

— 茨城県土浦市 —

弁才天遺跡 北西原遺跡 (第5次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集

〈本文編〉

2006

土 浦 市
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

弁才天遺跡 北西原遺跡 (第5次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集

〈本文編〉

2006

土 浦 市
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会



弁才天遺跡 遠景



北西原遺跡第5次調査 第3号墳出土遺物



弁才天遺跡出土 灰釉陶器 (第15号住居跡)



弁才天遺跡出土 緑釉陶器 (第84号住居跡)



弁才天遺跡出土 「和同開珎」(第6号住居跡)



弁才天遺跡出土 帶金具(第51号住居跡)



弁才天遺跡出土 杏葉(第61号住居跡)

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところであり、貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しております。

遺跡は昔の様子を知る手掛かりとなるだけでなく、現代の私達が豊かに生活することのできる過去からの社会・文化など様々な遺産の蓄積でもあります。

このように貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは、私達の大切な責務であるとともに、わが郷土土浦発展のためにも重要なことと思います。

この度の弁才天遺跡、北西原遺跡第5次調査の発掘調査は、市内常名地区での新総合運動公園建設事業に伴い実施されたものです。

中でも弁才天遺跡からは、古墳時代から奈良・平安時代にかけての拠点的な集落跡が確認されました。出土品には和同開珎や青銅製の馬の飾り金具が見られ、この遺跡に暮らした人々の繁栄ぶりを示しております。また、北西原遺跡からは、古墳とそれに供えられた須恵器が出土し、古墳時代当時この地域を支配した者の存在を裏付けています。

この調査報告書によって、土浦市内の古代文化の究明に役立つことができましたら幸甚であります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行にあたり、関係各位の皆様方のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

土浦市教育委員会
教育長 富永 善文

例 言

1. 本書は常名台遺跡調査会が実施した土浦市大字常名字北西原2652他に所在する^{きたにしほら}北西原遺跡の第5次調査と同市大字常名字弁才天3047他に所在する^{べんざいてん}弁才天遺跡の発掘調報告書である。
2. 調査は土浦市（担当：当時 都市整備部新運動公園課）から委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。
3. 調査期間は北西原遺跡第5次調査が平成8（1996）年6月21日から8月6日まで、弁才天遺跡が同年5月21日から11月30日まで実施した。出土品の整理作業及び報告書の作成は、調査終了後、平成17（2005）年10月まで行なった。
4. 発掘調査は北西原遺跡第5次調査、弁才天遺跡ともに比毛（当時 橋場）君男が担当した。整理作業は比毛・吉澤悟（当時 桐朋学園短期大学非常勤講師）が担当し、福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）、小野寿美子（筑波大学大学院生）、窪田恵一（石器文化研究会）がこれを補佐した。写真は遺構撮影・比毛、レイアウト・福田、遺物・嶋田圭吾が撮影・レイアウトを担当した。全体の総務・統括は比毛・関口満、報告書の編集は福田が行い、関口がこれを補佐した。
5. 報告書の原稿執筆分担は以下の通りである。

第1章 第2章 第3章-第1節 第2節 第4節	比毛 君男
第3章-第3節	比毛 君男・小野寿美子
第4章-第1節 第2節	比毛 君男
第4章-第3節・・石器にかかわる部分	窪田 恵一
縄文時代、古墳時代前期～奈良・平安時代の竪穴住居跡、その他の遺構	福田 礼子
古墳時代前期～奈良・平安時代の竪穴住居跡出土遺物の記載、同観察表	吉澤 悟
遺構外出土遺物	比毛 君男
第4章-第4節	比毛 君男
第5章	比毛 君男
6. 遺跡の航空写真は、(株)シン技術コンサルに依頼した。
7. 調査および報告書の作成にあたり、数多くの諸氏または諸機関のご協力・ご教示を賜った。別記して謝意を表したい。
8. 本報告書に関わる出土品および記録図面・写真などは、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。なお、記録や遺物の整理・保管に際しては、北西原遺跡第5次調査にUK5、弁才天遺跡にUBという略号を与えている。

凡 例

1. 「常名台遺跡群」という名称は、新運動公園建設予定地内に分布する5つの遺跡の総称で、これに含まれる遺跡は、西谷津遺跡、北西原遺跡、神明遺跡、山川古墳群、弁才天遺跡の5つである。
2. 弁才天遺跡は調査を行なった順に竪穴住居跡に番号を付しており、第1号住居跡から第91号住居跡まで発見されている（第73号住居跡は欠番）。本書では時代別に報告を行なっているため、竪穴住居跡の番号順に記載を行っていない。また、北西原遺跡第5次調査は同遺跡第4次調査までの遺構番号から継続して付しており、竪穴住居跡は第119号住居跡、古墳は第3号墳、土坑は第59号土坑、溝は第12号溝からの記載となっている。
3. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。
竪穴住居跡：S I 古墳：T M 土坑：S K 溝：S D
掘立柱建物跡：S B 攪乱：K
4. 遺構・遺物の実測図中の表記は以下の通りである。下記以外は註釈を付し任意の表示を行なった。
炉・焼土範囲  炭化物範囲  粘土範囲  柱痕 
スス  自然釉  須恵器（断面）  灰釉陶器（断面） 
鉄釉  石器研磨面  繊維混入縄文土器  一部の墨痕 
黒色処理  土器割れ口（人為的） 
5. 遺構・遺物の記述は以下を原則とした。
 - 1) 水糸レベルは海拔高度（m）を示す。
 - 2) 遺物番号は本文・挿図・写真図版とも一致する。
 - 3) 遺構の縮尺は竪穴住居跡・掘立柱建物跡が1/60、カマド・土坑が1/30、古墳が1/160、溝が1/300と1/100を基本とした。遺物は土器は1/3・1/4、土製品・金属製品は1/2、石器は4/5・1/3を基本としたが必要に応じてスケールを付して縮尺を変えている。
 - 4) 遺構の「主軸方向」は、竪穴住居跡の場合はカマド・炉の位置と支柱穴間を等分する軸線から、それ以外の遺構は左右対称となる長軸をこれに充てている。表記は、その主軸（長軸）が座標軸からみてどの方向に振れているかを角度で示した（例：N-29° -W）。
 - 5) 住居跡の規模は遺構下場の数値である。
 - 6) 遺物の観察表の法量は、（ ）が現存値、[]が復元値を表す。胎土の表記は、肉眼観察の結果確認できた鉱物のみを記し、含有量は相対的な差を主観的に示したものである。
 - 7) 土層や遺物の色調は、『新版標準土色帖』17版（小川正忠・竹原秀雄編著 1996 日本色研事業株式会社）を使用した。
6. 北西原遺跡第5次調査、弁才天遺跡の発掘調査は平成8（1996）年に実施されているが、「常名台遺跡群」はその後も継続して発掘調査が行なわれている。当報告書作成には、以後平成15年度までの調査成果を参考にしている。

平成8年度 土浦市遺跡調査会組織

会 長	須 田 直 之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	青 木 利 次	土浦市教育委員会教育長
理 事	大 塚 博	土浦市文化財保護審議会委員
	廣 田 宣 治	土浦市参事兼企画課長
	内海崎 保 生	土浦市区画整理課長
	坂 入 勇	土浦市都市計画課参事兼建築指導課長
	野 口 幹 雄	土浦市都市計画課長
	金 塚 文 雄	土浦市耕地課長
	大 塚 重 治	土浦市土木課長
監 事	飯 田 章 二	土浦市教育委員会教育次長
	小 野 政 夫	土浦市監査事務局長
幹事長	宮 本 昭	土浦市教育委員会文化課長
幹 事	矢 口 俊 則	上高津貝塚ふるさと歴史の広場副館長
	小 貫 俊 男	土浦市教育委員会文化課主査兼文化財係長
	塩 谷 修	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
	石 川 功	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
	黒 澤 春 彦	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事
	中 澤 達 也	土浦市教育委員会文化課主事
	関 口 満	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事
	橋 場 君 男	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事
	宮 本 礼 子	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事

※ 氏名・所属は当時のものである。

弁才天遺跡調査参加者名簿（敬称略 50音順）

調査員（発掘調査）

黒田友紀 鶴町明子 富田 徹 中野耕太郎

調査補助員

一戸一史 佐藤智史 徳田有希乃

発掘調査作業員

赤根茂也 新 清 飯田陽子 飯村洋子 石倉しげ 石浜敏子 市村光子 今泉代志子 岩田敦子
大竹信子 岡田さだ子 岡田次男 岡本君子 小野 豊 大久保敦子 大久保由紀子 鏡原美和子
菊田真代 坂 みよ 佐藤英夫 島田初男 関野喜久代 高野敏江 田畑保子 土屋和馬 戸崎生子
戸崎由三郎 富島栄子 富島 繁 富島利治 中野富美子 沼尻幸子 沼尻久子 沼尻文子 平江幸子
福田加世 藤崎雅世 榎田整子 増谷ふさ子 松浦澄子 松浦博子 松延貞次郎 丸岡公子 宮本 操
柳生智久 矢口なか 篠田淑子

調査員（整理作業）

小野寿美子 窪田恵一 作山智彦 嶋田圭吾 福田礼子 吉澤 悟

整理作業員

天谷瑛子 新井栄子 飯田陽子 石浜敏子 石山春美 岩田敦子 大久保敦子 大久保由紀子
大坪美知子 大野美津子 鏡原美和子 加固美佐子 川田光子 小松崎廣子 高野敏江 田畑保子
富田シズエ 長嶺道子 長嶺京美 根本邦子 中野富美子 浜田久美子 福田加世 坊野悦子
松川さち子 村田千枝子 榎田整子 丸岡公子 矢口頼以 柳生智久 篠田淑子

事務員

鈴木ひと美

※ 氏名は当時のものである。

弁才天遺跡調査協力者・協力機関名簿（敬称略 50音順）

赤井博之 渥美賢吾 石橋 充 稲田健一 井上喜久雄 茨城県教育委員会（助茨城県教育財団
茨城県教育庁文化課 茨城県県南教育事務所 大関 武 川口武彦 瓦吹 堅 黒澤彰哉
国立歴史民俗博物館 小玉秀成 後藤建一 小松崎博一 佐々木義則 鈴木素行 清野陽一 高島英之
田中新史 千葉隆司 筑波大学考古学研究室 土浦市都市整備部新運動公園課（現公園街路課）
土浦市文化財保護審議会 土生朗治 比田井克仁 日高 慎 平川 南 本田信之 望月明彦
桃崎祐輔

目次

巻頭1 弁才天遺跡 遠景

巻頭2 北西原遺跡第5次調査第3号墳出土土器・弁才天遺跡出土灰釉陶器（第15号住居跡）・同緑釉陶器（第84号住居跡）・同「和同開珎」（第6号住居跡）・同帯金具（第51号住居跡）・同杏葉（第61号住居跡）

序

例言 凡例

目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査日誌抄	4
第2章 環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 北西原遺跡第5次調査	9
第1節 調査の方法	9
第2節 遺跡の概要	10
第3節 遺構と遺物	10
1. 竪穴住居跡	10
2. 古墳	12
3. 土坑	16
4. 溝	17
5. 遺構外出土遺物	18
第4節 まとめ	19
第4章 弁才天遺跡	20
第1節 調査の方法	20
第2節 遺跡の概要	20
第3節 遺構と遺物	21
1. 旧石器時代	21
(1) 検出資料の分布状況	21
(2) 石器各説	21
(3) 使用石材について	24
(4) 小結	24
2. 縄文時代	33
(1) 竪穴住居跡	33
(2) 遺構外出土遺物 ①土器・土製品	35
②石器	46

3. 古墳時代前期	59
4. 古墳時代後期	86
5. 奈良・平安時代	129
(1) 竪穴住居跡	129
(2) 掘立柱建物跡	353
6. 土坑	372
7. 溝	377
8. 遺構外出土遺物	390
第4節 まとめ	395
第5章 総括	399

写真図版

付図

挿図目次

第1図 常名台遺跡群遺跡全体図・トレンチ配置図	2	第21図 第78号住居跡・出土遺物	33
第2図 周辺の遺跡	3	第22図 第88号住居跡・出土遺物	34
第3図 弁才天遺跡地形図	5	第23図 調査区内縄文土器出土量	36
第4図 北西原遺跡第5次調査遺構 全体図・トレンチ配置図	7	第24図 遺構外出土縄文土器(1)	37
第5図 北西原遺跡第1・2・5・6次、 神明遺跡第2次調査古墳配置図	9	第25図 遺構外出土縄文土器(2)	38
第6図 第119号住居跡・出土遺物	11	第26図 遺構外出土縄文土器(3)	39
第7図 第3号墳	13	第27図 遺構外出土縄文土器(4)	40
第8図 第3号墳遺物出土状況	14	第28図 遺構外出土縄文土器(5)	41
第9図 第3号墳出土遺物	15	第29図 遺構外出土縄文土器(6)・土製品	42
第10図 第59・60号土坑	16	第30図 縄文時代の石器(1)	51
第11図 第12・13号溝	17	第31図 縄文時代の石器(2)	52
第12図 遺構外出土遺物	18	第32図 縄文時代の石器(3)	53
第13図 グリッド設定図	20	第33図 縄文時代の石器(4)	54
第14図 旧石器検出遺構分布図	25	第34図 縄文時代の石器(5)	55
第15図 旧石器時代の石器(1)	26	第35図 縄文時代の石器(6)	56
第16図 旧石器時代の石器(2)	27	第36図 縄文時代の石器(7)	57
第17図 旧石器時代の石器(3)	28	第37図 第2号住居跡・出土遺物	60
第18図 旧石器時代の石器(4)	29	第38図 第3号住居跡・出土遺物	61
第19図 旧石器時代の石器(5)	30	第39図 第20号住居跡・出土遺物	63
第20図 旧石器時代の石器(6)	31	第40図 第39号住居跡	65
		第41図 第39号住居跡遺物・焼土出土状況	66
		第42図 第39号住居跡出土遺物	67
		第43図 第41号住居跡	68
		第44図 第41号住居跡出土遺物	69

第45図	第44号住居跡・出土遺物……………	71	第84図	第5号住居跡出土遺物……………	135
第46図	第48号住居跡・出土遺物……………	73	第85図	第6号住居跡……………	138
第47図	第49号住居跡・出土遺物……………	75	第86図	第6号住居跡遺物出土状況……………	139
第48図	第52号住居跡……………	77	第87図	第6号住居跡出土遺物（1）……………	140
第49図	第68号住居跡・出土遺物……………	78	第88図	第6号住居跡出土遺物（2）……………	141
第50図	第76号住居跡・出土遺物……………	80	第89図	第6号住居跡出土遺物（3）……………	142
第51図	第87号住居跡遺物・焼土出土状況……………	82	第90図	第8号住居跡・出土遺物……………	146
第52図	第87号住居跡出土遺物……………	83	第91図	第9号住居跡・出土遺物……………	148
第53図	第91号住居跡……………	85	第92図	第10号住居跡……………	150
第54図	第7号住居跡……………	87	第93図	第10号住居跡出土遺物……………	151
第55図	第7号住居跡遺物出土状況……………	88	第94図	第11号住居跡……………	154
第56図	第7号住居跡出土遺物（1）……………	89	第95図	第11号住居跡出土遺物……………	155
第57図	第7号住居跡出土遺物（2）……………	90	第96図	第12号住居跡・出土遺物……………	157
第58図	第13号住居跡……………	92	第97図	第14号住居跡・出土遺物……………	159
第59図	第13号住居跡出土遺物……………	93	第98図	第15号住居跡……………	161
第60図	第19号住居跡……………	95	第99図	第15号住居跡出土遺物……………	162
第61図	第19号住居跡カマド・ 貯蔵穴遺物出土状況……………	96	第100図	第16号住居跡・出土遺物……………	164
第62図	第19号住居跡出土遺物（1）……………	97	第101図	第17号住居跡・遺物出土状況……………	166
第63図	第19号住居跡出土遺物（2）……………	98	第102図	第17号住居跡出土遺物（1）……………	167
第64図	第21号住居跡……………	101	第103図	第17号住居跡出土遺物（2）……………	168
第65図	第21号住居跡出土遺物……………	102	第104図	第18号住居跡・出土遺物……………	171
第66図	第22号住居跡……………	104	第105図	第23号住居跡・出土遺物……………	173
第67図	第22号住居跡出土遺物……………	105	第106図	第24号住居跡……………	175
第68図	第31号住居跡・出土遺物……………	108	第107図	第24号住居跡出土遺物……………	176
第69図	第33号住居跡・出土遺物……………	110	第108図	第25号住居跡・出土遺物……………	178
第70図	第43号住居跡・出土遺物……………	112	第109図	第26号住居跡・出土遺物……………	179
第71図	第61号住居跡……………	115	第110図	第27号住居跡・出土遺物……………	181
第72図	第61号住居跡出土遺物……………	116	第111図	第28号住居跡・カマド遺物出土状況……………	182
第73図	第74号住居跡……………	119	第112図	第28号住居跡出土遺物……………	183
第74図	第74号住居跡出土遺物（1）……………	120	第113図	第29号住居跡・遺物出土状況……………	185
第75図	第74号住居跡出土遺物（2）……………	121	第114図	第29号住居跡出土遺物（1）……………	186
第76図	第82号住居跡……………	124	第115図	第29号住居跡出土遺物（2）……………	187
第77図	第82号住居跡出土遺物……………	125	第116図	第30号住居跡……………	190
第78図	第90号住居跡……………	126	第117図	第30号住居跡遺物出土状況……………	191
第79図	第90号住居跡出土遺物……………	127	第118図	第30号住居跡出土遺物（1）……………	192
第80図	第1号住居跡・カマド遺物出土状況……………	130	第119図	第30号住居跡出土遺物（2）……………	193
第81図	第1号住居跡出土遺物……………	131	第120図	第30号住居跡出土遺物（3）……………	194
第82図	第4号住居跡・出土遺物……………	133	第121図	第30号住居跡出土遺物（4）……………	195
第83図	第5号住居跡・カマド遺物出土状況……………	134	第122図	第32号住居跡・出土遺物……………	198
			第123図	第34号住居跡・出土遺物……………	201

第124図	第35号住居跡・遺物出土状況……………	202	第164図	第56号住居跡出土遺物（1）……………	273
第125図	第35号住居跡出土遺物……………	203	第165図	第56号住居跡出土遺物（2）……………	274
第126図	第36号住居跡・遺物出土状況……………	205	第166図	第57号住居跡・出土遺物……………	276
第127図	第36号住居跡出土遺物……………	206	第167図	第58号住居跡・出土遺物……………	278
第128図	第37号住居跡……………	208	第168図	第59号住居跡……………	280
第129図	第37号住居跡遺物出土状況……………	209	第169図	第59号住居跡遺物出土状況……………	281
第130図	第37号住居跡出土遺物（1）……………	210	第170図	第59号住居跡出土遺物（1）……………	282
第131図	第37号住居跡出土遺物（2）……………	211	第171図	第59号住居跡出土遺物（2）……………	283
第132図	第37号住居跡出土遺物（3）……………	212	第172図	第60号住居跡・出土遺物……………	286
第133図	第38号住居跡……………	218	第173図	第62号住居跡・カマド遺物出土状況…	288
第134図	第38号住居跡遺物出土状況……………	219	第174図	第62号住居跡出土遺物……………	289
第135図	第38号住居跡出土遺物（1）……………	220	第175図	第63号住居跡・出土遺物……………	292
第136図	第38号住居跡出土遺物（2）……………	221	第176図	第64号住居跡・カマド遺物出土状況…	294
第137図	第40号住居跡……………	225	第177図	第64号住居跡出土遺物（1）……………	296
第138図	第40号住居跡遺物出土状況……………	226	第178図	第64号住居跡出土遺物（2）……………	297
第139図	第40号住居跡出土遺物（1）……………	227	第179図	第64号住居跡出土遺物（3）……………	298
第140図	第40号住居跡出土遺物（2）……………	228	第180図	第64号住居跡出土遺物（4）……………	299
第141図	第42号住居跡……………	231	第181図	第65号住居跡……………	303
第142図	第42号住居跡出土遺物……………	232	第182図	第65号住居跡出土遺物……………	304
第143図	第45号住居跡……………	235	第183図	第66号住居跡……………	307
第144図	第45号住居跡出土遺物（1）……………	237	第184図	第66号住居跡出土遺物（1）……………	308
第145図	第45号住居跡出土遺物（2）……………	238	第185図	第66号住居跡出土遺物（2）……………	309
第146図	第46号住居跡・カマド遺物出土状況…	242	第186図	第67号住居跡……………	311
第147図	第46号住居跡出土遺物……………	243	第187図	第67号住居跡出土遺物（1）……………	312
第148図	第47号住居跡・遺物出土状況……………	245	第188図	第67号住居跡出土遺物（2）……………	313
第149図	第47号住居跡出土遺物……………	246	第189図	第69号住居跡……………	315
第150図	第50号住居跡・出土遺物……………	248	第190図	第69号住居跡出土遺物……………	316
第151図	第51号住居跡・遺物出土状況……………	250	第191図	第70号住居跡・カマド遺物出土状況…	319
第152図	第51号住居跡出土遺物（1）……………	251	第192図	第70号住居跡出土遺物（1）……………	320
第153図	第51号住居跡出土遺物（2）……………	252	第193図	第70号住居跡出土遺物（2）……………	321
第154図	第51号住居跡出土遺物（3）……………	253	第194図	第71号住居跡・出土遺物……………	323
第155図	第53号住居跡・遺物出土状況……………	257	第195図	第72号住居跡……………	324
第156図	第53号住居跡出土遺物（1）……………	259	第196図	第72号住居跡出土遺物……………	325
第157図	第53号住居跡出土遺物（2）……………	260	第197図	第75号住居跡……………	328
第158図	第53号住居跡出土遺物（3）……………	261	第198図	第75号住居跡出土遺物……………	329
第159図	第54号住居跡・出土遺物……………	265	第199図	第77号住居跡・出土遺物……………	331
第160図	第55号住居跡・カマド遺物出土状況…	268	第200図	第79号住居跡・出土遺物……………	333
第161図	第55号住居跡出土遺物（1）……………	269	第201図	第80号住居跡……………	334
第162図	第55号住居跡出土遺物（2）……………	270	第202図	第80号住居跡出土遺物……………	335
第163図	第56号住居跡・カマド遺物出土状況…	272	第203図	第81号住居跡・出土遺物……………	336

第204図	第83号住居跡……………	338
第205図	第83号住居跡出土遺物……………	339
第206図	第84号住居跡……………	340
第207図	第84号住居跡出土遺物……………	341
第208図	第85号住居跡……………	344
第209図	第85号住居跡遺物出土状況・ カマド遺物出土状況……………	345
第210図	第85号住居跡出土遺物（1）……………	346
第211図	第85号住居跡出土遺物（2）……………	347
第212図	第86号住居跡・出土遺物……………	350
第213図	第89号住居跡・出土遺物……………	352
第214図	第1号掘立柱建物跡……………	354
第215図	第1号掘立柱建物跡出土遺物……………	355
第216図	第2号掘立柱建物跡……………	356
第217図	第2号掘立柱建物跡出土遺物……………	357
第218図	第3号掘立柱建物跡・出土遺物……………	359
第219図	第4号掘立柱建物跡・第9号溝……………	360
第220図	第4号掘立柱建物跡出土遺物……………	361
第221図	第5号掘立柱建物跡……………	362
第222図	第5号掘立柱建物跡出土遺物……………	363
第223図	第6号掘立柱建物跡・出土遺物……………	364
第224図	第7号掘立柱建物跡……………	365
第225図	第8号掘立柱建物跡……………	367
第226図	第9号掘立柱建物跡……………	368
第227図	第10号掘立柱建物跡……………	370
第228図	第11号掘立柱建物跡……………	371
第229図	第1号土坑・出土遺物……………	372
第230図	第4号土坑……………	373
第231図	第4号土坑出土遺物……………	374
第232図	第6・7・8号土坑……………	375
第233図	第1・4号溝……………	378
第234図	第2号溝・出土遺物……………	379
第235図	第3号溝……………	381
第236図	第3号溝出土遺物……………	382
第237図	第6・7・8号溝……………	383
第238図	第6・7号溝出土遺物……………	386
第239図	第8号溝出土遺物……………	387
第240図	第10号溝・出土遺物……………	389
第241図	遺構外出土遺物（1）……………	391
第242図	遺構外出土遺物（2）……………	392

第243図	遺構外出土遺物（3）……………	393
-------	-----------------	-----

表目次

第1表	縄文時代竪穴住居跡一覧……………	396
第2表	古墳時代前期竪穴住居跡一覧……………	396
第3表	古墳時代後期竪穴住居跡一覧……………	396
第4表	奈良・平安時代竪穴住居跡一覧……………	397
第5表	掘立柱建物跡一覧……………	398

写真図版目次

PL.1	北西原遺跡第5次調査遠景
PL.2	第119号住居跡 第119号住居跡貯蔵穴出土 遺物 第3号墳 第3号墳遺物出土状況
PL.3	第3号墳玄室底面石出土状況 第3号墳粘 土出土状況 第59号土坑 第12号溝 第13 号溝 第13号溝土層断面
PL.4	第119号住居跡出土遺物 第3号墳出土遺物 遺構外出土遺物 第3号墳出土遺物
PL.5	弁才天遺跡全景
PL.6	第1号住居跡 第1号住居跡カマド遺物出 土状況 第2号住居跡 第2号住居跡遺物 出土状況 第3号住居跡 第4号住居跡 第4号住居跡カマド 第5号住居跡遺物出 土状況
PL.7	第6号住居跡 第6号住居跡カマド遺物出 土状況 第6号住居跡と同開珎出土状況
PL.8	第7号住居跡 第7号住居跡カマド遺物出 土状況 第7号住居跡遺物出土状況
PL.9	第8・12号（手前）住居跡 第8号住居跡 遺物出土状況 第8号住居跡遺物出土状況 （拡大） 第8号住居跡カマド 第9号住居 跡 第9号住居跡カマド 第10号住居跡 第10号住居跡遺物出土状況
PL.10	第11号住居跡 第11号住居跡カマド 第13 号住居跡 第13号住居跡カマド 第14号住 居跡 第14号住居跡遺物出土状況 第15号

- 住居跡 第15号住居跡カマド
- PL.11 第16号住居跡 第16号住居跡カマド 第17号住居跡 第17号住居跡遺物出土状況 第17号住居跡カマド 第18号住居跡 第18号住居跡遺物出土状況 第18号住居跡カマド
- PL.12 第19号住居跡 第19号住居跡カマド 第19号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- PL.13 第20号住居跡 第20号住居跡遺物出土状況 第21号住居跡 第21号住居跡遺物出土状況 第22号住居跡 第22号住居跡カマド 第23号住居跡 第23号住居跡カマド
- PL.14 第24号住居跡 第24号住居跡遺物出土状況 第25号住居跡 第25号住居跡遺物出土状況 第26号住居跡 第27号住居跡カマド 第28号住居跡 第28号住居跡遺物出土状況
- PL.15 第29号住居跡 第29号住居跡遺物出土状況 第29号住居跡カマド
- PL.16 第30号住居跡 第30号住居跡遺物出土状況 第30号住居跡カマド
- PL.17 第31号住居跡 第32号住居跡 第33号住居跡 第34号住居跡 第35号住居跡 第36号住居跡 第36号住居跡カマド 第36号住居跡カマド (下部)
- PL.18 第37号住居跡 第37号住居跡遺物出土状況 第37号住居跡カマド
- PL.19 第38号住居跡 第38号住居跡遺物出土状況 第39号住居跡 第39号住居跡遺物出土状況 第39号住居跡遺物出土状況 (拡大) 第40号住居跡遺物出土状況 第40号住居跡粘土出土状況
- PL.20 第41号住居跡・第1号掘立柱建物跡 第41号住居跡遺物出土状況 第42号住居跡 第42号住居跡カマド 第44号住居跡 第45号住居跡 第45号住居跡カマド 第45号住居跡粘土断面
- PL.21 第47号住居跡 第48号住居跡 第49号住居跡 第50号住居跡 第51号住居跡 第51号住居跡遺物出土状況 第51号住居跡貝出土状況 第52号住居跡
- PL.22 第53号住居跡 第53号住居跡遺物出土状況
- 第53号住居跡遺物出土状況 (拡大) 第53号住居跡カマド
- PL.23 第54号住居跡 第55号住居跡 第55号住居跡カマド 第56号住居跡 (手前第28号住居跡) 第56号住居跡遺物出土状況 第57号住居跡 第58号住居跡 第58号住居跡カマド
- PL.24 第59号住居跡 第59号住居跡遺物出土状況 第59号住居跡遺物出土状況 (拡大) 第59号住居跡粘土出土状況
- PL.25 第60号住居跡遺物出土状況 第61号住居跡 第61号住居跡カマド 第62号住居跡 第62号住居跡遺物出土状況 第62号住居跡カマド 第63号住居跡 第63号住居跡遺物出土状況
- PL.26 第64号住居跡 第64号住居跡遺物出土状況 第64号住居跡カマド 第64号住居跡カマド煙道部 (拡大)
- PL.27 第65号住居跡 第66号住居跡 第66号住居跡遺物出土状況 第66号住居跡カマド 第67号住居跡 第67号住居跡遺物出土状況 第68号住居跡 第68号住居跡遺物出土状況
- PL.28 第69号住居跡 第69号住居跡カマド 第70号住居跡 第70号住居跡遺物出土状況 第70号住居跡カマド 第71号住居跡 第72号住居跡 第72号住居跡カマド
- PL.29 第74号住居跡 第74号住居跡遺物出土状況 第74号住居跡カマド
- PL.30 第75号住居跡 第76号住居跡 第76号住居跡遺物出土状況 第76号住居跡遺物出土状況 (拡大) 第77号住居跡 第78号住居跡 第79号住居跡 第79号住居跡カマド
- PL.31 第80号住居跡 第80号住居跡カマド 第81号住居跡 第82号住居跡 第82号住居跡 (拡大) 第83号住居跡 第83号住居跡遺物出土状況 第83号住居跡カマド
- PL.32 第84号住居跡 第84号住居跡遺物出土状況 第84号住居跡緑釉陶器出土状況 第85号住居跡 第85号住居跡遺物出土状況 第85号住居跡カマド 第86号住居跡 第86号住居跡カマド

- PL.33 第87号住居跡 第87号住居跡遺物出土状況
第87号住居跡遺物出土状況(拡大)
- PL.34 第89号住居跡 第89号住居跡遺物出土状況
第89号住居跡遺物出土状況(拡大) 第90号
住居跡 第90号住居跡遺物出土状況 第90
号住居跡カマド 第91号住居跡・第7号土
坑(手前) 作業風景
- PL.35 第1号掘立柱建物跡 第4号掘立柱建物跡
ピット6 第3・6・7・8・10号掘立柱
建物跡 第9(上)・5(下)号掘立柱建物
跡 第3号掘立柱建物跡土層断面
- PL.36 第1号土坑 第4号土坑 第6号土坑 第
1号溝 第1号溝土層断面
- PL.37 旧石器時代(1)・縄文時代出土石器(1)
表面 裏面
- PL.38 旧石器時代出土石器(2) 表面 裏面
- PL.39 旧石器時代(3)・縄文時代出土石器(2)
表面 裏面
- PL.40 旧石器時代(4)・縄文時代出土石器(3)
表面 裏面
- PL.41 縄文時代出土石器(4) 表面 裏面
- PL.42 縄文時代出土石器(5) 表面 裏面
- PL.43 縄文時代出土石器(6) 表面 裏面
- PL.44 縄文時代第78号住居跡出土遺物 縄文時代
第88号住居跡出土遺物 縄文時代遺構外
出土遺物(1)
- PL.45 縄文時代遺構外出土遺物(2)(3)
- PL.46 縄文時代遺構外出土遺物(4)(5)
- PL.47 縄文時代遺構外出土遺物(6)(7)
- PL.48 縄文時代遺構外出土遺物(8)(9)
- PL.49 縄文時代遺構外出土遺物(10)(11)
- PL.50 縄文時代遺構外出土遺物(12)
- PL.51 第1号住居跡出土遺物 第2号住居跡出土
遺物 第3号住居跡出土遺物 第4号住居
跡出土遺物
- PL.52 第5号住居跡出土遺物 第6号住居跡出土
遺物(1)
- PL.53 第6号住居跡出土遺物(2)
- PL.54 第6号住居跡出土遺物(3) 第7号住居跡
出土遺物(1)
- PL.55 第7号住居跡出土遺物(2) 第8号住居跡
出土遺物 第9号住居跡出土遺物 第10号
住居跡出土遺物(1)
- PL.56 第10号住居跡出土遺物(2) 第11号住居跡
出土遺物(1)
- PL.57 第11号住居跡出土遺物(2) 第12号住居跡
出土遺物 第13号住居跡出土遺物
- PL.58 第14号住居跡出土遺物 第15号住居跡出土
遺物 第16号住居跡出土遺物 第17号住居
跡出土遺物(1)
- PL.59 第17号住居跡出土遺物(2)
- PL.60 第18号住居跡出土遺物 第19号住居跡出土
遺物(1)
- PL.61 第19号住居跡出土遺物(2) 第20号住居跡
出土遺物 第21号住居跡出土遺物
- PL.62 第22号住居跡出土遺物 第23号住居跡出土
遺物 第24号住居跡出土遺物(1)
- PL.63 第24号住居跡出土遺物(2) 第25号住居
跡出土遺物 第26号住居跡出土遺物 第27
号住居跡出土遺物 第28号住居跡出土遺物
(1)
- PL.64 第28号住居跡出土遺物(2) 第29号住居跡
出土遺物
- PL.65 第30号住居跡出土遺物(1)
- PL.66 第30号住居跡出土遺物(2)
- PL.67 第31号住居跡出土遺物 第32号住居跡出土
遺物 第33号住居跡出土遺物
- PL.68 第34号住居跡出土遺物 第35号住居跡出土
遺物 第36号住居跡出土遺物(1)
- PL.69 第36号住居跡出土遺物(2) 第37号住居跡
出土遺物(1)
- PL.70 第37号住居跡出土遺物(2)
- PL.71 第38号住居跡出土遺物(1)
- PL.72 第38号住居跡出土遺物(2) 第39号住居跡
出土遺物 第40号住居跡出土遺物(1)
- PL.73 第40号住居跡出土遺物(2)
- PL.74 第41号住居跡出土遺物 第42号住居跡出土
遺物(1)
- PL.75 第42号住居跡出土遺物(2) 第43号住居跡
出土遺物 第44号住居跡出土遺物 第45号

- 住居跡出土遺物（1）
- PL.76 第45号住居跡出土遺物（2）
- PL.77 第45号住居跡出土遺物（3） 第46号住居跡出土遺物
- PL.78 第47号住居跡出土遺物 第48号住居跡出土遺物
- PL.79 第49号住居跡出土遺物 第50号住居跡出土遺物 第51号住居跡出土遺物（1）
- PL.80 第51号住居跡出土遺物（2）
- PL.81 第51号住居跡出土具（上・ハマグリ 下・ヤマトシジミ） 第53号住居跡出土遺物（1）
- PL.82 第53号住居跡出土遺物（2）
- PL.83 第54号住居跡出土遺物 第55号住居跡出土遺物（1）
- PL.84 第55号住居跡出土遺物（2） 第56号住居跡出土遺物（1）
- PL.85 第56号住居跡出土遺物（2） 第57号住居跡出土遺物 第58号住居跡出土遺物 第59号住居跡出土遺物（1）
- PL.86 第59号住居跡出土遺物（2） 第60号住居跡出土遺物
- PL.87 第61号住居跡出土遺物 第62号住居跡出土遺物（1）
- PL.88 第62号住居跡出土遺物（2） 第63号住居跡出土遺物 第64号住居跡出土遺物（1）
- PL.89 第64号住居跡出土遺物（2）
- PL.90 第64号住居跡出土遺物（3） 第65号住居跡出土遺物（1）
- PL.91 第65号住居跡出土遺物（2） 第66号住居跡出土遺物（1）
- PL.92 第66号住居跡出土遺物（2） 第67号住居跡出土遺物
- PL.93 第68号住居跡出土遺物 第69号住居跡出土遺物 第70号住居跡出土遺物（1）
- PL.94 第70号住居跡出土遺物（2） 第71号住居跡出土遺物 第72号住居跡出土遺物
- PL.95 第74号住居跡出土遺物 第75号住居跡出土遺物（1）
- PL.96 第75号住居跡出土遺物（2） 第76号住居跡出土遺物 第77号住居跡出土遺物 第79号住居跡出土遺物 第80号住居跡出土遺物 第81号住居跡出土遺物
- PL.97 第82号住居跡出土遺物 第83号住居跡出土遺物 第84号住居跡出土遺物（1）
- PL.98 第84号住居跡出土遺物（2） 第85号住居跡出土遺物（1）
- PL.99 第85号住居跡出土遺物（2） 第86号住居跡出土遺物
- PL.100 第87号住居跡出土遺物 第89号住居跡出土遺物
- PL.101 第90号住居跡出土遺物 第2号掘立柱建物跡出土遺物 第3号掘立柱建物跡出土遺物
- PL.102 第4号掘立柱建物跡出土遺物 第5号掘立柱建物跡出土遺物 第6号掘立柱建物跡出土遺物 第1号土坑出土遺物 第4号土坑出土遺物 第7号土坑出土遺物 第8号土坑出土遺物 第2号溝出土遺物 第3号溝出土遺物 第7号溝出土遺物（1）
- PL.103 第7号溝出土遺物（2） 第8号溝出土遺物 遺構外出土遺物（1）
- PL.104 遺構外出土遺物（2）

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

平成2年3月、土浦市総合運動公園基本計画報告書が発表された。これにより土浦市西端の大字常名に川口運動公園に替わる新しい総合運動公園建設の指針が示されることとなった。この公園と取付道路の建設予定地内には、昭和56～58年度の遺跡分布調査で発見した北西原遺跡・神明遺跡・弁才天遺跡・山川古墳群・西谷津遺跡の周知の遺跡が5つ含まれている。これらの遺跡の分布と密度を把握する為に、平成3年3月に土浦市教育委員会は試掘調査を行った。この結果、公園建設を予定する台地全体に遺跡の存在が予想され、発掘調査は台地全体に拡大して設定されることとなった。

平成5年度から新運動公園建設に伴う記録保存を目的とする発掘調査は開始されたが、平成8（1996）年度の調査経過は以下の通りである（所属・名称は当時のまま）。

まず平成8年4月1日付土新運発第7号で、土浦市都市整備部新運動公園課が土浦市教育委員会あてに、文書「土浦常名運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」を提出した。この内容は、新運動公園課は土浦市教育委員会に当年度弁才天遺跡約15,000㎡、北西原遺跡（第5次調査）7,500㎡を調査することを依頼するというものである。

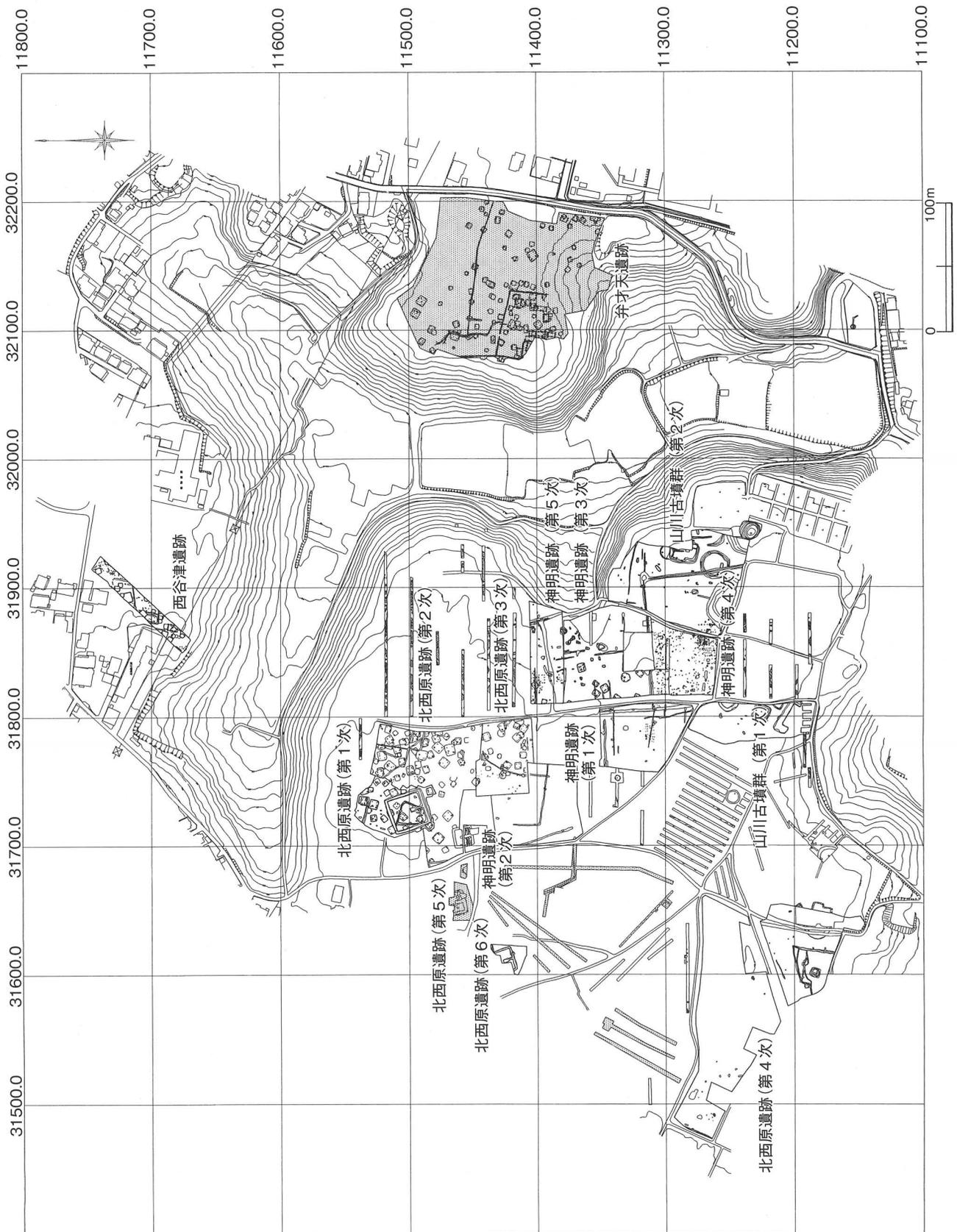
文書を受領した土浦市教育委員会文化課は、平成8年5月2日付土教委発第391号で土浦市長助川弘之あてに「土浦市常名運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について（回答）」を提出した。これにより、土浦市教育委員会は発掘と整理等を含めた調査費用の積算を行い、合わせて市内遺跡の調査機関である土浦市遺跡調査会が業務の遂行をはかることとした。

照会を受けた土浦市遺跡調査会（会長 須田 直之）は、平成8年5月9日付で「弁才天遺跡 他発掘調査委託」契約を土浦市長 助川 弘之と締結した。これ以後、表土排除、給水工事、方眼測量、事務所設置等を行い、遺跡調査の準備を進めた。

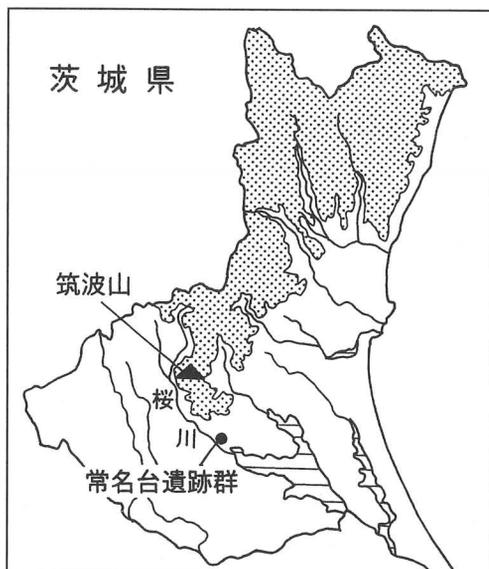
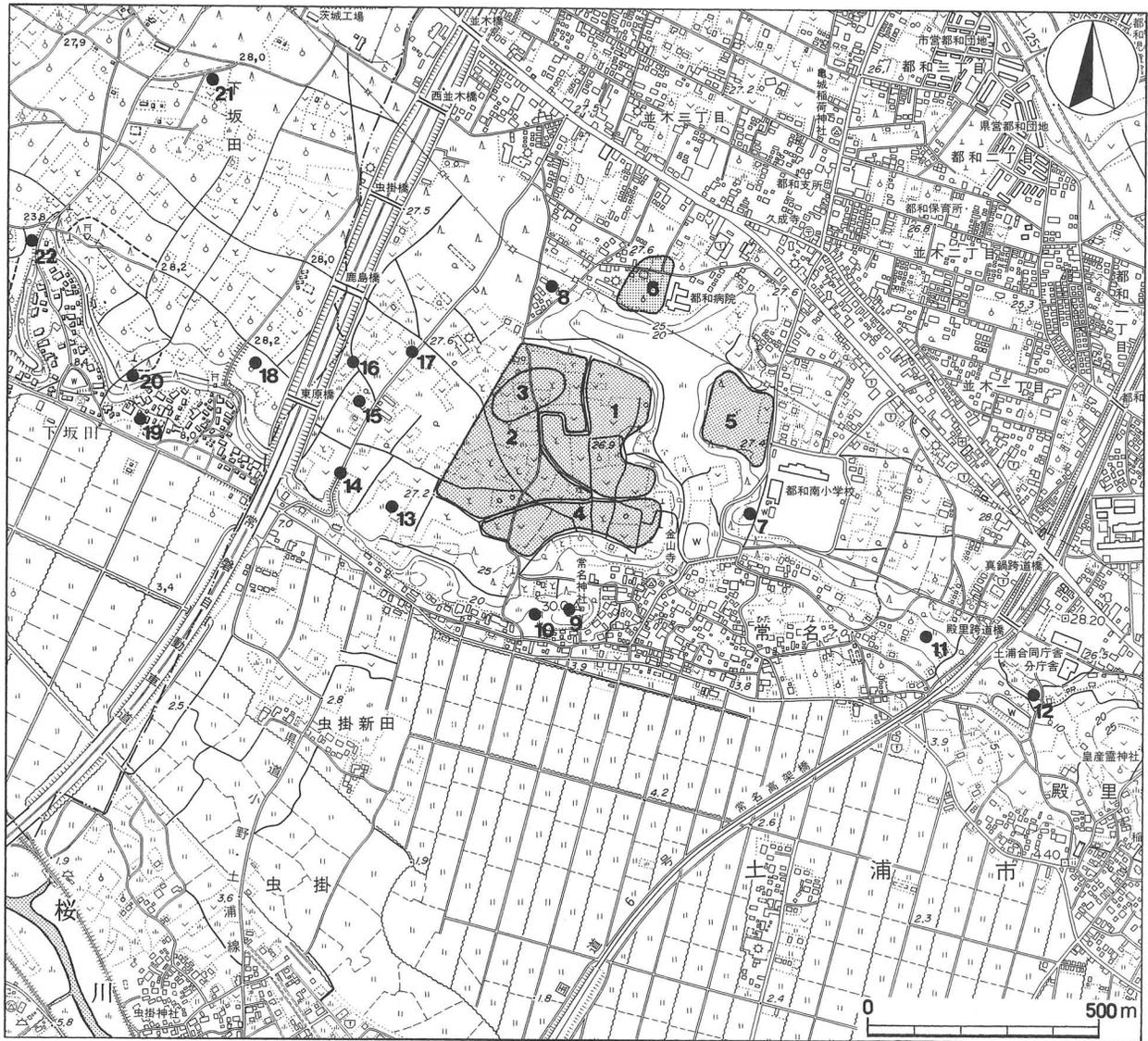
一方、土浦市教育委員会は平成8年5月15日付土教委発第401号で、「埋蔵文化財発掘調査通知の提出について」を茨城県教育委員会、茨城県県南教育事務所、文化庁長官に提出し、文化財保護法第98条の2第1項に基く埋蔵文化財発掘調査通知を行った。以後、発掘調査が本格的に始まるが、調査前の表土除去は弁才天遺跡から5月27日以降開始し、6月下旬から北西原遺跡の表土除去に移った。発掘調査は6月6日から11月30日まで行い、基礎的な整理作業を翌年の3月15日まで行った。

また、調査終了後に土浦市教育委員会文化課は、平成8年12月5日付土教委発第585号で、茨城県教育委員会、茨城県県南教育事務所の2者に、弁才天遺跡と北西原遺跡双方の「発掘調査終了に伴う発掘調査終了届等の提出について」を送付した。これにより、「発掘調査終了の確認について（依頼）」、「発掘調査終了届」、「文化財保管証」等を提出し、以後県教育委員会が調査終了の確認を行った。茨城県教育委員会は、文第1012号で「発掘調査終了の確認について（通知）」を発し、両遺跡の発掘調査の終了したことを認めた。

また同時に、土浦警察署長あてに「遺跡調査終了に伴う遺物発見届の提出について」を送付し、遺失物法に基く遺物発見届と拾得物保管請書を提出した。土浦警察署長は埋蔵物預り書を通知し、拾得物としての手続きを行った。



第1図 常名台遺跡群遺跡全体図・トレンチ配置図



番号	遺跡跡	時代
1	神明遺跡 (常名台遺跡群)	旧石器・縄文・古墳・中世
2	北西原遺跡 (常名台遺跡群)	旧石器・縄文・古墳
3	北西原古墳群 (常名台遺跡群)	古墳
4	山川古墳群 (常名台遺跡群)	古墳
5	弁才天遺跡 (常名台遺跡群)	縄文・古墳・奈良平安
6	西谷津遺跡 (常名台遺跡群)	古墳・奈良平安
7	天神脇遺跡	縄文・古墳・奈良平安
8	西谷津西遺跡	古墳
9	常名天神山遺跡	古墳
10	瓢箪塚 (挑戦塚) 古墳	古墳 (湮滅)
11	八幡下遺跡	古墳・奈良平安
12	殿里古墳	古墳
13	羽黒後遺跡	縄文
14	坂の上遺跡	縄文
15	小坂の上遺跡	縄文
16	中畑遺跡	縄文
17	アラク遺跡	縄文・中世
18	石橋古墳	古墳
19	下坂田館跡	中世
20	釈迦久保古墳群	古墳
21	坂田稲荷山古墳群	古墳
22	下坂田貝塚	縄文・弥生

第2図 周辺の遺跡

第2節 調査日誌抄

- 平成8（1996）年5月21日 弁才天遺跡表土除去開始。
- 6月6日 発掘調査開始。作業員遺構精査。
- 6月21日 遺構確認を終え、遺構（第1号溝・第1号住居跡）掘削を開始。
北西原遺跡第5次調査表土除去開始。
- 7月3日 北西原遺跡の遺構（第119号住居跡・第3号墳周溝）掘削開始。
- 7月16日 同第119号住居跡完掘。
- 7月19日 同第3号墳の墓道掘削開始。
- 7月26日 同第3号墳の墓道土層断面を取る。
- 7月29日 弁才天遺跡第6号住居跡カマドから和同開珎出土。
- 7月30日 北西原遺跡第3号墳遺物出土状況記録。
- 8月5日 同第3号墳と重複する近現代の墓墳から人骨出土。供養・無縁墓地埋葬等を行う。
- 8月6日 同第3号墳完掘。北西原遺跡終了。
- 8月15日 現場お盆休み
- 9月27日 第1号掘立柱建物跡完掘（南西側遺構集中区で初の掘立柱建物）。
- 10月14日 第19号住居跡カマド掘削。完形土師器甕出土。
- 11月8日 第84号住居跡から緑釉陶器椀出土。
- 11月22日 航空撮影。
- 11月30日 現場撤収。

第2章 環境

第1節 地理的環境

土浦市大字常名は、中心市街地から約4キロ北西にあたり、常磐高速道を挟んで新治郡新治村と境を接する。その地形は、手野・木田余・真鍋から続く洪積台地の新治台地と、南側に広がる桜川・古鬼怒川起源の沖積地の桜川低地、両者の接点にあたる緩斜面をもった微高地で構成する。遺跡のある台地を巡る谷は現在、荒撫地とアシ等の生える湿地であるが、かつては谷の入り口の溜め池と一連の池をなしていたと伝え、桜川低地に広がる水稻を灌漑する役目を果たしていた。開発前の台地上は、斜面部が杉・ヒノキ林、平地が畑地として利用されていた。

弁才天遺跡は、土浦市大字常名字弁才天3047番地他に所在する。その立地は、桜川左岸の標高約25mの新治台地上で、桜川低地から北に大きく貫入する谷が西に広がる支谷に圍繞された舌状台地に位置する。

北西原遺跡は土浦市大字常名字北西原2652番地他に所在し、弁才天遺跡と同じ南からの谷が東に広



第3図 弁才天遺跡地形図

がった支谷に面した台地の南縁に位置する。

遺跡の立地する台地の地層は、表土・耕作土下に関東ローム層が約3m堆積し、常総粘土層・龍ヶ崎砂礫層・成田礫層・藪層と続く。土浦市内の関東ローム層は、南関東の新期ロームである武蔵野・立川層に対応し、常総層が下末吉層に相当すると考えられている。遺構の掘りこみはほとんどが立川ローム層までに留まり、旧石器時代の遺物もローム層上面から下30cm以内である。遺構の遺存状況は各々異なるが、確認面下の掘りこみが深い遺構は概して良好である。しかしながら近年までゴボウ等の栽培が盛んに行われていたため、トレンチャーという掘削機械の攪乱が著しい箇所もある。

第2節 歴史的環境

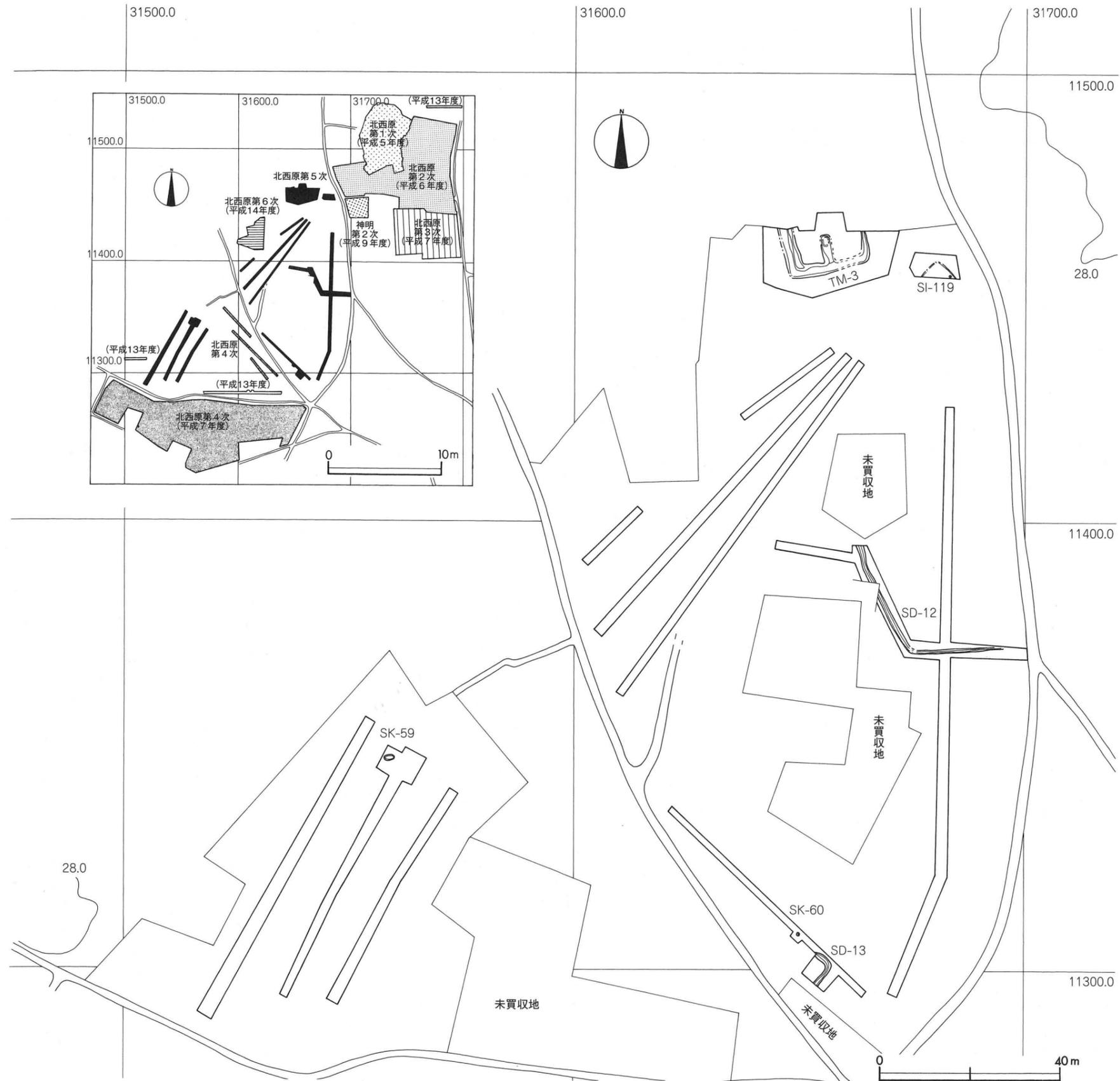
北西原遺跡は過去4度の調査が行われた。第1次調査では縄文時代の土坑2基、古墳時代前・中期の竪穴住居22軒、終末期古墳1基等が発掘された。第2次調査では、古墳時代前期中心の竪穴住居が68軒、終末期古墳1基等を発見した。第3次調査では、古墳時代前期の竪穴住居22軒等、第4次調査では時期不明の土坑や溝等が各々調査された。北西原遺跡は台地南に展開する山川古墳群との有機的関係も指摘されているが、おおよそ古墳時代前期の集落と終末期の方墳が重複する遺跡であったと考えられる。

古代の土浦市域は、郡の中心地では無く境界に当る地域であった。西側は筑波郡と河内郡、東側は茨城郡、南側は信太郡に分割され、南北は桜川（旧筑波川）がその境に当たっていた。古代の交通上、信太郡から常陸国府に至る官道が、高津付近にあったとされる曾祢駅を経て桜川を渡河し、真鍋台を抜けたと想定されている。弁才天遺跡を含む常名台も物資や情報流通の幹線網に間近に面した地であったと考えられ、和同開珎や緑釉陶器など奈良・平安時代の様々な資料が出土したことの背景とみられる。

この他の歴史的環境・文化財等については、既報告のものと重複するため割愛する。詳細は既報告中の記載を参照していただきたい。

(註) 各遺跡の報告は下記のとおりである。

- ・『北西原遺跡（第1次調査）』2004
- ・『北西原遺跡（第3次・第4次調査）山川古墳群（第1次調査）』2004
- ・『北西原遺跡（第5次調査）弁才天遺跡』2006
- ・『神明遺跡（第1次・第2次調査）』1998
- ・『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第3次調査）』2002
- ・『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡（第6次調査）神明遺跡（第4次調査）』2003
- ・『山川古墳群（第2次調査）』2004
- ・『神明遺跡（第5次調査）』2005



第4図 北西原遺跡第5次調査遺構全体図・トレンチ配置図

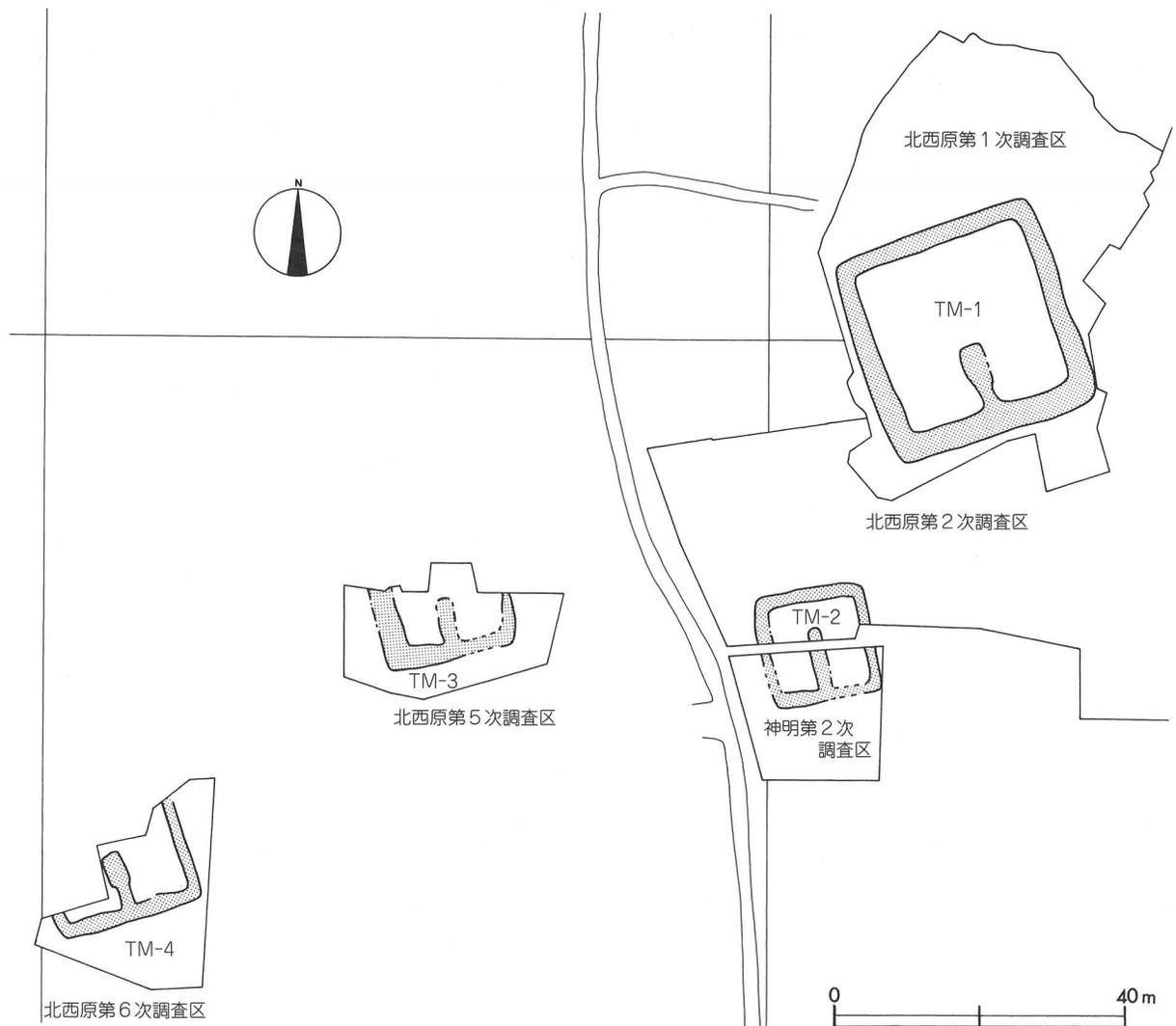
第3章 北西原遺跡第5次調査

第1節 調査の方法〔第5図〕

北西原遺跡第5次調査は面積約7,500㎡を調査区とし、北西から南東方向の現有道路を隔て、南北にエリアが区切られる（第5図）。

前年度の第4次調査において、南北方向の現有道路西側は遺構密度がかなり希薄化することが判明していたので、今次調査においては全調査区を表土排除するのではなく、トレンチを一定程度配置して、その中で発見された遺構を広げて検出・記録化するという方法をとった。このうち北側エリアではトレンチを10本、南側では3本各々設定した。

また当時、未買収地の問題も残っていたために、その部分は今次調査区から除外している。未買収地にかぶる遺構は、土地境界ぎりぎりの所までは掘削が難しいため、表土除去と調査区も手前に留めざるを得なかった。そのためにトレンチの位置、方向及び数量も、上記土地条件にかなり制約される結果となっている。



第5図 北西原遺跡第1・2・5・6次、神明遺跡第2次調査古墳配置図

第2節 遺跡の概要〔第5図〕

北西原遺跡は前年度（平成7年度）までに過去4度、2002年度に一度、発掘調査を行っている。全調査での遺構の累積は、竪穴住居跡130軒、古墳（終末期方墳）3基、土坑40基、溝20条である。概ね縄文時代中期と古墳時代前期の集落と古墳時代終末期の方墳群からなる。このうち古墳前期の竪穴住居は、現在までの所123軒を数え、周辺でも稀な規模の大きな集落である。台地南の山川古墳群とは、集落と墳墓、古墳造営地の移動を含めて、遺跡間で有機的な関連を古墳時代にかけて持ち続けている。

当調査では、古墳時代前期の竪穴住居1軒、古墳時代終末期の方墳1基、時期不明の土坑2基、溝2条を検出した。

第3節 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

当調査では、以下の通り竪穴住居跡を1軒検出した。過去の調査で検出したものと類似し、古墳時代前期のものである。

第119号住居跡〔第6図、PL.2・4〕

位置 北側エリアの北端。南北方向の現有道路に東西にトレンチを入れた所発見した。

規模 調査区内で約6×5.6mを測る。住居隅が未検出のため、主軸・方位は不明である。

壁 深さ10（～13）cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 住居東辺に一部のみ硬化面が遺存する。硬化面の中央に焼土が見られた。

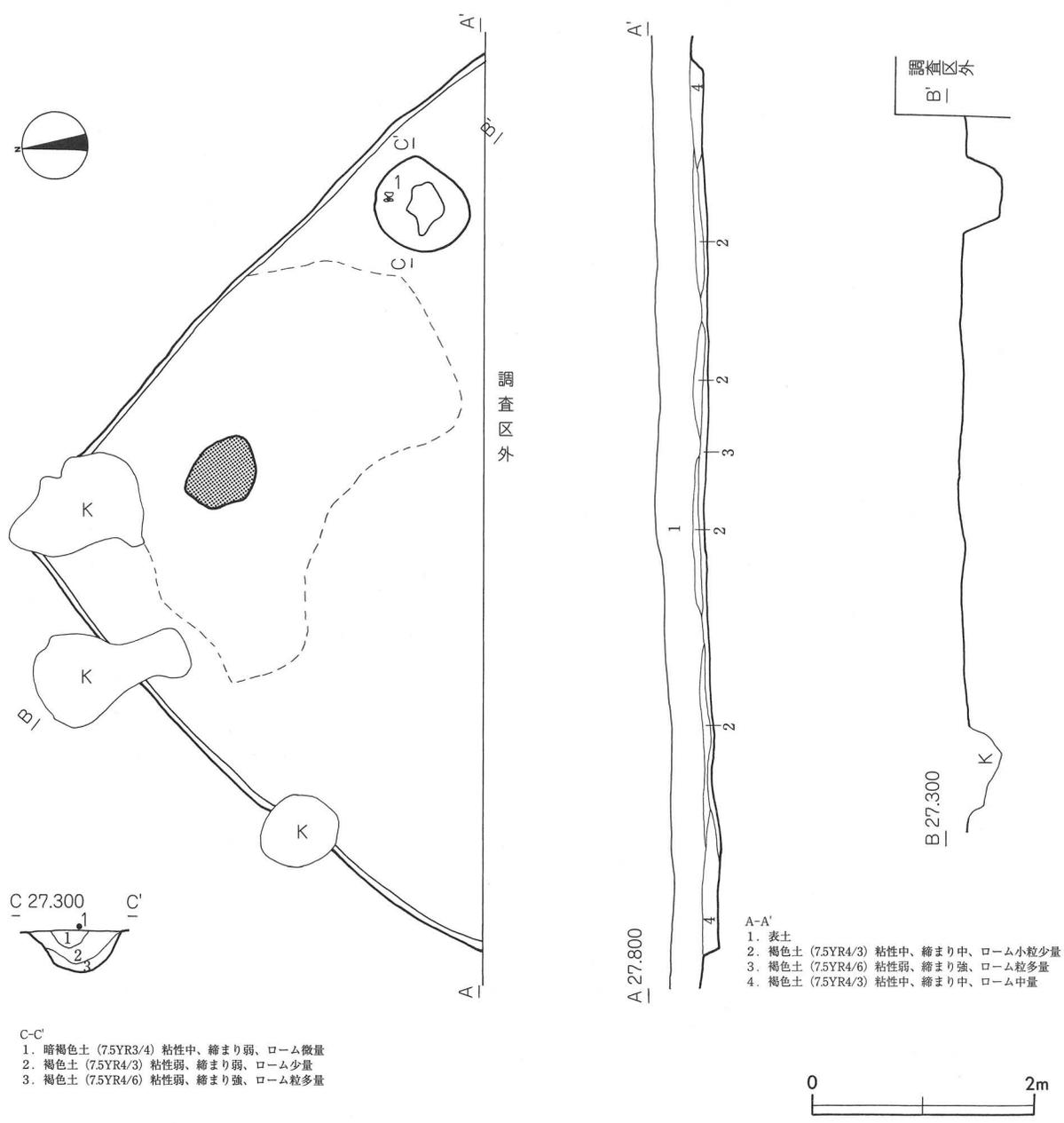
ピット 柱穴に相当するものは発見できなかった。東隅にある坑は、位置と形状から貯蔵穴の可能性が高い。

炉 明確な痕跡は見つからなかった。硬化面上の焼土は、位置的に炉の可能性は乏しい。

覆土 自然堆積である。

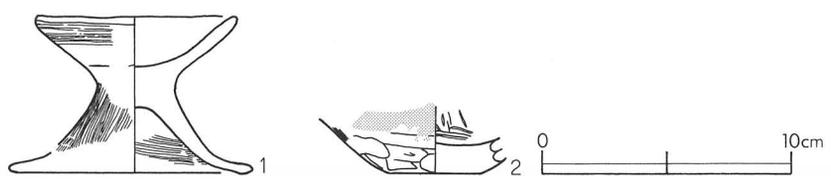
遺物 貯蔵穴上面から土師器高坏（1）、覆土中から土師器甕（2）が出土した。

所見 住居の南側は、当時土地利用等の関係で調査区を広げることができなかった。出土遺物から、当住居は古墳時代前期のものと考えられる。



C-C'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性中、締まり弱、ローム微量
2. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性弱、締まり弱、ローム少量
3. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性弱、締まり強、ローム粒多量



第6図 第119号住居跡・出土遺物

第119号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	土師器 高坏	口径 8.0 底径 [9.8] 器高 7.0	小さな坏部を有し、脚部裾がハの字状に大きく外反する高坏。	外面脚部の内外面に幅1cm弱のハケメを施す。坏部外面は粘土輪積みの痕跡が残る。口唇部外面は横位のナデ、内面はナデを施す。	長石・石英少量 橙色 普通	貯蔵穴上面 80%残存
第6図 2	土師器 甕	底径 3.8 器高 (2.6)	平底の甕の底部片。狭い底径の底部から外傾して立ち上がる。	外面底部と体部の境に右方向のヘラケズリと指頭痕、内面にはヘラナデを施す。	長石・石英中量 外面：にぶい赤褐色 内面：橙色 普通	覆土 10%残存 体部外面にスス附着

2. 古墳

当調査では、以下の通り古墳時代終末期の方墳を1基発掘した。この古墳は、墳丘はすでに失われたがトレンチ掘削中に周溝を確認したことから調査区を広げて、発見したものである。主体部は後世の攪乱を受けており、埋葬状況の具体的な情報は得られなかった。周溝の北半分は、当時未買収であったため調査を行っていない。なお、木根と近現代墓坑が周溝上に、溝が主体部上に攪乱として入りこんでいる。

ここでは、第1次調査発見の第1号墳、第2次調査発見の第2号墳に続いて番号を付し、第3号墳として報告を行う。

第3号墳〔第7～9図、PL.2～4〕

位置 北側エリアの北端。第119号住居跡の西隣。北側は当時未買収地。

規模と形状 方墳周溝の南半部を検出。北半は未買収地との関係で、調査区を広げることができなかった。周溝南辺は長さ約17.6m、東辺は(6.0)m、西辺は(10.8)mを測る。

周溝壁面 外傾して斜位に立ち上がる。周溝西辺の内側のみ、幅2～4mの中間場を設けてわずかに外反する。

周溝底面 ほぼ平坦である。

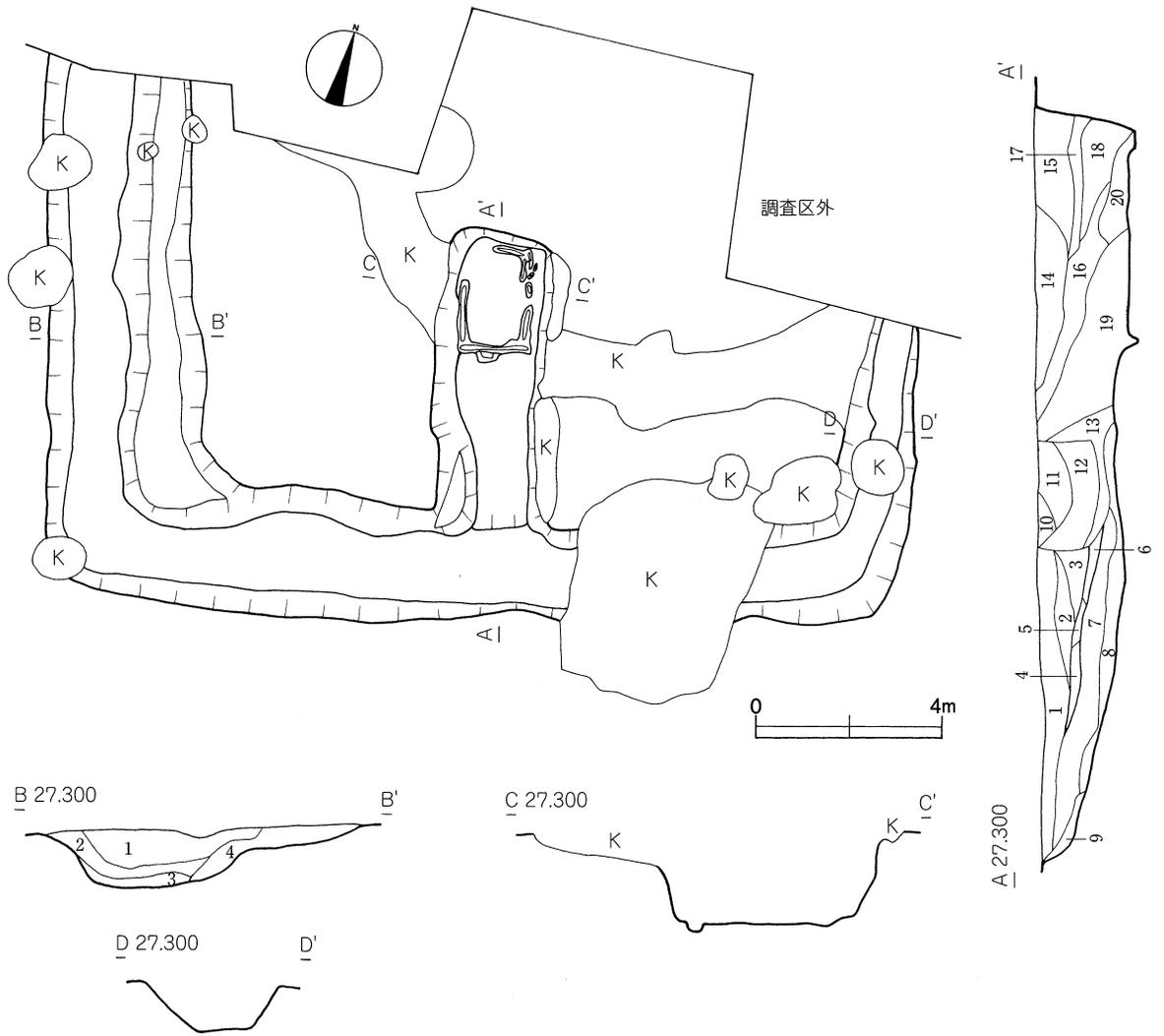
覆土 周溝部は自然堆積である。主体部は造成後程無く攪乱された(第13～20層)が、近世以降にも、主体部上面に及ぶ溝を掘られている(第10～12層)。玄室から墓道にかけては、白色粘土や片岩破片が散在する。特に墓道部の第4～6層には、まとまった白色粘土の水平堆積が見られ、意識的に床面を構築している可能性が考えられる。

遺物 周溝南辺の西側底面直上で土師器坏(1)が出土した以外は、第4～6層より上のレベルで入口から墓道にかけてまとまって出土したものである。まず、周溝部墓道入口西側からは須恵器蓋(3・4・5)と須恵器坏(6)が出土。後者は墓道出土破片と接合。墓道内からはこの他、土師器坏(2)・長頸瓶(8)の破片も出土。長頸瓶は墓道と周溝との接点からも多く出土し、両者で接合した。甕(7)も同地点での出土である。

須恵器は、破碎された小片が浮いた状態の出土状況だが、墓道内と周溝の墓道入口部分に出土が集中する。恐らく本来、墓道内か入口部分で利用していたものと考えられる。なお、小型の坏・蓋は新治窯産で、袋物類は静岡湖西産である。

主体部 長軸6.4m、短軸2.4mの長方形。攪乱を受けており、遺存状況は悪い。石室は、底面の敷石が一部残る以外は抜き取り、破碎されていた。裏込めの白色粘土や片岩片は墓道から玄室にかけて、50cm前後浮いて散在する。

所見 この古墳は、古墳時代終末期(7世紀代)のものと考えられる。出土遺物の年代は7世紀の後半代にしぼることができるため、構築時期も同じ頃と考えることができる。ただし掘り方よりも40cm前後上から須恵器が出土していることから古墳構築時ではなく、後に墓道を利用した墓前祭祀の可能性が考えられる。墓道の主軸は、1・2・4号墓とほぼ等しいため、北西原遺跡内で発見した古墳は構築の時期差はあるが、一連のものと見なすことができる。



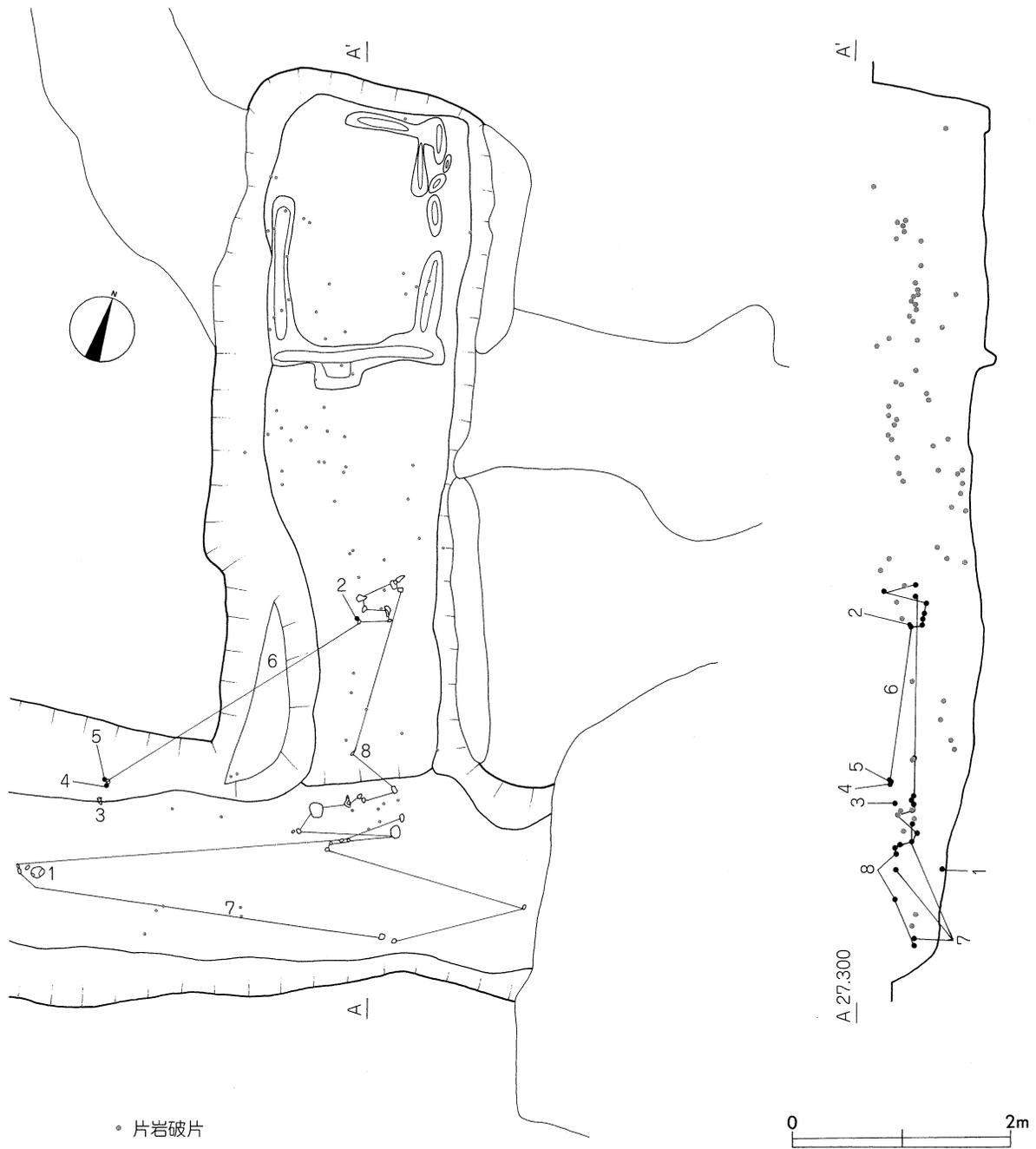
A-A'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性なし、締まり弱、ローム粒微量
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性なし、締まり中、ローム小粒多量
3. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性中、締まり中、ローム中量
4. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性弱、締まり中、ローム粒微量
5. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性中、締まり弱、ローム粒微量、粘土粒多量
6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性中、締まり弱、ローム粒少量、粘土粒少量
7. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中、締まり弱、ローム粒微量
8. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性強、締まり中、ローム粒中量
9. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性強、締まり強、ローム多量
10. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性なし、締まり弱、ローム粒中量
11. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性なし、締まり弱、ロームブロック多量
12. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性なし、締まり弱、ロームブロック中量
13. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性なし、締まり中、ローム粒微量
14. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性なし、締まりなし、ローム中量
15. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性なし、締まりなし、ローム多量、粘土ブロック少量
16. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性中、締まり中、ローム多量、粘土多量
17. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性なし、締まりなし、ローム多量
18. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり弱、ローム中量、粘土多量
19. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性強、締まり弱、ローム粒中量、粘土中量
20. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性強、締まり弱、ローム粒中量、粘土多量

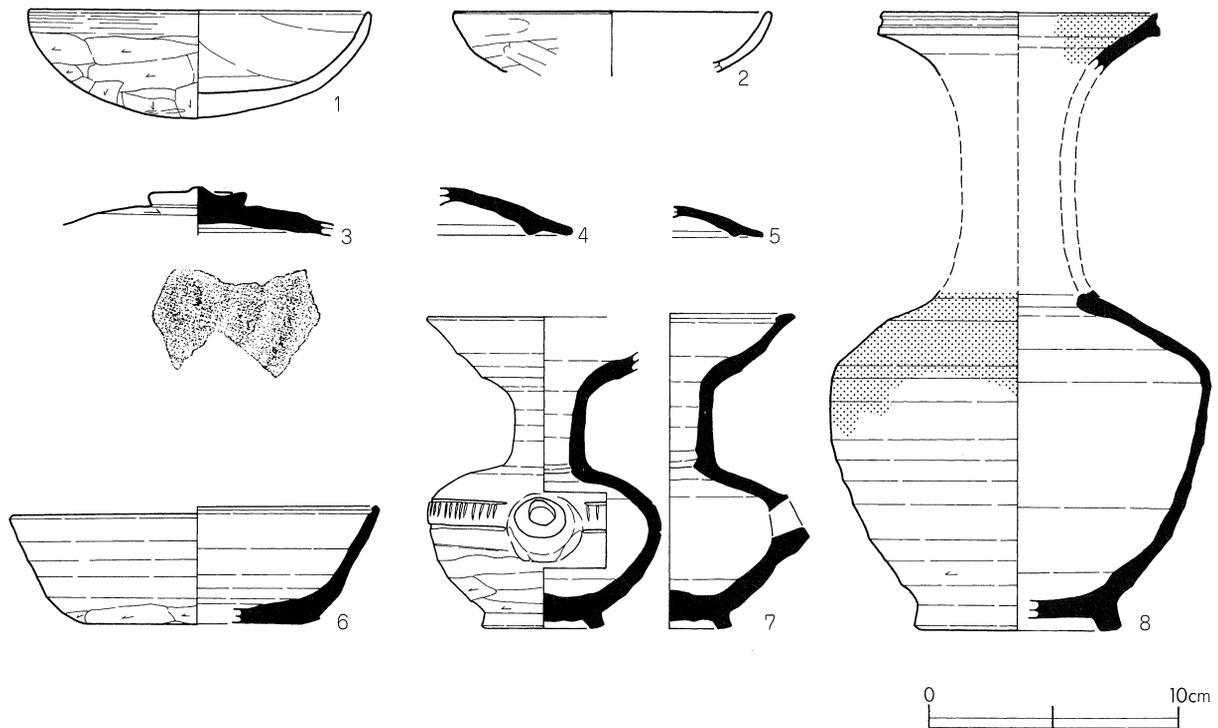
B-B'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性中、締まり中
2. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性弱、締まり弱
3. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性中、締まり強、ローム粒多量
4. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性中、締まり弱、ローム粒中量

第7図 第3号墳



第8図 第3号墳遺物出土状況



第9図 第3号墳出土遺物

第3号墳出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	土師器 坏身	口径 13.6 器高 4.2	口縁部を一部欠くがほぼ全体を残す土師器の坏身。底部は丸底で、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	底部外面はヘラケズリを施し、中央は更に細かなヘラナデ（ミガキ?）。口唇部内外面はヨコナデ。内面ナデ。	長石・石英微量 暗赤褐色 普通	周溝内 80%残存 口唇部内外面は 他と比較して黒 色味が強い
第9図 2	土師器 坏身	口径 [12.8] 器高 (2.6)	やや丸みを帯びて立ち上がる口縁部。底部は丸底状と推定。	体部外面はヘラケズリ。口唇部外面ヨコナデ。内面ナデ。	長石・石英少量 内面：黒色 外面：にぶい橙色 普通	墓道内 10%残存
第9図 3	須恵器 坏蓋	器高 (1.9)	つまみ部は中央が突出したボタン状を呈し、器厚は口唇部に向い減厚する。	つまみ寄りの外面上位に2cm弱の右方向回転ヘラケズリを施す。内面同心円状のロクロナデ。	長石・石英・雲母少量、 黒色微砂微量 灰白色 普通	墓道入口 20%残存 新治産
第9図 4	須恵器 坏蓋	器高 (1.9)	内面にカエリを持つ口縁部片。体部から口縁部側にかけて肥厚する。	内外面ロクロナデ。外面に焼成の濃淡がでた箇所があり、重ね焼きか伏せ焼きの痕跡か。	長石少量 灰白色～灰色 普通	墓道入口 10%残存 新治産
第9図 5	須恵器 坏蓋	器高 (1.4)	内面にカエリを持つ口縁部片。体部から口縁部側にかけて肥厚する。	内外面ロクロナデ。	長石少量、雲母微量 灰白色 普通	墓道入口 10%残存 新治産
第9図 6	須恵器 坏身	口径 14.6 底径 8.9 器高 4.7	平底の底部から口縁部に向かって、僅かに外傾しながら直立する。左右が非対称で高さが異なる。	口唇部内面に1条の沈線。体部下方は左方向のヘラケズリが重複し底部との境をなす。外底面ヘラケズリ。内面ナデ。	長石・石英少量、雲 母中量 灰色 普通	墓道入口 60%残存 新治産
第9図 7	須恵器 甕	口径 [9.4] 底径 4.9 器高 12.3	胴部肩に最大径を有し、注口と付け高台を有す。上方口縁部は大きく外反して、口唇部上面に面取り。	胴部と頸部を別々に製作、後に両者を接合。外面胴部肩より上はナデ。外面は胴部下半に右方向のヘラケズリ。胴部半ばに2本の沈線を引き、その間に爪形状の列点を施す。	長石・石英微量、磁 鉄鈹中量 胎土緻密 良好	墓道と周溝の接点 90%残存 口縁部内面と 胴部肩周辺に 灰オリープ色 の自然釉 湖西産
第9図 8	須恵器 長頸瓶	口径 [11.0] 底径 [8.0] 器高 [25.9]	頸部を欠くが口縁部と胴部の一部を残す、付高台の長頸瓶。底部から直立気味に立ち上がり、肩部で最大径を有して頸部へすぼまる。口縁部はラップ状に外反し、端面で肥厚する。	胴部と頸部を別々に製作した後、両者を接合。外面胴部には肩以下にヘラケズリの痕跡が明確だが、方向は不明。口唇部端面に沈線を有する。	長石微量、磁鉄鈹少 量 胎土緻密 灰白色 良好	墓道内 75%残存 口縁・底部内 面・肩部外面 にオリープ黄 色の自然釉 湖西産

3. 土坑

当調査では、以下のとおり時期不明の土坑を2基検出した。

第59号土坑〔第10図、PL.3〕

位置 調査区西側にて検出。

規模と形状 約260cm×133cmの隅丸方形。

長軸方向 N-90°-E

壁面 深さ約70cm、東側を除いてほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 この土坑の具体的な役割は不明である。ただし、北西原遺跡第55・58号土坑、山川古墳群第13号土坑と規模・底面形状の類似する点から、縄文時代の遺構の可能性もある。

第60号土坑〔第10図〕

位置 調査区西側、中央寄りで検出。

規模と形状 約75cm×70cmの円形。

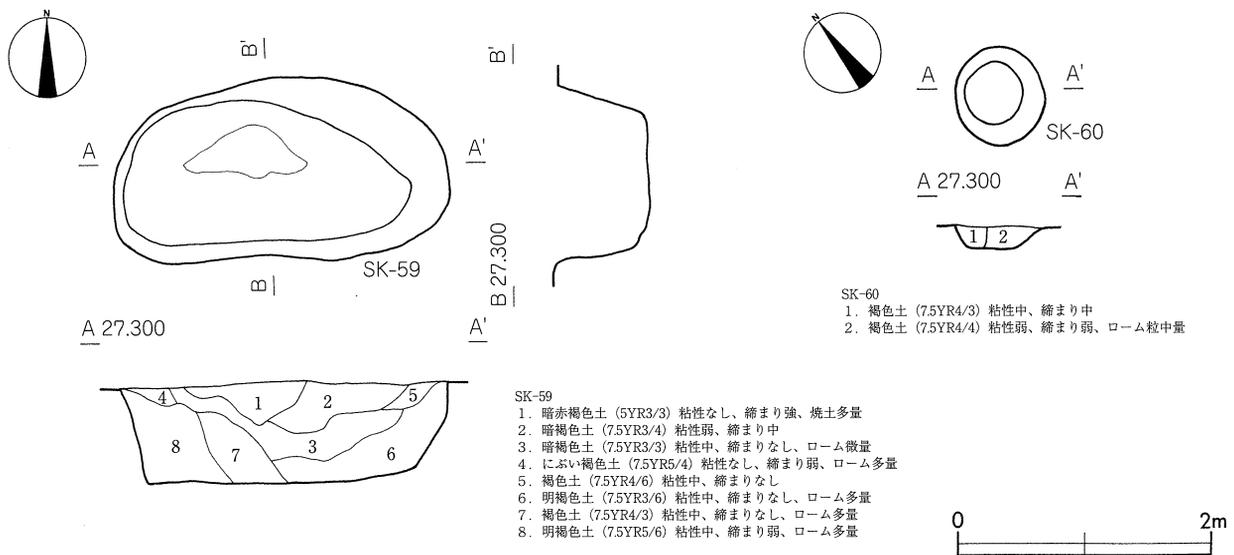
壁面 深さ約15cm、わずかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 具体的な役割は不明だが、覆土や形状から比較的最近のものとの印象を強く受ける土坑である。



第10図 第59・60号土坑

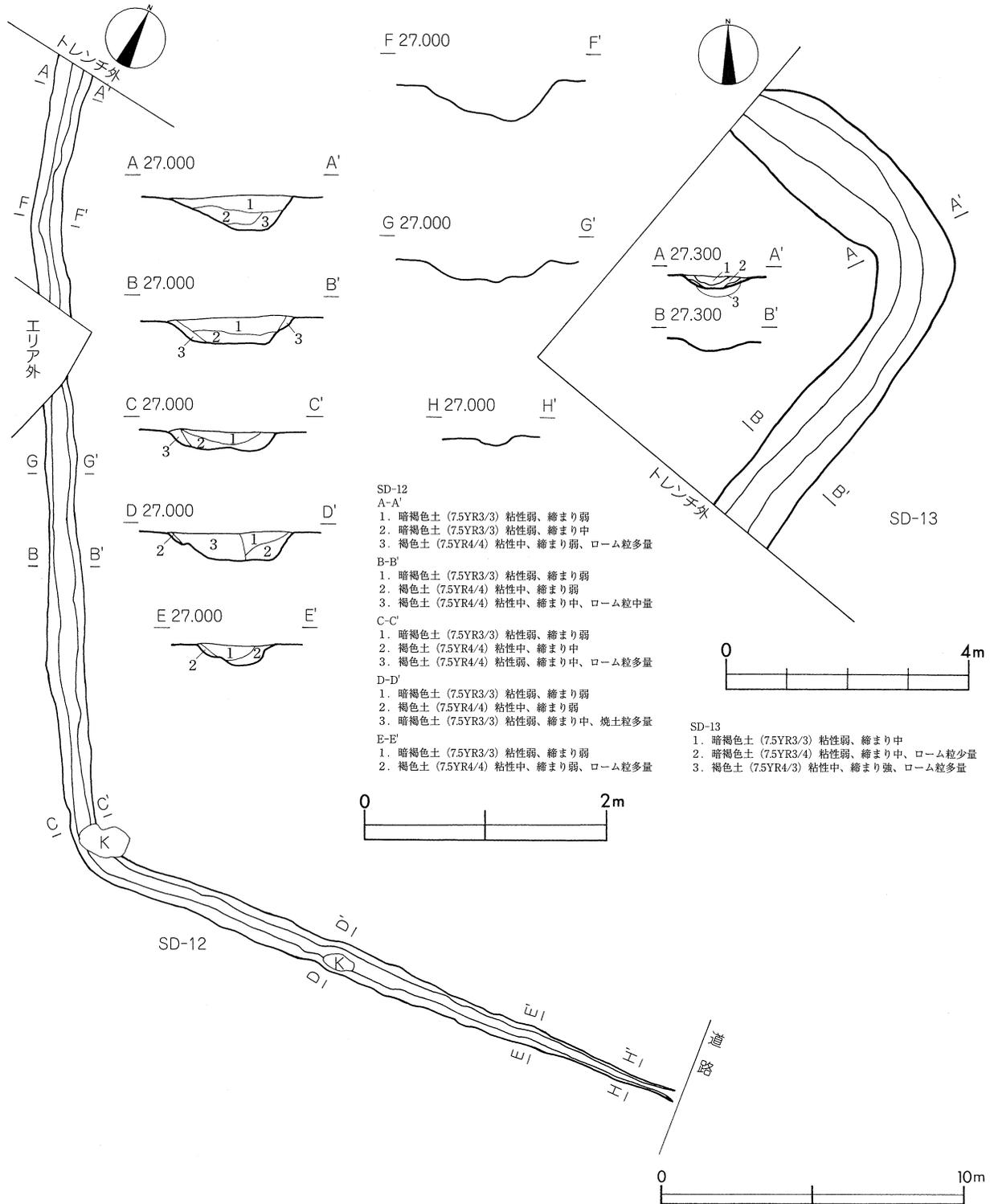
4. 溝

当調査では、以下の通り時期不明の溝を2条検出した。

第12号溝〔第11図、PL.3〕

位置 調査区東寄りで見出。

規模と形状 調査区内で長さ約47m、幅2～1m、深さ約20～15cmを測る。調査区東端から西向き、



第11図 第12・13号溝

中程で北上する。

覆土 自然堆積である。屈曲点付近で、部分的に浮いた状態で焼土が見られた。

遺物 出土していない。

所見 溝の両端は未買収地との関係で調査できなかった。規模と形状からは、古式の溝ではなく比較的最近掘られた耕作関係の溝の可能性がある。溝が途中で切れているのは、土地利用上の理由による。

第13号溝〔第11図、PL.3〕

位置 調査区南寄りで検出。

規模と形状 調査区内で長さ9.5m、幅1.5～1m、深さ20cmを測り、ほぼ直角に屈曲する。

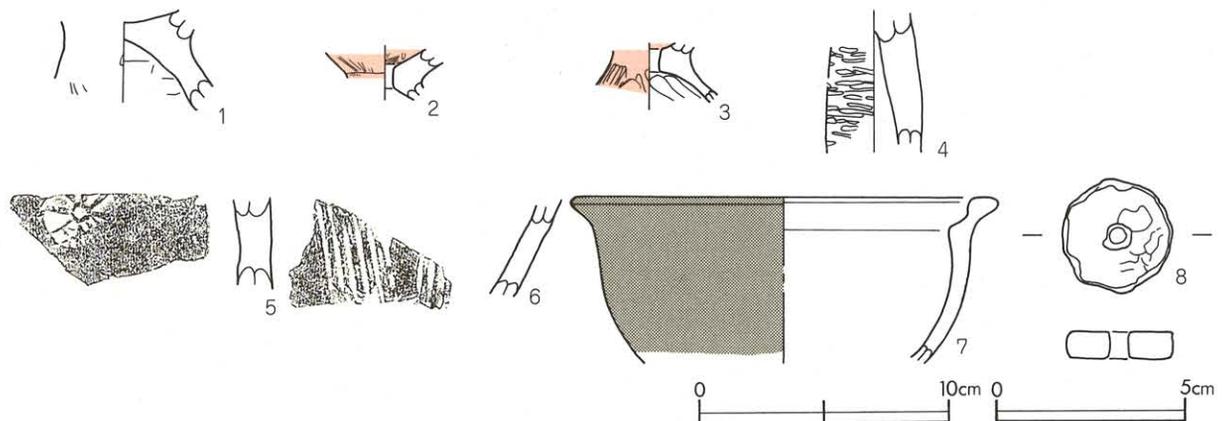
覆土 自然堆積。

遺物 出土していない。

所見 溝の両端は土地利用上の理由から調査区を広げることができなかった。規模と形状からは、古式の溝ではなく比較的最近の耕作による溝の可能性がある。

5. 遺構外出土遺物〔第12図、PL.3〕

当節では、以下に遺構外出土遺物を報告する。古墳時代のものは、集落址と同様に古墳前期のもので占められる。中世陶器は、隣接する神明遺跡内で約一町の溝を巡らせた方形館があることから、そこから混入した可能性もある。近世陶器は、第3号墳上に巡る攪乱溝中の出土である。



第12図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm・g)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	土師器 高坏	器高 (3.1)	坏部を欠く器受部で、外方する脚部を一部残す。	外面はナデ。脚部内面に指頭痕。	長石・石英粒多量 明黄褐色 普通	10% 残存 古墳時代中期か
第12図 2	土師器 器台	器高 (2.1)	坏部がやや内湾気味に立ち上がる器台の器受部。中心に6mm径の穿孔。	器受部の内外面に細かいヘラ磨き。	長石中量、石英少量 にぶい赤褐色 良好	10% 残存 器受部内外面と脚部外面の一部に赤彩
第12図 3	土師器 器台	器高 (2.6)	脚部がハの字状に大きく開く器台の一部。中心部に5mm径、脚部に4箇所穿孔。	脚部の内面に指による押圧、外面に細かいヘラ磨きを施す。	長石中量、石英少量 にぶい赤褐色 良好	10% 残存 器受部と脚部外面の一部に赤彩
第12図 4	土師器 高坏	器高 (5.2)	脚部が直立する中空の高坏。	外面に細かい横位のヘラ磨きを施す。内面にナデを施し器面を整える。	長石少量、石英・柘榴石微量、胎土緻密 明赤褐色 良好	20% 残存
第12図 5	陶器 甕	破片長 (3.4)	外面に車輪状の叩き目を持つ甕の体部。外面に薄く自然釉。	上位の破面は粘土紐の接合部に当る。内面指頭によるナデ。	長石・石英粒微量 青灰色 堅緻	10% 残存 中世
第12図 6	陶器 播鉢	破片長 (3.6)	内面に6条1単位の卸目をもつ体部片。 内外面錆釉。	外面ヨコナデ。	黒色微砂、胎土精良 器表：暗褐色 胎芯：にぶい黄橙色 良好	10% 残存 近世瀬戸美濃系
第12図 7	陶器 天目碗	口径 [17.0] 器高 (6.6)	直立気味に立ち上がり、口縁部は外反し玉縁状を呈する。口縁内面は段状をなす。	内外面ロクロナデ。 内面及び体部中位まで鉄釉。	良土 器表：黒色 胎芯：にぶい黄橙色 堅緻	10% 残存 近世瀬戸美濃系？
第12図 8	骨製品 不明	径 3.0×2.9 厚さ 0.7 重量 5.8	若干の凸凹はあるが、ほぼ円形を呈する。	表面及び側面は、一部を除いて丁寧に磨かれている。	灰黄色	紡錘車？

第4節 まとめ

北西原遺跡第5次調査では、古墳時代前期の堅穴住居1軒、古墳時代終末期の方墳1基、時期不明の土坑2基、溝2条を発見した。面積の割には、遺構の密度が希薄である点では前年度の第4次調査と類似する結果を示している。過去の調査の蓄積からは、堅穴住居全体の密度は、今次調査区より北側から東側で高まるものと予想される。

調査検出の土坑・溝は時期不詳のものだが、堅穴住居は古墳時代前期のもので、東側の第1次～第3次調査検出のものと類似する。

第3号墳は、過去の調査で発見された第1・2号墳と同様、古墳時代終末期の方墳である。当例も、攪乱のため埋葬状況等の情報が既に失われていたが、出土遺物がある事から状況的にはまだ恵まれている。特に須恵器は、出土位置や状況から古墳石室内への供献というよりも、墓道を利用しての墓前祭祀を行っていた可能性がある。産地の組成も、大型の袋物類は静岡県湖西窯産、小型の碗皿類は新治産で占められることも、7世紀の土器利用のありかたを考える意味で興味深い。7世紀代の集落は弁才天遺跡で確認されているが、同遺跡からは杏葉などの馬具も見つかっている。集落と墓域の関係からは、古墳時代後期以降は弁才天遺跡と北西原古墳群の対応が今後注目される。

第4章 弁才天遺跡

第1節 調査の方法

弁才天遺跡は、舌状台地全体に広がる面積約18,500㎡に及ぶ広範囲の遺跡である。当遺跡に発掘調査を行うにあたっては、前年度まで継続して調査を行った北西原遺跡とは谷や不可侵地を隔てる他、余りにも遺跡間の距離が離れ過ぎていたために、同一方眼軸による調査区の設定が困難であった。そのため調査区の方眼は、弁才天遺跡のみに対する任意で独自の方眼軸と呼称を設定することとし、調査区内遺構の把握を行った。

調査は重機による表土排除後、人力による表土精査を行い、調査区内の遺構の把握を方眼毎に行った。遺跡全体の遺構分布が、谷に面した北西から南側縁辺に特に密集していたため、概ね北西部から南東部へ逆時計回りに遺構の掘削を始めた。重複関係にある遺構が多いため、隣接していても掘り下げや遺構番号を前後したのものもある。その半面、現地での発掘調査の所見が、整理作業時に変わり新旧関係が明確になった遺構もある。

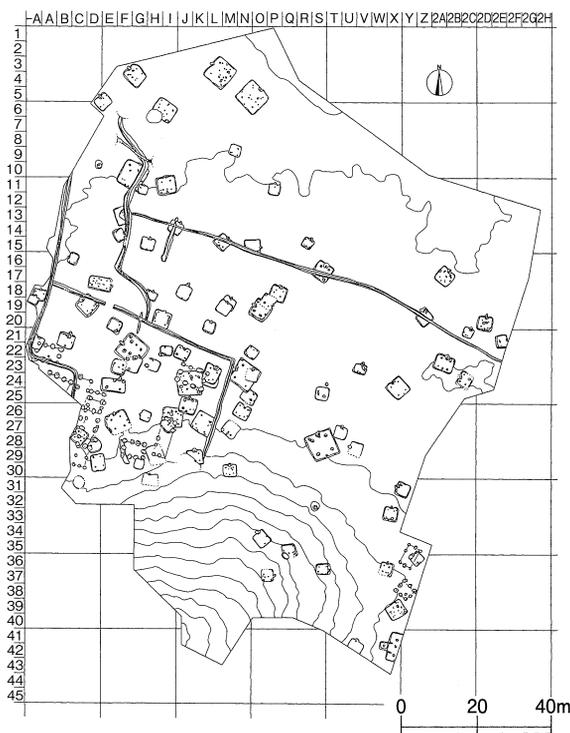
遺構の掘り下げは基本的に人力の移植ゴテで行い、掌大以上の遺物は原位置に残して、完掘状態の遺構と共に記録化した。遺物の中には掘り下げの都合上、原位置に残せなかったものもある。また、遺構の埋土を観察するために土の畔を1～2本掘り残したが、底面まで検出した後に、断面の記録化をして除去した。全ての遺構の掘り下げと完掘状態の記録が終了してから、セスナ機による遺跡の航空撮影を行った。

遺物の整理作業は、遺物の洗浄、注記、実測、写真撮影を行ったが、出土遺物が大量であったため、発掘後の作業は長期に及んだ。遺構の整理作業も、現場でとった測量図をもとに、本図を作成した。複雑な遺構や重複関係にある遺構の中には、現地測量図では不足の認められるものもあったため、個別遺構や航空撮影写真を参考にして修正を加えている。

第2節 遺跡の概要

弁才天遺跡は、土浦市大字常名字弁才天に所在する周知の遺跡である（土浦市遺跡番号236）。桜川から北に貫入する谷に圍繞された舌状台地上に立地し、谷を挟んだ西の別台地には北西原遺跡・神明遺跡・山川古墳群に面し、北側には西谷津遺跡と接している。同一台地の地続きには、現在都和南小学校庭以南の地に天神脇遺跡がある。

調査では竪穴住居跡90軒、掘立柱建物11棟、土坑5基、溝8条を発見した。時代毎に分類すると、縄文時代の竪穴住居2軒、古墳時代前期の竪穴住居13軒、古墳時代後期の竪穴住居12軒、奈良時代の竪穴住居35軒、平安時代の竪穴住居28軒、古墳時代から奈良時代にかけての土坑5基、奈良時代以降の溝8条、掘立柱建物11棟を調査した。以下に検出した遺構と出土遺物の報告を行う。



第13図 グリッド設定図

第3節 遺構と遺物

弁才天遺跡から出土した遺構は住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝などである。遺物は旧石器時代から近世までの広範囲に及んでいるが、すべてが遺構に伴うわけではない。遺構が発見された時代は縄文時代（竪穴住居跡－2軒）、古墳時代前期（竪穴住居跡－13軒）、古墳時代後期（竪穴住居跡－12軒）、奈良・平安時代（竪穴住居跡－63軒、掘立柱建物跡－11棟）である。土坑（5基）と溝（8条）は明確に時期が確定できるものが少なく、土坑は4～8世紀前半代、溝は8世紀後半から近世以降と判断した。

ここでは、遺構の有無に関わらず旧石器時代・縄文時代・それ以降と時代を追って記載することとし、土坑・溝は時代別の記載とは別の章立てで触れることとする。

1. 旧石器時代〔第14～20図、PL.37～40〕

（1）検出資料の分布状況（第14図）

今回の調査では関東ローム層中の調査は実施していないが、後世の遺構内検出石器の形態的特徴から55点を旧石器時代の石器として抽出・認定した。石器は住居跡を中心に検出しているが台地全域から検出しているわけではなく、常名台遺跡群を東西に分断するように深く刻まれた西側開析谷近くに分布する住居跡の覆土からの検出例が主体を占めている。特に第22号住居跡から11点、第3号住居跡から6点の石器を検出していて、他の住居跡での検出例が1～3点と比較してかなり多いことを把握している。検出される住居跡の密度と石器に使用している石材の同一個体区分の観察からすると、第2・3・13・14・20・21・22・23号住居跡と第3号溝、L-8グリッドから検出した、硬質頁岩が主要石材である合計27点の石器が集中する北西部エリアと、第10・19・32・51・62・74・87・88号住居跡と第7号溝、A・B-21、D-24、D-29各グリッドから検出した、ガラス質黒色安山岩（以下黒色安山岩と表記する）・メノウを主要石材とする合計15点の石器が比較的集中する南西部エリアの2ヶ所に、本来は埋没していた石器集中箇所が存在を想定しておきたい。残りの13点は、以上設定したエリア以外の遺構内や表土検出資料である。

茨城県南部は、旧石器時代の遺物包含層である関東ローム層の堆積が特に薄い地域である。土浦市域での堆積環境・経年変化の観察では、立川ローム層第2暗色帯に対比できる暗色帯付近が硬質ローム層で、より以上のローム層の大半が軟質ロームとして存在する。条件が良好な場合でも第1暗色帯以上が軟質ロームであるため、武蔵野編年Ⅱa期からⅣ期までの石器が同一層位内から検出される事例がほとんどである。層厚も薄く、暗色帯を掘り抜き鹿沼軽石を包含する明褐色硬質ロームまで表土から1.5mで達してしまう程である。このような堆積環境では、縄文時代以降の住居構築を目的とした掘削行為が旧石器時代の包含層を掘削することになり、本遺跡の様な密度の土地利用があったならば、遺物包含層の遺存状況に影響が及んでしまっていると考えておきたい。

（2）石器各説

弁才天遺跡で検出した旧石器の器種と点数は、磨製尖頭石器1点、ナイフ形石器7点、槍先形尖頭器1点、削器9点、彫刻刀形石器1点、微細な剥離のある剥片5点、剥片30点、石核1点の合計55点である。以下、各石器の製作技術上の特徴を紹介し、次に使用石材について硬質頁岩を中心に記述する。

磨製尖頭石器（第15図1）

この石器は、研磨と押圧剥離を主要な加工方法として尖頭部分を作り出した石器である。輪郭は左右

非対称形で、次に紹介するナイフ形石器と類似する。器面の70%に研磨面が残っており素材の形態や獲得方法が不明であるが、側面からの観察では腹面側に向かい湾曲して剥片素材であった可能性が高い。胴部半ばより基部の範囲に、左右両側縁から押圧剥離による成形を施して剥離の際にヒンジフラクチャーを頻繁に起こしている。左側縁では部分的に敲打による成形も行なっている。先端側は表裏左右四側面ともに研磨作業によって成形され、断面形は台形状をなす。裏面と左側面が接する角度は70度、右側面との角度は65度であり右側面の角度がより鋭角である。器厚も左側より右側を薄く成形している。先端および基部端を折損する。研磨を器体成形の主要な加工方法とする点は、旧石器時代においては石斧以外の器種に採用することは稀である。しかし、器体輪郭はナイフ形石器と共通点があり、旧石器時代の石器として提示した。

ナイフ形石器（第15図2～8）

剥片を素材として縁辺に急斜度剥離の二次加工を加えるが、剥片の縁辺の一部を未加工のまま残した石器をナイフ形石器とした。7点検出し全点を図示した。

2は縦長剥片を素材に左側縁に二次加工を施して、刃部を直線状に残し加工部位を曲線状に成形している。基部側に素材剥片の打面と打面縁辺調整部を残している。背面構成の観察では、素材剥片の獲得までに90度の打面転位を経過していることが観察できた。先端を僅かに折損する。3は縦長剥片を素材として、左右両側縁に二次加工を施している。右側縁の途中で縁辺を屈折させており錐状をなす。素材剥片獲得までに90度の打面転位を経過して、基部側に素材剥片時の打面を残す。先端を折損する。4は縦長剥片を素材として、右側縁は連続的に左側縁は基部と先端に二次加工を施している。左側縁の裏面にもバルブ除去のための二次加工を施して、左側縁は内側に屈折している。素材剥片の獲得までに180度の打面転位を経過している。5はナイフ形石器の折損品。右側面の剥離面構成を観察すると、背面頂部から腹面側に抜けるネガティブバルブを持つ剥離面が並行して残る。この剥離面を打面とした左側縁側への剥離には、末端にヒンジフラクチャーやステップフラクチャーを生じている。この様相を考慮すると、素材剥片は石核の打面縁辺調整剥片、あるいは石刃状の縦長剥片剥離の際に形成された稜付き剥片であったと考えられる。ナイフ形石器のための二次加工は左側縁のみに認められる。腹面の折損箇所付近にはタール状物質の付着が認められる（網点により表示）。6はやや幅広な剥片を素材として、二側縁に二次加工を施している。右側縁の二次加工は先の3と同様に途中屈折させ、錐状の張り出しを形成している。素材剥片の獲得までに90度の打面転位を経過している。先端側を折損している。7は寸詰まりな縦長剥片を素材として、右側縁を中心に微細な二次加工を施している。素材剥片の獲得までに90度の打面転位を経過している。基部端を僅かに折損する。8は横長剥片を素材として打面を左側縁に残し、右側縁に微細な二次加工を施す。左側縁とした打面と基部端には自然面を残す。

槍先形尖頭器（第16図9）

押圧剥離により剥離角45°未満の緩斜度剥離による二次加工を施して、木葉形や柳葉形に成形した石器を槍先形尖頭器とし、1点を検出した。縦長剥片を素材として、背腹両面に対して押圧剥離を施して成形している。胴部半ばで右側縁からの入力により折損している。

削器（第16図10、12～14、第17図15～19）

素材剥片の一部に45度以上の急斜度を計測する二次加工を加えて刃部を作り出したもの。9点検出し全点を図示する。

10は縦長剥片を素材として、片側に連続して二次加工を施したもの。刃部は緩やかなノッチ状をな

す。上部は検出時の欠損、下部は過去の折損と判断した。12は素材の周囲約90%に対して二次加工を施している。10、12の黒曜石は栃木県高原山甘湯沢群産を使用している（分析試料10：TUK-116, 12：TUK-117）〔望月2004〕。13は縦長剥片を素材として、周囲の3/4に二次加工を施して刃部を成形している。腹面にはネガ面が4面あり、器厚の観察から剥片素材の石核を最終的に利用した可能性が考えられる。14は縦長剥片を素材として、素材剥片の打面部に二次加工を施している。15は縦長剥片を素材として、その右側縁に二次加工を施している。打面は上部に残る。素材剥片を獲得するまでに90度から180度の打面転位を複数回経過している。16は縦長剥片を素材として、左側縁に二次加工を施している。二次加工箇所が切り合っていないため、鋸歯縁状をなす。打面は上部に残る。17は縦長剥片を素材として、左側縁に二次加工を施している。加工部位がノッチ状をなす。18は素材剥片の縁辺各所に二次加工を施している。加工部位はノッチ状をなす所と、やや丸く突出するものが交互に並ぶ。19は石刃石核の打面再生剥片を素材とし、右側縁に二次加工を施して刃部を成形している。左側縁には石刃石核時の打面縁辺調整加工の状態を残したままになっている。

彫刻刀形石器（第16図11）

1点検出した。縦長剥片を素材としている。胴部半ばで器体を折り取り、折り面を打面として左側縁に彫刻刀面を成形している。彫刻刀面の作出は、打面となった折り面と素材剥片縁辺のなす角度が鋭角をなす側縁に対し実施している。打面と彫刻刀面の挟む角度は82度である。この彫刻刀形石器は、彫刻刀面形成の特徴から「小坂型」に該当すると判断した。

微細な剥離のある剥片（第18図20～23、第19図28）

剥片縁辺の一部に剥離面長が1mm程の微細な剥離面があるもので、5点を検出し全点を図示した。

20は剥離時にバルブ部分が大きく屈折し破碎している比較的大振りな剥片を使用している。21は縦長剥片の背面末端に微細剥離が形成されている。22は縦長剥片の右側縁に微細剥離がある。剥片末端は打面付近の3倍の器厚があり、ウートラパッセに近い石核の器厚取り込みが生じている。23は縦長剥片の末端に微細剥離がある。剥片剥離の際にバルバスカートと、打点から縦割れを同時に生じている。28は縦長剥片の両側縁に微細剥離がある。剥片獲得までに90度の打面転位を経過している。剥片の打面側と末端側を折損するが、僅かに残った末端形状を見ると、ヒンジフラクチャーを生じていたことが認められる。

剥片（第18図24、第19図25～27、29・30、第20図31・32）

30点検出した内8点について図示し、特徴について記す。

24は末端側を折損している。背腹両面の剥離方向は一致している。25は背面の観察から、剥片の獲得までに180度の打面転位を経過していることが認められた。26は胴部半ばで末端側を折損している。27は背面が10枚以上のネガ面で構成されており、腹面幅と剥片厚が同程度である。この剥片は剥離が進行して板状になった石核の小口部分で剥離した剥片と考えられる。29は背面に節理面が多く残った剥片である。30は自然面が多く残る剥片で、素材礫に対して剥離を開始した初期段階の石核調整剥片の意味合いを持っている物と考えられる。31はトロトロ石（ガラス質黒色デイサイト）を使用した剥片である。打面側を折損している。32は背腹両面がポジ面であることが大きな特徴である。右側縁にはネガ面から構成される複数の剥離面より構成される。未掲載資料の剥片は、器体の一部を折損する物6点、不定形剥片16点である。

石核（第20図33）

器体の一部に自然面を残している。剥離面の構成から90度の打面転位を少なくとも3回以上繰り返し

ている。そのため打面縁辺調整加工は認められない。最終的には剥離末端にヒンジフラクチャーを生じた段階で剥離作業を終了している。

(3) 使用石材について

弁才天遺跡検出の旧石器に使用している石材には、黒色安山岩、トロトロ石（ガラス質黒色デイサイト）、硬質頁岩、チャート、メノウ、黒曜石がある。硬質頁岩以外は1点1個体の場合が多く、個体識別作業を実施していない。

黒色安山岩と共に主要石材を構成する硬質頁岩については、色調と構成粒子を肉眼観察し10個体に分別した。以下、各個体別分類の様相について記す。色調は標準土色帖〔小山・竹原2002〕に準拠する。

硬質頁岩1（5Y8/2～10YR7/2）剥離面の表面に微細な小孔が開いている。中心部から自然面にかけて同心円状の変色域があり、中心部の色調が暗く外周に向って徐々に明るくなる。全体に灰色微粒子が点在する。

硬質頁岩2（10YR7/3）硬質頁岩1よりもガラス質感が強い。色調は均質に見える。

硬質頁岩3（10YR7/3～10YR2/2）硬質頁岩2よりもガラス質感が強い。

硬質頁岩4（5Y5/1）ガラス質感が硬質頁岩2と同程度で、径1～3mmの斑紋が葉理状に生じる。

硬質頁岩5（2.5Y5/1）ガラス質感が硬質頁岩3と同程度で、灰白色の斑紋が全体に散在する。

硬質頁岩6（10YR6/2）ガラス質感が硬質頁岩2と同程度で、微細な灰色粒子が散在する。

硬質頁岩7（2.5Y8/3）ガラス質感が硬質頁岩1よりも弱く、灰色微粒子が点在する。

硬質頁岩8（7.5YR2/2）硬質頁岩7よりも砂質感が強い。灰白色の縞模様が僅かに認められる。

硬質頁岩9（10YR7/2）ガラス質感が硬質頁岩2と同程度で、黒褐色～灰色の斑紋が全体に認められる。

硬質頁岩10（10YR7/1）ガラス質感が硬質頁岩9と同程度。微細な小孔と灰色の斑紋が僅かに散在する。

黒曜石については、国立沼津工業高等専門学校望月明彦氏に蛍光X線による産地分析推定作業を実施していただいた。その結果、全点が栃木県高原山甘湯沢群産と判定された〔望月2004〕。

本遺跡における使用石材の総重量528.1gに対して各石材種の重量構成比は、多い順に黒色安山岩223.1g（42.25%）、硬質頁岩198.0g（37.49%）、チャート65.0g（12.31%）、トロトロ石18.8g（3.56%）、メノウ17.8g（3.37%）、黒曜石5.4g（1.02%）となる。一方、二次加工石器と石材の選択傾向が認められる。ナイフ形石器には硬質頁岩とメノウを用い、削器に対しては黒色安山岩と黒曜石を用いる。

(4) 小結

弁才天遺跡の旧石器は、全点が本来の包含層であるローム層以外の後世の遺構中からの検出となった。時期判断は、硬質頁岩とメノウを使用して基部端には打面を残す成形加工、言い換えると先端を鋭角に成形することに主眼を置いていて、基部側の成形は先端側と同様に基部側の成形も細く薄く成形することを意識する傾向のあるAT降灰期以降のナイフ形石器とは異なる基部側の厚い石刃製ナイフ形石器と小坂型彫刻刀形石器、黒色安山岩製の削器の存在から、武蔵野台地編年の立川ローム第Ⅶ層段階相当の石器群と考える。

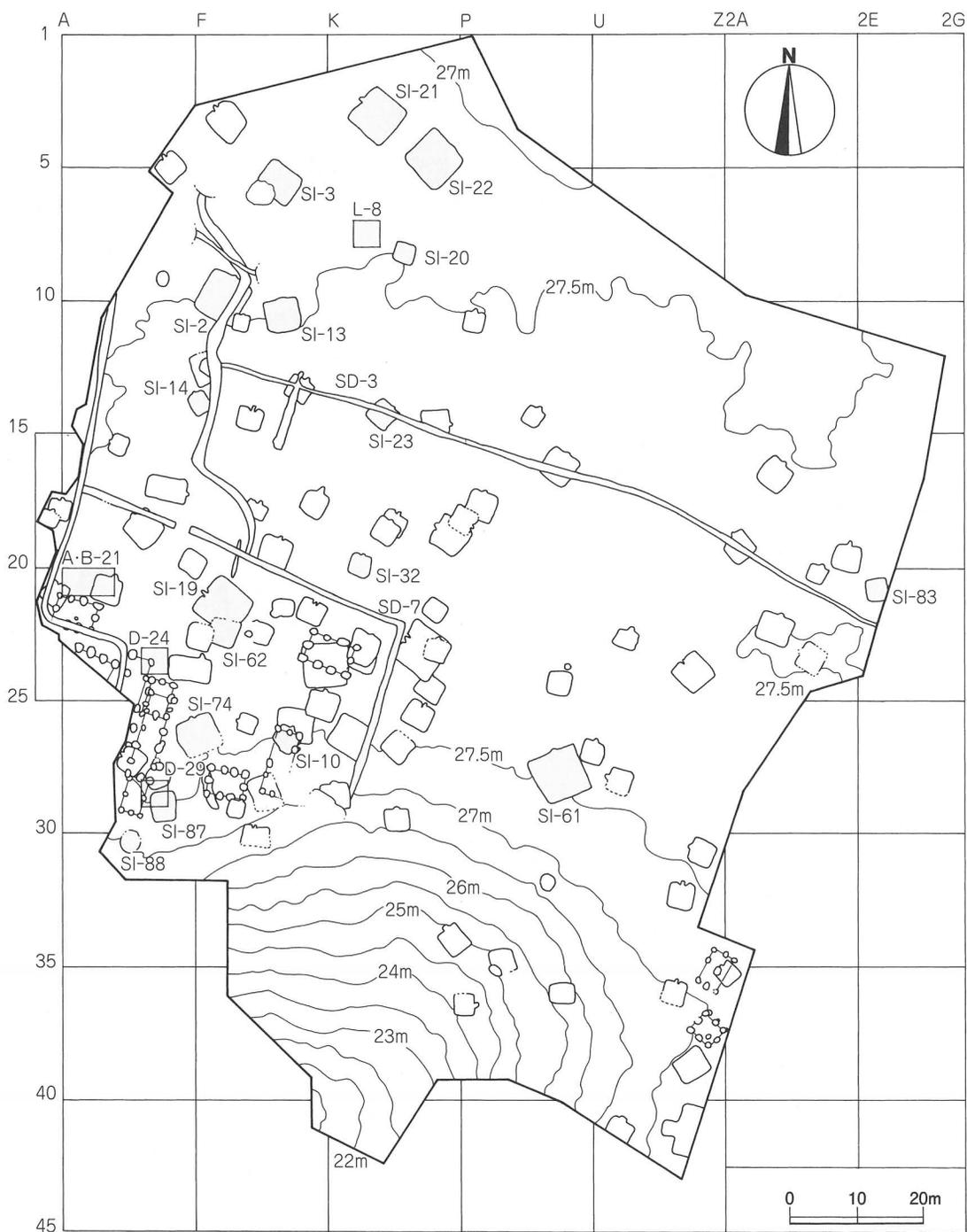
常名台遺跡群では現地調査の際に同時期と考えられる石器が現在まで多数検出されている。山川古墳群第2次調査では、第2暗色帯上部から石刃製削器を伴する石器集中地点を1ヶ所検出した〔窪田2004〕。検出状況の観察では、10数点の石器が4m四方に分布する小規模な集中であったが、この様な小さな遺構が各所に点在している可能性を考慮していかなければならない。たとえ遺構（包含層）外検出例ではあっても、ローム層内の調査を実施せずに50点以上の石器が検出できたことから、弁才天遺跡の

旧石器は常名台遺跡群の中でも埋蔵量が多い地点であったと指摘できると考えている。

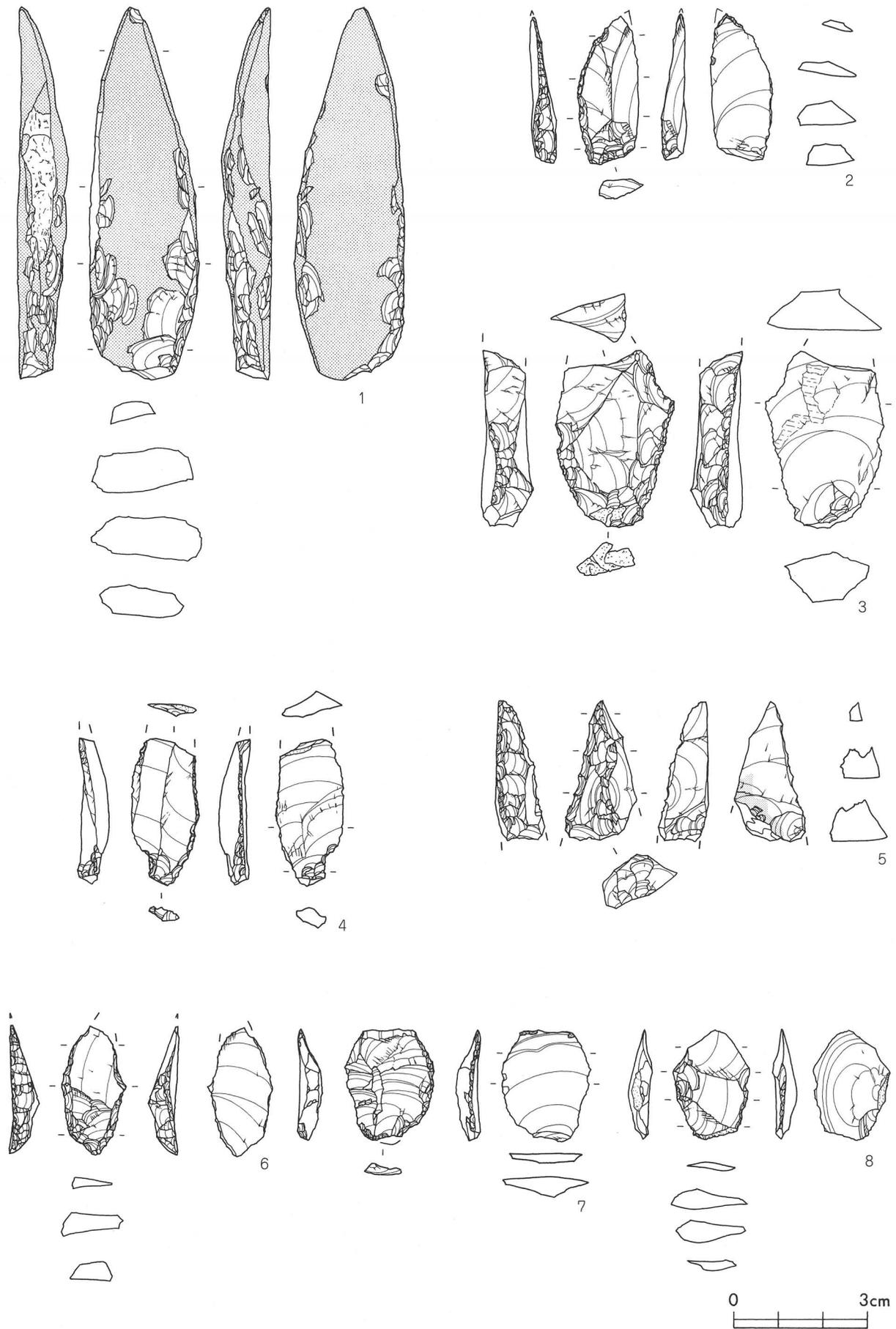
[参考文献]

窪田恵一 2004 「第3章 第6節 (1) 旧石器時代の調査」『山川古墳群 (第2次調査) 土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集』土浦市・土浦市教育委員会・山川古墳群第二次調査会

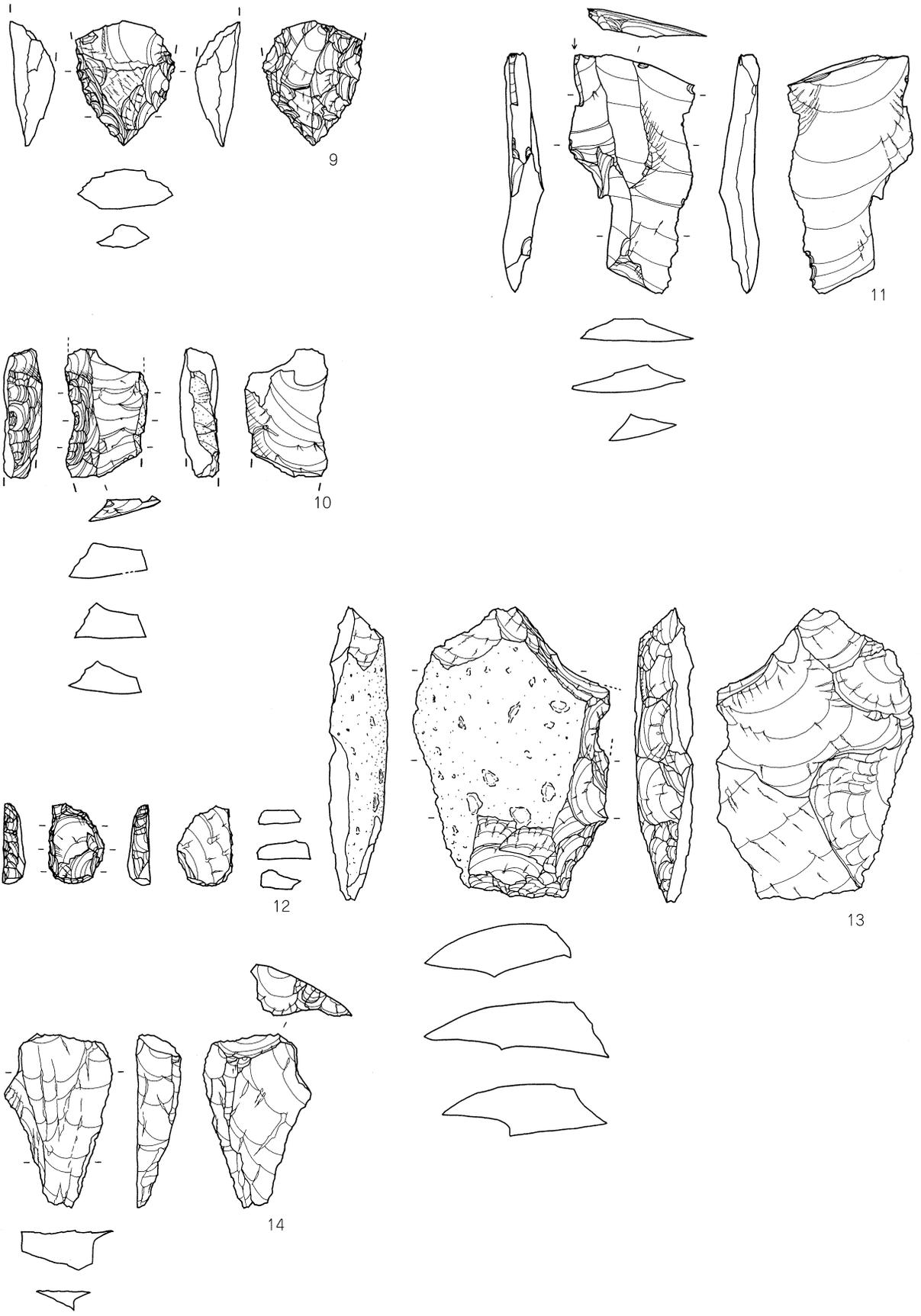
望月明彦 2004 「付編2 土浦市内遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『山川古墳群 (第2次調査) 土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集』土浦市・土浦市教育委員会・山川古墳群第二次調査会



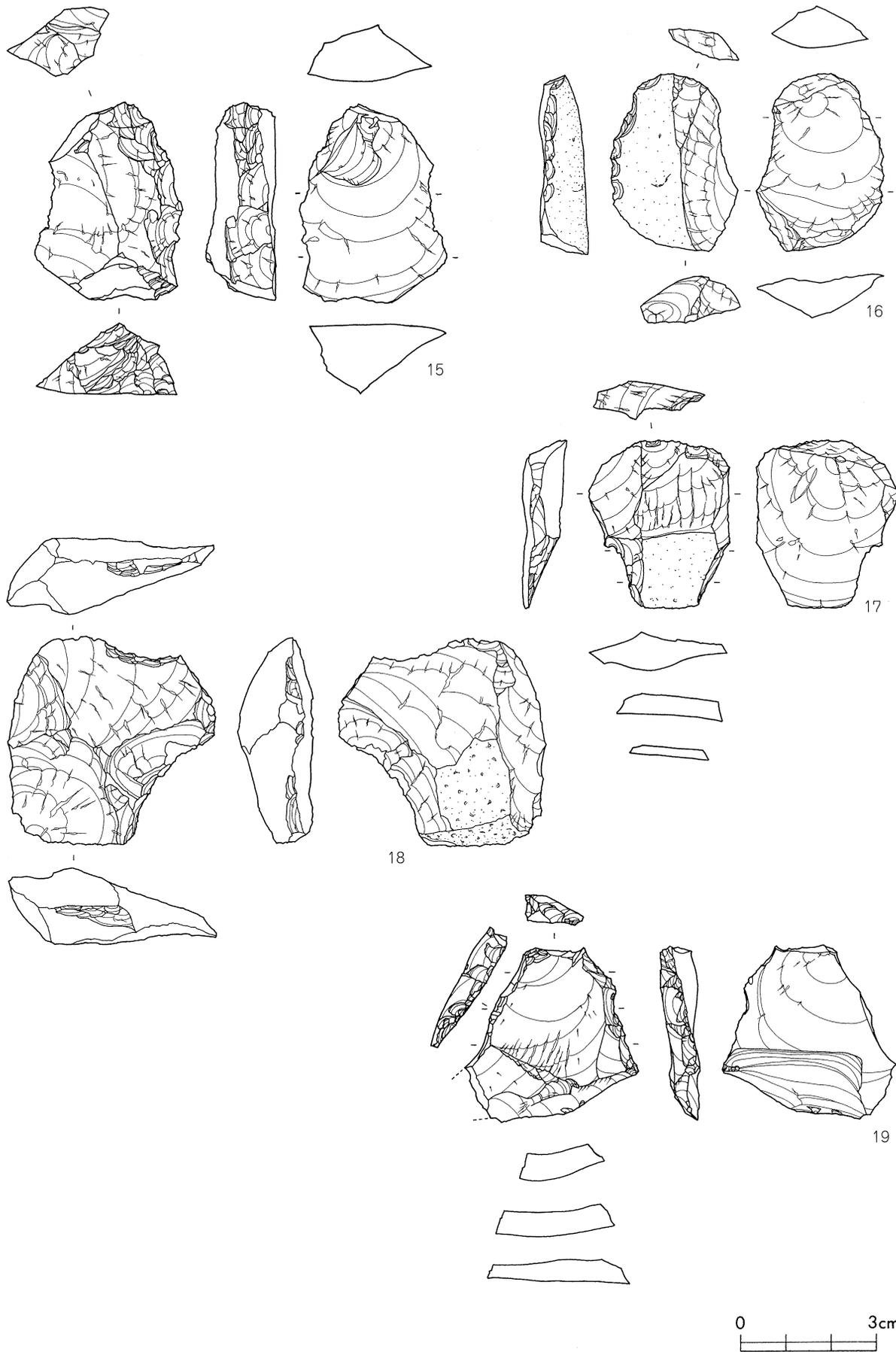
第14図 旧石器検出遺構分布図



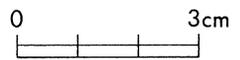
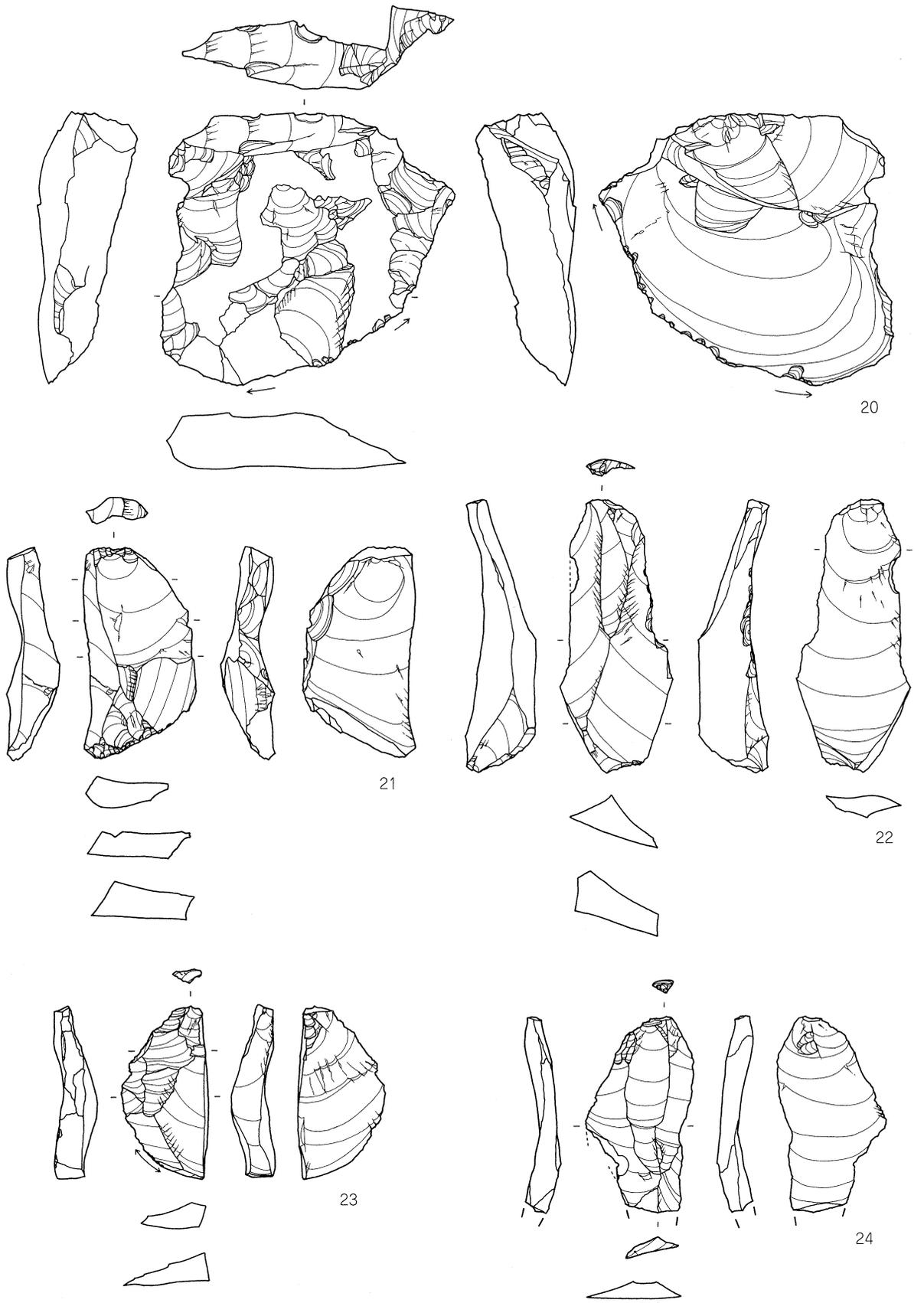
第15図 旧石器時代の石器（1）



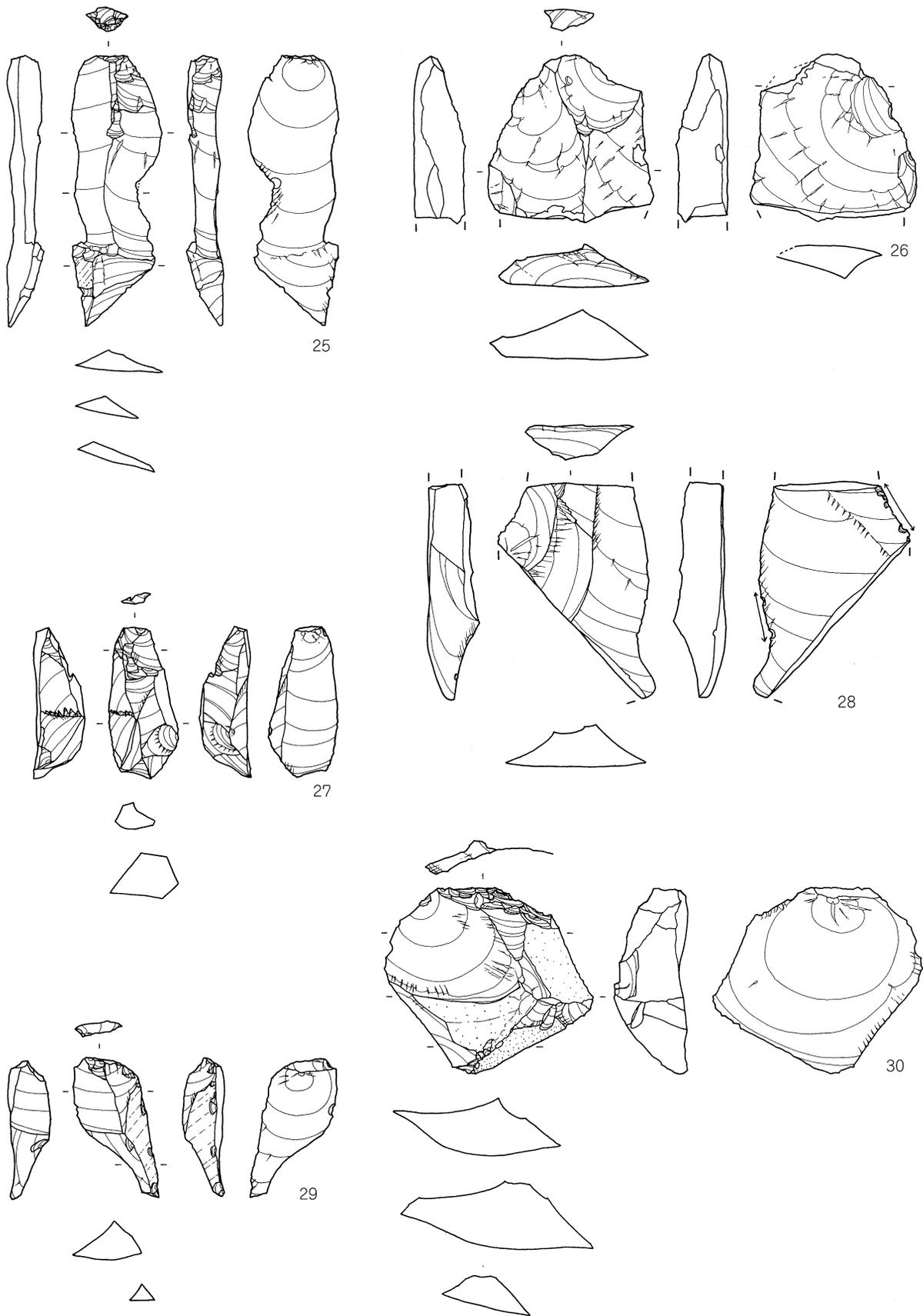
第16図 旧石器時代の石器 (2)



第17図 旧石器時代の石器 (3)

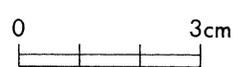
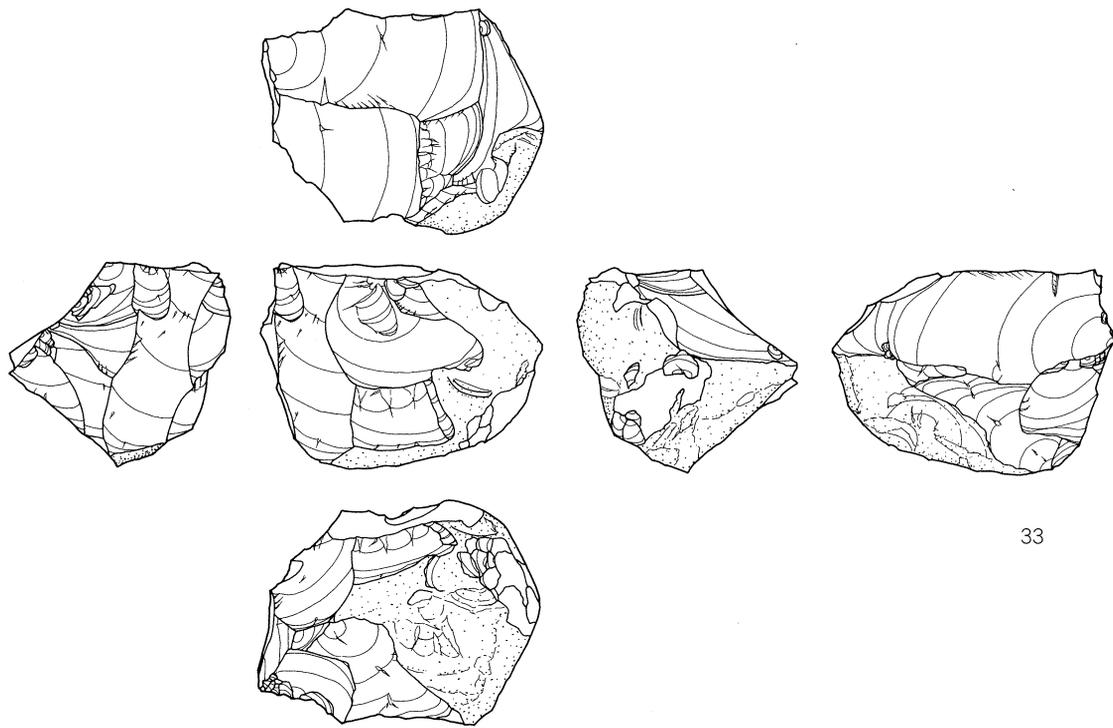
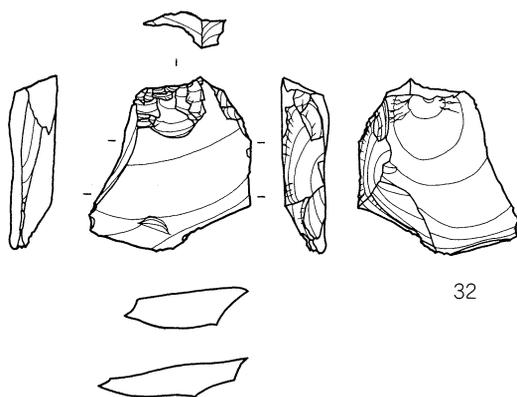
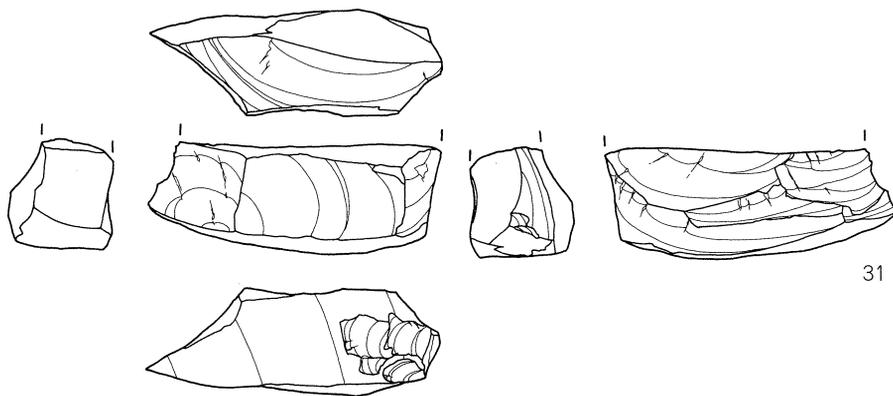


第18図 旧石器時代の石器 (4)



第19図 旧石器時代の石器 (5)

0 3cm



第20図 旧石器時代の石器 (6)

弁才天遺跡 旧石器観察表

図版 番号	器 種	石材名	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	打面形状	打面長 (mm)	打面幅 (mm)	剥離角	検出地点
15- 1	磨製尖頭石器	黒色安山岩	84.7	24.5	11.2	26.7	複剥離面	7.1	17.0	86	SI-87
2	ナイフ形石器	硬質頁岩 1	33.8	14.4	5.5	2.2	単剥離面	4.2	10.2	124	SI-22
3	ナイフ形石器	メノウ	40.0	26.9	10.6	12.0	単剥離面	4.2	8.5	132	SI-83
4	ナイフ形石器	メノウ	32.7	16.0	6.6	3.1	複剥離面	2.9	5.5	131	SI-13
5	ナイフ形石器	硬質頁岩 1	32.6	15.9	11.6	4.1	なし	0.0	0.0	0	SI-22
6	ナイフ形石器	硬質頁岩 2	29.2	14.9	5.6	2.2	なし	0.0	0.0	0	SI-22
7	ナイフ形石器	硬質頁岩 3	24.9	20.3	4.6	2.1	なし	0.0	0.0	0	SI-74
8	ナイフ形石器	硬質頁岩 4	24.8	17.5	4.5	1.7	単剥離面	2.5	8.8	122	D-24グリッド
16- 9	槍先形尖頭器	チャート	27.1	21.5	8.7	4.3	なし	0.0	0.0	0	SI-3
10	削 器	黒曜石	28.5	18.3	8.7	4.3	なし	0.0	0.0	0	SI-23
11	彫刻刀形石器	硬質頁岩 3	51.8	27.0	7.8	8.1	なし	0.0	0.0	0	SD-3
12	削 器	黒曜石	17.3	12.5	4.2	1.1	なし	0.0	0.0	0	A・B-21グリッド
13	削 器	黒色安山岩	64.9	43.9	12.6	36.9	なし	0.0	0.0	0	SI-62
14	削 器	黒色安山岩	37.9	24.0	9.9	6.4	なし	0.0	0.0	0	SI-83
17- 15	削 器	黒色安山岩	43.7	32.5	16.1	21.4	複剥離面	11.5	12.9	118	SI-10
16	削 器	黒色安山岩	37.5	29.5	10.5	12.5	単剥離面	7.1	16.1	135	SI-32
17	削 器	黒色安山岩	39.6	32.2	9.5	10.7	複剥離面	9.6	28.8	127	SD-7
18	削 器	黒色安山岩	51.9	47.3	16.6	32.5	なし	0.0	0.0	0	表土
19	削 器	硬質頁岩 5	37.2	37.3	6.2	10.5	複剥離面	5.5	14.1	110	表土
18- 20	微細剥離剥片	硬質頁岩 3	59.0	67.8	18.0	65.8	単剥離面	16.6	42.8	不可	SI-74
21	微細剥離剥片	硬質頁岩 1	46.9	23.3	8.2	10.3	単剥離面	5.4	14.0	112	SI-22
22	微細剥離剥片	硬質頁岩10	59.5	25.1	9.1	12.0	複剥離面	5.8	8.2	108	SI-51
23	微細剥離剥片	硬質頁岩 7	37.5	18.7	6.2	4.7	単剥離面	3.2	5.5	不可	SI-2
24	剥 片	硬質頁岩 3	42.6	22.5	4.2	4.0	複剥離面	2.7	4.9	118	SI-3
19- 25	剥 片	硬質頁岩 3	58.5	21.4	6.8	5.2	複剥離面	5.6	9.2	112	SI-3
26	剥 片	黒色安山岩	36.3	36.2	11.5	13.7	単剥離面	6.0	11.5	128	表土
27	剥 片	硬質頁岩 6	32.2	11.1	10.1	4.7	単剥離面	1.8	6.0	122	表土
28	微細剥離剥片	硬質頁岩 1	45.8	37.5	10.3	11.6	なし	0.0	0.0	0	SI-23
29	剥 片	硬質頁岩 1	28.1	17.5	8.5	2.8	単剥離面	3.4	11.2	128	SI-22
30	剥 片	硬質頁岩 1	40.8	45.5	14.3	19.8	単剥離面	4.5	14.8	114	SI-22
20- 31	剥 片	トトロ石	19.3	48.5	18.6	18.8	なし	0.0	0.0	0	SD-2
32	剥 片	硬質頁岩 1	27.1	27.6	6.6	5.0	複剥離面	6.4	12.5	124	SI-22
33	石 核	チャート	46.9	39.1	33.8	58.4	なし	0.0	0.0	0	SI-10
	剥 片	硬質頁岩 1	19.6	18.7	5.0	1.6	単剥離面	4.2	10.5	125	SI-21
	剥 片	硬質頁岩 1	23.7	22.2	7.2	2.7	なし	0.0	0.0	0	SI-22
	剥 片	硬質頁岩 1	25.8	11.4	5.4	1.3	なし	0.0	0.0	0	SI-22
	剥 片	硬質頁岩 1	13.0	19.6	4.3	0.7	なし	0.0	0.0	0	SI-22
	剥 片	硬質頁岩 1	25.0	20.4	11.0	4.3	自然面	0.0	0.0	0	SI-3
	剥 片	硬質頁岩 2	22.1	26.1	5.3	2.5	複剥離面	5.1	12.8	124	SI-21
	剥 片	硬質頁岩 2	19.5	17.3	4.0	0.8	なし	0.0	0.0	0	SI-22
	剥 片	硬質頁岩 5	16.7	18.9	4.9	1.8	複剥離面	11.6	5.0	133	SI-61
	剥 片	硬質頁岩 8	15.2	25.4	4.5	1.8	自然面	4.9	13.8	116	SI-19
	剥 片	硬質頁岩 9	28.1	22.0	2.0	1.3	なし	0.0	0.0	0	SI-14
	剥 片	硬質頁岩 9	23.0	20.3	5.0	2.4	なし	0.0	0.0	0	SI-88
	剥 片	黒色安山岩	19.8	28.4	5.7	3.6	複剥離面	5.3	25.8	130	SI-20
	剥 片	黒色安山岩	26.5	13.6	7.2	2.3	単剥離面	7.1	13.3	98	SI-20
	剥 片	黒色安山岩	25.2	44.5	9.6	5.5	線状	0.0	0.0	0	SI-88
	剥 片	黒色安山岩	34.6	39.2	9.9	11.9	単剥離面	3.8	8.4	135	SI-88
	剥 片	黒色安山岩	37.4	27.7	7.8	10.2	自然面	0.0	0.0	0	D-29グリッド
	剥 片	黒色安山岩	26.9	24.1	4.8	2.4	自然面	5.1	16.5	110	L-8グリッド
	剥 片	黒色安山岩	52.3	32.0	16.1	22.6	単剥離面	6.5	8.5	122	表土
	剥 片	黒色安山岩	21.4	32.4	6.4	3.8	自然面	3.7	0.0	85	表土
	剥 片	チャート	44.5	10.7	7.0	2.3	線状	0.0	0.0	0	SI-3
	剥 片	メノウ	15.4	20.9	3.4	1.0	線状	0.0	0.0	0	SI-3
	剥 片	メノウ	18.9	19.5	5.5	1.7	なし	0.0	0.0	0	SI-83

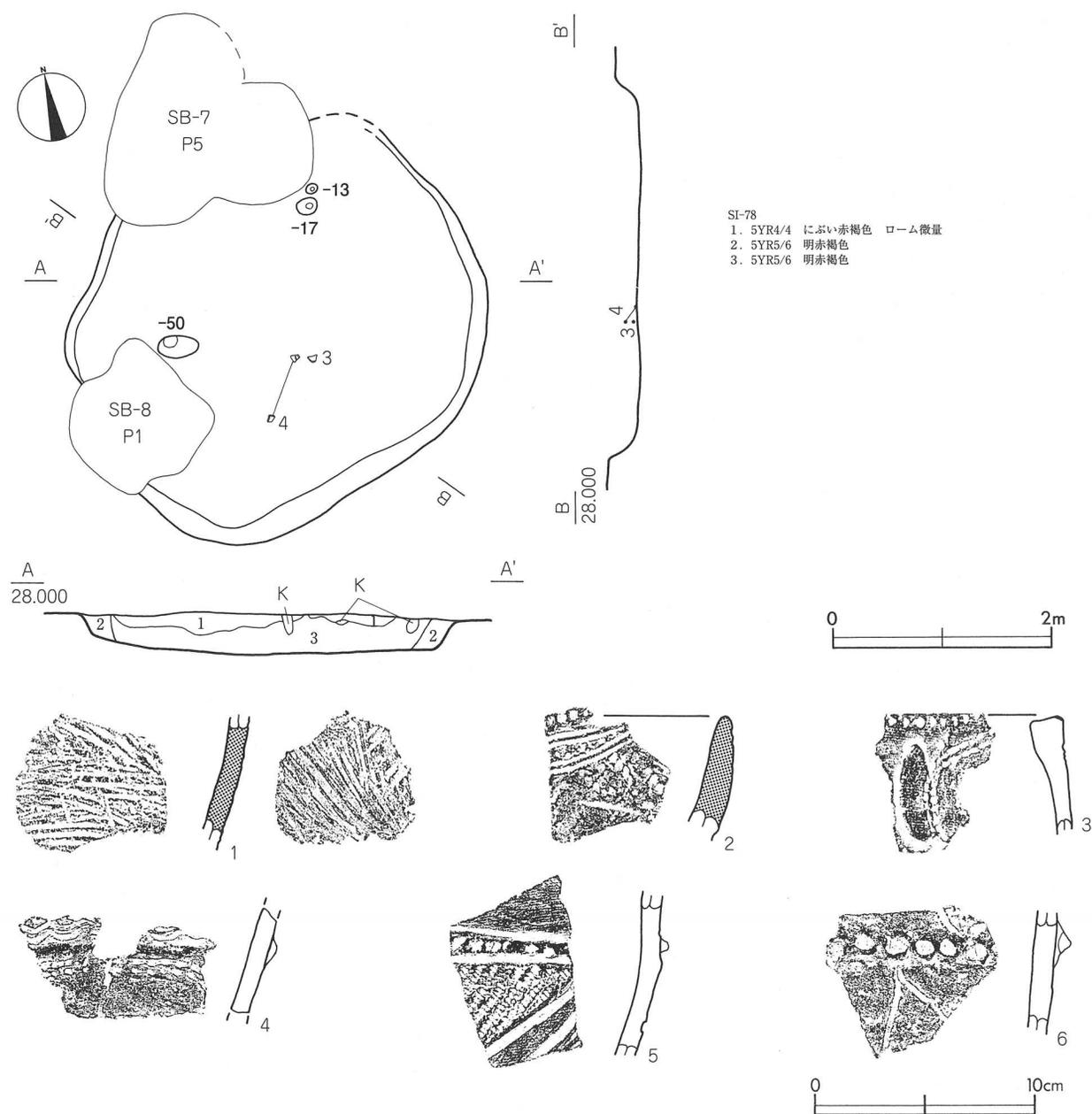
2. 縄文時代

本遺跡からは縄文時代の住居跡が2軒発見されている。調査区南西側に2軒が隣接して立地していた。時期はいずれも中期前半阿玉台式期に相当すると思われる。遺構番号は調査順に付しており、時代毎にまとめた本書では番号が大きく飛んでいることをご了承願いたい。なお、第73号住居跡は欠番である。

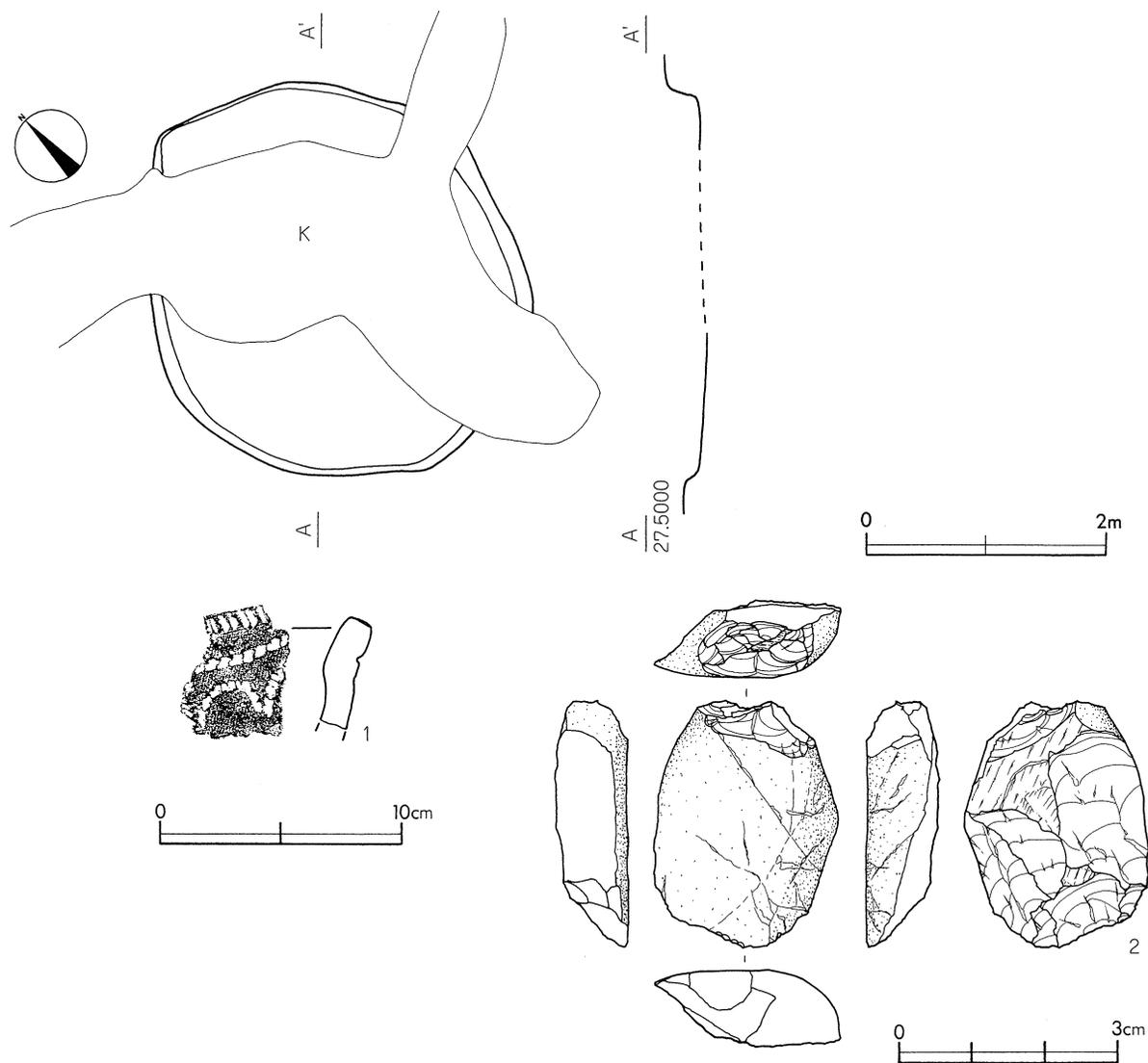
(1) 竪穴住居跡

第78号住居跡 [第21図、PL.30・44]

位置 調査区南西際D・E-28・29グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5m付近に位置する。第7・8号掘立柱建物跡と重複しており、土層堆積状態から本住居跡が古いと判断した。



第21図 第78号住居跡・出土遺物



第22図 第88号住居跡・出土遺物

規模 長径3.88m、短径3.55mの不整円形を呈し、床面積はおよそ13.8㎡である。

壁 外傾して立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で30cmを測る。重複する第7・8号掘立柱建物跡に壁の一部を壊されている。

床 やや起伏を有している。掘立柱建物跡により床面が一部壊されている。

ピット 3基確認された。円形・楕円形を呈し、径11～38cm、深さ13～50cmを測る。

炉 確認されなかった。

覆土 3層に分層された。壁際と底面の土相は類似している。

遺物 中央付近の床面直上、覆土下位より数点破片が出土している。石器は磨き石類3点、剥片3点が出土している。1は早期後半条痕文系、2は黒浜式である。3・4は阿玉台Ⅱ式、5は堀之内2式、6は加曾利B式粗製土器で外面に炭化物が付着していた。

所見 床面直上と覆土下位で出土している遺物から本住居跡の時期はおよそ阿玉台Ⅱ式に相当すると思われる。該期の住居形態は円形を基調とするものが多く、また柱穴が明瞭でない、炉址がみられない等の特徴を有していることも時期判定の根拠とした。

第88号住居跡〔第22図、PL.44〕

位置 調査区南西壁に近いC-31グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.0mに位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長径3.22m、短径3.17mの円形を呈し、床面積は約10.2㎡である。壁と床面の大半を攪乱により壊されている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で34cmを測る。

床 概ね平坦である。

ピット 確認されなかった。

炉 確認されなかった。

遺物 覆土中から破片が出土したのみである。1は波状縁、口唇部に爪形文、口縁部は有節沈線が描かれる。2は楔状石器で両極剥離により形成されている。片面に自然面を残している。他に敲打器1点、剥片2点が出土している。

所見 覆土中の破片から判断すると阿玉台Ib式期となろうか。該期の住居跡は柱穴が明瞭でない、炉址が確認されない等の特徴を有しており、このことも時期判定の根拠とした。

第88号住居跡出土石器観察表（単位：mm、g）

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
第22図 2	楔状石器	チャート	34.3	25.8	10.0	10.3

(2) 遺構外出土遺物

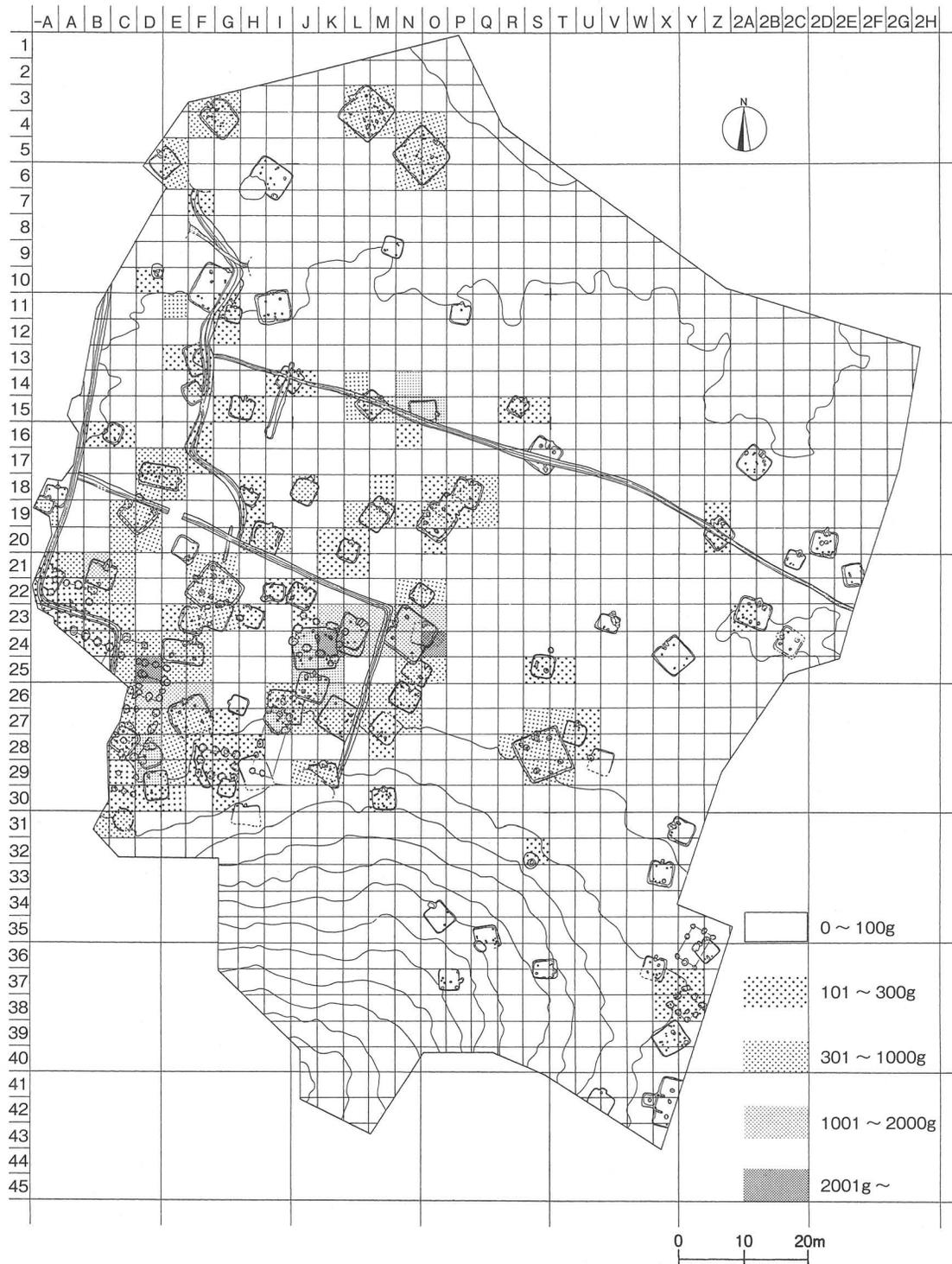
①土器・土製品〔第24～29図、PL.44～50〕

調査区南側の谷部と北東部周辺を除いた範囲、縄文時代以降の住居跡覆土中より多くの縄文土器片が出土した。遺跡全体からの出土量はおよそ143.65kg、破片数8726片であった。時期は早期前葉の撚糸文系から後期中葉の加曽利B式にかけて出土しており、最も多い時期は前期前葉（黒浜式とその併行期）、ついで後期前葉から中葉（堀之内～加曽利B式）である。逆に最も少ない時期は早期前葉撚糸文系、ついで中期前葉となっている。時期別の量比は破片数・重量ともに同様の傾向を示し、このことから破片の大小・厚さが時期により異なっても破片数もしくは重量を計測すれば傾向が把握できることが本遺跡では明らかとなった。また、土製品は土錘2点、円盤4点と僅かですべてを図示している。

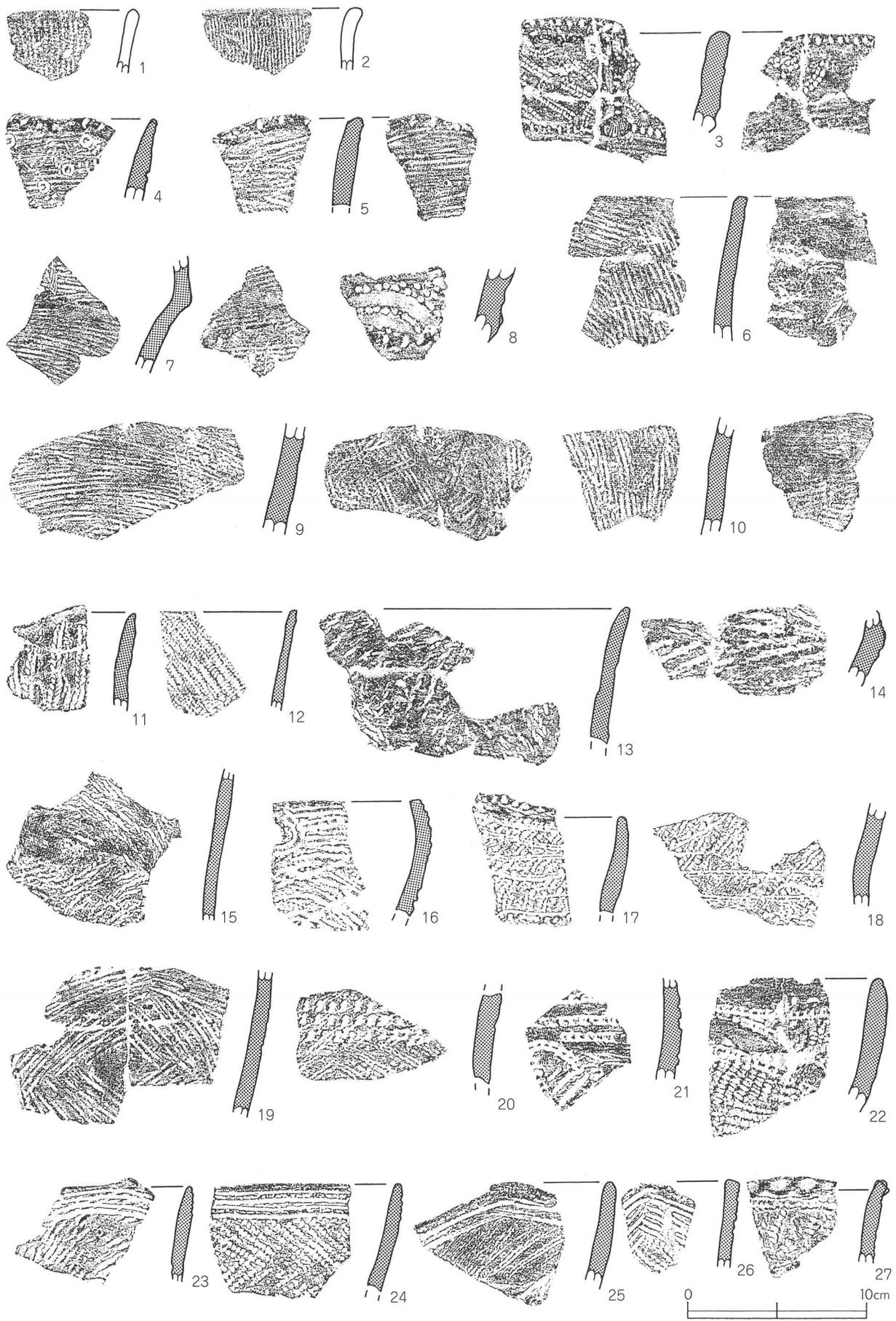
縄文時代の住居跡は前述したとおり調査区の南西側に集中していたが（第78・88号住居跡）、遺構外出土とした土器の分布はこの範囲を大きく越えて確認された（第23図）。最も集中している範囲は調査区中央やや南側のD～O-23～26グリッドの一带で、G～Iの空白部を挟み集中箇所が2箇所みられた。逆にほとんど出土していない希薄な部分は、南側の斜面部と北東側の平坦面である。

遺構外出土縄文土器

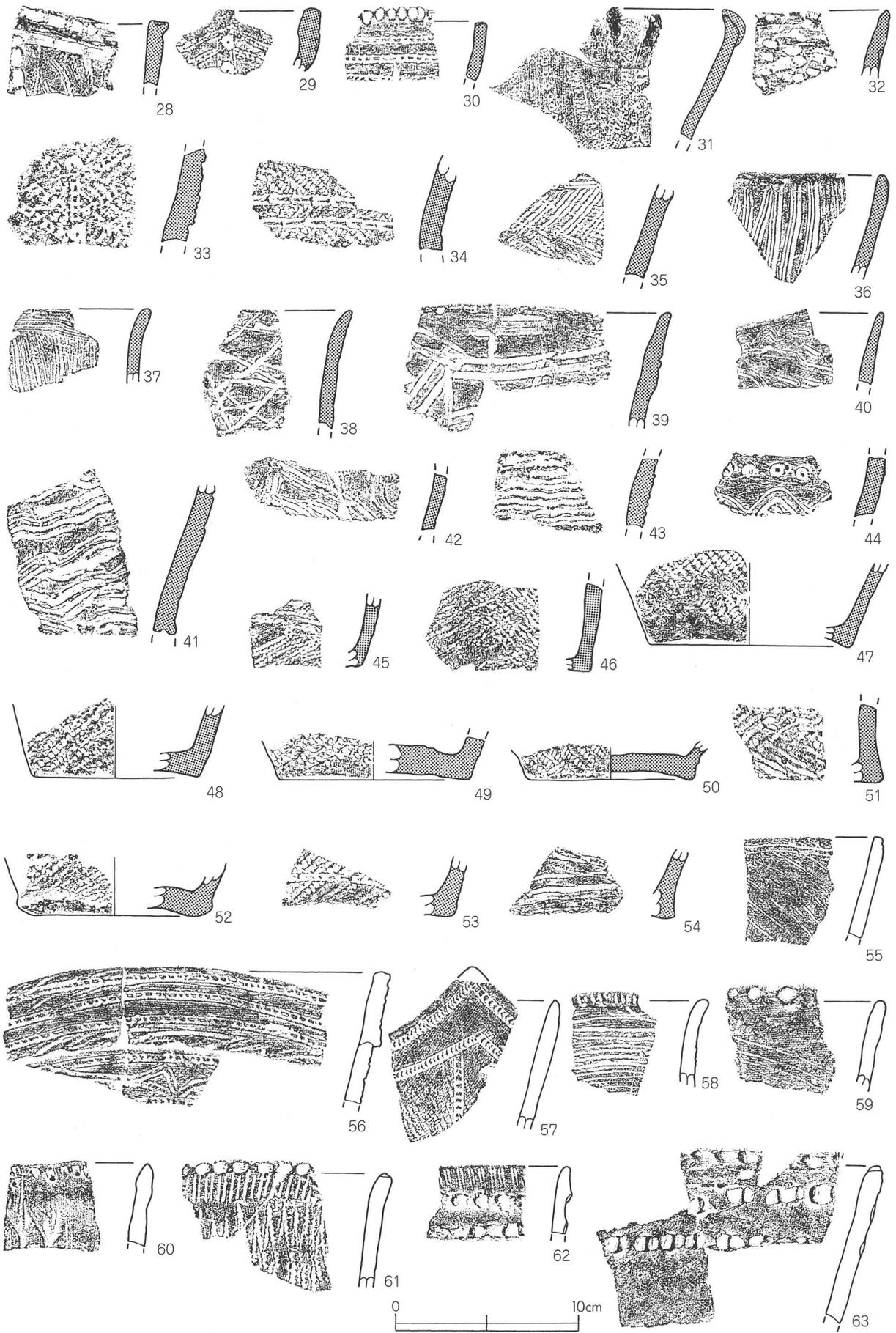
図版番号	器種	部位	器形と文様の特徴	胎土・色調・焼成	時期	出土地点 他
第24図 1	深鉢	口縁	平縁、口唇端部丸味、L撚糸文	石英 におい黄橙	夏島	SI-44
第24図 2	深鉢	口縁	平縁、外反、口唇端部丸味、 <i>l</i> 撚糸文	におい橙	夏島	SD-7
第24図 3	深鉢	口縁	平縁、口唇端部に刻文、表裏横位条痕文、刻文を有する隆帯が口唇から垂下し屈曲上も巡る。斜行する2列の角押文、放射筋をもつ小形貝の背面押圧、裏面にも2列の角押文	石英・雲母・繊維 におい橙	子母口～	C-24グリッド
第24図 4	深鉢	口縁	波状縁、口唇刻文列、地文横位条痕、2列の角押文→円形竹管文	繊維 におい橙	鶯ヶ島台	SI-36
第24図 5	深鉢	口縁	波状縁、口唇刻文列、表裏横位条痕文	石英・雲母・繊維 橙	鶯ヶ島台～	表土
第24図 6	深鉢	口縁	平縁、口唇部平坦、表面方向違いの斜位条痕文、裏面横位条痕文	繊維 橙	条痕文系	SI-10



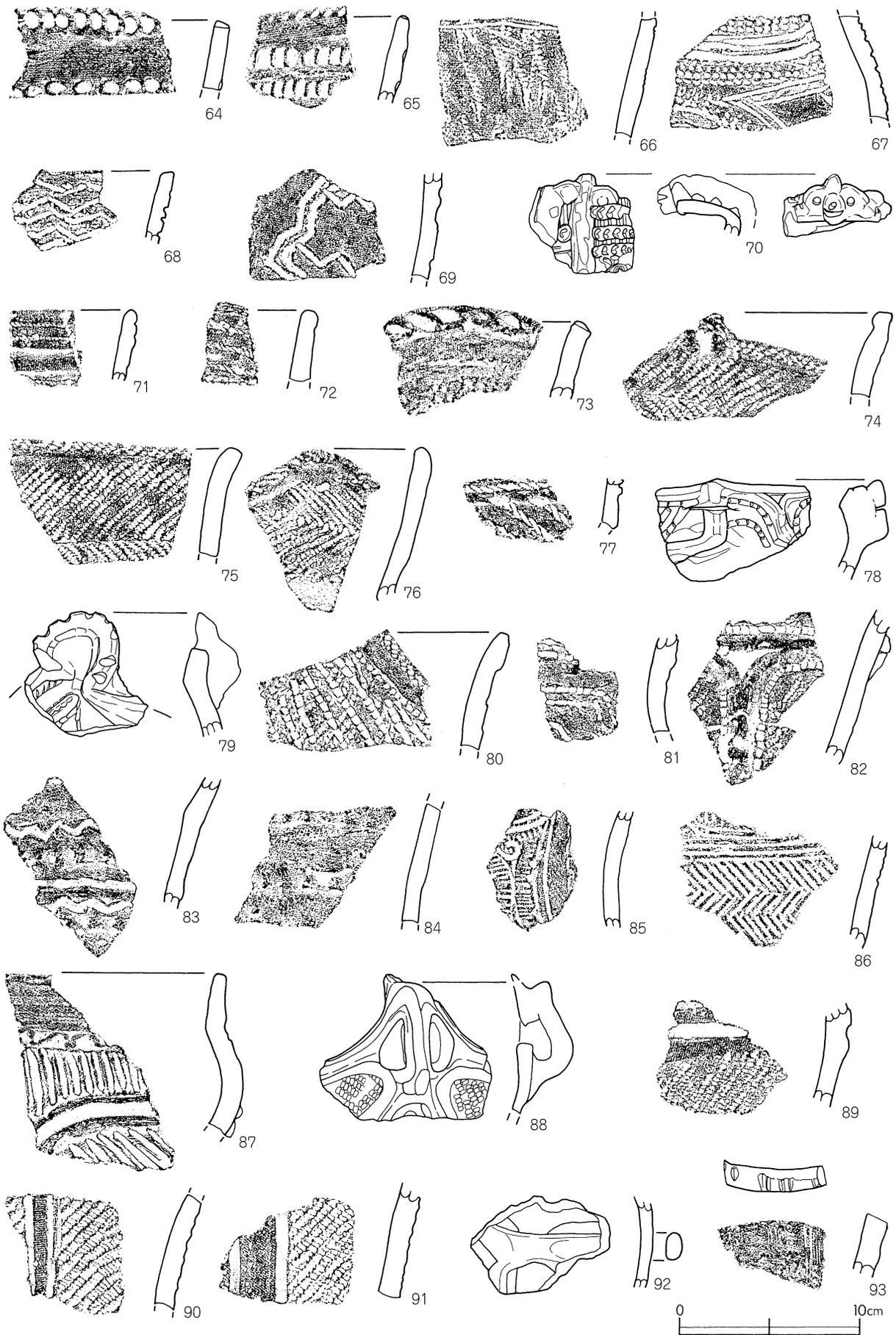
第23図 調査区内縄文土器出土量



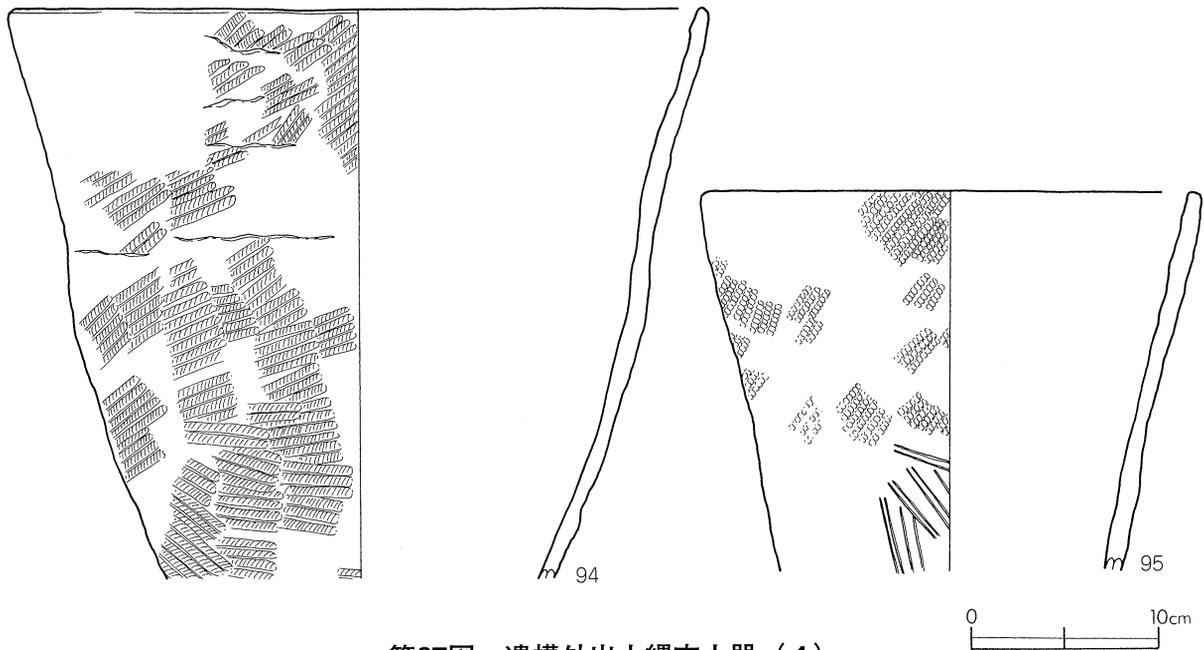
第24図 遺構外出土縄文土器 (1)



第25図 遺構外出土縄文土器 (2)

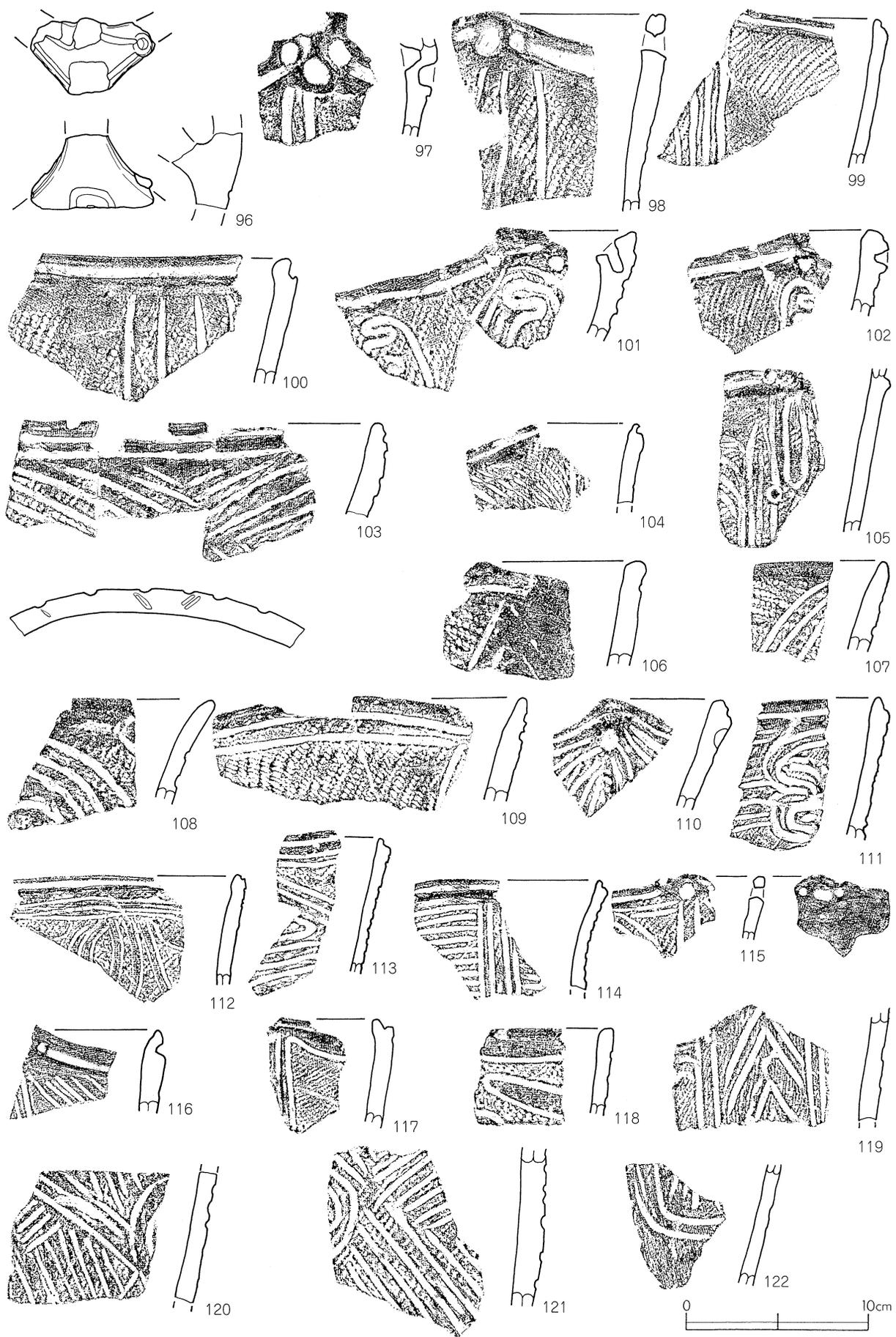


第26図 遺構外出土縄文土器 (3)

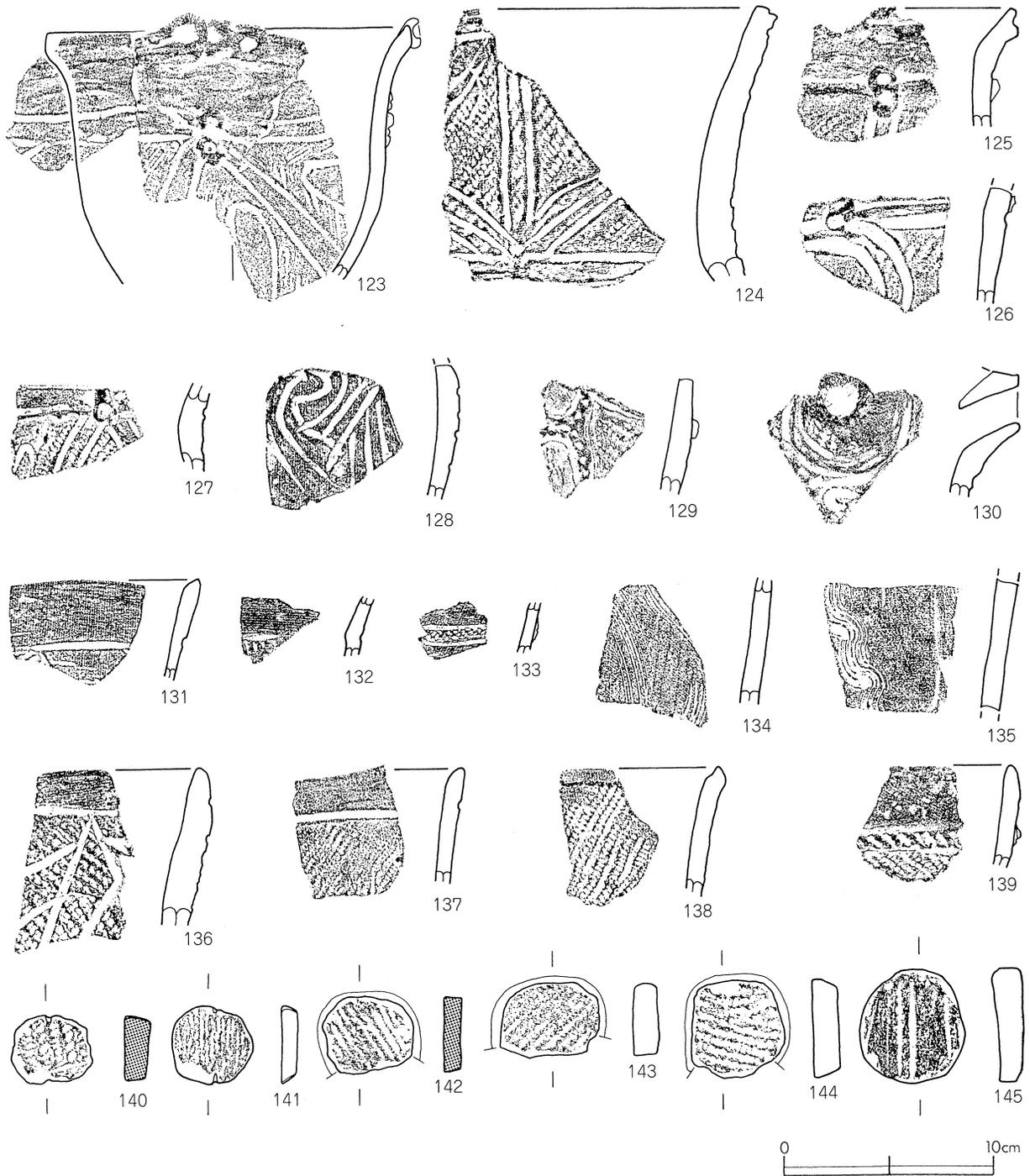


第27図 遺構外出土縄文土器 (4)

図版番号	器種	部位	器形と文様の特徴	胎土・色調・焼成	時期	出土地点 他
第24図 7	深鉢	胴	屈曲部大きく張り出す、表裏横位条痕文、屈曲上方連続する縦位鋸歯状文	石英・雲母・繊維 にぶい黄橙	鵜ヶ島台～	表土
第24図 8	深鉢	胴	刺突を有する横位隆帯文、密集する円形竹管文→幅広沈線による曲線文	長石・繊維 明赤褐	鵜ヶ島台～	表採
第24図 9	深鉢	胴	表横位条痕文、裏斜位条痕文が格子目状に施文	石英・雲母・繊維 にぶい橙	条痕文系	表土
第24図 10	深鉢	胴	表縦位条痕文、裏横位条痕文	長石・繊維 橙	条痕文系	P-2グリッド
第24図 11	深鉢	口縁	波状縁、口唇先尖状、薄手、単軸絡条体0段 l と r を各1本ずつ巻いたもの	長石・繊維 にぶい黄褐	黒浜	C-27グリッド
第24図 12	深鉢	口縁	平縁、口唇平坦、薄手、単節RL	繊維 にぶい黄橙 良	黒浜	SI-31
第24図 13	深鉢	口縁	平縁、外反、 l 燃糸文	長石・繊維 橙	黒浜	SI-51
第24図 14	深鉢	胴	屈曲部、 l 燃糸文	長石・繊維 明褐	黒浜	SI-51
第24図 15	深鉢	胴	薄手、単軸絡条体0段 l と r を2本巻いたものか	長石・繊維 明赤褐 良	黒浜	SI-30
第24図 16	深鉢	口縁	平縁、内彎、地文単節RL、半截竹管による曲線文、口縁下穿孔され、周囲を沈線が巡る。	長石・繊維 にぶい黄橙	黒浜	穿孔は焼成前 SD-2
第24図 17	深鉢	口縁	波状縁、裏面口唇端部円形刺突列、地文附加条 $R l + r$ 、半截竹管状工具による曲線的沈線文、沈線間刺突列	長石・繊維 明赤褐	黒浜	18と同一個体 SI-64
第24図 18	深鉢	胴	地文附加条 $R l + r$ 、半截竹管状工具による沈線文、沈線間刺突	長石・繊維 明赤褐	黒浜	SI-55
第24図 19	深鉢	胴	上端斜位有節沈線、半截竹管状工具による菱形文	繊維 にぶい黄橙	黒浜	SI-64
第24図 20	深鉢	胴	地文附加条、軸繩の燃と反対方向に絡げる、 $L r + l$ 2本か、3段の刺突列は巻き貝か	長石・繊維 にぶい黄橙	黒浜	F-8グリッド
第24図 21	深鉢	胴	平行沈線間連続瓜形文、弧線文、無節 $L r$	長石・繊維 にぶい橙	黒浜	SI-37
第24図 22	深鉢	口縁	平縁、地文0段多条RL、口縁下無文、平行沈線間連続瓜形文	長石・繊維 暗褐	黒浜	SI-11
第24図 23	深鉢	口縁	平縁に突起、地文無節 $L r$ 、水平に4条の沈線文、下端沈線あり	雲母・繊維 にぶい褐	黒浜	表土
第24図 24	深鉢	口縁	平縁、地文単節羽状縄文、半截竹管状工具による沈線文	繊維 にぶい黄橙	黒浜	F-25グリッド
第24図 25	深鉢	口縁	波状縁、地文単軸絡条体0段 r 2本巻き、波状縁に沿って沈線文、波頂部で引き直されている	長石・繊維 にぶい黄橙	黒浜	表土
第24図 26	深鉢	口縁	波状縁、地文単節RL、口縁沿いに半截竹管状工具による沈線文、波頂部で引き直されている	繊維 橙	黒浜	表土
第24図 27	深鉢	口縁	口唇部押圧され小波状様、地文縄文原体不明、水平に有節沈線文	長石・繊維 明褐	黒浜	SI-43



第28圖 遺構外出土繩文土器 (5)



第29図 遺構外出土縄文土器(6)・土製品

図版番号	器種	部位	器形と文様の特徴	胎土・色調・焼成	時期	出土地点 他
第25図 28	深鉢	口縁	波状縁、口唇部短沈線、波頂部より短沈線列垂下、地文単軸絡条体0段を2本巻いたもの	繊維 にぶい黄橙	黒浜	焼成前穿孔 SI-55
第25図 29	深鉢	口縁	波状縁、口縁に沿う2条の平行沈線間連続爪形文、円形竹管文	繊維 橙	黒浜	D-25グリッド
第25図 30	深鉢	口縁	口唇部刺突、小波状様、地文無文、平行沈線間連続爪形文	長石・繊維 にぶい黄橙	黒浜	SI-22
第25図 31	深鉢	口縁	平縁、口唇部にまたがる楕円形突起、細かな刺突列と円形竹管文	繊維 黒褐	黒浜	外面炭化物 SB-6
第25図 32	深鉢	口縁	口唇部刺突、小波状様、楕円形刺突列	繊維 褐	植房	表土
第25図 33	深鉢	胴	地文単節LRか、平行沈線間連続爪形文、肋骨文、円形刺突	長石・繊維 にぶい黄橙	黒浜	SI-21

図版番号	器種	部位	器形と文様の特徴	胎土・色調・焼成	時期	出土地点 他
第25図 34	深鉢	胴	地文単節RL、2段の平行沈線間、間隔の広いC字状文	長石・繊維 にぶい赤褐	黒浜	表土
第25図 35	深鉢	胴	地文無節羽状縄文、一部重複、半截竹管状工具による沈線文	繊維 にぶい橙	黒浜	表土
第25図 36	深鉢	口縁	平縁、3条1単位の条線文垂下	繊維 にぶい橙	植房	SI-19
第25図 37	深鉢	口縁	平縁、外反、5～6条1単位の条線文、縦位→横位（口縁下）	繊維 橙	植房	SI-11
第25図 38	深鉢	口縁	平縁、外反、1本引き沈線による斜格子文（不規則）	長石・繊維 黒褐	植房	SI-5・12
第25図 39	深鉢	口縁	平縁、幅広の平行沈線による区画文	長石・繊維 橙	植房	K-25～32グリッド
第25図 40	深鉢	口縁	波状縁、半截竹管状工具によるコンパス文、斜行沈線	長石 にぶい赤褐	植房	波頂部下焼成前穿孔 SI-9
第25図 41	深鉢	胴	半截竹管状工具による弧の浅いコンパス文	繊維 にぶい赤褐	植房	D-25グリッド
第25図 42	深鉢	胴	沈線による曲線文（不規則）	長石・繊維 暗赤褐	植房	表土
第25図 43	深鉢	胴	半截竹管状工具による弧の浅いコンパス文、一部刺突状に深い	石英・長石・繊維 橙	植房	SI-54
第25図 44	深鉢	胴	横位に連続する円形竹管文、半截竹管状工具による鋸歯状文	繊維 黒褐	植房	C-22グリッド
第25図 45	深鉢	底	直立、単軸絡条体0段 r 2本巻き	繊維 にぶい橙	花積下層～	SI-30
第25図 46	深鉢	底	直立、上げ底、原体不明、絡条体か。	繊維 橙	花積下層～	表土
第25図 47	深鉢	底	外傾、上げ底、単節RL、底径 [11.0] cm	繊維 にぶい黄橙	黒浜	SI-34
第25図 48	深鉢	底	外傾、上げ底、単節LR、底径 [9.0] cm	長石・繊維 橙	黒浜	SI-12
第25図 49	深鉢	底	外傾、上げ底、単節LR、底径 [10.4] cm	繊維 にぶい橙	黒浜	E-27グリッド
第25図 50	深鉢	底	外傾、中央4mm上げ底、単節RL、底径9.0cm	繊維 橙	黒浜	SI-74
第25図 51	深鉢	底	一度内傾後直立、単節羽状縄文、半截竹管状工具による「二」状の刺突列	長石・繊維 明赤褐	黒浜	C-25グリッド
第25図 52	深鉢	底	底面張り出し後外傾、上げ底、附加条無節R $\ell + r$ 、底径 [9.0] cm	繊維 橙	黒浜	SI-53
第25図 53	深鉢	底	外傾、上げ底、地文単節LR、横位有節沈線文	長石・繊維 橙	黒浜	SI-11
第25図 54	深鉢	底	外反、上げ底、横位沈線文	長石・繊維 橙	植房	B-23グリッド
第25図 55	深鉢	口縁	平縁、地文単軸絡条体 ℓ 1本巻き、口縁下半截竹管状工具による沈線文	橙	浮島I	SD-2
第25図 56	深鉢	口縁	平縁、口唇平坦、口縁部有段状、平行沈線間連続爪形文、地文無節R ℓ 、三角文	橙	浮島II	焼成後穿孔1 O-26グリッド
第25図 57	深鉢	口縁	波状縁、口縁に沿い半截竹管状工具による連続爪形文、波頂部下は垂下、地文単節RL	長石・雲母 にぶい橙	浮島II	表土
第25図 58	深鉢	口縁	平縁、外反、口唇端部刻文列、下半横位条線文	にぶい褐	浮島II～	表土
第25図 59	深鉢	口縁	波状縁、口唇端部押圧され小波状、整形時輪積痕残す、斜位条線文	長石・雲母 明黄褐	浮島II～	SI-21
第25図 60	深鉢	口縁	平縁、口唇先尖状、口縁部刺突列、ハマグリ系貝類による波状縁	長石 橙	浮島III	表土
第25図 61	深鉢	口縁	平縁、やや外反、口唇端部押圧され小波状、口縁部半截竹管状工具による縦位短沈線、アナダラ属系貝類による波状文	橙	浮島III	SI-45
第25図 62	深鉢	口縁	平縁、口縁部半截竹管状工具による縦位短沈線、下半2段の凸凹文	にぶい黄橙	浮島III	SI-21
第25図 63	深鉢	口縁	平縁、口唇端部押圧され小波状、下半2段の凸凹文	長石・雲母 橙	前期末～	A・B-21グリッド
第26図 64	深鉢	口縁	平縁、口唇端部押圧され小波状、凸凹文	長石 橙	前期末～	表土
第26図 65	深鉢	口縁	ゆるやかな波状縁、口唇端部斜位刺突列、輪積痕残す、凸凹文	長石 浅黄橙	前期末～	表土
第26図 66	深鉢	胴	アナダラ属系貝類による波状文、上方横位沈線2条	長石 橙	浮島	SI-64
第26図 67	深鉢	胴	地文ハマグリ系貝類による波状文、平行沈線による菱形文、文様内磨消、刺突列→横位沈線	長石・雲母 橙	興津II	SI-41

図版番号	器種	部位	器形と文様の特徴	胎土・色調・焼成	時期	出土地点 他
第26図 68	深鉢	口縁	波状線、1本引き沈線による連続する鋸歯状文	にぶい橙	大木5?	表土
第26図 69	深鉢	胴	地文無文、幅広の1本引き沈線による鋭角的な波状文	長石・石英 にぶい橙	大木5?	表土
第26図 70	深鉢	口縁	平縁、口唇端部内側を向く獣面突起(熊?)、口縁部大きく内傾、 地文縦位条線文、C字状刺突を連続する隆帯文、ボタン状貼付文	長石 にぶい黄橙	諸磯C	SI-7
第26図 71	深鉢	口縁	平縁、口唇端部丸味、口縁部有段、無節Lr押圧	長石・雲母 明黄褐	前期末~	SI-81
第26図 72	深鉢	口縁	ゆるやかな波状縁、口唇端部丸味、横位に無節Lr押圧	橙	前期末~	表土
第26図 73	深鉢	口縁	波状縁、口唇端部押圧され小波状、口縁下輪積痕残す、単 節LR	長石 橙	前期末~	表土
第26図 74	深鉢	口縁	波状縁、コブ状突起、口唇部・突起裏面縄文、単節の結節 縄文	長石 黄橙	前期末~	75と同一個体 SI-31
第26図 75	深鉢	口縁	波状縁、口唇端部縄文、単節の結節縄文	長石 黄橙	前期末~	SI-31
第26図 76	深鉢	口縁	波状縁、口唇端部縄文、単節の結節縄文、下端ナデ、無文	長石・雲母 にぶい黄橙	前期末~	K-25~32グリッド
第26図 77	深鉢	胴	単軸絡糸体無節Lr押圧、有段部に結節状押圧あり	長石 明褐	前期末~	SI-22
第26図 78	深鉢	口縁	ゆるやかな波状縁、隆帯に沿い有節沈線、L字状隆帯文、 幅広の口唇上に粘土紐貼付による三叉文	長石 にぶい橙	阿玉台II	外面炭化物 表土
第26図 79	深鉢	把手	環状把手、端部刻文、隆帯に沿う有節沈線	長石・石英・雲母 にぶい赤褐	阿玉台II	表土
第26図 80	深鉢	口縁	波状縁、口縁部有段状、口唇部・口縁部地文単節LR、半 截竹管状工具による斜行する有節沈線文	雲母 橙	五領ヶ台II ~猪沢(古)	阿玉台Ia併行 SB-6
第26図 81	深鉢	胴	上半一部隆起、半截竹管状工具による有節沈線文	長石・石英・雲母 明赤褐	阿玉台II	表土
第26図 82	深鉢	胴	地文単節RL、Y字状隆帯垂下、隆帯上に無節沈線、垂下 隆帯上棒状工具による刺突	長石・石英・雲母 明褐	阿玉台II	E-25グリッド
第26図 83	深鉢	胴	間隔の広いヒダ状隆起間波状沈線、短沈線の連続による横 線文	長石・石英・雲母 橙	阿玉台Ia~	SI-83
第26図 84	深鉢	胴	ヒダ状隆起	長石 橙	阿玉台	SI-83
第26図 85	深鉢	胴	沈線による区画文、区画内渦巻文、横位短沈線、三角形刺 突列、単節RL縦位結節文	長石・石英・雲母 にぶい褐	五領ヶ台II	表土
第26図 86	深鉢	胴	半截竹管状工具による横位鋸歯状文、上方横線上は楕円形 区画文	長石・石英・雲母 橙	踊場系	表土
第26図 87	深鉢	口縁	平縁、口縁直立、無文帯、横位交互刺突、2条の隆帯によ るクラク文、縦位・斜位短沈線文充填	長石 にぶい橙	中峠	SI-15
第26図 88	深鉢	把手	片側一部突出、波頂部下眼鏡状把手、沈線に沿う微隆起線 による区画文、区画内0段多条RL	にぶい黄橙	加曽利E I	表土
第26図 89	深鉢	胴	口縁部文様帯直下、隆起に沿い沈線文、下半単節RL	長石・石英・雲母 にぶい褐	加曽利E I	表土
第26図 90	深鉢	胴	地文0段多条RL、幅の広い垂下沈線文2条、沈線間は磨消	長石・雲母 灰褐	加曽利E II~	SI-27
第26図 91	深鉢	胴	地文単節RL、幅の広い垂下沈線文2条、沈線間は磨消	長石・石英・雲母 にぶい黄橙	加曽利E II~	表土
第26図 92	壺	胴	橋状把手、無文	石英 にぶい黄橙	加曽利E IV	SI-19
第26図 93	深鉢	胴	5条1単位の条線文垂下、上端の輪積面に接合強化のため の刻文列	長石・雲母 にぶい褐	加曽利E	N-14グリッド
第27図 94	深鉢	口縁~胴	口径 [37.6] cm、器高 (30.7) cm、平縁、口縁内面稜、無 節Lr、整形時の輪積痕残る	長石・石英 にぶい褐	堀之内1	外面炭化物 N-14グリッド
第27図 95	深鉢	口縁~胴	口径 [27.0] cm、器高 (20.2) cm、平縁、単節LR、下半半 截竹管文による条線文、縄文が後から施文	長石・石英 にぶい黄橙	堀之内1	外面炭化物 N-14グリッド
第27図 96	深鉢	把手	山形、裏面中空、口唇部円形の盲孔と両端を結ぶ沈線によ る三角文、外面曲線的沈線文	長石 明赤褐	称名寺	SI-45
第27図 97	深鉢	口縁	波状縁、波頂部下3孔・裏面1孔の盲孔、口縁下沈線1条、 地文縄文、原体不明、懸垂文	長石 にぶい黄橙	堀之内1	表土
第28図 98	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、波頂部下円孔、両側盲孔各1、 地文単節LR、懸垂文	長石・雲母 橙	堀之内1	100と同一個体 SI-45
第28図 99	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、地文0段多条LR、懸垂文	長石 にぶい橙	堀之内1	SI-49
第28図 100	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、地文単節LR、懸垂文	長石・雲母 橙	堀之内1	B-31グリッド
第28図 101	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、盲孔2、地文単節LR、蕨手文 垂下	長石 にぶい橙	堀之内1	外面ス付着 D-25グリッド

図版番号	器種	部位	器形と文様の特徴	胎土・色調・焼成	時期	出土地点 他
第28図 102	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、盲孔1、地文単節LR、蕨手文垂下	長石・石英・雲母 にぶい橙	堀之内1	SI-45
第28図 103	深鉢	口縁	平縁、口縁下沈線2条、地文単節RL、斜行沈線文、下端の輪積面に接合強化のための刻文列	長石・雲母 にぶい黄橙	堀之内1	SI-24
第28図 104	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、地文単節LR、懸垂文	にぶい橙	堀之内1	内面炭化物 SI-24
第28図 105	深鉢	胴	口縁直下片、口縁下沈線1条、盲孔1、地文単節LR、懸垂文	長石 にぶい赤褐	堀之内1	SI-45
第28図 106	深鉢	口縁	波状縁、沈線による区画文、複節RLR、沈線文脇無文	石英・雲母 にぶい橙	堀之内1	SI-45
第28図 107	深鉢	口縁	平縁、地文単節RL、3条の斜位沈線文	石英・雲母 にぶい橙	堀之内1	表土
第28図 108	深鉢	口縁	平縁、地文単節LR、曲線的な沈線文	長石 にぶい橙	堀之内1	SI-40
第28図 109	深鉢	口縁	平縁、口縁下沈線2条、地文0段多条LR、斜行沈線文	長石 にぶい橙	堀之内1	SI-68
第28図 110	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、盲孔1、盲孔下刻文を有する隆帯垂下、地文単節RL、斜行沈線文	長石・石英 にぶい褐	堀之内2	表土
第28図 111	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、地文無節LR、2条の波状沈線垂下	橙	堀之内2	SI-41
第28図 112	深鉢	口縁	平縁、口縁下沈線1条、地文縄文、原体不明、横位3条の沈線文、半截竹管状工具による曲線文	にぶい橙	堀之内2	SB-4
第28図 113	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、地文単節LR、重三角文	橙	堀之内2	SI-24
第28図 114	深鉢	口縁	平縁、口縁下沈線1条、地文単節LR、4条の懸垂文、横位沈線	にぶい橙	堀之内2	D-24グリッド
第28図 115	深鉢	口縁	波状縁、波頂部下円孔、波頂部・裏面盲孔、地文単節LR、三角文	長石 にぶい褐	堀之内2	SI-5
第28図 116	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、沈線内盲孔1、地文無文、斜位沈線文	にぶい橙	堀之内2	外面炭化物 N-16グリッド
第28図 117	深鉢	口縁	波状縁、口縁下沈線1条、地文単節LR、沈線による三角文	にぶい黄橙	堀之内2	C-30グリッド
第28図 118	深鉢	口縁	平縁、口縁部無文帯、口縁下沈線1条、地文単節LR、文様内磨消	石英・雲母 にぶい橙	堀之内2	SI-29
第28図 119	深鉢	胴	地文細かな単節LR、2条1単位の垂下沈線文間に鋸歯状文	浅黄橙	堀之内1	SI-29
第28図 120	深鉢	胴	地文単節LR、沈線による渦巻文、斜行文	石英 にぶい黄橙	堀之内1	SI-41
第28図 121	深鉢	胴	地文単節LR、沈線による渦巻文、斜行文	長石 にぶい黄橙	堀之内1	SI-28
第28図 122	深鉢	胴	U字状区画文、斜行沈線文、区画内単節LR	橙	堀之内2	断面・内面炭化物 SI-40
第29図 123	鉢	口縁～胴	平縁、連続する円形貼付文、口縁部無文、屈曲上沈線2条、8字状貼付文、斜行文、区画文、条線文充填、沈線間無文	長石・石英 にぶい橙	堀之内2	SB-3、F-26グリッド 表土接合
第29図 124	鉢	口縁	平縁、口縁下沈線1条、屈曲部2条、地文単節LR、斜行文、刺突	長石 浅黄橙	堀之内2	N-14グリッド
第29図 125	鉢	口縁	平縁、口縁下沈線1条、屈曲上隆帯文、8字状貼付、単節LR、磨消	石英 にぶい黄橙	堀之内2	SI-74
第29図 126	鉢	胴	屈曲部沈線1条、8字状貼付、地文単節LR、曲線文	長石 にぶい黄橙	堀之内2	SI-41
第29図 127	鉢	胴	屈曲部沈線2条、8字状貼付、地文単節LR、斜行文	長石 にぶい橙	堀之内2	表土
第29図 128	鉢	胴	地文無文、沈線による蕨手文、斜行文	橙	堀之内2	C-25グリッド
第29図 129	注口	胴	曲線的な隆帯文、隆帯上刺突、隆帯に沿った沈線文、単節RL	長石 にぶい黄褐	堀之内1	SI-12
第29図 130	注口	注口	地文単節LR、短い注口部、注口部下沈線による曲線文	長石 にぶい黄橙	堀之内2	SB-3
第29図 131	深鉢	口縁	平縁、口唇先尖状、口縁部無文帯、横位沈線文、単節LR、鋸歯状文	にぶい黄橙	加曾利Ⅲ～	SI-79
第29図 132	深鉢	胴	屈曲部、横位沈線下刺突列、上方無文	長石・雲母 黒褐	加曾利Ⅲ～	表土
第29図 133	深鉢	胴	横位沈線間単節RL、上下方は無文	長石 明赤褐	加曾利Ⅲ～	表土
第29図 134	深鉢	胴	6条1単位の櫛歯状工具による垂下波状文	長石・雲母 褐	称名寺	表土
第29図 135	深鉢	胴	6条1単位の櫛歯状工具による垂下波状文	長石・雲母 にぶい褐	称名寺	表土

図版番号	器種	部位	器形と文様の特徴	胎土・色調・焼成	時期	出土地点 他
第29図 136	深鉢	口縁	平縁、口縁下無文帯、横位沈線1条、地文複節RLR、斜行文	石英・雲母 橙	加曾利B1~	粗製 SI-29
第29図 137	深鉢	口縁	波状縁、口縁下無文帯、沈線が水平に巡る、下半単節LR	長石 におい黄橙	加曾利B1~	表土
第29図 138	深鉢	口縁	平縁、口縁裏面沈線状に凹む、口唇先尖状、直下は稜、0段多条LR	長石・雲母 におい橙	加曾利B1~	粗製 SI-87
第29図 139	深鉢	口縁	平縁、口唇先尖状、斜刻文を有する横位隆帯文、単節LR	長石・石英・雲母 橙	堀之内2~	粗製 N-14グリッド
第29図 140	土製品	土錘	一部研磨整形、切り目1対、単節RL、長さ3.2cm、幅3.8cm、重16.1g、完形	繊維 灰黄褐	黒浜	C-27グリッド
第29図 141	土製品	土錘	全周研磨整形、切り目1対、L撚糸文、長さ3.7cm、幅3.8cm、重12.5g、完形	石英 におい褐	中期後半?	A・B-21グリッド
第29図 142	土製品	円盤	一部研磨整形、単節RL、長さ3.6cm、幅4.3cm、重15.0g、完形	繊維・長石 橙	黒浜	E-26グリッド
第29図 143	土製品	円盤	一部研磨整形、単節LR、長さ3.5cm、幅4.7cm、重26.4g、完形	石英 におい黄橙	中期後半?	SI-41
第29図 144	土製品	円盤	一部研磨整形、単節LR、長さ4.6cm、幅4.5cm、重31.3g、完形	におい橙	中期後半?	D-24グリッド
第29図 145	土製品	円盤	全周研磨整形、条線文、長さ3.6cm、幅1.0cm、重13.1g、完形	におい橙	後期?	表土

②石器〔第30～36図、PL.37・39～43〕

縄文時代の石器は遺構内から4点、遺構外から335点を検出した。器種構成と点数の内訳は、草創期の石器として槍先形尖頭器1点、刃部磨製石斧1点、早期以降の石器として部分磨製石器1点、石鏃15点、石匙1点、石錐2点、摘み付き石器1点、楔形石器23点、削器4点、二次加工石器4点、両極剥片23点、剥片類156点、打製石斧1点、磨製石斧4点、スタンプ形石器1点、両刃礫器1点、片刃礫器6点、敲打器10点、磨き石類73点、石皿3点、凹み石1点、石核6点である。以下、各器種で図示した石器を中心に特徴を記述する。

槍先形尖頭器（第30図1）

押圧剥離により器体全面の調整が施されているため、素材の形状・獲得に係る情報が不明瞭である。先端側と基部端を折損している。基部側は末端側から調整剥離と同程度の角度により器体軸と並行する剥離面が生じ、剥離末端にはステップフラクチャーを生じている。この剥離は使用による損壊と考えられる。胴部半ばの損壊面はバルブを生じている上に、折損面末端側を打面とした小規模な剥離面が器体成形の剥離面を後から切る状態で生じている。折損面を打面とする剥離は折損後の再加工とは考えにくく、折損の際に生じた末端破碎と考えられる。におい黄橙色（10YR7/2）の硬質頁岩で、ガラス質感が旧石器の項で扱った硬質頁岩1と同程度で、色調は均質に見える。

局部磨製石斧（第30図2）

自然面を右側面に残す横長剥片を素材とする。背面側には90度剥離方向の異なる剥離面が観察され、素材剥片の獲得までに打面転位作業を経過していると考えられる。素材時の打面側であった右側縁に成形加工を集中的に加えている。その後、刃部両面に対し研磨加工を施して刃部幅を小さくするように面取り状態をなす。なお、刃部以外にも細破線で表示した部分には線状痕があり、研磨面とほぼ同様な状態である。これは背腹両面の稜線部や剥離面のリング凸部分など僅かながらも突出する部分に認められる。腹面右側縁には研磨面から連続する位置に小規模な剥離面が並んでいる。

本石器を縄文時代草創期の石斧として早期以降に一般的な石斧と区別した視点は2点ある。第1点は、縄文時代には通例である、側縁の敲打加工をほとんど施していない点に注目した。第2点は、左側縁の刃部は側面をなしておらず、背腹両剥離面の接する鋭角な稜線である。研磨成形による刃部から左側縁

にかけては、器厚も薄く篋状石器に近い形状となっていて、縄文時代の二次加工によって成形する篋状石器とは区別することができる。

部分磨製石器（第32図18）

両側縁から押圧剥離により成形加工を施した後、中央稜線部分を中心に両面を研磨している。裏面は研磨方向が90度異なる研磨面が2面あり、接する部分は直線状の稜線を生じている。折損が著しく本来の全体形状は不明である。使用している黒曜石は、蛍光X線による産地推定では、諏訪星ヶ台産と判定された（分析試料No.TUK-115）〔望月2004〕。

石 鏃（第31図3～17）

15点検出した全点を図示した。器形には平基三角形鏃（12、13）、凹基無茎鏃（3～11、14～16）、凸基有茎鏃（17）の三種類がある。先端部から脚端部までの側縁の形状にバラエティはなく、直線的なものから僅かに外湾する程度の形状である。脚端部間の形状にも挟り込みのないもの（12）から挟り込みの大きい物（15、16）がある。完形品の検出はなく、器体の一部を折損するものが大半である。あるいは末端にヒンジフラクチャーやステップフラクチャーを生じる衝撃剥離が認められる資料（14、17）もある。また、17には逆刺の片側（正面図左側縁端と裏面図右側縁端）の稜線に摩滅が認められる（網点で表示）。製作工程に関しては明瞭な資料を提示することが困難だが、13は基部とした部分が押圧剥離による成形加工ではなく、両極剥離工程に見られるステップフラクチャーの発生と打面破碎が顕著であった。この資料は石鏃製作に両極剥離が関連することを傍証するものとして注目している。

石 匙（第32図19）

素材剥片の打面を刃部側に設置し加工を施している。押圧剥離により摘み部を成形して、打面部除去と器厚調整をおこない、刃部を成形している。

削 器（第32図20、21）

4点検出した内2点を図示した。20は素材剥片の打面を基部側に置き、背面に成形加工を施したもの。21は打面側を除去する状態に、背面に成形加工を施している。

石 錐（第32図22）

2点検出のうち1点を図示した。素材剥片の末端側に対して、両側縁に急斜度剥離による成形加工を施す。加工により断面三角形の錐部を成形している。

摘み付き石器（第32図23）

本石器は打面から末端にかけて剥離面に90度の捻れが起きた縦長剥片を素材とする。素材剥片を獲得するまでに180度打面転位を経過している。成形は打面側の左側縁に押圧剥離により成形加工を行い、摘み部を作出している。先端側を折損している。

楔状石器（第32図24、25、第33図26～30、第34図31～37、第35図38）

平面形状は楕円形や略三角形をなす。剥離作業には両極剥離を行なうため、剥離面のリングが部分的に屈折しバルブの発達がほとんどないなど、通常の打撃・押圧による剥離とは異なっている。打面の多くはヒンジフラクチャーやステップフラクチャーを生じ、潰れるか線状打面として残る場合が多い。器体には礫自然面が残っている事が多く。扁平礫が素材となる事例が主体を占める。

今回検出した23点のうち掲載した15点は、大半が礫を素材として作出したもののだが、他器種の二次利用の資料も含まれる。36は磨製石斧の調整剥片が素材で背面側に研磨面が残っている。その研磨面も研磨方向が異なる面取り部分である。38は大きさや剥離面以外が研磨面であることから、磨製石斧の基部

側を利用していると考えられる。上下両縁辺はヒンジフラクチャーを生じた剥離面が並び、上下方向から中心に向かう剥離面が中央で接する剥離では、ステップフラクチャーを数ヶ所で生じている。左右からの剥離は両極剥離の後に、さらに成形を加えたものである。

石核（第35図39）

6点検出した内1点を図示した。楕円形礫を素材とした物で、両極剥離は行っていない。片面に礫自然面が残る。

刃部磨製石斧（第35図40）

最大幅が刃部付近にあり、剥片を素材としている。左右から成形加工を施した後、刃部を中心に研磨加工を施している。基部の右側面には研磨加工も施している。

二次加工石器（第35図41）

4点検出した内1点を図示した。

扁平な楕円形礫を素材として、側縁から緩斜度から急斜度剥離を施していて、断面形状は蒲鉾状になる。側縁には面形成の敲打加工もなく刃部形成の加工程度も弱いため、石斧とせず別器種として掲載した。

打製石斧（第35図42）

表裏に礫自然面が残っており、扁平礫を素材としている。左右両側面の加工には僅かな敲打加工が認められる。刃部成形加工は裏面側へ集中的に施している。

磨製石斧（第36図43～46）

4点検出した資料全点を図示した。全面研磨加工を基本とした成形加工を分類基準とするため、先に提示した刃部磨製石斧（第35図40）とは別器種とした。43は刃部側を側縁からの打撃によって折損している。この石斧は研磨加工が行き届かない箇所があり、成形時の剥離面が部分的に残っている。44は刃部側を折損している。折損面はかなり強い衝撃によるのか著しいステップフラクチャーを生じている。45はほぼ完形状態で、刃部には肉眼でも比較的観察し易いほどの線条痕が残る。刃部はかなり使い込んだ様で摩滅が著しい。46は装着側を折損している。折損面と刃部の研ぎ直しが施され、装着部・刃部のリダクションが確認できる資料である。

片刃礫器（第36図47～50）

素材礫の周囲に刃部成形の加工を施した石器で、6点検出した内4点を図示した。

47は楕円形礫に対して急斜度剥離を施し成形している。裏面にも小規模な剥離面があるが、末端にヒンジフラクチャーを起こすなど、使用による衝撃剥離の可能性が高い。48は厚みのある礫が素材で、片側縁に急斜度剥離を施して直線的な刃部を成形している。接合状態の図面は提示していないが、中央部に調整剥片が接合することを確認している。49は厚みのある礫を素材に、急斜度剥離を施し成形している。左側縁の斜線表示範囲は節理面である。50は49と同様な礫を素材として、急斜度剥離を施し成形している。

スタンプ形石器（第36図51）

1点検出した。礫を節理面で分割した後に、底面を周囲からの剥離により成形している。分割節理面側にも、小規模な剥離面が連続している。

その他の石器

今回は実測図を掲載できなかった石器が多数あるが、その中でも両極剥片と磨き石類について触れて

おく。両極剥片は23点検出していて、楔形石器を製作した際に剥離したと考えられる。打面を破碎しバルブの発達がほとんどない。礫面の一部を残すものがあるなど、楔形石器と類似する特徴を持つ。楔形石器との接合作業を実施したが、接合資料の抽出には至らなかった。

磨き石類は73点検出していて、剥片類156点に次ぐ検出点数を占めている。大半が古墳時代以降の遺構内からの検出で、所属時期の判断が困難である。

縄文時代の石器についての小結

弁才天遺跡では多数の石器を検出しており、今回は磨き石類・剥片類以外の二次加工石器を中心に図示した。ここで特徴的な石器について指摘しておきたい。

草創期の石器として槍先形尖頭器（第30図1）と局部磨製石斧（第30図2）を各1点検出している。槍先形尖頭器は細身で両面加工が施されている物で、隆起線文土器と共伴する時期を考えている。同様な石器は、北茨城市松井A遺跡例1点〔市毛他2003〕、結城郡八千代町尾崎前山遺跡例1点〔阿久津1981〕、つくば市椋内山遺跡例2点〔川村・島田2003〕、稲敷市内例1点（註1）、潮来市内野遺跡例1点〔間宮2004〕など、県内では数例しか確認できていない。局部磨製石斧は緑色凝灰岩の剥片を素材とする点は、近隣には類例がなく、近年利根川流域に分布が指摘されつつある〔萩谷2000〕磨製石斧と類似すると把握した。所属時期は爪形文土器の時期を考えている。西側の谷津を挟み対峙する台地では有茎尖頭器も検出されている〔渡辺2004〕など、縄文時代草創期の存在を示す石器資料は市内8遺跡で確認されている。

石鏃（第31図13）は両極剥離と押圧剥離を組み合わせている点で、石鏃と楔形石器の関係を示す資料として注目すべき物と考えている。「楔状石器」という器種が石鏃製作と関連するならば、目的器種として製作したのではなく石鏃製作工程の途中形態として、石鏃の母型あるいは石核と把握すべき存在なのかもしれない。同様な特徴を示す石鏃が市内田村町の下郷遺跡（2000年度市教育委員会調査地点）でも黒色安山岩製石鏃で確認しており〔窪田2001〕、今後は製作工程を復元可能な資料の検出を待って検討していきたい。楔状石器も他器種の破損品や調整剥片を二次利用するなど、旧石器時代の様に二次加工石器の製作で固定的な製作工程を経過するのとは異なり、融通性が強い点が認められる。

部分磨製石器（第32図18）は、信州地域の諏訪星ヶ台産の黒曜石製を使用して中央稜線部分に対し研磨成形を施す点で、「局部磨製石鏃」と類似する石器であると考えられる。所属時期については、現在早期前半のものとする主張〔芹沢1949、鈴木1981等〕と、後期から晩期の資料であるとする主張〔大工原1990〕があり、出土状態と共伴する土器の時期を明確にできない資料のため判断は留保せざるを得ない。県内の類例としては、土浦市内田村沖宿遺跡群内の壺杯清水西遺跡で両面に研磨面が認められる硬質頁岩製の尖頭器1点、片面に研磨面のあるチャート製の石鏃1点が検出されている〔関口・黒澤・駒澤1997〕。霞ヶ浦市の坂大平遺跡で両面研磨を施したチャート製の有茎尖頭器1点が、大正大学考古学研究会による遺跡分布調査の際に採取・報告されている〔奥野1985〕。県北部那珂川水系の一つ中丸川流域に位置するひたちなか市東石川新堀遺跡において、発掘調査により草創期の隆起線文系土器から早期前半撚糸文系土器が出土し、表面採取資料として表裏両面の中央稜線部分を研磨した乳白色の硬質頁岩製尖頭器1点が報告されている〔斉藤・住谷1987〕。特に壺杯清水西遺跡と東石川新堀遺跡の尖頭器は、使用石材の違いはあるが平面形態が非常に似ている。所属時期について、確定的な資料はないが早期前半から前期前半までの資料ではないかと考えている。この器種は「局部磨製石鏃」として、北相馬郡利根町の花輪台貝塚の出土資料に含まれていたため注目されるようになったが、土浦市内では大字中の向原遺跡で灰色チャート製五角形石鏃1点に両面の中央稜線部分が平坦に研磨されている事例〔仲野1987〕

がある。前期中葉黒浜式期の住居跡下に埋没していた陥穴状遺構の覆土中からの検出された資料で、前期中葉以前の石器と判断可能な資料である。また、紫ヶ丘（旧今泉町）に位置する原田遺跡群のひとつである原田北遺跡の遺物包含層検出資料で、両面の中央部稜線部分を研磨した灰色チャート製石鏃1点〔緑川・海老澤1993〕、原出口遺跡において暗灰色チャート製石鏃1点〔江端1995〕の2事例を確認している。向原遺跡・原田北遺跡の両石鏃に使用しているチャートは、灰白色に黒縞が僅かに入る石材で非常に類似している。

磨き石類は遺構内から多数検出しているが、縄文時代の石器が混入した物か、古墳時代の石器なのか形態からは明確に分別できない。稀な事例であるが、縄文時代の遺構・遺物がまったくなく古墳時代以降の遺構のみが所在する遺跡での、単純な出土状況が確認できる資料の検討できる機会を待ちたい。

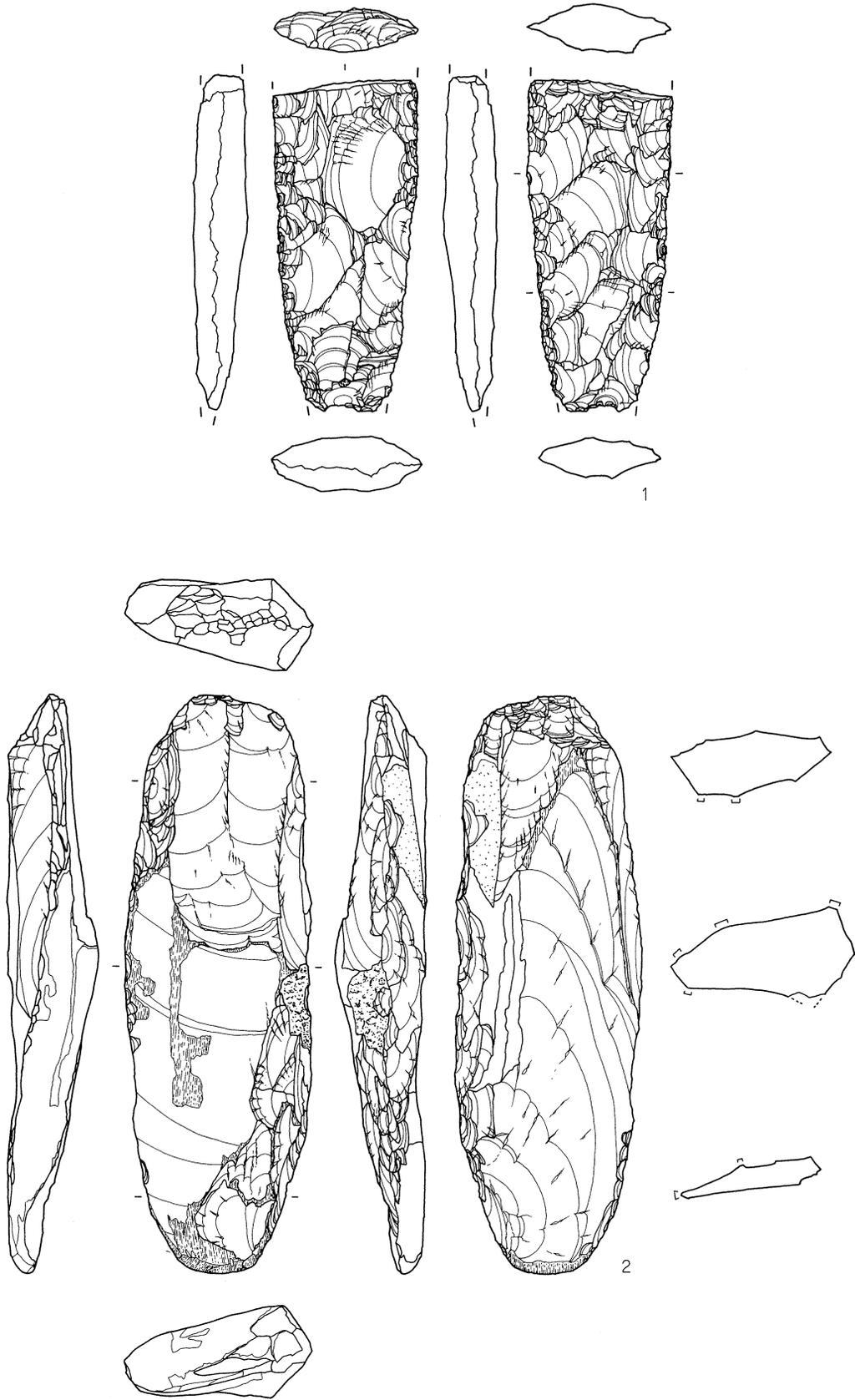
(註 釈)

(註 1) 稲敷市(旧東町)例は青灰色チャート製で弁才天遺跡や尾崎前山遺跡例よりも肉厚で、断面が菱形を成している。

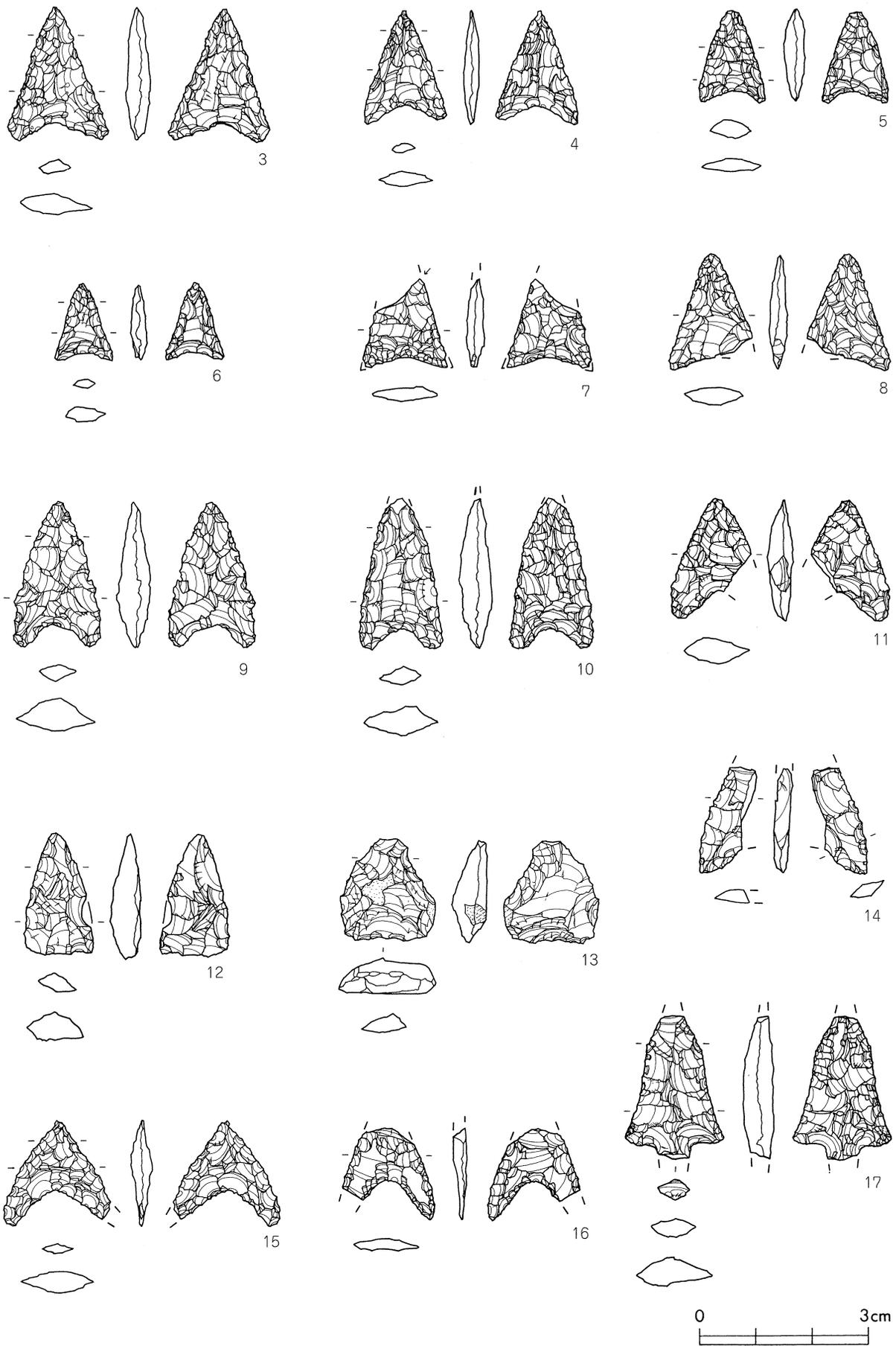
2005年7月現在、稲敷市立歴史民俗資料館の常設展示室に展示されている。

[参考文献]

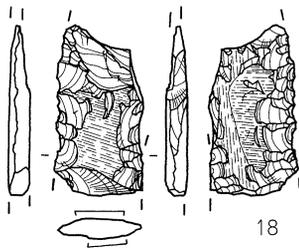
- 阿久津久 1981『尾崎前山』八千代町教育委員会
- 市毛美津子・小林貴郎・平田和明・板野晋鏡・早川泉 2003『松井A遺跡』北茨城市文化財調査報告10 大成エンジニアリング株式会社・北茨城市教育委員会
- 江幡良夫 1995『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 原出口遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第94集 財団法人茨城県教育財団
- 奥野麦生 1985「5. 骨角器・石器・石製品・土製品」『鴨台考古 茨城県出島半島における考古学的調査報告Ⅱ』第4号 大正大学考古学研究会
- 小山正忠・竹原秀雄 2002『新版 標準土色帳』日本色研事業株式会社
- 川村満博・島田和宏 2003『梶内山遺跡 一般国道468号線首都圏中央連絡自動車道(圏央道)及び高速自動車道常磐自動車道つくばジャンクション(仮称)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第199集 国土交通省常総国道工事事務所・日本道路公団・財団法人茨城県教育財団
- 窪田恵一 2001「第3章 第7節 遺構外出土遺物 石器」『下郷遺跡・下郷古墳群』土浦市教育委員会・下郷古墳群遺跡調査会
- 斉藤新・住谷光男 1987「第7章 東石川新堀遺跡」『昭和61年度 市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会
- 鈴木道之助 1981『石器の基礎知識』Ⅲ 柏書房
- 関口満・黒澤春彦・駒澤悦郎 1997「第3章 第3節 壺杯清水西遺跡」『三夜原東遺跡・新堀東遺跡・壺杯清水西遺跡』土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会・田村沖宿土地区画整理組合
- 芹沢長介 1949「半磨製石鏃について」『考古学集刊』第1巻3号
- 大工原豊 1990「縄文時代後・晩期における局部磨製石鏃の展開と意義－縄文時代における石器研究の一試論－」『青山考古』第8号 青山考古学会
- 仲野修秀 1987「Ⅳ－2. 縄文時代」『向原遺跡』向原遺跡調査会・土浦市教育委員会
- 萩谷千明 2000『第30回企画展 利根川流域の縄文草創期』笠懸野岩宿文化資料館
- 間宮正光 2004『内野遺跡 市指定史跡島崎城外郭部の第3次調査報告書』潮来市遺跡調査会
- 緑川正實・海老澤稔 1993『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原田北遺跡・原田西遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第80集 財団法人茨城県教育財団
- 望月明彦 2004「付編2 土浦市内遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『山川古墳群(第2次調査)土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 土浦市・土浦市教育委員会・山川古墳群第二次調査会
- 渡辺丈彦 2004「第5章 山川古墳群第1次調査 第7節 遺構外出土遺物 石器」『北西原遺跡(第3次・第4次調査)・山川古墳群(第1次)土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第3集 土浦市・土浦市遺跡調査会・土浦市教育委員会



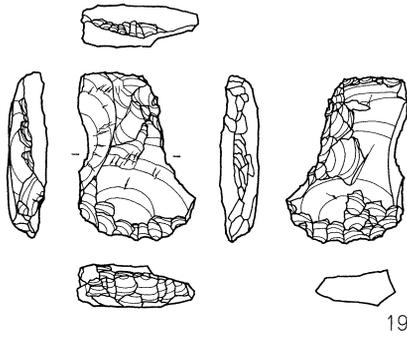
第30図 縄文時代の石器 (1)



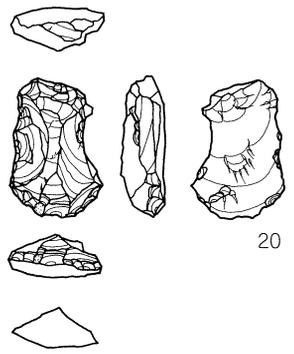
第31図 縄文時代の石器 (2)



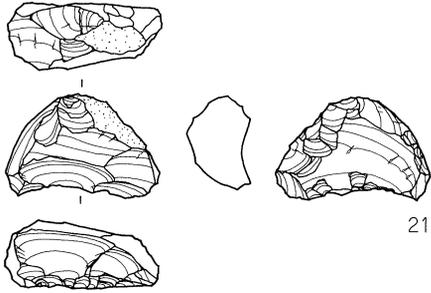
18



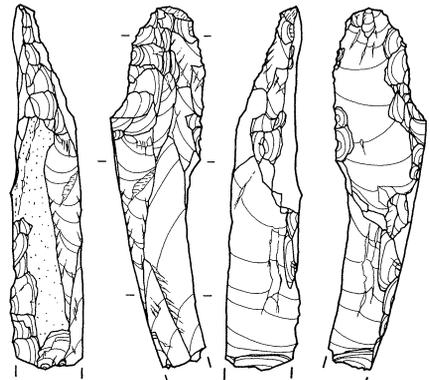
19



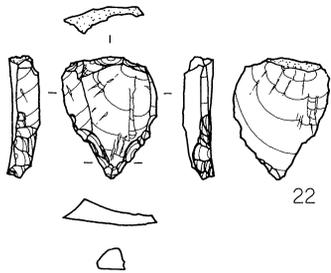
20



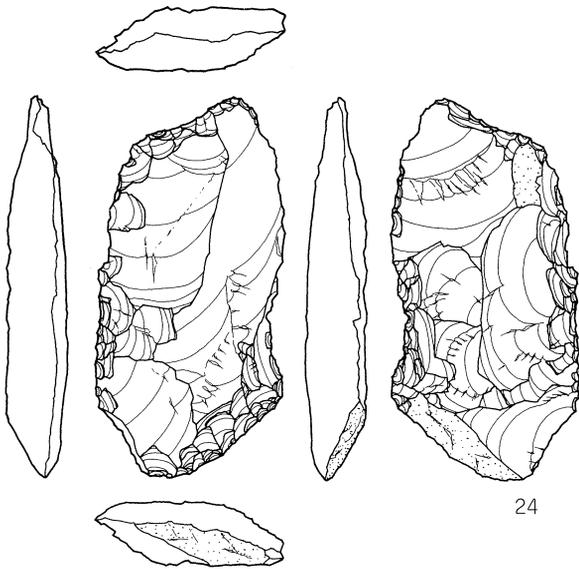
21



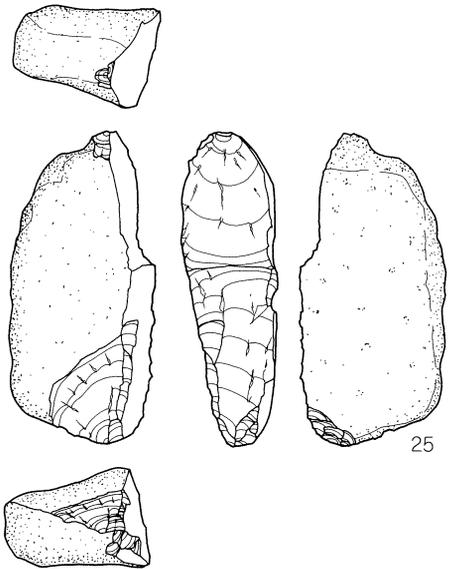
23



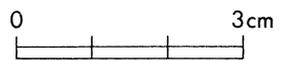
22



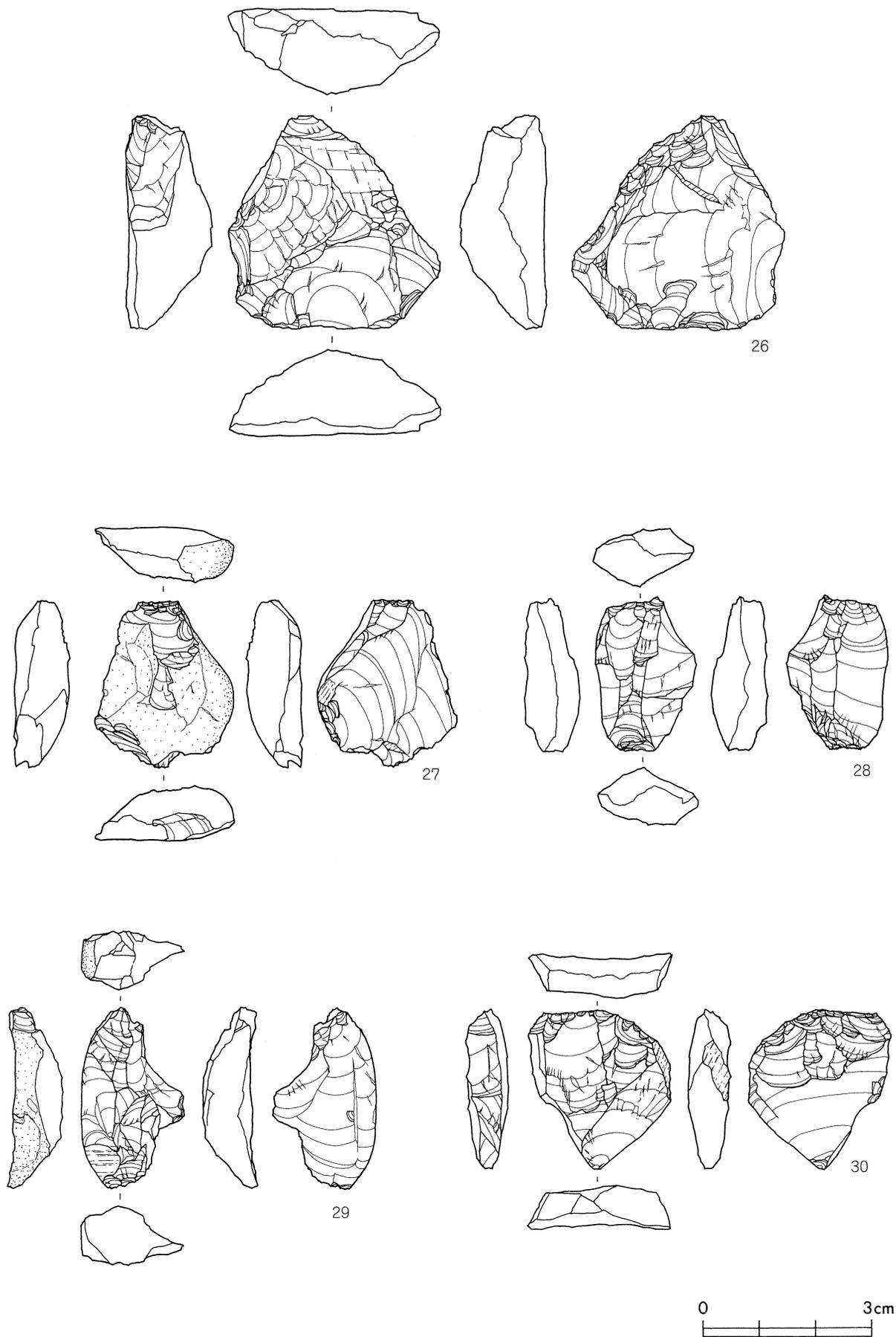
24



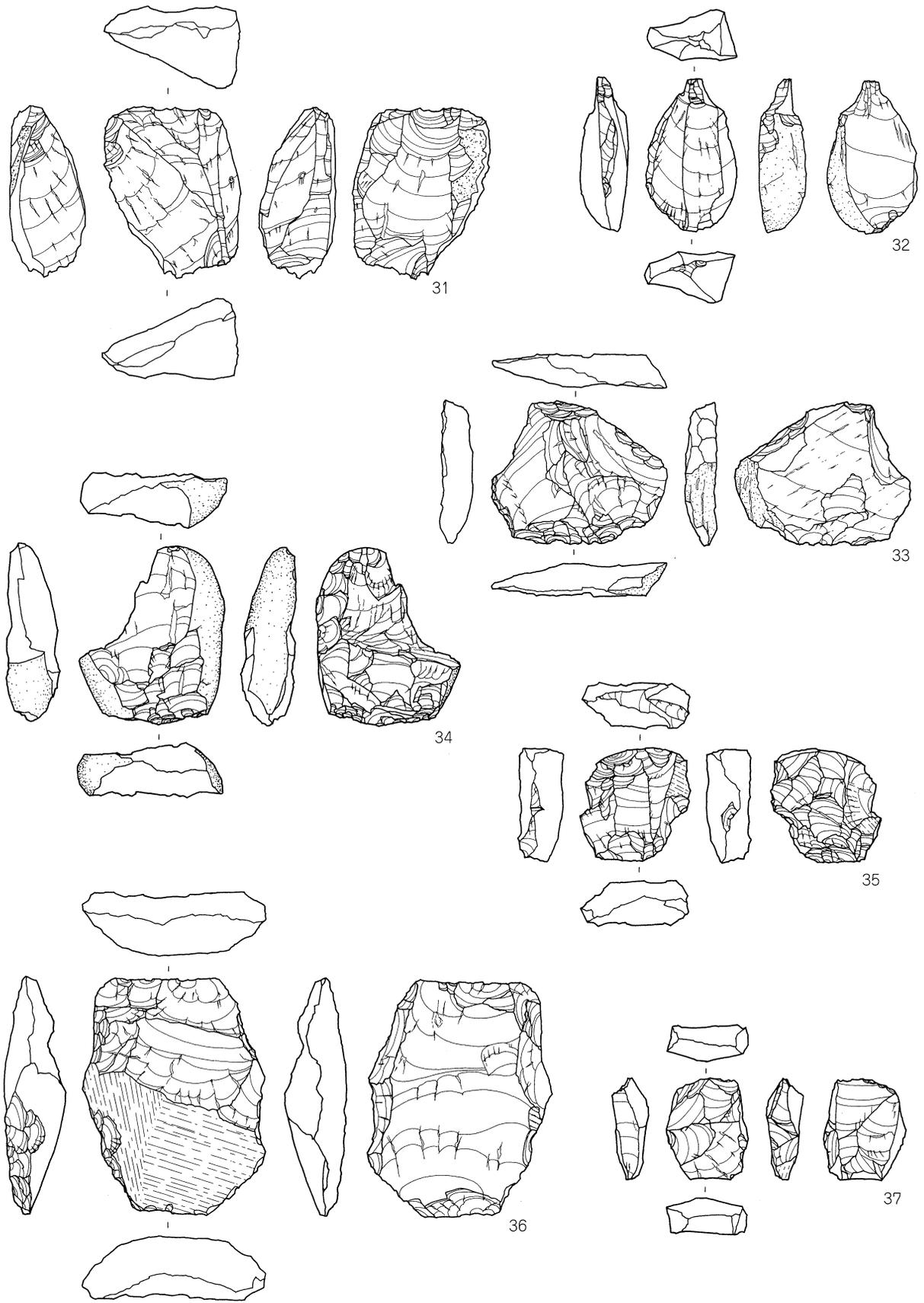
25



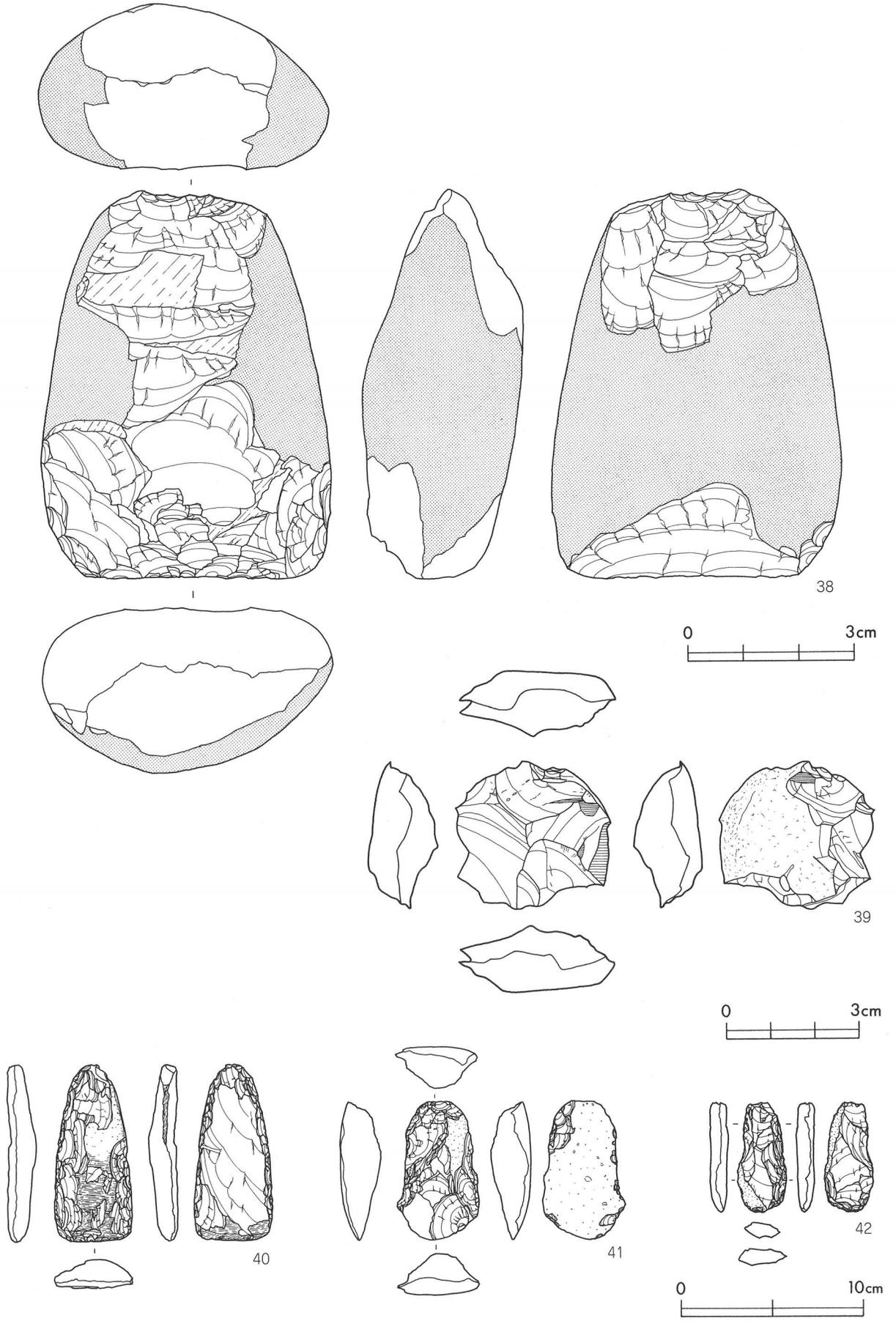
第32図 縄文時代の石器 (3)



第33図 縄文時代の石器（4）



第34図 縄文時代の石器 (5)



第35図 縄文時代の石器 (6)



第36図 縄文時代の石器（7）

弁才天遺跡 縄文時代以降の石器観察表

図版番号	器種	石材名	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	検出地点	備考
30- 1	槍先形尖頭器	硬質頁岩 11	66.7	28.7	10.5	23.8	SI-65	草創期前半
2	局部磨製石斧	緑色凝灰岩	114.9	36.7	17.8	82.5	表土	草創期 (爪形文期)
31- 3	石 鏃	黒色安山岩	23.6	18.3	4.3	1.3	SI-7	
4	石 鏃	チャート	20.0	15.2	2.9	0.5	SI-9	
5	石 鏃	チャート	16.5	11.8	3.4	0.6	SI-13	
6	石 鏃	チャート	13.7	10.2	2.7	0.3	SI-13	
7	石 鏃	黒曜石	16.0	15.2	3.3	0.6	SI-31	
8	石 鏃	チャート	20.6	16.6	3.5	0.8	SI-7	
9	石 鏃	チャート	26.1	15.5	5.9	1.8	SB-4	
10	石 鏃	流紋岩	26.7	15.3	6.1	1.6	SI-1	
11	石 鏃	黒曜石	21.3	15.4	4.7	1.0	SI-22	
12	石 鏃	メノウ	21.6	12.8	5.3	1.2	SI-3	
13	石 鏃	チャート	18.4	17.2	6.5	1.9	SI-38	
14	石 鏃	チャート	20.3	7.7	3.0	0.5	SI-9	
15	石 鏃	チャート	18.0	19.1	3.8	0.7	SI-7	
16	石 鏃	チャート	15.9	16.4	2.4	0.4	SI-19	
17	石 鏃	チャート	25.4	17.6	5.5	2.0	SI-75	
32- 18	部分磨製石器	黒曜石	23.1	11.6	2.7	0.9	SI-75	諏訪星ヶ台群産黒曜石
19	石 匙	チャート	22.6	15.8	5.4	2.2	SI-64	
20	削 器	メノウ	18.1	12.3	5.6	1.4	SI-35	
21	削 器	メノウ	20.3	13.3	8.5	2.6	SI-17	
22	石 錐	チャート	10.4	12.7	3.5	0.8	F-8 グリッド	
23	摘み付き石器	チャート	48.9	12.2	6.8	5.2	SI-7	
24	楔状石器	チャート	16.8	14.6	8.2	2.1	SI-38	
25	楔状石器	メノウ	41.8	17.8	11.4	12.1	G-29 グリッド	
33- 26	楔状石器	チャート	38.4	38.4	15.0	20.1	表土	
27	楔状石器	チャート	29.9	25.5	9.1	7.1	SI-87	
28	楔状石器	チャート	27.8	18.5	9.9	4.5	SI-31	
29	楔状石器	チャート	32.2	18.6	0.9	4.8	SB-2	
30	楔状石器	チャート	30.1	23.9	7.7	5.5	SI-47	
34- 31	楔状石器	黒色安山岩	30.7	22.5	12.7	8.6	表土	
32	楔状石器	チャート	26.8	16.2	8.6	3.4	SI-38	
33	楔状石器	チャート	27.9	30.5	5.4	4.7	SI-85	
34	楔状石器	チャート	30.9	26.0	9.1	6.3	SD-7	
35	楔状石器	チャート	20.1	18.9	7.6	3.6	SI-6	
36	楔状石器	緑泥片岩	41.3	32.6	10.9	17.0	SI-61	
37	楔状石器	玉髄	18.0	14.0	6.3	1.8	SI-3	
35- 38	楔状石器	花崗閃緑岩	70.3	53.4	28.9	138.0	SD-7	
39	石 核	チャート	36.2	36.6	15.2	17.6	表土	
40	刃部磨製石斧	緑泥片岩	95.6	43.3	13.8	77.2	SI-55	
41	二次加工石器	凝灰岩	75.4	45.0	21.7	62.2	D-26 グリッド	
42	打製石斧	粘板岩	59.3	26.9	8.7	17.7	表土	
36- 43	磨製石斧	蛇紋岩	106.6	55.0	33.9	267.5	D-26 グリッド	
44	磨製石斧	緑泥片岩	83.9	45.7	27.0	151.6	E-24 グリッド	
45	磨製石斧	緑色凝灰岩	76.6	41.3	17.4	83.4	SI-10	
46	磨製石斧	蛇紋岩	62.0	43.2	20.0	100.2	SI-45	
47	片刃礫器	流紋岩	83.7	77.4	28.2	249.4	SI-31	
48	片刃礫器	ホルンフェルス	98.9	37.2	33.3	122.2	SI-74	
49	片刃礫器	ホルンフェルス	103.9	64.1	45.6	378.6	表土	
50	片刃礫器	安山岩	89.8	64.3	52.8	372.4	SI-53	
51	スタンプ形石器	石英斑岩	79.9	69.4	38.7	181.6	SI-4	

3. 古墳時代前期

本遺跡から古墳時代前期（4世紀）の竪穴住居跡が11軒、おそらく前期と思われる、遺物が出土していない住居跡が2軒の計13軒が発見されている。このうち前期の住居跡1軒は調査区南西側に位置しているが、他の12軒は調査区西側にまとまってみられた。ここでは住居跡番号順に記載を行なっていくこととしたい。

第2号住居跡〔第37図、PL.6・51〕

位置 調査区北西F・G-10・11グリッド、標高27.5mの台地平坦面に位置する。東側で第1号溝・第4号住居跡と重複しており、出土遺物から本住居が古いと判断した。

規模 長軸6.7m、短軸6.44mのやや横に長い正方形を呈し、床面積は約43㎡である。

主軸方向 N-62°-W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 南側の隅を一部第4号住居跡に壊されている。確認面からの深さは最深部で44cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。各壁面に沿って部分的に壁溝が確認されており、壁溝の幅は8～12cm、深さは3～15cmである。

床 平坦である。中央部と西側を除く広範囲で床面に接して焼土・炭化材が確認された。東壁面ほぼ中央に間仕切り溝とみられる幅20cm、深さ19cm程の掘り込みがみられた。

ピット P1～4が主柱穴で相対する位置に配されている。円形・楕円形を呈し、長径25～66cm、深さ78～84cmを測る。P1は他の主柱に比して長径が大きく、柱の抜き取りに伴い上場が大きく開口したと思われる。P5は貯蔵穴である。楕円形を呈し、長径92cm、深さ46cmを測る。遺物は出土していない。その他8基のピットは性格不明だが、配置から補助柱穴の可能性も考えられる。

炉 中央の奥壁寄りに楕円形を呈する炉が2基確認された。南寄りの炉1は長径1.2m、深さ2cm、炉2は長径42cm、深さ5cmを測りいずれも浅く掘り込まれた地床炉で、炉床は被熱により著しく赤化していた。炉の新旧は不明である。

覆土 4層に分層された。第1層を除きいずれの土層にも焼土と炭化物が混入しており、概ね縦方向に堆積していることから、埋め戻し土と考えられる。

遺物 住居跡北側壁際の床面直上より、潰れた状態で土師器の埴が1点出土した。小型丸底壺の一種である。

所見 炉の配置から東側を入り口部と想定したが、貯蔵穴や間仕切り溝の位置からあるいは南側がこれに相当するかもしれない。床面に散在する焼土・炭化材から廃絶時に火を使用し埋め戻しを行なったと考えられる。出土遺物から当住居跡は古墳時代前期に営まれたものと判断した。

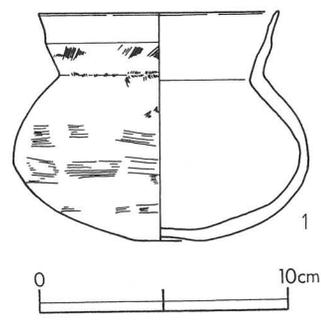
第3号住居跡〔第38図、PL.6・51〕

位置 調査区北側H・I-5～7グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複はなく、単独の住居跡である。

規模 長軸5.88m、短軸4.4mの横長の長方形を呈し、床面積は約25.9㎡である。

主軸方向 N-34°-E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 南壁の半分ほどが攪乱により大きく壊されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で24cmを測る。壁溝は確認されなかった。

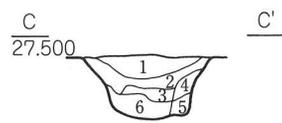
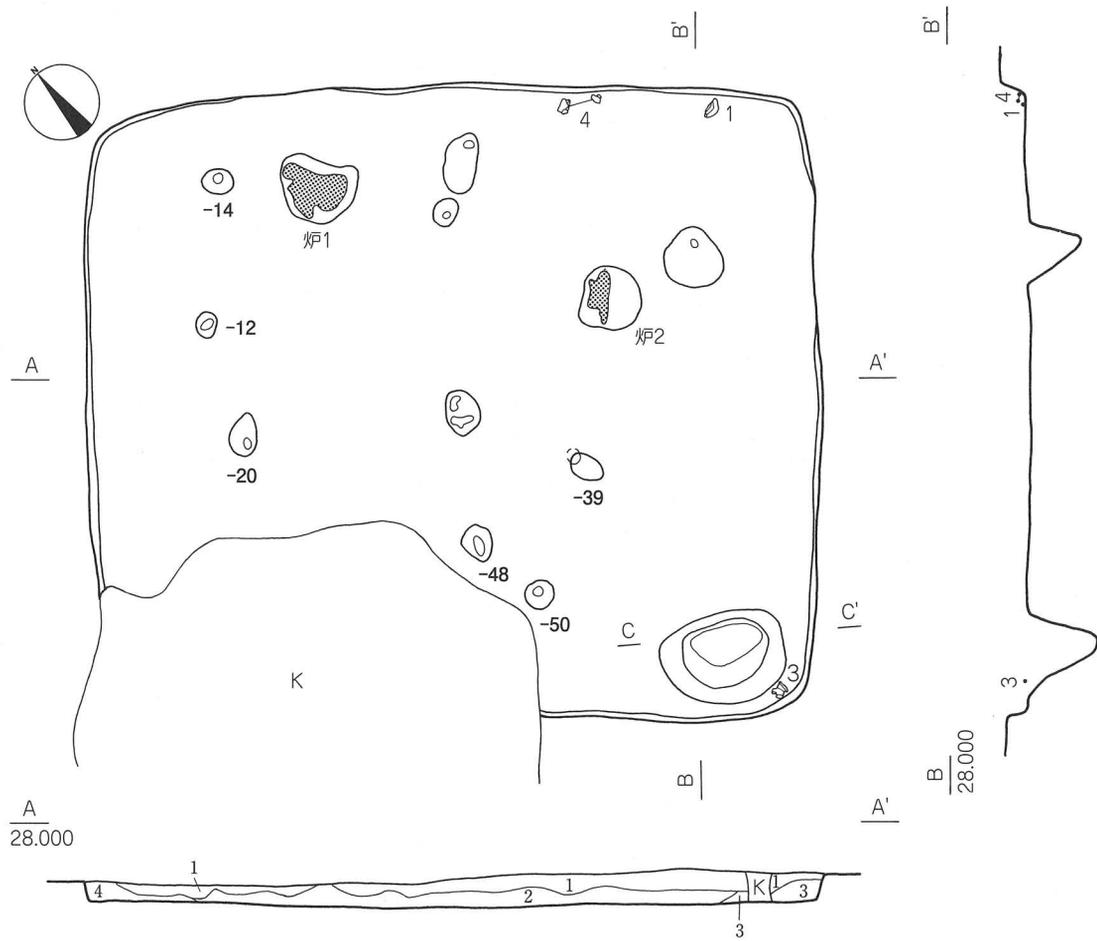


- SI-2
1. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム小微量 ローム粒中量
 2. 7.5YR4/3 褐色 炭化物微量 ローム小中量
 3. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒・炭化物・ローム中少量
 4. 7.5YR4/4 褐色 炭化粒微量 ローム小少量

第37図 第2号住居跡・出土遺物

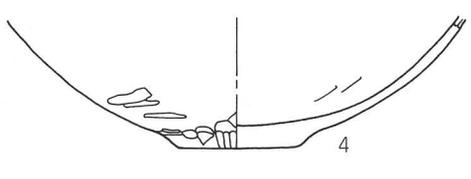
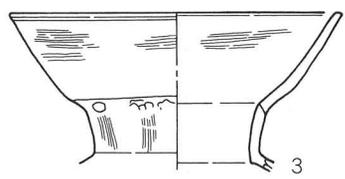
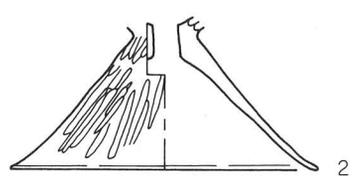
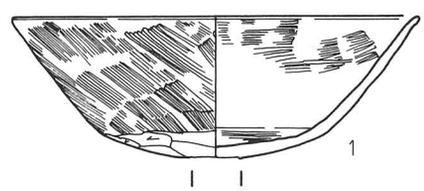
第2号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	土師器 罎	口径 9.6 底径 2.0 器高 9.6	底部はごく小さく上げ底を呈する。体部は算盤玉状を呈し、口縁部は中位に稜をもって直線的に開く。	体部に横位のハケ調整後、横位の磨きを行う。口縁部外面は縦位のハケ調整後、横位の磨きを施す。口縁内面は横位の磨き、体部内面はヘラナデを行う。	微細な長石・石英を多量、径1mmの石英・チャート粒少量 内外面赤褐色 普通	床直 80% 体部下半分に煤付着



- SI-3 貯藏穴
- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小中量 ローム粒少量
 - 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小少量 ローム粒微量 黒色土粒多量
 - 3. 7.5YR5/6 明褐色 ローム中~粒多量
 - 4. 7.5YR4/6 褐色
 - 5. 7.5YR4/6 褐色 ローム粒中量
 - 6. 7.5YR4/4 褐色 ローム粒微量

- SI-3
- 1. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土粒微量 ローム小少量
 - 2. 7.5YR4/6 褐色 ローム中少量
 - 3. 7.5YR4/6 褐色
 - 4. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小中量



第38図 第3号住居跡・出土遺物

床 概ね平坦である。

ピット 円形・楕円形・不整形を呈する10基のピットが確認されたが、規模・配置等からいずれが主柱穴となるかは確定が困難であった。10基の規模は長径22～48cm、深さ12～50cmを測る。南側隅は貯蔵穴である。楕円形を呈し長径1.02m、深さ57cmを測る。覆土は6層に分層され、暗褐色土・褐色土が主体であった。遺物は出土していない。

炉 中央奥壁寄りに2基掘り込まれている。北寄りの炉1は不整形を呈し、長径67cm、深さ3cm、炉2は円形を呈し、径48cm、深さ6cmを測る。いずれも浅く掘り込まれており、坑底面は被熱により赤化していた。同時に使用されていたのか、新旧関係があるのかは不明である。

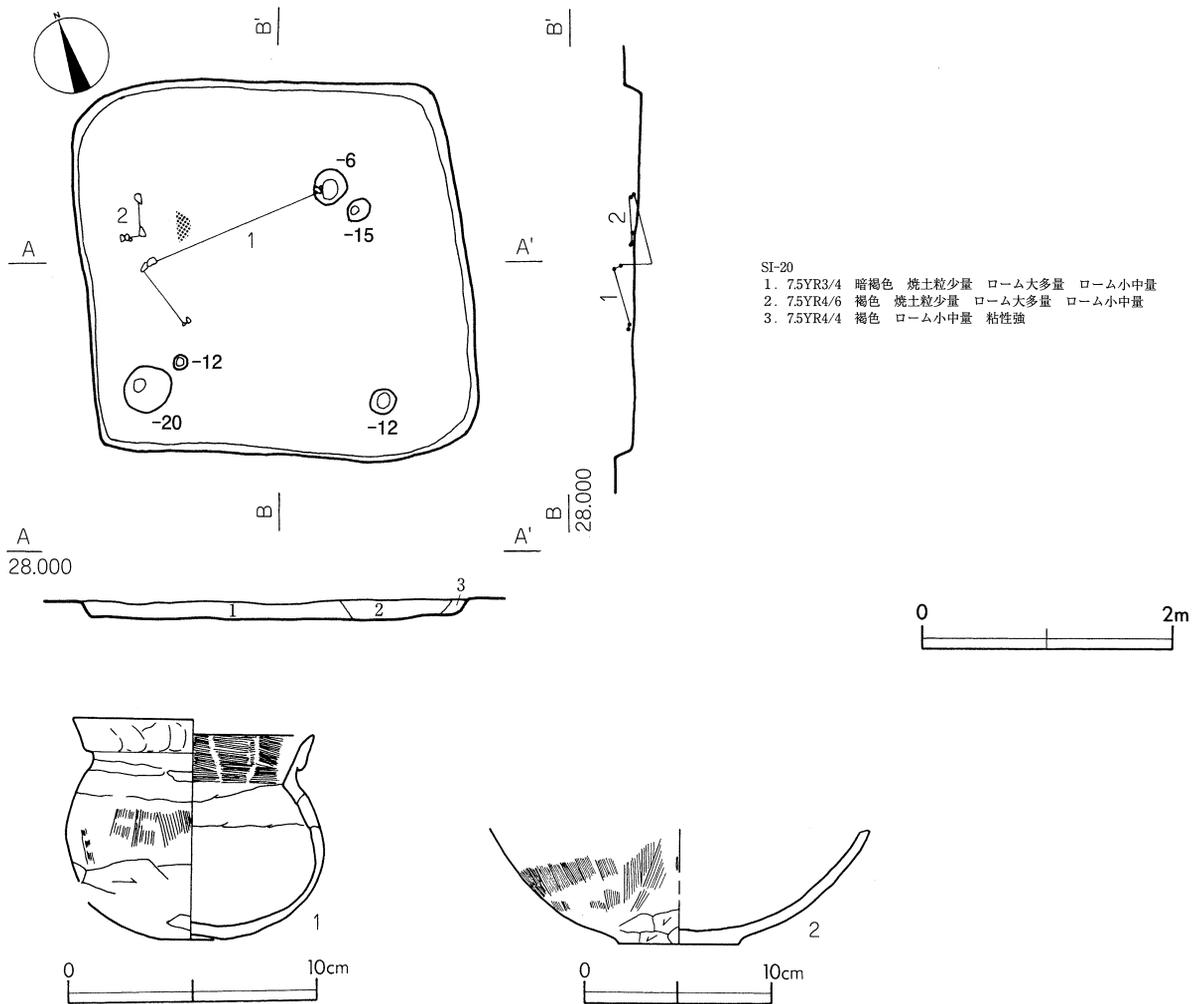
覆土 4層に分層された。第3・4層は壁崩れ土で全体に自然埋没と思われる。

遺物 土師器の高坏、器台、壺の破片が住居跡の壁際、床面よりやや浮いた位置から確認された。No.1は高坏の脚部が欠損したもので、全面にハケ調整が施されている。床面直上からの出土である。No.2は器台の脚部片で、器壁が薄く外面に磨きを施す端整な作りである。No.3と4は壺の口縁部と底部片で、胎土の違いから両者は別個体と判断した。No.3は南壁隅と貯蔵穴の間、床面直上より出土した。有段口縁を意識した屈曲する口縁部をもち、内外面に磨きが施されている。赤彩はみられない。No.4は床面より6cm程浮いた状態で出土した。突出した底部をもち、体部は横方向に大きく張り出す形態とみられる。

所見 炉と貯蔵穴の配置からおそらく南西側が入り口となろう。出土遺物から当住居跡は古墳時代前期に営まれたものと考えられる。

第3号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	土師器 高坏	口径 器高 16.2 (5.8)	脚部の外れた高坏の坏部片。口縁部は直線的に大きく開く。脚は棒柱状と思われ、取り付け部が狭く、きれいに剥離している。	口縁部外面は斜位のハケ調整後、回転ナデ、内面は横位のハケ調整後に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を多量、径1mmの長石・チャート粒を少量 内外面橙色 良好	床直 坏部90%
第38図 2	土師器 器台	裾径 器高 [12.2] (5.7)	脚から裾部にかけては緩やかに開く。坏部との接合部は強く引き締まり、中央に直径9mmの貫通孔が抜けている。	裾部外面は縦位ハケ調整後、縦位の磨き、内面は縦位のヘラナデ後、裾端付近に横位のナデを施す。	微細な長石・石英を多量 外面橙色、内面灰褐色 普通	覆土 60%
第38図 3	土師器 壺	口径 器高 [17.8] (8.4)	壺の口縁部片。頸部はほぼ直立し、内湾しながら開く。	頸部は縦位のハケ調整後、横位のナデ、口縁部内外面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面橙色 普通	床直 頸部位上60%
第38図 4	土師器 壺	底径 器高 7.0 (7.0)	壺の底部片。底部は台状に厚く突出する。	外面は、底部周辺にヘラ削り、体部は横位の磨きを施す。内面は斜方向のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を多量 外面黒褐色、内面明褐色 良好	覆土下位 30%



第39図 第20号住居跡・出土遺物

第20号住居跡〔第39図、PL.13・61〕

位置 調査区北側M・N-8・9グリッド、標高27.5mの台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独住居跡である。

規模 長軸2.92m、短軸2.88mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約8.4㎡である。

主軸方向 N-19° -E（南側を入り口部と想定して）

壁 外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で18cmを測る。壁溝は確認できなかった。

床 概ね平坦である。

ピット 5基確認された。形状は円形を呈し、径13～40cm、深さ6～20cmを測る。南西側隅のピットはその配置から貯蔵穴の可能性も考えられる。このピットの覆土は3層に分層され、概ね暗褐色土であった。

炉 中央やや西寄りに焼土範囲が確認され、おそらくこれが炉と思われる。床面から4cm程掘り込まれていた。

覆土 3層に分層された。第1・2層にはローム質土が多量に混入しており、埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物の量は極めて少なかった。図示し得たのは大小の甕2点のみである。No.1は小型の甕で、複合口縁をもつ。床面直上～覆土下層の接合資料である。No.2は一般的な大きさの甕であるが、体部

中位以上を欠失している。床面直上～覆土上層の接合資料である。両者にはハケメ調整が認められ、その器形の類例からも、古墳時代前期のものと考えられる。

所見 炉と貯蔵穴の配置から入り口方向は南側と想定した。遺物はその出土状況から住居跡の廃絶に伴い廃棄されたものと思われる。当住居跡が営まれた時期は古墳時代前期と考えたい。

第20号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	土師器 小型甕	口径 [9.6] 底径 2.6 器高 8.8	小型の甕。底部は僅かに上げ底を呈し、体部は球状に膨らむ。口縁部は複合口縁で直線的に開く。	底部および体部下位に小刻みなヘラ削り、体部上位に縦位のハケメを付ける。口縁部内面に横位のハケメを付ける。	径1mmの長石・石英を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直～覆土中位 60%
第39図 2	土師器 甕	底径 6.4 器高 [6.1]	底部は平底だが周囲からの削り出しによって台状を呈する。体部下位は丸みをもって大きく開く。	底部および周辺にヘラ削り、体部下位から上方にかけて縦位のハケメを付ける。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面暗褐色 普通	床直 20% (底部周辺は70%残存)

第39号住居跡〔第40～42図、PL.19・72〕

位置 調査区南西側J～L-26～28グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5mに位置する。東側で第7号溝と重複しており、本住居跡が古い。

規模 長軸5.02m、短軸(5.00)mの正方形を呈し、床面積は約(25.1)m²である。東側壁は第7号溝により壊されており、計測箇所は溝との重複部である。

主軸方向 N-33°-E(南西側が入り口と仮定して)。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは最深部で47cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 若干の起伏が認められ、中央部にかけてやや低くなっている。床面には焼土・炭化材・もしくは両者が混ざったような堆積物が広範囲にわたり確認された。東側床面は第7号溝により掘り込まれている。

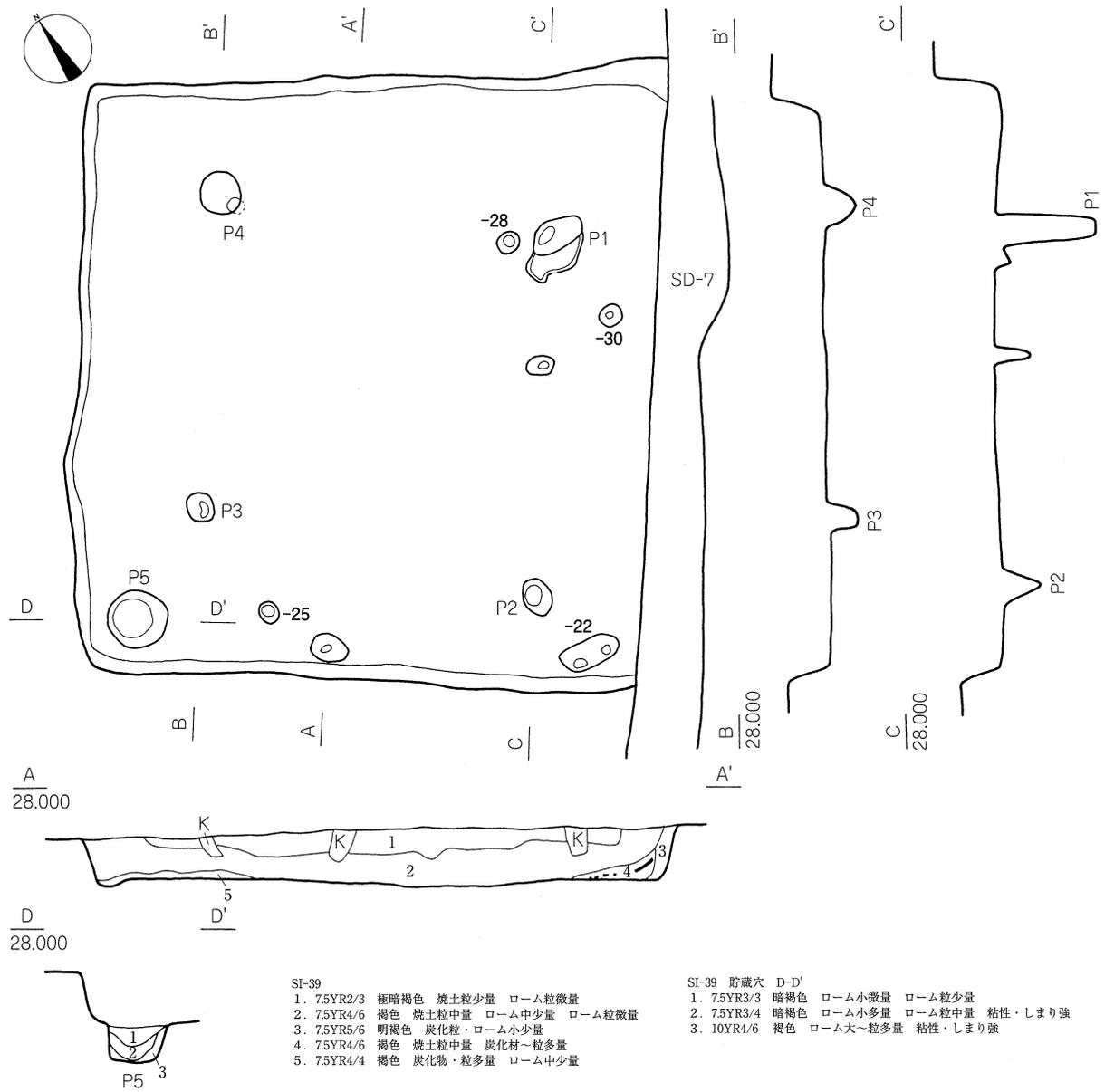
ピット 11基確認された。規模と配置からP1～4は支柱穴に相当しよう。円形・楕円形を呈し、径26～50cm、深さ28～89cmを測る。P5は貯蔵穴となろう。円形で径50cm、深さ37cmを測る。他の6基は径20～54cm、深さ10～30cmを測り、補助的な柱の存在が想定される。

炉 確認されなかった。

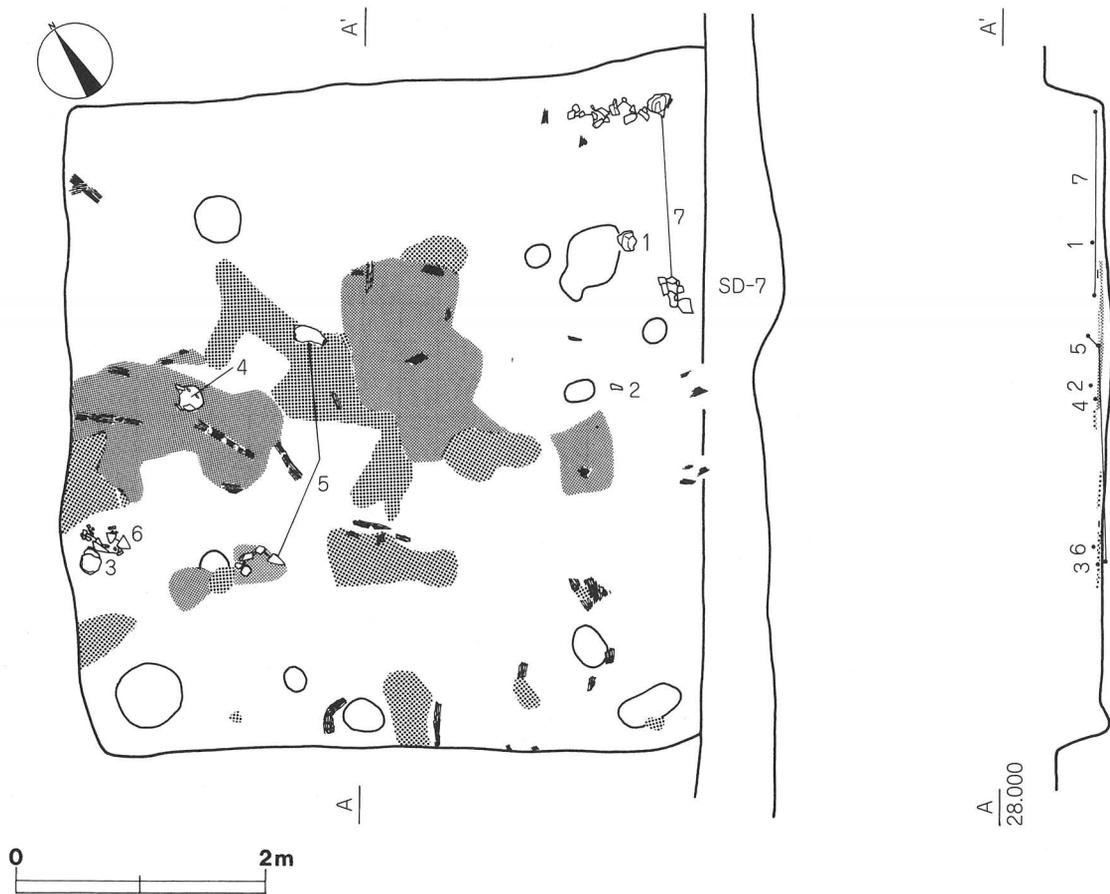
覆土 5層に分層された。床面直上の第4・5層には焼土・炭化物が多量に混入しており、廃絶に伴い火を用いたか、焼失後に埋め戻したと考えられる。

遺物 遺物は床面より僅かに浮いた位置から出土しており、覆土下位の焼土層に混入した状態で発見されたものもある。No.1は埴で、ごく小さな上げ底の底部をもつ。No.2は高坏の脚部片で、中空の筒状を呈する。No.3は甌、No.4・5はやや小型の甕である。いずれも器面調整にハケメが施されている。No.6は4や5に比べて大型の甕である。No.7は頸部を欠失した壺で、おそらく二重口縁をもつ形態と推測される。体部には磨きが施され、比較的丁寧な作りである。

所見 以上の観察から受動的あるいは能動的に住居跡廃絶前後に火が介在した後、土器の廃棄がなされたと判断した。柱穴・貯蔵穴の配置等から南西側を入り口と想定したが、あまり明確な根拠はない。遺物の時期は、ハケメをもつ甕類の特徴、および直線的で中空の高坏脚部などから、古墳時代前期のやや遅い時期と考えられる。焼土上面から出土した土器もあり、住居廃絶と土器廃棄にあまり時間差はないと思われる。



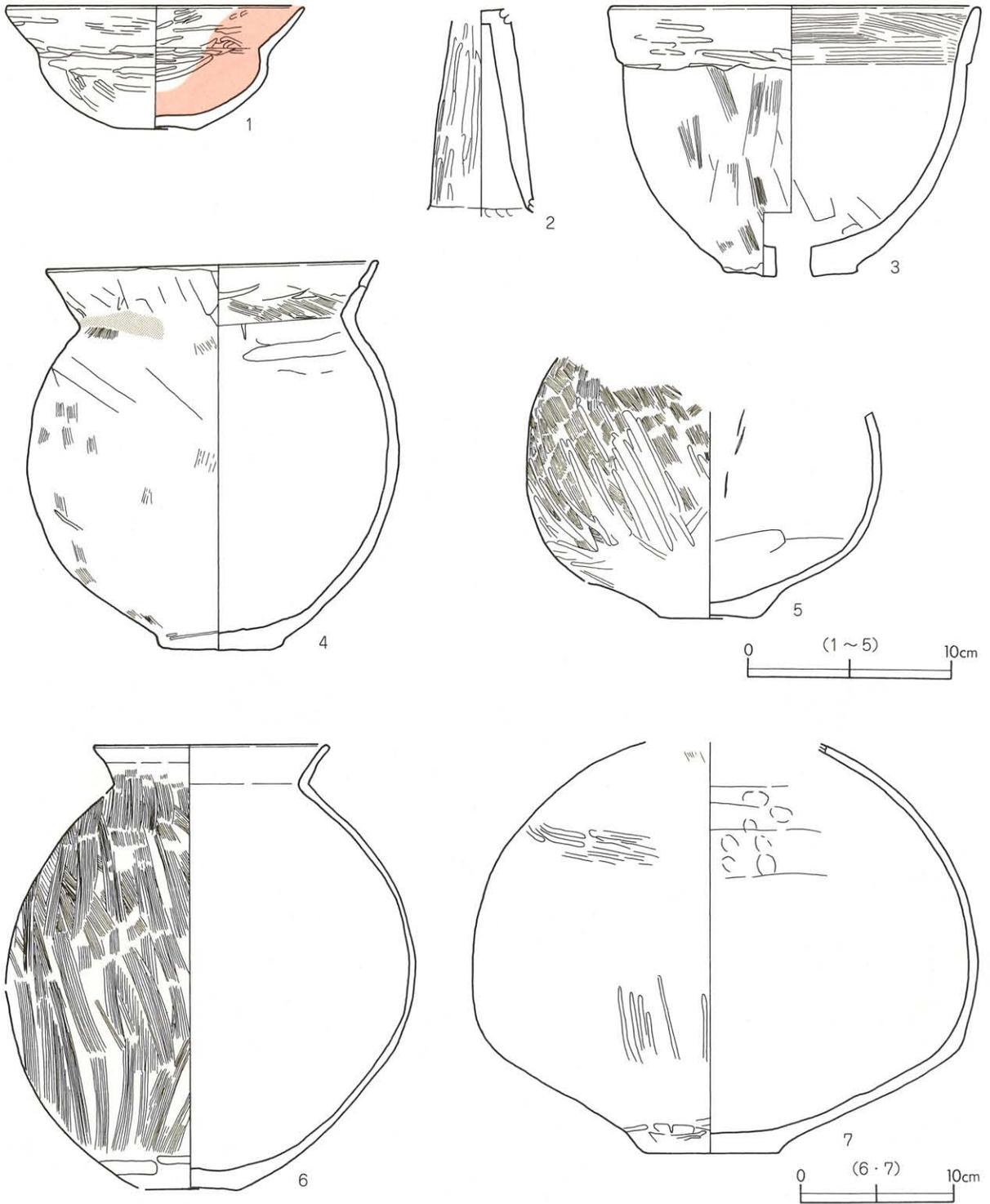
第40図 第39号住居跡



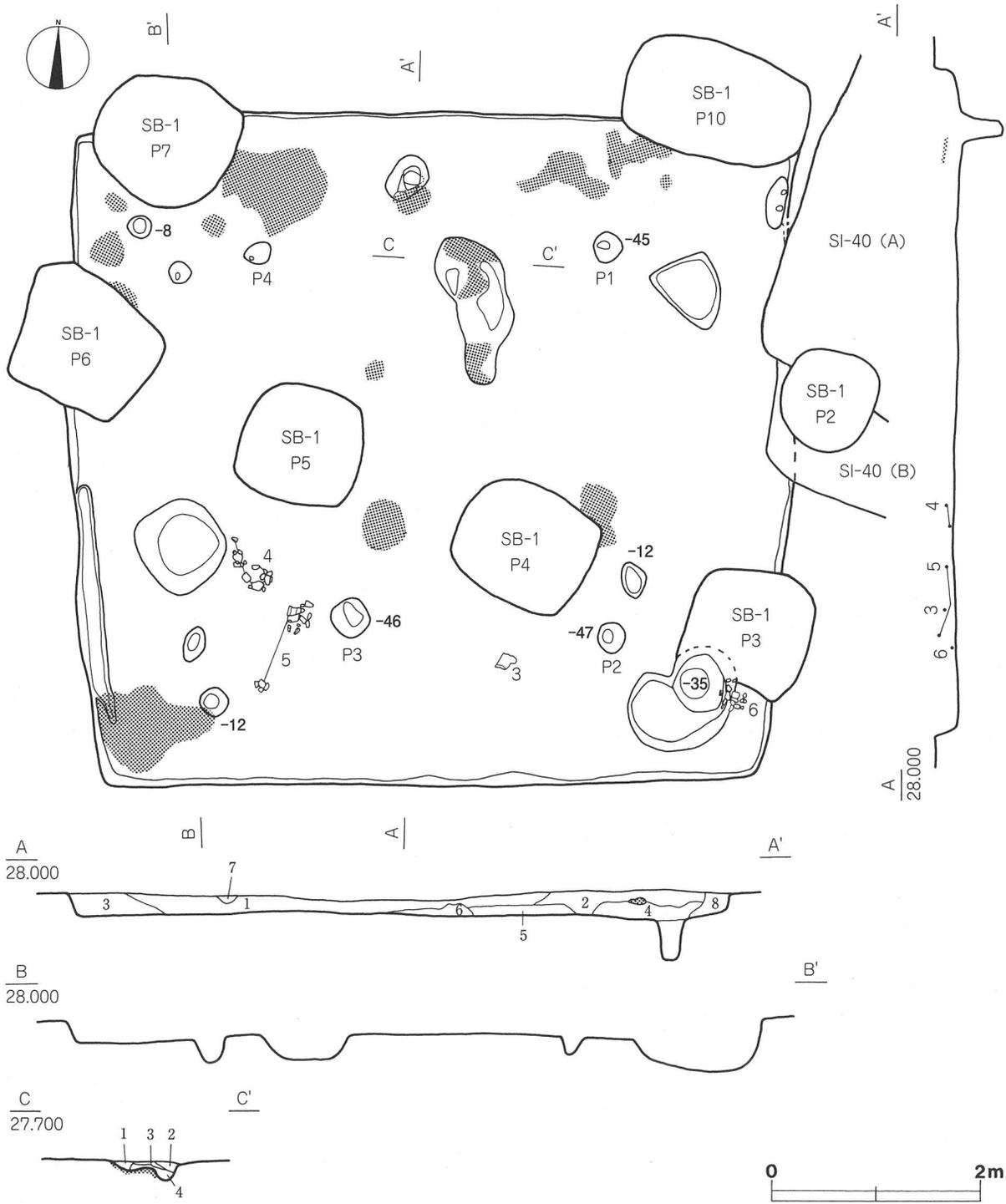
第41図 第39号住居跡遺物・焼土出土状況

第39号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	土師器 埴	口径 14.7 底径 3.2 器高 6.1	底部は小さな上げ底を呈する。体部は半球状に丸く、頸部は強く引き締まる。口縁部は「ハ」字に大きく開く。	底部および体部にヘラ削りを施し、全面的に細かな磨きを施す。	径1mmの長石・石英を中量、径4mmのチャート粒を微量 内外面褐色 良好	覆土下位 90% 内面赤彩
第42図 2	土師器 高坏	器高 (8.7)	高坏の脚部片。やや細みで直線的に延びる。内面は坏部の底まで中空となっており、筒状を呈する。	外面に縦位の磨き、内面に横位のヘラ削りを施す。	微細な長石・石英、白雲母を中量 内外面明赤褐色 良好	覆土下位 30% (坏部・裾部を除く脚部は完存)
第42図 3	土師器 甌	口径 18.5 底径 6.5 器高 13.1	底部は平底で、径1.6cmの孔を開ける。体部は丸みをもって強い角度で立ち上がる。口縁部は体部を成形後に張り付け帯状を呈する。	底部に軽いヘラ削り、体部に縦位のハケメ、口縁部外面に横位の磨き、内面に横位のハケメを付ける。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面橙色 普通	床直 完形
第42図 4	土師器 甕	口径 16.3 底径 6.1 器高 18.9	やや小型の甕。底部は平底で、体部は球形を呈する。口縁部は「ハ」字に開く。	底部にヘラナデ、体部に縦位のハケメとヘラ削り、口縁部は内外面にハケメを施す。	微細な長石を中量 外面にぶい黄橙色、内面黒褐色 良好	覆土下位 80% 外面頸部煤付着
第42図 5	土師器 甕	底径 6.8 器高 (16.8)	やや小型の甕。底部は上げ底ぎみの平底で、体部は横に大きく張り出す。	底部にヘラ削り、体部に縦・斜位のハケメ、内面にヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面褐色 普通	覆土中位 60%
第42図 6	土師器 甕	口径 [15.3] 底径 6.0 器高 29.1	底部は微かな上げ底で、体部は長く延びた球形を呈する。口縁部は「ハ」字に開く。	底部から体部下位にかけてヘラ削り、体部中位以上に縦位のハケメ、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石を中量 内外面褐色 良好	覆土下位 70%
第42図 7	土師器 壺	底径 8.8 器高 (26.6)	底部は平底で径が大きく、体部は横に大きく張り出し「下膨れ」形を呈する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の磨きとナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面橙色 良好	覆土下位 70% (頸部以上を欠く)



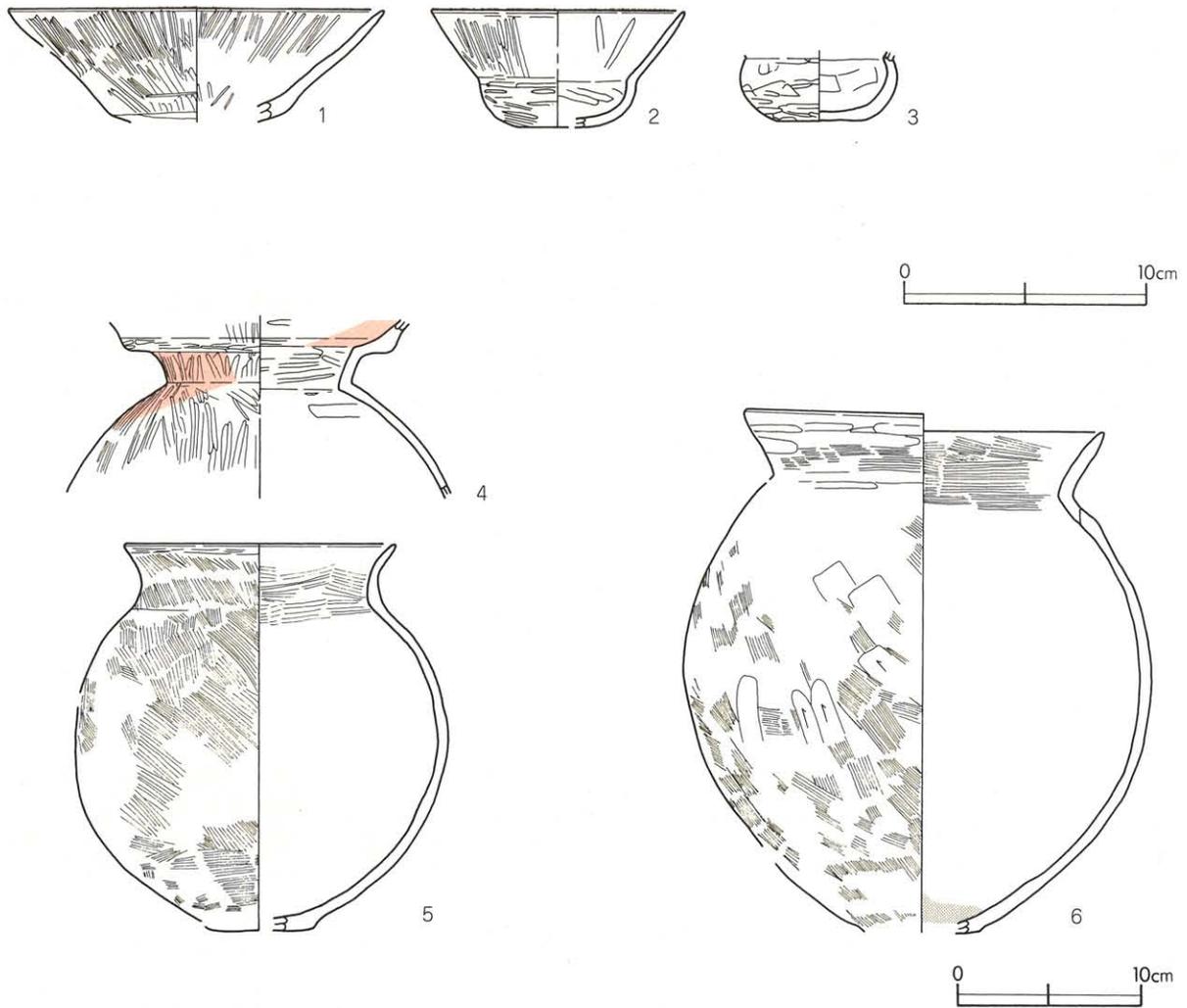
第42図 第39号住居跡出土遺物



- SI-41
1. 25YR3/3 暗褐色 ローム中・小少量 ローム粒微量
 2. 25YR4/3 にふい赤褐色 ローム小・粒少量
 3. 25YR4/3 にふい赤褐色 ローム小少量 ローム粒中量
 4. 25YR4/4 にふい赤褐色 ローム小微量 ローム粒少量
 5. 25YR4/4 暗赤褐色 ローム中量 ローム小・粒微量
 6. 25YR4/3 にふい赤褐色 ローム大微量 ローム中多量 ローム小中量 ローム粒少量
 7. 25YR4/6 赤褐色 ローム大多量 ローム中～粒微量
 8. 25YR4/4 暗赤褐色 ローム大・粒多量 ローム小中量 しまり強

- SI-41 炉 C-C'
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒微量
 2. 7.5YR4/3 褐色 ローム小少量 ローム粒中量
 3. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土小・粒中量
 4. 7.5YR4/3 褐色 焼土大中量 焼土中～粒多量

第43図 第41号住居跡



第44図 第41号住居跡出土遺物

第41号住居跡〔第43・44図、PL.20・74〕

位置 調査区ほぼ中央J・K-23～25グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。西側で第40号住居跡、本住居のプラン内全域で第1号掘立柱建物跡と重複しており、出土遺物から本住居跡が最も古いと判断した。

規模 長軸3.48m、短軸3.4mのやや縦長の正方形を呈し、床面積は約11.8㎡である。

主軸方向 N-5° -E

壁 外傾して立ち上がる。確認面からの深さは最深部で13cmを測る。西壁の一部に壁溝があり、規模は幅14cm前後、深さ8cm前後である。南壁を除く全ての壁が第40号住居跡と第1号掘立柱建物跡との重複により壊されている。

床 概ね平坦である。床面のほぼ全面に渡り小規模の焼土範囲がみられた。炉と判断したピット以外では第1号掘立柱建物跡のP4・5付近の焼土は床面直上だが、他の北側から西側にかけての焼土範囲は概ね床面から10～15cm程上位であった。第1号掘立柱建物跡により床面が壊されている。

ピット 14基確認された。規模と配置からP1～4は支柱穴に相当しよう。円形で径26～36cm、深さ26～47cmを測る。P4がやや浅いほかは深さが近似していた。他は円形・楕円形を呈し、径22～90cm、

深さ8～39cmを測る。南東隅に位置するピットは貯蔵穴の可能性がある。

炉 中央の奥壁寄りに不整形の地床炉が1基確認された。長径1.42m、深さ14cmを測り、被熱により著しく赤化している。

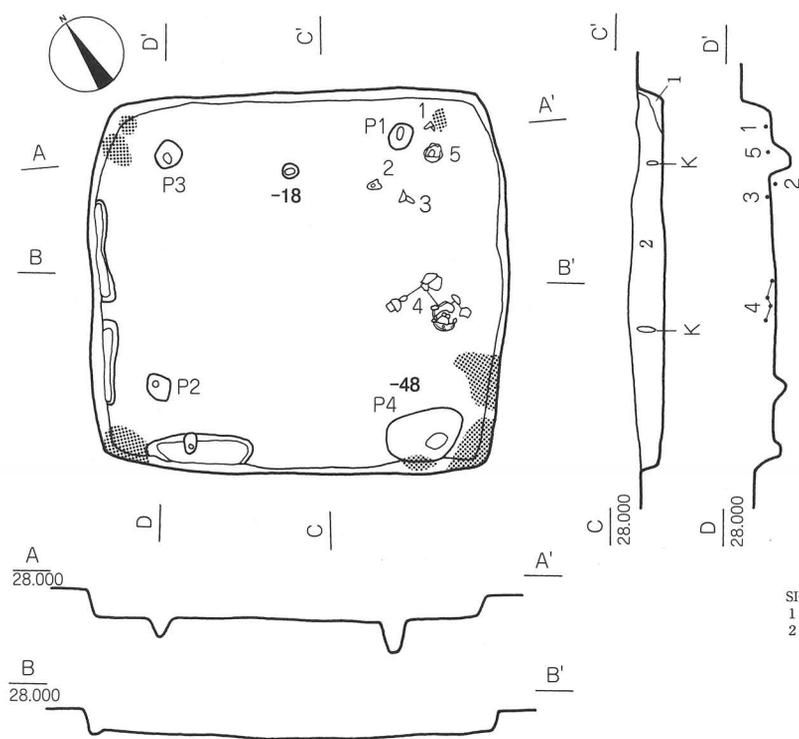
覆土 8層に分層された。第3・8層は壁崩落土である。

遺物 遺物は住居跡の南西隅に集まる状態で発見された。すべて土師器で、器種は高坏、埴、壺、甕の4種である。No.1は高坏の坏部で、口縁部は「ハ」字に大きく開く。小破片が覆土内に散っている状態で出土した。No.2・3は埴である。外面に細かな磨きが施され、つくりも端整である。No.4は有段口縁壺である。全体的な器形は、下膨れの体部から強く締まった頸部が直立し、断面L字状に屈曲した口縁部が立ち上がるものと推測される。全面に磨きが施されており、外面の頸部付近と内面の口縁部に赤彩の痕跡が認められた。No.5・6は甕である。大小2法量があり、両者とも球形の体部に強めに立ち上がる口縁部が付く。外面には顕著にハケメが施されている。

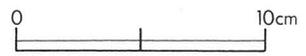
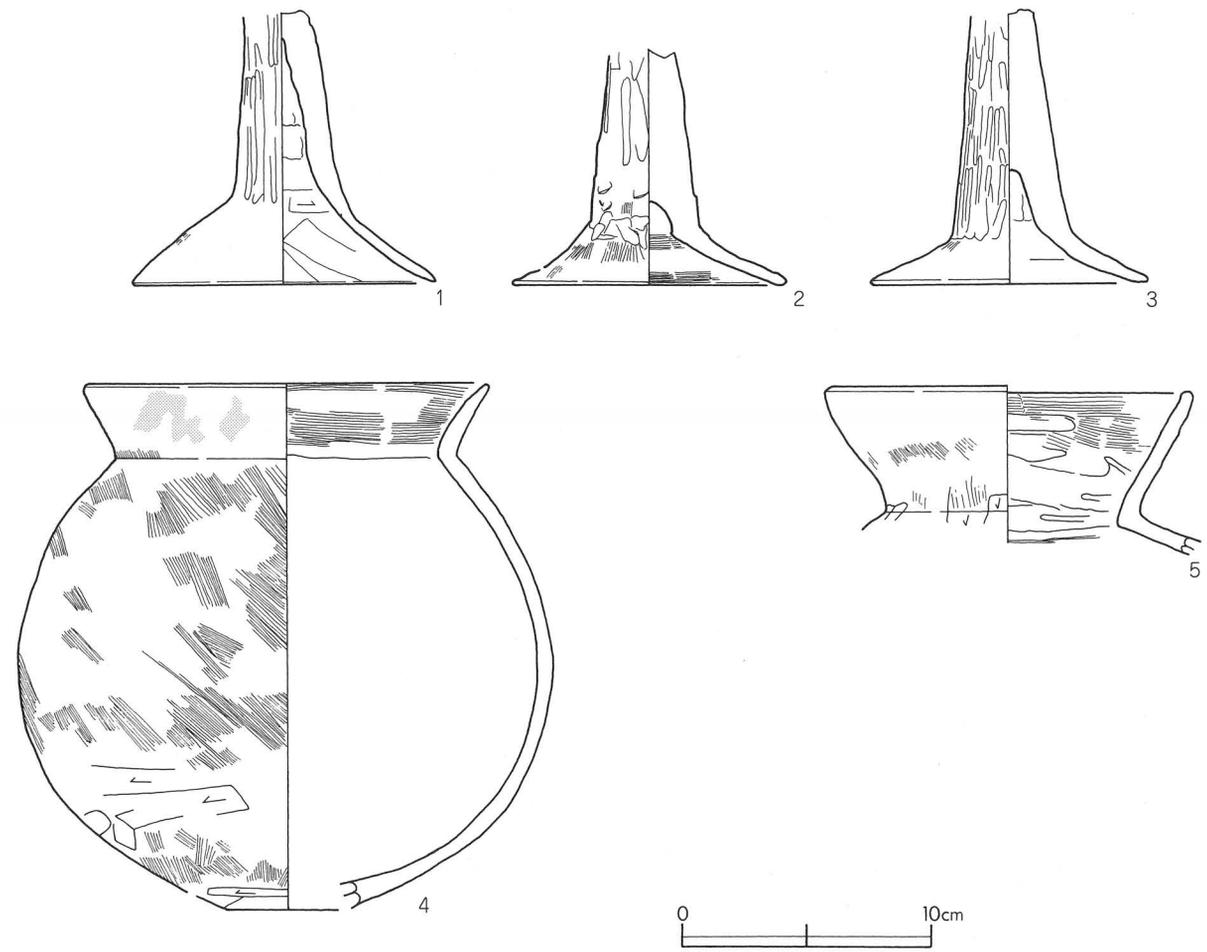
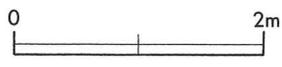
所見 壁際の焼土は出土状態から廃棄されたものであろう。入り口方向は支柱穴と炉の配置から南側と想定した。遺物の時期は、埴や有段口縁壺の存在などから古墳時代前期と考えられる。当住居が営まれた時期も同様となろう。

第41号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	土師器 高坏	口径 [15.5] 器高 (4.6)	坏部のみ残存。口縁部は「ハ」字に開き、深めに立ち上がる。口唇部は素縁で薄くつくられる。	外面に縦位のハケメを付け、その後縦位の磨きを施す。内面には縦位の磨きのみが観察される。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土 20% (坏部の40%残存)
第44図 2	土師器 埴	口径 [10.4] 器高 4.7	底部は丸底を呈し、体部は潰れた球状を呈する。口縁部は器高の半分以上を占め、「ハ」字に大きく開く。	体部外面に横位の磨き、口縁部内外面に縦位の磨きを施す。小型ながら端整につくられる。	ごく微細な長石、白雲母を微量 内外面明赤褐色 良好	覆土 30% (体部径の50%残存)
第44図 3	土師器 埴	底径 3.0 器高 (2.7)	体部のみ残存。底部は平底、体部は潰れた球状を呈する。	体部外面に横位の磨き、内面に指頭ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土下位 40% (体部は完存)
第44図 4	土師器 壺	器高 (9.8)	二重口縁壺の体部・頸部周辺の破片。最大径は体部下位にあるとみられ肩の張りは弱い。頸部は強い角度で立ち上がる。口縁部下位はL字状に屈曲して「ハ」字に開く。	体部および口縁部外面に縦位の細かな磨きを施す。口縁部および頸部内面に横位の細かな磨き、体部内面に横位のナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を微量 外面明赤褐色、内面橙色 良好	床直～覆土下位 20% (口縁部は40%残存) 外面頸部付近、内面口縁部赤彩
第44図 5	土師器 甕	口径 [14.8] 底径 [5.8] 器高 21.0	やや小ぶりの甕。体部は球状を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は直立して口唇部を外反させる。	底部にヘラナデ、体部下位に横位のハケメ、体部中位以上に斜位のハケメを施す。口縁部内面に横位のハケメ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面暗赤褐色 普通	覆土下位 80%
第44図 6	土師器 甕	口径 19.9 底径 [6.2] 器高 28.4	底部は径の小さな平底で、体部は卵形を呈する。口縁部は強めの角度で「ハ」字に開く。	体部外面に斜位のハケメ、内面に横位のヘラナデを施す。口縁部内外面に横位のハケメを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面褐色 普通	床直 70%



SI-44
 1. 7.5YR5/6 明褐色 炭化粒少量
 2. 7.5YR4/4 褐色 炭化粒・ローム大・中少量 ローム小多量



第45図 第44号住居跡・出土遺物

第44号住居跡〔第45図、PL.20・75〕

位置 調査区ほぼ中央N・O-22・23グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.2m、短軸2.92mのやや横長の正方形を呈し、床面積は9.3㎡である。

主軸方向 N-35° -E（南側が入り口部と仮定して）。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で27cmを測る。西壁と南壁に部分的に壁溝がみられた。幅10～22cm、深さ3～5cmを測る。

床 中央に向かいやや低くなっている。四隅の壁際付近に焼土範囲がみられた。焼土はほぼ床面と同じ高さであった。

ピット 6基確認された。P4を除き径が小振りで12～22cm、深さ9～24cmを測る。P1～3は配置から支柱穴の可能性が考えられる。P4はおそらく貯蔵穴であろう。楕円形を呈し、径64cm、深さ48cmを測る。

炉 確認されなかった。

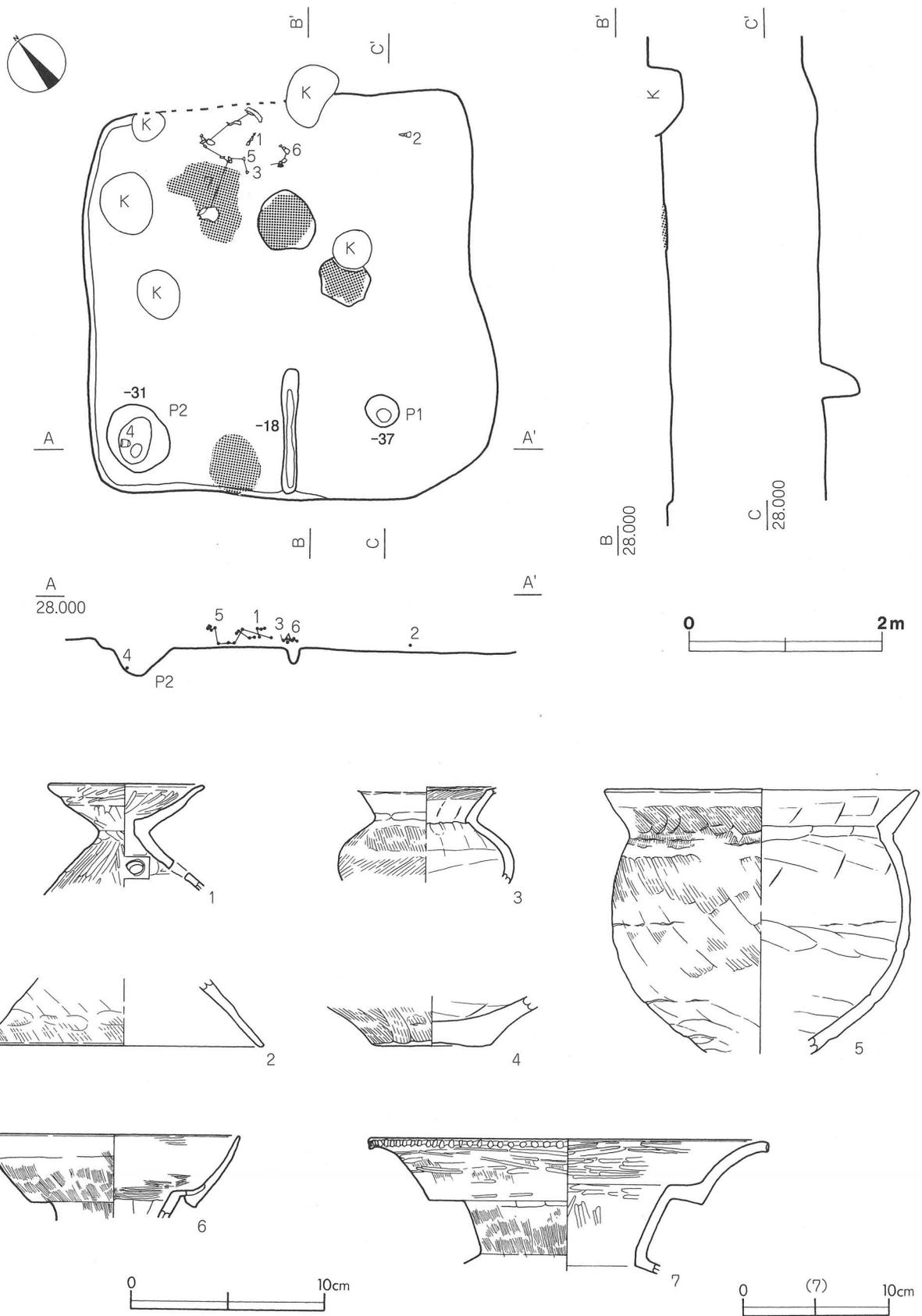
覆土 2層に分層された。主層となる第2層にローム質土が多く混入しており、埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物は住居跡の東部分に偏って発見され、いずれも床面直上もしくはそれに近い位置を保っていた。No.1～3は高坏の脚部片である。3個体とも類似の形態をしており、ラッパ状に開く裾部をもつ。No.1の脚部のみが中空で、他は裾部付近を除いて中実になっている。脚部に磨き、裾部にハケメとナデを施す点も共通である。No.4は甕である。球形の体部に「ハ」字に開く口縁部が取り付く典型的なタイプで、外面にハケメが付けられている。No.5も同じく甕であるが、こちらはやや内湾ぎみの口縁部を呈しており、器壁も厚手に作られている。内外面にやや大ぶりのハケメが施されている。

所見 住居の四隅、ほぼ床面と同じ高さで焼土が確認された。中央付近に炉と思われる施設は発見されていないが、この四隅を調理の場、採暖の場と考えるにはやや無理があることから、住居廃絶時にこの四隅で火を用いた何らかの行為を行なった可能性が考えられる。遺物の時期は、甕や高坏の器形から古墳時代前期に相当すると思われる。床面付近に土器を遺棄もしくは廃棄した後、一気に埋め戻しが行なわれたと考え、住居跡が営まれた時期も同様と判断した。

第44号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	土師器 高坏	裾部径 12.2 器高 (10.5)	脚部は中空で、筒状に細長く伸び、裾部はラッパ状に開く。	脚部外面に縦位の磨き、裾部外面に不定方向のナデを施し滑らかに整える。裾部内面にハケメに近いヘラナデを施す。	微細な長石を少量 内外面にぶい赤褐色 普通	ほぼ床直 60% (坏部を除き完存)
第45図 2	土師器 高坏	裾部径 [11.0] 器高 (9.2)	脚部は中実で長く伸びる。裾部はラッパ状に大きく開く。	脚部外面に縦位の粗いヘラナデ、裾部外面に放射状にハケメ、内面に横位のハケメ調整を施す。	微細な長石を中量 内外面にぶい橙色 普通	床直 50% (坏部と裾部若干を欠損)
第45図 3	土師器 高坏	裾部径 11.1 器高 (10.7)	脚部は下部を除き中実で、長く伸びる。裾部はラッパ状に大きく開く。	脚部外面に縦位の磨き、裾部外面にハケメを付けその上から放射状に磨きを施す。裾部内面には横位のナデを施す。	微細な長石を中量 内外面明赤褐色 普通	床直 60% (坏部と裾部若干を欠損)
第45図 4	土師器 甕	口径 16.0 底径 (4.8) 器高 21.1	底部は径の小さな平底で、体部は球状に膨らむ。口縁部は「ハ」字に大きく開く。	口縁部および体部外面に斜位のハケメ、体部下位に横位のヘラ削りを施す。口縁部内面に横位のハケメ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を 中量 内外面にぶい橙色 普通	床直～覆土下位 90% 外面口縁部煤付着
第45図 5	土師器 甕	口径 14.7 器高 (6.2)	口縁部はやや厚手で、僅かに内湾しながら「ハ」字に開く。	口縁部外面に縦位のハケメと横位のナデ、内面に横位のハケメを施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面灰黄褐色 普通	床直 30% (口縁部完存)



第46図 第48号住居跡・出土遺物

第48号住居跡〔第46図、PL.21・78〕

位置 調査区中央やや南寄りM・N-27・28グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5mに位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡であるが壁・床面を壊すような攪乱ピットが多くみられた。

規模 長軸推定3.8m、短軸3.68mのやや横長の方形を呈し、床面積推定14.0㎡である。

主軸方向 N-28° -E（南西部が入り口と仮定して）。

壁 西壁を中心とする箇所以外は遺存状態が悪い。壁は外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で12cmを測る。南西壁のほぼ中央に長方形の間仕切り状の溝があり、幅12cm前後、深さ18cmを測る。

床 概ね平坦である。間仕切り溝付近と奥壁側に焼土範囲が広がっていた。焼土の高さはほぼ床面と同じである。

ピット 2基確認された。配置からP1は柱穴、P2は貯蔵穴と考えられる。いずれも円形で、P1は径35cm、深さ37cm、P2は径70cm、深さ31cmを測る。貯蔵穴底面より小型の甕（No.4）が出土している。

炉 間仕切り溝の延長線上、奥壁寄りに円形の地床炉が2基確認された。径52・62cm、深さは2cm程であった。どちらも被熱により著しく赤化している。

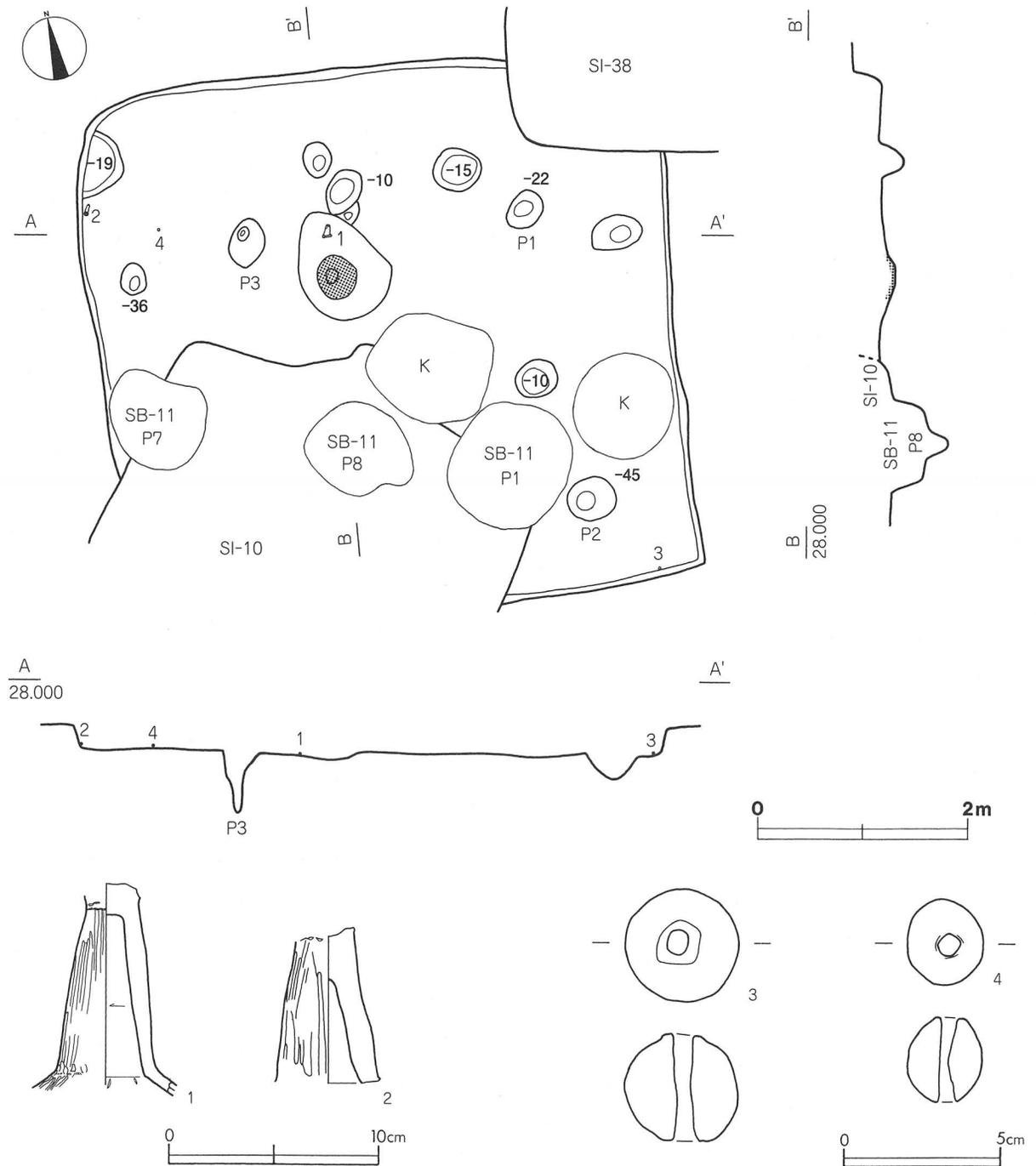
遺物 遺物はすべて土師器で、住居跡の北側部分の床面近くから覆土上位で出土している。No.1・2は器台である。坏部、脚部ともに「ハ」字に開く形態を呈している。No.3は埴で、張りの強い体部と「ハ」字に開く口縁部をもつ。外面には軽いハケメが施されている。No.4は甕の底部片で、やや上げ底を呈している。No.5は小型の甕である。底部は欠失しているが、台の付かないタイプと思われる。No.6は小型の有段口縁壺で、口縁部が内湾ぎみに強い角度で立ち上がっている。No.7は大型の有段口縁壺で、口縁部は強く外反し、口唇部には刻み目が付けられている。いずれの器種にも赤彩はみられなかった。

所見 炉のそばの焼土範囲は溜まった焼土を炉から掻き出した可能性が考えられるが、間仕切り溝付近の焼土は性格不明である。遺物の時期は、小型の器台や有段口縁の壺などの存在から、古墳時代前期と考えられる。当住居跡が営まれた時期も同様であろう。

第48号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	土師器 器台	口径 器高 8.1 (5.7)	体部・脚部ともにラッパ状に大きく開き、口縁部は小さな段をもつて外傾する。体部内底から脚部に円孔が貫通し、脚部側面には3方の透かし孔をもつ。	外面に縦位の細かな磨き、体部内面に放射状の磨き、脚部内面に横位のヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面明赤褐色 良好	覆土下～中位 60%
第46図 2	土師器 器台	裾部径 [14.2] 器高 (3.4)	脚部は裾まで直線的に「ハ」字に開く。	外面に斜方向のハケメを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面黄橙色 不良	覆土下位 裾部の30%
第46図 3	土師器 埴	器高 (4.3)	体部は横方向に強く張り出し、口縁部は「ハ」字に開いて口唇部を外反させる。	体部外面に斜位のハケメ、口縁部内面に横位のハケメを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 外面褐色、内面明褐色 良好	覆土下位 20%（頸部径の40%残存）
第46図 4	土師器 甕	底径 器高 6.2 (2.1)	甕の底部片。外底面は上げ底ぎみに窪み、体部は大きく開く。	外面に縦位のハケメを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面明灰褐色 普通	ピット2内 細片（底部は完存）

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 5	土師器 甕	口径 [16.0] 器高 (13.3)	体部は球形を呈し、底部は強く引き締まる。口縁部は「ハ」字に開く。	体部にナデに近いハケメを斜位に施す。口縁部外面にも斜位のハケメ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 外面暗灰褐色、内面褐色 普通	覆土下～上位 30% (体部径の40%残存)
第46図 6	土師器 壺	口径 13.1 器高 (4.2)	小型の壺。有段口縁を呈する。円筒状の頸部に被せるように口縁部が取り付け、丸みをもって立ち上がる。	口縁部外面に縦位のハケメ、内面に局所的に横位のハケメを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面橙色 普通	覆土下位 口縁部は80% 残存
第46図 7	土師器 壺	口径 27.6 器高 (8.6)	大型の壺。有段口縁を呈する。口縁部下位は頸部から直角に開き、角度を変えて外反しながら立ち上がる。口唇部に刻み目状のヘラ圧痕を巡らせる。	頸部外面に縦位のハケメ、内面に縦位の磨きを施す。口縁部は外面に縦位のハケメと横位の磨き、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面橙色 良好	床直～覆土中位 口縁部は70% 残存



第47図 第49号住居跡・出土遺物

第49号住居跡〔第47図、PL.21・79〕

位置 調査区南西寄り I・J-26・27グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5mに位置する。北東隅で第38号住居跡、南西隅と南壁の大半を第10号住居跡・第11号掘立柱建物跡と重複しており、プラン内に第10号住居跡のカマドが遺存していること、また、出土遺物から本住居が3軒の中で最も古いと判断した。この他攪乱により壁・床面は大きく壊されていた。重複する他2軒の時期を整理すると第10号住居跡は8世紀末葉から9世紀前葉、第38号住居跡は8世紀後葉に位置付けられる。

規模 長軸5.46m、短軸4.92mの横長の長方形を呈し、床面積は約26.9㎡である。

主軸方向 N-8° -E（南側を入り口と仮定して）。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で28cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 中央に向かい緩やかにへこんでいる。

ピット 11基確認された。規模と配置からP1～3は支柱穴と考えたい。楕円形を呈し、径38～46cm、深さ22～58cmを測る。他のピットは径30～62cm、深さ10～36cmを測る。

炉 奥壁寄りに楕円形の地床炉が1基確認された。長径1.06m、深さ14cmで底面中央にかけて緩やかに窪んでおり、被熱により赤化している。底面に貼りつくように高坏（No.1）が出土している。

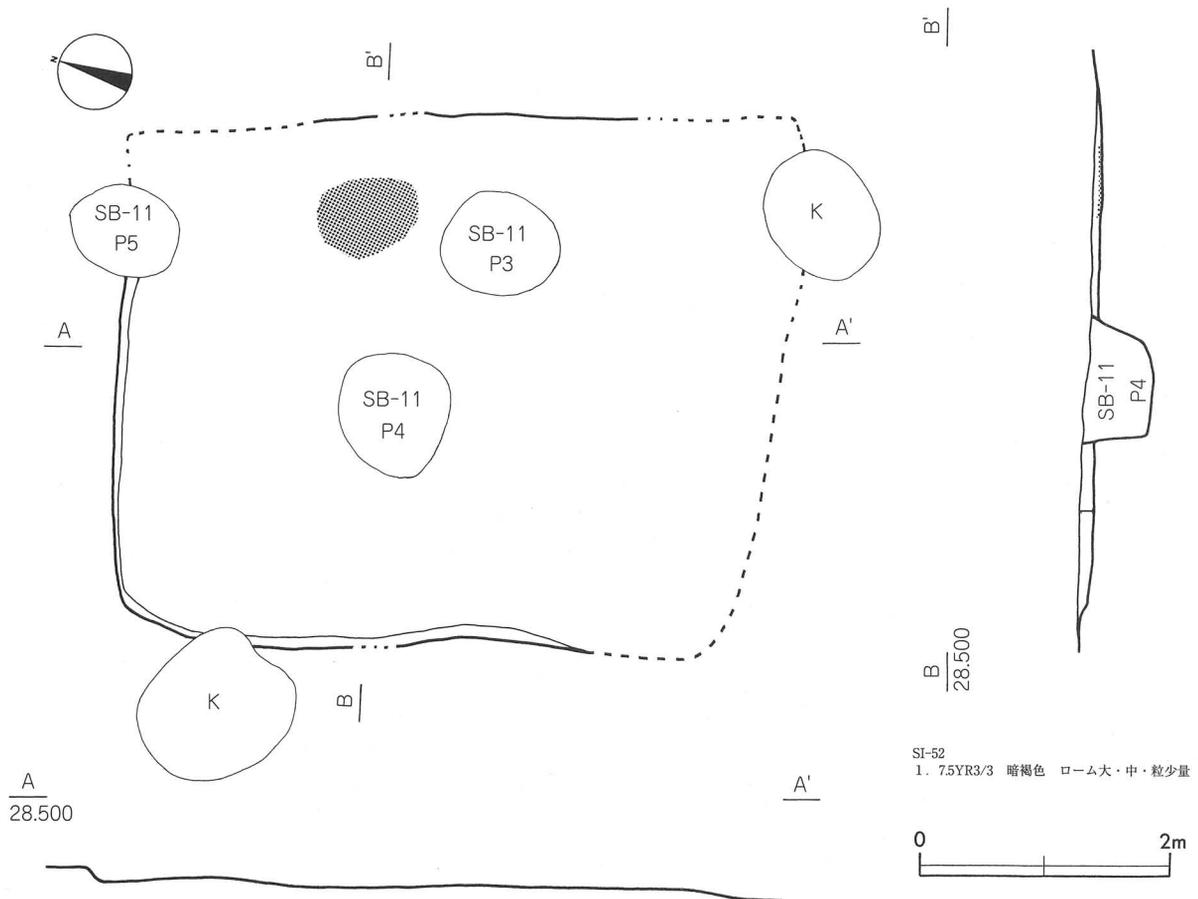
遺物 遺物のごく僅かである。床面ないし壁際から出土している。No.1・2は土師器の高坏である。どちらも円柱状の脚部で中空に作られ、中央部に僅かな張りがみられる。No.3・4は大小2種の土玉である。

所見 時期については、僅かな点数から判断するのは困難であるが、高坏脚部の形態からおおよそ古墳時代前期末と考えられる。当住居跡が営まれた時期も同様であろう。

第49号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	土師器 高坏	器高 (8.6)	柱状の脚部。中空に作られ、中位に僅かな張りがみられる。裾部は脚部から強く屈曲して開き、丸みを帯びる。	脚部外面に縦位の磨き、内面に横位のヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 良好	床直 脚部は完存
第47図 2	土師器 高坏	器高 (6.8)	柱状の脚部。やや短く厚手。中空に作られ、中位に僅かな張りがみられる。	外面に縦位の磨き、内面に横位のヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 普通	壁際床直 脚部は完存

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第47図 3	土製品 土玉	3.6	3.6	3.4	42	孔は径0.6cm。一方の孔の周縁に竹管状の圧痕あり。全体は手捏ねによる成形。	微細な長石を中量 におい黄橙色 良好	壁際床直 完形
第47図 4	土製品 土玉	2.4	2.4	2.6	15	やや小型。孔は径0.5cm。掌中で転がして成形したためか表面は滑らか。	微細な長石を中量 明褐色と黒色（黒斑） 良好	床直 完形



第48図 第52号住居跡

第52号住居跡〔第48図、PL.21〕

位置 調査区南西寄りH・I-28～30グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.0mに位置する。北側で第11号掘立柱建物跡と重複しており、土層堆積状態から本住居が古いと判断した。

規模 推定長軸5.10m、推定短軸4.15mの横長長方形を呈し、推定床面積21.2㎡である。

主軸方向 N-73° -E（入り口を西側と仮定して）。

壁 残存している箇所は外傾して立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で14cmを測る。壁溝は確認されなかった。南側は谷方向であり確認面も下がってしまったことから、南壁側を捉えることは困難であった。

床 概ね平坦である。

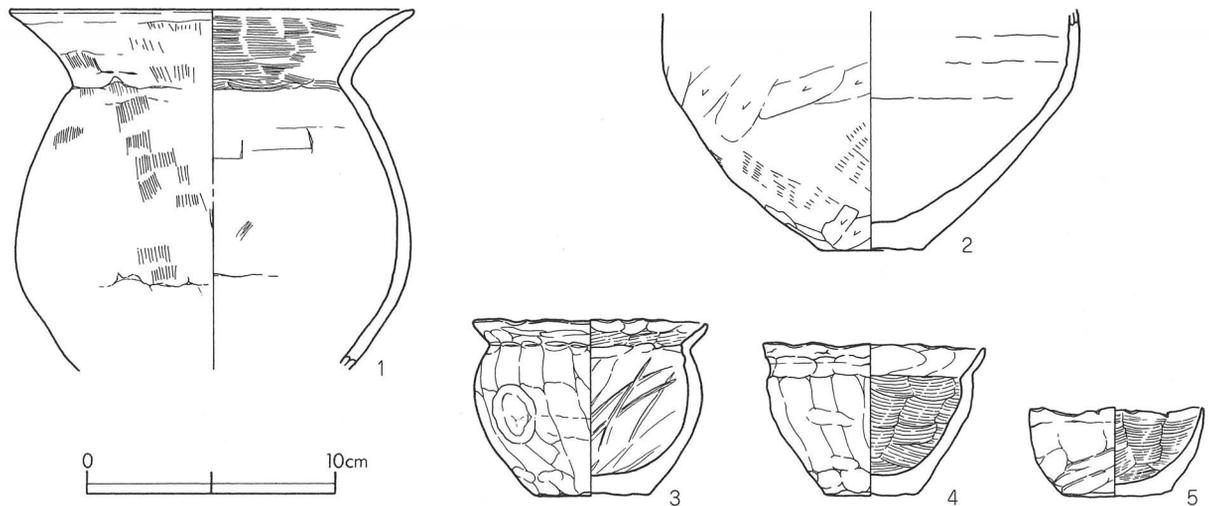
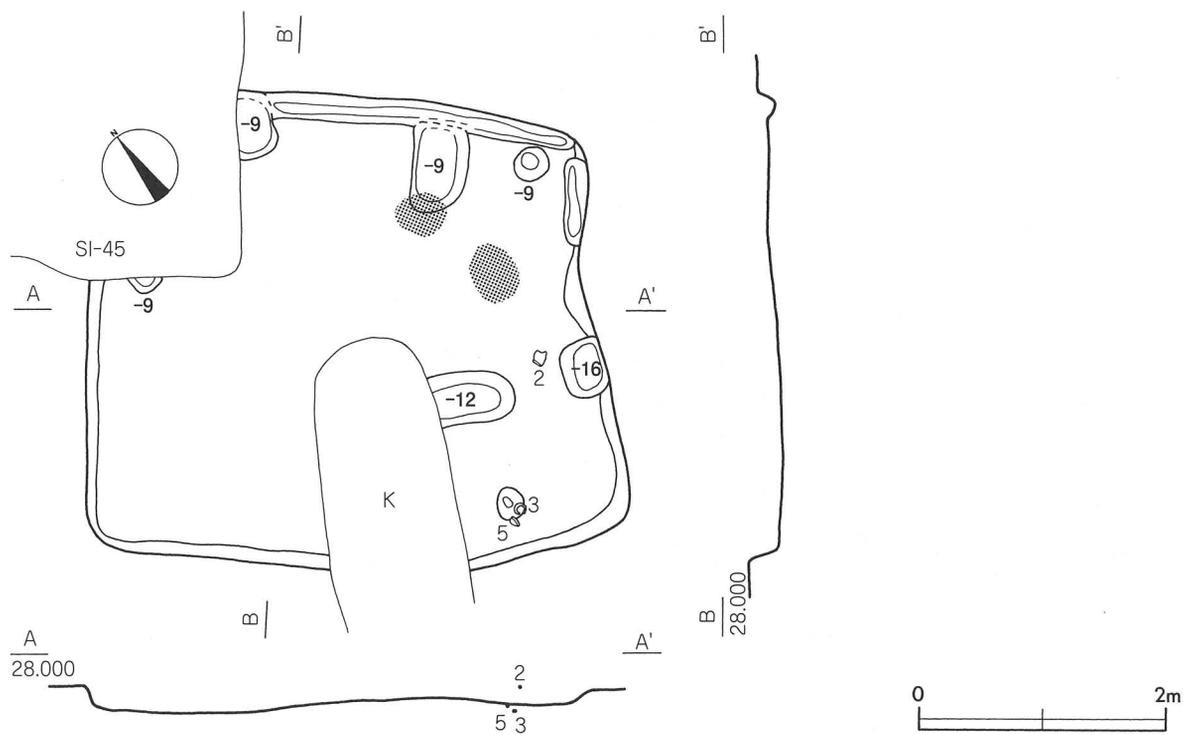
ピット 確認されなかった。

炉 東壁寄りの焼土範囲がおそらく炉であろう。床面をほとんど掘り込んでいない。

覆土 床面から確認面までが低いためか1層のみである。ローム質土の混入があり、埋め戻し土と考えられる。第11号掘立柱建物跡が住居の覆土・床面を掘り込んでいた。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物の出土はなかったものの、集落・住居跡形態とカマドが確認されなかったことから、おそらく古墳時代前期と考えられる。



第49図 第68号住居跡・出土遺物

第68号住居跡〔第49図、PL.27・93〕

位置 調査区ほぼ中央N・O-25・26グリッド、標高27.5m付近に位置している。北側で第45号住居跡と重複しており、出土遺物から本住居が古いと判断した。

規模 長軸4.16m、短軸3.42mのやや横長の方形を呈し、床面積は約14.2㎡である。

主軸方向 N-35° -E (入り口を南西側と仮定して)。住居の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で26cmを測る。北東側に壁溝が巡り、幅10～16cm、深さ2～4cmを測る。重複する住居跡や攪乱により壁が一部壊されている。

床 やや起伏を有している。東側の床面に2箇所焼土範囲がみられた。

ピット 7基確認された。円形・楕円形を呈し、壁溝に接しているピットもみられる。径24～66cm、深さ9～12cmを測る。いずれが柱穴等に相当するか判断が困難であった。

炉 焼土範囲が2箇所確認されたが掘り込みはなく、焼土の堆積も薄く、火をここで用いた痕跡としては希薄なものであった。

遺物 遺物の量は少ない。南寄りの小ピットに落ち込むかたちで甕類の破片が見ついている。No.1と2はやや小型の甕である。口縁部は「ハ」字に開き、体部中位やや下になだらかな稜をもって最大径となる形態で、外面に縦位のハケメが施される。No.3と4はミニチュアの鉢形土器、No.5は同じくミニチュアの椀ないし鉢である。作りは丁寧で、内外面にナデ調整が施されている。

所見 当住居跡は、甕の形態やハケメ調整の特徴から古墳時代前期と考えられる。

第68号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	土師器 甕	口径 [16.4] 器高 (14.3)	最大径は体部中位にあり、肩の張りは弱い。口縁部は「く」字に外反し、大きく開く。	体部外面に縦位のハケメ、口縁部内面に横位のハケメ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面橙色 普通	覆土 30% (頸部径の40%残存)
第49図 2	土師器 甕	底径 4.2 器高 (9.5)	最大径は体部下位にあるとみられ、体部下半は径の小さな底部に向かって直線的に窄まる。	体部内外面に斜位の粗いヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面橙色 普通	覆土中位 30% (底部完存)
第49図 3	土師器 小型鉢	口径 9.3 底径 4.8 器高 7.0	体部は丸みを帯びて短く、底部は平底を呈する。頸部は「く」字に屈曲し、口縁部は内湾ぎみに開く。	体部に斜位の粗いハケメ、口縁部に粗いヘラナデ、底部に不定方向の粗いナデを施す。	微細な長石を中量 内外面黒褐色 良好	南寄り小ピット内 90% 体部中央に円形の器面剥離
第49図 4	土師器 小型鉢	口径 8.8 底径 4.2 器高 5.8	頸部の締まりが弱く、全体に鉢状を呈する。口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。	体部外面および口縁部内面に軽いヘラナデ、体部内面に横位の小刻みなヘラナデを施す。	微細な長石を中量 内外面黒褐色 良好	覆土 90%
第49図 5	土師器 小型鉢	底径 4.2 器高 3.4	坏のミニチュアか。底部は平底で、体部は丸みを帯びて強く立ち上がる。口縁部は素縁で薄く延びる。	底部および体部外面に粗いナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石を多量 内外面黒褐色 良好	南寄り小ピット内 80%

第76号住居跡 [第50図、PL.30・96]

位置 調査区南東際 X・Y-39・40グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.0mに位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡であるが、攪乱により壁や壁の一部が壊されている。

規模 長軸4.64m、短軸4.24mの横長の正方形を呈し、床面積は約19.7㎡である。

主軸方向 N-35° -W。住居の四隅が概ね東西南北を向いている。

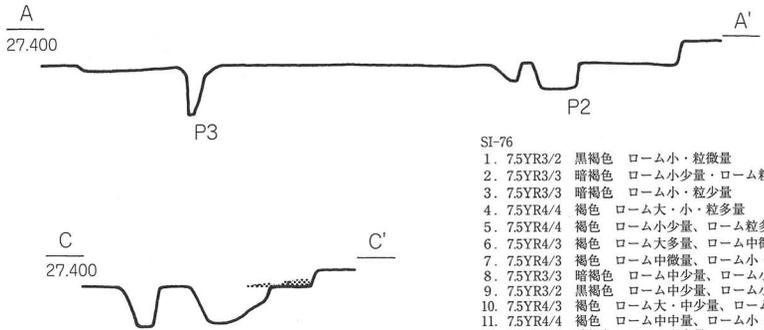
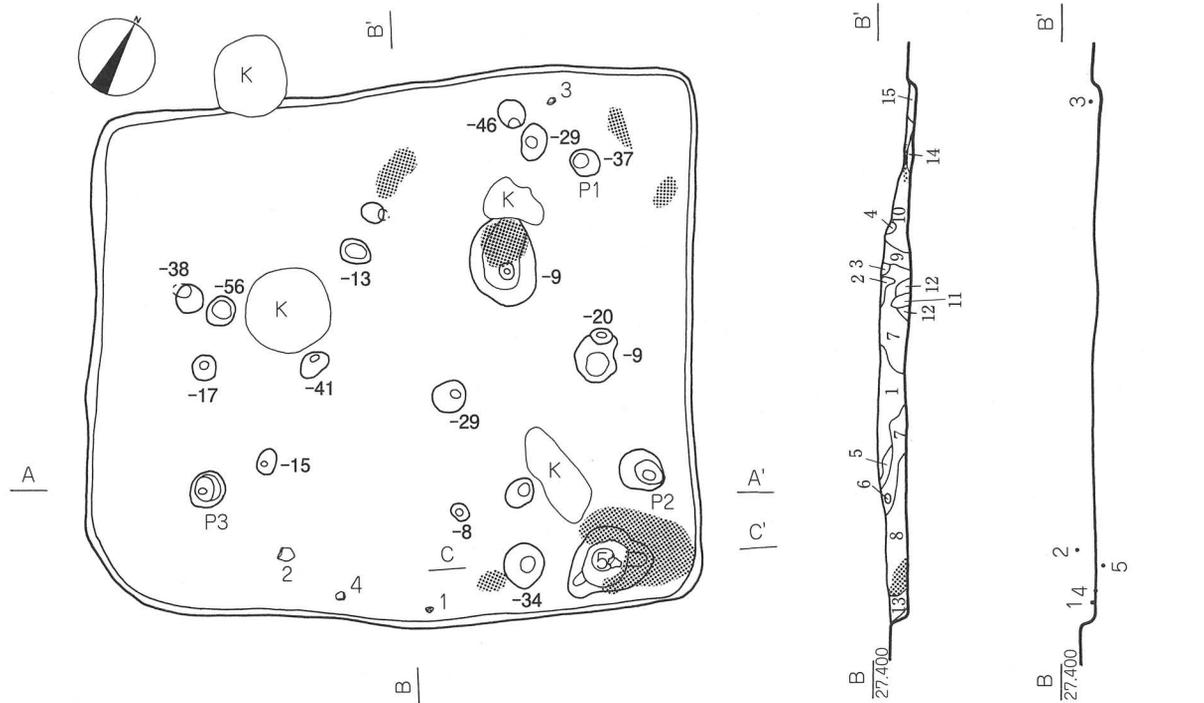
壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で24cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 やや起伏を有している。東壁寄りの床面に数箇所焼土範囲が確認された。

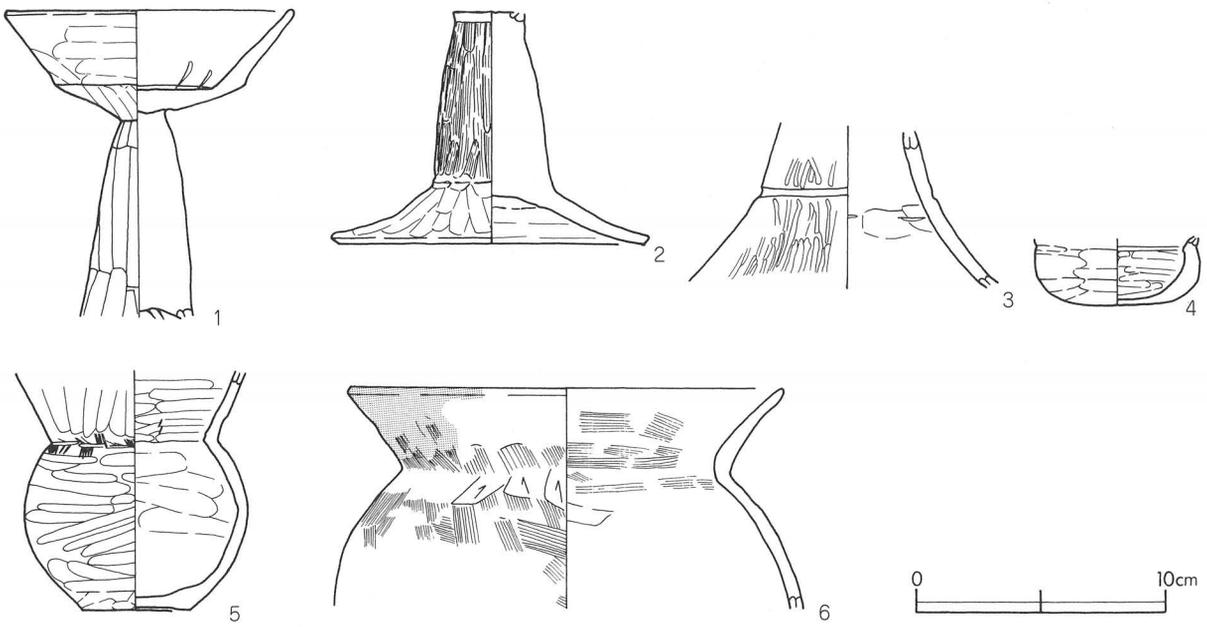
ピット 19基確認された。P1～3を主柱穴と想定したが、これらは整然と対の配置を取らず、深さで判断すると他のピットも主柱に該当する可能性がある。P1～3は円形を呈し、径30～36cm、深さ37～40cmを測る。東隅に位置するピットは貯蔵穴と考えられる。径74cm、深さ31cmを測る。

炉 奥壁やや北寄りに深さ6cm程の掘り込みを有する地床炉が1基確認された。また、掘り込みはないが奥壁寄りに焼土範囲が数箇所みられた。

覆土 15層に分層された。ローム質土の混入が斑状にみられ、埋め戻し土と考えられる。



- SI-76
- 1. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム小・粒微量
 - 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小少量・ローム粒微量
 - 3. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒少量
 - 4. 7.5YR4/4 褐色 ローム大・小・粒多量
 - 5. 7.5YR4/4 褐色 ローム小少量、ローム粒多量、粘性・しまり強
 - 6. 7.5YR4/3 褐色 ローム大少量、ローム中微量、ローム小少量、ローム粒中量、粘性強
 - 7. 7.5YR4/3 褐色 ローム中微量、ローム小・粒少量、粘性・しまり強
 - 8. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中少量、ローム小・粒微量
 - 9. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム中少量、ローム小・粒微量
 - 10. 7.5YR4/3 褐色 ローム大・中少量、ローム小微量
 - 11. 7.5YR4/4 褐色 ローム中少量、ローム小・粒多量
 - 12. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中少量、ローム小・粒微量
 - 13. 7.5YR4/3 褐色 ローム中微量、ローム小・粒少量
 - 14. 7.5YR4/4 褐色 ローム大・中多量、ローム小・粒中量
 - 15. 7.5YR4/3 褐色 ローム中~粒中量



第50図 第76号住居跡・出土遺物

遺物 北壁、南壁際の床面から覆土上位で僅かに出土している。No.1・2は高坏で、いずれも脚部は中実で円柱状を呈している。No.1は坏部下半が強く屈曲しており、直線的に口縁部に向かい開いている。No.3は高坏か壺か判別が困難であるが、上方に向かうつぼまり具合から、高坏の可能性が高いと思われる。No.4・5は埴である。No.4は第41号住居跡の埴と同様に底部は平底化しており、器形が類似していることから、口縁部の高さが体部の高さを上回る器形と推測できる。No.5の埴は底部がやや上げ底状となる平底で、体部は球胴状を呈している。体部と口縁部の高さはおそらく同程度であろう。No.6は甕である。第39号住居跡出土のNo.4のような器形と考えられる。

所見 焼土範囲は数箇所みられるが、焼失住居または廃絶時に火を用いたとするには焼土量も少なく、炭化材等の出土がみられなかった。柱穴や上屋で使用した材木が完全に燃焼したとは考えにくく、住居廃絶時に焼土を廃棄した可能性が考えられる。また、入り口部は炉と支柱穴の配置から南東側と判断した。出土遺物から当住居は古墳時代前期に営まれものであろう。

第76号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	土師器 高坏	口径 [11.4] 器高 (12.3)	脚部は中実で円柱状を呈する。口縁部は直線的に「ハ」字に開く。	脚部に縦位のヘラ削り、坏部に回転ナデを施す。	径1mmの石英を多量、白雲母を微量 内外面橙色 普通	床直 60%
第50図 2	土師器 高坏	器高 (9.3)	脚部は中実で、やや膨らみをもった円柱状を呈する。裾部は僅かに外反ぎみに大きく開く。	脚部に縦位のヘラ削り後、縦位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、褐色チャートを微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土中位 60% (脚部完存)
第50図 3	土師器 高坏?	器高 (6.5)	高坏の脚部もしくは壺の口縁部か。ラッパ状に開き、外面中位に一条の沈線が付く。	外面に縦位の細かな磨き、内面に横位のヘラ削りとヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面橙色 普通	覆土下位 30%? (一周完存) 割れ口(図の下側)に磨耗
第50図 4	土師器 埴	器高 (2.6)	体部は碗状に浅く、底部は平底化している。	外面に横位のヘラ削りと粗い磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面黒褐色 普通	床直 30% (体部完存)
第50図 5	土師器 埴	底径 4.2 器高 (9.4)	体部はやや縦長の球形、底部は小さな平底を呈する。口縁部は強い角度で「ハ」字に開く。	体部外面に横位の磨き、底部に方向不定の磨き、口縁部外面に縦位のハケメと磨き、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を中量、褐色チャート粒を微量 内外面にぶい黄褐色 良好	南東隅貯蔵穴内 70% (口縁部のみ欠)
第50図 6	土師器 甕	口径 17.2 器高 (8.7)	体部は上位まで丸みが及び、口縁部は「く」字に屈曲して大きく開き、口唇部は素縁でまとまる。	体部外面および口縁部下位に縦・斜位のハケメ、口縁部内面に横位のハケメ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土 30% (口径の90%残存) 外面口縁部煤付着

第87号住居跡 [第51・52図、PL.33・100]

位置 調査区南西壁近くD・E-29・30グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.0～27.5m間に位置している。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

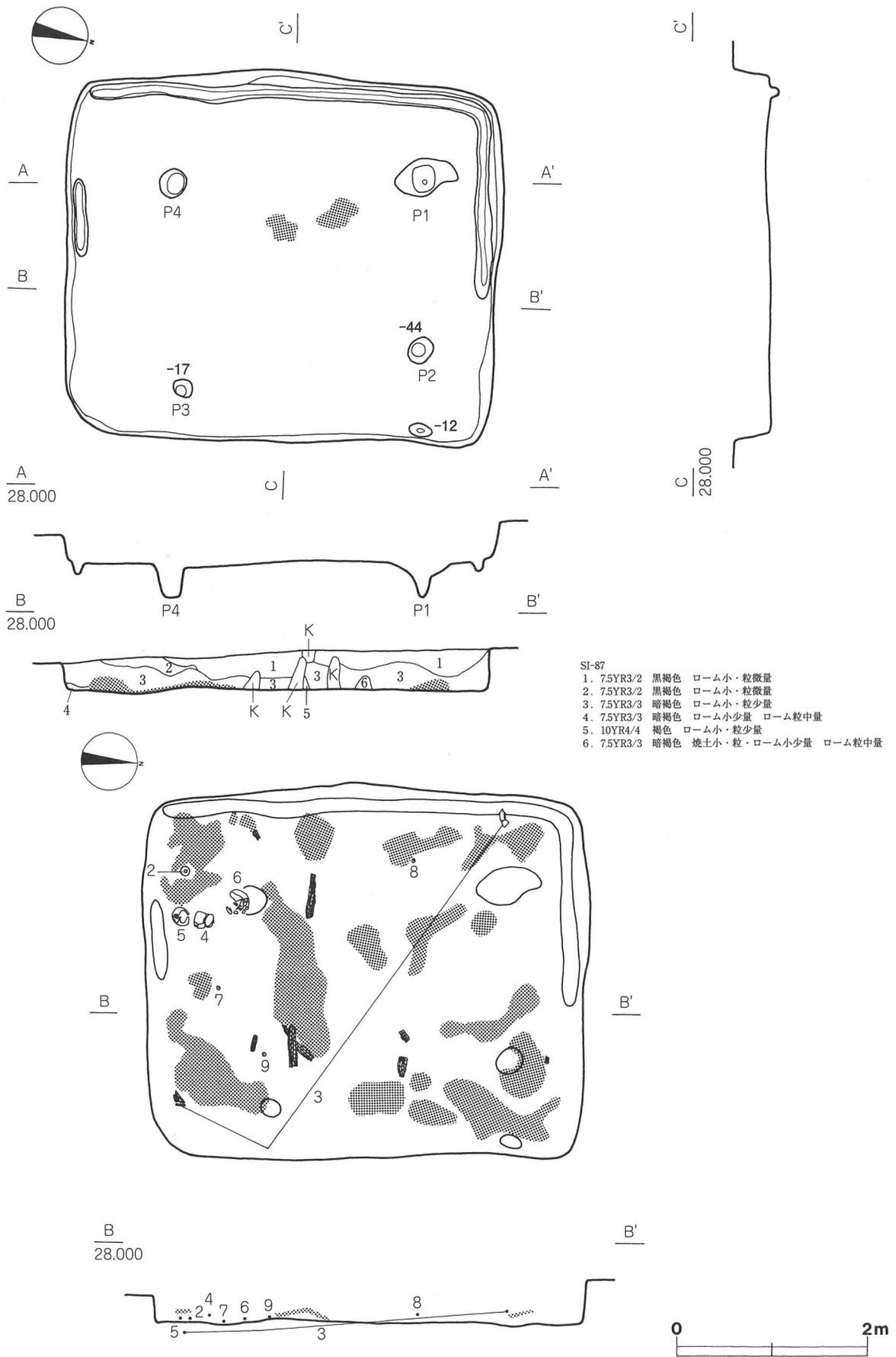
規模 長軸4.38m、短軸3.48mの横長の長方形を呈し、床面積は約15.2㎡である。

主軸方向 N-97° -E。主軸は東西方向を向いている。

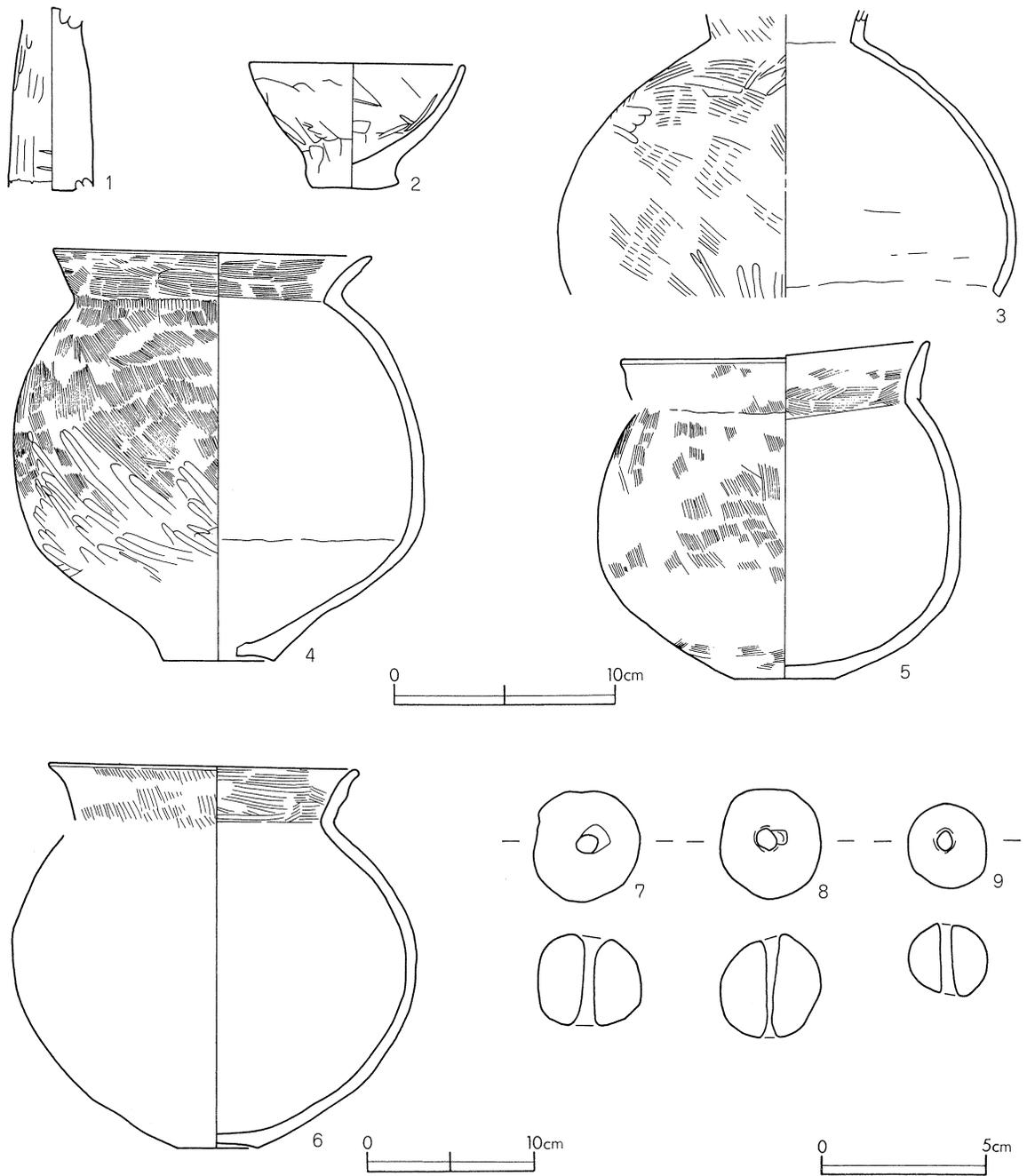
壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で50cmを測る。壁溝は東壁から北壁の半分程までと南壁の一部で巡っており、幅12～18cm、深さ3～10cmを測る。

床 やや起伏を有している。床面上広範囲に焼土範囲がみられ、部分的に炭化材も確認されている。焼土は堆積の厚さに幅があり、床面直上数cmから15cm程と様々であった。

ピット 5基確認された。配置と規模からP1～4は支柱穴に相当すると思われる。径は22～68cm、深さは17～85cmを測る。



第51図 第87号住居跡遺物・焼土出土状況



第52図 第87号住居跡出土遺物

炉 中央やや奥壁寄り、P1とP2の間に焼土範囲がみられた。不整形を呈する掘り込みのない地床炉であろう。

覆土 6層に分層された。床面直上より焼土・炭化材が出土しており、廃絶に伴い火を用いたか、焼失後に、埋め戻したと考えられる。

遺物 南側の焼土上面より多く出土している。No.1は中実の高坏脚部である。No.2は小型甕の下半または椀であろう。上部の割れ口が整えられており、甕欠損後の再利用品の可能性が考えられる。No.3は壺、No.4～6は甕である。No.4は胴部下半に屈曲部を有しており、この付近は底部にかけてハケメを磨きにより消している。また、底部には焼成後穿孔が認められた。No.7～9は完形の土玉である。

所見 本住居跡は以上の観察から、能動的あるいは受動的に廃絶前後に火が介在し、その後に土器の廃棄を行ったと考えられる。また、入り口部は炉と支柱穴の配置から東側と判断した。遺物は古墳時代前期に相当し、廃絶直後の廃棄行為から住居が営まれた時期もほぼ同様となる。

第87号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 1	土師器 高坏	器高 (8.1)	高坏脚部の軸に当る箇所。内面は剥り貫かれていない。	外面は縦位のヘラ磨き。	長石・石英粒、褐色微砂微量 明赤褐色 普通	覆土 60%
第52図 2	土師器 碗	口径 底径 器高 9.7 3.9 5.6	肉厚で底径の小さな底部から外傾して立ち上がる。体部は薄い。	体部は幅約1cmの粘土紐による輪積成形。外面ナデで底部寄り上下にナデる。内面一部ヘラナデ圧痕。	長石・石英粉粒少量 橙色 普通	床直 90%
第52図 3	土師器 壺	最大径 器高 20.3 (12.6)	最大径を胴部中央にもち、球状にすぼまる体部。混入物は量の割に目立たない。	体部は約1.5cmの粘土紐輪積成形。外面はヘラ磨きとナデを斜位に施す。頸部は横ナデの上、縦位のヘラ磨き。内面はナデるが、粘土紐圧痕が残る。	長石・石英多量 橙色 普通	床直～覆土下位 30%
第52図 4	土師器 甕	口径 底径 器高 穿孔 14.3 5.0 18.3 1.6	小底径の底部から僅かに上方に立ち上がり、球状を呈す。最大径は体部中位下半。口縁部は短く外傾して、立ち上がる。底面に穿孔。	外面体部中位以下はナデ。体部上半はハケメ。口縁部はハケメの上横ナデ。内面はナデ。口縁部内面のみハケメ。	長石・石英粒微量 赤灰色 普通	覆土下位 外面にスス附着 100%
第52図 5	土師器 甕	口径 底径 器高 13.8 4.5 14.5	平底の底部から球状に立ち上がり、口縁部は短く、外傾する。体部はややバランスを欠き、不整形を呈す。	体部下半はハケメの上ナデ。上半はハケメ。口縁部外面はハケメの上横ナデ、内面はハケメ。体部内面はナデ。	長石・石英粒多量 にぶい褐色 不良	床直 外面二次焼成 80%
第52図 6	土師器 甕	口径 底径 器高 18.6 4.8 22.7	体部は僅かに上底を呈し、球状に立ち上がる。最大傾は胴部中位。口縁部は直立し、外反する。	体部外面丹念なナデ。上半は砂粒から判断して、右から左へ調整する。口縁部内面は横ハケメ。外面はハケメの上横ナデ。	長石・石英粒少量 内外面明赤褐色 普通	床直 外面下半にスス 70%

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第52図 7	土製品 土玉	3.0	3.5	3.1	28	不整球形を呈する完形の土錘。	長石・雲母粉微量 黒褐色 普通	床直 100%
第52図 8	土製品 土玉	3.0	3.4	3.1	28	球形の土錘。扁平な面が1箇所ある。	長石・石英粉微量 褐灰色 普通	覆土下位 100%
第52図 9	土製品 土玉	2.5	2.5	2.7	12	小振りで球形の土錘。	長石粉微量 良土 橙色 普通	床直 100%

第91号住居跡 [第53図、PL.34]

位置 調査区南寄りQ・R-35・36グリッド、南の谷に向かって傾斜する標高25.0mに位置する。南側で第7号土坑と重複しており、おそらく本住居が古いと考えるが遺物が出土していないため推測の域を出ない。

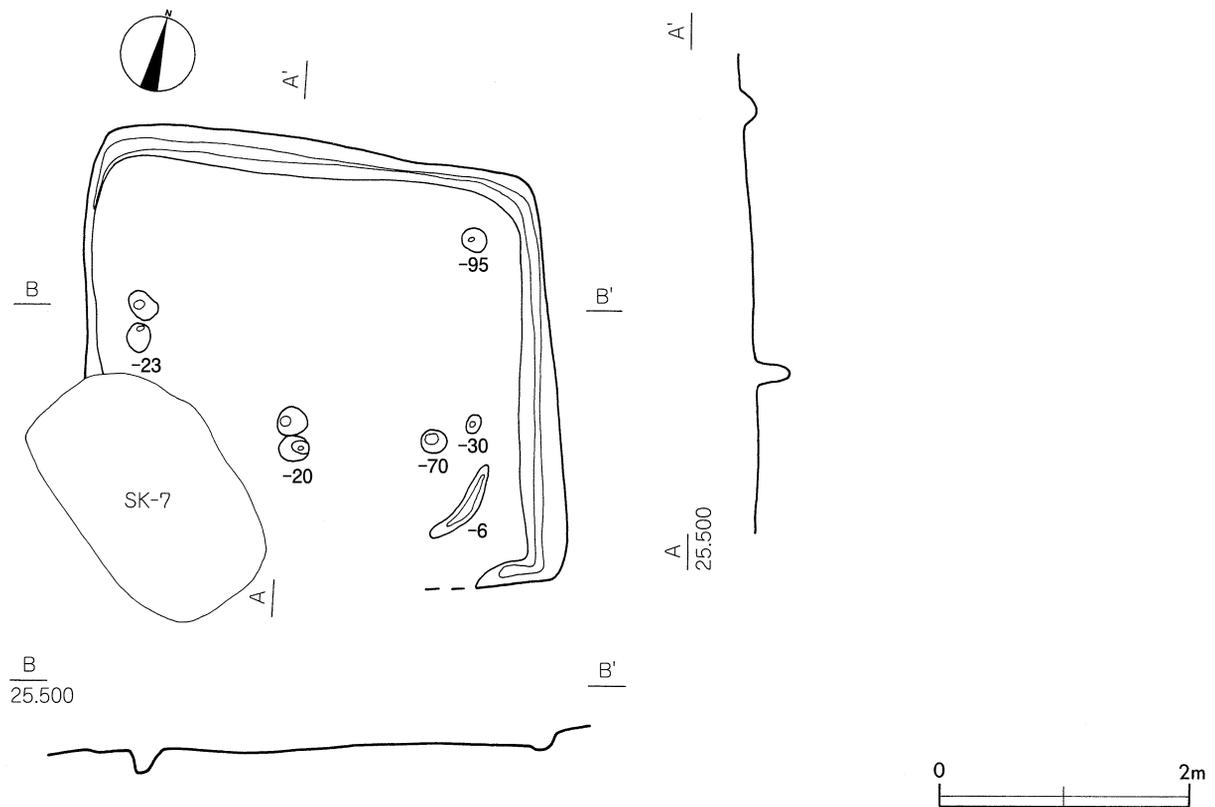
規模 長軸3.4m、短軸3.1mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約10.5㎡である。

主軸方向 N-22° -W (南側が入り口と仮定して)。

壁 外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で20cmを測る。壁溝は北壁から東壁にかけて巡っていた。幅8～18cm、深さ2～11cmを測る。南側壁は斜面の下方に向かうため確認されなかったと思われる。南隅は床面共々第7号土坑により壊されている。

床 やや起伏を有している。

ピット ピットは7基、溝状を呈するものが1基確認された。ピットはいずれも円形を呈し、径15～25cm、深さ18～30cmを測る。北壁隅と東壁の中央付近に他より著しく深いピットがみられた。北壁隅



第53図 第91号住居跡

は95cm、東壁側は70cmを測る。溝状の掘り込みは深さ6cmである。

カマド・炉 いずれも確認されなかった。

遺物 出土していない。

所見 遺物が出土していないことから、時期判定は困難であるが、カマドがあったと仮定して、カマドの位置から推測してみたい。本住居は北・東壁にはカマドの痕跡がみられないことから西壁もしくは南壁に位置すると仮定する。すると、他の斜面中に立地する第84・89・90号住居跡のカマド位置と比較した場合、全くカマド方向が異なってしまう結果となる。この3軒はいずれも斜面に対しておよそ45度下方の位置に入口を設けているが、本住居の場合はここにカマドが位置してしまうこととなる。このことから、おそらくカマドは存在せず、炉址を用いた時期、古墳時代前期の住居跡と推測することができる。

4. 古墳時代後期

ここでは古墳時代後期の竪穴住居跡について触れていくが、7世紀末葉から8世紀初頭にかけては次節で扱うこととしたい。この時期は古墳時代後期に相当するのだが、土器の様相はむしろ、続く奈良時代への連続性が見られるため、これらを除く12軒を後期として後述していくこととする。後期になると住居軒数は大きく変わらないものの、前時代の住居配置より台地全体に拡散していく傾向がみられる。前節と同様に調査時の住居跡番号順に記載を行なっていくこととしたい。

第7号住居跡〔第54～57図、PL.8・54・55〕

位置 調査区北端F・G-3～5グリッド、標高27.0m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独住居跡である。

規模 長軸5.14m、短軸4.28mの長方形を呈する。東壁側は丸みを帯び、曲線的であった。床面積は約22.0㎡である。

主軸方向 N-45°-W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で57cmである。壁溝は西側のみで確認され、幅は14cm前後、深さは2～6cmを測る。東壁の一部は攪乱により壊されていた。

床 中央にかけてやや低くなっている。カマド西側に小規模の粘土範囲が確認された。また、東側床面は攪乱により一部壊されていた。

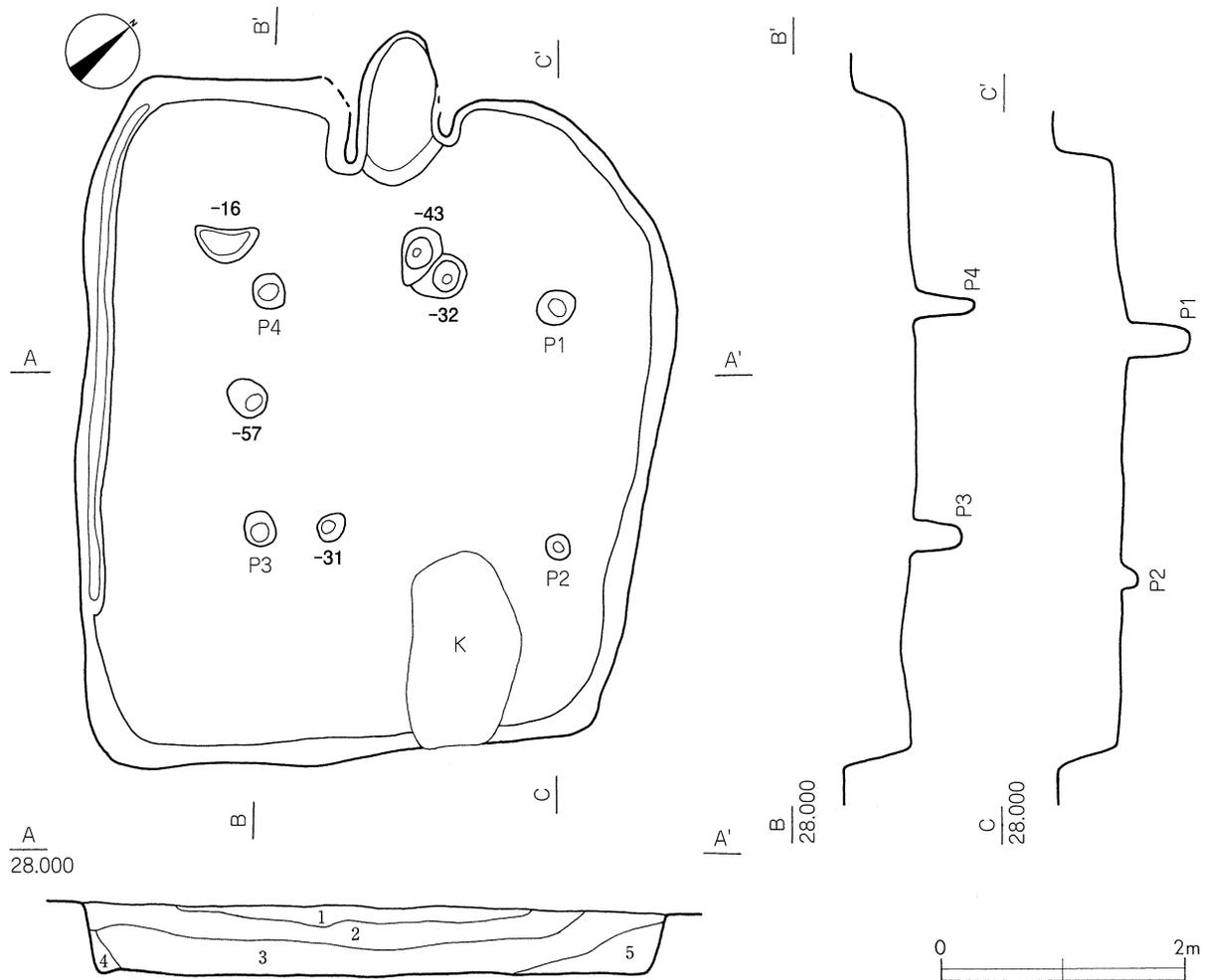
ピット 9基確認された。規模と配置からP1～4を支柱穴と判断したが、P2は浅く疑問が残る。円形を呈し、径21～34cm、深さ11～53cmを測る。他の5基は楕円形・不整形を呈し、長径26～53cm、深さ16～57cmを測る。P3・P4間に位置するピットは他に比べて深く、配置からも補助柱穴、もしくは入り口施設に伴うピットの可能性が考えられる。入り口は南東もしくは南西側となろう。

カマド 北西壁中央に位置する。壁下場から約70cm壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。燃焼部からカマド上場（以下ここを全長と呼称する）まで1.20m、袖の長さは左右非対称で焚き口幅は約50cm、燃焼部は床面より約6cm掘り込まれており、奥壁にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。遺物はカマド内から甕や甌が倒置した状態で、また西側袖脇には坏が3点重ねられた状態で出土しており、使用時を彷彿とさせる様相であった。

覆土 5層に分層された。第4・5層はおそらく壁崩落土で、自然埋没と思われる。

遺物 遺物はカマド燃焼部および袖付近に集中して確認されている。カマドには甕や甌がかけられ、袖付近には坏類が重ね置きされた状態で見つかっており（No.4・6・7）、当時の使用状況を復元することができる。また、P1付近では、床面から僅かに浮いた位置ではあるが、坏や壺の一群が集め置いた状態で見つっている。さらにP3付近にも、小型甕や紡錘車が投棄された状態で出土している。これらの出土状態は住居内の空間利用を反映していると思われ、出土位置に若干の高低差はあれ、ほとんど同時期の一括遺物と認定できる範囲にあると言える。No.10の椀のように床面直上から見つかった破片と覆土上層の破片が接合している極端なケースがあるが、他はおおむね覆土下位からの出土である。

遺物は土師器の坏、椀、甕、甌、土製品では勾玉、紡錘車、カマドの支脚などである。No.1～9はすべて丸底の坏で、おおむね次の2種が存在する。①体部と口縁部の境に稜をもち断面三角形の口縁部が内傾するもの（No.1～5）、②体部と口縁部の境に段がつき、口縁部が高く直立するもの（No.6～9）であり、両者の割合はほぼ半々で、全てに黒色処理が施されている。No.10は椀である。坏と同様

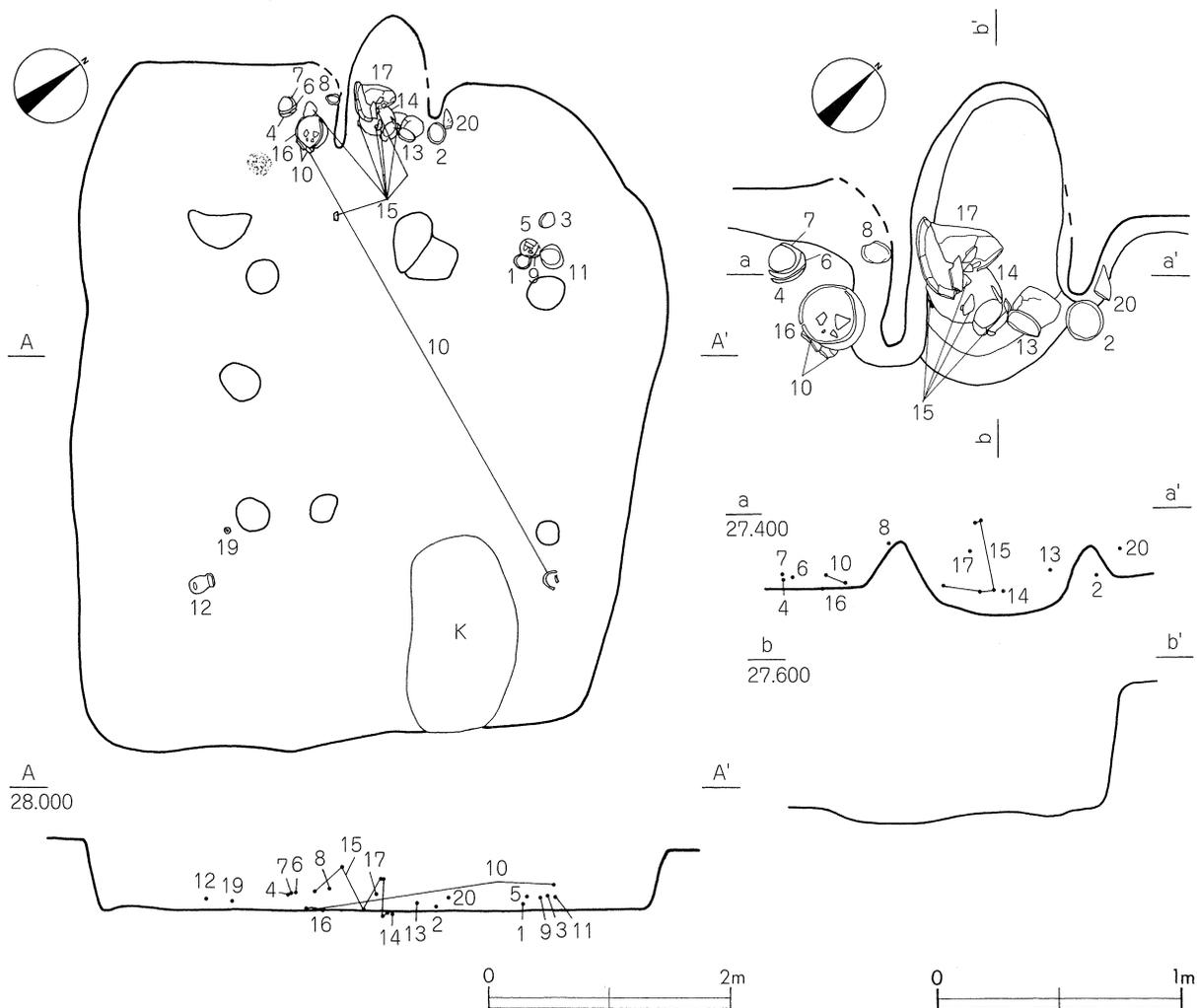


- SI-7
 1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒中量
 2. 7.5YR4/6 褐色 ローム中～粒多量
 3. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大少量 ローム小中量 ローム粒・黒色土粒多量
 4. 7.5YR5/6 明褐色 ローム小中量 黒色土粒少量
 5. 7.5YR5/6 明褐色 ローム粒多量 黒色土粒微量

第54図 第7号住居跡

の作りであるが、さらに深い体部をもち、黒色処理が施されている。No.11は小型の壺である。作りは坏・碗と類似するが、窄まった口縁と球形の体部をもつ。No.12～16は甕である。短胴広口のもの（No.12・13）と長胴で口縁が「く」字に屈曲するもの（No.14・15）、球胴を呈するもの（No.16）などの3種が存在する。No.17は甑で、ラッパ状に開く口縁をもつ。No.18は土製勾玉の残欠、No.19は土製紡錘車、No.20はカマド内に用いる支脚である。

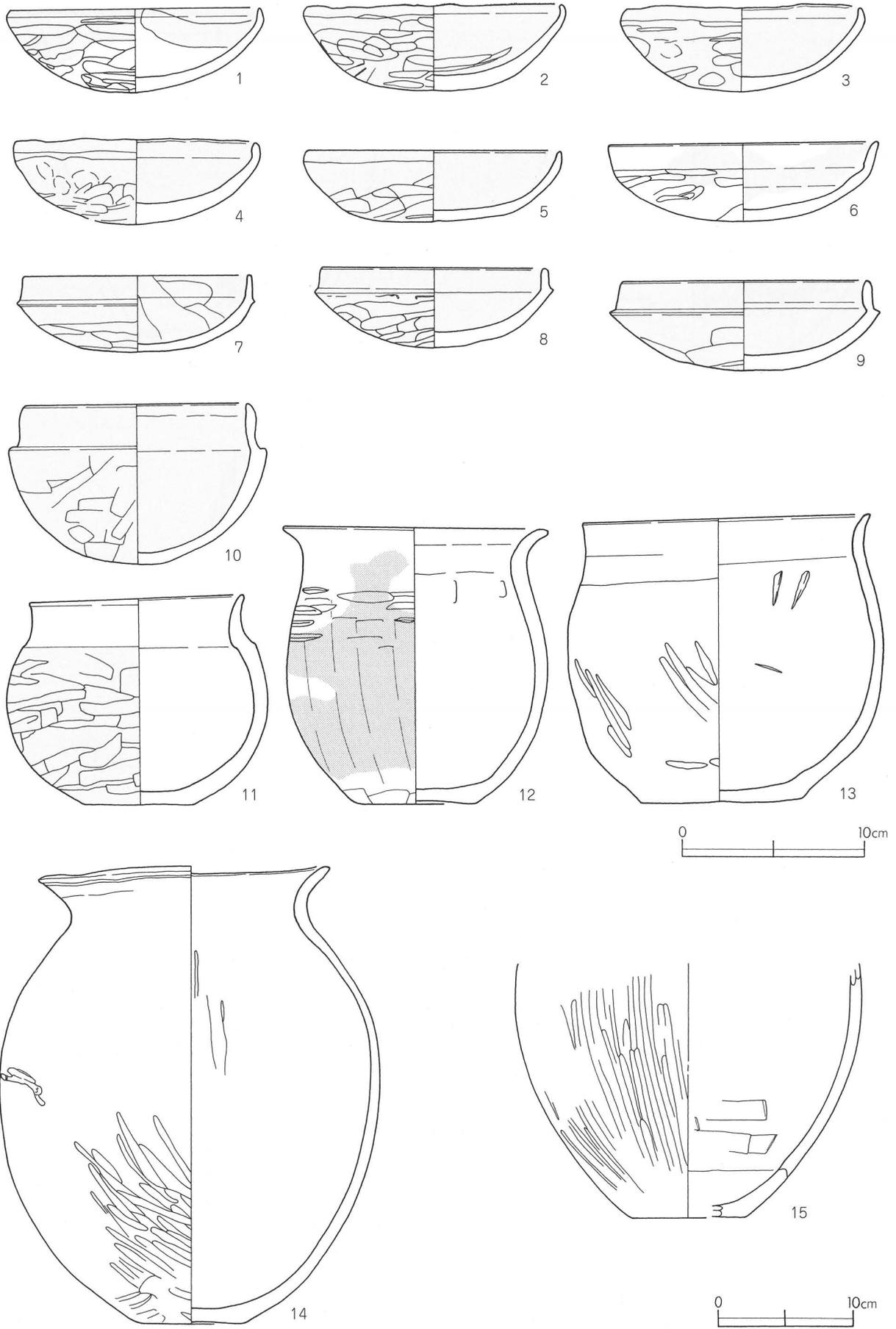
所見 当住居跡の年代は須恵器坏の形態を模していると思われる②（No.6～9）の坏から、古墳時代後期、およそ7世紀前半に営まれたものと考えられることができる。



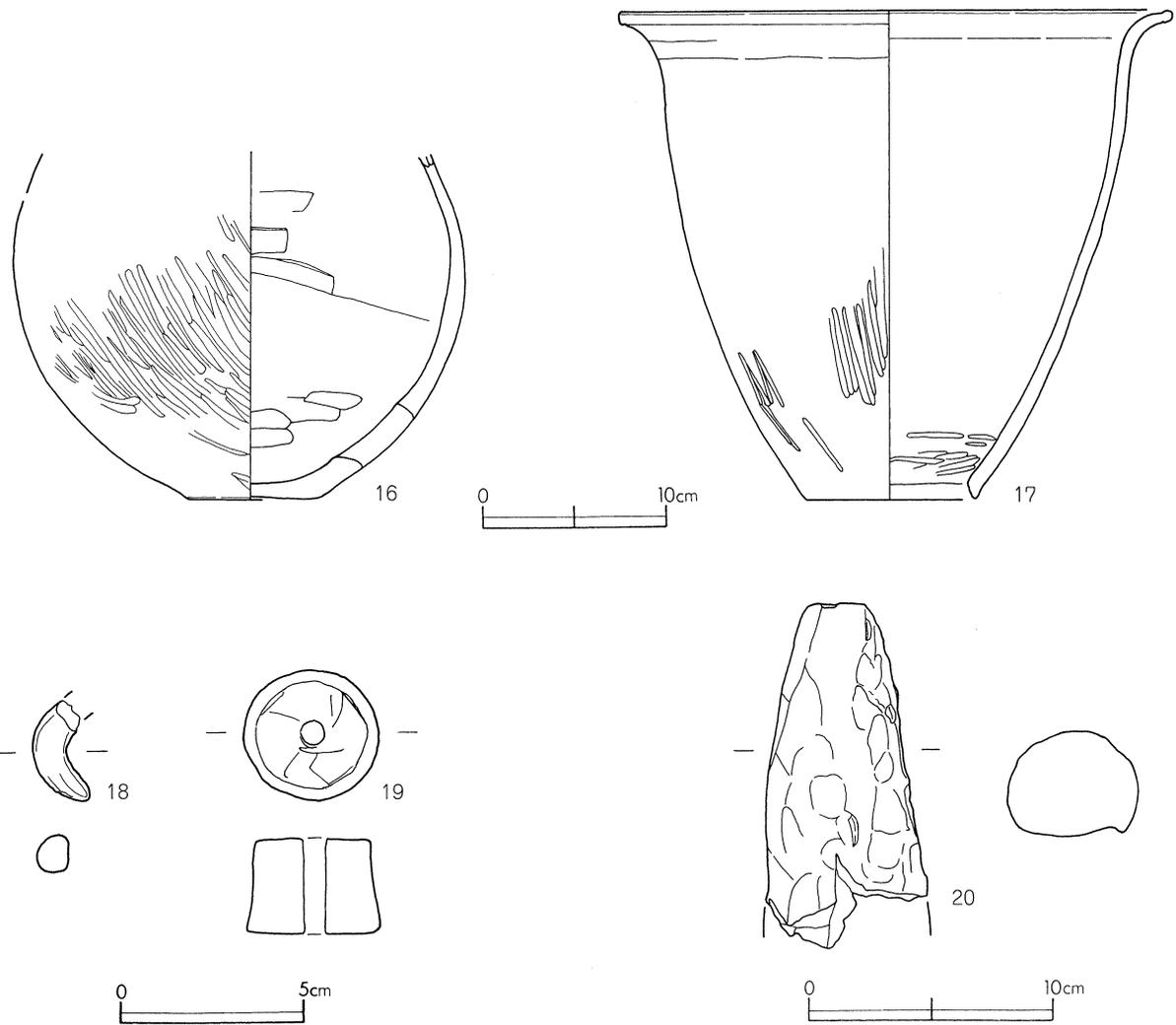
第55図 第7号住居跡遺物出土状況

第7号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	土師器 坏	口径 器高 13.6 4.5	底部は丸底で口縁付近まで曲線が連続する。口縁部は稜をもって小さく内傾する。	底部は多方向からのヘラ削り、体部・口縁部外面に横位の磨き、内面は回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 外面灰黄褐色、内面 にぶい黄橙色 普通	覆土下位 ほぼ完形 内外面黒色処理 (部分的)
第56図 2	土師器 坏	口径 器高 13.8 4.5	底部から口縁付近まで一連の曲線を描き丸底を呈する。口縁部は稜をもって小さく内傾し、断面は三角形を呈する。	底部中央は一方方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削り後軽い磨きを施す。口縁部および内面は回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英・金雲母を少量 内外面にぶい黄橙色と黒色 普通	カマド袖部 ほぼ完形 内外面黒色処理
第56図 3	土師器 坏	口径 器高 12.9 4.5	底部は丸底で口縁付近まで曲線が連続する。口縁部は稜をもって内傾し、断面は三角形を呈する。	底部中央は一方方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削り、口縁部および内面は回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面灰黄褐色と黒色 普通	覆土中位 完形 内外面黒色処理
第56図 4	土師器 坏	口径 器高 13.1 4.5	器壁が厚く鈍重である。底部は丸底で、口縁付近まで曲線が連続する。口縁部は鈍い稜をもって直立する。	底部は方向不定のヘラ削り後ヘラナデを施す。体部外面は横位のヘラ削りと磨きをまばらに行い、指頭圧痕を残す。口縁部と内面には回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面黒色 普通	床直 完形 内外面黒色処理
第56図 5	土師器 坏	口径 器高 13.8 3.9	底部は小さな平坦面をもつが、口縁付近まで一連の曲線で連続する。口縁部は稜をもって直立し、断面は三角形を呈する。	底部は多方向からのヘラ削り、体部外面は横位のヘラ削りと磨き、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面灰黄褐色と黒色 普通	覆土下位 ほぼ完形 内外面黒色処理
第56図 6	土師器 坏	口径 器高 14.8 4.2	底部は丸底で口縁付近まで曲線が連続する。口縁部は内面に稜をもち外傾しながら立ち上がる。	底部中央は一方方向からのヘラ削り、底部周縁および体部は反時計回り(横位)の手持ちヘラ削りを施す。口縁部および内面は回転ナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量 内外面灰黄白色 普通	床直 完形 内外面黒色処理 (部分的)
第56図 7	土師器 坏	口径 器高 12.4 4.1	底部は丸底で体部まで曲線が連続する。口縁部は体部との境に強い稜と段をもち、垂直に立ち上がる。	底部は縦横方向のヘラ削り、体部外面は横位のヘラ削りと部分的な磨き、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量 内外面黒色 普通	床直 完形 内外面黒色処理



第56图 第7号住居跡出土遺物 (1)



第57図 第7号住居跡出土遺物(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 8	土師器 坏	口径 12.3 器高 4.3	底部は丸底で体部まで曲線が連続する。口縁部は体部との境に強い稜と段をもち、垂直に立ち上がる。	底部は縦横方向のヘラ削り、体部外面は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 普通	カマド袖部 95% 内外面黒色処理(希薄)
第56図 9	土師器 坏	口径 13.4 器高 4.8	底部は丸底で体部まで曲線が連続する。口縁部は体部との境に強い稜と段をもち、垂直に大きく立ち上がる。	底部は一方方向からのヘラ削り、体部外面は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面黄褐色と黒色 普通	覆土中位 完形 内外面黒色処理
第56図 10	土師器 碗	口径 12.2 器高 8.6	坏と同様の作りであるが、非常に深い器形である。底部から体部にかけては半球状を呈し、口縁部は稜と段をもって強く直立する。	底部は一方方向からのヘラ削り、体部外面は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量 内外面灰黄褐色と黒色 普通	カマド袖部 ほぼ完形 内外面黒色処理
第56図 11	土師器 小型壺	口径 11.7 底径 6.0 器高 11.2	作りは坏や碗に等しいが、より深めで口縁を締る器形。底部は小さな平底で、体部は球形を呈する。口縁部は体部との境に強い稜をもち、外反気味に大きく立ち上がる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部外面は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土中位 完形 外面下半黒色処理(希薄)
第56図 12	土師器 甕	口径 14.3 底径 6.6 器高 15.0	小型の甕。底部は平底、体部は丸みをもって強く立ち上がる。最大径は体部下位にあり、やや下膨れを呈す。頸部の締りは弱く、口縁部は強く外半する。	底部は一方方向からのヘラ削り、体部下位に横位、体部中位から上位にかけては縦位のヘラ削りを施す。口縁部は回転ナデ、内面は横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、褐色チャート・骨針を微量 内外面にぶい褐色 普通	覆土下位 ほぼ完形 体部外面に煤附着
第56図 13	土師器 甕	口径 15.7 底径 8.6 器高 15.6	小型の甕。底部は径が大きく、体部は不整の球形を呈する。口縁部は体部との境にかすかな稜をもち、外反ぎみに強く立ち上がる。	底部は不定方向のヘラ削り、体部下位に横位のヘラ削りを施す。体部中位以下に斜方向の粗い磨き、口縁部に回転ナデを施す。	径1~3mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面浅黄色 普通	カマド燃焼部 ほぼ完形 器形に大きな歪み

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 14	土師器 甕	口径 21.2 底径 7.6 器高 33.4	底部は平底で、体部は丸みをもって長く伸びる。最大径は体部中位にあり、肩から口縁にかけて緩やかな「く」字を描く。口縁部は外反ぎみに大きく開く。	底部をナデによって平坦に整え、体部中位以下に斜方向の磨きを施す。口縁部は内面にヘラ削り後回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量 内外面におい黄橙色普通	カマド燃焼部 ほぼ完形
第56図 15	土師器 甕	底径 [8.4] 器高 (18.4)	甕の体部下位片。底部は比較的大きく、体部は丸みをもって大きく立ち上がる。	底部はナデもしくは磨きによって平坦に調整される。体部外面に縦位の細かな磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 外面灰褐色、内面におい褐色不良	カマド燃焼部 30%
第57図 16	土師器 甕	底径 7.2 器高 (18.6)	甕の体部下位片。器壁が厚く重い。平底の底部から球形の体部が張り出しながら立ち上がる。	底部に軽いナデ、体部外面に斜方向の細かな磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面におい黄橙色普通	床直 40%
第57図 17	土師器 甕	口径 30.1 底径 9.3 器高 26.3	底部孔は径9cm、体部は僅かに丸みを帯び外傾しながら大きく立ち上がる。口縁部は水平方向に強く外反する。	底部はヘラで滑らかに開削される。体部外面に縦位の磨き、内面は上位をヘラナデ後、下位に縦横の磨きを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面におい黄橙色普通	カマド燃焼部 95%

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第57図 18	土製品 勾玉	(2.7)	0.9	1.0	(3.0)	頭部を欠失した土製勾玉。指頭による成形で、腹部をやや平坦に作る。	微細な長石を少量 におい橙色 普通	覆土 70%
第57図 19	土製品 紡錘車	3.6	3.7	2.4	36.9	円筒状を呈する土製紡錘車。軸孔径は0.7cm。上下面をヘラ削りし、側面は縦位の削り後に磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 オリーブ黒色 普通	覆土下位 完形
第57図 20	土製品 支脚	(14.0)	(6.6)	(4.3)	(350)	粘土塊を手捏ねで長円錐状に成形したもの。指圧痕が多数付く。	ごく微細な長石・白雲母をごく微量 浅黄橙色 不良	カマド袖部 60%

第13号住居跡 [第58・59図、PL.10・57]

位置 調査区北側H・I-10～12グリッド、標高27.5mに位置する。他の遺構と重複のない単独住居跡である。

規模 長軸4.68m、短軸4.28mの若干横長の正方形を呈し、床面積は約20.0㎡である。

主軸方向 N-15° -W

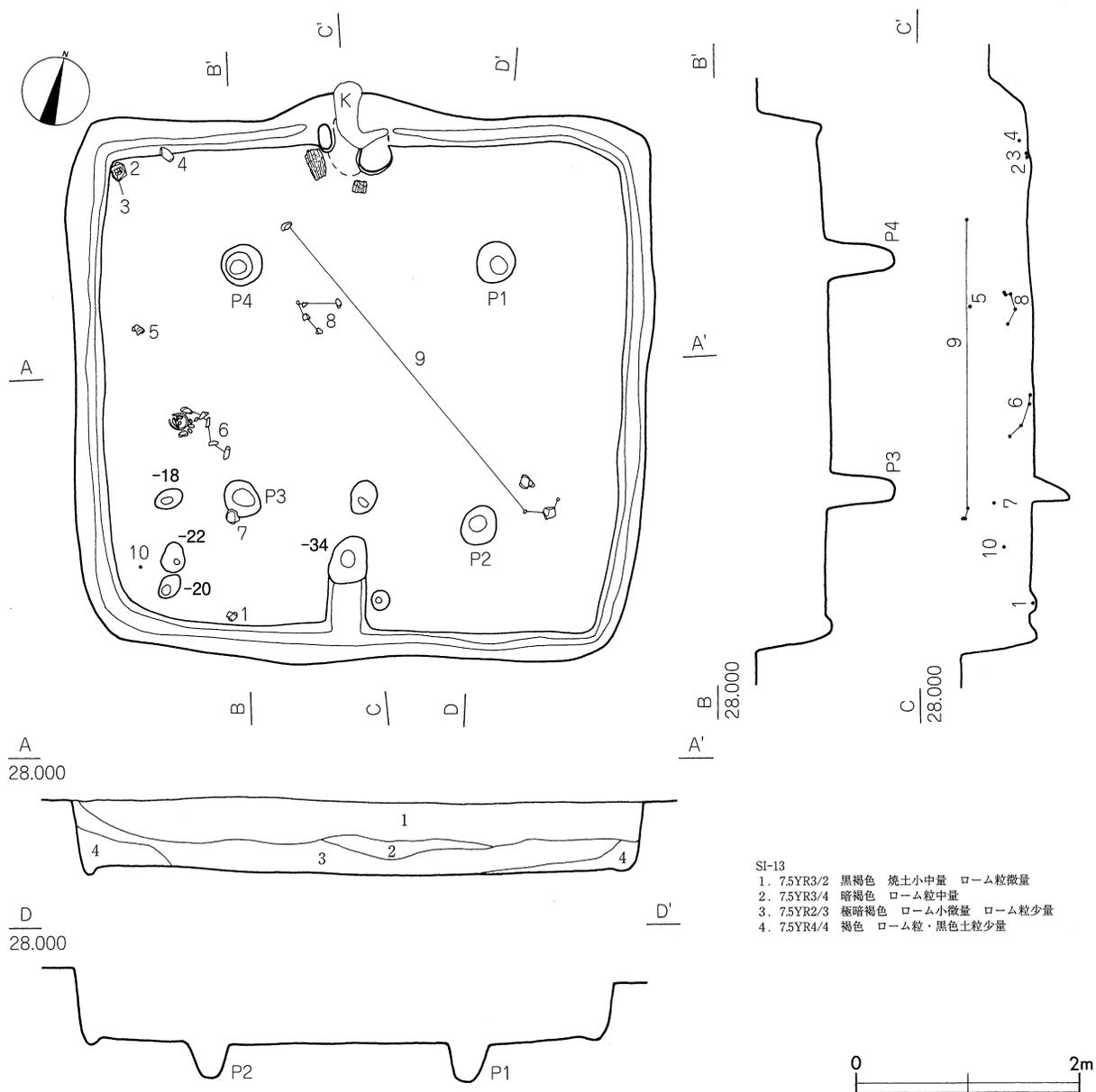
壁 垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で65cmを測る。壁溝は全周しており、幅10～22cm、深さ4～8cmであった。カマドと対になる南側の壁溝から主軸上を通る溝とピットがみられた。溝は幅34cm、深さ11cmで端部に位置するピットは34cmと深くなる。おそらく両者合わせて入り口部施設を構成するものであろう。

床 概ね平坦である。中央付近に若干硬化面が残存していた。

ピット 9基確認され、P1～4はその配置と規模から支柱穴に相当しよう。いずれも円形を呈し、径34～38cm、深さ30～66cmで開口部の大きさは非常に近似している。他の5基はいずれもカマドと対になる入り口部付近に集中しており、入り口施設に関連したピットの可能性が考えられる。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、煙道部から袖にかけて大きく攪乱を受けていた。壁下場より50cm程壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築しており、全長推定80cm、焚き口幅約25cmを測る。袖の長さは非対称で左側袖は短い、設置当初は当然ながら左右対称であったと思われる。両袖付近に若干床面から浮いて炭化材が確認され、また燃焼部は僅かに窪んでおり焼土が堆積していた。遺物は出土していない。

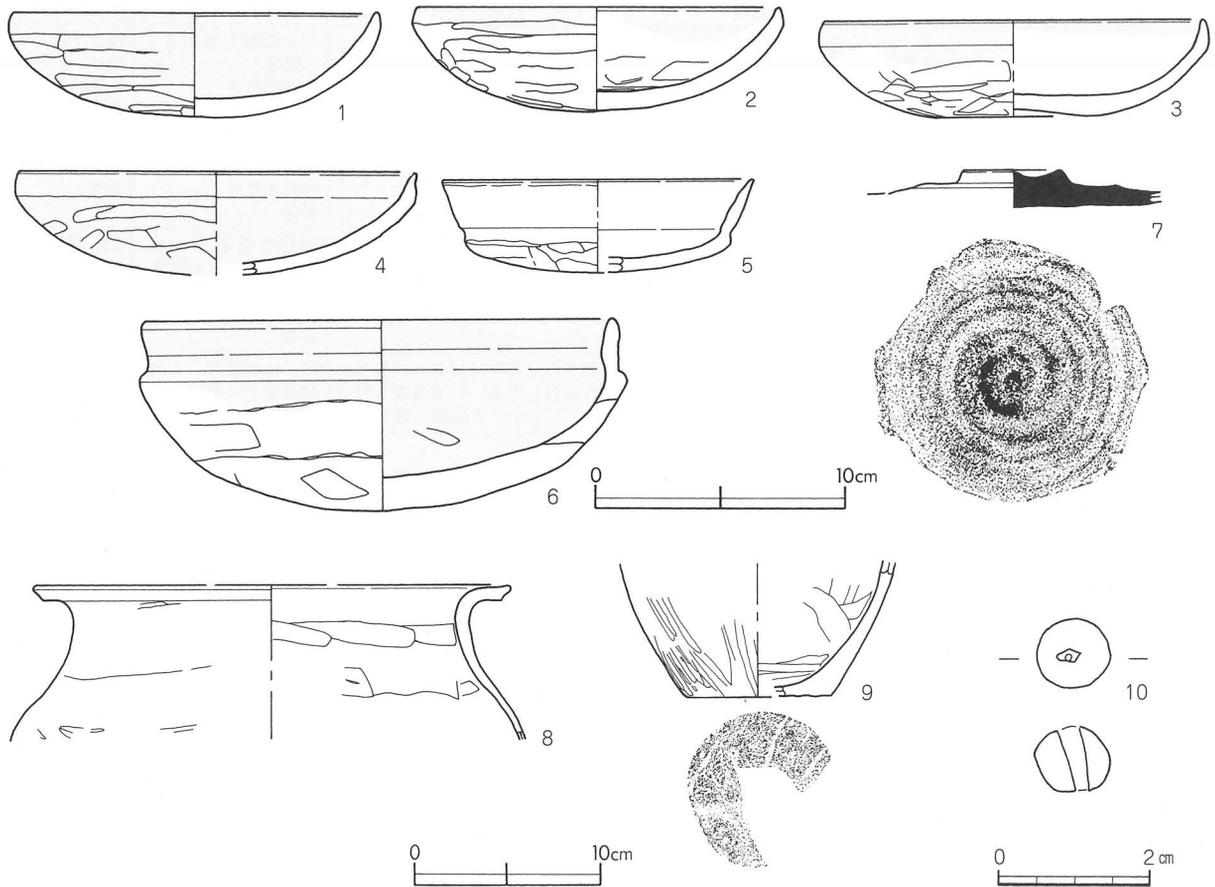
覆土 4層に分層された。おそらく自然堆積と思われる。



第58図 第13号住居跡

遺物 遺物の出土量は少なく、床面に若干の坏片が散乱していた他、覆土中～上位から蓋や甕などの破片が発見されている。床面での一括性が保証されるのは、No.1～4、6の坏だけである。

No.1～6は土師器の坏で、形態的に概ね3種類に分類することができる。①口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部の断面形態が三角形を呈するタイプで、全てに黒色処理が施されている（No.1～4）。②やや扁平ぎみの丸底に段の付いた体部、「ハ」字に開く口縁部を特徴とするタイプである（No.5）。③底部は丸底、体部には段が付き、口縁部は直立するタイプである。内面には黒色処理を施している（No.6）。特に当住居跡から出土しているものは非常に大型であるが、器形や製作技法は一般的な大きさのものと変わりはない。以上の3種類の坏で、当住居跡で主体となっていたのは①のタイプである。②のタイプは覆土上層から出土したNo.5を1点図示しただけであるが、小破片の中にも数個体が認められ、一定量は存在していたと思われる。③のタイプはここではNo.6が唯一の例であるが、第7号住居跡には①との共存も確認されている。従って、この3種の坏に大きな時間的な懸隔を想定する必要はないことになる。No.7は須恵器の蓋で、大きなつまみを有する。この種の花つまみはかすみがうら市一



第59図 第13号住居跡出土遺物

町田窯跡の製品に多くみられるもので、かえり蓋が最も退化した段階の蓋とされている。No.8・9は大小の土師器甕、No.10は土製小玉である。

所見 これらの遺物の時期は、各タイプの坏が7世紀に多くみられる形態であること、須恵器蓋が8世紀初頭に充てられている一町田窯段階のものと同様と推測されることなどから、およそ7世紀後半代と考えることにしたい。当住居跡の営まれた時期も同様と思われる。

第13号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	土師器 坏	口径 14.5 器高 4.2	底部は丸底で、口縁部と体部の境に軽い稜が付く。口縁部は断面三角形を呈する。	底部は二方向からのヘラ削り、体部には横位の細かなヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英をごく微量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直 ほぼ完形 口唇部全周に 磨耗 内外面黒色処理 (希薄)
第59図 2	土師器 坏	口径 14.7 器高 4.2	底部は丸底で、口縁部と体部の境に稜をもつ。口縁部は断面三角形を呈する。	底部は方向不明のヘラ削り、体部には横位の細かなヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面灰黄褐色 普通 (軟質)	床直 ほぼ完形 口唇部全周に 磨耗 内外面黒色処理 (部分的)
第59図 3	土師器 坏	口径 [15.0] 器高 3.9	底部は丸底だが中央部は上げ底を呈する。口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は断面三角形を呈する。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は横位の細かなヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を少量 外面褐灰色、内面に ぶい黄褐色 不良 (軟質)	床直 40% 内外面黒色処理 (部分的)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 4	土師器 坏	口径 [16.0] 器高 4.1	底部は丸底で、口縁部と体部の境にシャープな稜をもつ。口縁部は断面が鋭い三角形を呈する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量 内外面黒色 良好	覆土下位 40% 内外面黒色処理
第59図 5	土師器 坏	口径 [12.4] 器高 3.7	底部は平坦な丸底、口縁部と体部の境に段が付き明瞭に分かれる。口縁部は直線的に開く。	底部および体部は多方向のヘラ削り、口縁部と内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 普通	覆土上位 20%
第59図 6	土師器 坏	口径 18.9 器高 7.6	大型の坏。底部は丸底で、口縁部と体部の境には段が付く。口縁部は高く直立し、内側が僅かに肥厚する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量、褐色チャートを微量 外面にぶい黄橙色、内面黒色 普通	床直～覆土中位 90% 内外面黒色処理(外面部分的)
第59図 7	須恵器 蓋	器高 (1.5) つまみ径4.6	つまみは大型で、中心を残してその周囲を深く窪めた扁平円盤状を呈する。体部は平坦で大きく広がる。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを行った後、つまみ取り付けに伴う回転ナデを周囲に施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面灰色 普通	覆土中位 60%
第59図 8	土師器 甕	口径 [25.8] 器高 (8.2)	肩の張りは強めで、引き締まった頸部をもつ。口縁部は強く外反し、水平方向に伸びる。口唇部は短く外反する。	頸部内面に横位のヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい褐色 良好	覆土中位 10% (口径の20%残存)
第59図 9	土師器 小型甕	底径 [7.8] 器高 (7.1)	小型の甕の体部下位片。器壁が厚く重い。体部は強い角度で立ち上がる。	体部外面に縦位の磨き、内面に横位を主体としたヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英・白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	覆土上位 20% 底部に木葉痕

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第59図 10	土製品 小玉	0.9	1.0	0.9	0.6	孔は径1～2mmで、焼成前に針状の道具で貫通させたもの。	混入物のない緻密な胎土 黒褐色 普通	覆土中位 完形

第19号住居跡〔第60～63図、PL.12・60・61〕

位置 調査区西側E～H-21～23グリッド、標高27.5m付近の台地平坦部に位置する。南側で第62号住居跡と重複しており、本住居跡内に第62号住居跡のカマドの痕跡がみられることと出土遺物から本住居が古いと判断した。

規模 長軸6.32m、短軸6.24mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約32.4㎡である。

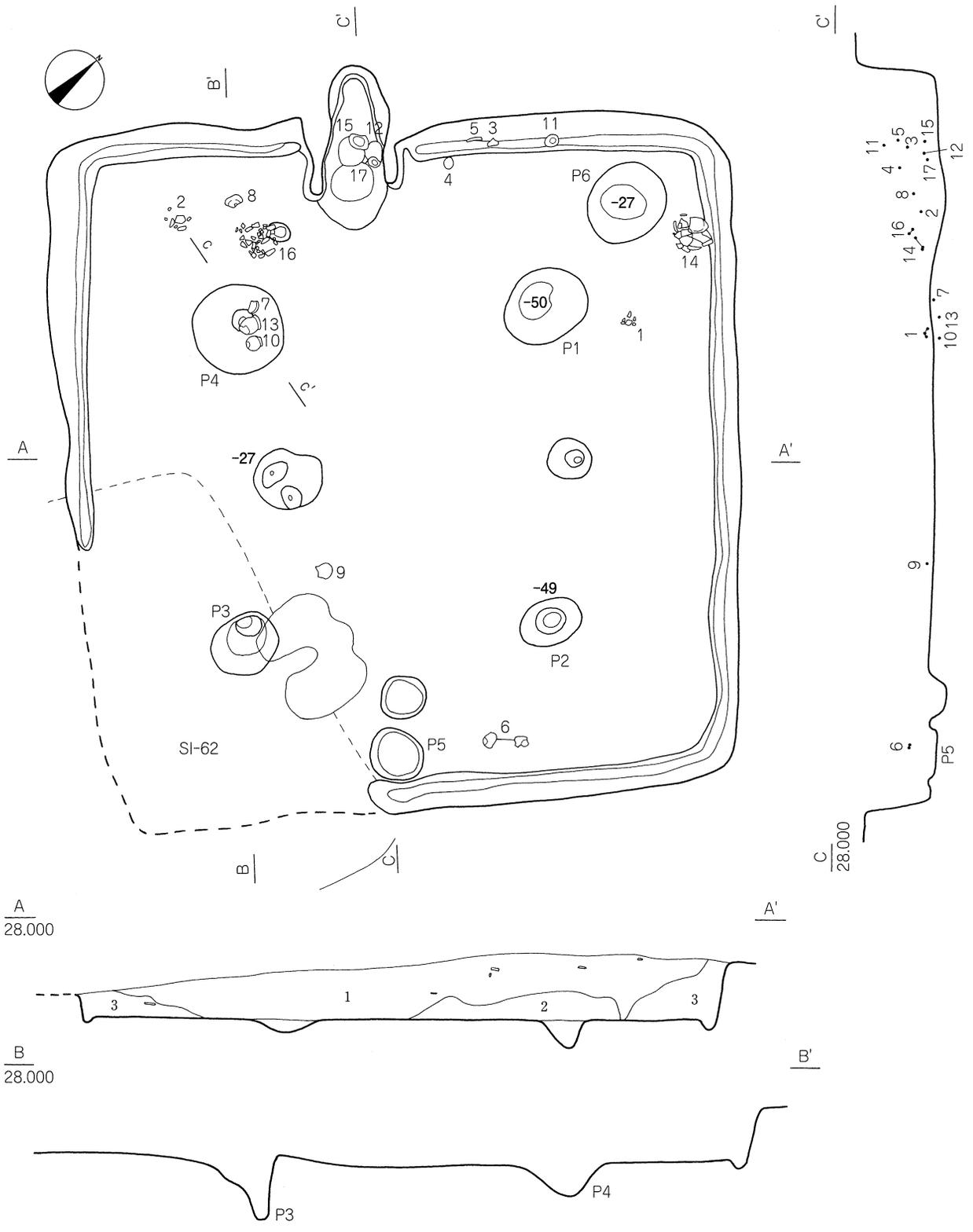
主軸方向 N-49° -W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で69cmを測る。第62号住居跡に壊されている南隅を除いて壁溝が全周しており、幅10～20cm、深さ2～7cmを測る。

床 中央にかけて緩やかに窪んでいる。

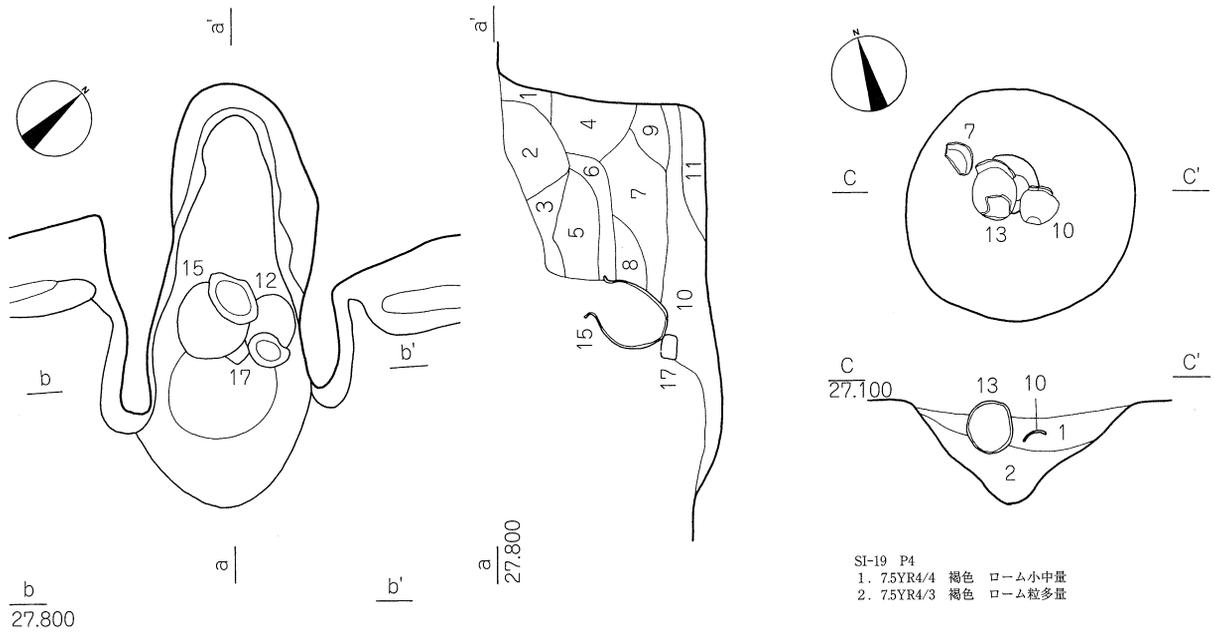
ピット 10基確認された。配置と規模からP1～4は支柱穴に相当すると考える。円形・楕円形を呈し、径64～92cm、深さ42～62cmを測る。P4の覆土中から土器が3個体分出土しており、2個体の甕類はとも逆位で、坏は正位の状態であった。住居廃絶時にP4から柱を抜き取り、埋没土中に廃棄もしくは遺棄したと考えられる。P5は入り口施設に相当し、円形で径60cm、深さ7cmを測る。壁から離れて隣接するピットも同様の性格と考えられる。P6は配置から貯蔵穴に相当し、円形で径86cm、深さ27cmを測る。支柱穴間に位置するピットは補助柱穴的な性格を有していたと思われる。

カマド 北西壁はほぼ中央に位置する。壁下場から90cm程壁外に掘り出されて煙道部が構築される。全長約1.66mで、燃焼部は床面から16cm程掘り込まれ、奥壁はほぼ垂直に立ち上がっている。両袖の遺存状態は良好で、焚き口幅60cmを測る。カマド内の覆土は11層に分層され、燃焼部内に第10層が堆積している状態で支脚が据えられ、甕を乗せて使用していたと考える。甕は2個体出土しており、ほぼ完形であった。第10層の上層は大半が天井部となる。



- SI-19
 1. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土小・粒・ローム大・小中量 ローム粒多量 ローム中・砂少量 しまり強
 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中～粒中量
 3. 7.5YR4/4 褐色 焼土小・炭化粒・ローム中少量 ローム大・小中量 ローム粒多量

第60図 第19号住居跡



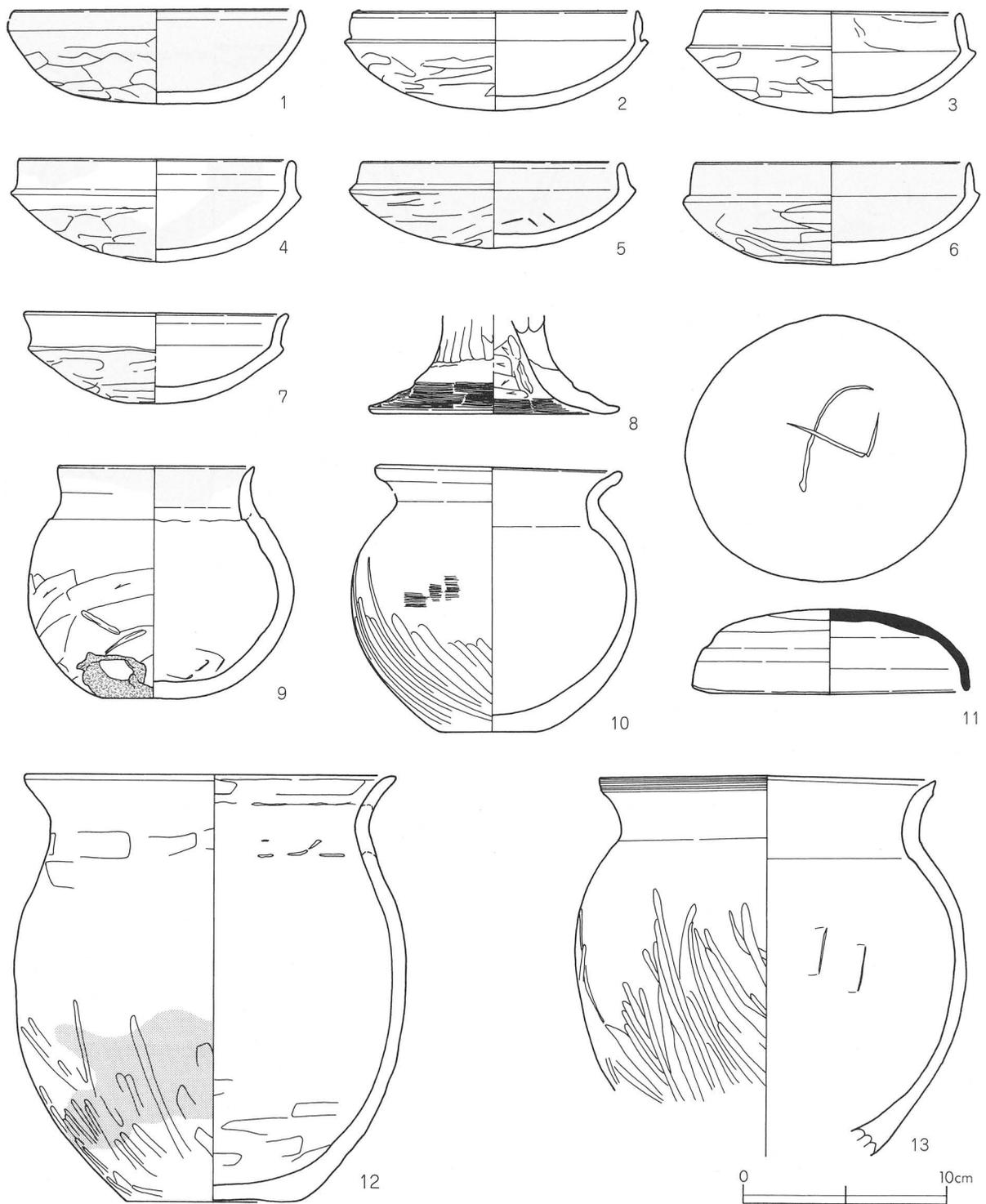
- SI-19 カマド
1. 5YR3/3 暗赤褐色 ローム粒少量
 2. 5YR4/3 にぶい赤褐色 焼土大・粒少量、白色砂・黒色土粒中量
 3. 5YR4/2 灰褐色 ローム小少量、白色砂多量
 4. 5YR4/3 にぶい赤褐色 焼土粒・白色砂中量
 5. 5YR5/3 にぶい赤褐色 焼土粒・黒色土粒少量 白色砂多量
 6. 5YR5/4 にぶい赤褐色 焼土粒少量 白色砂中量
 7. 5YR4/4 にぶい赤褐色 焼土粒多量、焼土小・白色砂中量、炭化粒少量
 8. 5YR4/2 灰褐色 焼土粒・ローム粒少量
 9. 5YR3/3 暗赤褐色 白色砂少量
 10. 5YR4/3 にぶい赤褐色 ローム小少量、ローム粒中量、白色砂多量
 11. 5YR3/3 暗赤褐色 ローム中・白色砂少量、ローム粒中量

第61図 第19号住居跡カマド・貯蔵穴遺物出土状況

覆土 3層に分層される。第1・2層は近似した層で壁崩落後、あまり時間をおかず埋没したと考えられる。

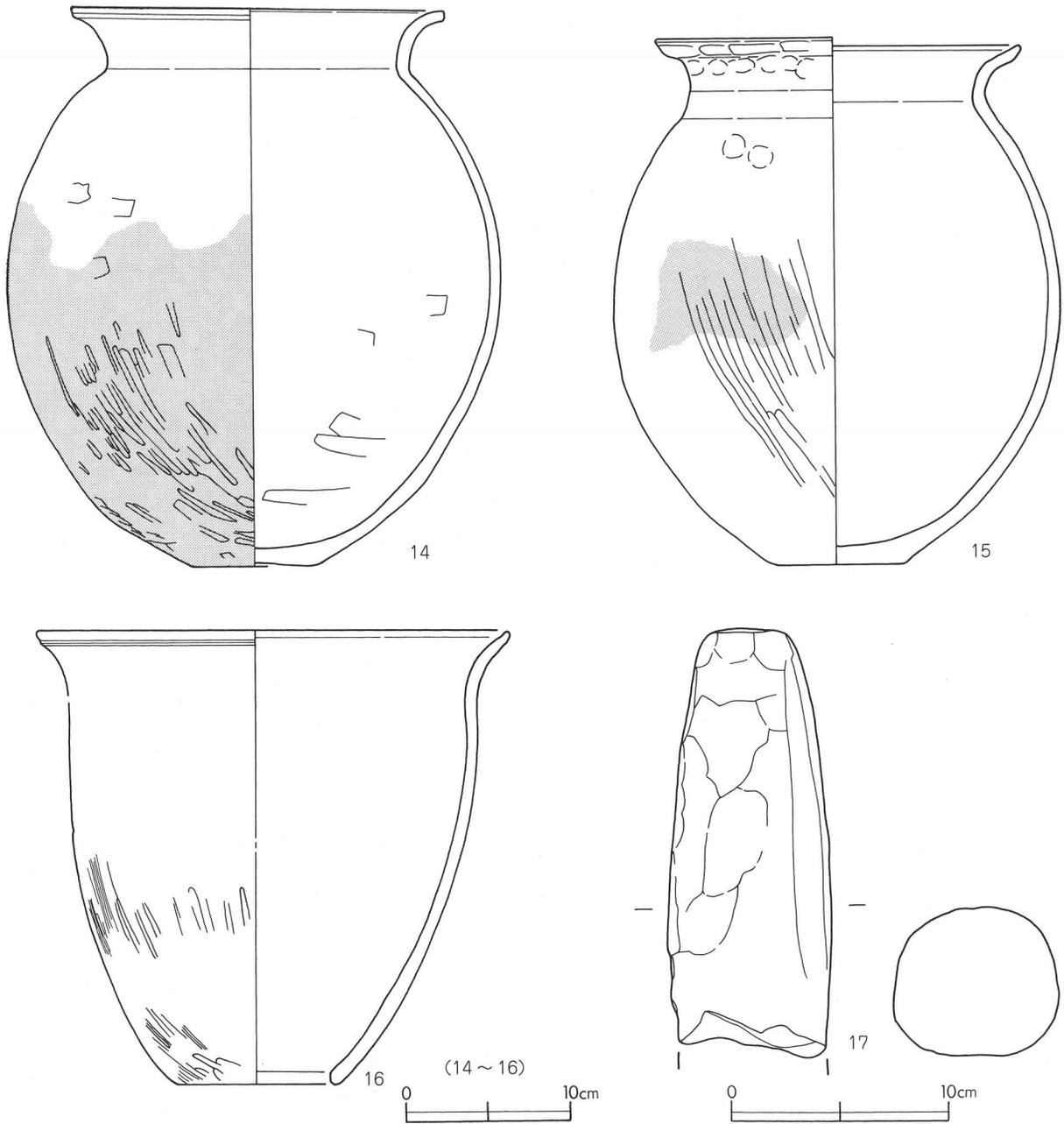
遺物 第62号住居跡と切り合い関係があるため、覆土中の遺物は別時期のものが多く混在していた。当住居跡に伴うと思われるものだけを抽出したところ、カマド燃焼部内やP4内に落ち込んでいた土器類が最も廃絶時期に近いもので、その他は覆土下位から上位にかけて散在しており、その内の一部はレベル差を越えて接合するものも存在した。

器種構成は土師器の坏、高坏、甕、甑に加え、小型壺・甕、須恵器蓋が存在する。No.1～7は坏である。体部と口縁部の境に稜を有し口縁が断面三角形を呈するものと、段が付いて口縁部が直立ないし内傾・外反するもの、の2種が確認されるが、前者はNo.1が1点のみであった。No.2～7は後者のタイプで、黒色処理を施すものとそうでないものの二者がある。整形・調整技法はすべて共通で、底部・体部にヘラ削り、口縁や内面に回転ナデを施し、磨きは行われていない。No.8は高坏の脚部片である。軸部に縦位のヘラ削り、裾部に回転ヘラ削り状にハケメを付けている。No.9と10は小型の甕ないし壺である。両者は類似した器形や法量をもつが、胎土と整形・調整技法には著しい違いがある。No.10は一般的な甕と同様の砂粒を多く含んだ胎土を用い、体部下位には磨きを施している。外反する口縁部の形態も大型の甕と同様である。一方、No.9はむしろ坏類に近く、緻密な胎土、体部のヘラ削り、口縁部の回転ナデなど、坏の調整技法をそのまま用いて作られている。これらの点から、No.10を「小型甕」



第62図 第19号住居跡出土遺物（1）

と呼ぶのに対して、No.9を「小型壺」と分別することにした。なお、No.9の体部下位には径2cmの破砕孔が開けられている。No.11は須恵器蓋で、体部外面頂部に回転ヘラ削りを施し、その上にヘラ状の道具で「×」の記号が刻まれている。緻密な胎土は在地産でない可能性を示唆している。No.12～15は甕である。各々、若干の違いはあるが、概して最大径の位置が低く、体部の膨らみが球形を意識したものとなっている。No.16は甑、No.17はカマドの支脚である。



第63図 第19号住居跡出土遺物（2）

所見 遺物の時期は、No.11の須恵器蓋が陶邑編年でいうTK43からTK209の頃に相当し、実年代ではおよそ6世紀後半から7世紀前半にあたる。No.11は覆土上位からの出土なので参考に留まるものであるが、他の土師器坏類の形態からも、およそ7世紀前半代、少なくとも中頃までには収まる時期にあると考えられる。

第19号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)		器形の特徴		技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		口径	器高	口径	器高			
第62図1	土師器 坏	口径 14.2	器高 4.5	底部は平坦ぎみの丸底で、体部は丸みをもって強い角度で立ち上がる。口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は断面三角形を呈する。	底部は二方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面黒色 普通	覆土下位 70% 内外面黒色処理	
第62図2	土師器 坏	口径 14.0	器高 4.9	底部は丸底で体部はやや浅めに開く。体部と口縁部の境に段をもち、口縁部は中膨れで垂直に立ち上がる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面は回転ナデを施す。	ごく微細な長石、褐色スコリアを少量 内外面にぶい橙色 普通	覆土下位 60%	
第62図3	土師器 坏	口径 12.8	器高 5.0	底部は丸底で、体部はやや浅めに開く。体部と口縁部の境に段をもち、口縁部は内傾して直線的に立ち上がる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面は回転ナデを施す。	ごく微細な長石を少量 外面にぶい黄橙色、 内面明黄褐色 普通	覆土中位 ほぼ完形	
第62図4	土師器 坏	口径 13.5	器高 5.0	底部は丸底で、体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部は垂直に高く立ち上がる。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 外面にぶい褐色、内面にぶい黄橙色 普通	覆土上位 ほぼ完形 内外面黒色処理 (部分的)	
第62図5	土師器 坏	口径 12.7	器高 4.2	底部は丸底で、体部はやや浅めに開く。体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部は厚手で短く、内傾して立ち上がる。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な石英をごく微量 内外面にぶい黄橙色 普通 (やや軟質)	覆土上位 ほぼ完形 内外面黒色処理 (希薄)	
第62図6	土師器 坏	口径 13.8	器高 4.9	底部は丸底でかなり厚手。体部と口縁部の境に段をもち、口縁部は垂直に高く立ち上がる。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を少量 内外面黒色 普通	覆土中位 70% 内外面黒色処理	
第62図7	土師器 坏	口径 13.0	器高 4.4	底部は丸底で、体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部は外反しながら高く立ち上がる。	底部は二方向からのヘラ削り、体部は横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面橙色 普通	ピット4内 60% 外面体部黒色処理、 口縁部は不明	
第62図8	土師器 高坏	脚台径 12.4	器高 (5.8)	高坏の脚部片。柱状の軸部から裾部が段をもって大きく開く。	裾部の表裏面にハケによる回転ナデ、軸部は内外面に縦位のヘラ削りを施す。	微細な長石を少量 内外面にぶい黄橙色 普通 (やや軟質)	覆土中位 20% (裾部径の50%残存)	
第62図9	土師器 小型壺	口径 9.7	底径 4.6	器高 11.2	底部は小さな平底。体部は球形を呈し、口縁部との境に段をもつ。口縁は垂直に立ち上がり、口唇部が外反する。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は全面的横位のヘラ削り、口縁は回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面にぶい黄橙色 普通 (やや軟質)	覆土下位、完形 体部下位に径2cmの穿孔 内外面黒色処理 (部分的)
第62図10	土師器 小型甕	口径 12.8	底径 5.6	器高 12.6	底部は小さな平底。体部は球形を呈し、口縁部は「く」字に外反する。	体部外面に横位のハケ目を僅かに付ける。下位には斜位の磨き、底部に一方の磨きを施す。	径1~3mmの長石・石英を非常に多量、白雲母を微量 内外面にぶい黄橙色 普通	ピット4内 口縁部80%を欠く以外は完形
第62図11	須恵器 蓋	口径 13.6	器高 4.2	体部は半球形を呈する。口縁は直線的に垂下するが、内側に僅かな膨らみをもつ。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデ調整を施す。	径1mmの長石を少量、径5mmのチャートを微量 内外面灰色 良好	覆土上位 完形 外面頂部にヘラ記号「×」	
第62図12	土師器 甕	口径 18.1	底径 8.5	器高 20.9	中型の甕。最大径は体部中位にあり、底部と頸部の締りが弱い。口縁部は緩く外反しながら高めに立ち上がる。	底部は一方向からの磨き、体部下位に斜位の磨きを施す。口縁部は回転ナデを施す。頸部内面に横位のヘラ削り、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1~3mmの長石・石英を多量、白雲母少量 内外面にぶい黄橙色 普通	カマド燃焼部 ほぼ完形 体部外面下位に煤付着
第62図13	土師器 甕	口径 16.6	底径 18.4	器高 (18.4)	中型の甕。最大径は体部中位で、底部と頸部はよく締り、体部は球形を呈する。口縁部は外反しながら強く立ち上がり、口唇部は断面三角形を呈する。	体部中位以下に縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1~3mmの長石・石英を多量、白雲母少量 内外面にぶい橙色 普通	ピット4内 80% (底部のみ欠失)
第63図14	土師器 甕	口径 22.6	底径 7.4	器高 34.3	大型の甕。最大径は体部中位にあり、頸部と底部はよく締る。体部は弓なりに膨らみ、口縁部は強く外反する。	底部に一方向からの磨き、体部下位に斜位の磨きを施す。口縁部に回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土中位 ほぼ完形 体部外面下位に煤付着
第63図15	土師器 甕	口径 22.3	底径 8.8	器高 31.7	大型の甕。最大径は体部中位にあり、頸部と底部はよく締る。体部は弓なりに膨らみ、口縁部は「コ」字を呈して立ち上がる。口唇部は短く外傾する。	底部に方向不明の磨き、体部下位に斜位の磨きを施す。口縁部に回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	カマド燃焼部 ほぼ完形 体部外面中位に煤付着
第63図16	土師器 甕	口径 28.9	底径 9.6	器高 27.8	底部は大きな一孔が開き、体部は丸みをもって強く立ち上がる。口縁部は「ハ」字に外傾し、口唇部は短く開く。	体部下位に横位のヘラ削り後、縦位の磨きを施す。口縁部および内面にナデを施し、滑らかに整える。	径1~3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土中位 80%
図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第63図17	土製品 支脚	(19.6)	7.5	6.8	(900)	砂質の強い粘土を柱状に成形したもの。板上で成形したらしく、一面に平坦面がある。表面に指頭圧痕と縦位のヘラナデ。	微細な長石・石英、黒金雲母を少量 橙色 不良	カマド燃焼部 90%

第21号住居跡〔第64・65図、PL.13・61〕

位置 調査区北端K～M-3・4グリッド、標高27.0m付近に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸6.42m、短軸6.04mの横長の正方形を呈し、床面積は約38.8㎡である。

主軸方向 N-47° -W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 垂直気味に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で60cmを測る。南隅を中心とした一角と東壁の一部に壁溝がみられた。幅8～16cm、深さ2～6cmを測る。南隅は壁溝と壁が離れており、床面と同じレベルのスペースがみられた。

床 概ね平坦である。南東壁中央部床面直上に焼土と粘土の範囲がみられた。

ピット 20基確認された。配置と規模からP1～4は支柱穴に相当しよう。円形・楕円形を呈し、径26～70cm、深さ45～121cmを測る。P2は中心に向かいオーバーハングしていた。また、P3は他に比べて開口部が大きく、柱の抜き取りに伴い形状が変化したと考えられる。P5は入り口施設に伴うピットであろう。径54cm、深さは2段になっており、壁際が浅く26cm、1段深くなる側は48cmを測る。他の15基は円形・楕円形を呈し、径19～85cm、深さ13～60cmを測る。配置的に補助柱穴に相当するピットがあると思われる。貯蔵穴の有無は不明である。おそらくカマドと対になる南東壁側が入り口となろう。

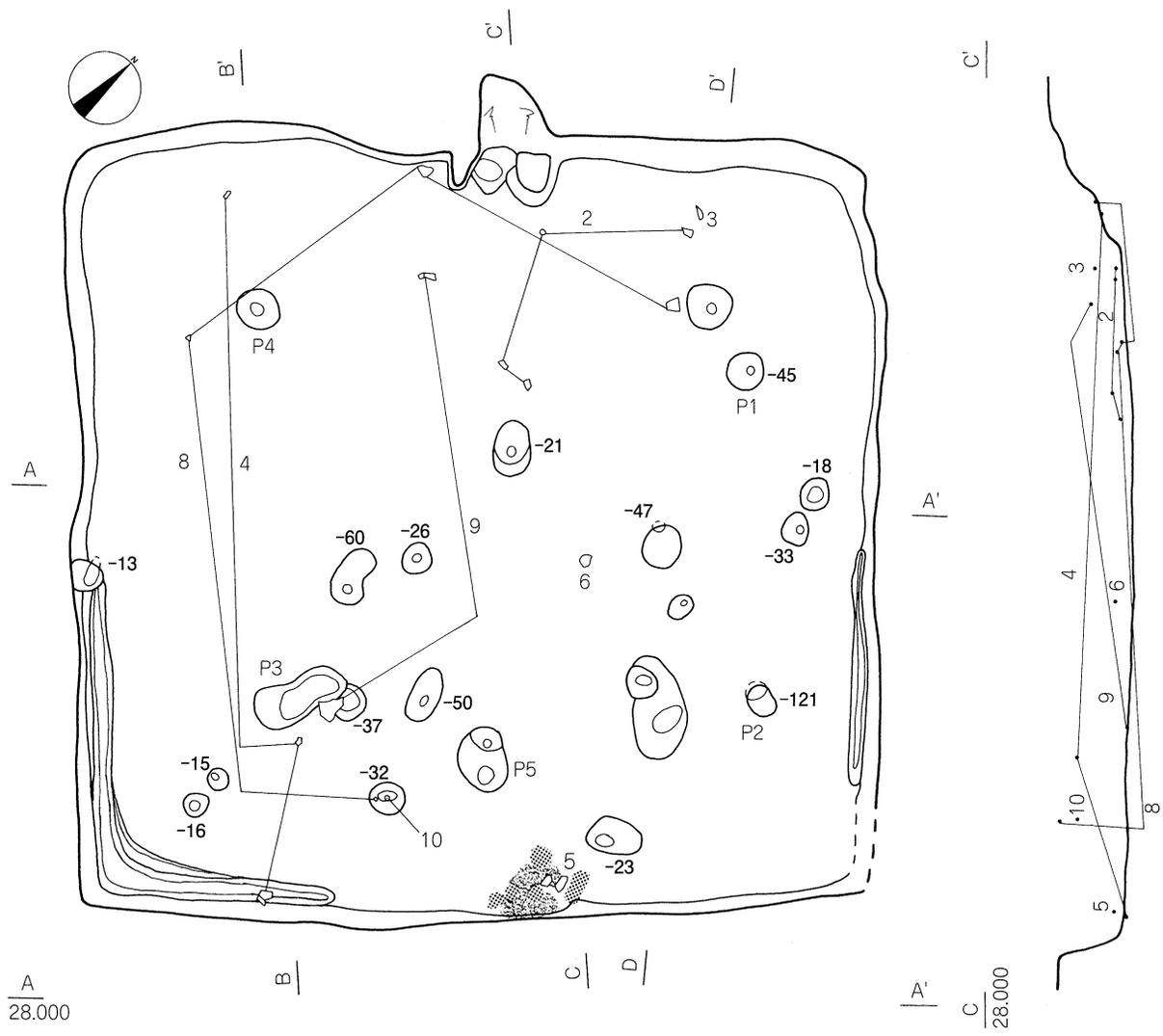
カマド 北西壁ほぼ中央に位置し、壁下場から56cm程壁外に掘り出して煙道部を構築している。平坦な燃焼部から奥壁にかけて緩やかに段を有しながら立ち上がる。全長約98cm、焚き口幅は42cmである。遺物は出土していない。

覆土 5層に分層される。第4・5層は壁崩落土と考えられ、第3層が残存する覆土の大半を占めるほど一気に埋没しており、おそらく人為的な埋め戻し土であろう。

遺物 多くの土器片が床面から覆土上位にかけて散乱する状態であった。同一個体の破片が5mも離れて出土したり、30cm以上のレベル差を超えて覆土上位と床面近くの破片が接合した場合もあった。床面近くで出土した破片を含む個体が多いため、住居廃絶間もない頃の、あまり時間差のない土器群と見なすことが可能である。

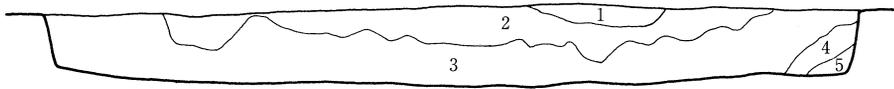
No.1から6は土師器坏である。No.1は体部と口縁部の境に段が付かず、削りとナデの器面調整の違いによって区分されるタイプである。当住居跡では唯一の例である。No.2～6の坏は、いずれも体部と口縁部の境に明瞭な段付き、直立ないし外反する高い口縁をもつタイプである。内外面に黒色処理を施すものが多く、また痕跡はあるものの器面の変色と見間違ふような例もある。なお、No.6の内面には布目圧痕跡がみられるが、これはナデ調整の際に布が用いられたために付着したものと思われる。No.7と8は土師器甕である。最大径が体部中位にあり、ふくよかで鈍重な器形を呈している。No.9は土師器の甌で、径10cmの大孔が底部に開けられている。No.11は非常に小さな土製の小玉である。

所見 遺物の時期は、坏の形態が第19号住居跡と共通していることから、およそ7世紀前半頃と考えることができる。当住居跡が営まれたのも同様の時期であろう。



A
28,000

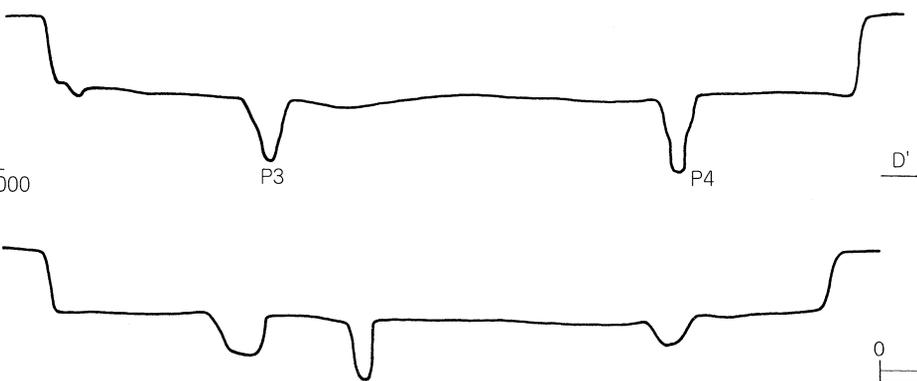
A'
C
28,000



B
28,000

B'

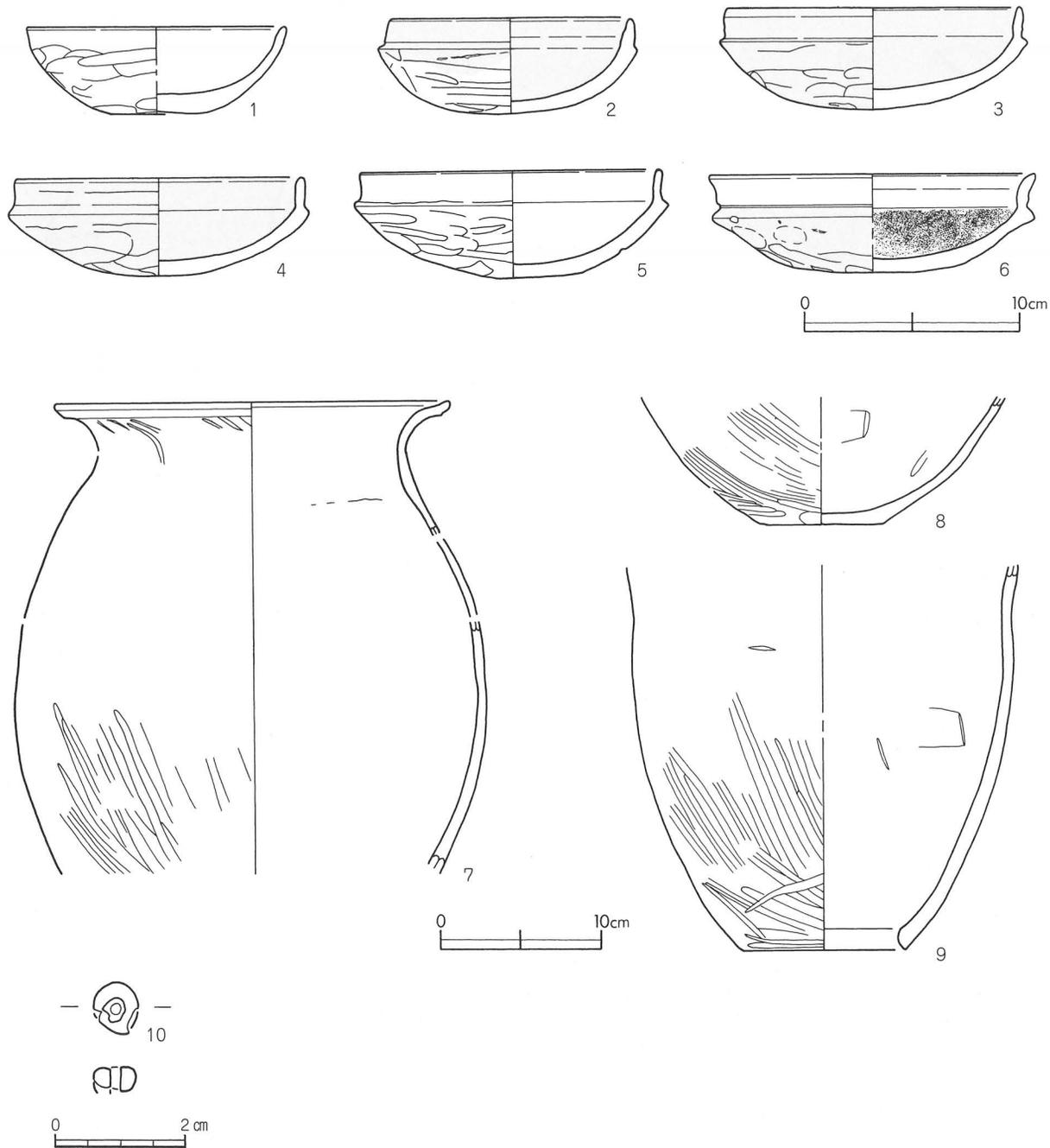
D
28,000



D'

- SI-21
1. 7.5YR4/6 褐色 炭化物・ローム中少量 ローム粒中量
 2. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム大少量 ローム小中量 ローム粒多量
 3. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒・炭化物少量 ローム中中量 ローム小・粒多量
 4. 7.5YR4/6 褐色 焼土粒・ローム小少量 ローム粒中量
 5. 7.5YR4/3 褐色 焼土粒・炭化粒・ローム小少量 ローム粒中量

第64図 第21号住居跡



第65図 第21号住居跡出土遺物

第21号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	土師器 坏	口径 [12.0] 器高 4.0	底部は削りによって小さな平坦面が作られる。体部は丸みをもって開き、口縁部との境の後は不明瞭。口縁は直線的で外傾する。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削りを施す。口縁および内面に回転ナデを施す。	微細な長石をごく微量 外面に黄橙色 内面に淡橙色 普通	覆土 30%
第65図 2	土師器 坏	口径 11.0 器高 4.5	底部は丸底で、体部と口縁部の境に段が付く。口縁は直線的に立ち上がる。	底部は方向不明のヘラ削り、体部に横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	緻密な粘土 微細な長石をごく微量 内外面淡黄色 不良(軟質)	覆土下~中位 90% 内外面黒色処理(外面は部分的)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 3	土師器 坏	口径 13.6 器高 4.8	底部は丸底で体部は浅めに大きく開く。体部と口縁部の境に段が付き、口縁は高く直立する。	底部は二方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面黒色 普通	覆土中位 ほぼ完形 口唇部に使用による 磨耗 内外面黒色処理
第65図 4	土師器 坏	口径 13.4 器高 4.6	底部は丸底で体部は丸みをもって大きく開く。体部と口縁部の境に段が付き、口縁は高く直立する。	底部は一方からのヘラ削り、体部は横位を基調にした粗いヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面黒色 普通	床直～覆土上位 90% 内外面黒色処理
第65図 5	土師器 坏	口径 14.0 器高 4.9	底部は丸底で、体部は丸みをもって大きく開く。体部と口縁部の境に段が付き、口縁部は高く直立する。	底部は一方からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面浅黄橙色 不良(軟質)	覆土下位 70%
第65図 6	土師器 坏	口径 [15.0] 器高 4.6	底部は丸底だが粗い削りによって平坦化している。体部浅めに開き、口縁部との境に段が付き。口縁部は外反しながら高く立ち上がる。	底部は一方からのヘラ削り、体部は横位、反時計回りのヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面におい橙色 普通	覆土下位 60% 内面に布目圧痕 内外面黒色処理(部分的)
第65図 7	土師器 甕	口径 [24.6] 器高 (29.0)	最大径は体部中位にあり、体部は丸みをもつ。頸部は「つ」字に大きく外反し、口縁部は水平方向にせり出す。口唇部は短く外傾する。	体部外面に縦位の磨き、口縁部内外面に回転ナデ、体部内面に縦横方向に軽いナデを施す。	径1mmの長石・石英・灰色チャートを中量、褐色スコリアを微量 内外面におい黄橙色 普通	覆土 40%
第65図 8	土師器 甕	底径 7.5 器高 (7.8)	甕の体部下位片。径の大きな平底から体部が大きく開く。	底部はナデ、その周辺は手持ちヘラ削りを施す。体部下位に縦・斜位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面におい黄橙色 普通	床直～覆土上位 10% (底部は完存)
第65図 9	土師器 甕	底径 10.2 器高 (23.7)	体部中位に僅かな膨らみをもつ。底部に大型の孔が一つ開口する。	体部外面下位に縦・斜位の磨き、内面に横・斜位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量 内外面におい橙色 普通	床直～覆土中位 30% (底部は60%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第65図 10	土製品 小玉	0.8	0.7	0.7	(0.2)	孔は径1.5mm、指頭により白玉状に横広に成形された小玉。	混入物のない緻密な胎土 褐灰色 普通	覆土上位 70%

第22号住居跡〔第66・67図、PL.13・62〕

位置 調査区北端M～P-4～6グリッド、標高27.0m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸6.84m、短軸6.54mのやや横長の正方形を呈する。床面積は約44.7㎡である。

主軸方向 N-48° -E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

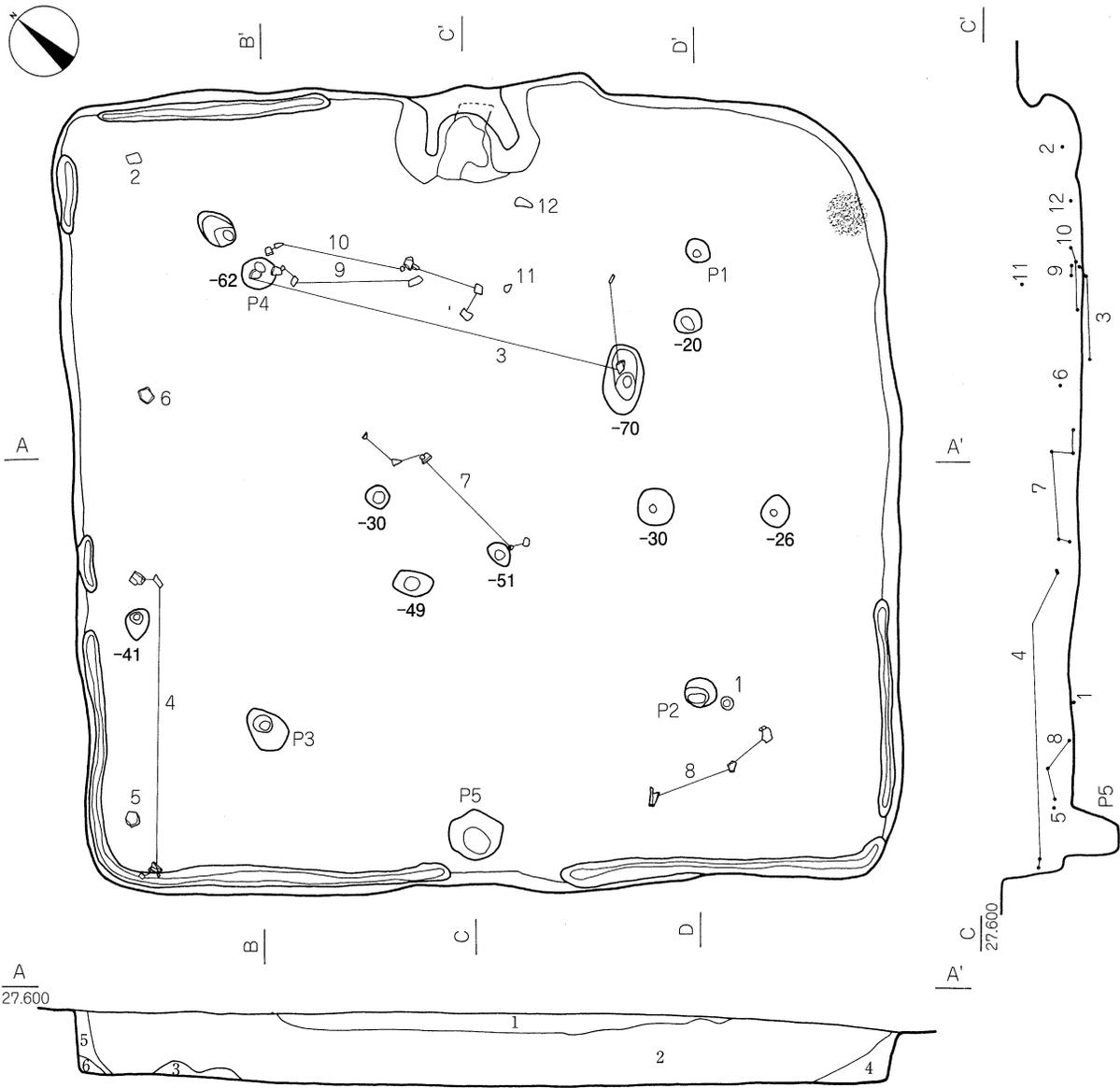
壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で48cmを測る。東側隅付近を除いて途切れながら壁溝が巡っており、規模は幅10～22cm、深さ3～8cmである。

床 概ね平坦である。東側隅の床面直上に小規模の粘土範囲がみられた。

ピット 14基確認された。配置と規模からP1～4は主柱穴に相当しよう。円形・楕円形を呈し、径23～42cm、深さ33～62cmを測る。P5は入り口部施設に関連したピットで、円形を呈し径44cm、深さ48cmである。他の9基は円形・楕円形を呈し、径18～58cm、深さ20～70cmを測る。配置的に補助柱穴に相当するピットがあると思われる。

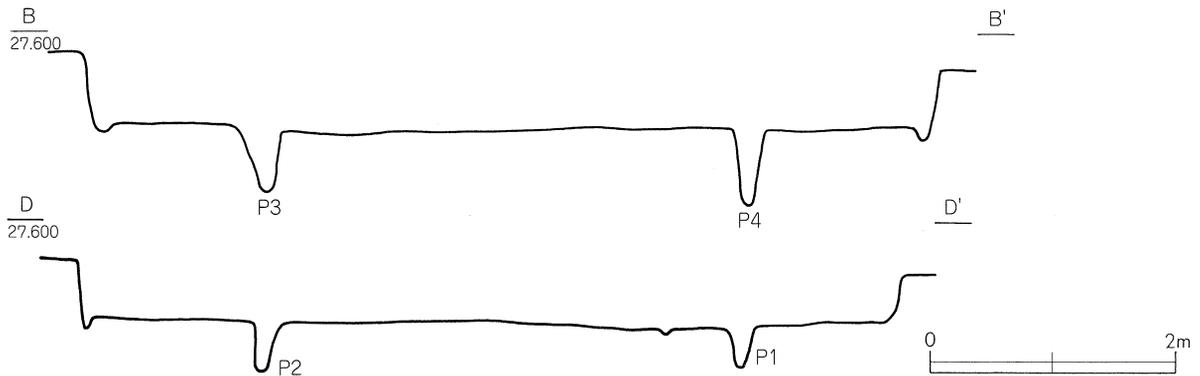
カマド 北東壁ほぼ中央に位置する。ほとんど壁外に掘り出されておらず、方形の住居プラン内に収まっている。煙道部のみトンネル状に壁外に設置されたのであろう。燃焼部は床面から7cm程掘り込まれており、奥壁にかけてオーバーハングして立ち上がっている。全長約70cm、両袖の遺存状態は良好で焚き口幅は38cmを測る。カマド内に遺物はなく支脚が袖部付近から出土している。

覆土 6層に分層される。第4～6層は壁崩落土と考えられ、第2層が残存する覆土の大半を占めるほど一気に埋没しており、おそらく人為的な埋め戻し土であろう。

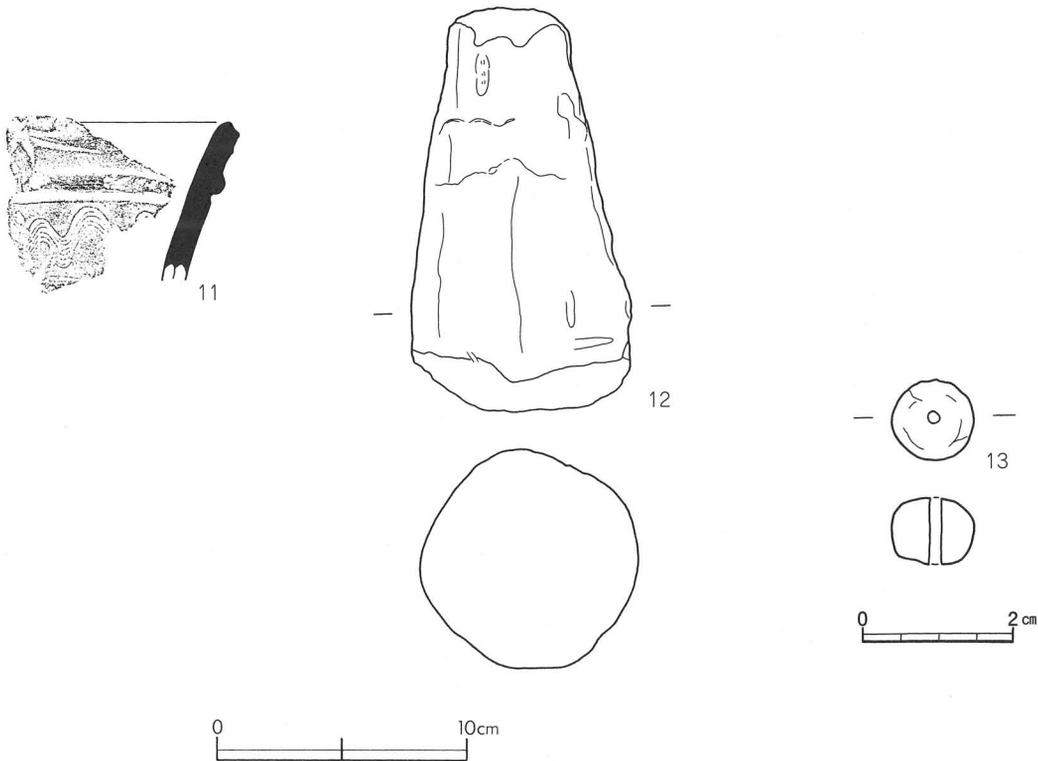
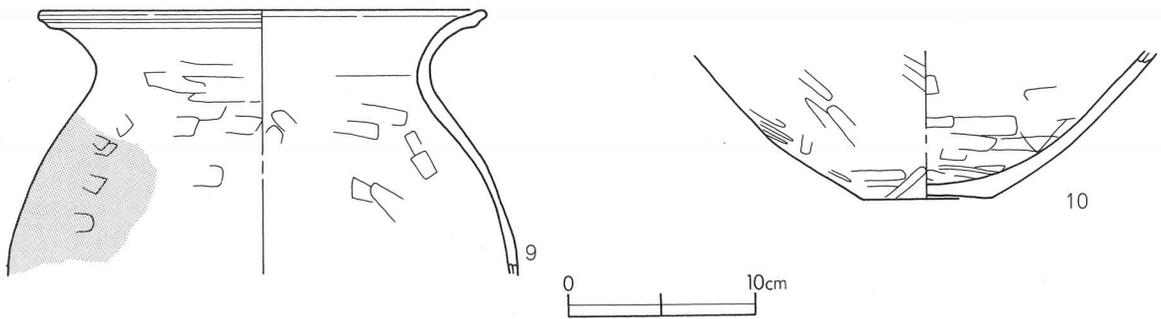
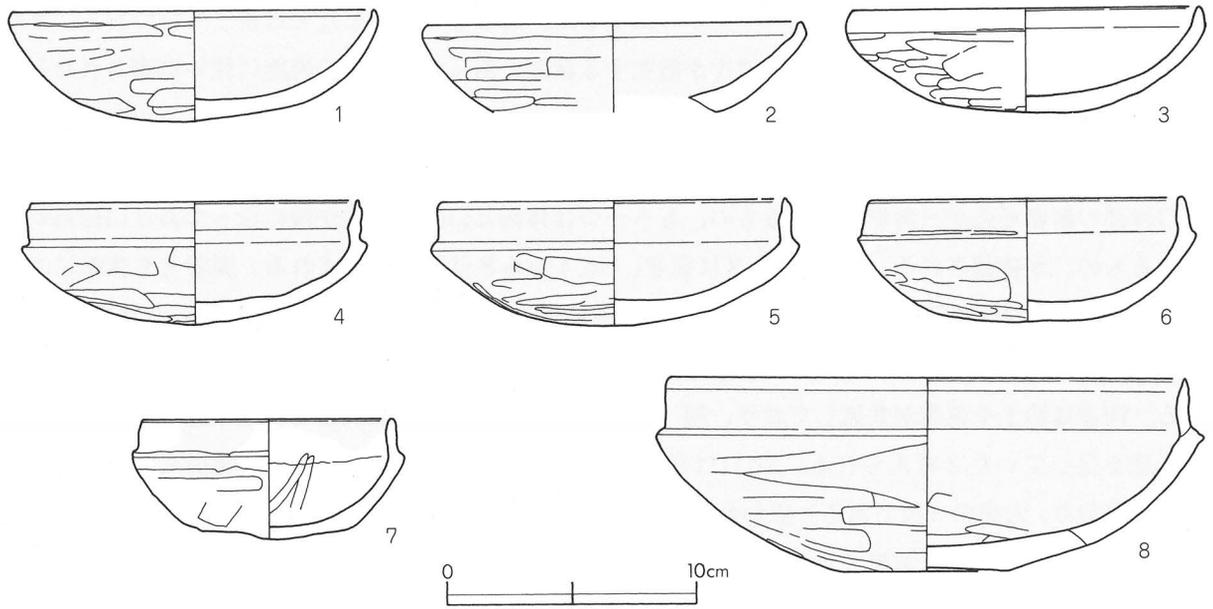


SI-22

- 1. 7.5YR3/3 暗褐色
- 2. 7.5YR4/3 褐色 炭化粒微量 ローム粒少量
- 3. 7.5YR4/6 褐色 ローム粒少量
- 4. 7.5YR4/4 褐色 焼土粒少量 ローム粒中量
- 5. 7.5YR5/4 に近い褐色 ローム中・小少量 ローム粒中量
- 6. 7.5YR5/6 明褐色 ローム中～粒多量



第66図 第22号住居跡



第67图 第22号住居跡出土遺物

遺物 遺物は床面直上ないし覆土下～上位から出土した。最も多く出土したのは覆土中位である。平面的には出土地点に特別な偏りはなく、破片が散在する状態であった。住居の廃絶に伴い廃棄されたと思われる。

No.1 から 8 は土師器の坏である。形態的に 2 つのタイプがあり、一つは体部と口縁部の境に稜があり口縁部の断面形態が三角形を呈するもの、もう一つは体部と口縁部の境が段になっており口縁部が直立するもの、が確認される。No.1 から 3 は前者、No.4 から 8 は後者に含まれる。両者とも体部にヘラ削り、口縁部や内面に回転ナデを施し、内外面に黒色処理を施す場合が多いなどの共通した特徴がある。No.7 と 8 は小型と大型の坏であるが、形態や調整技法は他と全く同じである。No.9 と 10 は土師器甕である。両者は胎土や色調が共通しており、同一個体の可能性が高い。最大径を体部中位にもつよくよかな形態を呈していたと考えられる。No.11 は須恵器甕の口縁部小片である。波状の櫛描文と突帯を口縁にもっており、大甕の一種であると思われる。出土位置が覆土上位であり、割れ口の磨耗具合などから、後世に流れ込んだものと判断される。No.12 はカマドの支脚、No.13 は土製小玉である。また、図示していないが凝灰岩製の砥石が 1 点出土している。

所見 遺物の時期は、坏の形態が第 7・20・21 号住居跡などと共通しており、およそ 7 世紀前半頃に充てるのが妥当と思われる。当住居跡が営まれたのも同様の時期であろう。

第 22 号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 67 図 1	土師器 坏	口径 14.6 器高 4.4	底部は丸底で体部は大きく開く。体部と口縁部の境に稜が付き、口縁部は断面三角形を呈する。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は反時計回り・横位のヘラ削り、口縁部と内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面暗褐色、局所に黒色 普通	床直 完形 内外面黒色処理
第 67 図 2	土師器 坏	口径 15.0 器高 (3.6)	底部を欠失。体部と口縁部の境に稜をもち、口縁部は断面が内傾した三角形を呈する。	体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面黒色 不良 (軟質)	床直 80% 内外面黒色処理
第 67 図 3	土師器 坏	口径 13.8 器高 4.2	底部は丸底で体部は丸みを帯びて大きく開く。体部と口縁部の境に稜をもち、口縁部は断面三角形を呈する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石、褐色スコリアを微量 内外面におい橙色 普通	床直 90%
第 67 図 4	土師器 坏	口径 13.1 器高 4.9	底部は丸底で、体部と口縁部の境に段が付く。口縁部は内側に稜をもち直立する。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面黒褐色 普通	覆土下～中位 80% 内外面黒色処理
第 67 図 5	土師器 坏	口径 14.1 器高 5.1	底部は丸底で、体部は大きく開く。体部と口縁部の境に段が付く、口縁部は内側に膨らみをもちながら高く直立する。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面黒色 普通	覆土下位 80% 内外面黒色処理
第 67 図 6	土師器 坏	口径 12.4 器高 4.9	底部は丸底で、体部はやや強めに立ち上がる。体部と口縁部の境に段が付く、口縁部は直線的でやや内傾する。	底部は二方向からのヘラ削り、体部は横位を主とする粗いヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石、灰色チャートを微量 内外面におい黄橙色と黒色 普通 (やや軟質)	覆土中位 ほぼ完形 口縁部に使用による磨耗 内外面黒色処理
第 67 図 7	土師器 坏	口径 10.0 器高 4.8	小型の坏。底部はいびつな丸底で、体部と口縁部の境に段が付く。口縁部は内側に膨らみをもち、僅かに内傾する。	底部は歪みを伴う粗いヘラ削り、体部に横位の簡易なヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面におい黄橙色 普通	覆土下～中位 70% 内外面黒色処理 (部分的)
第 67 図 8	土師器 坏	口径 20.6 底径 6.6 器高 7.7	大型の坏。底部はやや上げ底ぎみの平底。体部は丸みをもって大きく開き、口縁部との境に段が付く。口縁部は内側に膨らみをもって高く直立する。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は反時計回り・横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデ、内底面に指頭ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面におい橙色と黒色 普通	覆土下～中位 60% 内外面黒色処理
第 67 図 9	土師器 甕	口径 [24.2] 器高 (12.1)	最大径は体部中位にあるとみられ、体部は丸みをもって立ち上がる。頸部は「つ」字に外反し、口縁部は大きく開く。	体部内外面に横位を主とした軽いヘラナデ、頸部内面に横位のヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	径 1 mm の長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面におい黄橙色 普通	床直～覆土下位 20% No.10 と同一個体か 外面上位煤附着
第 67 図 10	土師器 甕	底径 7.0 器高 (7.6)	甕の体部下位片。底部は平底で、体部は僅かな丸みをもって大きく開く。	底部に一方向からの磨き、体部下位に斜位の磨きを施す。内面は横位を主としたヘラナデを施す。	径 1 mm の長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面におい黄橙色 普通	床直～覆土下位 20% (底径は 60% 残存) No.9 と同一個体か
第 67 図 11	須恵器 甕	器高 (6.3)	甕の口縁部小片。直線的に開き、外面に一条の突帯をもつ。口唇部は切り放しの素縁である。	外面に回転ナデ、突帯の下に櫛描波状文を付ける。	径 1 mm の長石・石英、白雲母を多量 内外面灰オリーブ色 普通	覆土上位 細片

図版番号	器種	法 量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第67図 12	土製品 支脚	16.1	8.7	8.7	960	砂質の強い粘土を柱状に手捏ね整形したもの。側面に縦位のヘラナデと指頭圧痕が付く。	径1mmの長石・石英を多量 橙色 不良	覆土下位 ほぼ完形
第67図 13	土製品 小玉	1.1	1.1	0.8	1.0	孔は径1.5mm、焼成前に針状の細い道具を貫通させて開ける。上下に平坦面をもち白玉状を呈する。	混入物のない緻密な胎土 灰褐色 普通	覆土 完形

第31号住居跡〔第68図、PL.17・67〕

位置 調査区北西端D・E-5・6グリッド、標高27.0m付近に位置する。他の遺構と重複の見られない単独の住居跡である

規模 長軸3.98m、短軸3.58mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約14.2㎡である。

主軸方向 N-33° -W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で42cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 若干の起伏を有している。

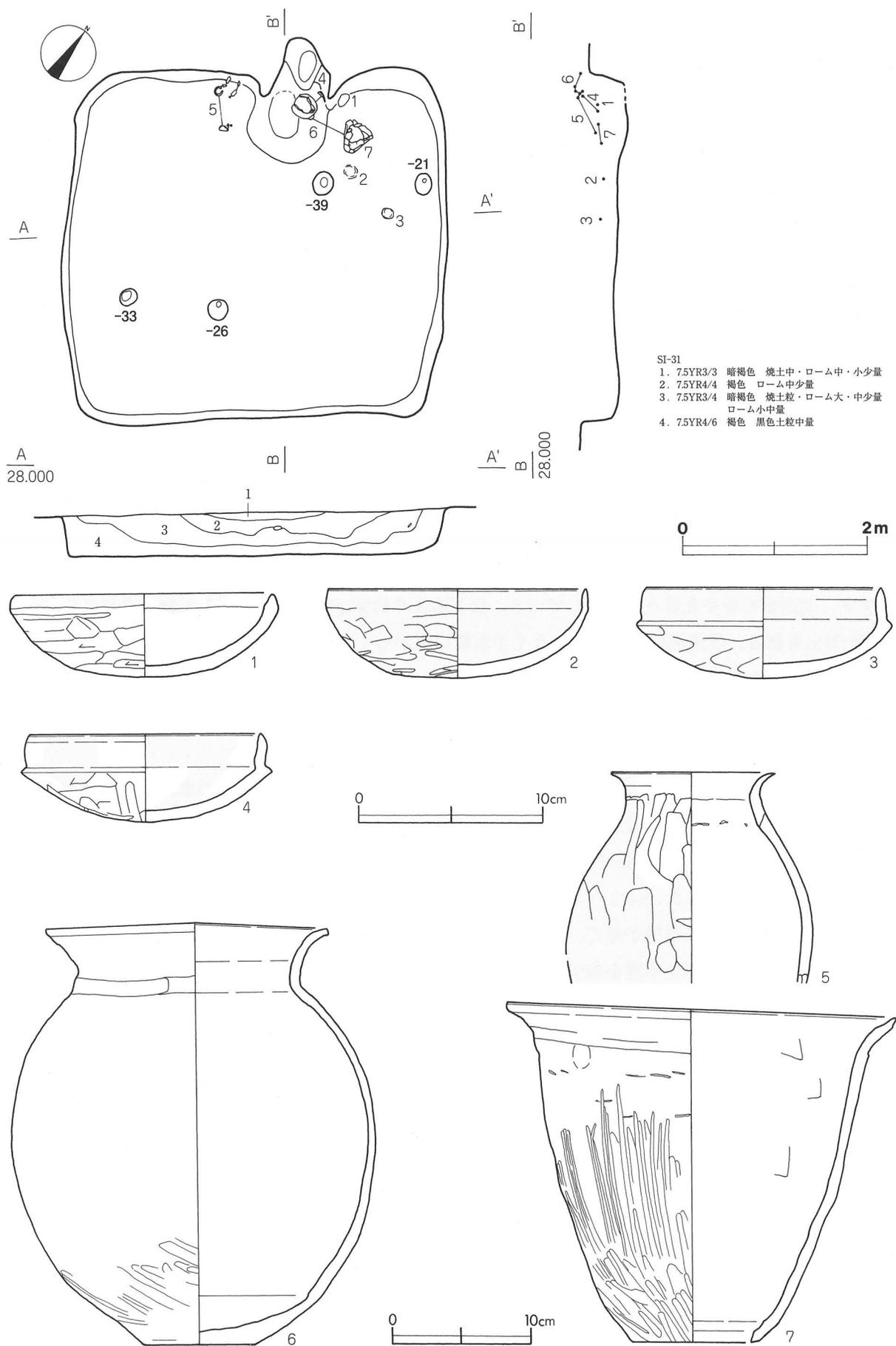
ピット 4基確認された。円形を呈し、径21～26cm、深さ21～39cmと比較的近似したものであった。いずれが支柱穴に相当するかは不明である。

カマド 北西壁のやや北寄りに位置している。壁下場より約50cm壁外に掘り出して構築されており、全長は1.34mを測る。燃焼部は両袖より大きく手前側に広がっており、床面からの深さは10cm程で奥壁にかけてほぼ垂直に立ち上がっていた。焚き口幅は約58cmで袖自体あまり床方向に突出していない。燃焼部内と袖付近から遺物が出土している。

覆土 4層に分層された。概ね自然堆積と考える。

遺物 遺物量は比較的少なく、カマド周辺に集中して発見された。カマド付近の遺物以外は覆土中～上位からの出土である。すべて土師器で、坏、甕、甑の3種である。No.1～4は丸底の坏で、体部と口縁部の境に稜をもつタイプ (No.1・2) と、段をもって口縁部が高く立ち上がるタイプ (No.3・4) の2種が確認される。また、No.1～4の坏には内外面に黒色処理が施されていた。No.5は甕であるが、かなり細身の形態の上に器壁が厚く、一般的な煮沸具として用いられたのではない可能性が高い。外面に縦位のヘラケズリと黒色処理を施す点も、当地に通有の甕の調整技法とは異なっており、壺のような貯蔵具を意識したものと思われる。これに対して、No.6の甕は一般的なふくよかな体部をもち、外面には縦位の磨きが施される。No.7は典型的な形態の甑で、No.6と同様に外面に縦位の磨きが施される。

所見 遺物の時期は、TK43～209相当の須恵器蓋を出土した第19号住居跡の坏類に対して、当住居跡の坏はやや後出的な様相を呈する。一方、和同開珎を出土した第6号住居跡や、一丁田窯跡段階の須恵器蓋を出土している第13号住居跡などの坏類と比べると、やや先行的な要素が窺える。よって、およそ7世紀後半頃に充てるのが妥当と思われる。ちなみに当住居跡の坏・甕類は、第7号住居跡との類似が指摘される。



第68図 第31号住居跡・出土遺物

第31号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 1	土師器 坏	口径 14.0 器高 4.5	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜をもつ。口唇部は断面三角形を呈する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面におい黄橙色 普通	カマド袖部 完形 内外面黒色処理(部分的)
第68図 2	土師器 坏	口径 14.0 器高 4.8	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は薄手に作られ直立する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削りを施し、その上から軽いヘラナデないし磨きを行う。口縁部および内面に回転ナデ。	微細な長石・石英を微量 内外面黒色 普通	覆土中位 ほぼ完形 内外面黒色処理
第68図 3	土師器 坏	口径 12.6 器高 4.9	底部は丸底で、体部と口縁部の境に鋭い段が付く。口縁部は高く直立する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量 内外面黒褐色 普通	覆土中位 完形 内外面黒色処理
第68図 4	土師器 坏	口径 12.5 器高 4.7	底部は丸底で、体部と口縁部の境に鋭い段が付く。口縁部は高く直立し、中位に僅かな膨らみをもつ。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面におい橙色 普通	カマド燃烧部 完形 内外面黒色処理(部分的)
第68図 5	土師器 甕	口径 12.0 器高 (15.1)	体部は細身で肩や胴部の張りが弱い。頸部は「く」字に外反し、口縁部は水平方向に開く。	頸部以下に縦位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色、部分的に黒色 普通	覆土中～上位 40% (頸部以上は完存) 外面黒色処理(部分的)
第68図 6	土師器 甕	口径 21.3 底径 8.0 器高 30.5	底部は平底で体部の張りは強め。最大径は体部中位にあり、頸部の締りは弱い。口縁部は「ハ」字に外反しながら立ち上がる。	体部外面に横位の軽いヘラナデと縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面におい黄褐色 普通	カマド燃烧部 60%
第68図 7	土師器 甌	口径 28.0 底径 9.0 器高 24.7	底部に径8cmの円孔を開ける。体部は僅かな丸みをもって強めに立ち上がる。口縁部は「ハ」字に開き、口唇部は素縁に整える。	体部外面に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面におい黄橙色 普通	覆土中位 ほぼ完形

第33号住居跡〔第69図、PL.17・67〕

位置 調査区中央やや西寄りH・I-22グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複は見られない。

規模 長軸2.98m、短軸2.3mの長方形を呈し、床面積約6.9㎡である。

主軸方向 N-3°-E (図版の手前を入り口と想定した場合)。

壁 垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で65cmを測る。南西隅にカマドではない張り出しが確認された。この部分は隅全体が大きく突出し、床面から段を有しながら緩やかに立ち上がっている。最頂部は床面より26cm程高まっていた。壁溝は確認されなかった。

床 概ね平坦である。

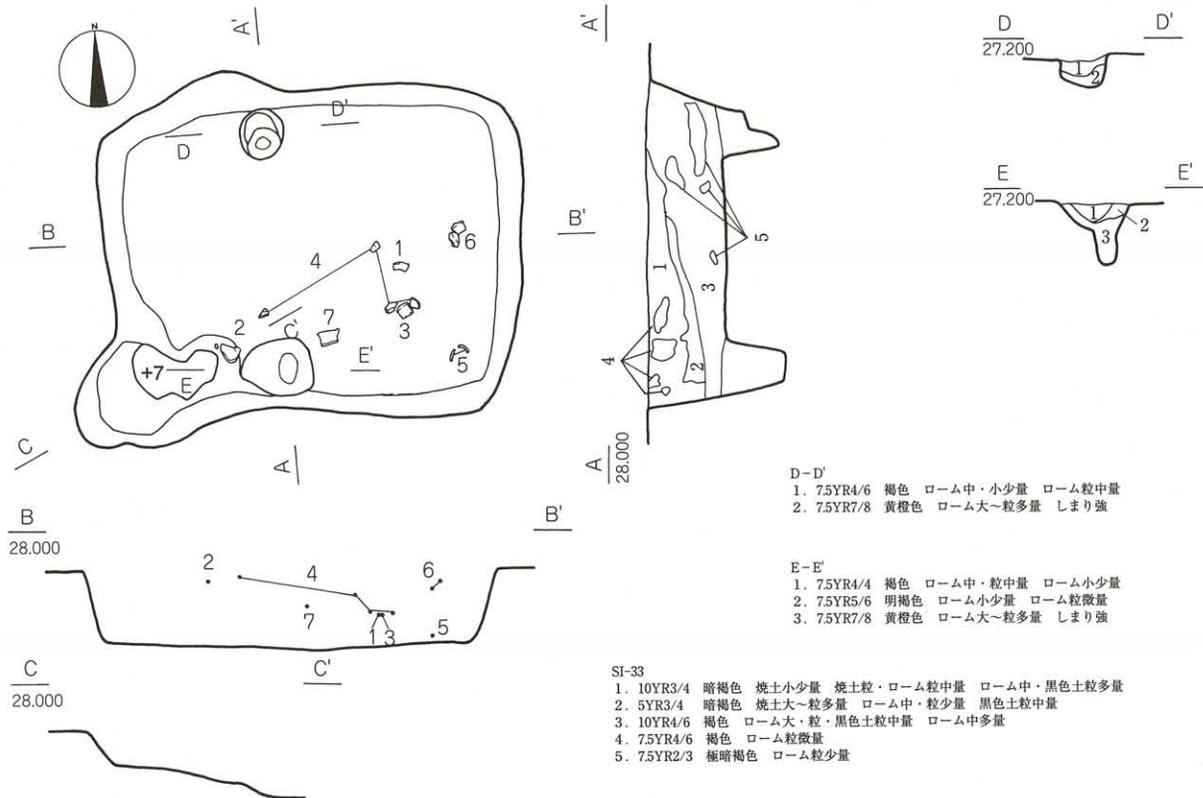
ピット 南北の対となる位置に2基確認された。楕円形を呈し、径40・57cm、深さは47・48cmで規模は近似している。柱穴であろう。

カマド・炉 確認されなかった。

覆土 5層に分層された。第1・3層内にブロック状に質の異なる土が混入しており、おそらく人為的な埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物はすべて土師器で、覆土中位から上位にかけて多く出土している。

No.1～3は坏である。体部と口縁部の境に稜が付き、口縁部が内傾するタイプ (No.1) と、境に段が付き、口縁部が直立するタイプ (No.2・3) の2種が存在する。No.4は器台と思われる。坏部、脚部ともに外面中位に段が付き、角度を変えて口縁と裾が広がる特異な形を呈する。坏部内面は中央が椀状に窪み、その底に径1.3cmの小孔が穿たれている。その窪みの淵部分は磨耗が顕著であり、丸底の器を載せる器台としての用途が推し量れる。内底部の小孔は、一見焼成後の破碎孔のように見えるが、中



D-D'

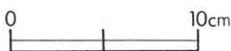
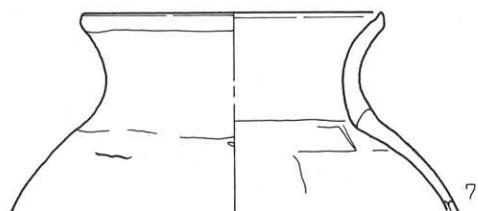
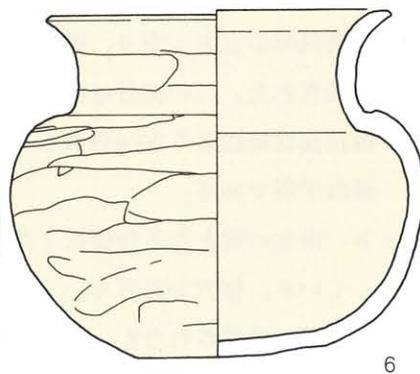
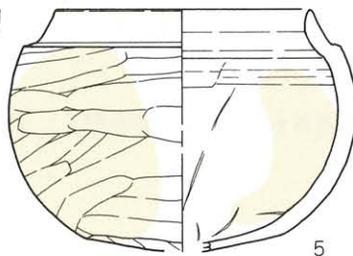
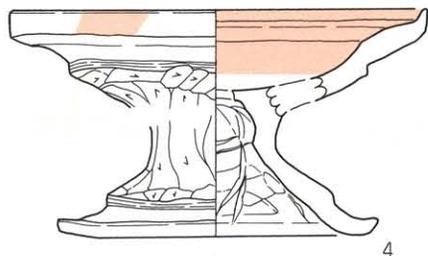
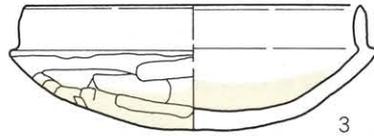
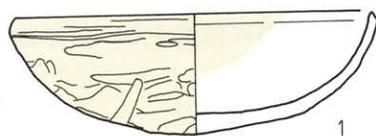
1. 7.5YR4/6 褐色 ローム中・小少量 ローム粒中量
2. 7.5YR7/8 黄棕色 ローム大~粒多量 しまり強

E-E'

1. 7.5YR4/4 褐色 ローム中・粒中量 ローム小少量
2. 7.5YR5/6 明褐色 ローム小少量 ローム粒微量
3. 7.5YR7/8 黄棕色 ローム大~粒多量 しまり強

SI-33

1. 10YR3/4 暗褐色 焼土小少量 焼土粒・ローム粒中量 ローム中・黒色土粒多量
2. 5YR3/4 暗褐色 焼土大~粒多量 ローム中・粒少量 黒色土粒中量
3. 10YR4/6 褐色 ローム大・粒・黒色土粒中量 ローム中多量
4. 7.5YR4/6 褐色 ローム粒微量
5. 7.5YR2/3 極暗褐色 ローム粒少量



第69図 第33号住居跡・出土遺物

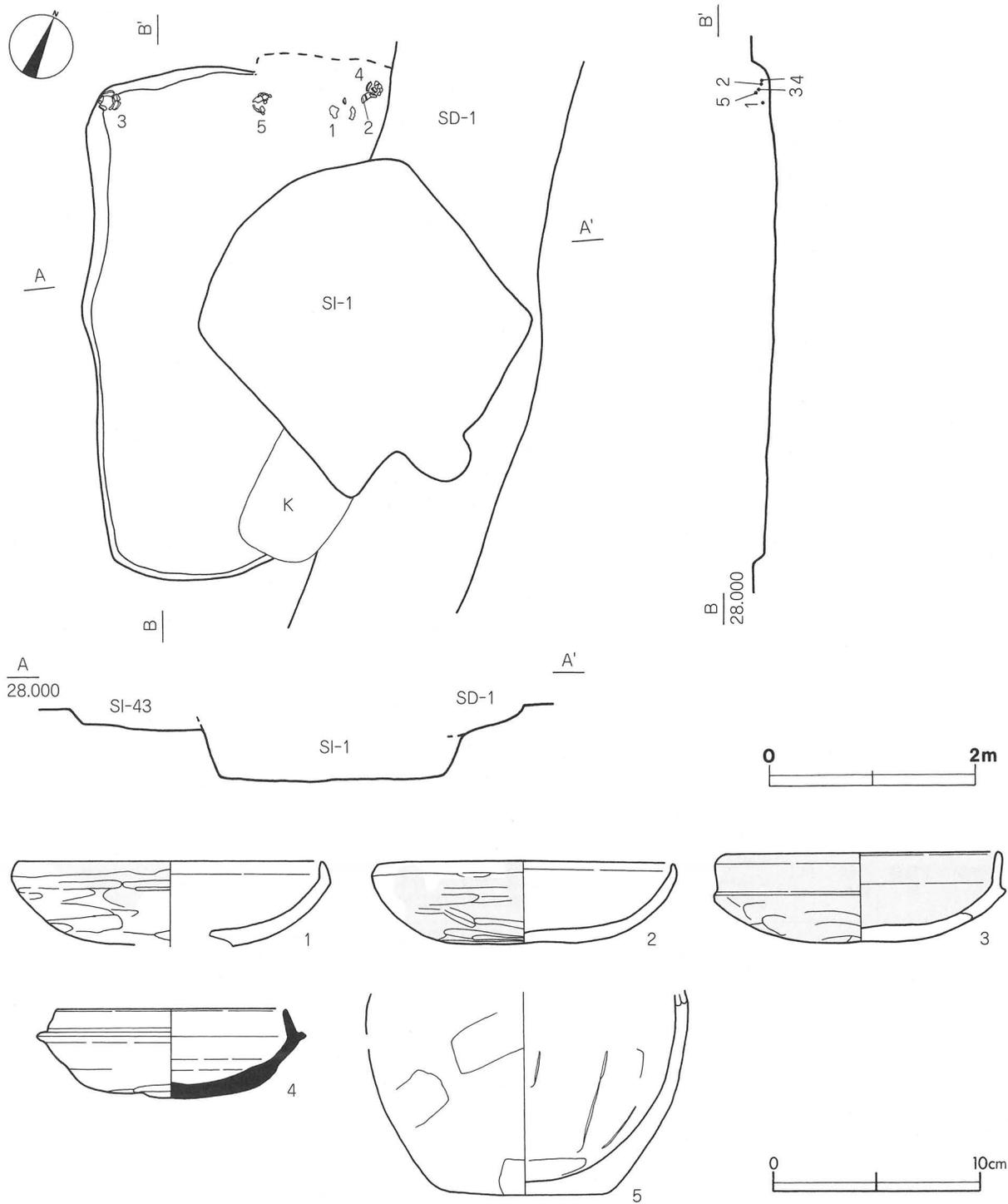
空になっている脚部の方からヘラで削り開けている痕跡が観察された。おそらく使用時に小孔の縁が割れながら拡大したものであろう。全体的には粗い作りであるが、坏部内面と口縁部外面には赤彩が施されていた。No.5は小型の壺とすべきか、あるいは椀・鉢の一種と呼ぶべきか迷う器形である。形態的にはNo.2や3の坏の底部を非常に深めに作ったもので、成形・調整技法は全く坏のそれと変わらない。球形の体部、内傾する口縁部、平底などは貯蔵に適するようにも思われる。No.6も類似した土器であるが、こちらは外反する口縁部をもっており明らかに壺を意識したものである。体部は横に膨れ、口縁部は段をもって体部から直立し、先端を外反させている。底部は平底であるが、中心からややずれた位置に作られており、立たせると器全体が若干傾いてしまう。成形・調整技法は坏類と同様であるが、体部に横位の磨きと内外面に黒色処理が施されている。No.7は甕である。「く」字に外反する口縁部、短く直立する口唇部をもつ一般的な形態の甕である。

所見 当住居跡の遺物は、第7号住居跡や第19号住居跡の遺物群と非常に良く類似している。特に第19号住居跡とは、坏の形態をはじめ、No.4の器台の脚部やNo.5の小型壺も第19号住居跡に類例をみることが出来る。よってほぼ同じ時期のものと考えることが許されよう。第19号住居跡には、陶邑編年のTK43～TK209段階の須恵器蓋が出土しており、7世紀前半頃と考えている。当住居跡もこれにあわせて7世紀前半頃と考えておきたい。

なお、当遺構をここでは住居跡として扱ったが、本来出土遺物からみて当然カマドの存在が想定される時期にもかかわらずカマドが確認されなかったこと、また、柱穴としたピットがともに壁際に位置しており他の住居ピットと在りようが異なることから、日常起居する住居跡とするよりは簡易な小屋として使用していた可能性が考えられる。

第33号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	土師器 坏	口径 14.4 器高 4.7	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口唇部は断面三角形を呈する。	底部は一方方向からのヘラ削り、体部は横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面におい橙色普通	覆土中位 完形 内外面黒色処理 (内面は部分的)
第69図 2	土師器 坏	口径 13.6 器高 4.9	底部は丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は高く直立する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面におい黄橙色普通	覆土上位 80%
第69図 3	土師器 坏	口径 [13.9] 器高 4.9	底部は丸底で、体部と口縁部の境に段が付く。口縁部は高く直立し、中位に僅かな膨らみをもつ。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石、赤褐色スコリアを微量 内外面におい黄褐色普通	覆土中位 40% (口径の25%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第69図 4	土師器 器台	口径 16.6 裾部径 12.7 器高 (9.1)	坏部は外面に段が付き、口縁部は外反して水平方向に開く。口唇部は短く直立する。脚部は中空で太く、裾部との境に段が付く。裾部は大きく開き、末端を外反させる。	坏部外面に横位のヘラ削り、口縁部の内外面に回転ナデを施す。脚部は外面に縦位のヘラ削り、裾部に回転ナデ、中空の内面に強いヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面におい黄褐色普通	覆土中～上位 80% 坏部内底面に径1.3cmの穿孔 焼成前の小孔が使用時に拡大したものの 坏部内面および口縁部外面に赤彩
第69図 5	土師器 小型壺	口径 [10.2] 底径 5.4 器高 (9.2)	底部は小さな平底で、体部は球形を呈する。口縁部と体部の境に段が付き、口縁部は内側に張りもちながら内傾きみに立ち上がる。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部外面に横位のヘラ削り後、横位のヘラ磨きを施す。口縁部に回転ナデ、内底面に不定方向のヘラナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量、非常に緻密な粘土 内外面におい褐色良好	覆土下位 50% 内外面黒色処理 (部分的)
第69図 6	土師器 壺	口径 13.9 底径 7.4 器高 13.7	底部は平底で、体部は横張りの強い球形を呈する。口縁部と体部の境に段が付き、口縁部は高く直立する。口唇部は強く外反する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部外面に横位のヘラ削り後、横位のヘラナデを施す。口縁部に回転ナデ、内底面に僅かにヘラナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量、非常に緻密な粘土 内外面黒色普通 (やや軟質)	覆土上位、90% 内外面黒色処理 底部の位置がずれており、器全体が傾く
第69図 7	土師器 甕	口径 [16.2] 器高 (10.7)	頸部はよく引き締まり、口縁部は緩やかに外反しながら高く立ち上がる。口唇部は短く直立する。	体部は内外面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面橙色普通	覆土上位 10% (頸部径の30%残存)



第70図 第43号住居跡・出土遺物

第43号住居跡〔第70図、PL.75〕

位置 調査区北西寄りE・F-13・14グリッド、標高27.5m付近に位置する。第1号住居跡・第1号溝と重複しており、土層堆積状態と出土遺物から本住居が最も古いと判断した。

規模 長軸4.74m、短軸は計測不可だがおそらく長軸と大差のない正方形を呈する住居跡と思われる。

主軸方向 N-63° -E (図版の手前を入り口と想定した場合)。

壁 外傾して立ち上がる。確認面からの深さは最深部で20cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 概ね平坦である。

ピット 確認されなかった。

カマド 北壁ほぼ中央に位置すると思われるが、確認されなかった。

遺物 遺物は北側に集中して発見された。No.1～3は土師器坏である。体部と口縁部の境に稜が付き口縁部は断面三角形を呈するもの (No.1・2)、段をもって口縁部が直立するもの (No.3) の2種が確認される。いずれも底部は平坦化の進んだ丸底か、もしくは中央部にはっきりとした平坦面が作られている。No.4は須恵器坏で、土師器坏の後者の形態と共通している。口縁部と体部の境に鏝状の強い段が付き、口縁部は内傾しながら強く立ち上がっている。また、口縁部の外面には、ややきつめのロクロ目がみられ、一条の稜が付いている。胎土は長石と黒色粒子を多く含み、全体的にざらついている。明らかに在地の製品ではないが、作りの粗さから陶邑や湖西の製品でもないと思われ、産地は不明とせざるを得ない。No.5は土師器の小型甕である。張りのある体部をもつようであるが、上半部を欠損しており、さらに被熱により器面剥離が著しいため、特徴が把握し得ない。底部に木葉痕がなく、ヘラ削り調整が施されているだけである。

所見 遺物の帰属時期は、須恵器坏の形態が、陶邑編年のTK47からTK209にかけてのものと類似しており、およそ6世紀終わりから7世紀はじめ頃にかけてのものと推測される。また、口縁部外面の稜 (ロクロ目) や器質などは、埼玉県羽尾窯の製品に類似の特徴を見出せる。現時点で同窯の製品と断定することはできないが、武蔵方面からの土器の流入は想定されてもよいと思われる。同窯はおよそ7世紀初頭に位置付けられており、おそらく当住居跡の遺物もこれに近い時期と考えることができよう。

第43号住居跡出土遺物

図版番号	器種	量方 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	土師器 坏	口径 14.7 器高 (4.1)	底部は平坦化の進んだ丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は断面三角形を呈し、僅かに内傾する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石をごく微量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土下位 80% 外面黒色処理 (部分的)
第70図 2	土師器 坏	口径 14.3 器高 4.0	底部は小さな平坦面をもち、体部と口縁部のかすかな稜が付く。口縁部は断面三角形を呈し、短く直立する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削りと軽い磨きを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面灰黄色 普通	覆土下位 50% 外面黒色処理 (部分的)
第70図 3	土師器 坏	口径 13.9 器高 4.3	底部は平坦化の進んだ丸底で、体部と口縁部の境に段が付く。口縁部は大きく直立する。	底部は多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面褐灰色、内面灰褐色 普通	覆土下位 90% 内外面黒色処理
第70図 4	須恵器 坏	口径 11.0 器高 4.3	底部は平坦化しており、体部は浅めに開く。体部と口縁部の境に強い段が付き、口縁部は内傾しながら直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、不定方向からのナデ、体部から口縁部にかけて内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量、黒色粒子を多量 内外面灰色 良好	覆土下位 90%
第70図 5	土師器 小型甕	底径 7.9 器高 (9.7)	底部はやや径が大きく、体部は丸みをもって立ち上がる。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に横位のヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量 外面橙色、内面暗赤灰色 不良	覆土下位 50% 被熱による器壁剥離が顕著

第61号住居跡〔第71・72図、PL.25・87〕

位置 調査区南東寄りR～T-27～29グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5mに位置する。重複はしていないが北東側に隣接して第60号住居跡が位置している。

規模 長軸6.96m、短軸6.92mの正方形を呈し、床面積は約48.2㎡である。

主軸方向 N-22° -W

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で42cmを測る。カマドの両袖付近を除き壁溝がほぼ全周していた。幅10～24cm、深さ8～13cmを測る。

床 概ね平坦である。北壁のカマドを中心とした両壁際に焼土範囲がみられた。

ピット 6基確認された。規模と配置からP1～4は主柱穴、P5は入り口施設に関連したピットと思われる。主柱穴は径74～100cm、深さ55～74cmを測り、いずれも坑底部に2段ピットを有していた。全て開口部が広く柱の抜き取りが行なわれたと考える。P5は径44cm、深さ18cmを測る。

カマド 北壁ほぼ中央に位置しており、煙道部は攪乱により壊されていた。残存全長1.46m、焚き口幅は54cmを測る。燃焼部は不整形で床面を17cm程掘り窪めていた。両袖の内側は被熱により赤化していた。遺物は出土していない。

覆土 10層に分層された。第7～10層はカマドに関連した覆土である。

遺物 遺物は南側のP3からNo.3・5・7の坏片、床面直上からNo.15・16の甕片が発見されている。その他にも覆土中に比較的多くの破片をみることができた。土器はすべて土師器である。注目される遺物としてはNo.17の金銅製杏葉があるが、土器洗い作業中に発見したもので、出土位置は特定できず、覆土一括の扱いとしている。

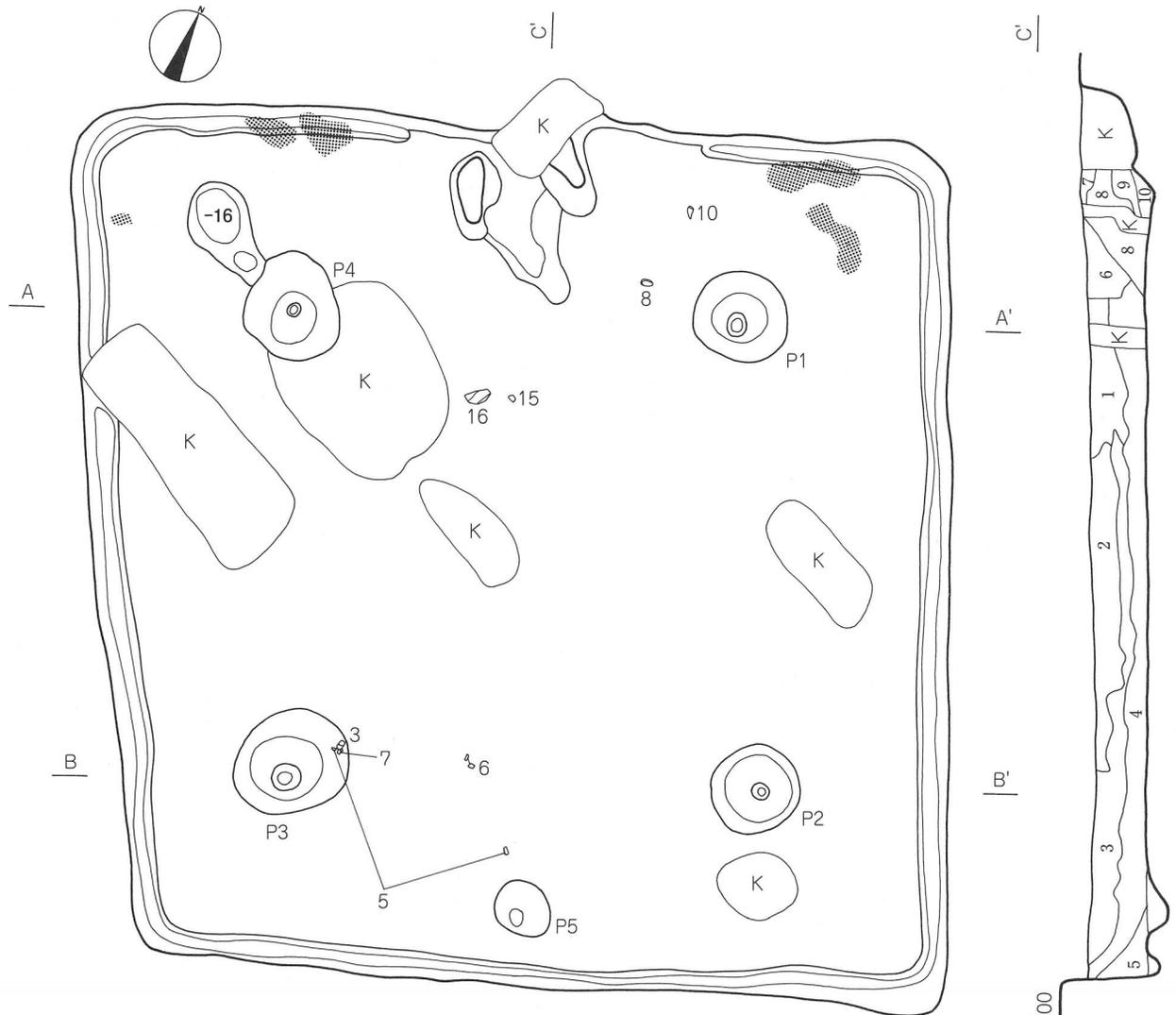
No.1～9は丸底の坏である。形態的に以下の4種に分類することができる。

- ① 口縁部が強く内湾するもの (No.1)
- ② 口縁部と体部の境に強い段が付き、口縁部が直立するもの (No.2)
- ③ 口縁部と体部の境に小さな段が付き、口縁部は外傾して器高の5割を占めるもの (No.3～5)
- ④ 口縁部と体部の境に微かな稜が付き、口縁部は器高の2割程度を占めるもの (No.6～9)

①と②は鬼高期の典型的な器形であり、特に②は須恵器坏身の模倣形態として特徴的である。当住居跡ではそれぞれ1点ずつ小片が認められただけである。一方、③と④は奈良時代に多くみられる坏の典型であり、大小の法量が各々一定量存在している。No.10・11は盤もしくは浅手の坏である。内面に間隔の粗い磨きもしくは暗文が放射状に施されている。No.12は壺甕類の底部片であるが、甕にしては器壁が厚いので、小型壺の一種と思われる。No.13・14は小型甕である。No.14は口縁部と体部の境に段が付き、直立ぎみに口縁部が立ち上がる器形で、武蔵型甕の影響を思わせる。No.15・16は一般的なサイズの甕である。厚手の器壁、膨らみをもった体部などの特徴をもつ。

No.17は金銅製の杏葉の破片である。厚さ0.5mmの銅板の表面に鍍金を施したもので、長軸方向にアマalgamの塗布が擦痕状に残る。文様は線刻で描かれ、三日月形とその下に多条線を置くパターンを、二列にならべ、それを上下に最低三段を配している。田中新史氏のいう「道上型毛彫馬具」Ⅳ期の杏葉に相当する。現状は上下端を欠失しており、上方1/3の位置で「く」字に軽く折れ曲がっている。

所見 当住居跡の遺物群は、およそ鬼高期の土器様相をもっているが、上記の③や④の坏などは新しい要素も窺える。同じ鬼高期の土器群をもつ第19号住居跡では、陶邑編年のTK43ないし209相当の須恵器蓋を下限としていたが、そこでは②の土師器坏が主流となっていた。当住居跡にはそれがごく僅かで、



A
28.000

B
28.000

C
28.000

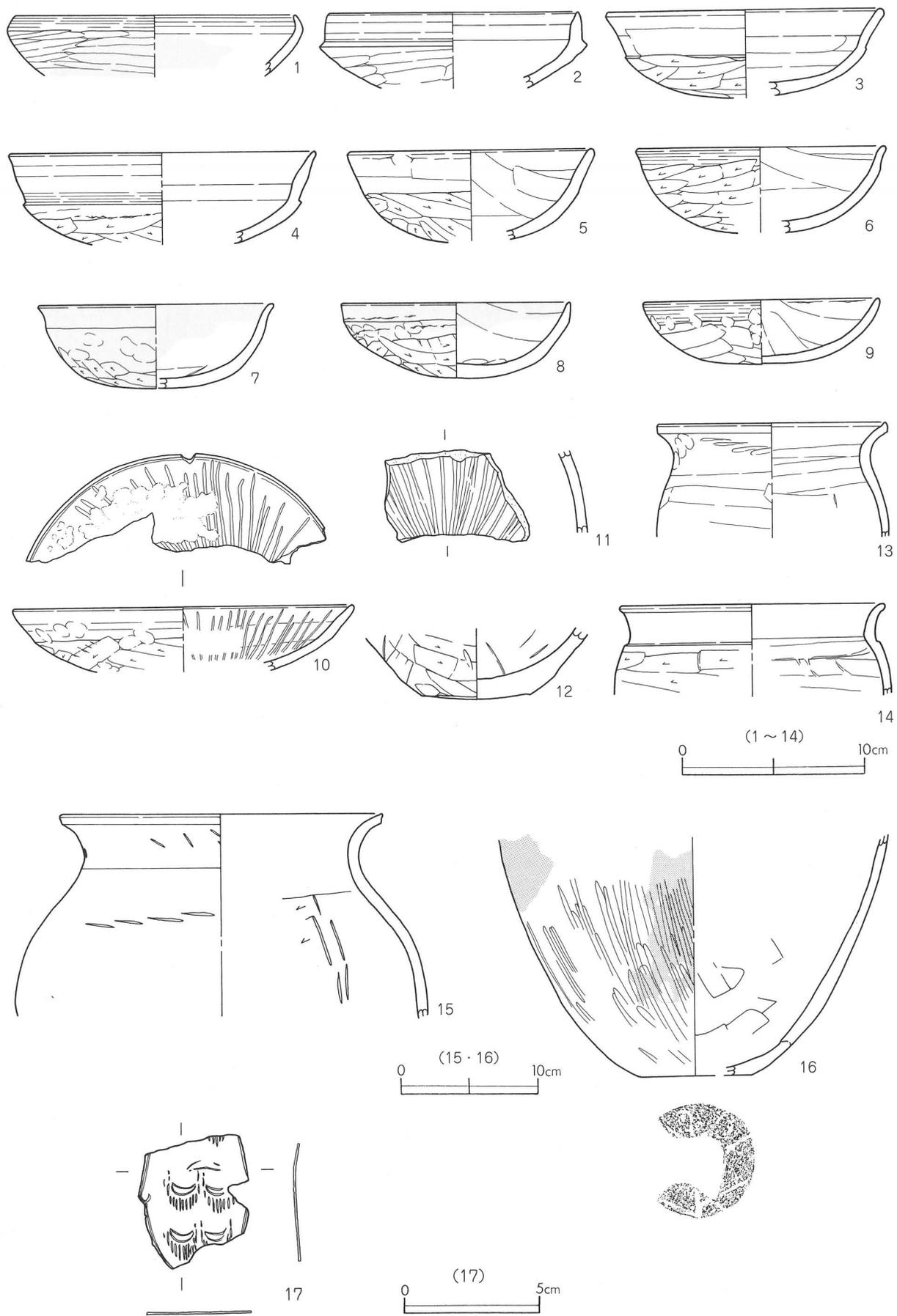
A'
28.000

- SI-61
1. 75YR3/2 黒褐色 焼土粒・ローム小中量、ローム粒微量 黒色土粒少量
 2. 75YR4/4 褐色 ローム大多量、ローム小、黒色土粒少量
 3. 75YR3/4 暗褐色 焼土粒・ローム粒微量、ローム大、黒色土粒少量、ローム中・小中量
 4. 75YR3/4 暗褐色 ローム大、黒色土粒中量、ローム中・小多量、ローム粒少量
 5. 75YR4/4 褐色 ローム小微量、ローム粒少量
 6. 75YR4/3 褐色 焼土小少量、焼土粒・ローム小・粒中量、ローム中微量
 7. 75YR4/3 褐色 ローム大中量、焼土大・小、ローム中・粒微量
 8. 75YR4/4 褐色 ローム大少量、ローム中・粒中量
 9. 75YR4/3 褐色 ローム大多量、焼土中、白色砂中量、焼土小・粒・ローム小・粒少量、ローム中微量
 10. 75YR3/3 暗褐色 焼土大・中中量、焼土小少量、焼土粒・ローム粒微量

C'



第71図 第61号住居跡



第72図 第61号住居跡出土遺物

③や④へと主流が移る過渡期とみられる。第19号住居跡を7世紀前半代とすれば、当住居跡はそれに後続する7世紀後半代の時期を充てることができるであろう。また、No.17の杏葉は田中氏の「道上型毛彫馬具」のⅣ期にあたり、飛鳥Ⅲ期の土器群と併行関係にあるという。現状では7世紀第3四半期頃に相当しよう。その伝世期間や覆土中に混入するまでの時間差を見込んでも、先の7世紀後半代を大きく出るものではないと思われる。当住居跡の土器群を7世紀後半の標識的な資料とみなすことも許されるであろう。

第61号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	土師器 坏	口径 [15.4] 器高 (3.3)	体部は直線的に開き、口縁部は「く」字に内湾する。	体部外面に横位のヘラ磨き、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量 内外面灰黄色 不良(軟質)	覆土 20% (口径の30%残存) 内外面黒色処理(部分的)
第72図 2	土師器 坏	口径 [13.6] 器高 (4.1)	体部は浅めで直線的に開き、口縁部は体部との境に強い段をもって直立する。	体部外面に磨きに近いヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石をごく微量 内外面浅黄橙色 普通(やや軟質)	覆土 細片(口径の20%残存)
第72図 3	土師器 坏	口径 15.1 器高 4.7	底部は丸底で、体部は浅めに大きく開く。口縁部は体部との境にごく小さな段をもち、器高の4割を占める。	底部に一方からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい褐色 良好	ピット3内 70%
第72図 4	土師器 坏	口径 [16.6] 器高 (4.9)	体部は浅めに大きく開く。口縁部は体部との境にごく小さな段をもって強い角度で立ち上がり、器高の5割を占める。	体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	長石・石英を少量 内外面にぶい赤褐色 普通	覆土 40% (口径の50%残存)
第72図 5	土師器 坏	口径 13.4 器高 (5.0)	体部は丸みをもって深く、口縁部との境に微かな稜が付く。口縁部は直線的に立ち上がり、器高の5割を占める。	底部に多方向のヘラ削り、体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を中量 内外面にぶい橙色 良好	ピット3内 床直 90%
第72図 6	土師器 坏	口径 [13.6] 器高 (4.6)	体部は丸みをもって深く、口縁部との境は不明瞭。口縁部は器高の2割程度を占め、軽く外反する。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面にぶい黄橙色 良好	床直 40% (口径の50%残存)
第72図 7	土師器 坏	口径 [12.8] 器高 4.5	体部は丸みをもって深く、口縁部との境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。口縁部は器高の3割を占め、やや外反する。	底部付近に一方からの手持ちヘラ削り、体部中位は未調整、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 外面黒褐色、内面明褐色 良好	ピット3内 20% (口径の20%残存) 内外面黒色処理(内面は部分的)
第72図 8	土師器 坏	口径 12.4 器高 4.1	底部は丸底で、体部は丸みをもって深い。口縁部は体部との境にごく微かな稜をもって直立する。	底部に一方からのヘラ削り、体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい黄橙色 普通	ほぼ床直 90% 内外面黒色処理(部分的)
第72図 9	土師器 坏	口径 [12.8] 器高 3.4	底部はやや平坦化した丸底で、体部から口縁部にかけては丸みをもって浅く開く。	底部から体部にかけてはナデに近い手持ちヘラ削りを不定方向、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 外面暗褐色、内面明灰褐色 良好	覆土 25% (口径の20%残存)
第72図 10	土師器 盤	口径 [18.6] 器高 (3.5)	盤状に浅い坏か。体部はやや丸みをもって浅く大きく開く。口縁部は体部との境に微かな稜をもって開く。	体部外面に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデ、内面に放射状の磨き(暗文?)を施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面にぶい赤褐色 良好	床直 20% (口径の30%残存)
第72図 11	土師器 盤	破片長 (7.0)	盤状に浅い坏か。浅く開く体部の細片。	外面に多方向からのヘラ削り、内面に放射状の磨き(暗文?)を施す。	微細な長石・石英を少量 内外面明褐色 良好	覆土 細片

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 12	土師器 壺	底径 [5.9] 器高 (3.4)	小型の壺か。体部は丸みを帯びて安定感がなく、体部は緩い角度で立ち上がり、大きく膨れるとみられる。	底部は未調整もしくは粗いナデが施される程度、体部下位に不定方向の手持ちヘラ削り、内面にヘラナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面浅黄橙色 不良(軟質)	覆土 20%(底部は完存)
第72図 13	土師器 小型甕	口径 [16.6] 器高 (8.2)	口縁部は「く」字に外反し、口唇部は断面三角形を呈する。	体部内外面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面暗褐色 普通	覆土およびカマド内覆土 10%(口径の40%残存)
第72図 14	土師器 小型甕	口径 [14.4] 器高 (4.8)	口縁部は体部との境に段をもち、強い角度で外反しながら立ち上がる。	体部に横位のヘラ削り、口縁部は回転ナデ、内面は横位の指頭ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を中量 内外面暗灰褐色 普通	覆土 細片(頸部径の20%残存)
第72図 15	土師器 甕	口径 [23.6] 器高 (14.6)	最大径は体部中位にあり、口縁部は「つ」字に緩いカーブを描いて立ち上がる。口唇部は断面三角形を呈する。	体部内外面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面におい赤褐色 普通	床直 20%(口径の40%残存)
第72図 16	土師器 甕	底径 8.6 器高 (17.3)	底径は比較的大きく、器壁は厚い。体部は下位から膨らみをもって立ち上がる。	体部下位に縦位の磨き、内面に縦位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面におい黄褐色 普通	床直 20%(底径の70%残存) 底部に木葉痕 外面煤付着

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第72図 17	金銅製品 毛彫り杵葉	(4.4)	(4.0)	0.05	(6.5)	上部・下端を欠失する。鍍金は表面のみ。文様は下向きの三日月文とその下に縦位の多条線文の組み合わせが、二列、三段以上にわたって配されている。	覆土中 40%

第74号住居跡〔第73～75図、PL.29・95〕

位置 調査区西寄りE～G-26・27グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5mに位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸5.7m、短軸推定5.2mのやや横長の長方形を呈し、床面積は推定29.6㎡である。

主軸方向 N-27° -W

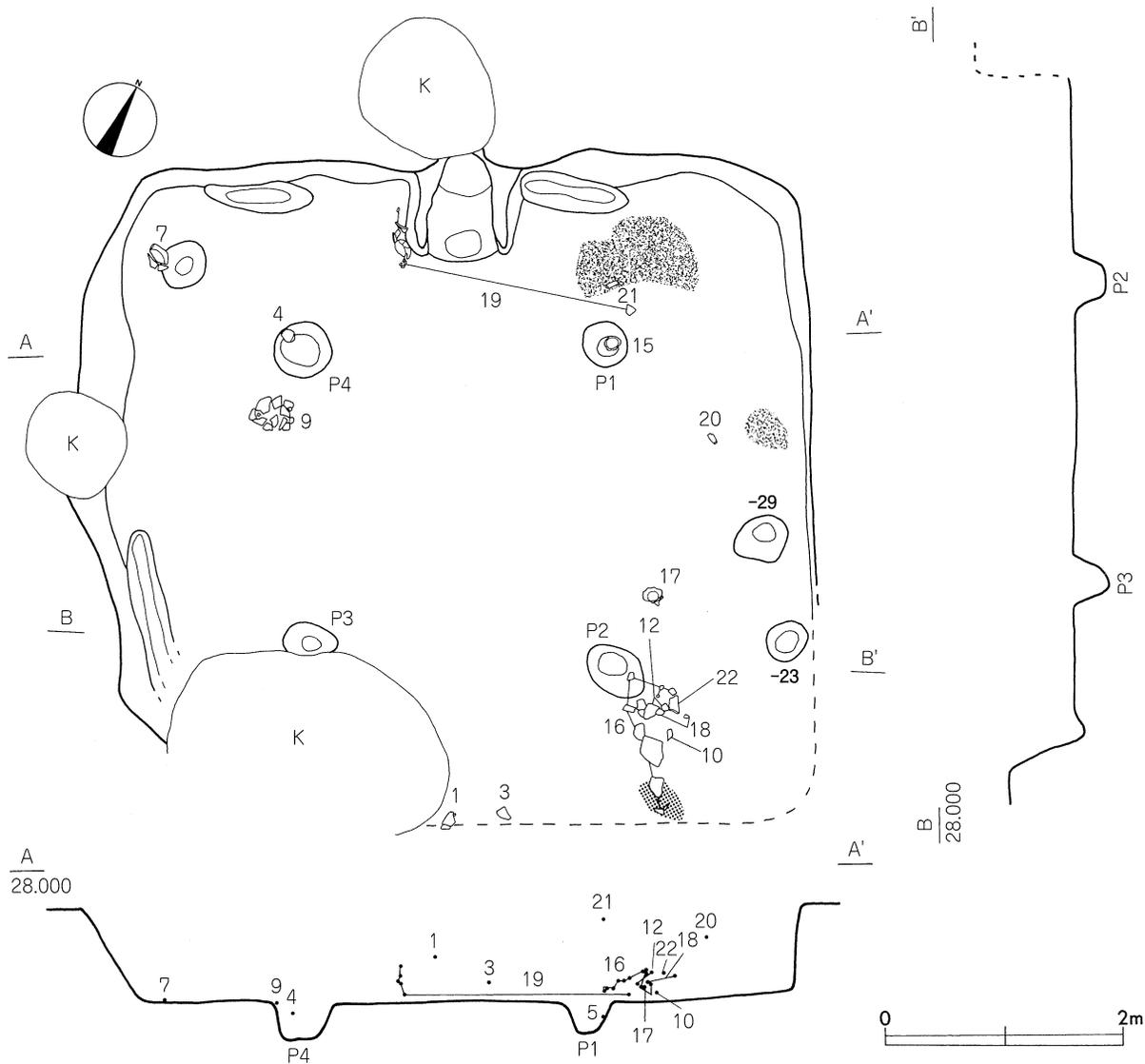
壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で55cmを測る。壁溝はカマドの両側と西壁の一部にみられ、幅16～32cm、深さ4～11cmを測る。カマドの両側の壁溝は対をなすように近似した形状であった。攪乱により壁が部分的に壊されており、また、南壁は確認できなかったため範囲を推定するに留める。

床 概ね平坦である。北東隅付近に粘土、南東隅付近に焼土範囲がそれぞれ確認された。粘土範囲は床面直上にあり厚さはほとんどない。

ピット 6基確認された。配置と規模からP1～4は支柱穴に相当しよう。径46～56cm、深さ21～31cmを測る。他のピットは径34～48cm、深さ22～29cmを測る。支柱穴も含め規模が比較的近似しており、全て柱穴の可能性も考えられる。支柱穴とカマドの配置から入り口は南方向と推測される。

カマド 北壁のほぼ中央に位置している。壁外に掘り出して構築されており、煙道部は攪乱により壊されている。推定全長1.0m、焚き口幅は54cm、燃焼部の深さは9cmを測る。両袖の遺存状態は良好で、形状は幅が細く比較的長い。カマド確認時は全体が白色粘土で覆われたような状態であった。遺物は左側の袖に貼りつくように土師器甕(No.19)が出土している。

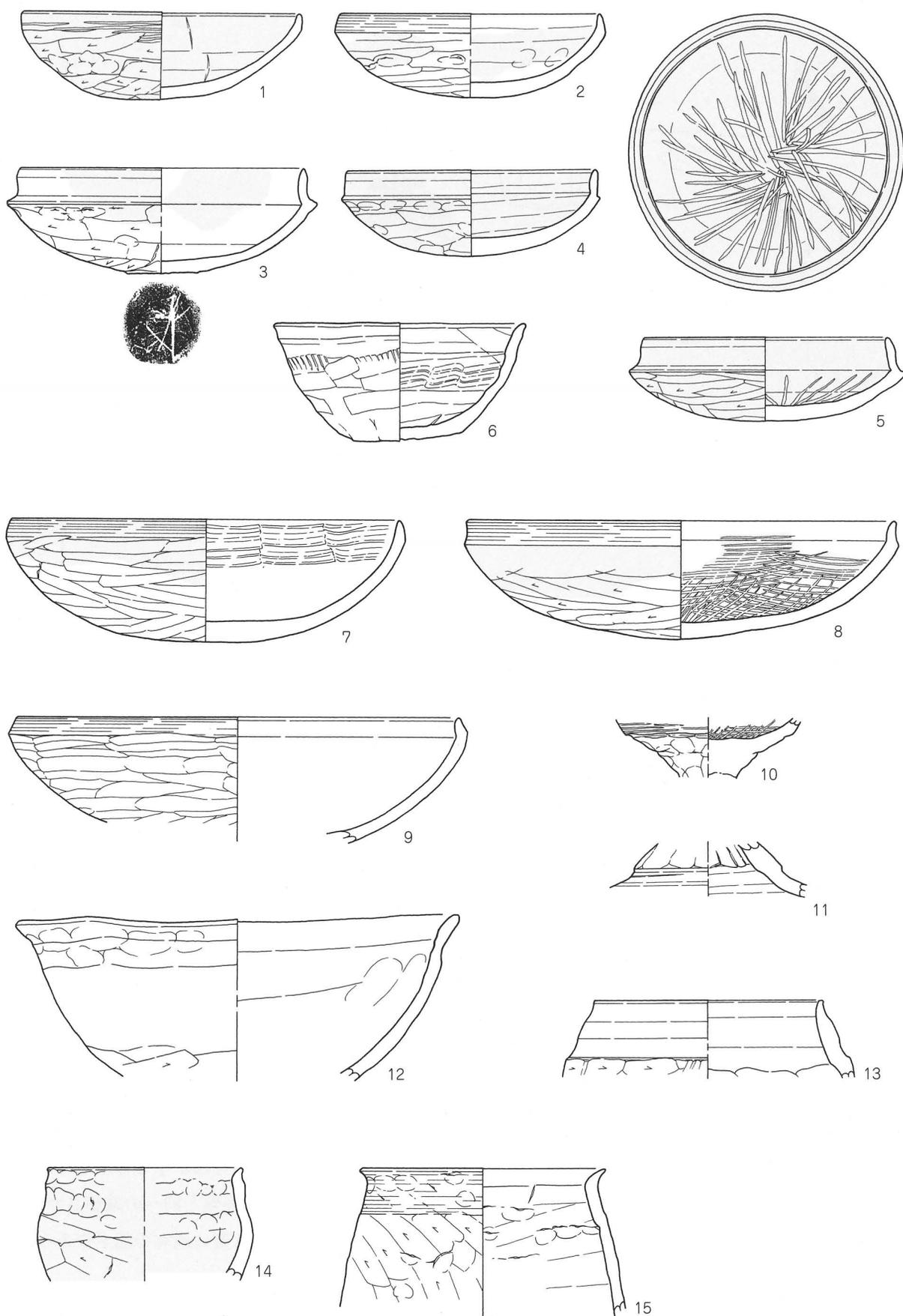
遺物 遺物の量は比較的多く、土器類はすべて土師器である。カマドの袖部付近から小型甕(No.19)が潰れた状態で発見された他、P2付近に甕(No.16)や鉢(No.12)、支脚(No.22)などが集められた状態で出土している。一次埋没後に廃棄されたような出土状況を呈する箇所もみられた。No.1～5は



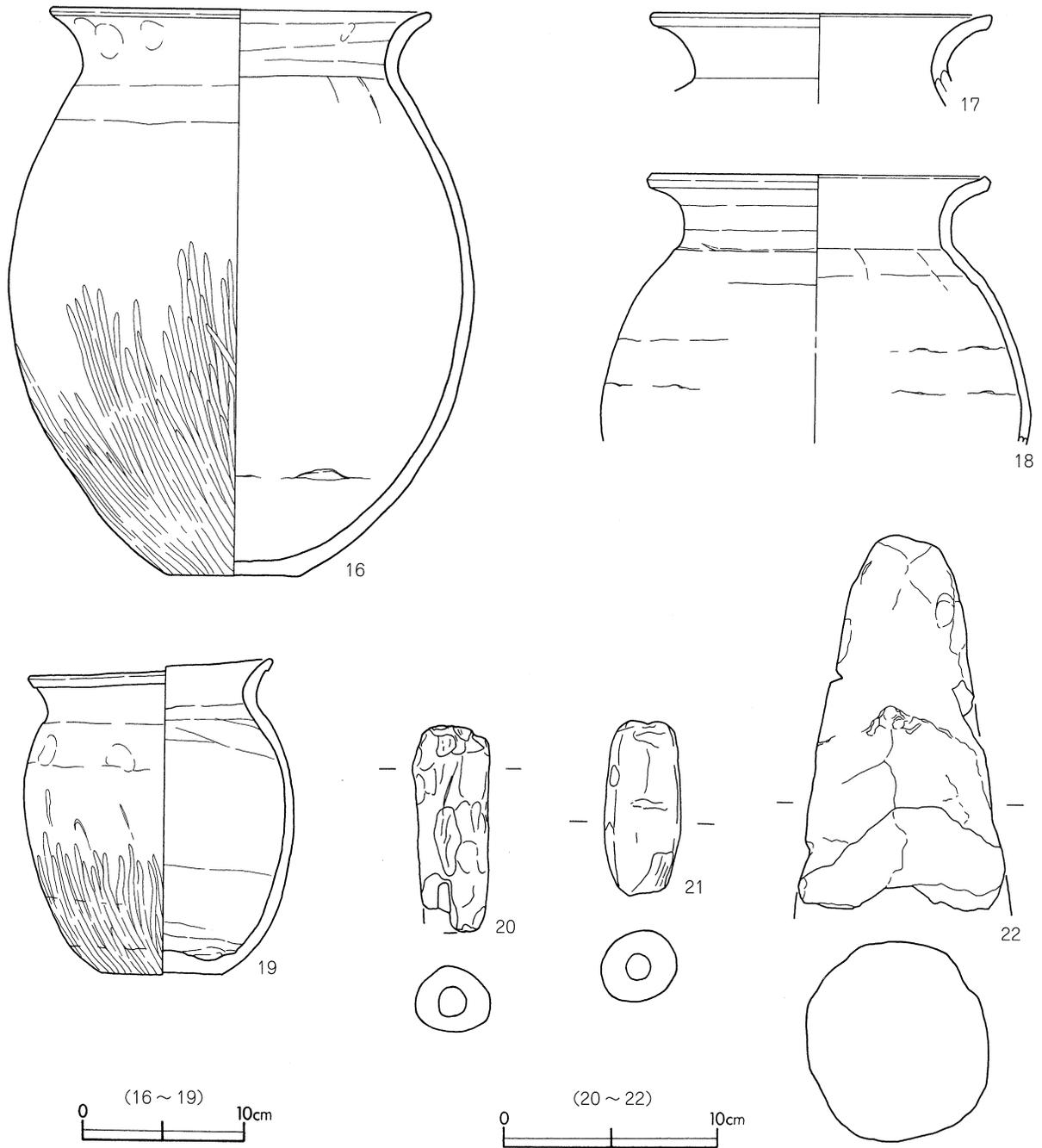
第73図 第74号住居跡

坏である。口縁部が内傾するタイプ (No.1・2) と、段をもって直立するタイプ (No.3~5) の2種があり、両者の割合は小破片を含めてもほぼ1対1である。両者とも黒色処理が施されており、特にNo.5には内面に放射状の磨き (暗文) が施されていた。No.6は坏の一種もしくは小型の鉢で、平底を有している。No.7~9は口径20cmを越える大型の坏で、口縁部形態は上記の2種が確認される。No.10と11は高坏の坏部と脚部で、同一個体の可能性がある。No.12は鉢である。体部下位にヘラ削りがみられる点や胎土が粗い点などは、供膳具よりも甕類に近い作りである。No.13は口縁部が窄まる器形であり、体部は球形を呈するとみられることから、小型の壺かと思われる。作りは、坏類と同一の端整さがみられ、胎土も緻密である。これに対してNo.14・15は口縁部が開き、作りや胎土は甕に通有の粗さがみられ、小型の甕として区別した。

No.16~18は一般的な大きさの甕である。厚手の器壁と強く外反する口縁部をもつ。No.19はこれと同様の形態をもつ小型甕である。No.20・21は円筒状の土錘、22は手捏ねの支脚である。また、図示していないが、安山岩製の砥石が1点出土している。



第74图 第74号住居跡出土遺物 (1)



第75図 第74号住居跡出土遺物（2）

所見 当住居の遺物は、第7・19・33号住居跡の土器群とおおむね共通した様相がみられる。特に2種の坏が同じ割合で並存していることや、No.11の高坏やNo.13の小型壺は第19・33号住居跡と共通している。第19号住居跡はTK43～209相当の須恵器蓋が下限となっており、およそ7世紀前半と考えている。当住居跡もこれに併行する時期を考えてよいであろう。

第74号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	土師器 坏	口径 14.8 器高 4.6	底部は丸底で、口縁部は断面三角形で僅かに内傾する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面黒褐色 普通	覆土中位 80% 内外面黒色処理
第74図 2	土師器 坏	口径 [13.8] 器高 4.4	底部は丸底で、口縁部は断面三角形で僅かに内傾する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土 40% (体部～底部の60%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第74図 3	土師器 坏	口径 [15.0] 器高 5.6	底部は丸底だが、中央部に削り残しの微隆起あり。体部と口縁部の境に段が付き、口縁部は外反ぎみに直立する。	体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面明灰褐色 普通	覆土中位 30% (口径の30%残存) 底部に木炭痕 内外面黒色処理 (部分的)
第74図 4	土師器 坏	口径 13.4 器高 4.5	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段をもって直線的に立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部及び内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面黒褐色 普通	ピット4内完形 口縁部に使用による磨耗顕著 内外面黒色処理
第74図 5	土師器 坏	口径 13.0 器高 4.5	底部は丸底で、体部はやや浅め。口縁部は体部との境に段をもって内傾ぎみに大きく立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削りを施す。内面に放射状の磨き(暗文?)が付く。	ごく微細な長石・灰色チャート粒を微量 内外面黒褐色 良好	ピット1内 完形 内外面黒色処理
第74図 6	土師器 坏	口径 13.2 底径 5.8 器高 6.3	小型の鉢か。底部は平底で、体部は丸みを帯びて強い角度で立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に小刻みなヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい橙色 普通	覆土 80%
第74図 7	土師器 大型坏	口径 20.4 器高 6.5	底部は丸底で、体部は大きく開く。口縁部は断面三角形を呈し、やや内傾する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部外面に回転ナデを施す。内面にハケ目のようなヘラナデ痕が付く。	微細な長石を微量 外面橙色、内面にぶい黄褐色 良好	床直 75% 外面黒色処理 (部分的)
第74図 8	土師器 大型坏	口径 [22.8] 器高 6.2	底部は丸底で、体部は大きく開く。口縁部は体部との境に稜をもって、やや外反ぎみに直立する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。内面に縦横の磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土 60% (体～底部の60%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第74図 9	土師器 大型坏	口径 23.5 器高 (6.6)	底部は丸底と想定される。体部は丸みを帯びて大きく開く。口縁部は体部との境に稜をもって内傾する。	体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面にぶい橙色 良好	床直 60% (底部のみ欠損)
第74図 10	土師器 高坏	器高 (3.0)	坏部の破片。下位は朝顔形に開き、口縁部は段をもってやや急な角度で立ち上がる。	外面下位に指頭圧痕、口縁部外面に横位の磨き、内面に放射状の磨きを施す。	微細な長石を中量、金雲母を微量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土下位 20% (坏部下位の60%残存)
第74図 11	土師器 高坏	器高 (2.3)	脚裾部の破片。上部はやや膨らみをもって開き、下部は段をもって外反ぎみに大きく開く。	外面上位に縦位のヘラ削り、内面に横位のヘラ削り、下位は内外面に回転ナデを施す。	微細な長石を中量、金雲母を微量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土 細片 (裾径の25%残存) No.10と同一個体か
第74図 12	土師器 鉢	口径 23.6 器高 (8.8)	体部は丸みを帯びて大きく開き、口縁部は緩やかに外反する。	体部下位に横位のヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。器面剥離が顕著。	径1mmの長石・石英を多量 内外面にぶい橙色 普通	覆土下～中位 40% (口径の50%残存)
第74図 13	土師器 小型壺	口径 [12.2] 器高 (4.0)	深手の坏ないし鉢の可能性あり。口縁部は体部との境に段をもって内傾しながら大きく立ち上がる。	体部外面に横位のヘラ削り、内面に指頭による強いナデ、口縁部の内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を少量 内外面橙色 普通	覆土 細片 (口径の20%残存)
第74図 14	土師器 小型甕	口径 [10.2] 器高 (6.0)	体部は中位に最大径をもち、口縁部は僅かに内傾しながら大きく立ち上がる。	体部下位に横位のヘラ削り、口縁部に軽い回転ナデと指頭圧痕が付く。	微細な長石・石英をごく微量 内外面黒褐色 普通	覆土 10%を2片 (体部径の20%残存) 内外面黒色処理
第74図 15	土師器 小型甕	口径 [12.8] 器高 (7.5)	体部は直線的で下方向へ開く。口縁部は強く外反する。	体部外面に斜位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に軽いヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面明黄褐色 良好	覆土 細片 (口径の25%残存)
第75図 16	土師器 甕	口径 23.2 底径 8.1 器高 34.9	最大径を体部中位にもち、底部は径が大きく安定感がある。口縁部は緩やかに「く」字を描いて外反する。	底部に一方方向からの磨き、体部下位に縦位の磨き、口縁部に回転ナデを施す。器面剥離が顕著。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面橙色 普通	住居南西寄り覆土下～中位 50% (口径の50%残存、底部完存)
第75図 17	土師器 甕	口径 16.0 器高 (3.6)	口縁部は「く」字に強く外反し、口唇部は小さく直立する。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土下位 20% (口縁部の80%残存) 器台に転用したものか?
第75図 18	土師器 甕	口径 [20.4] 器高 (16.5)	体部中位に最大径をもち、頸部は強く縮まる。口縁部は「コ」字を描いて外反し、口唇部はごく小さく直立する。	体部の内外面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面赤褐色 普通	住居南西寄り覆土下位 覆土下位 細片 (口径の20%残存)
第75図 19	土師器 小型甕	口径 15.3 底径 7.5 器高 19.5	最大径を体部中位にもち、底部は径が大きく安定感がある。口縁部は緩やかに「く」字を描いて外反し、口唇部は断面菱形を呈する。	底部にヘラナデと磨き、体部下位に横位のヘラ削りと縦位の磨き、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい橙色 普通	カマド周辺覆土下～中位 70%

図版番号	器種	法 量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第75図 20	土製品 土錘	9.6	3.5	3.4	(94.0)	円筒状の土錘。孔は径12mm。太い指で握るようにして整形されている。	微細な長石・石英を中量 橙色 良好	覆土上位 90%
第75図 21	土製品 土錘	7.7	3.6	3.6	(90.0)	葉巻状に両端が窄まる形の土錘。孔の径は12mm。指頭圧痕が多数。	微細な長石を少量にふい黄橙色 普通	覆土上位 ほぼ完形
第75図 22	土製品 支脚	(17.4)	(9.5)	9.3	(1010.0)	円錐形の支脚。指頭によるナデ整形。	径1mmの長石・石英を多量 明赤褐色 不良	覆土中位 70%

第82号住居跡〔第76・77図、PL.31・97〕

位置 南西調査区域にかかるW～Y-41～43グリッド、南側の谷に向かって落ち込む斜面の標高27.0～27.5mの間に位置している。確認されている範囲では他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸7.54m、短軸残存2.9mのおそらく方形を呈する住居である。南側に大きな張り出し部を有しており、張り出し部の規模は、住居の主軸方向と平行する辺は1.8m、これに対し横は1.56mを測る。東側の大半が調査区外である。

主軸方向 N-101° -W

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で37cmを測る。壁溝は南側の一部と西側の張り出し部との接合箇所を除き巡っており、幅は10～24cm、深さ4～9cmを測る。また、張り出し部と住居壁のほぼ延長上に、主軸方向に平行して対となる位置に間仕切り状の溝がみられた。長さ66～104cm、幅18～23cm、深さ15～20cmを測る。間仕切り状の溝と壁溝との接点は同様に対となるピットが確認された。ピットは楕円形を呈し、径32・38cm、深さ60・71cmを測る。張り出し部内は円形ピットが1基確認され、径54cm、深さ14cmを測る。張り出し部と対となる溝・ピットはいずれも接しており、この三者でひとつの入り口施設を形成していたと考えられる。

床 やや起伏を有している。焼土と粘土の範囲が散在してみられた。

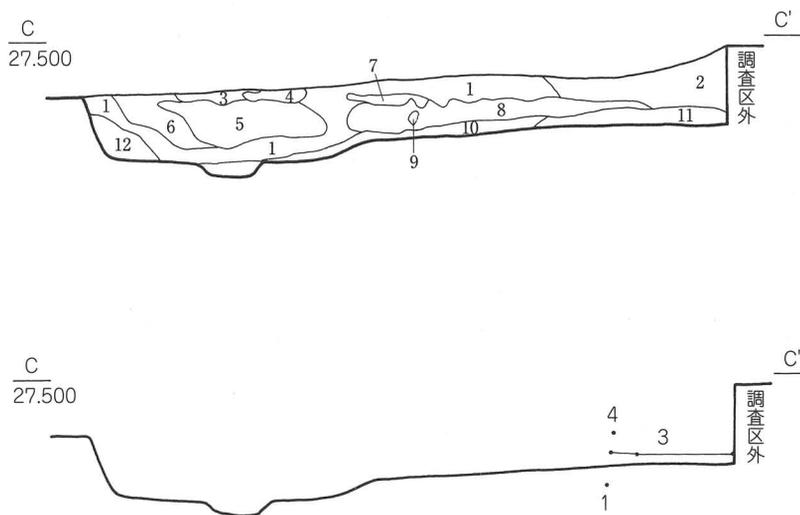
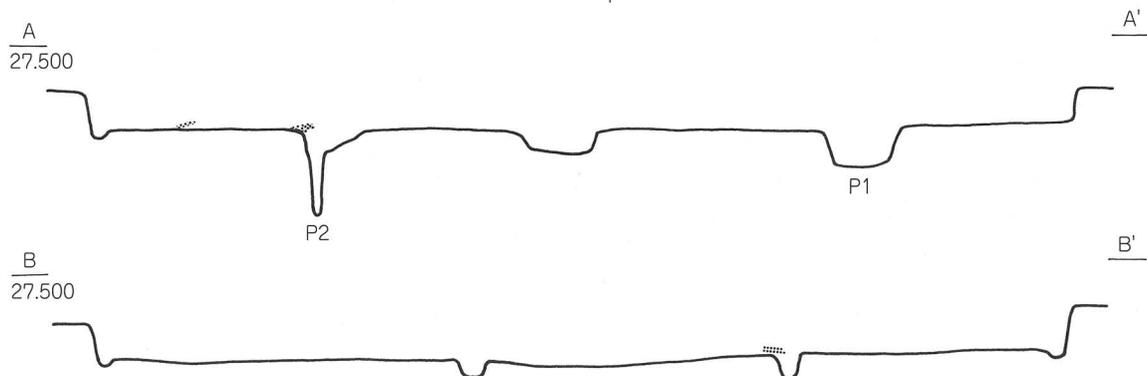
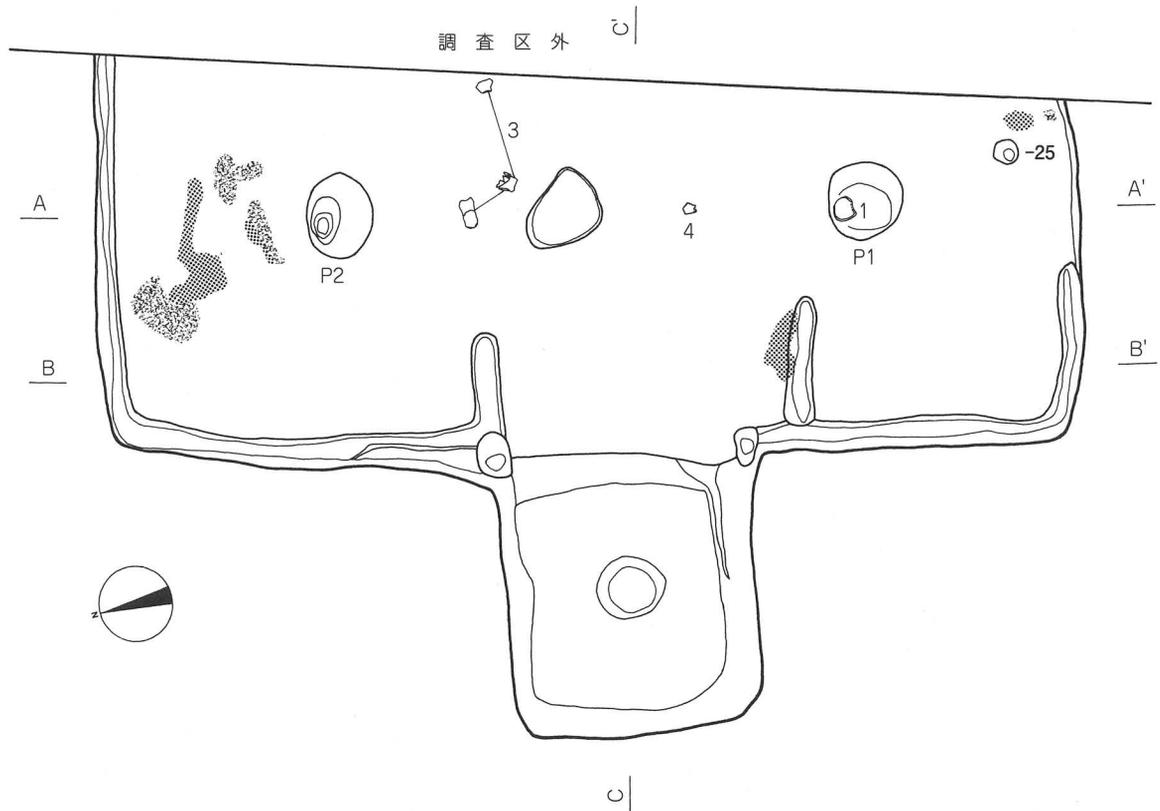
ピット 住居本体側に4基確認された。配置と規模からP1・2は主柱穴に相当すると思われる。径62・68cm、深さ32・74cmを測る。他の2基は規模が大きく異なっていた。

カマド 確認されていない。おそらく張り出し部と対になる東側に位置していたと考えられる。

覆土 12層に分層された。覆土下位から中位にかけて黒褐色のブロック状の堆積がみられることから、埋め戻し土と考えられる。

遺物 出土遺物は僅かで、土器はすべて土師器であった。P1の覆土中より土師器の坏が出土している。No.1・2は坏で、両者とも口縁部の立ち上がりに典型的な鬼高期の様相を見て取れる。No.3は甕である。胴部は球胴状を呈し、口唇部は短く立ち上がっている。No.4は大型砥石の剥片である。

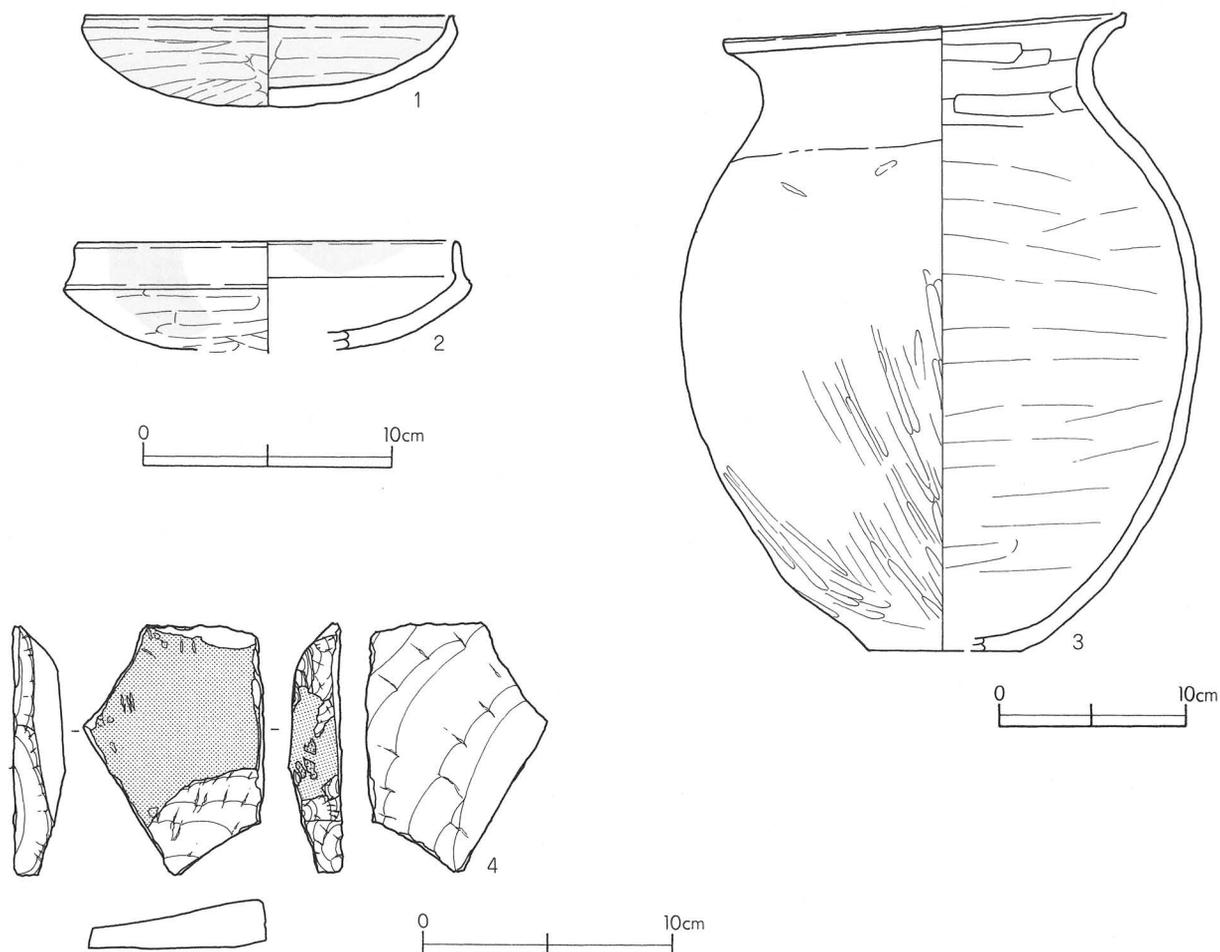
所見 本住居のように大形の張り出しを有する住居は、本遺跡で1軒だけであった。出土遺物は坏の口唇部形態から7世紀前半代に相当すると考える。住居跡の時期もほぼ同様であろう。



- SI-82
- | | | | |
|--------------|-----|----------|----------------------|
| 1. 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム粒少量 | ローム小中量 |
| 2. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小・粒少量 | |
| 3. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小・粒少量 | |
| 4. 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム中微量 | ローム小中量
ローム粒多量 粘性強 |
| 5. 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム小・粒微量 | 粘性強 |
| 6. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小微量 | ローム粒少量 |
| 7. 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム大・粒中量 | ローム中・小少量 |
| 8. 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム小・粒微量 | |
| 9. 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム大・粒多量 | ローム中少量
ローム小微量 粘性強 |
| 10. 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム大・中少量 | ローム小・粒中量 粘性強 |
| 11. 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム大~小中量 | ローム粒極めて多量 粘性強 |
| 12. 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム小微量 | ローム粒中量 粘性強 |



第76図 第82号住居跡

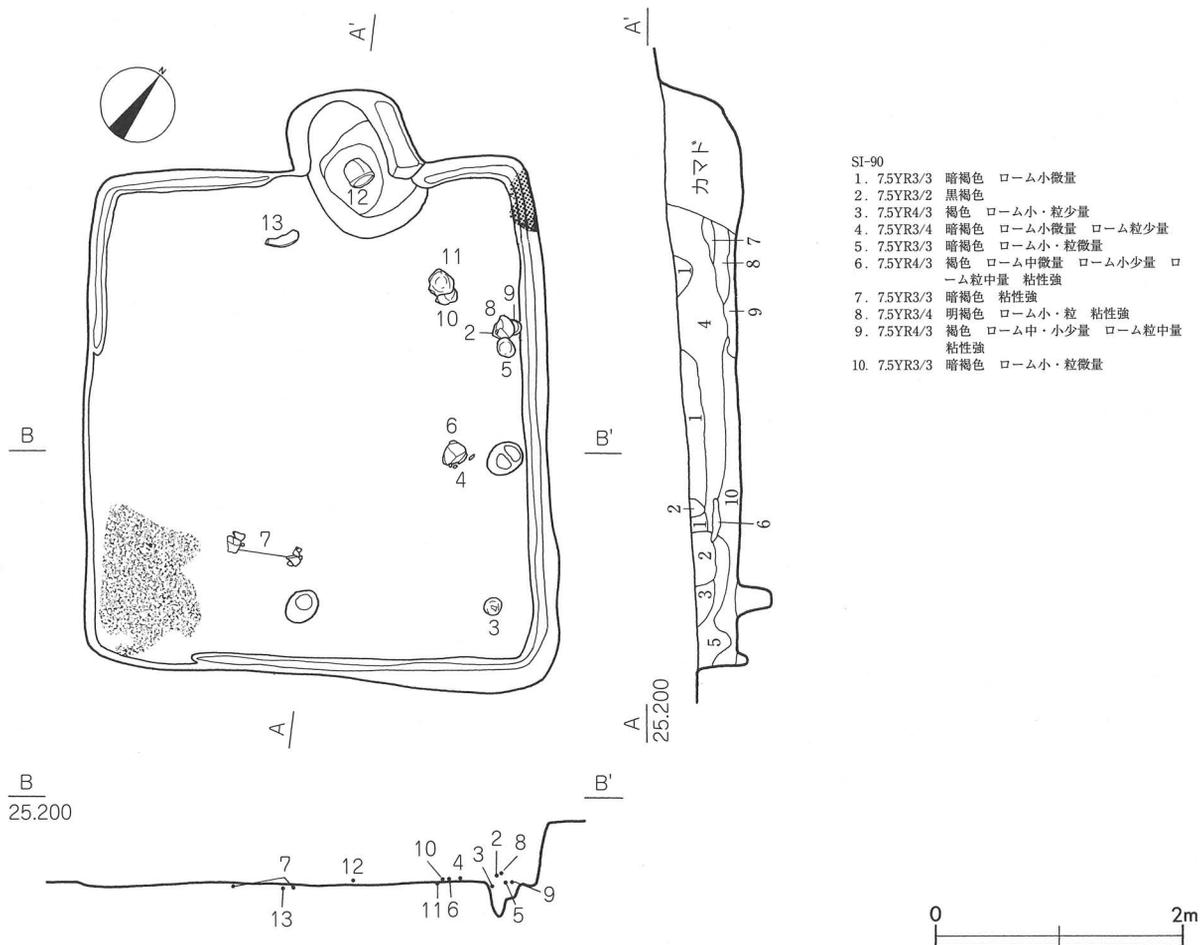


第77図 第82号住居跡出土遺物

第82号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 1	土師器 杯	口径 14.6 器高 3.7	底部は丸底で、体部は浅く開く。口縁部は小さく直立する。	底部に一方方向、体部に横位のヘラ削りとヘラナデを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面にふい黄橙色と黒色 普通	ピット1内 95% 内外面黒色処理
第77図 2	土師器 杯	口径 [15.4] 器高 (4.2)	底部は丸底で、体部は浅く開く。口縁部は外反ぎみに大きく立ち上がる。	体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面にふい褐色 普通	覆土 25% (口径の 20%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第77図 3	土師器 甕	口径 21.4 底径 8.0 器高 33.9	体部は最大径を中位にもち、丸く大きく膨らむ。口縁部は緩やかに「く」字に外反し、口唇部はごく小さく直立する。	体部外面の中位以下に縦位の磨き、底部に不定方向の磨き、口縁部に回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を少量 内外面にふい橙色 普通	覆土下位 90%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第77図 4	石製品 砥石	9.9	7.2	1.9	(147.2)	砂岩製の大型砥石の剥離片。現状での使用面は2面。平坦な使用面に長軸方向の擦痕が残る。	覆土中位 20%程度



第78図 第90号住居跡

第90号住居跡〔第78・79図、PL.34・101〕

位置 調査区南寄りO・P-34・35グリッド、南の谷に向かって傾斜する標高25.0mに位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.82m、短軸3.46mの長方形を呈し、床面積は約13.2㎡である。

主軸方向 N-37° -E。住居の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で52cmを測る。南隅付近を除き壁溝が全周しており、規模は幅8～12cm、深さ2～5cmを測る。

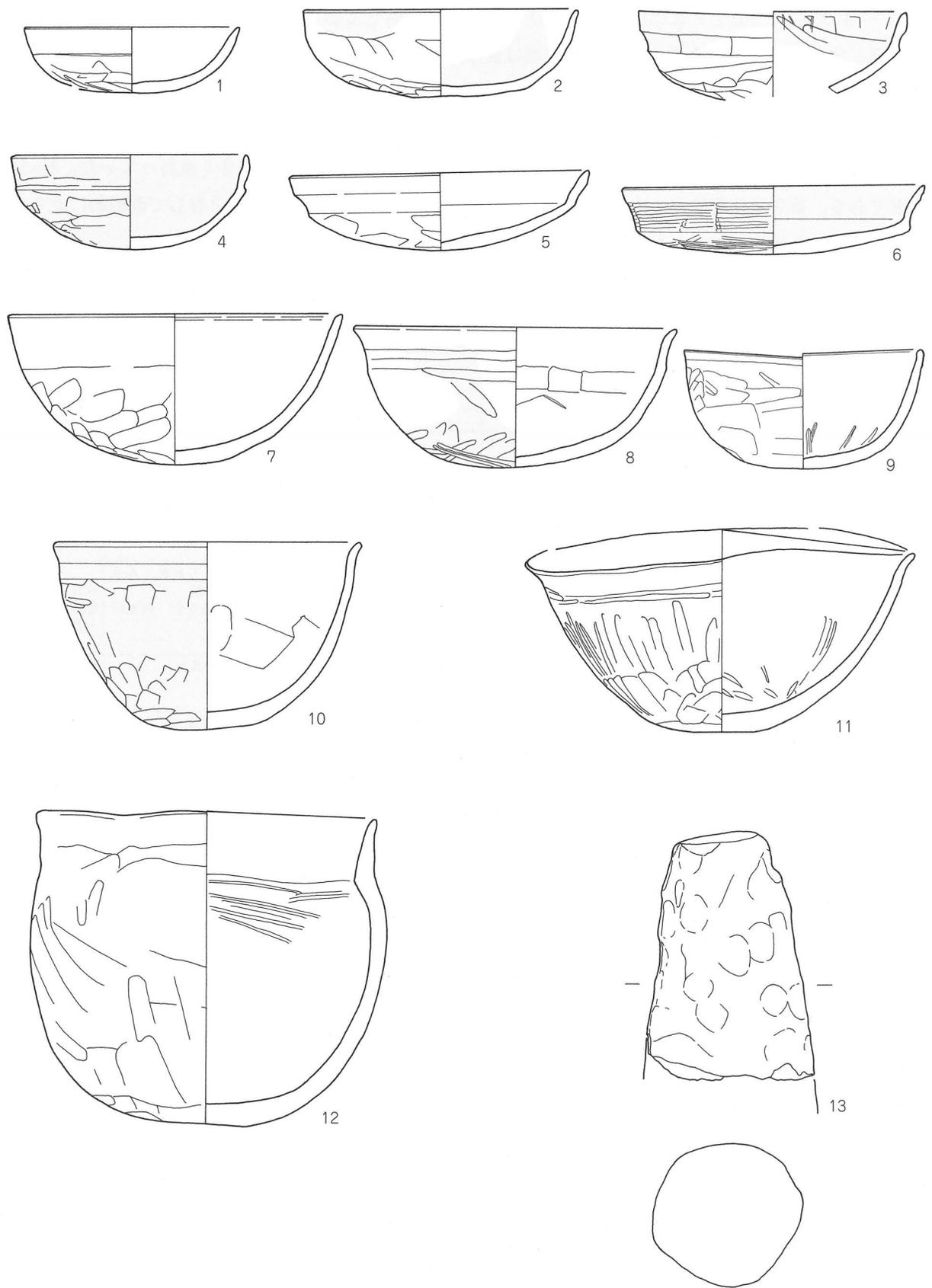
床 ほぼ平坦である。北壁隅は焼土範囲、南壁隅は粘土範囲がみられた。粘土範囲は厚みを有しており、壁際では15cm程と厚く、壁から離れるにつれだんだんと薄くなり床面直上に至っている。

ピット 2基確認された。カマドと対をなす位置のピットは入り口施設に伴うピットであろう。径28cmで深さ26cmを測る。

カマド 北西壁やや北寄りに位置し、壁下場より72cm程壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。全長1.2m、燃焼部は深さ7cmを測る。両袖の痕跡はなく、煙道部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。燃焼部中央に土師器の小型甕が口縁部を床方向に向け倒置した状態で出土していた。

覆土 10層に分層される。比較的近似した土層が堆積しており、埋め戻し土の可能性が考えられる。

遺物 北東壁付近の床面直上から完形の坏が多く出土している。出土遺物はすべて土師器である。



第79图 第90号住居跡出土遺物

No.1～6は坏で、No.1・2は口唇部にかけて緩やかに内湾しており、短い稜を有している。No.3は口縁部と体部の境に明瞭な段を持ち、口縁部は直立気味に立ち上がっている。No.4もこれに類似しているがNo.3のように段の幅が広い。No.5・6は内面に大きく稜を有し、口縁部は反りながら外傾している。No.6は口縁部の高さが、屈曲下部の高さを上回っていた。No.7～9は椀、10・11は鉢である。いずれも丸底で、口縁部形態は坏に類似している。No.11は口縁部が大きく波打っていた。No.12は甕である。第7号住居跡出土の小型甕に類似しているが、口縁部は内面に稜を有して直線的に立ち上がり、底部は丸底気味であった。No.13は支脚の上部である。全面に指頭痕がみられた。

所見 遺物は大半が床面直上からの出土であり、住居の廃絶に伴い時間をおかずに廃棄されたものと考えられる。出土遺物から7世紀後半代に営まれた住居跡であろう。

第90号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)		器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	土師器 坏	口径 器高	11.2 3.4	僅かに丸底を呈する体部から丸味を持って立ち上がる。口唇部は先細りする。	底部一方向からのナデ。周辺寄り はナデ調整。口縁部内外面横ナデ。	均質な良土、長石・ 石英粒微量 橙色 普通	覆土 40%
第79図 2	土師器 坏	口径 器高	14.2 4.6	僅かに平底を呈する底部から直立 気味に立ち上がる。体部と底部の 境の稜は無い。	外底面は中心寄りがナデ、体部寄 りは指ナデ又はナデ。口縁部は内 外共に横ナデ。	均質な良土、赤色微砂微量 外面褐灰色 内面に ぶい橙色 普通	床直 90% 一部黒色処理
第79図 3	土師器 坏	口径 器高	13.8 (4.5)	丸底の底部から低めに立ち上 がり、口縁部は直立する。体部と口 縁部の境、口縁部の2段ナデの部 分は稜をもつ。	底部ナデ。口縁部横ナデ。外面は 二段ナデで、下位のナデは小単位 に区切れる。欠損部から底部はき しめん状の粘土紐を巻き上げて成 形したと思われる。	長石・石英粒・赤色 微砂少量 外面褐灰色 内面橙 色 良好	床直 90% 一部黒色処理
第79図 4	土師器 坏	口径 器高	12.2 (5.0)	丸底の底部から丸味を持って立ち 上がる。口縁部は直立する。外面 体部と口縁部境に稜を生じる。	外底部一方向からのナデ。体部寄 りはへら削り調整。口縁部横内外 面横ナデ。	均質な良土 黒褐色 良好	床直 70% 内外面黒色処理
第79図 5	土師器 坏	口径 器高	15.5 (4.1)	緩やかに丸味をもつ底部から、体 部は外傾して立ちあがる。底部と 体部の境に稜を生じる。	外底面は中心を一方からナデ、 周縁寄りをへら削り調整。内底面 は回転ナデ、体部横ナデ。外体部 は二段ナデ。	均質な良土 赤色微 砂少量 ぶい橙色 普通	床直 70%
第79図 6	土師器 坏	口径 器高	15.7 3.6	平底の幅広い底部から、口縁部が 短く外反気味に直立する。底部と 体部の境に稜を生じる。	外底面は中心を一方からナデ、 周縁寄りをへら削り調整。内底面 中心をナデ、体部境を横ナデ。体 部横ナデ。外体部は二段ナデ。	均質な良土 外面黒褐色 内面に ぶい橙色 普通	床直 80% 内外面黒色処理
第79図 7	土師器 椀	口径 器高	17.3 8.0	丸底の底部から丸味を持って立ち 上がる。境の稜はない。口唇部僅 かに外反。	外体部ナデ。口縁部内外横ナデ。 内底面時計回りのナデ。欠損部 から底部はきしめん状の粘土紐を巻 き上げて成形。	長石・石英粒微量 橙色 普通	床直 70%
第79図 8	土師器 椀	口径 器高	16.9 7.4	丸底の体部から丸味を持って立ち あがる。口縁部は僅かに括れて外 反する。	体部から底部はナデ。口縁部は内 外横ナデ。内底面は布状のもので 拭き取るようなナデ。	良土 長石・雲母・ 石英粉粒微量 褐灰色 普通	覆土下位 80% 外面黒色処理
第79図 9	土師器 椀	口径 器高	12.3 6.0	丸底の体部から直立気味に立ち上 がる。	外面底部から体部はナデ。口縁 部はナデ。内面底部はナデの上に へら状工具が放射線状に押捺され る。口縁部はナデ。	長石・石英・赤色・ 黒色微砂少量 ぶい橙色 普通	床直 100% 内面一部黒色 化
第79図 10	土師器 鉢	口径 器高	16.0 9.8	丸底の底部から丸味をもって立ち 上がる。口縁部で弱く括れ口唇部 は短く外反する。	体部ナデ。口縁部横ナデ。	長石粒・雲母粉微量 外面黒褐色 内面に ぶい橙色 普通	床直 80% 外面黒色処理
第79図 11	土師器 鉢	口径 器高	20.3 10.5	僅かに平底を呈する底部から、緩 やかに丸味をもって立ちあがる。 口縁部は外反する。	外底面ナデ。外体部下から上にナ デ。口縁部内外共にナデ。	長石粒微量 褐灰色 普通	床直 80%
第79図 12	土師器 甕	口径 底径 器高	17.6 5.0 16.4	丸底の底部から丸味をもって立ち上 がる。口縁部で弱く括れ口唇部は直 立する。口縁部内面に稜を生じる。	体部外面ナデ。口縁部横ナデ。体 部内面へら状工具の横ナデ。	長石粒微量 褐灰色 普通	カマド内 80% 表面一部黒色化

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	上面幅	厚さ (cm)	重量 (g)			
第79図 13	土製品 支脚	12.9	4.8	(8.8)	(750)	底面を一部欠くも、ほぼ完形の土 製支脚。外面全体に指頭痕が残る。	小石・雲母粉少量 砂質 ぶい赤褐色 普通	床直 100%

5. 奈良・平安時代

本遺跡から概期の住居跡は63軒、掘立柱建物跡は11棟発見されている。時間的な連続性がみられることから、分離せずまとめて扱うこととする。前時代は台地全体に住居跡が拡散して立地していたが、当概期は標高27.5m付近の台地中央部に濃密に分布している。掘立柱建物跡は第5・9号掘立柱建物跡が調査区の南西部に位置している他は、第6・7号溝で区画されている西側で集中して発見されており、溝との関連が想起される。遺物が出土していない掘立柱建物跡も存在するが、概ね奈良・平安時代の範疇に収まるものと判断した。以下、遺構番号順に述べていくこととする。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡〔第80・81図、PL.6・51〕

位置 調査区北西F-13グリッド、標高27.5mの台地平坦面に位置する。南北方向に延びる第1号溝により壁の一部が壊され、また、第43号住居跡の床面を壊して構築されている。土層堆積状況と出土遺物から第1号溝より古く、第43号住居跡より新しいと判断した。

規模 長軸2.26m、短軸2.3mの正方形を呈し、床面積は約5.2㎡である。カマドと対になる壁面はやや曲線的となる。

主軸方向 N-32°-W。概ね住居の四隅が東西南北を向いている。

壁 第1号溝と重複する東側は、溝により床から30cm程の高さから上半部が壊されている。壁の最深部は確認面から58cmで、概ね垂直に立ち上がっている。壁溝は確認されなかった。

床 中央にかけてやや低くなる。

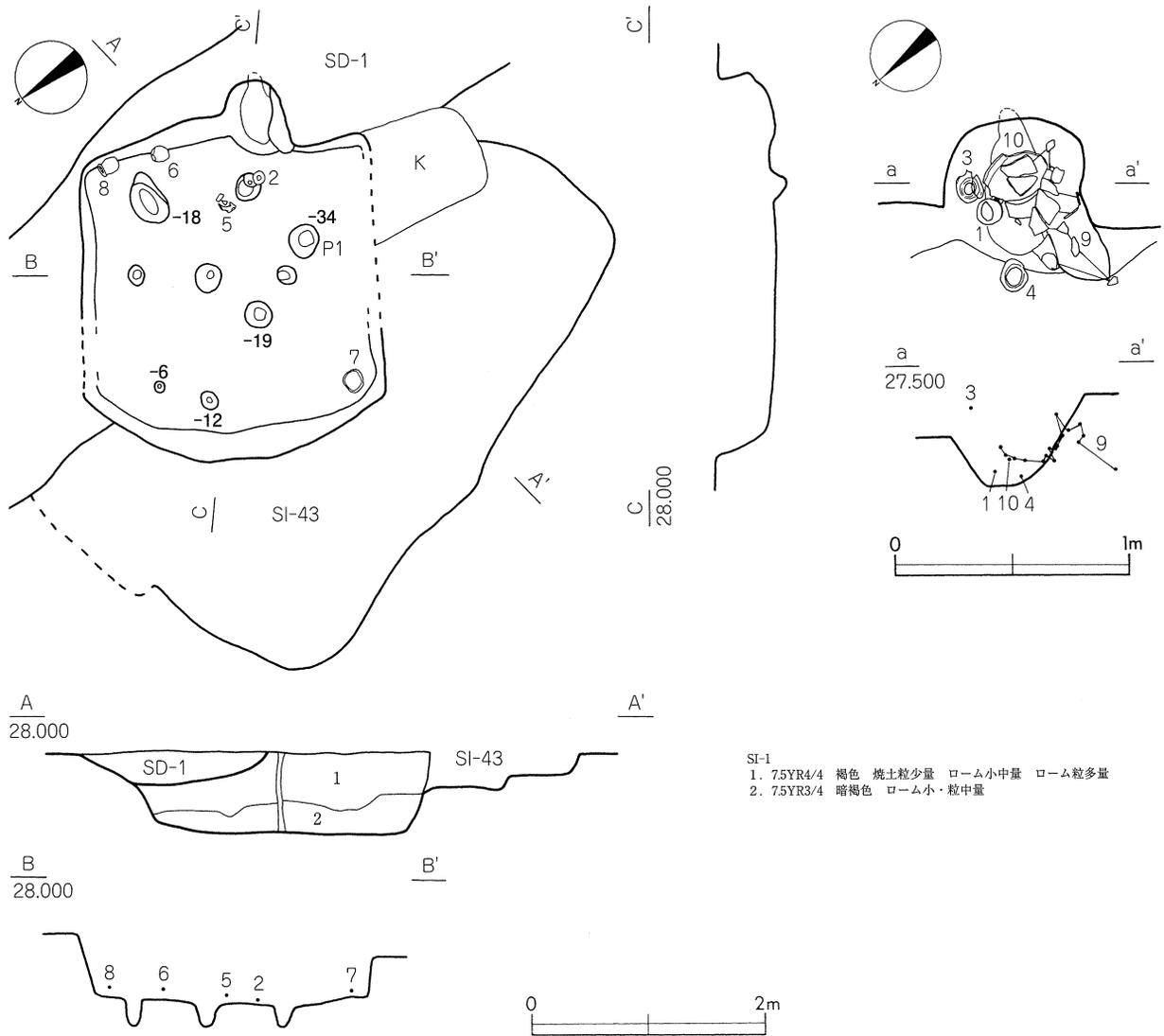
ピット 9基確認された。形状は円形・楕円形を呈し、規模は長径9～45cm、深さ6～34cm程である。いずれのピットも比較的浅く主柱穴とは決めがたいが、配置からP1がこれに相当しようか。また、カマドと対になる位置、もしくは北東壁側にみられるピットのいずれかが入り口ピットと考えられる。北西壁、もしくは北東壁側が入り口となろう。

カマド 南東壁のほぼ中央、壁外に40～56cm程掘り出して燃焼部と煙道部が構築されている。右側の袖部のみ一部残存しており、著しく被熱している。全長62cm、焚き口幅推定60cm、燃焼部は床から6cm程掘り込まれており、奥壁にかけてオーバーハングしていた。

覆土 水平に堆積する2層が確認された。おそらく埋め戻し土であろう。

遺物 カマドの燃焼部から土師器甕2点と土師器・須恵器の坏が3点確認された。また、カマド周辺の床面直上ないし僅かに浮いた位置から土師器皿や須恵器坏、小型甕などが出土している。カマドの燃焼部から出土した土器はすべて被熱していないため、カマドの廃絶に伴って投棄されたものと思われる。器種は土師器・須恵器の坏と皿、大小2種の土師器甕である。No.1は土師器の坏で、やや丸底気味の底部をもち、内面に黒色処理が施されていた。カマド内から出土したが被熱痕はなく、口縁部には灯芯痕もみられる。No.2～5は須恵器坏で、いずれも底径が大きく、特にNo.4はいわゆる箱形坏の形態をとる。No.6・7は土師器皿で、丸みを帯びた底部と浅く立ち上がる体部をもつ。内外面に細かな磨きが施されているが、畿内産に特徴的な内底面のらせん状暗文は付けられていない。住居跡の東西の両隅付近から出土している。No.8は土師器の小型甕で、住居跡東コーナーから出土した。No.9・10は一般的なサイズの土師器甕で、底径が大きく安定感をもった形態である。カマド内から重なるよう出土した。

所見 土器の帰属時期は、比較的大きな底径をもった須恵器坏や浅い土師器皿の存在、鈍重な土師器甕

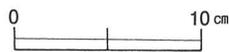
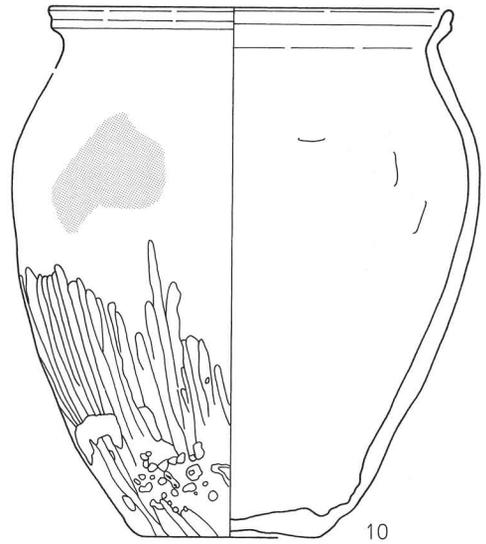
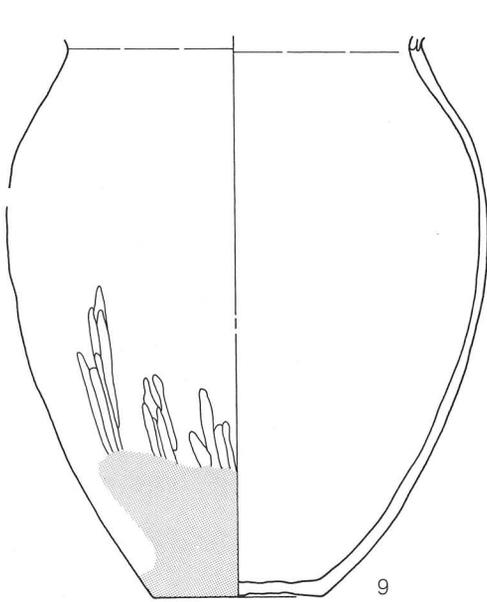
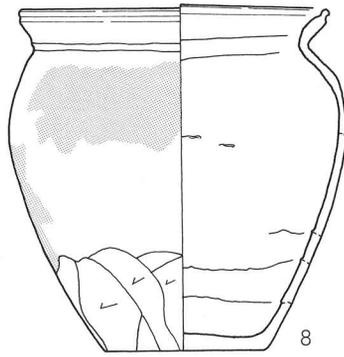
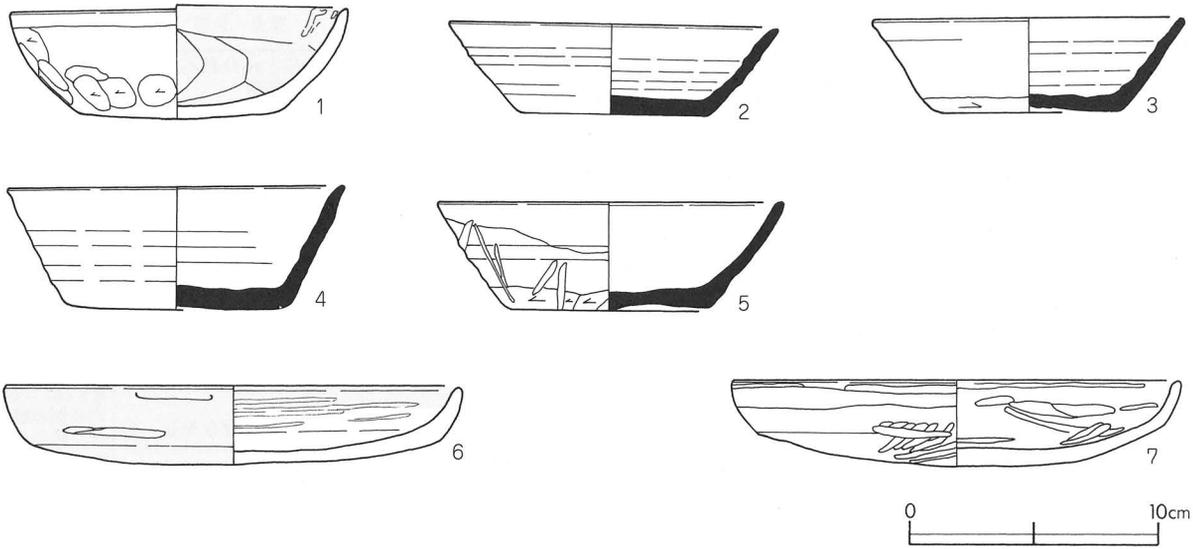


第80図 第1号住居跡・カマド遺物出土状況

の形態などの諸特徴から、奈良時代初頭頃に位置付けるのが妥当と思われる。当住居跡はこれらの遺物がカマドの内より出土していることから、該期に営まれたものと考えられる。当集落の中では数少ない南東側にカマドを持つ住居跡である。

第1号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	土師器 坏	口径 13.4 底径 8.3 器高 4.4	底部は平底で比較的径が大きく、 体部は丸みを帯びて立ち上がる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は横方向に小刻みなヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を 中量 外面にぶい橙色、内面 黒色 普通	カマド燃焼部 完形 内面黒 色処理 内面に2箇所 タール付着の 灯芯痕
第81図 2	須恵器 坏	口径 13.3 底径 7.7 器高 3.6	底部は平底で、体部は直線的に大 きく開く。	底部は回転ヘラ切り後、多方向からの軽いヘラ削りを施す。体部は内外面に間隔の狭いロクロ目を付ける。体部下端にごく軽い回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を 少量、白雲母を多量 内外面にぶい黄灰色 普通 (やや軟質)	床直 完形



第81图 第1号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 3	須恵器 坏	口径 12.6 底径 7.6 器高 3.7	底部は平底で、体部は直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からの強いヘラ削りを施す。体部下端に軽い手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 良好	カマド覆土 80%
第81図 4	須恵器 坏	口径 13.4 底径 8.6 器高 5.0	底部は平底で径が大きく、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。いわゆる「箱形坏」を呈する。	底部は回転ヘラ切り後、ナデに近いヘラ削りを多方向から施す。体部は均一的な回転ナデ調整を施す。	径1～2mmの長石・石英を中量、微細なチャート粒、赤色スコリアを少量 内外面におい橙色 普通	カマド燃烧部 95%
第81図 5	須恵器 坏	口径 13.9 底径 8.0 器高 4.4	底部は平底で、体部は局所的に内湾しながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、軽いナデ以外はほとんど未調整。体部下端に断続的な回転ヘラ削りを施す。	径1～2mmの長石・石英を多量 内外面褐色 良好	覆土下位 50% 体部外面に青灰色の火摺
第81図 6	土師器 皿	口径 18.0 底径 16.5 器高 3.2	底部は僅かに丸みをもって張り出し、体部はごく浅く、強い角度で立ち上がる。	底部中央部は一方向からのヘラ削り、外縁は反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部外面および内面は回転ナデ後に横位の磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面明赤褐色 普通	覆土下位 完形 内底面の磨きは、細かな器面剥離によって方向不明 内外面の口縁部に黒色処理
第81図 7	土師器 皿	口径 18.0 底径 16.6 器高 3.5	底部は僅かに丸みをもって張り出し、体部はごく浅く、強い角度で立ち上がる。	底部中央はヘラ削り後一方向の磨き、外縁は反時計回りのヘラ削り後、縁に沿って磨きを施す。体部内外面は横位の磨き、内底面は一方向の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を微量、ごく微細な金雲母を微量 内外面におい橙色 良好	覆土下位 完形
第81図 8	土師器 小型甕	口径 16.6 底径 8.7 器高 18.3	最大径は肩部にあるが、底径が大きく安定感がある。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は段をもって短く直立する。	体部下位に手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面におい褐色 普通	覆土下位 完形 底部に木葉痕 肩部付近に煤付着
第81図 9	土師器 甕	底径 9.2 器高 (30.0)	体部は僅かな丸みを帯びて長く伸び、最大径を肩部付近にもつ。頸部の絞まりは弱く、口縁部は「く」字に外反する。	体部下位に縦位の磨きを施す。器壁は比較的薄く作られる。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面におい橙色 普通	カマド燃烧部 70% 底部に2枚の木葉痕 体部外面に煤付着
第81図 10	土師器 甕	口径 [20.6] 底径 9.4 器高 28.4	最大径は肩部にあり、頸部の引き締まりは弱い。底径は大きく安定感があり、器壁も厚い。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は段をもって直立する。	体部下位に縦位の磨きを施す。	径1～3mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面におい橙色 普通	カマド燃烧部 70% 底部に木葉痕 底部および体部外面に煤付着、 底部付近に豆粒状の剥離

第4号住居跡〔第82図、PL.6・51〕

位置 調査区北側G・H-11・12グリッド、標高27.5mに位置する。西側で第2号住居跡と重複しており、土層堆積状況と出土遺物から本住居跡が新しいと判断した。

規模 長軸2.3m、短軸2.28mのほぼ正方形を呈する。床面積は約5.2㎡である。

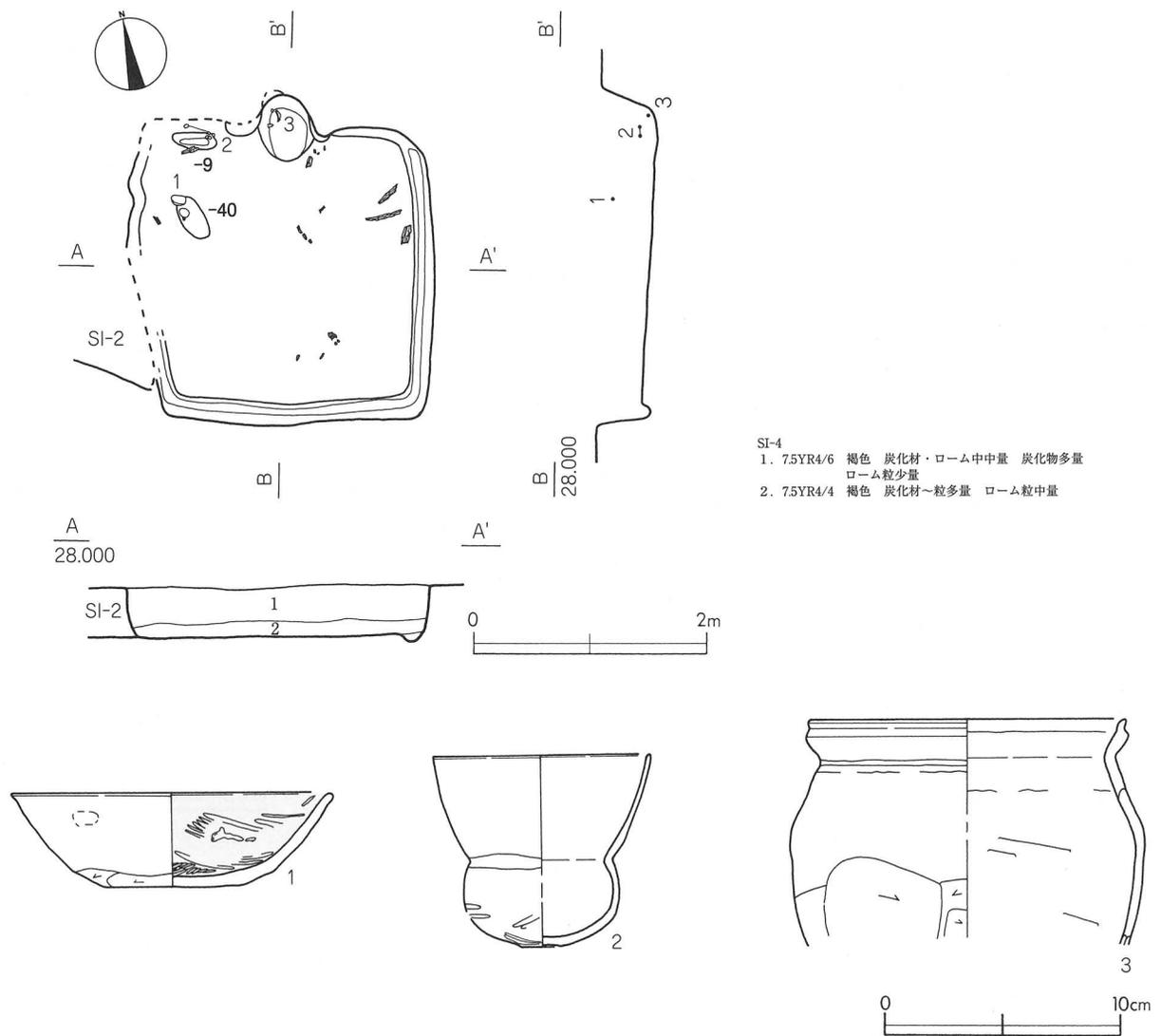
主軸方向 N-12° -W

壁 床面からほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で40cmである。壁溝は北壁と西壁の一部を除きほぼ全周しており、カマド左側の細長いピットも壁溝と考えた。壁溝の幅は10～12cm、深さは2～7cmを測る。

床 概ね平坦である。北側を主として炭化材が散在していた。

ピット 1基確認された。配置と規模から支柱穴に相当すると思われるが他は不明である。楕円形を呈し、長径40cm、深さ40cmを測る。入り口部はカマドと対となる南側であろう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置する。壁下場より35cm程壁外に掘り出し、燃烧部と煙道部を構築している。奥壁にかけて緩やかに立ち上がり、一部オーバーハングしている。全長は54cmを測り、袖の長さは短い。が、燃烧部が袖よりかなり手前側から掘り込まれていることから、使用時は現状より長かったと思われる。



第82図 第4号住居跡・出土遺物

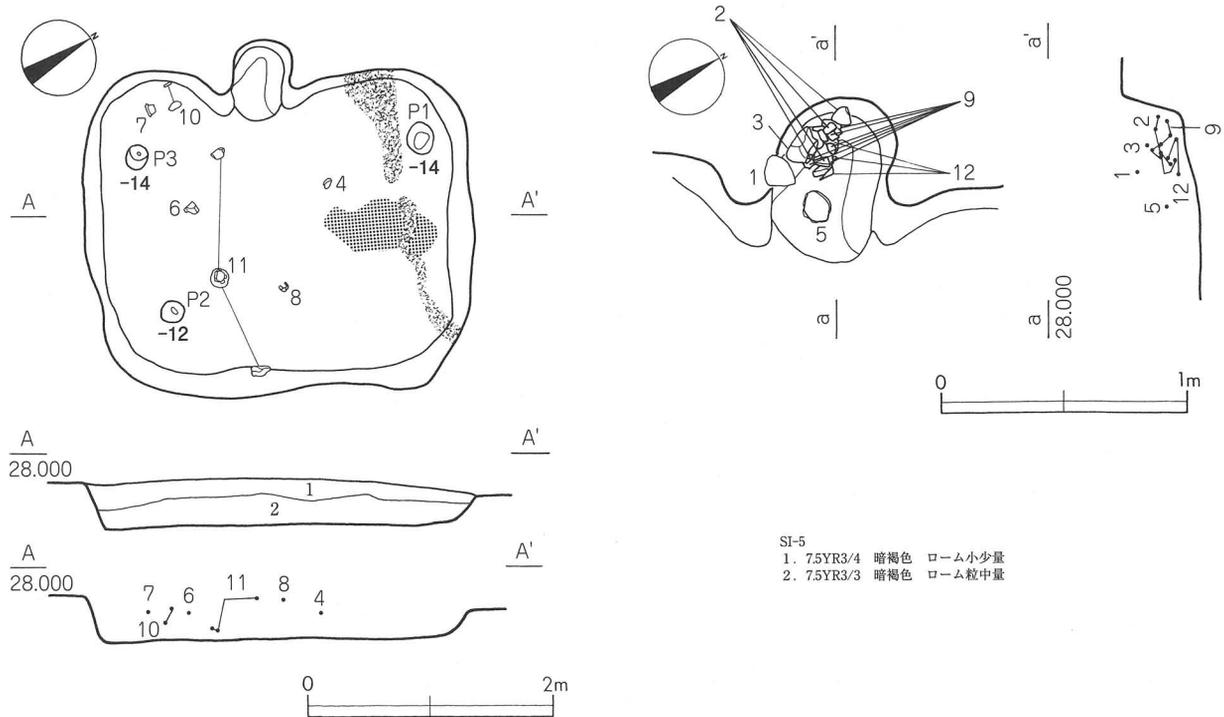
る。焚き口幅は約46cm、燃焼部は床から2cmと浅く掘り込まれており、一部被熱により赤化していた。
覆土 2層に分層された。ともに炭化材・炭化粒が多量に混入し、ほぼ水平に堆積していることから埋め戻し土と考える。また、西側で第2号住居跡と重複しており、後述する出土遺物と土層堆積状況から本住居跡が新しいと判断した。

遺物 覆土中～上層から土師器坏と埴、カマド内から小型甕が確認された。No.1は内面黒色の坏で、椀を思わせる丸みを帯びた体部と外反する口縁部をもつ。内壁に灯芯痕が認められる。No.2は小さな体部に大きな口縁部が付いた埴で、No.1やNo.3とは明らかに時期が異なる。第2号住居跡との切り合い部分から紛れ込んだものであろう。No.3は小型の甕で、削りによって器壁が非常に薄く作られている。

所見 焼土範囲等の広がりは見られないが、床面の炭化材と覆土の様相から廃絶時に火を受けたと思われる。No.1・3の遺物、特に坏の形態的特徴から当住居跡は平安時代、9世紀後半頃に営まれたものと考えられる。

第4号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	土師器 坏	口径 13.6 底径 5.7 器高 4.0	底部は径が小さく、体部は丸みを帯びて浅めに立ち上がる。口唇部は僅かに外傾する。	底部に一方向からの強いヘラ削り、体部下端に手持ちヘラ削り、内面には横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を中量 外面にぶい黄橙色、 内面黒色 普通	覆土 内面黒色処理 内面中位に灯芯痕
第82図 2	土師器 埴	口径 [9.1] 底径 1.8 器高 8.1	ごく小さな平底の底部をもち、口縁部は内湾しながら大きく立ち上がる。口縁部は器高の約6割を占める。	体部外面および口縁部の内外面に横位の細かな磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を多量 内外面明赤褐色 普通	覆土下位 (SI-2との切り合いによる流れこみか) 45%
第82図 3	土師器 小型甕	口径 [13.2] 器高 (9.5)	最大径は体部上位にあり、口縁部は「く」字に外反する。口唇部は端整で、外反気味に短く立ち上がる。	体部外面の中位に幅広の強いヘラ削り、内面は横・斜方向のヘラナデを施す。器壁はごく薄く作っており、軽量である。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面にぶい橙色 普通	カマド焼部 40%



第83図 第5号住居跡・カマド遺物出土状況

第5号住居跡 [第83・84図、PL.6・52]

位置 調査区西側B・C-15・16グリッド、標高27.5mに位置する。他の遺構と重複はなく、単独の住居跡である。

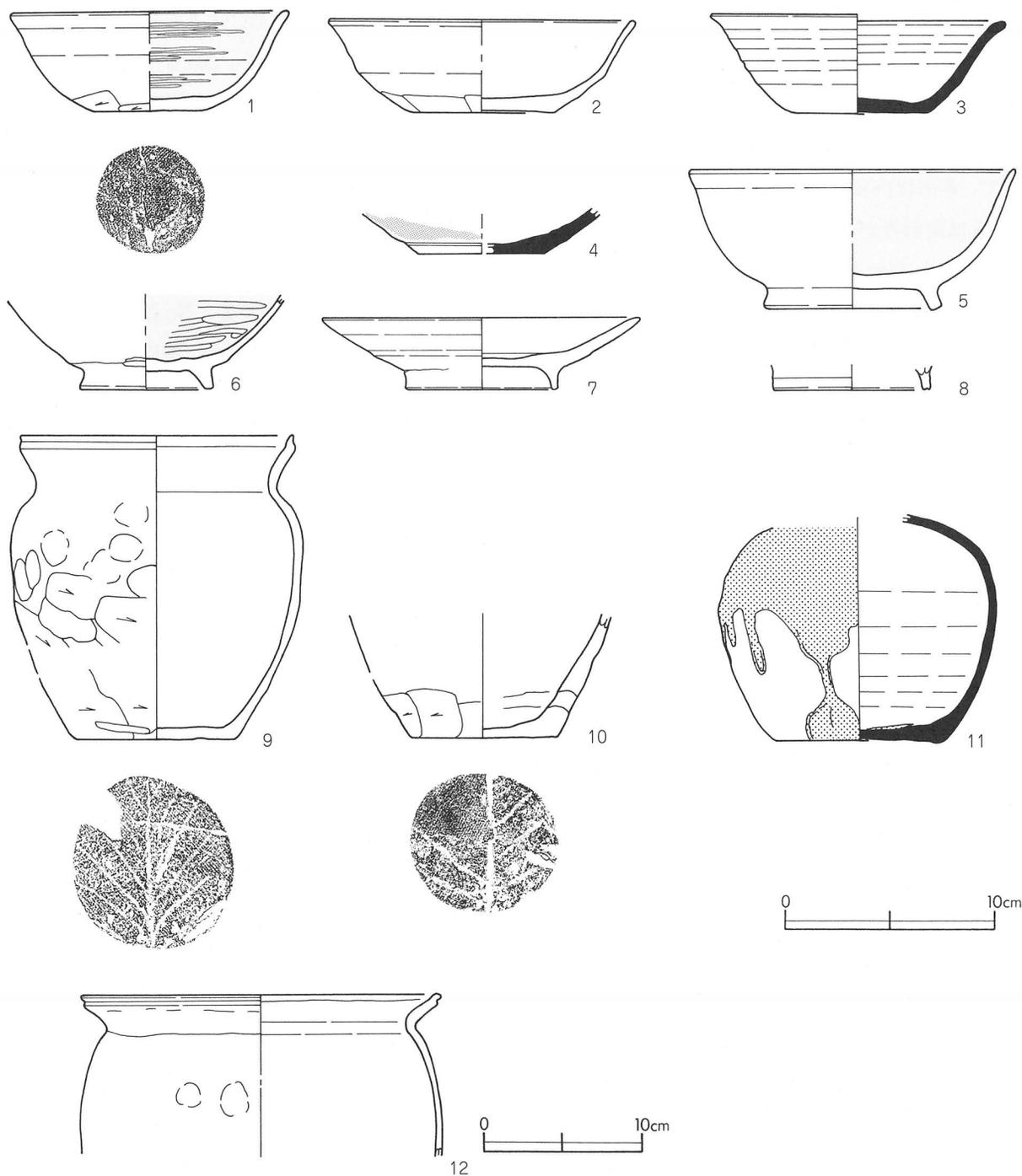
規模 長軸2.74m、短軸2.3mの横長の長方形を呈する。床面積は約6.3㎡である。

主軸方向 N-58° -W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 一部緩やかに外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で34cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 概ね平坦である。東側に粘土と焼土の範囲が広がっており、いずれも床面より約24cm浮いた状態であった。焼土は壁際に向かうほど床面に近くなり、粘土は焼土と接するように焼土上を帯状に広がっていた。

ピット 3基確認した。P1～3は主柱穴と思われる。円形を呈し、径18～25cm、深さ12～14cmを測る。配置的にいずれも壁隅寄りの感がある。また、入り口はカマドと対になる南東壁側となろう。



第84図 第5号住居跡出土遺物

カマド 北西壁ほぼ中央に位置する。壁下場より46cm程壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。奥壁にかけて外傾して立ち上がり、全長64cm、焚き口幅約42cmで、燃焼部は床面を2cm程掘り込んでいた。遺物はカマド内から多く出土している。

覆土 2層に分層された。近似した暗褐色の土相で、ほぼ水平に堆積していることから人為的な埋め戻し土と考える。

遺物 遺物はカマド崩落土中に多く確認された他、床面より10～20cm高い位置からも若干確認されている。器種は土師器・須恵器の坏と土師器碗、土師器甕、須恵器長頸壺などである。No.1と2は土師

器坏である。No.1が内面黒色で小さな底径をもつものに対し、No.2はナデ整形に大きな底径をもつという違いがある。カマド内から確認されているが、明確な被熱痕は認められない。No.3・4は須恵器坏で、No.3は底径が口径の約半分になっており、比較的深めの器形を呈している。No.4は粘土板を貼りつけて底部を補強したような段を有する。No.5・6は土師器の高台付椀である。No.5はやや大きめの椀で、本来は内面に磨きと黒色処理が施されていたものが、被熱によって赤化、器面剥離を被っている。No.6は高台径が小さく、器壁も非常に薄手に作られた内黒椀である。No.7は高台付皿で、体部は直線的に開き、高台も開くことなく垂下する。内面に磨きや黒色処理は施されていない。No.8は高台のみの破片であるが、No.7と同様の器形と思われる。No.9・10は土師器小型甕、No.12は普通サイズの甕である。No.11は須恵器の長頸壺で、頸部と高台を欠失している。緻密な胎土に濃緑色の自然釉が付着する様子は搬入品を思わせる。

所見 出土遺物の帰属時期は、須恵器坏の底径が小さめであること、深めの内黒椀や高台付皿などが出現していることから、9世紀でも半ば以降の時期が想定される。また、須恵器坏の底部にも小径化が認められ、9世紀後半頃の傾向に合致する。よって当住居跡は9世紀半ばから後半にかけての時期に営まれたものと考えられる。

第5号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	土師器 坏	口径 [13.2] 底径 5.2 器高 4.8	底部は小さく、体部は丸みをもってゆったり立ち上がる。口縁部は僅かに外傾する。	底部に二方向からの強いヘラ削り、体部下端に反時計回りの手持ちヘラ削りを施し底径を小さくしている。体部内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英・白雲母を中量、径1mmの長石を微量 外面橙色、内面黒褐色 普通	カマド燃焼部 50% 内面黒色処理
第84図 2	土師器 坏	口径 [14.4] 底径 7.0 器高 4.4	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	底部は一方向からのヘラ削り、体部下端に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面には回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英・白雲母を少量 緻密な胎土 内外面におい黄褐色 普通	カマド燃焼部 60% 体部外面中位に墨痕 文字か記号か不明
第84図 3	須恵器 坏	口径 14.0 底径 6.8 器高 4.7	底部は小さく、体部は直線的に大きく開く。口縁部は強く外反する。	底部は一方向からのヘラ削りを施す。体部下端にはヘラ削り等の調整が行われていない。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面黒褐色 普通 (やや軟質)	カマド燃焼部 完全 全面的に燻し焼きのような黒色を呈する
第84図 4	須恵器 坏	底径 6.0 器高 (2.9)	底部は小さく、体部との境に段をもつ。体部は浅めに大きく開く。	底部は切り離し後、補強のために粘土を貼り付け、一方向からのヘラ削りで調整している。体部下端に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰オリープ色 普通 (やや軟質)	覆土 30% (底部は70%残存) 外面に煤の付着 内面に豆粒状の剥離が顕著
第84図 5	土師器 高台付椀	口径 [15.7] 器高 6.7 高台径 8.4	体部は丸みをもってゆったりと立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は断面台形を呈し、僅かに開く。	高台周辺は回転ナデ、体部内面は横位の磨きを施す。	ごく微細な長石・石英・白雲母が中量 緻密な胎土 内外面明赤褐色 不良 (二次焼成)	カマド燃焼部 70% 内面黒色処理 (希薄) 火熱による器面剥離が顕著
第84図 6	土師器 高台付椀	器高 (2.5) 高台径 6.4	体部は丸みをもって立ち上がる。高台は径が小さく、断面三角形を呈する。	高台の周辺は回転ヘラナデ、体部内面は横位の磨きを施す。	ごく微細な長石・石英・白雲母を少量 緻密な胎土 内外面明褐色、内面黒色 普通	覆土 40% (高台は完存) 内面黒色処理 内底面に豆粒状の剥離が顕著
第84図 7	土師器 高台付皿	口径 [15.0] 高台径 [7.2] 器高 3.4	体部は直線的で浅めに開く。高台はやや高めで直線的に垂下する。	底部は回転ヘラ削り後、回転ナデを施す。体部は内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量、微細な黒・金雲母を多量 内外面明黄褐色 不良 (軟質)	覆土 40%
第84図 8	土師器 高台付椀	高台径 7.4	高台付椀の高台部分が剥離したもの。高台は断面長方形で、外面中央に微かな稜をもつ。ほぼ垂直に立ち上がる。	回転ナデによって整形されている。	ごく微細な長石・石英・白雲母を少量 内外面におい橙色 良好	覆土 20% (高台は完存) 作りは端整
第84図 9	土師器 小型甕	口径 [12.8] 底径 7.8 器高 14.4	最大径は肩部にあり、頸部の引き締まりは弱い。底径は大きく安定感がある。口縁部は「ハ」字に開き、口唇部を小さく直立させる。	体部下端から中位にかけて横位の強いヘラ削りを施す。口縁部に回転ナデ、内面は指頭ナデと圧痕が残る。	径0mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面明赤褐色 良好	カマド燃焼部 50% 底部に木葉痕

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 10	土師器 小形甕	底径 7.0 器高 (5.9)	甕の底部片。体部は下端が厚く、直線的に立ち上がる。	体部下端に横位の強いヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量 内外面におい褐色 普通	覆土 10% (底部は70%残存) 底部に木葉痕
第84図 11	須恵器 小型長頸壺	底径 7.6 器高 (10.8)	小型の長頸壺の頸部と高台部が欠落したもの。底部は大きく、器高が低いため、安定感がある。肩の張りは比較的強めである。	体部下端に回転ヘラ削りを施した後、全面的に回転ナデ調整を行う。体部上位から中位にかけて濃緑色の釉が付着。	径1mmの長石をごく微量 非常に緻密な胎土 外面赤褐色、内面褐色 堅緻	覆土中～下位 60% 搬入品 折戸 10号窯式併行
第84図 12	土師器 甕	口径 [23.0] 器高 (10.2)	甕の体部上位片。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は段をもってせり出す。	体部外面は縦位のヘラ削り後、ナデを施す。口縁部は回転ナデ整形を行う。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面におい黄褐色 良好	カマド燃焼部 30% (口径の50%残存)

第6号住居跡〔第85～89図、PL.7・52～54〕

位置 調査区西側C・D-18～20グリッド、標高27.5m付近に位置する。北壁隅で第6号溝と重複しており、土層堆積状況から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸4.24m、短軸4.1mの正方形を呈する。床面積は約17.4㎡である。

主軸方向 N-34° -W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 概ね外傾しているが、東壁側は垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは最深部で80cmを測り、当遺跡において良好に確認できた1軒といえる。壁溝は北壁の一部を除きほぼ全周しており、幅は14～32cm、深さ2～14cmを測る。

床 中央に向けて若干高くなるが、概ね平坦である。重複する第6号溝の底面は床面には達しておらず、覆土下層までの掘り込みであった。

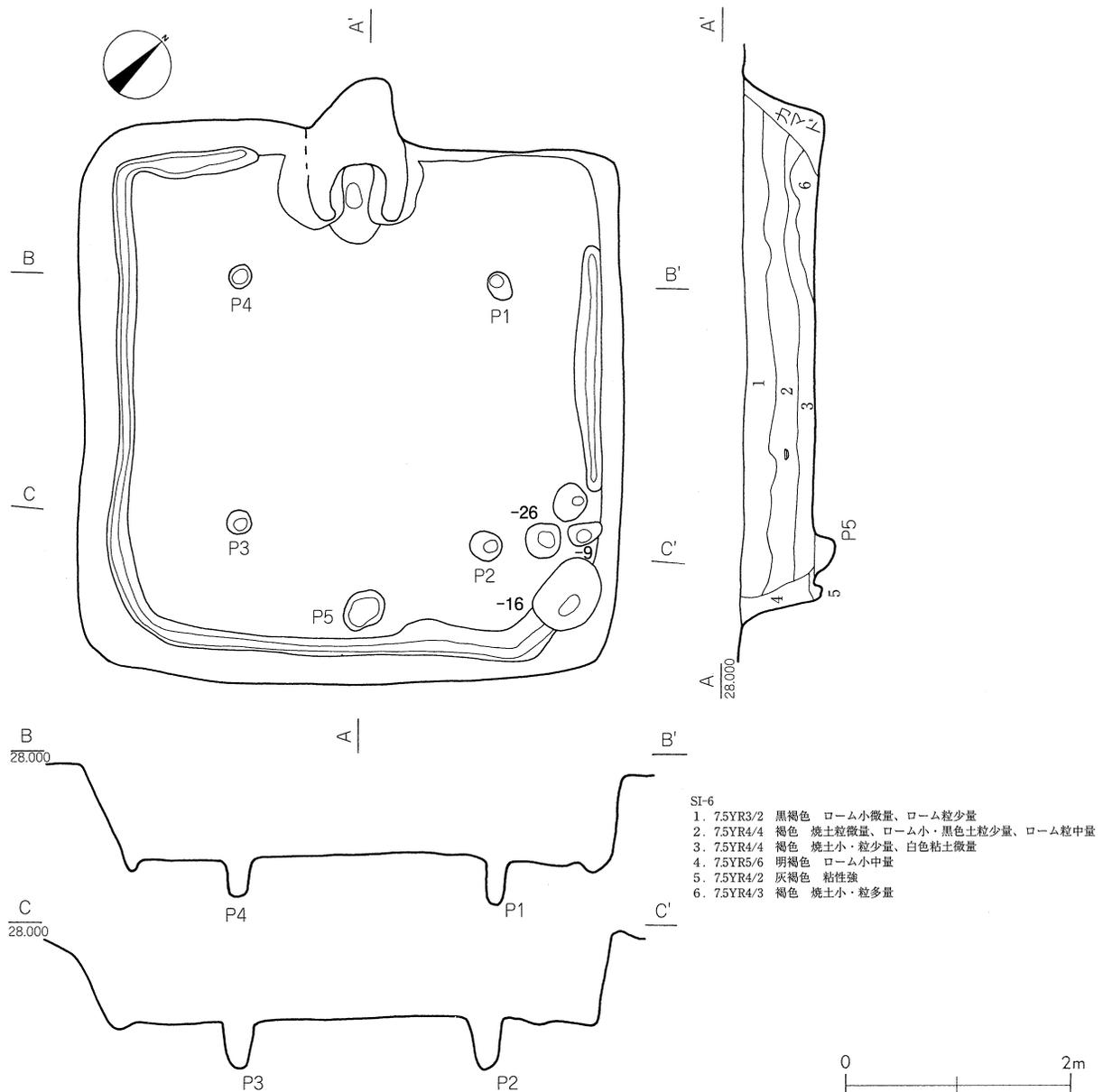
ピット 9基確認された。規模と配置からP1～4が主柱穴に相当しよう。平面形は円形・楕円形を呈し、長径21～28cm、深さ32～43cmを測る。P5はその配置から入り口施設に伴うピットに相当し、長径40cm、深さ17cmを測る。他のピットは長径27～66cm、深さ9～26cmを測り規模が様々であったが、主柱穴とした一群は規模がほぼ近似していた。P5の位置からカマドと対になる南東壁側が入り口と考える。

カマド 北西壁ほぼ中央に位置する。壁下場より壁外に約70cm掘り出して煙道部を構築している。天井の一部が残存しており、奥壁にかけてオーバーハング状を呈している。全長1.46m、焚き口幅は26cmを測る。両袖は馬蹄形状を呈し、高さ、幅ともに遺存状態は良好であった。燃焼部は床から約10cm掘り込まれており、両袖脇と共に多くの遺物が遺棄されていた。No.34の鉄釘もカマド内からの出土である。

覆土 6層に分層される。第6層は焼土粒が多量に混入しており、カマドの崩落土の一部と思われる。

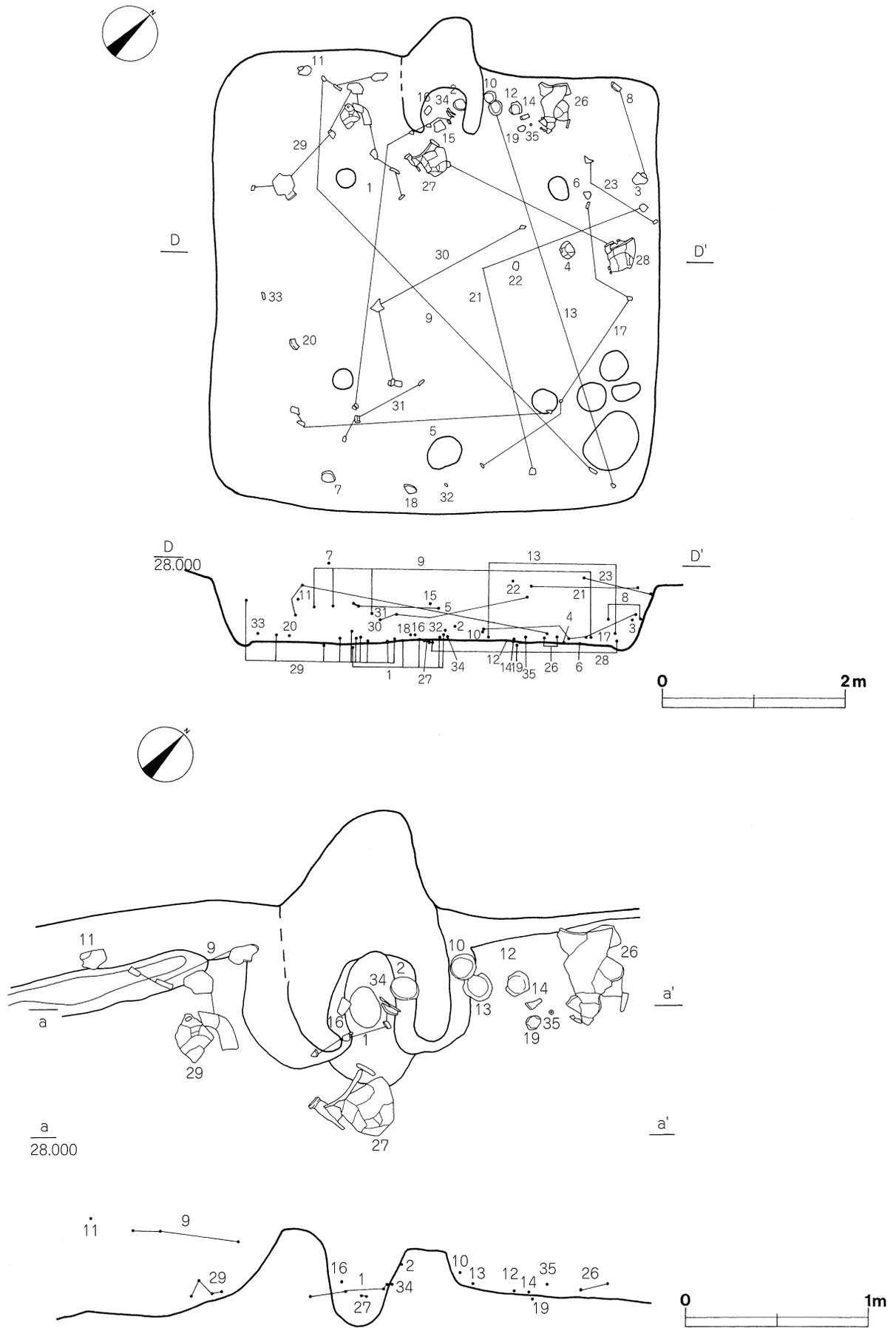
遺物 当住居跡からは比較的多くの遺物が出土した。土器類はカマド燃焼部内に投棄されたものや、カマド脇に放置されたものが相当量あり、また住居跡内の床面直上ないしやや浮いた位置からも大きな破片の残存が確認された。さらに覆土上位からも若干の遺物が出土しているが、これはやや新しい時期の土器と判断された。住居跡の掘り方が深かったために廃絶後も一定期間は窪地となっており、新しい時期の遺物が流れこんだのであろう。

遺物は土師器の坏・甕類と須恵器の坏・甕・甗などに加え、土製支脚、鉄鎌、鉄釘、刀子、そして「和同開珎」などである。土師器と須恵器の割合は、圧倒的に土師器が多く、須恵器の完形品は皆無であった。No.1～15は土師器坏で、底部にヘラ削りを施し丸底に仕上げる浅めの器形が主体的である。ただし、No.1や15のように平底の杯も僅かに存在し、さらにNo.13のように丸底でありながらもかなり平坦化した底部をもつものもみられる。土師器坏が丸底から平底へと推移する過渡期の様相が窺え、特にNo.15などはNo.16の須恵器坏の類似した形態を呈している。No.17は非常に浅い典型的な土師器盤である。内

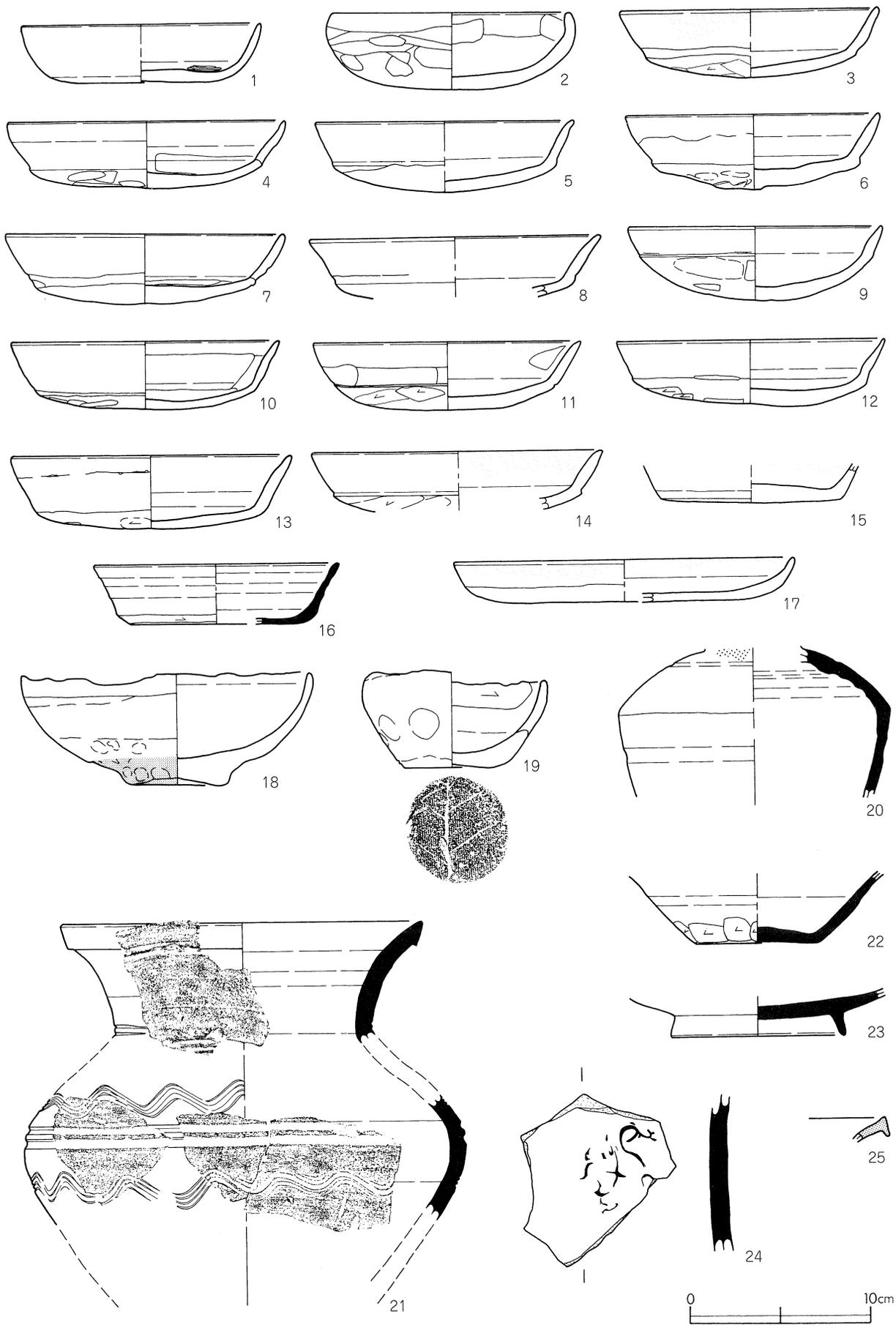


第85図 第6号住居跡

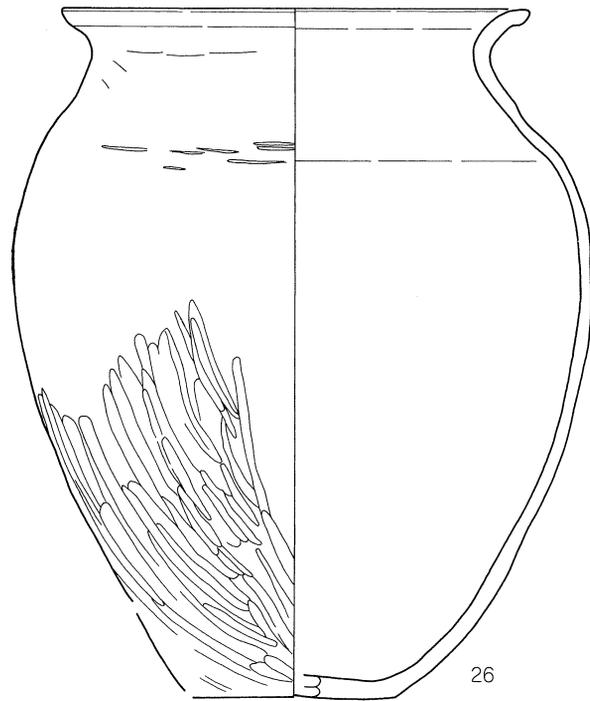
面に磨きや暗文は施されておらず、在地色が強い。No.18は土師器坏の変形ないし椀形土器とでも呼ぶべき特異な器種で、坏であれば本来削りとってしまう底部の突起をあえて残し、高台状に成形している。この高台状突起と底部の周辺には二次的な被熱痕と煤の付着がみられるので、煮沸具として利用されていたことが窺える。No.20・21は須恵器の長頸壺ないし広口壺である。特にNo.21は肩部に沈線と櫛描波状文が施文される稀有な例である。近辺では土浦市寺家ノ後B遺跡の第2号墳出土の長頸壺に類例がみられるだけである。No.22～25は、当住居跡出土の土器群の中では器種や形態的に異質であり、明らかに新しい時期の遺物の混入である。No.22は小さな底部を有する須恵器坏、No.23は高台付盤で、9世紀代の土器である。両者は住居跡の覆土上層から出土しており、流れ込みと考えられる。No.24は須恵器甕の体部片であるが、人面らしい墨書痕が認められ注目される。摩滅が著しく、人面の容貌は判然としないが、目や鼻らしき表現が辛うじて窺い知れる。覆土中から出土した小破片であり、No.22・23と一



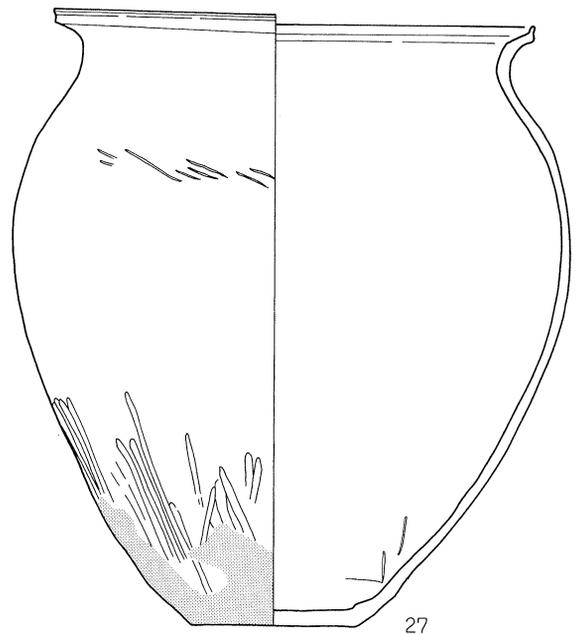
第86図 第6号住居跡遺物出土状況



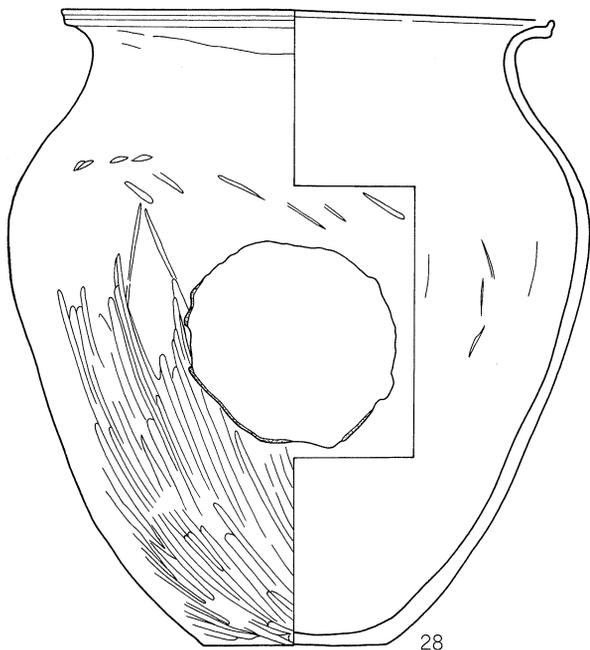
第87图 第6号住居跡出土遺物 (1)



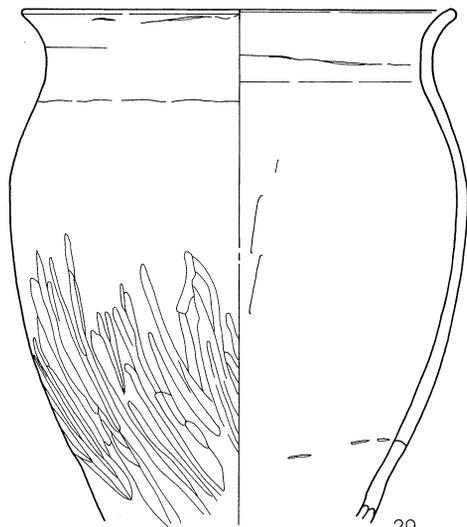
26



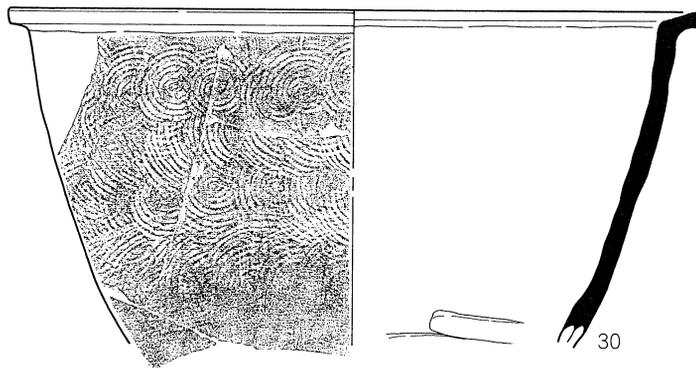
27



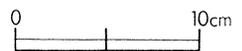
28



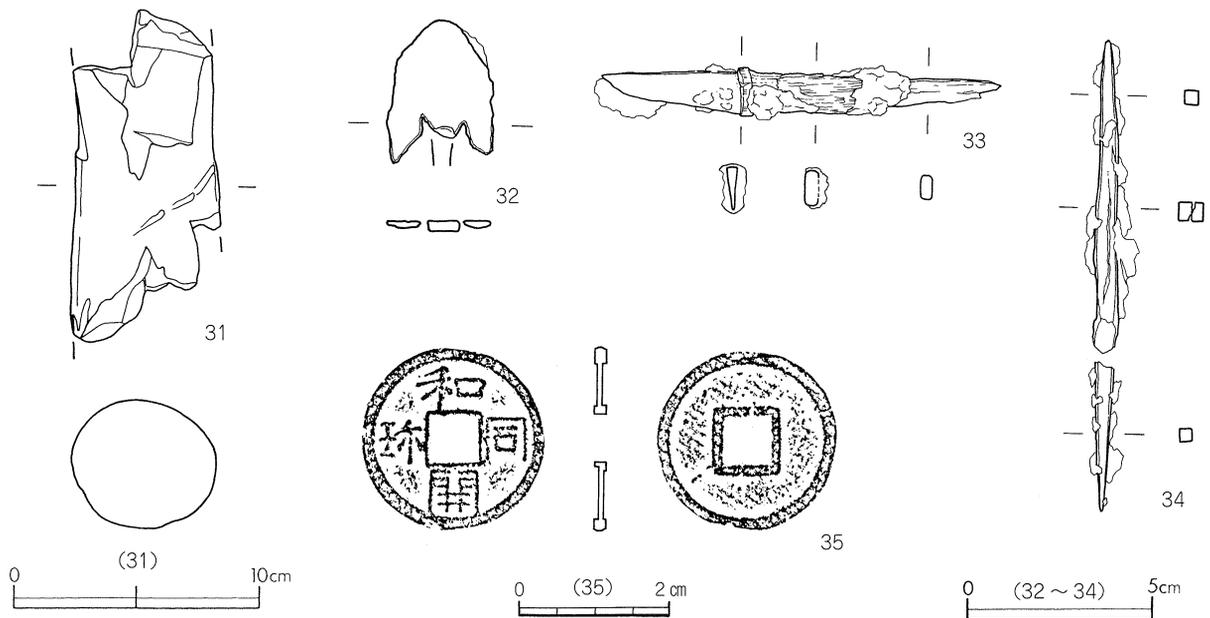
29



30



第88図 第6号住居跡出土遺物 (2)



第89図 第6号住居跡出土遺物（3）

緒に当住居跡の廃絶後に流れ込んだものとみられる。No.25も同様で、灰釉陶器長頸壺の口縁部片である。No.26～29は土師器甕である。No.29の細身の甕を除き、前3者は比較的横幅の大きい安定感のある形態を呈している。No.28の甕の体部中央には径11cmの円形破碎孔があり、その部分の器壁は磨耗している。意図的な開削であると判断された。住居跡東壁寄りの床面直上に潰れていたものであるが、何らかの信仰的用途に供されたものであろうか。No.30は須恵器の甑ないし鉢である。外面に同心円の叩き目がつけられている点が特筆される。同心円は本来、叩き締めの際に当て具痕として内面に付けられるものであるが、これを外面に施文した甕や甑が、茨城県南部を中心とする地域に若干例発見されている。これも同種の貴重な事例とされよう。なお、以上の須恵器は、すべて胎土に白雲母が含まれていた。いずれの器種も新治窯の製品であることがほぼ確実である。土器以外ではNo.31のカマド支脚やNo.32の鉄鏃、No.33の刀子、No.34の鉄釘などが確認された。他にも図化し得なかったが刀子と思われる鉄片2片や鉄釘状の細棒2片が覆土に混在していた。さらにカマド脇から、No.26の土師器甕と同一レベルで「和同開珎」が1枚発見されている。銭の字画に鋳潰れや磨耗がみられず、多くの人手を介さない内に投棄ないし埋納されたものと考えられる。ちなみに「和同開珎」の初鋳年代は706年である。

所見 以上の遺物相から、1. 須恵器に対して土師器の割合が非常に高いこと、2. 土師器坏が丸底から平底に転化し始める段階にあること、3. 擦れのない「和同開珎」が住居の廃絶とほぼ同時期に埋没していること（706年を上限）、さらに、4. 浅い土師器皿や肩部に稜が付く須恵器長頸壺、外面に同心円の叩きをもつ須恵器甑などの特徴ある遺物の類例が看取できる。このことから判断して当住居跡は奈良時代初頭頃、およそ8世紀前葉に収まる時期に営まれたものとする。そして、当住居が廃絶した後の窪みに、9世紀代の遺物が若干流れ込んだ経緯が想定される。

第6号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 1	土師器 坏	口径 13.0 底径 10.5 器高 3.3	底部は平底だが周縁は丸みを帯び、体部との境は不明瞭。体部は僅かに丸みをもって開く。	底部は一方方向からのヘラ削り、体外外面は回転ナデ、内面は横位の磨き、内底面は縦横二方向の磨きを施す。	径1~3mmの長石・石英を少量、褐色スコリアを微量 内外面橙色 良好	カマド燃焼部 60%
第87図 2	土師器 坏	口径 13.0 底径 - 器高 4.2	丸底の底部から体部が連続し、口縁部は微かな稜をもって内傾する。	底部は一方方向からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。口縁部および内面は回転ナデ調整を施す。	ごく微細な長石を中量、褐色スコリア・赤褐色チャートを少量 内外面橙色 良好	カマド燃焼部 90%
第87図 3	土師器 坏	口径 [14.3] 底径 11.6 器高 3.4	底部は丸底で体部との境に稜と段をもつ。体部は直線的に浅く開く。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。	ごく微細な長石・褐色スコリアを中量、白雲母を微量 内外面におい橙色 普通	覆土中位 50% 外面黒色処理 (部分的)
第87図 4	土師器 坏	口径 15.0 底径 12.6 器高 3.7	底部は丸底で体部との境に稜が付く。体部は浅く開き、口縁部は僅かに内湾する。	底部中央は多方向、周縁は反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部は内外面とも回転ナデ調整を施す。	ごく微細な長石・石英を中量、褐色スコリアを中量 内外面におい橙色 良好	床直 ほぼ完形
第87図 5	土師器 坏	口径 [14.0] 底径 [12.2] 器高 3.9	底部は丸底で体部との境に稜が付く。体部は直線的に浅く開く。	底部中央は多方向、周縁は反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部は内外面とも回転ナデ調整を施す。	ごく微細な長石を少量、微細な白雲母を微量 外面浅黄橙色、内面におい橙色 普通	覆土中位 40%
第87図 6	土師器 坏	口径 13.8 底径 11.3 器高 4.2	底部は丸底だが中央部が突出する。体部との境に稜と段をもち、体部は直線的に浅く開く。	底部は未調整で指頭圧痕が残り、中央部には本来削り取られるはずの台状突出が残される。体部は内外面に回転ナデ調整を施す。	ごく微細な長石・石英を中量、褐色スコリアを中量 内外面橙色 普通	床直 ほぼ完形 口縁部に使用痕
第87図 7	土師器 坏	口径 16.0 底径 12.0 器高 3.3	底部は丸底で体部との境に稜と段をもつ。体部は直線的に浅く開く。	底部中央は多方向、周縁は反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部は内外面に回転ナデ調整を施す。	ごく微細な長石・石英・褐色スコリアを中量、微細な白雲母を少量 内外面橙色 普通	覆土上位 80%
第87図 8	土師器 坏	口径 [15.8] 底径 [12.8] 器高 (3.3)	底部は丸底と思われ、体部との境に稜と段をもつ。体部は外反ぎみに浅く立ち上がる。	底部周縁に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部は内外面に回転ナデ調整を施す。	ごく微細な長石・石英を多量 外面におい黄橙色、内面におい赤褐色 普通	覆土中位 40% 口縁部に使用によるスレが顕著
第87図 9	土師器 坏	口径 13.9 底径 12.7 器高 4.1	底部は丸底で厚く、体部との境に稜と段をもつ。体部は直線的に開く。	底部中央部に一方方向からのヘラ削り、周縁部に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を中量 外面明赤褐色、内面橙色 良好	覆土下~中位 完形 底部に篠竹ほどの棒状圧痕
第87図 10	土師器 坏	口径 14.6 底径 11.8 器高 3.8	底部はかなり平坦化が進んだ丸底で、体部との境は明確な稜をもって屈曲する。体部は直線的に開く。	底部中央部に一方方向からのヘラ削り、周縁部に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を少量、赤褐色スコリアを中量、微細な白雲母をごく微量 内外面におい橙色 普通	カマド袖部 70%
第87図 11	土師器 坏	口径 17.6 底径 12.0 器高 3.7	底部は中央部が平坦化した丸底で、体部との境に稜をもつ。体部は直線的に開く。	底部中央部に一方方向からのヘラ削り、周縁部に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を少量、赤褐色スコリアを中量、微細な白雲母をごく微量 内外面におい橙色 普通	覆土中位 80% 内面口縁部黒色処理(部分的)
第87図 12	土師器 坏	口径 14.4 底径 12.6 器高 3.7	底部は中央が平坦化した丸底で、体部との境に稜と段をもつ。体部は中位に僅かな屈曲をもちながら開く。	底部中央部に一方方向からのヘラ削り、周縁部に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を少量、赤褐色スコリアを中量、微細な白雲母をごく微量 内外面におい橙色 良好	床直 完形
第87図 13	土師器 坏	口径 15.2 底径 12.4 器高 4.0	底部は平坦化の進んだ丸底で、体部との境は稜をもって屈曲する。体部は僅かに外反しながら開く。	底部は一方方向からのヘラ削りで、周縁は未調整。体部内外面に回転ナデを施す。	径1~3mmの長石・石英を多量 内外面におい橙色 普通	カマド袖部 80% 口縁部に使用による擦れ顕著
第87図 14	土師器 坏	口径 [15.8] 器高 (3.2)	底部は緩やかに湾曲する丸底で、口縁部は中央に厚みをもって直線的に開く。	底部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部は内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、ごく微細な長石・石英を中量 外面灰黄褐色、内面黒褐色 普通	床直 20% (口径の30%残存) 内面黒色処理
第87図 15	土師器 坏	底径 [9.8] 器高 (2.0)	底部は平底で、体部は強い角度で立ち上がる。体部は比較的薄手に作られる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。体部下位にヘラ削りは施されていない。	微細な長石・石英を中量 外面におい赤褐色、内面におい橙色 普通	覆土上位 40% 内面黒色処理
第87図 16	須恵器 坏	口径 [13.4] 底径 [9.3] 器高 3.3	底部は平底で、体部は僅かに外反しながら強い角度で立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りを行う。底部と体部の境に時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面におい赤褐色 普通	カマド燃焼部 30%
第87図 17	土師器 盤	口径 18.6 底径 17.2 器高 2.3	底部は平坦で広く、周縁は丸みをもって体部に連続する。体部の立ち上がりは小さく、緩やかに口縁が開く。	底部は一方ないし二方向からのヘラ削り、周縁部は反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部は内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を中量、微細な白雲母を微量 外面橙色、内面におい橙色 普通	覆土下位 40% 外面口縁部・内面黒色処理

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 18	土師器 椀	口径 15.6 底径 5.7 器高 6.2	鉢ないし大振りの椀。本来は丸底の底部であるが、高台状の突出部が付く。体部は丸みをもって開き、口縁部は僅かに内傾する。	底部中央に柱状の粘土塊を残し、手捏ねによって高台状に整形。体部外面は横位の軽いヘラ削り、口縁および内面は回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面にぶい赤褐色 内面にぶい橙色 普通	覆土下位 ほぼ完形 外面下半煤付着、 口縁・内底面に 使用痕顕著
第87図 19	土師器 鉢	口径 9.6 底径 4.7 器高 5.4	ほぼ手捏ねで成形され、器形全体にゆがみがある。底部は平坦で、体部は丸みをもって強く立ち上がり、口縁部は局所的に内傾する。	粘土紐巻き上げによって成形。体部外面は指頭によるナデ。内面は指頭とヘラによるナデ調整。	微細な長石と白雲母を微量、赤褐色スコリアを少量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直 ほぼ完形 底部に木葉痕 口縁部に使用痕
第87図 20	須恵器 長頸瓶	最大径 [15.0] 器高 (8.2)	長頸瓶の肩部片。肩に強い稜をもち、緩やかな丸みをもって頸部に至る。	外面は回転ナデによって端整に整形・調整される。肩部に灰オリープ色の自然釉が付着する。	ごく微細な長石を微量 外面にぶい黄褐色 内面褐色 堅緻	覆土下位 30%
第87図 21	須恵器 壺	口径 [19.6]	口縁部は外反しながら大きく開く。体部は算盤玉状に中央が突出する。頸部の基部に沈線が一条、体部中央に二条、その上下に二条の櫛描波状文が施文される。	内外面に回転ナデを施す。櫛描波状文は最低五本の櫛歯によって施文される。	微細な長石・石英を少量、白雲母を中量 外面褐色、内面灰黄褐色 普通 (やや軟質)	覆土上位 同一個体と思 われる細片が 4片
第87図 22	須恵器 坏	底径 6.6 器高 (3.7)	底部は径の小さな平底で、体部は直線的に開く。口縁部はやや外反するとみられる。	底部回転ヘラ切り後、一方からのヘラ削りを施す。体部下端に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英・白雲母を多量 外面黄褐色、内面黄灰色 普通 (やや軟質)	覆土上位 30% (底部は 80%残存)
第87図 23	須恵器 高台付盤	高台径 6.4 器高 (4.4)	高台は径が大きく端整。体部は水平方向に大きく張り出し、口縁が直立するとみられる。	底部は反時計回りの回転ヘラ削りを施し、高台の周囲および体部内外面には回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、径2～3mmの白雲母を多量 内外面灰色 普通	覆土上位 30% (底部・ 高台は70%残存)
第87図 24	須恵器 甕	器高 (9.4)	甕の体部小片。	外面に横位の平行線の叩き目、内面に指頭圧痕が付く。	径1～3mmの長石を少量、白雲母を中量 内外面灰黄色 普通 (やや軟質)	覆土 細片 外面に人面墨書
第87図 25	灰釉陶器 長頸壺	器高 (1.3)	長頸壺の口縁部片。口唇部は下方に折れ返り断面L字状を呈する。	強いロクロ回転により端整に成形される。	ごく微細な長石を微量 内外面灰黄色 堅緻	覆土 細片
第88図 26	土師器 甕	口径 25.2 底径 [11.0] 器高 36.6	最大径は体部上位にあり、肩を張りながら大きく口縁部が外反する。	体部外面の下位に縦位の細かな磨きを施す。口縁部は回転ナデと横位のヘラ削り。肩部にヘラが当たった傷が多数みられる。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい黄褐色 良好	覆土下位 85%
第88図 27	土師器 甕	口径 25.8 底径 8.6 器高 33.0	最大径は体部上位にあり、口縁部は「く」字に外反して大きく開く。口唇部は外反気味に短く立ち上がる。	体部外面下位に縦位の細かな磨き、口縁部に回転ナデと横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。肩部にヘラ傷。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	カマド焼き口部 95% 底部に木葉痕 底部半面に煤 が付着
第88図 28	土師器 甕	口径 26.6 底径 10.0 器高 33.8	最大径は体部上位にあり、肩を強く張る。口縁部は「つ」字状に大きく外反し、口唇部を短く直立させる。	体部外面下位に縦位の細かな磨き、口縁部に回転ナデと横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。肩部にヘラ傷。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄褐色 良好	床直 90% 底部に磨き 体 部中央に径11cm の円形の破砕孔
第88図 29	土師器 甕	口径 23.4 器高 (27.7)	最大径を体部上位にもつ。口縁部は間延び気味に外反し、口唇部は丸みを帯びた素縁を呈する。	体部外面下位に縦位の細かな磨き、口縁部に回転ナデと横位のヘラ削り、内面にヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい黄褐色 普通	床直～覆土下 位 70%
第88図 30	須恵器 甕	口径 [37.4] 器高 (17.9)	底部が欠失。体部は僅かに内湾しながら「ハ」字に開く。口縁部は「L」字に屈曲し、口唇部は平坦面をもつ。	体部外面に同心円の叩き目を付け、体部下位に横位のヘラ削りを施す。内面は全体的に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面明灰色 普通 (やや軟質)	覆土中～上位 20% (口径の 20%、体部の 30%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第89図 31	土製品 支脚	(13.3)	6.0	5.2	(328.0)	粘土塊を手捏ねで円筒状に成形し、局部的に軽いヘラナデを施す。	微細な長石・石英・白雲母を少量 橙色 普通	覆土中位 60%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第89図 32	鉄製品 鎌	(3.7)	2.8	0.3	(7.1)	平根の鎌で、先端の尖りは鈍く、平面形態は五角形状を呈する。茎は欠失するが、逆棘は二等辺三角形を呈する。	覆土下位 70%
第89図 33	鉄製品 刀子	(10.7)	1.2	0.6	(11.5)	刃幅の狭い小型の刀子。茎は長さ6.8cm、木質が残存し刃部との境には幅3.5mmの切羽を巻き、刃を固定している。	覆土下位 70%
第89図 34	鉄製品 釘	(8.9)	0.6	0.5	(10.7)	本来12cmを超える長さの鉄釘の残欠。断面四角形を呈し、頭部が欠失、先端は徐々に太さを減じながら鋭く尖る。	カマド燃焼部 90%
第89図 35	古銭 「和同開珎」	外径 2.44 内径 2.10	外径 2.45 内径 2.10	0.12～0.13	1.8	字画や内外区に鑄潰れ・磨耗がまったく見られず良好な状態を呈する。外区には製作時の研磨・擦痕が残る。やや黄銅色が強く、重量は比較的軽い。	カマド脇 覆土下位 完形

第8号住居跡〔第90図、PL.9・55〕

位置 調査区西壁際－（マイナス）A・A-18・19グリッド、標高27.5m付近に位置する。第12号住居跡と南西側で重複しており、本住居のプラン内に第12号住居跡のカマドが残存していることから当住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.34m、短軸2.76mの横長の長方形を呈し、床面積は約9.2㎡である。

主軸方向 N-12° -E

壁 南西隅を第12号住居跡に壊されているほかは、壁は概ね垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で54cmを測る。南壁と西壁の一部に壁溝が見られ、幅は12cm前後、深さは3～5cmを測る。

床 概ね平坦である。

ピット 3基確認された。P1・2は支柱穴と考えられる。円形・楕円形を呈し、長径20・28cm、深さ16・19cmを測る。おそらくカマドの対となる南壁側が入り口部と考えられる。

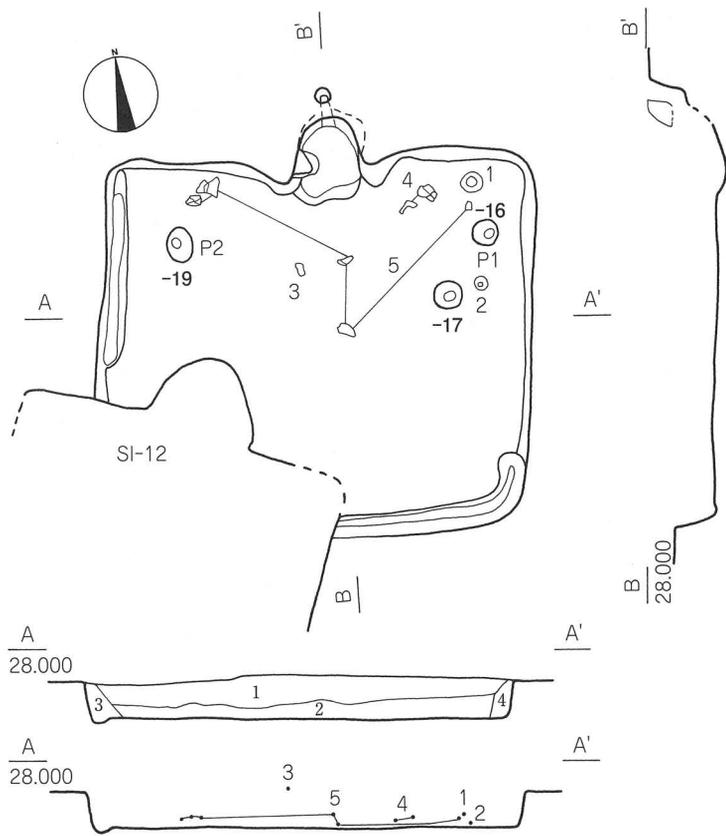
カマド 北壁ほぼ中央に位置する。壁下場より約40cm壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。天井部が一部残存しており、奥壁にかけて段を有しながら立ち上がり煙道部へと繋がっている。煙道の開口部は12cm程であった。全長（煙道から燃焼部まで）90cm、焚き口幅は53cmで、左側袖は内側の奥壁寄りにも袖状の高まりが見られた。作り付けの支脚の可能性も考えられる。燃焼部は床面から約6cm掘り込まれており、両袖から燃焼部、奥壁は被熱により著しく赤化していた。遺物は出土していない。

覆土 4層に分層された。第3・4層は壁崩落土と思われ、全体に自然埋没土であろう。

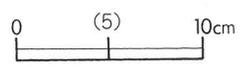
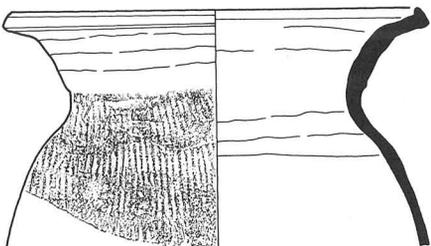
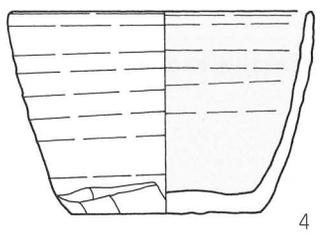
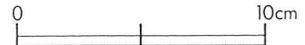
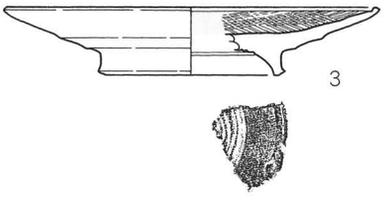
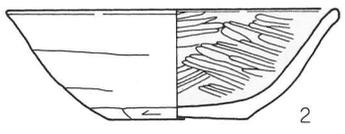
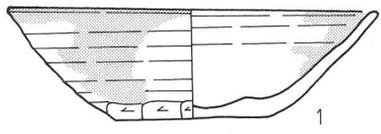
遺物 遺物の出土量は僅かである。住居跡の北側、カマドの周辺に散乱した状態で出土した。

No.1・2は土師器坏で、口径に対し底径が非常に小さい。特にNo.2の坏は、底部の切り離し技法に当地では比較的少ない回転糸切り技法が用いられている。No.3は土師器の高台付皿で、底部にはNo.2と同じく回転糸切り技法がみられる。高台の形態は、基部が広く接地部が狭い逆三角形を呈しており、比較的新しい段階の様相を示している。内面の処理は磨きと黒色処理である。No.4は土師器の鉢で、やや大ぶりのコップ形を呈し、内面には黒色処理を施している。比較的珍しい器種であるが、当地周辺では内黒碗などが主流になる段階に出現している。No.5の甕は、形態や製作技法などから須恵器の甕と判断したが、色調は土師器と同じ酸化焰焼成を呈している。須恵器生産の終末的な様相を示すものである。

所見 遺物の時期は底径の小さな土師器坏や、内黒の鉢の存在、あるいは焼成技術の後退段階にある須恵器甕などより、9世紀後葉から10世紀前半にかけての頃と考えられる。



- SI-8
 1. 7.5YR5/6 明褐色 焼土小・ローム中微量 焼土粒・ローム小少量
 2. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土小・粒・炭化物・粒中量
 3. 7.5YR5/6 明褐色 焼土小少量 ローム小微量 黒色土粒中量
 4. 7.5YR4/4 褐色 ローム粒微量



第90図 第8号住居跡・出土遺物

第8号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	土師器 坏	口径 14.6 底径 6.0 器高 4.7	底径はきわめて小さく、体部は直線的に大きく開く。	底部は二方向からのヘラ削り、体部下端に反時計回りに手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	覆土下位 完形 内外面の口縁部から下半にかけてに多量の灯芯痕
第90図 2	土師器 坏	口径 13.1 底径 5.5 器高 4.4	底径はきわめて小さく、体部は内湾しながら大きく開き、口縁部が僅かに外反する。	底部は回転糸切り後、二方向からのヘラ削りを施す。体部下端に反時計回りに手持ちヘラ削り、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を中量 外面にぶい黄橙色、内面黒色 普通	床直 完形 内面黒色処理
第90図 3	土師器 高台付皿	口径 [15.0] 高台径 (7.4) 器高 2.7	高台は僅かに開き、断面三角形を呈する。体部は緩やかに開き、口唇部内面に浅い沈線がつく。	底部は回転糸切り後、高台取り付けに伴う回転ナデを周囲に施す。体部外面は下位に回転ヘラ削りを施し、その後全面に回転ナデを施す。内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を多量 外面にぶい橙色、内面黒色 普通	覆土上位 20% 内面黒色処理
第90図 4	土師器 鉢	口径 12.1 底径 7.6 器高 8.1	コップ形の小型の鉢。底径は大きく、僅かに内湾した体部が強い角度で立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り後、一方向の軽いヘラ削りを施す。体部下端に手持ちヘラ削り、体部はロクロ目を残す。	ごく微細な長石・石英、赤褐色スコリアを少量 外面橙色、内面黒色 不良	覆土下位 95% 内面黒色処理 内底面に豆粒状の剥離
第90図 5	須恵器 甕	口径 [21.4] 器高 (12.7)	甕の体部上位片。肩の張りが弱く、口縁部は「く」字に外反する。口唇部は内傾しながら短く立ち上がる。	体部外面に平行線の叩き目を縦位に付ける。口縁部および内面に回転ナデによる器面調整を行う。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土下位 30% (口縁部は60%残存) 土師器的な色調

第9号住居跡〔第91図、PL.9・55〕

位置 西側調査区にかかる - (マイナス) A・A-21・22グリッド、標高27.5m付近に位置する。第2号掘立柱建物跡・第2号溝と重複しており、土層堆積状況から本住居が古いと判断した。

規模 長軸3.48m、短軸3.42mの若干横長の正方形を呈し、床面積は約11.9㎡である。壁と床面を重複する第2号掘立柱建物跡・第2号溝により壊されている。

主軸方向 N-27° -E

壁 東西方向は外傾して、南北方向は垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは最深部で48cmを測る。壁溝は確認されていない。

床 概ね平坦である。東壁際に床面から7cm程浮いた状態で薄い粘土範囲が広がっていた。

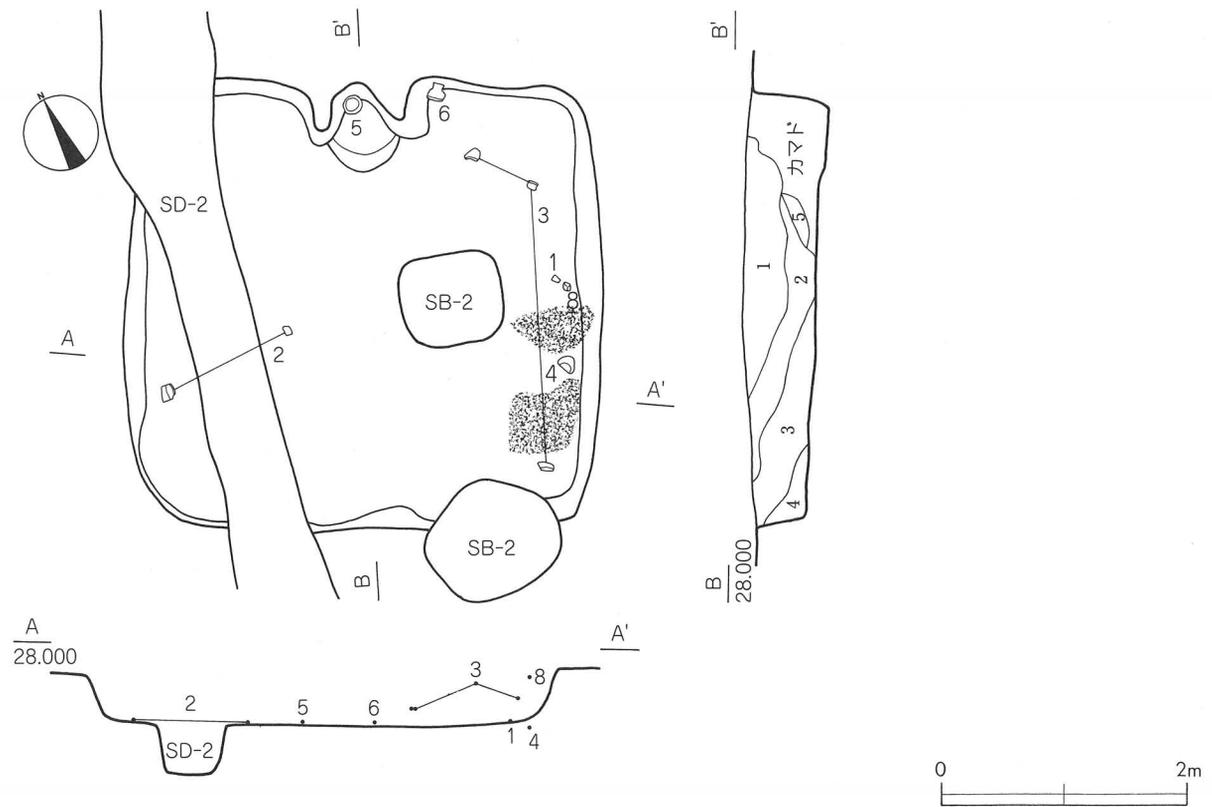
ピット 確認されていない。おそらくカマドと対になる南壁側が入り口となろう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置する。壁下場から煙道部は大きく掘り出されておらず、確認された上場からほとんど突出していない。全長72cm、焚き口幅約45cmで燃焼部は床面より約7cm掘り込まれている。奥壁はほぼ垂直に立ち上がっており、両袖の内側と奥壁は被熱により赤化していた。奥壁寄りの底面直上から土師器坏が1点出土している。

覆土 5層に分層された。第5層は混入物からカマド崩落土の一部と考えられ、全体に自然堆積であろう。

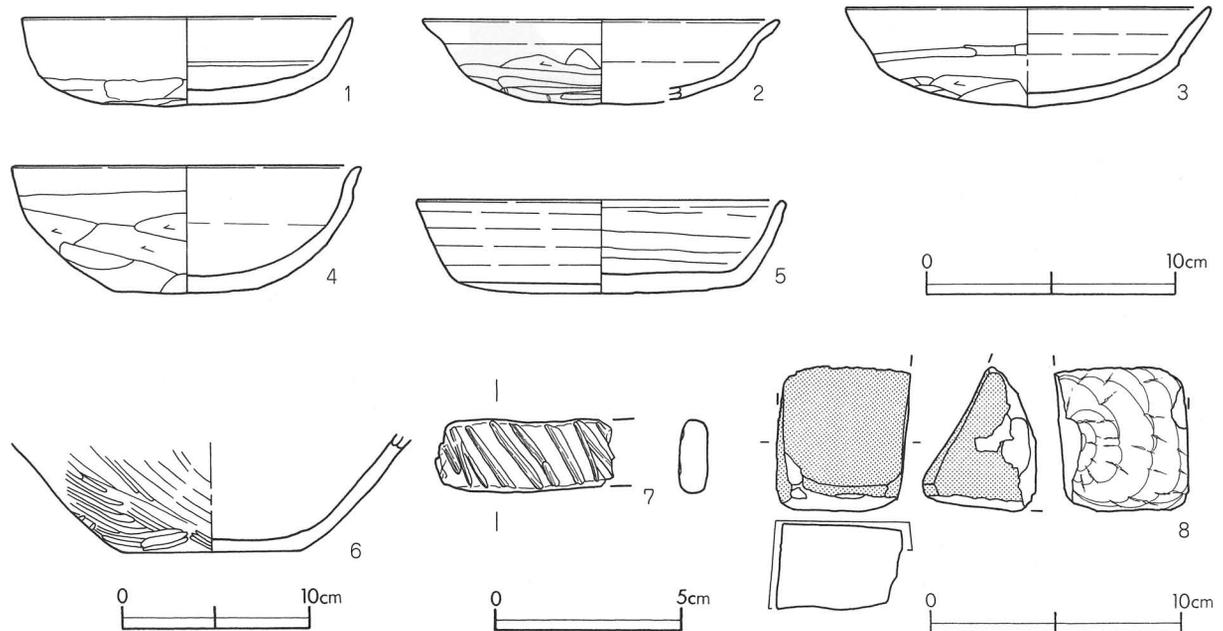
遺物 遺物の出土量は僅かである。カマドの燃焼部にNo.5の土師器坏が置かれていた他、東壁寄りの床面に3点の坏片が散在していた。No.3・5が覆土中～上層から出土する以外は床面直上からの出土である。No.1～5は土師器坏である。底部は丸底のヘラ削り、底部と体部の境に稜をもち、口縁部に回転ナデを施すものが主体である。No.5だけは例外で、平底から体部が強い角度で立ち上がっており、須恵器坏の模倣を思わせる。No.6は土師器甕の底部でカマドの袖部から発見された。No.7は方形の手捏ね粘土板に稲科の植物の茎や葉を押圧したもので、用途は不明である。No.8は凝灰岩製の砥石である。

所見 遺物の時期は、1. 坏がすべて土師器であり須恵器が全く混在していないこと、2. 土師器坏が丸底から平底へ変化する過渡段階にあると思われること、などから7世紀末頃と考えておきたい。当住居跡が営まれた時期も同様の時期と思われる。



SI-9

1. 7.5YR4/6 褐色 ローム中少量 ローム小中量 ローム粒微量
2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム大少量 ローム粒微量 黒色土粒中量 しまり弱
3. 7.5YR5/4 にぶい褐色 炭化粒・ローム小少量 ローム大中量 ローム粒微量
4. 7.5YR3/4 褐色 ローム大少量 ローム小中量
5. 7.5YR4/4 褐色 焼土大・ローム粒中量 焼土粒少量 ローム大微量



第91図 第9号住居跡・出土遺物

第9号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 1	土師器 坏	口径 13.2 底径 11.3 器高 3.5	底部はやや平坦な丸底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部中央に一方からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい橙色 普通	床直 40%
第91図 2	土師器 坏	口径 [14.2] 器高 3.2	底部は丸底で、体部との境は不明瞭。口縁部は僅かに外反しながら大きく開く。	底部中央に一方からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英・赤褐色スコリアを少量 外面黒褐色、内面灰褐色 普通	床直 50% 外面黒色処理 (部分的)
第91図 3	土師器 坏	口径 [14.4] 器高 4.0	底部は丸底で、体部との境に稜をもつ。体部は僅かに外反しながら大きく開く。	底部中央に二方向からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英・赤褐色スコリアを少量 内外面にぶい褐色 不良 (軟質)	覆土中～上位 60%
第91図 4	土師器 坏	口径 14.0 底径 5.6 器高 5.1	削りによって作られた小さな平底を有する。体部は碗状に深く丸みをもって立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	多方向のヘラ削りによって平坦な底部を作り出す。体部は反時計回りに手持ちヘラ削り、口縁と内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、赤褐色スコリアを中量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直 70%
第91図 5	土師器 坏	口径 14.0 底径 11.1 器高 3.8	底部は平底で径が大きい。体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削り、体部内外面にロクロ目を残す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面橙色 良好	カマド燃焼部 95%
第91図 6	土師器 甕	底径 10.4 器高 (5.9)	甕の底部片。大きな底径、開き具合の大きな体部下位の様子から、重厚な器形が想定される。	底部は一方からのヘラ削りによって平坦化。体部外面に斜方向の磨きを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、微細な白雲母を微量 外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色 普通	カマド裾部 20% 局所的に木葉痕

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第91図 7	板状土製品	(4.8)	2.0	0.8	(9.3)	手握ねで粘土を板状に成形し、稲科植物の茎や葉を押し当てて斜めの沈線文状にあらったもの。用途不明。	ごく微細な長石を微量 ぶい橙色 良好	覆土 残存率不明 裏面に粉?痕

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第91図 8	石製品 砥石	5.7	4.9	4.5	(147.9)	凝灰岩製の砥石。砥面は3面、切り出し面 (石材を切り出した時の面) が1面、折損面が1面。	覆土上位 80%

第10号住居跡〔第92・93図、PL.9・56〕

位置 調査区南西側H・I-26・27グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5mに位置する。

第49号住居跡・第11号掘立柱建物跡と重複しており、土層堆積状況と出土遺物から第49号住居跡より新しく、第11号掘立柱建物跡よりは古いと判断した。また、攪乱により壁・カマドの一部が壊されていた。

規模 長軸3.28m、短軸2.94mの若干横長の正方形を呈し、床面積は約9.6㎡である。

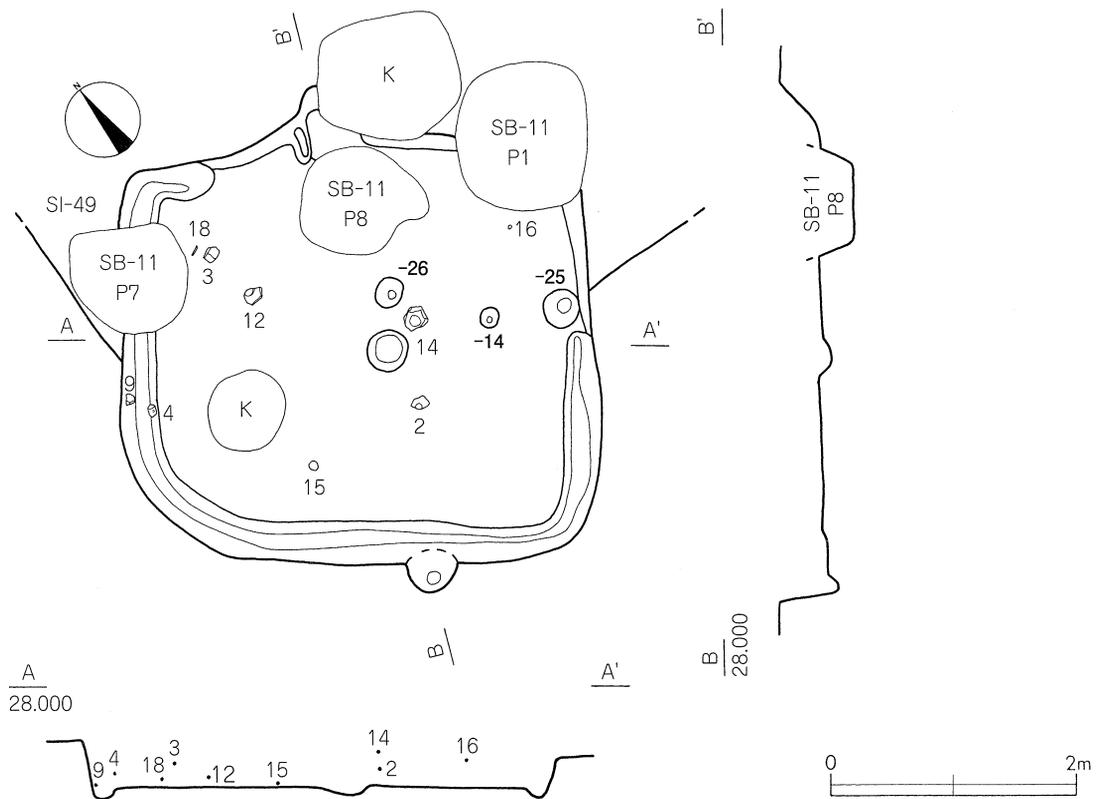
主軸方向 N-35° -E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 やや垂直気味に外傾して立ち上がる。確認面からの深さは最深部で36cmを測る。東壁側と北東側の一部を除き壁溝が巡っており、幅12～22cm、深さ1～11cmである。

床 概ね平坦である。中央付近に硬化面が広がっていた。

ピット プラン内に4基、南側隅付近に壁外に突出するように1基確認された。配置からいずれが支柱穴に相当するか判別は困難であった。いずれも円形を呈し、径16～40cm、深さ8～41cmを測る。南東壁際は入り口ピットに相当する可能性があり、入り口は南東もしくは南西側と思われる。

カマド 北東壁ほぼ中央に位置し、大きく攪乱を受けている。壁下場から壁外に約48cm掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。全長推定65cm、東側の袖は攪乱により壊されており焚き口幅は不明である。残存する袖を判断基準とすると住居の主軸に対してカマドの軸方向がややずれており、カマドの軸はお



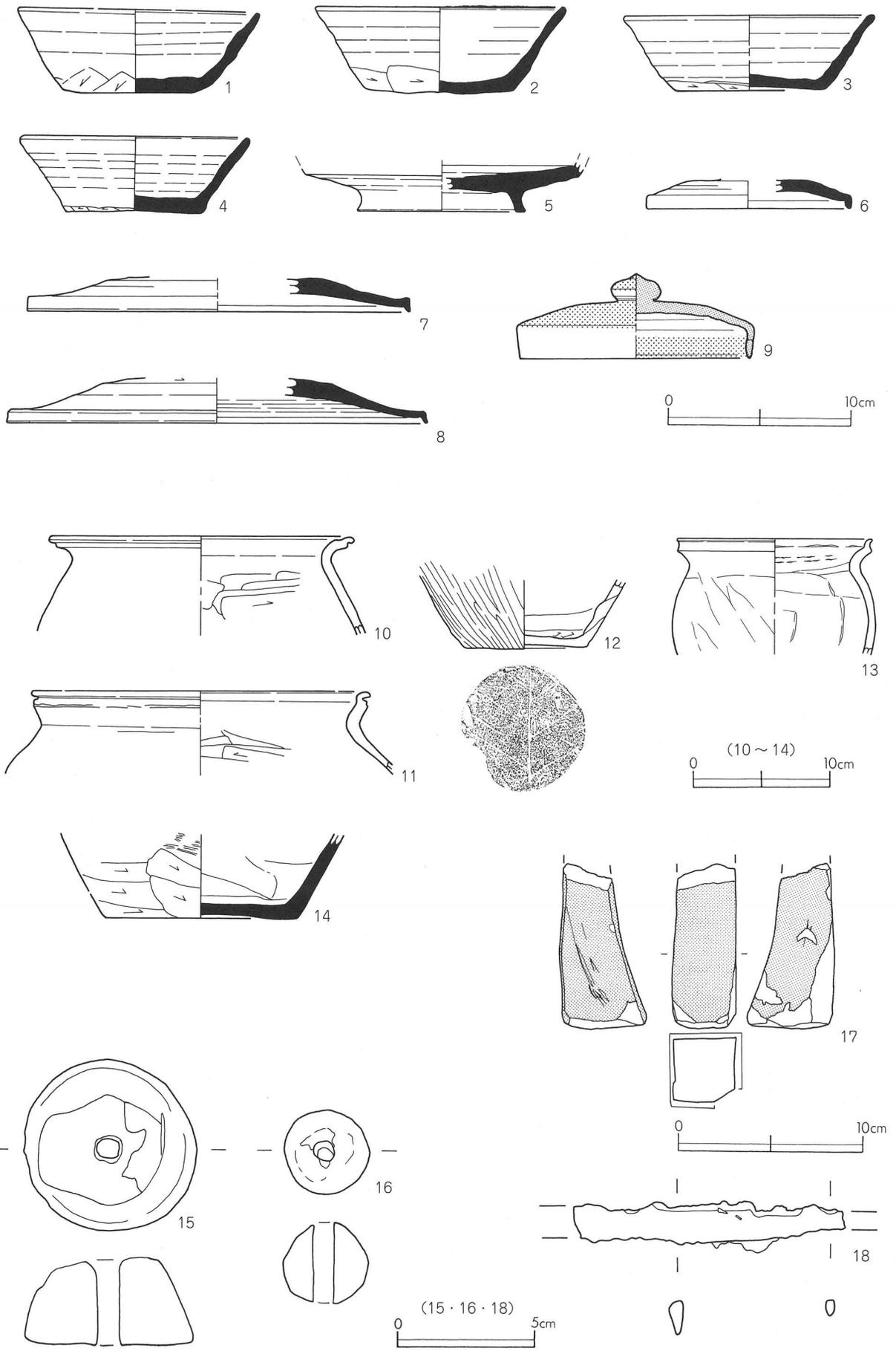
第92図 第10号住居跡

よそ20度西方向を向いていることが計測された。奥壁は緩やかに立ち上がっており、遺物は出土していない。

遺物 遺物はすべて床面ないし床面よりやや浮いた位置から発見されている。土器群は、坏、高台付盤、蓋、甕で構成され、供膳具はすべて新治窯産の須恵器である。須恵器の割合が非常に高い一方、土師器は煮沸具の甕に限られている。

No.1～4は須恵器坏である。4点とも形態的には類似しており、焼成もやや軟質ぎみのものが目立ち、新治窯製品の典型的な坏である。ちなみに、口径が13cm前後であるのに対して、底径は7.4～8.0cm程度である。No.5は須恵器の高台付盤である。作りはシャープで焼成は良好であるが、胎土はやはり新治窯に通有のものである。No.6～8は須恵器の蓋で、径20cm台のものと11～14cm前後の大小の2種が確認される。いずれも扁平な器形で、口縁部は小さく垂下している。No.9は灰釉陶器の蓋で、短頸壺専用で作られた蓋である。ふくよかな宝珠つまみをもち、外面上位および口縁部内面に釉の付着がみられる。猿投窯の製品と思われ、折戸10号から井ヶ谷78号窯式期に相当すると考えられる。No.10～13は土師器甕で、大小の法量分化が確認される。No.14は須恵器甕の底部である。体部に平行線の叩き目、下位に強いヘラ削りが施される新治窯に特徴的な甕で、胎土にも白雲母が認められる。No.15は土製紡錘車、No.16は土玉、No.17は凝灰岩製の棒状砥石である。

所見 遺物の時期は、須恵器坏の口径／底径の比率から判断する限り、9世紀前半頃に充てられると思われる。灰釉陶器の蓋がおよそ8世紀末を中心とする時期と考えれば、須恵器群とも大きな齟齬はないであろう。当住居跡も同様の時期に営まれたと考えられる。



第93图 第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図1	須恵器 坏	口径 13.0 底径 7.4 器高 4.7	体部は直線的に立ち上がる。	底部に一方からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰色 不良(軟質)	覆土 70%
第93図2	須恵器 坏	口径 13.6 底径 8.0 器高 4.6	底径は比較的大きく、体部は直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、二方向からのヘラ削りを施す。体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量 内外面灰褐色 良好	覆土中位 80%
第93図3	須恵器 坏	口径 [13.5] 底径 [8.0] 器高 4.0	体部は直線的に立ち上がり、やや浅め。口縁部は外反気味に僅かに開く。	底部に二方向からのヘラ削り、体部下位に軽い回転ヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 普通	覆土中位 45%
第93図4	須恵器 坏	口径 12.4 底径 7.4 器高 4.0	体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方からのヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを局部的に施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面褐色 普通	覆土中位 50%
第93図5	須恵器 高台付盤	高台径 [9.0] 器高 (2.2)	高台は端整な作りで、僅かに「ハ」字に開く。体部は水平方向に大きく開き、強い角度で立ち上がる。	底部は切り離し後、反時計回りの回転ヘラ削りを施す。体部は下位に反時計回りの回転ヘラ削りを行い、その後全面的に回転ナデを加える。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 良好	覆土 30% (高台部 30%残存)
第93図6	須恵器 蓋	口径 [11.0] 器高 (1.5)	小型の蓋の体部片。体部上位に平坦面をもち、扁平に短く開く。口縁部の作りは端整で、短く垂下する。	体部上面および中位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面青灰色 良好	覆土 40%
第93図7	須恵器 蓋	口径 [20.7] 器高 (1.8)	大型の蓋の体部片。体部は扁平に大きく開く。口縁部は短く垂下する。	体部上面(つまみ周辺)に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰黄色 普通(軟質)	覆土 30%
第93図8	須恵器 蓋	器高 (1.8)	体部は扁平に大きく開く。口縁部は短く垂下する。	体部上面に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石、白雲母を多量 内外面灰白色 不良(軟質)	覆土 40%
第93図9	灰陶陶器 蓋	口径 [12.6] 器高 4.5	短頸壺専用の蓋。つまみはふくよかな宝珠形を呈し、体部は僅かに甲高の膨らみをもつ。口縁部は内側が肥厚し、僅かに内傾する。	全面的に回転ナデを施し、端整に仕上げる。外面全面および口縁部内面に灰オリーブ色の釉が付着する。	ごく微細な長石を微量 (灰色の緻密な胎土) 外面灰オリーブ色、 内面灰黄色 良好	壁溝内 30% 折戸10号窯式 期に相当
第93図10	土師器 甕	口径 [22.0] 器高 (6.8)	甕の口縁部片。口縁は「く」字状に強く屈曲し、口唇部は外側に丸く折り返る。	内外面にヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面におい褐色 普通	覆土 細片(口径の 10%残存)
第93図11	土師器 甕	口径 [24.4] 器高 (5.4)	甕の口縁部片。口縁は「く」字状に屈曲し、口唇部は外側に丸く折り返る。	内外面にヘラナデ、内面の頸部付近に横位のヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面におい橙色 普通	覆土 細片(口径の 10%残存)
第93図12	土師器 甕	器高 (6.3) 底径 8.4	甕の体部下位片。底径は比較的大きく、体部は強い角度で立ち上がる。	体部下位はヘラ削り後、斜方向の磨きを施す。内底面にヘラナデ、体部内面に指頭によるナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面におい橙色 良好	覆土下位 20% (底部は 70%残存) 底部に木葉痕
第93図13	土師器 小型甕	口径 [14.0] 器高 (8.3)	体部は全体的に丸みを帯び、最大径を中位やや上にもつ。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は端整につまみ上げられる。	体部外面に斜位の軽いヘラナデ、内面に横位のヘラナデを施す。口縁部は回転ナデにより端整に整える。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面におい赤褐色 良好	覆土 20% (口径は 30%残存)
第93図14	須恵器 甕	器高 (6.0) 底径 14.0	甕の底部片。体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は未調整で砂粒痕が残る。体部外面の下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英、白雲母を多量 外面におい黄色、内面灰黄色 普通(軟質)	覆土上位 10% (底部は 完存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第93図15	土製品 紡錘車	6.2	6.0	3.2	117.5	やや大型の紡錘車。孔の径は0.9cm。全面的にナデによって滑らかに調整している。	微細な長石を中量、骨針(?)を微量 褐色 普通	床直 ほぼ完形
第93図16	土製品 土玉	3.0	3.1	3.0	25.9	孔の径は0.7cm。全面滑らかであるが、削り等の調整はみられない。	ごく微細な長石・白雲母を微量 灰褐色 普通	覆土上位 完形

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第93図17	石製品 砥石	(8.9)	4.3	3.5	(174.2)	凝灰岩製の棒状砥石。4面に研面があり、長軸方向の擦痕がみられる。	床直 60%
第93図18	鉄製品 刀子	(9.7)	1.9	0.6	(13.0)	刃幅は狭いが、背部の厚みがある刀子。切先、茎端を欠損し、刃部と茎の境も不明瞭。	覆土中位 60%

第11号住居跡〔第94・95図、PL.10・56・57〕

位置 調査区西側D・E-17・18グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独住居跡である。カマド脇に攪乱を受けていた。

規模 長軸5.88m、短軸3.12mの長方形を呈し、床面積約18.3㎡である。本遺跡の中でも少ない著しく長方形の住居跡である。長軸・短軸の比率はおよそ2対1であった。

主軸方向 N-83°-E。住居跡の長軸をほぼ東西方向に取っている。

壁 垂直気味に外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で46cmを測る。壁溝はカマド北側の一部を除き全周しており、幅10～14cm、深さ2～5cmを測る。

床 概ね平坦である。北壁側に部分的に焼土範囲が見られた。

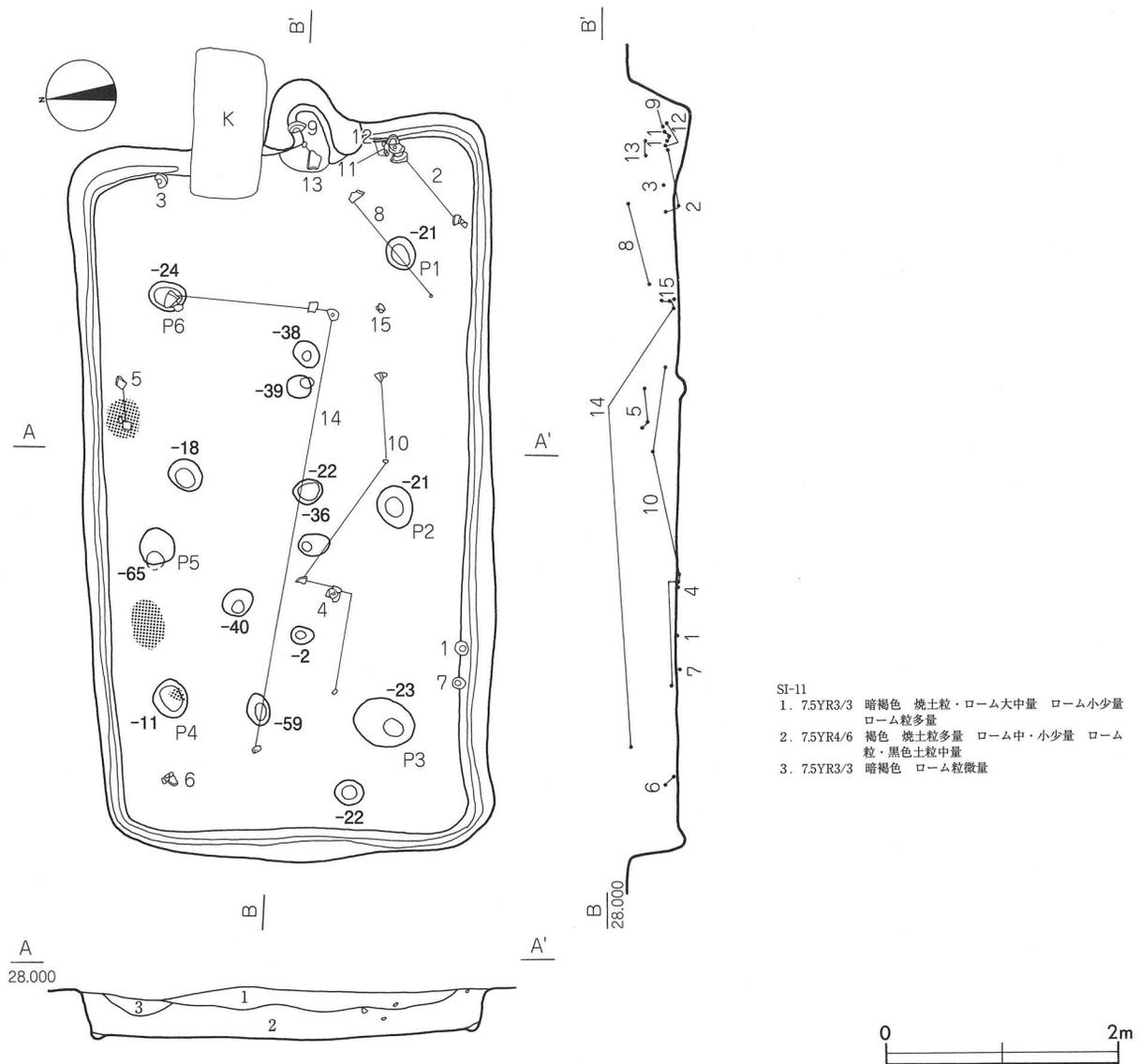
ピット 15基確認された。うちP1～6が配置から主柱穴と考えられる。円形・楕円形を呈し、長径28～52cm、深さ11～65cmを測る。浅い柱穴もみられるが近在して規模の深いピットも位置しており、補助柱穴の存在は十分に考えられる。他の9基は長径20～28cm、深さ2～59cmを測る。P3もしくはP5に隣接するピットは入り口施設に伴うピットの可能性もあり、入り口はカマドと対となる西壁側、もしくは北壁側のP5・6間と思われる。

カマド 東壁ほぼ中央に位置し、壁下場より約54cm壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。両袖は短く燃焼部側にほとんど突出していない。全長78cm、焚き口幅は約30cmで、カマドの主軸は住居跡の主軸とずれており、やや南寄り振られている。燃焼部は床面から奥壁に向かうにつれ深くなり、最深部は16cmで奥壁は外傾して立ち上がる。奥壁から両袖にかけて著しく被熱により赤化していた。袖に貼りつくように須恵器高台付盤(No.9)が出土している。

覆土 3層に分層された。焼土粒等を多量に混入する第2層は人為的な埋土で、第1・3層は後の自然堆積土と考えられる。

遺物 遺物は床面やカマドの周辺に散在しており、特別集中している様子はなかった。実測し得た土器の多くは床面直上ないし覆土中～下位より出土したもので、一括性の高い資料群とみなせるであろう。

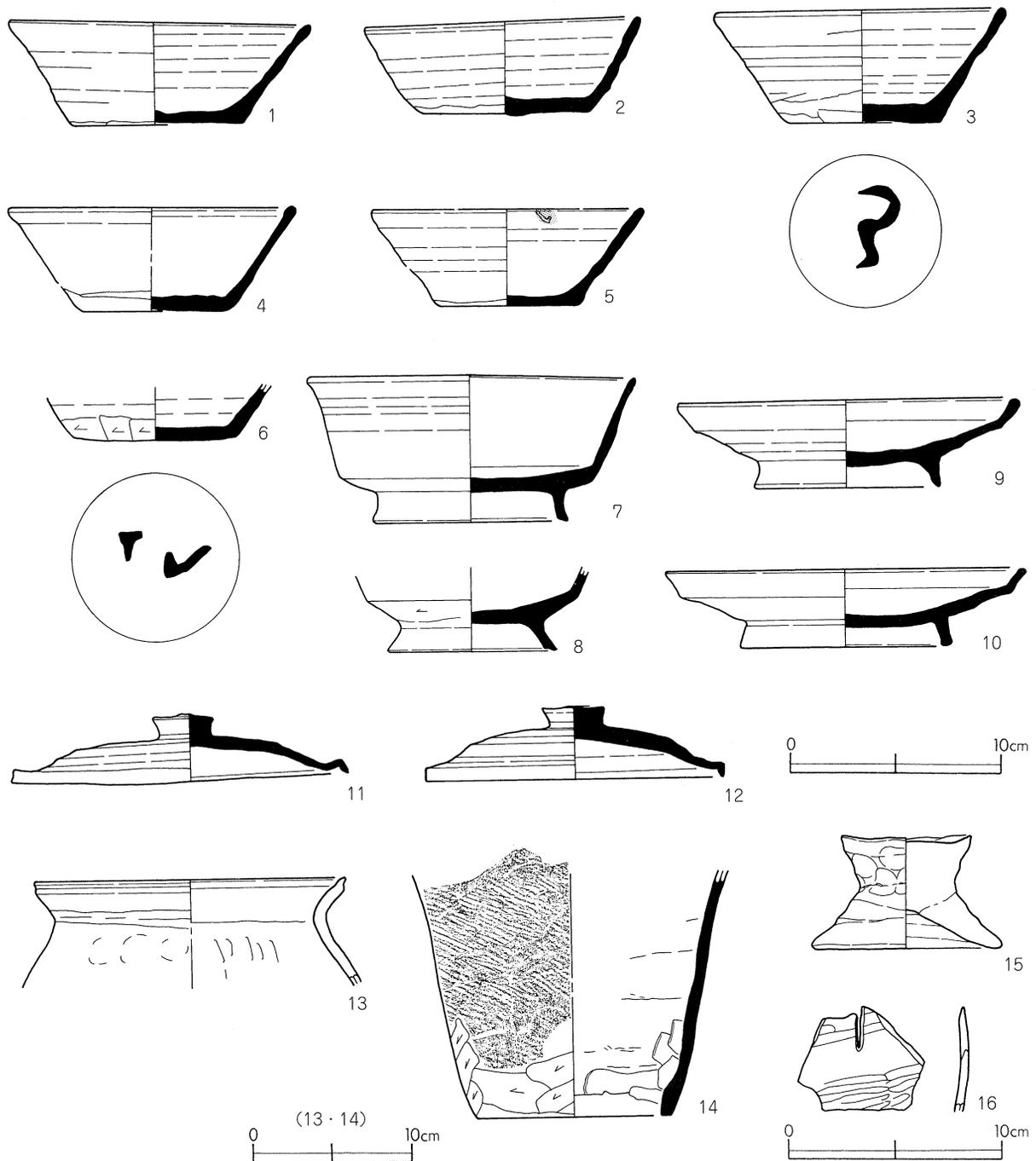
遺物はほとんどが須恵器であり、土師器は甕と加工痕のある甕小片、そして器台状の手捏ね土器がそれぞれ1点のみである。供膳具はすべて須恵器で、胎土や焼成具合も類似している。白雲母の含有から新治窯の製品であると思われる。No.1～6は須恵器坏である。いずれも体部が強い角度で直線的に立ち上がるタイプで、やや深めの印象を受ける。底径が大きく安定感のあるものと、やや小さめの底径をもつものの2種があるが、口径に対する底径の割合が50%を下回ることはない。No.3と6の底部には墨書がみられたが、文字か記号かさえ判別し得ないものであった。強いて文字と解するならば、No.3は「部」と読めるであろうか。No.7・8は須恵器の高台付坏、No.9・10は同じく高台付盤である。高台付坏には2種の法量分化が確認される。いずれも作りは端整で、焼き上がりも良好である。No.11・12は須恵器の蓋で、体部やつまみは全く同一形態である。No.13は土師器の甕で、比較的口縁部の開きがおとなしい長胴甕の一種とみられる。No.14は須恵器の甑である。体部の立ち上がりがつつく長胴化しており、当地周辺の甑としてはやや異例の形態である。底部の透かし孔は、本来は中央に円孔が一つ、その周囲に凸レンズ形の孔が4つ配置されるタイプである。No.15は手捏ねによって成形された器台の一種と思われる。逆さにして高坏のミニチュアとみることも不可能ではないが、上端部(図上の口縁部)が鋭く作られており、接地には適さないと判断した。カマドの支脚にしては高さが足らず、被熱もみられないため、正確な用途は不明である。該期の遺物としては不相応な感もあるが、床面直上から確認さ



第94図 第11号住居跡

れている。No.16は土師器甕の体部小片に切れ目を入れたものである。切れ目は刀子のような鋭利な道具によるものであるが、周縁には特別な加工がなく、用途は不明である。

所見 遺物の年代は、須恵器の供膳具の器形的特徴、特に坏の口径と底径の比率から判断して、9世紀前半頃に位置付けられるであろう。当住居跡は同様に該期に営まれたと考えられる。



第95図 第11号住居跡出土遺物

第11号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 1	須恵器 坏	口径 14.1 底径 8.2 器高 4.5	体部は僅かに外反ぎみに強い角度で立ち上がる。体部と底部の境がシャープ。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からヘラ削り。体部下端に局部的に回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面灰白色 普通 (軟質)	床直 完形
第95図 2	須恵器 坏	口径 13.0 底径 8.0 器高 4.4	体部は直線的に強い角度で立ち上がる。口径に対する底径の割合がやや大きい。	底部は回転ヘラ切り後、反時計回りの回転ヘラ削り。体部下端にも反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面灰黄色 不良	床直 完形
第95図 3	須恵器 坏	口径 13.8 底径 7.0 器高 5.3	体部は直線的に強い角度で立ち上がる。体部と底部の境がシャープ。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削り。体部下端は手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面灰白色 普通	覆土下位 80% 底部に墨書 (文字不明)
第95図 4	須恵器 坏	口径 [13.6] 底径 6.6 器高 4.8	体部は直線的に強い角度で立ち上がる。口縁部は僅かに肥厚する。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削り。体部下端に手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面黒褐色 普通	床直 70%

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 5	須恵器 坏	口径 [12.9] 底径 6.6 器高 4.5	体部は強い角度で直線的に立ち上がる。体部下端はエラを張り、底部を突出させる。	底部は切り離した後、一方向からのヘラ削り。底部外周のみ狭く手持ちヘラ削りを施し、体部下端は回転ナデ調整。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土 60% 内面口縁部にター ール状の付着物
第95図 6	須恵器 坏	底径 3.7 器高 (2.5)	体部は強い角度で立ち上がる。	底部は切り離した後、一方向からのヘラ削りを施す。体部下端に時計回りに手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面灰色 良好	床直～覆土下位 40%(底部は完存) 底部に墨書 (文字不明)
第95図 7	須恵器 高台付坏	口径 16.5 高台径 9.2 器高 6.7	体部は強い角度で直線的に立ち上がり、全体的に箱状を呈する。口縁部は僅かに外傾し、高台端部は弱めに開く。	底部および体部下端に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。体部は内外面に回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・ 石英を中量 内外面灰色 良好	床直 ほぼ完形
第95図 8	須恵器 高台付坏	高台径 8.0 器高 (3.6)	やや小型の高台付坏。高台は端整な作りで、「ハ」字に強く張り出す。体部は腰が高く、強い角度で立ち上がる。	底部は切り離した後、反時計回りの回転ヘラ削り、体部下位に反時計回りの軽い回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面灰色 良好	覆土上位 40%(高台部 は完存)
第95図 9	須恵器 高台付盤	口径 16.2 高台径 8.8 器高 4.1	体部は浅く大きく開き、口縁部は丸く肥厚する。高台は僅かに「ハ」字に開く。	底部は切り離した後、反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を少量 内外面灰白色 普通	カマド燃焼部 完形
第95図 10	須恵器 高台付盤	口径 [17.0] 高台径 10.0 器高 3.6	体部は浅く大きく開き、口縁部は外反ぎみに開く。高台はシャープで、僅かに「ハ」字に開く。	底部は切り離した後、反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・ 石英を少量 内外面褐灰色 良好	床直～覆土中位 70%
第95図 11	須恵器 蓋	口径 16.0 器高 3.2	体部は緩い弧を描いて開き、口縁部はシャープな稜をもって垂下する。つまみは上部がほぼ平坦で逆台形を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。体部外面にはきついロクロ目を残す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 良好	床直 90% 口縁部に焼き 歪み
第95図 12	須恵器 蓋	口径 14.1 器高 3.5	体部は緩い弧を描いて開き、口縁部はシャープな稜をもって垂下する。つまみは上部がほぼ平坦で逆台形を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、その上から回転ナデを施す。体部外面にはきついロクロ目を残す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面灰色 良好	床直 70% No.10によく類 似する
第95図 13	土師器 甕	口径 [19.6] 器高 (6.5)	肩部の張りは弱く、口縁部は「く」字に屈曲する。口唇部は短く外反する。	口縁部の内外面に回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面橙色 普通	カマド覆土 10%(口縁の 40%残存)
第95図 14	須恵器 甌	底径 [12.2] 器高 (15.3)	体部は直線的で垂直に近い角度で立ち上がる。底部に凸レンズ状の孔が開く。	体部に斜方向の平行線の叩き目を付け、体部下端に横位の手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面灰白色 普通	床直～覆土上位 10%(体部径 の30%残存)
第95図 15	手捏ね土 器 器台?	口径 [6.0] 高台径 [9.0] 器高 5.2	手捏ねによって成形された器台ないし高坏。高台部は「ハ」字に大きく開き、体部は円柱状を呈し、口縁部が僅かに立ち上がる。	全体的に指頭によって成形され、部分的に指頭ナデが施される。高台内面および口縁内面も簡易な指頭ナデ調整が施される。	径1～3mmの長石・石 英を多量、褐色スコ リア少量、白雲母を中量 内外面にぶい褐色 普通	床直 60%

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第95図 16	加工土器 片	4.9	5.5	0.4	13.3	土師器甕の体部片を利用。刃物で細長い孔をいし切れ目を入れたもの。用途不明。	径1mmの長石・石英を多量 にぶい橙色 普通	覆土 残存率不明

第12号住居跡〔第96図、PL.9・57〕

位置 西側調査区にかかる－(マイナス)A-18・19グリッド、標高27.5mに位置する。北東部で第8号住居跡と重複しており、第8号住居跡内に当住居跡のカマドが遺存していることから当住居跡が新しいと判断した。

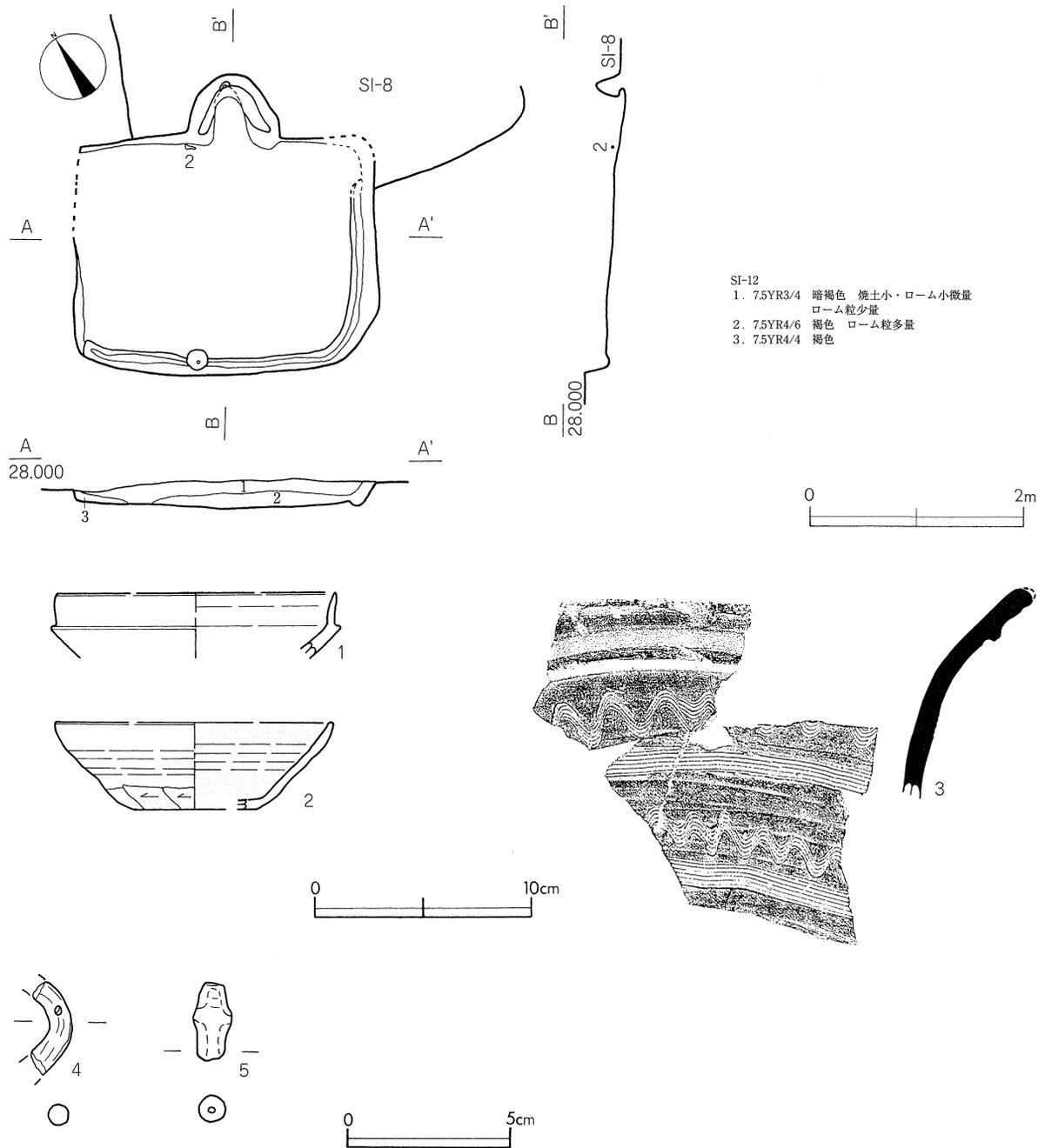
規模 長軸2.44m、短軸1.9mの横長の長方形を呈し、床面積は約4.6㎡である。

主軸方向 N-27° -E

壁 外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で28cmを測る。南西から東壁にかけて壁溝が確認されており、規模は幅10cm前後、深さ2～5cmである。

床 中央からカマドを有する壁方向に向かい緩やかに傾斜している。第8号住居跡の床面は当住居跡の高位の床面から10cm程下面に形成されている。

ピット 南側壁溝にかけて径19cmの円形ピットが1基確認されたのみである。これが入り口施設に伴うかは不明であるが、おそらく入り口はカマドと対となる南側であろう。



第96図 第12号住居跡・出土遺物

カマド 北壁ほぼ中央に位置する。壁下場から64cm程壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。全長推定70cm、焚き口幅は約31cm、壁の下場と袖の位置がほぼ同じで、袖も含めて壁外に作られている。床面から燃焼部は緩やかに傾斜しており、明確な掘り込みはなく、また奥壁はオーバーハングしながら外傾して立ち上がる。両袖内側から奥壁側は被熱により赤化していた。カマド内から遺物は出土していない。

覆土 3層に分層された。埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物の量は非常に少なく、カマド脇の床面から発見されたNo.2の坏以外は、覆土中からの出土である。No.1は土師器坏で、体部と底部の境に稜をもち、本来は丸底であったと想定される。No.2も土師器の坏であるが、底部は平底で非常に径が小さく、体部は内湾ぎみに立ち上がっている。比較的新

しい時期の特徴である。No.3は須恵器大甕の口縁部片で、外面に櫛描の条線と波状文が施文されている。No.4・5は土製の垂飾品の一種で、それぞれ勾玉と管玉を意識したものと思われる。また、図示していないが凝灰岩製の砥石が1点出土している。遺物の時期は、No.1の坏やNo.4・5の玉類が類例から古墳時代後期のものと考えられる。一方、No.2の坏は、器形の特徴から9世紀後半以降のものと推測される。No.3のような大甕は長期にわたり存在しており、時期を絞り込むことはできない。

所見 当住居跡は第8号住居跡を掘り込んで営まれており、当住居跡の方が新しいことは確実である。第8号住居跡の遺物は9世紀後葉から10世紀前半にかけてのものと考えられたが、本住居跡の遺物もこれと大きく隔たることはないと思われる。よって10世紀前半頃の時期に充てておくのが妥当であろう。

第12号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	土師器 坏	口径 [13.0] 器高 (3.0)	体部と底部の境に段をもち、口縁部は高く直立する。	体部外面に横方向のヘラ削り、口縁部は内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土 10% (口径の 20%残存)
第96図 2	土師器 坏	口径 [12.7] 底径 [5.8] 器高 4.0	ごく小さな底部から内湾ぎみの体部が緩い角度で立ち上がる。	底部は一方向からのヘラ削り、体部下端に手持ちヘラ削りを施す。体部中位に強いロクロ目を残す。	微細な長石・石英、 白雲母を少量 内外面浅黄色 普通	カマド脇床直 20% 内面・外面の 一部に黒色処 理
第96図 3	須恵器 大甕	器高 (9.6)	大甕の口縁部片。口縁は外反しながら大きく立ち上がり、口唇部は「J」字に平たく折り返す。	口縁部外面に二条の櫛描条線と二段の櫛描波状文を施文する。	径1～3mmの長石・ 石英を少量、白雲母 を多量 内外面灰オリーブ色 普通	覆土 細片

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第96図 4	土製品 勾玉?	(2.8)	0.8	0.6	(1.8)	両端が欠損する三日月状の土製品。長軸方向に直交して径2mmの孔を穿つ。	混和材のない緻密な粘土 にぶい橙色 普通	覆土 80%
第96図 5	土製品 管玉?	2.4	1.2	0.8	2.2	中央が膨らむ管玉。両端から指頭で押さえるように成形したもの。孔は径2mm。	混和材のない緻密な粘土 灰褐色 普通	覆土 完形

第14号住居跡〔第97図、PL.10・58〕

位置 調査区北西側E・F-14・15グリッド、標高27.5m付近に位置する。東側で第1号溝と重複しており、土層堆積状況から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.96m、短軸2.54mの長方形を呈し、床面積は約10.1㎡である。

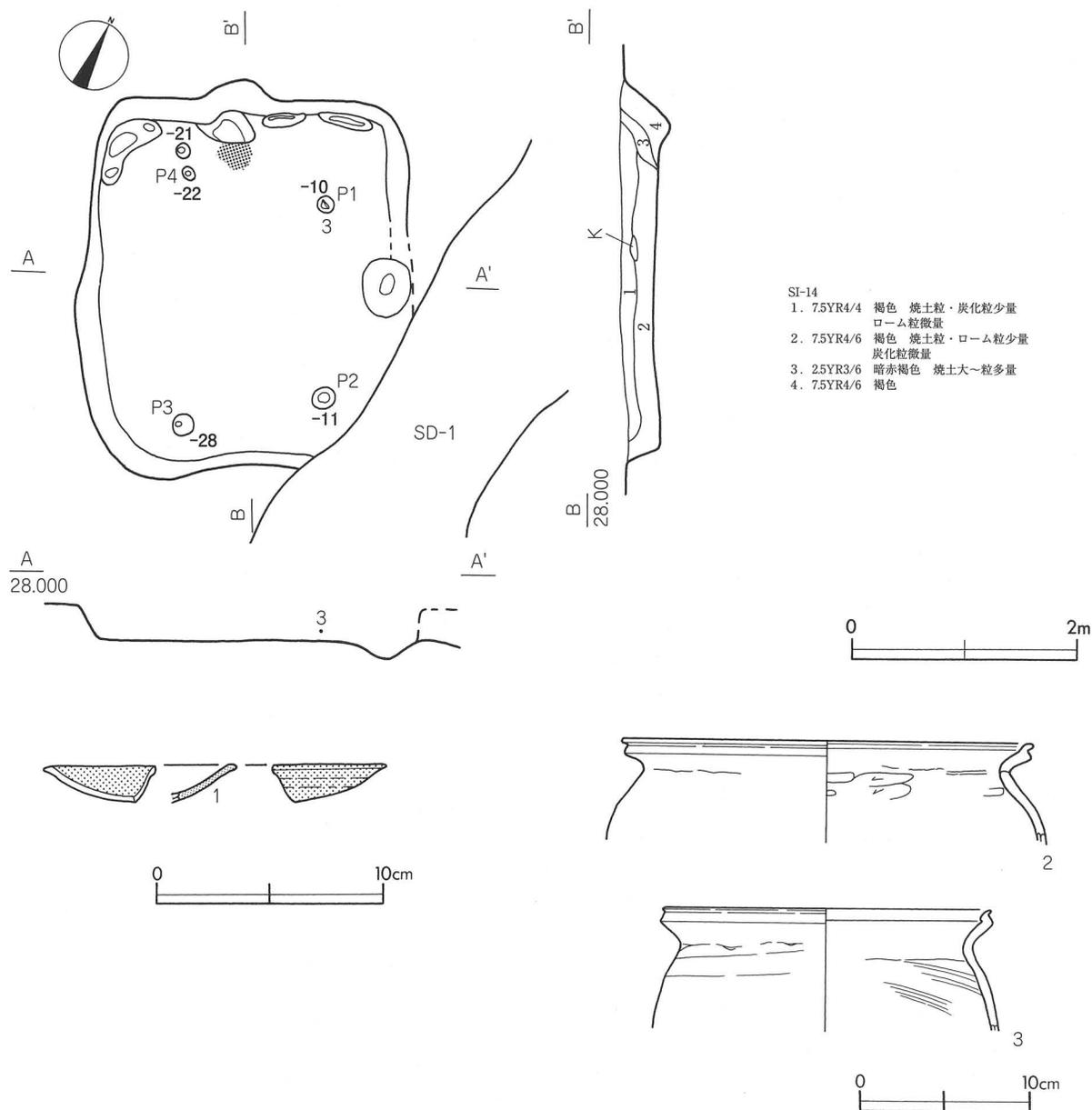
主軸方向 N-25° -E

壁 外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で30cmである。カマドを挟んで両側に壁溝状のピットがみられる。規模は幅12～24cm、深さ10～13cmで、カマド東側の2条は規模・形状ともに近似していた。壁溝の一部と考えられる。

床 概ね平坦で、カマド燃焼部手前にカマド内から掻き出したと思われる焼土がみられた。

ピット 6基確認された。配置からP1～4は主柱穴に相当しよう。円形を呈し、径12～20cm、深さ10～28cmである。東側壁にかかる楕円形ピットは他に比べて径50cmと大形で浅いものである。入り口施設に伴うピットの可能性もあり、入り口は東もしくはカマドと対となる南側となろう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置する。壁下場から壁外に30cm程掘り出して煙道部を構築しており、奥壁は外傾して立ち上がる。全長54cmで両袖の痕跡は確認できなかった。燃焼部は床面から10cm程掘り込まれており、遺物は出土していない。カマド内の覆土中位には焼土が多量に混入していた。



第97図 第14号住居跡・出土遺物

覆土 4層に分層された。第3・4層はカマド崩落土である。

遺物 実測し得た遺物は僅か3点である。No.1は灰釉陶器の椀である。口縁部のみの小破片であるが、浅い器形と丸みを帯びた体部の様子が窺える。釉は刷毛塗りか漬け掛けか判断できないが、鮮黄緑色の釉が両面に薄く付着している。このふくよかで浅い椀の形態は、猿投窯では黒笹90号窯式期に比較的多くみられるものである。胎土や釉調も同期のものに類似しているようである。No.2・3は土師器の甕であるが、いずれも小破片でしかない。一般的な甕に変わるところはないが、比較的頸部が短く、口縁の立ち上がりが小さい傾向がみられる。

所見 遺物の時期は、灰釉陶器を黒笹90号窯式期とするならば、およそ9世紀後半から10世紀前半頃に充てることができる。甕の形態も後出的な様相が窺え、概ね9世紀後半以降と想定される。当住居跡の営まれた時期も同様の時期となろう。

第14号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	灰釉陶器 椀	器高 (1.6)	体部は丸みを帯びて浅めに開く。 口縁部は緩やかに外反する。	内外面に滑らかなロクロ回転がみられ、両面に鮮黄緑色の釉が塗布される。	微細な長石を少量 緻密な胎土 内外面 鮮黄緑色 堅緻	覆土 細片
第97図 2	土師器 甕	口径 [24.3] 器高 (5.9)	口縁部は「く」字に強く屈曲し、 口唇部はシャープに外反する。	口縁部内面に横位のヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英 を多量、白雲母を少量 内外面にい褐色 普通	覆土 細片 (口径の 10%残存)
第97図 3	土師器 甕	口径 [19.4] 器高 (7.1)	口縁部は「く」字に屈曲し、口唇 部は外反ぎみに立ち上がる。	体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・ 石英を多量 外面灰褐色、内面褐 色 普通	覆土下位 細片 (口径の 10%残存)

第15号住居跡 [第98・99図、PL.10・58]

位置 調査区北西側 G・H-14・15グリッド、標高27.5m付近の台地平坦部に位置する。他の遺構と重複しない単独の住居跡である。

規模 長軸3.54m、短軸3.24mの横長の正方形を呈し、床面積約11.5㎡である。

主軸方向 N-13° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で20cmである。東-南-西側で途切れながら壁溝が巡り、規模は幅8～16cm、深さ2～7cmを測る。

床 概ね平坦である。南側から中央部にかけて白色粘土が広範囲にみられた。

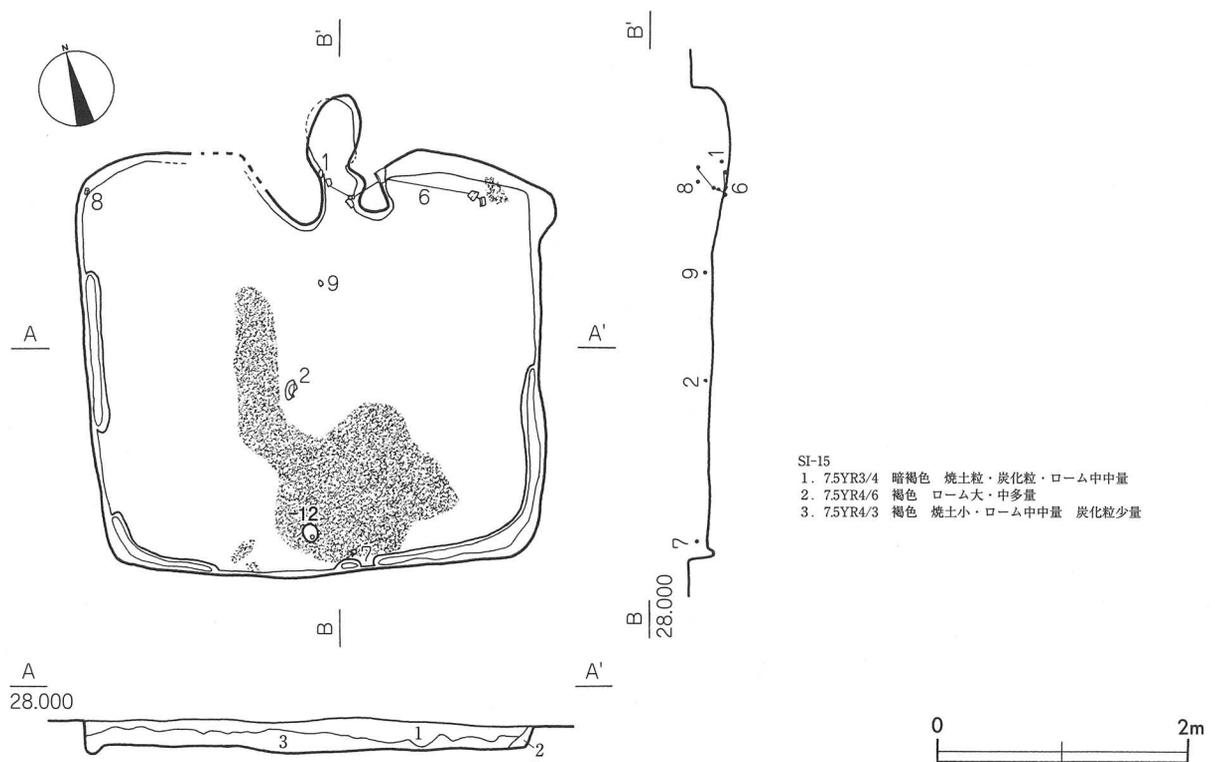
ピット カマドと対になる南側で1基確認されたのみである。円形で径14cm、深さ12cmを測る。これを入り口施設に伴うピットと考え、入り口はカマドと対となる南壁側に位置しよう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置する。壁下場より70cm程壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築しており、奥壁は一部オーバーハングして立ち上がる。両袖は確認された住居上場ラインより50cm前後居住域内に張り出している。焚き口幅は27cmと狭く、ここから奥壁にかけて若干軸を変えながら楕円形を呈して広がっていた。焚き口から奥壁にかけて全体に細く長い形状を呈している。全長推定1.1m、床面から燃焼部の最深部は16cmで、両袖は被熱のためか黒変していた。カマド内から土師器椀 (No.1) と置きカマド (No.6) の破片の一部が出土している。

覆土 3層に分層された。第2層はローム質土が多く壁崩落土であろう。

遺物 遺物はカマド内及び周辺よりNo.1の土師器椀やNo.6の置きカマドが床面レベルで確認されている。住居の中央から南側にかけての覆土下位にも、No.2の灰釉陶器皿をはじめとする土器類が確認された。

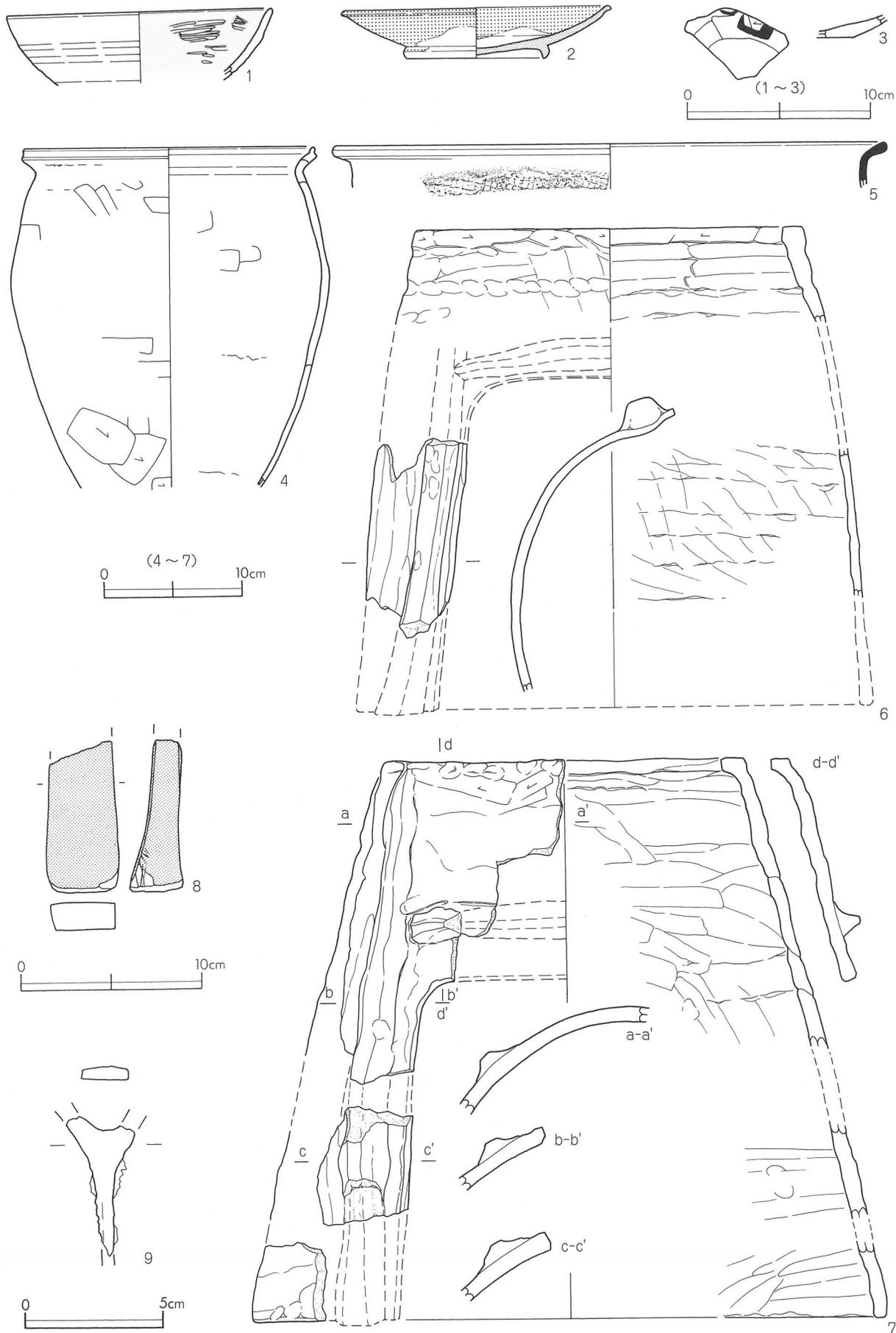
No.1は土師器椀で、内面に磨きと黒色処理を施している。No.2は灰釉陶器の皿である。当住居跡から出土したのは約1/2の破片であったが、残りの破片が第28号住居跡 (約27m程南東に位置) の覆土中から出土しており接合した。当住居跡の破片の方が覆土中でもより下のレベルで発見されているので、この皿の帰属は当住居と判断している。高台の断面形態はシャープな三ヶ月形を呈しており、黒笹90号窯式期に比定できる。釉は漬け掛けされ、鮮黄緑色に発色している。No.3は土師器皿の小片で、内面黒色処理がみられる。体部外面に墨書がみられるが判読不能であった。No.4は土師器甕である。長胴化した一般的な形態であるが、体部外面に磨きが施されていない特徴がある。No.5は須恵器の鉢ないし甌の口縁部である。同一個体と思われる孔のない底部片が見つかったので (小片のため図化していない)、No.5はおそらくバケツ形を呈する鉢であったと推測される。当地域、特に新治窯の製品



第98図 第15号住居跡

には一定量認められる器種である。外面には格子目の叩きが施されている。No.6・7は土師器の置きカマドである。両者はともに粘土紐の積み上げ痕を明瞭に残す粗雑なつくりであるが、焼き口の枠や底の表現、胎土などに大きな違いが認められる。No.6の焼き口の側枠は太い柱状を呈しているのに対し、No.7は突帯状の簡易なもので、しかも焼き口よりもやや離れた位置に取りつけられている。後者は焼き口の補強や防災の機能を果たしていない点で、形骸化の過程にあるものと考えられる。大きな時期差は想定できないが、出土レベルは後者の方が上位であり、僅かに新しいものと考えられそうである。なお、No.6の外面には微かであるがNo.5と類似した格子目の叩きが認められ、須恵器生産との関連性が予想される。No.8は凝灰岩製の板状砥石、No.10は雁又鏃である。

所見 遺物の時期は、No.2の灰釉陶器皿が黒笹90号窯式期に比定できるので、9世紀後半から10世紀前半頃に充てることができる。須恵器の量が著しく少ない点も9世紀末頃の傾向に対応しているようである。当住居跡の営まれた時期も同様の時期と考える。



第99图 第15号住居跡出土遺物

第15号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	土師器 椀	口径 [14.4] 器高 (3.8)	体部は丸みを帯びて深めに立ち上がる。口縁部は外反せず素縁に終息する。	体部外面に間隔の狭いロクロ目が付く。内面は横位の磨きを施す。	微細な長石と褐色スコリアを微量、白雲母を多量 外面にぶい橙色、内面黒色 普通	カマド燃焼部 40% 内面黒色処理
第99図 2	灰釉陶器 皿	口径 14.5 高台径 7.5 器高 2.8	体部は丸みをもって浅く開き、口縁部は緩やかに外反する。高台は断面三ヶ月形を呈する。	底部に反時計回りの回転ヘラ削りを行い、その後全面的に回転ナデを施す。鮮黄緑色の釉が内外面に付着。漬け掛けによる施釉。	微細な長石を微量、 黒色粒子を少量 内外面浅黄色 堅緻	床直 90% SI-28出土の破片と接合
第99図 3	土師器 皿	底径 [5.6] 器高 (1.0)	無台皿の小片。体部は浅く直線的に開く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。内面に磨きを施す。	径1mmの長石・石英、 褐色スコリアを少量、 白雲母を多量 外面にぶい橙色、内面黒色 普通	覆土 細片 内面黒色処理 体部外面に墨書 文字不明
第99図 4	土師器 甕	口径 [21.1] 器高 (24.7)	最大径は体部中位にあり、肩の張りは弱い。頸部は「く」字に屈曲し、シャープな口唇部が直立する。	体部外面に横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・ 石英を多量、白雲母 を少量 内外面にぶい赤褐色 普通	覆土 30%
第99図 5	須恵器 鉢	口径 [40.2] 器高 (3.3)	鉢ないし甔の口縁部片。口縁は「く」字に外反し、短い口唇部が直立する。	体部外面に格子目の叩き目が付く。口縁部は回転ナデ調整を施す。	径1～3mmの長石・ 石英を多量、白雲母 を中量 内外面灰色 普通	覆土 細片 (口径の 20%残存)
第99図 6	土師器 置きカマド	釜口 外径 [20.5] 内径 [18.5]	置きカマドの上部 (釜口部) と焼き口付近の破片。焼き口部には断面四角形の厚い枠が付く。	粘土紐輪積みによって粗く成形される。外面に格子目の叩きと縦位のナデを施す。焼き口部の枠は手捏ね成形後、ヘラナデにより調整を行う。	径1mmの長石・石英を 少量、白雲母を多量 外面橙色、内面にぶい 褐色 普通	カマド燃焼部、 裾部および床直 全体の20%
第99図 7	土師器 置きカマド	釜口 外径 [19.5] 内径 [16.7] 器高 (30.1)	置きカマドの上部から焼き口部までの破片。焼き口の枠と庇は粘土帯を「H」字状に貼りつけたもの。焼き口は隅丸方形に切り開かれる。	粘土輪積みによる粗成品。内外面とも指頭ナデ調整を主に部分的にヘラナデを施す。釜口と焼き口はヘラ切りにより開口させる。	径1～3mmの長石・ 石英を多量、白雲母 を少量 内外面明赤褐色 良好	覆土下位 破片を含め全 体の20%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第99図 8	石製品 砥石	(8.2)	3.9	2.9	(106.3)	凝灰岩製の板状砥石。砥面は4面、切り出し面が1面、折損面が1面。	覆土中位 60%
第99図 9	鉄製品 雁叉鎌	(5.0)	(2.5)	0.5	(6.6)	先端および茎を欠損する。平面形態は「Y」字を呈する。	覆土下位 70%

第16号住居跡〔第100図、PL.11・58〕

位置 調査区北西側 I・J-13・14グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。住居跡を縦・横断するように第3・10号溝が重複しており、土層堆積状況から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.58m、短軸3.12mの横長の長方形を呈し、床面積は約11.2㎡である。

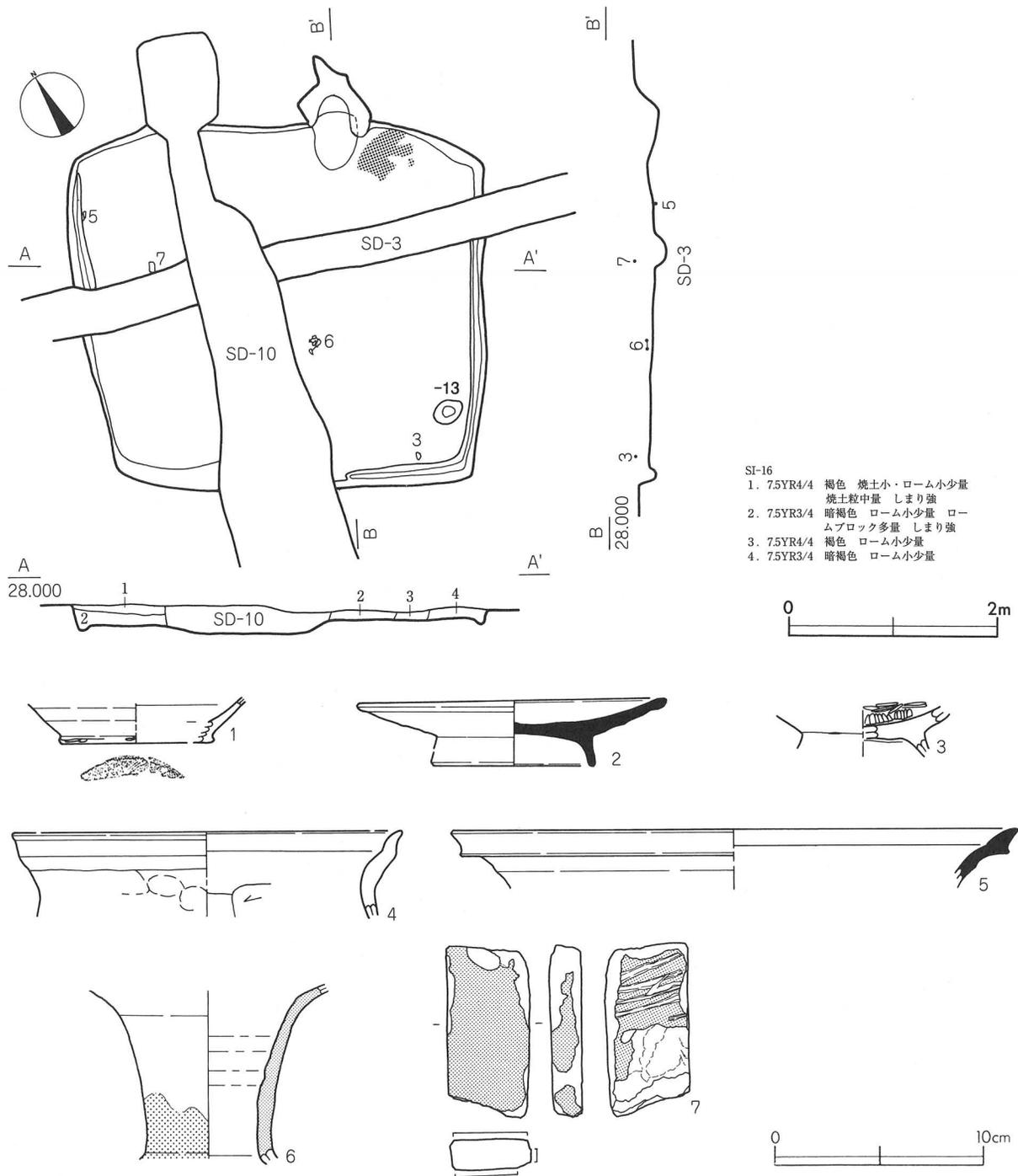
主軸方向 N-32° -E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 垂直気味に外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で24cmを測る。東壁から南壁にかけてと西壁に壁溝が巡っている。規模は幅8～12cm、深さ5cm前後を測る。

床 概ね平坦である。カマド脇に大量の焼土が厚みを有して堆積していた。また、重複遺構である2条の溝はいずれも床面まで掘り込まれている。

ピット 南側隅に1基確認されたのみである。円形で径28cm、深さ13cmを測る。推測する根拠は弱いだが、入り口はおそらくカマドと対になる南西壁かカマドが偏向している南東壁に位置すると思われる。

カマド 北東壁の東寄りに位置する。壁下場から壁外へ65cm程掘り出して燃焼部と煙道部を構築しており、奥壁は外傾して立ち上がる。全長1.8mで左袖はほとんど確認できなかった。床面から燃焼部の最深部までは10cm程で、残存している部分はいずれも被熱により著しく赤化している。遺物は出土していない。



第100図 第16号住居跡・出土遺物

覆土 4層に分層された。土層図の東側は第3号溝の覆土の可能性はある。

遺物 遺物の出土量は少ない。覆土中～上位に小さな土器片が散在するような状態で、比較的大きな遺物はNo.2の高台付皿とNo.6の長頸壺頸部の2点である。

No.1は土師器坏である。体部の立ち上がり方次第では小皿の可能性もあるが、残存部が少ないため判然としない。底部には糸切り技法に通有の粘土のみ出し（バリ）がみられるが、ヘラ切りか糸切りかやはり判然としない。No.2は須恵器の高台付皿である。部分的に還元焰焼成の色調がみられるが、全体的には土師器によく似た色調を呈する。高く直立した高台をもち、口縁部は外面のみを肥厚させて

外反するように見せかけている。灰釉陶器を模倣する意識が読み取れる。No.3は土師器の高台付椀である。底部および高台基部が小さく引き締まり、ふくよかな体部と「ハ」字に開く高めの高台が特徴的である。これは土師器の同器種に通有の特徴である。No.4は土師器の甕である。常総地域の土師器甕は、頸部から口唇部にかけて「S」字状を描くのが一般的であるが、No.4はそれを踏襲しつつ、かなり間延びした形態を呈している。No.5は器形的には須恵器甕の口縁部であるが、色調は土師器そのものである。No.2と同様、しっかりとした還元焰焼成が行われなくなった段階のものであろう。床面直上から出土している。No.6は灰釉陶器の長頸壺頸部で、外面下位に明オリーブ色の釉が刷毛塗りされている。黒笹90号窯式期に相当するものと思われる。No.7は凝灰岩製の板状砥石である。

所見 遺物の時期は、No.6の長頸壺を黒笹90号窯式期に充てて9世紀後半から10世紀前半、No.2の高台付皿も器形的特徴から9世紀後葉頃に位置付けるのが妥当と思われる。No.2やNo.5は当地域における還元焰焼成の最終段階の遺物とみなせよう。当住居跡の営まれた時期は該期に相当すると考える。

第16号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	土師器 椀	底径 [7.4] 器高 (1.9)	底部は切り離しのみで体部との境に突出部ができる。体部の器壁は非常に薄く、丸みをもって立ち上がる。	底部は切り離し後、ヘラ削りを施す。体部下端に切り離し時に付いたヘラのあたりが残る。体部は内外面に回転ナデ。	微細な長石と白雲母を少量 内外面橙色 普通 (やや軟質)	覆土 10% (底径の20%残存)
第100図 2	須恵器 高台付皿	口径 14.5 高台径 7.6 器高 3.3	体部は僅かな丸みを帯びて浅く開き、口唇部は外側に肥厚する。高台は高く、直線的に垂下する。	底部は切り離し後、反時計回りの回転ヘラ削り、高台の周囲に回転ナデを施す。体部は内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を少量 内外面灰黄褐色 不良	覆土 70% 色調は土師器に類似
第100図 3	土師器 高台付椀	器高 (2.0)	底径および高台基部の径が小さく、体部は丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。高台は「ハ」字に開く。	底部は高台取り付けに伴う回転ナデを全面に施す。体部下端に軽い回転ヘラ削り、内面に細かな磨きを施す。	微細な長石、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土中位 20% (高台基部径の40%残存)
第100図 4	土師器 甕	口径 [18.4] 器高 (4.0)	甕の口縁部小片。口縁の外反は弱く、縦方向に間延びする。口唇部も外反しながら高く立ち上がる。	指頭によるナデ成形を行う。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土 細片 (口径の5%残存)
第100図 5	須恵器 甕	器高 (2.0)	甕の口縁部小片。強く外反して開き、口唇部断面三角形にせり出す。	回転ナデによって整形されている。	径1mmの長石・石英、白雲母を少量 内外面灰褐色 普通	床直 細片(口径の5%残存) 色調は土師器に類似
第100図 6	灰釉陶器 長頸壺	器高 (7.3)	頸部片。基部は強く締め、口縁部に至り大きく開く。	外面および頸部内面に回転ナデ調整を施す。頸部下位に釉を刷毛塗りする。	微細な長石と黒色粒子を微量 内外面灰白色 堅緻	覆土下位 20% (頸部径の60%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第100図 7	石製品 砥石	(7.9)	3.9	1.5	(80.7)	凝灰岩製の板状砥石。砥面は1面、切り出し面が4面、折損面が1面。横方向に刃物痕が残る。	覆土上位 80%

第17号住居跡〔第101～103図、PL.11・58・59〕

位置 調査区ほぼ中央I・J-18・19グリッド、標高27.5mの台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

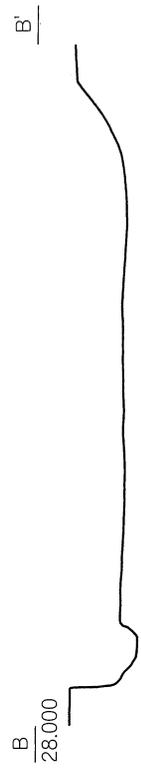
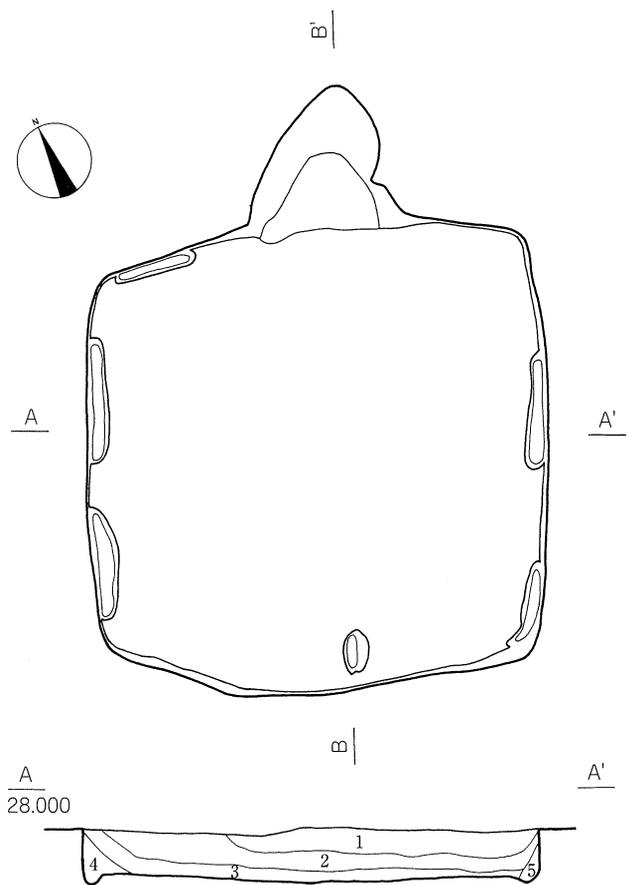
規模 長軸3.62m、短軸3.54mのやや横に長い正方形を呈し、床面積は約12.8㎡である。

主軸方向 N-26° -E

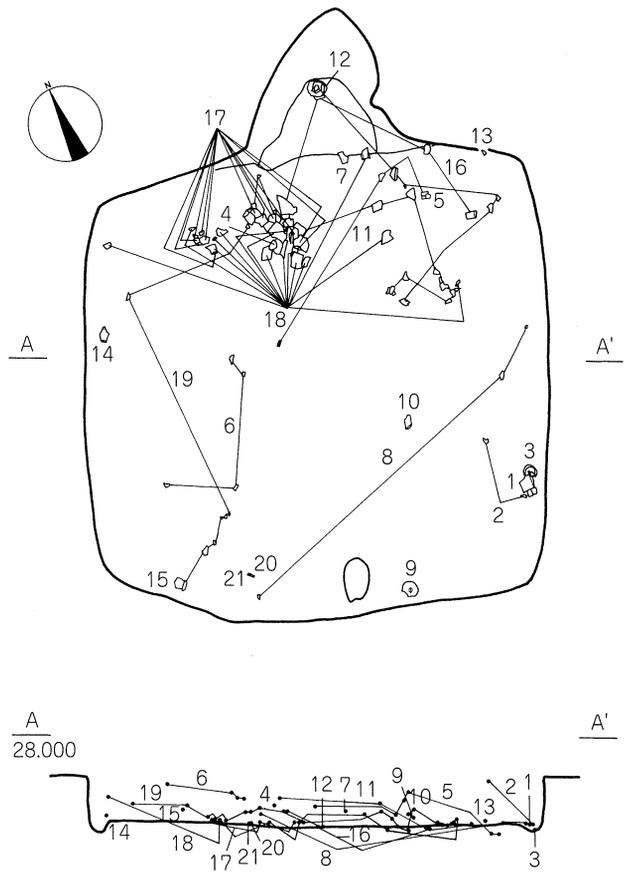
壁 概ね垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で45cmを測る。東西壁と北壁に部分的に壁溝が確認された。規模は幅10cm前後で、深さ2～9cmを測る。

床 概ね平坦である。

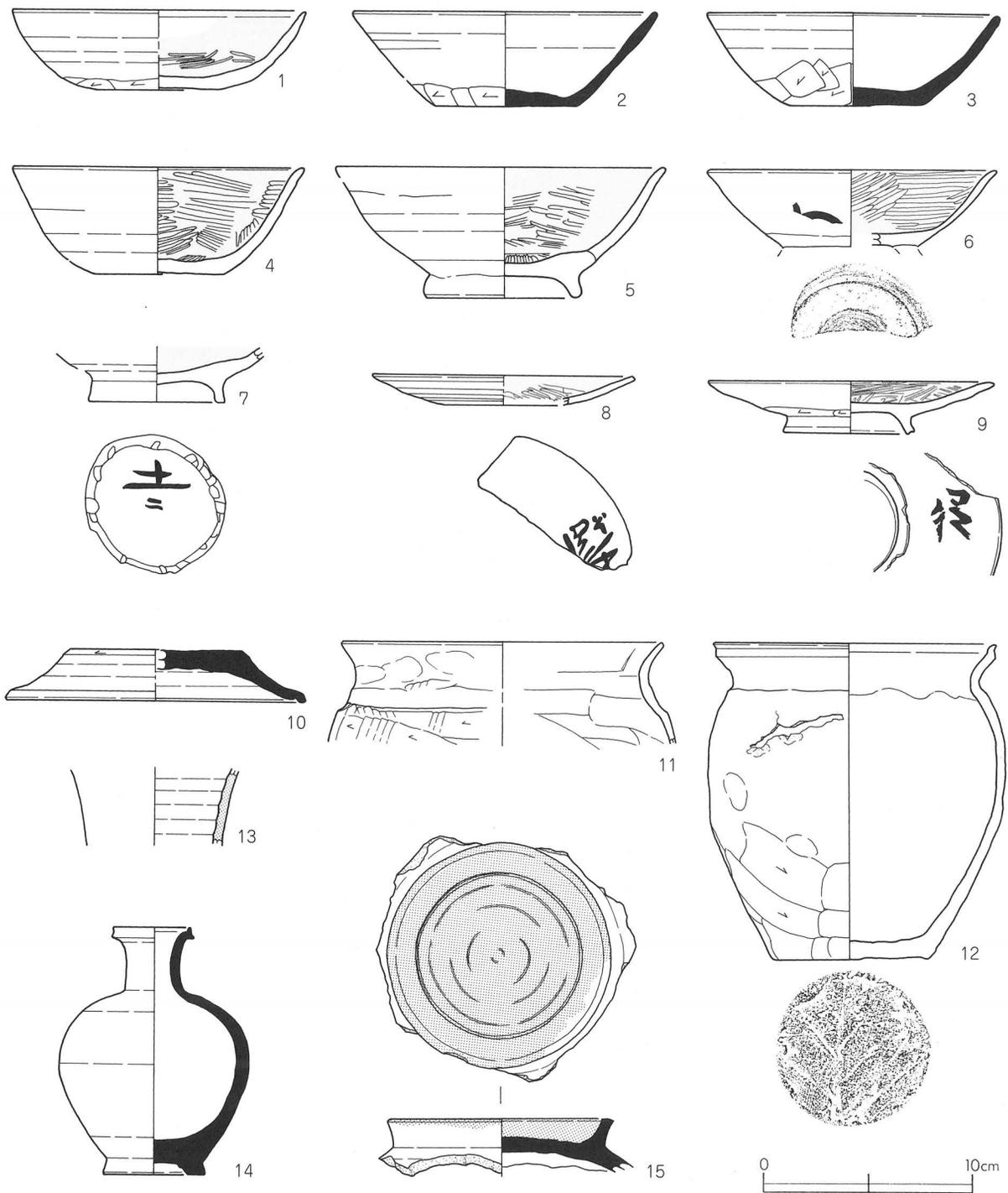
ピット カマドと対になる南壁側に1基確認されたのみである。楕円形を呈し、長径35cm、深さ14cmを測る。配置から入り口施設に伴うものと推測される。



- SI-17
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小中量
 2. 7.5YR4/3 褐色 ローム粒多量
 3. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大・中少量
 4. 7.5YR4/6 褐色 ローム大多量 ローム中中量 粘性強
 5. 7.5YR5/6 明褐色 ローム粒多量 粘性強



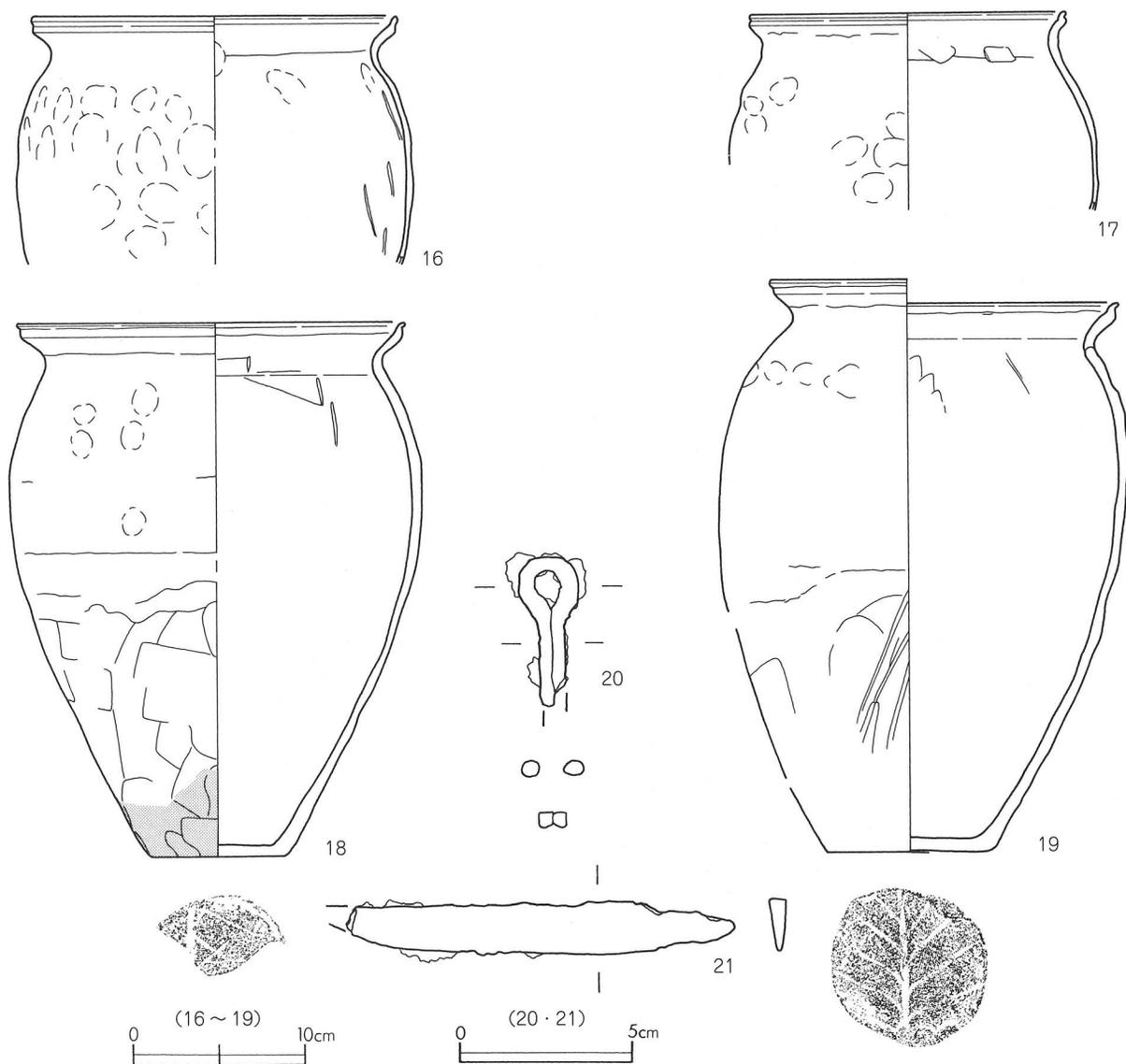
第101図 第17号住居跡・遺物出土状況



第102図 第17号住居跡出土遺物（1）

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場から壁外に1.12m掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。奥壁は緩やかに立ち上がり、カマド付近の床面上に袖と思われる白色粘土が確認されたが、範囲として捉えることはできなかった。燃焼部が壁下場のラインから居住域側にほとんど突出していないことから、袖も住居内に大きく張り出さなかったと考えられる。燃焼部は床面より僅かに低くなっていた。遺物は奥壁からNo.12の土師器の小型甕が逆位で出土しており、その上向きとなる底面上にはNo.5の破片の一部が乗った状態で確認された。

覆土 5層に分層された。第4・5層はローム質土が多量に混入しており、壁崩落土であろう。全体に



第103図 第17号住居跡出土遺物（2）

自然埋没と考える。

遺物 遺物は比較的豊富であった。出土状況で特筆される点は、土師器の小型甕がカマド燃焼部の最奥部に置かれていたこと、また焚き口付近に数個体の甕が押し潰れていたことなどである。小型甕は二次的な被熱を受けておらず、支脚というよりもカマド廃絶に伴って置かれた可能性が高い。体部に破碎孔があることと併せて、何らかの儀礼的な行為が想定される。一方、甕以外では、坏・碗類が数個体確認されているが、破片が床面に散在する状態であり、特別な偏りは認められなかった。土器の器種構成は供膳具から煮沸具、貯蔵具まで一通りが揃っている。No.1～9は坏・碗・皿類、No.13・14は長頸壺、No.11・12およびNo.16～19は甕類である。この内、須恵器はNo.2・3の坏とNo.10の蓋、No.14の小型長頸壺、そしてNo.15の転用硯の5点であり、No.13が灰釉陶器、これ以外はすべて土師器である。土器全体に占める土師器の割合が高い点の一つの特徴が認められよう。

坏・碗・皿類には、それぞれ無台のものと高台が付くものの2種が存在する。No.1～3は無台の坏、No.4は無台の碗、No.8が無台の皿である。一方、No.6の坏やNo.5・7の碗、No.9の皿などは高台

が付くものである。器形に深さの違いはあるが、いずれも基本的には体部が丸みを帯び、口縁部が外反ないし肥厚する点で共通しており、内面に磨きと黒色処理が施される点も同様である。なお、文字が墨書されているものが4点存在するが、坏・椀・皿いずれかの器種に偏ることはなかった。判読できたものは「吉」、「得？」など吉祥句的な文字であった。No.10の須恵器蓋は、つまみをもたないタイプで、頂部は広く平坦に調整され、口縁部の垂下も形骸化している。新治窯産の蓋としては比較的珍しいタイプである。No.11・12は共に土師器の小型甕であるが、No.11はいわゆる武蔵型甕の口縁部形態をもち、No.12は当地通有の形態を呈する点で異なる。No.12は体部に刀子のような鋭利な道具で突き開けられた細長い破碎孔がある。No.13は灰釉陶器の長頸壺である。頸部の小片で、内面にごく軽い釉の付着がみられる。No.14は小型の長頸壺である。端正な作りで良く焼き締っており、新治窯産のものとは胎土も異なっている。No.15は須恵器高台付坏の底部片を硯に転用したもので、高台内側は良く擦れており、墨痕がみられる。本来はやや大ぶりで端正な作りの高台付坏であったと考えられるが、当住居跡の供膳具の組成としては違和感がある。おそらく古い時期の破片を拾得して硯に転用したものである。No.16～19は土師器の甕である。当地では一般的な器形の甕であるが、全体的にやや長胴化が進行している気味がある。No.20・21は鉄製品で、No.20は用途不明の環付き金具である。軸部を釘のように打ち込み、露出した環部に何かを挿し通したものである。No.21は刀子である。

所見 遺物の時期は、須恵器坏の底部が小径化する段階にあること、内黒椀・皿が供膳具の主体を占めていること、土師器甕は長胴化の進んだ段階にあることなどから、およそ9世紀後半の時期が想定される。住居跡が営まれた時期も同様の時期となろう。

第17号住居跡出土遺物

図版番号	器種	量尺 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	土師器 坏	口径 [14.0] 底径 6.0 器高 3.8	小さな底径から丸みを帯びた体部が緩やかに開く。口縁部は外反せず素縁で終息する。	底部は切り離した後、一方向からの強いヘラ削り、体部下端に手持ちヘラ削り、内面に磨きを施す。	微細な長石、白雲母を少量 外面にぶい赤褐色、 内面局所的に黒色 普通	床直 40% 内面黒色処理 (部分的) 2次的に被熱 を受けたか
第102図 2	須恵器 坏	口径 [14.4] 底径 6.6 器高 4.5	小さな底部から体部が直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・ 石英を多量、微細な 白雲母を中量 内外面暗灰色 普通	床直～覆土上位 50%
第102図 3	須恵器 坏	口径 14.0 底径 6.2 器高 4.5	底径が小さく、体部は内湾しながら立ち上がる。	底部は切り離した後、一方向からのヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・ 石英を多量、微細な 白雲母を中量 内外面暗灰黄色 不良	床直 70%
第102図 4	土師器 椀	口径 [14.2] 底径 6.0 器高 5.1	体部は下位に丸みをもって強く立ち上がる。口縁部はごく僅かに外反する。	底部は切り離した後、反時計回りの回転ヘラ削り、体部下端に方向不明の軽い回転ヘラ削りを施す。内面に磨きを施す。	径1mmの長石、褐色 スコリアを少量、白 雲母を多量 外面橙色、内面黒色 普通	覆土中位 60% 内面黒色処理
第102図 5	土師器 高台付椀	口径 [15.4] 高台径 7.5 器高 6.4	体部は丸みを帯びて深く立ち上がり、口縁部は弱く外反する。高台は厚手で低く、「ハ」字に開く。	底部は切り離し後に回転ヘラナデ、体部外面に回転ナデを施す。内面に磨きを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を中量 外面 にぶい黄橙色、内面 黄褐色と黒色 普通	床直～覆土上位 60% 内面黒色処理 被熱により褐色 に変色
第102図 6	土師器 高台付坏	口径 [13.8] 器高 (3.6)	体部は僅かに丸みを帯びて浅めに立ち上がる。口縁部は軽く肥厚するが外反しない。高台部は剥離・欠損。	底部および体部外面は回転ナデ、内面は磨きを施す。	微細な長石を少量 外面にぶい橙色、内 面黒色 良好	覆土上位 50% 内面黒色処理 体部外面に墨書 文字は不明
第102図 7	土師器 高台付椀	高台径 6.4 器高 (2.3)	体部下位および高台部の破片。高台は径が小さく直線的に垂下する。高台の接地部には篠竹状の圧痕が付く。	底部および体部下位に回転ナデを施す。内面に磨きを施す。	微細な長石と褐色ス コリアを少量、微細 な白雲母を中量 外面にぶい黄橙色、 内面黒色 普通	覆土中位 30% (高台は 完存) 内面黒色処理 底部に墨書 「吉」か?
第102図 8	土師器 皿	口径 [12.4] 器高 (2.4)	体部は僅かに丸みを帯びて浅く開く。高台の有無は不明。	体部下位に回転ヘラ削りを施し、その後全面的に回転ナデを行う。内面に磨きを施す。	微細な長石・石英を 中量 外面にぶい橙色、内 面黒色 普通	床直～覆土中位 40% 内面黒色処理 体部外面に墨書 文字は不明

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 9	土師器 高台付皿	口径 13.6 高台径 6.2 器高 2.5	体部は直線的に浅く開く。高台は径が小さく、僅かに開き、接地部に沈線が巡る。	底部および体部下位に反時計回りの回転ヘラ削り、内面に磨きを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白色骨針を少量 外面にぶい黄橙色、内面黒色 普通	覆土下位 90% 内面黒色処理 体部外面に墨書「得」か?
第102図 10	須恵器 蓋	口径 [14.3] 頂部径 [8.4] 器高 2.4	体部上面は平坦で広く、つまみをもたない。体部は緩やかに外反しながら浅めに開く。口縁部を垂下させる代わりに、内面に一条の沈線をつける。	体部上面とその周縁に回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、微細な白雲母を中量 内外面灰白色 普通	覆土下位 30% (頂部の40%残存)
第102図 11	土師器 小型甕	口径 [15.4] 器高 (4.7)	いわゆる武蔵型甕の口縁部片。口縁部は崩れた「コ」字形を呈する。	体部外面は横位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデを施す。	ごく微細な長石を微量、褐色スコリア・黒色粒子を少量 内外面にぶい褐色 良好	覆土下～中位 細片 (頸部径の20%残存)
第102図 12	土師器 小型甕	口径 14.0 底径 7.3 器高 14.8	最大径は体部中位にあり、口縁部は「く」字に屈曲する。口唇部は端整に作られ短く外反する。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、内面に指頭による横ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 良好	カマド燃焼部 ほぼ完形 (体部上位に破砕孔) 底部に木葉痕
第102図 13	灰陶陶器 長頸壺	器高 (3.5)	長頸壺の頸部小片。	内面にロクロ目が強めに残り、外面は回転ナデで滑らかに整えられる。内面に軽く釉の付着がみられる。	微細な長石と黒色粒子を微量 内外面灰白色 堅緻	床直 細片 (頸部径の40%残存)
第102図 14	須恵器 小型長頸壺	口径 3.7 高台径 4.8 器高 11.8	最大径は体部上位にあり、肩を強く張る。体部下位は強く引き締まり、逆卵形を呈する。頸部は非常に細長く伸び、口唇部は断面三角形を呈する。	体部下位に横位の軽いヘラ削りを行い、その後全面的に回転ナデを施す。口縁から肩部にかけてオレンジ色の自然釉が付着する。	径1mmの長石・石英を微量 内外面灰色 堅緻	壁溝内 ほぼ完形
第102図 15	須恵器 転用硯 (高台付坏)	高台径 10.2 器高 (2.5)	高台付坏の底部片を逆さまにして硯に転用したもの。高台は比較的径が大きく、作りも端整。	底部は切り離した後、回転ヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面暗灰黄色 普通	覆土下位 高台部は完存 高台内側に墨痕
第103図 16	土師器 甕	口径 [21.2] 器高 (13.1)	最大径は体部上位にあり、頸部は「く」字に外反し、口縁は大きく開く。	体部外面に指頭圧痕多数。口縁部に指頭による回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい褐色 良好	床直～覆土中位 30% (口径の50%残存)
第103図 17	土師器 甕	口径 [18.3] 器高 (11.4)	最大径は体部中位にあり、頸部は緩い「く」字を描く。口縁部の開きは比較的弱く、端整な口唇部が短く立ち上がる。	体部上位に軽い縦位のヘラナデ、頸部内面に横位のヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい赤褐色 良好	床直～覆土下位 30% (口径の60%残存)
第103図 18	土師器 甕	口径 [21.6] 底径 [7.6] 器高 30.5	最大径は体部上位にあり、頸部は「く」字に外反し、口縁部は大きく開く。体部下位から底部にかけて強く引き締まる。	体部中位以下に横位のヘラ削り、口縁部に指頭ナデ、頸部内面に横位のヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母と褐色スコリアを微量 内外面にぶい褐色 良好	床直～覆土上位 50% 底部に木葉痕 底部下半に煤付着
第103図 19	土師器 甕	口径 20.2 底径 9.2 器高 32.8	最大径は体部上位にあるが、膨らみが弱く全体的に細身を呈する。頸部は「く」字に屈曲し、口唇部は短く外反する。	体部下位に横位のヘラ削り、その上から縦位の磨きを粗く施す。体部上位に指頭圧痕を多く残す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面橙色 普通	床直および覆土下位 70% 底部に木葉痕

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第103図 20	鉄製品 環状金具	(4.3)	1.7	0.4	(6.6)	細い鉄棒を折り曲げ、先端に環をつくる。環部は断面円形、軸部は方形を呈する。	床直 70%
第103図 21	鉄製品 刀子	(11.2)	1.3	0.5	(16.9)	断面は楔形を呈する刃をもった刀子。先端を欠損する。	床直 80%

第18号住居跡〔第104図、PL.11・60〕

位置 調査区西側 E・F-20・21グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複しない単独の住居跡である。

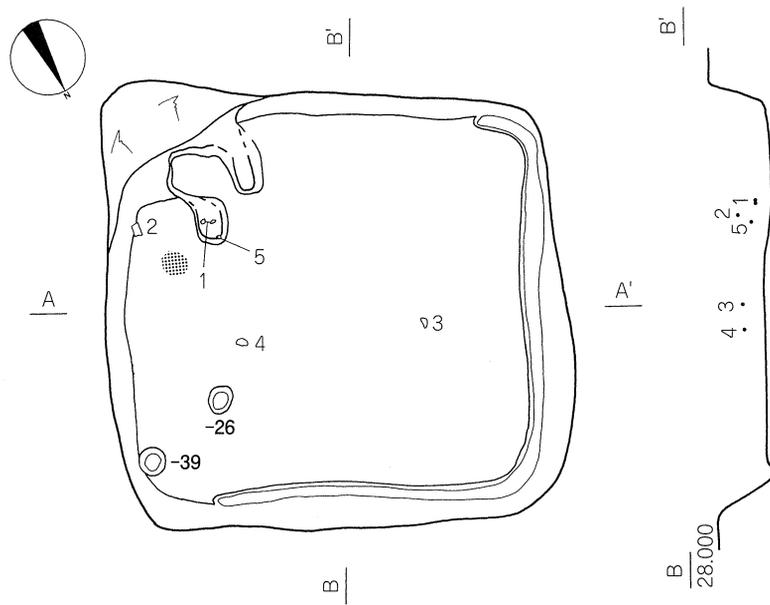
規模 長軸3.18m、短軸2.92mのやや横に長い正方形を呈し、床面積は約9.3㎡である。

主軸方向 N-30° -E (カマドの位置を南とした場合)。住居跡の四隅は概ね東西南北を向いていた。

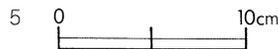
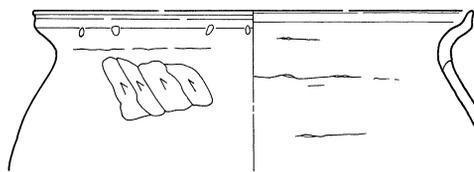
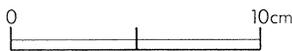
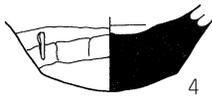
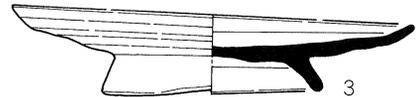
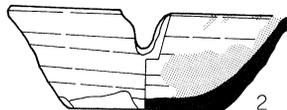
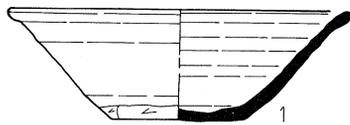
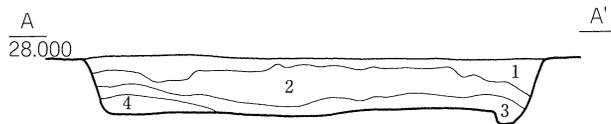
壁 垂直気味に外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で48cmを測る。北西・北東壁に沿って壁溝が巡っており、規模は幅10～18cm、深さ1～8cmを測る。

床 概ね平坦である。カマドの東側に焼土範囲がみられた。

ピット 東壁側に2基確認された。1基は壁に接している。いずれも円形で径21・23cm、深さ26・39cmを測る。この2基は東西の壁隅を結んだ延長線上に位置しており、共に入り口施設に伴うピットの可能性が考えられる。入り口は東壁隅となろうか。



- SI-18
1. 7.5YR4/4 褐色 焼土粒少量 ローム粒多量 しまり強
 2. 7.5YR4/4 褐色 焼土小・ローム小中量 ローム少量
 3. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土大多量 炭化物・ローム小少量 砂ブロック中量
 4. 7.5YR4/3 褐色 焼土大多量 炭化物少量 ローム少中量



第104図 第18号住居跡・出土遺物

カマド 南側隅に位置する。本遺跡では数少ない隅カマドの住居跡のひとつである。住居跡プランの方形の意識を崩さず構築されている。燃焼部と両袖は正対しておらず袖は壁に平行に作られており、カマド全体をみると大きくねじれたような印象を受ける。袖端部から奥壁にかけて全長約1.5m、両袖が最も接近する箇所では15cmを測る。袖上より遺物が出土している。

覆土 4層に分層された。第4層はカマド崩落土の一部と思われる。他は概ね水平堆積で覆土下位に焼土・炭化物が多く混入していることから、人為的な埋め戻し土であろう。

遺物 遺物は比較的少量で、袖直上のNo.1・5以外はいずれも第2層中からの出土で廃棄遺物と思われる。

る。No.1・2は須恵器の坏である。No.1は底径が非常に小さい割に体部が大きく開き、口縁部が外反する器形をもつ。須恵器坏は、新しくなるに従って底径が縮小化する傾向にあるが、当器はその最終段階にあると言えよう。No.2の坏はやや小ぶりで口径が小さいため、No.1のような口径と底径の差異が顕著となっていない。灯明皿代わりに使われたためか、内面にタール状の物質と灯芯痕が多く付着している。No.3は須恵器の高台付盤である。焼き歪みが著しく器形の把握に不安が残るが、体部が水平方向に浅く開くものとみられる。No.4は底部のみの破片であるが、小型の壺の一種と思われる。底部の器壁が非常に厚く、糸切り痕をもつ。胎土も非常に緻密なもので、新治窯の製品ではあり得ず搬入品と思われる。No.5は土師器甕である。口唇部が直線的に立ち上がるタイプで、比較的端整に作られている。

所見 遺物の時期は、No.1の坏が非常に小さな底径を呈することから、およそ9世紀末頃のものと考えられる。当住居跡の営まれた時期も遺物の出土状況から該期に相当すると思われる。

第18号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図 1	須恵器 坏	口径 [13.8] 底径 5.8 器高 4.4	径の小さな底部から体部が直線的に大きく開く。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸く肥厚する。	底部は回転ヘラ切り後、多方向からのヘラ削りを施す。体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面灰褐色 普通	カマド袖部 40%
第104図 2	須恵器 坏	口径 11.4 底径 6.2 器高 3.8	やや小ぶりの坏で器壁が厚い。体部は直線的に開く。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面灰黄褐色 普通	覆土上位 ほぼ完形 内面に多量のタールと灯芯痕が残る。口縁に破砕小溝を穿つ(灯芯用か)
第104図 3	須恵器 高台付盤	口径 [16.2] 高台径 [8.9] 器高 3.5	体部は水平方向に大きく開き、口縁部は緩い角度で立ち上がる。全体的に焼き歪みが著しい。	体部外面にロクロ目を強く残す。全体的に回転ナデ調整を施す。	径1mmの長石を少量 内外面灰色 良好	覆土 (高台は50%残存)
第104図 4	須恵器 小型壺?	底径 5.6 器高 (2.8)	小型壺の底部片。底部の器壁が非常に厚く、重い。体部は僅かに丸みを帯びて強い角度で立ちがる。	底部は回転糸切り。体部下位に横位の軽い手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石をごく微量 内外面青灰色 堅緻	覆土中位 20% (底部は50%残存) 過焼成で器壁内が発泡
第104図 5	土師器 甕	口径 [23.6] 器高 (8.6)	頸部は「く」字に外反し、口唇部はほぼ垂直に立ちがる。	体部上位に縦位の軽いヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1~3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい橙色 普通	カマド袖部 10% (口径の20%残存)

第23号住居跡〔第105図、PL.13・62〕

位置 調査区中央やや北寄りL・M-14・15グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。第3号溝が東西方向に走っており、土層堆積状況から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.5m、短軸3.24mのやや横長の正方形を呈する。床面積は約11.3㎡である。

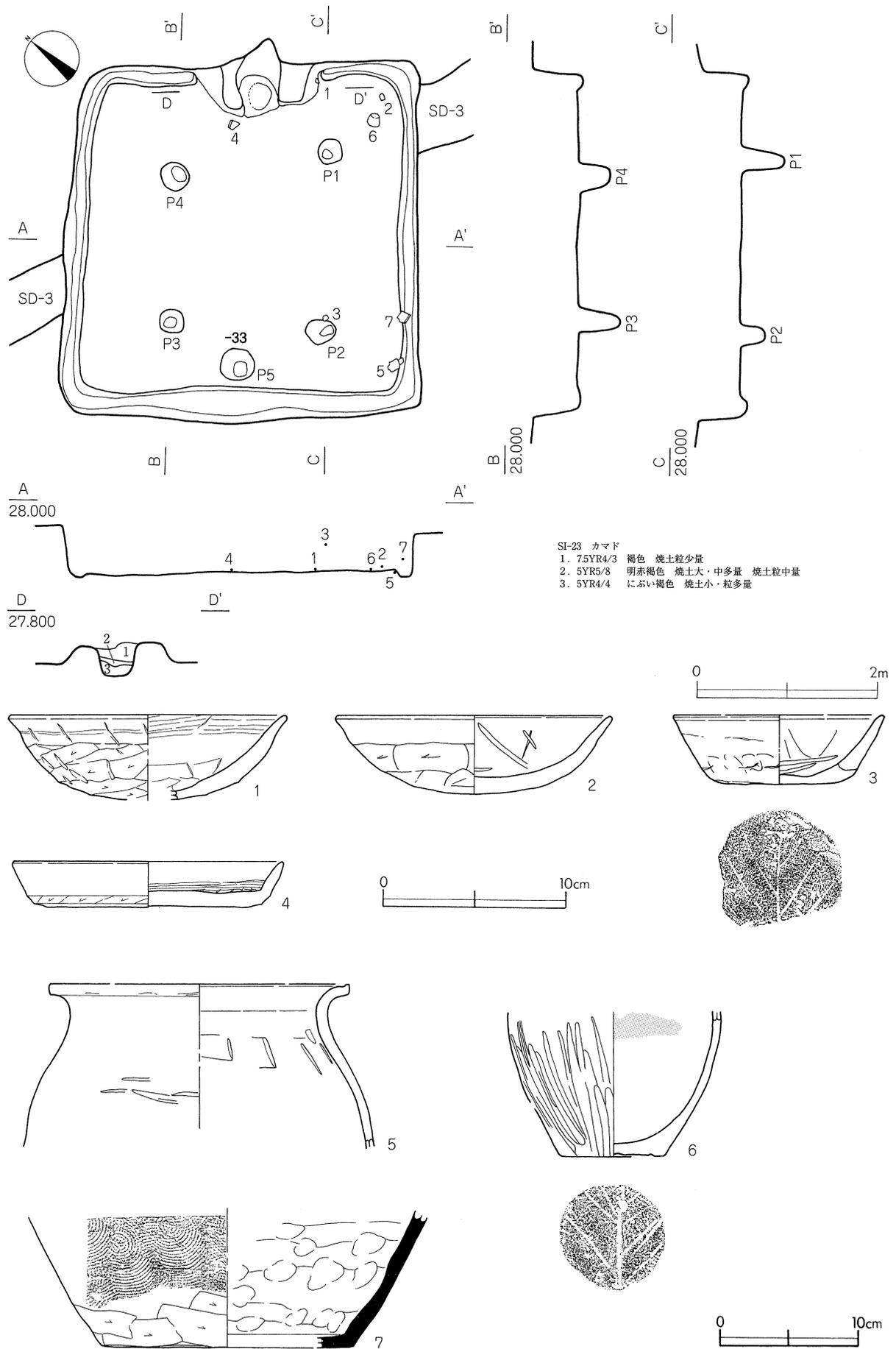
主軸方向 N-42° -E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で48cmを測る。東西壁の一部が第3号溝に壊されている。壁溝が全周して巡っており、規模は幅10~30cm、深さ2~6cmを測る。南西側の壁溝が比較的幅広であった。

床 概ね平坦である。第3号溝の重複は床面まで達していない。

ピット 5基確認された。配置と規模からP1~4は主柱穴に相当しよう。円形を呈し、径は26~35cmと概ね近似しており、深さは27~47cmを測る。P5は入り口部施設に関連したピットで円形を呈し、径38cm、深さ33cmを測る。

カマド 北東壁ほぼ中央に位置する。壁下場より約50cm壁外に掘り出して煙道部を構築している。全長約80cm、燃燒部は床面を12cm程掘り窪めており、奥壁は外傾して立ち上がる。焚き口幅は40cmで両袖の遺存状態は良好であった。左側袖は湾曲しており、被熱により著しく赤化している。カマド内は焼土粒を多量に混入する覆土が中位から下位にかけて堆積していた。袖付近より土師器の盤状坏が出土してい



第105図 第23号住居跡・出土遺物

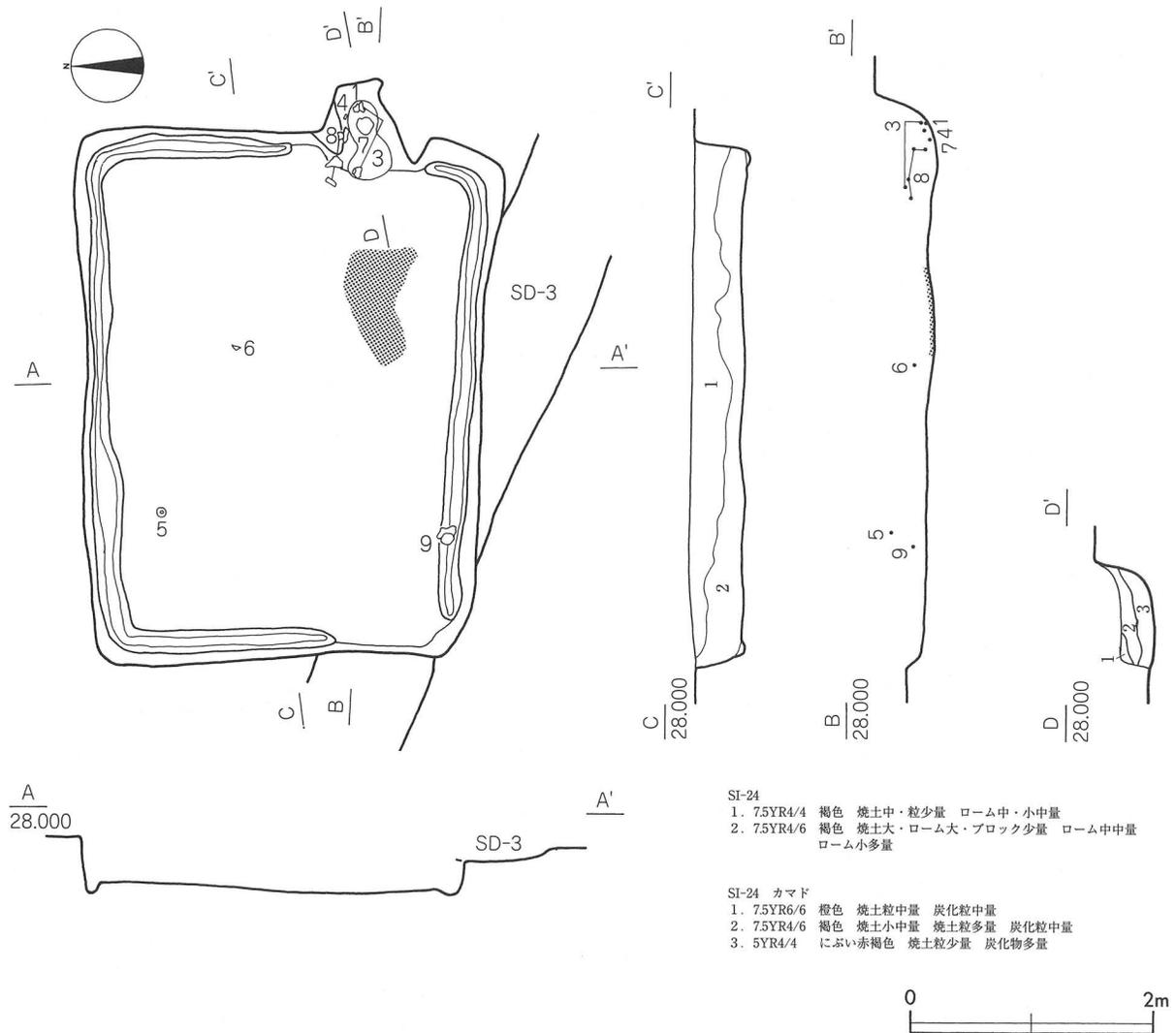
る。

遺物 遺物はカマド周辺および住居跡の南隅から若干数出土した。多くは床面直上ないし覆土下位から確認されている。No.2と6は、第3号溝の軌道線上に位置するが、溝底よりも深い位置から出土している。No.7の甕が須恵器である他はすべて土師器である。供膳具にやや特異な形態がみられる点の特筆される。No.1は土師器の坏である。底部は丸底で、体部が浅めに開き、そのまま口縁部に至る。体部と口縁部の境に稜や段は付かず、削りかナデの違いによって境目が識別される。作りは比較的粗く、体部は凹凸があり、削り調整も不整な仕上りとなっている。口唇部には2箇所切り込み状の溝が見られ、その周辺にはスス・タール状の痕跡が残ることから、灯明皿として使用していたと考えられる。No.2もほぼ同様の坏である。No.3は土師器の小型坏であるが、本来は甕に通有の木葉痕が底部に付けられている。体部の作りも粘土の輪積み痕が認められるなど、やや通常の坏とは趣を異にしている。No.4は土師器の盤状坏である。盤としてはやや口径が小さく、坏としては平坦に過ぎる形態である。底部には手持ちのヘラ削りを執拗に施して平坦化をはかっている一方で、内面には磨きを施している点で、坏と盤の折衷的な性格が窺える。ちなみに、No.1から4は、それぞれ器形が異なるが、皆同じ胎土である。No.5は土師器の甕で、大きく開いた口縁、短く直立した口唇部をもつ。No.6は土師器の小型甕で、体部下位に縦位の磨きが施される一般的なタイプである。No.7は須恵器の甕で、体部下位の破片である。外面に同心円の叩き目を有する。この叩き目をもつ須恵器は往々にして軟質な焼成であるが、当器は良く焼き上がっている。

所見 遺物の時期は、坏類が特異なだけにやや難しいが、盤状の坏は第1・6号住居跡に類縁性が感じられる。また、第6号住居跡からは外面に同心円の叩きを有する甕もみられるので、近い時期を想定できよう。ただし、No.1の坏などは古墳時代的な様相を引きずっているものと考えられ、第6号住居跡の土器群よりもやや先行する可能性がある。よって、一応、7世紀末頃の時期を与えておくことにしたい。当住居跡の営まれた時期も同様の時期と考えたい。

第23号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 1	土師器 坏	口径 [15.0] 器高 (4.4)	器壁は厚手で、粗い作りの坏。底部は丸底。体部は丸みをもって浅めに開き、口縁部との境は稜も段も付かない。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は横位を主にした粗いヘラ削り、口縁部は力加減の不均一な回転ナデを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面明赤褐色 良好	床直 50% 口唇部に2箇所切り込み 灯芯・煤灯明皿
第105図 2	土師器 坏	口径 15.2 器高 4.2	器壁は厚手で、作りは比較的粗い。底部は丸底で、体部は浅めに開く。口縁部と体部の境に稜や段は付かない。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削り、口縁部は指頭による回転ナデ、内面は横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面明赤褐色 普通	覆土下位 50%
第105図 3	土師器 坏	口径 [11.6] 底径 [7.4] 器高 3.7	甕の底部を思わせる小型の坏。底部は平底で、体部は直線的に立ちあがる。	体部は粘土輪積みの後、指頭による粗いナデ調整を施す。内面にヘラナデに伴う工具痕を残す。	微細な長石を多量 外面褐色、内面灰褐色 普通	覆土上位 30%(底径の50%残存) 底部に木葉痕
第105図 4	土師器 坏	口径 [14.6] 底径 [12.5] 器高 2.7	盤状を呈する浅めの坏。底部は平底で径が非常に大きく、体部は強い角度で短く立ち上がる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部下位に斜方向の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。内面に多方向の軽い磨きを施す。	微細な長石を多量 内外面にふい赤褐色 普通	床直 80%
第105図 5	土師器 甕	口径 [22.0] 器高 (11.7)	最大径は体部中位よりやや上にあると思われる。頸部は「つ」字に外反し、口縁部は横に大きくせり出す。口唇部はごく小さく直立する。	頸部内面に横位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面橙色 普通	床直 30%(頸部径の50%残存)
第105図 6	土師器 小型甕	底径 7.7 器高 (10.4)	最大径は体部中位にあるとみられ、体部下位は僅かに丸みを帯びる。	体部下位に縦位の磨きを施す。	径1~3mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 外面にふい橙色、内面橙色 普通	床直 40%(底部完存) 底部に木葉痕 内面中位煤付着
第105図 7	須恵器 甕	底径 [18.4] 器高 (4.6)	甕の底部片。径の大きな底部から体部が直線的に立ち上がる。	底部に多方向の軽いヘラ削り、体部下位に横位のヘラ削り、体部外面に同心円の叩き目を施す。内面に縦横のヘラナデを施す。	径1mmの長石、白雲母を少量 内外面灰色 良好	覆土下位 10%(底径の20%残存)



第106図 第24号住居跡

第24号住居跡〔第106・107図、PL.14・62・63〕

位置 調査区中央やや北寄りN・O-15グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。南側で第3号溝と重複しており、土層堆積状況から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.88m、短軸2.8mの長方形を呈し、床面積は約10.9㎡である。

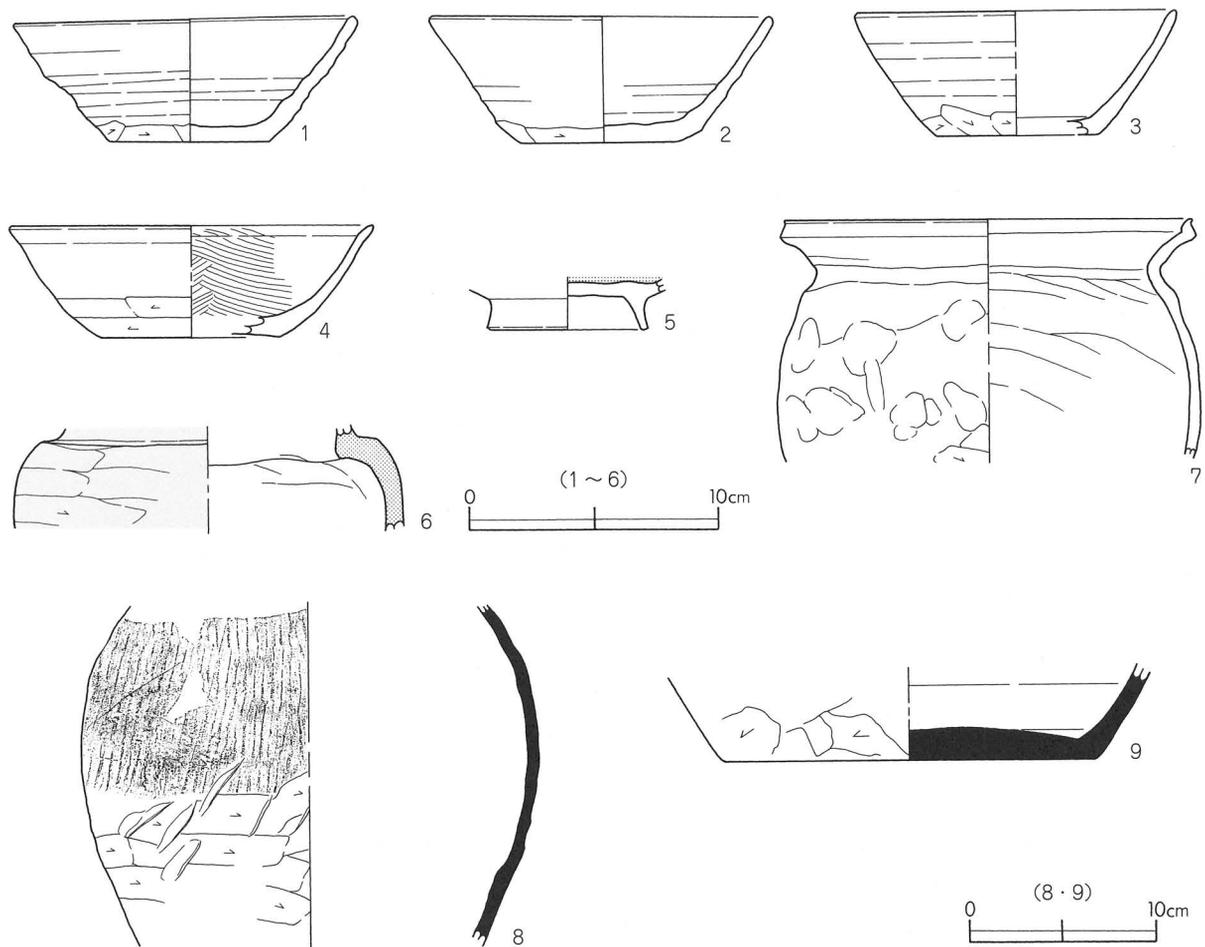
主軸方向 N-88° -E。長軸が概ね東西方向に沿っている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で43cmを測る。南側と西側壁の一部が第3号溝により壊されている。西壁の一部を除き壁溝が巡っており、幅10～26cm、深さ5～10cmを測る。

床 北から南側、また西から東側にかけて緩やかに窪んでいる。カマド燃焼部の手前側に掻き出したと思われる焼土範囲がみられた。

ピット 確認されなかった。カマドの位置からおそらく南壁、もしくは西壁側が入り口になると思われる。

カマド 東壁のやや南寄りに位置する。壁下場より70cm程壁外に掘り出して煙道部を構築している。全長約80cmで、燃焼部は瓢形を呈し床面から4cm程掘り込まれ、奥壁は外傾して立ち上がる。焚き口幅は35cmで、両袖は住居の主軸に対して斜め（南壁方向）に取り付けられていた。カマド内は3層に分層され、いずれも焼土・炭化粒が多量に混入している。燃焼部奥に貼りつくようにNo.1・4・7が出土した。



第107図 第24号住居跡出土遺物

覆土 2層に分層される。概ね水平堆積であり、ロームの混入がみられることから人為的な埋め戻し土と考える。

遺物 遺物はカマド燃焼部に若干と床面に少量散在していた。カマド燃焼部内の土器は、顕著な被熱を受けておらず、カマド廃絶時に投棄されたものと考えられた。

No.1 から 3 は土師器の坏である。形態や調整技法などは須恵器の坏と全く同じであるが、還元焰焼成されておらず、黒斑まで確認されるため、土師器として焼成されたものと判断した。器高や口径に対して底径がかなり小さく、同形の須恵器坏ならば新治窯跡群の小野窯段階に相当する。当地における須恵器生産の末期的な状況下で派生したものであろう。No.4 は同じ土師器の坏であるが、こちらは一般的な土師器の内黒土器の系統にあるもので、内面の磨き、丸みを帯びた体部、外反する口縁などの特徴をもつ。No.5 は高台付皿と思われ、内面に磨きと黒色処理が施されている。No.6 は軟質の白色陶器の一種で、器形は短頸壺と思われる。二彩や緑釉陶器などに類似した胎土で、非常に柔らかい。外面にヘラ削りと黒色処理がみられ、作りは比較的雑である。No.7 は土師器の甕であるが、一般的な大きさよりも一回り小さい。小型甕とするにはやや大きく、中型甕と分類すべきものかもしれない。形態は一般的な甕と変わらず、「く」字に外反する頸部と短く直立する口唇部を有している。No.8 は須恵器の甕である。器形や外面の叩き目、器壁の薄さなどは須恵器の中型甕の特徴であるが、色調は土師器と同じ褐色を呈している。これも須恵器生産の末期的段階のものと考えられよう。No.9 は須恵器甕の底部片である。No.8 に比べてかなり厚手であるが、体部下位にヘラ削りが施される典型的な甕の一種に変わり

はない。

所見 遺物の時期は、坏の形態が須恵器ならば小野窯跡段階にあることから、9世紀末頃に相当するものと考えられる。当住居跡が営まれた時期も該期に相当しよう。

第24号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	土師器 坏	口径 13.7 底径 6.4 器高 5.0	小さな底部から体部が直線的に大きく立ち上がる。形態・調整技法は須恵器坏と変わらず。	底部は切り離し後、一方向からのヘラ削りを施す。体部下端に時計回りの手持ちヘラ削り、中位以下に強いロクロ目を付ける。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面明褐色 普通	カマド燃焼部 95% 体部外面に黒斑 (焼成時)
第107図 2	土師器 坏	口径 13.7 底径 6.5 器高 5.0	小さな底部から体部が直線的に大きく立ち上がる。形態・調整技法は須恵器坏と変わらず。	底部は切り離し後、二方向からのヘラ削りを施す。体部下端に時計回りの手持ちヘラ削り、内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面にぶい橙色 普通	覆土 70% 内面に黒斑
第107図 3	土師器 坏	口径 [12.8] 底径 [6.4] 器高 4.9	小さな底部から体部が直線的に大きく立ち上がる。	底部は一方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面にぶい黄褐色 普通	カマド燃焼部 30% (底径の 40%残存)
第107図 4	土師器 坏	口径 [14.6] 底径 [7.0] 器高 4.4	底部は比較的広く、体部は僅かに丸みをもって立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部は回転ヘラ削り、体部下位に反時計回りの回転ヘラ削り、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量、赤褐色スコリアを微量 外面にぶい橙色、内面明赤褐色 普通	カマド燃焼部 30% (底径の 40%残存)
第107図 5	土師器 高台付皿	高台径 6.3 器高 [1.6]	高台付皿の高台部片。高台は薄手で開きは弱く、比較的高い。	底部は切り離し後、回転ヘラ削り、内面に一方向からの磨きを施す。	径1mmの長石・石英・白雲母を少量 外面にぶい黄橙色、内面黒色 良好	覆土上位 30% (高台部 完存) 内面黒色処理
第107図 6	軟質白色 陶器 短頸壺?	器高 (4.0)	体部は僅かに膨らむ円筒形を呈し、口縁部は周囲の平坦面から直立する。	体部外面に横位のヘラ削り、内面に横位のナデを施す。	混入物のない緻密な白色粘土 外面黒色、内面灰白色 不良 (非常に軟質)	覆土中位 細片 (口縁周囲の20%残存) 外面黒色処理
第107図 7	土師器 甕	口径 [16.0] 器高 (9.3)	最大径は体部中位やや上にあるとみられ、頸部は「く」字に屈曲する。口唇部は短く直立する。	体部外面に縦位の軽いヘラナデと指頭圧痕、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面橙色 良好	カマド燃焼部 40% (頸部・ 体部上位は全 周が残存)
第107図 8	須恵器 甕	器高 (18.2)	最大径は体部中位にもつ。	体部外面に縦位の平行線の叩き目、体部下位に横位の強いヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面褐色 普通	カマド袖部 20% (体部径 の30%残存)
第107図 9	須恵器 甕	底径 [20.6] 器高 (4.6)	甕の底部片。径の大きな底部から強い角度で体部が立ち上がる。	底部に多方向からの軽いヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面灰色 良好	壁溝内 細片 (底径の 20%残存)

第25号住居跡 [第108図、PL.14・63]

位置 調査区北側P-11・12グリッド、標高27.5mに位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸2.92m、短軸2.9mのほぼ正方形を呈し、床面積は約8.5㎡である。

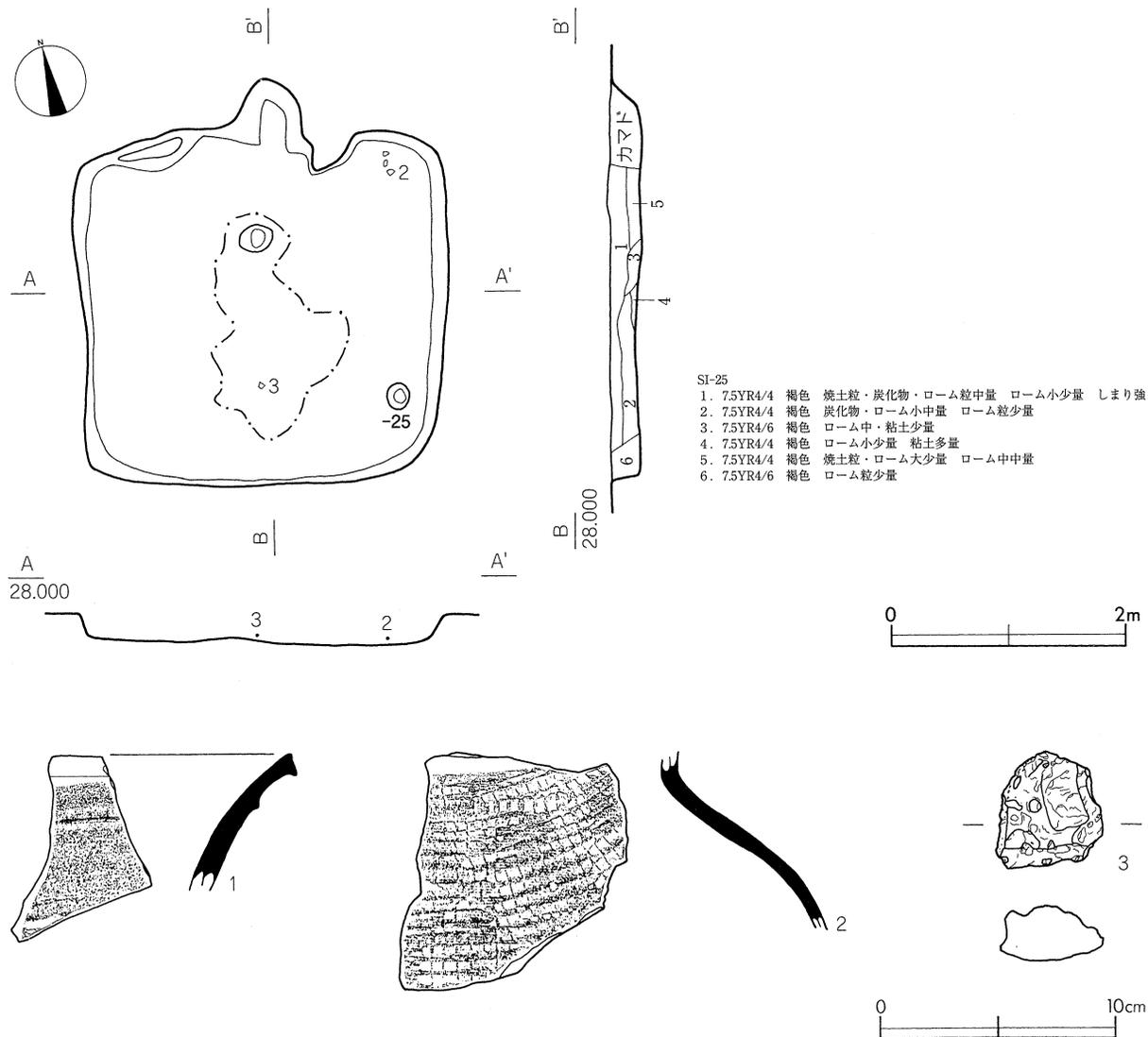
主軸方向 N-9° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で30cmを測る。カマドの左側は床面から9cm程の段を有して壁面へと連結していた。壁溝は確認されなかった。

床 やや起伏が認められ、中央付近に硬化面が広がっている。

ピット 2基確認された。円形を呈し径23～30cm、深さ25～33cmを測る。おそらくカマドと対になる南壁側が入り口となろう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場より60cm程壁外に掘り出して煙道部が構築される。袖の遺存状態は悪く、左側袖は確認されなかったが、残存する袖は被熱により著しく赤化していた。この袖の端部からの全長は約80cmで奥壁は緩やかに外傾して立ち上がる。燃焼部は浅く掘り窪められていた。遺物は



第108図 第25号住居跡・出土遺物

出土していない。

覆土 6層に分層される。概ね自然堆積と思われる。

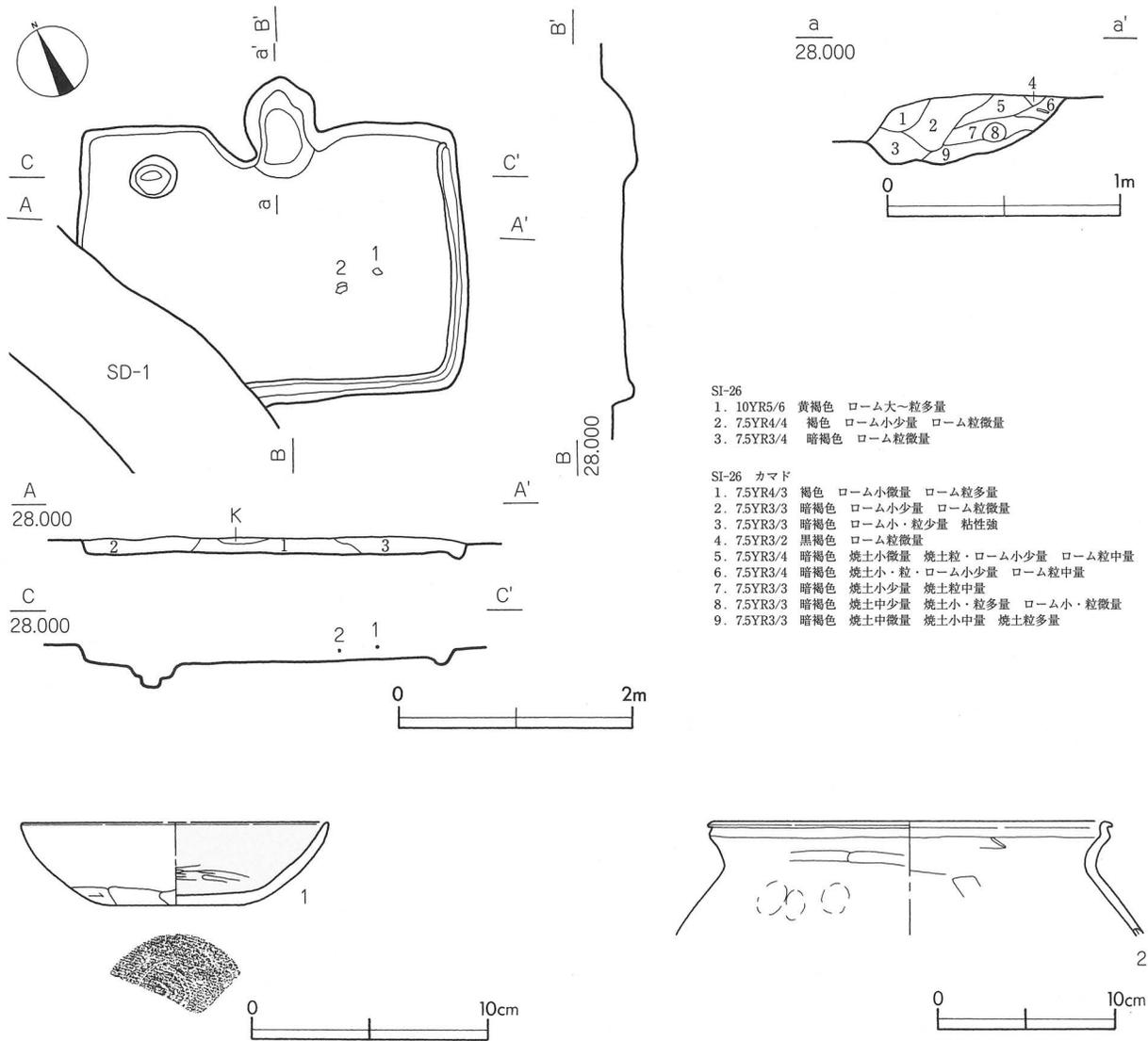
遺物 遺物の量は僅かでNo.2・3は床面からの出土である。No.1・2は須恵器甕の小片である。No.1の口縁部には突帯と沈線が付いており、比較的大型の甕の口縁であったと思われる。No.2の体部片は外面に格子状の叩き目が付いており、器壁も薄いことから一般的な大きさの甕であったことが推測される。No.3は小型の椀形鉄滓である。この他に凶化し得なかったが、土師器の内黒無台椀の破片が覆土より出土している。

所見 時期については、須恵器甕の小片のみから判断するのは困難であるが、内黒椀の形態から辛うじて9世紀後半頃と推測することができる。竪穴住居跡は時期が新しくなるにつれて小型・簡易化する傾向にあるが、この点からもおよそ妥当な時期かと思われる。

第25号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 1	須恵器 甕	器高 (5.8)	甕の口縁部小片。口縁は外反しながら強めの角度で立ち上がる。外面に一条の突帯、沈線をもつ。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 堅緻	床直 細片
第108図 2	須恵器 甕	器高 (7.8)	甕の体部片。丸みをもつ肩部から頸部が直立する。	外面に格子状の叩き目を付ける。 内面に横位の指頭ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面灰黄色 普通	覆土下位 細片

図版番号	器種	法 量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第108図 3	鉄滓	4.8	4.7	2.3	83.9	小型の椀形滓。全面に多数の気泡孔が開く。	床直 完形



第109図 第26号住居跡・出土遺物

第26号住居跡〔第109図、PL.14・63〕

位置 調査区西側G・H-18・19グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。西側で第1号溝と重複しており、壁・床面が大きく壊されていることから本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.1m、短軸2.12mの横長の長方形を呈し、床面積は約6.6㎡である。

主軸方向 N-25° -E

壁 垂直気味に外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で14cmを測る。西壁隅は大きく第1号溝により壊されていた。壁溝は東壁と南壁に巡っており、幅10cm前後、深さ2～4cmを測る。形状は全体に均一であった。

床 起伏が若干みられるものの概ね平坦である。第1号溝の底面は床面まで達していた。

ピット 1基確認されたのみである。円形を呈し、径40cm、深さ20cmを測る。配置から貯蔵穴と考えられる。おそらく入り口はカマドと対となる南壁側となろう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場から50cm程壁外に掘り出して燃焼部と煙道部が構築される。全長86cmで燃焼部は床面を7cm程掘り窪め、ここから奥壁にかけて緩やかに外傾して立ち上がる。焚き口幅は40cmで袖自体あまり大きく張り出しておらず、また非対称であった。燃焼部から奥壁側は被熱により著しく赤化していた。覆土は9層に分層され、遺物は出土していない。

覆土 3層に分層された。不自然な垂直方向の堆積がみられ、第2層は第1号溝覆土の可能性も考えられる。人為的な埋め戻し土であろう。

遺物 遺物の量は僅かであり床面より10cm前後浮いた状態であった。No.1は土師器の内黒坏、No.2は土師器甕の小片である。これらの帰属時期は、坏の形態より9世紀中葉から後半と考えられる。

所見 当住居跡の営まれた時期は遺物の時期と同様の9世紀後半代と考えられる。

第26号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 1	土師器 坏	口径 [13.0] 底径 [5.6] 器高 3.5	底部は平底で体部は丸みを帯びて浅めに立ち上がる。	底部は回転糸切り後、回転ヘラ削り、体部下端に時計回りの手持ちヘラ削り、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石、白雲母を少量 外面にぶい黄褐色、 内面黒色 普通	覆土下位 30% (底径の 40%が残存) 内面黒色処理
第109図 2	土師器 甕	口径 [23.0] 器高 (6.4)	甕の肩から口縁部の破片。頸部は「く」字に外反し、口唇部は短く直立後、先端を強く外反させる。	口縁部に回転ナデ、口唇部外面はヘラ状の工具によって端整に整えられる。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	覆土下位 細片 (頸部径 の10%残存)

第27号住居跡〔第110図、PL.14・63〕

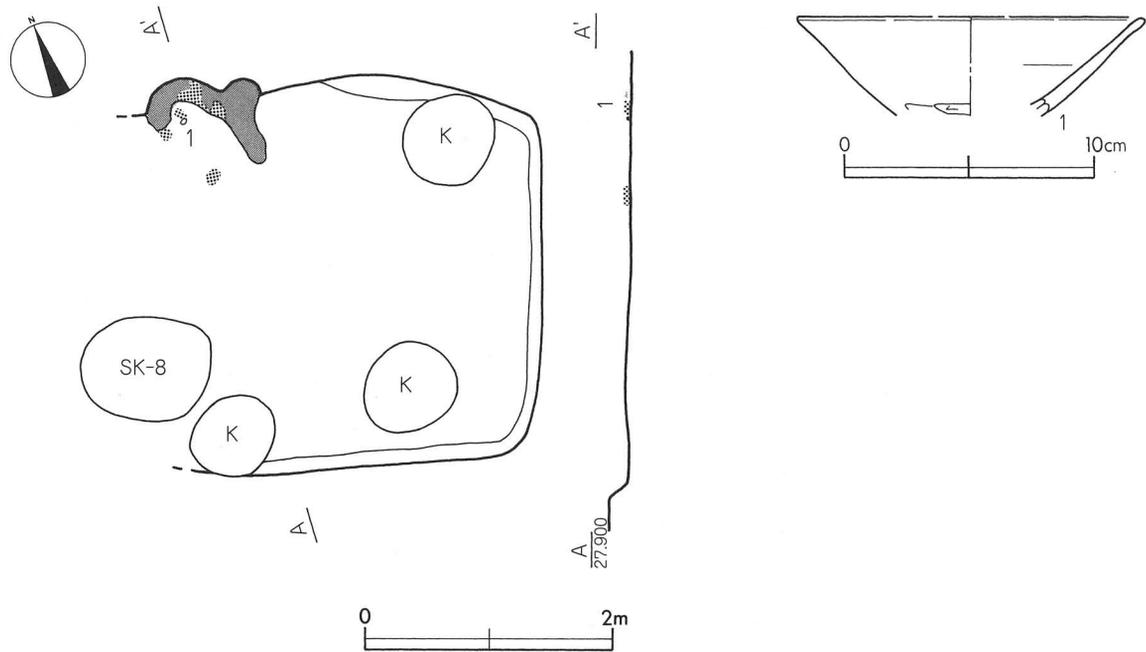
位置 調査区西側H-23グリッド、標高27.5m付近に位置する。第8号土坑と重複しており、出土遺物から本住居跡が新しいと判断した。

規模 長軸推定4.0m、短軸2.84mの横長の長方形を呈し、床面積は推定11.4㎡であろう。住居確認時に第一に確認されたのがカマドと思われる焼土範囲であり、プラン等あまり明瞭に把握しえなかった住居跡である。

主軸方向 N-22° -E

壁 外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で16cmを測る。カマドから西側半分は壁が確認できなかった。また、壁溝も確認できなかった。

床 概ね平坦であるが、複数の攪乱により床面が壊されている。



第110図 第27号住居跡・出土遺物

ピット 確認されなかった。カマドの位置からおそらく南側が入り口となろう。

カマド スクリーン部はカマドと判断した焼土範囲である。北壁ほぼ中央に位置していたと思われる。壁下場からおよそ30cm壁外に掘り出して煙道部を構築している。

遺物 遺物はカマド内から確認された土師器坏1点のみである。底径が小さく、体部が浅く開く形態から9世紀後半頃のものとして推測される。

所見 出土遺物から当住居跡の営まれた時期も9世紀後半頃と考える。

第27号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 1	土師器 坏	口径 [13.8] 器高 (3.9)	径の小さな底部をもつとみられ、体部は直線的に大きく開く。口縁部は僅かに外反する。	体部下端に反時計回りの手持ちヘラ削り、体部は内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面に黄橙色不良	カマド燃焼部20% (口径の30%残存)

第28号住居跡〔第111・112図、PL.14・63・64〕

位置 調査区ほぼ中央L・M-19・20グリッド、標高27.5mに位置する。北側で第56号住居跡と重複しており、土層堆積状況と出土遺物から本住居跡が新しいと判断した。

規模 長軸3.54m、短軸3.34mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約11.8㎡である。

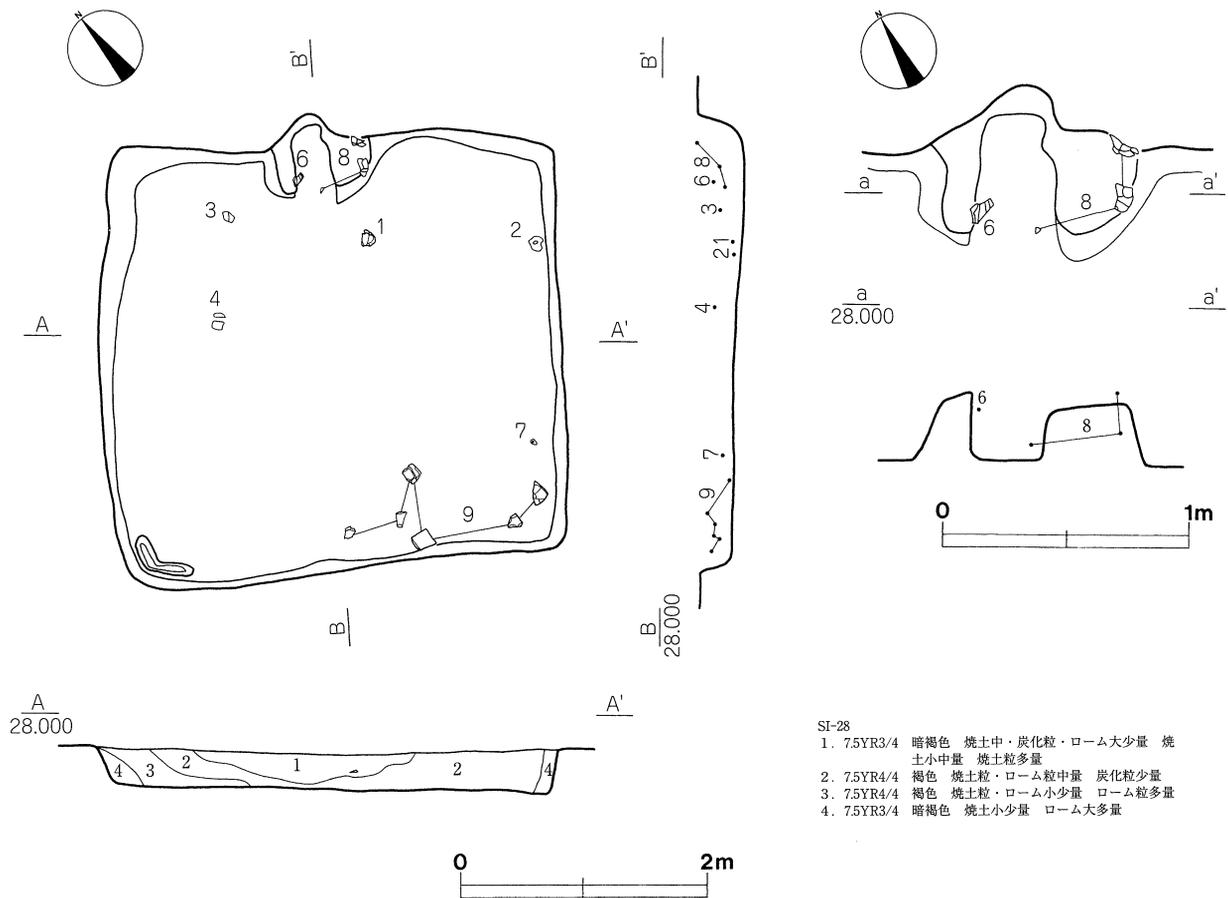
主軸方向 N-35° -E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 垂直気味に外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で30cmを測る。西壁隅に沿って短い壁溝がみられ、規模は幅10cm前後、深さ6cmであった。

床 概ね平坦である。

ピット 確認されなかった。おそらく入り口はカマドと対となる南西壁側であろう。

カマド 北東壁ほぼ中央に位置し、壁下場から約35cm壁外に掘り出して煙道部を構築している。袖端部

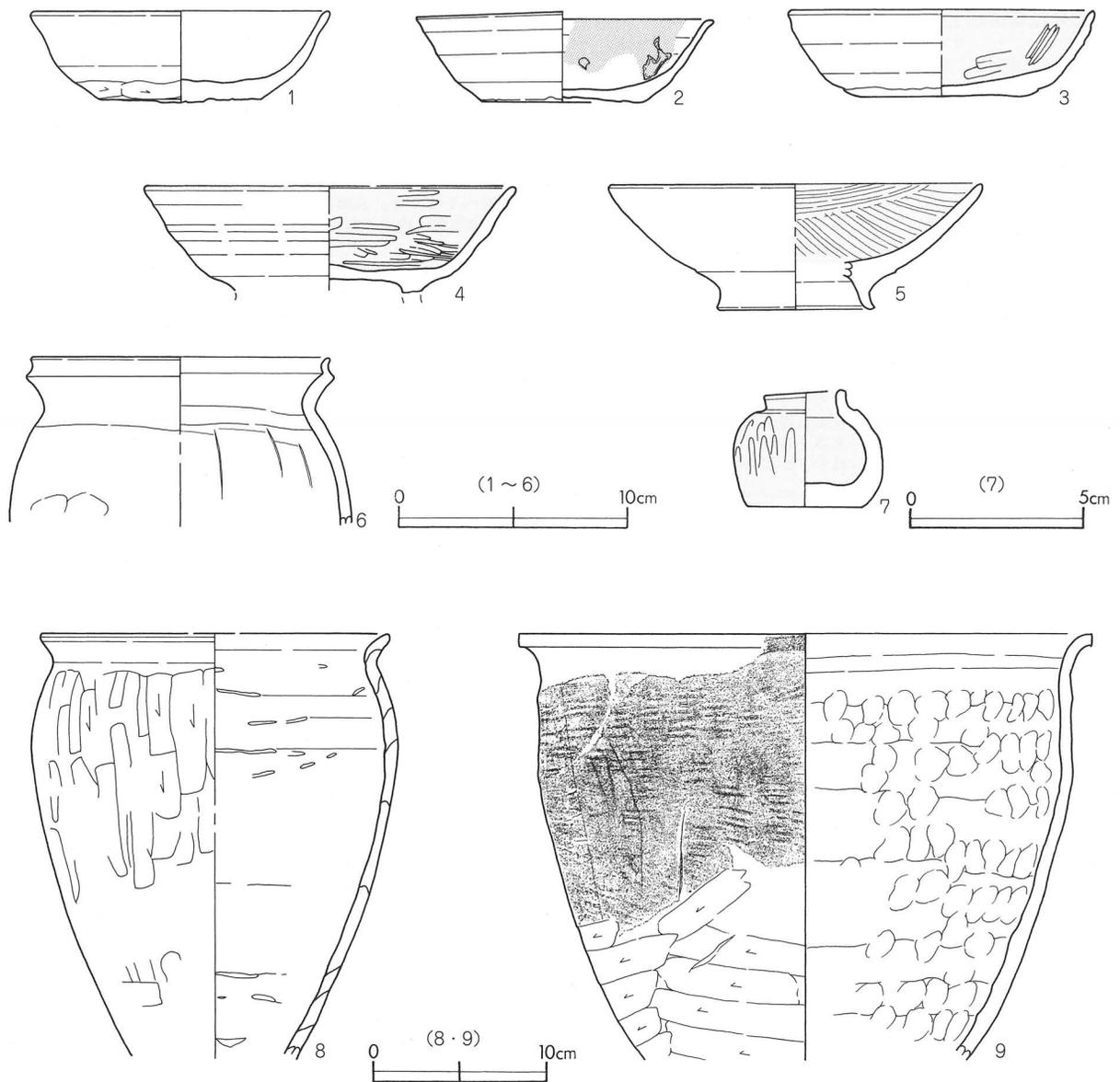


第111図 第28号住居跡・カマド遺物出土状況

からの全長は72cm、燃焼部はあまり掘り込まれておらず、奥壁は外傾して立ち上がる。両袖は厚みがあり、焚き口幅は30cmを測る。遺物は袖の上面より出土した。

覆土 4層に分層された。第4層はローム質土を多量に混入しており壁崩落土、全体には自然堆積であろう。

遺物 遺物はカマドの袖部に土師器甕（No.8）が貼り付く状態で出土した以外は、覆土下位から上位中に散在する状態で確認された。出土位置に特別な傾向はみられないようである。No.1～3は土師器坏である。比較的底径が大きく、体部は浅めの器形で、No.3には内面に磨きと黒色処理が施されている。No.2・3は共に体部下端のヘラ削りが行われておらず、胎土に金雲母を含むことから、当地に通有の土師器坏とは異なる特徴をもっている。No.4は土師器の高台坏ないし椀である。比較的大ぶりで、高い高台をもっていたと推測される。高台の欠損後も使い続けたらしく、高台基部の割れ口には磨耗が認められる。No.5も同じく土師器の高台付坏ないし椀であるが、こちらは底径あるいは高台径が小さく、器壁も厚い。No.4よりも後出的な様相であろうか。No.6は土師器の小型甕である。口縁部に端整な作りがみられる。No.7は土師器の小壺で、全面に磨きと黒色処理を施している。水滴ないしはミニチュアの一種であろうが、作りは非常に丁寧である。No.8は細身の土師器甕で、最大径を体部上位にもち、口縁部は「ハ」字に開く特異な形態を呈する。外面に縦方向のヘラ削りを全面的に施しており、この点も磨きが主流である当地域の甕の中では異例である。No.9は土師器の甑ないし鉢である。器形や成形



第112図 第28号住居跡出土遺物

技法は須恵器の甑に一般的なものであるが、色調は褐色を呈し黒斑もみられるので土師器と判断した。須恵器の製作技法で成形されたものが、土師器と同じ酸化焰焼成されたものであろう。

所見 遺物の時期は、底径の大きな土師器坏や、器高の大きな土師器などから、およそ9世紀前半頃に比定することができる。ただし、No.5の高台径の小さな高台付坏が存在することや、No.9の甑のように須恵器の技術が土師器製作に流出していることなども併せると、やや後出的な要素も窺うことができる。当住居跡が営まれた時期はおおよそ9世紀前半頃と考えられよう。

第28号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 1	土師器 坏	口径 [13.0] 底径 7.0 器高 3.9	底部は比較的径が大きく、体部は丸みを帯びて強く立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部は回転ヘラ切り後、一方からの強いヘラ削りを施す。体部下端に時計回りの手持ちヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面におい橙色 普通	覆土下位 60%
第112図 2	土師器 坏	口径 13.0 底径 6.9 器高 3.6	底部は比較的径が大きく、体部は丸みを帯びて強く立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部は回転ヘラ切り後、未調整。体部下端は未調整、内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量、 金雲母を多量 外面橙色、内面黒色 普通	覆土下位 ほぼ完形 内面に灯芯跡 とタール付着
第112図 3	土師器 坏	口径 13.0 底径 8.4 器高 4.8	底部は径が大きく、体部は丸みを帯びて強く立ち上がる。口唇部はごく僅かに外傾する。	底部は回転ヘラ切り後、軽いナデを施す。体部下端は未調整、内面に縦横の磨きを施す。	微細な長石を微量、 金雲母を多量 外面におい橙色、内 面黒色 普通	覆土中位 50% 内面黒色処理
第112図 4	土師器 高台付坏	口径 [16.0] 器高 (4.6)	やや大ぶりの高台付坏ないし碗。底部は径が大きく、体部は僅かに丸みを帯びて立ち上がり、口縁部はかすかに外反する。	底部は切り離した後、回転ヘラ削りと高台周辺に回転ナデ。内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英 を微量、白雲母を中 量 外面橙色、内面黒色 普通	覆土中位 40% (底径の60%残存) 内面・外面の 口縁部付近黒 色処理
第112図 5	土師器 高台付坏	口径 [16.2] 高台径 [6.8] 器高 5.4	高台は径が小さく開きも弱い。坏部に比べて器壁が薄く不均整。体部は丸みをもって緩やかに開く。	体部外面に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石を中量、ご く微細な石英を少量 外面におい橙色、内 面黒色 普通	覆土 40% (口径の30%残存) 内面黒色処理
第112図 6	土師器 小型甕	口径 [12.8] 器高 (7.1)	最大径を体部中位にもつ。口縁部は「く」字に開き、口唇部は端整に作られ、内湾しながら高く立ちあがる。	体部外面に若干の指頭圧痕。口縁部は回転ナデ、頸部内面に横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を 中量、白雲母を少量 外面におい赤褐色、 内面黄褐色 普通	カマド袖部 10% (体部径 の20%残存)
第112図 7	土師器 小壺	口径 2.4 底径 3.4 器高 3.4	インク壺状の小型短頸壺。底部は大きく体部は球形を呈する。口縁部は短く直立する。	底部に一方、体部に縦位の磨きを施す。	微細な長石・石英、 白雲母を少量 内外面黒色 普通	覆土下位 完形 内外面黒色処理
第112図 8	土師器 甕	口径 [20.2] 器高 (24.7)	細身の甕。最大径は体部上位にあり、肩を張る一方で体部は下方が強く引き締まる。口縁部は「ハ」字に開く。	体部外面は縦位のヘラ削り、口縁部は回転ナデ、内面は横位の軽いナデを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面におい褐色 普通	カマド袖部 30% (口径・体 部径の30%残存)
第112図 9	土師器 甌	口径 [33.0] 器高 [24.5]	甌ないし鉢。体部はやや丸みを帯びたバケツ形を呈し、口縁部は強く外反する。	外面に横位の平行線の叩き目を付け、体部下位にヘラ削りを施す。内面は横位のナデと指頭圧痕が多く残る。	径1mmの長石・石英を 多量、白雲母を中量 内外面明茶褐色 普通	床直～覆土上位 30% (体部径 の40%残存) 口縁部に黒斑あり

第29号住居跡〔第113～115図、PL.15・64〕

位置 調査区西側H・I-19・20グリッド、標高27.5m付近に位置する。南側で第7号溝と重複しており、土層堆積状況から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸4.26m、短軸3.96mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約16.9㎡である。

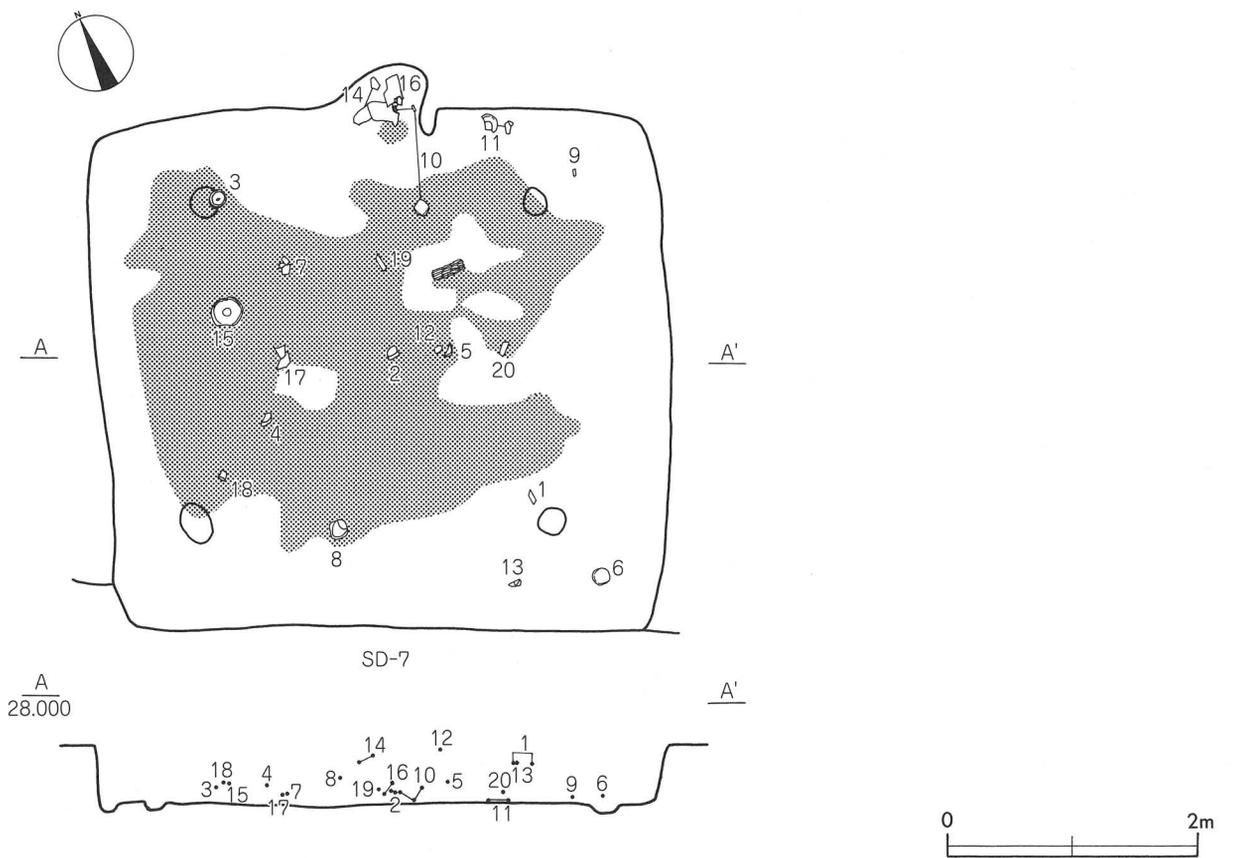
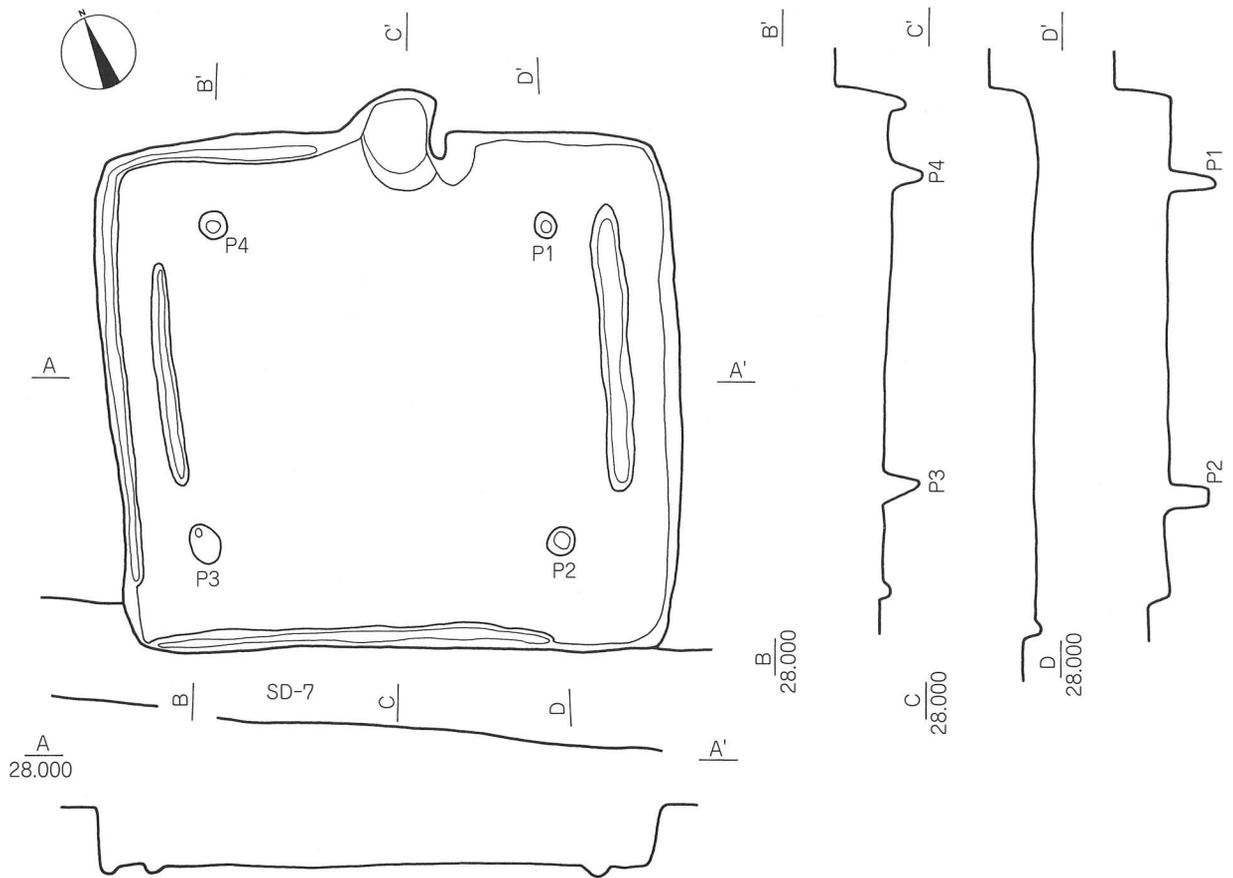
主軸方向 N-17° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で52cmを測る。壁溝はカマドの西側から南壁にかけて一部途切れながら巡っていた。南壁側はこの壁溝上面は第7号溝により壊されている。幅は12cm前後で深さは5～11cmを測る。また東西の壁に沿って支柱穴と壁の間に対になる溝状遺構が確認された。幅は12～26cmで東側の溝の幅が広い。深さは8～10cmで東西共に大差なく、また壁溝と同様の深さであった。入り口はこの東西の溝状遺構の位置から南側と思われる。

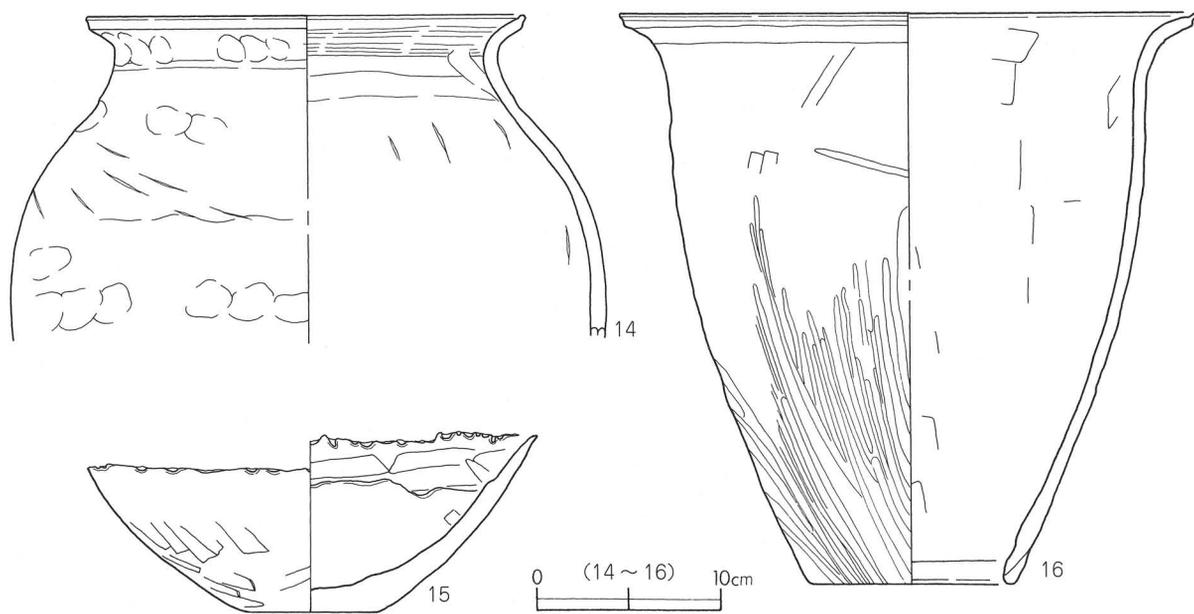
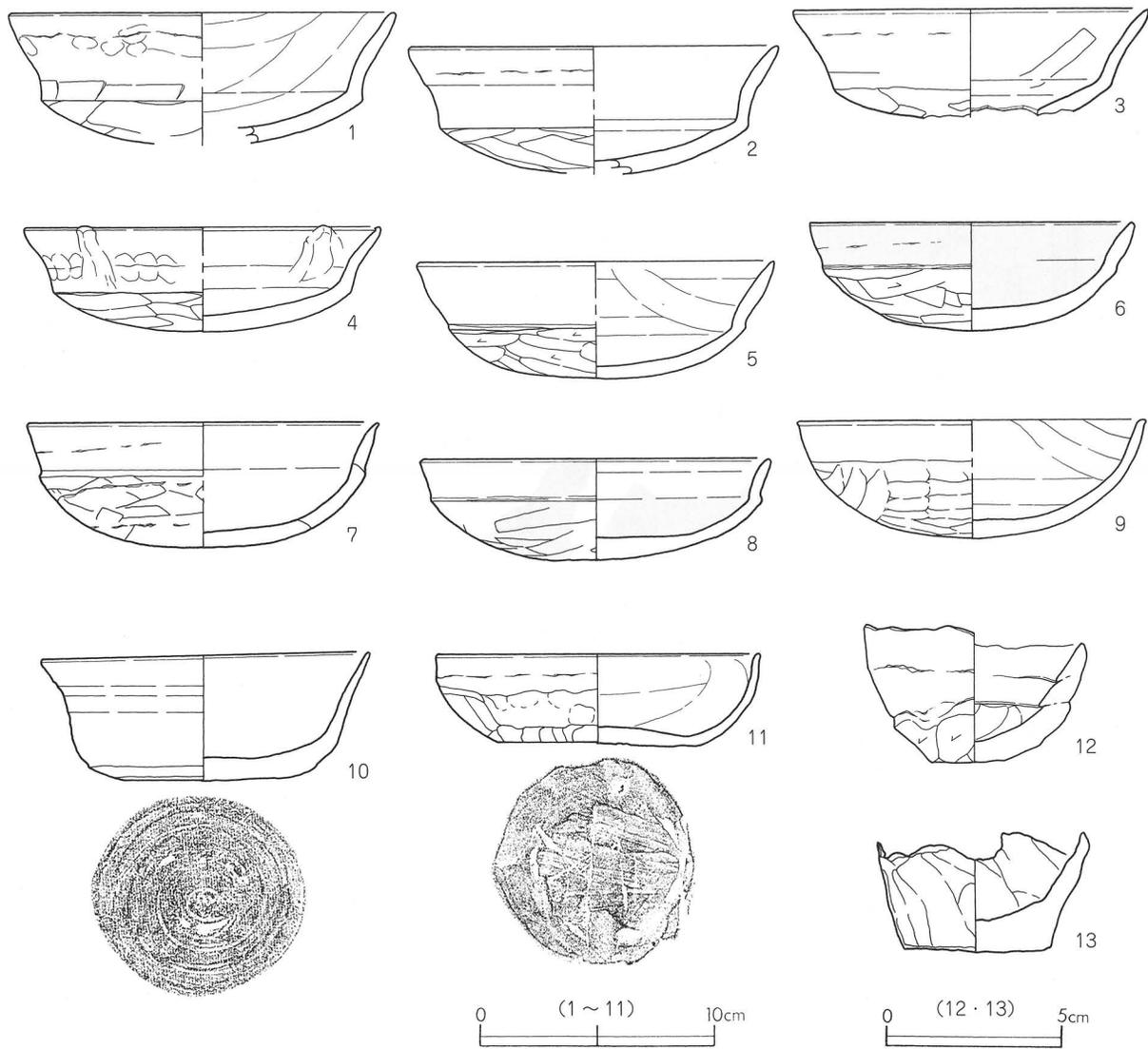
床 概ね平坦である。支柱穴間の内側に焼土面が広範囲に広がっており、その中に僅かではあるが炭化材・灰も確認された。焼土混じりの土は壁際が最も厚く(50cm前後)、中心部に向かうにつれ薄くなっている。

ピット 4基確認された。配置からいずれも支柱穴に相当すると思われる。円形・楕円形を呈し、径20～32cm、深さ25～37cmを測る。規模が比較的近似している。

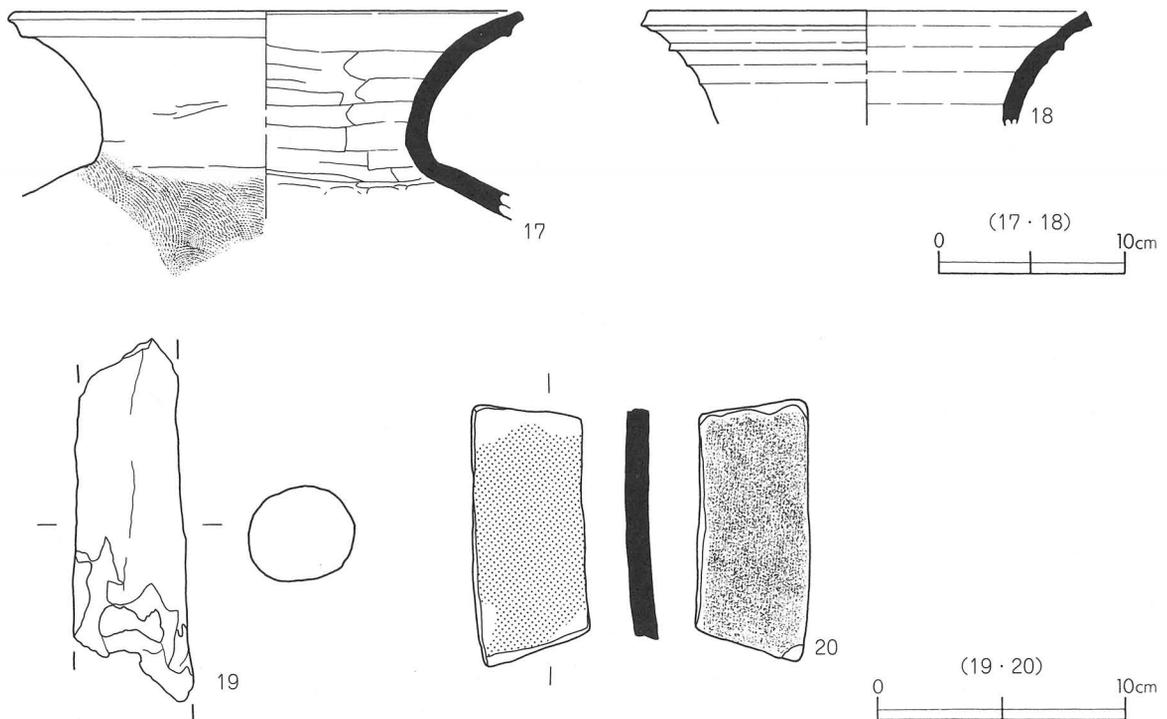
カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場から40cm程壁外に掘り出して構築されている。全長約80cmで燃焼部は床面から4cm程掘り込まれ、奥壁にかけて垂直気味に立ち上がっている。西側の袖は不明瞭だが東側は遺存状態が良好であった。燃焼部から奥壁側は被熱により著しく赤化している。



第113図 第29号住居跡・遺物出土状況



第114图 第29号住居跡出土遺物 (1)



第115図 第29号住居跡出土遺物（2）

遺物 遺物は比較的豊富であった。カマド内から甕・甌や坏が確認された他、覆土中に広がっていた焼土層の上面、また下のレベルから坏類を主とした土器片が確認されている。

当住居跡から出土した土器類は、No.17・18の須恵器甕を除き、すべて土師器である。No.1～11はいずれも坏であるが、平底と丸底の両者が存在し、丸底の割合が圧倒的に多い。No.1～9が丸底の坏で、これらは体部から口縁部に至るラインの違いによってさらに3つのタイプに大別することができる。中でも主体となる器形はNo.2～4の坏である。このタイプは体部と口縁部の境に稜をもち、口縁部は一度強い角度で立ち上がりながら中程で外傾する特徴をもつ。これに対しNo.5～8の坏は、体部と口縁部の境に小さな段が付き、口縁部の中程に膨らみをもっている。また、No.9は体部と口縁部の間に稜や段をもたず、半球形を呈している。以上の3タイプは、調整技法に特別な差異は認められず、No.6・8に部分的に黒色処理の痕跡が残っているが、単純に形態的な違いということになる。一方、平底の坏はNo.10・11の2点のみである。形態的には上記の丸底のものに類似しており、それぞれNo.10がNo.1～4、No.11がNo.9のタイプに親縁性を認められる。No.12・13は手捏ねの坏形土器である。ミニチュアの一種であろうが、作りは粗く実用的ではない。どちらも平底である。No.14は土師器甕、No.16は甌で、どちらも一般的な器形である。No.15は例の少ない土器で、形態から鉢形土器と呼ぶのが適切であろうか。非常に厚手の器壁をもち、作りは甕の底部と同じく粘土紐を巻き上げて成形している。口縁部は粘土の巻き上げを途中で止めたかのような粗雑なものであるが、口唇部にヘラで刻み目を入れて仕上げとしている。挿鉢的な用途をもつものかと推測される。No.17・18は須恵器の甕で、No.17の外面には同心円の叩き目が付けられている。比較的大型の甕である。No.19はカマドの支脚、No.20は須恵器大甕の破片を砥石代わりに用いたものである。

所見 床面上広い範囲にみられる焼土面の下から柱穴が確認されたことから、住居廃絶の際に柱を抜き取り、なんらかの火を用いた行為を行なったと思われる。遺物は焼土面の下位から覆土上位にかけて範

囲も全面に及んでおり、大半は廃絶に伴う廃棄遺物となろう。

遺物の時期は、丸底杯の形態から、7世紀後半に属するものと推測される。須恵器の割合が非常に低い点も、8世紀代には至らないと考える根拠となろう。ただし、No.10の杯底部には須恵器に通有の回転ヘラ削りが施されており、またNo.17の外表面同心円叩きを有する須恵期甕は第6号住居跡出土のものと類似することなどから、7世紀後半でも比較的新しい段階にかかる時期を想定すべきであろう。ここでは一応、7世紀末と考えておくことにしたい。

第29号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	土師器 杯	口径 [16.2] 器高 (5.3)	底部は丸底で、口縁部は体部との境に稜をもって強く立ち上がり、中位から緩く外傾する。	底部に多方向からのヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁部中位に粘土紐の積上げ痕を残す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 普通	覆土上位 30% (口径の30%残存)
第114図 2	土師器 杯	口径 [15.4] 器高 (5.3)	底部は丸底で、口縁部は体部との境に稜をもって垂直に立ち上がり、中位で緩やかに外傾する。	底部に多方向からのヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁部上位に粘土紐の積上げ痕を残す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい褐色 普通	覆土下位 40% (口径の30%残存)
第114図 3	土師器 杯	口径 14.8 器高 (4.5)	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は強く立ち上がり、中位で外傾する。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 普通	覆土下位 80% 底部に4×6cmの破砕孔
第114図 4	土師器 杯	口径 [15.0] 器高 4.3	底部は丸底で、口縁部は体部との境に稜をもって強く立ち上がり、中位で外傾する。口唇内面に浅い沈線が付く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針?をごく微量 内外面褐色 普通	覆土中位 30% (口径の30%残存) 口縁に粘土粒の貼付け補強
第114図 5	土師器 杯	口径 [15.0] 器高 4.8	底部は丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は強めの角度で外傾し、中位に膨らみをもつ。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい橙色 普通	覆土中位 40%
第114図 6	土師器 杯	口径 13.7 器高 4.5	底部は丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は中位に膨らみをもち、外傾しながら立ち上がる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 外面にぶい橙色、内面暗赤褐色 普通	覆土下位 ほぼ完形 内面・外面口縁部黒色処理
第114図 7	土師器 杯	口径 [14.9] 器高 5.2	底部は丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部はやや膨らみをもち、外傾しながら立ち上がる。	底部は方向不明のヘラ削り、体部は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。体部・口縁部中位に粘土紐の積上げ痕を残す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい橙色 普通	覆土下位 50%
第114図 8	土師器 杯	口径 14.8 器高 4.2	底部は丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は内側に僅かな膨らみをもち、外傾して立ち上がる。	底部に一方方向、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面橙色 普通	覆土中位 70% 内外面黒色処理 (部分的)
第114図 9	土師器 杯	口径 [14.6] 器高 4.9	丸底の底部から口縁部まで境目なく弧を描き、半球形を呈する。口唇部はごく小さく外反する。	底部から体部にかけて細かな手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面にぶい橙色 良好	床直 50%
第114図 10	土師器 杯	口径 13.9 底径 6.5 器高 5.3	底部は平底で、斜め上方に張り出した二次底部面をもつ。体部は外反しながら高く立ち上がり、口唇部は先細りの素縁を呈する。	底部および二次底部面は反時計回りの回転ヘラ削り、体部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面浅黄褐色 普通 (やや軟質)	カマド燃焼部 ～覆土中位 70%
第114図 11	土師器 杯	口径 13.8 底径 8.4 器高 3.8	底部は径の大きな平底で、体部は丸みをもって強い角度で立ち上がる。口唇部は薄く、ごく僅かに外反する。	底部はヘラ削り後、一方方向からの磨き、底部周縁に手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。体部と口縁部の境に粘土紐の積上げ痕を残す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	カマド裾部 80% 底部に刻文 (磨きを施す前に刻まれる)
第114図 12	土師器 ミニチュア杯	口径 6.3 底径 2.1 器高 3.9	壊ないし鉢状の粗製手捏ね土器。底部は平底で、体部と口縁部の境に段が付く、口縁部は大きく開く。	底部は一方方向からのヘラ削り、体部は斜方向の手持ちヘラ削り、口縁部は指頭による軽いナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土上位 70%
第114図 13	土師器 ミニチュア杯	口径 5.3 底径 4.0 器高 3.3	壊ないし鉢状の粗製手捏ね土器。底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は台に置かれたために未調整だが平坦を呈する。体部は指頭により粘土を斜めに引き上げて成形される。	微細な長石を少量 内外面橙色 良好	覆土上位 完形
第114図 14	土師器 甕	口径 [23.4] 器高 (17.2)	最大径は体部中位にあり、肩部の張りは弱い。頸部は「く」字に外反し、口唇部はごく小さくせりあがる。	体部外面上位に斜位のヘラナデ、内面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 外面にぶい黄色、内面褐色 普通	カマド覆土上位 10% (口径の25%残存)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 15	土師器 鉢	口径 24.8 底径 8.0 器高 9.3	大型の摺り鉢形を呈する。器壁が厚く重い。底部は平底で、体部は丸みを帯びて大きく開く。口唇部に爪ないしヘラによる刻み目をつける。	甕の底部と同様に粘土紐の積上げによって成形。内外面に横・斜位のヘラナデを粗く施す。	径1～3mmの長石・石英を多量 内外面橙色 普通	覆土中位 ほぼ完形
第114図 16	土師器 甕	口径 [30.8] 底径 10.8 器高 30.6	体部はやや丸みを帯びて強く立ち上がる。口縁部は「L」字に大きく外反し、口唇部はごく短く直立する。	体部中位以下に縦位の細かな磨き、口縁部および内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面にぶい橙色 良好	カマド燃焼部 40% (底径は 70%残存)
第115図 17	須恵器 甕	口径 [27.6] 器高 (9.8)	甕の口縁部・体部上位の破片。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は外面に小さくかえりを付ける。	体部外面に同心円の叩き目を付ける。頸部内面に回転ヘラナデを施す。	径1mmの長石を少量、白雲母を中量 内外面黒色 普通 (やや軟質)	覆土下位 10% (頸部径 の40%残存)
第115図 18	須恵器 甕	口径 [22.4] 器高 (6.0)	甕の口縁部小片。「ハ」字に外反して開く。外面に一条の突帯をもち、口唇部は平坦な素縁を呈する。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 不良 (軟質)	覆土中位 細片 (口径の 15%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第115図 19	土製品 支脚	(14.5)	(4.6)	(3.9)	(224.4)	砂質の粘土を細長い柱状に手捏ね成形したもの。指頭によるナデを縦位に施す。	径1mmの長石・石英を多量 ぶい橙色 不良	覆土中位 70%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第115図 20	須恵器片 転用砥石	9.0	4.4	0.9	71.0	須恵器大甕の肩部片を砥石に転用したもの。外面に自然釉、内面に同心円の叩き目が付いた甕片を四角に成形。表裏面および3方の割れ口を研磨に利用。鉄錆が付着。	覆土下位 砥石としては 完形

第30号住居跡 [第116～121図、PL.16・65・66]

位置 調査区ほぼ中央R～T-16・17グリッド、標高27.5m付近に位置する。住居の南側を第3号溝が横断しており、土層堆積状況から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸4.4m、短軸4.26mのやや横長の正方形を呈する。床面積は約18.7㎡である。

主軸方向 N-32° -E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で60cmを測る。南隅を除き壁溝が途切れず巡っていた。幅は10～24cm、深さは6～11cmを測る。

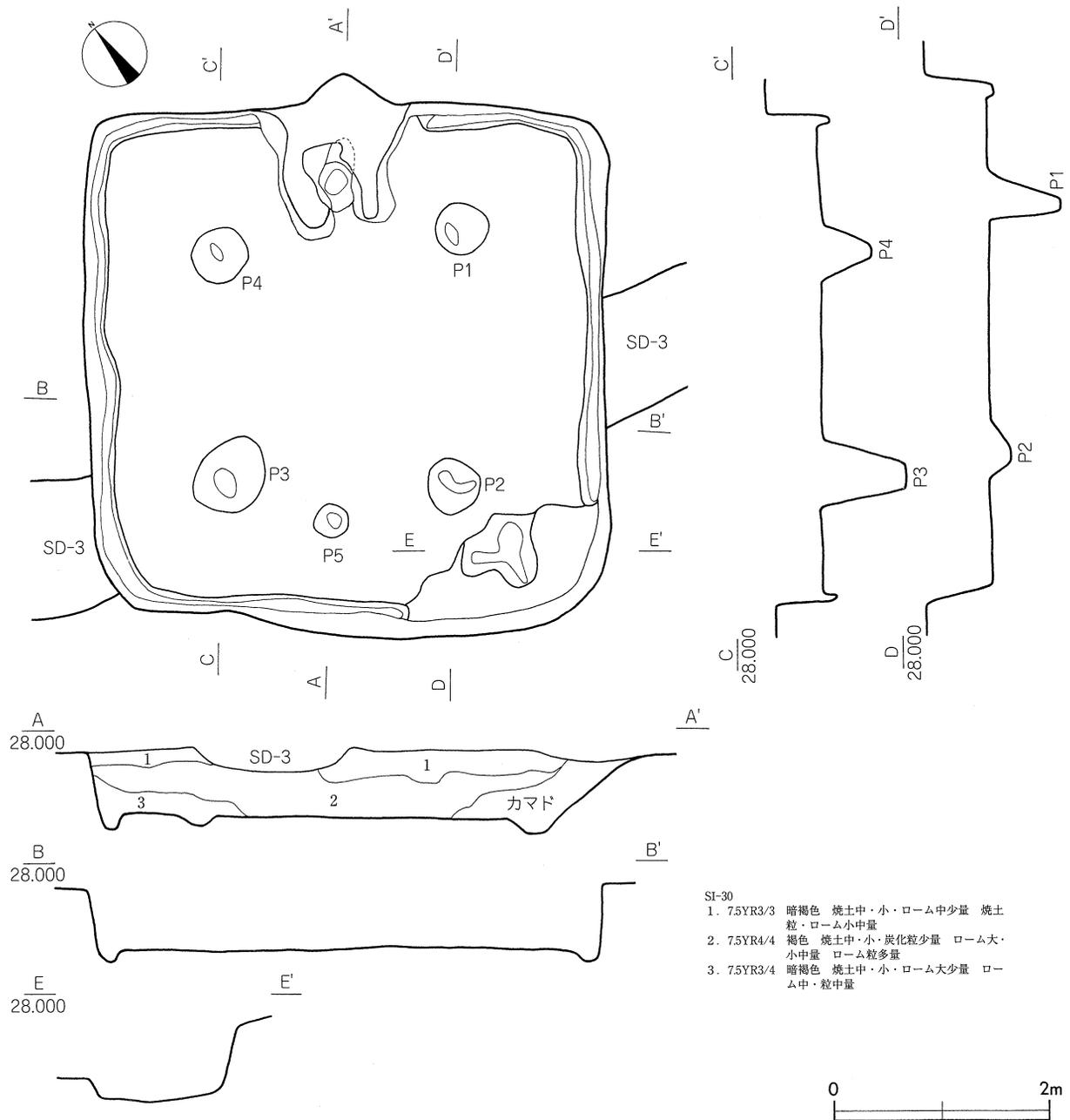
床 概ね平坦である。南隅は不整形のピットの周囲が緩やかに壁に向かって傾斜している。

ピット 6基確認された。P1～4は配置と形状から主柱穴に相当する。円形・楕円形を呈し、径49～73cm、深さ27～80cmを測る。深さに近似性は認められない。P5はカマドに正対する位置にあり、入り口施設に伴うものであろう。円形を呈し、径31cm、深さ11cmを測る。南隅の不整形ピットは深さ12cmであった。

カマド 北東壁ほぼ中央に位置し、壁下場から約30cm壁外に掘り出して構築される。全長1.24m、燃焼部床面から15cm程掘り込まれており、ここから奥壁にかけて緩やかに外傾して立ち上がる。天井が一部残存していた。特筆すべきは袖の状況である。土師器の甕の口縁部が各袖の端部側を向くように貼り付けて出土している。おそらく袖の補強材と考えられる。焚き口幅は25cmを測る。

覆土 3層に分層される。覆土中に焼土や炭化物の混入がみられ、埋め戻し土と考えられる。

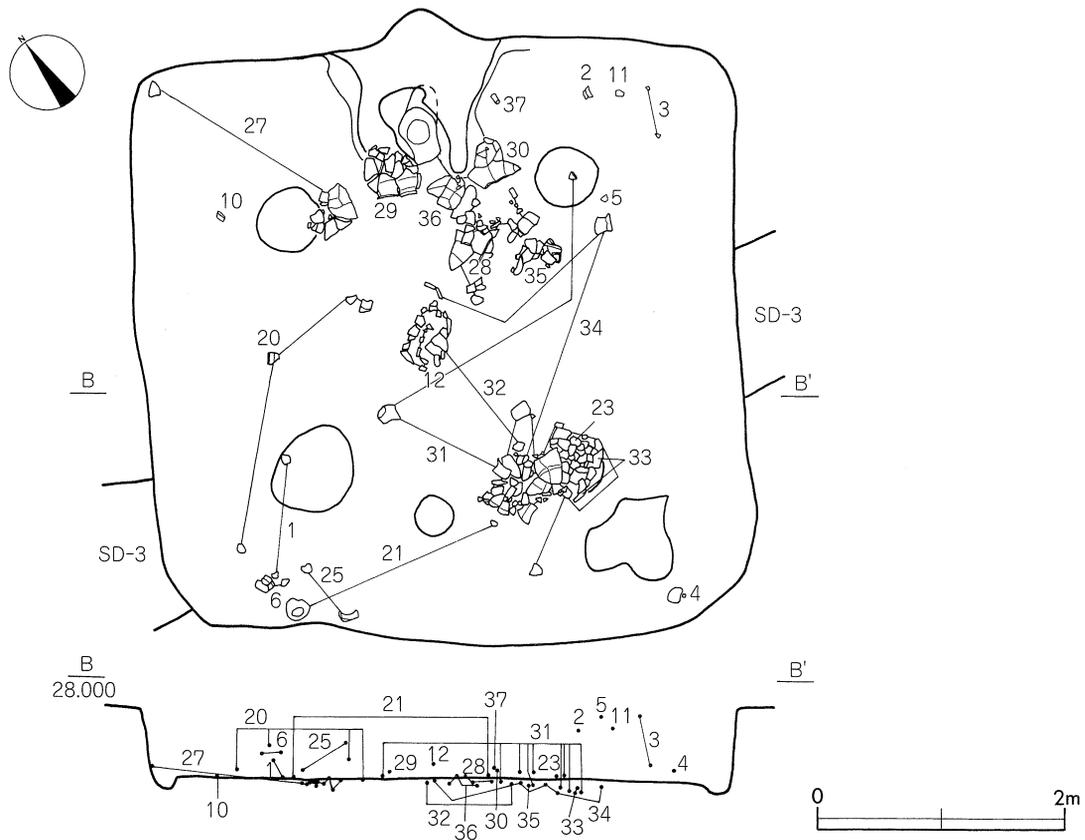
遺物 数多くの遺物の出土をみた。特に土師器甕の出土量が目立って多く、実測し得たものだけでも10個体を越える。一部はカマドの補強材として転用されたとしても、一軒の住居での使用量としては異常である。他に坏類の出土もみられたが、床面直上ないし覆土下位からの出土が多く、一括性の高い遺物群であると言えよう。器種構成は、坏、蓋、鉢ないし椀、盤など、供膳具に多くのバリエーションがあ



第116図 第30号住居跡

る。依然として土師器の割合が高いものの、坏や蓋に一定量の須恵器が使われ始めている。

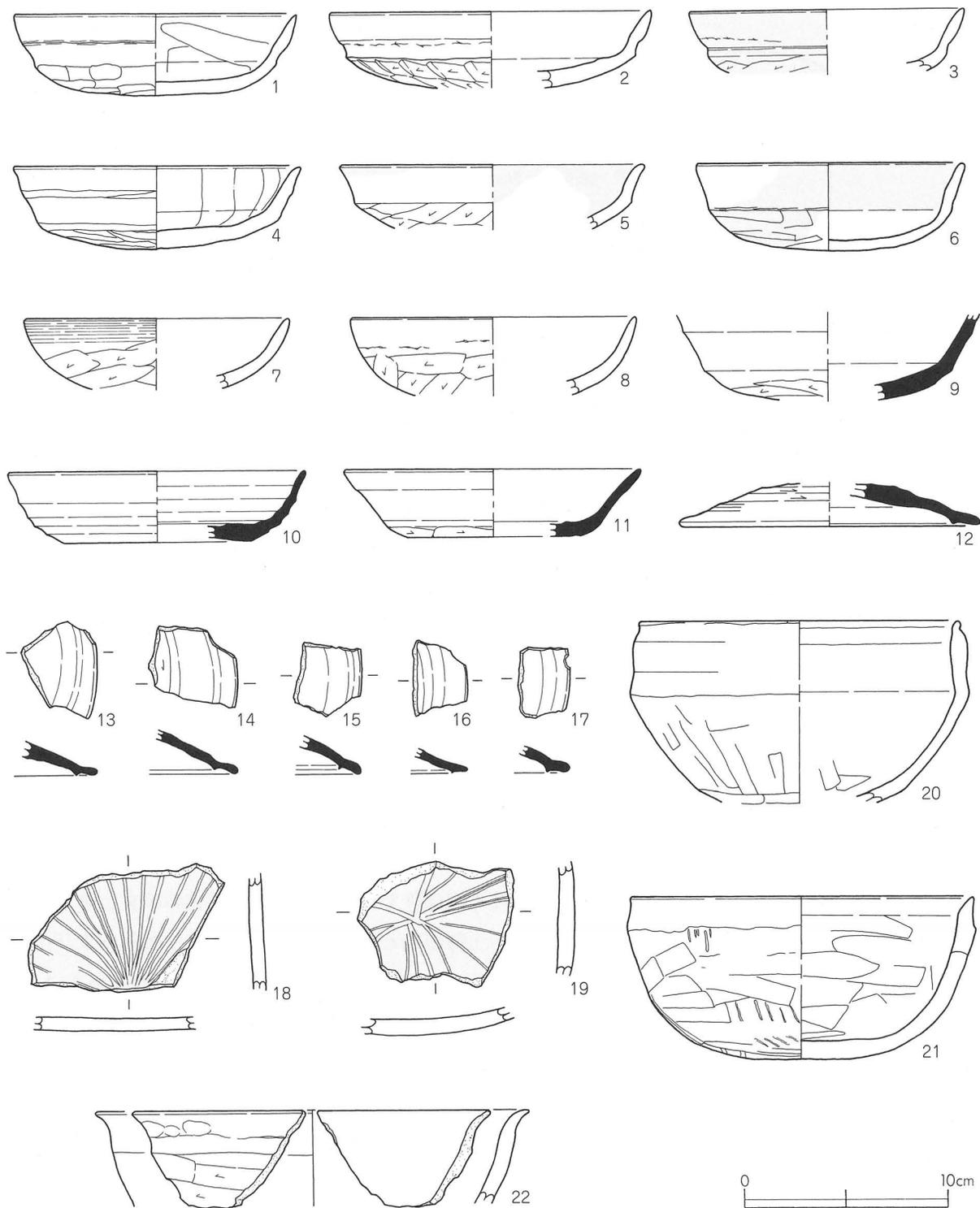
No.1～8は土師器坏である。底部はかなり平坦化が進んでいるが、まだ丸底を留めている。第29号住居跡の坏にみられた3種のタイプがここでも確認でき、口縁部と体部の境に段が付き口縁部の中位に膨らみをもつものが比較的多い (No.1～3)。段の代わりに稜をもって口縁部が立ち上がるタイプは、第29号住居跡に比べて器高が低くなっている (No.4～6)。段も稜も付かず半球形を呈するタイプは、他に対して一回り口径が小さい (No.7・8)。全体的にみて、第29号住居跡の坏よりも、平底化、低器高化が進行しているようである。No.9～11は須恵器の坏である。No.9は丸底で、深めの体部をもつ。No.10・11は平底で、底径はかなり大きく8～9cmを測る。須恵器坏では最も底径の大きな段階である。No.12～17は須恵器の蓋である。かえりの形態のバリエーションを把握するため、あえて細片も図示し



第117図 第30号住居跡遺物出土状況

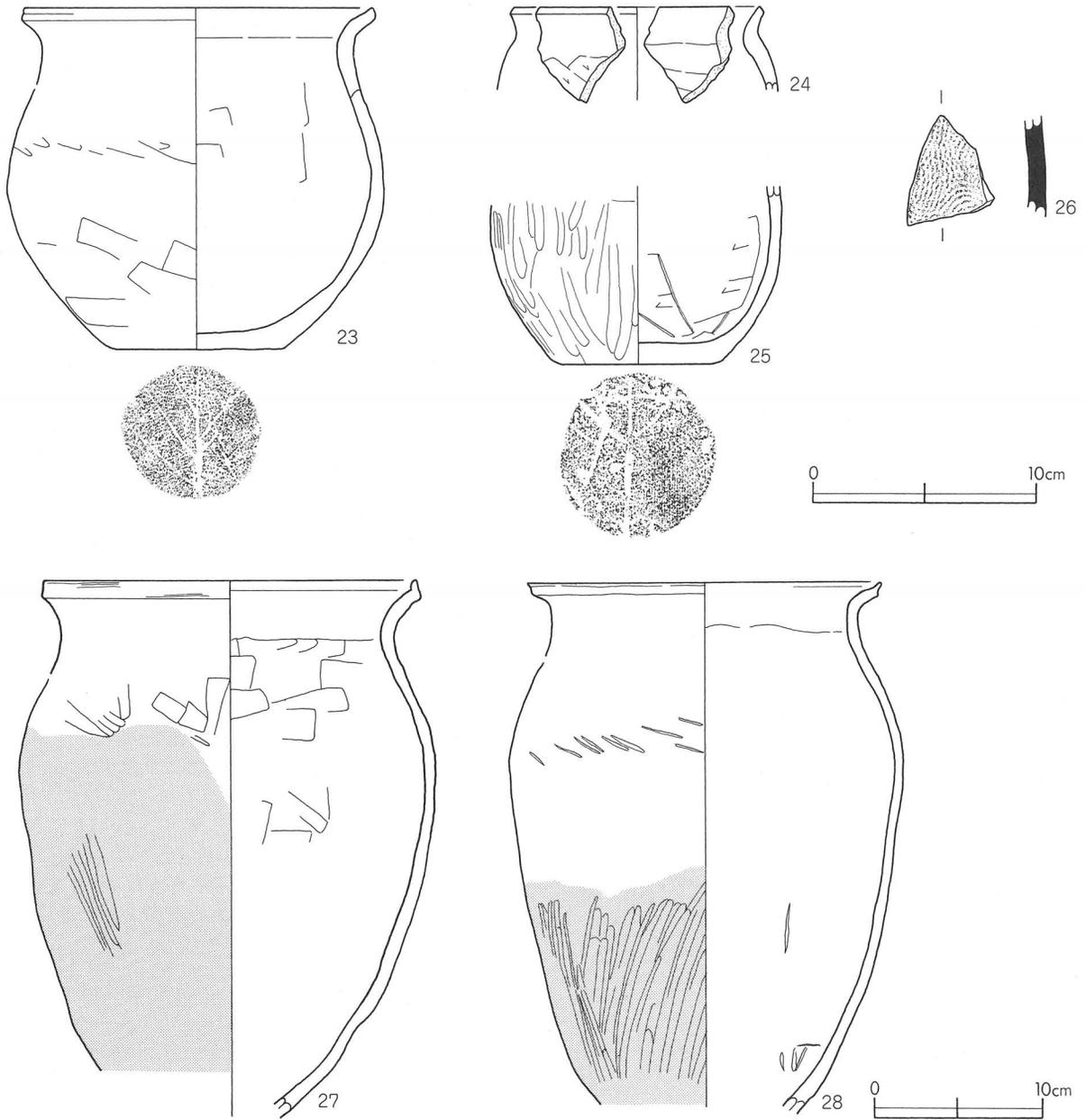
た。いずれもかえりは小さく、土浦市栗山窯跡の蓋に比べるとやや後出的な感が否めない。栗山窯跡に後続するかすみがうら市一丁田窯跡の蓋により近似しており、かえりの付いた蓋の最終段階に位置するものと考えられる。No.18・19は土師器の盤ないし坏の底部片である。内面に放射状の暗文と黒色処理が施されている。No.20・21はかなり深めの器形から土師器碗とすべきものであろう。底部および体部にヘラ削り、口縁部に回転ナデ、その間に段を有しており、坏の形態や調整技法を踏襲して作られている。No.22も同様の碗もしくは鉢である。体部の開きが大きく、口唇部が外反している点でNo.20・21とは若干異なっている。No.23～25は土師器の小型甕である。No.23と24・25の間には法量の違いがあるようで、前者を中型、後者を小型と分別すべきかもしれない。No.26は須恵器甕の体部小片である。外面に同心円の叩き目が付いている。No.27以降はごく一般的な大きさの土師器甕である。No.27～30のように小底径で体部は細身を呈するものと、No.31～36のように底径が大きく、体部が強く張り出すものの2種がみられる。いずれも小さくつまみ上げた口唇部を有し、調整技法としては体部下位に磨き、上位にヘラナデを施すことが基本となっており、各個体に顕著な違いはみられない。口径や頸部径、器高などは、体部が太い細いに拘らずほぼ同じ大きさを維持しているようである。No.37は柱状の粘土塊に径0.9cmの孔が貫通しており、土錘の一種と推定される。また、図示していないが凝灰岩製の砥石が1点出土している。

所見 遺物の時期については、平坦化の進んだ丸底坏の形態が、和同開珎の出土した第6号住居跡と共通することから、まず8世紀初頭に近い時期を想定することができる。No.10の須恵器坏は床面直上から確認されているが、この坏の法量はおよそ口径14cm、底径9cmをはかる。土浦市栗山窯跡は7世紀第



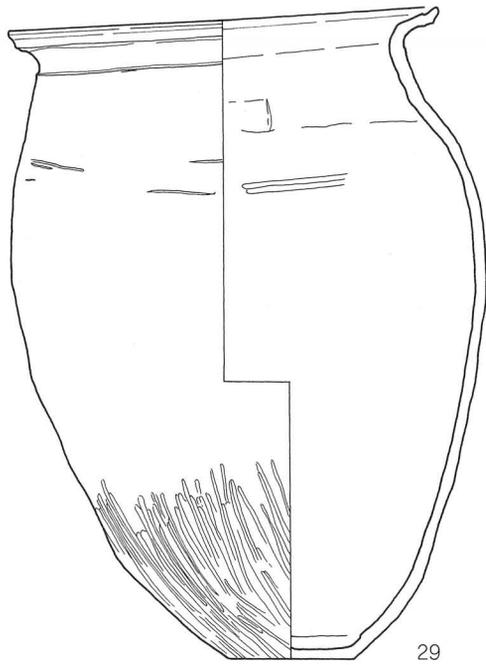
第118図 第30号住居跡出土遺物（1）

4 四半期に比定されているが、この窯の坏は口径が15～17cm台のものが主体で、14cm台を欠いている。14cm台が主体となるのは、後続する土浦市（旧新治村）永井寄井窯跡もしくはかすみがうら市一丁田窯跡の段階であり、8世紀初頭頃とされている。また、No.9の深めの丸底坏も両窯跡でみられ、さらに須恵器蓋のかえりの形態も一丁田窯跡との近似が指摘できる。よって、これらの須恵器を8世紀初頭頃に充てることが許されよう。土師器甕の形態が古墳時代的な鈍重なものから律令期的な細身のものに転

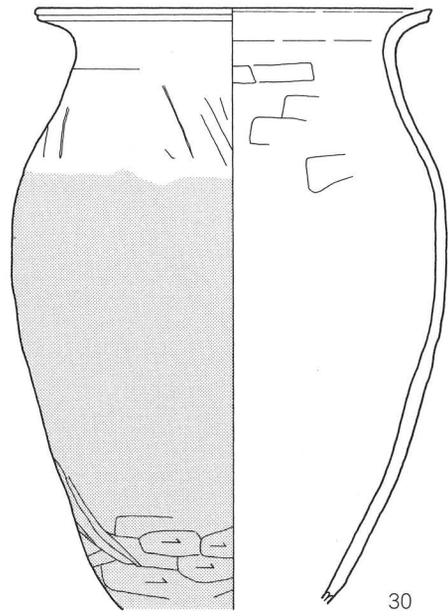


第119図 第30号住居跡出土遺物 (2)

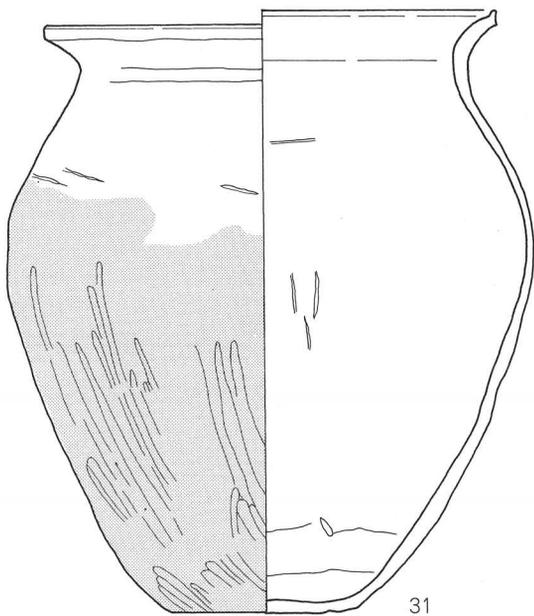
換しつつあることなども、この時期の一般的な動向に合致している。大半の遺物が床直か覆土下位からの出土であり、該期の良好なセットであると言えよう。住居跡が営まれた時期も同様と考える。



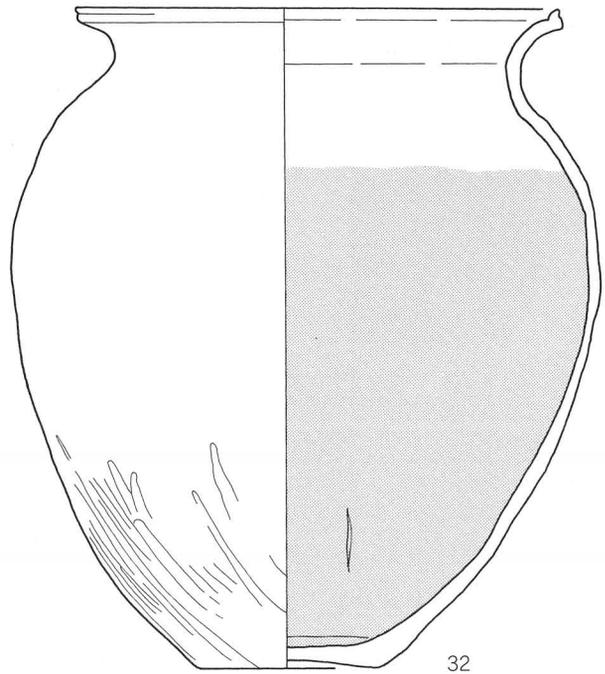
29



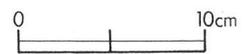
30



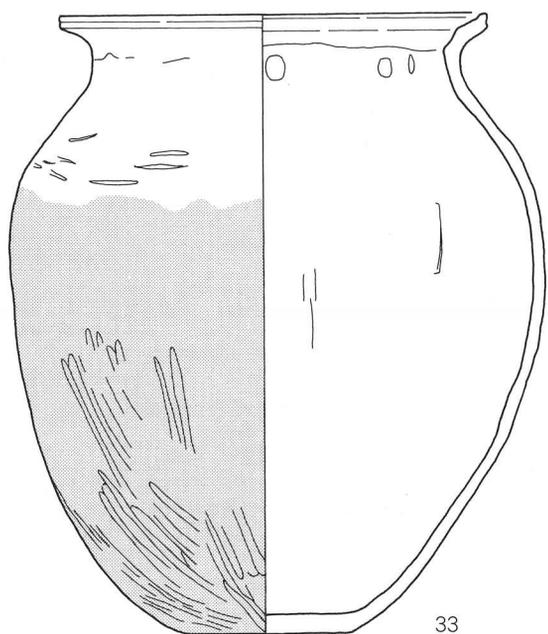
31



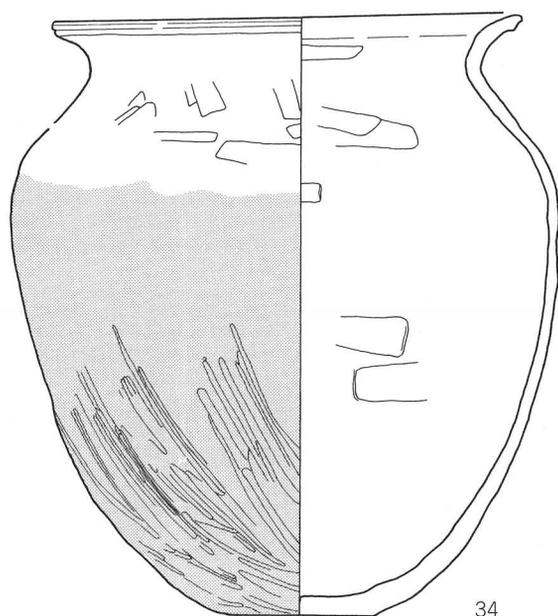
32



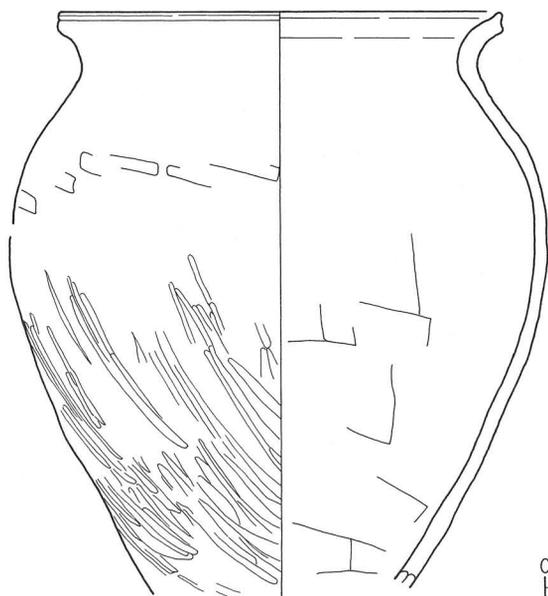
第120図 第30号住居跡出土遺物 (3)



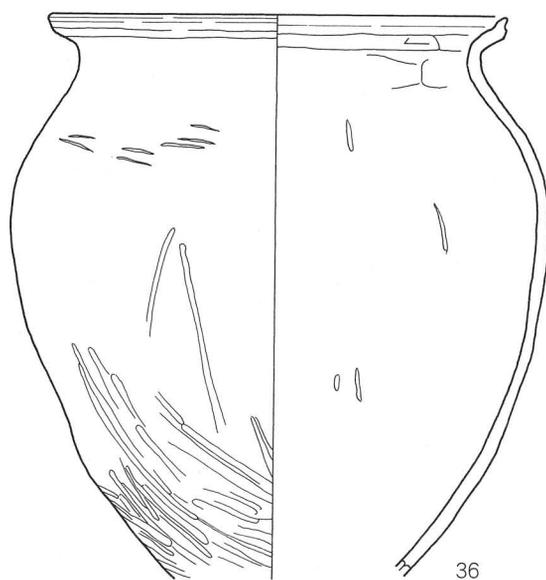
33



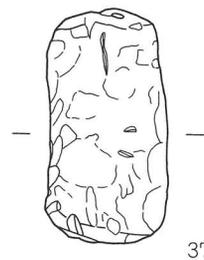
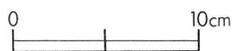
34



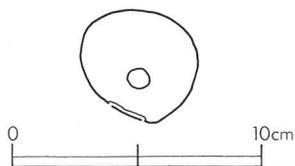
35



36



37



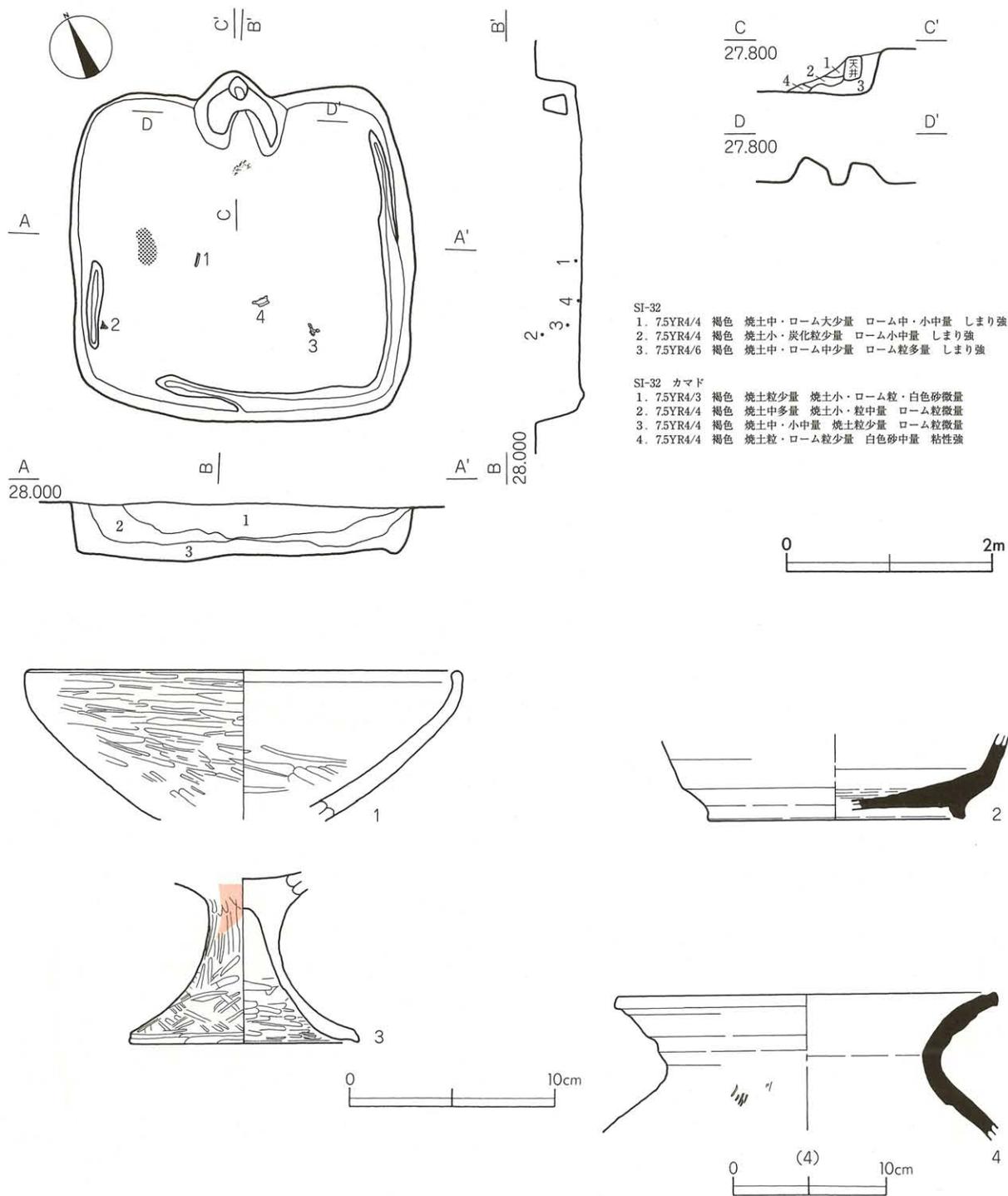
第121図 第30号住居跡出土遺物 (4)

第30号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第118図 1	土師器 坏	口径 [14.1] 器高 3.9	底部は平坦化が進んだ丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は中位に膨らみをもち、直線的に開く。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 普通	床直～覆土 30% (底部付近は80%残存)
第118図 2	土師器 坏	口径 [15.8] 器高 (3.7)	底部は丸底とみられ、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は中位に膨らみをもち、直線的に開く。	底部は一方からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁部中位に粘土紐の積上げ痕を残す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面橙色 普通	覆土上位 20% (底部周辺は30%残存)
第118図 3	土師器 坏	口径 [13.4] 器高 (2.0)	底部は丸底とみられ、体部と口縁部の境に沈線状の窪みを付けて小さな段を作る。口縁部は中位に膨らみをもち、直線的に開く。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面におい赤褐色 普通	覆土下～上位 20% (口径の30%残存) 外面黒色処理
第118図 4	土師器 坏	口径 [14.0] 器高 4.0	底部は平坦化が進んだ丸底で、口縁部は体部との境に稜をもって直線的に立ち上がる。	底部に一方、体部に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量、骨針を微量 内外面橙色 普通	覆土下位 60%
第118図 5	土師器 坏	口径 [15.0] 器高 (3.1)	体部は浅めに開き、口縁部との境に稜が付く。口縁部は軽く外反しながら短く立ち上がる。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量、白雲母を微量 外面におい橙色、内面黒褐色 普通	覆土上位 30% (口径の30%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第118図 6	土師器 坏	口径 13.2 器高 4.2	底部は丸底で、体部は丸みをもつ。体部と口縁部の境に小さな段が付く、口縁部は直線的に立ち上がる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石、白雲母を微量 内外面におい黄褐色 普通	覆土中位 70% 内外面黒色処理 (部分的)
第118図 7	土師器 坏	口径 [13.0] 器高 (3.4)	底部から口縁部にかけて境目がなく、半球形を呈する。	体部に反時計回りの軽いヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石少量 内外面におい赤褐色 普通	覆土 細片 (口径の10%残存)
第118図 8	土師器 坏	口径 [14.0] 器高 (3.8)	底部から口縁部にかけて境目がなく、半球形を呈する。	体部に反時計回りの軽いヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、褐色チャートを少量 内外面におい橙色 普通	覆土 30% (口径の50%残存)
第118図 9	須恵器 坏	器高 (4.2)	底部は丸底とみられ、体部との境は微かな稜によって画される。体部は強めの角度で直線的に開く。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 不良 (軟質)	覆土 10% (底部付近は20%残存)
第118図 10	須恵器 坏	口径 [14.6] 底径 9.2 器高 3.4	底部は平底で、周縁に二次底部面をもつ。体部は下位に丸みを帯びて強めの角度で立ち上がる。	底部は切り離し後、回転ヘラ削りを施す。体部外面にきついロクロ目を残す。	径1mmの長石をごく微量、白雲母を多量 内外面灰黄色 普通 (やや軟質)	床直 40% (底径の50%残存)
第118図 11	須恵器 坏	口径 [14.4] 底径 [8.6] 器高 3.3	底部は平底で広い。体部は下位に丸みを帯び、僅かに外反しながら緩やかに開く。	底部は一方からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 普通 (やや軟質)	覆土上位 15% (口径の20%残存)
第118図 12	須恵器 蓋	口径 [14.8] 器高 (2.1)	上面に平坦面をもち、体部は浅く開く。口縁部は僅かに外反し、内側に断面三角形の小さなかえりが付く。	体部上面に反時計回りの回転ヘラ削り、体部および口縁部に回転ナデを施す。かえりは回転ナデ時に指頭でつまみ上げたもの。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面灰黄色 普通	覆土下位 30%
第118図 13	須恵器 蓋	破片長 (3.8)	蓋の口縁部付近の細片。口縁端部外面に僅かな屈曲をもち、内面に断面三角形のかえりが付く。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石を少量、白雲母を多量 内外面におい黄色 不良	覆土 細片
第118図 14	須恵器 蓋	破片長 (4.4)	蓋の口縁部付近の細片。口縁端部外面に僅かな窪みが付き、内面に摘み上げた程度のごく小さなかえりが付く。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石を中量、白雲母を少量 内外面におい黄褐色 普通	覆土 細片
第118図 15	須恵器 蓋	破片長 (3.3)	蓋の口縁部付近の細片。口縁端部外面に僅かな窪みが付き、内面には断面三角形のごく小さなかえりが付く。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石を中量、白雲母を少量 内外面灰色 普通	覆土 細片
第118図 16	須恵器 蓋	破片長 (2.7)	蓋の口縁部付近の細片。口縁部は直線的に延び、内面には摘み上げた程度のごく小さなかえりが付く。	内外面に回転ナデを施す。	微細な長石を中量 内外面灰色 良好	覆土 細片
第118図 17	須恵器 蓋	破片長 (2.6)	蓋の口縁部付近の細片。口縁端部は僅かに屈曲し、口唇部はやや肥厚する。かえりは口唇部の厚みを利用して僅かに摘み上げる程度。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面灰色 普通	覆土 細片
第118図 18	土師器 盤	破片長 (8.1)	盤の底部の破片。底部は平坦で広い。	底部外面に一方からのヘラ削り、内面に放射状の暗文を施す。	微細な長石・石英を少量 外面灰黄褐色、内面黒色 普通	覆土 細片 内面黒色処理
第118図 19	土師器 坏ないし 盤	破片長 (7.5)	平坦化の進んだ丸底坏の底部、もしくは丸みを帯びた盤の底部。	底部外面に一方からのヘラ削り、内面に放射状の暗文を施す。	微細な長石少量 外面におい褐色、内面黒色 普通	覆土 細片 内面黒色処理

図版番号	器種	法量 (cm)		器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		口径	器高				
第118図 20	土師器 椀	口径 器高	[15.8] (8.8)	底部は平坦化した丸底とみられる。体部は僅かに丸みを帯びて強く立ち上がり、口縁部との境に稜が付く。口縁部は中央に膨らみをもって直立し、口唇部は玉縁を呈する。	底部に多方向、体部に縦横のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量、骨針? をごく微量 内外面橙色 普通	床直～覆土上位 40%
第118図 21	土師器 椀	口径 器高	17.0 7.9	底部は丸底で、体部はゆったりと丸みをもって大きく立ち上がる。口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は小さく直立する。	底部に一方方向、体部に横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量 外面黄灰色、内面褐灰色 普通	床直 50%
第118図 22	土師器 鉢	口径 器高	[21.2] (4.7)	鉢ないし椀の口縁部片。体部は僅かに丸みをもって立ち上がり、口縁部は小さく外反する。	体部外面に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面橙色、内面にぶい 橙色 良好	覆土 細片 (口径の 15%残存)
第119図 23	土師器 小型甕	口径 底径 器高	[15.7] 7.4 15.0	底部は径が大きく、体部は球状を呈し、最大径は中位にある。頸部の締りは弱く高く立ち上がり、口縁部は「ハ」字に開く。口唇部はごく小さく直立する。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、中位および内面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面明赤褐色 普通	床直 80% 底部に木葉痕
第119図 24	土師器 小型甕	口径 器高	[10.8] (3.7)	頸部は「く」字に屈曲し、口唇部は平坦な素縁を呈する。	外面に斜位のヘラ削り、内面に横位のナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 外面にぶい橙色、内面黒褐色 普通	覆土 細片
第119図 25	土師器 小型甕	底径 器高	7.4 (7.8)	小型、厚手の甕の体部片。体部は球形を呈し、最大径は体部中位にある。底部は径が大きく安定感がある。	体部に横位のヘラ削り後、縦位の細かな磨きを施す。内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 外面にぶい赤褐色、内面褐灰色 普通	覆土下～上位 50% (体部下位は完存) 底部に木葉痕
第119図 26	須恵器 甕	破片長	(4.5)	甕の体部小片。	外面に同心円の叩き目が付く。	微細な長石を少量、白雲母を多量 外面オリーブ黒色、内面灰色 不良(軟質)	覆土 細片
第119図 27	土師器 甕	口径 器高	22.0 (31.8)	最大径は体部上位にあり、頸部の締りは弱い。口縁部は「く」字に外反し、口唇部が短く直立する。	体部下位に縦位の磨き、中位および内面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 普通	床直 80% 体部中位以下に粘土(カマド材の粘土か)が厚く付着
第119図 28	土師器 甕	口径 器高	20.8 (31.6)	最大径は体部上位にあり、頸部の締りは弱い。口縁部は「く」字に強く外反し、短い口唇部が外傾する。	体部下位に縦位の細かな磨き、中位および内面に斜・横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面暗褐色 普通	床直 80% 体部下位に粘土と煤が付着
第120図 29	土師器 甕	口径 底径 器高	22.4 6.6 34.9	最大径は体部中位にあり、頸部の締りは弱い。口縁部は「つ」字に強く外反し、口唇部は断面三角形を呈して大きく開く。体部の歪みが著しい。	体部下位に縦位の細かな磨き、中位および内面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面にぶい褐色 普通	カマド袖部 80% 底部に木葉痕
第120図 30	土師器 甕	口径 器高	21.0 32.1	最大径は体部上位にあり、頸部はよく締る。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は短く外傾する。	体部下位に横位のヘラ削りと僅かな磨きを施す。体部上位および内面に縦・横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	カマド袖部 70% 体部中位に黒斑
第120図 31	土師器 甕	口径 底径 器高	23.8 9.8 32.3	底部は径が大きく、体部の張りも大きい安定感のある甕。最大径は体部中位。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は短く直立する。	体部下位に縦位の細かな磨き、体部上位に横位、内面に縦位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	床直 90% 底部に木葉痕 体部中位以下に煤付着
第120図 32	土師器 甕	口径 底径 器高	25.7 10.0 35.4	体部は大きく膨らみ、最大径は体部上位。口縁部は「く」字に大きく外反する。口唇部は断面三角形で小さく直立する。	体部下位に縦位の細かな磨き、体部上位および内面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 外面にぶい橙色、内面黒褐色 普通	床直 70% 底部に木葉痕 内面に黒斑(焼成時に煤付着)
第121図 33	土師器 甕	口径 底径 器高	22.7 8.7 33.2	最大径は体部中位にあり、体部は大きく膨らむ。口縁部は「く」字に大きく外反する。口唇部は断面三角形で短く直立する。	体部下位に縦位の細かな磨き、体部上位および内面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい橙色 普通	床直 70% 底部に木葉痕 体部中位以下に煤付着
第121図 34	土師器 甕	口径 底径 器高	25.1 8.0 32.1	最大径は体部上位にあり、肩部の張りが強い。体部は大きく膨らみ、下位は強く丸みを帯びる。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は強く外反する。	体部下位に縦位の細かな磨き、体部上位および内面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。底部に一方方向からのヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を少量 内外面暗褐色 普通	床直 90% 体部中位以下に煤付着
第121図 35	土師器 甕	口径 器高	[23.6] (30.9)	最大径は体部中位。口縁部は「く」字に強く外反し、口唇部は短く直立する。	体部下位に縦位の細かな磨き、体部上位および内面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直 60%
第121図 36	土師器 甕	口径 器高	24.4 (30.2)	最大径は体部上位。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は短く外傾する。	体部下位に縦位の細かな磨き、体部上位および内面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデを施す。	径1mmに長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面暗褐色 普通	カマド袖部 70%

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第121図 37	土製品 土錘	9.4	4.8	4.6	22.7	円筒状の土錘。中心軸をややずれた位置に径0.9cmの孔が貫通する。手捏ね成形で、多数の指頭圧痕が残る。	微細な長石を少量 にぶい橙色 普通	覆土下位 完形



第122図 第32号住居跡・出土遺物

第32号住居跡〔第122図、PL.17・67〕

位置 調査区ほぼ中央、K・L-20・21グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸2.88m、短軸2.74mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約7.9㎡である。

主軸方向 N-25° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で43cmを測る。北壁を除いて途切れながらも壁

溝が巡っており、幅10～18cm、深さ3～7cmを測る。東～南側の壁溝端部は壁から離れた状態であった。
 床 概ね平坦である。床面の西側に焼土、カマド燃焼部付近に白色粘土が狭い範囲ながら広がっていた。
 ピット 確認されなかった。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場より34cm程壁外に掘り出して構築される。全体の遺存状態は非常に良好といえる。袖端部からの全長は80cm、燃焼部はほとんど掘り込まれずほぼ床面と同じ高さで、奥壁にかけて垂直気味に立ち上がる。天井が一部残存しており、煙道部の径は18cm、焚き口幅は22cmを測る。燃焼部手前の白色粘土はカマド構築土の一部と考えられる。遺物は出土していない。

覆土 3層に分層された。いずれの土層中からも焼土粒が確認されており、人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。

遺物 遺物は比較的少なく、実測し得た4点の他に土師器甕や丸底・平底両タイプの坏などの細片が若干点存在する。床面や覆土下～上位中に散在する状況で、出土位置に特別な傾向はみられなかった。No.1は鉢の一種と思われ、仏器の鉄鉢形を模したような、尖底と口縁部内湾の形態を呈する。全面に磨きが施されており、いわゆる鬼高期の坏のような、体部にヘラ削り、口縁部に回転ナデの調整は行われていない。No.2は須恵器の高台付坏である。底径および高台径が大きく安定感があり、高台そのものは低く作られている。No.3は土師器高坏である。脚部は中空に作られ、全面に磨きが施される。外面の一部には赤彩がみられた。No.4は須恵器甕で、厚手で軟質の焼成を呈する。体部外面に平行線の叩き目が付けられる。

所見 遺物の時期は、No.2の高台付坏が覆土上位からの発見であるが、8世紀前半代の特徴をもっている。実測に堪えなかった坏の細片も、丸底で体部に段をもつタイプと平底で盤状を呈するタイプの2種がみられ、およそ8世紀初頭頃の特徴に合致する。No.4の須恵器甕にみる厚手で軟質の焼成も、奈良時代前半頃に比較的多くみられる傾向である。よって、当住居跡は8世紀前半代のものと考えることができよう。なお、No.1の土師器鉢やNo.3の高坏は、当該期の資料としては珍しい資料である。

第32号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	土師器 鉢	口径 [20.0] 器高 (7.1)	仏器の鉄鉢形を模倣した土器。底部は尖底ないし径の小さな丸底と推定される。体部は直線的で大きく開き、口縁部は僅かに内傾する。	全面に細かな磨きを施し滑らかに整える。磨きは体部下位は斜位、体部上位から口縁部、内面は横位に施される。	微細な長石・石英・白雲母を少量 内外面にぶい橙色 良好	覆土下位 20% (口径の25%残存)
第122図 2	須恵器 高台付坏	高台径[12.4] 器高 (3.9)	底径が大きく、重厚な印象を与える。体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。高台は低く、断面四角形を呈する。	底部は切り離し後、反時計回りの回転ヘラ削りを行い、高台取り付けに伴い回転ナデを周囲に施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 良好	覆土上位 20% (底部周辺は25%残存)
第122図 3	土師器 高坏	裾部径[11.0] 器高 (8.2)	脚部は中空で細身に延び、裾部はラッパ状に開く。坏部は平坦で浅めに大きく開くとみられる。	坏部、脚部とも内外面に細かな磨きを施し滑らかに整える。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい橙色 良好	覆土下位 60% 外面一部赤彩
第122図 4	須恵器 甕	口径 [24.0] 器高 (8.7)	頸部は「く」字に屈曲し、口唇部は素縁に作られる。	体部外面に縦位の平行線の叩き目を施す。	径1mmの長石を少量、白雲母を多量 内外面暗緑灰色 不良 (軟質)	床面直上 細片 (頸部径は25%残存)

第34号住居跡〔第123図、PL.17・68〕

位置 調査区中央やや西寄り I・J-22・23グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.80m、短軸3.28mの長方形を呈し、床面積は約12.5㎡である。

主軸方向 N-30°-E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 直立気味に外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で37cmを測る。西壁とカマド西側に部分的に壁溝が巡り、幅10～14cm、深さ5cm前後であった。

床 概ね平坦である。

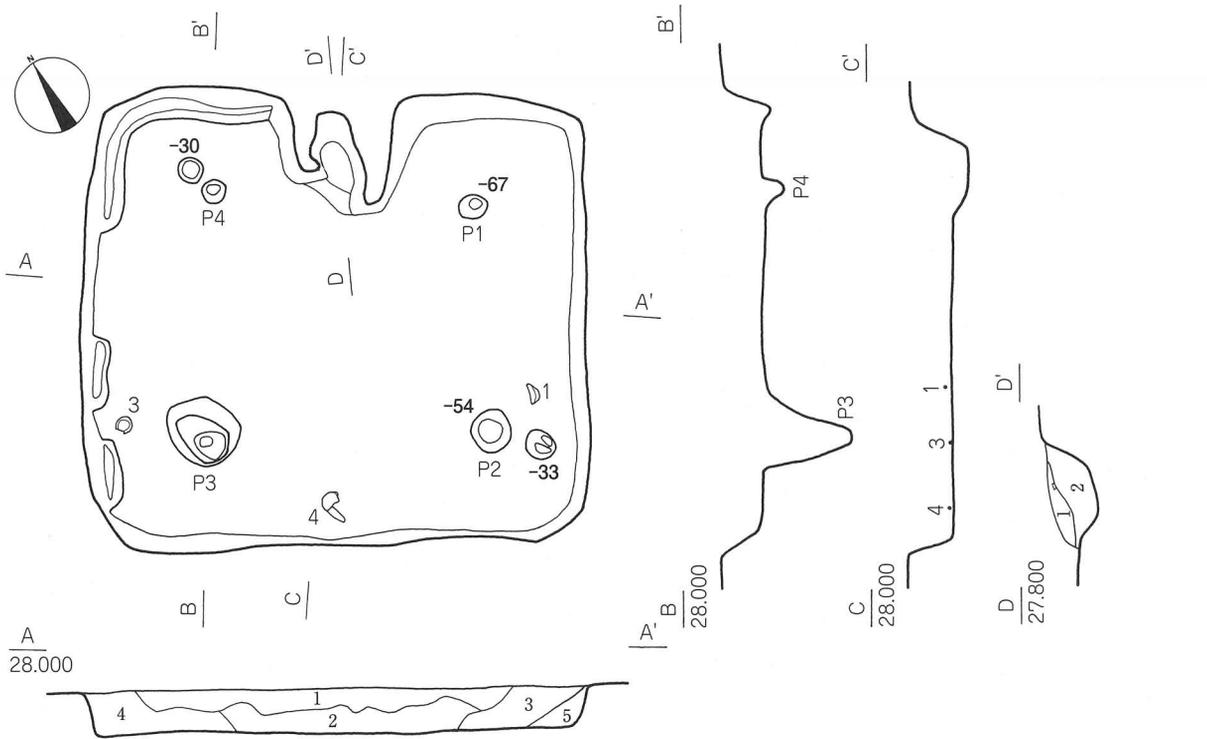
ピット 6基確認され、P1～4は配置と規模から主柱穴に相当しよう。円形・楕円形を呈し、径18～62cm、深さ15～70cmを測る。また、P2・4と壁隅の間に対となるようなピットがそれぞれみられた。特にP4は他に比べて浅いピットでこれを補うための柱の存在が窺える。入り口部はカマドと対をなす南西壁側であろう。

カマド 北東壁ほぼ中央に位置する。煙道部はほとんど住居の方形プラン内から突出しておらず、両袖がP1・4の柱穴を結ぶラインよりさらに床面中央に向けて張り出していた。全長約80cm、燃焼部は床面を12cmほど掘り込んでおり、奥壁にかけて外傾して立ち上がる。焚き口幅は20cmである。カマド内の覆土は2層に分層され、いずれも焼土・炭化物の混入がみられた。遺物は出土していない。

覆土 5層に分層された。非常に土層が近似しており、人為的な埋め戻し土の可能性が考えられる。

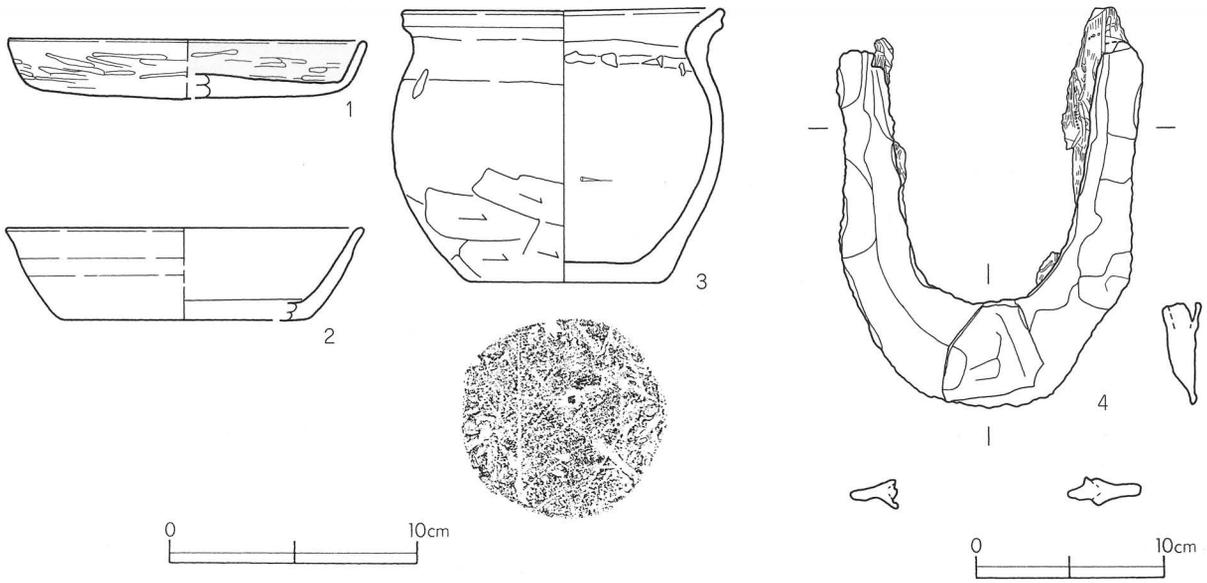
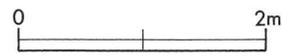
遺物 遺物の量は比較的少なかった。実測し得た土器は僅かであり、図示した以外に須恵器の蓋、土師器坏、甕の細片が若干認められた。No.1・3・4は床面直上から出土したが、平面的には散在している。No.1は土師器の盤である。口径はやや小さめで坏の口径に近づいているが、依然として体部は浅めで全面に磨きを施しており、盤の意識が強く残っている。No.2は土師器の坏で、広い底部をもつ。No.3は土師器の小型甕である。No.4は鉄製のU字形鋤先である。完形であり装着部分には木質が残っている。他に須恵器の蓋が2個体分あり、小さなかえりを有するものと、かえりがなく端部を下方に折り曲げるものの2種が確認された。土師器の坏は、No.2と同様の平底のもの、丸底で体部に稜が付くもの、丸底だが体部に稜も段も付かないもの、の3種が認められた。

所見 遺物の年代は、No.1の盤が第23号住居跡に類似しており、両者はともに第6号住居跡から出土している盤よりも平底化が進んでいることから後出的と考えられる。よって8世紀初頭よりもやや後の時期が想定できる。また、No.2の底径の大きな平底の坏は第6号住居跡にも僅かだが認められる。丸底坏の存在と併せて、当住居跡が大きな時間的懸隔をもつことはないと考えられよう。さらに、細片で確認される須恵器の蓋は、かえりが消失し、端部を折り曲げるかたちに移行する段階の資料と考えられる。新治窯跡では、一丁田窯跡から東城寺寄井前窯跡にかけての段階にあたり、およそ8世紀第2四半期頃と考えられている。以上から、当住居跡の年代は、8世紀前半でも比較的遅い時期に充てることができよう。



- SI-34
- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土小・ローム中少量 ローム小多量
 - 2. 7.5YR4/4 褐色 焼土大・ローム大少量 ローム中量
 - 3. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土中・ローム大少量 ローム少・粒中量
 - 4. 7.5YR4/4 褐色 ローム大・中少量 ローム小中量
 - 5. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土中・ローム小少量 ローム粒中量

- SI-34 カマド
- 1. 7.5YR4/6 褐色 焼土大~粒・炭化物中量
 - 2. 7.5YR4/4 褐色 焼土中・小多量 焼土大・炭化物中量

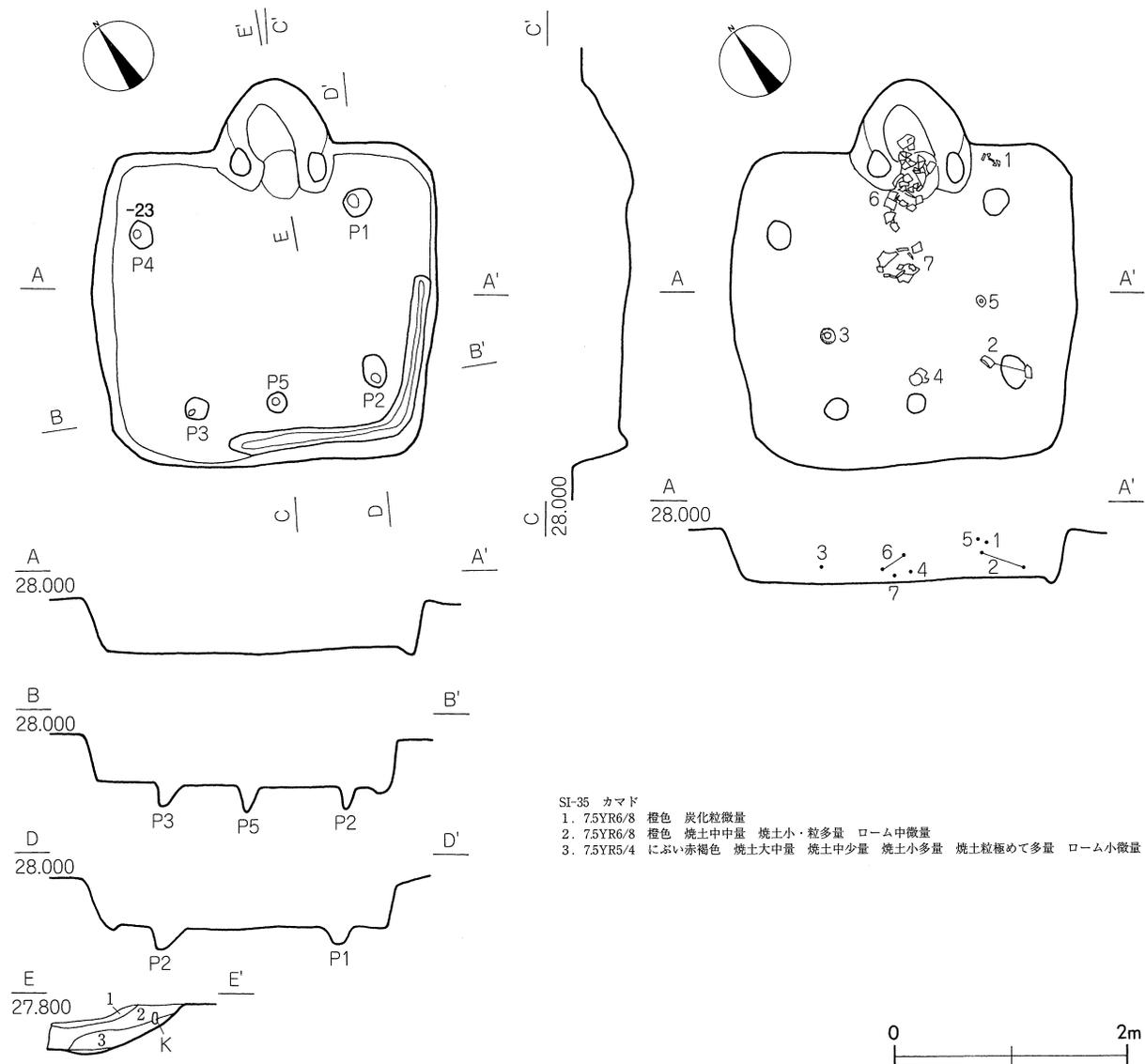


第123図 第34号住居跡・出土遺物

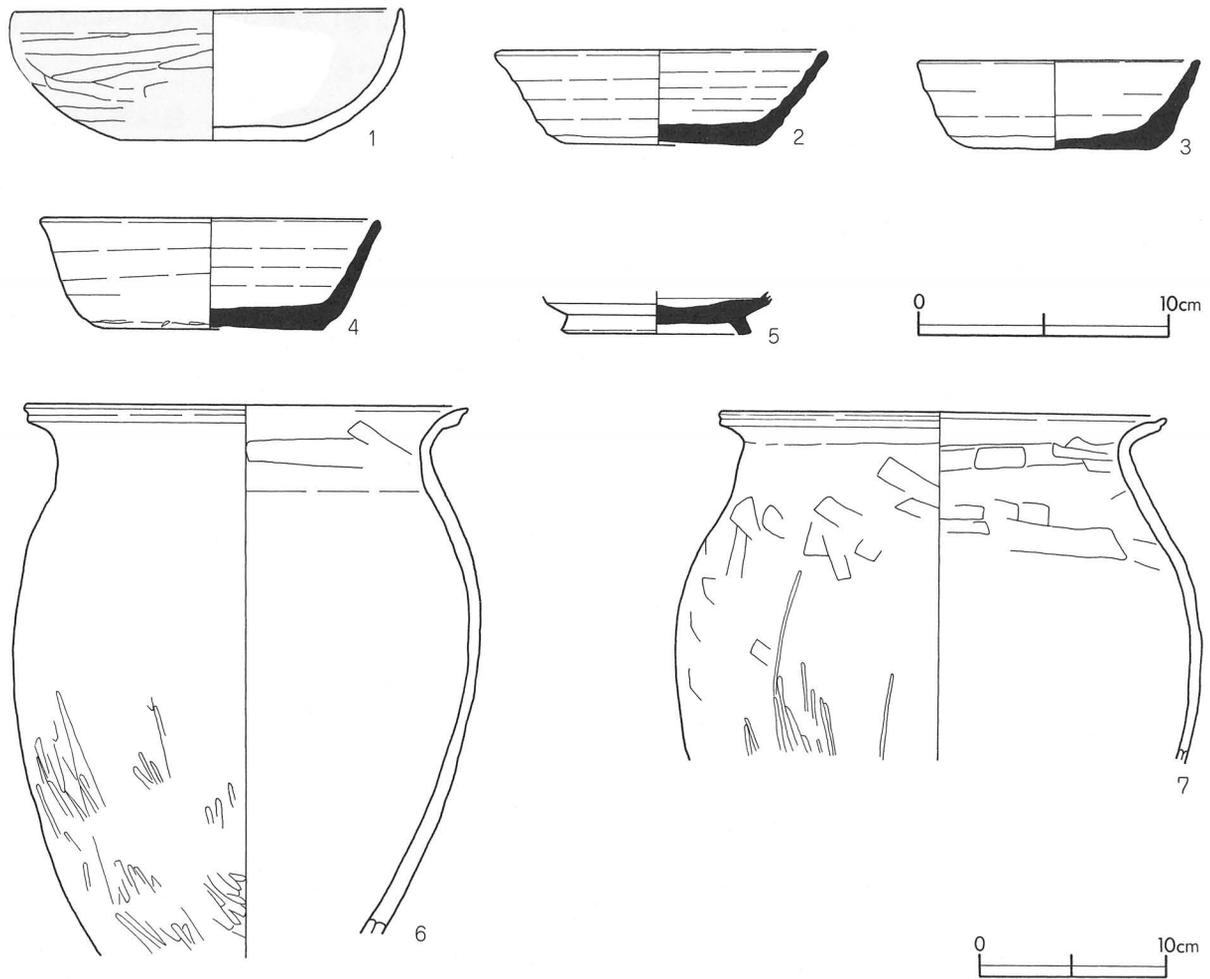
第34号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図 1	土師器 盤	口径 [14.5] 底径 [13.0] 器高 2.3	底部はごく僅かに丸みを帯びた広い平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、全面に細かな磨きを施す。	微細な長石・石英、白雲母を微量 内外面にぶい赤褐色 普通	床直 50% 内面黒色処理 (希薄)
第123図 2	土師器 杯	口径 [14.2] 底径 [9.6] 器高 3.7	底部は平底で径が大きい。体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。	体部内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を 中量 内外面橙色 普通	覆土 30% (口径の 25%残存)
第123図 3	土師器 小型甕	口径 12.9 底径 8.2 器高 10.9	底部は比較的広い。最大径は体部中位にあり、頸部の縮りは弱い。口縁部は小さく外反し、短い口唇部が直立する。	体部下位に横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 多量、白雲母を少量 内外面にぶい赤褐色 普通	床直 90% 底部に木葉痕

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第123図 4	鉄製品 鋤先	21.5	15.3	1.5	266.0	U字形鋤先。木質が装着部に残存。	床直 完形



第124図 第35号住居跡・遺物出土状況



第125図 第35号住居跡出土遺物

第35号住居跡〔第124・125図、PL.17・68〕

位置 調査区中央やや北寄り、R・S-14・15グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸2.68m、短軸2.5mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約6.7㎡である。

主軸方向 N-33°-E。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で42cmを測る。南隅を中心に壁溝が一部巡っており、幅12～18cm、深さ7cm前後を測る。

床 概ね平坦であるが、中央に向かいやや窪んでいる。

ピット 5基確認された。配置からP1～4は支柱穴に相当しよう。円形・楕円形を呈し、径20～28cm、深さ15～23cmと規模が近似していた。P5は入り口施設に伴うピットであろう。円形で、径18cm、深さ22cmを測る。

カマド 北東壁ほぼ中央に位置し、カマドの横幅は北壁のおよそ1/3を占めている。壁下場より76cm程壁外に掘り出して構築されており全長約1.0mで、燃烧部は床面を6cm程掘り下げ、奥壁にかけて緩や

かに外傾して立ち上がる。焚き口幅は30cmを測る。カマド内の覆土は3層に分層され、覆土中には焼土が多量に堆積していた。燃烧部面の上位でNo.6の土師器甕が出土している。

遺物 遺物はカマド燃烧部に土師器甕、カマド袖脇の上位から土師器坏が確認され、他は覆土中に散在する状態で発見されている。器種構成は坏と甕のみである。坏では土師器よりも須恵器の割合が高くなっている。No.1は土師器の坏である。やや大ぶりで、体部は丸みをもち底部は平底である。いわゆる鬼高期の坏と同じく、体部にヘラ削り、口縁部に回転ナデが施されている。No.2～4は須恵器の坏である。いずれも平底で、新治窯跡の製品である。口径は概ね13cm台であるが、No.3だけは11cm台で、大小の法量分化を確認できる。口径に対する底径の割合は58～64%を占め、まだ底径が大きく作られる段階にある。No.5は須恵器の高台付坏である。底部片が残存するのみであるが、その高台径から小型品であることが窺える。No.6・7は土師器甕である。体部にやや細身なものと太めなものがあるが、両者とも最大径を上位にもち、長胴化を遂げつつある。

所見 遺物の時期は、坏の口径と底径の割合から、およそ8世紀中頃に相当すると考えられる。当住居跡が営まれた時期も同様であろう。

第35号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 1	土師器 坏	口径 15.5 底径 7.6 器高 5.3	底部は平底で、体部は内湾しながら高く立ち上がる。口縁部は薄く直立する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部下位に横位のヘラ削り、体部上位および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英、白雲母を少量 内外面黒褐色 普通	覆土上位 90% 内外面黒色処理 (部分的)
第125図 2	須恵器 坏	口径 13.2 底径 7.8 器高 4.8	底部は平底で、体部は直線的に開く。	底部は切り離し後、反時計回りの回転ヘラ削り、体部下位も同様。体部中位から内面にかけて回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰色 良好	覆土下～中位 90% 内外面に火襷
第125図 3	須恵器 坏	口径 [11.3] 底径 7.4 器高 3.5	やや小型の坏。底部は平底で、体部は強い角度で直線的に開く。	底部は切り離し後、反時計回りの回転ヘラ削り、体部下位も同様。体部中位から内面にかけて回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面褐灰色 普通 (やや軟質)	覆土中位 90%
第125図 4	須恵器 坏	口径 13.7 底径 8.8 器高 4.4	底部は径の大きい平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は切り離し後、一方向からの強いヘラ削り、体部下位は未調整、体部中位から内面にかけてロクロ目を残す。	微細な長石を微量、白雲母を多量 内外面灰黄色 普通 (やや軟質)	覆土下位 90%
第125図 5	須恵器 高台付坏	高台径 7.6 器高 (1.4)	小型の高台付坏。高台の作りは端整で「ハ」字に開く。体部は横方向に大きく開き、角度を変えて強く立ち上がる。	底部は切り離し後、反時計回りの回転ヘラ削りを施す。高台周辺部は回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面灰黄色 普通	覆土上位 30% (高台部 完存)
第125図 6	土師器 甕	口径 23.4 器高 (29.7)	最大径は体部上位にあり、やや細身を呈する。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は短く横に張り出す。	体部下位に縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面にぶい黄橙色 普通	カマド燃烧部 80%
第125図 7	土師器 甕	口径 23.9 器高 (18.7)	最大径は体部上位にあり、体部はやや太め。口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部は短く横に張り出す。	体部下位に縦位の磨き、上位および内面に横位のヘラナデ、口縁部内側に横位のヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	覆土下位 60%

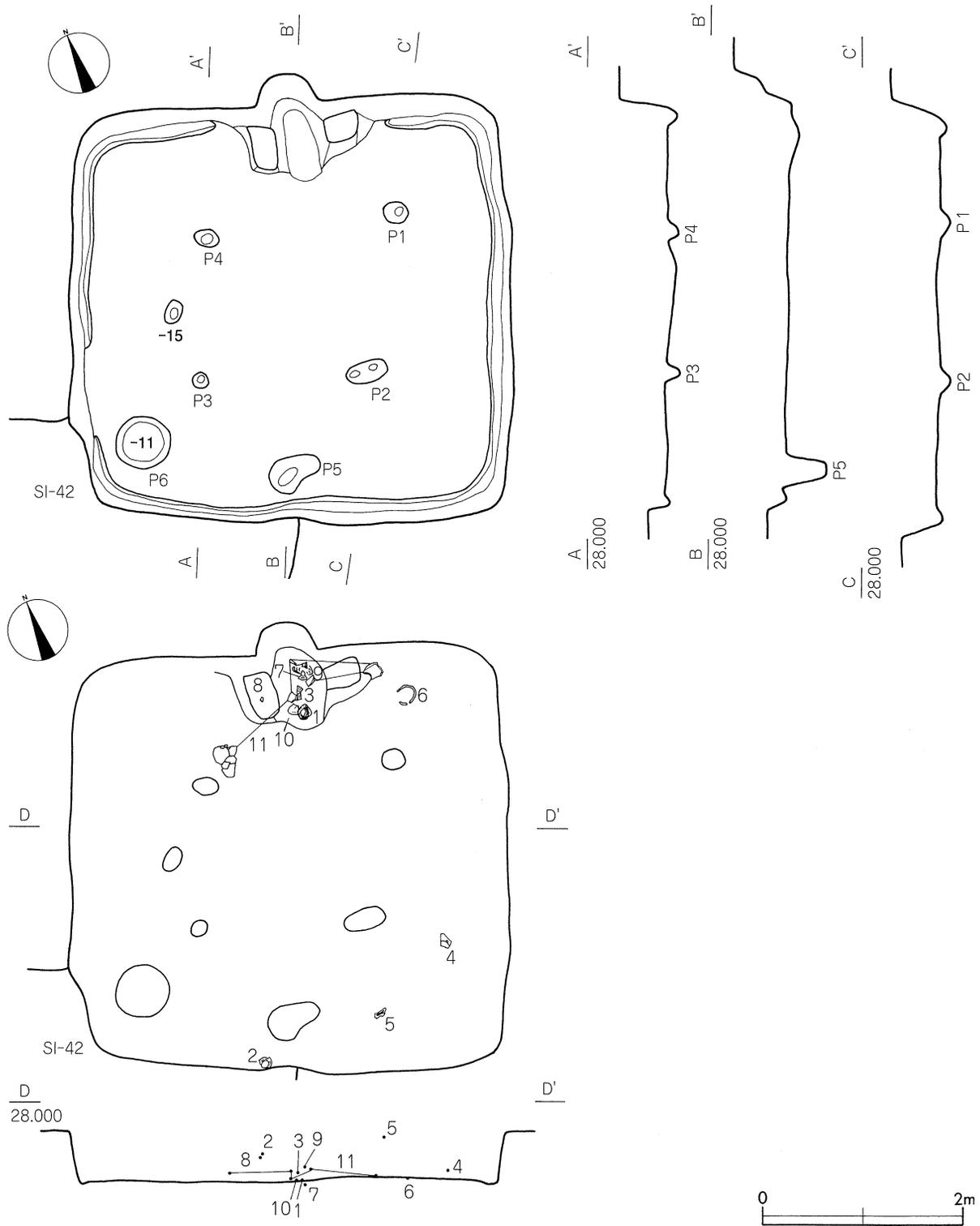
第36号住居跡 [第126・127図、PL.17・68・69]

位置 調査区ほぼ中央P・Q-18・19グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。南西隅で第42号住居跡と重複しており、出土遺物から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.96m、短軸3.76mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約14.9㎡である。

主軸方向 N-22° -E

壁 概ね垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で45cmを測る。壁溝は西壁で一部途切れているが、他は全周している。幅8～16cm、深さ2～8cmを測る。南西隅で重複する第42号住居跡は、確認面から最大30cm程の深さで本住居跡の壁上部を壊していた。

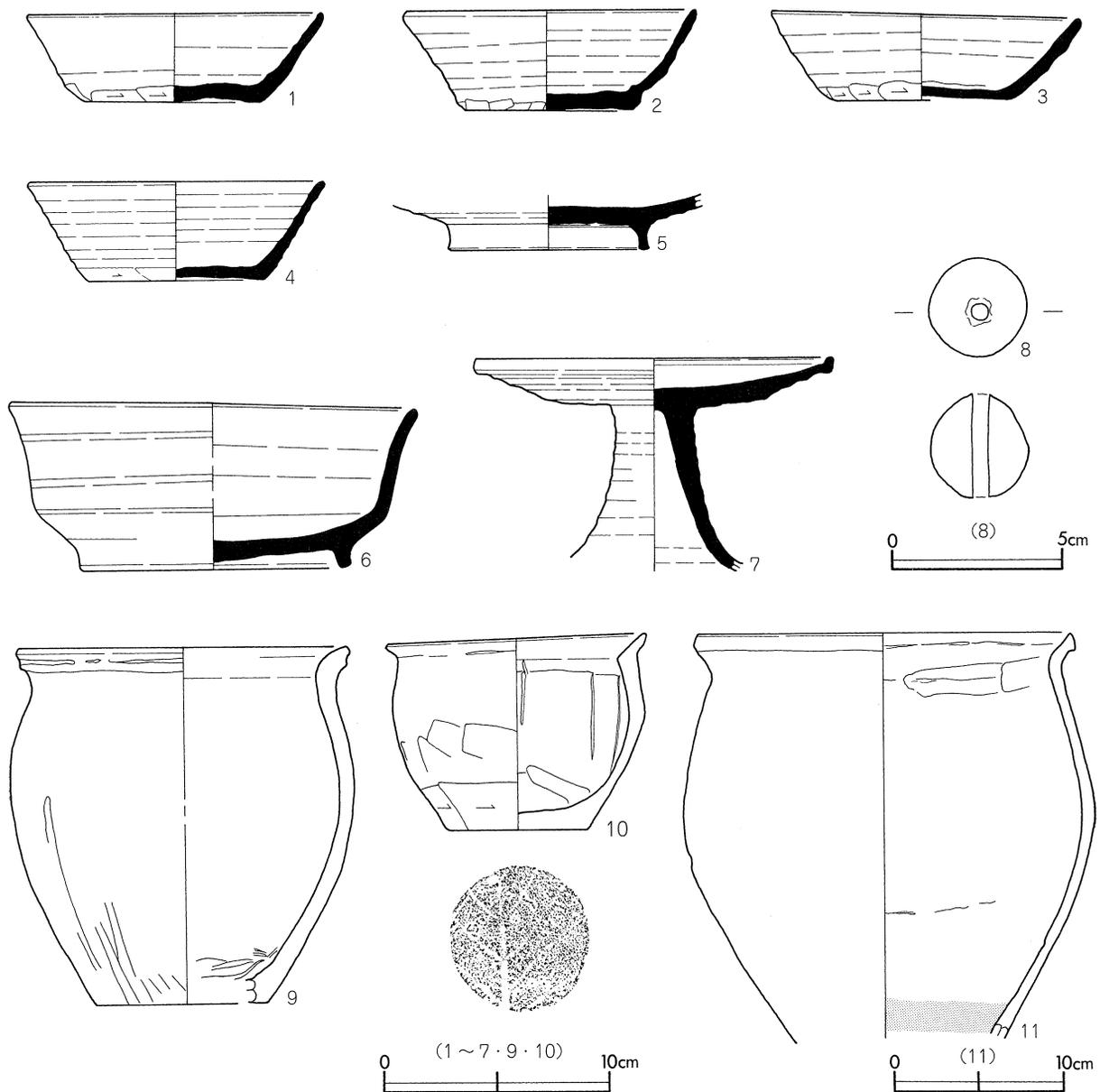


第126図 第36号住居跡・遺物出土状況

床 若干の起伏が認められる。

ピット 7基確認された。配置からP1～4は主柱穴に相当しよう。円形・楕円形を呈し、径14～40cm、深さ8～20cmを測る。P5は入り口部施設に伴うピット、P6は貯蔵穴となろう。P5は楕円形で、径54cm、深さ43cm、P6は円形で径52cm、深さ11cmである。主柱穴としたピットよりP5は著しく深い。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場より50cm程壁外に掘り出して構築される。全長1.04m、燃烧部



第127図 第36号住居跡出土遺物

は床面を6cm程掘り窪め、奥壁にかけて段を有しながら、外傾して立ち上がる。奥壁は被熱により著しく赤化していた。両袖の遺存状態は良好で、焚き口幅は48cmを測る。土器の大半がカマド内より出土している。

遺物 遺物の大半はカマドの燃焼部内に投棄された状態で出土していた。器種構成は、供膳具が坏、高台付坏、高坏、煮沸具は法量の異なる3種の甕である。供膳具はすべて須恵器で、新治窯跡の製品である。No.1～4は比較的底径の大きな坏で、口径はおよそ13～14cm、底径は8cm前後を測る。No.5は高台付盤である。高台は径が大きく、直立している。No.6は口径18cmを超える大型の高台付坏である。底部が大きく体部も深い重厚な器形である。No.7は高坏である。坏部は平坦で、細めの脚部が延びる。No.9～11は土師器の甕で、No.11が一般的な大きさであるのに対してNo.9・10は小型品である。特にNo.10は超小型の甕とでも言うべきサイズであるが、使用痕が確認されることからミニチュアとして作られたものではない。この顕著な法量の差は用途の違いを反映したものであろう。No.8は土玉で、カ

マド袖部の上から発見された。

所見 年代は底径の大きな須恵器坏の形態から、8世紀半ばから後半にかけての時期と推定される。当住居跡が営まれた時期も同様といえる。

第36号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第127図 1	須恵器 坏	口径 13.2 底径 8.0 器高 3.9	底径は大きく、体部は直線的に開く。	底部は切り離した後、一方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面黄灰色 普通 (やや軟質)	カマド燃焼部 完形
第127図 2	須恵器 坏	口径 13.0 底径 7.5 器高 4.4	底部は平坦で体部から僅かに突出する。体部は直線的に開く。	底部は切り離した後、一方向からのヘラ削り、底部周縁に小刻みな手持ちヘラ削りを施す。体部外面にロクロ目を強く残す。	径1mmの長石・石英を少量、微細な長石を多量 内外面灰色 良好	覆土中位 70%
第127図 3	須恵器 坏	口径 13.7 底径 8.1 器高 4.0	底部は径が大きく、体部は直線的に開く。	底部は切り離した後、一方向からのヘラ削りを施す。体部下位に時計回りに手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰黄色 普通 (やや軟質)	カマド燃焼部 90%
第127図 4	須恵器 坏	口径 [13.1] 底径 7.8 器高 4.4	底部はやや内反りの平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は切り離した後、一方向からのヘラ削り、体部下位にストロークの長い手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 不良 (軟質)	覆土下位 50% (底径の 60%残存)
第127図 5	須恵器 高台付盤	高台径 [8.8] 器高 (1.9)	高台は直線的に垂下する。体部は横方向に大きく開く。	底部は切り離した後、回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面灰色 良好	覆土上位 30% (高台部 50%残存)
第127図 6	須恵器 高台付坏	口径 [18.4] 高台径 12.2 器高 6.9	大ぶりの高台付坏。底径および高台径は大きく、高台は低く厚い。体部は強い角度で立ち上がり、口縁部付近で外傾する。	底部は切り離した後、反時計回りの回転ヘラ削り、高台貼付けに伴い、周縁に回転ナデを施す。体部外面にロクロ目を強く残し、内面は滑らかな回転ナデを施す。	微細な長石を微量、白雲母を多量 内外面灰黄色 不良 (軟質)	床直 90%
第127図 7	須恵器 高坏	口径 16.0 器高 9.0	坏部は平たく大きく開き、口唇部は短く直立する。脚部は中空で細く延び、裾部は大きく開く。	坏部外面の基部に反時計回りの回転ヘラ削り、他の部位は回転ナデで滑らかに調整する。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面灰色 普通	カマド燃焼部 80%
第127図 9	土師器 小型甕	口径 14.6 底径 [7.2] 器高 15.6	最大径は体部中位にあり、頸部の縮りは弱い。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に沈線が付く。	体部下位に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面橙褐色 普通	カマド燃焼部 60%
第127図 10	土師器 小型甕	口径 11.6 底径 6.4 器高 8.6	小型甕の中でも特別小さな甕。最大径は体部中位にあり、頸部の縮りは弱い。口縁部は「ハ」字に開く。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、内面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面灰褐色 普通	カマド燃焼部 ほぼ完形 底部に木葉痕
第127図 11	土師器 甕	口径 22.0 器高 (24.1)	最大径は体部中位にあり、肩の張りは弱い。頸部は「く」字に屈曲し、口唇部は素縁に作られる。	体部下位に縦位の磨き、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい褐色 普通	カマド燃焼部 ～覆土中位 60% 内面底部に煤付着

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第127図 8	土製品 土玉	2.9	2.9	3.0	25.4	孔は径5mm、焼成前に棒状の道具を一方向から挿し込み開孔。孔の周囲は未調整。	微細な長石を少量 にぶい黄橙色 普通	カマド袖部直上 完形

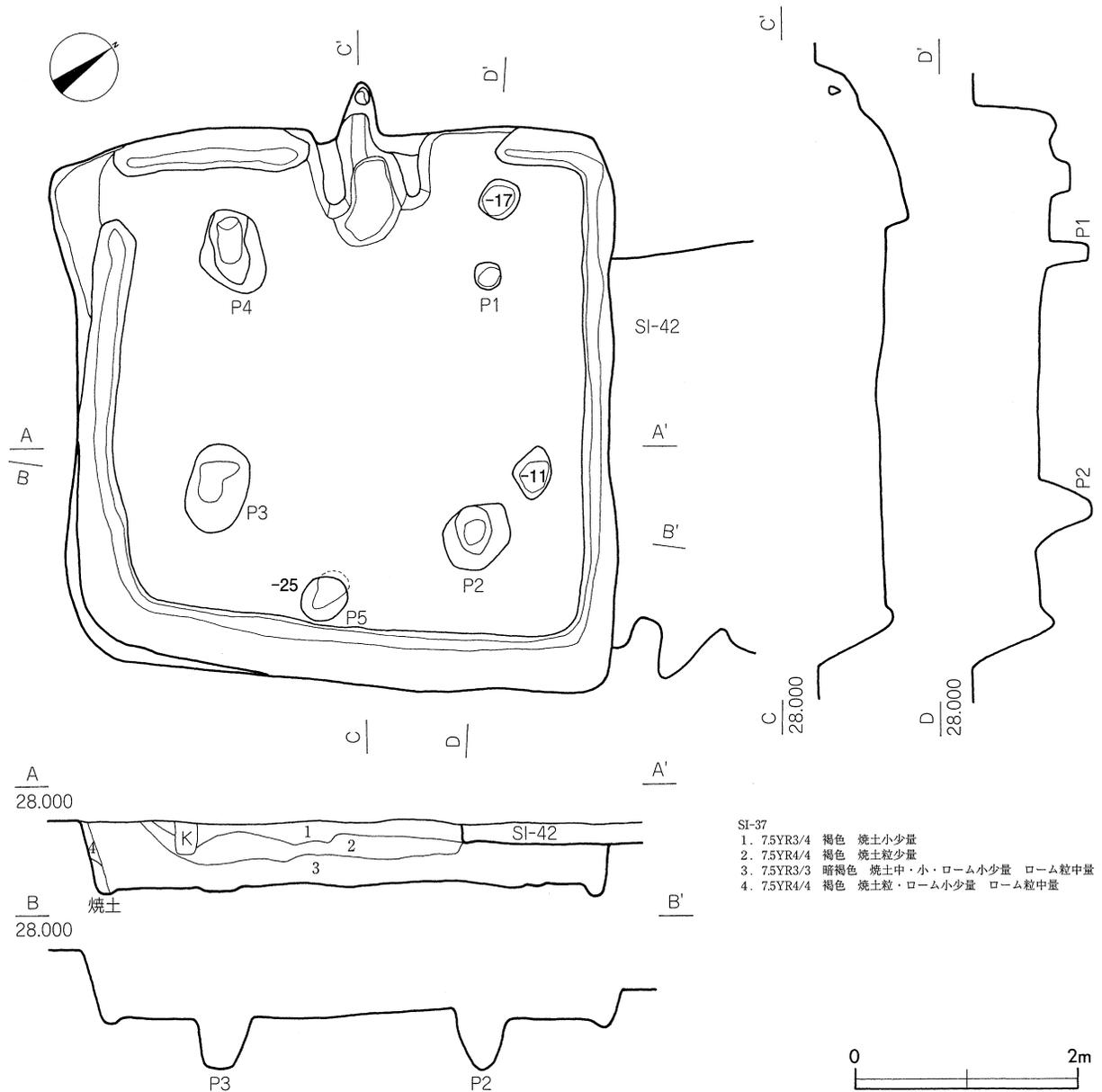
第37号住居跡 [第128～132図、PL.18・69・70]

位置 調査区ほぼ中央N～P-19・20グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。北東側で第42号住居跡と重複しており、土層堆積状態と出土遺物から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸4.40m、短軸4.38mの正方形を呈し、床面積は19.3㎡である。

主軸方向 N-43° -W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 北西から東側の壁は垂直気味に、他は外傾して立ち上がる。確認面からの深さは最深部で58cmを測る。壁溝はカマド付近に一部途切れがみられるもののほぼ全周しており、幅12～20cm、深さ2～10cm



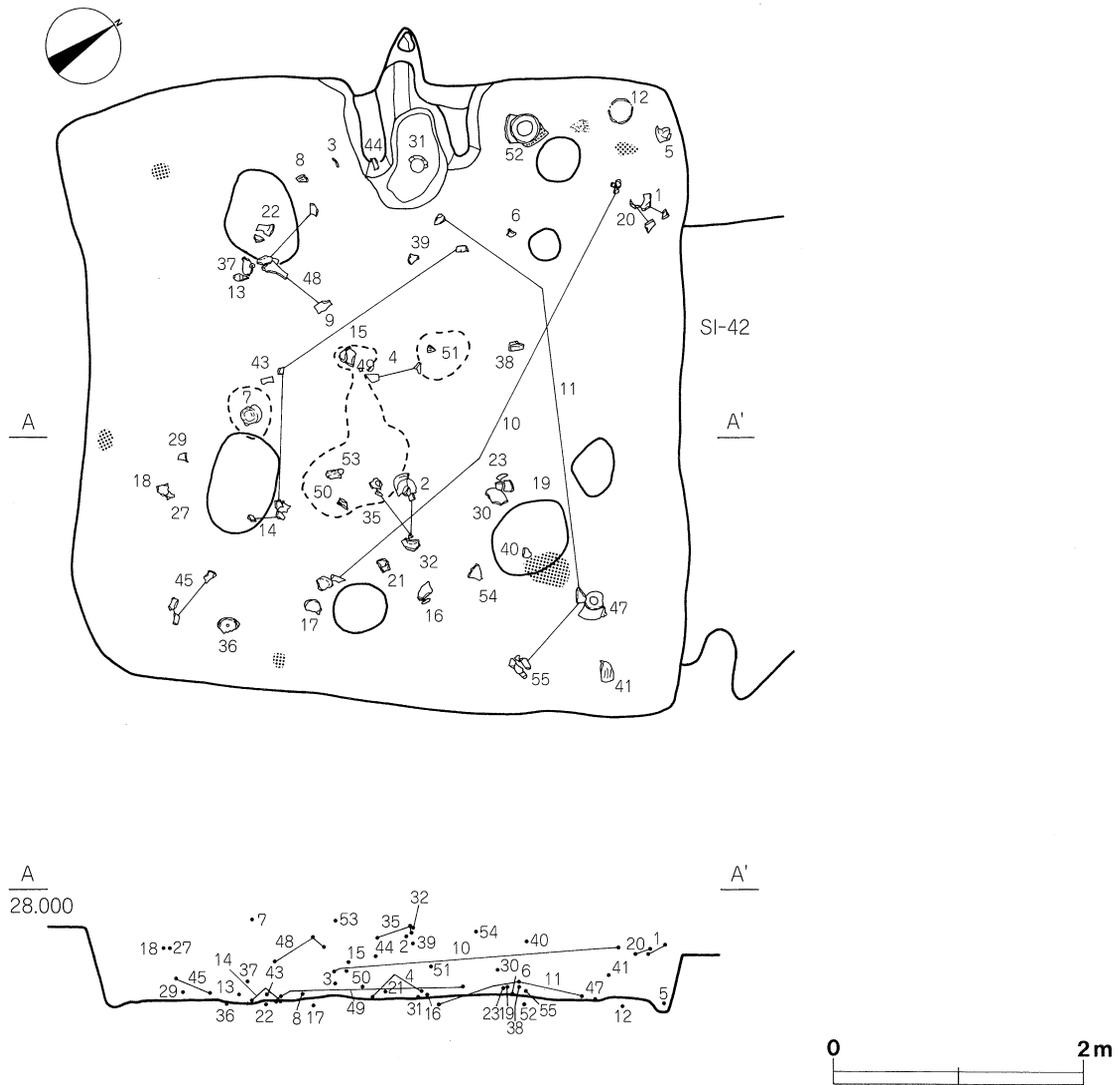
第128図 第37号住居跡

を測る。北東側で第42号住居跡と重複しており、壁の確認面からほぼ20cm下のレベルまで壁を壊されていた。

床 若干の起伏が認められた。中央部の床面直上に灰の範囲が3箇所、P2上面に小規模の焼土範囲が1箇所確認された。第42号住居跡の重複は床面まで達しておらず、遺存状態は良好である。

ピット 7基確認された。P1～4は規模と配置から支柱穴となろう。円形・楕円形を呈し、径24～78cm、深さ35～51cmを測る。P2～4はいずれも開口部が広く、おそらく柱の抜き取りに伴い広がったと考えられる。P5は配置から入り口施設に相当するピットであろう。楕円形を呈し、径42cm、深さ25cmでピット底面は床面中央に向かいオーバーハングしている。他の2基はP1・2に沿うように配されており径36・48cm、深さ11・17cmを測る。補助的な柱と考えられる。

カマド 北西壁ほぼ中央に位置する。壁下場より壁外に50cm程掘り出して構築されており、全長1.46mを測る。燃焼部は床面を20cm程掘り込んでおり、ここから煙道部にかけて緩やかに外傾しながら段を有

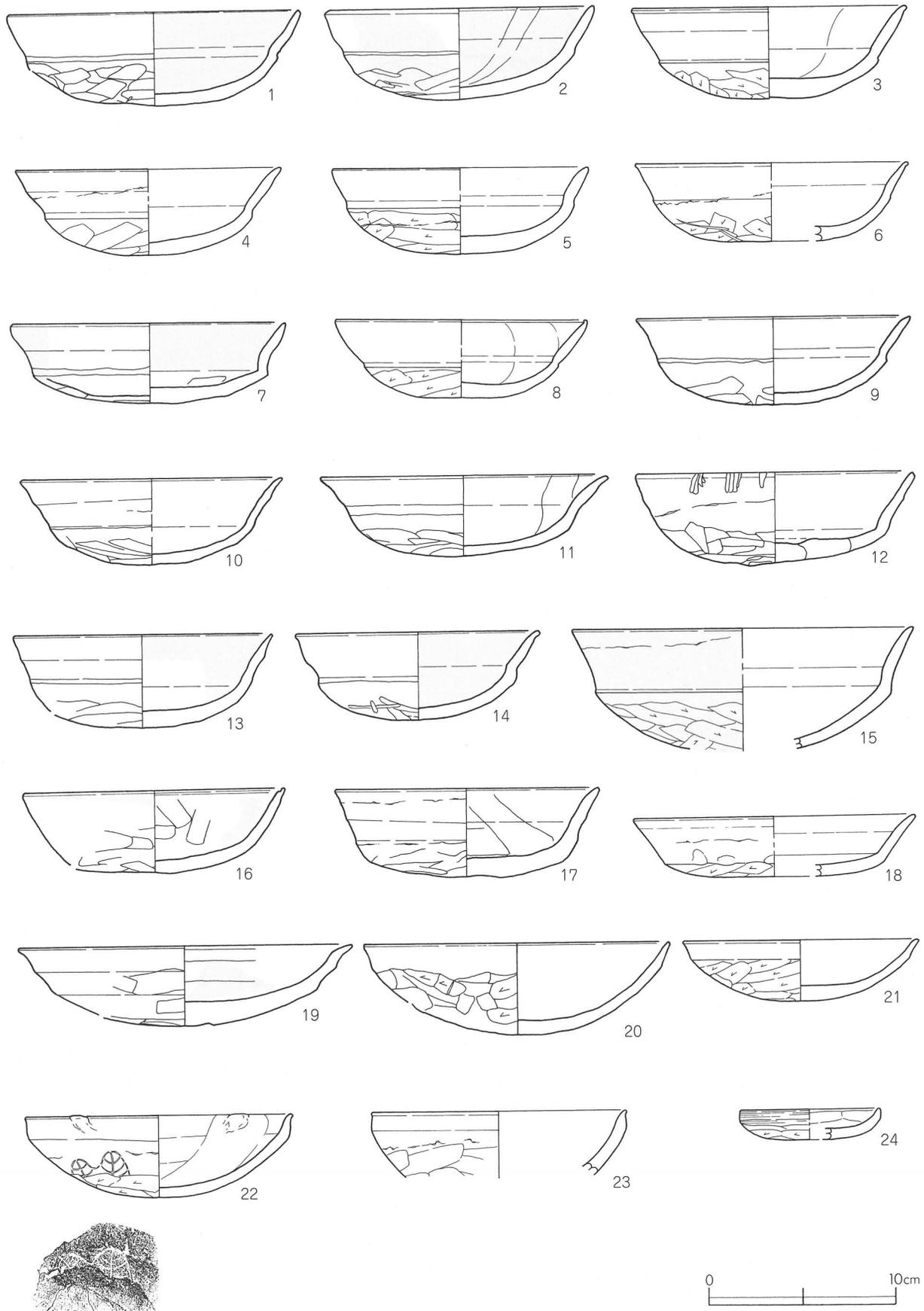


第129図 第37号住居跡遺物出土状況

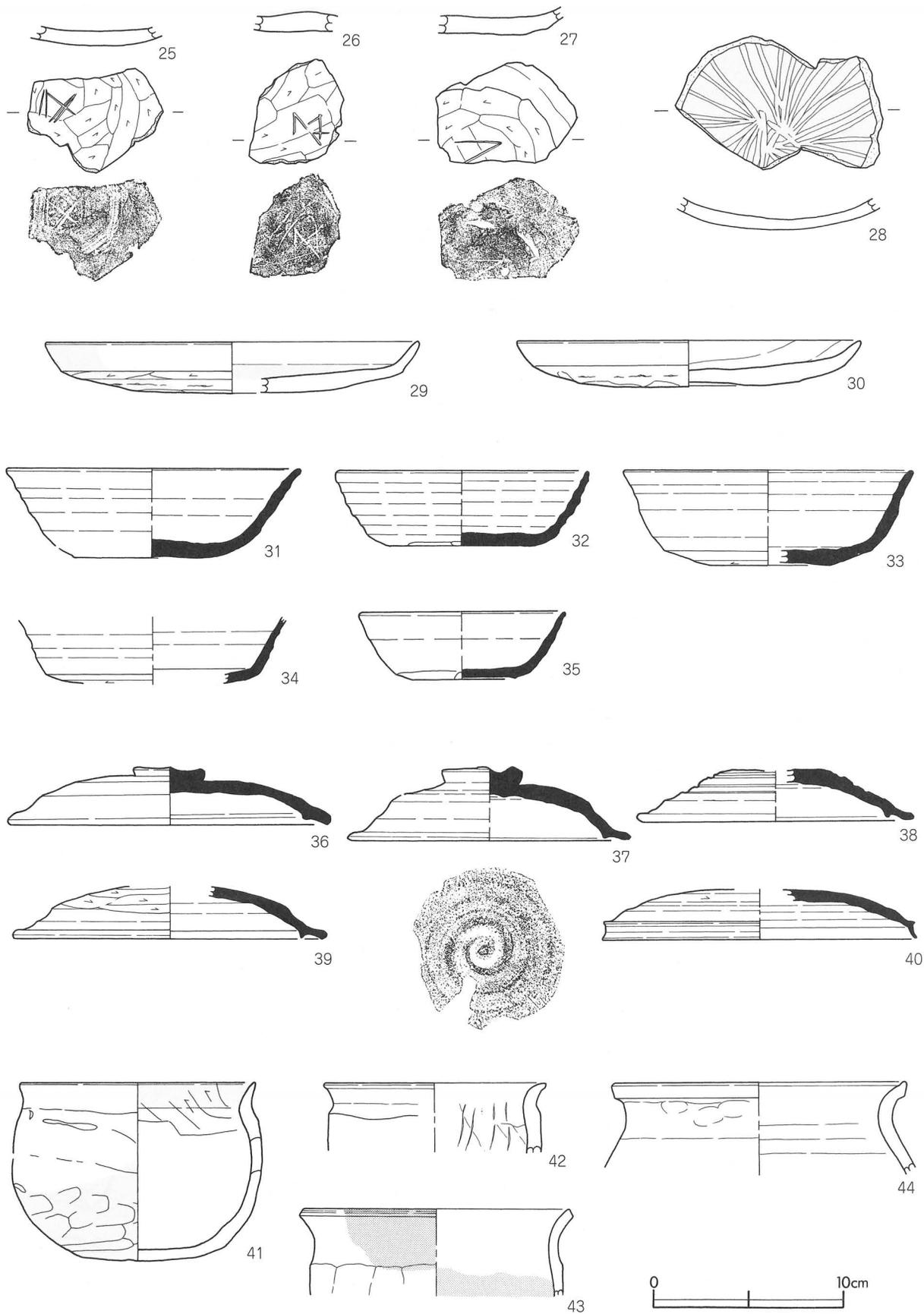
して立ち上がっている。煙道部は径12cm、天井部は幅8cmで残存していた。両袖の遺存状況は良好で、内側が被熱により著しく赤化している。焚き口幅は38cmで燃烧部内と左側袖上、右袖脇から遺物が出土した。特に右袖脇の須恵器甕は床面にめり込むような状態で正位に据えられていた。

覆土 4層に分層された。ローム質土が混入する第3層が床面から覆土上位まで及んでおり、人為的な埋め戻し土と考えられる。

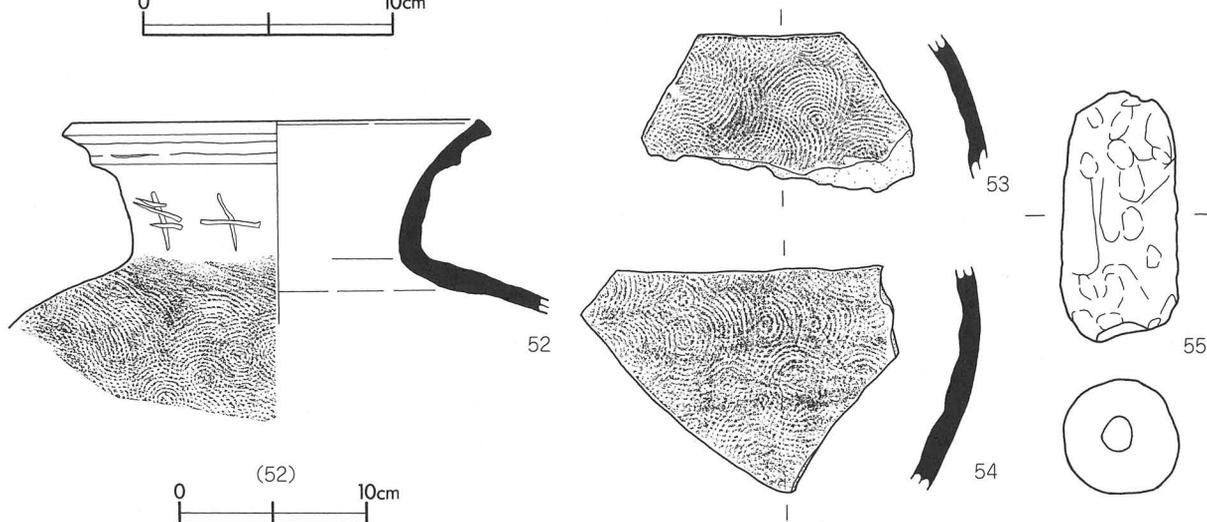
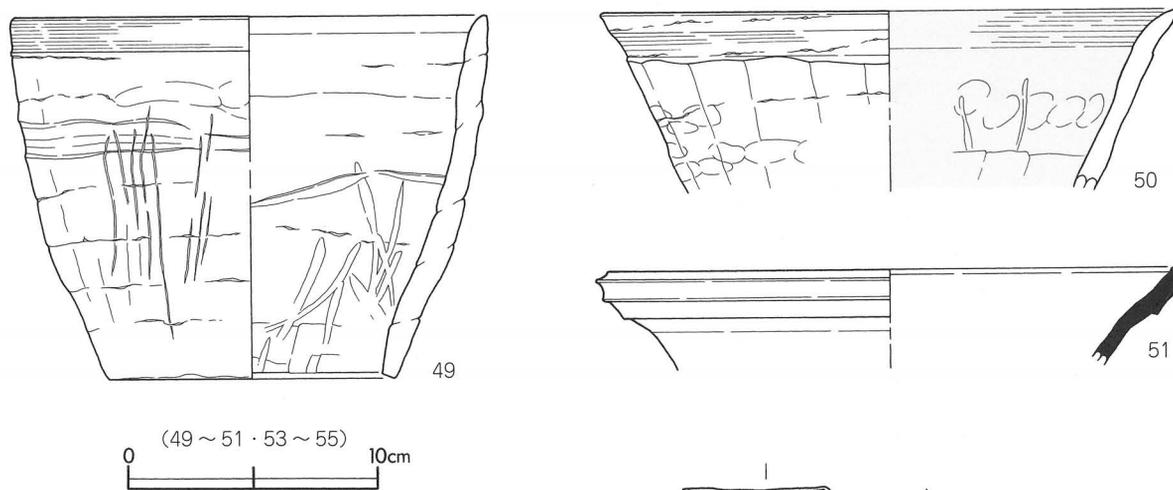
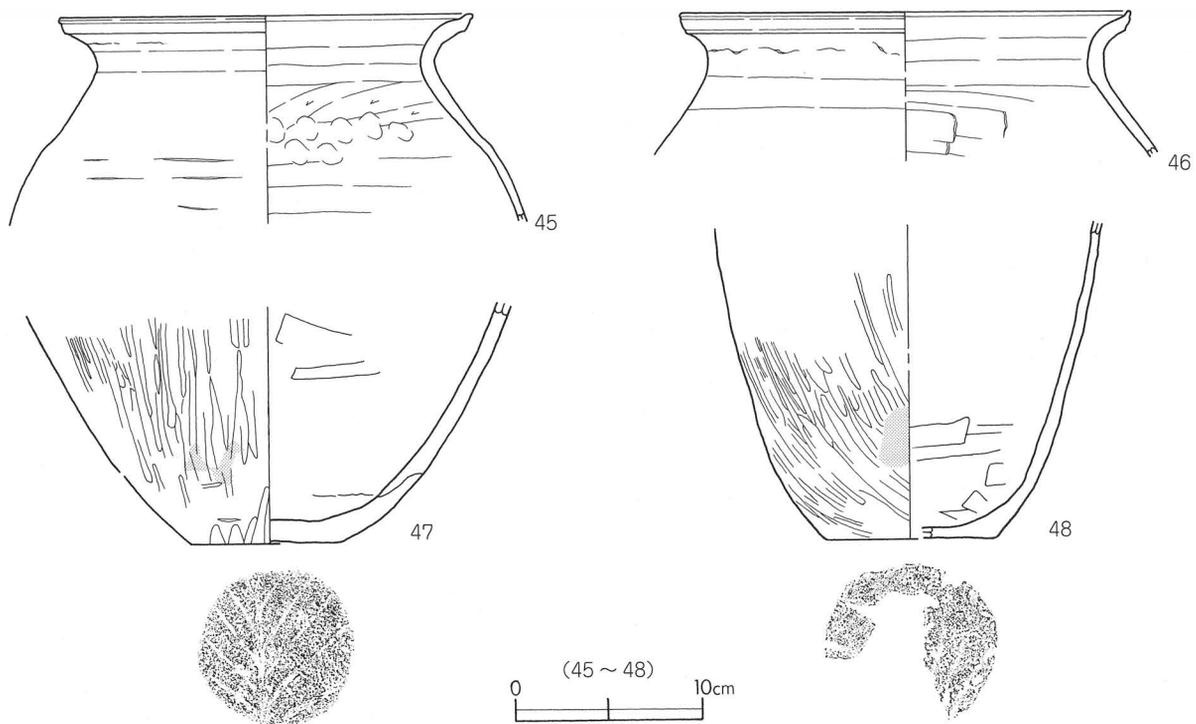
遺物 遺物の量は非常に豊富であった。カマドの燃烧部に坏 (No.31) が置かれていた他、カマド脇に須恵器甕 (No.52) の上部が据えられ器台のように用いられている様子が看取された。さらに多数の土器片が、床面直上から遺構確認面に至る覆土中に発見されている。この覆土は均一的な黒色土であり、人為的に埋め戻されたか、あるいは短期間に堆積したものと考えられ、そこに含まれる土器群も出土位置の上下にかかわらず類似した様相を呈している。よって、これら全体が短い時間幅に収まる土器のセットであると考えてよいと思われる。器種構成は、供膳具では土師器・須恵器の坏、土師器盤、須恵器蓋、土師器鉢ないし甑の4種、煮沸具では大小2法量の土師器甕、貯蔵具としては須恵器の大甕（上部片を器台に転用）などがある。坏における土師器・須恵器の割合は、およそ6対1で土師器が圧倒的に多い。



第130图 第37号住居跡出土遺物 (1)



第131图 第37号住居跡出土遺物 (2)



第132图 第37号住居跡出土遺物 (3)

No.1～28は土師器坏である。ほとんどが丸底であるが、底部に強いヘラ削りを施し、平坦化しているものもみられる。形態的には大きく分けて次の4種が確認される。

①体部と口縁部の境に小さめの段が付くもの (No.1～9・14・15)。口縁部と体部の高さの比率は1対1か、もしくはやや口縁部の方が大きい。口径は14.5～15cm台のものを一般的なサイズとして、13cm台の小型品 (No.8・14) と18cm台の大型品 (No.15) の3法量が確認される。黒色処理を施すものとそうでないものが存在するが、後者の方が一般的である。

②体部と口縁部の境にごく形骸化した段もしくは稜が付き、口縁部の高さに対する体部の割合が著しく小さいもの (No.10～13・16～18)。口縁部が器高の大半を占め、器形全体が箱形に近づくことで、体部は扁平化して底部の一部となるものもある (No.16～18)。①と②は中間的なものが若干存在するが、概して平底化への過渡的な段階を示すものとして括られる。

③体部と口縁部の境は不明瞭で、器形全体が浅めの半球形を呈するもの (No.19～21)。底部は丸底を堅持し、②とは対照的に口縁部の割合が小さい。口径は16～17cmのやや大きめなもの (No.19・20)、12cm台の小さなもの (No.21) の2法量が確認できる。

④器形は③とほぼ同じだが、口縁部が稜をもって直立し、口唇部を小さく外反させるもの (No.22・23)。口径は14cm前後である。

上記の4種の割合は、①が約5割を占め、②が3割、③と④は合わせて2割程度である。製作・調整技法の上で各々に特別な違いはなく、粘土紐を巻き上げて成形し、底部から体部にかけてはヘラ削り、口縁部から内面にかけては指頭による回転ナデの器面調整を行っている。なお、No.22の体部には、成形時に用いた柏葉の圧痕が、ヘラ削りされることなく残されていた。また、No.25～27の底部片には、「Z」ないし「×」字状の記号らしきものがヘラ書きされていた。これは焼成前に書かれたものであるが、さらに観察すると記号の一部がヘラ削りによって削り取られていることが分かる。従って、この記号らしきものは坏の製作途中、器面調整の直前に付けられたものとなる。須恵器にみられるヘラ記号は製作が済んだ後に付けられるのが一般的であり、これとは性格が異なるものと思われる。土師器坏の製作に関わる何らかの符牒であろうが、類例が望まれるところである。

No.24はミニチュアの坏、No.28は一般的な坏の底部片であるが、内面に放射状の暗文と黒色処理が施されている。No.29・30は土師器の盤である。口径が18cmを超える大型品で、底部は丸底の面影を残している。製作・調整技法は坏と全く同じである。

No.31～35は須恵器の坏である。すべて平底で、No.33や34は本来の底部の周縁に二次底部面を有する。この二次底部面は、丸底から平底に移行する際にみられるもので、底部から体部に至る部位が横方向に大きく張り出すために形成される、過渡的な現象である。口径は13.5～15cm程度のもので、11cm以下の2法量が確認される。No.36～40は須恵器の蓋である。口縁部内面にかえりを有するものと、端部を折り曲げるものの2種がみられ、後者は小破片まで精査したが1例しか確認されなかった。形態的には体部が甲高で、つまみの径が大きいものが主体である。口縁部の内面に取付けたかえりは形骸化の途上にあり、形態的には新治窯跡群の一町田窯段階に相当する。

No.41～48は土師器の甕である。法量は多種あり、No.41～43は最も小さな甕、No.44はそれよりも若干大きなもの、そしてNo.45～48は煮沸具としては一般的な大きさの甕である。法量の違いと共に形態も若干異なっており、概して小型のものは口縁部が短く「ハ」字に開くのに対して、一般的な大きさのものは「く」字に大きく外反するようである。No.49は土師器の甑である。短胴で円筒形を呈する形

態は非常に特異であり、焼成は甘く脆い。小型の甕に取り付けて使ったものであろうか。No.50は土師器の鉢ないし甕である。底部が遺存していないため両者の判別は難しいが、内面に黒色処理を施している点で鉢の可能性が高いと思われる。No.51～54は須恵器の甕である。No.52の甕は、口縁部と体部の一部が全周にわたって遺存しており、カマドの脇に据えられていた。土師器甕などを立たせておくための器台にしたのであろう。口縁部には「十」「卍」のヘラ書が焼成前に行われている。ちなみに、「卍」の字画を観察すると、横棒を先に書いてから縦棒を三本書き込んでいる書き順が窺われた。字儀は不明であるが、甕の価格を表す可能性も想定できるかもしれない。体部外面には、No.53・54の破片と同様に同心円の叩き目が施されている。No.55は手捏ね製の円筒形土錘である。

所見 遺物の年代については、まず、須恵器蓋がかえりを有すること、須恵器坏が二次底部面を有する平底であること、などから8世紀前半までには収まるものと考えられる。特に蓋のかえりは退化傾向がみられ、新治窯跡一町田窯段階に相当する。土師器の坏は、②と分類した口縁部の割合が大きく、底部が平底化しつつある器種が、第6号住居跡のものと同通している。第6号住居跡から発見された和同開珎により、8世紀前葉頃に充てることも可能であろう。ただし、当住居跡の土師器坏は、②の形態よりも丸底の意識の強い①の坏が多くを占めている。この点においては、第6号住居跡よりも先行する要素とも受け取れよう。その一方で、供膳具における須恵器と土師器の割合は、第6号住居跡よりも当住居跡の方が須恵器の比率が高く、やや後出的である。これら矛盾する状況があるものの、大方において7世紀代に遡るほどの乖離は見られず、結果として8世紀前葉の中で収まるものと考えて大過はないであろう。住居跡が営まれた時期も同様と考える。

第37号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	土師器 坏	口径 [15.6] 器高 4.9	底部は丸底で、体部は内湾しながら浅めに開く。体部と口縁部の境に小さな段が付き、口縁部は直線的に開く。	底部に二方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 外面にぶい橙色、内面 黒色 普通	覆土上位 50% 内面黒色処理
第130図 2	土師器 坏	口径 14.4 器高 4.8	底部は丸底で、体部は内湾しながら浅めに開く。体部と口縁部の境に小さな段が付き、口縁部は直線的に開く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中 量、白雲母を微量 内外面赤褐色と黒色 普通	覆土上位 80% 内外面黒色処理 (外面部分的)
第130図 3	土師器 坏	口径 [14.4] 器高 4.8	底部は丸底で、体部は内湾しながら浅めに開く。体部と口縁部の境に小さな段が付き、口縁部は直線的に開き、口唇部は僅かに外反する。	底部およびその周縁に不定方向の手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を少 量 内外面橙色 良好	覆土下位 50% (口径の 50%残存)
第130図 4	土師器 坏	口径 [14.0] 器高 4.5	底部は丸底で体部はやや径が小さい。体部と口縁部の境に小さな段が付き、口縁部は直線的に開く。	底部および体部に多方向からのヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁部に粘土紐の積み上げ痕を残す。	微細な長石・石英を中 量 内外面橙色と暗褐色 良好	床直～覆土下位 60% (口径は 完存、口縁は 30%残存)
第130図 5	土師器 坏	口径 [13.4] 器高 4.5	底部は丸底で、体部は浅めに開く。体部と口縁部の境に段が付き、口縁部は中位が僅かに膨らみ短めに開く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部に粘土紐の積み上げ痕を残す。	微細な長石・石英を中 量 外面暗褐色、内面褐色 不良	北隔壁溝内 50% (底部は 完存) 全体に歪み
第130図 6	土師器 坏	口径 [14.4] 器高 4.1	底部は小さな平底を呈するとみられる。体部と口縁部の境には器面調整の違いによるごく微かな段が付く。口縁部は直線的に開き、口唇部が小さく外反する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少 量 内外面褐色 良好	床直 25% (口径の 25%残存)
第130図 7	土師器 坏	口径 14.7 器高 4.2	底部は平坦化した丸底で、体部は浅めに開く。体部と口縁部の境に小さな段が付き、口縁部は強い角度で立ち上がり、中位で外傾する。	底部に二方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中 量 内外面にぶい橙色 普通	覆土上位 60% 内外面黒色処理 (部分的)
第130図 8	土師器 坏	口径 [13.2] 器高 4.1	やや小型の坏。底部は小さな平坦面をもつ。体部は径が小さく丸をもつて開き、口縁部との境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、口唇部が小さく内傾する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中 量、金雲母を微量 内外面暗灰褐色 普通	床直 30% (体部径 の40%残存)
第130図 9	土師器 坏	口径 14.6 器高 4.7	底部は丸底で、体部は内湾しながら浅めに開く。体部と口縁部の境に小さな段が付き、口縁部は直線的に開く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面褐色 普通	床直～覆土下 位 80%

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 10	土師器 坏	口径 [14.0] 器高 4.5	底部は丸底で、体部と口縁部の境にごく僅かな段が付く。口縁部は直線的に開く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の軽いヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面におい橙色 普通	覆土中～上位 50%
第130図 11	土師器 坏	口径 15.3 器高 4.2	底部は丸底で、体部は内湾しながら浅く開く。体部と口縁部の境に小さな段が付く、口縁部は中位が僅かに膨らむ。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面におい黄橙色 普通	床直～覆土下 位 50%
第130図 12	土師器 坏	口径 14.8 器高 4.9	底部は丸底で、体部は浅めに開く。体部と口縁部の境に稜が付く、口縁部は直線的に開く。内面に粘土紐の隆帯が残り、顕著な凹凸がみられる。	底部に一方方向からの乱雑なヘラ削り、体部に横位の小刻みなヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英をごく 微量 内外面浅黄橙色 良好	壁溝内 ほぼ完形 口縁部にヘラ 痕跡
第130図 13	土師器 坏	口径 [13.8] 器高 4.9	底部は丸底で、体部と口縁部の境にごく僅かな段が付く。口縁部は直線的に開く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 外面におい赤褐色、内 面暗赤褐色 普通	覆土下位 50% 内面黒色処理 (部分的)
第130図 14	土師器 坏	口径 12.8 器高 4.6	やや小型の坏。底部は丸底で、体部の立ち上がりは強め。体部と口縁部の境に小さな段が付く、口縁部は直線的に開き、口唇部は外反する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位の軽いヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 外面におい褐色、内面 黒褐色 良好	床直 70% 底部に篠竹の 圧痕 内面黒色処理
第130図 15	土師器 坏	口径 [18.0] 器高 (6.3)	やや大型の坏。底部は丸底とみられ、体部は深みをもって開く。口縁部との境に小さな段が付く、口縁部は強めに立ち上がり、中位から外傾する。	体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁部に粘土紐の積み上げ痕を残す。	微細な長石・石英を少量 内面黒褐色 内面橙色 良好	覆土中位 50% (体部径 の30%残存) 外面黒色処理
第130図 16	土師器 坏	口径 [16.0] 器高 4.3	底部は丸底で、体部は内湾しながら強めの角度で立ち上がる。体部と口縁部の間に境や稜がなく、口唇部内面に浅い沈線が付く。	底部に不定方向のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの褐色チャート を多量 内外面明赤褐色 不良	床直 50% 内外面黒色処理 (部分的)
第130図 17	土師器 坏	口径 14.1 器高 4.6	器壁が厚く、重い。底部は平坦化の進んだ丸底で、体部は浅く開く。体部と口縁部の境にごく小さな段が付く、口縁部は強い角度で立ち上がる。	底部中央は未調整で、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削り、体部に横位の軽いヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面浅黄橙色 良好	床直 90%
第130図 18	土師器 坏	口径 [14.8] 器高 3.2	底部は平底で、体部は二次底部状に平坦化している。口縁部は緩めの角度で直線的に開く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面明褐色 普通	覆土上位 20% (口径の 20%残存)
第130図 19	土師器 坏	口径 [17.8] 器高 4.2	底部は丸底で、体部は内湾しながら皿状に浅く開く。底部と口縁部の境にかすかな稜が付く、口縁部は内湾しながら浅めに開き、口唇部は外反する。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面におい橙色 普通	覆土下位 40% 底部に篠竹数 本の圧痕 内面黒色処理 (部分的)
第130図 20	土師器 坏	口径 [16.4] 器高 4.8	底部は丸底で、体部は内湾しながら浅く開く。体部と口縁部の境にかすかな稜が付く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面褐色 普通	覆土上位 50%
第130図 21	土師器 坏	口径 [12.4] 器高 3.2	全体的に丸みを帯びた浅めの坏。底部は丸底で、体部は大きく開き、口縁部との境に僅かな稜が付く。口縁部はごく短く開く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、 骨針状物質を微量 内外面淡褐色 普通 (やや軟質)	覆土下位 40% (口径の 40%残存)
第130図 22	土師器 坏	口径 [14.0] 器高 4.3	底部は丸底で、体部は深めに大きく開き、口縁部との境に稜が付く。口縁部はごく短く直立し、口唇部は小さく外反する。	底部は一方方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口唇部に粘土粒の貼り付けあり。	微細な長石・石英を中 量、白雲母を少量 内外面褐色 普通 (やや良好)	床直 50% (口径の 45%残存) 体部下位に柏葉 の圧痕
第130図 23	土師器 坏	口径 [13.4] 器高 (3.4)	小型の坏。底部は丸底とみられ、体部は深めに開き、口縁部との境に稜が付く。口縁部はごく短く直立し、口唇部は小さく外反する。	体部に方向不明の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を 少量、非常に緻密な胎土 内外面明灰褐色 不良 (軟質)	覆土下位 20% (口径の 30%残存)
第130図 24	土師器 小型坏	口径 [7.4] 器高 1.6	ミニチュアの坏か。底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に甘い稜が付く。口縁部は短く直立し、断面三角形を呈する。	底部に一方方向のヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に粗い指ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面におい橙色、外面 黒褐色 普通	覆土 30% (口径の 30%残存)
第131図 25	土師器 坏	破片長 (7.0)	坏の底部片。丸底を呈する。	底部に反時計回りの手持ちヘラ削り、内面に回転ナデを施す。ヘラ記号は焼成前、ヘラ削り調整の前に刻む。	微細な長石・石英を少 量 内外面灰褐色 普通	覆土 細片 底部に 「Z」字ないし「×」 のヘラ記号
第131図 26	土師器 坏	破片長 (5.2)	坏の底部片。平底ないし平坦化の進んだ丸底と思われる。	底部に一方方向からのヘラ削り、周縁に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。ヘラ記号は焼成前、ヘラ削り調整の前に刻む。	ごく微細な長石・石英 を微量 内外面暗褐色 普通	覆土 細片 底部に「Z」 字ないし「×」 のヘラ記号 内面黒色処理
第131図 27	土師器 坏	破片長 (7.3)	坏の底部片。丸底を呈する。	底部に一方方向からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。ヘラ記号は焼成前、ヘラ削り調整の前に刻む。	微細な長石を微量 内外面褐色 良好	覆土上位 細片 底部に「Z」 字のヘラ記号

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第131図 28	土師器 環	破片長(10.5)	環の底部片。丸底を呈する。	底部に一方方向からのヘラ削りと黒色処理、内面に放射状の暗文を施す。	微細な長石・石英を少量 外面黒色、内面黒褐色 普通	覆土 20% (底部完 存) 内面黒色処理
第131図 29	土師器 盤	口径 [19.6] 器高 (2.7)	底部は僅かな丸みを帯び、体部は横方向に大きく開く。口縁部は緩やかな角度を屈曲して直線的に立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。体部に粘土紐の積み上げ痕を残す。	微細な長石・石英を多量 内外面橙色 良好	覆土下位 20% (口径の 25% 残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第131図 30	土師器 盤	口径 [18.0] 器高 (2.4)	底部中央は僅かな上げ底を呈し、体部は丸みを帯びて大きく開く。口縁部は緩やかな角度で短く立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部上位は未調整、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 良好	覆土中位 60%
第131図 31	須恵器 環	口径 [15.7] 底径 8.1 器高 4.7	底部は平底で周縁部は丸みを帯びる。体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は切り離し後、周縁部と共に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を多量 内外面灰黄色 普通 (やや軟質)	カマド燃焼部 40% (底部は 完存)
第131図 32	須恵器 環	口径 [13.4] 底径 [7.6] 器高 3.9	底部は平底で周縁部は丸みを帯びる。体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は切り離し後、一方方向からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部内外面に間隔の狭いロクロ目を残す。	微細な長石・石英を微 量、白雲母を多量 内外面灰白色 普通 (やや軟質)	覆土上位 30% (口径の 30% 残存)
第131図 33	須恵器 環	口径 [15.2] 底径 [6.4] 器高 4.9	底部は平底で、周縁に二次底部面をもつ。体部は強い角度で深めに立ち上がる。	底部は切り離し後、二次底部面と共に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を多量 内外面灰色 普通	覆土 30% (底径は 60%、口径は 20% 残存)
第131図 34	須恵器 環	底径 [9.6] 器高 (3.3)	底部は平底で、周縁に二次底部面をもつ。体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、二次底部面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 少量、白雲母を多量 内外面灰白色 不良 (軟質)	覆土 10% (底径の 20% 残存)
第131図 35	須恵器 環	口径 [11.0] 底径 5.6 器高 3.5	小型の環。底部は径の小さな平底で、体部は強い角度で立ち上がる。	底部は切り離し後、一方方向からの強いヘラ削り、周縁に手持ちヘラ削り、体部は内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少 量、白雲母を中量 内外面暗青灰色 良好	覆土上位 40% (口径は 30%、底径は 80% 残存)
第131図 36	須恵器 蓋	口径 17.0 器高 3.2 つまみ径3.8	体部は扁平で僅かに丸みを帯びて開き、角度を変えて口縁が開く。内面に小さなかえりが付く。つまみは径が大きく扁平を呈する。	体部外面上位に反時計回りの回転ヘラ削り、その後全面的に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 多量、白雲母を少量 内外面にぶい赤褐色 良好	床直 90%
第131図 37	須恵器 蓋	口径 [14.8] 器高 3.8 つまみ径3.8	体部は甲高で、口縁部は緩やかに外反する。内面に摘み上げる程度の小さなかえりが付く。つまみは径が大きく扁平を呈する。	体部外面上位に反時計回りの回転ヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 多量、白雲母を少量 内外面灰色 良好	覆土中位 60%
第131図 38	須恵器 蓋	口径 [14.6] 器高 (2.7)	体部は直線的に開き、やや甲高を呈する。口縁部は緩やかに外反し、内側に小さなかえりを付ける。	体部外面上位に反時計回りの回転ヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を多量 内外面灰白色 普通 (軟質)	覆土下位 50%
第131図 39	須恵器 蓋	口径 [16.4] 器高 (2.7)	体部は丸みを帯びて開き、やや甲高を呈する。口縁部は緩やかに外反し、内側に端整なかえりを付ける。	体部外面上位に反時計回りの回転ヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 少量、白雲母を多量 内外面灰黄色 普通	覆土上位 20% (口径の 30% 残存)
第131図 40	須恵器 蓋	口径 [16.4] 器高 (2.6)	体部は丸みをもって開き、口縁部は強い稜をもって垂下する。	体部外面上位に反時計回りの回転ヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 多量 内外面灰色 良好	覆土上位 20% (口径の 30% 残存)
第131図 41	土師器 小型甕	口径 [12.4] 器高 9.3	底部は丸底で、体部は球形を呈する。最大径は体部中位にあり、頸部の締りは弱く、口縁部は「く」字に屈曲する。	底部に一方方向からのヘラ削り、周縁に手持ちヘラ削り、体部に横位のヘラナデを施す。口縁部に回転ナデ、内面に不定方向のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を中量 外面明赤褐色、内面灰 赤色 普通	覆土中位70% 底部に篠竹の 圧痕 口縁部内外面 に黒色処理(部 分的)
第131図 42	土師器 小型甕	口径 [11.6] 器高 (3.6)	小型の中でも最も小さな甕。体部上位は円筒状を呈し、頸部の締りは弱い。口縁部は弱く外反する。	体部外面に縦位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に縦位のヘラナデを施す。	ごく微細な長石・石英 を少量 内外面灰褐色 普通	覆土 20% (口径の 20% 残存)
第131図 43	土師器 小型甕	口径 [13.8] 器高 (4.4)	体部上位は円筒状を呈し、頸部の締りは非常に弱い。口縁部は緩く外反しながら高く立ち上がる。	体部外面に縦位のヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 多量 内外面褐色 普通	覆土下位 20% (口径の 50% 残存) 内外面煤付着
第131図 44	土師器 小型甕	口径 [15.0] 器高 (4.5)	小型甕の中でも比較的大きい甕。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は短く直立する。	内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を 中量、白雲母を少量 内外面にぶい褐色 普通	カマド袖部 細片 (口径の 25% 残存)
第132図 45	土師器 甕	口径 [21.8] 器高 (11.0)	頸部は強く引き締まり、口縁部は「つ」字に外反する。口唇部は短く外傾しながら立ち上がる。	体部外面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデと指頭圧痕が付く。	径1mmの長石・石英、 白雲母を多量 内外面橙色 普通	覆土下～中位 細片 (頸部径 の20% 残存)

図版番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 46	土師器 甕	口径 [23.8] 器高 (7.5)	頸部は強く引き締まり、口縁部は「つ」字に外反する。口唇部は短く立ち上がる。	頸部から口縁部にかけて回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 外面明橙色、内面にぶい褐色 普通	覆土 細片（口径の30%残存）
第132図 47	土師器 甕	底径 8.3 器高 (12.4)	器壁が厚く、重い。底部は平底で、体部は大きく開く。	体部外面に縦位の細かな磨き、内面に指頭とヘラによる横位のナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面橙色 良好	床直 30%（底部は完存） 底部に木葉痕 体部下半に煤付着
第132図 48	土師器 甕	底径 9.0 器高 (16.6)	やや細身の器形を呈する。底部は径が大きく、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	体部外面に縦・斜位の細かな磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 外面灰黄褐色、内面にぶい黄褐色 普通	覆土中位～上位 20%（底部は70%残存） 底部に木葉痕 体部下半に煤付着
第132図 49	土師器 甕	口径 [18.8] 底径 [11.6] 器高 14.4	円筒形で丈の短い甕。底部から口縁部にかけて僅かな丸みをもつ。口縁部は素縁で直立する。	全体的に粗い作りでもろい。体部外面に軽く縦位のヘラナデ、体部上位に横一条の指ナデ、口縁部に回転ナデを施す。内面に縦位の乱雑な磨きを施す。	ごく微細な長石・石英、金雲母を微量 内外面淡い黒褐色 不良（軟質）	覆土下位 20%（体部径の30%残存）
第132図 50	土師器 鉢ないし 甕	口径 [23.0] 器高 (7.1)	体部から口縁部にかけて直線的に「ハ」字に開く。	体部外面に縦位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面暗灰色、内面黒色 普通	覆土中位 10%（口径の30%残存） 内面黒色処理
第132図 51	須恵器 甕	口径 [22.4] 器高 (3.9)	口縁部は「ハ」字に開き、口唇部は段と稜をもって肥厚する。	全面的に回転ナデを施し、端整に整える。	微細な長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面暗灰色 不良（軟質）	覆土上位 細片（口径の20%残存）
第132図 52	須恵器 甕	口径 21.8 器高 (10.8)	大型の甕。体部は大きく膨らむとみられ、頸部は強く締る。口縁部はラッパ状に開き、外面に一条の突帯が付く。口唇部は断面三角形を呈する。	体部外面に同心円の叩き目、内面に楕円径の押さえ跡と指頭圧痕が付く。口縁部は回転ナデを施す。	微細な長石を微量、白雲母を中量 外面褐灰色、内面灰白色 不良（軟質）	床直 20%（口縁部は完存） 頸部に「十」「卍」の焼成前刻書あり
第132図 53	須恵器 甕	破片長 (0.7)	甕の肩部付近の破片。	外面に同心円の叩き目を付け、内面に指頭による横ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰白色 不良（軟質）	覆土上位 細片
第132図 54	須恵器 甕	破片長(12.4)	甕の体部片。	外面に同心円の叩き目を付け、内面に指頭による横ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を微量 内外面灰色 良好	覆土上位 細片 No.53とは別個体の甕片

図版番号	器種	法 量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第132図 55	土製品 土錘	9.3	4.6	4.6	235.0	孔は径0.9～1.3cm、焼成前に先細の棒に粘土を巻きつけて成形し、後から棒を引き抜いている。外面に指頭圧痕が顕著に残り、表面調整は施されていない。	微細な長石・石英を中量 にぶい黄褐色 普通	覆土下位 完形

第38号住居跡〔第133～136図、PL.19・71・72〕

位置 調査区南東側 J・K-25・26グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5mに位置する。

南西側で第49号住居跡と重複しており、出土遺物とカマドの有無から本住居跡が新しいと判断した。

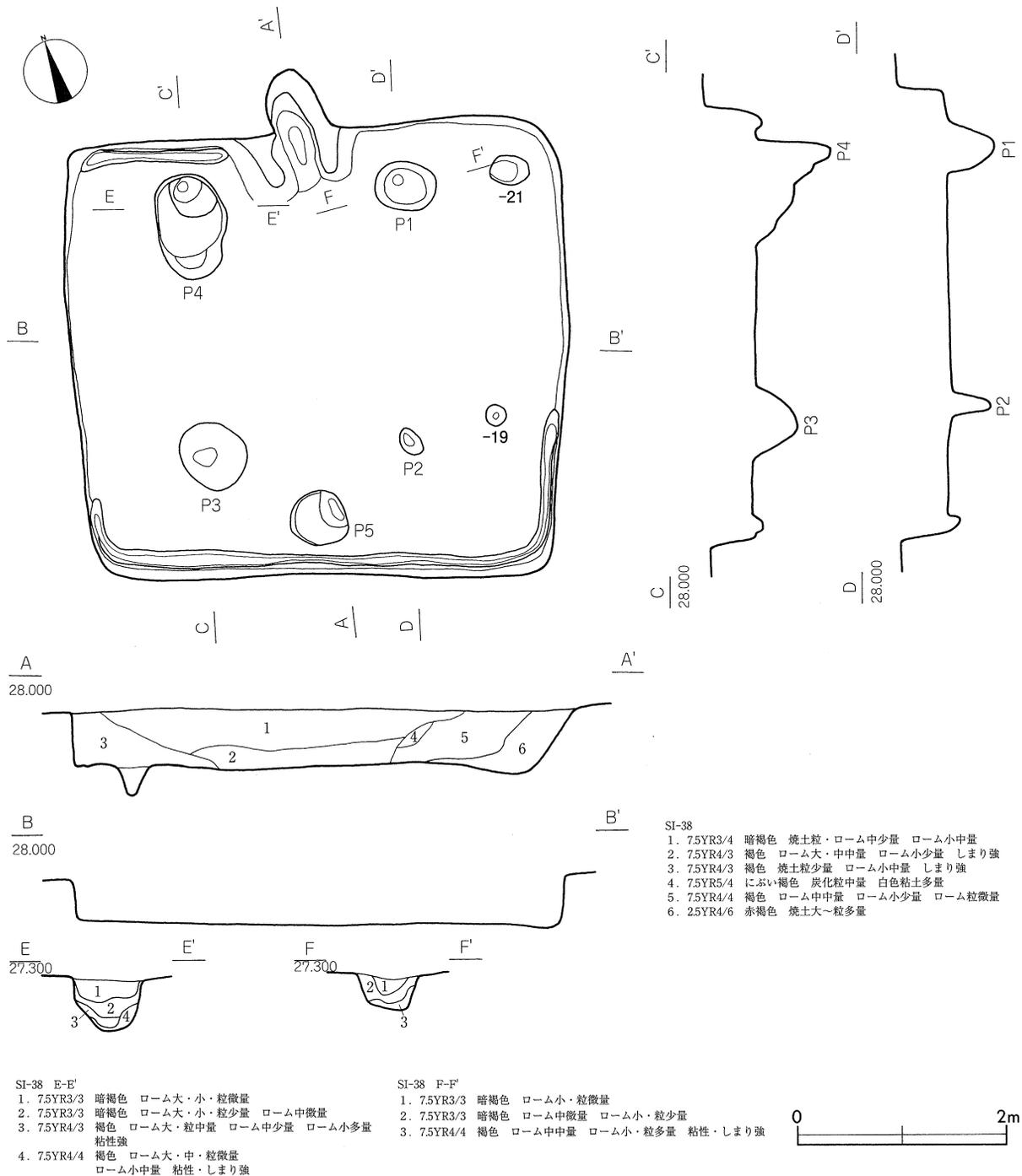
規模 長軸4.64m、短軸3.98mの長方形を呈し、床面積は約18.5㎡である。

主軸方向 N-12° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で47cmを測る。壁溝はカマドの西側、南壁沿いに部分的に確認され、幅10～18cm、深さ2～8cmを測る。

床 概ね平坦である。

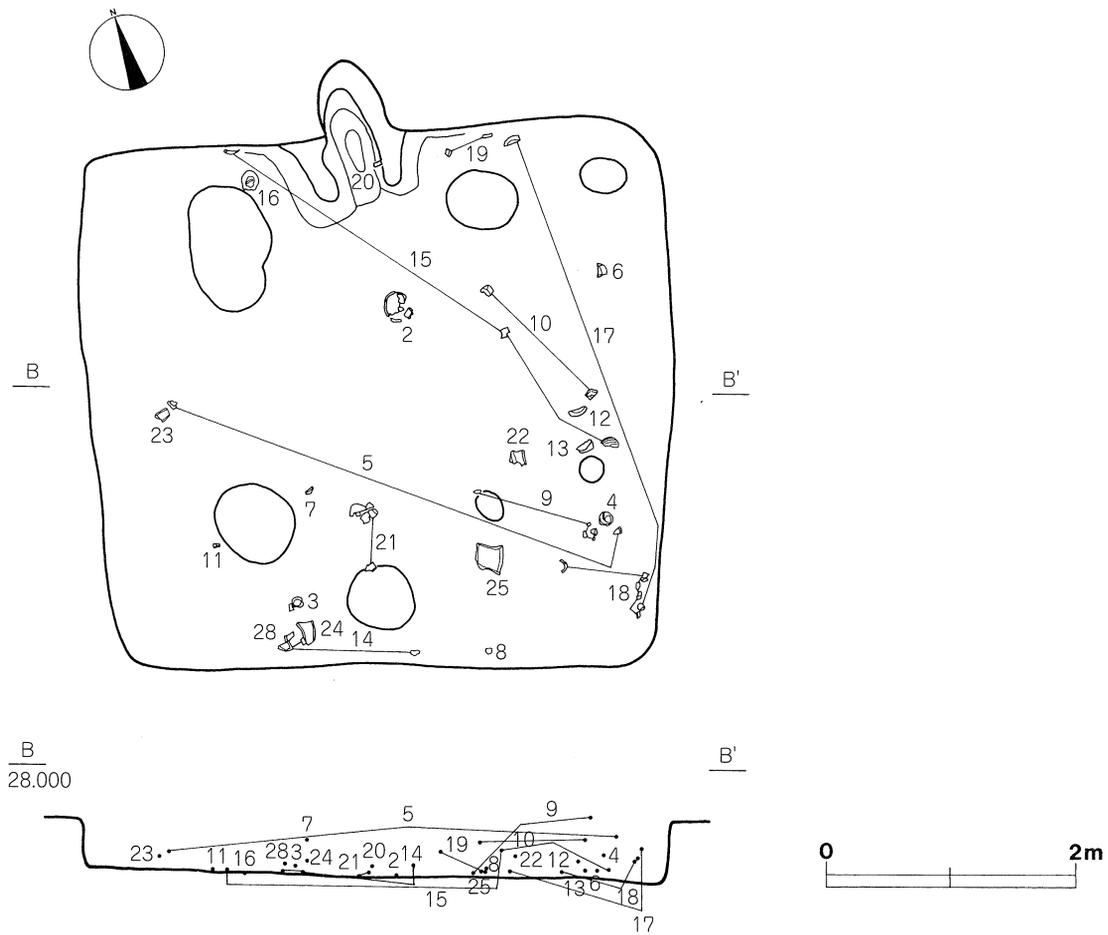
ピット 7基確認された。配置と規模からP1～4は主柱穴に相当しよう。円形・楕円形を呈し、径28～100cm、深さ38～72cmを測る。P2を除きいずれも開口部が大きく、柱の抜き取りに伴い広がったと考えられる。P5は入り口施設に伴うピットで円形を呈し、径54cm、深さ31cmを測る。他の2基はP1・2に沿うように配されており径22・36cm、深さ19・21cmを測る。配置から補助的な柱の意味合いが



第133図 第38号住居跡

考えられる。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場より壁外に約70cm掘り出して構築される。全長1.16m、燃焼部は床面を10cm程掘り込んでおり、ここから奥壁にかけて緩やかに外傾して立ち上がる。両袖の遺存状態は良好で、焚き口幅は22cmを測る。住居跡の主軸に対してカマドの軸（壁から延びる袖の方向）は平行しておらず、およそ13度西方向へ傾いている。奥壁は被熱により赤化しており、またカマド内には焼土が多量に堆積していた。遺物は燃焼部に浮いた状態で、また左袖脇に貼りつくようにして数点が出土している。



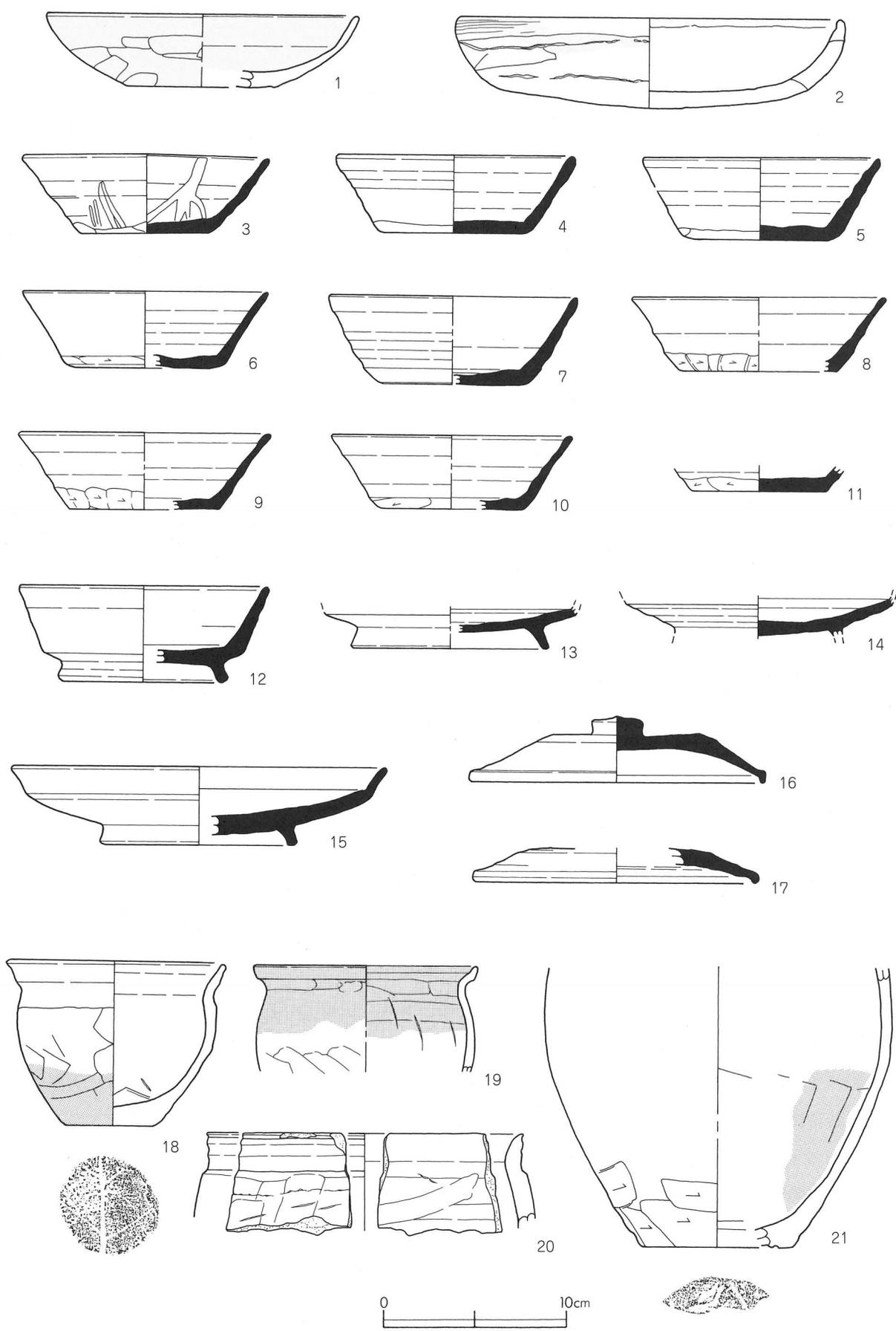
第134図 第38号住居跡遺物出土状況

覆土 6層に分層された。第4～6層はカマドの廃絶に伴う土層である。また第3層の壁崩落土上に二次堆積がなされており、概ね自然堆積といえよう。

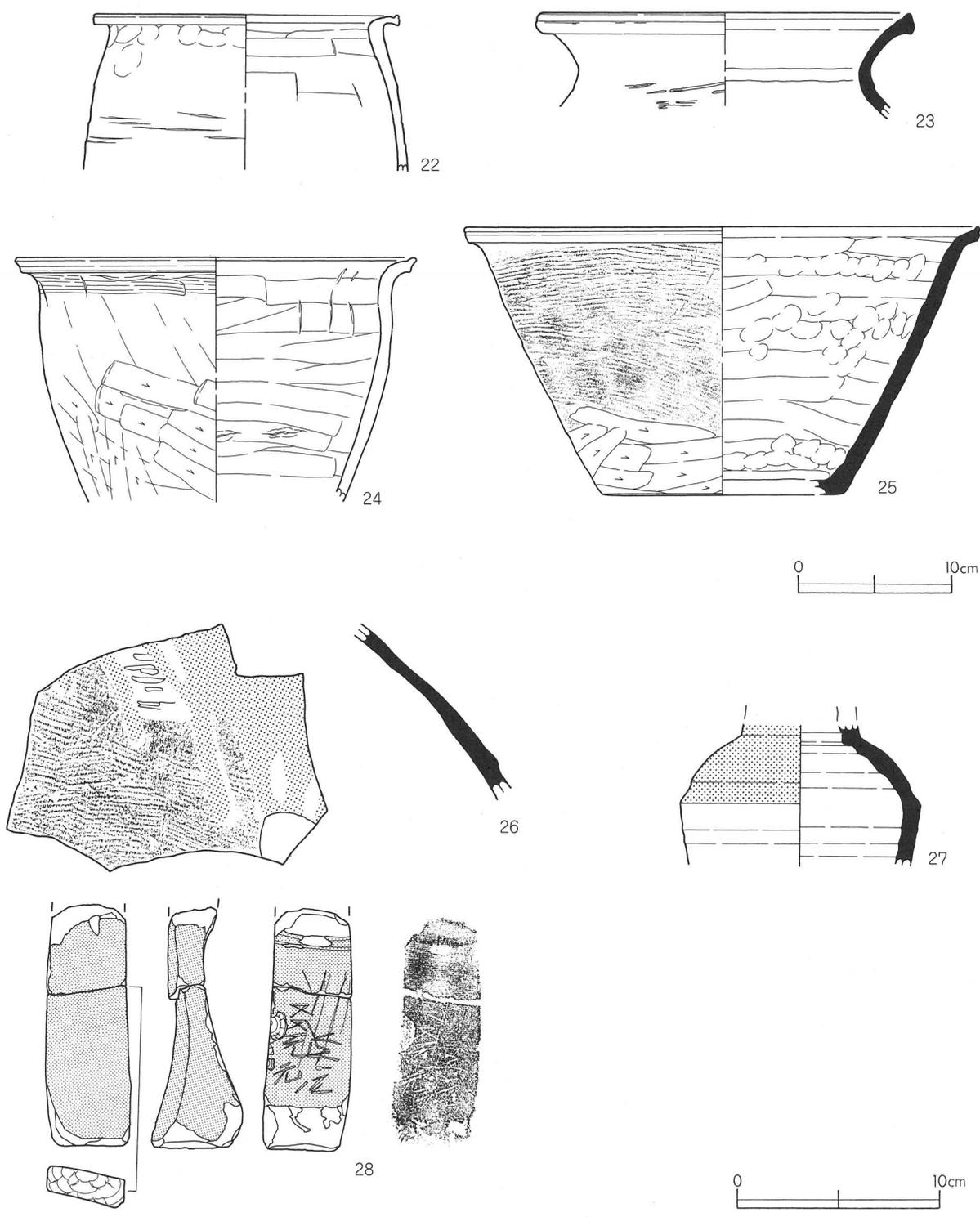
遺物 遺物は比較的多く確認された。出土地点に特別な傾向性は認められず、土器片が床面や覆土中に散在するような状況であった。覆土上位から発見された土器片が床面近くの破片と接合するものもあり、住居跡の埋没が比較的短期間に進行したものと考えられる。掲出した土器群は該期の器種組成を保つ好資料と言えよう。

供膳具の器種組成は、坏、高台付坏、高台付盤、蓋があり、須恵器の割合が圧倒的に高い。土師器は平底化の進んだ浅めの坏が2点あるだけである。煮沸具では大小の土師器甕があり、およそ3法量確認される。さらに須恵器の甑（あるいは鉢）も存在する。貯蔵具は須恵器の小型壺と甕があり、大甕の破片も認められた。

No.1・2は土師器坏である。No.1は大きな口径と浅く開く体部をもち、底部は完全に平底化している。前時代的な体部の稜や段はすでに消失している。No.2は盤を思わせる浅い形態で、僅かに丸底を留めている。No.3～10は須恵器坏である。いずれも直線的な体部をもち、法量は口径13.5cm、底径8cm、器高4.5cmを平均としている。No.11はやや小型の坏で、緻密な胎土を用い、硬く焼き締まっている。No.12・13は須恵器の高台付坏、No.14・15は高台付盤である。両者とも高台は比較的厚手で低く、僅かに開く形態をとる。No.16・17は須恵器の蓋で、口径は15cm前後、体部は浅く直線的に開き、口縁部は小さく垂下している。以上の須恵器は、No.11を除き、胎土に白雲母を含有するため新治窯跡の製品と



第135图 第38号住居跡出土遺物 (1)



第136图 第38号住居跡出土遺物 (2)

判断される。

No.18～22は土師器甕で、概ね3つの法量が認められる。No.22がカマドにかける一般的な大きさであるのに対し、No.18・19は非常に小型であり、No.20・21はそれよりも一回り大きい。形態もそれぞれ特色があり、特にNo.20は口縁部が段をもって直立する特異な形態を呈している。No.23は須恵器甕の口縁部片、No.24は土師器の甑ないし鉢であろう。No.25も逆「ハ」字に開く体部の形態から甑ないし鉢と考えられる。No.23の甕と共に新治窯跡産の須恵器である。No.26は須恵器の大甕の体部片である。外面に並行線の叩き目と自然釉の付着がみられる。No.27は須恵器の小型壺で、肩部に稜をもち、頸部は長頸瓶のように直立すると思われる。胎土は緊密なもので、堅く焼き締まっており、新治窯とは異なる製品である。No.28は凝灰岩製の砥石である。研磨面に針状の道具で書いた刻書がみられる。文字は二行にわたって刻まれ、「□□(元?)」「又又□(元?)元」と読める。習書のように同一文字を複数回書いているようであるが、砥石に習書する必然性がなく、その意味は不明である。なお、この砥石は二つに折れた後も、文字が書かれている破片の方をさらに使用し続けており、接合した二片の厚さが異なっている。刻字を行ったのが破損前か後かは判断できないが、文字面には僅かに磨耗部分があり、文字を刻んだ後もある程度使い続けた様子が窺える。

所見 遺物の年代は、須恵器杯の口径と底径の比率からみて、8世紀後半代に位置付けるのが妥当であると思われる。底径の大きな高台付杯や、器高の低い高台付盤などの形態的特徴も、およそ該期の傾向に合致しているようである。ちなみに、砥石に文字が刻まれている事例は、群馬県黒熊中西遺跡、同日高遺跡、千葉県印内台遺跡などに例があるだけで、非常に希少な資料と言える。

第38号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第135図 1	土師器 杯	口径 [17.0] 底径 [8.0] 器高 3.8	盤状を呈する浅い杯。底部は平底で、体部は浅く大きく開く。体部と口縁部に境目はなく、口縁部は緩やかに立ち上がる。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施し、最後に全面的に磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面灰褐色 普通	覆土 30% (口径の30%残存) 内外面黒色処理 (内面は希薄)
第135図 2	土師器 杯	口径 20.6 底径 17.0 器高 4.7	底部は平底に近い丸底で、体部との境に微かな稜が付く。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口唇部は小さく内湾する。	底部に縦横方向のヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。体部に粘土紐の積上げ痕跡を残す。	微細な長石・石英を中量 外面黒褐色、内面に ぶい橙色 普通	床直 70% 外面黒色処理 (部分的)
第135図 3	須恵器 杯	口径 13.4 底径 7.3 器高 4.0	底部は平底で、体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。	底部は切り離し後に二方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面黄灰色 普通 (やや軟質)	覆土下位 60% (底部完存) 内外面に火擦
第135図 4	須恵器 杯	口径 12.9 底径 8.0 器高 4.1	底部は平底で、体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。	底部は切り離し後に二方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面褐色 普通	覆土中位 60% (底部完存)
第135図 5	須恵器 杯	口径 [12.9] 底径 8.0 器高 4.4	底部は平底で、体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。	底部は切り離し後に反時計回りの回転ヘラ削り、体部下位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 不良 (軟質)	覆土中～上位 40% (底径の60%残存)
第135図 6	須恵器 杯	口径 [13.2] 底径 [8.4] 器高 4.1	底部は平底で、体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削りを施す。体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰白色 不良 (軟質)	覆土下位 30% (底径の50%残存)
第135図 7	須恵器 杯	口径 [13.4] 底径 [8.0] 器高 4.7	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部下位に方向不定のヘラ削りを施す。体部外面のロクロ目はかなり強く残される。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面灰色 普通	覆土上位 30% (底径の50%残存)
第135図 8	須恵器 杯	口径 [13.6] 底径 [8.4] 器高 3.9	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの小刻みな手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面灰色 良好	覆土下位 30% (底径の40%残存)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第135図 9	須恵器 坏	口径 [13.5] 底径 [8.0] 器高 4.1	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。底部端から体部下端にかけては鋭い稜をもって屈曲する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を少量 内外面灰色 良好	床直～覆土上位 30% (口径の40%残存)
第135図 10	須恵器 坏	口径 [12.8] 底径 [7.8] 器高 3.9	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面灰色 普通 (やや軟質)	覆土上位 30% (底径の40%残存)
第135図 11	須恵器 坏	底径 [7.2] 器高 (1.1)	小型の坏の底部片。平底を呈する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石を少量 内外面青灰色 良好	床直 20% (底径の40%残存) 非新治産
第135図 12	須恵器 高台付坏	口径 [13.5] 高台径 [8.8] 器高 4.2	底径が大きく、箱形に近い形態を呈する。高台は低いが端整で、僅かに開く。体部は強い角度で直線的に開く。	底部は切り離し後に反時計回りの回転ヘラ削り、体部下位にも同様のヘラ削りを施す。体部および内面は回転ナデによって器面を滑らかに整える。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色 普通 (やや軟質)	覆土中位 40% (口径の50%残存)
第135図 13	須恵器 高台付坏	高台径 [10.4] 器高 1.8	高台は「ハ」字に開く。体部は水平方向に大きく開き、角度を変えて強く立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り後、回転ナデを施す。体部下位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面灰褐色 普通	覆土下位 30% (高台径の50%残存)
第135図 14	須恵器 高台付盤	器高 (2.1)	高台は「ハ」字に開くとみられる。体部は横方向に大きく開き、口縁部を立ち上げる。	底部は切り離し後に反時計回りの回転ヘラ削り、体部は内外面に回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面灰白色 不良 (軟質)	床直～覆土下位 60% (体部は80%残存)
第135図 15	須恵器 高台付盤	口径 [20.0] 高台径 [10.6] 器高 4.2	高台は断面方形で「ハ」字に開き、体部は水平方向に大きく張り出す。口縁部は外反ぎみに強く立ち上がる。	底部は切り離し後に反時計回りの回転ヘラ削り、体部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 不良 (軟質)	覆土下位 40% (口径、高台径の40%残存)
第135図 16	須恵器 蓋	口径 [16.1] 器高 3.5 つまみ径 2.8	頂部上面は平坦で、体部は直線的に開き、口縁部は短く垂下する。つまみは径が小さく、丈の短い円筒形を呈する。	頂部上面および周縁に反時計回りの回転ヘラ削り、体部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 外面灰黄褐色、内面にぶい橙色 不良 (軟質)	床直 80%
第135図 17	須恵器 蓋	口径 15.6 器高 (1.8)	頂部上面は平坦で、体部は浅く直線的に開く。口縁部はごく短く垂下し、断面三角形を呈する。	頂部上面および周縁に反時計回りの回転ヘラ削り、体部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を多量 外面にぶい褐色、内面褐色 普通	覆土下～中位 50%
第135図 18	土師器 小型甕	口径 11.9 底径 5.1 器高 8.7	小型の中でも特に小さめの甕。頸部に締りがなく口径は最大径を上回る。口縁部は「ハ」字に開き、口唇部は素縁を呈する。	体部下位に手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面にヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を中量 内外面橙色 普通	覆土下～中位 ほぼ完形 底部に木葉痕 体部下位に煤附着
第135図 19	土師器 小型甕	口径 [12.0] 器高 (5.6)	小型の中でも特に小さめの甕。体部は丸みを帯び、頸部の締りは弱い。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は断面三角形を呈する。	体部外面に斜位のヘラ削り、口縁部に指頭による回転ナデ、体部内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石、白雲母を微量 内外面褐色 良好	覆土下～中位 30% (口径の60%残存) 体部上位の内外面に煤附着
第135図 20	土師器 小型甕	口径 [16.8] 器高 (4.6)	小型だが器壁が厚く鈍重な印象。頸部の締りはなく、段をもって口縁部が直立する。	体部外面に縦位のヘラナデ、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を微量、白雲母を少量 内外面黄褐色 普通	カマド燃焼部 細片
第135図 21	土師器 甕	底径 (15.0) 器高 [8.0]	やや小型の甕。最大径は体部中位にあり、体部は強い角度で立ち上がる。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 外面にぶい橙色、内面褐色 普通	床直 20% (体部径の50%残存) 内面下半に煤附着
第136図 22	土師器 甕	口径 [20.0] 器高 (10.0)	体部に張りがなく、頸部の締りもないまま口縁部は直角に外反する。口唇部は短く直立する。	体部外面に横位のヘラナデ、口縁部に指頭による回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい褐色 普通	覆土中位 細片 (頸部径の20%残存)
第136図 23	須恵器 甕	口径 [24.2] 器高 (6.1)	甕の口縁部片。口縁部は「く」字に強く外反し、口唇部はごく小さく直立する。	体部外面に横位の平行線の叩き目、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰色 普通	覆土下位 細片 (口径の20%残存)
第136図 24	土師器 鉢ないし 甌	口径 [26.2] 器高 (15.9)	体部は僅かな丸みをもって開き、口縁部は直角に外反する。口唇部は短く外傾しながら立ち上がる。	体部外面に縦・斜位のヘラ削り、口縁部に指頭による回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面明褐色 普通	覆土下位 10% (口径・体部径の20%残存)
第136図 25	須恵器 鉢ないし 甌	口径 [33.6] 底径 [13.2] 器高 16.5	バケツ状の形態を呈する鉢ないし甌。体部は直線的に大きく開き、口縁部は強く外反する。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、体部外面に横位の平行線の叩き目、内面に横位の指頭ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面灰色 良好	覆土下位 30% (口径・底径の30%残存)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 26	須恵器 大甕	破片最大幅 (15.5)	大甕の体部片。	体部外面に横位の平行線の叩き目を施す。外面に自然釉が付着する。	微細な黒色粒子を多量 内外面灰色、釉は暗 オリーブ色 堅緻	覆土 細片
第136図 27	須恵器 小型長頸 壺	器高 (3.7)	頸部は太く直立する。肩部は張り が弱めで稜が付く。	全面に回転ナデを施す。肩部に自 然釉が付着する。	混入物のない緻密な 灰色胎土 内外面青灰色 堅緻	覆土 20% (肩部径 の50%残存) 東海産か？

図版番号	器種	法 量				特 徴	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第136図 28	石製品 砥石	8.0	4.2	4.2	150.0	凝灰岩製の撥形の砥石。研磨面は3面、切り出し面は2面。 2つに折れた後も、一方を使い続けており、厚さが異な っている。研磨面に「□□又又元元」の刻書	覆土下位 ほぼ完形

第40号住居跡〔第137～140図、PL.19・72・73〕

位置 調査区ほぼ中央K・L-23・24グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。南西側で第41号住居跡、第1号掘立柱建物跡と重複しており、出土遺物から第41号住居跡より新しく、掘立柱建物跡より古いと判断した。また、調査時は張り出しを有する1軒の住居と認定していたが、その後の整理作業で2軒の重複と改め、カマドが遺存する北側の住居を(A)、南側を(B)と呼称することとする。(A)は(B)の拡張住居の可能性が考えられる。

規模 (A)長軸4.28m、短軸3.8mの縦長の長方形を呈し、床面積は16.3㎡である。(B)は長軸不明、短軸3.72mを測る。

主軸方向 (A)はN-28° -E、(B)は推定N-25° -Eで、近似している。

壁 (A)(B)共にほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で(A)60cm、(B)30cmを測る。(A)は南北の各隅を中心に部分的に壁溝が巡っており、幅10～20cm、深さ3～9cmを測る。(B)の残存部に壁溝は確認されなかった。

床 (A)(B)共に若干の起伏を有している。また、(A)の南西側は床面直上から10cm程の厚さで白色粘土の範囲が広がっていた。この粘土範囲が掘立柱建物跡により不自然に途切れていることも遺構新旧関係を判断する一助となった。

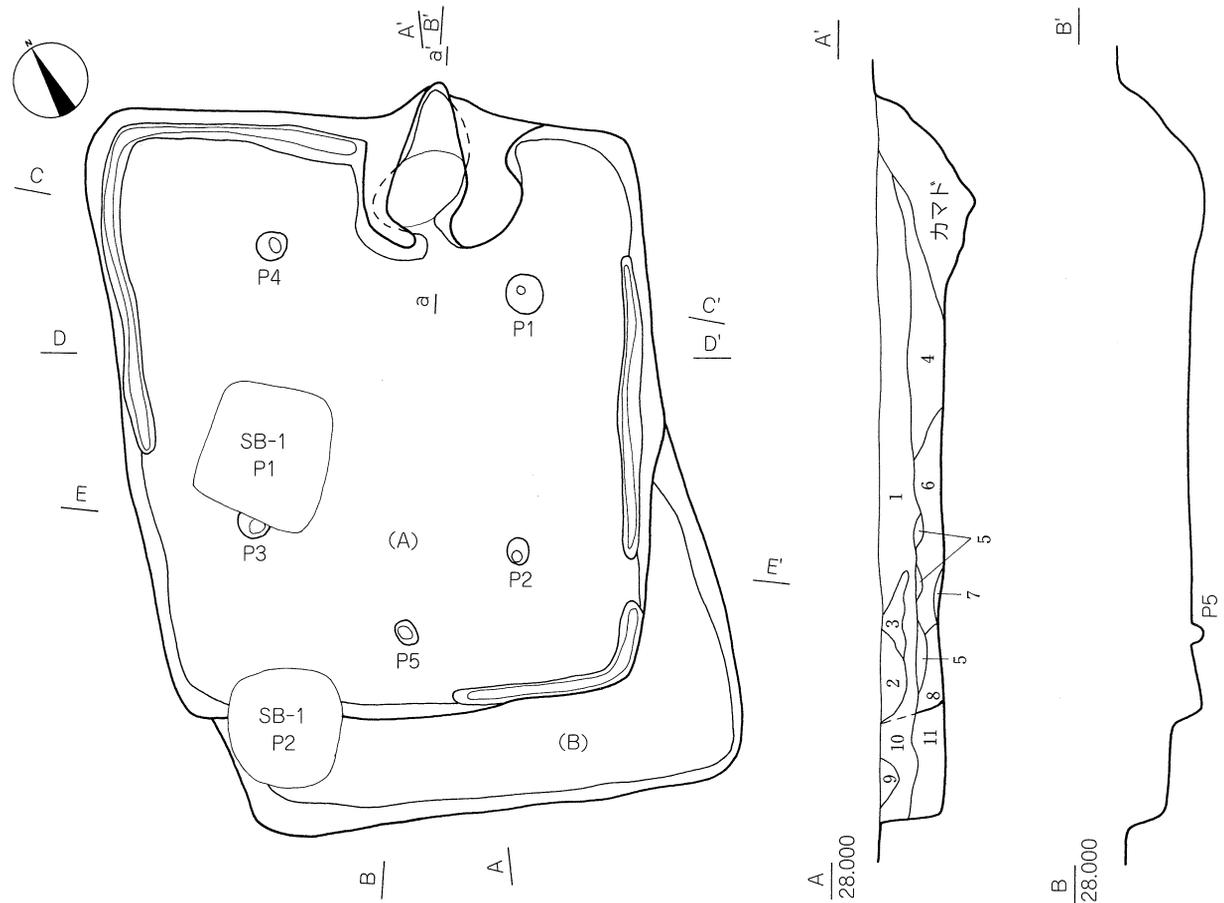
ピット 5基確認された。規模と配置からP1～4は支柱穴、P5は入り口施設に関連したものと考えられる。いずれも円形で支柱穴としたピットは径22～32cm、深さ19～33cm、P5は径22cm、深さ21cmを測る。

カマド 北東壁のほぼ中央に位置し、壁下場より壁外に約50cm掘り出して構築される。袖端部からの全長1.42m、燃焼部は床面を14cm程掘り込み奥壁にかけて微妙に段を有しながら緩やかに立ち上がる。袖の遺存状態は良好で、両袖で燃焼部を囲むように設置され、燃焼部は一部袖下にオーバーハングしている。両袖の最接近部は12cm程であった。両袖周辺より多くの遺物が出土している。

覆土 11層に分層される。第9～11層は(B)の覆土である。拡張住居の可能性を指摘したが、ある程度埋没してから再度掘り込んだと思われる。

遺物 遺物の大半はカマド周辺から、床面直上ないし覆土下位のレベルで発見されている。器種は土師器の坏、鉢、壺、甕、そして僅かに須恵器の蓋と甕があり、土師器の占める割合が圧倒的に高い。また、覆土上層からは時期の隔たった遺物群がまとまって出土しており、遺構として認識され得ない土坑が後世に掘り込まれていた可能性もある。

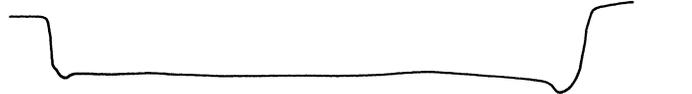
No.1～12は土師器の丸底坏である。底部はかなり平坦化が進行しており、丸底の最終段階を呈して



C
28.000



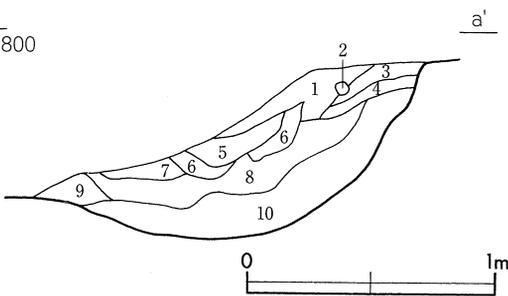
D
28.000



E
28.000

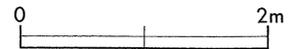


a
27.800



SI-40

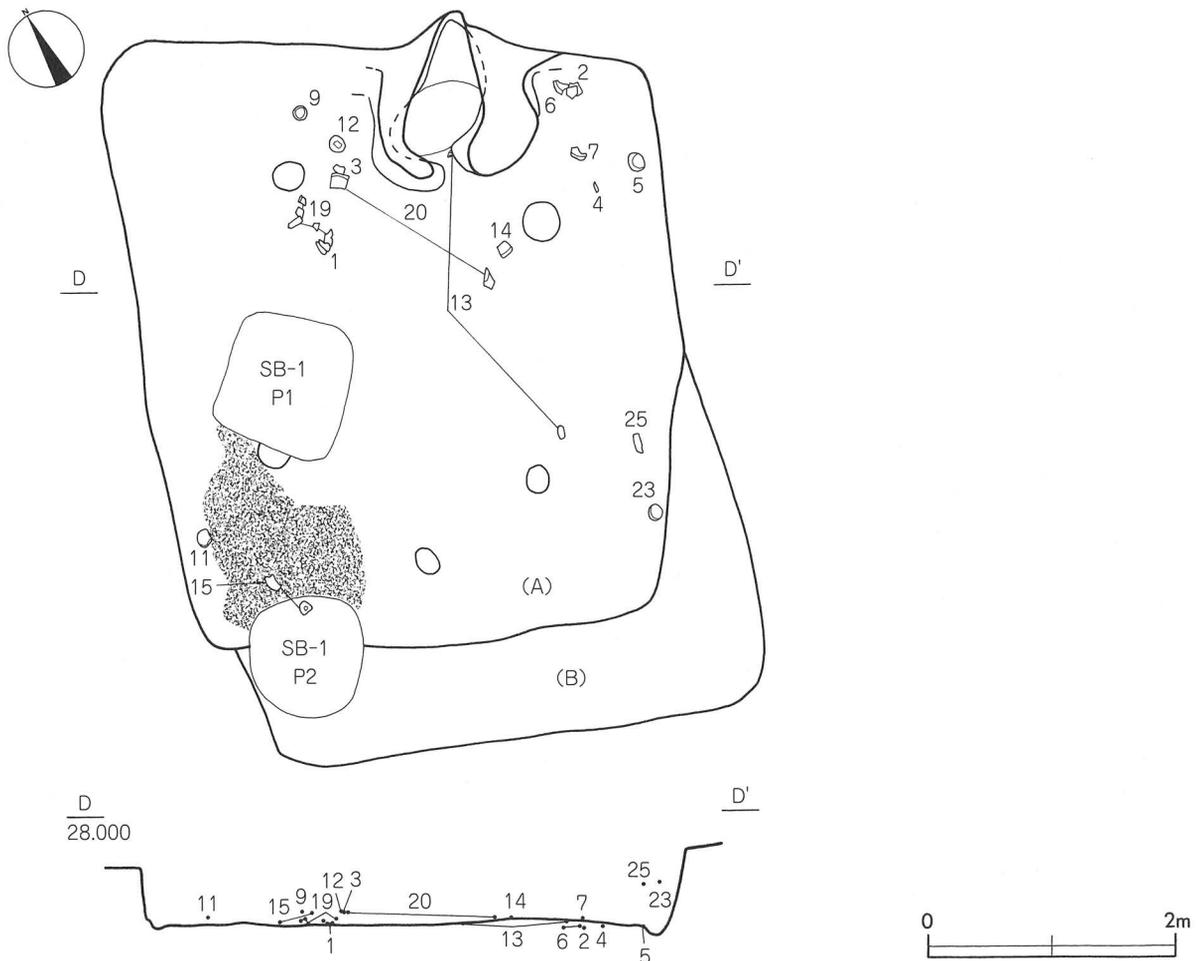
1. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム小・粒微量 しまり弱
2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中・小微量、ローム粒少量、粘性強
3. 7.5YR4/4 褐色 ローム大・粒多量、ローム中中量、ローム小少量
4. 7.5YR3/2 黒褐色 焼土小・粒・ローム大微量、ローム小・粒少量、しまり弱
5. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大・粒多量、ローム中中量、ローム小微量、粘性弱、しまり強
6. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒微量、ローム中・小少量、ローム粒中量
7. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小微量、ローム粒・白色砂粒中量、粘性強、しまり弱
8. 7.5YR4/3 褐色 ローム小中量、ローム粒多量
9. 7.5YR3/2 黒褐色 焼土小・ローム小・粒微量、粘性強、しまり弱
10. 7.5YR4/3 褐色 ローム中・粒中量、ローム小少量、粘性強
11. 7.5YR4/4 褐色 ローム大～粒多量、しまり弱



SI-40 カマド

1. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土小・粒・ローム小・粒微量
2. 7.5YR4/4 褐色 白色砂多量
3. 7.5YR4/4 褐色 ローム粒・白色砂少量
4. 7.5YR4/4 褐色 焼土粒微量、ローム粒少量、白色砂極めて多量
5. 7.5YR4/3 褐色 ローム粒微量、白色砂少量
6. 7.5YR4/3 褐色 ローム粒微量、白色砂中量
7. 7.5YR3/4 暗褐色 白色砂多量
8. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土中・小・ローム粒微量、焼土粒・白色砂少量
9. 7.5YR4/3 褐色 焼土大・粒少量、白色砂多量
10. 7.5YR4/3 褐色 焼土粒微量、ローム粒少量

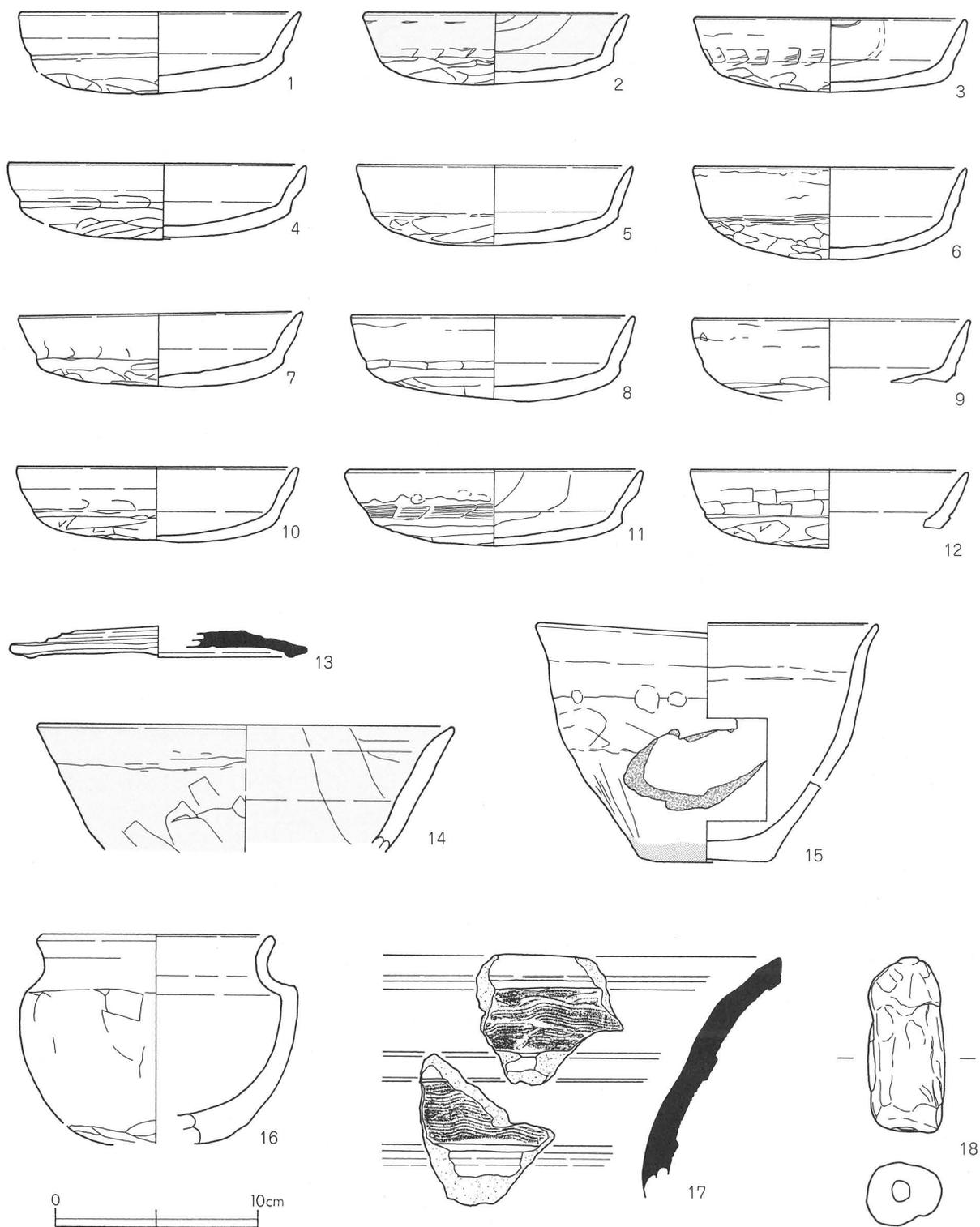
第137図 第40号住居跡



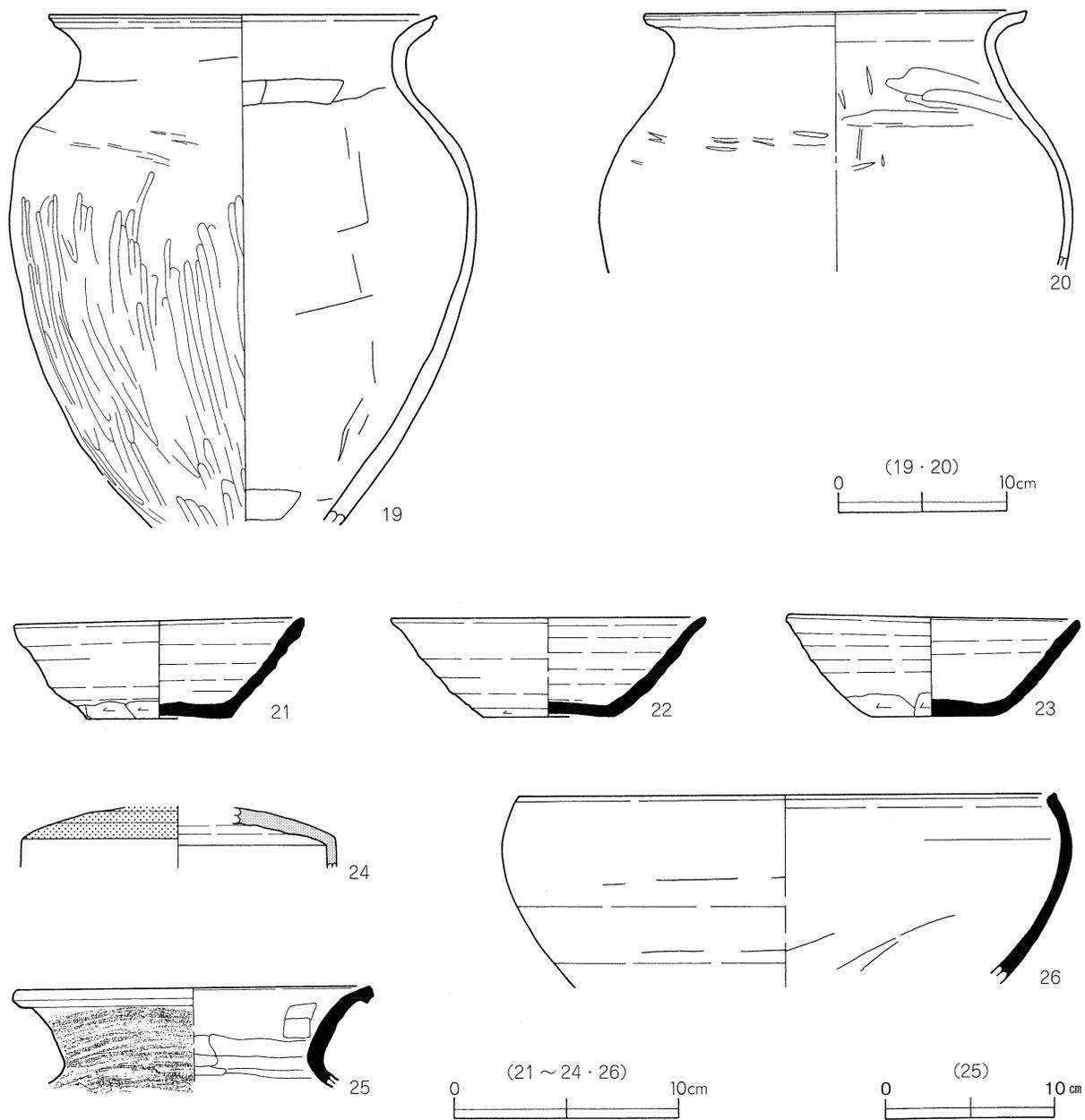
第138図 第40号住居跡遺物出土状況

いる。体部に小さな段が付くものと、稜をもって口縁部が立ち上がるものの2種が認められる。両者とも、器高における口縁部と体部の比率は、口縁部の方が圧倒的に大きな割合を占めており、共に平底・箱状の器形を志向しているように受け取れる。成形、調整の技法はいずれも同じものである。No.13は須恵器の蓋である。平たく直線的に開く体部が特徴的であるが、口縁部内面にごく小さなかえりをもっている。新治窯跡で生産された「かえり蓋」の最終段階のものと思われる。No.14・15は土師器の鉢である。両者とも頸部に締りがなく、体部が逆「ハ」字に開く形態を呈する。なお、No.15の体部中央には意図的な破碎孔が穿たれていた。No.16は土師器の小型壺である。底部は丸底、体部は球形を呈する「鬼高期」の壺に類似するが、肩部に稜が付き、口縁部は外反しながら強く立ち上がる特異な形態をとる。No.17は須恵器甕の口縁部片である。外面に一条の突帯と、その上下に櫛描波状文が施文されている。新治窯跡の製品である。No.18は手捏ねによる円筒形の土錘である。No.19・20は土師器甕で、共に最大径を体部上位にもち、口縁部を強く外反させている。細身・長胴化を遂げる前の段階の形態を呈している。

No.21～26は、上記の土器群とは明らかに時期の異なる一群で、覆土上層より発見された。No.21～23は須恵器坏である。いずれも底径が小さく体部が大きく開く類似の形態を保っている。遺存状態も良好であった。No.24は灰釉陶器の壺蓋である。灰白色の緻密な胎土を用い、上部には明緑色の釉が付着する。猿投窯の製品と推測される。No.25は須恵器の甕、No.26は須恵器の鉄鉢形土器である。



第139图 第40号住居跡出土遺物 (1)



第140図 第40号住居跡出土遺物（2）

所見 遺物の時期は、No.13の「かえり蓋」が、新治窯跡では一丁田窯跡の段階に対応し、8世紀前葉と考えられる。さらに土師器坏の形態や、No.17の櫛描波状文を付ける須恵器甕などは、第6号住居跡の遺物相とも類似しており、8世紀前半頃と考えることができる。当住居跡の廃絶年代はおよその時期であろう。そして、覆土上層から発見された遺物群は、底径の小さな須恵器坏の形態から9世紀後半と考えられ、この時期に攪乱ないし遺物の流入があったと推測される。

第40号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第139図 1	土師器 坏	口径 13.7 器高 4.0	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直 90%
第139図 2	土師器 坏	口径 13.2 器高 3.5	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁の下端にヘラナデの工具痕が残る。	ごく微細な長石・石英を中量 内外面にぶい橙色 普通	カマド脇・床直 80% 内外面黒色処理
第139図 3	土師器 坏	口径 13.4 器高 3.6	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に二方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁の下端にヘラナデの工具痕が残る。	ごく微細な長石・石英を中量 内外面橙色 普通	覆土下位 70%
第139図 4	土師器 坏	口径 [13.7] 器高 3.9	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁の下端にヘラナデの工具痕が残る。	微細な長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 普通	床直 70%
第139図 5	土師器 坏	口径 13.7 器高 3.9	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面にぶい橙色 普通	床直 70%
第139図 6	土師器 坏	口径 13.5 器高 4.5	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 外面褐灰色、内面にぶい橙色 普通	カマド脇・床直 80%
第139図 7	土師器 坏	口径 14.0 器高 3.8	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 普通	床直 80%
第139図 8	土師器 坏	口径 13.8 器高 4.2	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面浅黄橙色 普通（やや軟質）	カマド覆土 80% 底部に粉の圧痕
第139図 9	土師器 坏	口径 13.7 器高 (4.0)	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面橙色 普通	覆土中位 80% 底部に意図的な破砕・穿孔
第139図 10	土師器 坏	口径 14.0 器高 3.7	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に二方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土 80%
第139図 11	土師器 坏	口径 14.8 器高 3.7	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に二方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量、白雲母を微量 外面橙色、内面褐色 普通	覆土下位 70%
第139図 12	土師器 坏	口径 13.8 器高 (3.8)	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に開き、中位が僅かに膨らむ。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。口縁下端にヘラナデの工具痕が残る。	微細な長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面橙色 普通（やや軟質）	カマド脇・覆土下位 90% 底部に破砕孔
第139図 13	須恵器 蓋	口径 14.8 器高 (1.3)	扁平な蓋。体部は水平方向に直線的に開く。口縁部内面にごく小さなかえりが付く。	頂部上面に反時計回りの回転ヘラ削り、体部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石、白雲母を少量 外面黄灰色、内面にぶい褐色 普通	床直～カマド 覆土 80%
第139図 14	土師器 鉢	口径 [20.7] 器高 (6.2)	体部から口縁部にかけて直線的に「ハ」字に開く。	体部外面に縦位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面橙色 普通	床直 20%（口径の40%残存） 内外面黒色処理（希薄）
第139図 15	土師器 鉢	口径 [17.0] 底径 6.2 器高 11.6	底部は平底で、体部は僅かな膨らみをもって強い角度で立ち上がる。口縁部は軽く外反する。	体部外面に縦位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 外面明黄褐色、内面橙色 普通（やや軟質）	床直～覆土下位 70% 体部下半に黒斑
第139図 16	土師器 小型壺	口径 11.8 器高 (10.2)	底部は不整形な丸底で、体部は球形に膨らむ。肩部に強い稜が付く、口縁部は「つ」字状に屈曲しながら立ち上がる。	底部に不定方向のヘラ削り、体部に斜位のヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面明赤褐色 普通（やや軟質）	覆土 70%
第139図 17	須恵器 甕	破片長 (6.5)	甕の口縁部小片。外面中位に二条の突帯が付く、その上下に櫛描波状文が施される。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、微細な長石を多量 内外面褐灰色 普通（やや軟質）	覆土 細片

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 19	土師器 甕	口径 23.0 器高 (30.7)	最大径は体部上位にあり、肩を強く張る。口縁部は「つ」字状に強く外反し、口唇部は短く外傾する。	体部下半に縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面におい黄褐色 普通	床直～覆土下位 80%
第140図 20	土師器 甕	口径 [23.0] 器高 (15.3)	最大径は体部上位にあり、肩を強く張る。口縁部は「つ」字状を呈し、横方向に大きく開く。	体部上位に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面橙色 普通	床直～覆土下位 30% (口径の 40%残存)
第140図 21	須恵器 坏	口径 [13.2] 底径 6.8 器高 4.4	底径は小さく、体部は直線的に開く。口唇部が僅かに肥厚する。	底部は回転ヘラ切り後、一方向から軽いヘラ削りを施す。体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を少量 内外面灰白色 普通 (やや軟質)	覆土 60% 後世の混入か
第140図 22	須恵器 坏	口径 [14.2] 底径 6.0 器高 4.3	底径は小さく、体部は直線的に大きく開く。	底部は回転ヘラ切り後、未調整。体部下位に軽い手持ちヘラ削りを反時計回りに行う。	径1mmの長石・石英を 中量、白雲母を多量 内外面におい黄褐色 不良	覆土 60% 後世の混入か
第140図 23	須恵器 坏	口径 13.2 底径 5.6 器高 4.4	底径は小さく、体部は僅かに丸みをもって大きく開く。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削りを施す。体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を 中量、白雲母を少量 内外面灰色 普通 (やや軟質)	覆土上位 完形 後世の混入か
第140図 24	灰釉陶器 蓋	体部径 [14.0] 器高 2.6	短頸壺専用の蓋の破片。体部は僅かな丸みをもち、口縁部は直線的に垂下する。	内外面に回転ナデを施す。外面上位に明緑色の釉が付着。	微細な黒色粒子を少量 外面明オリブ色、 内面灰色 堅緻	覆土 細片 痕投産 後世の混入か
第140図 25	須恵器 甕	口径 [21.0] 器高 (5.5)	甕の口縁部片。口縁部は「ハ」字に開き、口唇部は断面菱形を呈する。	口縁部外面に叩き目が付き、その上から回転ナデを施す。頸部内面に横位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 外面黄灰色、内面灰 黄色 普通	覆土上位 細片 (口径の 25%残存) 後世の混入か
第140図 26	須恵器 鉄鉢形土 器	口径 [24.0] 器高 (8.5)	体部強く内湾し、上位に最大径をもつ。口縁部は内傾し、素縁に切り揃えている。	内外面に回転ナデを施す。土師器のような色調を呈する。	微細な長石・石英を 少量、白雲母を中量 内外面におい黄褐色 普通	覆土 20% (体部径 の20%残存) 後世の混入か

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第139図 18	土製品 土錘	8.7	3.8	3.1	110.0	孔は径1.1cm。手握ねにより円柱状に粗く成形したもの。	微細な長石少量 におい黄橙色 普通	覆土 完形

第42号住居跡 [第141・142図、PL.20・74・75]

位置 調査区ほぼ中央O・P-18・19グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。東側で第36号住居跡、西側で第37号住居跡と重複しており、出土遺物から本住居が最も新しいと判断した。これら3軒の新旧関係を整理すると第37号住居跡は8世紀前葉、第36号住居跡は8世紀半ば以降となる。

規模 長軸3.48m、短軸推定3.4mの正方形を呈し、床面積は推定11.8㎡である。

主軸方向 N-116° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で23cmを測る。北西壁に一部壁溝が確認され、幅8～20cm、深さ2～9cmを測る。3軒重複住居のうち本住居が最も新しいが、調査が最後になってしまったため第36・37号住居跡と接する部分の壁を掘り飛ばしてしまっている。

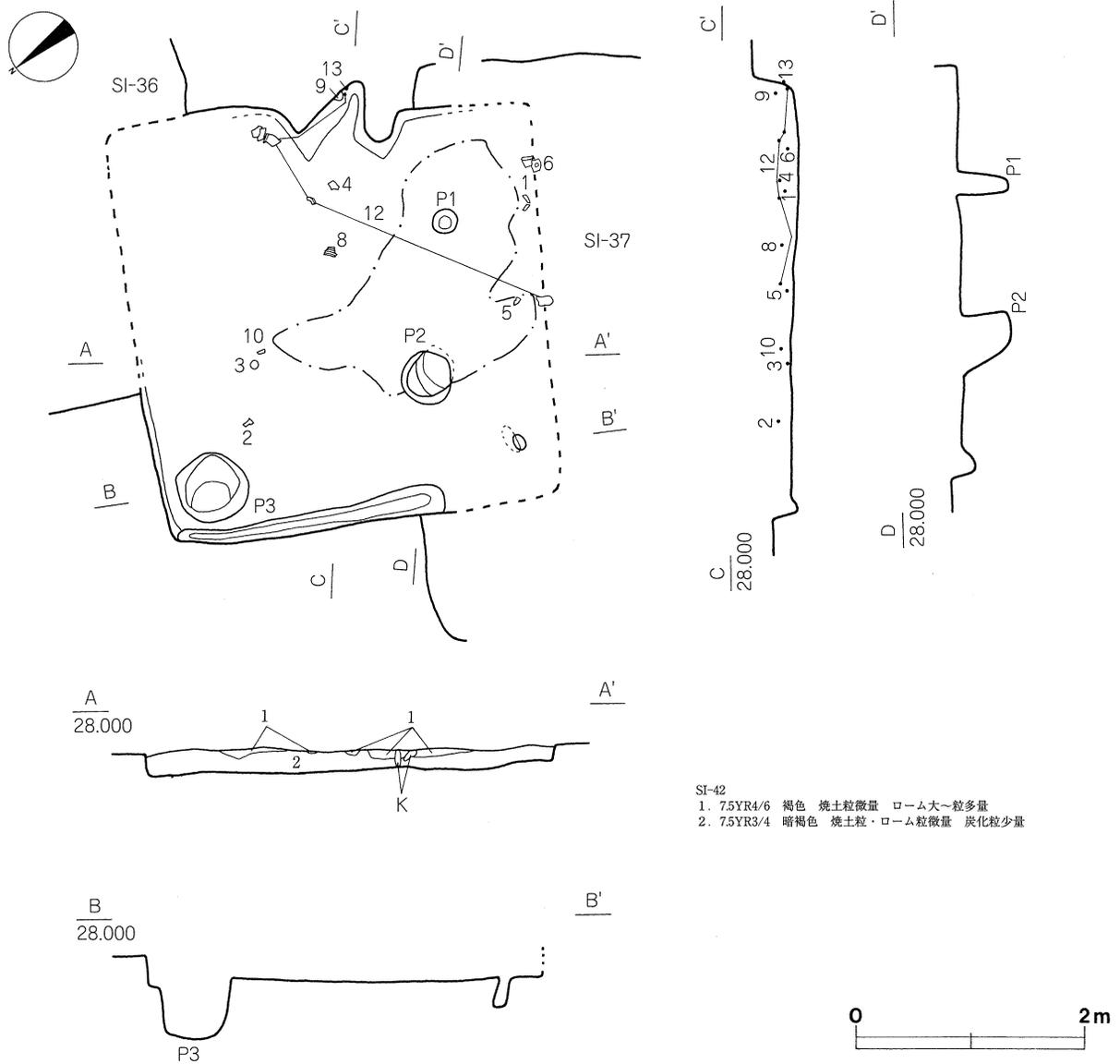
床 若干の起伏がみられた。西壁から中央にかけて硬化面が広がっている。

ピット 4基確認された。規模と配置からP1・2は支柱穴、P3は貯蔵穴と考えられる。いずれも円形で支柱穴は径24・46cm、深さ44・45cm、P3は径58cm、深さ45cmを測る。P2は坑底が一部オーバーハングしていた。他の1基は楕円形で径14cm、深さ24cmで東方向にオーバーハングしている。カマドの位置と対をなす北側が入り口部となろうか。

カマド 南壁ほぼ中央に位置している。本遺跡では数少ない南カマドといえる。壁下場より40cm程壁外に掘り出して構築している。袖端部からの全長は約66cm、燃焼部は床面をあまり掘り窪めておらず、奥壁にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。焚き口幅30cm、袖内側と奥壁側は被熱により著しく赤化していた。

覆土 2層に分層された。覆土中の大半を第2層が占めており、埋め戻し土と考えられる。

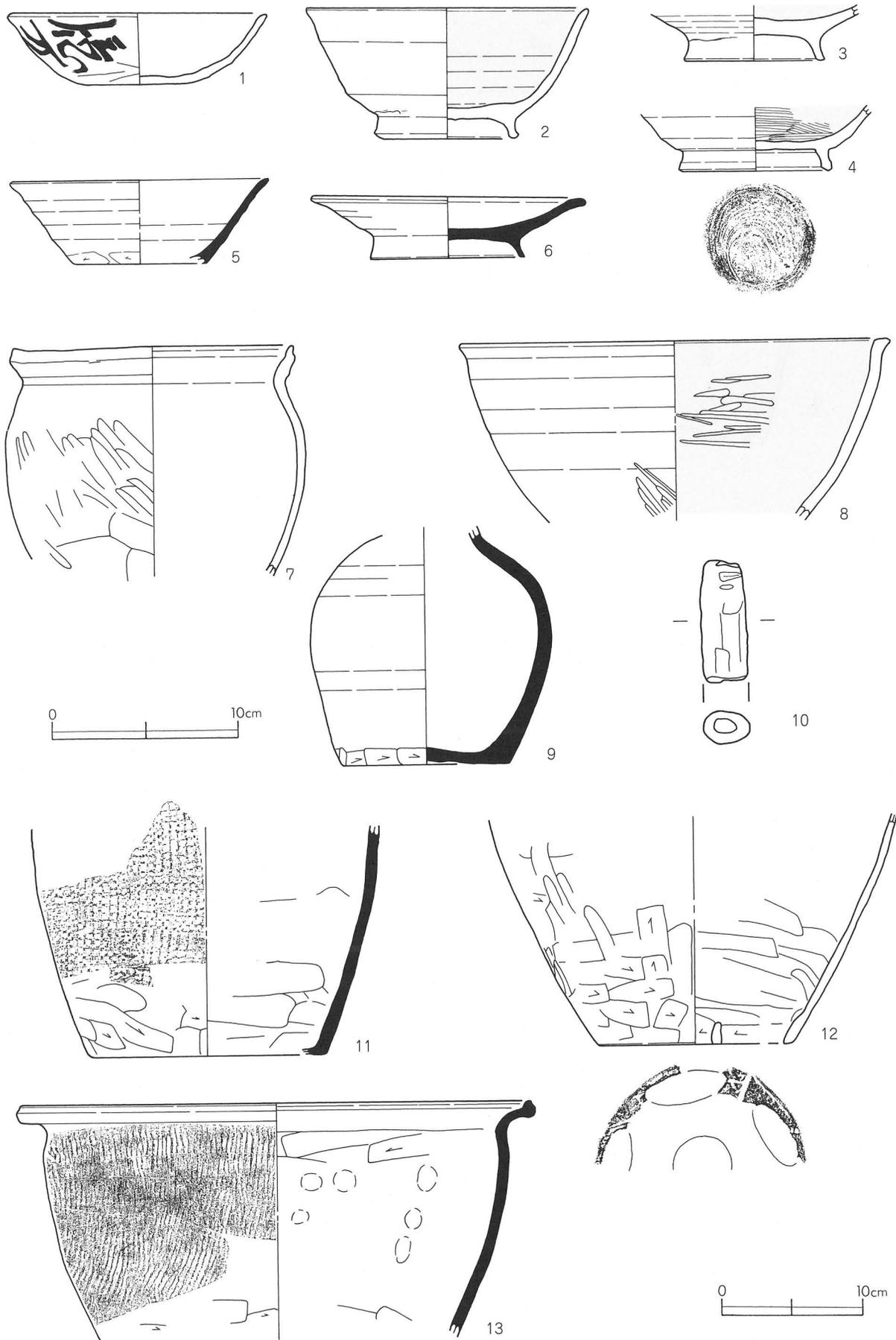
遺物 遺物はカマド燃焼部内に甕類が若干みられた他は、覆土下位から中位に若干の土器片が散乱する



第141図 第42号住居跡

状態であった。

No.1は土師器坏で、外面に「億万」の墨書がみられる。吉祥句の一種であろう。No.2～4は土師器の内黒椀である。一般的な高台付坏よりも深みがあり、椀と呼称する方がふさわしいと思われる器形である。No.4の底部には回転糸切り痕がみられたが、胎土はNo.2や3とほぼ同じであり、特別な搬入品ではないと思われる。No.5は須恵器坏であるが、色調は褐色を呈しており、土師器を思わせる。底径は口径のおよそ半分ほどの大きさしかなく、新治窯の須恵器坏では最終段階のものである。No.6は高台付皿である。これも須恵器ではあるが、低火度、不完全な還元焰焼成で灰褐色を呈している。口唇部がやや厚く作られ、灰釉陶器の皿を模倣したものと思われる。No.7は土師器の小型甕、No.8は土師器の内黒鉢である。No.9は頸部を欠失しているが須恵器の長頸壺である。一般的に、長頸壺には底部に高台が取り付けられているはずであるが、これには当初から付けられておらず、甕類に通有の手持ちヘラ削りが周囲に施されている。短胴で底部にも締まりがなく、やや特異なプロポーシオンを呈している。胎土に白雲母を含む新治窯の製品であるが、類例の少ないものである。No.10は手捏ねの円筒状土錘である。No.11は須恵器の甕で、体部に格子状の叩き目が付く。これも不完全な還元焰焼成品である。



第142图 第42号住居跡出土遺物

No.12は土師器の甑である。底部に4つの花卉状の孔が開き、形態的には須恵器の甑と同形である。しかし、底部に木葉痕がみられ、土師器の甑と同様に製作・焼成されていたものと推測される。No.13は須恵器の鉢ないし甑である。形態や製作技法は須恵器に一般的なものであるが、焼成は褐色で土師器と異なるところがない。須恵器生産の衰退期の製品であろう。

所見 遺物の時期は、底径の小さな坏の形態が、新治窯跡群の小野窯とほぼ同じ段階にあり、およそ9世紀後半に充てることができる。供膳具の主体が内黒碗に移行していること、灰釉陶器の模倣を思わせる高台付皿があることなど、いずれもこの頃の特徴と合致するものであろう。当住居跡が営まれた時期も同様の時期と考えられる。

第42号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法 量 (cm)		器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		口径	底径				
第142図 1	土師器 坏	口径 13.8 底径 4.9 器高 4.0		底部は径が小さく、体部は丸みをもって緩やかに立ち上がる。	底部に一方からのヘラ削り、体部下位に横位のヘラ削りを施す。体部上位から内面にかけて回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量、白雲母を中量 内外面にぶい黄橙色 普通 (やや軟質)	覆土下位 95% 体部外面に墨書「億万」
第142図 2	土師器 高台付碗	口径 15.1 高台径 7.7 器高 6.8		体部は下位に丸みをもって強く立ち上がる。口縁部はごく僅かに外反する。高台は小さく開きも弱い。	底部および体部下端に回転ヘラ削り、内面に微かな磨きを施す。	微細な長石・石英、白雲母を少量 外面にぶい黄褐色、内面黒褐色 普通	覆土中位 70% 内面黒色処理
第142図 3	土師器 高台付碗	高台径 7.5 器高 (2.5)		体部は浅めに開くので高台付皿の可能性あり。高台はやや高めで「ハ」字に開く。	底部および体部下端に回転ヘラナデ、内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 外面にぶい褐色、内面黒色 普通 (やや軟質)	床直 30% (底部・高台完存) 内面黒色処理
第142図 4	土師器 高台付碗	高台径 8.2 器高 (3.1)		底径はやや大きく、体部は丸みをもって立ち上がる。高台は「ハ」字に開き、端部を肥厚させる。	底部は回転糸切りを行う。体部は回転ナデ、内面は磨きを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 外面明赤褐色、内面黒色 良好	覆土中位 30% (底部・高台完存) 内面黒色処理
第142図 5	須恵器 坏	口径 [13.8] 底径 [7.0] 器高 4.4		底部は径の小さな平底で、体部は直線的に開き、口縁部を僅かに外反させる。	体部下位に手持ちヘラ削り、体部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 普通 (やや軟質)	覆土下位 20% (口径の30%残存)
第142図 6	須恵器 高台付皿	口径 14.8 高台径 8.4 器高 3.4		体部は浅く直線的に開き、口縁部を肥厚させる。高台は断面三角形を呈し「ハ」字に開く。	底部は回転ヘラ削り後、高台取り付けに伴う回転ナデを施す。体部および内面にも回転ナデを施す。	微細な長石を少量、白雲母を多量 内外面灰黄色 不良 (軟質)	覆土下位 80%
第142図 7	土師器 小型甑	口径 15.0 器高 (12.3)		頸部の締まりは弱く、口縁部は強めに立ち上がる。口唇部は短く直立する。	体部下位に横位のヘラ削り、中位に斜位の磨きに近いヘラナデ、内面に横位の指頭ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄褐色 良好	覆土 60% (口径の80%残存)
第142図 8	土師器 鉢	口径 [23.2] 器高 (9.6)		体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	体部外面に回転ナデ、下位に斜位の磨きを施す。内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 外面にぶい黄褐色、内面黒色 普通	覆土中位 20% (口径の20%残存) 内面黒色処理
第142図 9	須恵器 長頸壺	底径 9.0 器高 (12.6)		底部はやや径が大きく高台を持たない。頸部は細長く直立するとみられる。	底部に指頭による軽いナデ、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部全面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 外面にぶい橙色、内面灰黄色 不良	カマド燃焼部 80% (頸部以外は完存)
第142図 11	須恵器 甑	底径 [17.0] 器高 (16.4)		底部は径が大きく、体部は強い角度で立ち上がる。	体部外面に格子目の叩き目が付き、下位に横位のヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面灰黄褐色 普通 (やや軟質)	覆土 20% (底径の20%残存)
第142図 12	土師器 甑	底径 [14.0] 器高 (16.3)		体部は直線的に強い角度で立ち上がる。底部に花卉状の透かし孔が開けられる。	体部外面に横位のヘラ削り、その上から縦位のヘラナデを施す。内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土下～中位 30% (底・体部径の50%残存) 底部に木葉痕
第142図 13	須恵器 鉢ないし甑	口径 [36.8] 器高 (16.8)		体部は丸みを帯びて強めに立ち上がる。口縁部は直角に外反し、断面三角形の口唇部が付く。	体部外面に縦位の平行線の叩き目、内面に横位のヘラナデと指頭圧痕が付く。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 外面にぶい褐色、内面黒褐色 不良	カマド燃焼部 20% (口径の30%残存)

図版番号	器種	法 量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第142図 10	土製品 土錘	(6.2)	2.5	2.5	24.0	孔は長径1.2cmの楕円形。表面に部分的なヘラナデを施す。	微細な長石少量 褐灰色 良好	覆土下位 70%

第45号住居跡〔第143～145図、PL.20・75～77〕

位置 調査区ほぼ中央M～O-23～25グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。東側で第46号住居跡、南側で第68号住居跡、西側で第7号溝と重複しており、第46号住居跡のカマドがプラン内に遺存していたことと出土遺物から、第46号住居跡より古く、第68号住居跡より新しいと判断した。

規模 長軸6.12m、短軸5.86mのやや横長の正方形を呈し、床面積は35.9㎡である。

主軸方向 N-53°-W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で74cmを測る。壁溝は全周しており、幅18～42cm、深さ9～23cmを測る。南壁側の壁溝内にはピットが2基みられた。

床 概ね平坦である。北側隅に白色粘土の堆積がみられた。粘土下面是床に接地しており、堆積の厚さは壁際30cm前後、P1方向に向かうにつれ順次薄くなり、5cm前後となる。また、南側隅では焼土範囲がみられた。

ピット 8基確認された。配置と規模からP1～4は支柱穴、P5・6は入り口施設に伴うピットと考えられる。支柱穴は円形・楕円形を呈し、径30～74cm、深さ28～66cmを測る。P1は浅いが他はほぼ近似した深さであった。いずれも開口部が広がる、もしくは段を有しているなど柱の抜き取りを想定させる状態であった。P5・6は円形で、径24・34cm、深さ26・38cmを測る。北壁隅の粘土範囲下のピットは壁溝に接しており、径54cm、深さ17cmを測る。

カマド 北西壁ほぼ中央に位置し、壁下場から壁外に約50cm掘り出して構築される。袖端部から煙道部までの全長約1.30m、燃焼部は床面を8cm程掘り窪め、煙道部にかけて外傾して立ち上がる。煙道孔の径は12cmを測る。焚き口幅は40cmで、袖内側と奥壁にかけて被熱により著しく赤化していた。

覆土 5層に分層される。壁際を除き概ね水平堆積である。前述した粘土堆積は壁溝や壁溝際のピットを覆うように確認されており、住居廃絶に伴う粘土の廃棄と考えられる。

遺物 遺物は住居跡の南西隅、カマドの左脇に若干の集中がみられるが、他所にも土器片が散在しており、特定の傾向を示してはいなかった。また、第46号住居跡との重複部分からも遺物が見つかったが、その中には第46号住居跡の時期と明らかに異なる一群がある。本来は当住居跡の遺物であったものが後世に流出したものと思われ、原位置は特定できないが、時期的な齟齬のない遺物は当住居跡に含めて報告することにした。

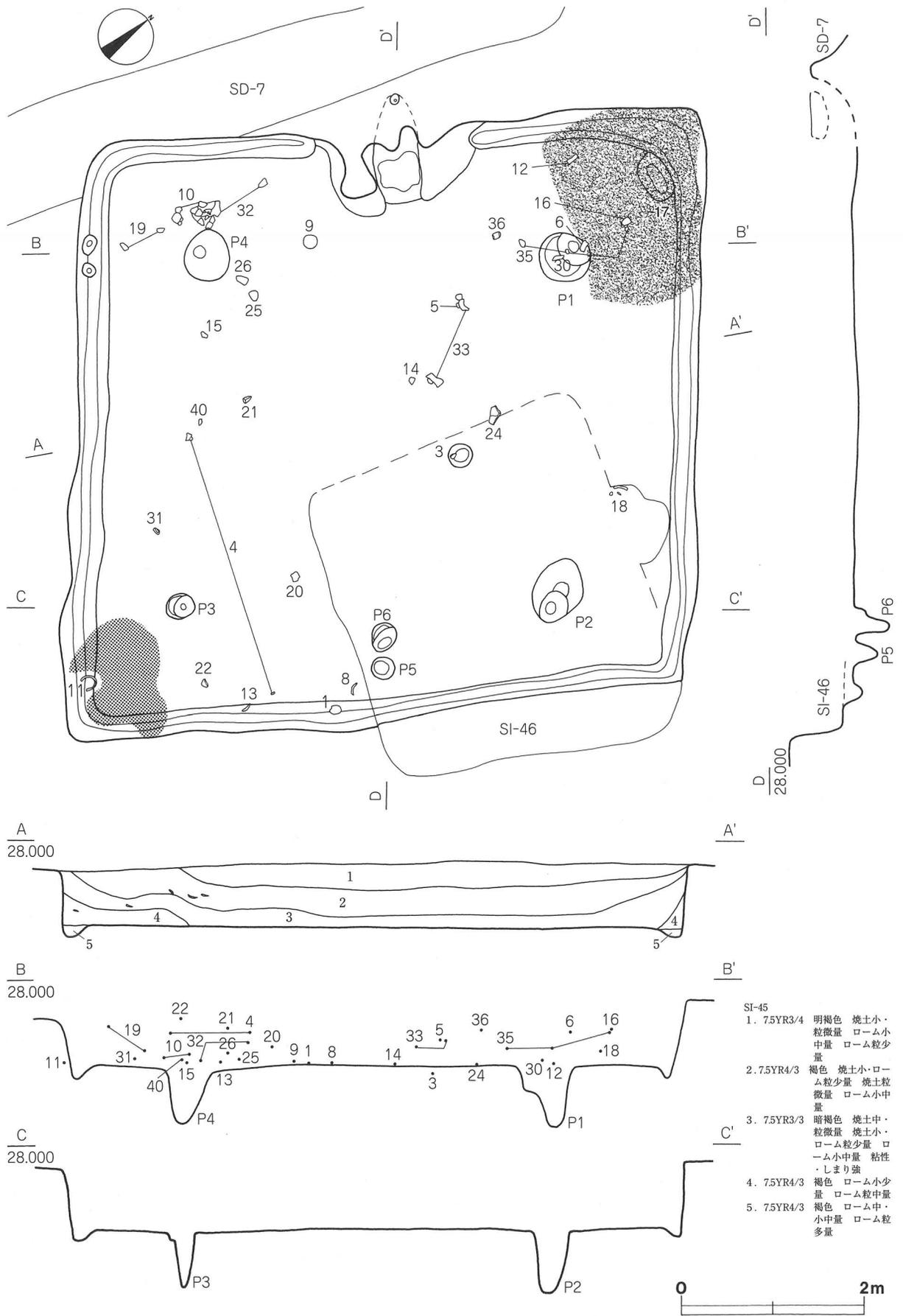
器種構成は、供膳具では土師器・須恵器の坏、須恵器の蓋、土師器の椀、盤など、煮沸具は法量と形態の異なる3種の土師器甕、須恵器の甑ないし鉢、貯蔵具では須恵器の甕などがある。また、ミニチュア坏や土製円盤など、祭祀的な小型品もみられる。坏における土師器と須恵器の割合は、図示していない破片も含めると、およそ4対1ないしそれ以上の格差をもって土師器が多数を占めている。

No.1～15は土師器の坏である。大半は丸底であるが、平底も僅かに存在している。形態的には以下の4種に大別することができる。

①丸底で、体部と口縁部の間に小さな段が付くもの。器高全体における口縁部と体部の割合は1対1程度である（No.1）。当住居跡では僅かしか確認されず、図示は1点に留まる。

②丸底で、体部と口縁部の境に稜もしくはごく小さな段が付くもの。口縁部は外反しながら大きく立ち上がり、器高の6割程度を占める（No.2～7）。逆に体部の割合は小さくなり、平底坏の形態に近いものもある（No.6・7）。

③平底で、体部は直線的に立ち上がるもの（No.8・9）。②に近い浅めの形態を呈するもの（No.8）と、



第143図 第45号住居跡

須恵器のいわゆる「箱形坏」に類似するもの（No.9）がある。前者は②の底部が平坦化したものと考えられ、丸底から平底への推移過程を示す資料と思われる。

④基本的には丸底で、全体的に半球形を呈するもの（No.10～14）。体部と口縁部の境は不明瞭で、器面調整の違いによって微かな稜が付く程度である。底部のヘラ削り調整の強弱によって平底化したものをみられる（No.14）。

以上の4種の割合は、②と④が大半を占めており、その比率はおよそ3対2である。これに対して①と③は僅か数個体である。

No.15は②ないし③の形態をした坏の底部片であるが、中央部にヘラ記号状の刻線がみられる。ヘラ削り調整以前に付けられたものであり、複数枚の木葉痕が重なった結果かもしれないが、刻線の鋭さはヘラ状の工具を思わせる。意味は不明であるが、記号の可能性が指摘される。

No.16～18は、それぞれ形態や器面調整などが異なっているが、土師器の深手の供膳具ということで碗として一括した。No.16は深めの坏形を呈し、内外面に磨きを施している。No.17は鉢状を呈し、外面にヘラ削り、外面の口縁部と内面に黒色処理が行われる。No.18は小型甕を思わせる作りで、体部中央に穿孔がみられる。No.19～21は土師器の盤である。いずれも浅身の皿形を呈し、底部は平坦を意識して作られている。特にNo.19は上記④の坏に、No.21は②の坏にそれぞれ形態的な類縁性が認められ、坏の作りの意識の延長に盤が製作されていた様子が読み取れる。

No.22～26は須恵器坏である。すべて無台の平底坏であるが、No.25は小型で深みのある坏で、やや丸底ぎみを呈している。No.25を除きすべて新治窯産である。無台坏はいずれも広い底径を有し、その周縁には二次底部面もみられる。底部調整は多方向からの直線的なヘラ削りを行うものと、回転ヘラ削りを施すものの2種が確認される。なお、No.24の底部には、刀子などの研磨ないし刃潰しを行ったとみられる傷が付けられている。

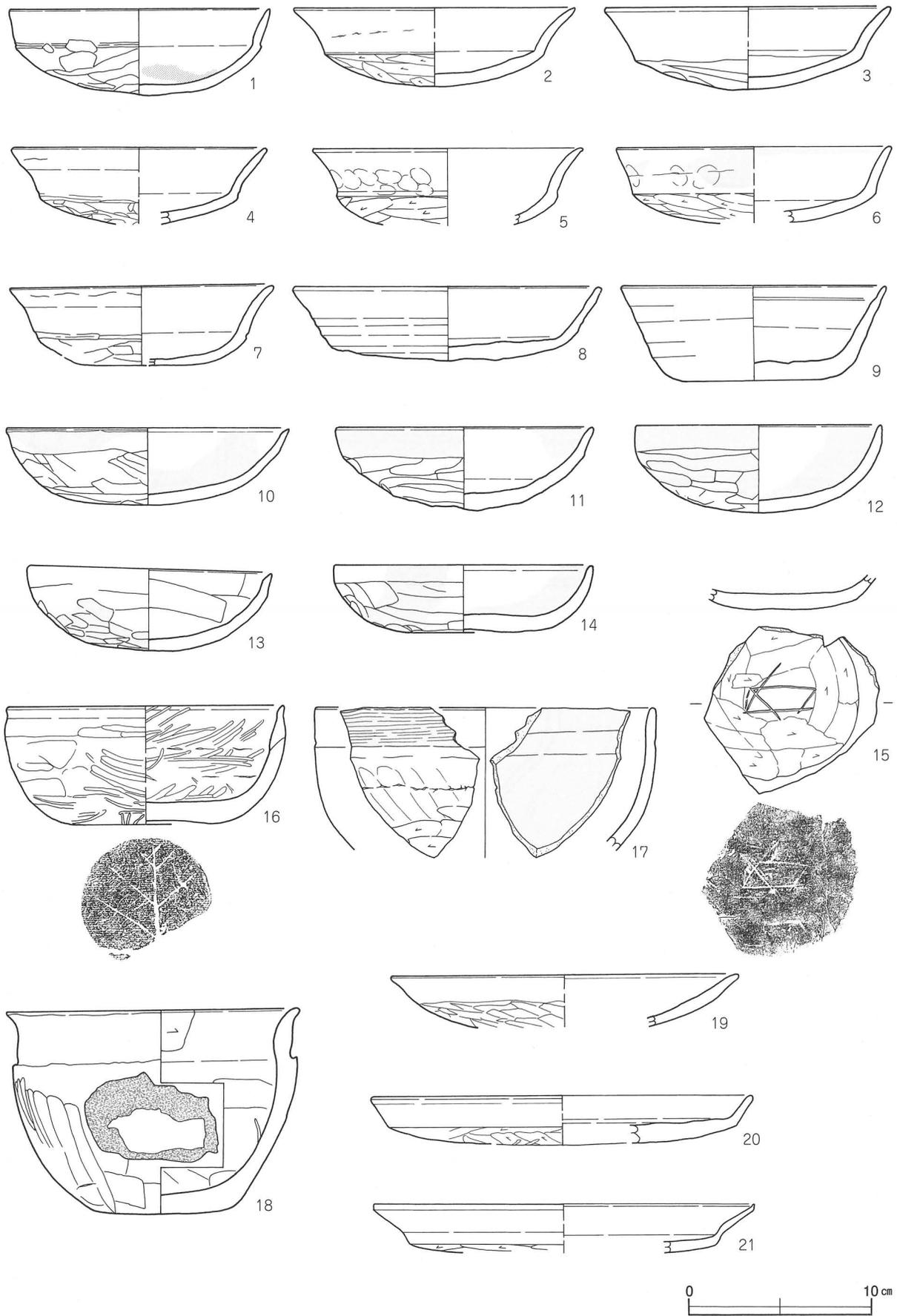
No.27～31は須恵器蓋である。いずれもつまみの径は大きく、退化したかえりが付けられている。すべて新治窯産で、一町田窯段階の製品と考えられる。

No.32～34は土師器甕であるが、法量や形態は3点とも異なっている。No.32は大きく開く口縁部と膨らみのある体部をもった当地一般の甕である。No.33はやや小ぶりで厚手に作られており、口縁部の断面は「コ」字を描いて窄まっており、特異な形態を呈する。No.34は小型甕の一種で、大きな口径に丸い体部が特徴的である。

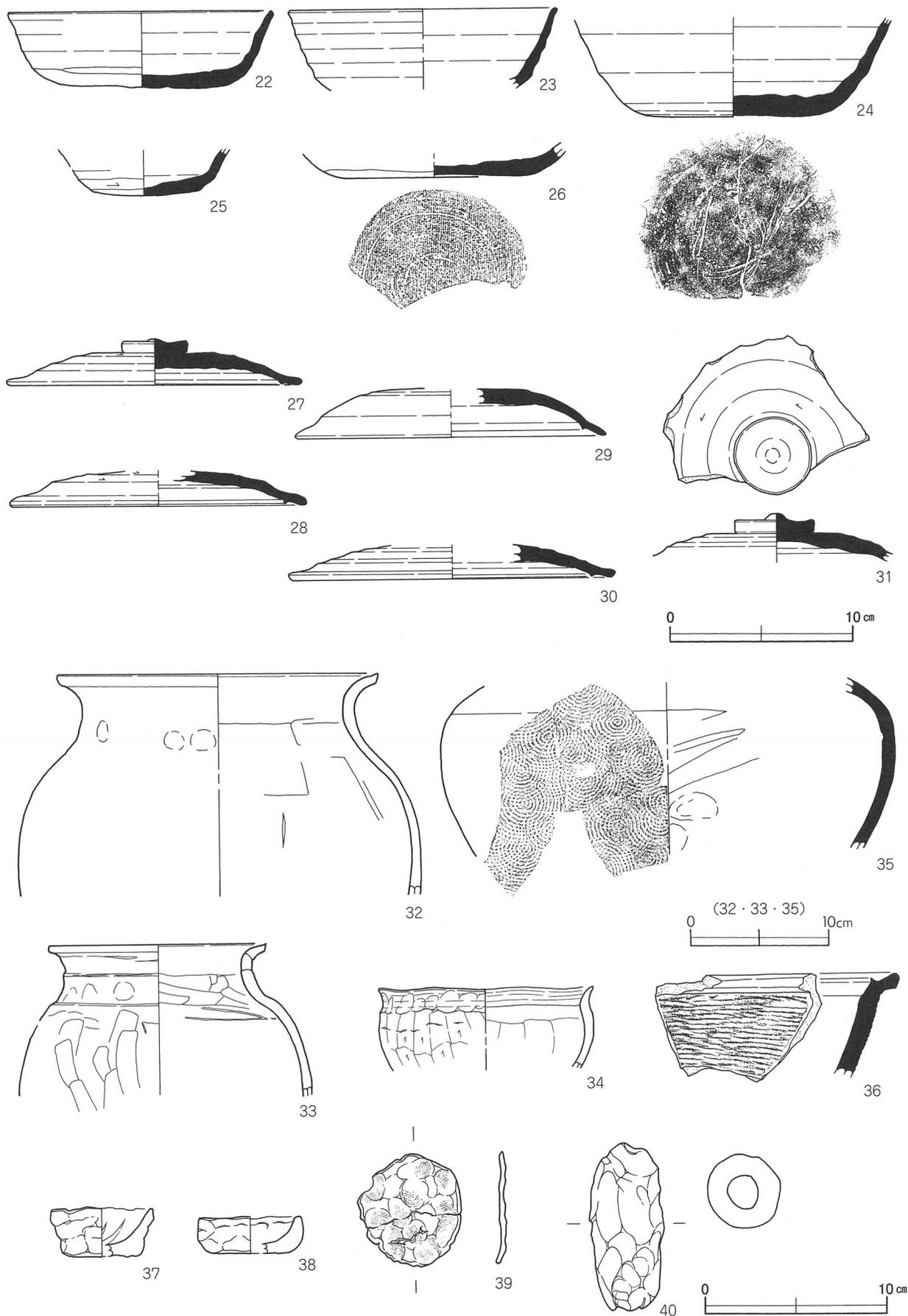
No.35は須恵器甕の体部片で、外面に同心円の叩き目が付く。新治窯産である。No.36は須恵器の甎ないし鉢の口縁部片であるが、内側に端整なかえりが付けられている。

No.37・38はミニチュアの坏形土製品である。No.39は用途不明の円盤状土製品で、表面に指頭圧痕が顕著にみられる。鏡形を意識した祭祀具の一種であろうか。No.40は手握ねの円筒状土錘である。

所見 当住居跡の帰属時期は、土師器坏が②の形態を主体とすること、底部の大きな須恵器坏が一定量存在すること、あるいは須恵器蓋の退化したかえりが一町田窯段階に相当すること、同心円の叩き目をもつ甕が存在すること、など複数の要素で第29・30・37号住居跡などと共通しており、概ね8世紀初頭にかけての時期と考えることができる。No.25の小型・深手の須恵器坏も、7世紀末葉頃を中心とするものであり、整合的に理解できるであろう。



第144図 第45号住居跡出土遺物 (1)



第145图 第45号住居跡出土遺物 (2)

第45号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	土師器 坏	口径 14.4 器高 4.6	底部は丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は器高の5割程度で、外傾しながら直線的に立ち上がる。	底部は一方からの強いヘラ削り、体部は横位のヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面明赤褐色 普通	住居東側、壁溝内 70% 内面に墨滴ない漆膜付着
第144図 2	土師器 坏	口径 [15.0] 器高 (2.6)	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は器高の6割を占め、外反ぎみに大きく開く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	覆土 60%
第144図 3	土師器 坏	口径 [15.4] 器高 (4.5)	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は器高の6割を占め、外反ぎみに大きく開く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい橙色 普通	住居中央ピット内 40%
第144図 4	土師器 坏	口径 [14.0] 器高 (4.1)	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は器高の6割を占め、外反ぎみに大きく開く。	底部に一方からのヘラ削り、体部に横位の小刻みなヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 普通	覆土上位 50%
第144図 5	土師器 坏	口径 [14.4] 器高 (4.1)	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は器高の6割を占め、外反ぎみに大きく開く。	体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	覆土上位 20% (口径の40%残存)
第144図 6	土師器 坏	口径 [14.6] 器高 (4.1)	底部は平坦化ぎみの丸底で、体部と口縁部の境にぶい稜が付く。口縁部は直線的に開き、立ち上がりの角度も強い。	底部に一方からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面にぶい褐色 普通	覆土上位 30% (口径の40%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第144図 7	土師器 坏	口径 14.4 器高 4.2	底部は平坦ぎみの丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は器高の7割近くを占め、外反ぎみに大きく立ち上がる。	底部に一方からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英・灰色チャートを少量 内外面橙色 良好	覆土 40% (口径の60%残存)
第144図 8	土師器 坏	口径 16.6 器高 4.0	底部は僅かな丸みを残す平底で、二次底部面をもつ。口縁部は強い角度で直線的に立ち上がる。形態的には須恵器坏と同形である。	底部は回転ヘラ切り後、一方からのヘラ削り、さらに周囲に回転ヘラ削りを施す。口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を微量 内外面にぶい橙～灰ピンク色 普通	床直 80%
第144図 9	土師器 坏	口径 14.3 底径 9.4 器高 5.2	底部は平底で厚い。口縁部は直線的に強い角度で立ち上がる。口縁部内面に浅い沈線ないし段が付く。須恵器坏と同形。	底部は摩滅しているが、一方からのヘラ削りを施したとみられる。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を多量、灰色チャート微粒を少量 内外面橙色 普通	ほぼ床直 ほぼ完形 (口縁部に顕著な磨耗あり)
第144図 10	土師器 坏	口径 15.4 器高 4.1	底部は丸底で、全体的に半球形を呈し、口縁部は僅かに外傾する。体部と口縁部の境には器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部は多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土中位 70% 内外面黒色処理 (部分的)
第144図 11	土師器 坏	口径 13.9 器高 4.4	底部は丸底で、体部は丸みを帯びて深めに立ち上がる。口縁部は直線的に外傾し、体部との境に稜が付く。	底部に多方向からの粗いヘラ削り、体部に横位の粗いヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石、赤褐色スコリアを微量 内外面にぶい褐色 不良	壁溝上 90% 内外面黒色処理 (部分的)
第144図 12	土師器 坏	口径 13.4 器高 4.7	底部は丸底で、体部は丸みを帯びてやや深めに立ち上がる。口縁部は直立し、体部との境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石、赤褐色スコリアを微量 内外面にぶい黄橙色 不良	住居南隣、壁溝内 80% 内外面黒色処理 (部分的)
第144図 13	土師器 坏	口径 13.2 器高 4.5	底部は丸底で、全体的に半球形を呈し、口縁部は僅かに外傾する。体部と口縁部の境には器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面にぶい橙色 普通	覆土下位 ほぼ完形 外面黒色処理 (部分的)
第144図 14	土師器 坏	口径 14.0 器高 3.6	底部は丸底が平坦化した状態で、中央部がやや窪む。体部は丸みをもって浅めに開く。体部と口縁部の境には器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に一方からの強いヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量、赤褐色スコリアを微量 外面にぶい褐色、内面にぶい橙色 不良	床直 ほぼ完形 口縁部に顕著な磨耗 内外面黒色処理 (部分的)
第144図 15	土師器 坏	破片長 (9.0)	底部は丸底で、体部と口縁部の境に稜が付く。	底部中央は未調整、体部に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を少量 外面橙色、内面黒色 普通	覆土下位 20% 底部にヘラ記号状の刻線 内面黒色処理

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 16	土師器 椀	口径 [15.2] 底径 7.4 器高 6.3	底部は上げ底ぎみの平底で、体部は鉢状に深みをもつ。体部と口縁部の境には、器面調整の違いによる微かな稜が付く。	体部内外面に粗い横位の磨き、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面橙色 普通	覆土中～上位 40% (底部の70%残存) 底部に木葉痕 外面に黒斑
第144図 17	土師器 椀	口径 [18.0] 器高 (7.6)	体部は丸みをもって直立し、鉢状の深みをもつ。体部と口縁部の境に器面調整の違いによる小さな段が付く。	体部外面下位に横位のヘラ削り、中位にナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面暗灰褐色、内面黒色 良好	覆土 細片 外面口縁部・ 内面黒色処理
第144図 18	土師器 椀	口径 15.9 底径 6.5 器高 11.0	鉢ないし広口甕の形態を呈する。底部は平底で、体部は丸みをもって強く立ち上がり、口縁部との境に段が付く。	底部に縦横のヘラ削り、体部に横位のヘラ削り後、縦位のヘラナデを施す。口縁部および内面上位に回転ナデ、内面下位にヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面黄褐色 良好	覆土中位 ほぼ完形 体部中位に穿孔
第144図 19	土師器 盤	口径 [18.8] 器高 (2.8)	底部は丸底とみられ、体部は浅く大きく開く。口縁部と体部の境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 外面橙色、内面に ぶい褐色 普通	覆土中～上位 50%
第144図 20	土師器 盤	口径 [20.4] 器高 (2.6)	底部は丸みを帯びた平底で、中央部は肥厚する。口縁部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方向からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。口縁部に回転ナデ、内面に細かな磨きを施す。	微細な長石を少量 外面褐色 普通	覆土中位 20% (体部径 の30%残存)
第144図 21	土師器 盤	口径 [20.4] 器高 (2.6)	底部は平底で、口縁部は稜をもって立ち上がり、中位で屈曲して開く。口唇部は断面三角形を呈し、短く直立する。	底部周縁に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英 を少量 内外面にぶい 橙色 良好	覆土上位 10% (口径の 20%残存)
第145図 22	須恵器 坏	口径 14.5 底径 8.3 器高 4.2	底部は平底で、二次底部面をもつ。体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は縦横方向からのヘラ削り、周縁の二次底部面に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英 を少量、白雲母、 灰色スコリアを中 量 内外面灰白色 不良 (軟質)	覆土上位 70%
第145図 23	須恵器 坏	口径 [14.5] 器高 (4.3)	体部は直線的に立ち上がる。	体部下位にヘラ削り痕がなく、全体的に回転ナデが施されている。	微細な長石多量、 径1mmの長石・石 英を中量 内外面灰色 良好	SI-46覆土に 混入 20% (口径の 20%残存)
第145図 24	須恵器 坏	底径 9.4 器高 (5.3)	底部は平底で広く、周縁は丸みを帯びて漸移的に体部に至る。体部は直線的に立ち上がり、深みをもつ。	底部およびその周縁に回転ヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石を少 量、白雲母を微量 内外面灰白色 不良 (軟質)	床直 40% 底部に焼成後 の刃物痕
第145図 25	須恵器 坏	底径 6.0 器高 (2.4)	小型の坏。底部は丸みを帯びた平底で、やや突出する。体部は強い角度で外湾気味に立ち上がる。	底部およびその周縁に時計回りの回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	径1～5mmの長石・ 石英を中量 内外面青灰色 良好	覆土中位 30% (底部完 存)
第145図 26	須恵器 坏	底径 [9.8] 器高 (1.8)	底部は平底化で径が大きく、やや上げ底気味。周縁に二次底部面を持つ。	底部は強い回転ヘラ削りによって窪み、周縁に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石 英・褐色スコリア を中量、白雲母を 少量 外面暗灰色、内 面灰色 普通	覆土下位 20% (底部の 50%残存) 底部に「×」の ヘラ記号
第145図 27	須恵器 蓋	口径 [15.8] 器高 2.5	つまみは径が大きく扁平。体部は浅く開き、口縁部内側にごく小さなかえりが付く。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石 英、白雲母を少量 内外面灰白色 不良 (軟質)	覆土 40% (つまみ、 体部上位は完 存)
第145図 28	須恵器 蓋	底径 [16.0] 器高 (1.9)	体部は浅く開き、口縁部内側に小さなかえりが付く。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・ 石英を中量 内外面灰色 良好	SI-46覆土に 混入 20% (口径の 20%残存)
第145図 29	須恵器 蓋	口径 [16.8] 器高 (2.6)	体部はやや丸みを帯びて浅めに開き、口縁部周辺で屈曲する。口縁部内側に小さなかえりが付く。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石 英、白雲母を多量 内外面灰白色 不良 (軟質)	覆土下位 40% (口径の 30%残存)
第145図 30	須恵器 蓋	口径 [17.6] 器高 (1.8)	体部は直線的で浅めに開く。口縁部の内側に小さなかえりが付く。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石 英を中量 内外面灰色 良好	覆土下位 20% (口径の 30%残存)
第145図 31	須恵器 蓋	器高 (2.6) つまみ径 4.3	つまみは径が大きく、扁平な宝珠形を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石 英、白雲母を多量 内外面にぶい 褐色 普通	覆土下～中位 20% (体部上 位の40%残存)
第145図 32	土師器 甕	口径 [23.4] 器高 (16.0)	最大径は体部上位にあり、頸部は「つ」字状に屈曲する。口唇部は断面三角形に整えられる。	体部外面に軽い縦位のナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石 英を少量、白雲母 を少量 内外面にぶい 橙色 普通	覆土中位 40%
第145図 33	土師器 甕	口径 15.9 器高 (11.2)	最大径は体部中位にあり、頸部は断面「コ」字を呈する。口縁部は横に大きく開き、口唇部は短く直立する。	器壁が厚く、重い。体部に縦位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石 英を少量、骨針状 鉱物を微量 外面にぶい 褐色、内面 褐色 普通	覆土 40% (口径の 80%残存)
第145図 34	土師器 小型甕	口径 [11.6] 器高 (4.4)	体部は丸みを帯び、上位に最大径をもつ。口縁部は外反ぎみに直立する。	体部外面に縦位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位の軽いナデを施す。	ごく微細な長石・ 石英を微量 内外面暗灰褐色 普通	覆土中～上位 20% (口径の 30%残存)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 35	須恵器 甕	器高 (12.3)	体部は横に大きく張り出し、上位に最大径をもつ。	外面に同心円の叩き目を付け、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面灰色 不良(軟質)	覆土上位 10% (体部径の15%残存)
第145図 36	須恵器 甕	破片幅 (8.6)	甕ないし鉢の口縁部小片。口縁部内側に端整なかえりが付く。	外面に横位の平行線の叩き目、内面に横位のナデを施す。	微細な長石を少量、白雲母を多量 内外面灰色 普通(軟質)	覆土 細片
第145図 37	土師器 ミニチュア ア坏	口径 [5.3] 底径 2.6 器高 3.8	手捏ねのミニチュア土器。底部は平底、体部は直線的に開く。	指頭によって成形。内面に僅かにヘラナデを施す。	微細な褐色チャートを微量 内外面明褐色 普通	覆土 40% (底径の40%残存)
第145図 38	土師器 ミニチュア ア坏	口径 [5.5] 底径 2.0 器高 4.2	手捏ねのミニチュア土器。体部は丸く、短く立ち上がる。	全面的に指頭による成形。非常に粗い作り。	微細な長石微量 内外面にぶい褐色 普通	覆土 25% (底径の25%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第145図 39	土製品 円盤	6.1	5.5	0.4	13.2	手捏ねで粘土小塊を円盤状に成形したもの。表面に指頭圧痕が多く付く。	微細な長石を微量 にぶい橙色 良好	SI-46覆土に 混入 ほぼ完形
第145図 40	土製品 土鉢	9.0	3.4	3.4	126.0	孔は径1.6cm。手捏ねにより円筒状に粗く成形したもの。	微細な長石・石英を少量 にぶい褐色 普通	覆土下位 ほぼ完形

第46号住居跡〔第146・147図、PL.77〕

位置 調査区ほぼ中央N・O-23・24グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。遺構プランの大半を第45号住居跡と重複しており、第45号住居跡内に当住居のカマドが残されていることと出土遺物から当住居跡が新しいと判断した。

規模 長軸推定3.2m、短軸推定3.1mのやや横長の正方形を呈し、床面積は推定9.9㎡である。重複する第45号住居跡より新しいのだが、2軒同時に調査を行なったため遺構形状が不明確になってしまった。

主軸方向 N-19° - E

壁 残存している東側は外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で55cmを測る。

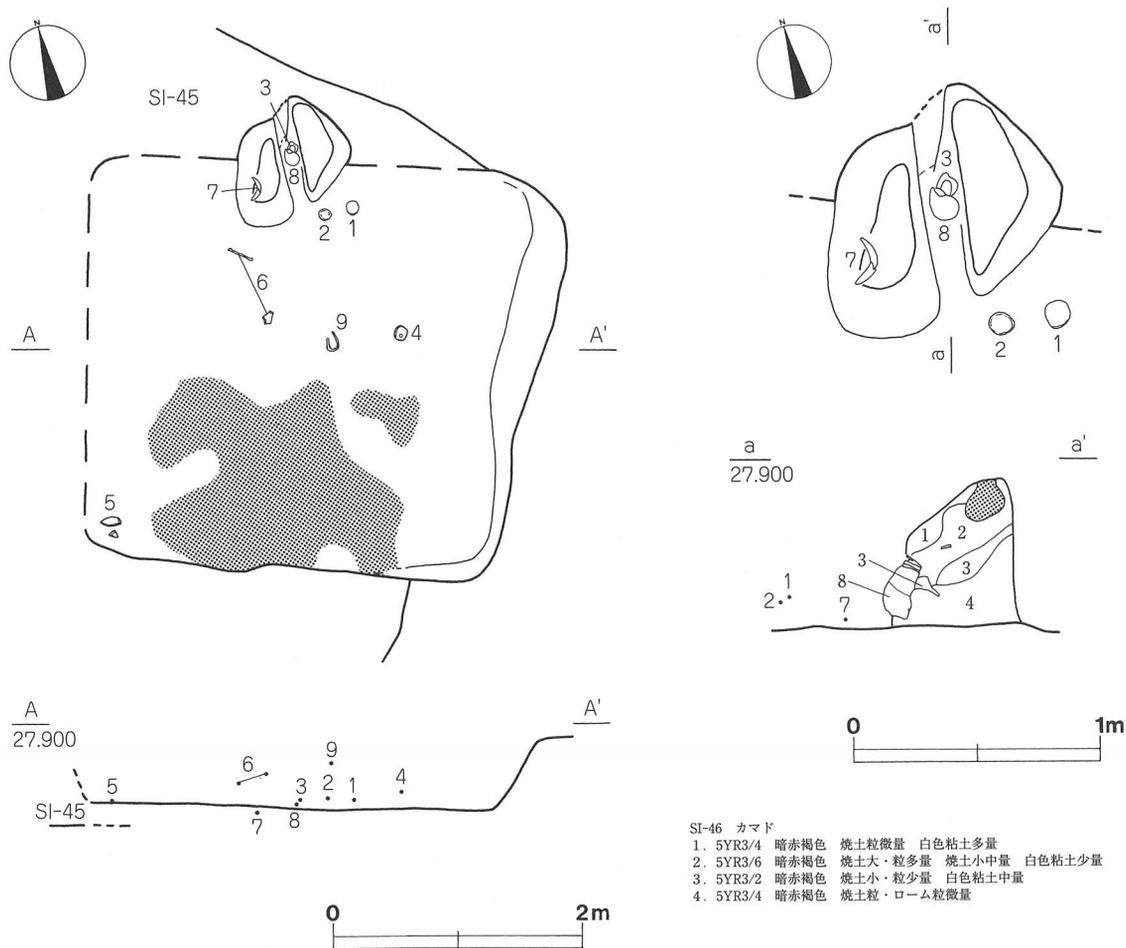
床 概ね平坦で、部分的に硬化面が確認された。また、南側で床面より高い位置に焼土が広範囲に広がっている。第45号住居跡の床面より18cm程高い。壁溝は確認されなかった。

ピット 確認されなかった。おそらく入り口部はカマドの位置と対をなす南側であろう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置すると思われる。壁外におよそ60cm掘り出されており、袖端部からの全長は1.05mを測る。燃焼部は床面とほぼ同じ高さで、奥壁にかけての形状は不明である。焚き口幅は12cmと狭い。遺物は燃焼部内と袖上、袖脇から出土している。

遺物 遺物の出土状況は、カマドの燃焼部内に小型甕が倒位に置かれて支脚代わりになっていた他、カマドの焚口付近から坏が2点並ぶように出土した。

No.1は内黒の土師器坏である。無台で底径が大きく、体部は直線的に開く。No.2～4は須恵器坏で、すべて新治窯産である。No.2がやや小型を呈するため、大小2法量が存在することになる。口径に対する底径の割合が6～5割を呈し、底部が小型化する途上の段階とみられる。No.5は須恵器の鉄鉢形土器で、口縁部に段をもつ。新治窯産でやや焼きは甘いが、作りは全体的に端整である。No.6～8は土師器甕である。No.6・7は一般的な大きさの甕、No.8は小型甕で、大小2種の法量が認められる。No.6・7はどちらも細身で長胴化の傾向を呈している。No.8は口径が大きく、粗雑な作りである。No.9は用途不明のU字形鉄製品である。鋕にしては足が長く、打ち込みに必要な敲打面が形成されていない。鋕の差込み金具もしくは類似の金具の一部であった可能性が考えられる。

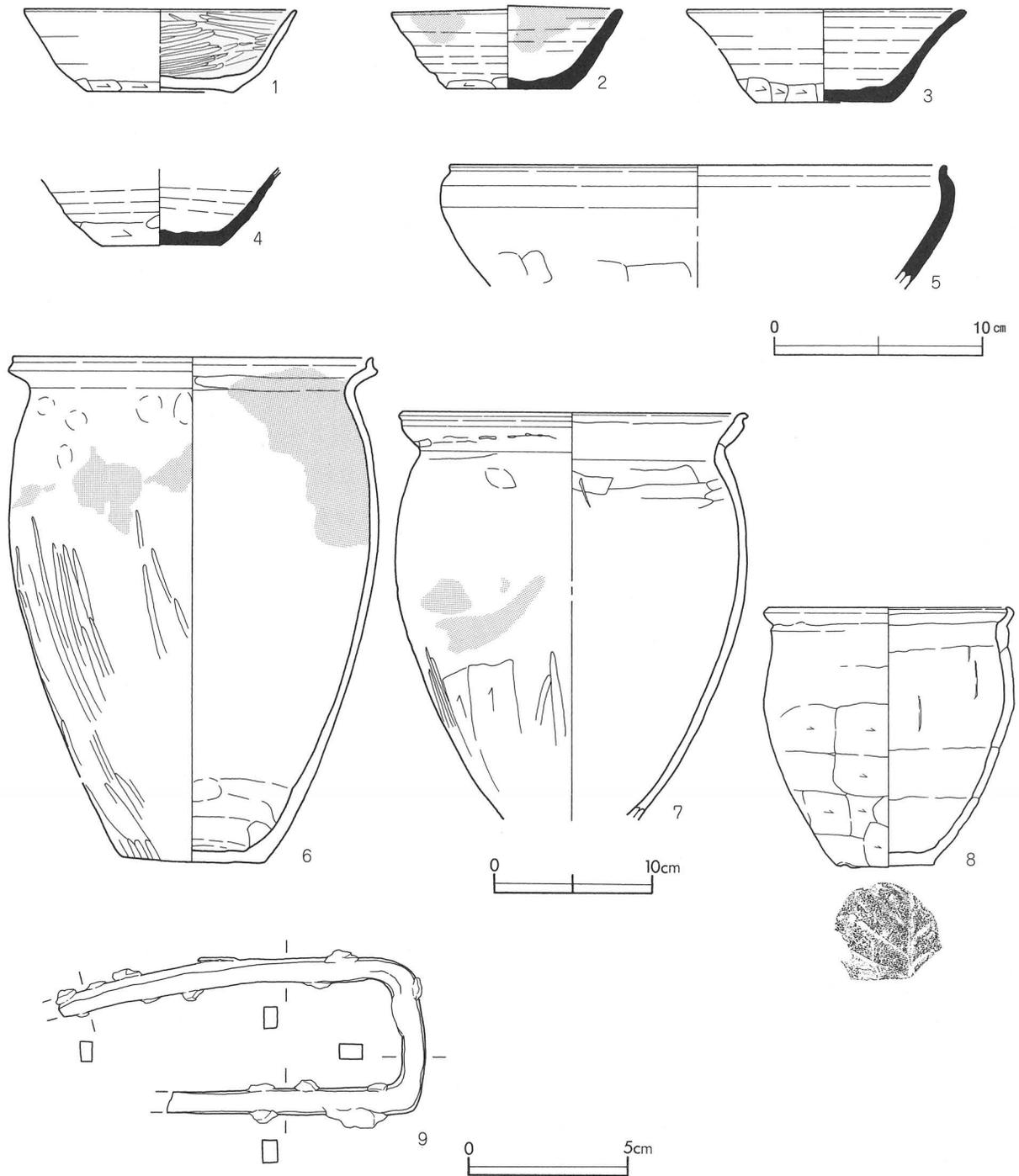


第146図 第46号住居跡・カマド遺物出土状況

所見 遺物の時期については、土師器坏の底径が大きく、一般の内黒椀にみる体部の丸みをもたないことなどから、9世紀前半から半ば頃の特徴を備えているとみられる。一方、須恵器坏の口径と底径の割合はそれよりも後出的な様相が強く、特にNo.3は新治窯跡では9世紀中葉から後葉に位置付けられる。供膳具における土師器と須恵器の割合では、まだ須恵器の割合が卓越している段階にあり、土師器内黒椀が主体となる9世紀末よりも先行すると思われる。よって、当住居跡は、9世紀中葉頃と考えておくのが妥当であろう。

第46号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第147図 1	土師器 坏	口径 [13.0] 底径 7.0 器高 3.9	体部は下位に丸みをもち、直線的に立ち上がる。口縁部は外反せず、素縁にまとまる。	底部に一方向からの強いヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削り、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 外面にぶい黄橙色、内面黒色 普通	カマド前、覆土下位 60% 内面・外面の口縁部付近黒色処理
第147図 2	須恵器 坏	口径 11.1 底径 6.1 器高 3.9	全体的にやや小ぶりで器壁も厚い。体部は直線的に開く。	底部は一方向からの強いヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面褐色 普通	カマド前、覆土下位 完形 口縁部に灯芯
第147図 3	須恵器 坏	口径 [13.3] 底径 6.3 器高 4.4	体部は外反ぎみに立ち上がる。	底部は一方向からの強いヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面を灰色 普通	カマド燃烧部 60% (底部は完存)
第147図 4	須恵器 坏	底径 6.7 器高 (3.6)	やや小ぶりの坏。底部は径が小さく、体部は僅かに丸みを帯びて立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石・石英、白雲母を少量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土下位 50% (底部は完存)



第147図 第46号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第147図 5	須恵器 鉄鉢形土器	口径 [25.6] 器高 (5.8)	体部は逆「ハ」字に開き、口縁部は外面に段が付く。	体部下位に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を中量、白雲母を多量 外面灰色、内面黄灰色 普通 (軟質)	床直 20% (口径の30%残存)
第147図 6	土師器 甕	口径 [20.6] 底径 9.2 器高 32.3	底部は比較的径が大きく、体部は細身に長く伸びる。口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部は直立する。	底部は未調整、体部下位に縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内底部付近に指頭ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面橙色 普通	覆土中～上位 30% (体部径20%残存) 内外面の上位に煤附着
第147図 7	土師器 甕	口径 [21.6] 器高 (25.9)	体部は細身に長く伸び、最大径を上位にもつ。口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部は段をもって小さく外反する。	体部下位に縦位のヘラ削りと磨き、口縁部に回転ナデ、内面に斜位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面におい黄橙色 普通	カマド構築土内 30% (口径の30%残存) 体部中位に煤附着
第147図 8	土師器 小型甕	口径 15.8 底径 6.5 器高 16.2	口径と体部中位の最大径がほぼ等しく、深鉢状の形態を呈する。口縁部は僅かに外傾し、内湾した口唇部をもつ。	体部下位から中位にかけて横位の粗いヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面におい褐色 普通	カマド燃焼部 70% 底部に木葉痕

図版番号	器種	法 量				特 徴	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第147図 9	鉄製品 U字状金 具	(11.7)	5.3	0.8	(31.2)	錠の一部か？断面方形の鉄棒が「U」字に屈曲する。敲打部がなく、釘や錠とは異なる。	覆土上位 30%？

第47号住居跡〔第148・149図、PL.21・78〕

位置 調査区中央M・N-26・27グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。他の遺構と重複の見られない単独の住居跡である。

規模 長軸4.06m、短軸3.6mの長方形を呈し、床面積は約14.6㎡である。

主軸方向 N-28° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で50cmを測る。壁溝はほぼ全周するが東壁と西壁の対向する箇所ですてぎれる部分がみられた。幅8～18cm、深さ4～7cmを測る。

床 概ね平坦である。北東のP6上面に粘土、P4南で焼土が狭い範囲で広がっていた。

ピット 7基確認された。配置と規模からP1～4は支柱穴、P5は入り口施設に伴うピット、P6は貯蔵穴と考えられる。支柱穴は円形を呈し、径26～28cm、深さ15～39cmを測る。深さの差異はあるが開口部の径はほぼ同じである。P5は径30cm、深さ26cmを測る。P6は円形で径50cm、深さ18cmを測る

カマド 北壁ほぼ中央に位置している。煙道部は攪乱により大きく壊されているものの、一部だが径12cm程のトンネル状となる部分が遺存していた。残存している部分の長さは82cm、燃焼部は両袖の端部より大きく中央に向かい張り出しており、床面を8cm程掘り窪めていた。両袖の遺存状態は良好で、焚き口幅10cm、被熱により著しく赤化していた。

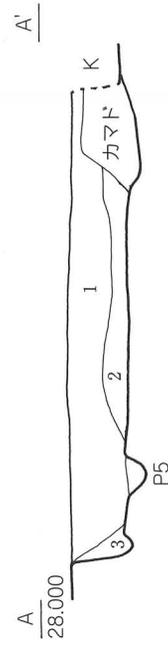
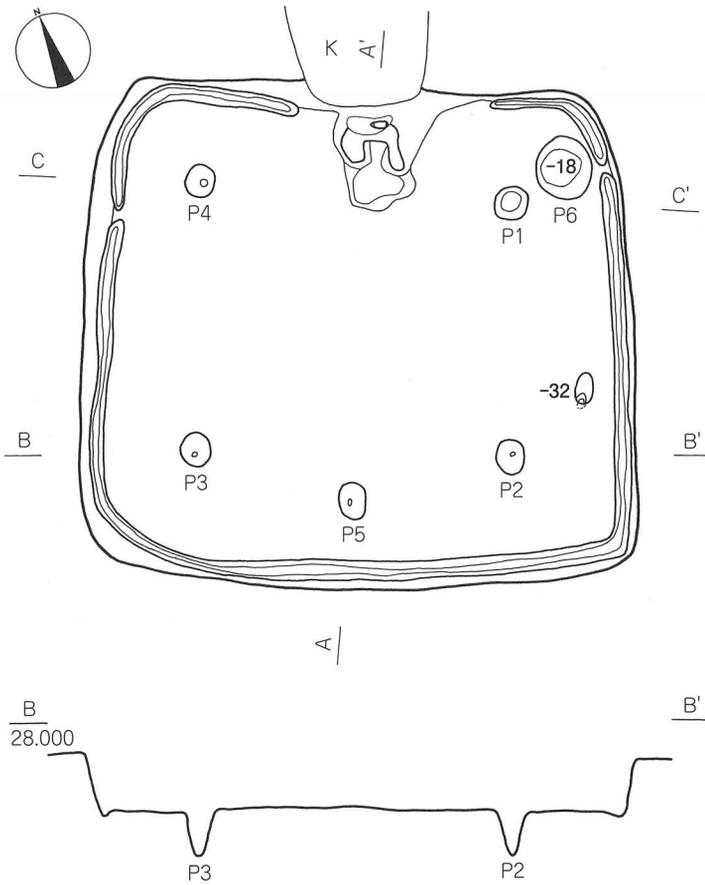
覆土 3層に分層される。いずれもローム質土の混入が見られ堆積状態から埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物はNo.13の土師器甕片が東側の貯蔵穴で発見された他、P3付近に若干の集中がみられた。床面直上から覆土上位に及んでいる。また、供膳具にみる土師器と須恵器の割合は、1対2で須恵器の方が主体となっている。

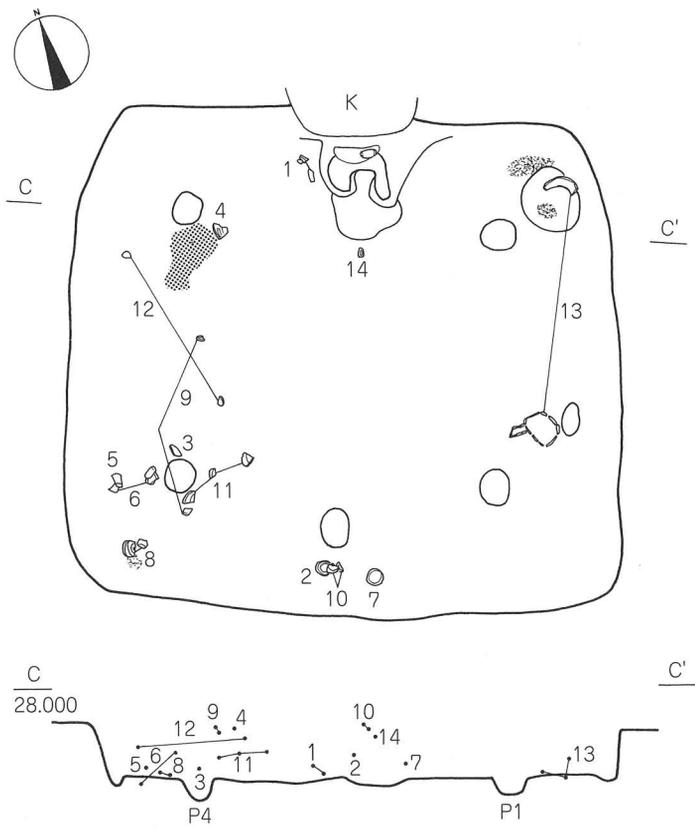
No.1～3は土師器坏である。丸底ないし平坦化した丸底をもち、体部には稜もしくは小さな段が付く。No.4は土師器坏の一種であるが、厚手で体部に深みがあるので椀とした。内外面に磨きが施されている。No.5～12は須恵器坏である。すべての胎土に白雲母の混入がみられ、新治窯産の製品と考えられる。形態はいずれも類似しており、底部は平底で径が大きく、体部は直線的で立ち上がりの角度が強い。14cm前後の口径に対して、底径は7.6～9.4cmまであり、底径の割合がかなり大きい段階にある。なお、No.11は、底部がやや丸底ぎみに突出しており、土師器坏と同様のヘラ削り調整が施されている。土師器から須恵器作りに転向した工人の癖とも考えられよう。

No.13は土師器甕である。体部下位にやや膨らみがあり、前時代的な特徴を残している。No.14は土錘の破片である。No.15は金銅製の帯金具ないし馬具の一種と思われる。これは当住居の北壁を壊して掘り込まれた攪乱坑から発見されており、必ずしも当住居跡に帰属するとは言えないが、関連する可能性を考慮してここに掲出した。

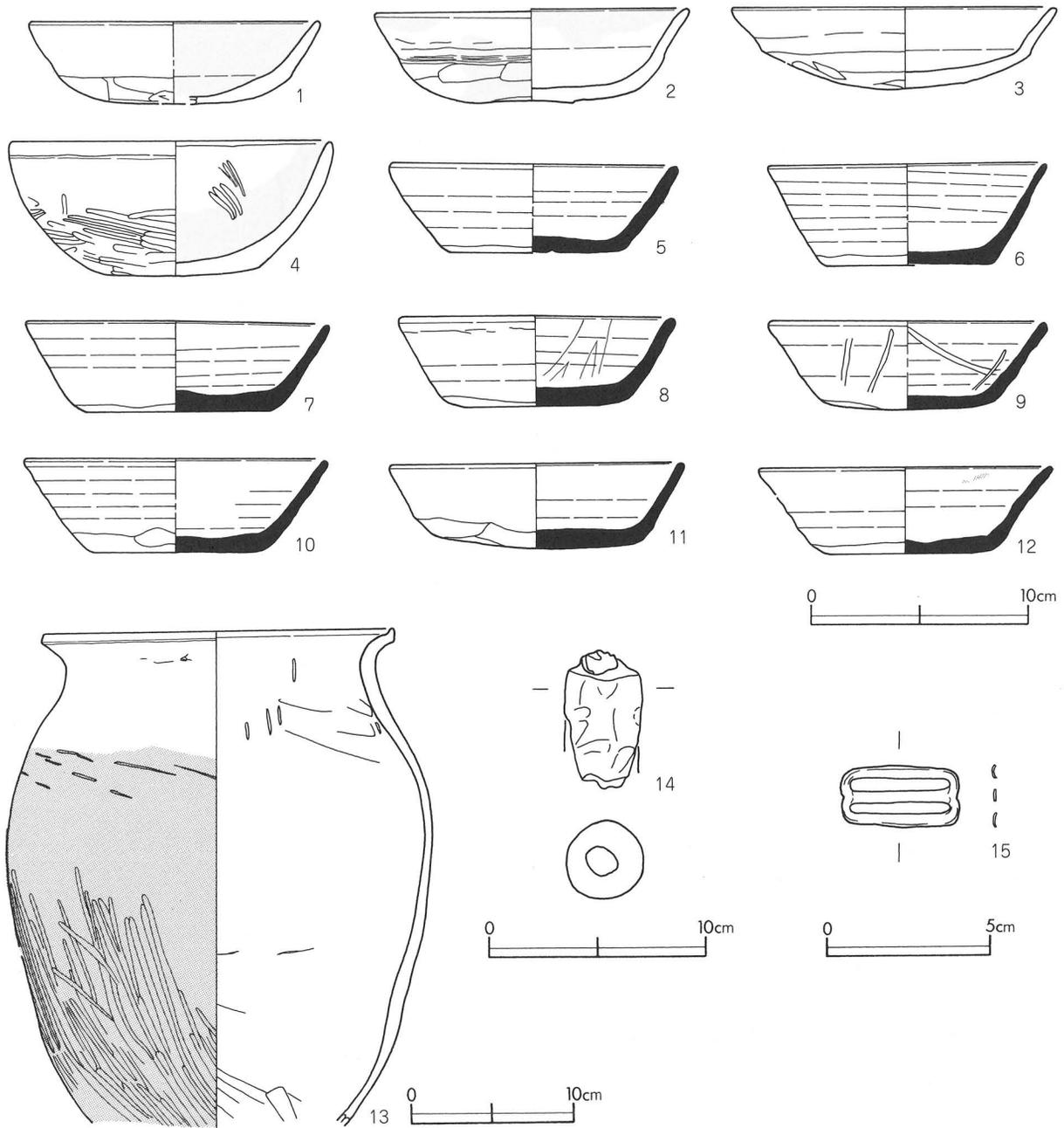
所見 遺物の時期は、底径の大きな須恵器の形態、および土師器の丸底坏の残存などから、8世紀前半でも半ばに近い頃の時期に充てることができる。なお、図示し得なかったが、須恵器蓋の破片が1点確認されており、これには一町田窯段階の退化したかえりが付けられている。土師器丸底坏の残存と併せて、8世紀初頭頃の土器組成を受け継いでいる様子が窺われよう。他住居跡との関連では、第30・37・



- SI-47
- 1. 暗褐色 ローム中少量 ローム小中量
 - 2. 暗黄褐色 焼土粒微量 ローム粒少量
 - 3. 暗褐色 ローム中・小中量



第148図 第47号住居跡・遺物出土状況



第149図 第47号住居跡出土遺物

40号住居跡など、土師器丸底坏と須恵器かえり蓋に代表される段階の直後に相当し、第1・35・38号住居跡など、須恵器坏が供膳具の主体をなす段階にほぼ対応するものと考えられる。

第47号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149図 1	土師器 坏	口径 [13.4] 器高 3.7	底部は平坦化した丸底で、口縁部は直線的に開く。	底部およびその周縁に多方向からのヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石、白雲母を微量 内外面にぶい赤褐色 普通	カマド脇、覆土下位 50% 内面黒色処理
第149図 2	土師器 坏	口径 14.2 器高 4.7	底部は平坦化の進んだ丸底で、体部と口縁部の境に微かな段が付く、口縁部は直線的に開く。	底部中央に一方からの強いヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面明赤褐色 普通	覆土中位 ほぼ完形 内外面黒色処理 (部分的)
第149図 3	土師器 坏	口径 [13.9] 器高 3.7	底部は丸底で、体部と口縁部の境に小さな段が付く。口縁部は直線的に大きく開く。	底部に一方からのヘラ削り、体部に不定方向のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土下位 50%
第149図 4	土師器 椀	口径 14.6 底径 7.3 器高 6.1	底部は平底で、体部は丸みをもって深手に立ち上がる。	底部および体部外面に粗いヘラ削りと磨きを施す。内面は横位の磨きで滑らかに整える。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい橙色 普通	覆土上位 50% 内面黒色処理 (部分的)
第149図 5	須恵器 坏	口径 [13.2] 底径 8.0 器高 3.4	底部は平底で径が大きく、体部は直線的に開く。	底部は多方向からのヘラ削り、体部下端に手持ち幅の狭いヘラ削りを施す。	径1mmの長石を微量、白雲母を中量 内外面灰褐色 普通 (やや軟質)	覆土下位 50%
第149図 6	須恵器 坏	口径 [12.8] 底径 7.6 器高 4.6	底部は平底で径が大きく、体部は強い角度で直線的に開き、深手である。	底部は回転ヘラ切り後、一方からの強いヘラ削り、体部下端に手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石を少量、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 普通 (やや軟質)	床直～覆土中位 50%
第149図 7	須恵器 坏	口径 12.1 底径 9.6 器高 3.9	底部は平底で径が非常に大きく、体部は浅めで直線的に開く。	底部は回転ヘラ切り後、一方からのヘラ削り、体部下端に手持ちヘラ削りを軽く施す。	微細な長石を少量、白雲母を多量 内外面灰黄色 普通 (やや軟質)	覆土中位 完形
第149図 8	須恵器 坏	口径 12.7 底径 8.0 器高 3.9	底部は平底で径が大きく、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りを施す。体部下位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面灰褐色 良好	床直～覆土下位 ほぼ完形 内外面に火襷
第149図 9	須恵器 坏	口径 [12.8] 底径 7.6 器高 4.0	底部は平底で径が大きく、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方からのヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 良好	覆土上位 50% 内外面に火襷
第149図 10	須恵器 坏	口径 [14.0] 底径 7.8 器高 4.3	底部は平底で径が大きく、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方からの強いヘラ削り、体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量 内外面暗灰黄色 普通	覆土上位 40% (底径60%残存)
第149図 11	須恵器 坏	口径 13.6 底径 9.6 器高 3.9	底部はやや中央が膨らんだ平底で、径が非常に大きい。体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は土師器丸底坏と同様に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。体部下位に手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石を少量、白雲母を中量 内外面灰黄褐色 普通	覆土中位 80%
第149図 12	須恵器 坏	口径 [13.6] 底径 7.7 器高 3.9	底部は平底で径が大きく、体部は強い角度で外反ぎみに立ち上がる。	底部に時計回りの回転ヘラ削り、体部下位にも時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面暗灰黄色 普通	覆土中～上位 60%
第149図 13	土師器 甕	口径 21.3 器高 (30.5)	最大径を体部中位にもつ。口縁部は「く」字に外反し、口唇部を小さく直立させる。	体部外面の中位以下に縦位の磨き、上位および内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 外面橙色、内面にぶい黄褐色 良好	一部貯蔵穴 床直～覆土中位 50% 体部下半に煤付着

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第149図 14	土製品 土錘	(6.3)	3.6	3.5	43.2	円筒状の土錘の破片。孔は径1.5cm。長軸方向に軽いヘラナデを施す。	微細な長石を中量 ぶい橙色 良好	覆土上位 30%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第149図 15	金銅製品 帯金具?	3.5	1.8	0.05	0.9	平面形態は「8」字状を呈し、断面は表面側に張りをもつアーチ形で非常に薄い。裏面に鍍金が残る。帯金具ないし馬具などの一部か?	北側攪乱坑内 破片だが完形 に復元可能

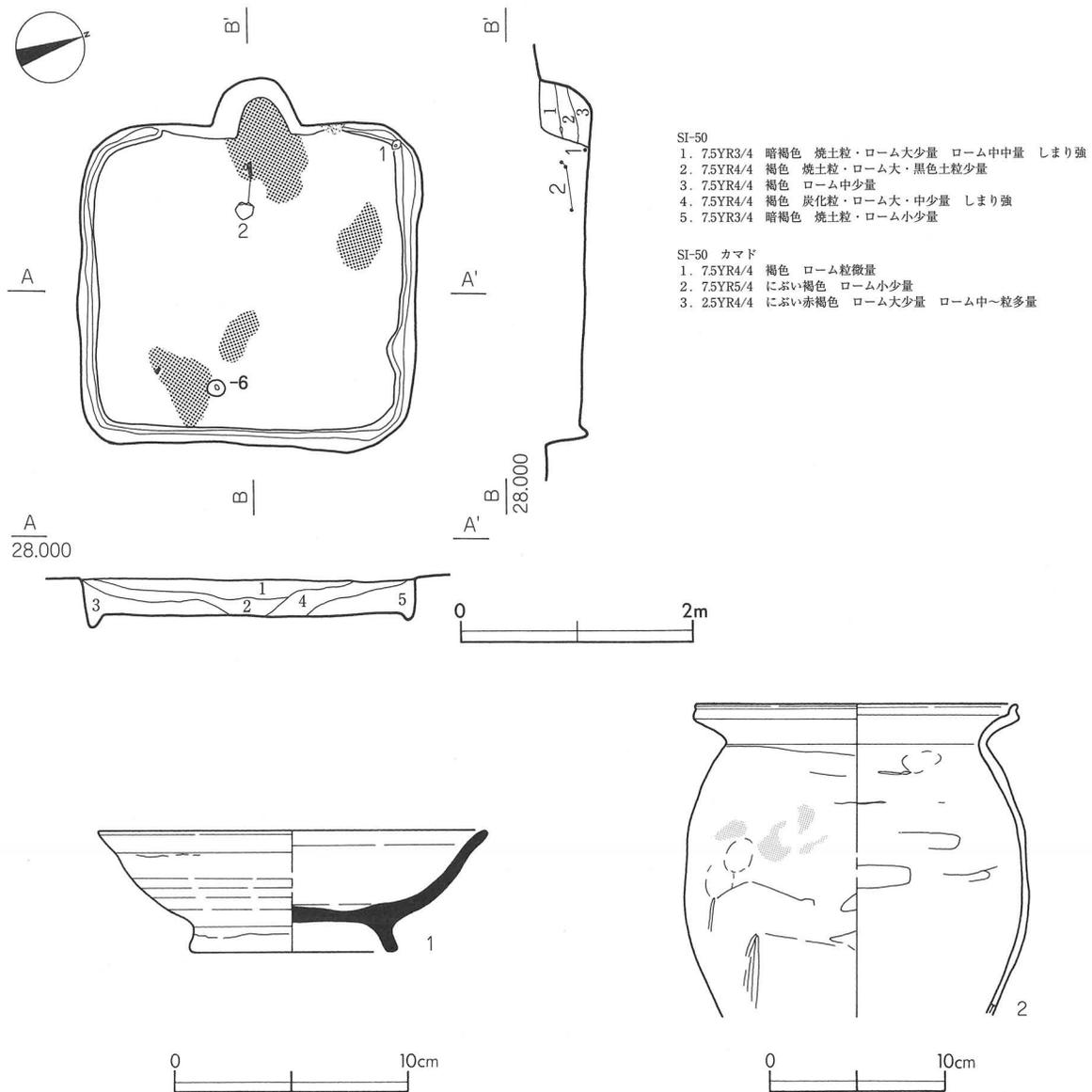
第50号住居跡〔第150図、PL.21・79〕

位置 調査区南西寄りG・H-26・27グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5mに位置する。

他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸2.55m、短軸2.5mの正方形を呈し、床面積は6.4㎡である。

主軸方向 N-72° -W



第150図 第50号住居跡・出土遺物

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で38cmを測る。壁溝はカマド付近を除きほぼ全周しており、幅8～14cm、深さ4～8cmを測る。

床 概ね平坦である。カマドの燃焼部を含めて4箇所焼土の散在範囲がみられた。

ピット 1基確認されたのみで、配置から入り口施設に伴うピットと考えられる。円形を呈し、径15cm、深さ6cmを測る。

カマド 西壁のほぼ中央に位置し、壁下場より50cm程壁外に掘り出して構築される。燃焼部は床面を7cm程掘り窪め、奥壁にかけて垂直気味に立ち上がっている。燃焼部内は広範囲に焼土が残っていた。両袖は残存しておらず、カマド右の壁際に見られる粘土があるいは袖の一部と考えられる。焼土上面から土師器甕 (No.2) が出土している。

覆土 5層に分層された。自然堆積であろう。

遺物 確認できた遺物はごく僅かであり、図示した2点以外はごく微細な破片ばかりであった。No.1は須恵器の高台付坏で、北側隅の壁溝より出土した。器形は丸みを帯びた体部と外反する口縁部をもち、

灰釉陶器碗の模倣を思わせる。胎土に白雲母を多量に含み、新治窯産であることは明らかであるが、同窯の製品にこうした形態は珍しい。No.2は土師器の甕で、カマド正面の覆土中位より出土した。一般的な長胴の甕であり、最大径は体部中位にある。口縁部は「く」字を描いて強く屈曲し、横に大きく開く。体部はこの屈曲部直前まで丸みをもっており、やや新しい段階の様相を示している。

所見 時期は、No.1を灰釉陶器の模倣とすると、少なくとも9世紀代に属するとみることができる。No.2の甕は第24号住居跡に類似のものがあり、同住居跡の遺物相は9世紀後半に充てることができる。よって、当住居跡も9世紀後半頃と考えるのが妥当であろう。

第50号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 1	須恵器 高台付杯	口径 [17.7] 底径 9.0 器高 5.1	体部は丸みを帯びて浅身の碗形を呈する。口縁部は僅かに外傾する。	底部および周縁に回転ヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英をごく微量、白雲母を多量 内外面黄褐色 不良(軟質)	北側壁溝内40%(底部は完存) 内面に使用による剥離顕著
第150図 2	土師器 甕	口径 [18.3] 器高 (17.9)	最大径は体部中位にあり、口縁部は「く」字に強く外反し、口唇部は短く外反しながら立ち上がる。	体部外面に横位のヘラ削りと縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい褐色 普通	覆土中～上位20%(頸部径の40%残存) 体部中位に煤付着

第51号住居跡〔第151～154図、PL.21・79～81〕

位置 調査区南西J・K-28・29グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.0mに位置している。東側で第7号溝と重複しており、土層堆積状態から本住居が古いと判断した。また、調査区内に残された樹木の関係で南西隅を調査していない。

規模 長軸4.0m、短軸3.74mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約15.0㎡である。

主軸方向 N-5°-W

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で57cmを測る。壁が調査された箇所では南東隅を除いて壁溝が全周している。幅10cm前後で、深さ3～8cmを測る。

床 概ね平坦である。南西隅に粘土範囲がみられた。また、中央やや南寄りでは床面より7cm程浮いた状態で小規模の貝ブロックが確認された。貝はハマグリとヤマトシジミである。

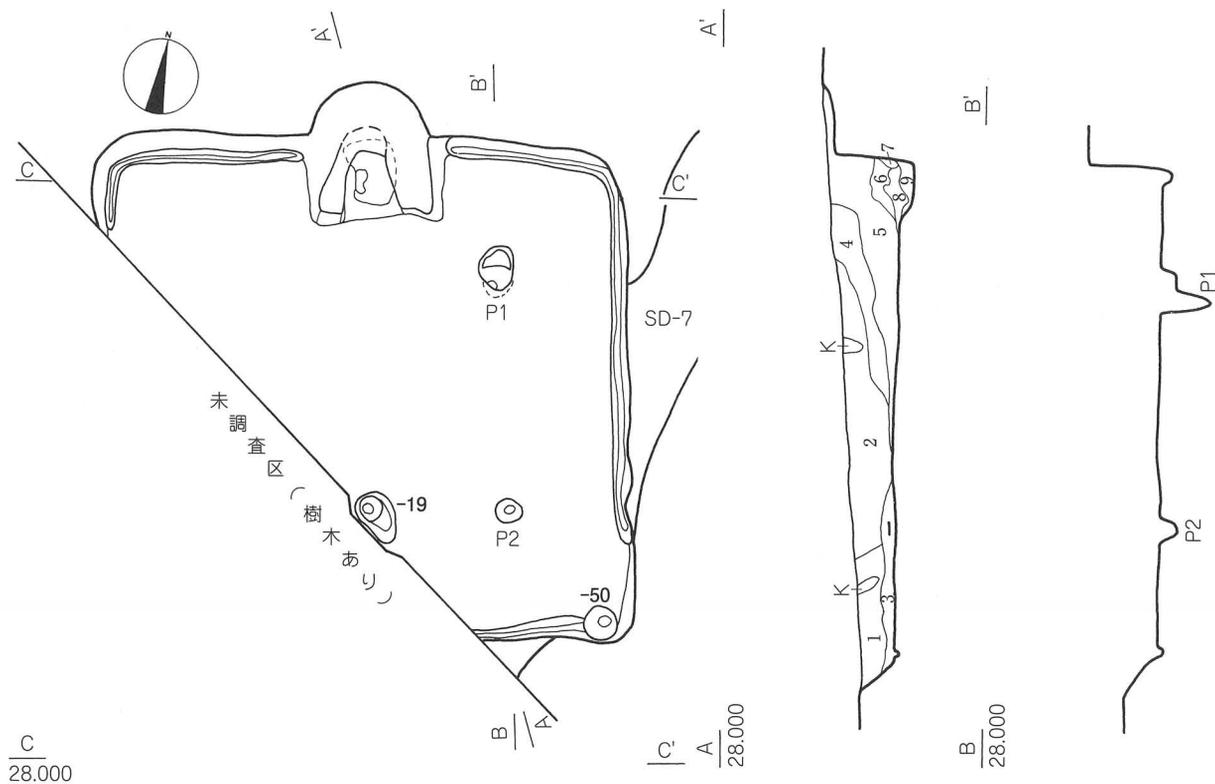
ピット 4基確認された。配置と規模からP1・2は主柱穴に相当しよう。円形・楕円形を呈し、径18・36cm、深さ47・49cmを測る。他の2基は径28・44cm、深さ19・50cmで深いほうのピットは壁際に位置している。入り口部はおそらくカマドの位置と対をなす南側であろう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場より65cm程壁外に掘り出して構築している。全長1.08m、燃焼部は床面を12cm掘り込んでおり、奥壁にかけてオーバーハングして立ち上がる。焚き口幅は40cmである。袖脇より小型壺と思われる(No.26)土器が出土している。

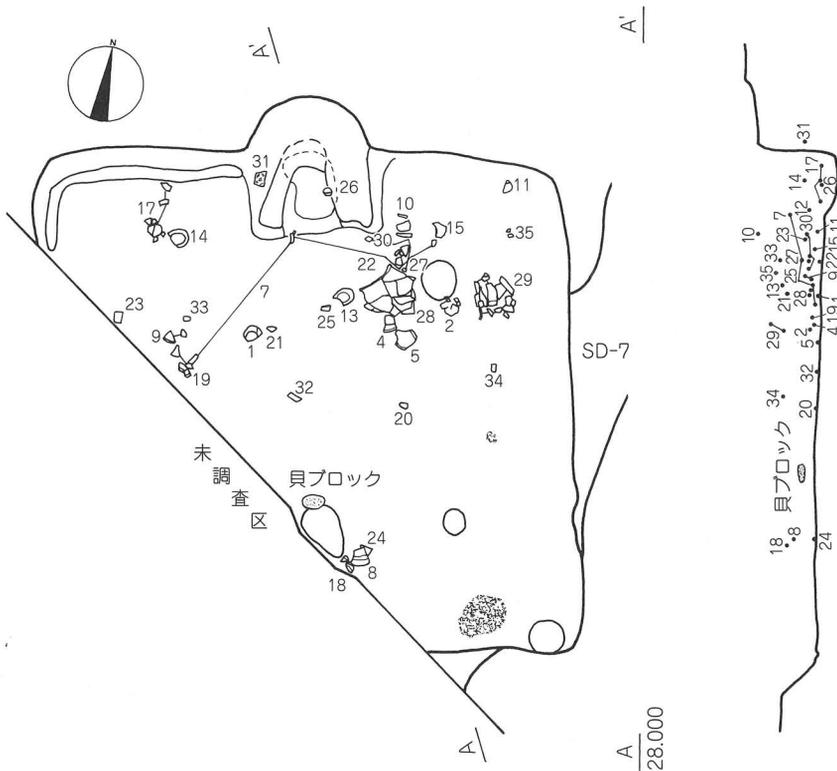
覆土 9層に分層される。第5～9層はカマドの覆土もしくは崩落に伴う堆積である。自然埋没による窪地の中に貝の廃棄を行なったのであろう。

遺物 遺物は豊富に確認され、特にカマドのある住居跡北部に集中していた。土器類は土師器杯を主体として、碗や盤、高杯、小型壺、甕、甌などバラエティーに富み、鉄鏃や鎌、青銅製飾り金具など稀有な遺物もみられる。須恵器の割合はごく僅かであり、混入品を除けば図示した杯2点と蓋1点、長頸壺、甕一個体分が全てである。

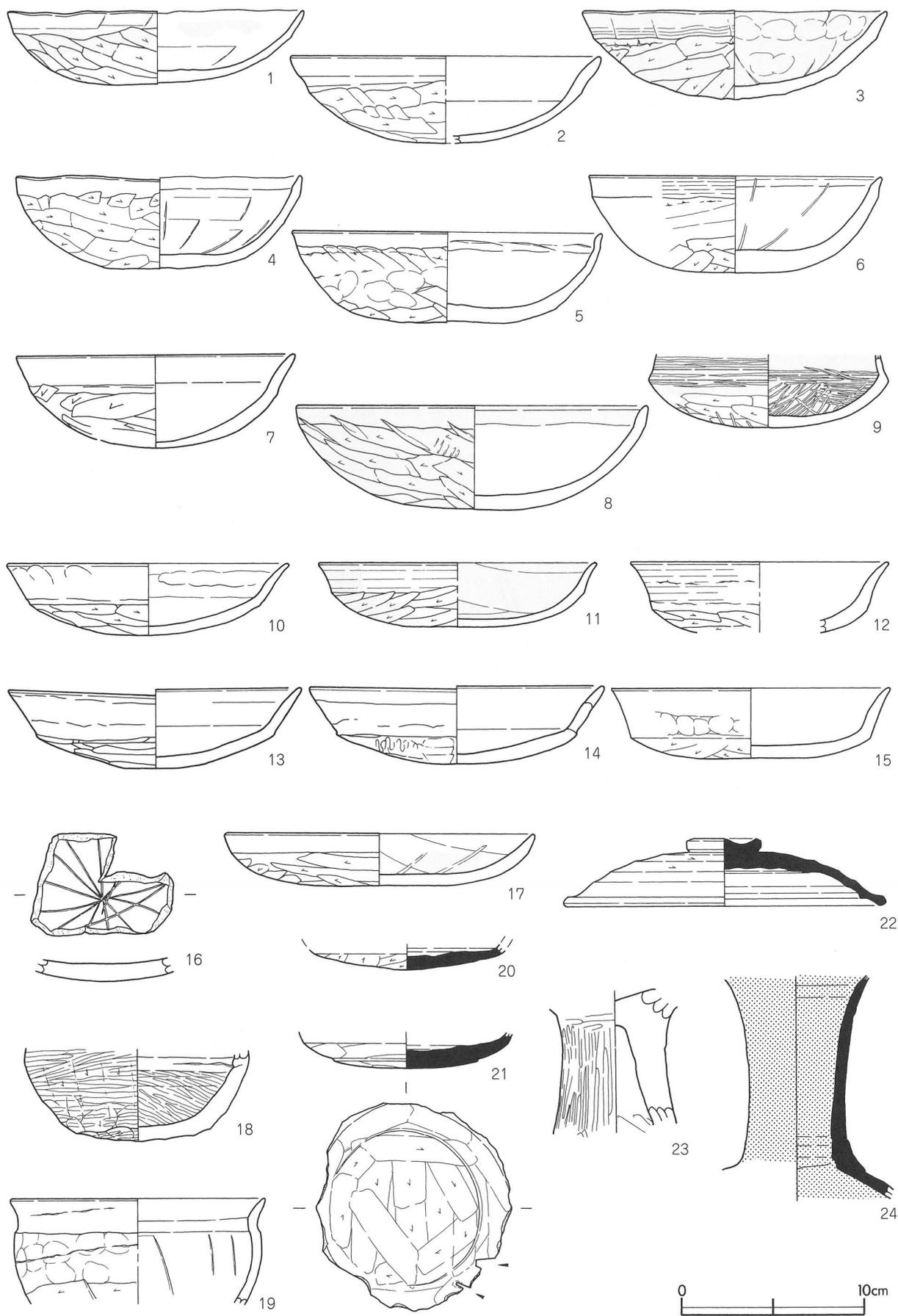
No.1～16は土師器の杯である。形態的には次の3種に大別できる。①底部は丸底で、体部と口縁部



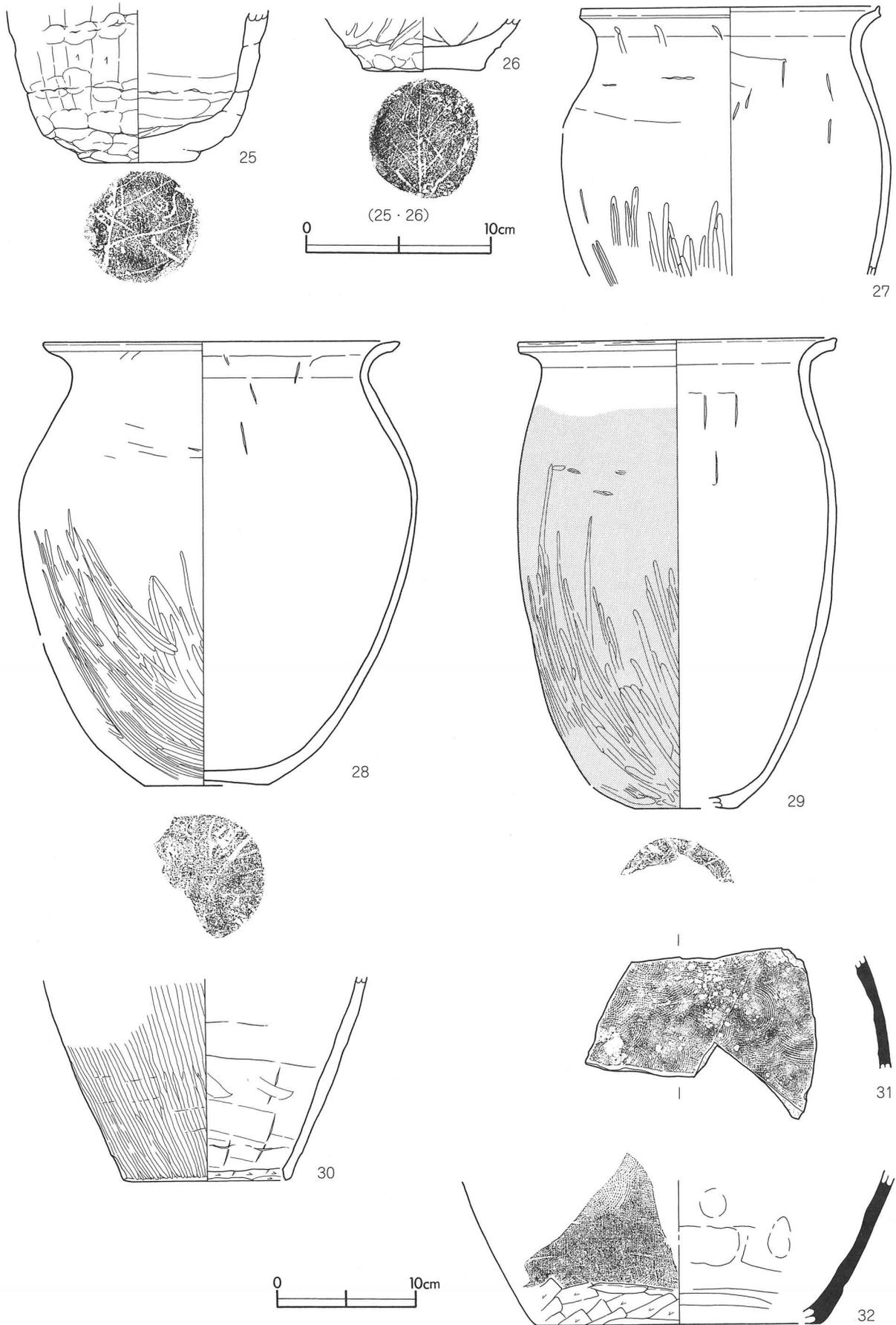
- SI-51
1. 7.5YR4/4 褐色 ローム粒少量
 2. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒・ローム粒・黒色土粒少量
 3. 7.5YR4/6 褐色 ローム粒微量
 4. 7.5YR4/6 褐色 ローム粒少量 黒色土粒中量
 5. 7.5YR4/6 褐色 焼土微量 ローム中・粒中量
 6. 7.5YR5/6 明褐色 ローム小・粒・砂多量
 7. 焼土
 8. 7.5YR4/6 褐色 焼土中～粒多量
 9. 7.5YR5/8 明褐色 焼土小多量 ローム中少量



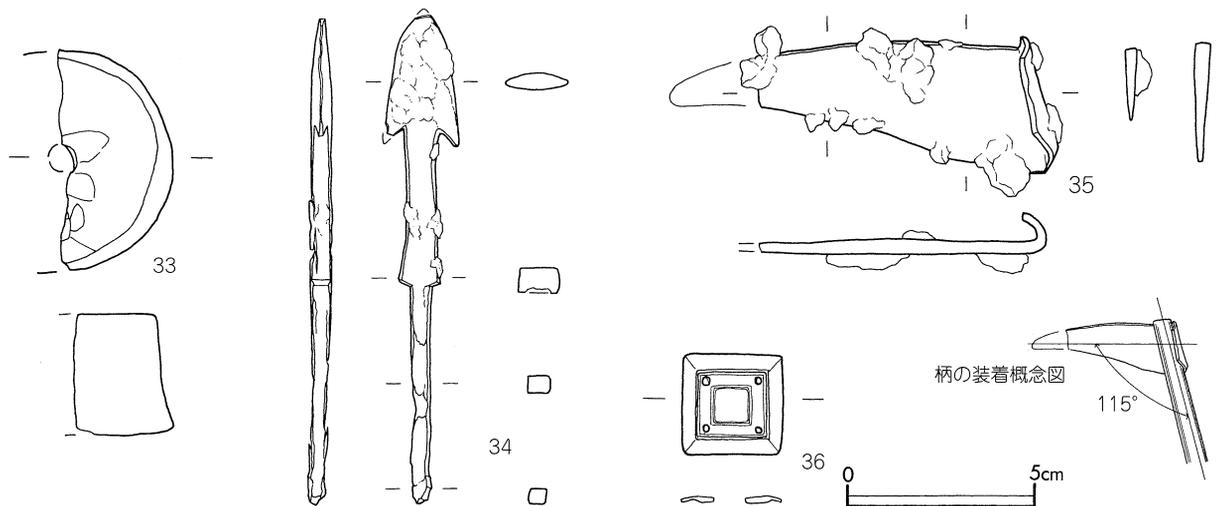
第151図 第51号住居跡遺物出土状況



第152图 第51号住居跡出土遺物（1）



第153図 第51号住居跡出土遺物 (2)



第154図 第51号住居跡出土遺物（3）

の境には微かな稜が付き、口縁は外に開くもの（No.1～8）。器高全体に占める口縁部の高さは2～3割程度で小さい。② 底部は丸底で、口縁部は体部との境に強い段をもって立ち上がり、古墳時代の須恵器杯の模倣を思わせるもの（No.9）。③ 底部は丸底で、口縁部は直線的ないし外反しながら強く立ち上がるもの（No.10～15）。器高全体に占める口縁部の高さは5～7割を占め、体部の割合は著しく小さく、底部との区別は困難である。これらの内、②に該当するのはNo.9が1点のみで、前時代の残滓的な存在とみなせよう。①と③では、①の形態が量的にやや卓越するが、両者とも一定量存在し、同様に大小の異なる法量や底部の平坦化が進んだものなども認められる。なお、③の形態にみる口縁部の拡大・体部と底部の一体化傾向は、平底杯のプロポーシオンに一步近づくものであり、丸底杯から平底杯への移行過程を示すと思われる。No.16は杯の底部小片であるが、内面に暗文を模倣した放射状の沈線が付けられている。暗文そのものはNo.6の杯にみられ、技術的に未知のものではないだけに興味深い資料である。No.17は土師器の盤である。No.18・19は、形態や器面調整が全く異なるものの、共に深身の供膳具とみられ、椀の一種と判断した。No.18は厚手に作られ、内外面に磨きを施す一方、No.19は杯と同じ作りで甕を思わせる深手の体部に仕上げている。No.20・21は須恵器の杯である。両者とも丸底で、土師器と同様の底部調整を施している。なお、No.21の割れ口には刃物痕が2箇所みられる。破片となった後、刀子の研磨や刃潰しなどに再利用されていたと思われる。No.22は須恵器の蓋である。大きなつまみをもち、口縁部内側にはごく小さなかえりが付けられている。杯と共に新治産の須恵器であり、形態的には一町田窯段階のものと考えられる。No.23は土師器高杯の脚部、No.24は須恵器長頸壺の頸部片である。No.24の胎土は非常に緻密な灰白色のもので、表面には自然釉が付着している。在地産の須恵器とは明らかに異なり、尾張方面の製品と推測される。床面直上からの出土である。No.25・26は突出した底部に木葉痕が付く袋状の器種である。甕に比べて厚手で粗雑な作りをしており、小型壺の一種と思われる。No.27～29は土師器甕である。体部が張るもの（No.27・28）と細身のもの（No.29）の2形態が確認できる。No.30は土師器の甑で、底部は全面的に開放している。No.31・32は須恵器で、同一個体と思われる。新治窯跡産とみられ、外面には同心円の叩き目が付けられている。No.33はやや大型の土製紡錘車、No.34はほぼ完形の鉄鎌、No.35は鉄鎌、No.36は青銅製の飾り金具の一種と思われる。

No.35の鎌は柄を装着するための屈曲部が残っており、その角度から、鎌刃の装着角度は約115度ないしそれ以上であったと推計された。No.36の金具表面には鍍金の痕跡がみられる。形態は銚帯に類似するが、平板状で厚さがなく、馬具の一種かと想像される。

所見 当住居跡の遺物の時期は、一町田窯跡段階の須恵器が存在することから、8世紀前半に属するものと考えられる。他の住居跡との関係では、土師器坏の①、③と同形態の坏を第6・29・30・37・40号住居跡に見出すことができる。いずれも供膳具は圧倒的に土師器が多い段階にあり、一町田窯跡段階のかえり蓋を伴う。土師器の盤は同じく第6・37号住居跡に加え、第45号住居跡からも出土している。さらに坏内面の暗文は第30・37号住居跡に例があり、深身の椀は第30・37・40号住居跡、外面に同心円の叩き目を施す須恵器の甕類は第6・29・37号住居跡、太身と細身の2種の土師器甕は第30号住居跡に類例を求めることができる。土師器盤や暗文坏、椀、同心円叩きの須恵器甕類などは該期の器種組成の特徴とみなせるものである。これらの公約数的な時期は、一町田窯跡の8世紀前半に加え、第6号住居跡の和銅銭から導かれる8世紀前葉である。当住居跡もこれに当てはめて考えるのが妥当であろう。さらに言えば、土師器坏の①と③では、③の方が平底坏に近くやや後出的であるが、当住居跡では①の方が量的には若干卓越している。他の住居跡ではいずれも③が主体であり、それらに対して当住居跡は幾分先行させることが可能である。よって、8世紀前葉の中でも初頭に近い時期を想定しておきたい。

なお、当住居跡の中央南寄りの地点からは貝殻ブロックが確認されている。床面より7cm程浮いたレベルで、ハマグリとヤマトシジミが出土した。総量は21.2gで内訳はハマグリ19.9g、ヤマトシジミ1.3gであった。いわゆる「地点貝塚」の一種とみられるが、奈良時代の事例は当地では非常に珍しいものである。

第51号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1	土師器 坏	口径 16.1 器高 4.1	底部は平坦化の進んだ丸底で、体部は浅めに開く。体部と口縁部の境は、器面調整の違いによる軽い稜が付く。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部と内面に回転ナデ、内底面にヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面灰褐色、内面に ぶい橙色 普通	床直 60% 内外面黒色処理 (部分的)
第152図 2	土師器 坏	口径 [16.8] 器高 (4.7)	底部は丸底で、体部は浅めに開く。体部と口縁部の境は、器面調整の違いによる軽い稜が付く。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面暗褐色 普通	覆土下位 60%
第152図 3	土師器 坏	口径 [16.6] 器高 4.8	底部は丸底で、体部は丸みをもって立ち上がる。体部と口縁部の境は、器面調整の違いによる軽い稜が付く。全体的に雑な作り。	底部は一方向からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内底面にヘラナデを施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面黒褐色 普通	覆土 40% (口径の 30% 残存) 内外面黒色処理
第152図 4	土師器 坏	口径 15.4 器高 5.2	底部は平坦面をもった丸底で、体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部と体部の境は、器面調整の違いによる軽い稜が付く。	底部は多方向からのヘラ削り、体部下半は反時計回り、上半は時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部は回転ナデ、内面にヘラナデを施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面橙色 普通	覆土下位 90%
第152図 5	土師器 坏	口径 16.8 器高 4.9	底部は丸底で、中央部に僅かな窪みをもつ。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部との境に器面調整の違いによる軽い稜が付く。	底部は一方向からのヘラ削り、体部下位に半時計回りの手持ちヘラ削り、上位はヘラナデと指頭圧痕、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を 中量 内外面にぶい褐色 普通	床直 80%
第152図 6	土師器 坏	口径 [16.0] 器高 5.1	底部は丸底で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部との境に軽い稜が付く。厚手の作り。	底部は一方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。内面に放射状の暗文を付ける。	微細な長石を少量 内外面暗灰褐色 普通 (やや軟質)	覆土 30% (底部周 辺は40%残存)
第152図 7	土師器 坏	口径 15.3 器高 5.0	底部は丸底で、体部は丸みをもって開き、口縁部との境に稜が付く。	底部は一方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面橙色 普通	覆土下位～中 位 80%
第152図 8	土師器 坏	口径 [18.9] 器高 (5.7)	やや大型の坏。底部は丸底で、体部は丸みをもって浅く開き、口縁部との境には器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に時計回り・反時計回りの双方向のヘラ削りを施す。口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を 多量 外面黒褐色、内面暗 褐色 普通	覆土中位 60% 外面・内面の 口縁部付近黒 色処理

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図9	土師器 杯	器高 (4.0)	底部は丸底で、体部は丸みをもって浅く開き、口縁部との境に強い稜が付く。口縁部は内傾して直線的に立ち上がる。	底部および体部下端に多方向からのヘラ削りと僅かな磨きを施す。口縁部の内外面と内底面に磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 外面にぶい赤褐色、内面黒褐色 普通	覆土下～中位 40% (体部径の40%残存) 内外面黒色処理
第152図10	土師器 杯	口径 [15.3] 器高 5.2	底部は丸底で、体部は丸みをもって浅めに開く。口縁部は器高の半分を占め、稜をもって大きく開く。	底部に縦横のヘラ削り、体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、灰色チャート粒を微量 内外面橙色 良好	覆土上位 60% (底部80%残存)
第152図11	土師器 杯	口径 [15.2] 器高 3.5	底部は平坦化の進んだ丸底で、体部は丸みをもって浅く開く。口縁部は器高の4割を占め、外反ぎみに立ち上がる。	底部に一方方向からの強いヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面赤褐色 良好	覆土下位 30% (体部径の30%残存) 内面・外面の一部に黒色処理
第152図12	土師器 杯	口径 [14.0] 器高 (3.8)	体部は丸みをもって浅めに開く。口縁部は器高の6割を占め、外反しながら大きく立ち上がる。	体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削り、上位は未調整、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面明褐色、内面明黄橙色 良好	カマド前、覆土下位 20% (口径の40%残存)
第152図13	土師器 杯	口径 16.0 器高 4.3	底部は丸底で、体部は浅めに開く。口縁部は器高の6割を占め、外反ぎみに大きく立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	覆土上位 90%
第152図14	土師器 杯	口径 16.2 器高 4.2	底部は丸底で、体部は浅めに開く。口縁部は器高の6割を占め、直線的に開く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 良好	覆土中位 90%
第152図15	土師器 杯	口径 [15.2] 器高 3.7	底部は平坦面をもち、体部は浅く開く。口縁部は器高の7割を占め、外反ぎみに強い角度で立ち上がる。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面橙色 良好	覆土下位 40% (底部は70%残存)
第152図16	土師器 杯	破片長 (7.4)	杯底部の小片。底部は平坦化の進んだ丸底を呈する。	底部に不定方向の手持ちヘラ削りを施す。内面に暗文模倣のヘラ書き沈線を放射状に付ける。	微細な長石・石英を少量 外面灰褐色、内面橙色 普通	覆土 細片 沈線は焼成前に施工
第152図17	土師器 盤	口径 16.8 器高 2.9	底部は平坦で、体部は丸みをもって浅く開く。口縁部は体部から連続して開き、断面は三角形を呈する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部は回転ナデ、内面にごく微かな暗文状の磨きを施す。	微細な長石を少量 内外面にぶい赤褐色 普通	覆土下位 70% 内面黒色処理 (部分的)
第152図18	土師器 椀	底径 [7.2] 器高 (4.8)	厚手で深身の椀ないし鉢状を呈する。底部は丸底で、体部は丸みをもって強く立ち上がる。	底部および体部外面に粗いヘラ削りと細かな磨きを施す。内面に斜位の粗い磨きを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	覆土上位 40% (底径の60%残存)
第152図19	土師器 椀	口径 [15.8] 器高 (5.7)	体部は深手で小型甕を思わせる。口縁部は外反しながら強く立ち上がる。	体部下位に横位のヘラ削り、上位に軽いナデと指頭圧痕、口縁部は回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい褐色 普通	覆土下位 30% (口径の50%残存)
第152図20	須恵器 杯	底径 10.2 器高 (1.0)	杯の底部片。底部は平坦化の進んだ丸底で、体部は強い角度で立ち上がるとみられる。	底部に縦横二方向からのヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を中量 内外面青灰色 良好	床直 20% (底部片のみ)
第152図21	須恵器 杯	底径 11.0 器高 (2.0)	杯の底部片。底部は丸底で、中央がやや突出する。体部は強い角度で立ち上がるとみられる。	底部中央に一方方向からのヘラ削り、周縁に時計回りの軽い手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面灰白色 普通 (やや軟質)	覆土中位 30% 破片端に刃物による刻み
第152図22	須恵器 蓋	口径 [17.4] 器高 3.7 つまみ径 4.0	つまみは径が大きく扁平で、体部は丸みを帯びて浅めに開く。口縁部周辺は緩やかに外反し、内側にごく小さなかえりが付く。	体部外面上位に反時計回りの回転ヘラ削り、他は回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面暗褐色 普通	覆土下位 50% (体部上位は完存)
第152図23	土師器 高杯	器高 (7.8)	脚部は径が太く、厚手に作られ、円筒状に長く延びる。	杯部内底面に縦横方向の磨き、脚部外面に縦位の磨き、内面に横位のヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土中位 30% (脚柱部は完存)
第152図24	須恵器 長頸壺	器高 (11.5)	頸部は円筒状に長く伸び、口縁部は「ハ」字に開く。肩部の張りは弱いとみられる。	頸部から口縁部にかけては、早いロクロ回転によって薄く引き上げられている。内外面に鮮緑色の自然釉がかかる。	ごく微細な長石、黒色粒子を微量、非常に緻密な胎土 釉は鮮緑色 良好	床直 20% (頸部完存) 尾張産か

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 25	土師器 小型壺	底径 6.2 器高 (8.1)	厚手で円筒状を呈する。煮沸に適さないため甕ではなく壺と思われる。底部は高台状に突出する。	粘土紐を積み上げて成形。底部周縁に指頭による粗い調整、体部は縦位のヘラ削り、内面に指頭ナデ、内底面に一部ヘラナデを施す。	ごく微細な長石を少量 外面灰褐色、内面明黄橙色 普通	覆土下位 20% (底部は完存) 底部に木葉痕
第153図 26	土師器 小型壺	口径 6.4 器高 (2.7)	厚手で粗い作りの壺。底部は高台状に突出する。	底部周縁に指頭ナデと圧痕、体部下位に部分的なヘラナデ、内面にヘラナデを施す。	微細な長石を微量 内外面明褐色 良好	カマド覆土中位 細片 (底部は完存) 底部に木葉痕
第153図 27	土師器 甕	口径 21.6 器高 (19.2)	やや細身の甕。最大径を体部中位にもつ。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は短く直立する。	体部下位に縦位の磨き、上位に横位のヘラナデ、口縁部内面に横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	覆土中位 50% (体部上位は完存)
第153図 28	土師器 甕	口径 25.8 底径 8.8 器高 32.0	体部は大きく張り出し、中位に最大径をもつ。口縁部は「つ」字に強く外反し、口唇部の直立はみられない。	体部下位に縦位のヘラ削りと磨き、口縁部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい褐色 普通	覆土中位 70% 底部に木葉痕
第153図 29	土師器 甕	口径 22.9 底径 8.4 器高 33.8	やや細身の甕。最大径は体部中位にあり、砲弾形を呈する。口縁部は「L」字に強く外反し、口唇部はごく短く直立する。	体部下位に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい橙色 普通	覆土上位 80% 底部に木葉痕 体部に煤付着
第153図 30	土師器 甗	口径 [12.0] 器高 (14.4)	体部は直線的に延びる。底部はヘラで全面的に切り開けられている。	体部下位に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 外面灰褐色、内面にぶい褐色 普通	覆土中位 20% (底径の60%残存)
第153図 31	須恵器 甕	破片長(16.5) 器高 (8.5)	甕の体部片。	外面に同心円の叩き目、内面に半円形の押え痕が付く。	微細な長石・石英を少量、白雲母を多量 外面黒灰色、内面暗灰色 不良 (軟質)	カマド覆土および覆土中位 細片 No.32と同一個体
第153図 32	須恵器 甕	口径 [21.0] 器高 (10.4)	甕の体部下位片。	体部下位に横位のヘラ削り、体部中位に同心円の叩き目、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を多量 外面黒灰色、内面暗灰色 不良 (軟質)	床直 細片 No.31と同一個体

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第154図 33	土製品 紡錘車	5.9	(2.9)	3.3	(62.7)	大型の紡錘車。手捏ねにより円筒状に成形。孔は径0.8cm。	微細な長石を少量 褐灰色 良好	覆土上位 50%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第154図 34	鉄製品 鉄鏃	(12.8)	1.9	0.7	(18.0)	平面形態は矢印状を呈し、小さなかえりをもつ。中茎や軸に木質の付着はみられない。	覆土 ほぼ完形
第154図 35	鉄製品 鏃	(8.4)	3.7	0.4	(24.5)	端部を折り返して柄の装着部を作る。刃は尖端ほど幅が狭くなっており、相当に使い込んだものとみられる。	覆土上位 70%
第154図 36	銅製品 帯金具?	2.7	2.7	0.2	4.6	馬具の一種か? 方形の透かし孔とその四隅に径1.5mmの鉋孔が空く。	覆土 完形

第53号住居跡 [第155～158図、PL.22・81・82]

位置 調査区南寄り L・M-29・30グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高26.5mに位置する。

他の遺構と重複のみられない単独の住居跡である。

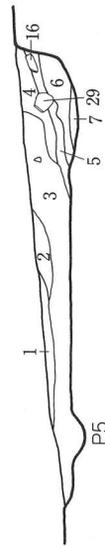
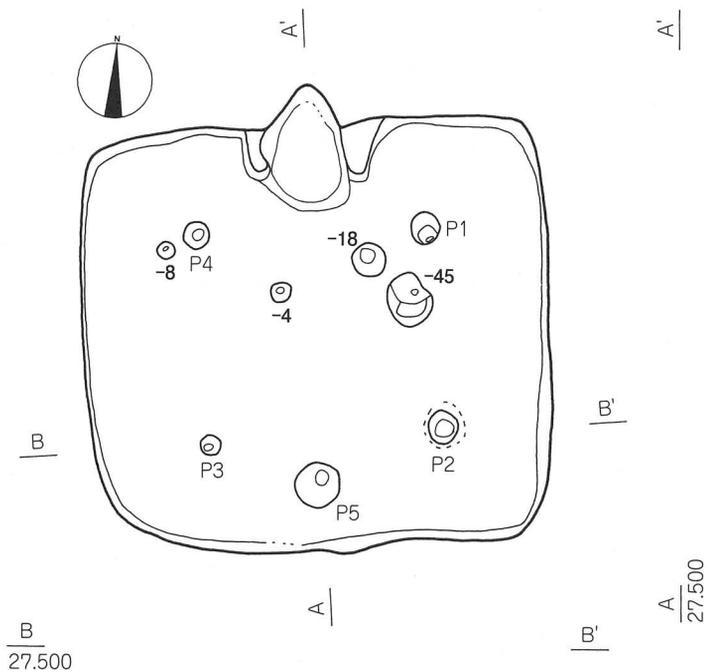
規模 長軸3.64m、短軸3.22mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約11.7㎡である。

主軸方向 N-4° -W

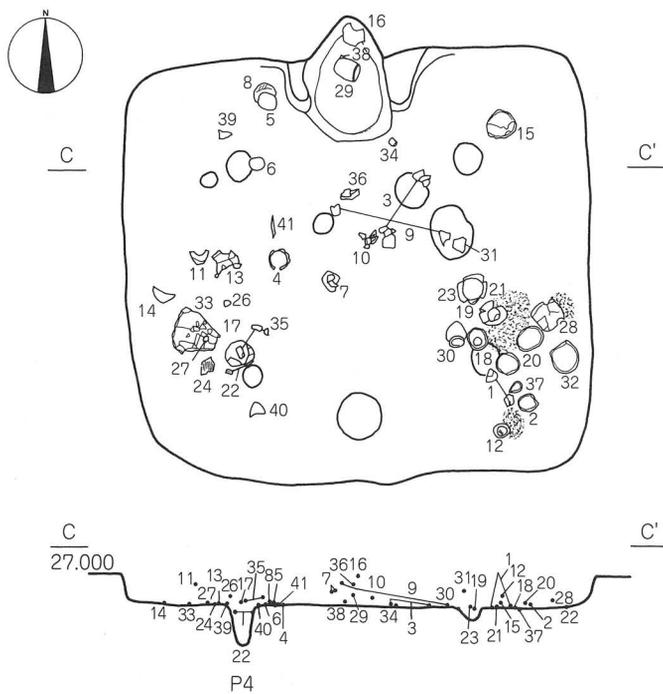
壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で32cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 概ね平坦である。P 2周辺に粘土範囲がみられた。

ピット 9基確認された。配置と規模からP 1～4は支柱穴、P 5は入り口施設に関連したピットに相当すると考える。支柱穴は円形を呈し、径16～26cm、深さ34～62cmを測る。開口部は比較的近似した



- SI-53
- 1. 7.5YR3/4 暗褐色
 - 2. 7.5YR5/6 明褐色 ローム大~小多量
 - 3. 7.5YR4/4 褐色 焼土粒・炭化物中量
 - 4. 7.5YR4/6 褐色
 - 5. 7.5YR4/4 褐色
 - 6. 7.5YR3/4 暗赤褐色
 - 7. 7.5YR4/8 赤褐色



第155図 第53号住居跡・遺物出土状況

大きさを、P 2 は底面全体が開口部よりオーバーハングしていた。P 5 は円形を呈し、径36cm、深さ10cmを測る。他のピットはP 1・4間に集中してみられ、径13～42cm、深さ4～45cmを測る。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場より壁外に44cm程掘り出して構築される。全長1.02m、燃焼部は床面を8cm掘り窪め、奥壁にかけて垂直気味に立ち上がる。焚き口幅は54cmで燃焼部は被熱により赤化していた。遺物は袖脇から土師器坏が口縁部を合わせるように（No.8が下でNo.5が上）、また燃焼部内は土師器の小型甕（No.29）が倒置した状態で出土している。

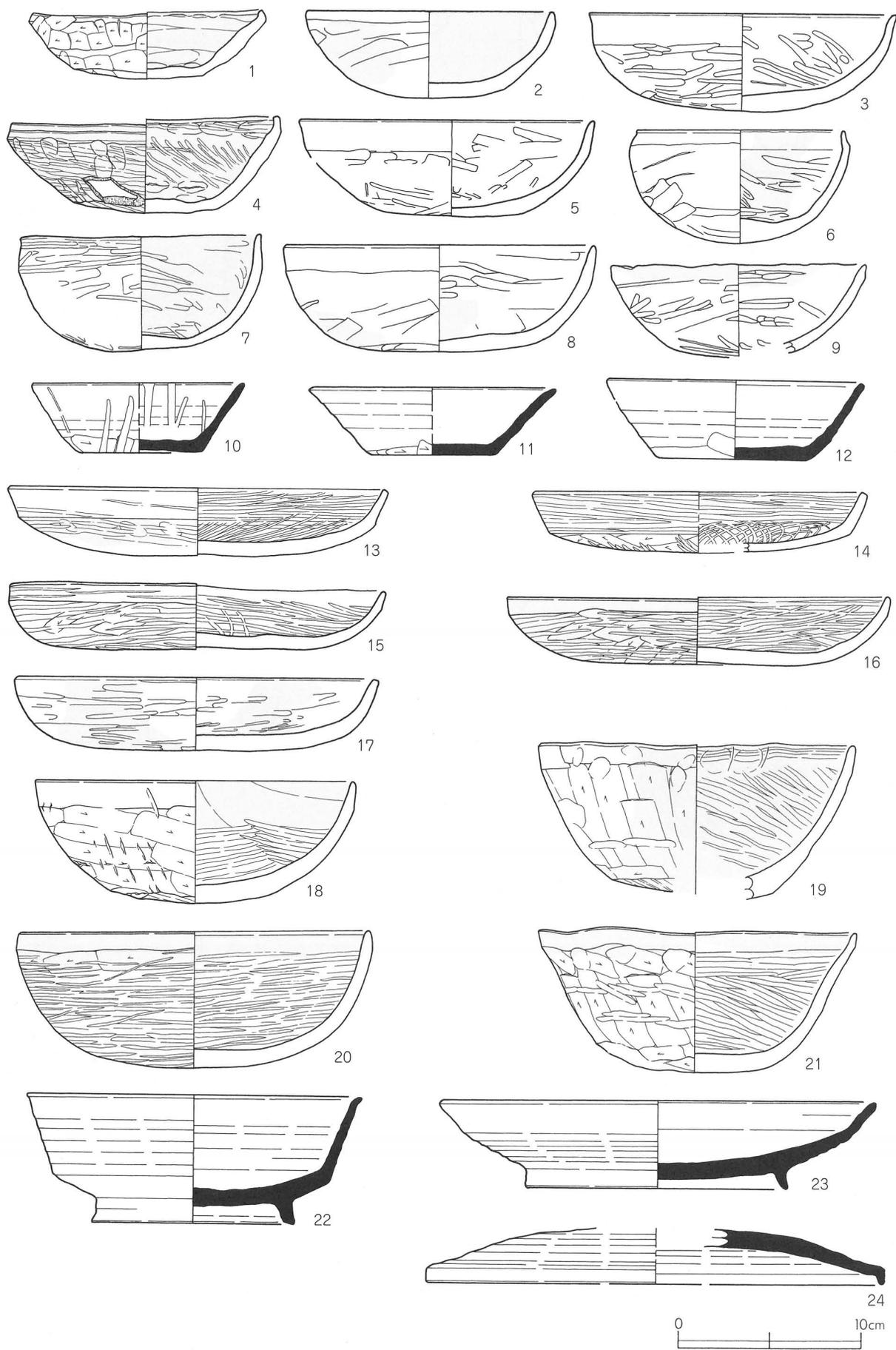
覆土 7層に分層された。第5～7層はカマドの覆土及び崩落土である。覆土の大半を占める第3層に焼土粒・炭化物が混入していることから埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物は豊富であった。カマド燃焼部から土師器の小型甕（No.29）や盤（No.16）が出土した他、床面直上に多数の坏・椀類が散乱した状態で発見されている。特にP 2付近からは、ほぼ完形を保つ坏・椀類、甕などが集められた状態で出土している。

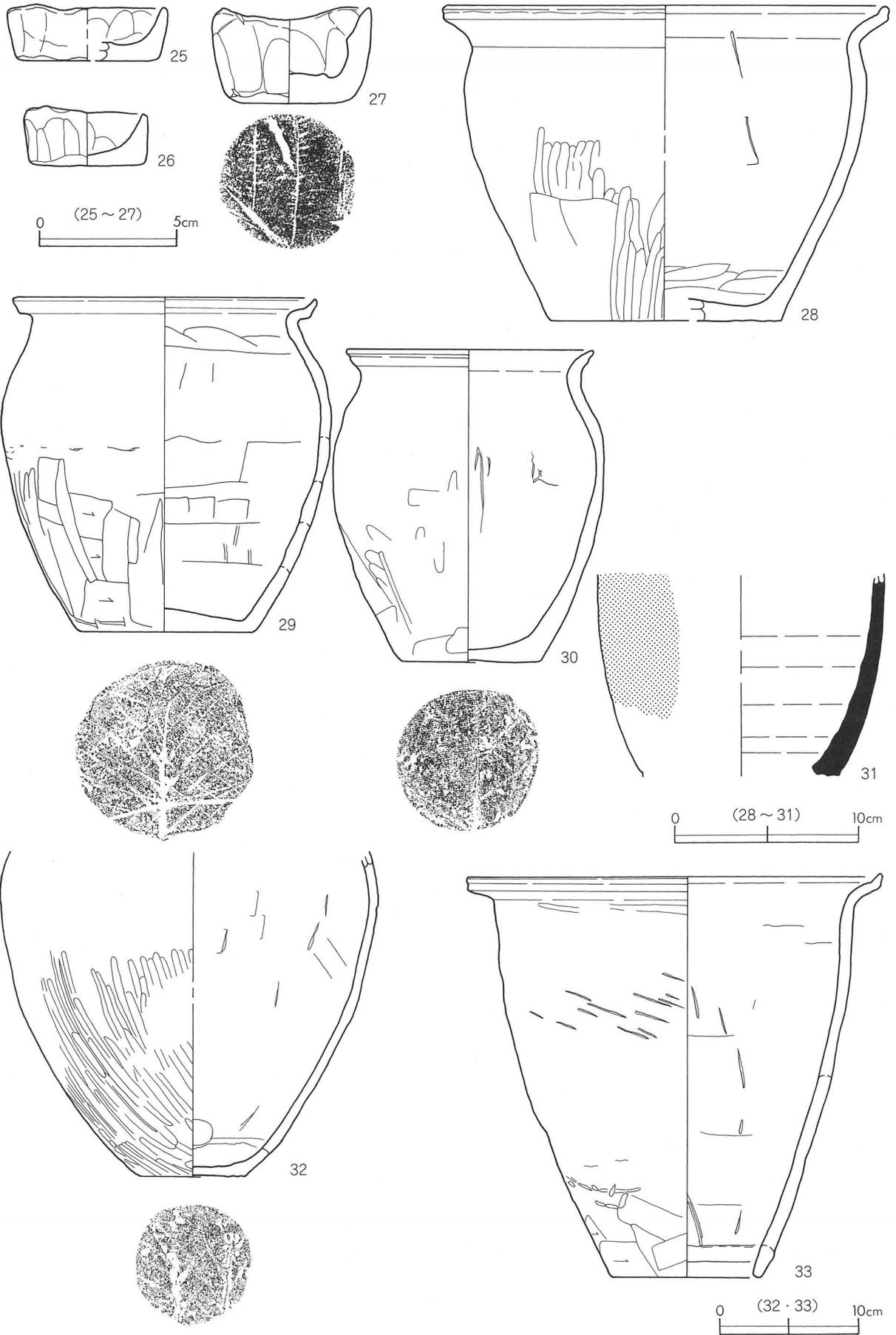
土器の器種構成は、土師器の坏、椀、盤、小型甕、甕、甗、ミニチュア坏などに加え、須恵器の坏、高台付坏、高台付盤、蓋などが若干量出土している。供膳具にみる土師器と須恵器の割合は3対1で、土師器が圧倒的に多い。

No.1～9は土師器坏である。体部が直線的に開くもの（No.1・4）や、丸みをもつもの（No.2・3・5・8・9）、半球状に深く椀を思わせるもの（No.6・7）など、器形にバリエーションがある一方、器面調整に磨きを多用する共通点がある。また、底部は基本的には丸底の範疇であるが、周縁に稜をもって体部と一線を画しているものがみられ、平底を強く意識している様子がみられる。No.10～12は須恵器坏である。いずれも平底で体部が直線的に開くタイプで、新治窯の製品である。口径は11.4～14.4cm、底径は6.7～8.5cmで、ややばらつきがあるものの、口径に対する底部の割合は5割を超えている。No.13～17は土師器の盤である。体部が浅く開き、口縁部をきつめに立ち上げる器形であるが、器面調整は坏と全く同じ技法を用いている。暗文を意識して内底面の磨きを円環状の軌跡で行ったものもみられ（No.14）、畿内産の土師器盤の模倣が窺える。No.18～21は土師器椀である。鉢ないし大型の坏とみることができ、ここでは一応、椀に区分することにした。製作・調整技法は坏と基本的に同一であるが、No.19・21は体部外面に縦位のヘラ削りを用いている。No.22は須恵器の高台付坏、No.23は高台付盤、No.24は蓋である。いずれも大型で、作りも丁寧である。No.22と23は新治窯産、24は産地不明であるが木葉下窯の可能性もある。No.25～27は手捏ね成形のミニチュア坏である。No.28はやや小型で広口の土師器甕、29・30は小型甕である。法量はそれぞれ異なるが、製作・調整技法、胎土などは同一である。No.31は須恵器の壺である。上半部と底部を欠失しているが、細身の形態から長頸壺と考えられる。外面には自然釉の付着がみられ、新治窯産とは異なる胎土である。No.32は土師器甕、33は甗である。No.34は土製紡錘車、No.35～38は手捏ねのカマド支脚である。No.39・40は凝灰岩および片岩製の砥石、No.41は鉄製の刀子であろう。

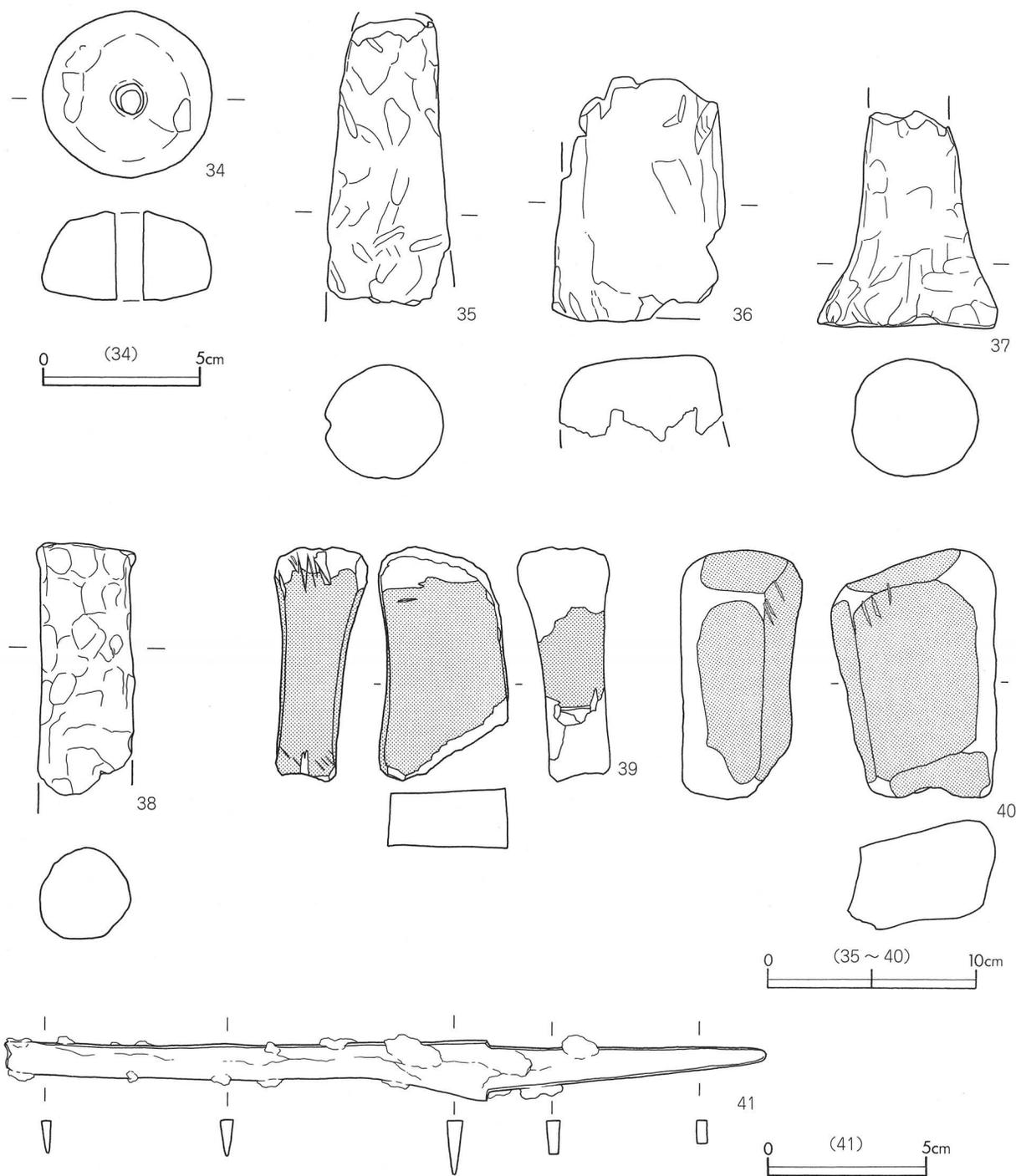
所見 遺物の年代は、須恵器坏の口径に対する底径の比率が5割強であることから、まずは8世紀半ばから9世紀初頭頃までの間に属すると考えられる。大型の高台付坏や盤については、新治窯の東城寺寄井前A単位群に類例をみることができ、その時期は8世紀半ばと考えられている。土師器の大型盤は、当地周辺では7世紀後半に出現し、8世紀後半には収束する傾向にある。それが多出している当住居跡を9世紀代にまで下げることは難しく、むしろ古めに考えるべきところであろう。これらから、当住居跡の年代は8世紀中葉頃に充てるのが妥当であると思われる。



第156图 第53号住居跡出土遺物 (1)



第157図 第53号住居跡出土遺物 (2)



第158図 第53号住居跡出土遺物（3）

なお、当住居跡の遺物群は以下の点で非常に特徴的であり、あえて所見を付記しておく。

- ①該期の供膳具は一般的には須恵器が主体を占めるのに対し、土師器の割合が非常に多いこと。
- ②土師器盤や深身の椀、磨きを多用した坏など異色な器種が多く、当遺跡内でも浮いた存在となっていること。
- ③土師器の供膳具の胎土にのみ、在地の土にはみられない骨針が微量ながら混入していること。甕、甑などは当地に一般的な土師器の胎土であり、須恵器もほとんどが新治窯産で在地的であるのと対照的である。

第53号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第156図 1	土師器 坏	口径 12.5 底径 6.6 器高 3.7	底部は丸みをもった平底で、体部は僅かな丸みをもって開き、口縁部は小さく内傾する。全体的に厚手で粗い作り。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面にナデを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 外面にぶい黄橙色、 内面黒褐色 普通	床直 ほぼ完形 内面黒色処理
第156図 2	土師器 坏	口径 13.5 底径 8.0 器高 4.6	底部は丸底で、体部は丸みをもって深めに立ち上がり、口縁部は直立する。	体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面明赤褐色 普通	ほぼ床直 完形 内外面黒色処理（外面は部分的）
第156図 3	土師器 坏	口径 16.7 器高 5.2	底部は丸底で、体部は丸みをもって大きく開く。口縁部は短く直立し、口唇部を僅かに外反させる。	底部に一方方向からの磨き、体部に横位のヘラ削りと磨きを施す。口縁部に回転ナデ、内面に横・斜位の磨きを施す。底部に黒斑状の焼成ムラ。	微細な長石・石英を中量、骨針をごく微量 内外面にぶい黄褐色 普通	床直 80%
第156図 4	土師器 坏	口径 14.4 底径 7.0 器高 5.2	底部は丸みをもった平底で、体部は直線的に開く。口縁部は小さく内傾する。全体的に厚手に作られる。	底部に一方方向からの磨き、体部に横位のヘラ削りと磨き、内面に横・斜位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面黒褐色 普通	床直 ほぼ完形 体部下位に径2cmの穿孔 内外面黒色処理
第156図 5	土師器 坏	口径 [16.0] 底径 7.0 器高 5.1	底部は平底で、体部は丸みをもって深めに立ち上がり、口縁部は直立する。	底部に一方方向からの磨き、体部に横位のヘラ削りと磨き、内面に軽いナデと磨きを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい橙色 普通	床直 50%
第156図 6	土師器 坏	口径 11.3 器高 6.0	深手の坏ないし小型の碗形を呈する。底部から体部にかけて半球形を呈し、口縁部は内傾する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面にぶい黄褐色 良好	床直 完形 内面黒色処理（部分的）
第156図 7	土師器 坏	口径 13.1 器高 5.2	深手の坏ないし小型の碗形を呈する。底部から体部にかけて半球形を呈し、口縁部は直立する。	底部に一方方向からの磨き、体部内外面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 外面にぶい黄褐色、 内面黒色 普通	覆土中位 60% 外面口縁部・ 内面黒色処理（外面は希薄）
第156図 8	土師器 坏	口径 17.0 底径 10.8 器高 4.7	大型の坏。底部は平底で、体部は丸みをもって深めに立ち上がり、口縁部は直立する。	底部に二方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英、 灰色チャート粒を少量、骨針をごく微量 内外面にぶい橙色 普通	床直 ほぼ完形 内外面黒色処理（部分的）
第156図 9	土師器 坏	口径 [13.8] 器高 (4.7)	底部は丸底で、体部は丸みをもって深く立ち上がり、口縁部は短く直立する。	底部に一方方向からの磨き、体部に横位のヘラ削りと磨き、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面にぶい橙色 普通	床直・覆土上位 40% 内外面口縁部 付近黒色処理（部分的）
第156図 10	須恵器 坏	口径 11.4 底径 3.7 器高 6.7	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方方向からのヘラ削りを施す。体部下端に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面灰黄色 普通	覆土下位 60% 内外面に火瘃
第156図 11	須恵器 坏	口径 [13.4] 底径 [6.8] 器高 3.6	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、多方向からのヘラ削りを施す。体部下端に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面灰色 良好	覆土中位 40%（底部径の50%残存）
第156図 12	須恵器 坏	口径 14.0 底径 8.5 器高 4.2	底部は平底で径が大きく、体部は直線的に立ち上がる。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下端に軽い手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石・石英、 白雲母を少量 内外面灰黄色 普通（やや軟質）	覆土下位 70%
第156図 13	土師器 盤	口径 [20.4] 器高 3.6	体部は浅めに大きく開き、軽い稜をもって口縁部が立ち上がる。	体部に横位のヘラ削りと磨き、口縁部にナデと軽い磨き、内面に横位の磨き、内底面に軽い放射状の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 外面にぶい黄褐色、 内面褐色 普通	ほぼ床直 80% 内外面黒色処理（部分的）
第156図 14	土師器 盤	口径 [18.0] 器高 (3.2)	体部は浅めに大きく開き、明確な稜をもって口縁部が立ち上がる。口唇部は平坦に整えられ、全体に端整な作り。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削りと一方方向からの磨き、口縁部に横位の細かな磨き、内底面に円環状の磨きを施す。	微細な長石・石英、 灰色チャート粒を中量 内外面にぶい黄褐色 良好	床直 50% 口縁部黒色処理（部分的）
第156図 15	土師器 盤	口径 20.1 器高 3.6	底部は平坦で大きく、体部は丸みをもって部分的に強く立ち上がる。体部と口縁部の境には器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に一方方向からのヘラ削りと磨き、体部に横位のヘラ削りと磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面にぶい黄褐色 良好	床面やや上 ほぼ完形
第156図 16	土師器 盤	口径 20.4 器高 4.9	底部は平坦で、体部は丸みをもって浅めに開く。体部と口縁部の境には器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に一方方向からのヘラ削りと磨き、体部に横位のヘラ削りと磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 外面灰黄色、内面に ぶい褐色 普通	カマド覆土 50% 内外面黒色処理
第156図 17	土師器 盤	口径 19.8 器高 3.9	厚手の作りで重い。底部は平坦で、体部は浅めに大きく開く。体部と口縁部の境はなく、連続して立ち上がる。	底部に一方方向からの磨き、体部と口縁部に横位の磨き、内底面に直線的な磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面にぶい橙色 良好	床直 (No.22と重なる) ほぼ完形 内外面黒色処理（部分的）
第156図 18	土師器 碗	口径 17.2 底径 8.6 器高 6.5	底部と体部の境に微かな稜が付く。体部は丸みをもって深く立ち上がり、口縁部は直立する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面にぶい橙色 普通	床直 ほぼ完形 内面黒色処理（部分的）
第156図 19	土師器 碗	口径 17.0 底径 8.4 器高 (8.3)	底部と体部の境に微かな稜が付く。体部は僅かに丸みを帯びて強く立ち上がり、口縁部は直立する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に縦位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に斜位の磨きを施す。	微細な長石・石英を中量、骨針をごく微量 外面にぶい黄褐色、 内面黒色 普通	床直 70% 内外面黒色処理（部分的）

図版番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第156図 20	土師器 椀	口径 18.8 器高 7.5	底部は丸底で体部に連続する。体部は半球状を呈し、口縁部は直立する。	底部に多方向からのヘラ削りと磨き、体部に横位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面にぶい橙色 良好	ほぼ床直 ほぼ完形 内外面口縁部 付近黒色処理
第156図 21	土師器 椀	口径 17.0 底径 7.6 器高 7.6	底部は丸底で、緩やかな屈曲をもって体部に続く。体部は直線的に大きく立ち上がり、口縁部は直立する。	体部に縦位のヘラ削りと横位の部分的な磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横・斜位の磨きを施す。	微細な長石・石英を微量、骨針をごく微量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直 80% 内外面口縁部 付近黒色処理
第156図 22	須恵器 高台付杯	口径 18.2 高台径 11.0 器高 6.7	大型の高台付杯。高台は直立して端部を張り出す。体部は横に大きく開き、角度を変えて直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに外傾する。	底部は切り離し後に回転ヘラ削りと回転ナデ、体部内外面に回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を少量 内外面灰色 良好	床直 完形
第156図 23	須恵器 高台付盤	口径 23.6 高台径 14.2 器高 4.7	高台は径が大きく僅かに開く。体部は浅く大きく開き、口縁部は緩い角度で立ち上がる。	底部は切り離し後に回転ヘラ削りと回転ナデ、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面灰黄色 普通（やや軟質）	床直 90%
第156図 24	須恵器 蓋	口径 14.6 器高 2.9	体部は浅めに大きく開き、口縁部は直角に屈曲する。	体部外面の上位に回転ヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面灰黄色 良好	床直 30%（口径の 30%残存）
第157図 25	土師器 ミニチュア ア杯	口径 [5.6] 底径 [5.2] 器高 2.0	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がり、臼状を呈する。	粘土塊を窠ませて器状に成形する。内面に指頭による摘み上げ痕が残り、外面に指頭ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面橙色 良好	カマド覆土 30%（底径の 40%残存）
第157図 26	土師器 ミニチュア ア杯	口径 4.4 底径 4.2 器高 2.2	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がり、臼状を呈する。	粘土塊を窠ませて器状に成形する。内面に指頭による摘み上げ痕が残り、底部と体部外面に指頭ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面橙色 良好	覆土下位 完形
第157図 27	土師器 ミニチュア ア杯	口径 5.4 底径 4.4 器高 3.4	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がり、臼状を呈する。	粘土塊を窠ませて器状に成形する。内面に指頭による摘み上げ痕が残り、体部外面に指頭ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面橙色 良好	床直(No.33の直上) 完形 底部に木葉痕
第157図 28	土師器 甕	口径 [23.6] 底径 [12.7] 器高 16.9	広口の甕ないし鉢状を呈する。最大径は体部上位にあり、口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部を短く直立させる。	体部下半に横位のヘラ削りと縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい橙色 良好	覆土下位 40%（口径の 40%残存） 底部に木葉痕
第157図 29	土師器 小型甕	口径 16.3 底径 9.8 器高 18.1	最大径は体部上位にあり、口縁部は「つ」字に屈曲し、口唇部は「ハ」字に開く。	体部下半に横位のヘラ削りと縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 良好	カマド燃焼部 完形 底部に木葉痕
第157図 30	土師器 小型甕	口径 13.2 底径 7.4 器高 16.9	最大径は体部上位にあり、やや細身を呈する。口縁部は「く」字に緩やかに屈曲する。口唇部は外反しながら強めに立ち上がる。	体部下半に横位のヘラ削りと縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1～2mmの石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい橙色 普通	床直 完形 底部に木葉痕
第157図 31	須恵器 壺	器高 (10.8)	長頸壺の体部片か。僅かに丸みを帯びて強い角度で立ち上がる。	内外面に回転ナデを施す。外面に自然釉の付着あり。	微細な長石、灰色チャート粒を微量 外面暗灰色、内面灰色 良好	覆土中位 細片（体部径 の20%残存）
第157図 32	土師器 甕	底径 7.6 器高 (23.4)	最大径は体部上位にあり、体部は張りをもって長く延びる。	体部下半に縦・斜位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を非常に多量、白雲母を少量 内外面橙色 良好	床直 50%（体部下 半の40%残存） 底部に木葉痕
第157図 33	土師器 甌	口径 28.0 底径 5.6 器高 29.2	底部は底抜けの一孔に作り、体部は僅かに丸みを帯びて長く延びる。口縁部は横方向に大きく開き、口唇部を短く直立させる。	体部下端に横位のヘラ削り、体部中位に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面明黄褐色 良好	床直 70%

図版番号	器種	法 量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第158図 34	土製品 紡錘車	5.4	5.3	2.8	86.5	丸みを帯びた独楽状を呈する。孔は径0.8cm。使用により器面が剥離している。	微細な長石・石英を中量、骨針を微量 明赤褐色 良好	床直 完形
第158図 35	土製品 支脚	(13.7)	5.8	5.6	(345)	粘土塊を手捏ねで円柱状に成形したもの。表面に縁竹らしき圧痕が付く。	微細な長石を少量 ぶい黄橙色 普通	覆土下位 70%
第158図 36	土製品 支脚	(11.5)	(7.3)	(4.5)	(360)	粘土塊を板の上で転がして方柱状に成形したもの。側面は平坦で、僅かにヘラナデを施す。	微細な長石を少量、骨針をごく微量 ぶい黄橙色 普通	覆土中位 50%
第158図 37	土製品 支脚	(10.3)	8.5	5.7	(451)	粘土塊を手捏ねで円柱状に成形し、基部を円錐形に肥厚させる。表面に指頭ナデと圧痕が付く。	微細な長石を少量 ぶい橙色 普通	床直 90%
第158図 38	土製品 支脚	(12.1)	4.7	4.3	(242)	粘土塊を手捏ねで円柱状に成形し、頂部を僅かに窠ませる。表面に指頭ナデと圧痕が顕著に付く。	微細な長石を少量、骨針をごく微量 ぶい橙色 良好	カマド燃焼部 70%

図版番号	器種	法 量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第158図 39	石製品 砥石	(10.9)	6.2	4.3	(331)	凝灰岩製の方柱形の砥石。使用面は4面あり、磨耗によって表面が窪んでいる。	床直 60%
第158図 40	石製品 砥石	11.7	7.9	5.8	774	片岩類の転石を砥石に利用。使用面は5面。	床直 ほぼ完形
第158図 41	鉄製品 刀子	(24.1)	1.5	0.5	(44.9)	刃部は17.5cm残存する。刃幅に対してかなり長めの刃渡りをもっていたと思われる。	床直 90%

以上は、土師器の供膳具が外来的要素をもっていることを示唆している。しかも当住居跡だけが特異である点で、一般的な流通・交易で入手したというよりも、当住居跡の住人がこれをセットで持ち込んでいた可能性の方が高い。現在の知見では、胎土に微量の骨針を含む土器は、県内では水戸市の木葉下窯周辺の土器、県外では千葉県の永田不入窯付近の土器が知られている。水戸市周辺地からの移住であれば、土師器の供膳具を持ち込む以上に木葉下産の須恵器を持ち込む蓋然性が高い。一方、千葉県、特に下総地域では土師器の使用率が高く、また流通している須恵器は新治窯の製品が多い。よって移住者の出所としては下総地域の方が想定し易いことになる。彼地の土師器様相との綿密な比較が必要となるが、現時点では南方面との強い関係、例えば移住や婚入などの可能性が指摘される程度である。

加えてカマド支脚が4本も確認されていることも異質な要素の一つであるが、その中の2本の胎土にも骨針が僅かに認められた。これも他所から持ち込んだのであれば、祭祀的意味合いを推すことも可能であろう。

第54号住居跡〔第159図、PL.23・83〕

位置 調査区ほぼ中央S・T-24・25グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複はみられない。

規模 長軸3.4m、短軸3.32mの正方形を呈し、床面積は約11.3㎡である。

主軸方向 不明

壁 外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で24cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 やや起伏を有している。

ピット 2基確認された。東側は円形を呈し、径77cm、深さ8cm、西側は溝状を呈し、幅20cm前後、深さ3～5cmを測る。

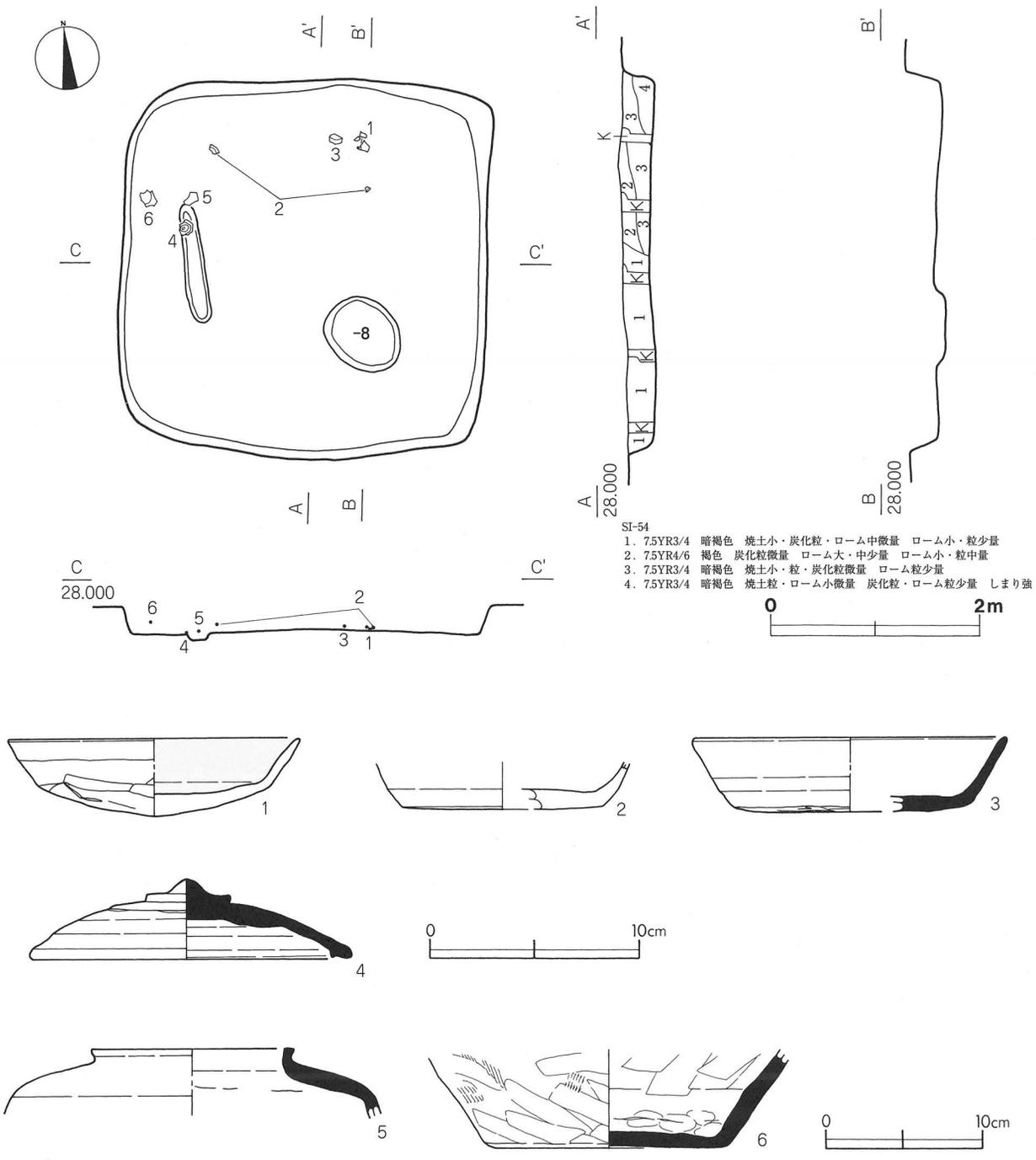
カマド 確認されなかった。入り口方向も不明である。

覆土 4層に分層された。全ての土層に炭化物が混入しており、埋め戻し土と考えられる。耕作に伴う攪乱が著しい。

遺物 遺物の量は比較的少なく、出土状態に特別な傾向は認められなかった。土器の器種構成は、図示し得たのが土師器・須恵器の坏、須恵器の蓋、短頸壺、甕などで、他に土師器甑の小片が少量みられた程度である。須恵器はすべて新治窯産のものである。

No.1・2は土師器の坏で、丸底と平底の両者並存が確認される。No.3は須恵器坏である。平底に直線的な体部をもつ典型的な形態であるが、底部の調整は土師器坏と同様のヘラ削りを施している。No.4は須恵器蓋で、円錐形をなすつまみの形態が特徴的である。つまみの径が大きく、内側に小さなかえりが付く点で、一町田窯跡に並行するものと思われる。No.5は須恵器の短頸壺である。肩を張り、口唇部を平坦に切り揃えるシャープな作りである。No.6は須恵器甕の底部片である。外面に軽い平行線の叩き目と、ヘラ削りに近い強めのヘラナデが施されている。底部には、砥石代りに使われたためか、一方向の滑らかな研磨痕がみられる。

所見 年代は、No.3の須恵器坏の口径・底径が共に大きいこと、No.4の蓋の形態が一町田窯段階に相当すること、などから8世紀前葉に位置付けられるであろう。なお、該期の住居にはカマドが併設されることが常であるが、当住居跡からはその痕跡を窺うこともできなかった。このことから、住居というよりは一時的な小屋として使用していた可能性が想定できよう。



第159図 第54号住居跡・出土遺物

第54号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 1	土師器 坏	口径 [14.0] 器高 3.7	底部は丸底を呈し、口縁部は直線的に開く。	底部に一方向からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 普通	床直 60% 内面黒色処理 (希薄)
第159図 2	土師器 坏	口径 [9.6] 器高 (2.1)	底部は平底で、体部は丸みを帯びながら強い角度で立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量、 石英微粒と褐色粒子を微量 内外面橙色 普通	床直～覆土下位 30% (底径の 50%残存)
第159図 3	須恵器 坏	口径 [15.0] 底径 [10.9] 器高 3.5	底部は平底で径が大きく、体部は直線的に立ち上がる。	底部に一方向からのヘラ削り、周縁に時計回りの手持ちヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を多量 内外面にふい黄褐色 普通	ほぼ床直 30% (底径の 40%残存)
第159図 4	須恵器 蓋	口径 15.3 器高 3.8 つまみ径4.0	体部は丸みをもって浅く開き、端部内側に小さなかえりが付く。つまみは径が大きく中央部が円錐状に突出する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 良好	床直 70%
第159図 5	須恵器 短頸壺	口径 [12.8] 器高 (4.2)	体部上位に強い屈曲部をもつ。口縁部は短く直立し、口唇部は平坦に切りそろえられる。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 普通	ほぼ床直 20% (体部径 の30%残存)
第159図 6	須恵器 甕	底径 15.2 器高 (6.7)	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に微細な砂粒の圧痕、体部下端に横位のヘラナデと微かな平行線の叩き目、内面に縦位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面灰色 良好	覆土中位 細片 (底部は 90%残存) 底部に研磨痕

第55号住居跡〔第160～162図、PL.23・83・84〕

位置 調査区西寄りE・F-24・25グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。重複していないが、北側で接するように第65号住居跡がみられる。

規模 長軸6.08m、短軸3.42mの横長の長方形を呈し、床面積は約20.8㎡である。これほど著しい横長住居跡は本遺跡では他に例をみない。

主軸方向 N-6°-E

壁 垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で35cmを測る。東壁側を除き壁溝が途切れず巡っており、幅20～28cm、深さ6～9cmを測る。南西隅では壁溝が壁から離れ、住居プランもこの部分だけ段を有している。

床 概ね平坦で、部分的に硬化面がみられた。

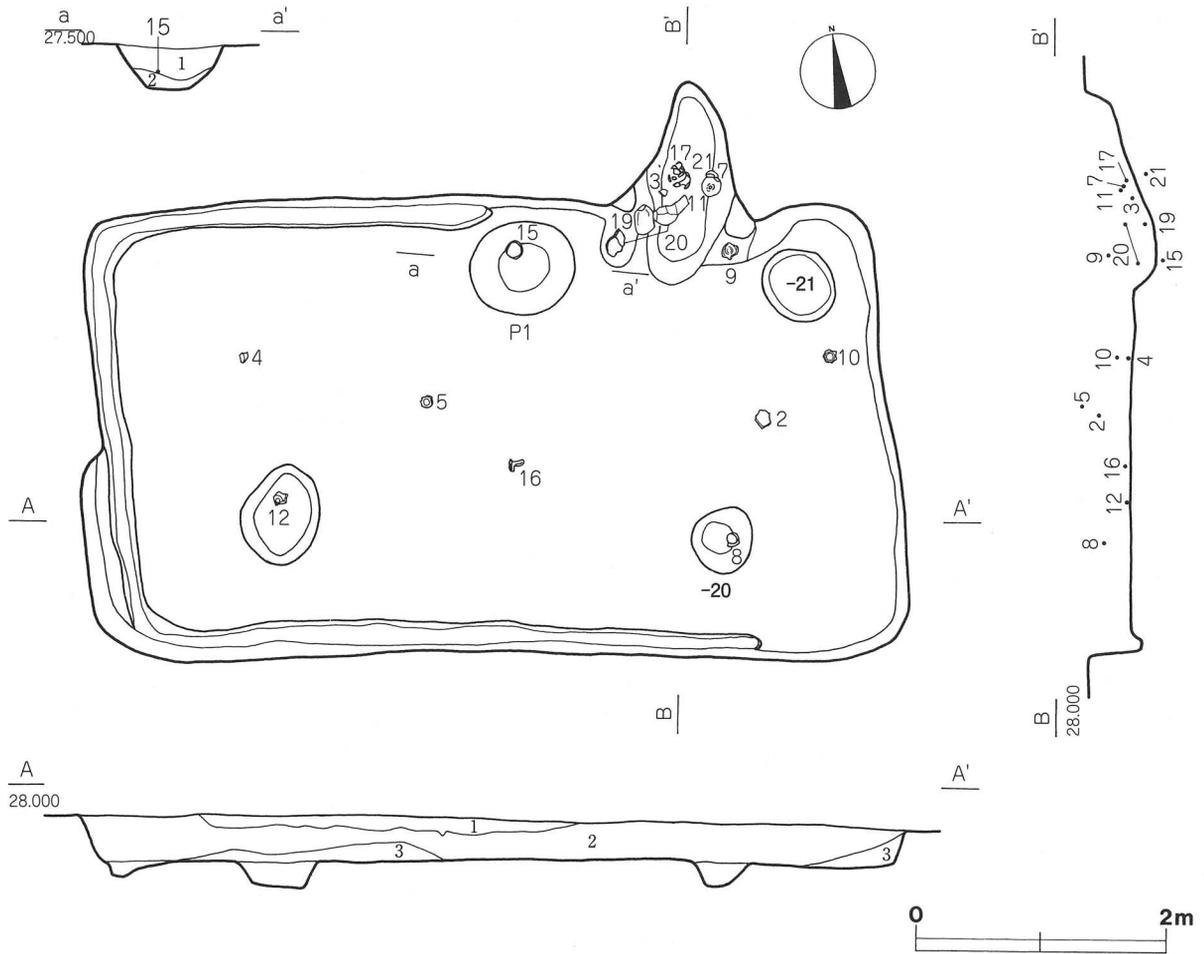
ピット 4基確認された。P1は貯蔵穴の可能性が考えられる。円形を呈し、径84cm、深さ33cmを測る。覆土は2層に分層され、第2層直上から須恵器蓋(No.15)が出土している。他のピットは円形・楕円形を呈し、径54～82cm、深さ20～21cmを測る。深さは非常に近似していた。明確な根拠はないがカマドが偏向していることから入り口部は東もしくは南側と推測される。

カマド 北壁東寄りに位置している。両袖から東西各隅までの長さ比は1対4でかなり東に偏向していることがわかる。壁下場より壁外に1.10m程掘り出して構築しており、全長1.60mを測る。燃焼部は床面を20cm程掘り窪めており、底面は緩やかに外傾して奥壁にかけて立ち上がっている。焚き口幅は60cmで、袖内側から奥壁側は被熱により赤化していた。出土遺物は多く、燃焼部内だけではなく完形の土師器甕(No.19)が逆位で西側袖に貼り付くような出土状況もみられた。

覆土 3層に分層された。いずれにもローム質土の混入がみられることから、埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物はカマド内を中心に比較的豊富に発見された。土器の器種構成は、土師器の坏と盤、須恵器の坏、高台付坏、蓋、高坏(高盤)、そして大小の土師器甕である。また、小破片にて図化し得なかったものに、土師器・須恵器の甗片が存在する。供膳具にみる土師器と須恵器の割合は、1対4で須恵器が主体的となっている。須恵器はほとんど新治窯産であるが、木葉下産とみられるものも一部存在する。

No.1は土師器坏である。体部は丸く湾曲し、口縁部内面に一条の沈線が付く。底部は平底であるが、体部との境は漸移的である。No.2は土師器盤で、内外面に細かな磨きが施されている。No.3は形態や製作技法の点で須恵器の坏であるが、還元焰焼成をしておらず土師器の一種とみなした。ロクロ成形の平底坏で、直線的な体部をもつ。No.4～7は須恵器坏の底部片である。底径は7.0～8.4cmまでややばらつきがあるが、概して底部の大きい段階にある。すべて新治窯産である。No.8～10は須恵器の高台付坏である。No.8と9は、大きな底径に小さな高台が付き、体部下位を斜めに張り出す共通した形態を呈しているが、前者は胎土から木葉下窯産の製品であり、後者は新治窯産と判断される。No.9の底部には焼成前にヘラ書きされた「○」の記号がみられる。No.11～15は須恵器の蓋である。口径は15～16cm台の一般的なものと11～13cm台のやや小振りのものの2種が確認される。いずれも平坦な体部と逆台形つまみ、端部折り返しの口縁部など共通した形態的特徴をもっており、新治窯跡の製品である。No.16は須恵器の高坏ないし高盤である。坏部は大きく横に開き、脚部の三方に方形の透かし孔をもつ。新治窯産である。No.17～22は土師器の甕である。法量はおよそ3種に分かれ、器高が20cmに満たないとみられる小型甕(No.17)と、22cm台の中型ないし小振りの甕(No.21)、30cmを越える一般的な大きさの甕(No.19・20・22)で、当住居跡ではすべてカマド内から出土している。No.18は甕の体部



SI-55

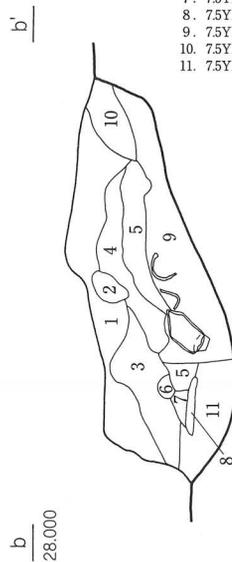
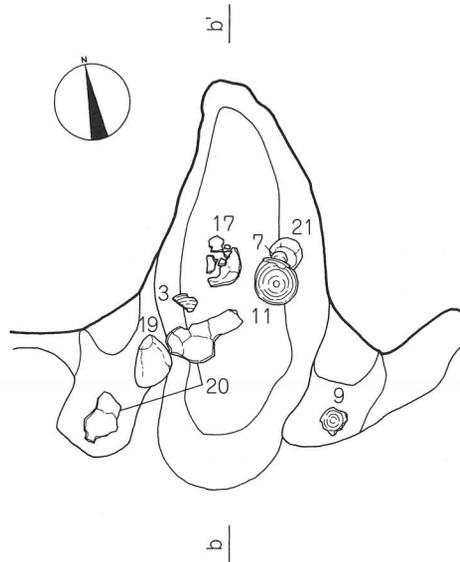
1. 7.5YR4/3 褐色 ローム大微量 ローム中～粒中量
2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小中量 ローム中・粒少量
3. 7.5YR4/4 褐色 ローム中中量 ローム小・粒多量

SI-55 貯蔵穴 a-a'

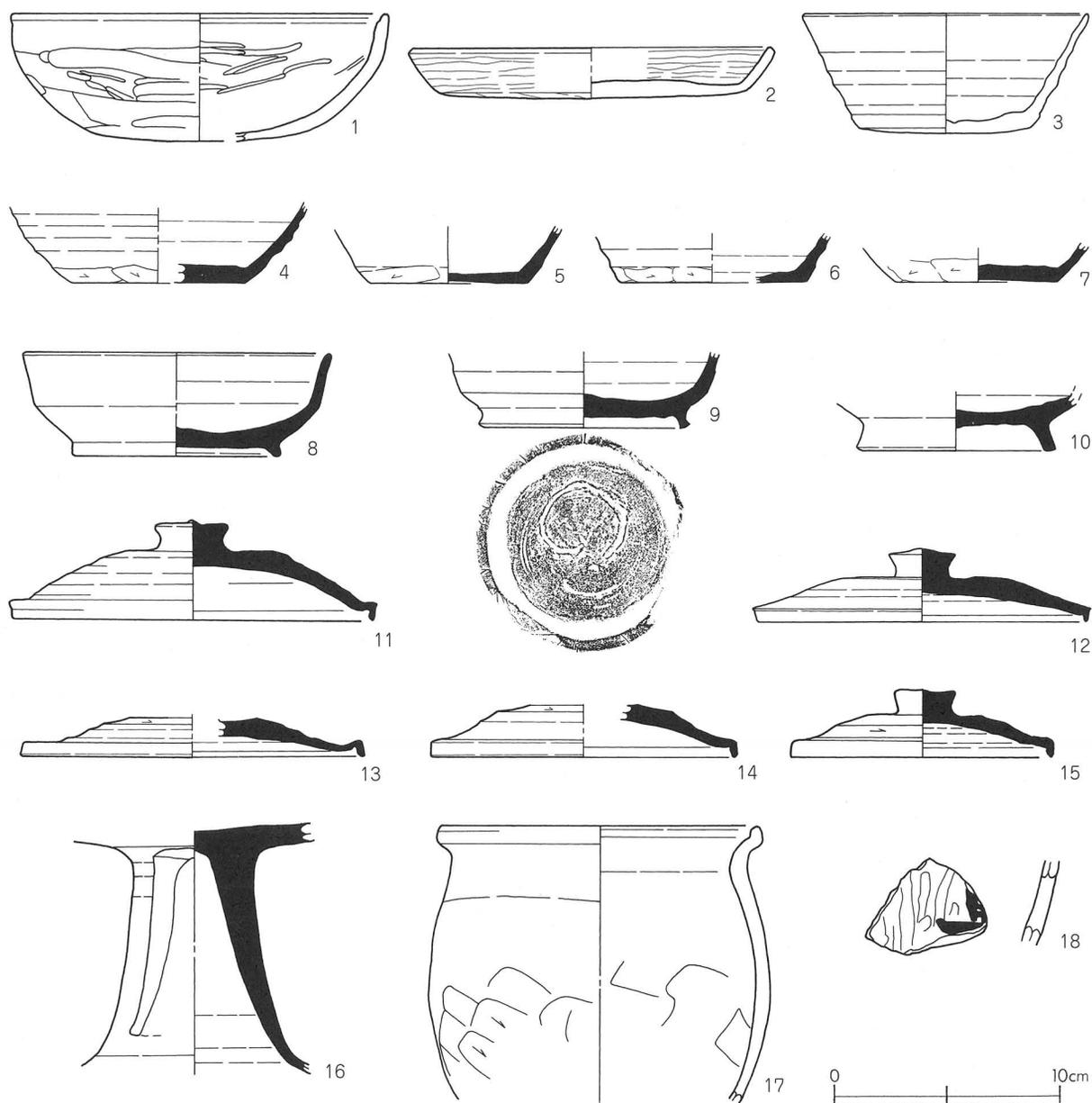
1. 7.5YR2/3 暗褐色 ローム小・粒微量
2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小少量 ローム粒中量 粘性・しまり強

SI-55 カマド

1. 7.5YR3/3 暗褐色 白色砂微量
2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒少量 白色砂多量
3. 7.5YR2/2 黒褐色
4. 7.5YR2/3 極暗褐色
5. 7.5YR3/4 暗褐色 白色砂微量
6. 7.5YR4/3 褐色 白色砂多量
7. 7.5YR4/3 褐色 白色砂中量
8. 7.5YR4/3 褐色 焼土粒・白色砂少量
9. 7.5YR4/3 褐色 焼土小・白色砂少量 焼土粒多量
10. 7.5YR4/3 褐色 焼土粒少量 ローム小微量 白色砂中量
11. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・白色砂質粘土粒微量 ローム粒少量 粘性強



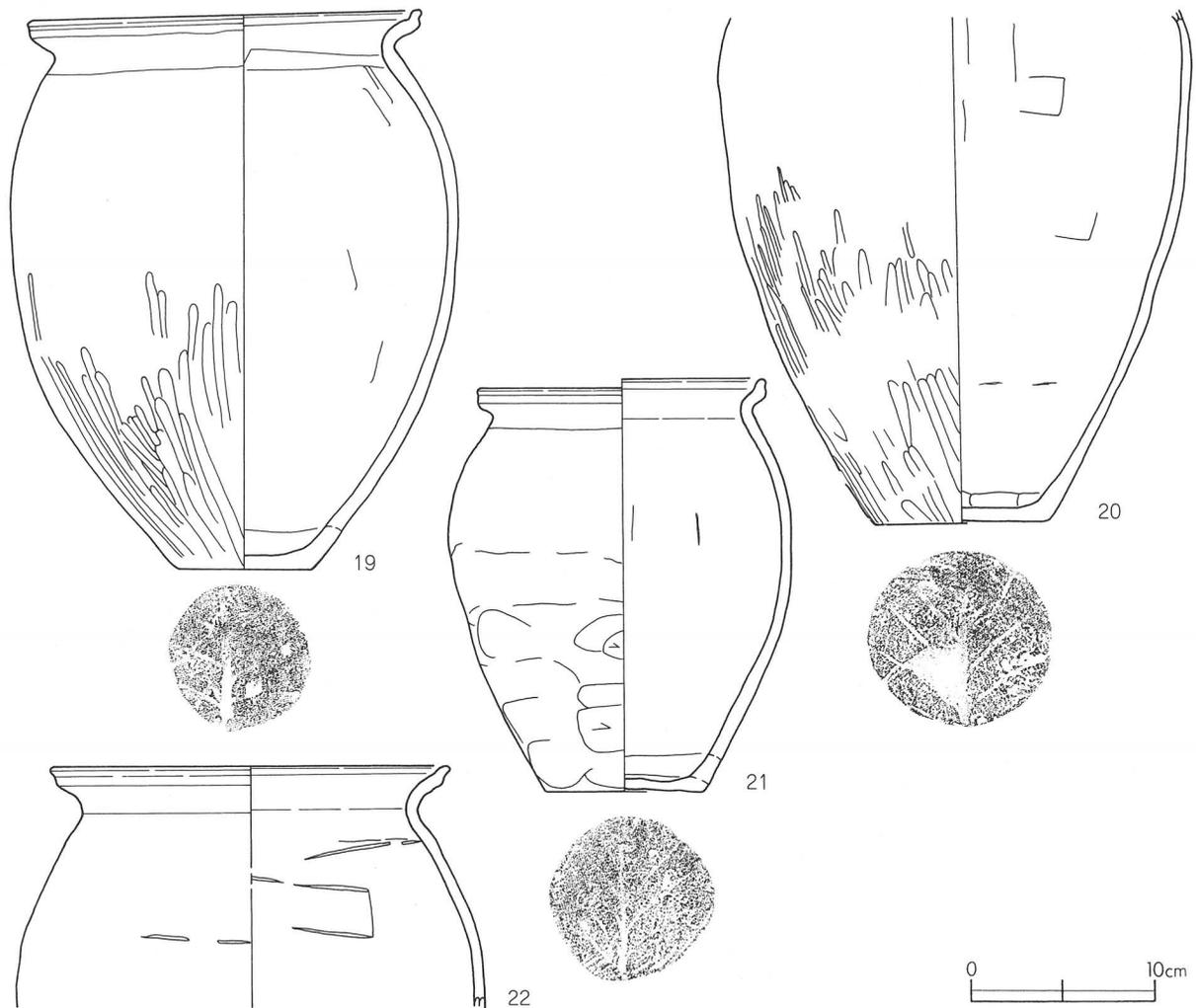
第160図 第55号住居跡・カマド遺物出土状況



第161図 第55号住居跡出土遺物（1）

に文字が墨書されたものであるが、小破片のため判読することはできなかった。

所見 遺物の帰属時期は、須恵器坏の底径が7～8cm台であること、高台付坏が増加し、それに組み合うとみられる蓋も出現していることなどから、およそ8世紀後半頃に相当すると考えられる。No.8の高台付坏は木葉下窯高取山支群C地点5号窯に類例をみることができる。同窯の製品は8世紀中葉～後葉と考えられている。また、供膳具の主体が須恵器となりながらも、土師器坏や土師器盤が存在している様相なども8世紀後半頃の特徴と合致する。よって、当住居跡の年代は8世紀後半に位置付けることができる。



第162図 第55号住居跡出土遺物（2）

第55号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161図 1	土師器 坏	口径 [16.8] 器高 (5.6)	底部は平坦化した丸底で、体部は丸みを帯びて深手に立ち上がる。口縁部内面に沈線が付く。	体部に横位のヘラ削りと磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 普通	覆土 30% (口径の30%残存)
第161図 2	土師器 盤	口径 [16.2] 底径 13.6 器高 2.3	底部は平坦で広く、体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。	底部に縦横方向のヘラ削り、体部に回転ナデと横位の磨き、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 良好	覆土中位 60% (底径の80%残存)
第161図 3	土師器 坏	口径 [12.6] 底径 7.5 器高 5.3	須恵器坏と同形。底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に強いロクロ目を残す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を少量 内外面明赤褐色 普通	カマド燃焼部 40% (底径の60%残存)
第161図 4	須恵器 坏	底径 [7.6] 器高 (3.3)	底部は平底で、体部は僅かに丸みを帯びて強く立ち上がる。	底部に縦横方向のヘラ削り、体部下端に時計回りの手持ちヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を少量 内外面灰色 普通	床直 30% (底径の40%残存)
第161図 5	須恵器 坏	底径 7.0 器高 (2.3)	底部は平底で、体部は直線的に強い角度で立ち上がる。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下端に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英・白雲母を中量 内外面灰色 普通 (軟質)	覆土上位 60% (体部中位以下は完存) 口縁を割り揃えて再利用
第161図 6	須恵器 坏	底径 [8.4] 器高 (2.1)	底部は平底で、体部は直線的に強い角度で立ち上がる。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下端に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面灰白色 普通	覆土 細片 (底径の30%残存)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161図 7	須恵器 坏	底径 7.0 器高 (1.5)	底部は平底で、体部は直線的に立ち上がる。	底部に縦横方向のヘラ削り、体部下端に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面灰色 普通	カマド燃焼部 30% (底部は90%残存)
第161図 8	須恵器 高台付坏	口径 [13.9] 高台径 [9.4] 器高 4.6	高台は低く開きも弱い。体部は斜方向にせり出し、強い角度で口縁部が立ち上がる。端整な作り。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部全面に丁寧な回転ナデを施す。	径1～3mmの石英を少量、骨針を微量 内外面灰色 良好	覆土中位 50%
第161図 9	須恵器 高台付坏	高台径 9.0 器高 (3.2)	高台は低く僅かに開く。体部は斜方向にせり出し、強い角度で口縁部が立ち上がる。	底部および体部下端に反時計回りの回転ヘラ削りと回転ナデ、内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面灰色 普通 (軟質)	カマド袖部 40% (底部の90%残存) 底部に「○」のヘラ記号
第161図 10	須恵器 高台付坏	高台径 8.6 器高 (2.1)	高台は高く直線的に開く。体部は斜方向にせり出す。	底部および体部下端に反時計回りの回転ヘラ削りと回転ナデ、内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を微量 内外面灰色 普通	覆土下位 40% (底部・高台は完存)
第161図 11	須恵器 蓋	口径 16.2 器高 4.4 つまみ径3.3	体部上位に平坦面をもち、僅かに丸みを帯びて開く。口縁部は端部を短く垂下させる。つまみは断面逆台形を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、全面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面青灰色 良好	カマド燃焼部 完形
第161図 12	須恵器 蓋	口径 [14.6] 器高 3.2 つまみ径3.0	体部上位に平坦面をもち、浅く直線的に開く。口縁部は端部を短く垂下させる。つまみは断面逆台形を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りと回転ナデ、全面的に回転ナデを施す。	径1～3mmの長石・石英を少量 内外面灰色 良好	柱穴覆土上位 30% (体部上位の40%残存)
第161図 13	須恵器 蓋	口径 [15.2] 器高 (1.7)	体部は上位に平坦面をもち、浅く外反ぎみに開く。口縁部は端部を短く垂下させる。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、全面的に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面灰色 良好	覆土 20% (体部上位の30%残存)
第161図 14	須恵器 蓋	口径 [13.6] 器高 (2.4)	体部は僅かに外反しながら浅めに開く。口縁部は端部を短く垂下させる。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、全面的に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を少量 内外面灰色 普通	覆土 細方 (体部上位の40%残存)
第161図 15	須恵器 蓋	口径 11.7 器高 3.0 つまみ径2.8	体部は僅かに丸みを帯びて浅めに開く。口縁部は端部を短く垂下させ、つまみは断面逆台形を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、全面的に回転ナデを施す。	径1～2mmの長石・石英を非常に多量 内外面褐色 良好	P1内 完形
第161図 16	須恵器 高坏	器高 (11.0)	高盤か。体部は横方向に大きく開き、脚部は中空で三方に方形の透かし孔が開く。	全面的に回転ナデを施す。透かし孔はヘラによる切り開け痕が残る。	微細な長石を少量、白雲母を多量 内外面灰黄色 不良 (軟質)	ほぼ床直 30% (脚部の30%残存)
第161図 17	土師器 小型甕	口径 [14.3] 器高 (12.1)	最大径は体部中位にあり、頸部の締まりは弱い。口縁部は短く開き、厚手の口唇部を直立させる。	体部中位以下に斜方向のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	カマド燃焼部 30% (口径の50%残存)
第161図 18	土師器 甕小片	破片長 (4.0)	甕の体部中位付近の破片。	外面に縦位の磨き、内面に横位のナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面褐色 普通	覆土 細片 外面に墨書 文字不明
第162図 19	土師器 甕	口径 21.3 底径 7.6 器高 30.3	最大径は体部中位にあり、体部は丸みを帯びて長く延びる。口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部は外反ぎみに短く立ち上がる。	体部中位以下に横位のヘラ削りと縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面橙色 良好	カマド燃焼部 完形 底部に木葉痕
第162図 20	土師器 甕	底径 9.4 器高 (27.6)	最大径は体部上位にあり、体部下半は長く延びる。底部は径が比較的大きい。	体部中位以下に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面橙色 普通	カマド袖部 40% (底部は完存) 底部に木葉痕
第162図 21	土師器 甕	口径 15.6 底径 8.4 器高 22.4	やや小振りの甕。最大径は体部上位にあり、口縁部は「く」字に屈曲する。口唇部は厚めで直立する。	体部下位に横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 普通	カマド燃焼部 ほぼ完形 底部に木葉痕
第162図 22	土師器 甕	口径 [21.8] 器高 (13.0)	口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部は厚めで外反する。	口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面明赤褐色 良好	カマド覆土 20% (口径の50%残存)

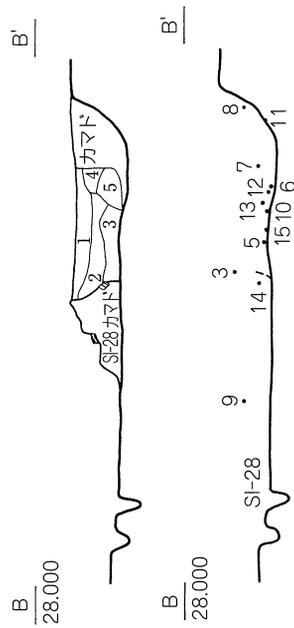
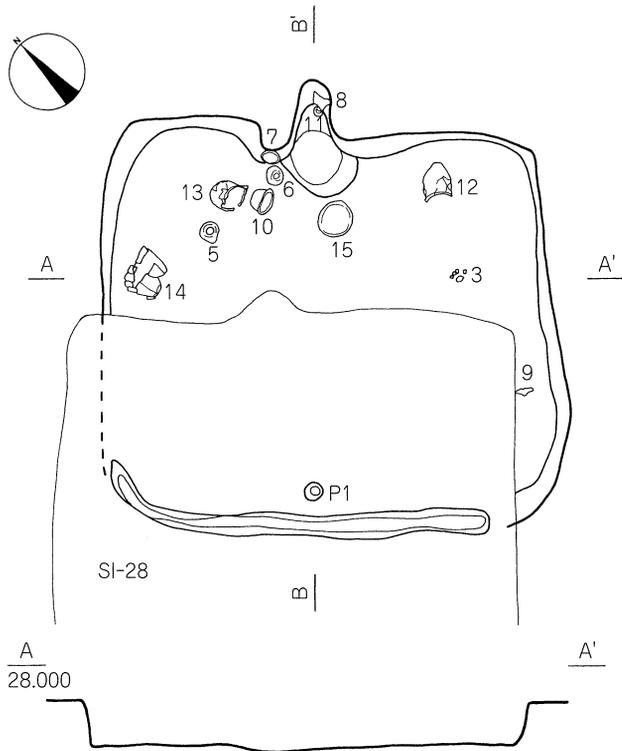
第56号住居跡 [第163～165図、PL.23・84・85]

位置 調査区ほぼ中央L・M-18・19グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。南西側で第28号住居跡と重複しており、土層堆積状態と出土遺物から本住居跡が古いと判断した。

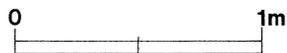
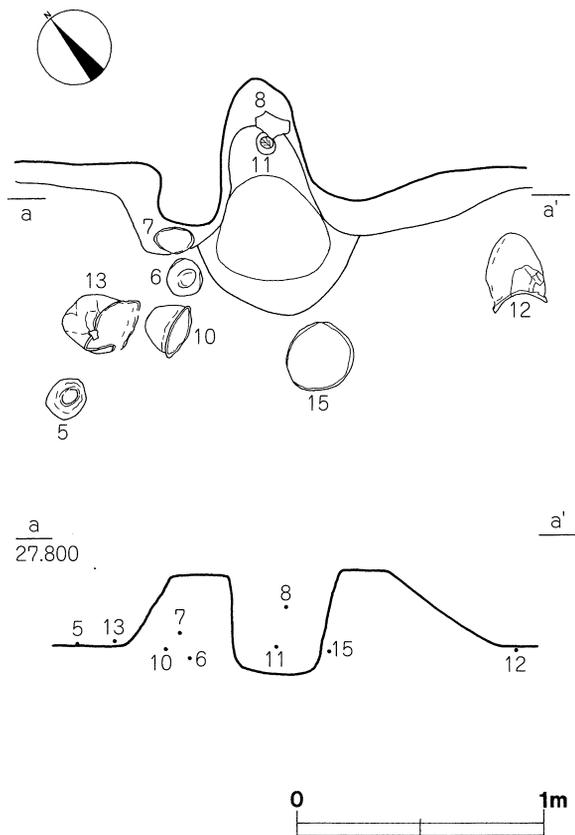
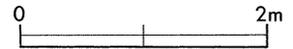
規模 長軸3.4m、短軸3.08mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約10.5㎡である。

主軸方向 N-39° -E。概ね住居の四隅が東西南北を向いている。

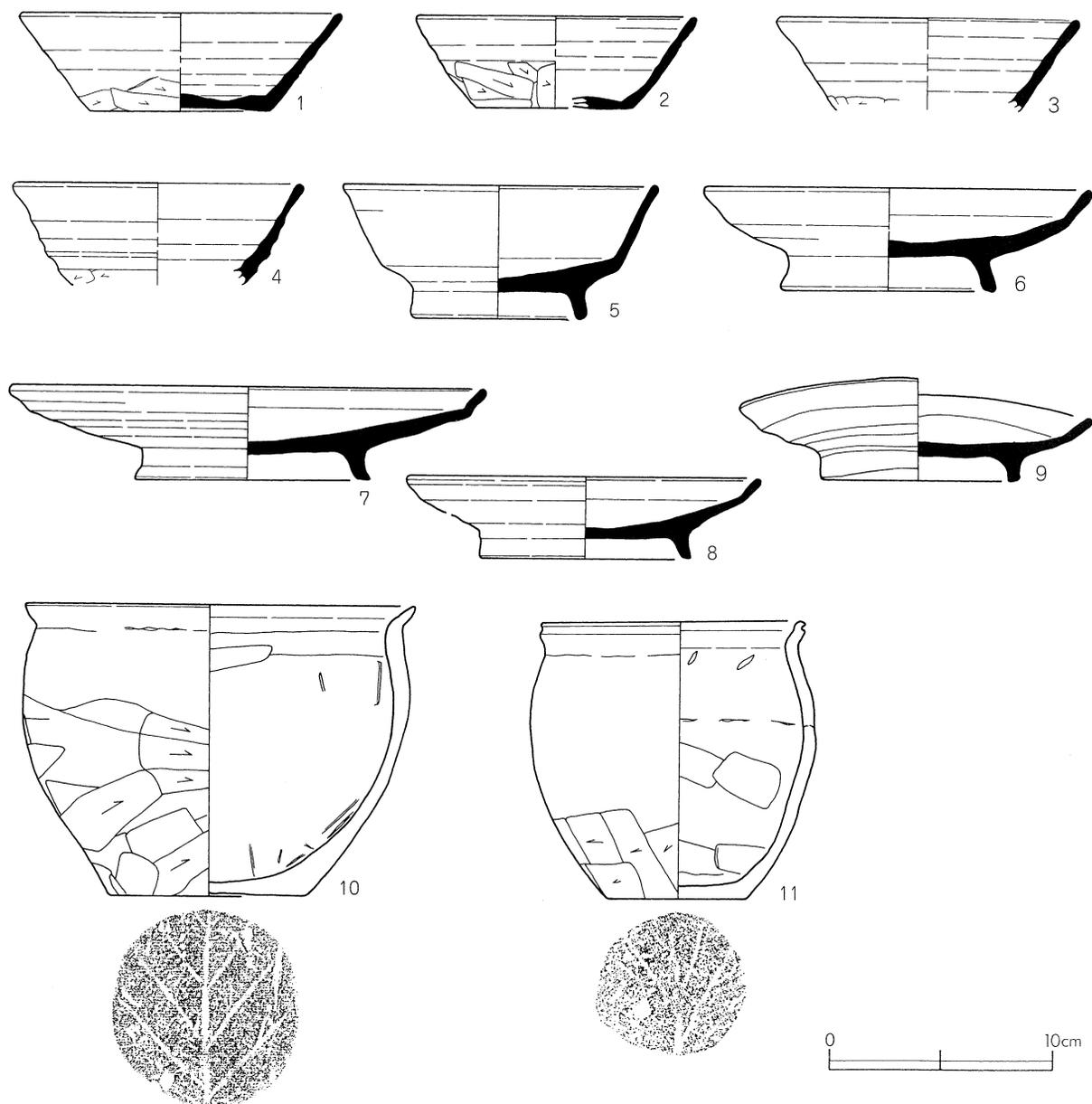
壁 外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で42cmを測る。第28号住居跡と重複している南西側の壁は全て壊され遺存していないが、両住居跡の床面がほぼ同じ高さであるため、南西側の壁溝は壊されずに確認された。壁溝の規模は幅10～20cm、深さ5～7cmを測る。



- SI-56
- 1. 7.5YR4/3 褐色 焼土小・粒微量
 - 2. 7.5YR4/6 褐色 焼土小・ローム粒少量 焼土粒微量
 - 3. 7.5YR4/2 灰褐色 焼土粒微量
 - 4. 7.5YR4/4 褐色 焼土小少量 白色砂中量
 - 5. 7.5YR4/4 褐色 ローム粒微量



第163図 第56号住居跡・カマド遺物出土状況



第164図 第56号住居跡出土遺物（1）

床 やや起伏を有している。第28号住居跡の重複は床面には及んでいない。

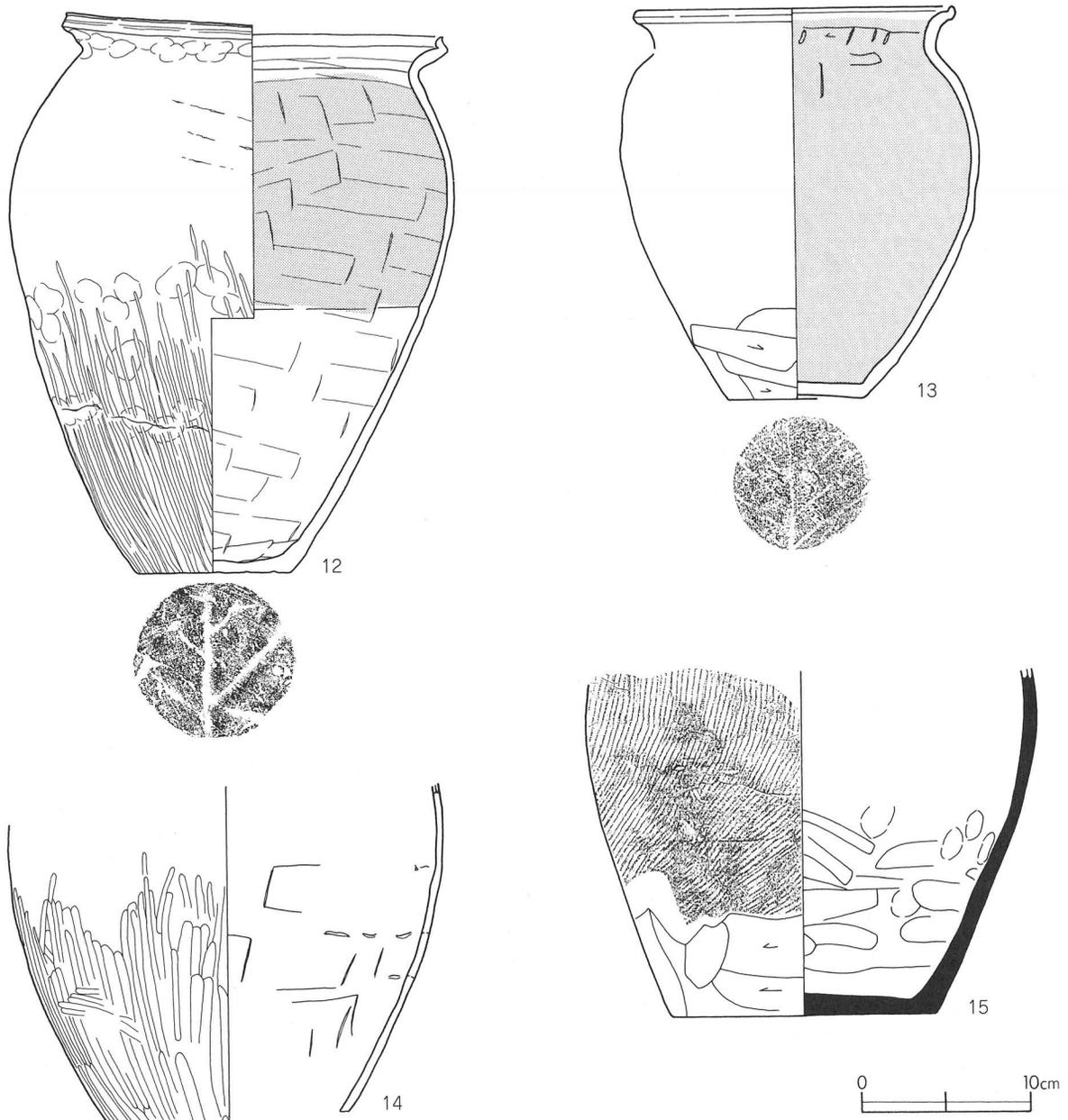
ピット 1基確認された。配置から入り口施設に伴うピットであろう。円形で径17cm、深さ17cmを測る。

カマド 北東壁ほぼ中央に位置し、壁下場より46cm程壁外に掘り出して構築されている。全長95.0cm、燃焼部は床面を3cm程掘り込み、奥壁にかけて外傾して立ち上がる。燃焼部は被熱により赤化していた。焚き口幅は40cm程、遺物は奥壁や袖に貼り付くような状態で、また燃焼部手前から出土している。

覆土 5層に分層された。本住居の覆土を壊して第28号住居跡のカマドが構築されていることがわかる。

遺物 カマド内や周辺部を中心に土器類が発見されている。供膳具はすべて須恵器で、坏、高台付坏、高台付盤の3種が存在する。甕は煮沸具としての土師器甕が大小の法量差をもって5個体以上存在し、他に貯蔵具としての須恵器甕が1点確認されている。

No.1～4は須恵器坏である。口径が14cm台のものと12cm台のもの2種が存在する。口径／底径比



第165図 第56号住居跡出土遺物（2）

はどちらも56.0%程度で、底径が口径の1/2に至る前の段階である。No.5は高台付坏で、やや小振りで底径が大きい。No.6～9は高台付盤で、口径が21cmを越える大型のものと、15cm台の小型のものが存在している。以上のすべての須恵器は新治窯跡の製品であると思われる。No.10～14は土師器の甕で、No.10と11は小型甕、No.12～14は一般的なサイズの甕である。後者は最大径が体部上位にあり、下半分が細く窄まる形態をとり、土師器甕の長胴化の兆候がみられる。内面に煤状の付着物（おこげ）がみられる。No.15は須恵器甕で、大きな底径と外面縦位の叩き目などの特徴をもつ。

所見 遺物の帰属時期は、供膳具が須恵器一色になっていること、高台付坏や盤が多くみられること、坏の口径／底径比などから、8世紀後半の年代が与えられる。当住居跡が営まれた時期も同様の時期と考えられる。

第56号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 1	須恵器 坏	口径 [14.0] 底径 [8.0] 器高 4.3	底部は平底で、体部は直線的に開く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面暗灰褐色 普通	覆土 30% (口径・底径の30%残存)
第164図 2	須恵器 坏	口径 [12.3] 底径 [7.0] 器高 4.1	底部は平底で、体部は強い角度で直線的に立ち上がり、やや口径が小さい。	底部に縦横方向のヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を少量 内外面灰色 良好	覆土 90%
第164図 3	須恵器 坏	口径 [13.2] 器高 (4.0)	体部は直線的に開き、口縁部は僅かに肥厚する。	体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面灰色 普通	覆土上位 細片
第164図 4	須恵器 坏	口径 [12.6] 器高 (4.5)	体部は直線的に開き、口縁部は僅かに肥厚する。	体部外面にきついクロロ目、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面灰色 普通	覆土 40% (口径の60%残存)
第164図 5	須恵器 高台付坏	口径 14.1 高台径 7.9 器高 5.9	高台は高めで直線的。体部下位は斜方向に大きく開き、体部は強い角度で立ち上がる。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面白色 普通	床直 ほぼ完形
第164図 6	須恵器 高台付盤	口径 [18.0] 底径 9.6 器高 4.6	高台は直線的に「ハ」字に開き、体部は横方向に大きく開く。口縁部は外反ぎみに立ち上がる。	底部および体部下位に反時計回りの回転ヘラ削り、体部と口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい褐色 普通	カマド袖部前 床直 80%
第164図 7	須恵器 高台付盤	口径 21.1 高台径 10.4 器高 4.2	高台は直線的に垂下し、端部を「ハ」字に開く。体部は浅めに大きく開き、口縁部は外反ぎみに立ち上がる。	底部および体部下位に反時計回りの回転ヘラ削り、体部と口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面明褐色 普通	カマド袖部 90%
第164図 8	須恵器 高台付盤	口径 [15.7] 高台径 9.4 器高 3.6	高台は僅かに開き、基部が厚い。口縁部は緩い角度で立ち上がり、口唇部が僅かに肥厚する。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面灰色 良好	カマド燃焼部 70%
第164図 9	須恵器 高台付盤	口径 (15.6) 高台径 9.0 器高 3.2	高台は直線的に垂下し、端部を僅かに開く。体部は伸びが弱く、口縁部は緩い角度で立ち上がり、口唇部が僅かに肥厚する。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面灰色 良好	覆土中位 ほぼ完形 焼成時の焼け 歪みが著しい
第164図 10	土師器 小型甕	口径 17.1 底径 8.7 器高 12.9	頸部の縮まりが弱く、鉢状を呈する。最大径は体部中位にあり、口縁部は短く「ハ」字に開く。	体部中位以下に横位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面にヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 外面にぶい赤褐色、内面にぶい橙色 良好	カマド袖部前 床直 完形 底部に木葉痕
第164図 11	土師器 小型甕	口径 11.8 底径 6.1 器高 12.2	最大径は体部中位にあり、頸部の縮まりは弱い。口縁部は短く開き、ごく小さな口唇部を外反させる。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、口唇部はヘラ状の工具で端整に仕上げる。内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面橙色 普通	カマド燃焼部 完形 支脚として利用 底部に木葉痕
第165図 12	土師器 甕	口径 [22.2] 底径 9.2 器高 33.0	最大径は体部上位にあり、下半部は細く伸びる。頸部は「く」字に屈曲し、口唇部は短く直立する。	体部中位以下に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 外面橙色、内面暗褐色 良好	カマド脇、床直 70% 底部に木葉痕 内面に煤付着
第165図 13	土師器 甕	口径 [19.1] 底径 8.0 器高 23.3	最大径は体部上位にあり、下半部は細く窄まる。口縁部は外反しながら立ち上がり、口唇部は断面三角形を呈する。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 外面にぶい赤褐色、内面暗赤褐色 普通	カマド袖部覆 土下位 80% 底部に木葉痕 内面に煤付着
第165図 14	土師器 甕	器高 (20.0)	最大径は体部上位にあり、下半部は細く伸びる。	体部中位以下に横位の手持ちヘラ削りと縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土下位 40% (体部は一周分残存)
第165図 15	須恵器 甕	底径 15.8 器高 (20.3)	器壁が厚く重い。底部は径が大きく、体部は僅かに丸みをもって強く立ち上がる。最大径は体部上位。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、体部外面に縦位の平行線の叩き目、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰白色 不良 (軟質)	カマド前、床直 40% (体部下位は完存) 底部は未調整 で砂粒痕

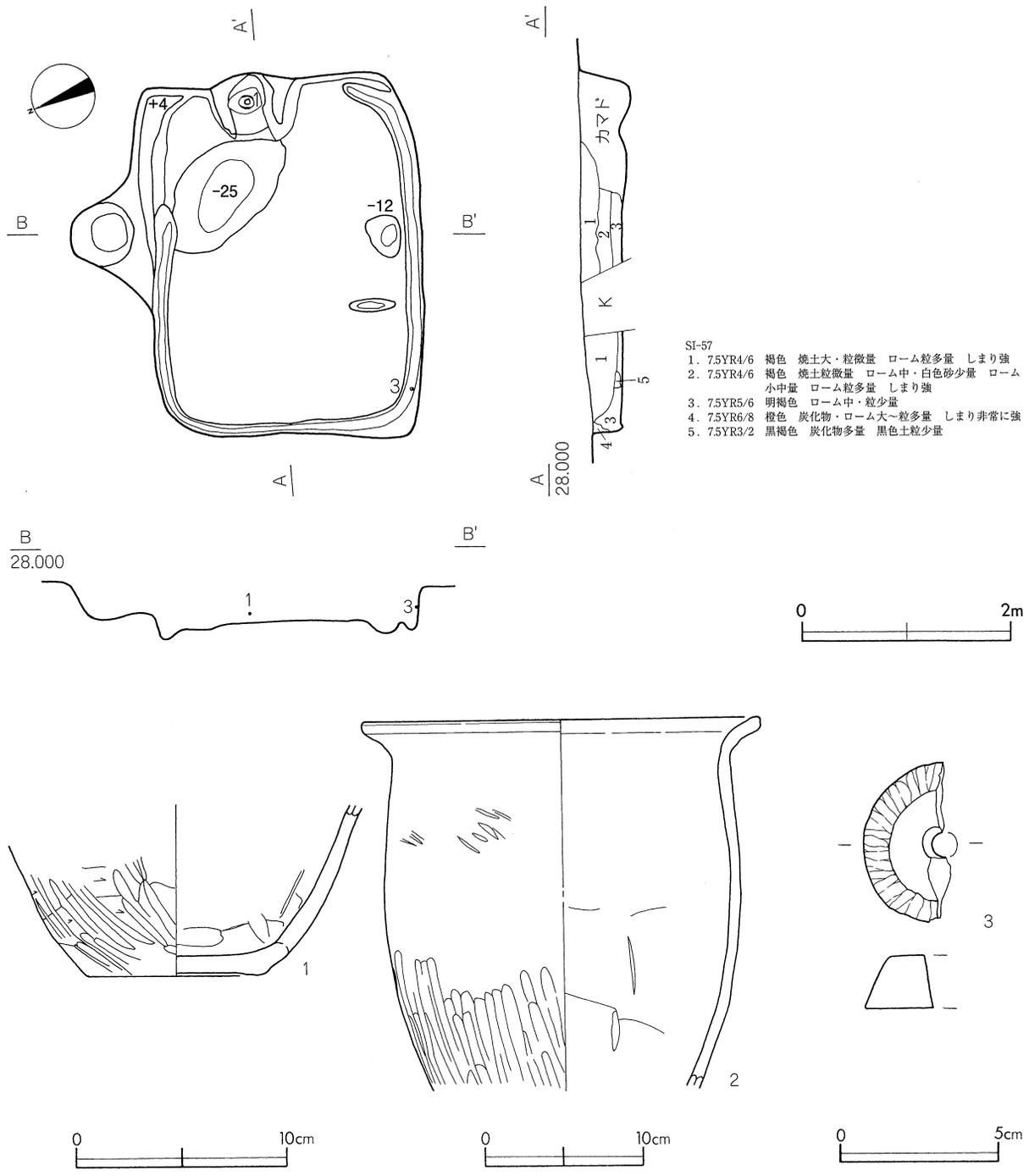
第57号住居跡〔第166図、PL.23・85〕

位置 調査区中央やや東寄り、U・V-23・24グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.16m、短軸2.24mの縦長の長方形を呈し、床面積は約7.1㎡である。

主軸方向 N-110° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で40cmを測る。壁溝は東側のカマド周辺を除き



第166図 第57号住居跡・出土遺物

ほぼ全周している。幅9～32cm、深さ2～9cmを測る。壁溝の末端は両側とも壁から離れており、北東側では床面より4cm高まるテラス状を呈している。

床 やや起伏を有していた。

ピット 3基確認された。南側の2基は径40・42cm、深さ12cmを測る。カマドの手前側は大きな楕円形を呈し、径1.34m、深さ25cmを測る。入り口部は旧カマドと対をなす南側となろうか。

カマド 2基確認された。東壁側は東壁ほぼ中央に位置し、壁下場より壁外に22cm程掘り出して構築されている。袖端部からの全長63cm、焚き口幅は32cmを測る。燃焼部は床面を12cm程掘り窪め、奥壁にか

けて垂直気味に立ち上がっている。燃焼部内からは土師器甕 (No.1) が出土している。もう1基は北壁ほぼ中央に位置し、壁外に96cm程掘り出して構築されている。両袖は壊され、この部分に壁溝が巡っていることから東側のカマドが新しいと判断した。

覆土 5層に分層された。ローム質土の混入がみられ埋め戻し土と考える。

遺物 遺物はごく僅かであった。No.1は土師器甕の底部片で、カマド燃焼部に掘り込まれたピットの中から出土した。No.2は締まりのない頸部形態から土師器甕と考えられる。小破片となって覆土中に散乱する状態で発見された。No.3は土製紡錘車である。緻密な胎土を用い、側面に細かな磨きを施している。

所見 以上の遺物から帰属時期を判断するのは難しい。No.1の甕の形態は、体部下位に丸みがあり、底部の径も大きいことから、体部上位もかなり横膨れする形態であったと推測できる。また、底部には木葉痕でなく一方向からの磨きが施されていた。これらの特徴は第6号住居跡の甕に類例をみることができる。同住居跡は和銅銭を伴うことから8世紀前葉の年代が与えられ、当住居もおそらくこれに近い時期と考えられる。なお、カマドの造り変えを行なっているのは本住居のみであった。

第57号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第166図 1	土師器 甕	口径 8.3 器高 (7.8)	底部は径が大きく、体部下位は丸みをもって立ち上がる。	底部に一方向からの磨き、体部下位に横位のヘラ削りと斜位の磨き、内面に指頭とヘラによるナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面にぶい褐色 良好	カマド燃焼部 20% (底部完 存)
第166図 2	土師器 甕	口径 [25.2] 器高 (23.4)	最大径は体部中位にあり、体部は僅かに丸みをもって強く立ち上がる。頸部に締まりがなく、口縁部は「ハ」字に開く。	体部下位に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 外面にぶい黄褐色、内面褐色 普通	覆土 30% (体部上 位径の30%残 存)

図版番号	器種	法 量				特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第166図 3	土製品 紡錘車	(5.0)	(2.2)	1.7	(21.5)	断面台形を呈する独楽状の紡錘車。側面に放射状に細かな磨きを施す。	ごく微細な長石を微量 にぶい黄褐色 良好	南壁寄り、覆 土中位 50%

第58号住居跡〔第167図、PL.23・85〕

位置 調査区南西寄りG-29・30グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.0m付近に位置している。北側で第4号掘立柱建物と重複しており、掘立柱建物跡の覆土を掘り込んで本住居のカマドが構築されていることから、本住居跡が新しいと判断した。

規模 長軸2.6m、短軸2.44mのやや縦長の正方形を呈し、床面積は約6.3㎡である。

主軸方向 N-13° -W

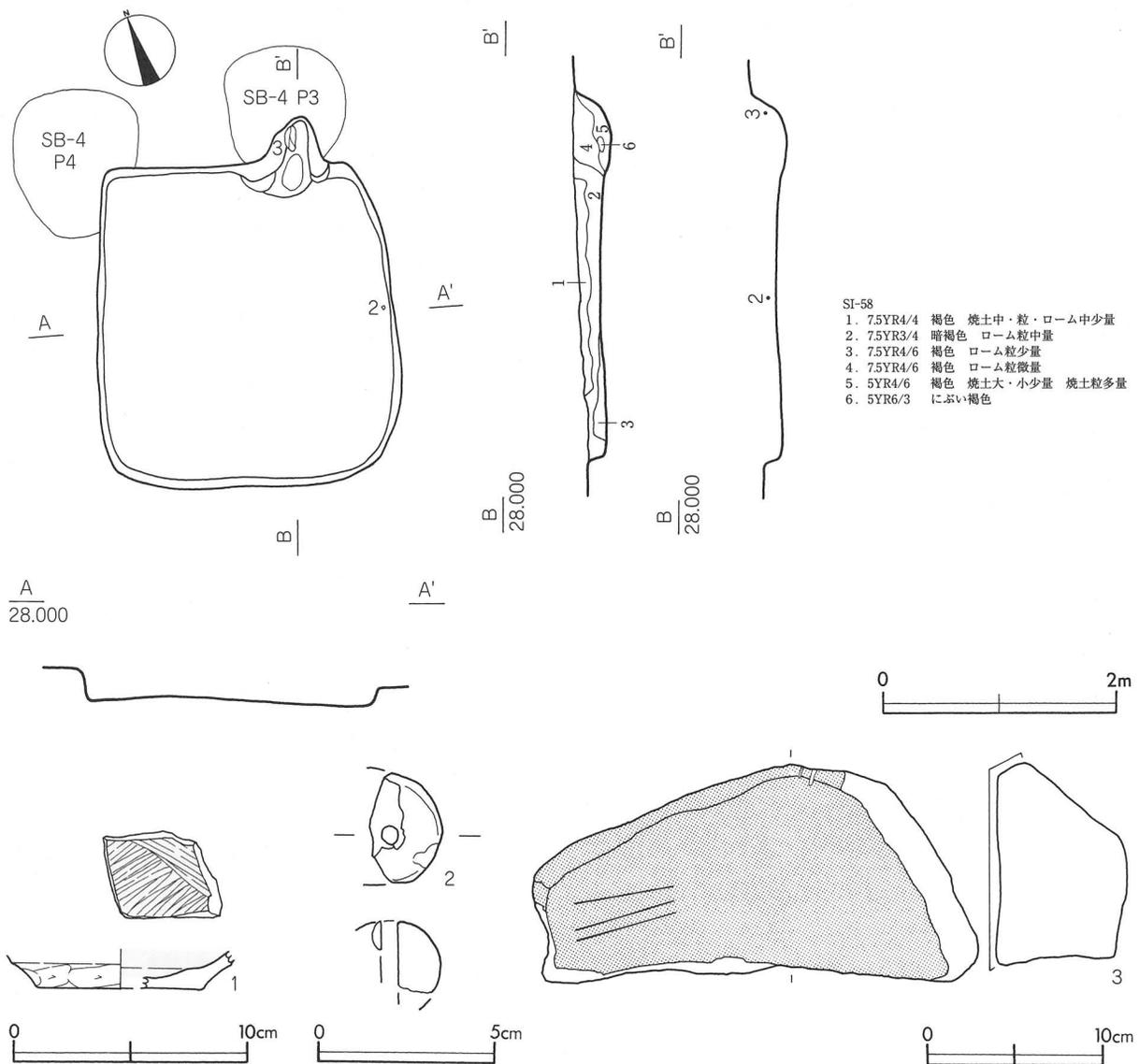
壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で26cmを測る。

床 西側から東側にかけて緩やかに傾斜している。

ピット 確認されなかった。明確な根拠はないがカマドが偏向していることから入り口部は東もしくは南側と推測される。

カマド 北壁の東寄りに位置している。壁下場より壁外に約48cm掘り出して構築される。全長67cm、焚き口幅30cm、燃焼部は床面を7cm掘り窪め、奥壁にかけて外傾して立ち上がる。奥壁は被熱により赤化していた。遺物は奥壁に貼りつくように立位の状態で砥石 (No.3) が出土している。

覆土 6層に分層された。第4～6層はカマドに伴う堆積である。他の層は色調・混入物が近似してお



第167図 第58号住居跡・出土遺物

り埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物はごく僅かであった。カマド内から発見されたNo.3の砥石以外はほとんど3cm以下の微細片であり、図示し得なかったばかりでなく、古墳時代から平安時代まで各時期の遺物が混在する状況であった。

No.1は土師器の内黒坯の小片である。底径が大きく無高台で、丸みを帯びて浅めに開く体部をもつと思われる。覆土に混在して発見されたものであるが、当住居跡中の微細遺物群の下限年代を示すものである。No.2は土玉の破片である。覆土中位からの出土であるが、流入の可能性もある。No.3は雲母片岩製の砥石である。やや大型であり、据え置いて使われたものと思われる。使用面は一面で、長軸方向に擦痕が数条認められる。

所見 当住居跡の年代は、第4号掘建柱建物との重複関係から注目される場所であるが、あまりにも遺物が少なく、正確な判断は難しい。No.1の内黒坯の底部形態で判断するならば、第28号住居跡の坯に比較的類似しており、9世紀末頃と考えることができる。住居跡そのものが顕著に小型化するの9世紀後半以降であり、およそ対応するものであろう。

第58号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第167図 1	土師器 坏	底径 [7.0] 器高 (1.3)	底径が大きく、体部は緩やかに立ち上がる。	底部に縦横方向のヘラ削り、体部下位に軽い手持ちヘラ削り、内面に横位の磨きを施す。	ごく微細な長石と白雲母を少量 外面橙色、内面黒色 普通	覆土 20% (底径の30%残存) 内面黒色処理

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第167図 2	土製品 土玉	(2.2)	3.2	(1.9)	(10.4)	孔は径0.5cm。表面に一部ヘラ削りを施す。	ごく微細な長石を微量 にぶい橙色 良好	東壁寄り、覆土下位 40%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第167図 3	石製品 砥石	24.5	11.4	8.0	335	黒雲母片岩製の大型の砥石。使用面は2面。被熱により部分的に赤化している。	カマド燃焼部 50%

第59号住居跡〔第168～171図、PL.24・85・86〕

位置 調査区東側W～Y-24・25グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸4.56m、短軸4.5mの正方形を呈し、床面積は約21.0㎡である。

主軸方向 N-42° -W。概ね住居の四隅が東西南北を向いている。

壁 垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で48cmを測る。壁溝はカマドの袖と接する部分を除き全周しており、幅6～22cm、深さ8～19cmを測る。

床 概ね平坦である。北と西側隅に粘土範囲が広がっている。2箇所とも壁際の壁溝上の堆積が厚く、壁から離れるにつれ薄くなり、床面直上に達している。

ピット 5基確認された。配置からP1～4は支柱穴、P5は入り口施設に伴うピットであろう。支柱穴は円形を呈し、径23～31cm、深さ43～67cmを測る。規模は比較的近似している。P2は入り口方向に向かい底面がオーバーハングしていた。P5は径25cm、深さ22cmを測る。

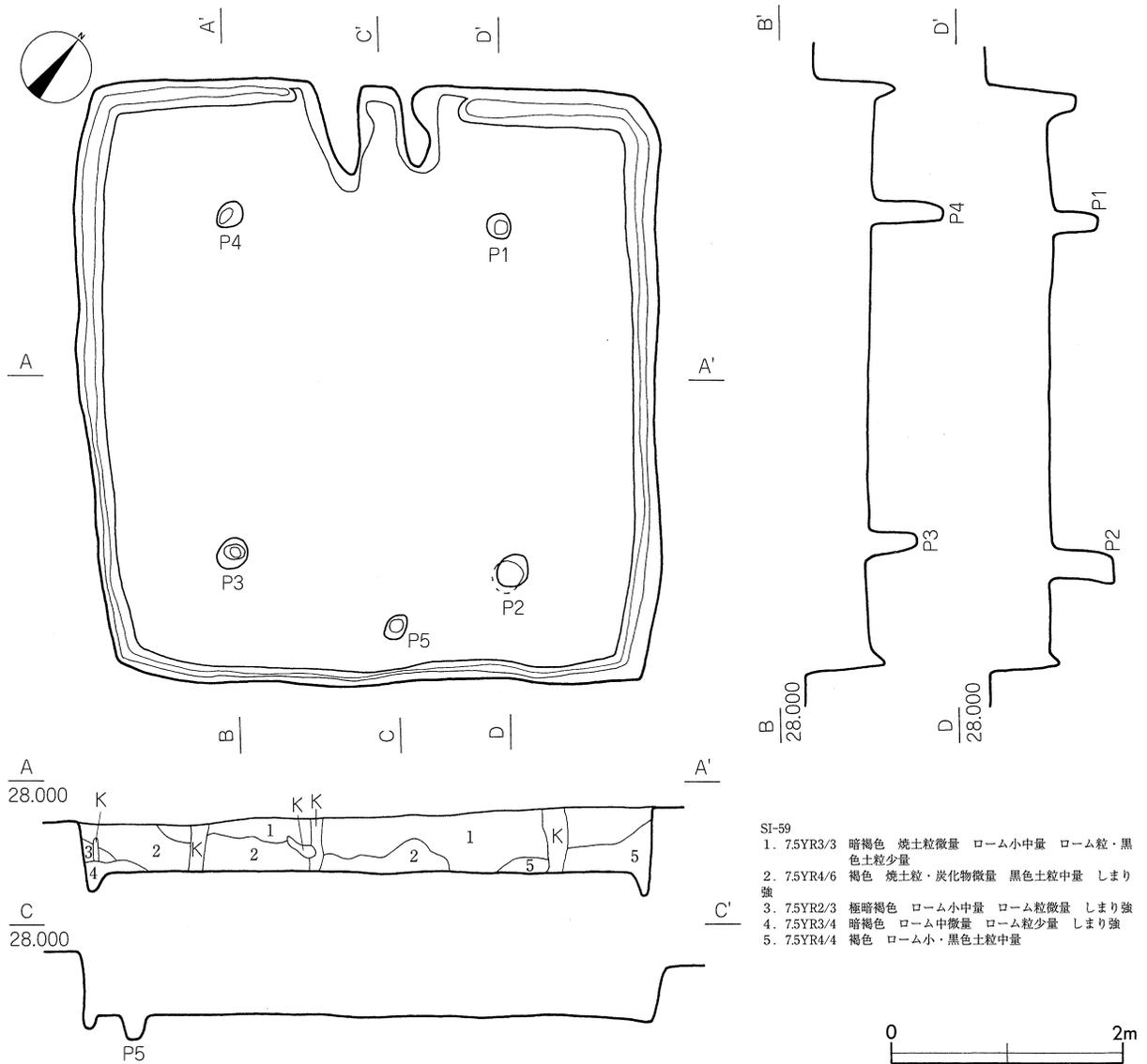
カマド 北西壁ほぼ中央に位置している。確認されたプランから壁外に掘り出すことなく、両袖を住居内に大きく張り出させている。全長88cm、焚き口幅は40cmを測る。燃焼部は床面をほとんど掘り込んでおらず、奥壁にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。袖内側から奥壁側は被熱により赤化している。遺物は両袖脇から多く出土している。

覆土 5層に分層された。全体に耕作による攪乱が著しい。住居の壁際に粘土の廃棄行為が行なわれていることから、埋め戻し土と考える。

遺物 遺物は比較的豊富で、器種組成が把握できる良好なセットが得られた。カマドの左右脇や燃焼部内から坏類が数個体まとめて発見された他、南・西側の壁溝中からも坏類が多く見つかった。また、住居跡中央部の床面からNo.32の小型甕が潰れた状態で発見された。土器類はほとんどが土師器で、須恵器はNo.26の坏の他、図示し得なかった甕の破片が僅かに存在する程度である。器種組成は、供膳具では大量の坏と盤、椀が若干点、煮沸具では大小の甕に加えて、図示できない甌らしき破片が僅かに存在する。

No.1～25は土師器の坏である。すべて丸底であるが、やや平坦化の進んだものもみられる。形態的には以下の3種に分類される。

①全体的に半球形を呈し、口縁部と体部の境に微かな稜が付くもの。口縁部は軽く外反し、器高の2



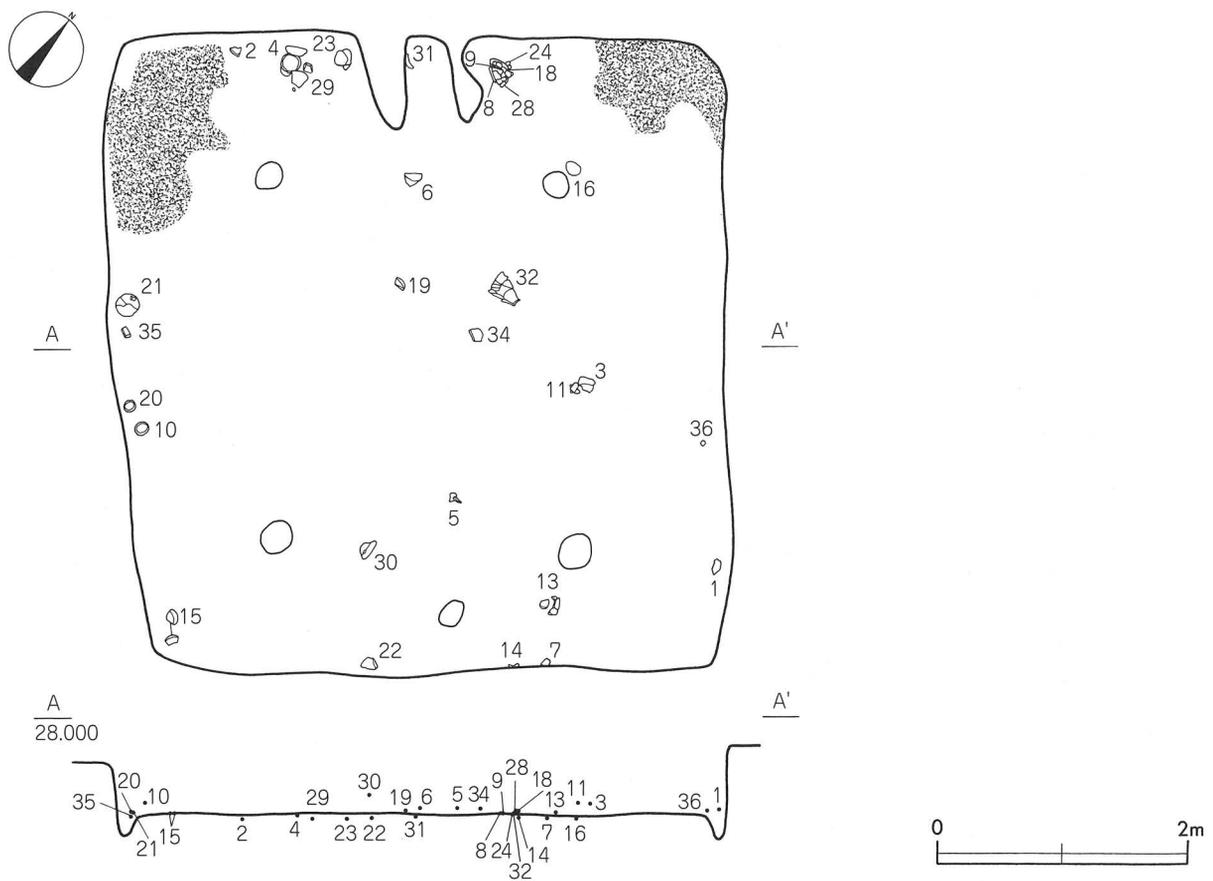
第168図 第59号住居跡

割程度の高さに収まる (No.1 ~ 18)。口径が14 ~ 15cm台のものを典型とするが、11cm台の小型のもの (No.16・17) や19cmを越える大型のもの (No.18) も存在している。また、口唇部内側に沈線が付くもの (No.1 ~ 3) と付かないものがあり、その比率は1対6で沈線のないものが一般的である。

②体部の形態や器面調整は①と同じであるが、口縁部が直立ないし内傾するもの (No.20・21)。口径が12cm台のものとは15cm台の2法量が確認される。

③体部と口縁部の境に小さな段が付き、口縁部が大きく開くもの。口縁部は器高の6割を占め、体部は浅く平底化が進んでいる。口唇部内側に沈線が付くもの (No.22 ~ 24) と付かないもの (No.25) があり、3対1で沈線の付くものが多い。なお、口縁部形態がやや異なるが、No.19もこの一種であろう。

以上の3種のうち、①が坏全体の7割を占め、②は1割、③は2割程度である。黒色処理は、上記の形態に関わらず、口縁部周辺にその痕跡を残しているものが大半で、坏全体の4割に認められる。また、内面に放射状の暗文を施すものが若干例みられた (No.8・18・22)。特にNo.22の暗文は、器形に合わせ

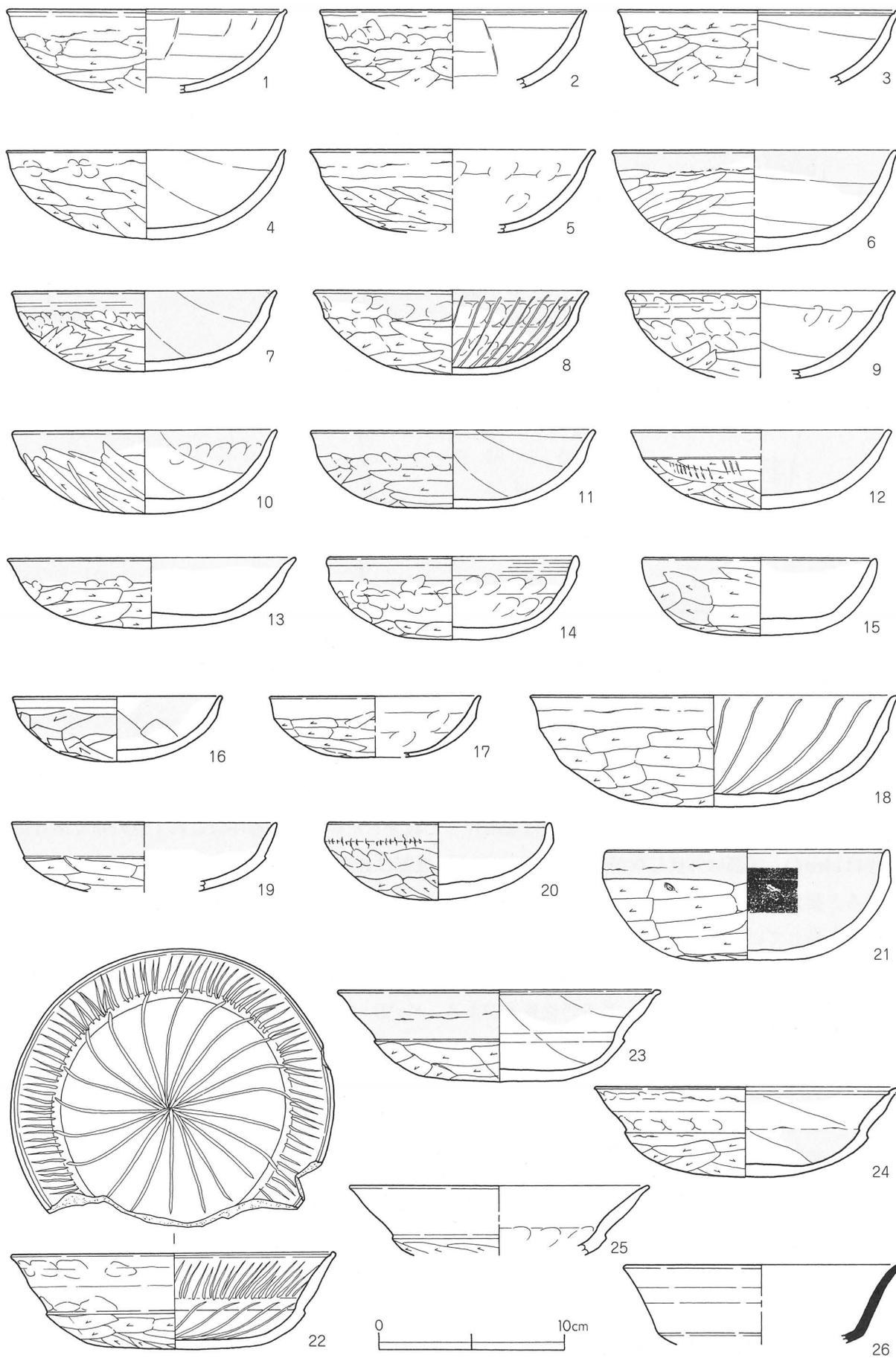


第169図 第59号住居跡遺物出土状況

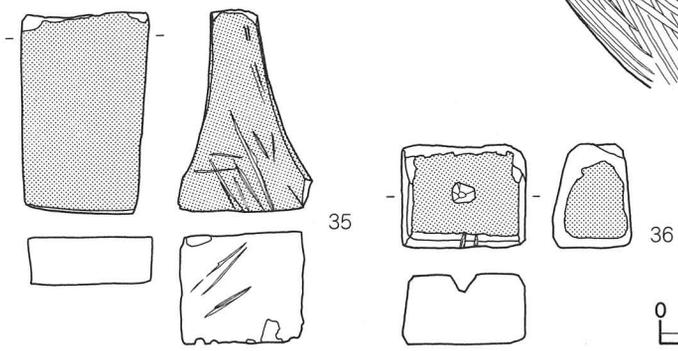
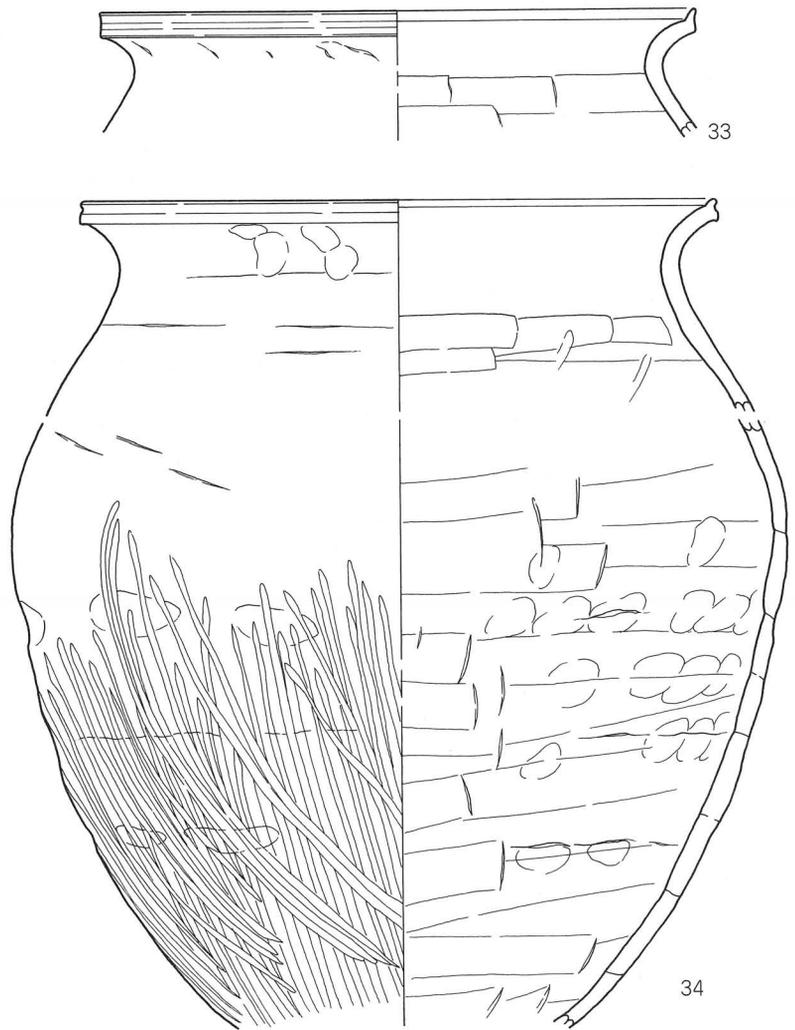
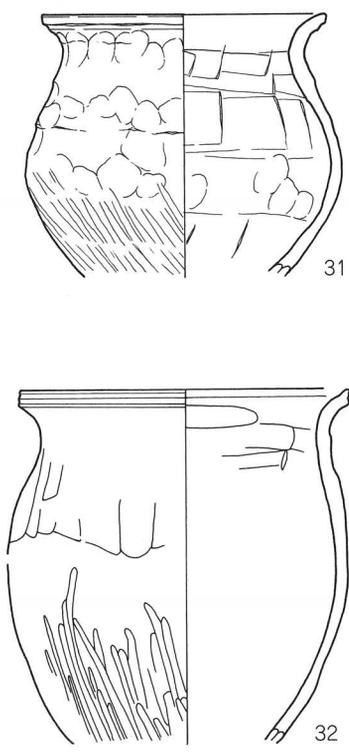
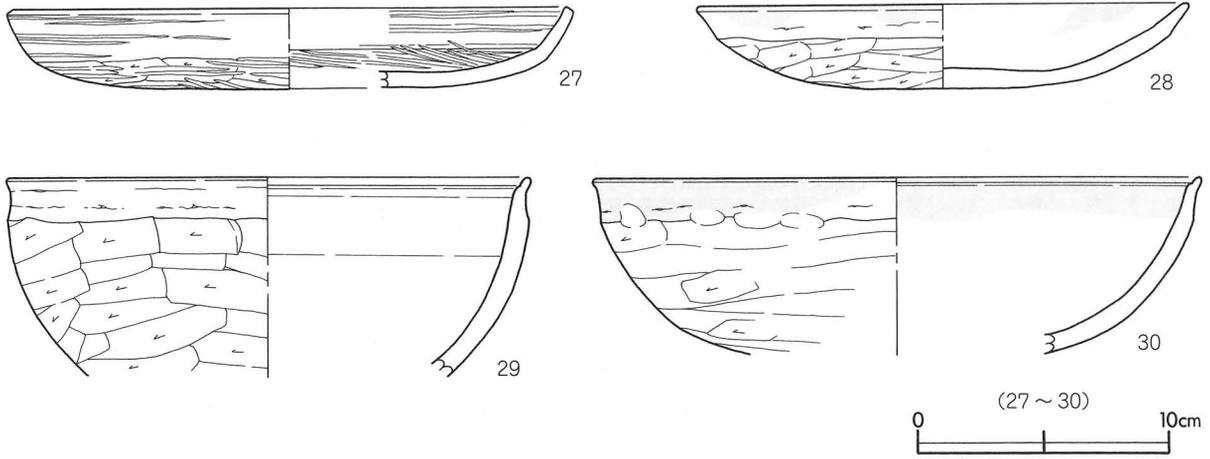
て2段に暗文を配する当地では珍しい事例である。

No.26は須恵器の坏である。当住居跡では微細片まで精査したが、須恵器坏はこれ1点のみであった。口径は14cm台、体部は外反しながら強く立ち上がる。底部は存在しないが残存部位から平坦化した丸底であると推定される。No.27・28は土師器盤である。No.27は強く屈曲した厚手の口縁部をもち、内外面に磨きを施している。一方、No.28は上記①の坏を浅くしたような形態を呈し、調整も坏と同様である。No.29・30は土師器碗である。口縁部形態や調整技法は①の坏と同様で、体部のみが深手に作られている。No.31・32は土師器の小型甕で、若干の法量差がある。No.33・34は一般的な大きさの土師器甕で、体部は膨らみが強く、最大径を上位にもつ。No.35・36は凝灰岩製の砥石である。No.36の中央部には逆円錐状の穿孔があるが、貫通していない。

所見 当住居跡の土器群は、①や③の坏と同様なものを第29・37・45・51号住居跡などに認めることができる。暗文の付いた坏や盤、碗なども第37・45・51号住居に確認できるので、ほぼ同時期とみなすことが可能であろう。中でも第51号住居跡は、①の坏が主体となっている点で当住居跡と一致している。須恵器の割合がきわめて低いことも同様である。第51号住居跡には、新治窯跡群一町田窯段階のかえり蓋が存在するので、8世紀前葉の時期が与えられる。また、No.22の坏内面に2段にわたる暗文を付す例は、飛鳥Ⅳ期から平城Ⅰ、Ⅱ期頃の坏類に少なからず認められる。口唇部内側に沈線が付くのも同期の畿内産土師器坏の模倣であろう。いずれも8世紀前葉頃の特徴であり、当住居の時期もこれに合わせて考えておくべきであろう。



第170图 第59号住居跡出土遺物 (1)

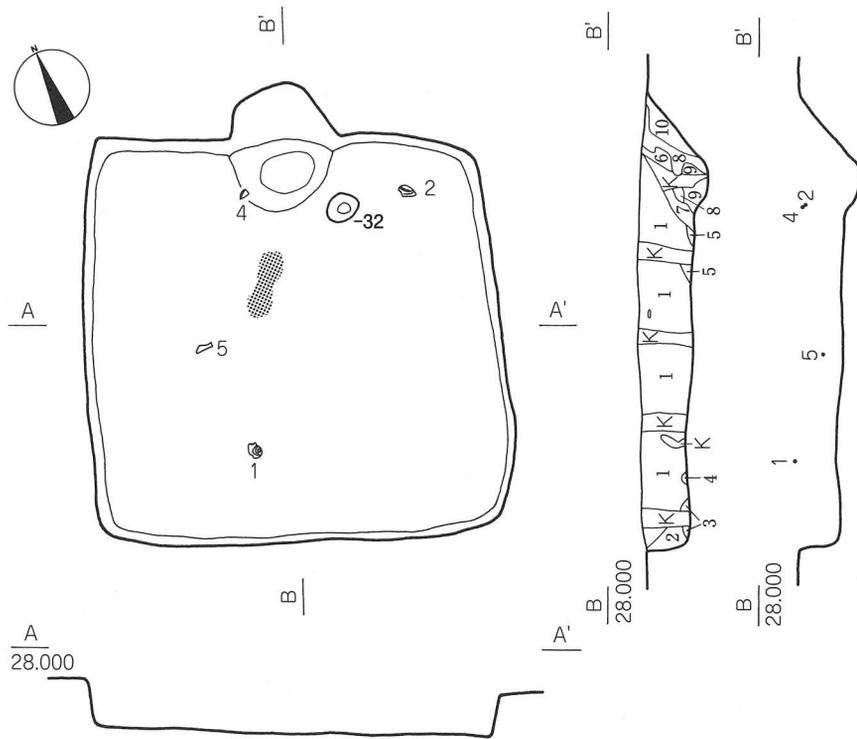


第171图 第59号住居跡出土遺物 (2)

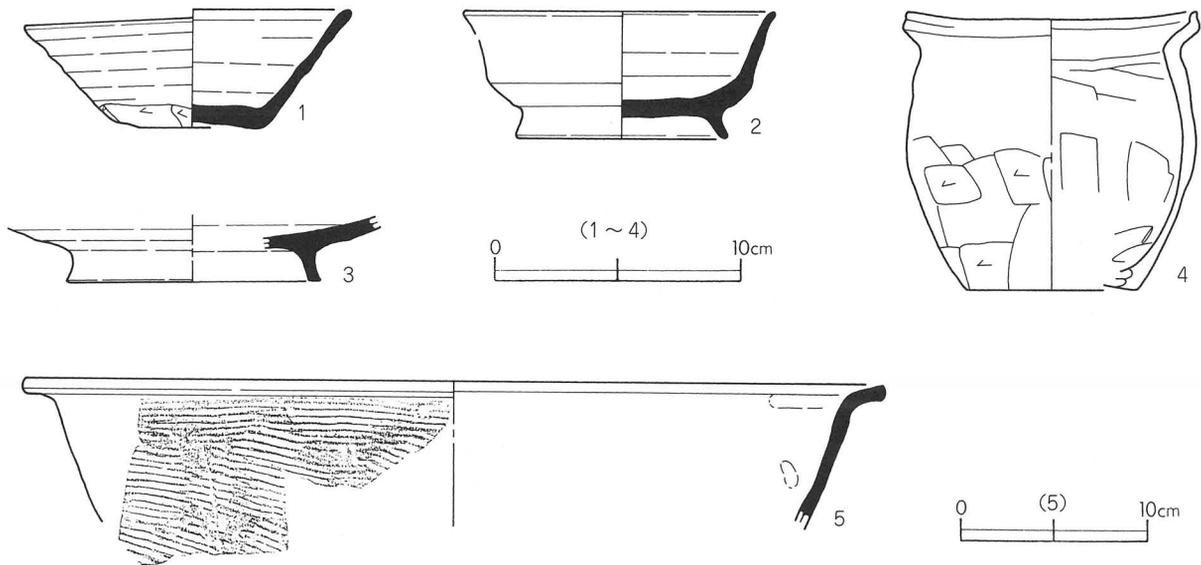
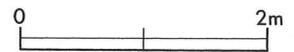
第59号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 1	土師器 坏	口径 [15.0] 器高 (4.4)	底部は丸底で、体部は丸みをもって開き、口縁部との境は不明瞭。口唇部は僅かに外反し、内側に沈線による小さな段が付く。	体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面にヘラ状工具の圧痕あり。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	東側壁溝覆土上位 30% (口径の20%残存)
第170図 2	土師器 坏	口径 [14.2] 器高 (4.1)	体部は丸みをもって深めに立ち上がり、口縁部との境は不明瞭。口唇部は僅かに外反し、内側に沈線が付く。	体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、体部と口縁部の境に未調整部分を残す。内面にヘラナデ。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	西側壁溝内 30% (口径の40%残存)
第170図 3	土師器 坏	口径 [15.2] 器高 (4.0)	体部は丸みをもって開く。口縁部は僅かに外反し、体部との境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。口唇部内側に沈線が付く。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい黄橙色 良好	覆土下位 30% (口径の30%残存)
第170図 4	土師器 坏	口径 15.0 器高 4.7	底部は丸底で、体部から口縁部にかけては半球形状を呈する。口唇部は僅かに外反する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直 ほぼ完形
第170図 5	土師器 坏	口径 [15.2] 器高 (4.4)	体部は丸みをもって開く。口縁部は僅かに外反し、体部との境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	覆土下位 30% (口径の40%残存)
第170図 6	土師器 坏	口径 [15.2] 器高 5.4	底部は丸底で、体部は丸みをもって深めに立ち上がる。口唇部は僅かに外反する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削りとヘラナデ、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面黄橙色 良好	覆土下位 30% (口径の30%残存) 口縁部付近黒色処理
第170図 7	土師器 坏	口径 14.2 器高 4.3	底部は丸底で、体部は丸みをもって開く。口縁部は僅かに外反し、体部との境にごく微かな稜が付く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 外面にぶい黄橙色、 内面黒褐色 普通	南側壁溝内 ほぼ完形 口唇部に磨耗 内外面黒色処理 (外面は部分的)
第170図 8	土師器 坏	口径 14.7 器高 4.5	底部は丸底で、体部は丸みをもって開く。口縁部は僅かに外反し、体部との境に微かな稜が付く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。内面に放射状の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面浅黄橙色、部 分的に黒褐色 普通	カマド袖部脇 床直 70% 内面黒色処理 (部分的)
第170図 9	土師器 坏	口径 14.4 器高 (4.8)	体部は丸みをもってやや深めに立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、体部との境に微かな稜が付く。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面黄橙色 良好	カマド袖部脇 床直 70%
第170図 10	土師器 坏	口径 14.2 器高 4.4	底部丸底で、体部は丸みをもって開く。口縁部は僅かに外反し、体部との境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面浅黄橙色、部 分的に黒褐色 普通	覆土下位 ほぼ完形 内外面黒色処理 (部分的)
第170図 11	土師器 坏	口径 15.3 器高 4.2	底部は平坦化した丸底で、体部は丸みをもって開く。口縁部は僅かに外反し、体部との境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面黄橙色と黒色、 内面明るい黒褐色 普通	覆土下位 80% 内外面黒色処理
第170図 12	土師器 坏	口径 [14.0] 器高 4.2	底部は丸底で、体部は丸みをもって開く。体部と口縁部の境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 外面にぶい褐色、内 面黒色 良好	カマド覆土 20% (口径の20%残存) 外面口縁部・ 内面黒色処理
第170図 13	土師器 坏	口径 [15.6] 器高 3.7	底部は丸底で、体部は丸みをもって浅く開く。口縁部は僅かに外反する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面灰褐色、内面に ぶい褐色 普通	床直 40% (口径の40%残存) 内外面黒色処理 (希薄)
第170図 14	土師器 坏	口径 13.4 器高 4.4	底部は丸底で、体部は丸みをもって深く立ち上がる。口縁部はやや厚みもち、体部から連続して開く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部下位に横位の手持ちヘラ削りを施す。体部上位に指頭圧痕、口縁部に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面明褐色 普通	南側壁溝内 70% 内外面黒色処理 (希薄)
第170図 15	土師器 坏	口径 12.6 器高 4.1	底部は平坦化した丸底で、体部との境に微かな稜が付く。体部はやや丸みを帯びて強めの角度で立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面赤褐色 普通	壁溝覆土上面 70% 内外面黒色処理 (部分的)
第170図 16	土師器 坏	口径 11.3 器高 3.5	やや小型を呈する。底部は丸底で、体部は丸みをもって開き、口縁部は僅かに外反する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面にぶい褐色 普通	床直 ほぼ完形 内外面黒色処理 (部分的)
第170図 17	土師器 坏	口径 [11.4] 器高 (3.2)	やや小型を呈する。底部は丸底で、体部はやや浅めに開く。口縁部は僅かに外反し、体部との境に微かな稜が付く。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	カマド覆土 30% (口径の40%残存)
第170図 18	土師器 坏	口径 [19.6] 器高 5.9	大型の坏。底部は丸底で、体部は丸みをもって深手に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、体部との境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。内面に放射状直線の暗文を付ける。	微細な長石・石英を少量 内外面黄褐色 良好	カマド袖部脇 床直 70%

図版番号	器種	法 量 (cm)		器形の特徴		技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)			
第170図 19	土師器 坏	口径 器高	[14.2] (3.6)	底部は丸底で、体部は浅めに開く。口縁部は体部との境にごく小さな段をもって強い角度で直線的に立ち上がる。		体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面暗褐色 良好	床直 10% (口径の20%残存) 口縁部黒色処理
第170図 20	土師器 坏	口径 器高	12.0 4.2	底部は丸底で、体部は丸みをもって開く。口縁部は体部との境に緩い稜をもって内傾する。		底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面浅黄橙色 普通	西側壁溝覆土 上面 ほぼ完形 内外面黒色処理 (部分的)
第170図 21	土師器 坏	口径 器高	15.2 5.9	大型の坏。底部は平坦化した丸底で、体部は丸みをもって深手に立ち上がる。口縁部は体部との境に緩い稜をもって直立する。		底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面にぶい褐色、内面黒褐色 普通	西側壁溝覆土 上面 70% 外面に粉状の種子の庄痕 内面・外面口縁部付近黒色処理 (希薄)
第170図 22	土師器 坏	口径 器高	17.3 5.1	底部は平坦化した丸底で、体部は浅く開く。口縁部は体部との境に小さな段をもって大きく開き、器高の6割以上を占める。口唇部内側に沈線が付く。		底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部内外面に回転ナデを施す。内面に放射状の暗文を二段にわたって付ける。	微細な長石・石英を少量 内外面橙色 良好	南側壁溝内 80%
第170図 23	土師器 坏	口径 器高	[17.3] 4.9	底部は平坦化した丸底で、体部は浅く開く。口縁部は体部との境に小さな段をもって大きく開き、器高の6割以上を占める。口唇部内側に沈線が付く。		底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面にぶい褐色、内面にぶい赤褐色 普通	カマド袖部脇、床直 50% (口径の50%残存) 口縁部黒色処理
第170図 24	土師器 坏	口径 器高	16.3 4.8	底部は丸底で、体部は浅く開く。口縁部は体部との境に小さな段をもって大きく開き、器高の5割を占める。口唇部内面に沈線が付く。		底部に二方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 良好	カマド袖部脇、床直 90% 内面黒色処理 (部分的)
第170図 25	土師器 坏	口径 器高	[16.0] (3.7)	体部は丸みをもって浅く開き、口縁部は体部との境に小さな段をもって大きく開く。		体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面にぶい橙色 良好	覆土 10% (口径の10%残存)
第170図 26	須恵器 坏	口径 器高	[14.8] (4.2)	体部は強い角度で外反ぎみに立ち上がる。		体部下位にヘラ削りはなく、体部内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英、白雲母を少量 内外面明褐色 普通	覆土 20% (口径の15%の細片2個)
第171図 27	土師器 盤	口径 器高	[22.6] 3.2	底部は平坦で広く、口縁部は強めの角度で直線的に立ち上がる。口唇部は平坦に切り揃えられる。		底部に一方方向のヘラ削りと磨き、体部に横位のヘラ削りと磨き、口縁部内外面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面明褐色 普通	覆土 20% (内底径の40%残存)
第171図 28	土師器 盤	口径 器高	[19.6] 3.3	浅い坏状を呈する。底部は平坦で、体部は丸みをもって浅く開き、口縁部との境に微かな稜が付く。		底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい橙色 普通	カマド袖部脇、床直 30% (口径の40%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第171図 29	土師器 椀	口径 器高	[21.0] (7.9)	大型で深手の坏状を呈する。体部は半球形状を呈して深く、口縁部との境に微かな稜が付く。口唇部は外反ぎみに直立し、内側に沈線が付く。		体部外面に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面褐色 普通	床直 20% (体部径の30%残存)
第171図 30	土師器 椀	口径 器高	[24.2] (7.0)	大型の坏状を呈する。体部は半球形状を呈して深く、口縁部との境に微かな稜が付く。口唇部は外反ぎみに直立し、内側に沈線が付く。		体部外面に横位のヘラ削りとナデ、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、ごく微細な白雲母を微量 内外面にぶい褐色 普通	覆土 20% (口径の20%残存) 口縁部黒色処理
第171図 31	土師器 小型甕	口径 器高	[14.9] (13.9)	体部は中位に最大径をもち算盤玉状を呈する。口縁部は体部から「く」字を描いて屈曲する。		体部下位に横位のヘラ削りと斜位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。全体的に作りが粗く、指頭圧痕を残す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 外面にぶい橙色、内面にぶい褐色 不良	カマド燃焼部 40% (口径・体部径の50%残存)
第171図 32	土師器 小型甕	口径 器高	17.8 (18.8)	体部はやや細めで中位に最大径をもつ。頸部の縮まりは弱く、口縁部は「ハ」字に開いて小さな口唇部が直立する。		体部下位に縦位の磨き、上位に縦位の軽いヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 良好	住居中央床直 50% (体部上位は完存)
第171図 33	土師器 甕	口径 器高	[23.6] (4.7)	口縁部は「く」字に外反し、口唇部を直立させる。		口縁部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい黄橙色 良好	カマド覆土 細片 (口径の20%残存)
第171図 34	土師器 甕	口径 器高	[25.4] (8.4) (24.1)	体部は上位に最大径をもち、大きく膨らむ。口縁部は「く」字に外反し、口唇部を短く直立させる。		体部下位に横位のヘラ削りと縦位の磨き、上位に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面褐色 良好	覆土下位 30% (頸部径の20%、体部径の30%残存)
図版番号	器種	法 量				特徴	備考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)			
第171図 35	石製品 砥石	8.0	5.0	5.2	225.7	凝灰岩製の方柱形の砥石。両面の使用により、断面が撥形を呈する。側面、小口にも磨耗があり、使用面は5面にわたる。	西側壁溝内 50%	
第171図 36	石製品 砥石	4.9	4.1	3.1	99.8	凝灰岩製の立方体形の砥石。砥面中央に径8mm、深さ6mmの逆円錐形の穿孔あり。	北側壁寄り 床直 ほぼ完形	



- SI-60
1. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒・ローム小微量 ローム粒少量
 2. 7.5YR4/3 褐色 ローム大微量 ローム小少量 ローム粒中量
 3. 7.5YR5/8 明褐色
 4. 7.5YR5/6 褐色 白色砂中量
 5. 7.5YR4/4 褐色 ローム小中量
 6. 5YR3/3 暗赤褐色 焼土中・小・ローム粒少量 ローム小中量 しまり強
 7. 5YR5/6 明赤褐色 焼土小・ローム大・中少量
 8. 5YR4/4 にぶい赤褐色 焼土小・ローム大・中少量、ローム粒・白色砂中量
 9. 5YR4/6 赤褐色 焼土中少量、焼土小中量、焼土粒多量
 10. 5YR4/8 赤褐色 焼土中・小少量、焼土粒多量 しまり強



第172図 第60号住居跡・出土遺物

第60号住居跡〔第172図、PL.25・86〕

位置 調査区南東寄りT・U-27・28グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5m付近に位置する。重複はしていないが南西側に隣接して第61号住居跡が位置する。

規模 長軸3.2m、短軸3.08mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約9.9㎡である。

主軸方向 N-21° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で43cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 若干起伏を有している。カマド燃焼部手前側に焼土範囲が広がっていた。

ピット 1基確認された。カマド近くに位置し、円形、径は27cm、深さ32cmを測る。入り口部はおそらくカマドの位置と対をなす南側であろう。

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場より約54cm壁外に掘り出して構築されている。全長は1.03m、両袖は確認されなかった。燃焼部は横長の楕円形を呈し、床面を8cm程掘り窪めている。ここから奥壁にかけて外傾して立ち上がっていた。遺物は出土していない。

覆土 10層に分層され、全体に耕作による攪乱が著しい。第5～10層はカマド関連覆土、他は壁際を除きほぼ単一層で、埋め戻し土と考えられる。

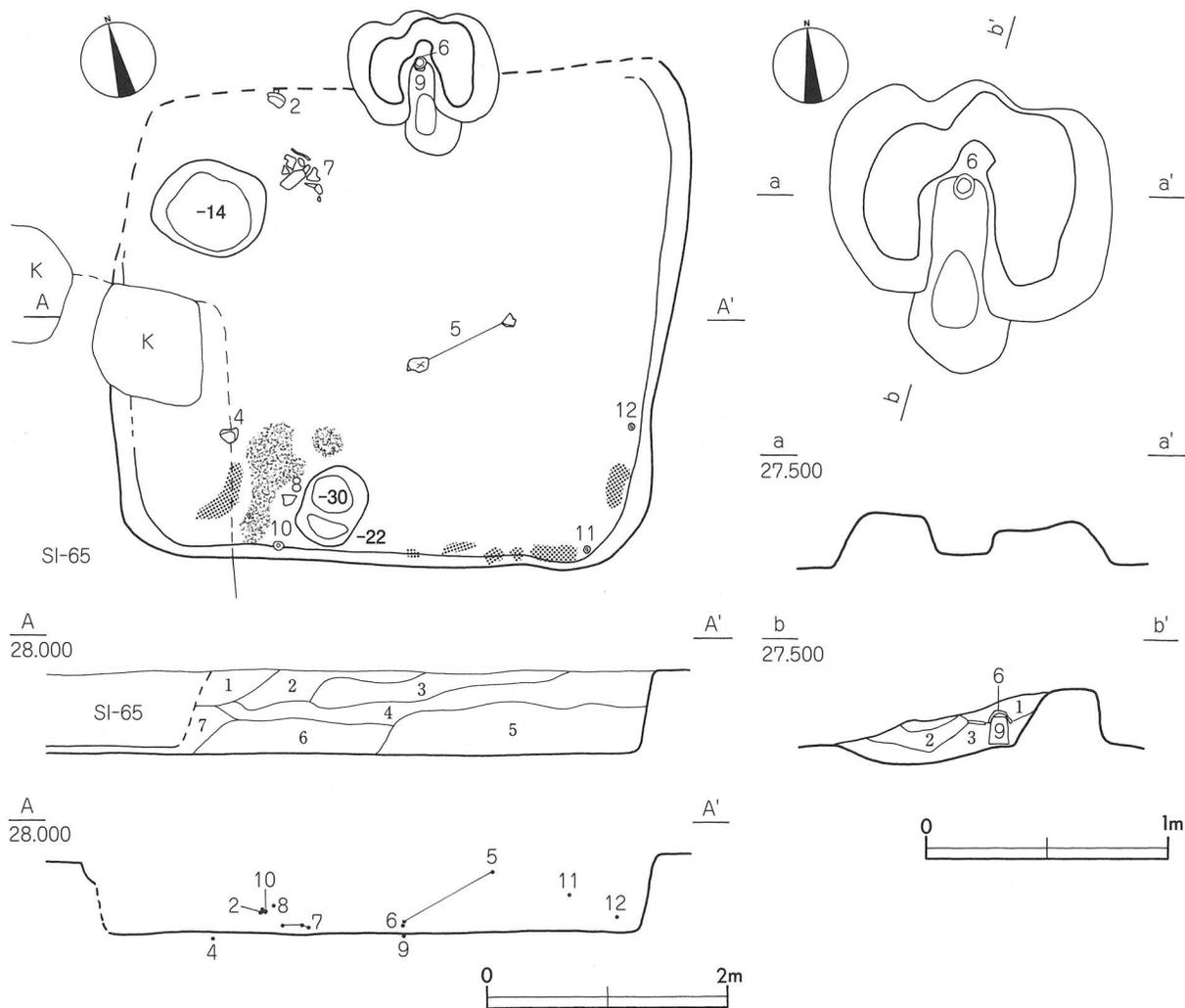
遺物 遺物は比較的少なく覆土中に散見された程度で、床面直上で発見されたものはない。

No.1は須恵器坏である。口径13.2cmに対して底径が4.7cmしかなく、底径・口径指数は(底径/口径×100)35.6%とかなり低い。須恵器坏の最終段階のものと思われる。No.2は須恵器の高台付坏である。小型な割に底径、高台径が大きく、作りも端正であるが、焼成はやや軟質である。No.3は須恵器の高台付盤とみられる小片である。回転復元によると高台径の大きな盤であったとみられるが、焼成は軟質で褐色を呈している。No.4は土師器の小型甕である。器壁は薄く作られるが、器面調整は粗雑である。No.5は須恵器の甕ないし鉢の口縁部片で、体部に横方向の平行線叩き目がみられる。作りは良好である。以上の他に、一般的な大きさの土師器甕の小片、外面に縦方向の平行線叩き目をもつ須恵器甕の破片、No.1と同形の須恵器坏小片などが若干点発見されている。

所見 これらの須恵器はすべて新治窯跡産の製品で、特に軟質な焼き上がりの粗悪品が目立つ点で、須恵器生産の衰退期の様相を思わせる。No.1の坏は底径が極限まで小さくなっており、新治窯跡では小野窯の段階に相当する。同窯は9世紀後葉頃に比定されているが、当住居跡の遺物群もそれに充て考えることができるであろう。当住居が営まれた時期も同様であろう。

第60号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	須恵器 坏	口径 13.2 底径 5.6 器高 4.3	底径が極めて小さく、体部は緩めの角度で直線的に開く。口唇部は僅かに肥厚する。	底部に一方からの強いヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面灰黄褐色 普通	覆土上位 70%
第172図 2	須恵器 高台付坏	口径 [12.5] 高台径 8.6 器高 5.0	やや小型。高台は「ハ」字に開き、口縁部は外反する。体部は斜め方向に短く張り出した後、急角度で立ち上がる。	底部および体部下位に時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 外面暗灰色、内面灰褐色 普通	覆土上位 70%
第172図 3	須恵器 高台付盤	高台径[10.2] 器高 (1.4)	高台は「ハ」字に開き、体部は水平方向に大きく開く。	体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面黄橙色 不良	覆土 細片(高台径の10%残存)
第172図 4	土師器 小型甕	口径 [11.8] 底径 [6.9] 器高 11.0	最大径は体部中位にあり、頸部と底部の締まりは弱い。口縁部は「ハ」字に開き、口唇部は直立する。	体部下位に横位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 外面灰褐色、内面黒褐色 普通	覆土上位 50%(口径の70%残存) 底部に木葉痕
第172図 5	須恵器 甕ないし 鉢	口径器高 [46.0] (7.7)	甕もしくは鉢の口縁部片。体部は僅かな丸みをもって強い角度で立ち上がる。口縁部は水平近くまで大きく開き、口唇部は素縁に整えられる。	体部外面に横位の平行線の叩き目、口縁部に回転ナデ、内面に横位のナデを施す。	微細な長石・石英、白雲母を少量 内外面灰色 良好	覆土中位 細片(口径の10%残存)



SI-62

1. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土中・ローム粒微量、ローム小少量
2. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム粒微量
3. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中・小微量 ローム粒少量
4. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小少量 ローム粒微量
5. 7.5YR4/3 褐色 ローム中・粒中量、ローム小少量、しまり強
6. 7.5YR4/3 褐色 ローム中・粒中量、ローム小微量、粘性強
7. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土中・小微量、ローム中・粒少量

SI-62 カマド

1. 2.5YR3/3 暗赤褐色 焼土粒少量
2. 2.5YR4/6 赤褐色 焼土大～粒多量 ローム小中量
3. 7.5YR5/6 明褐色 ローム中微量

第173図 第62号住居跡・カマド遺物出土状況

第62号住居跡〔第173・174図、PL.25・87・88〕

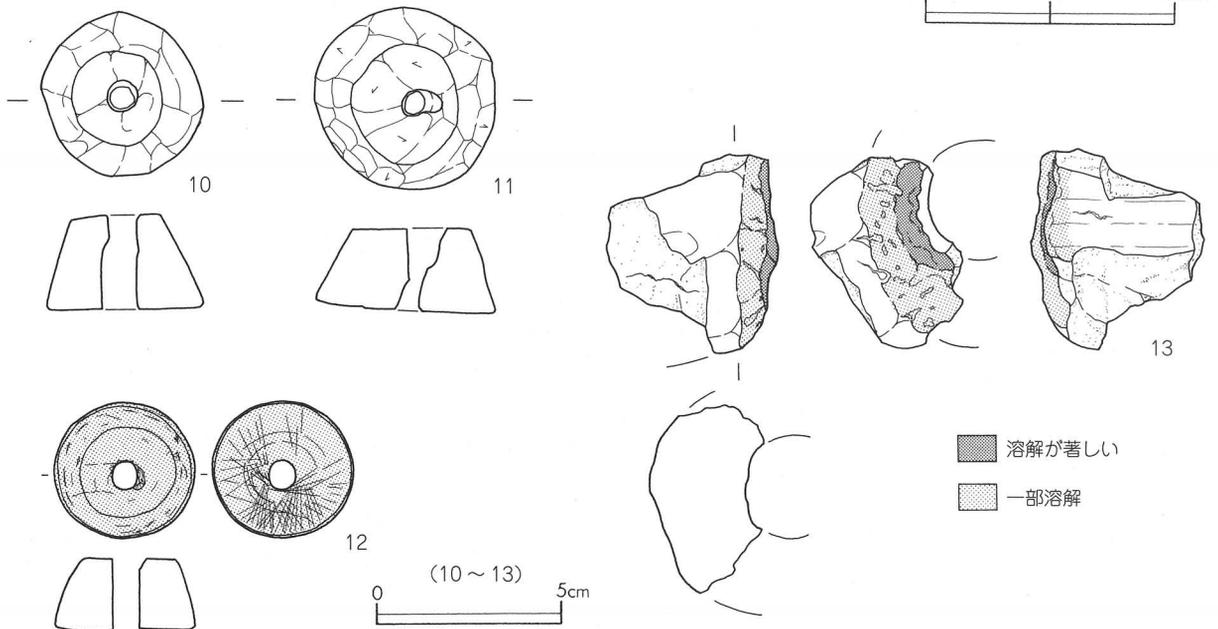
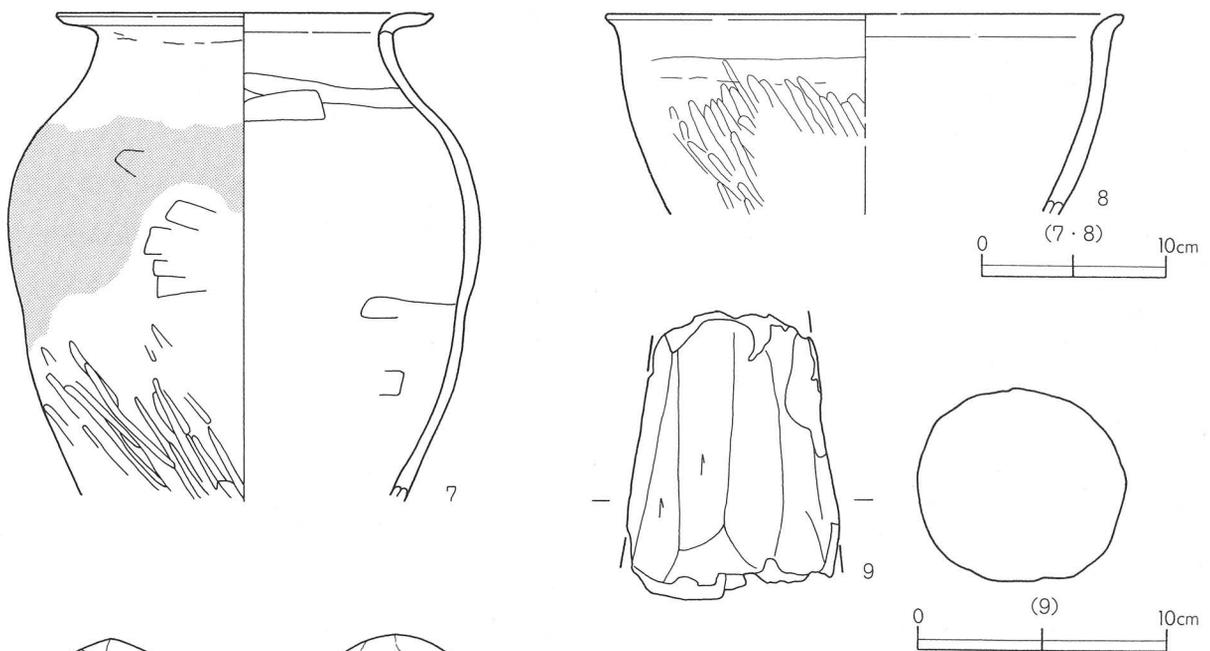
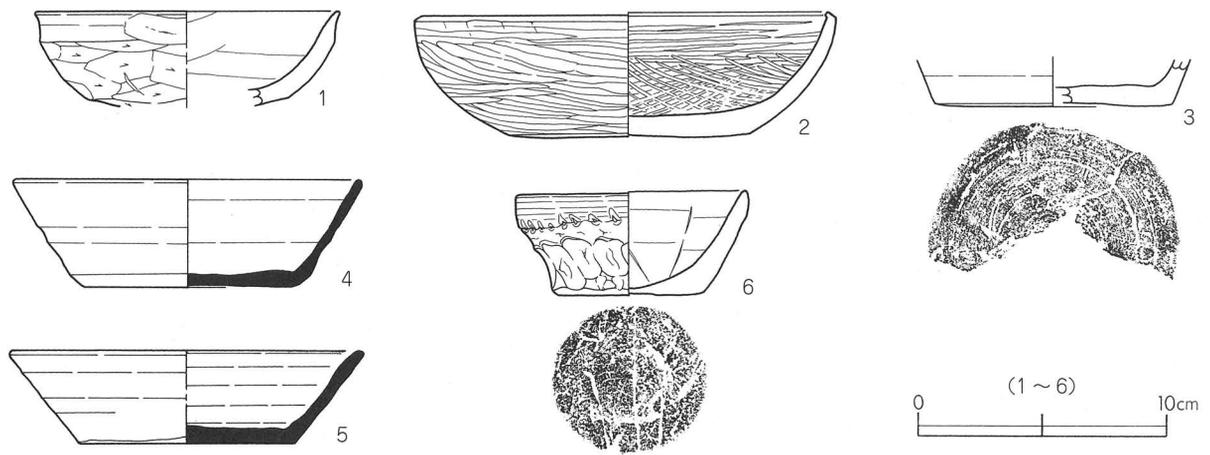
位置 調査区西寄りF・G-23グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。北側で第19号住居跡、西側で第65号住居跡と重複しており、カマドの遺存状態と土層堆積状態から本住居は第19号住居跡より新しく、第65号住居跡より古いと判断した。

規模 長軸4.16m、短軸推定4.0mのやや横長の正方形を呈し、床面積は推定16.6㎡である。

主軸方向 N-15° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で61cmを測る。北側は第19号住居跡と同時に調査したため、壁は全て確認できなかった。壁溝は確認されていない。

床 概ね平坦である。南壁際は焼土と粘土の範囲がみられた。粘土範囲は厚みがあり、床面から20cm程の高さまでを占めている。



第174図 第62号住居跡出土遺物

ピット 2基確認された。北西隅のピットは貯蔵穴の可能性も考えられる。径107cm、深さ14cmを測る。南側は入り口施設に関連したピットであろうか。径67cm、深さ30cmを測る。

カマド 北壁ほぼ中央に位置している。壁は確認できなかったがおそらく壁外に掘り出して構築されたと考える。全長1.18m、焚き口幅20cmを測る。燃烧部は深さ8cmで、奥壁にかけて外傾して立ち上がる。袖の遺存状態は良好で、袖内側と奥壁側は被熱により著しく赤化していた。カマドの奥壁からは支脚が立位で、さらにその上に土師器の坏が被せられて出土した。

覆土 7層に分層された。第65号住居跡との重複関係が明瞭である。同住居跡との床面差は約8cmである。

遺物 当住居跡は、第19・65号住居跡と切り合い関係をもつため、覆土内からは時期の異なる土器類が混在して発見されている。図示したのは確実に当住居跡に伴うと思われるものを選んでいますが、確認された破片総数に対してかなり少数となり、もともと残された遺物は少なかったであろうと推測される。前述したようにカマド内からNo.9の支脚が立ったまま発見され、さらにその上にNo.6の坏が被せられていた。支脚の先端が折れた部分を補い、高さ調節を図ったものと思われる。また、住居跡の南壁、東壁際の覆土中からも、坏や紡錘車などが発見されている。

No.1～3は土師器坏である。それぞれ形態や法量が異なり、No.1は小型の丸底坏、No.2は大型で磨きの施された大型平底坏、No.3は須恵器模倣の平底坏である。No.4・5は新治窯跡産の須恵器坏で、大きな底径と直線的な体部が共通している。No.6は土師器の小型坏であるが、手捏ね成形で底部に木葉痕をもつ特異な土器である。No.7は土師器甕、No.8は土師器の鉢ないし甑である。No.9は支脚で、上部・下部共に欠失している。No.10～12は土製ないし石製の紡錘車である。No.13はフィゴの羽口片で、先端が溶解していた。

所見 当住居跡の年代は、No.4・5の須恵器坏の形態が新治窯跡群の東城寺寄井前A単位群の坏に類似しており、8世紀後半の時期が充てられよう。なお、No.2の土師器坏は、大型で全面に磨きをもち、胎土に微量の骨針を含む点で、第53号住居跡に特徴的にみられた丸底の坏や椀、盤などと共通している。また、No.6の手捏ね成形の坏も同住居跡に類例がみられる。共伴する須恵器坏は東城寺寄井前A単位群から東城寺桑木窯跡の段階に相当し、8世紀後半から9世紀初頭の時期が充てられている。この第53号住居跡の遺物相は当該地域においては特異なものであるが、当住居跡の時期と大きな懸隔はみられない。当住居跡の時期を8世紀後半とみておくことに支障はないと思われる。

第62号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 1	土師器 坏	口径 [12.2] 器高 (3.7)	やや小型で底部は丸底とみられる。口縁部は体部との境に微かな稜をもち、外反ぎみに小さく立ち上がる。	体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面黄橙色 良好	覆土 10% (口径の 20%残存)
第174図 2	土師器 坏	口径 [16.0] 底径 9.4 器高 4.9	大型で厚手の坏。底部は平底で、体部は丸みをもって口縁部まで連続的に立ち上がり、口唇部は小さく内傾する。	底部に一方からの磨き、外面に横位の磨き、内面に横位と放射状に磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 外面黄橙色、内面赤褐色 良好	覆土中位 60%
第174図 3	土師器 坏	底径 [9.6] 器高 (1.9)	底部は平底で、体部は強い角度で立ち上がる。	底部に回転ヘラ削り、体部下位に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、赤褐色スコリアを少量 内外面赤褐色 普通	覆土 20% (底径の 40%残存)
第174図 4	須恵器 坏	口径 [14.0] 底径 8.4 器高 4.3	底部は径の大きな平底で、体部は直線的に立ち上がる。	底部に一方からのヘラ削り、体部下位は未調整、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石を微量、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 普通	床直 60% (底部完 存)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 5	須恵器 環	口径 [14.0] 底径 8.6 器高 3.7	底部は径の大きな平底で、体部は直線的に立ち上がる。	底部に一方のヘラ削り、体部下位の半周分に回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石を微量、白雲母を多量 外面黒褐色、内面暗灰褐色 普通	覆土中位～上位 50% (口径・底径の50%残存)
第174図 6	土師器 小型環	口径 9.3 底径 6.0 器高 4.2	手捏ねによる厚手の小型環。底部は平底で、体部は直線的に開く。	体部外面に指頭圧痕による凹凸が著しい。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 外面黄褐色 内外面黄褐色 普通	カマド燃焼部・支脚上 完形 底部に木葉痕
第174図 7	土師器 甕	口径 [20.4] 器高 (25.7)	最大径は体部上位にあり、肩を張る。口縁部は「つ」字状に強く屈曲し、水平方向に大きくせり出す。	体部下位に縦位の磨き、上位に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母少量 外面褐色、内面にぶい褐色 普通	覆土下位 40% (体部径の60%残存) 外面に煤付着
第174図 8	土師器 鉢 ないし甌	口径 [27.8] 器高 (10.6)	鉢ないし甌の上位片。体部は丸みを帯びて強い角度で立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	体部外面に縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量、骨針をごく微量 内外面黄褐色 普通	覆土中位 20% (口径の20%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)			
第174図 9	土製品 支脚	(11.5)	8.4	7.7	(635)	粘土塊を柱状に成形し、長軸方向に面取りのような強いヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 ぶい橙色 普通	カマド燃焼部 70%
第174図 10	土製品 紡錘車	4.2	4.4	2.6	54	断面台形を呈する独楽状の紡錘車。全面に小刻みなヘラ削りを施す。	ごく微細な長石を少量 明黄褐色 良好	南壁沿い、覆土中位 完形
第174図 11	土製品 紡錘車	4.8	4.8	2.3	54	断面台形を呈する独楽状の紡錘車。全面に小刻みなヘラ削りを施す。孔は上下両面から穿ち、ずれて貫通する。	ごく微細な長石を少量 明黄褐色 良好	東壁沿い、覆土上位 完形
第174図 13	土製品 フイゴ羽口	(4.6)	(5.3)	(2.7)	(52.4)	羽口先端部の破片。側面に長軸方向のナデを施す。孔径は推定3cm。先端は鉛状に溶解。	微細な長石を多量 明灰黄色～黒色 普通	覆土 細片 (直径の1/4残存)

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)		
第174図 12	石製品 紡錘車	3.7	3.6	1.9	41.4	蛇紋岩製の紡錘車。孔径は7.5mm。孔内にはらせん状の線状痕と、直交する擦痕がみられる。外面にも多数の傷あり。	覆土下位 完形

第63号住居跡〔第175図、PL.25・88〕

位置 調査区南東寄り、U・V-28・29グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5m付近に位置している。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.5m、短軸3.24mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約11.3㎡である。

主軸方向 N-75° -W

壁 垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で23cmを測る。南壁側は大きく攪乱により壊されていた。壁溝は確認されなかった。

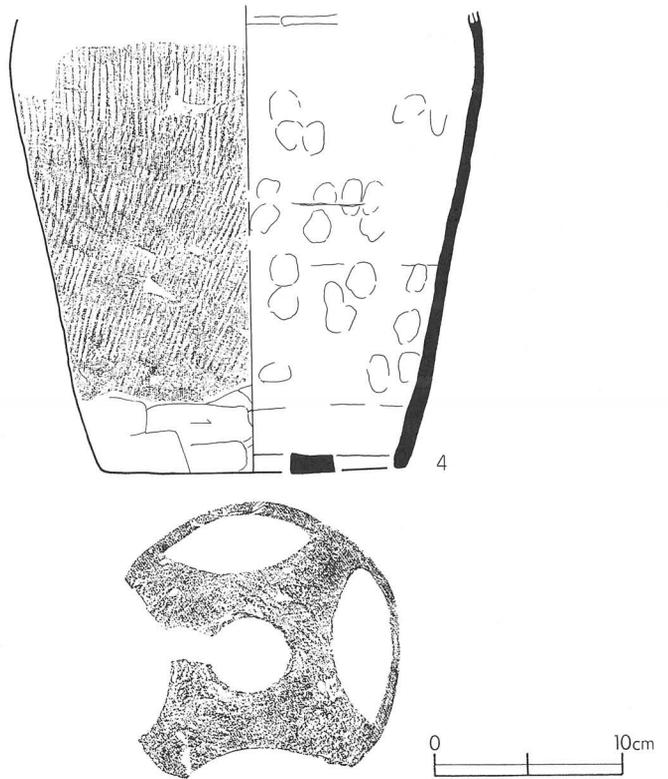
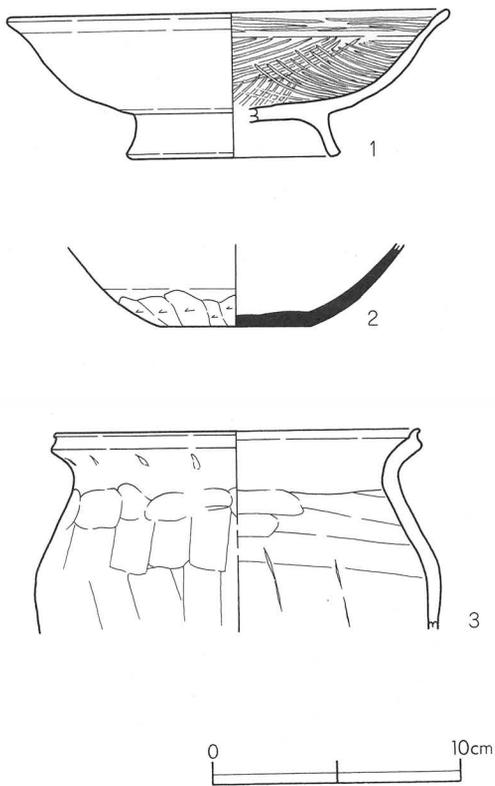
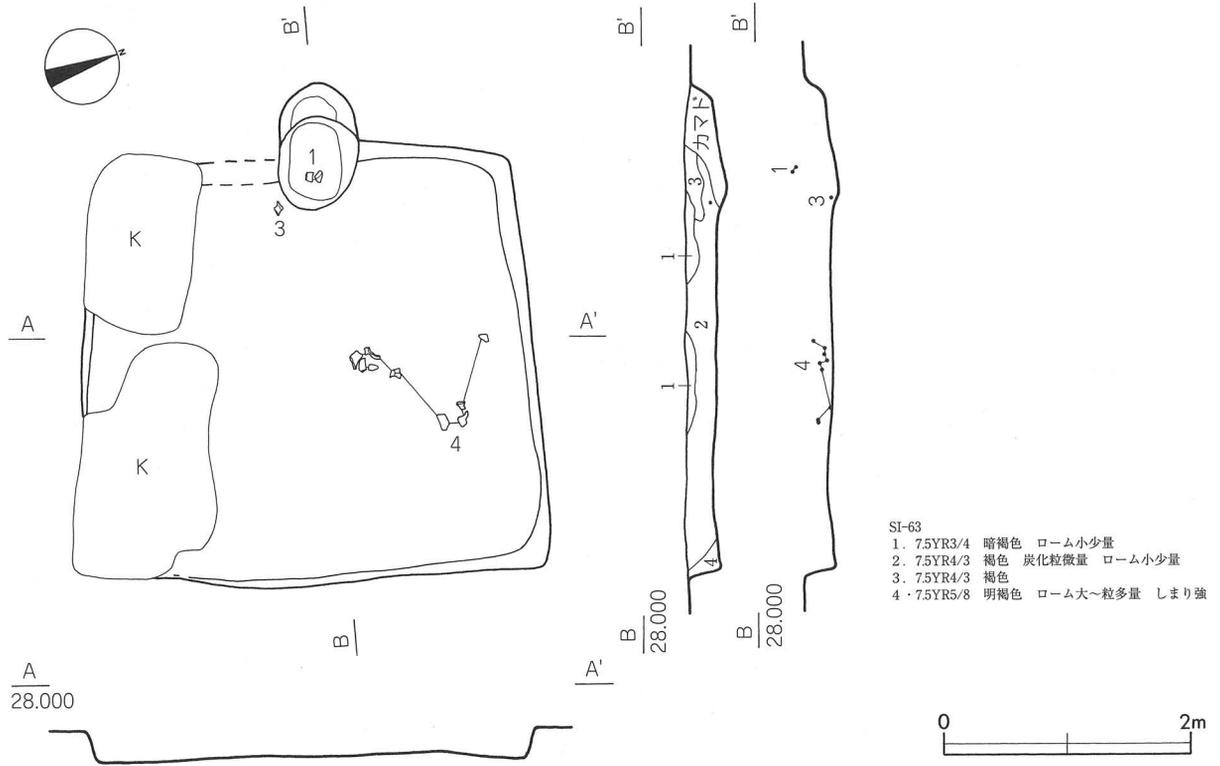
床 やや起伏を有している。

ピット 確認されなかった。入り口部はおそらくカマドの位置と対をなす東側となろう。

カマド 西壁のほぼ中央に位置し、壁下場より約60cm壁外に掘り出して構築され、全長1.0mを測る。燃焼部は楕円形を呈し、深さ7cm、奥壁にかけて外傾して立ち上がっている。両袖は遺存していない。燃焼部近くより土師器の甕が出土している。

覆土 4層に分層された。壁崩落土を除いて比較的近似した土相で、埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物はかなり少量であった。図示した土器以外は接合しない土師器甕片が若干存在する程度である。No.1は土師器の高台付椀である。内面に磨きと黒色処理が施されている。No.2は新治窯跡産の須



第175図 第63号住居跡・出土遺物

恵器坏である。ごく小さな底部と浅めの角度で開く体部をもつ。No.3は土師器の小型甕である。口唇部はシャープに摘み上げられ、全体的に端整な作りである。No.4は須恵器の甕で、新治窯跡産である。長く円筒状に伸びた体部を呈し、底部の透かし孔は中央に円形、周囲に凸レンズ形を4つ配置する、新治窯跡産の甕に典型的なものである。

所見 当住居跡の年代は、No.1の土師器内黒椀が9世紀後半から10世紀代に多くみられる形態であり、No.2の坏の小さな底部は9世紀末頃の特徴であるため、およそ9世紀末から10世紀前半頃に位置付けるのが妥当と思われる。No.4の須恵器甕は作りが粗く、焼成も軟質であり、9世紀後半以降の特徴に合致する。新治窯跡で生産される須恵器甕の最終的な段階のものであろう。

第63号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第175図 1	土師器 高台付椀	口径 [17.4] 高台径 8.2 器高 5.7	体部は丸みをもって浅めに開く。口縁部は緩やかに外反する。高台は比較的高く、僅かに「ハ」字に開く。	底部に一方方向のヘラ削りと高台取り付けに伴う回転ナデ、体部下位に軽い回転ヘラ削り、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 外面にぶい黄橙色、内面黒色不良	カマド覆土上位 40% (高台径の60%残存) 内面黒色処理
第175図 2	須恵器 坏	底径 6.2 器高 (3.2)	底部は径が小さく、体部は僅かに丸みを帯びて大きく開く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの小刻みな手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰白色不良 (軟質)	覆土 40% (底径の80%残存)
第175図 3	土師器 小型甕	口径 [14.6] 器高 (7.9)	最大径は体部上位にあり、口縁部は「く」字に屈曲する。口唇部は端整に作られ、外反しながら立ち上がる。	体部に縦位のヘラナデ、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面にぶい赤褐色良好	床直 30% (口径の30%残存)
第175図 4	須恵器 甕	底径 [16.0] 器高 (24.6)	体部は強い角度で立ち上がり、円筒状を呈する。	体部下位に横位のヘラ削り、体部に縦位の平行線の叩き目、内面に指頭圧痕が付く。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい褐色不良	床直～覆土上位 30% (底径の60%残存)

第64号住居跡 [第176～180図、PL.26・88～90]

位置 調査区西寄りB・C-21・22グリッド、標高27.5m付近に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸4.12m、短軸3.62mの長方形を呈する。北壁は有段状を呈しており、段の下部では短軸3.1mを測る。この数値から得られた床面積は約12.8㎡である。

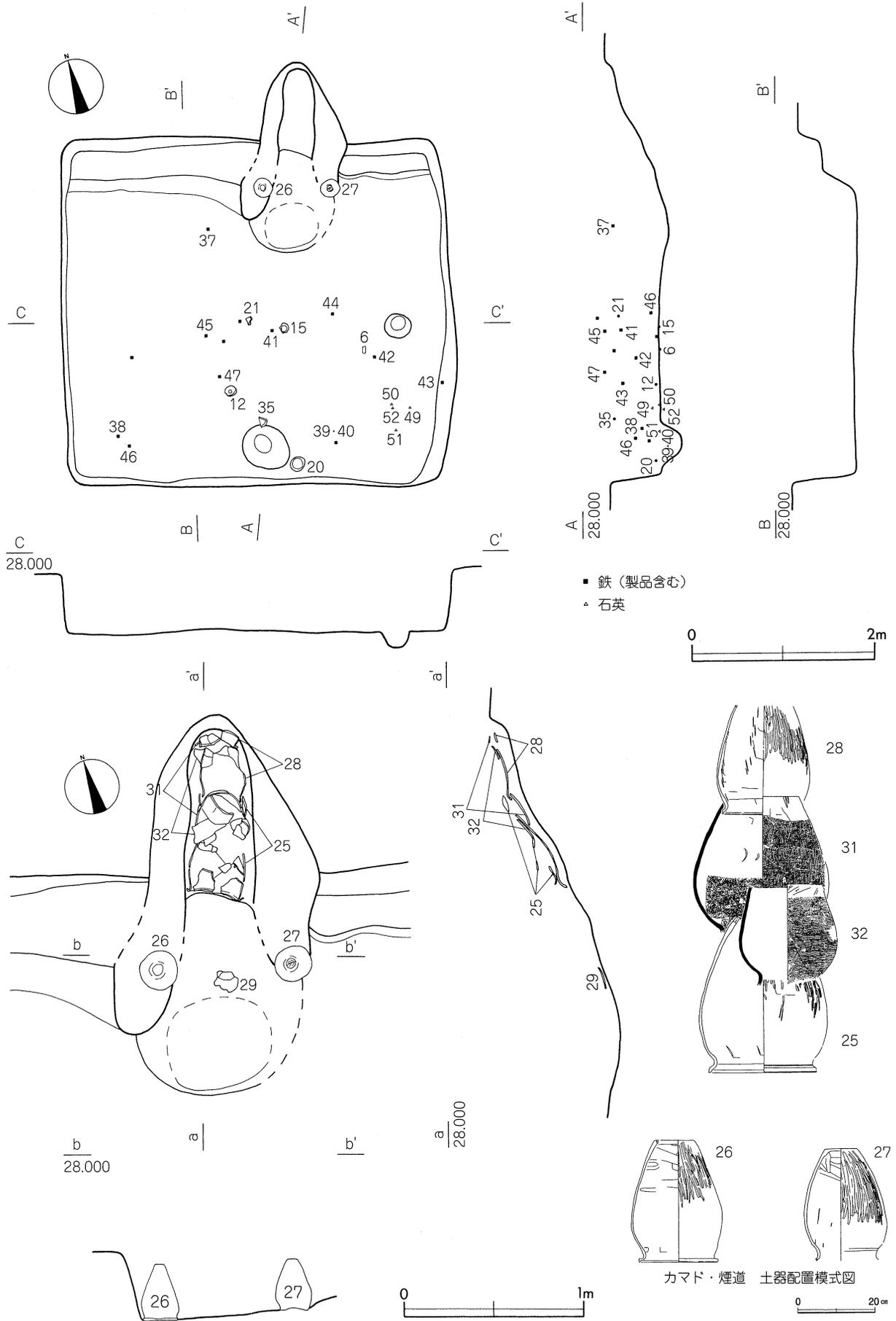
主軸方向 N-16° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で68cmを測る。前述したように北壁のカマドを中心とした両側全体が段を有し、テラス状となっている。テラス部は床面から40cm程の高さであった。壁溝は確認されていない。

床 概ね平坦である。

ピット 2基確認された。南側のピットは配置から入り口施設に伴うピットであろう。径54cm、深さ24cmを測る。東側の1基は径28cm、深さ19cmを測る。

カマド 北壁のやや東寄りに位置している。テラス部上段の下場から1.0m程壁外に掘り出して構築される。全長は2.06mでテラス部を含む壁内が燃焼部、壁外が煙道部と分けられる。特筆すべきは煙道部で、4個体分の甕を口縁部がいずれも燃焼部側となるように連結させて使用していたことである。土師器甕・須恵器甕が各2個体ずつ用いられ、両端は土師器甕が配されていた。燃焼部から煙道部にかけては土器を設置しやすいように全体的に緩やかな傾斜となっている。両袖にも特徴があり、土師器の甕がいずれも逆位の状態でやや燃焼部側に傾くように設置されていた。位置はカマドの袖とテラス部との境で、甕



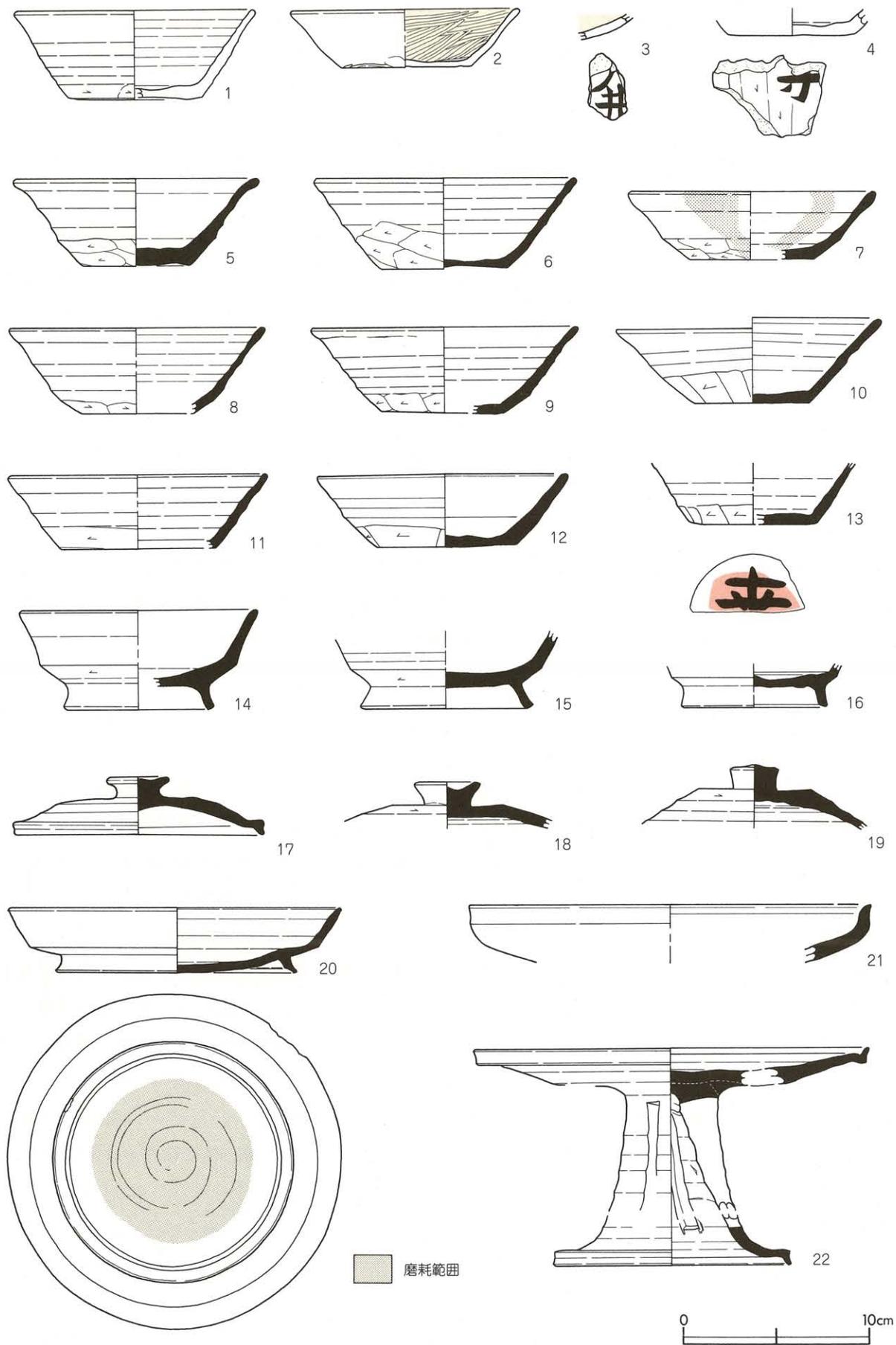
第176図 第64号住居跡・カマド遺物出土状況

の間隔は52cmを測る。燃烧部は深さ10cmを測り、奥壁にかけて被熱により赤化していた。

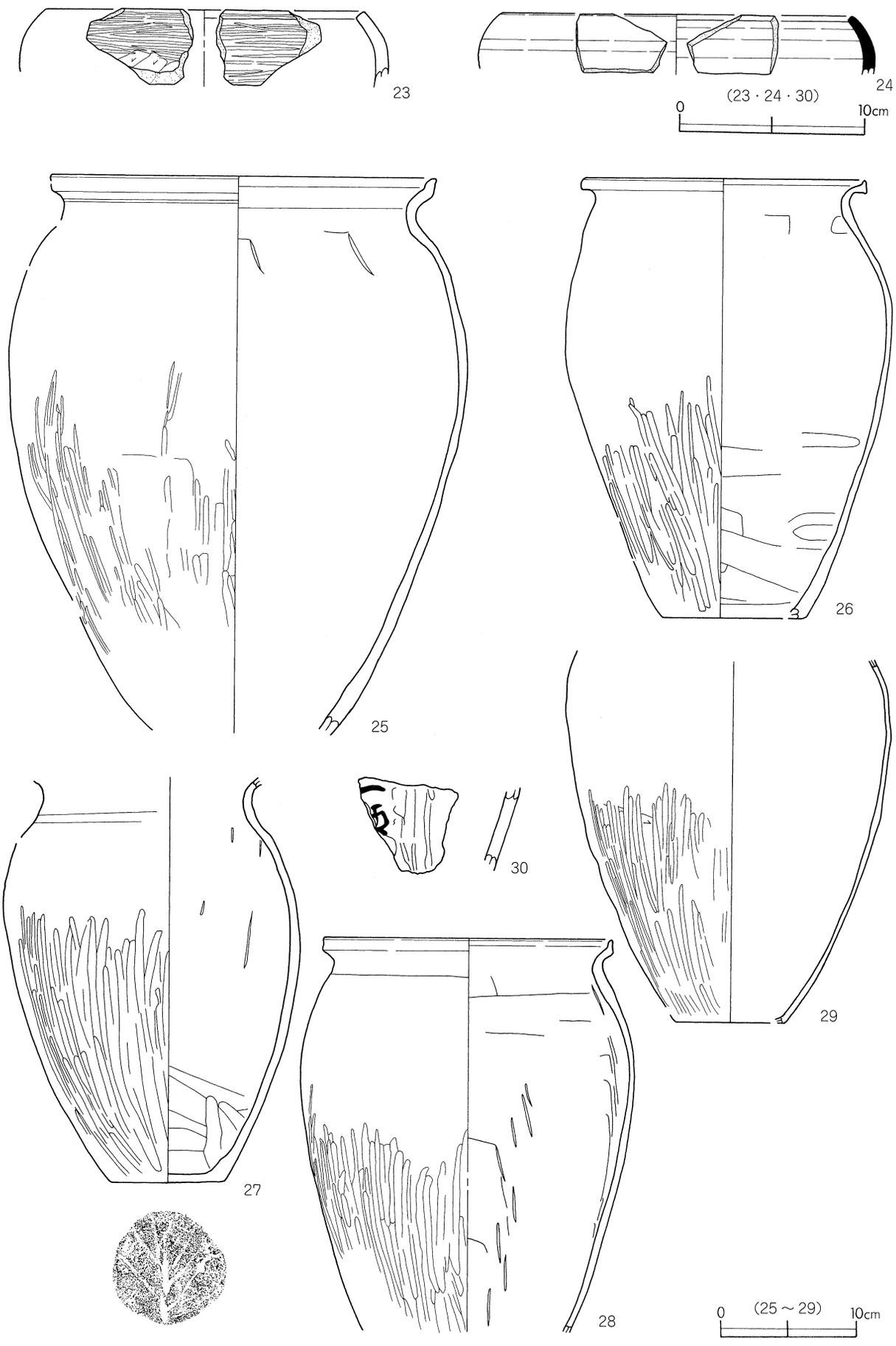
遺物 床面直上から覆土上位まで、遺物は非常に多く確認されている。出土状態で特筆されることは、カマドの煙道部から4個体の甕が口縁と底を連結させた状態で見つかったことである。このような煙突状の施設は当遺跡では唯一の事例である。また、カマドの左右の袖には芯材として甕を逆位としたものが使われていた。覆土中の土器片には多種多様な器種の存在が確認されている。

器種構成は、土師器では坏と甕、須恵器では坏や高台付坏の他に蓋、高台付盤、脚付盤、甕、鉢などがあり、灰釉陶器の長頸壺も存在する。さらに、小片であるが鉄鉢形土器が、土師器・須恵器の両者で1点ずつ確認される。供膳具にみる土師器と須恵器の割合は、須恵器が圧倒的に多く、土師器は坏が数点存在するだけである。

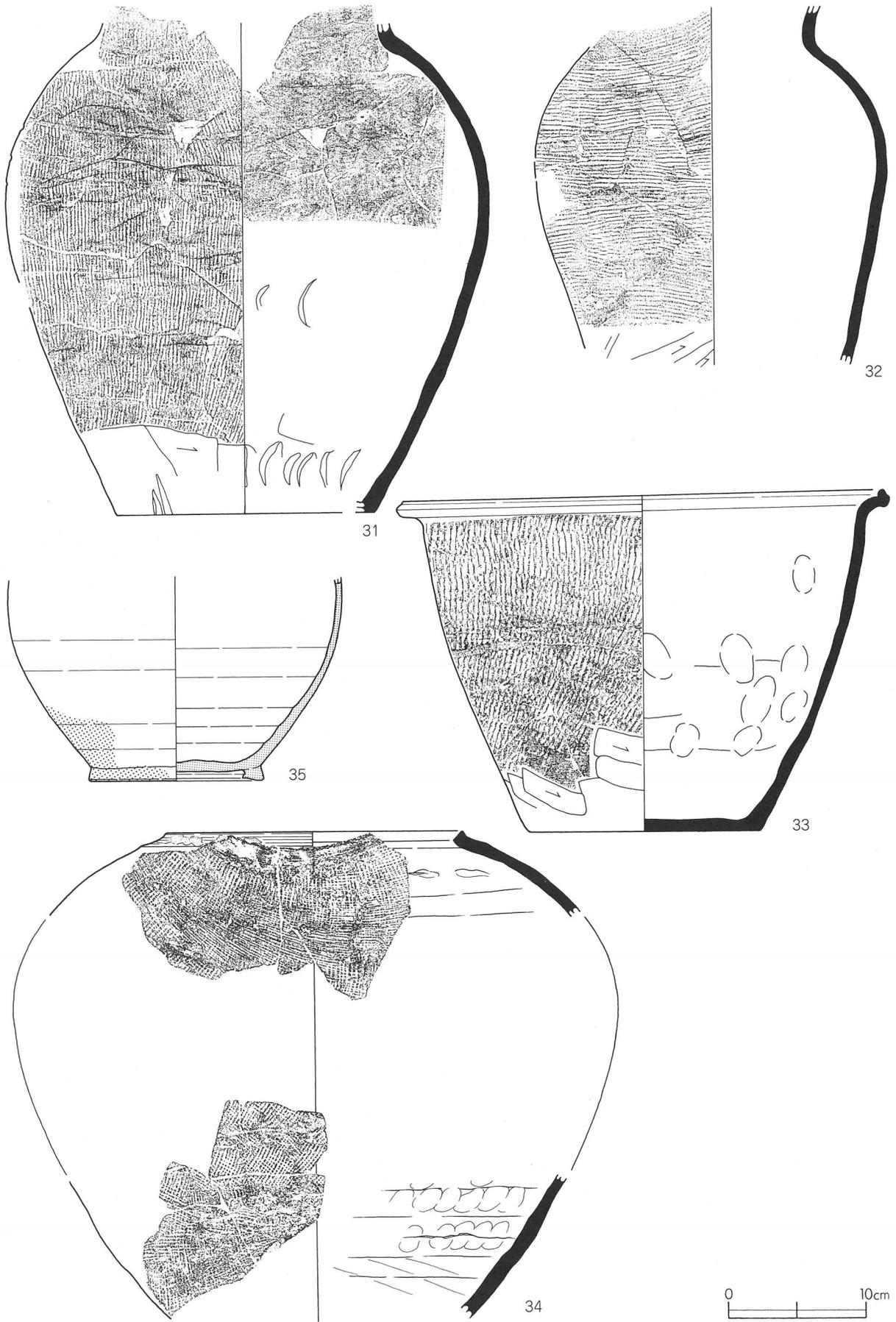
No.1～4は土師器坏、No.5～13は須恵器坏である。ほとんどが口径13cm台ないしその前後である一方、底径は7～8cmを測る比較的大きなもの（No.1・2・11・12）と、5～6cm台の小さなものが並存している。作りは須恵器坏一般に通有のもので、底部に一方向からのヘラケズリ、体部下位に反時計廻りを基本とした手持ちヘラケズリが施されている。体部や底部の外面に墨書のあるものが若干あり、No.3に「□井」、No.4に「寺？」、No.13は朱彩と「来」の文字がみられる。No.14～16は須恵器の高台付坏、No.17～19は同じく蓋である。いずれもやや小型品である。No.20・21は須恵器の高台付盤である。No.20は作りが非常にシャープで、胎土も他の須恵器と異なって緻密である。底部外面に硯に転用されたためにできた顕著な磨耗がみられる。No.22は脚付盤あるいは一般に高盤と言われる器種で、大きく開いた身部と三方に方形透かしを入れた脚部で構成される。No.23・24は鉄鉢形土器である。前者は土師器で磨きと黒色処理が施され、後者は須恵器で回転ナデにより滑らかに仕上げられている。No.25～30は土師器甕である。形態はいずれも典型的な「常総型甕」であるが、No.25は器高40cmを越える大型品、No.27は細身ながら厚い器壁をもち、逆にNo.29は中型ながら非常に薄い器壁に仕上げられるなど、法量や作りなどに若干の違いが認められる。No.30は体部片に縦書きの墨書がみられるが、文字は判読できなかった。No.31・32は須恵器甕である。土師器を思わせる赤褐色の色調を呈するが、外面に須恵器通有の叩き目とケズリが施されている。No.34は本来、須恵器甕の大型品であったと思われるが、頸部を欠いており無頸壺状を呈している。頸部の接合部はきれいに剥離しており、その内面は研磨されて滑らかな口縁部が再生されている。No.35は灰釉陶器の長頸壺で、体部下半のみが遺存する。尾張産の製品と思われる。No.36は銅製の丸軛である。内部の鈕と裏板を欠失しているが、厚手で端整に作られている。漆塗りや鍍金の痕跡はみられない。No.37・38は刀子片である。No.39・40は性格不明の棒状鉄製品で、同一地点からまとまって出土している。軸の断面が円形を呈することや、端部に付属物が取り付けられていることなどから、鉄釘などの単独使用品ではなく、調度品類の一部である可能性が高い。No.41は頭部が広がった鉄釘の一種、No.42は鏝の脚部と推測される。No.43～45は大小の鉄釘である。No.46は大型の鉄匙である。現代のスプーン形に類似するが、杓部と柄の取り付け角度が浅く、液体を掬い上げるには柄を水平にする必要がある。柄の断面形は方形で、やや厚みがある。実用品か儀礼的な道具は判断できないが、類例としては仏教法具の一つにある銅匙に求められよう。No.47は椀形鉄滓の破片である。図示したのはこの1点のみであるが、他に2～4cm大の鉄滓片が覆土中から計6点発見されている。No.48は絹雲母片岩製の砥石、No.49～52は石英礫を粗割りしたもので4点纏まって南東隅の床面直上から出土した。石英の稜には敲打痕が観察されるので、火打ち石に使用されたものと推測される。



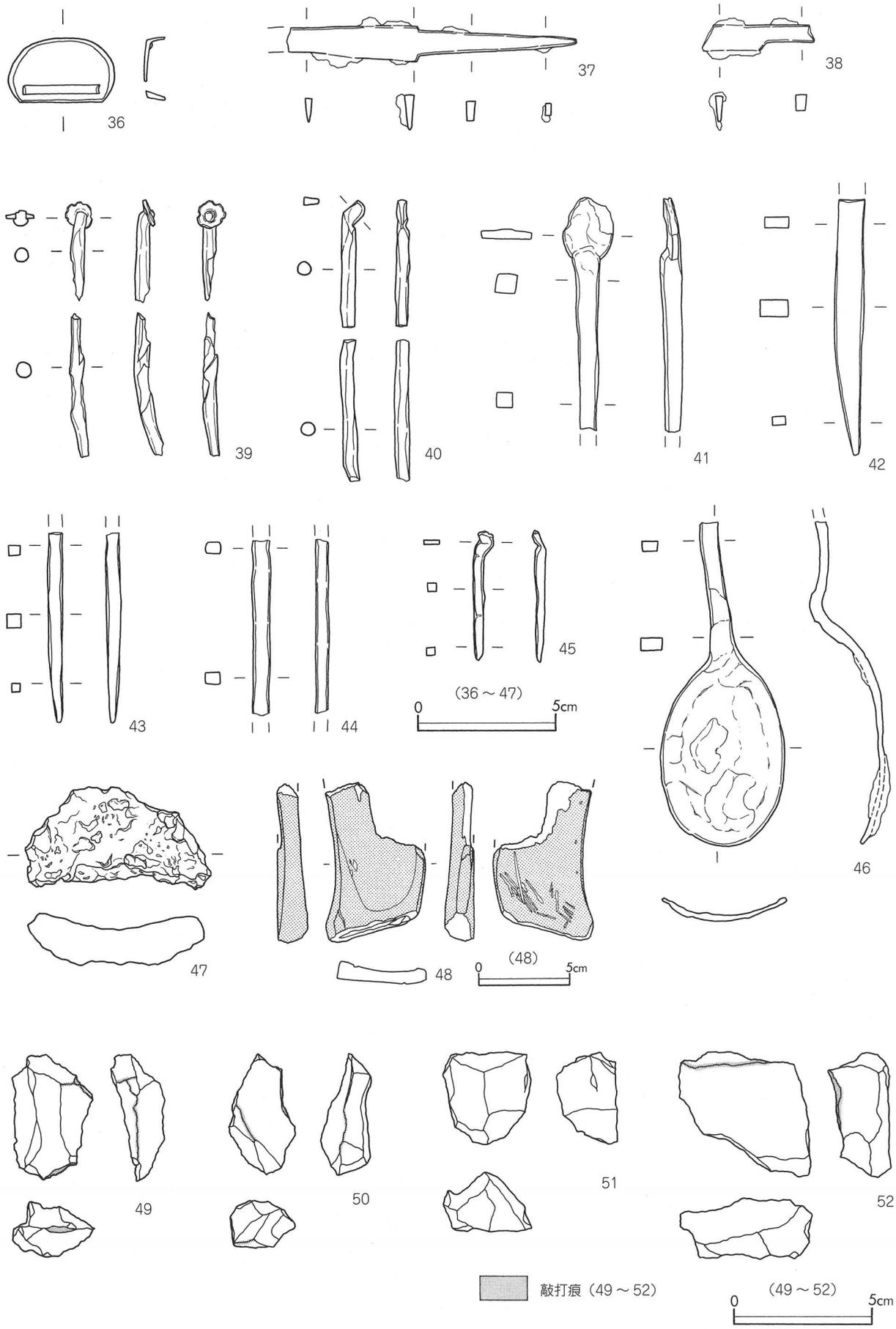
第177図 第64号住居跡出土遺物 (1)



第178图 第64号住居跡出土遺物 (2)



第179図 第64号住居跡出土遺物 (3)



第180图 第64号住居跡出土遺物 (4)

所見 以上の遺物群の帰属時期は、No.5～10の須恵器坏が小さな底径を呈していることから判断して、おおむね9世紀後半と考えられる。ただし、No.11や12のような大きな底径をもつ坏も存在しており、やや古手の遺物が混在もしくは長期に残存していた可能性も踏まえておく必要がある。例えば、No.20の高台付盤は形態的には8世紀後半から9世紀前半頃と考えて差し支えないが、硯に転用していたために永く伝世した経緯が想定される。当住居跡の中では唯一、新治窯産ではない良質の須恵器であることも、伝世を助けた一因であろう。同様にNo.22の脚付盤もやや古手の様相をもっており、なんらかの要因で長く残ったものであろう。故意か偶然か、個々の判断は難しいが、当住居跡の土器群は帰属時期にやや幅があることが特徴とされよう。

また、No.4の坏にみられる墨書が「寺」である可能性や、No.23・24の鉄鉢形土器の存在、あるいはNo.46の鉄匙など、断片的ではあるが仏教関係の遺物が存在する点も注目される。銅製丸軋の出土、あるいは甕を連結させて煙道を作るような遺構の特徴と併せて、当住居跡は集落内でもかなり特異な位置を占めていたことが窺える。

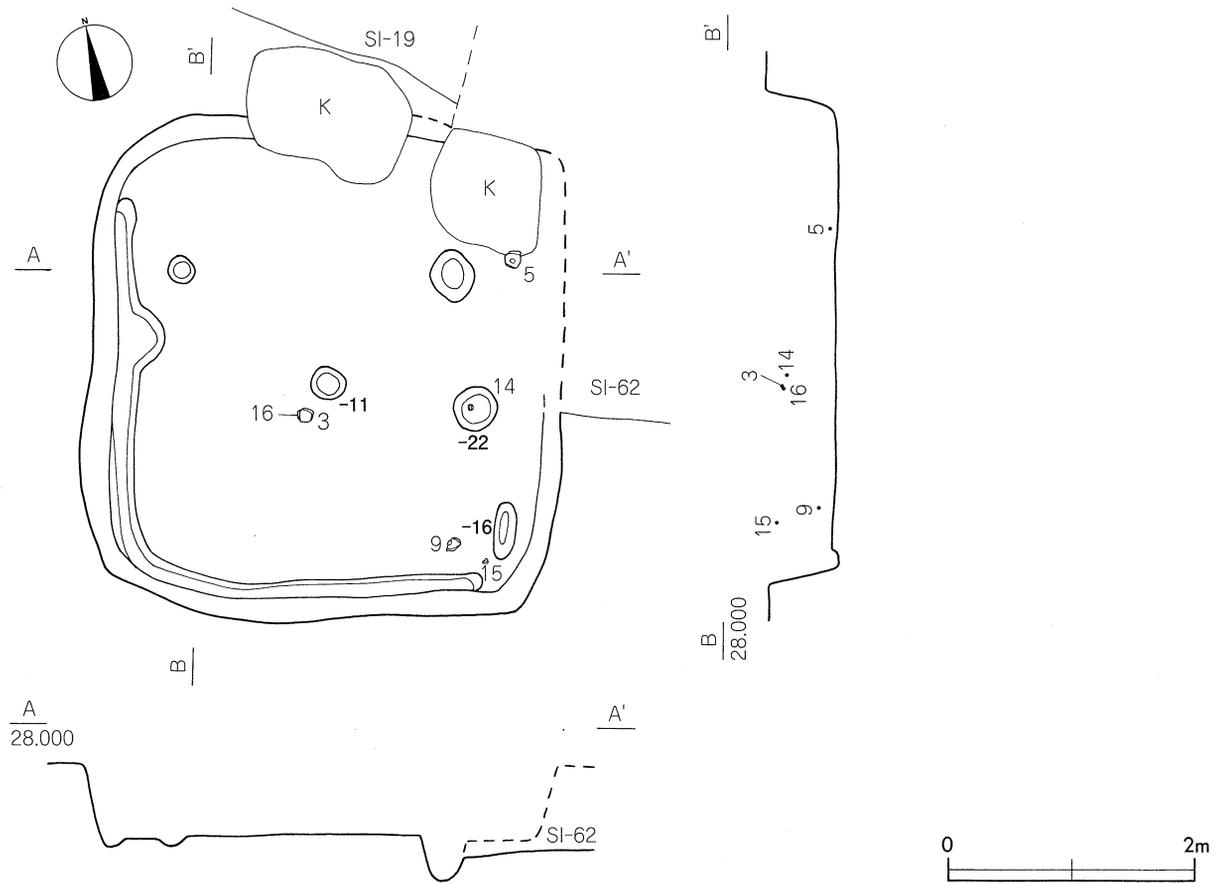
第64号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 1	土師器 坏	口径 [12.8] 底径 [7.2] 器高 4.8	体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削り、体部内面に強めのロクロ目が付く。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土 40% (底径の 50%残存)
第177図 2	土師器 坏	口径 [12.2] 底径 [7.0] 器高 3.1	底部は径が大きく、体部は直線的で浅めに開く。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部外面に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を微量 外面黄橙色、内面一部黒色 良好	覆土 30% (底径の 40%残存) 内面黒色処理
第177図 3	土師器 坏	破片長 (3.6)	坏もしくは皿の体部小片。体部は僅かに丸みを帯びる。	外面にナデ、内面に磨きを施す。	ごく微細な長石・石英、白雲母を少量 外面黄橙色、内面黒色 良好	覆土 細片 外面に横位に墨書「□井」 内面黒色処理
第177図 4	土師器 坏	底径 [6.8] 器高 (0.8)	坏底部の小片。	底部に一方向からのヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面褐色 普通	覆土 小片 底部に墨書「寺」?
第177図 5	須恵器 坏	口径 [13.2] 底径 5.7 器高 4.7	底部は径が小さく、体部は深手に立ち上がる。口縁部は外反し、口唇部が肥厚する。	底部に一方向からの強いヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面灰色 良好	覆土 60% (口径の 50%、底径の 90%残存)
第177図 6	須恵器 坏	口径 14.1 底径 6.8 器高 4.9	底部は径がやや大きめで、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方向からの強いヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面にぶい橙色 普通	床直 70% (口径・ 底径の60%残 存)
第177図 7	須恵器 坏	口径 [13.4] 底径 [6.6] 器高 3.6	底部は径がやや大きめで、体部は浅めに開く。口唇部は僅かに肥厚する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰白色 普通	覆土 40% (口径の 50%残存) 体部内外面に 墨痕
第177図 8	須恵器 坏	口径 [13.8] 底径 [6.0] 器高 4.6	体部は下位に微かな丸みをもって大きく開く。口唇部はやや肥厚する。	体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 通	カマド覆土 20% (口径の 30%残存)
第177図 9	須恵器 坏	口径 14.4 底径 6.8 器高 4.6	体部は直線的に大きく開き、口縁部は僅かに外反し、口唇部は軽く肥厚する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面にぶい黄橙色、 灰白色 不良(軟質)	覆土 60% (口径の 50%、底径の 60%残存)
第177図 10	須恵器 坏	口径 14.3 底径 6.2 器高 4.6	底部は径が小さく、体部は直線的に大きく開く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面にぶい黄褐色 普通	カマド覆土 95%
第177図 11	須恵器 坏	口径 [13.8] 底径 [8.4] 器高 3.9	底部は径がやや大きく、体部は直線的に開く。	体部下位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を少量 内外面灰色 良好	覆土 10% (口径の 20%残存)

図版番号	器種	量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図12	須恵器 環	口径 13.5 底径 7.5 器高 3.9	底部は径が大きめで、体部は厚手で直線的に開く。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面灰色 良好	ほぼ床面95%
第177図13	須恵器 環	底径 [6.8] 器高 (3.3)	体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。	底部に一方からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1～3mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面暗灰色 普通	覆土20% (底径の20%残存) 底部に朱彩と墨書「来」?
第177図14	須恵器 高台付環	口径 [12.8] 高台径 [8.0] 器高 5.3	高台は「ハ」字に開き、体部下位は斜方向に開き、体部上位は外反ぎみに強い角度で立ち上がる。	底部に方向不明の回転ヘラ削り、体部下位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 普通	覆土40% (体部下位径の60%残存)
第177図15	須恵器 高台付環	高台径 [9.2] 器高 (3.5)	高台は「ハ」字に大きく開き、体部下位は斜方向に短く張り出す。	底部および体部下位に反時計回りの回転ヘラ削りと回転ナデを施す。	径1～2mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面灰色 普通	床直40% (底部・高台は完存)
第177図16	須恵器 高台付環	高台径 [7.8] 器高 (2.2)	やや小型品。高台は短く垂下し、体部下位の張り出しは弱い。	底部および体部下位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面青灰色 良好	覆土20% (高台基部径の80%残存)
第177図17	須恵器 蓋	口径 13.4 器高 3.2 つまみ径3.2	小型の蓋。体部は僅かに丸みを帯びて浅めに開き、口唇部を短く垂下させる。つまみは中央の窪む円盤状を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰白色 不良	覆土ほぼ完形
第177図18	須恵器 蓋	器高 (2.0) つまみ径3.6	体部は浅めに開くとみられる。つまみは中央の窪む逆円錐形を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面灰色 普通	覆土10% (つまみ部完存)
第177図19	須恵器 蓋	器高 (3.2) つまみ径2.6	体部は上位に狭い平坦面をもち、稜をもって直線的に開く。つまみは円筒状を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面青灰色 良好	覆土20% (つまみ部完存)
第177図20	須恵器 高台付盤	口径 17.8 高台径 13.0 器高 3.5	高台は径が大きく「ハ」字に開き、底部は高台内に落ち込む。体部は横に大きく張り出し、稜をもって強い角度で立ち上がる。全体的に端整な作りを呈す。	底部に時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施し滑らかに仕上げる。	微細な長石をごく微量含む緻密な胎土 内外面灰色 良好	南壁際、覆土下位ほぼ完形 底部外面に顕著な磨耗面 硯に転用
第177図21	須恵器 高台付盤	口径 [21.8] 器高 (3.1)	体部は横方向に大きく張り出し、口縁部を直立させる。口唇部は僅かに外反する。	全面的に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 外面黄灰色、内面灰黄色 普通	覆土上位小片 (口径の10%残存)
第177図22	須恵器 脚付盤	口径 [21.2] 脚裾径 [12.8] 器高 (11.6)	脚部は基部が太く、ほぼ垂直に伸び、裾近くで横に広がる。長方形の透かしを三方向に開ける。体部は平坦に大きくひらき、口縁部を短く直立させる。	全面的に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面灰黄白色 不良 (軟質)	カマド覆土および覆土30% (口径の10%、脚部の40%残存)
第178図23	土師器 鉄鉢形土器	口径 [17.2] 器高 (3.4)	口縁部付近の小片。口縁部は内反し、口唇端部を平坦に切り揃えられる。	体部外面に斜位の軽いヘラ削り、口縁部および内面に横位の磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 外面にぶい黄橙色、内面暗褐色 良好	覆土細片 口縁部黒色処理
第178図24	須恵器 鉄鉢形土器	口径 [18.8] 器高 (3.1)	口縁部付近の小片。口縁部は内反し、口唇端部を平坦に切り揃えられる。	全面的に回転ナデを施す。	ごく微細な長石を微量、白雲母を少量 内外面灰色 普通	覆土細片
第178図25	土師器 甕	口径 27.8 器高 (40.0)	大型品。最大径は体部上位にあり、下位は長く伸びる。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は短く直立する。	体部下位に横位のヘラ削りと縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄褐色 良好	カマド煙道部70% (口縁部完存)
第178図26	土師器 甕	口径 20.6 底径 [10.4] 器高 32.0	最大径は体部中位にあり、なで肩を呈する。口縁部は「つ」字に強く屈曲し、口唇部は断面三角形を呈する。	体部下位に縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい橙色 良好	カマド袖部70% (体部中位以上は完存)
第178図27	土師器 甕	底径 8.2 器高 (29.0)	最大径は体部中位にあり、全体に細身を呈する。口縁部は緩やかに「く」字に屈曲する。	体部中位以下に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を非常に多量、白雲母を少量 外面にぶい橙色、内面明赤褐色 普通	カマド袖部80% (口縁部周囲を欠く) 底部に木葉痕

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第178図 28	土師器 甕	口径 [20.8] 器高 (28.6)	最大径は体部上位にあり、下位は長く伸びる。口縁部は「く」字に外反し、口唇部は短く直立する。	体部中位以下に縦位の磨き、上位に一部斜位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい褐色 良好	カマド煙道部 40% (口径の 50%残存)
第178図 29	土師器 甕	底径 [7.9] 器高 (27.8)	最大径は体部上位にあり、下位は長く伸びる。	体部中位以下に横位のヘラ削りと縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。器壁は非常に薄く仕上げられている。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい橙色 良好	カマド燃焼部 40% (体部は 一周残存する)
第178図 30	土師器 甕	破片長 (4.7)	甕の体部中位の小片。	外面に縦位の磨き、内面に横位のナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい黄褐色 良好	覆土 細片 外面に縦位に 墨書□□
第179図 31	須恵器 甕	底径 18.8 器高 (35.5)	大型品で、器壁は厚く、重い。最大径は体部上位にあり、やや肩を張る。	体部外面に縦位の平行線の叩き目と2条のナデ消し、下位に横位のヘラ削り、内面に当て具痕が付く。	微細な長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 普通	カマド煙道部 ほか 40% (底径の 70%残存)
第179図 32	須恵器 甕	器高 (26.0)	最大径は体部上位にあり肩を張る。頸部は締まりがなく、強い角度で口縁部が立ち上がる。	体部外面に横位の平行線の叩き目、下位に横位のヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を中量 内外面橙色 不良	カマド煙道部 ほか 40% (体部径 の70%残存) 内面に豆粒状 の剥離
第179図 33	須恵器 鉢	口径 36.1 底径 17.2 器高 24.6	体部は丸みを帯びて強い角度で立ち上がる。口縁部は横方向に張り出し、口唇部が直立する。	体部外面に縦位の平行線の叩き目、下位に横位のヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を多量 内外面黄灰色 不良	カマド覆土 70% (底部完 存、口縁部60 %残存)
第179図 34	須恵器 甕	口径 [21.4]	大型の甕の破片。頸部が剥離した後、断面を磨いて二次的に無頸壺状に再加工したもの。	体部外面に平行線の叩き目を斜めに交差させて付けている。内面に横位のナデと指頭圧痕が付く。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面灰色 普通	覆土 細片
第179図 35	灰釉陶器 長頸壺	高台径 12.6 器高 (14.6)	体部は丸く膨らみ、底部に至るラインの締まりが強い。高台の張り出しは小さく、内側に小さなかえりが付く。	体部下位に回転ヘラケズリ、全面的に回転ナデを施す。体部下位に濃緑色の自然釉が付着する。	微細な長石・黒色粒子少量 外面赤紫色、内面灰色 良好	覆土上位 30% (高台径 の60%残存) 東海産

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第180図 36	銅製品 丸鞘	3.9	2.3	0.8	9.2	内面に裏板を留める鉸が3ヶ所。上部中央と透かし孔の両脇に各1本づつ。表面に鍍金の痕跡みられず。透かし孔は2.3×0.3cm。	覆土(ベルト内) 裏板・鉸先を 除き完形
第180図 37	鉄製品 刀子	(10.5)	1.3	0.3	(10.3)	刃部の幅は最大で1.3cm。刃と背の両側が柄部に対して段をもって広がる。	覆土上位 70%
第180図 38	鉄製品 刀子	(4.1)	0.9	0.4	(4.0)	やや小型の刀子。柄部は直線的に伸び、刃部の背に連続する。	覆土中位 30%
第180図 39	鉄製品 性格不明	(3.6) (5.2)	0.6	0.6	(1.9) (2.6)	断面円形の棒状製品。端部に小円盤が45度の角度で取り付く。	覆土下位 50%程度?
第180図 40	鉄製品 性格不明	(4.6) (5.1)	0.5	0.5	(2.2) (2.6)	断面円形の棒状製品。端部は45度の角度で屈曲し、ゴルフのバター状に平坦化している。	覆土下位 50%程度?
第180図 41	鉄製品 釘?	(8.4)	1.8	0.6	(16.5)	軸部は断面方形の釘状を呈し、端部に薄い円盤が取り付く。この円盤は軸部と一体成形。釘の頭部が広がったものか。	覆土上位 70%程度
第180図 42	鉄製品 鏝?	(9.4)	1.0	0.6	(23.3)	先端は釘状に尖り、断面形は平たい長方形を呈する。鏝の脚部的一方か。	覆土中位 70%程度
第180図 43	鉄製品 釘	(6.9)	0.5	0.5	(4.8)	断面は正方形を呈する。頭部を欠失する。	覆土上位 70%
第180図 44	鉄製品 釘	(6.3)	0.7	0.5	(6.6)	断面は長方形を呈する。頭部と脚部先端を欠失する。	覆土下位 60%
第180図 45	鉄製品 釘	4.7	0.4	0.3	1.9	小型の釘。頭部は平坦化して斜めに屈曲する。断面は正方形を呈する。	覆土上位 完形
第180図 46	鉄製品 匙	(11.7)	4.6	0.8	(32.0)	やや大型のスプーン状を呈する。杓部は平面が卵形を呈し、窪みは浅い。柄部は断面方形で、握り部分を欠失している。	覆土中位 70%程度
第180図 47	椀形鉄滓	6.8	(3.7)	1.9	(53.1)	椀形鉄滓の半片。上面中央が窪む。気泡が多数入り、表面は錆びにより黄褐色を呈する。	覆土上位 50%
第180図 48	石製品 砥石	(8.5)	4.9	1.6	(68.7)	絹雲母片岩製の板状砥石。研磨面は4面。中央部で折損。	覆土 60%程度
第180図 49	石製品 火打ち石	4.6	3.0	2.0	21.1	石英を粗割りしたもの。3ヶ所の稜辺に敲打痕が確認される。	覆土下位 完形
第180図 50	石製品 火打ち石	4.4	2.4	1.7	16.4	石英を粗割りしたもの。3ヶ所の稜辺に敲打痕が確認される。	床直 完形
第180図 51	石製品 火打ち石	3.4	3.2	2.2	24.6	石英を粗割りしたもの。明確な敲打はみられないが、他の3点の石英と同質であり、火打ち石と推測。	床直 完形
第180図 52	石製品 火打ち石	4.5	4.8	2.3	49.6	石英を粗割りしたもの。2ヶ所の稜辺に敲打痕が確認される。	床直 完形



第181図 第65号住居跡

第65号住居跡〔第181・182図、PL.27・90・91〕

位置 調査区西寄り E・F-23・24グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。東側で第62号住居跡と重複しており、土層堆積状態と出土遺物から本住居跡が新しいと判断した。

規模 長軸3.54m、短軸3.22mの正方形を呈し、床面積は約11.4㎡である。

主軸方向 N-13° -E

壁 外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最深部で58cmを測る。西から南側にかけて壁溝が巡り、幅12～20cm、深さ4～15cmを測る。北壁は攪乱により、また東壁は第62号住居跡を先行して調査したため壁が一部しか遺存していない。

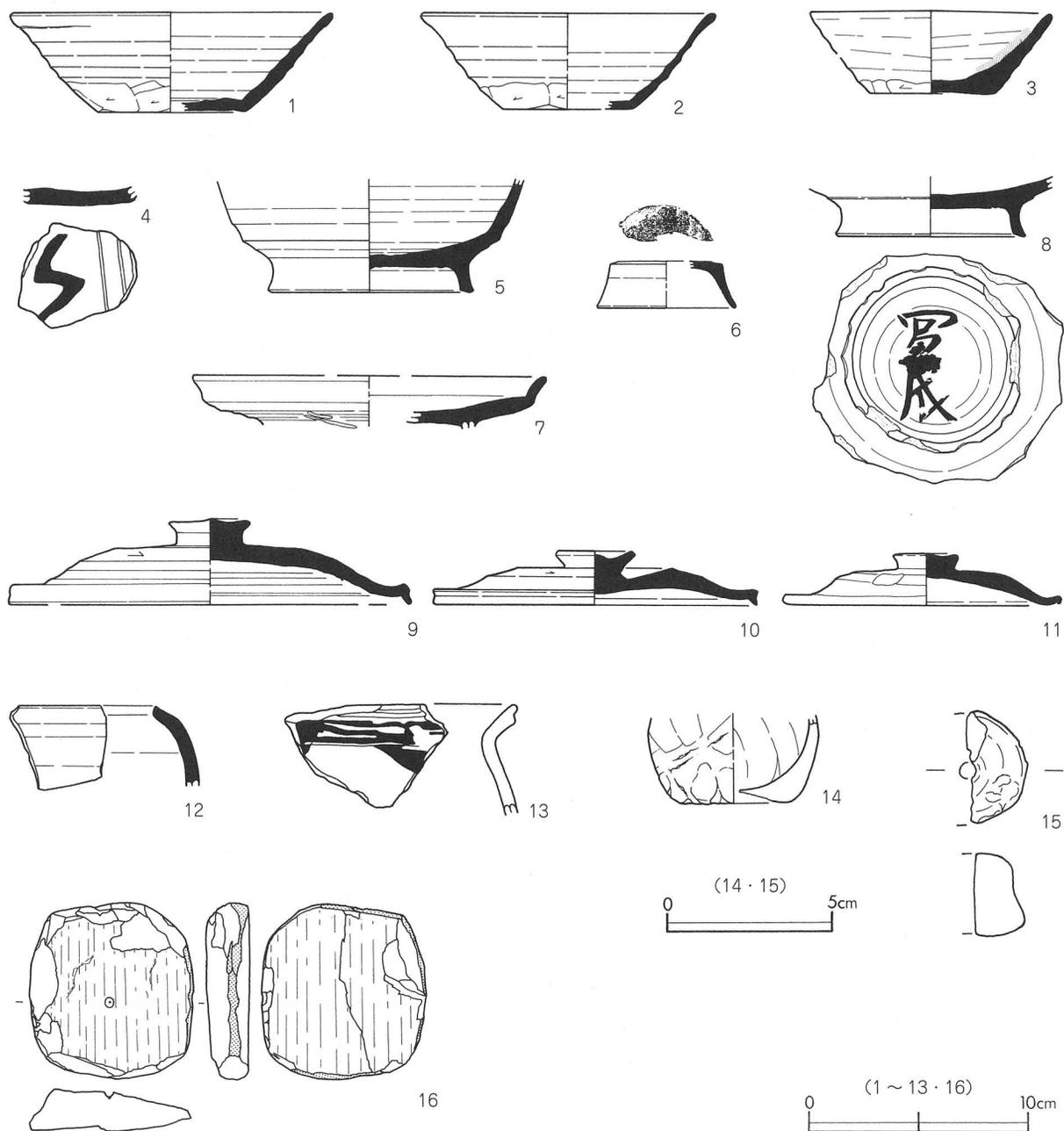
床 概ね平坦である。

ピット 5基確認された。円形・楕円形を呈し、径23～48cm、深さ7～37cmを測る。北東隅側のピットは柱穴の可能性が考えられるが、他の性格は不明である。入り口方向も不明である。

カマド 東壁側はカマドの痕跡がみられず、北壁ほぼ中央に位置していたと考えられるが、攪乱により大きく壊されており、確認できなかった。

遺物 遺物量は全体に少ない。第62号住居跡と重複関係にあるため、別の時期の遺物が混入している可能性がある。土器類は土師器が圧倒的に少なく、供膳具はすべて須恵器で構成されている。No.6を除き、須恵器はすべて新治窯の製品である。

No.1～4は須恵器坏である。No.1・2は口径が13～14cm台であるのに対し、底径は6cm台と小さ



第182図 第65号住居跡出土遺物

く、色調は土師器と同様の酸化焰焼成を呈する。No. 4 は底部の小片であるが、「S」字状の墨書がみられる。No. 5 は須恵器の高台付坏で、大きめの底部と高台、ゆったりした体部の形状から、やや古手の様相が窺える。第62号住居跡からの流れ込みの可能性もある。No. 6 は、須恵器の小型坏、もしくは高台付坏などの高台部片であると思われる。一般的に高台は輪状を呈するが、当器は上面と一体成形されており、剥離痕のような粘土の薄い盛り上がりが見られる。ただし、この面には若干の磨耗がみられるため、あるいは図示とは上下逆のミニチュア坏である可能性も残る。胎土は緻密で、新治窯の製品ではない。No. 7・8 は須恵器の高台付盤である。No. 8 の底部には墨書銘がみられる。一字目は「富」ないし「宮」、二字目は「氏」もしくは「長」、「成」などと読めるが、いずれの組み合わせでも成語にならず、吉祥句の類であろうと推測される。No. 9～11 は須恵器蓋で、口径18cm台と12～13cm台の大小2法量

が確認される。No.12は須恵器の鉄鉢形土器の口縁部片である。No.13は土師器甕の口縁部片であるが、頸部外面に墨痕がみられる。この墨痕は明らかに文字ではなく、口唇部や内面には付着していないことから偶然の墨垂れとも考えられない。墨による絵の一部の可能性が高いが、何を描いたものかは不明である。No.14は手捏ね成形されたミニチュア坏である。No.15は土製紡錘車、No.16は用途不明の円盤状石製品である。

所見 当住居跡の土器群の年代は、須恵器坏の形態から、およそ9世紀後半に位置付けられると思われる。新治窯の製品で、酸化焰焼成の須恵器が目立つようになるのは9世紀でも後半からであり、No.1・2の坏はそうした趨勢に対応したものであろう。ただし、土師器内黒椀などがみられず、供膳具がまだ須恵器で占められている点は、9世紀後半でもやや早い段階にあることを推測させる。

第65号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第182図 1	須恵器 坏	口径 [14.5] 底径 [6.8] 器高 4.5	底径は小さく、体部は直線的に大きく開く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。土師器と同様の酸化焰焼成を呈する。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面におい黄橙色普通	覆土 20% (口径の20%残存)
第182図 2	須恵器 坏	口径 [13.4] 底径 [6.0] 器高 4.3	底径は小さく、体部は直線的に大きく開く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。土師器と同様の酸化焰焼成を呈する。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を多量 内外面におい橙色普通	覆土 20% (口径の20%残存)
第182図 3	須恵器 坏	口径 [11.1] 底径 5.7 器高 3.6	やや小型の坏で器壁は厚い。底径は小さめで、体部は直線的に開く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	1mmの長石・石英、白雲母を中量 外面におい黄褐色、内面暗灰黄色 普通	覆土上位 50% (底部完存) 内面に灯芯痕
第182図 4	須恵器 坏	破片長 (5.6)	坏の底部小片。	底部に一方方向からのヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母多量 内外面灰色 普通	覆土 細片 底部外面にS字状の墨書
第182図 5	須恵器 高台付坏	高台径 9.2 器高 (5.1)	高台は径が大きく、僅かに外に張り出す。体部下位は斜方向に張り出し、上位は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰色 普通 (やや良)	覆土下位、SI-62寄りの壁近く 50% (体部下位の70%残存)
第182図 6	須恵器 高台付坏?	高台径 [6.4] 器高 2.1	小型の高台付坏の高台部か? 器壁は薄く、端整に作られる。軽く「ハ」字に開く。	全面に回転ナデを施す。	径1mmの長石をごく微量 緻密な胎土 内外面灰色 良好	覆土 30% (上部径の40%残存)
第182図 7	須恵器 高台付盤	口径 [16.2] 器高 (2.2)	高台が欠失するが基部径は大きく、体部は横方向に大きく開く。口縁部は外反しながら立ち上がる。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部は内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を中量 外面灰白色、内面におい黄橙色 不良	覆土 20% (口径の25%残存)
第182図 8	須恵器 高台付盤	高台径 8.4 器高 (2.2)	底部から高台部の破片。高台はやや高めで僅かに開く。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を少量 内外面暗褐色 普通	覆土 30% (高台完存) 底部外面に墨書「富□」
第182図 9	須恵器 蓋	口径 [18.4] 器高 3.8	体部は浅めで丸みをもって大きく開き、口唇部を垂下させる。つまみは短円筒上に円盤を載せた形状を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面におい黄橙色普通	覆土下位 40% (体部上位の50%残存)
第182図 10	須恵器 蓋	口径 [14.8] 器高 2.4	体部は浅く大きく開き、口唇部は僅かな屈曲をもって垂下する。頂部はすり鉢状に窪み、つまみは漏斗状を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面灰黄色 普通	覆土 30% (口径の30%残存)
第182図 11	須恵器 蓋	口径 12.7 器高 2.4	小型の蓋。体部は丸みを帯びて浅く開き、口唇部は短く垂下する。つまみは低い逆台形を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	径1~3mmの長石・石英を多量 内外面青灰色 良好	覆土 80%
第182図 12	須恵器 鉄鉢形土器	破片長 (4.2)	口縁部の小片。丸みを帯びて内傾し、口唇部を平坦に整える。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量 外面暗灰色、内面灰色 良好	覆土 細片

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第182図 13	土師器 甕	破片長 (5.0)	口縁部の小片。口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部は外反する。	体部外面に横位のへら削り、口縁部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面橙色 良好	覆土 細片 頸部外面に墨痕（非文字）
第182図 14	土師器 ミニチュア ア坏	底径 [3.3] 器高 (2.6)	手捏ねの坏形土製品。体部は内湾して強めに立ち上がる。	指頭による成形後、外面に部分的に軽いへら削り、内面に指頭ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面橙色 良好	覆土上位 50%（底径の50%残存）

図版番号	器種	法 量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第182図 15	土製品 紡錘車	3.4	(1.7)	2.6	(135)	縦断面は「鼓」形で、縄文時代の「耳栓」を思わせる。手捏ねによる成形で、上下に平坦面を作る。	ごく微細な長石を微量 におい黄橙色 普通	覆土上位 50%

図版番号	器種	法 量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第182図 16	石製品 円盤形	8.0	7.4	1.8	165.0	片岩類を円盤状に加工・研磨したもの。片面中央に径3mm、深さ2mmの逆円錐形の窪みあり。	覆土上位 ほぼ完形

第66号住居跡〔第183～185図、PL.27・91・92〕

位置 調査区東寄り、2B・2C-23・24グリッド、標高27.5mに位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.62m、短軸3.28mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約11.9㎡である。

主軸方向 N-58° -W。住居の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で40cmを測る。壁は部分的に大きく攪乱により壊されていた。壁が残存している箇所は全て壁溝が巡っていた。幅14～24cm、深さ5～13cmを測る。

床 やや起伏を有している。南隅壁際に床面から10cm程の厚さで粘土が堆積していた。壁溝上を覆っており、また、この粘土層直上からも遺物が出土している。

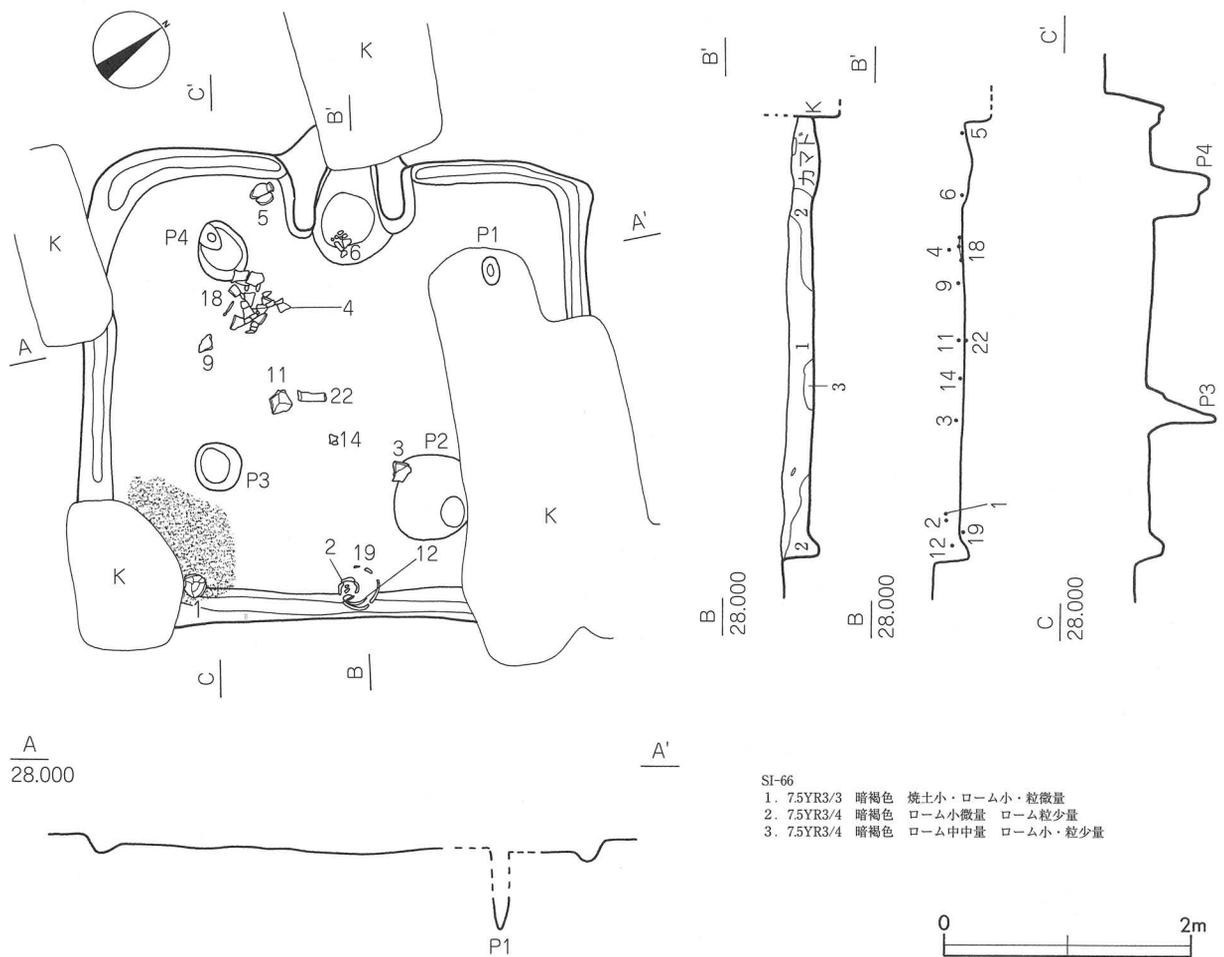
ピット 4基確認された。規模と配置から全て支柱穴と考える。P1は攪乱中にあり、確認された開口部の径は小さいが深さ65cm、他は径38～70cm、深さ38～63cmでP1が最も深い。入り口部はカマドの位置と対をなす南東側と思われる。

カマド 北西壁ほぼ中央に位置しているが、煙道部に攪乱が入り先端部が壊されている。推定全長1.1m、焚き口幅は52cm、燃焼部は深さ8cmを測る。奥壁寄り、燃焼部底面からやや浮いた状態で土師器の甕の底部（図示していない）、また、燃焼部内から土師器の坏（No.6）が出土した。

覆土 3層に分層される。いずれも近似した土相であり、また壁際に粘土の廃棄が行なわれていることなどから埋め戻し土と考える。

遺物 遺物はカマド内をはじめ、住居跡中央部および西壁付近にまとまって確認されている。供膳具の組成は、土師器の坏が主体であり、それに土師器の盤と須恵器の坏、蓋が少数伴っている。土師器に対する須恵器の割合は、破片を含めておよそ3対1程度である。

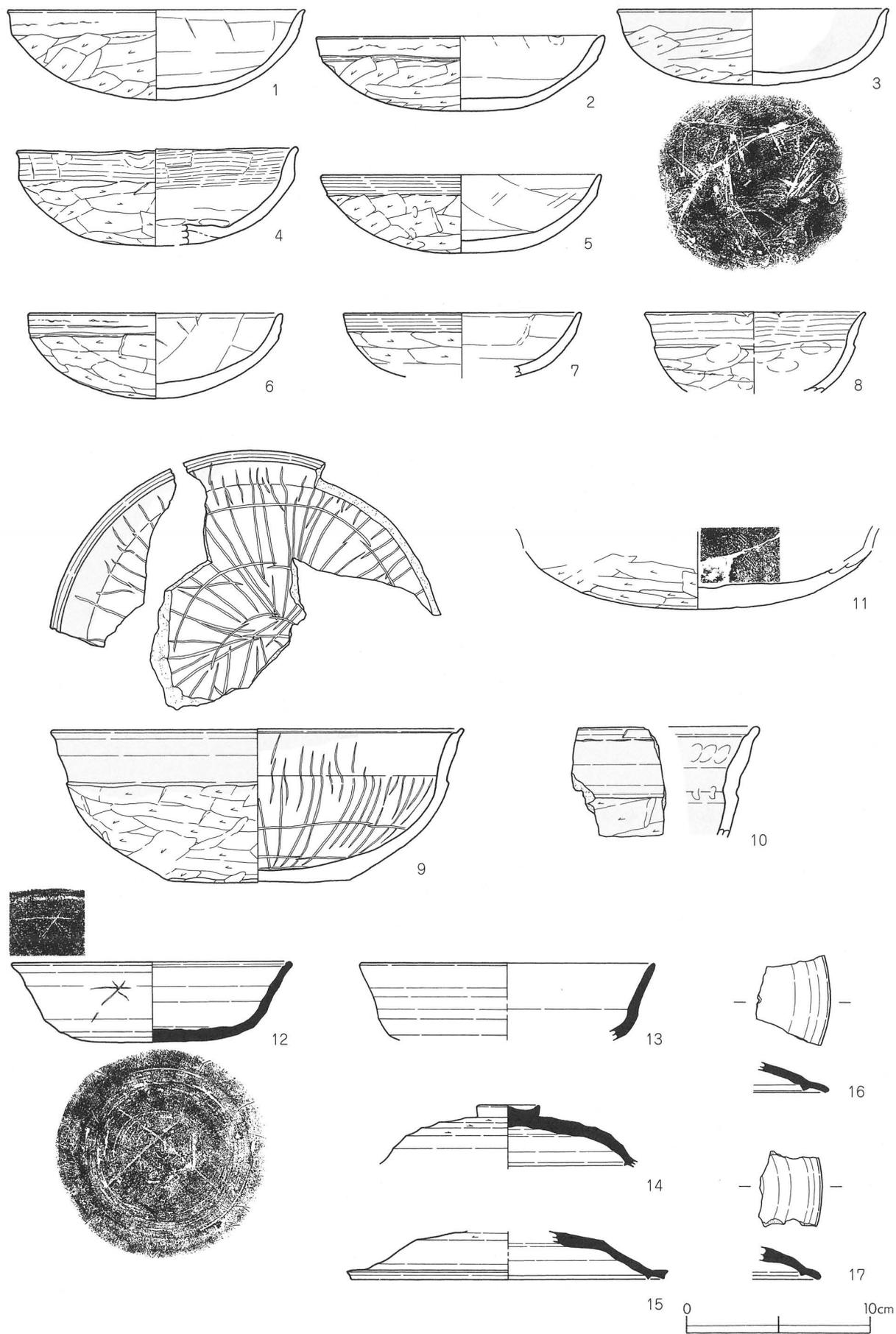
No.1～10は土師器の坏である。体部と口縁部の境に微かな稜が付くタイプ（No.1～7）と、段をもって口縁部が強く立ち上がるタイプ（No.8～10）の2種が確認できる。特にNo.9の大型坏は平底で、内面に三重の不整円と放射状の暗文が付けられている特異な様相を示す。第59号住居跡に類例がみられるが、こちらの暗文の方が粗雑である。口唇部の内側に小さな段もしくは沈線が付けられている点はNo.10も同様で、共伴する須恵器坏（No.12）と共通する特徴である。No.12・13は須恵器坏で、大きな



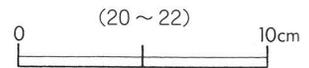
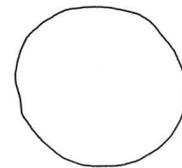
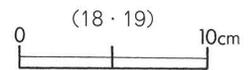
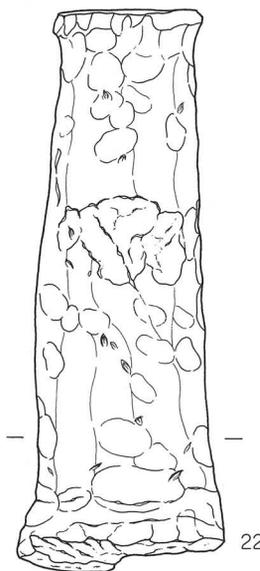
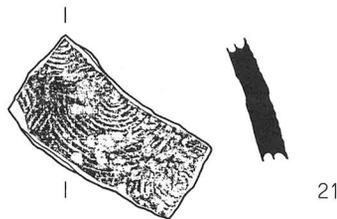
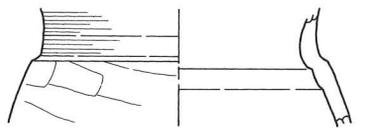
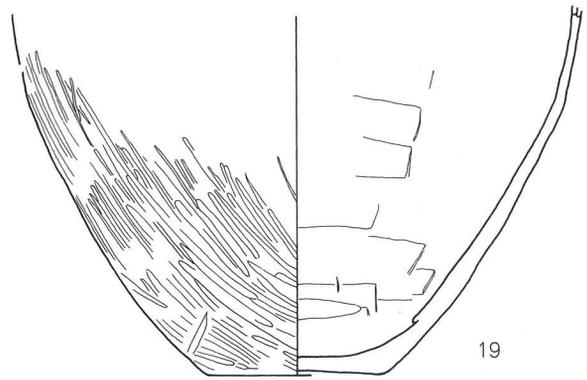
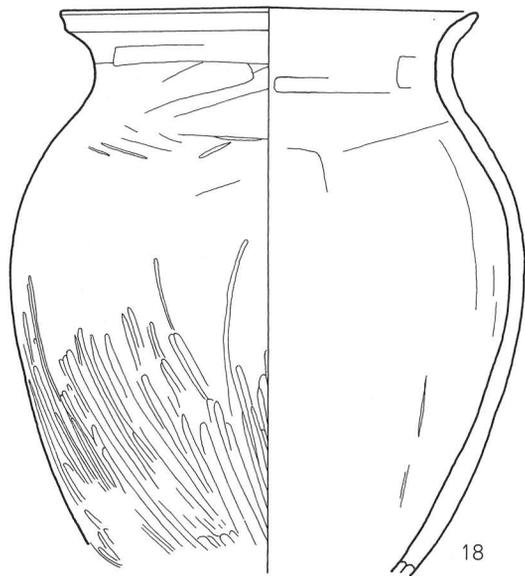
第183図 第66号住居跡

底径と僅かに外反する体部をもつ。No.12の底部および体部側面に焼成前のヘラ記号が認められ、底部は「×」、体部側面は「大」ないし「×」とみられる。No.14～17は須恵器の蓋で、内側に小さなかえりを有している。いずれも新治窯跡群の製品であり、栗山窯から一町田窯にかけての特徴に合致している。No.18・19は土師器甕である。最大径が体部中位にあり、膨らみが目立ち、重厚な作りが特徴的である。No.20は小型甕の破片で、口縁部が段をもって直立する特殊な形態である。No.21は須恵器甕で、外面に同心円の叩き目が施されている。小片のみが出土しており、流れ込みによるものと思われる。No.22は完形の土製支脚である。手捏ね成形品で、全面的にモミ殻の圧痕が認められる。

所見 遺物の時期は、須恵器の坏と蓋の形態が栗山窯から一町田窯に対応することから、7世紀末から8世紀前半に収まるものと考えられる。この須恵器と同様の形態は、第37・45号住居跡などに類例が求められる。いずれの蓋もかえりが退化する以前の状況を示しており、かえりの最終段階にある一町田窯よりもやや古手の様相が感じられる。従って、7世紀末葉頃に充てておくのが妥当と思われる。



第184图 第66号住居跡出土遺物 (1)



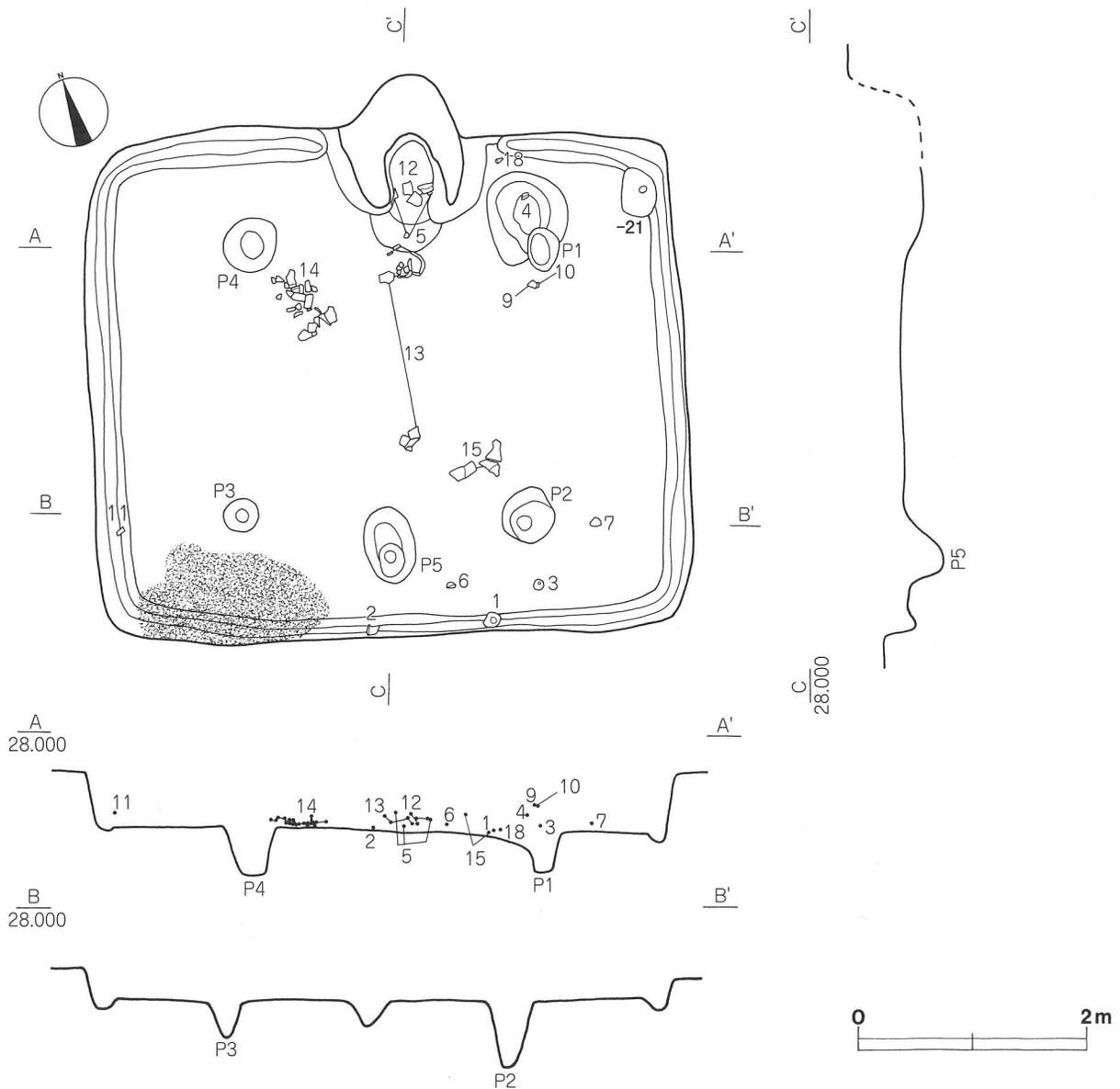
第185図 第66号住居跡出土遺物 (2)

第66号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 1	土師器 坏	口径 器高 16.0 4.8	底部は丸底で、口縁部は僅かに外傾する。体部と口縁部の境に微かな稜が付く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面におい黄橙色 普通	覆土中位 95%
第184図 2	土師器 坏	口径 器高 15.6 4.1	底部は丸底で、口縁部は肥厚して外傾する。体部と口縁部の境に稜もしくはヘラによる回転沈線が付く。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、褐色スコリアを中量 内外面におい橙色 普通	覆土中位 60% (口径の 60%残存)
第184図 3	土師器 坏	口径 器高 14.6 4.2	底部は丸底で、口縁部は直立し、口唇部は小さく外反する。体部と口縁部の境は器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に多方向からの雑なヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面におい褐色 普通	覆土下位 80% 底部に焼成前のヘラ傷多数 内外面黒色処理 (部分的)
第184図 4	土師器 坏	口径 器高 15.4 5.2	底部は丸底で、口縁部は直立し、口唇部は小さく外反する。体部と口縁部の境に稜が付く。	体部に時計回りの手持ちヘラ削り、未調整帯を挟んで口縁部に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面橙色 良好	覆土中位 70% (口径の 90%残存)
第184図 5	土師器 坏	口径 器高 15.2 4.2	底部は丸底で、口縁部は僅かに外傾する。体部と口縁部の境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面におい橙色 普通	カマド脇、床直 95% 内面に軽いヘラの圧痕

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 6	土師器 坏	口径 13.8 器高 4.6	底部は丸底で、口縁部は直立する。体部と口縁部の境に浅い沈線と稜が付く。	底部に多方向のヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、微細な長石・石英・チャート粒を中量 内外面橙色 普通	カマド燃焼部 70%
第184図 7	土師器 坏	口径 [12.8] 器高 (3.4)	やや小型の坏。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部との境に微かな稜が付く。	体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面赤褐色 普通	覆土 60% (口径の 70%残存)
第184図 8	土師器 坏	口径 [12.2] 器高 (4.3)	やや小振で深めの坏。体部は丸みをもって開き、口縁部は体部との境に段をもち、外反しながら大きく立ち上がる。	体部に横位の手持ちヘラ削りと指頭圧痕、口縁部の内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を中量 内外面黄橙色 良好	覆土 20% (口径の 25%残存)
第184図 9	土師器 坏	口径 [22.4] 底径 [9.9] 器高 8.3	大型の坏。底部は平底で、体部は丸みをもって開き、口縁部との境に段が付く。口縁部は外傾しながら強く立ち上がり、中央部を肥厚させる。口唇部は小さく外反し、内側に沈線が付く。	底部に一方方向からの強いヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。内面に三重の不整形と放射状の暗文を付ける。	ごく微細な長石・石英、褐色スコリアを微量 内外面にぶい褐色 良好	覆土下位 30% (口径・ 体部径の30% 残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第184図 10	土師器 坏	破片長 (6.1)	大型の坏の口縁部片。口縁部は体部との境に段をもち、外傾しながら強く立ち上がる。口唇部の内側に沈線が付く。	体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面黒褐色 普通	覆土細片 内外面黒色処理
第184図 11	土師器 盤	器高 (3.2)	底部は丸底で大きく広がる。	底部中央に一方方向からのヘラ削り、周辺に横位の手持ちヘラ削り、内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面黄橙色 普通	覆土下位 60% (底部完存) 内面に布目圧痕
第184図 12	須恵器 坏	口径 15.2 底径 9.4 器高 4.3	底部は平底で径が大きく、周縁に二次底部面をもつ。体部は僅かに外反しながら強い角度で立ち上がる。口唇部の内側に沈線が付く。	底部に回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面にぶい黄色 普通	東側壁溝付近、 床直 完形 底部と体部に 焼成前のヘラ 記号「×」「大」
第184図 13	須恵器 坏	口径 [16.0] 器高 (4.2)	体部は下位に丸みをもち、上位は直線的に立ち上がる。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの石英を多量、 白雲母を中量 内外面灰白色 普通 (軟質)	覆土 10% (口径の 20%残存)
第184図 14	須恵器 蓋	器高 (3.2)	体部は丸みをもって開き、口縁部付近で外反する。内側に小さなかえりが付く。つまみは扁平で径が大きい。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面灰色 良好	ほぼ床直 20% (体部径 の20%残存)
第184図 15	須恵器 蓋	口径 [16.8] 器高 (2.6)	体部は上位に屈曲をもって直線的に開き、口縁部付近で外反する。内側に小さなかえりが付く。	体部上位に時計回りの回転ヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を微量、白雲母を少量 内外面灰色 普通 (軟質)	覆土 20% (体部上 位の30%残存)
第184図 16	須恵器 蓋	破片長 (4.1)	体部は直線的に開き、口縁部付近で僅かに屈曲する。内側に小さなかえりが付く。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を少量 内外面灰黄色 普通	覆土 細片
第184図 17	須恵器 蓋	破片長 (3.4)	体部は丸みをもって開き、口縁部付近で外反する。内側に小さなかえりが付く。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を中量 内外面灰色 良好	覆土 細片
第185図 18	土師器 甕	口径 22.3 器高 (30.2)	体部は全体的に丸みが強く、最大径を中位にもつ。器壁が厚く重い。口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。	体部下位に縦位の磨き、上位および内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を多量 内外面にぶい黄褐色 普通	床直 80%
第185図 19	土師器 甕	口径 9.6 器高 (19.0)	体部はやや丸みがあり、中位に最大径をもつ。器壁が厚く重い。	体部下位に斜位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。底部に一方方向の磨きを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を多量 内外面にぶい褐色 普通	東側壁溝付近、 床直 50%
第185図 20	土師器 小型甕	器高 (4.6)	体部と口縁部の境に段が付き、口縁部は外反ぎみに強く立ち上がる。	体部外面に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石、褐色スコリア少量 内外面浅黄色 普通	覆土 細片 (頸部径 の20%残存)
第185図 21	須恵器 甕	破片長 (7.8)	甕の体部細片。厚手でかなり大型の甕と推測される。	外面に同心円の叩き目、内面に横ナデを施す。	微細な長石・石英を中量、白雲母を少量 外面黒褐色、内面灰黄色 不良 (軟質)	覆土 細片

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第185図 22	土製品 支脚	22.2	8.2	8.2	1800	円柱状を呈する。手握ね成形で、全面に指頭とモミ殻の圧痕が付く。	微細な長石を少量 内外面ぶい橙色 普通	住居中央部 床直 完形



第186図 第67号住居跡

第67号住居跡〔第186～188図、PL.27・92〕

位置 調査区東寄り2A・2B-22・23グリッド、標高27.5m付近に位置している。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

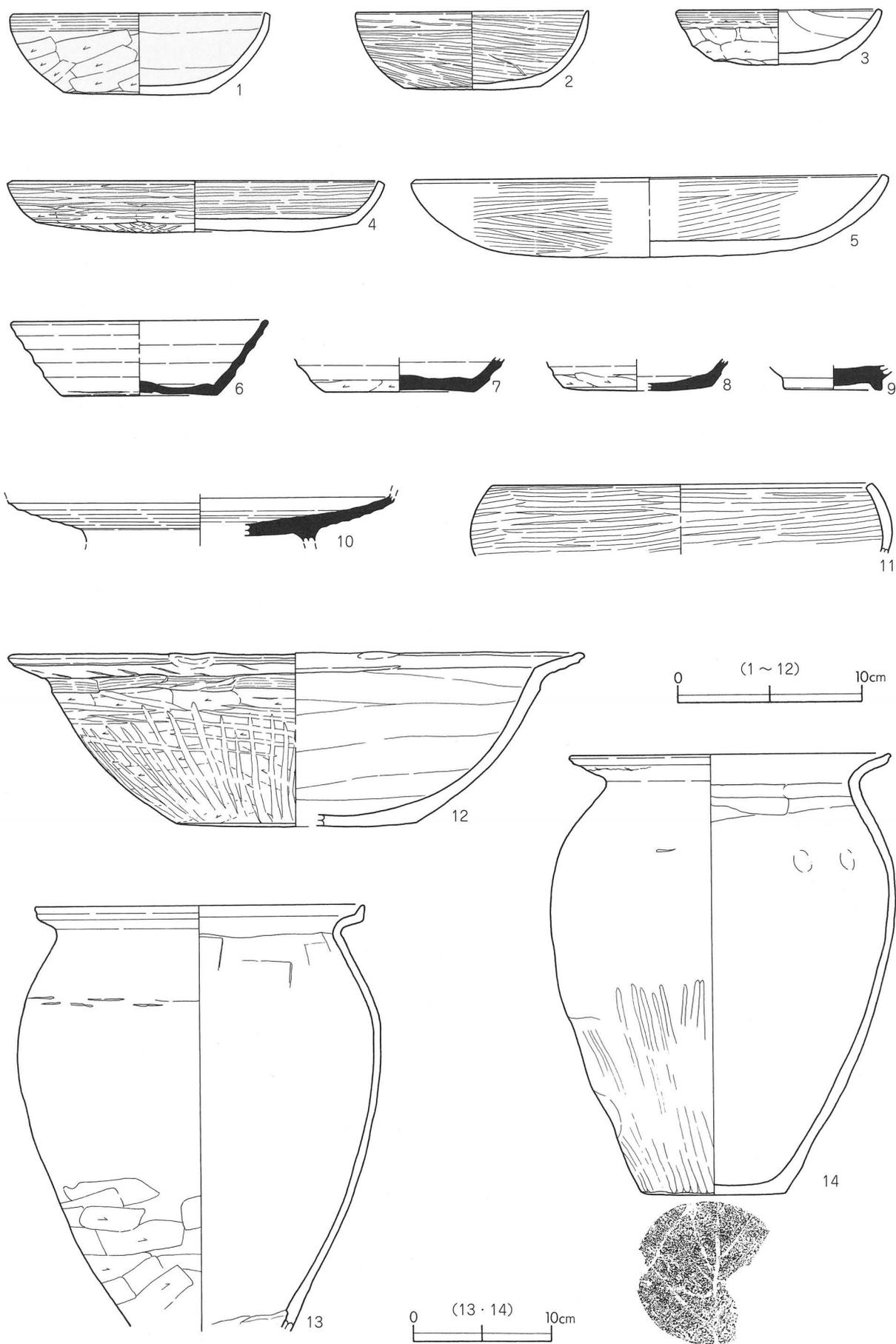
規模 長軸4.66m、短軸4.0mの長方形を呈し、床面積は約18.6㎡である。

主軸方向 N-19° -E

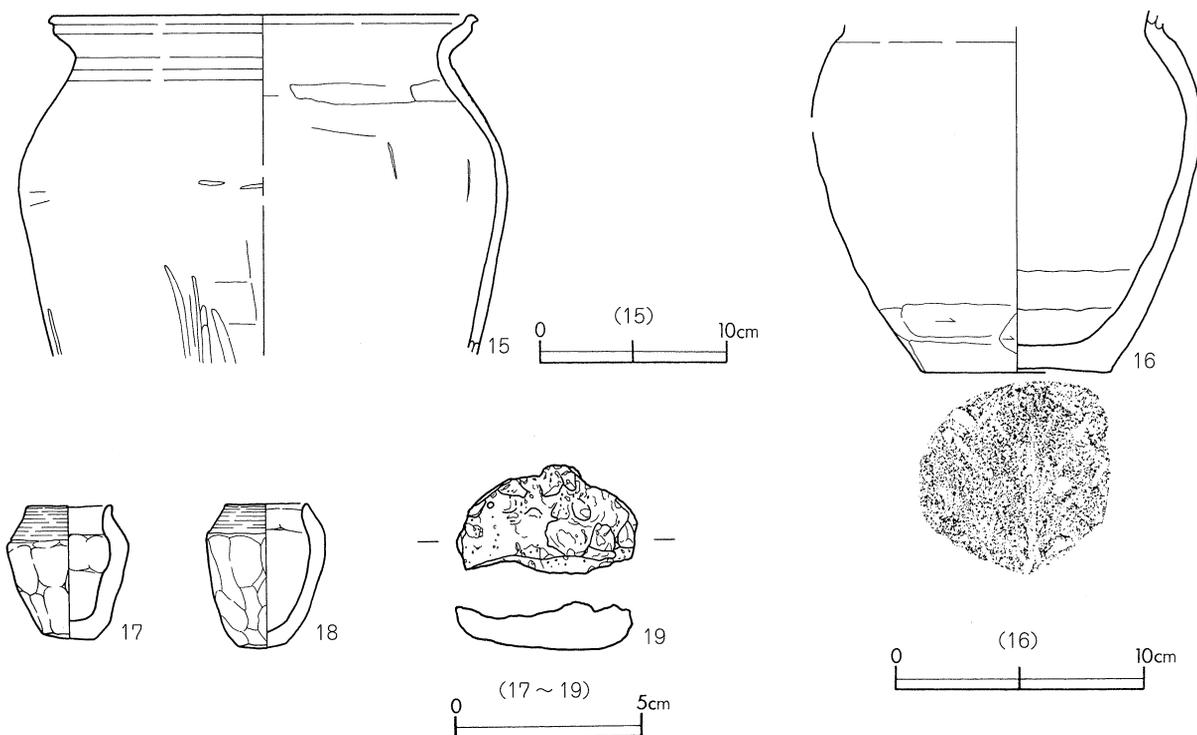
壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で52cmを測る。壁溝は全周しており、幅12～22cm、深さ4～13cmを測る。

床 やや起伏を有している。南西隅に厚みを有する粘土範囲がみられた。

ピット 6基確認された。配置と規模からP1～4は支柱穴、P5は入り口施設に伴うピットと考えられる。柱穴は径30～46cm、深さ32～59cm、P5は径66cm、深さ37cmを測る。他の1基は東隅の壁溝に隣接していた。



第187図 第67号住居跡出土遺物（1）



第188図 第67号住居跡出土遺物（2）

カマド 北壁ほぼ中央に位置し、壁下場より60cm程壁外に掘り出して構築されている。全長1.52m、焚き口幅30cm、燃烧部は深さ12cmを測る。

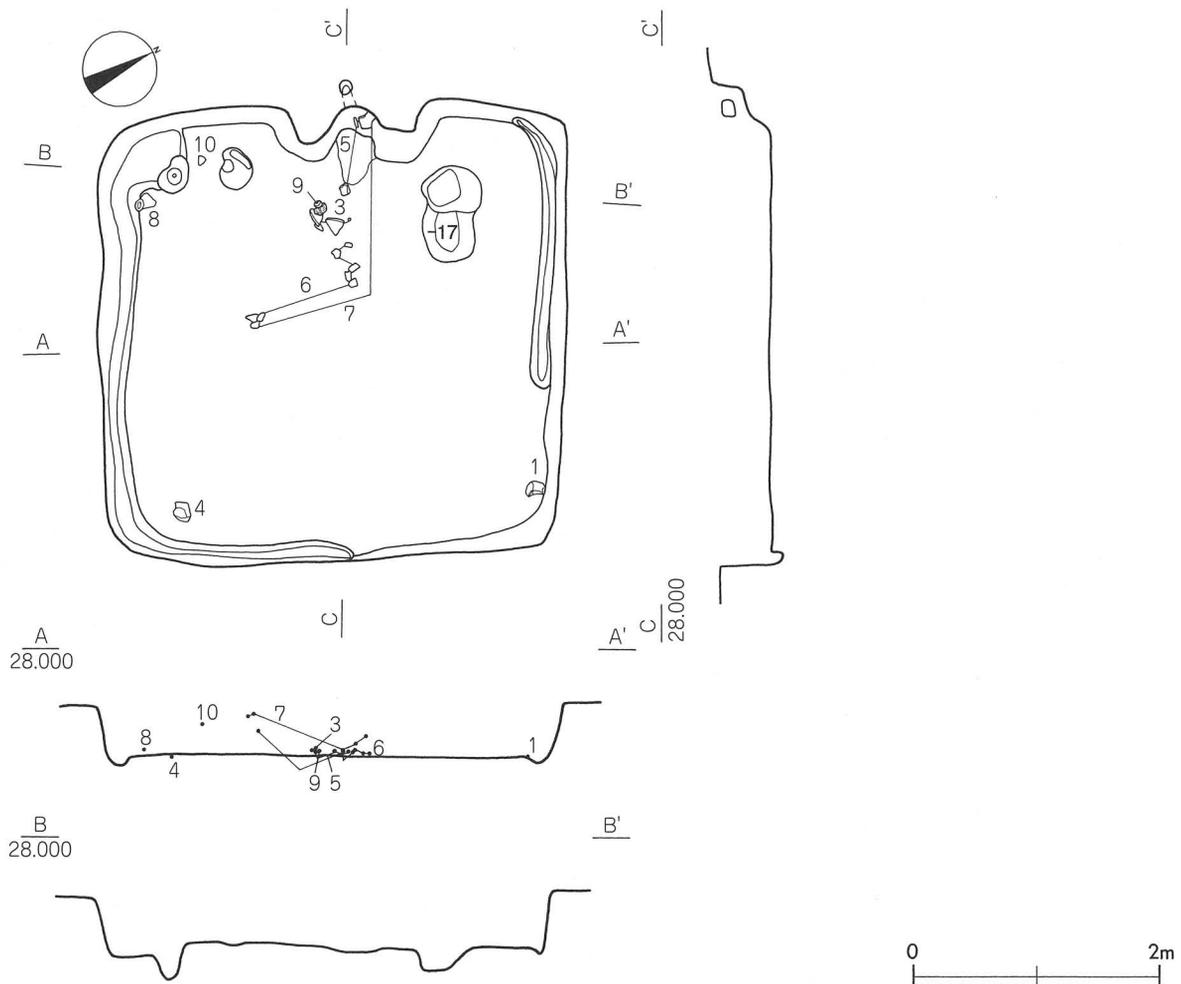
遺物 遺物はカマドの燃烧部から土師器鉢（No.12）と、大型の盤（No.5）の破片が発見されている。また、住居跡内カマド寄りの床面から土師器甕が潰れた状態で2個体発見されている（No.13・14）。全体に土師器が主体的であり、須恵器は供膳具に若干の破片が存在する程度である。

No.1～3は土師器坏、No.4・5は大小の土師器盤で、いずれも底部は平底化しており、口唇部が平坦に切り揃えられている共通した特徴を有している。No.6～8は須恵器坏で、底径は8cm前後を測る。No.9の高台付坏は、底部を残して周縁が割り取られており、小型の皿として再利用された可能性がある。No.10は高台付盤で、小破片であったがかなり大型の製品であったと推測される。以上の須恵器はすべて新治窯の製品である。No.11は土師器の鉄鉢形土器で、上記の坏や盤と同様に口唇部が平坦に揃えられ、全面に丁寧な磨きが施されている。No.12は土師器の大型鉢である。平底に丸みを帯びた体部、外傾する口縁部といった特異な形態を呈する。No.13～15は土師器甕である。いずれも体部上位に最大径があり、頸部の縮まりは弱く、形態的には類似している。No.16は土師器の小型甕、No.17・18は土師器のミニチュア壺、No.19は椀形鉄滓である。

所見 これらの遺物の帰属時期は、須恵器坏の底径が8cm台であることから、新治窯跡群東城寺寄井前A単位群に対応するとみられ、8世紀後半に位置付けられる。須恵器坏の類例は第1・38・55号住居跡などにみられ、これらはいずれも土師器の盤を伴っており、当住居跡と共通の土器組成がみられ、8世紀後半の範囲で把握され得る。よって当住居跡の年代をこの時期に充てるのが妥当であろう。

第67号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)		器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)				
第187図 1	土師器 坏	口径 底径 器高	13.8 7.8 4.3	底部は平底で、体部は丸みをもって立ち上がる。口唇部は平坦に切り揃えられる。	底部は多方向からのヘラ削り、体部は反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面黒褐色 普通	覆土下位 完形 内外面黒色処理
第187図 2	土師器 坏	口径 底径 器高	[12.6] 7.4 4.2	底部は平底で、体部は丸みをもって立ち上がる。口唇部は部分的に狭い平坦面をもつ。	底部はヘラ削り後、多方面からの磨きを施す。体部内外面に横位の細かな磨き、口縁部に回転ナデと磨きを施す。	微細な長石、白雲母を微量 外面赤褐色、内面明黄橙色 良好	南側壁溝覆土 上位 50% (底部完存)
第187図 3	土師器 坏	口径 底径 器高	11.1 6.8 3.0	底部はやや丸みを帯びた平底で、体部は丸みをもって開く。口唇部は平坦に切り揃えられる。	底部に一方からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面黄橙色 良好	覆土下位 完形
第187図 4	土師器 盤	口径 底径 器高	20.2 17.6 2.7	底部は平底で、稜をもって体部が強く立ち上がる。口唇部は平坦に切り揃えられる。	底部は縦横方向のヘラ削り後、多方向の磨き、体部下位に横位のヘラ削り、体部内外面に細かな横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい褐色 普通	覆土 70% 内外面口縁部 黒色処理 (部分的)
第187図 5	土師器 盤	口径 器高	[25.6] 4.3	底部は丸みを帯びた平底で、体部との境が不明瞭なまま大きく開く。口唇部は平坦に切り揃えられる。	底部に不定方向のヘラ削りと磨き、体部内外面に横位の磨きを施す。	ごく微細な長石・石英を中量 内外面にぶい橙色 良好	カマド燃焼部 25% (底部は60%残存)
第187図 6	須恵器 坏	口径 底径 器高	[16.8] [8.3] 4.0	底部は平底で径が大きく、体部は強い角度で直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り後、一方からのヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、ごく微細な白雲母を微量 内外面灰色 良好	覆土下位 25% (口径・底径の25%残存)
第187図 7	須恵器 坏	底径 器高	8.0 (1.7)	底部は平底で径が大きい。	底部に一方からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面灰色 普通	覆土下位 30% (底部の60%残存)
第187図 8	須恵器 坏	底径 器高	8.0 (1.5)	底部は平底で径が大きい。	底部に回転ヘラ削り後、一方からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	微細な長石・石英を微量、白雲母を少量 内外面暗灰色 普通	覆土 20% (底径の60%残存)
第187図 9	須恵器 高台付坏	高台径 器高	5.3 (1.3)	やや小型の高台付坏の再利用品か。高台は小さく、底部は厚い。	底部に回転ナデを施す。底部周縁の割れ口を磨いて小皿状に再生している。	微細な長石と白雲母を少量 内外面明灰色 普通 (やや軟質)	覆土上位 30% (底部完存)
第187図 10	須恵器 高台付盤	器高	(2.3)	底部は径が大きく、体部は横に大きく開く。	底部に回転ヘラ削り後、回転ナデを施す。体部外面に強いロクロ目を残す。	微細な長石・石英を少量 内外面灰色 良好	覆土上位 20% (体部径の20%残存)
第187図 11	土師器 鉄鉢形土器	口径 器高	[20.4] (3.7)	体部は丸みを帯び、口縁部にかけて内湾する。口唇部は平坦に切り揃えられる。	内外面に横位の丁寧な磨きを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面橙色 良好	覆土 10% (口径の30%残存)
第187図 12	土師器 鉢	口径 底径 器高	[30.8] [12.8] 9.3	底部は平底で、体部は丸みをもって大きく開き、口縁部は直線的に外傾する。	底部に不定方向のヘラ削りと粗い磨き、体部外面に横位のヘラ削り後、縦位の粗い磨きを施す。口縁部および内面に滑らかな横ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい黄橙色 良好	カマド燃焼部 30% (口径・底径の30%残存)
第187図 13	土師器 甕	口径 器高	23.7 (30.9)	最大径は体部上位にあり、口縁部は「く」字に屈曲する。口唇部は短く直立する。	体部下位に横位のヘラ削り、体部上位および内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色 良好	覆土下～中位 90%
第187図 14	土師器 甕	口径 底径 器高	23.2 10.3 31.9	最大径は体部上位にあり、口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部は外傾する。	体部下位に縦位の磨き、頸部内面に横位のヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面橙色 普通	床直 ほぼ完形 底部に木葉痕
第188図 15	土師器 甕	口径 器高	[23.0] (18.0)	最大径は体部上位にあり、口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部は小さく外反する。	体部中位以下に縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、頸部内面に横位のヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土 30% (口径の40%残存)
第188図 16	土師器 小型甕	底径 器高	7.6 (13.7)	最大径は体部上位にあり、頸部の締まりは弱めとみられる。	体部下位に横位のヘラ削り、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面明黄褐色 普通	覆土 60% (体部下位は完存) 底部に木葉痕
第188図 17	土師器 ミニチュア壺	口径 底径 器高	2.2 1.4 3.6	小型ながら精製の壺形土器。底部は平底を意識し、体部は細く伸び、口縁部は内傾する。	底部は未調整、体部外面に指圧痕、口縁部に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面黄橙色、一部黒斑 良好	覆土 完形
第188図 18	土師器 ミニチュア壺	口径 底径 器高	2.2 1.4 3.8	No.17とほぼ同形で同じ作りを呈する。	底部は未調整、体部外面に指圧痕、口縁部に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を微量 内外面黄橙色、一部黒斑 良好	北壁寄り、カマド脇、覆土下位 完形
図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第188図 19	椀形鉄滓	7.3	(4.3)	1.9	(71.1)	椀形鉄滓の半片。底部に細かな砂の付着あり。	覆土 50%



第189図 第69号住居跡

第69号住居跡〔第189・190図、PL.28・93〕

位置 調査区南東際近く、X・Y-31・32グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5m付近に位置している。他の遺構と重複のみられない単独の住居跡である。

規模 長軸3.34m、短軸3.3mの正方形を呈し、床面積は約11.0㎡である。

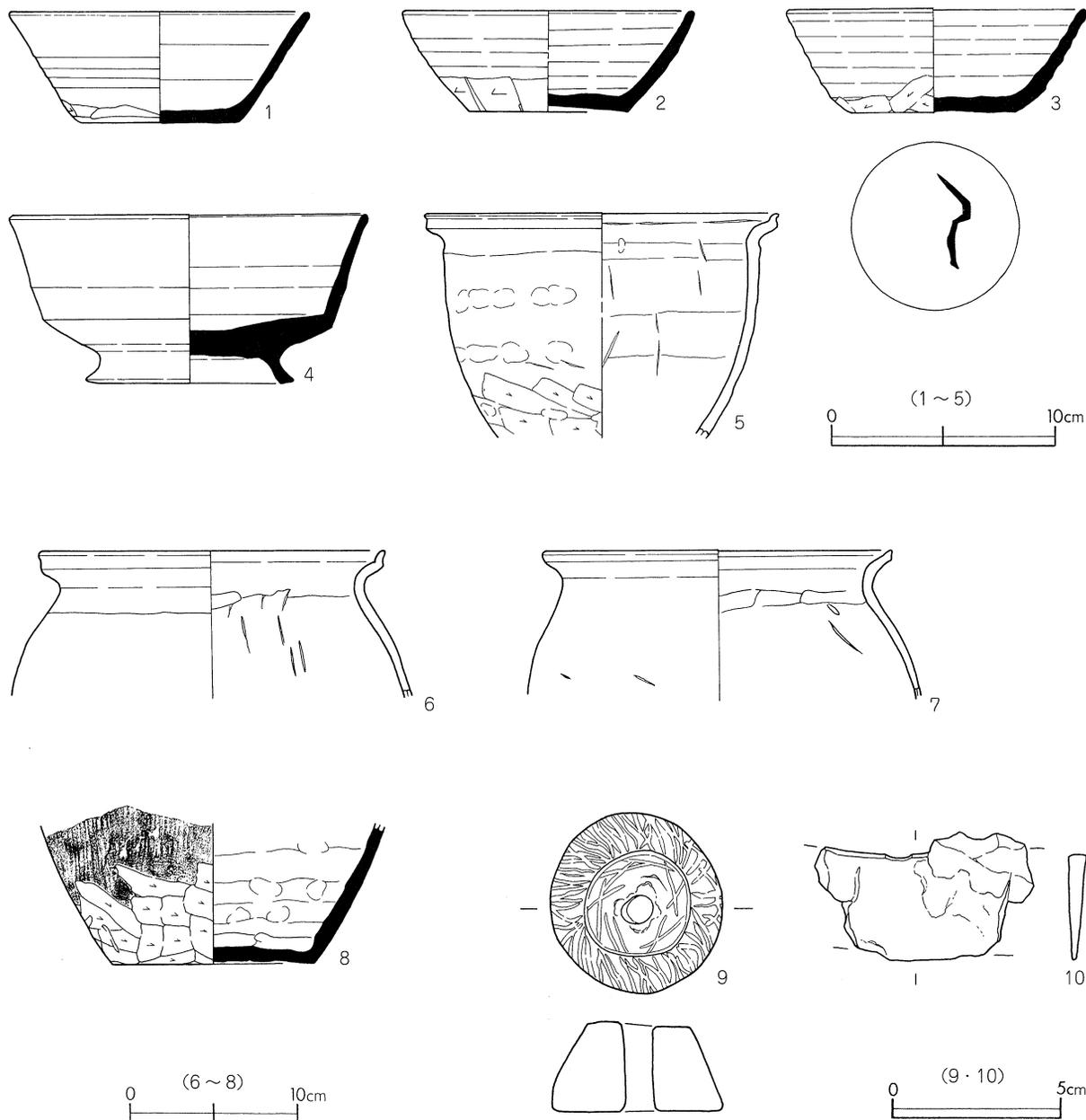
主軸方向 N-66° -W

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で43cmを測る。北側と南壁を中心とした2箇所に壁溝が巡っている。幅8～20cm、深さ2～11cmを測り、北隅は幅が広がる。

床 やや起伏を有している。

ピット 3基確認された。径30～85cm、深さ17～32cmを測る。いずれか支柱穴に相当する可能性があるが、確定できない。入り口部はカマドの位置と対をなす東側と思われる。

カマド 西壁ほぼ中央に位置している。壁下場より70cm程壁外に掘り出して構築しており、全長は1.33mを測る。焚き口幅は46cm、両袖の遺存状態は良好で、確認面とほぼ同じ高さで残っていた。燃烧部の深さは4cmで奥壁にかけて段を有しながら外傾して立ち上がる。天井も一部残存しており、奥壁からトンネル状に抜けている。煙道部は円形で径10cmを測る。袖内側と奥壁は被熱により赤化していた。燃烧



第190図 第69号住居跡出土遺物

部内より土師器の甕が2点出土しており、覆土上位の破片との接合関係がみられる。

覆土 7層に分層される。第1～5層はカマドに関連した土層堆積で、他は概ね単一層と考えられることから埋め戻し土であろう。

遺物 遺物はカマド正面付近の床面に集中する傾向がみられた。量は比較的少なく、供膳具は微細片を含めてすべて須恵器で占められている。

No.1～3は須恵器坏である。器形はどれも類似しており、口径はおよそ13cm、底径は7cm程度で、口径／底径指数は50を越える段階にある。No.3の底部には墨書がみられ、「部」の旁かと推測される。この墨書は第11号住居跡でも確認されており、筆跡は異なるが両者の深い関係が想定される。No.4は須恵器の高台付坏である。高台径がやや小さいものの体部は横に広がり安定感があり、作りも丁寧であ

る。以上の須恵器はすべて新治窯の製品である。No.5は小型の土師器甕である。頸部の締まりがなく短胴で収束するため、鉢ないし甑を思わせる形態であるが、第36・70号住居跡の出土品にも類品がみられる。No.6・7は一般的な大きさの土師器甕、No.8は須恵器甕の底部片である。No.9は土製紡錘車で、放射状の細かな磨きが施されている。No.10は性格不明の鉄製品であるが、刃部の作りが窺われるので小刀片の可能性はある。

所見 当住居跡の年代は、須恵器坏の口径と底径の割合が、東城寺桑木窯跡の坏に比較的近いことから、およそ9世紀前半の時期が想定できる。共通の墨書銘が出土している第11号住居跡にも同様の比率をもつ須恵器坏があり、ほぼ同時期に共通の文字が使われていた可能性が高い。

第69号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第190図1	須恵器坏	口径 13.5 底径 7.0 器高 4.9	底部は平底で、体部は直線的に強い角度で立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からの軽いヘラ削りを施す。体部下位に軽い手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 良好	北壁寄り、床直 60% (底部の70%残存)
第190図2	須恵器坏	口径 [13.0] 底径 [7.0] 器高 4.5	底部は平底で、体部は僅かに内湾ぎみに立ち上がる。	底部に一方向からの強いヘラ削り、体部下位に強い手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面暗灰黄色 不良	覆土 50% (底径の60%残存)
第190図3	須恵器坏	口径 13.2 底径 7.4 器高 4.6	底部は平底で、体部は直線的に強い角度で立ち上がる。	底部に一方向からの強いヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面灰白色 不良 (軟質)	ほぼ床直 80% 底部に墨書「部」?
第190図4	須恵器高台付坏	口径 [15.4] 高台径 9.2 器高 7.4	高台は「ハ」字に大きく開く。体部下位は横方向に大きく張り出し、中位より強い角度で直線的に立ち上がる。	底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1~3mmの長石・石英を中量、白雲母を少量 内外面灰色 良好	床直 70%
第190図5	土師器小型甕	口径 [21.0] 器高 (13.2)	頸部の締まりがなく、鉢状を呈する。口縁部は直角に外反し、短い口唇部が外反ぎみに立ち上がる。	体部下位に横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面におい黄橙色 良好	カマド燃焼部 50% (口径の50%残存)
第190図6	土師器甕	口径 20.8 器高 (8.7)	頸部は「く」字に屈曲し、厚めの口唇部は外反ぎみに立ち上がる。	頸部内面に横位のヘラ削り、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面におい褐色 良好	床直 30% (口径の60%残存)
第190図7	土師器甕	口径 20.7 器高 (8.9)	頸部は「く」字に屈曲し、口唇部は断面三角形を呈する。	頸部内面に横位のヘラ削り、体部内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面におい橙色 普通	カマド燃焼部 覆土上位 30% (口径の60%残存)
第190図8	須恵器甕	底径 [12.0] 器高 (8.1)	底部は平底で、体部は強い角度で立ち上がる。	底部は未調整で木目状の圧痕が付く。体部下位に横位のヘラ削り、中位以上に縦位の平行線の叩きを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 普通	覆土下位 10% (底径の50%残存)

図版番号	器種	法 量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第190図9	土製品紡錘車	5.1	5.4	2.7	68.0	断面は台形を呈する。孔径は0.9cm。側面に細かな磨きを放射状に施す。	ごく微細な長石と骨針?を微量 におい褐色 良好	覆土下位 完形

図版番号	器種	法 量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第190図10	鉄製品小刀片?	5.7	3.1	0.5	(5.4)	原形不明の鉄製品だが、一方の端を薄く刃状に作り、反対は厚いまま平坦に整えているので刃物の一種と思われる。	覆土上位 20%程度?

第70号住居跡〔第191～193図、PL.28・93・94〕

位置 調査区南東際W・X-32・33グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.5m付近に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.54m、短軸3.32mの正方形を呈し、床面積は約11.8㎡である。

主軸方向 N-12° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で53cmを測る。壁溝は全周しており、幅20～26cm、深さ3～17cmを測る。

床 若干起伏を有している。南西隅と南東隅に粘土範囲が確認され、特に南西隅はP2の上面を覆っており、最厚部で12cm程を測る。

ピット 7基確認された。配置からP1～3は支柱穴、P4は入り口施設に伴うピットと考えられる。支柱穴は径20～24cm、深さ8～29cm、P4は径30cm、深さ13cmを測る。他のピットは径16～70cm、深さ5～26cmで、P4の東に位置するピットは貯蔵穴となろうか。

カマド 北壁ほぼ中央に位置している。壁下場より40cm程壁外に掘り出して構築される。全長は87cm、両袖の遺存状態は良好で焚き口幅26cmを測り、全体の形状は馬蹄形を呈している。燃焼部の深さは12cmで奥壁にかけて垂直気味に立ち上がっている。袖内側と奥壁側は被熱により赤化していた。燃焼部より26cm程上位で須恵器高坏（No.13）の脚部が正位で出土している。

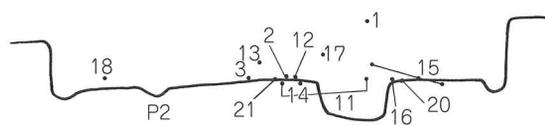
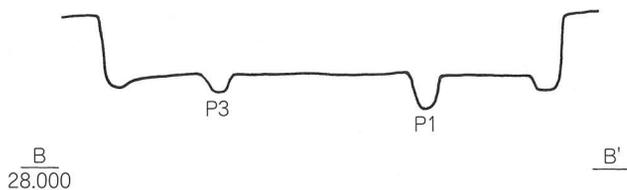
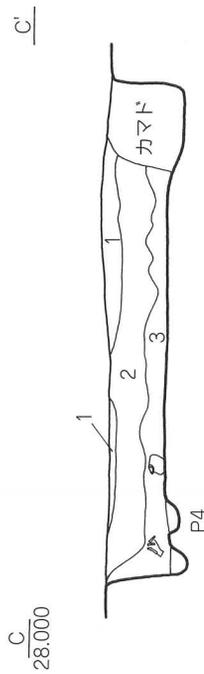
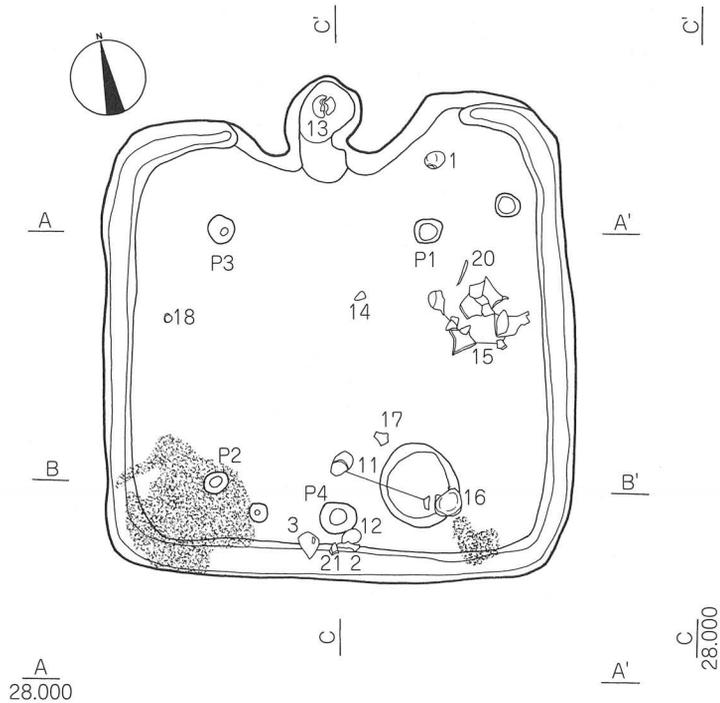
覆土 3層に分層された。ほぼ水平堆積であり、埋め戻し土と考えられる。

遺物 遺物は比較的多く確認された。カマド燃焼部内から高坏が出土している。支脚代りに設置された可能性もあるが燃焼部より20cm程浮いた状態で出土していた。また、入り口とみられる住居跡南壁の周辺より坏類数個体がみつまっている。

土器類は、土師器・須恵器の坏、須恵器の高台付坏、高坏、小型蓋など供膳具を中心としており、その他に大小の土師器甕、短頸壺などがみられる。供膳具における土師器と須恵器の割合は、1対4程度で須恵器が圧倒的に多い。

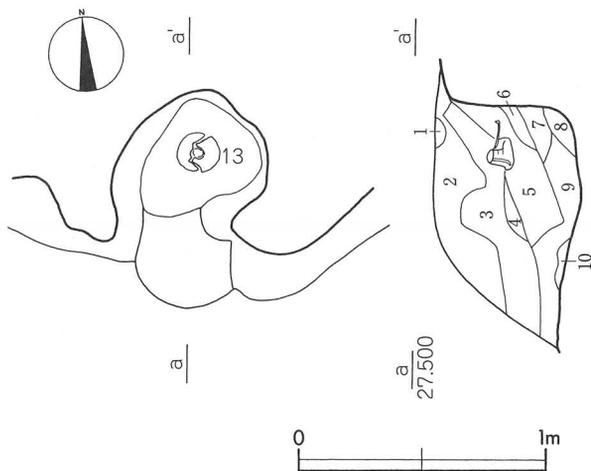
No.1～3はそれぞれ形の異なる土師器坏である。底部はいずれも平底化しており、体部と口縁部の境に付く稜がほぼ消失している。内面に痕跡が明瞭もしくは不明瞭な磨きがみられる。No.4～10は須恵器坏である。体部は直線的に開き、底径/口径指数はおおよそ56～62程度、底径が小型化を遂げる前の段階にある。No.11・12は須恵器の高台付坏である。やや大ぶりで、高台径も大きい。特にNo.12は高台の内側に墨滴痕がみられたので、底面を硯に転用したものとみられる。器質が緻密でないために墨滴が染込んでしまったのか、使用頻度が少ないまま廃棄されている。No.13は須恵器の高坏である。坏部を欠損した後、支脚として転用しており、表面は赤化している。No.14は須恵器の小型蓋の小片である。以上の須恵器は胎土に白雲母が含まれており、すべて新治窯跡の製品と判断された。No.15は一般的な大きさの土師器甕で、体部の膨らみが強い。一方、No.16は小型甕で、鉢状に大きく開いた口縁をもつ。No.17は土師器短頸壺の小片で、外面に軽い磨き調整が施されている。No.18は土製紡錘車、No.19は銅製丸軛、No.20は刀子、No.21は凝灰岩製の砥石である。No.19の丸軛は、内部に付けられた3本の鈺が裏板に固定されている。外面に鍍金の痕跡はみられなかった。No.20は床面直上からの出土である。

所見 当住居跡の帰属時期は、須恵器坏の口径・底径の比率が新治窯跡群東城寺桑木窯跡の段階か、もしくはやや先行する段階に相当するとみられ、おおよそ8世紀後半から9世紀初頭頃と判断される。



SI-70

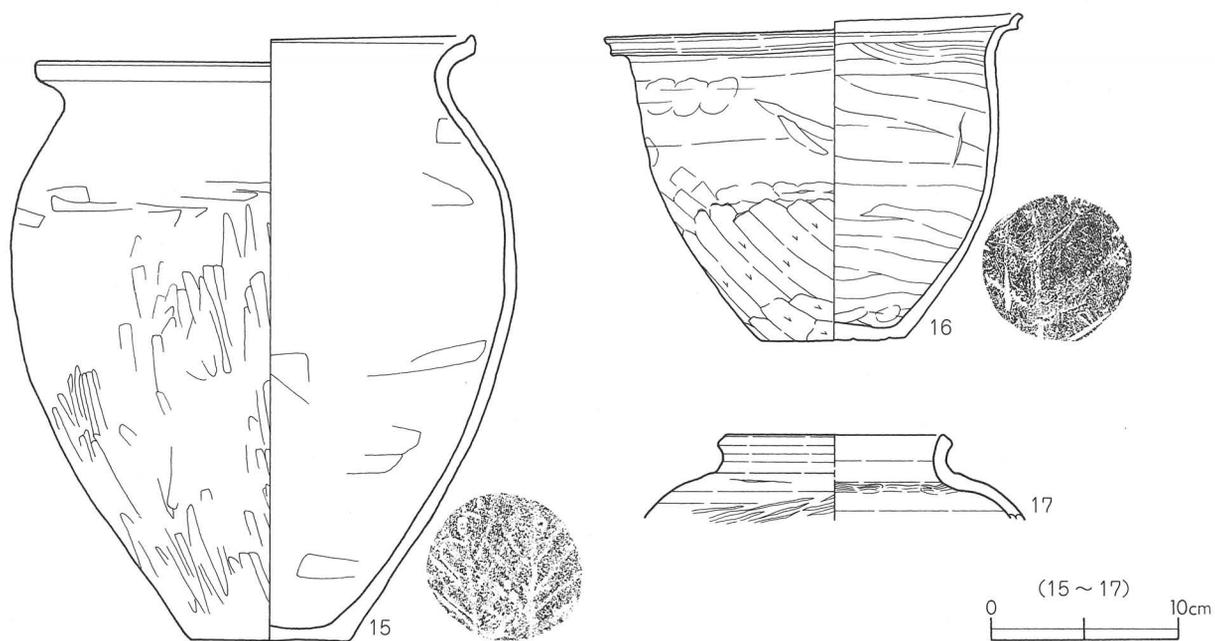
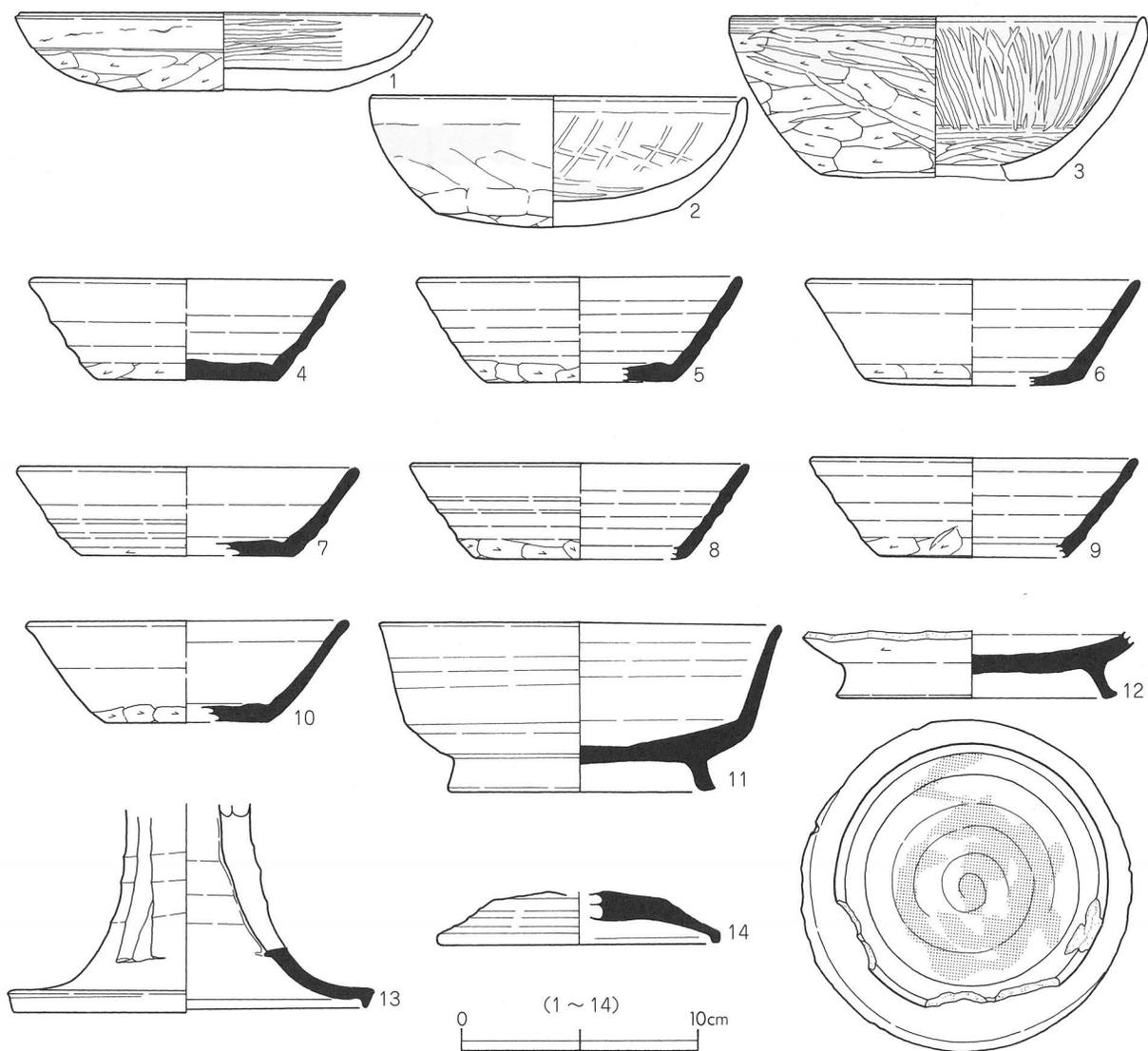
- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒微量
- 2. 7.5YR4/3 褐色 焼土粒・炭化物・ローム粒少量 ローム中・白色砂多量
- 3. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土粒中量



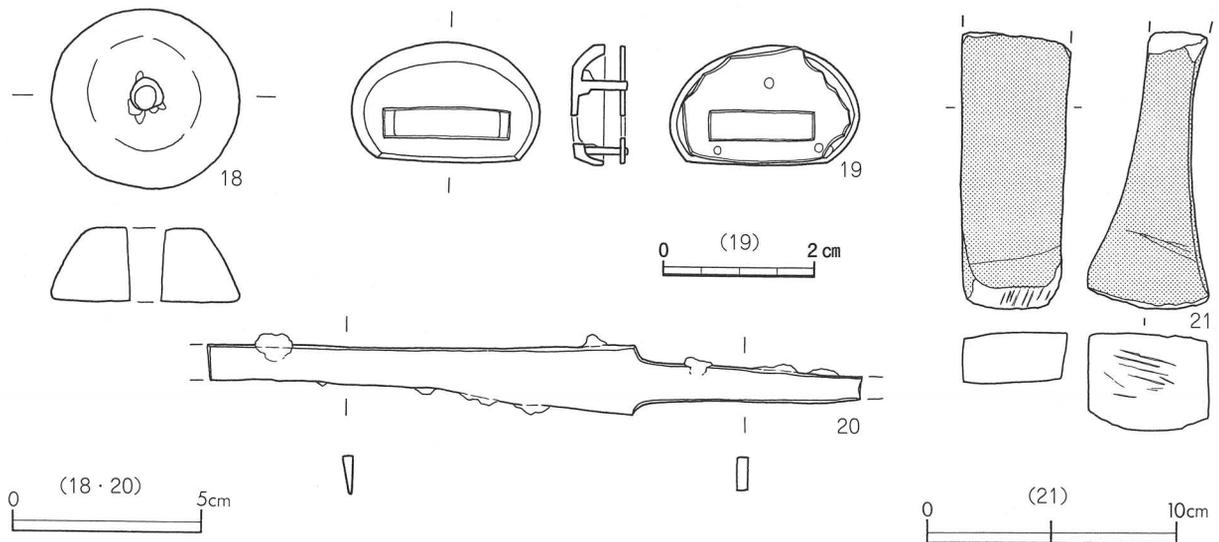
SI-70 カマド

- 1. 7.5YR4/3 褐色 ローム粒微量 白色砂中量
- 2. 7.5YR4/3 褐色 ローム小・粒微量 ローム粒少量 白色砂多量
- 3. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土小・白色砂微量
- 4. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒・白色砂中量
- 5. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土中・ローム粒・白色砂少量 焼土小・粒中量
- 6. 7.5YR3/3 暗褐色
- 7. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中少量 ローム小・粒・白色砂中量
- 8. 7.5YR4/3 褐色 ローム大微量 ローム中・小少量 ローム粒中量
- 9. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土小・粒微量 ローム粒少量 粘性強
- 10. 7.5YR3/3 暗褐色 粘性強

第191図 第70号住居跡・カマド遺物出土状況



第192图 第70号住居跡出土遺物 (1)



第193図 第70号住居跡出土遺物（2）

第70号住居跡出土遺物

図版番号	器種	量法 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第192図 1	土師器 坏	口径 [17.0] 底径 9.0 器高 3.3	底部は平底で、体部は浅く緩やかに開く。口唇部は平坦に切り揃え、一条の沈線が付く。	底部に一方方向からのヘラ削りと磨きを施す。体部に横位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 良好	覆土上位 70%（体部下位は完存）
第192図 2	土師器 坏	口径 [15.6] 底径 10.2 器高 5.5	底部は丸底ながら端部に稜が付く。体部は丸みを帯びて強い角度で立ち上がる。	底部は不定方向のヘラ削り、体部は横・斜位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に粗い磨きを施す。	微細な長石・石英を中量 内外面にぶい橙色 普通（やや軟質）	南壁溝付近、床直 70% 内外面黒色処理（部分的）
第192図 3	土師器 坏	口径 17.2 底径 9.8 器高 6.8	底部は丸底ぎみの平底で、体部は丸みを帯びて強い角度で深く立ち上がり、深身の碗状を呈する。	体部に横位のヘラ削りと粗い磨き、口縁部に回転ナデ、内面に放射状の磨きを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面にぶい橙色 良好	南壁溝付近、床直 底部に径7cmの破砕孔 内外面黒色処理（部分的）
第192図 4	須恵器 坏	口径 [13.4] 底径 7.6 器高 4.2	底部は平底で、体部は直線的に強めの角度で立ち上がる。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面灰色 普通	覆土 40%（底部の80%残存）
第192図 5	須恵器 坏	口径 [13.7] 底径 [7.8] 器高 4.4	底部は平底で、体部は直線的に強めの角度で立ち上がる。	底部に縦横方向のヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面褐色 不良（軟質）	覆土 20%（底径の30%残存）
第192図 6	須恵器 坏	口径 [13.8] 底径 [8.2] 器高 4.4	底部はやや丸みを帯びた平底で、径が大きい。体部は直線的に強めの角度で立ち上がる。	底部に回転ヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面明灰色 普通（やや軟質）	覆土 40%（口径の40%、底径の50%残存）
第192図 7	須恵器 坏	口径 [14.4] 底径 [9.0] 器高 3.7	底部は平底で径が大きく、体部は直線的に強い角度で立ち上がり、口唇部は僅かに肥厚する。	底部に回転ヘラ削り、体部下位に回転とみられるヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面浅黄灰色 不良	覆土 20%（口径の30%残存）
第192図 8	須恵器 坏	口径 [14.2] 底径 [8.8] 器高 4.0	底部は平底とみられ、体部は直線的に強い角度で立ち上がる。	体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を微量 内外面灰色 普通	覆土 10%（口径の20%残存）
第192図 9	須恵器 坏	口径 [13.8] 底径 [7.8] 器高 4.1	底部は平底とみられ、体部は直線的に強い角度で立ち上がる。	体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面褐色 不良（軟質）	覆土 30%（口径の30%残存）
第192図 10	須恵器 坏	口径 [13.6] 底径 [7.0] 器高 4.3	底部は平底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面灰色 普通	覆土 30%（底径の40%残存）

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第192図 11	須恵器 高台付坏	口径 17.0 高台径 11.3 器高 6.9	高台は径が大きく「ハ」字に開く。体部は横方向に大きく開いた後、強い角度で立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	底部および体部下位に反時計回りの回転ヘラ削り、体部と口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 外面黒褐色、内面褐色 普通（やや軟質）	床直および南東ピット上層98%
第192図 12	須恵器 高台付坏	高台径 11.6 器高 (2.8)	高台は径が大きく「ハ」字に開く。体部下位は斜方向に開く。体部上位は意図的に打ち欠かされている。	底部および体部下位に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面灰色 良好	南壁寄り、床直40%（体部下位以下完存） 底部を覗に転用
第192図 13	須恵器 高坏	脚部径 14.7 器高 (8.6)	裾部はラッパ状に大きく開き、端部は断面逆三角形を呈する。三方向に方形の透かし孔を開ける。	内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・白雲母を少量 内外面灰黄色 普通（やや軟質）	カマド燃焼部50%（脚部はほぼ完存） 支脚に転用
第192図 14	須恵器 蓋	口径 [12.0] 器高 (2.2)	小型の蓋。頂部は平坦で、体部は直線的に浅めに開き、口縁部は小さく垂下する。	頂部に時計回りの回転ヘラ削り、体部および口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石を多量 内外面灰色 良好	床直40%（口径の40%残存）
第192図 15	土師器 甕	口径 23.4 底径 8.5 器高 32.5	最大径を体部上位にもち、頸部は「く」字に外反する。口唇部は厚めで小さく直立する。	体部中位以下に縦位の磨き、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面におい橙色 良好	床直および覆土下位95% 底部に2枚の木葉痕
第192図 16	土師器 小型甕	口径 22.2 底径 7.7 器高 17.4	頸部に締まりがなく鉢状を呈する。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は直角に屈曲し、口唇部は外反ぎみに立ち上がる。	体部下位に斜位のヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラナデを施す。全体に焼歪みが著しく、口径は楕円形を呈する。	微細な長石・石英を少量、白雲母を微量 内外面黄橙色 良好	床直95% 底部に木葉痕
第192図 17	土師器 短頸壺	口径 [11.6] 器高 (4.5)	体部は丸く大きく膨らみ、口縁部は短く直立する。口唇部は断面三角形に肥厚する。	体部に横位の軽い磨き、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・チャートを微量 外面黄橙色、内面黄褐色 良好	覆土中位細片（口径の25%残存）

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第193図 18	土製品 紡錘車	5.0	5.0	2.0	51.3	断面は台形を呈する。孔径は最大1.0cm。全面に丁寧な磨きが施され光沢がある。	ごく微細な長石を微量 におい赤褐色 良好	覆土下位完形

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第193図 19	銅製品 丸軋	2.5	1.6	0.8	4.0	小型の丸軋。内面の中央上部と左右下端に計3本の鉾が付けられ、裏板を留める。鉾の頭部は裏板表面で磨き落とされている。鍍金や漆の痕跡は認められない。	覆土ほぼ完形
第193図 20	鉄製品 刀子	(17.4)	1.8	0.3	(25.0)	刃渡りが最低12cm以上の大きめの刀子。刃は顕著な使い込みによって内湾状に減っている。	床直80%
第193図 21	石製品 砥石	(11.1)	4.9	4.8	(238.7)	凝灰岩製の砥石。使用面は3面、切り出し面が2面。側面は撥状を呈する。	南壁溝上面70%

第71号住居跡〔第194図、PL.28・94〕

位置 調査区南東隅Y・Z-35・36グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.0m付近に位置する。第9号掘立柱建物跡と重複しており、土層堆積状態から本住居跡が古いと判断した。

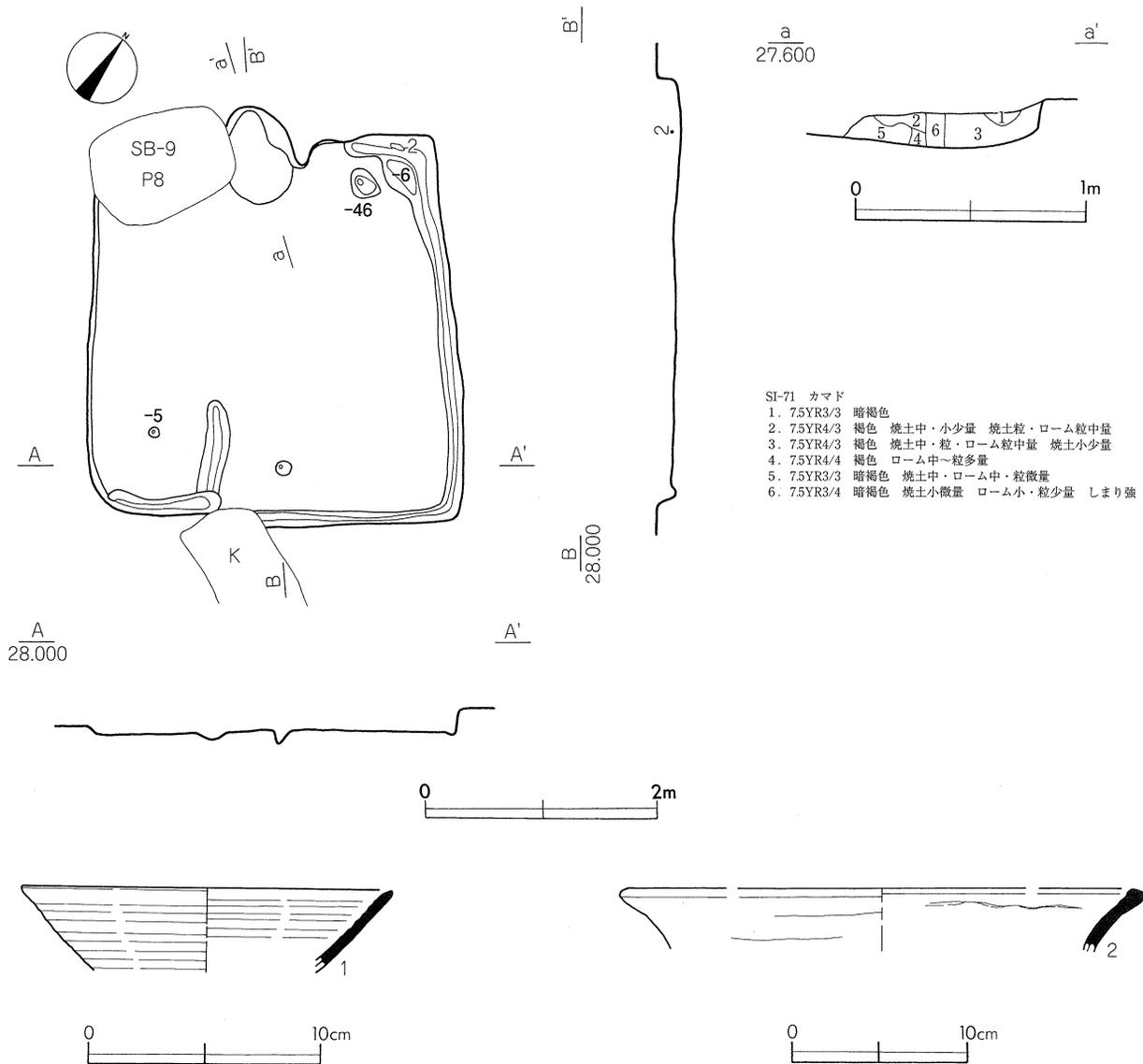
規模 長軸3.12m、短軸3.02mの正方形を呈し、床面積は約9.2㎡である。

主軸方向 N-45° -W。住居の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で23cmを測る。北壁から東壁を経て南壁側に壁溝が巡っており、幅は8～14cm、深さ3～13cmを測る。南東壁は住居主軸と平行に、壁溝に接して間仕切り状の溝がみられた。幅14～20cm、深さ6cmを測る。西側隅は第9号掘立柱建物跡に壊されている。

床 床面中央がややへこんでいる。

ピット 3基確認された。カマド付近のピットは主柱穴と思われる。径30cm、深さ46cmを測る。他の2基は間仕切り状の溝の両側、対をなすように位置している。間仕切り状の溝と合わせて住居内施設となる可能性もある。径9・12cm、深さ5・13cmを測る。この施設の位置から入り口は南東壁側の可能性も考えられる。



第194図 第71号住居跡・出土遺物

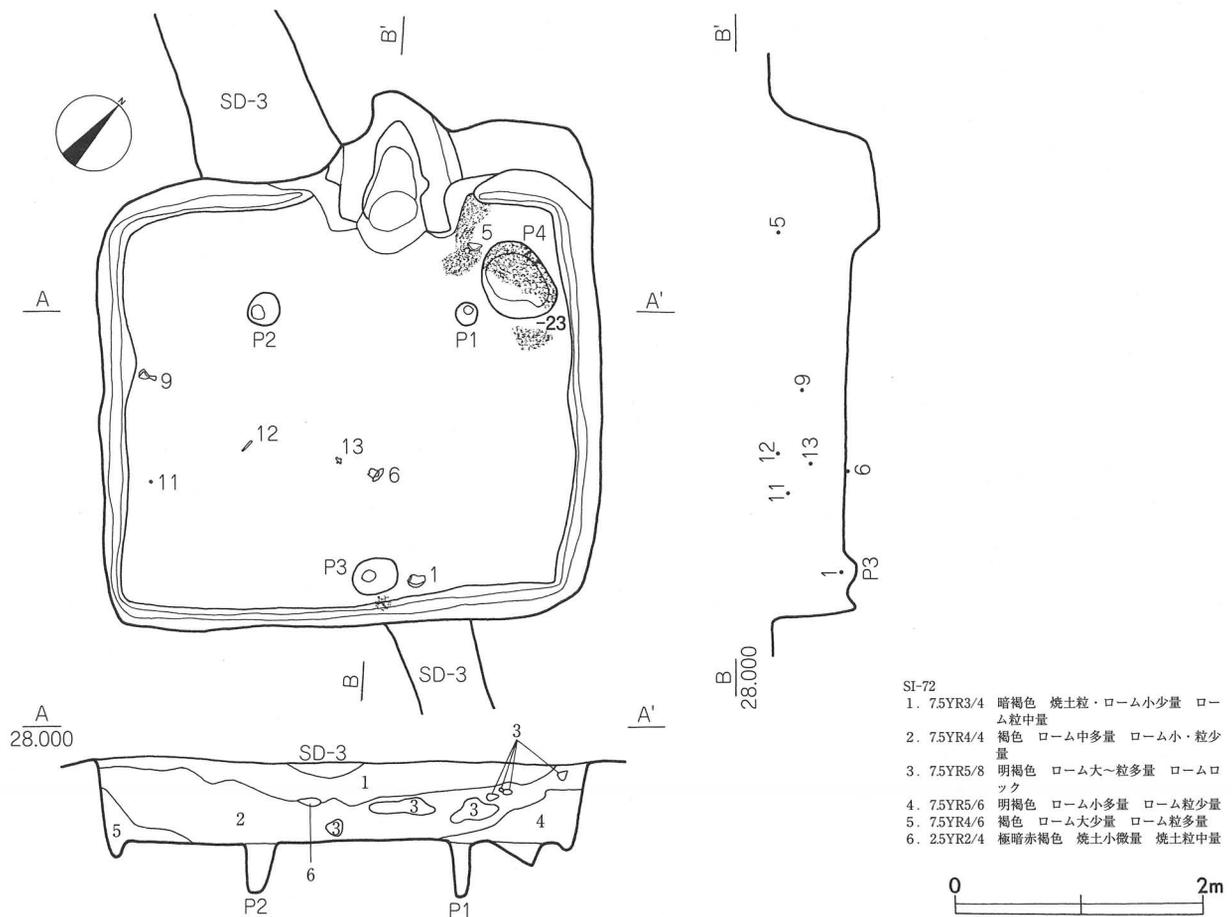
カマド 北西壁のほぼ中央に位置し、左側の袖は第9号掘立柱建物跡により壊されている。壁下場より32cm程壁外に掘り出して構築されており、全長83cmを測る。燃烧部は深さ8cmで楕円形を呈し、奥壁にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。遺物は出土していない。

遺物 遺物は僅かしか確認されず、図示し得たものはNo.1の須恵器坏とNo.2の須恵器甕の2点のみである。坏は小さな底部をもつとみられる。

所見 2点の土器はいずれも新治窯跡群の小野窯段階に相当すると考えられる。帰属時期は9世紀後半であろう。住居が営まれた時期も同様であろう。

第71号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第194図 1	須恵器 坏	口径 [16.0] 器高 (3.6)	体部は直線的に大きく開く。	内外面に間隔の狭いロクロ目が付く。	微細な長石を少量、白雲母を多量 内外面におい黄褐色 普通	覆土 20% (口径の 30%残存)
第194図 2	須恵器 甕	口径 [30.0] 器高 (3.6)	口縁部の小片。外反しながら大きく開き、口唇部内面に断面三角形の隆起帯をもつ。	内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を中量 内外面黄灰色 普通	覆土下位 細片 (口径の 20%残存)



第195図 第72号住居跡

第72号住居跡〔第195・196図、PL.28・94〕

位置 調査区東寄り Z・2 A-19・20グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。住居の東西を横断するように第3号溝と重複しており、土層堆積状態から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.54m、短軸3.16mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約11.2㎡である。

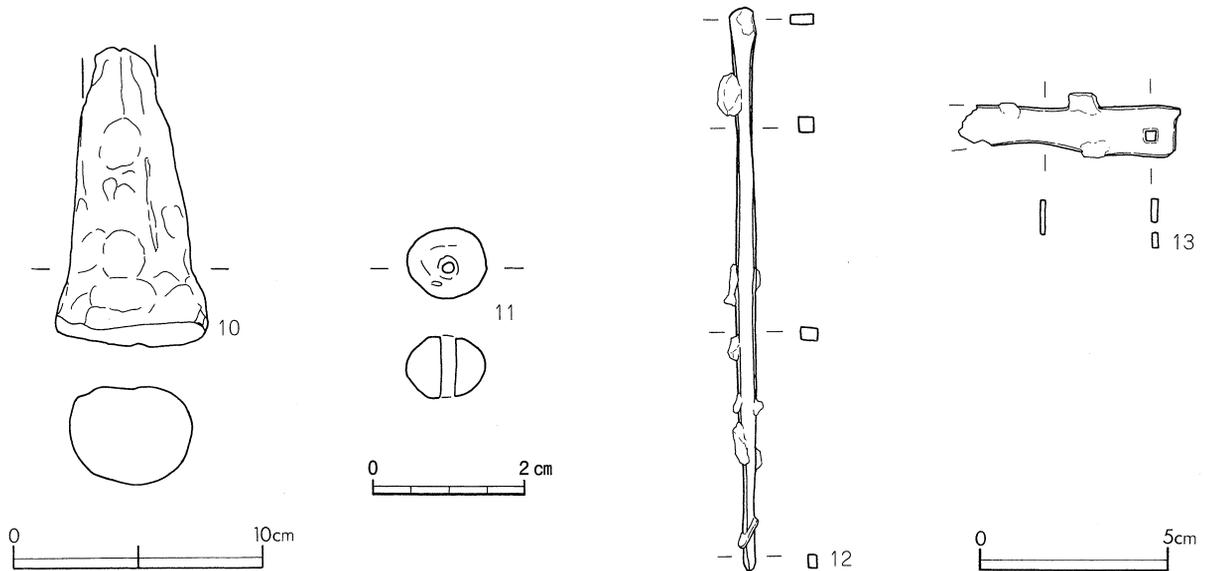
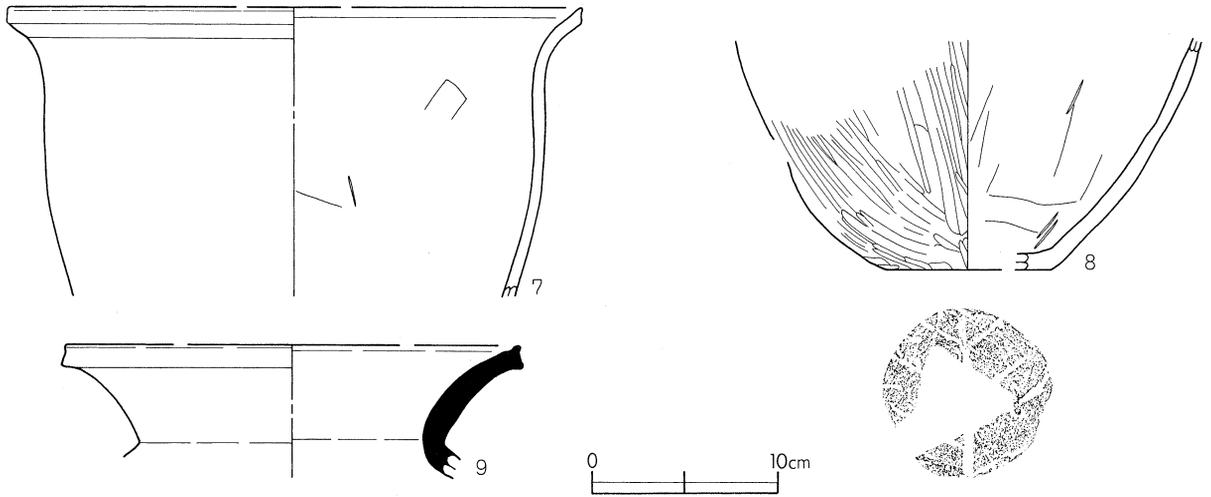
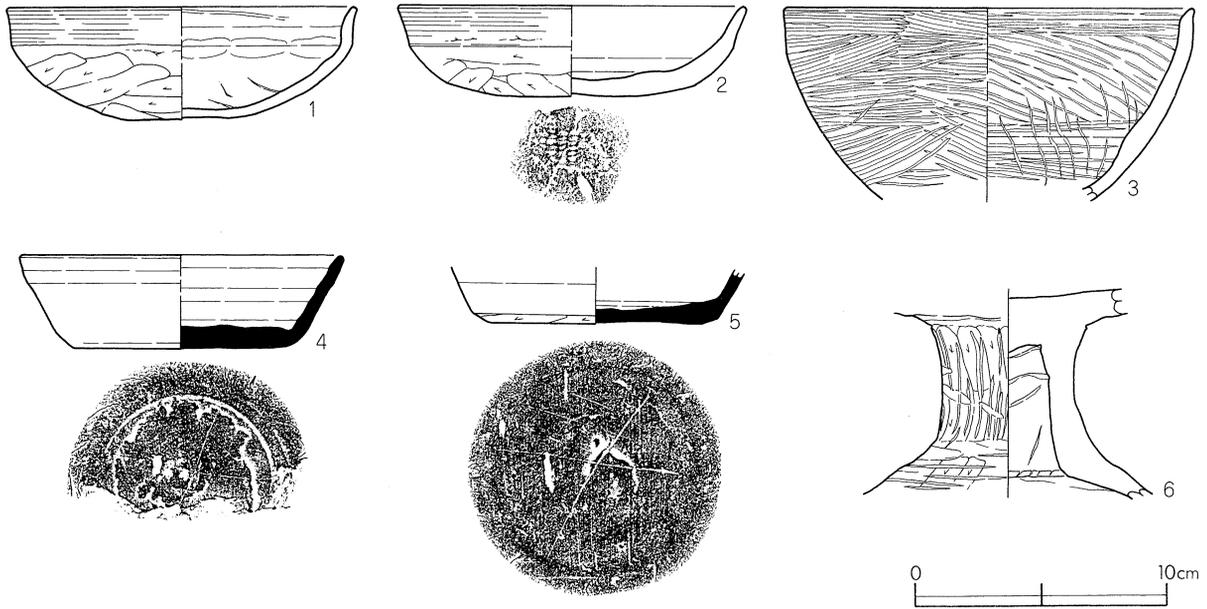
主軸方向 N-39°-W。住居の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で64cmを測る。壁溝は全周しており、幅10～30cm、深さ6～9cmを測る。重複する第3号溝の掘り込みは浅く、住居東西の壁を確認面から15cm程壊すに留まっていた。

床 概ね平坦である。北壁のカマド袖脇に粘土範囲が確認された。袖の崩落土の一部と考えられる。

ピット 4基確認された。配置と規模からP1・2は支柱穴、P3は入り口施設に伴うピット、P4は貯蔵穴と考えられる。支柱穴は径18・26cm、深さ39・44cmを測る。P3は径46cm、深さ8cm、P4は径68cm、深さ23cmを測る。貯蔵穴としたP4の覆土中に粘土の堆積がみられた。写真から判断すると粘土は覆土中位付近まで及んでいるようである。

カマド 北西壁やや北寄りに位置し、壁下場より85cm程壁外に掘り出して構築されている。全長1.28m、焚き口幅44cmを測る。右袖は一部崩落しており、床面に粘土が堆積していた。燃烧部は深さ19cm、楕円形を呈し奥壁にかけて垂直気味に立ち上がっている。奥壁は被熱により赤化していた。遺物は出土して



第196图 第72号住居跡出土遺物

いない。

覆土 6層に分層された。壁際崩落の後、一気に第2層が堆積している。

遺物 遺物は床面および覆土中位から上位に散在する状態で発見されている。供膳具にみる土師器と須恵器の割合はおよそ2対1で土師器が多い。No.1・2は土師器の坏で、平坦化した丸底を有している。No.3は深手の土師器碗で、内外面に磨きと部分的な黒色処理の痕跡がみられた。No.4・5は須恵器坏で、径の大きな平底をもつ。両者とも底部に「×」のヘラ記号が焼成前に付けられているが、No.5の方は「卍」の可能性もある。共に新治窯跡の製品である。No.6は土師器の高坏で、平坦に開く坏部に太い脚部が付く。No.7は土師器の甌、8は土師器甕、9は須恵器甕である。いずれも小さめの破片で覆土中より確認されている。No.10は支脚、No.11は土製の小玉である。No.12は鉄釘のように先端が細くなっているが、頭部が平板形を呈しており、性格不明と言わざるを得ない棒状製品である。No.13も刀子状の鉄片であるが、刃部のつくりがなく、端部に方形の孔が開いているため、性格は同定できない。

所見 当住居跡の帰属時期は、須恵器坏の底径が大きく、体部の開きが弱い形態から、新治窯跡群の東城寺寄井前A単位群か、それよりもやや先行する時期のものと考えられ、およそ8世紀中葉から後半にかけての頃に充てられる。

第72号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第196図 1	土師器 坏	口径 [13.8] 器高 4.4	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境に軽い稜が付く。口縁部は直立して口唇部が外反する。	底部に一方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面にぶい黄橙色 普通	床直 50% (口径の50%残存)
第196図 2	土師器 坏	口径 [13.8] 器高 3.6	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境にごく軽い稜が付く。口縁部は外傾ぎみに強く立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面明橙色 普通	覆土 30% (底部の60%残存) 底部に縄目のある編物の圧痕
第196図 3	土師器 碗	口径 [16.2] 器高 (7.6)	体部は丸みをもって深めに立ち上がり、口唇部は小さく外反する。	内外面に横位を基調とした細かな磨きを施す。	微細な長石を少量 外面黒褐色、内面にぶい褐色 良好	覆土 20% (口径の20%、体部径の30%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第196図 4	須恵器 坏	口径 [12.6] 底径 8.4 器高 4.7	底部は平底で径が大きく、体部は強めの角度で直線的に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、ごく軽いヘラナデを施す。体部下位は未調整、内外面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量、白雲母を多量 内外面灰白色 普通 (やや軟質)	覆土 50% (底径の60%残存) 底部に焼成前のヘラ記号「×」
第196図 5	須恵器 坏	底径 8.2 器高 (2.0)	底部は平底で径が大きく、体部は強めの角度で立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を中量、白雲母を微量 内外面灰色 良好	覆土上位 30% (底部完存) 底部に焼成前のヘラ記号「×」か「卍」
第196図 6	土師器 高坏	器高 (8.3)	脚部は太い円筒形を呈し、裾部は丸みをもって大きく開く。坏部は水平方向に大きく開き、盤状を呈するとみられる。	脚部外面に縦位のヘラ削りと磨き、内側にヘラで粘土を削り取った跡が残る。坏部内底面に一方向の磨きを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面赤褐色 良好	床直 40% (脚部完存)
第196図 7	土師器 甌	口径 [31.0] 器高 (15.4)	体部は丸みをもって強く立ち上がり、口縁部は緩やかに外反し、口唇部は断面三角形を呈する。	体部内面に横位のヘラナデ、口縁部に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土 10% (口径の30%残存)
第196図 8	土師器 甕	底径 8.8 器高 (12.2)	体部は丸みをもって立ち上がる。	体部外面に縦位の磨き、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土 20% (底部の70%残存) 底部に木葉痕
第196図 9	須恵器 甕	口径 [24.2] 器高 (6.0)	口縁部は「く」字に強く外反し、口唇部は平坦に整えられ、上下端に稜が付く。	内外面に回転ナデを施す。口縁部内面に白濁した自然釉が付着する。	径1mmの長石・石英を中量 外面灰色、内面灰オリーブ色 堅緻	覆土中位 細片 (口径の25%残存)

図版番号	器種	法 量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第196図 10	土製品 支脚	(12.0)	6.1	5.8	(256.8)	長円錐形の支脚。手捏ねによる整形。	微細な長石・石英、白雲母を微量 橙色 良好	覆土 70%
第196図 11	土製品 小玉	0.8	1.0	0.8	0.7	孔は径1mm。ややいびつな球形で、表面に使用による光沢がみられる。	ごく微細な長石をごく微量 橙色 良好	覆土上位 完形

図版番号	器種	法 量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第196図 12	鉄製品 棒状製品	15.0	0.6	0.4	7.5	断面方形、一方が先細りするため鉄釘の可能性もあるが、頭部は平たい撥状を呈する。	覆土上位 完形
第196図 13	鉄製品 板状製品	(5.8)	1.3	0.2	(3.3)	刀子状を呈するが、刃部がなく、端部に一辺3mmの方孔が開く。	覆土中位 60%程度か

第75号住居跡〔第197・198図、PL.30・95・96〕

位置 調査区北東寄り、2A・2B-16～18グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。

他の遺構と重複のない単独の住居跡である。ここより北東側に住居は確認されていない。

規模 長軸4.34m、短軸4.14mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約18.0㎡である。

主軸方向 N-40°-E。住居の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で56cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 概ね平坦である。カマドの両側と西壁隅に粘土範囲が確認され、西壁隅では5cm程の厚さで堆積していた。P3とP4の間は大きく攪乱により床面が壊されている。

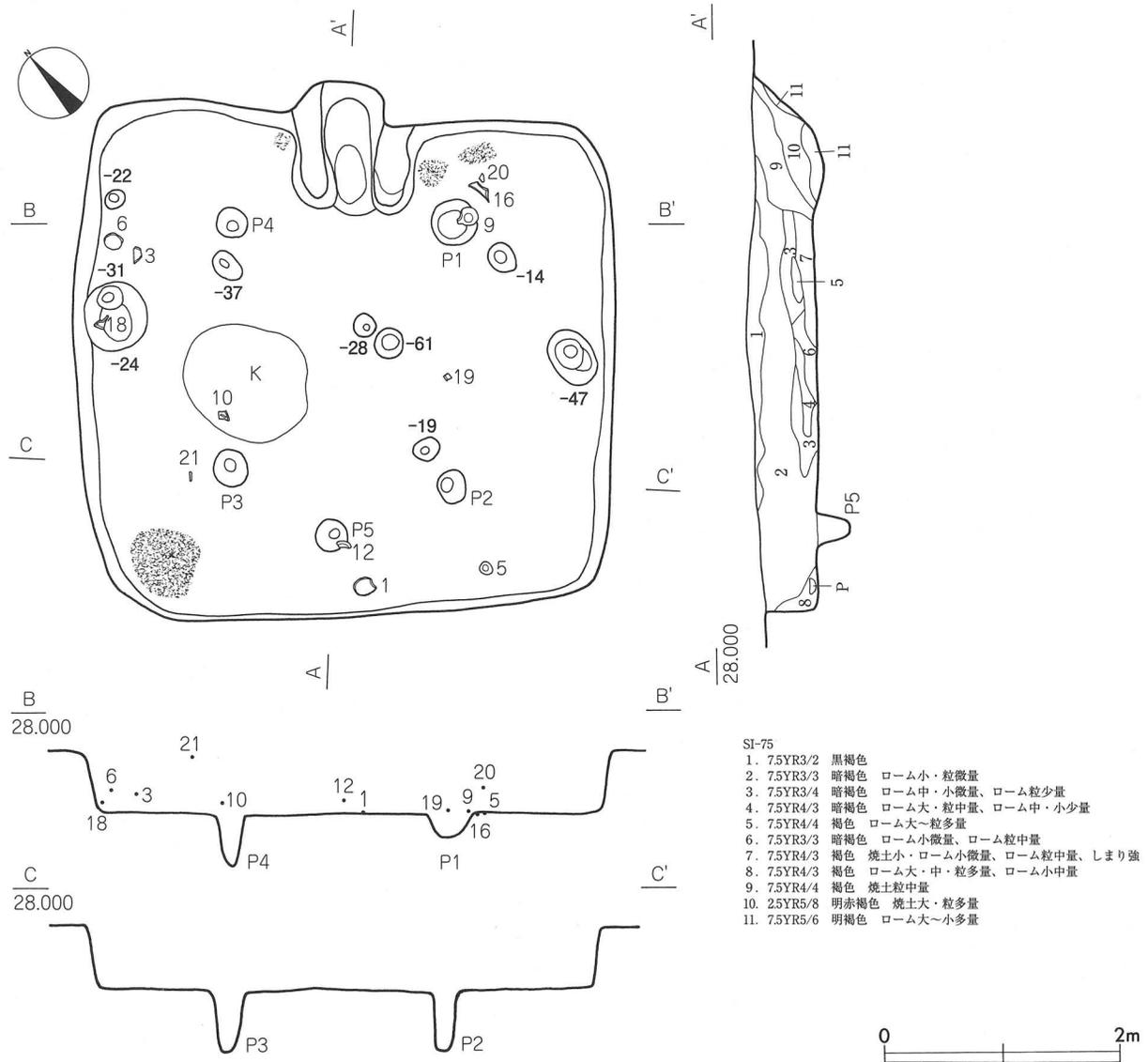
ピット 13基確認された。配置と規模からP1～4は支柱穴、P5は入り口施設に関連したピットとなる。支柱穴は径24～38cm、深さ19～54cm、P5は径28cm、深さ28cmを測る。他のピットは径18～50cm、深さ14～47cmを測る。

カマド 北東壁ほぼ中央に位置し、壁下場より44cm程壁外に掘り出して構築されている。全長1.15m、焚き口幅30cm、燃焼部の深さは10cmを測る。奥壁にかけて外傾して立ち上がり、両袖の内側は被熱により赤化していた。遺物は出土していない。カマドの両袖外側に見られる粘土範囲は袖の一部が崩落したものであろう。

覆土 11層に分層された。第9～11層はカマドに伴う覆土である。全体に不自然な堆積であり、埋め戻し土と考える。

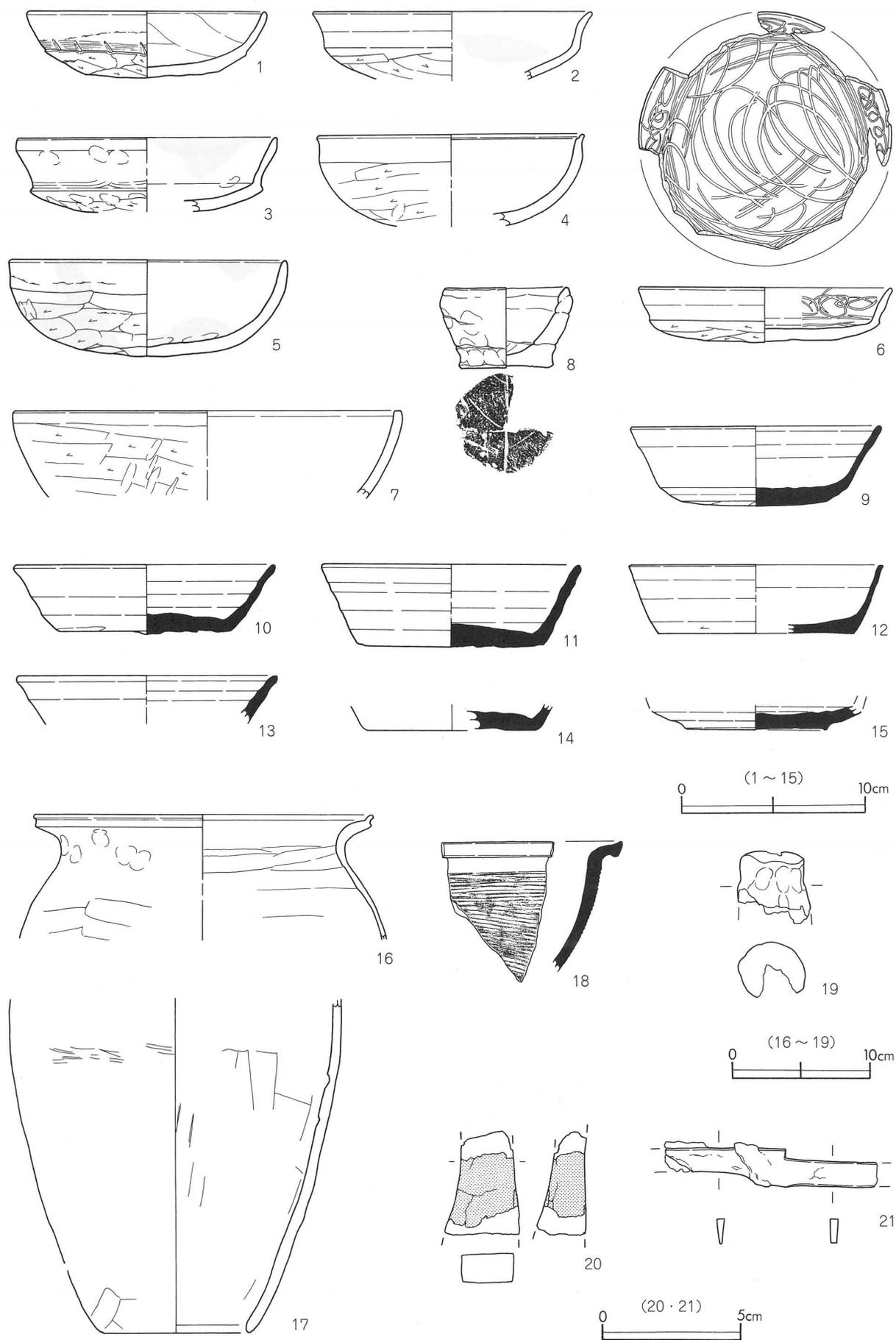
遺物 支柱穴とした各ピットと壁の間、レベルは床面直上から覆土上位とさまざまであった。No.1～6は土師器の坏である。器形はNo.1～3・6のように器高の半分以上を口縁部が占め、屈曲のきついものと、No.4・5のように短く反る口縁部と内湾する体部を持つ2タイプに分けられる。No.6は直立した口縁部の内面に螺旋状の、また内面には不規則な弧状の暗文が描かれている。No.7は鉢形土器で内面には細かな磨きが施されていた。No.8はミニチュアの坏ないしは鉢形土器である。輪積み痕と指頭痕が明瞭に観察された。No.9～15は須恵器でNo.15が高台付坏、他は坏である。No.9はやや丸底状、他は平底でいずれも底径が大きい。土師器と須恵器の坏類はほぼ同じ割合で出土している。No.16・17は甕・甌である。No.18は須恵器の鉢ないしは甌の口縁部片である。これらは坏類と比べて少量であった。No.19は指頭痕が明瞭に残る土製支脚の頭部である。No.20は凝灰岩製の砥石で断面は方形を呈し、砥面が4面みられた。No.21は刀子である。

所見 西側床面の粘土は比較的均一の厚さで、住居廃絶に伴い廃棄されたとは考えにくい出土状態で



第197図 第75号住居跡

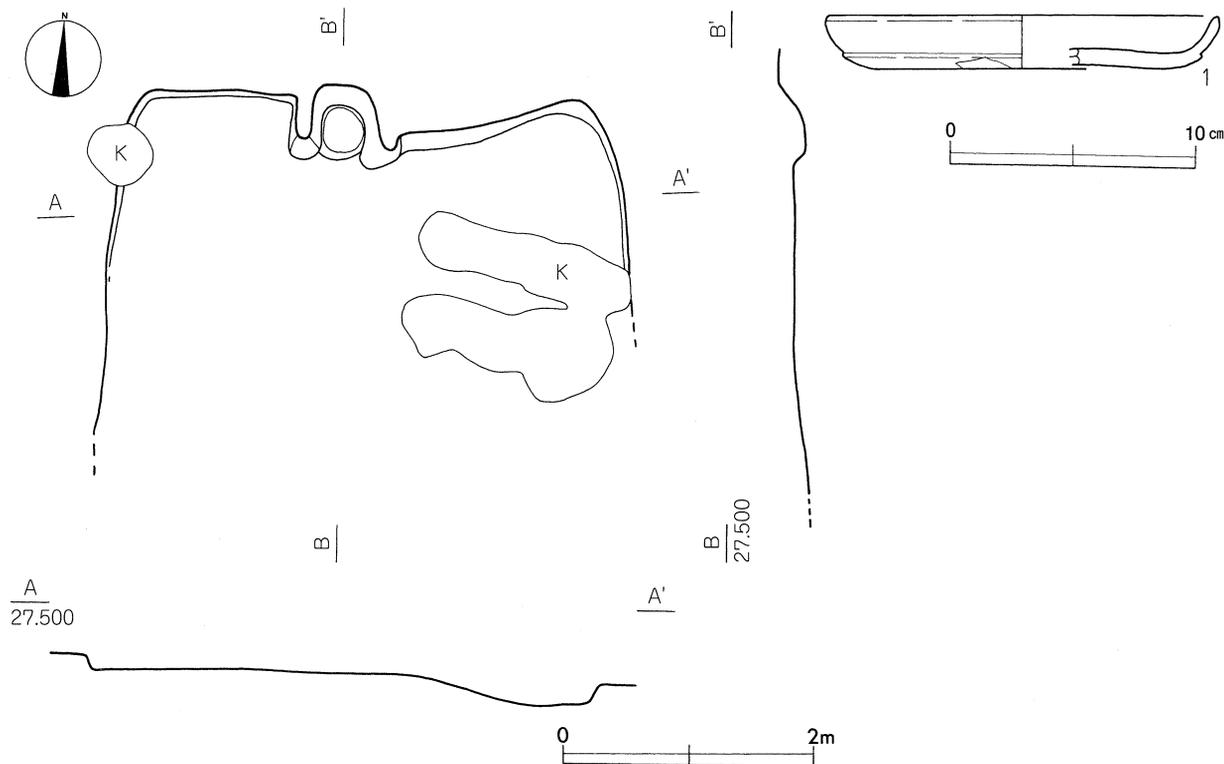
あった。また、遺物は床面及び覆土下位からの出土が多く、主柱穴としたピットの際からも出土していた。住居廃絶時に柱穴が抜き取られ、あまり時間を置かないうちに土器が廃棄されたのであろう。このことから出土遺物と住居の時期はほぼ同じ頃と考えられ、8世紀前葉に相当すると思われる。



第198図 第75号住居跡出土遺物

第75号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)		器形の特徴		技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		口径	器高	口径	器高			
第198図 1	土師器 坏	口径 12.8	器高 3.6	底部は丸底で、体部と口縁部の境にごく小さな段が付く。		底部に一方のヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部下に小刻みなヘラナデを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面橙色 良好	床直 95%
第198図 2	土師器 坏	口径 [15.0]	器高 (3.6)	体部は丸みを帯びて浅く開き、口縁部との境に段をもって強く外反しながら高く立ち上がる。		体部に不定方向の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面淡い褐色 普通	覆土 20% (口径の20%残存) 内面黒色処理 (部分的)
第198図 3	土師器 坏	口径 [14.0]	器高 (4.0)	体部は丸みを帯びて浅く開く。口縁部は体部との境に段をもって強く立ち上がる。口唇部をやや肥厚させる。		底部に一方からのヘラ削り、体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部の内外面に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を少量 内外面褐色、底部は黒色 普通	覆土中位 10% (体部径の20%残存) 内面黒色処理 (部分的)
第198図 4	土師器 坏	口径 [14.4]	器高 (4.9)	体部は丸く膨らみ深手。口縁部は僅かに外反し、口唇部内側に浅い沈線が付く。		体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 内外面淡い褐色 普通 (やや軟質)	覆土 10% (口径の15%と体部径の15%の破片が2点)
第198図 5	土師器 坏	口径 14.8	器高 5.2	底部は丸底で、体部は丸く深手に立ち上がる。口縁部は素縁で直立する。		底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を微量 内外面黄褐色 普通	床直 90% 内外面黒色処理 (部分的)
第198図 6	土師器 坏	口径 [13.6]	器高 2.9	底部は平坦化した丸底で、体部と口縁部の境にごく小さな段が付く。口縁部は中央部が僅かに膨らむ。		底部中央に一方からのヘラ削り、周縁に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。内面に細かな磨きと、螺旋状の暗文を施す。	微細な長石・石英を中量 内外面橙色 良好	覆土中位 60% (底部完存)
第198図 7	土師器 鉢	口径 [20.8]	器高 (4.7)	体部は丸みを帯びて強く立ち上がり、口唇部は平坦に切り揃えられる。		体部外面に横位のヘラ削りと磨き、内面に細かな磨きを施し、器全体が滑らかに整えられる。	径2mmの長石粒を微量、微細な長石・石英を少量 内外面黄褐色 良好	覆土 細片 (口径の20%残存)
第198図 8	土師器 ミニチュア 坏	口径 5.2	底径 器高 4.3	手捏ねによる粗製の坏ないし鉢。底部は平底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内傾する。		粘土紐を指だけで巻き上げ成形。内面に指頭によるナデを施す。	微細な長石を微量 内外面橙色 良好	覆土 40% (底部の70%残存) 底部に木葉痕
第198図 9	須恵器 坏	口径 13.4	底径 器高 8.0 4.3	底部は平坦化した丸底で、体部は中央が僅かに外反しながら強い角度で立ち上がる。		底部に縦横方向のヘラ削り、体部下位に回転ヘラ削り、体部外面に回転ナデでロクロ目を擦り消す。	微細な長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面にぶい黄褐色~灰色 不良 (軟質)	ビット1内 95%
第198図 10	須恵器 坏	口径 [14.0]	底径 器高 9.4 3.7	底部は径の大きな平底で、体部は直線的でやや浅めに開く。		底部に回転ヘラ削り後未調整、体部下位にごく軽い手持ちヘラ削りを局部的に施す。	径1~3mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 不良 (軟質)	覆土下位 50% (底部完存)
第198図 11	須恵器 坏	口径 [14.2]	底径 器高 9.8 4.4	底部は径の大きな平底で、体部は直線的で強い角度で深めに立ち上がる。		底部に一方からの粗いヘラ削りを施す。体部下位は未調整。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 普通	覆土 40% (底部の70%残存)
第198図 12	須恵器 坏	口径 [13.7]	底径 器高 [10.4] 3.7	底部は径の大きな平底で、体部は僅かに丸みを帯びて強い角度で立ち上がる。口唇部は平坦でシャープに切り揃えられる。		底部に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。器壁は薄く、全体的に端整な作りを呈する。	径1mmの長石・石英を微量、微細な長石を中量 内外面青灰色 良好	覆土下位 30% (底径の40%残存)
第198図 13	須恵器 坏	口径 [14.0]	器高 (2.6)	体部から口縁部にかけて直線的に開く。		内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量 内外面青灰色 良好	覆土 細片 (口径の20%残存)
第198図 14	須恵器 坏	底径 器高 [9.4] (1.3)		底部は平底で体部は強めの角度で立ち上がる。		底部に回転ヘラ削り後、一方からのヘラ削り、体部下位に軽い回転ナデを施す。	径1~3mmの長石・石英を少量、白雲母を多量 内外面灰色 不良 (軟質)	覆土 20% (底径の50%残存)
第198図 15	須恵器 高台付坏	高台径 器高 [7.8] (1.0)		底部の端をつまみ上げて成形したごく小さな高台が付く。体部は横方向に張り出し、角度を変えて立ち上がる。		底部に多方向のヘラ削りと軽いナデ、体部下位に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰色 普通 (軟質)	覆土 細片 (高台径の20%残存)
第198図 16	土師器 甕	口径 器高 [24.6] (9.0)		口縁部は「く」字に強く外反し、口唇部は小さく外反する。		体部外面に横位のヘラ削り、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面褐色 良好	床直 10% (口径の50%残存)
第198図 17	土師器 甕	底径 器高 10.8 (24.1)		体部は細長く伸びる。底部は底を抜いた大きな円孔が開く。		体部下位に横位のヘラ削り、体部内外面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面灰黄褐色 普通	覆土 30% (底径の80%残存)
第198図 18	須恵器 鉢 ないし甕	破片長	(10.1)	鉢ないし甕の口縁部片。口縁部は直角に屈曲し、口唇部は断面三角形を呈する。		体部外面に横位の平行線の叩き目、内面に横位のナデと同心円の当て具痕が付く。	微細な長石を少量、白雲母を多量 内外面灰色 普通	覆土下位 細片
図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第198図 19	土製品 支脚	(5.3)	4.8	(3.8)	(64.2)	円柱状の支脚の頭部片。指頭庄痕が多数付く。	ごく微細な長石を微量にぶい橙色 良好	床直 30%
図版番号	器種	法量				特徴	備考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第198図 20	石製品 砥石	(5.5)	(4.0)	2.6	(63.9)	凝灰岩製の砥石。使用面は4面。被熱により表面が劣化、黒色変色している。	覆土中位 40%	
第198図 21	鉄製品 刀子	(7.5)	0.9	0.3	(6.9)	顕著な使用により、刃部は内湾するまで研ぎ減っている。	覆土上位 60%	



第199図 第77号住居跡・出土遺物

第77号住居跡〔第199図、PL.30・96〕

位置 調査区南西寄り G・H-30・31グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高26.5mと27.0mの間に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.96m、短軸推定3.2m、やや横長の方形を呈すると思われる。床面積推定12.7㎡である。

主軸方向 N-2°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で35cmを測る。南側は斜面の下方に向かってることから、調査時に壁が確認できなかったと思われる。また、東壁、西壁の一部も攪乱により壊されていた。壁溝も確認されていない。

床 北東側隅は他に比べて25cm程床面が下位であった。攪乱により遺存状態が不良のため、なぜここが低くなっているのか不明である。

ピット 確認されなかった。入り口部はカマドと対をなす南側と思われる。

カマド 北壁ほぼ中央に位置している。北壁はカマドを中心に対称ではなく段を有しており、その左側壁下場より18cm程壁外に掘り出して構築されている。全長60cm、焚き口幅は32cm、燃烧部の深さは10cmを測る。奥壁にかけて緩やかに外傾して立ち上がっている。カマド覆土中より土師器坏が出土している。

遺物 カマド覆土中から土師器の坏が1点出土している。底面は平底で、口径に比して底径の割合が大きい器形である。

所見 遺物の出土位置が明確でないため、明らかに住居に帰属するとはいえないが、土師器の坏は8世紀前葉に相当しよう。

第77号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199図 1	土師器 坏	口径 [15.6] 器高 2.1	底部は平底で、体部はごく浅く皿状を呈する。口縁部は体部の境に小さな段をもち、僅かに内湾しながら立ち上がる。	底部に一方向からのヘラ削り、底部周縁ないし体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を多量 内外面明褐色 普通	カマド覆土 20% (口径の 20%残存)

第79号住居跡〔第200図、PL.30・96〕

位置 調査区南東際の調査区域にかかるC・D-27・28グリッド、標高27.5m付近に位置する。第7・8号掘立柱建物跡と重複しており、土層堆積状態から本住居跡が古いと判断した。

規模 長軸3.4m、短軸3.26mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約11.1㎡である。

主軸方向 N-44° -W。住居の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁 垂直気味に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で53cmを測る。南隅を除き壁溝が全周しており、幅10～18cm、深さ1～10cmを測る。北と南の隅は第7・8号掘立柱建物跡との重複により壊されていた。

床 やや起伏を有している。南東壁際に2箇所の焼土範囲が確認された。床面のほぼ中央を第7号掘立柱建物跡により壊されている。

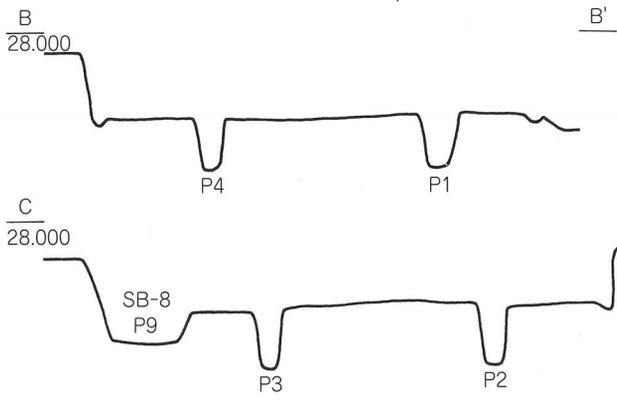
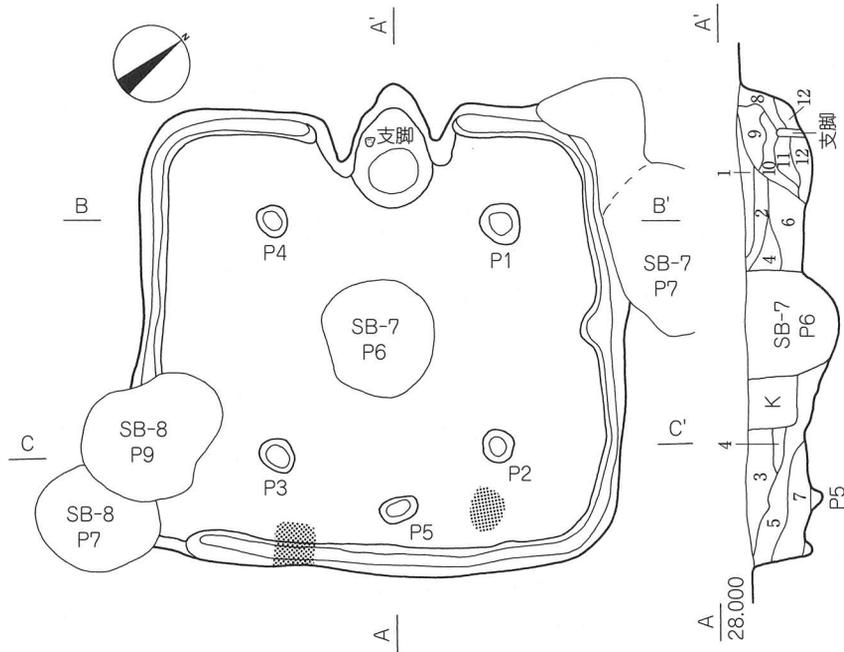
ピット 5基確認された。規模と配置からP1～4は支柱穴、P5は入り口施設に伴うピットであろう。支柱穴の径は25～35cm、深さ41～49cmと近似した規模を測る。P5は径30cm、深さ14cmを測る。

カマド 北西壁のほぼ中央に位置し、壁下場より40cm程壁外に掘り出して構築される。全長1.0m、焚き口幅60cm、燃焼部の深さは4cmを測る。奥壁にかけて外傾して立ち上がっている。両袖の内側と奥壁は被熱により著しく赤化していた。燃焼部内の左側に支脚が直立した状態で出土している。支脚の出土位置が燃焼部内の際に寄っており、カマドに2個体以上の土器をかける「カマド口」があった可能性が考えられる。

覆土 12層に分層された。第8～12層はカマドに関連した堆積である。またほぼ中央で第7号掘立柱建物跡に掘り込まれている様子が見て取れる。全体には自然埋没であろう。

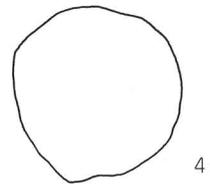
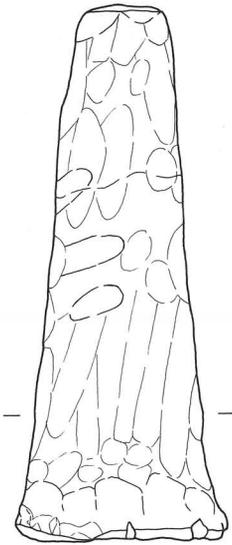
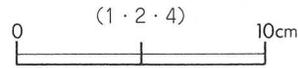
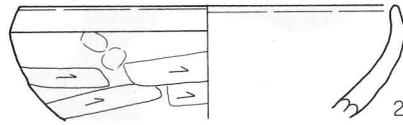
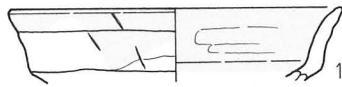
遺物 支脚を除き全て覆土中からの出土である。No.1・2は土師器の坏である。No.1は口縁部が外反するタイプ、No.2は内湾するタイプであった。いずれも内外面に黒色処理が施されているが、部分的で希薄であった。No.3は土師器の甕である。頸部の締りは弱く、体部の最大径とあまり大きな差異はない。No.4は完形の土製支脚である。底面に糊の痕跡が観察された。

所見 壁溝の上面から出土した焼土は、その出土位置から廃棄されたものと考えられる。出土遺物は8世紀前葉に相当し、全て覆土中からの出土であるが、住居の時期もこれと大差のない時期であろう。



SI-79

1. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土中・小・ローム小・粒微量、ローム中少量
2. 7.5YR4/3 褐色 焼土大・粒微量、焼土中・小・ローム粒・白色砂少量
3. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒微量
4. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中・小少量、ローム粒中量
5. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒微量、粘性・しまり強
6. 7.5YR3/2 黒褐色 焼土小・ローム粒微量、炭化粒・ローム小・白色砂少量、しまり強
7. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム粒・白色砂微量、粘性強
8. 5YR5/4 にぶい赤褐色 焼土大・小少量、焼土粒中量、ローム粒多量、しまり強
9. 5YR4/4 にぶい赤褐色 焼土粒・白色砂少量、ローム粒中量
10. 5YR4/3 にぶい赤褐色 焼土中・小・ローム小少量、ローム粒中量
11. 5YR4/4 にぶい赤褐色 焼土中・小中量、焼土粒多量、ローム粒・白色砂少量
12. 5YR4/3 にぶい赤褐色 焼土大・ローム小少量、焼土粒・ローム粒中量

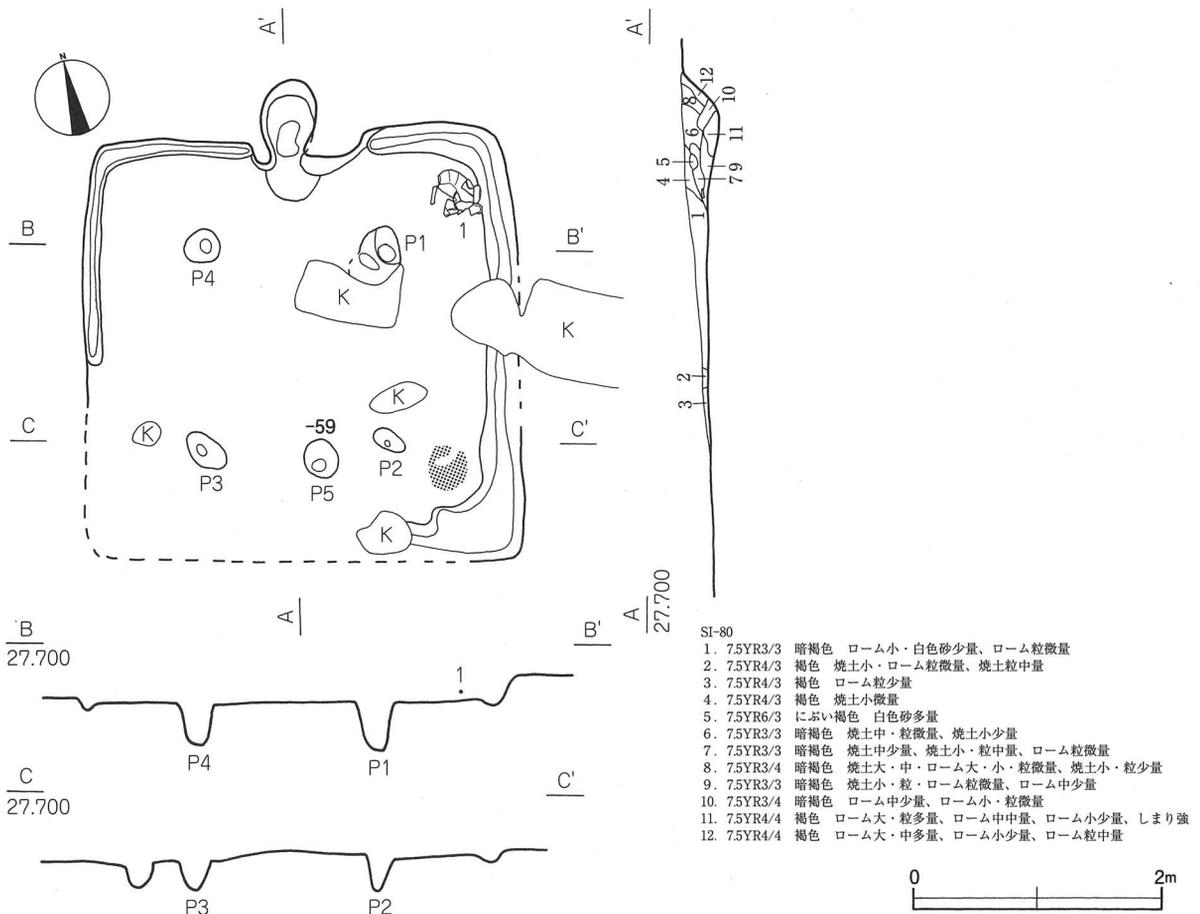


第200図 第79号住居跡・出土遺物

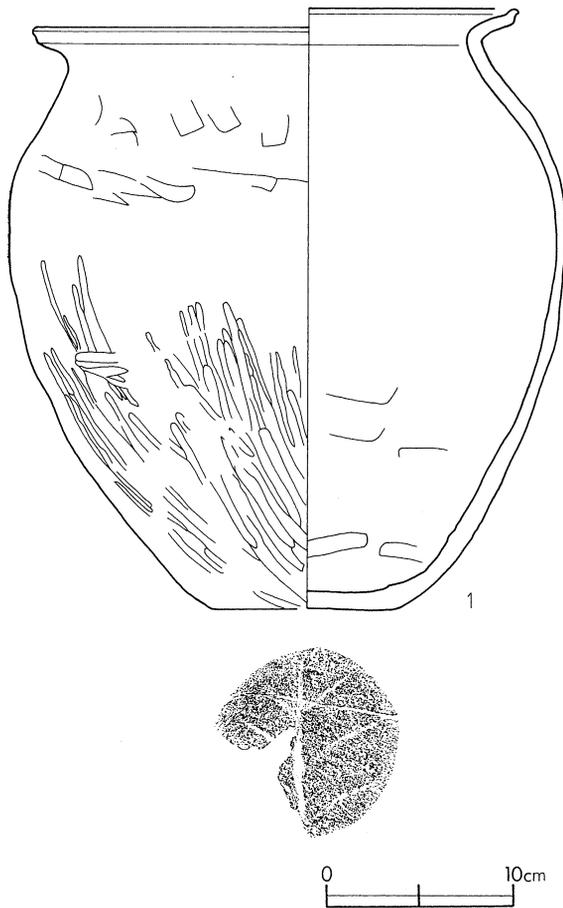
第79号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第200図 1	土師器 坏	口径 [13.2] 器高 (2.9)	口縁部は体部との境に稜もち、強い角度で外反しながら立ち上がる。	内外面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英、白雲母を微量 内外面におい橙色普通	覆土 30% (口径の50%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第200図 2	土師器 坏	口径 [15.0] 器高 (4.5)	体部は深く丸みをもち、口縁部との境に微かな稜が付く。口縁部は小さく内傾する。	体部外面に横位のヘラ削りと指頭圧痕、口縁部に回転ナデを施す。	ごく微細な長石・石英を多量 内外面明赤褐色普通	覆土 20% (口径の30%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第200図 3	土師器 甕	口径 [24.2] 器高 (18.6)	最大径を体部中位にもつ。頸部の締まりは弱く、口縁部は緩やかな「く」字を描いて立ち上がる。口唇部は断面三角形で直立する。	体部外面の中位以下に縦位の磨き、上位に横位のヘラナデ、内面に横位のヘラナデとヘラ削りを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母少量 内外面灰黄褐色普通	覆土 10% (口径の20%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第200図 4	土製品 支脚	21.2	8.4	6.9	830.0	裾広がりの円柱状の支脚。手捏ね成形の後、縦方向に軽いヘラナデを施す。底部に糊の圧痕あり。	微細な長石を微量 におい橙色 良好	カマド燃焼部 完形



第201図 第80号住居跡



第202図 第80号住居跡出土遺物

～4は支柱穴、P5は入り口施設に伴うピットと考えられる。支柱穴の規模は径28～48cm、深さ30～39cm、P5は径32cm、深さ59cmを測る。P5は入り口施設としてはピットの深度が深く、あるいは別の性格を有していた可能性も考えられる。

カマド 北壁のほぼ中央に位置している。壁下場より60cm程壁外に掘り出して構築されている。全長98cm、焚き口幅20cm、燃焼部の深さは11cmを測る。両袖は端部が窄まる馬蹄形状を呈しており、また燃焼部から奥壁にかけて緩やかに外傾して立ち上がる。遺物は出土していない。

覆土 12層に分層された。第4～12層はカマドに関連した堆積である。全体に覆土が薄い。

遺物 北東隅の床面付近からほぼ完形の土師器甕が出土した。頸部に締めりがなく、全体に鈍重な器形は、第6・30号住居跡出土の甕と共通している。

所見 覆土下位から出土している遺物の時期は8世紀前葉に相当し、住居の時期もこれと大差のない時期と考えられる。

第80号住居跡〔第201・202図、PL.31・96〕

位置 調査区南東際近くW・X-36・37グリッド、南側の谷に向かって傾斜し始める標高27.0mに位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.04m、短軸2.92mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約8.9㎡である。

主軸方向 N-14° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で23cmを測る。南側が斜面の下方に向かうためか西壁の一部と南壁は確認されなかった。この壁が遺存していない範囲を除き、壁溝が全周している。幅8～26cmで南東隅は最も広く50cm、深さは4～9cmである。東壁の一部を攪乱により壊されていた。

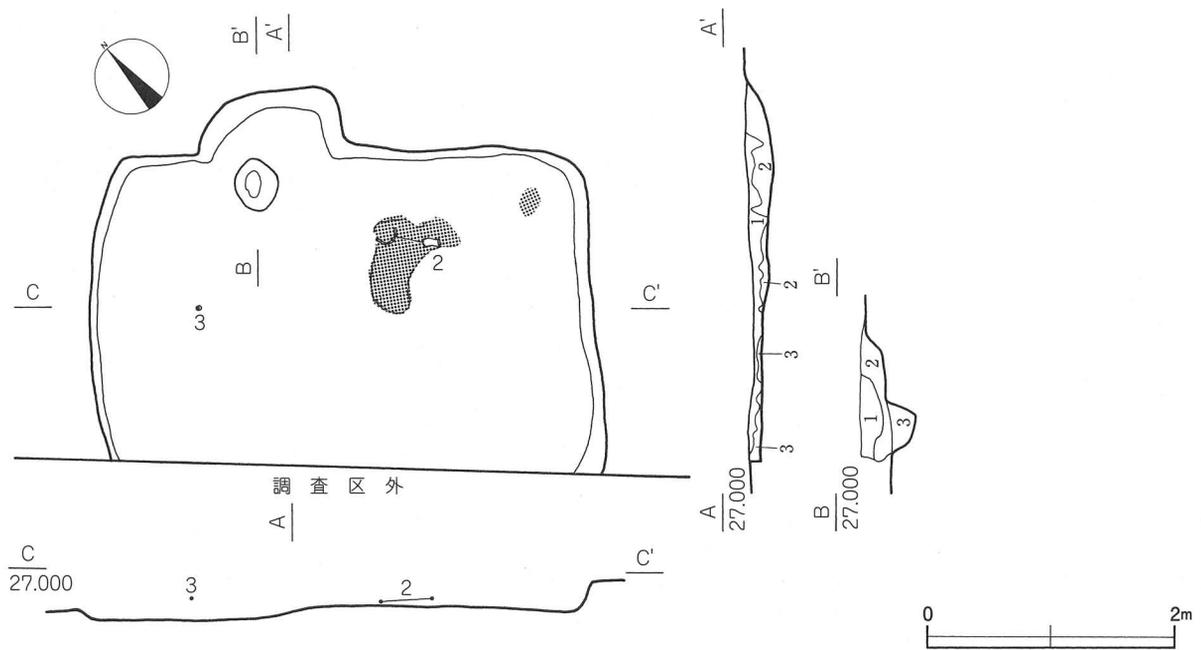
床 やや起伏を有し、中央にかけて部分的に盛り上がっている。南東隅の床面上より焼土範囲が確認された。床面の数箇所を攪乱により壊されている。

ピット 5基確認された。配置と規模からP1

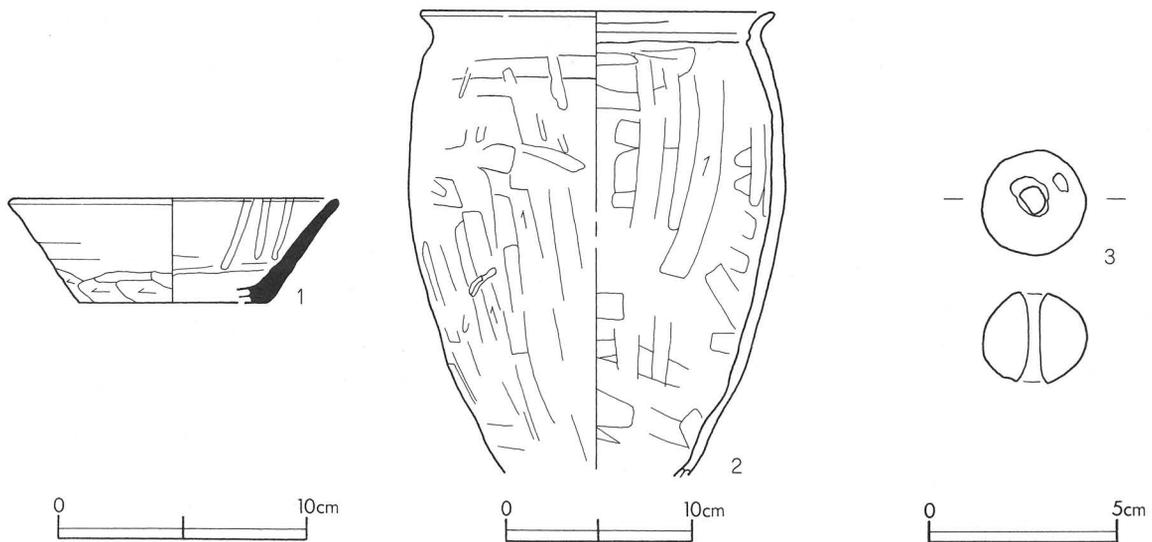
～4は支柱穴、P5は入り口施設に伴うピットと考えられる。支柱穴の規模は径28～48cm、深さ30～39cm、P5は径32cm、深さ59cmを測る。P5は入り口施設としてはピットの深度が深く、あるいは別の性格を有していた可能性も考えられる。

第80号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第202図 1	土師器 甕	口径 25.5 底径 9.8 器高 32.2	体部は最大径を上位にもって大きく膨らむ。底部は径が大きく安定感がある。口縁部は「く」字に強く外反し、口唇部は大きく外傾する。	体部外面の中位以下に縦位の磨き、上位に横位のヘラナデ、内面に横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を中量 内外面にぶい橙色良好	北東隅覆土下位 90% 底部に木葉痕



- SI-81 A-A'
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中・粒微量
 2. 7.5YR4/3 褐色 ローム大微量、ローム小・粒中量、粘性強
 3. 7.5YR4/4 褐色 ローム大・中中量、ローム小微量、ローム粒少量、粘性・しまり強
- SI-81 B-B'
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒微量
 2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小微量、ローム粒少量
 3. 7.5YR4/3 褐色 ローム小少量、ローム粒中量



第203図 第81号住居跡・出土遺物

第81号住居跡 [第203図、PL.31・96]

位置 南端の調査区壁にかかるU・V-41・42グリッド、南側の谷に向かって落ち込む斜面の上位で標高27.0mと26.5mの間に位置する。確認されている範囲では他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.9m、短軸残存2.46mの方形を呈している。南西側が調査区域にかかり、およそ半分が未調査である。

主軸方向 N-40° -E (北東側の張り出しをカマドと仮定して)。住居跡の四隅が概ね東西南北を向い

ている。

壁 外傾して立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で35cmを測る。壁溝は確認されなかった。

床 西側に向かい緩やかに傾斜している。奥壁寄りに焼土範囲が2箇所確認された。

ピット 1基確認された。円形を呈し径43cm、深さ25cmを測る。

カマド 北東壁やや西寄りに壁外に掘り出されている箇所がカマドとなろうか。壁外に60cm程掘り出されているが、袖や被熱の痕跡が全くみられなかった。B-B'とした覆土中にも焼土・炭化物等の混入はみられない。カマドとするには疑問が残る。

覆土 3層に分層された。いずれにもローム質土の混入がみられ、埋め戻し土であろう。

遺物 遺物は少ない。No.1の須恵器坏は覆土中からの出土で、内面に火襻がみられた。No.2の土師器甕は焼土上面からの出土である。口縁部と頸部の長さが短く、体部が長い器形である。No.3は完形の土玉である。

所見 前述したように、カマドの痕跡が非常に希薄である。ピットも1基のみで、入り口方向は不明である。焼土上面から出土した土師器甕は9世紀前葉に相当すると思われ、住居の時期もほぼ同様の時期と考えられる。

第81号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第203図 1	須恵器 坏	口径 [13.3] 底径 [7.6] 器高 4.2	底部は平底で、体部は直線的に開く。	底部に一方向からのヘラ削り、体部下位に反時計回りの手持ちヘラ削り、内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量 内外面灰色 普通	覆土 30% (口径・底径の30%残存) 内面に火襻
第203図 2	土師器 甕	口径 [19.0] 器高 (24.7)	体部は中位に最大径をもって長く伸びる。頸部の縮まりが弱く、口縁部は「く」字に短く外反する。口唇部は平坦に切り揃えられる。	体部外面に顕著な縦位のヘラ削り、内面に縦位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を少量 内外面にぶい黄橙色 良好	覆土下位 30% (体部径の30%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第203図 3	土製品 土玉	2.4	2.8	2.8	17.1	孔の上端は楕円形で、最大幅0.9cm	微細な長石・石英を多量にぶい橙色・黒褐色 普通	覆土中位 完形

第83号住居跡 [第204・205図、PL.31・97]

位置 東側調査区域にかかる2E-21・22グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.08m、短軸2.76mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約8.5㎡である。

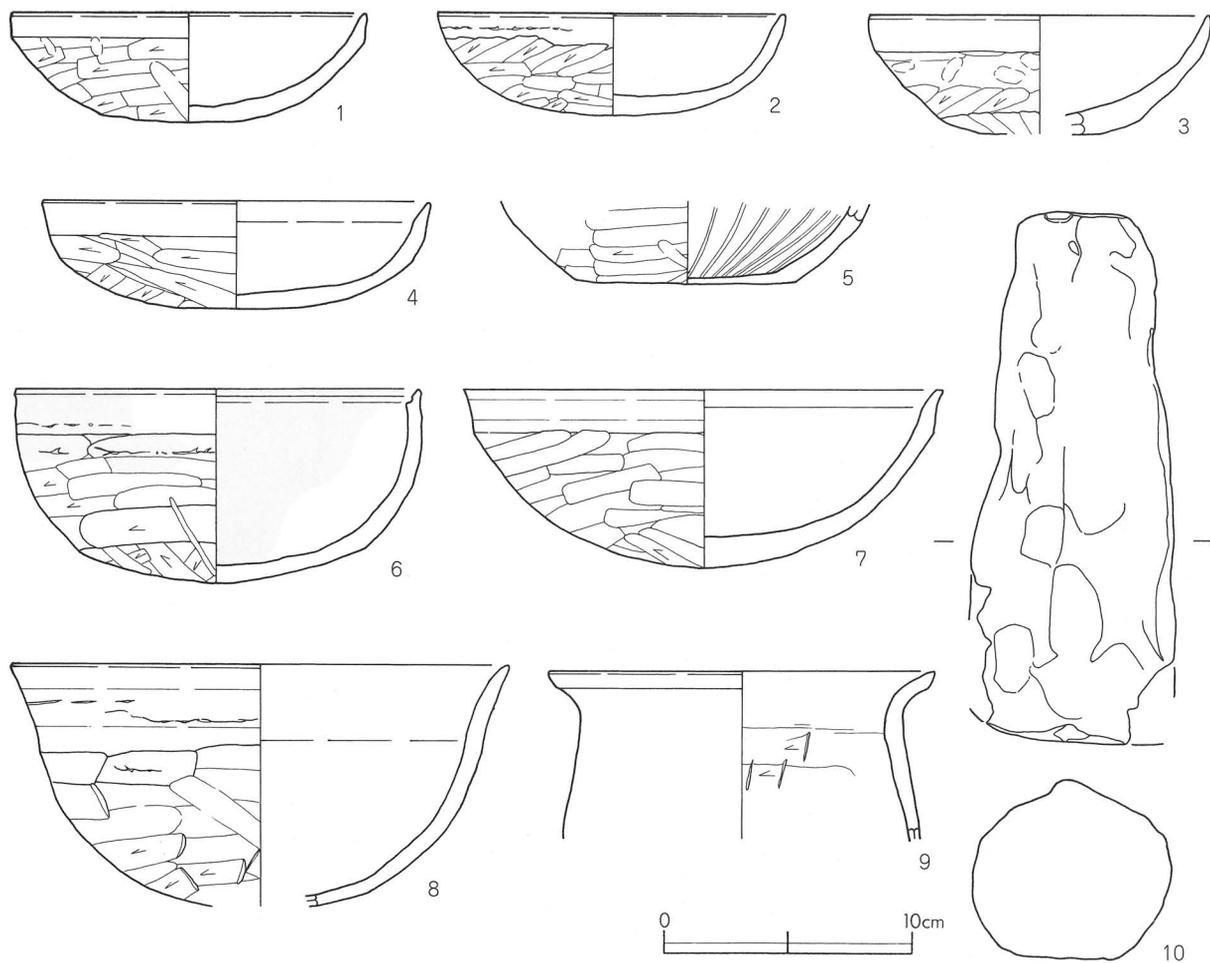
主軸方向 N-78° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で51cmを測る。南東隅は調査区外にあたり、壁溝はこの付近を除き全周している。幅8～18cm、深さ4～7cmを測る。

床 やや起伏を有している。

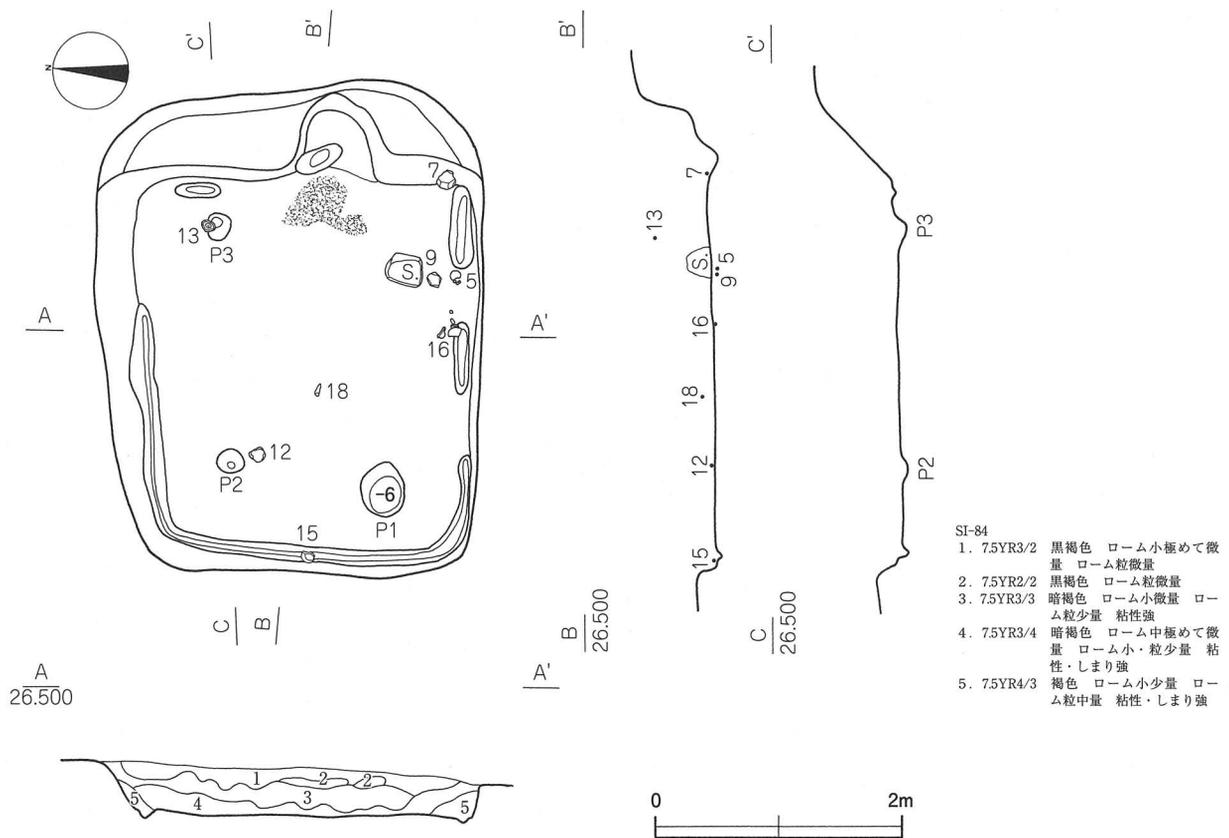
ピット 4基確認された。配置と規模からP1・2は主柱穴と考えられる。径20・22cm、深さ9・16cmを測る。カマドに正対して西側に楕円形のピットがあり、径70cm、深さ25cmを測る。位置的に入り口施設に伴うピットの可能性も考えられるが、やや床面中央に寄りすぎの感がある。

カマド 東壁のほぼ中央に位置し、壁下場より20cm程壁外に掘り出して煙道部が構築される。全長75cm、



第205図 第83号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)		器形の特徴		技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
		口径	器高	底径	器高				
第205図 3	土師器 坏	13.4	4.7			底部に多方向からのヘラ削り、体部下位に横位のヘラ削り、体部上位は未調整で指頭圧痕が残る。口縁部に回転ナデ。	微細な長石・石英を微量 内外面橙色 普通	覆土 40% (口径の50%残存)	
第205図 4	土師器 坏	15.2	4.3			底部は丸底で、体部は丸みをもって浅めに開く。口縁部は体部との境に稜をもって直立する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面暗褐色 普通	覆土 50% (口径の50%残存)
第205図 5	土師器 坏	8.6	3.2			底部は強いヘラ削りによる平底で、体部は僅かに丸みを帯びて強い角度で立ち上がる。	底部に一方方向からの強いヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、内面に放射状の暗文を施す。	微細な長石を少量 内外面暗褐色および黒褐色 普通	覆土 20% (底径の50%残存)
第205図 6	土師器 椀	16.0	7.6			底部は丸底で、体部は半球形状に深く、口縁部はやや外反ぎみに直立する。口唇部内面に浅い沈線が付く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を微量 内外面暗褐色および黒褐色 普通	カマド脇、床直 50% (体部・底部の40%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第205図 7	土師器 椀	19.0	7.0			底部は丸底で、体部は丸みをもって深身を呈し、口縁部は外反ぎみに強い角度で立ち上がる。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量 外面に黄褐色と黒褐色 内面に褐色 普通	覆土 40% (体部・底部の40%残存)
第205図 8	土師器 椀	[19.6] (9.7)				底部は丸底で、体部は半球形状に深く、口縁部は外反しながら大きく立ち上がる。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位の粗い手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を少量、褐色スコリアを微量 内外面に黄褐色 普通	床直 50% (口径の50%残存)
第205図 9	土師器 小型甕	[15.4] (6.7)				体部は直線的で肩の張りがなく、口縁部は強めに外反する。口唇部は断面三角形を呈する。	口縁部に回転ナデ、内面に横位のヘラ削りとヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を多量、白雲母を微量 内外面橙色 良好	覆土中位 10% (口径の30%残存)
図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
第205図 10	土製品 支脚	21.2	7.9	8.0	(810.0)	円柱状の支脚。ごく粗い手握ね成形で、表面に指頭圧痕が深く残り凹凸が顕著。	微細な長石を微量 内外面に黄褐色 普通	カマド燃焼部 70%	



第206図 第84号住居跡

第84号住居跡〔第206・207図、PL.32・97・98〕

位置 調査区南側 S・T-36・37グリッド、南側の谷に向かって傾斜している標高25.5～26.5mに位置している。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.42m、短軸2.52mの長方形を呈している。東壁がテラス状になっており、居住域は下段となる。下段の長軸は2.86mで、床面積は約7.2㎡である。

主軸方向 N-88° -E。ほぼ東西方向である。

壁 北壁側が外傾する他は、ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で43cmを測る。壁溝は全ての壁で途切れながら巡っており、幅6～18cm、深さ2～4cmを測る。東壁全体はカマドの煙道部を囲むようにテラス状の高まりを有している。床面からの高さは22cm程で、テラス部から確認面までは13cm程の深さである。テラス部は平坦ではなく、住居跡内に向かい傾斜している。

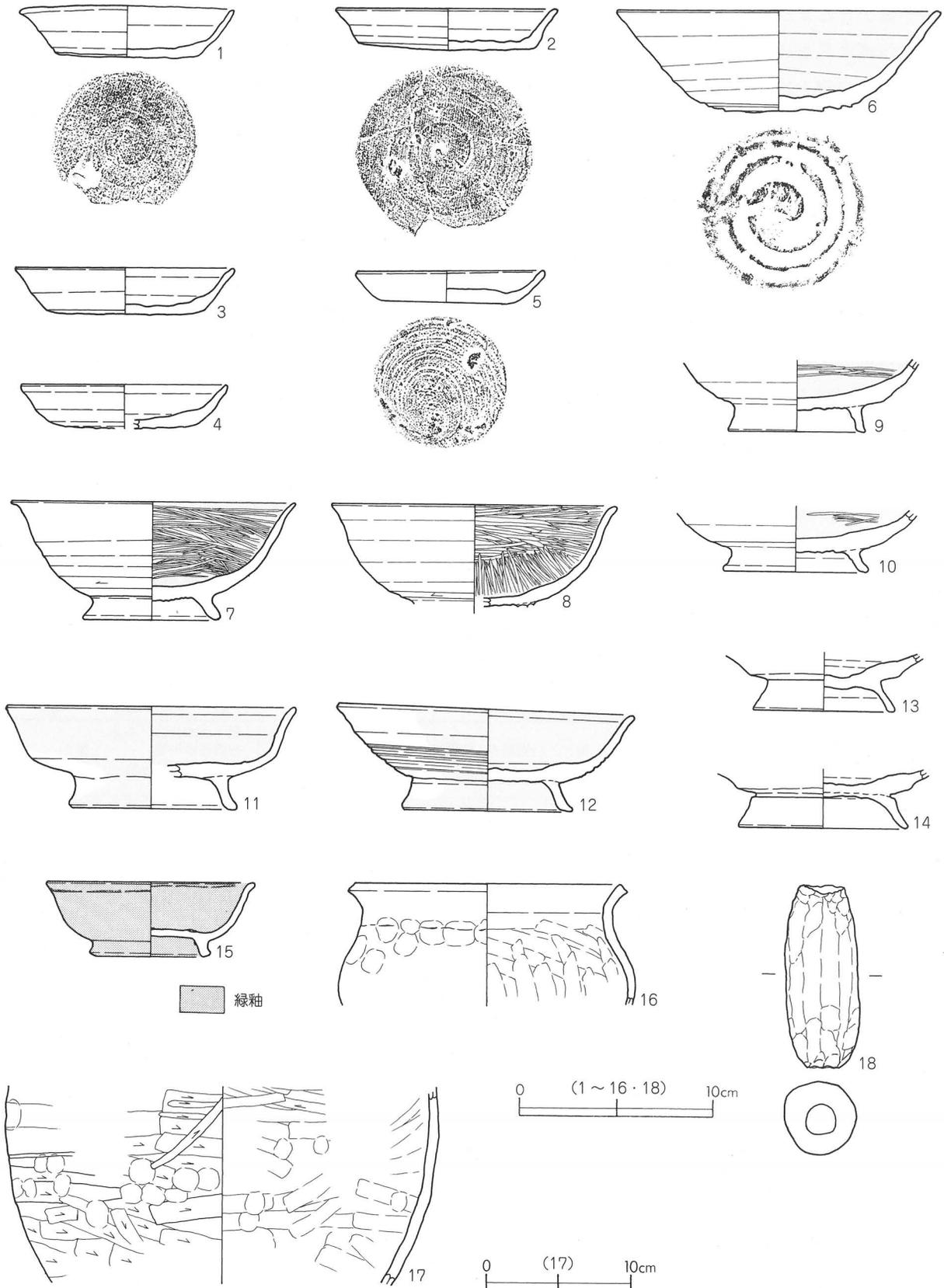
床 やや起伏を有している。カマドの焚き口側に粘土範囲がみられた。

ピット 3基確認され、配置からいずれも主柱穴と思われる。径22～44cm、深さ5～7cmを測り、やや深度が浅い点に注意されよう。入り口はカマドと対をなす西側であろうか。

カマド 東壁のやや南寄りに位置し、燃焼部と煙道部はテラスとした範囲内に収まっている。全長62cmを測り、袖は確認されなかった。燃焼部は深さ6cmでここから奥壁にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。遺物は出土していない。

覆土 5層に分層された。堆積状態から自然堆積と思われる。

遺物 南側の壁溝付近、床面直上より多く出土している。No.1～5は土師器の小皿である。これだけ



第207図 第84号住居跡出土遺物

の小皿がまとまって出土する住居は他にはみられなかった。器形は底面から口縁部にかけて外反するもの、内湾するものとバリエーションがあり、また口径と底径の比も大きく3つのタイプに分けられる。ひとつは口径と底径の差が大きいもの（差3.7cm-No.1）、また口径と底径の差がなく底径が大きいもの（差2.3cm-No.2）、以上2者の中で差が3cm前後のもの（No.3～5）である。No.6は土師器の椀である。無高台で底面はヘラ切り痕により、凸凹がそのまま残されている。No.7～14は土師器の高台付椀である。No.7～10は体部に丸みを持ち、内面は磨きと黒色処理が施されていた。他は体部下半に稜を持つものが多く、前者に比して椀の部分が浅い。No.15は緑釉陶器の高台付椀である。床面直上からの出土であった。全面濃緑色で口縁端部は短く外反し、体部下半は丸みを有して高台部へと続く。内面には三叉トチンの痕跡が残っていた。No.16・17は甕である。いずれも遺存状態が悪い。小皿・高台付椀の割合が高く、甕類は少量であった。また、凶化していないが、南側床面直上から台状の石が出土している（PL.98）。大形で長さ29.5cm、幅27.5cm、高さ19.5cm、重量23.0kgを測る。全体に被熱しており、数箇所面取りされている。上面は比較的平滑で部分的に鉄サビ様の痕跡が認められた。覆土中や床面から鍛造剥片等は出土しておらず、用途不明である。石材は雲母片岩である。

所見 カマド燃焼部手前に広がる粘土範囲はカマドの廃絶に伴い拡散したものであろうか。明確に入り口ピットと判別できるピットは確認されていないが、カマドの位置から西もしくは南側が入り口部と思われる。緑釉陶器の高台付椀は、東濃産・大原2号窯式相当と考えられる。土師器の小皿、内黒高台付椀は良好なセットをなし、10世紀中葉から11世紀前半にかけての標式的な資料として注目される。

第84号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第207図 1	土師器 小皿	口径 10.9 底径 7.2 器高 2.6	体部は浅く大きく開き、口縁部を僅かに外反させる。	底部は回転ヘラ切り後、時計回りの軽いヘラ削りを施す。体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面におい橙色 普通	覆土 70%
第207図 2	土師器 小皿	口径 11.2 底径 8.9 器高 2.1	底径が大きく、体部は浅く開き、半ばで折れて口縁部は外傾する。	底部は回転ヘラ切り後、未調整ないしごく軽いヘラナデ、内底面にクロ口目を残す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面におい普通	覆土 80%
第207図 3	土師器 小皿	口径 [11.2] 底径 [8.1] 器高 (2.4)	底径が大きく、体部は浅く開き、半ばで折れて口縁部は外傾する。	底部は回転ヘラ切り後、一方向からの軽いヘラナデ、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面におい褐色 普通	覆土 50% (口径・底径の50%残存)
第207図 4	土師器 小皿	口径 [10.6] 底径 [7.6] 器高 (2.2)	体部は僅かに丸みを帯びて浅く開き、口縁部は軽く外反する。	底部は回転ヘラ切り後、未調整ないしごく軽いヘラナデ、体部内外面に回転ナデを施す。	径2mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面におい黄橙色 普通	覆土 50% (口径・底径の50%残存)
第207図 5	土師器 小皿	口径 9.7 底径 6.8 器高 1.8	体部は僅かに丸みを帯びてごく浅く開く。内底面は軽く盛り上がる。	底部は回転糸切り後未調整。体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を非常に多量 内外面におい普通(軟質)	床直 完形
第207図 6	土師器 椀	口径 [16.6] 底径 8.2 器高 5.1	底部は無高台でヘラ切り痕で凹凸がある。体部は下位に丸みをもって大きく立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	底部は回転ヘラ切り後未調整。体部の内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 外面におい黄橙色、内面黒色 普通	覆土 40% (底部完存) 内面黒色処理 (希薄)
第207図 7	土師器 高台付椀	口径 [14.5] 高台径 7.0 器高 6.0	高台は基部の径が小さく、やや厚手に作られる。体部は下位に丸みをもって大きく立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	底部は回転ヘラ切り後、高台取り付けに伴う回転ナデを周囲に施す。体部外面に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を少量 外面におい黄橙色、内面黒褐色 良好	床直 60% (口径の50%、底部完存) 内面に黒色処理
第207図 8	土師器 高台付椀	口径 [14.6] 器高 (5.2)	体部は丸みをもって大きく立ち上がり、口縁部は小さく外反する。	体部下位に反時計回りの回転ヘラ削り、体部上位に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 外面橙色、内面黒色 良好	覆土 50% (口径の50%残存) 内面黒色処理
第207図 9	土師器 高台付椀	高台径 [7.0] 器高 (3.5)	高台は基部が小さく、「ハ」字に低く開く。体部下位は丸みをもって強めに立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、高台取り付けに伴う回転ナデを周囲に施す。体部外面に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を少量 外面におい黄橙色、内面黒色 普通	床直 40% (底部完存) 内面黒色処理

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第207図 10	土師器 高台付椀	高台径 [7.4] 器高 (2.9)	高台は外反しながら低めに開く。体部下位は丸みをもって緩やかに立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、高台取り付けに伴う回転ナデを施す。体部下位に回転ヘラ削り、内面に磨きを施す。	径1mmの長石・石英を少量、白雲母を微量 外面にぶい黄橙色、内面黒色 普通	覆土 30% (高台径の30%残存) 内面黒色処理
第207図 11	土師器 高台付椀	口径 [14.9] 高台径 8.6 器高 5.2	高台はやや高めで端部を外反させる。体部は横方向に張り出し、角度を変えて強く立ち上がり、口縁部は小さく外反する。	底部は回転ヘラ切り後、高台取り付けに伴う回転ナデを施す。体部内外面に回転ナデ、内底面に縦横方向の指頭ナデを施す。	微細な長石をごく微量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土 70% (口径の60%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第207図 12	土師器 高台付椀	口径 15.3 高台径 8.8 器高 5.0	高台はやや高めで端部を外反させる。体部は丸みをもって緩やかに立ち上がり、口縁部を外反させる。内底部を僅かに窪ませる。	底部は回転ヘラ切り後、高台取り付けに伴う回転ナデを施す。体部下位に五条の回転ヘラ掻きの沈線が付く。体部はない外面に回転ナデ、内底面に縦横方向の指頭ナデを施す。	微細な長石をごく微量 内外面にぶい橙色、部分的に黒褐色 普通	床直 70% (口径の60%、高台径の70%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第207図 13	土師器 高台付椀	高台径 [7.2] 器高 (2.7)	高台の基部は径が小さく、高台は直線的に「ハ」字に開く。体部下位は丸みを帯びて横方向に張り出す。内底面を僅かに窪ませる。	高台は坏状に成形したものを逆さに貼り付けて作る。体部内外面および内底面にも回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を多量 内外面にぶい黄橙色 普通	覆土上位 40% (高台径の60%残存)
第207図 14	土師器 高台付椀	高台径 [8.6] 器高 (2.7)	高台の基部は径が小さく、高台は直線的に「ハ」字に開く。体部下位は横方向に大きく張り出す。内底面を僅かに窪ませる。	高台は坏状に成形したものを逆さに貼り付けて作る。体部内外面および内底面にも回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面にぶい褐色 普通	覆土 30% (高台径の30%残存)
第207図 15	緑釉陶器 高台付椀	口径 [10.6] 高台径 6.1 器高 3.8	小型の椀。高台は小さく「ハ」字に開く。体部は下位に強い丸みをもち、口縁部は外反する。	内外面に回転ナデを施し、滑らかに整える。内底面に三又トチン痕の微突起が2点残る。内外面および高台内面に濃緑色の緑釉が掛り、口縁部に厚く溜まる。	ごく緻密な灰白色の胎土 内外面濃緑色、生地は灰白色 良好	床直 60% (高台径の60%残存) 東濃産・大原2号窯式相当
第207図 16	土師器 甕	口径 [14.2] 器高 (6.2)	体部上位から中位にかけて最大径をもち、口縁部は「く」字に屈曲して小さく開く。口唇部は平坦に切り揃えられる。	体部外面に指頭による軽いナデ、口縁部は回転ナデ、内面は横位のヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英、白雲母を中量 内外面にぶい赤褐色 普通	床直 20% (口径の30%残存)
第207図 17	土師器 甕	器高 (13.5)	やや大型の甕。体部は丸みを帯びて強めに立ち上がる。	外面に横位のヘラ削りと指頭ナデ、内面に横位のヘラと指頭によるナデを施す。	径1mmの長石・石英を微量、白雲母を多量 内外面にぶい橙色 不良	覆土 10% (体部径の25%残存)

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第207図 18	土製品 土錘	8.9	3.7	3.6	113.0	円筒状の土錘。孔の径は1.6cm。手捏ね成形後、長軸方向に軽いヘラナデを施す。	微細な長石・石英を少量、白雲母中量 にぶい橙色 普通	覆土中位 ほぼ完形

第85号住居跡〔第208～211図、PL.32・98・99〕

位置 調査区東壁寄り2C・2D-20・21グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

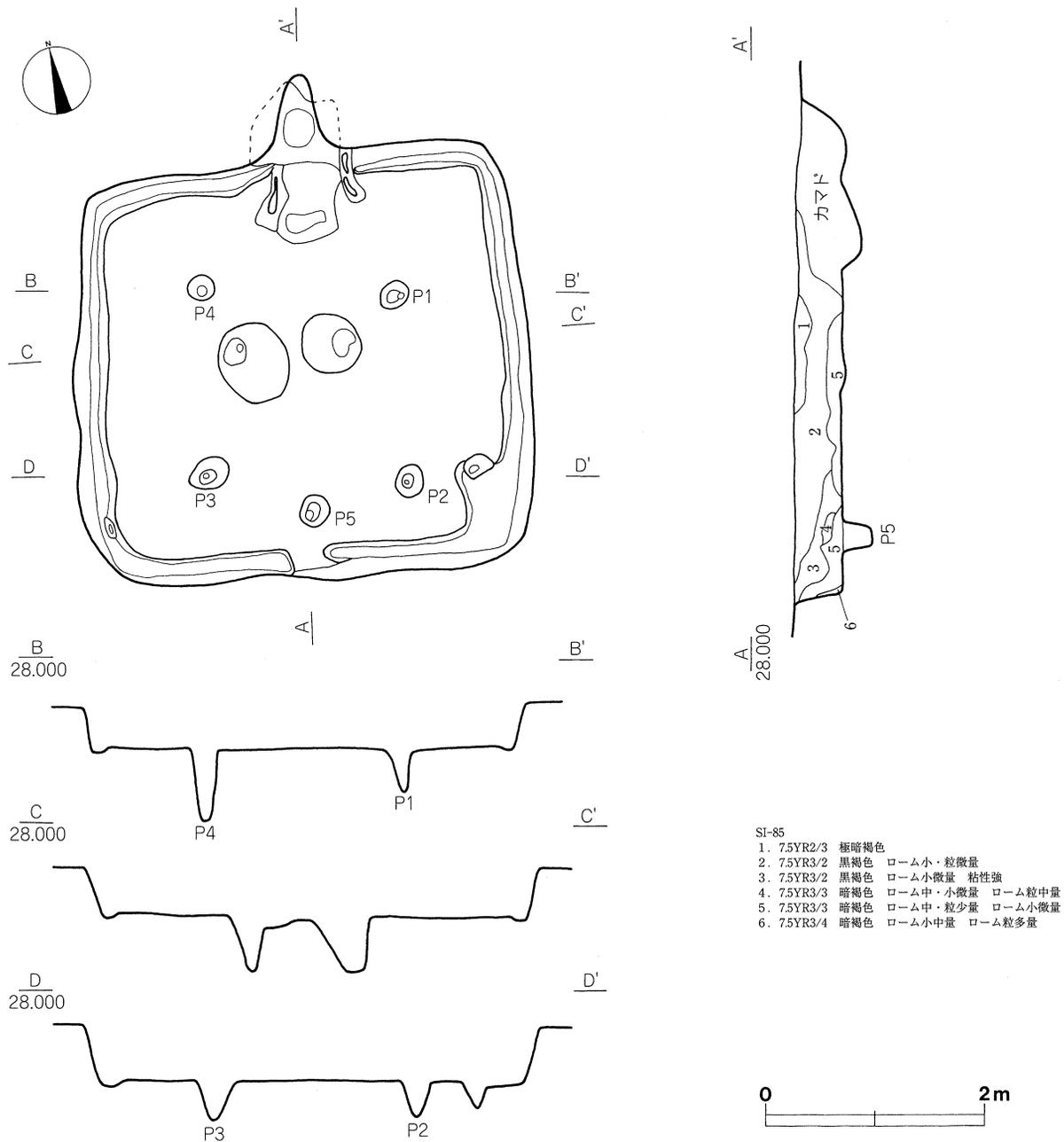
規模 長軸3.56m、短軸3.3mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約11.7㎡である。

主軸方向 N-10° -E

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、確認面からの深さは最深部で33cmを測る。壁溝は南壁の中央を除き全周している。ここはカマドと対をなす場所で、明確な意図を有して壁溝を途切れさせていると考えられる。壁溝の幅は12～20cmで南東隅のみ幅が広がっており、深さは2～7cmを測る。

床 概ね平坦である。

ピット 8基確認された。規模と配置からP1～4は支柱穴、P5は入り口施設に伴うピットと考えられる。支柱穴は径24～38cm、深さ35～63cmで深さにばらつきはあるが、径は比較的近似している。P5は径28cm、深さ25cmを測る。また、床面中央に2基の円形ピットがみられた。径54・72cmと大きく、深さも52・58cmと支柱穴並みの規模を測る。しかしながら居住域の中心であり、配置から柱穴もしくは

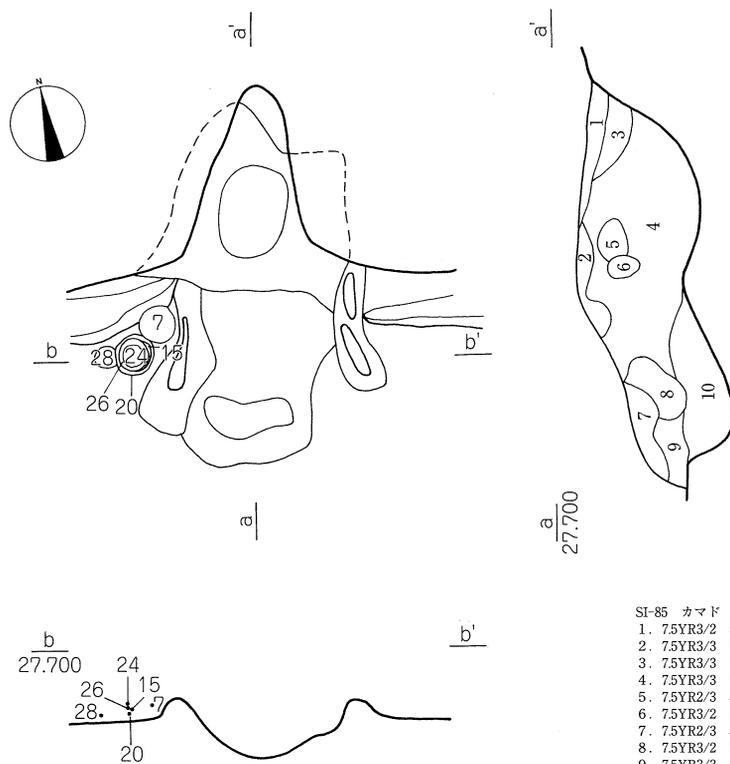
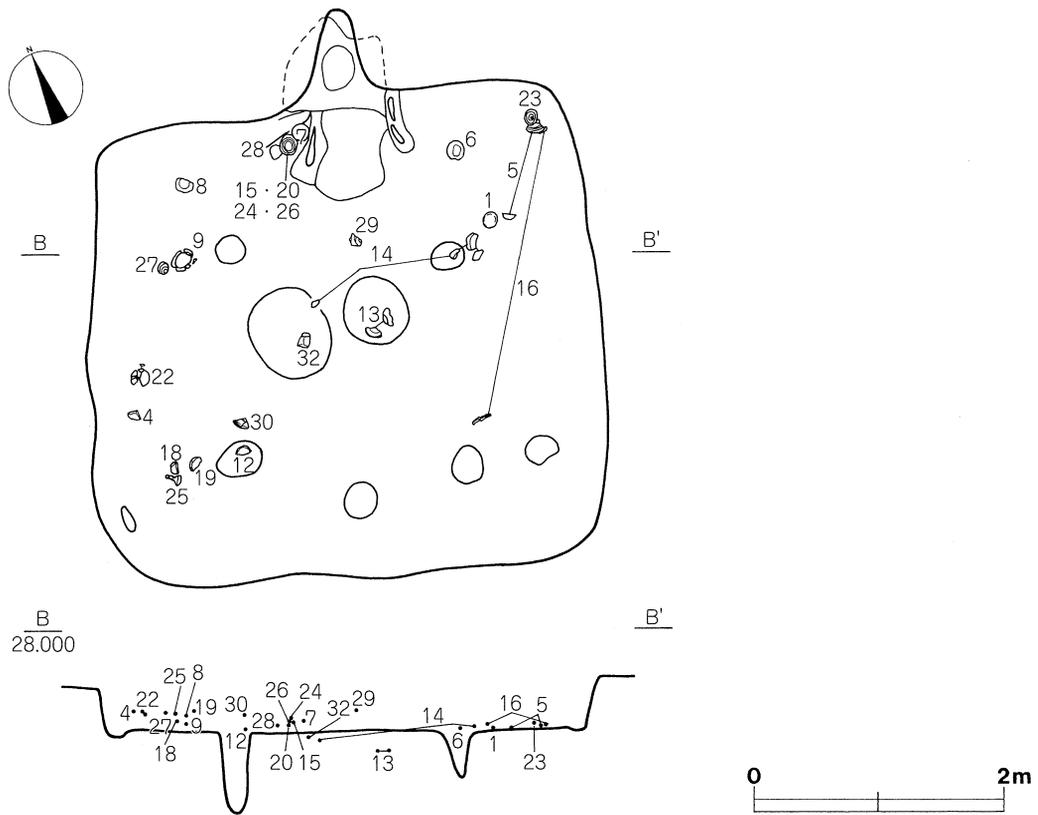


第208図 第85号住居跡

貯蔵穴とは考えにくい。性格不明のピットである。

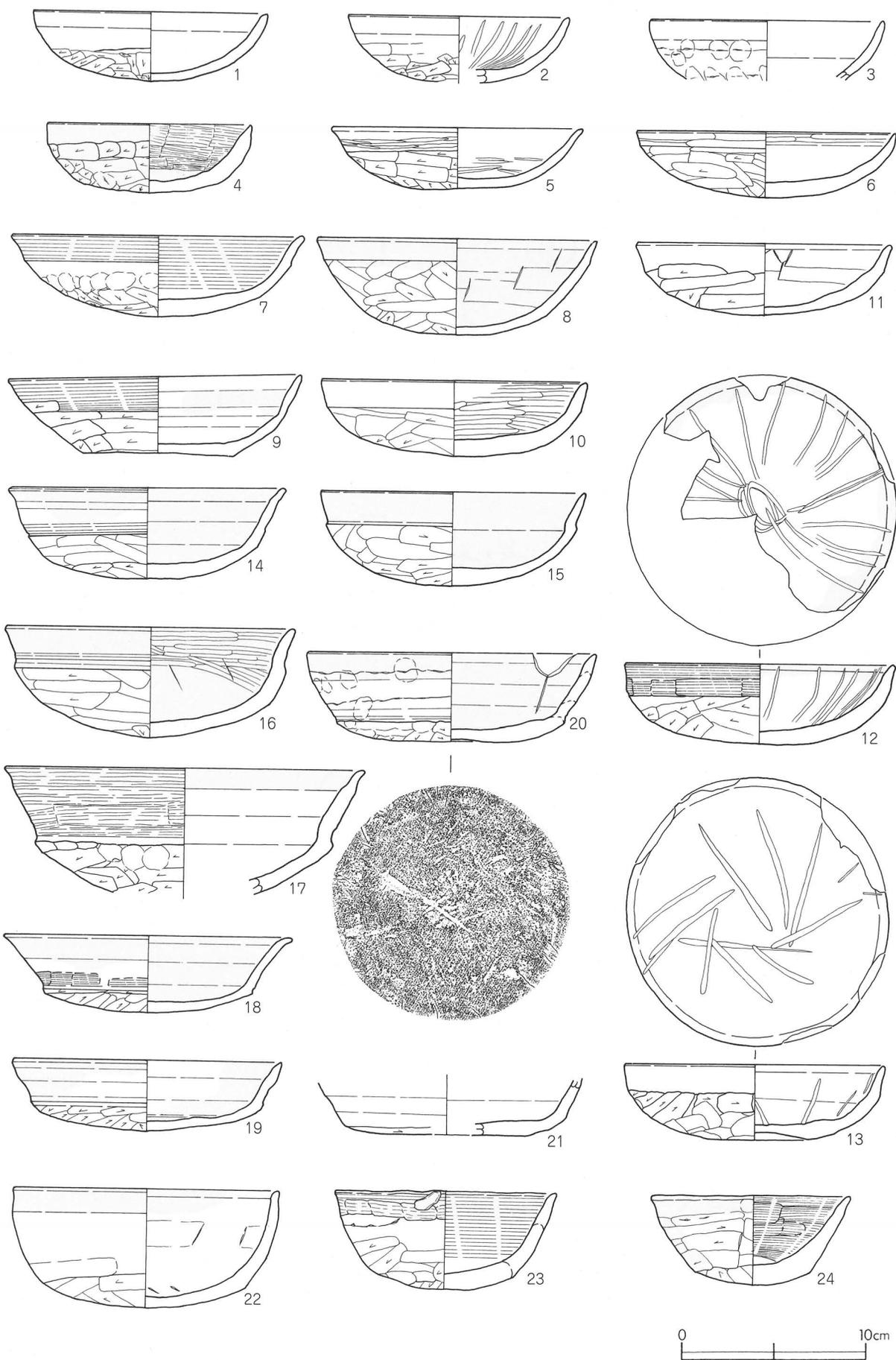
カマド 北壁のほぼ中央に位置している。壁下場より90cm程壁外に掘り出して煙道部を構築している。全長1.52m、焚き口幅64cm、燃焼部の深さは17cmを測る。燃焼部から奥壁にかけては段を有しながら外傾して立ち上がり、両袖は「ハ」字状を呈している。煙道部にかけては両側がオーバーハングして膨らんだ状態であった。燃焼部内からは遺物は出土していないが、左袖脇より坏や椀等が重なり合って、または単独で全て接した状態で出土していた。特にNo.20・26・24はこの順序で床面より重なっており、使用時を彷彿とさせる出土状態であった。

覆土 6層に分層された。堆積状態から自然堆積と思われる。

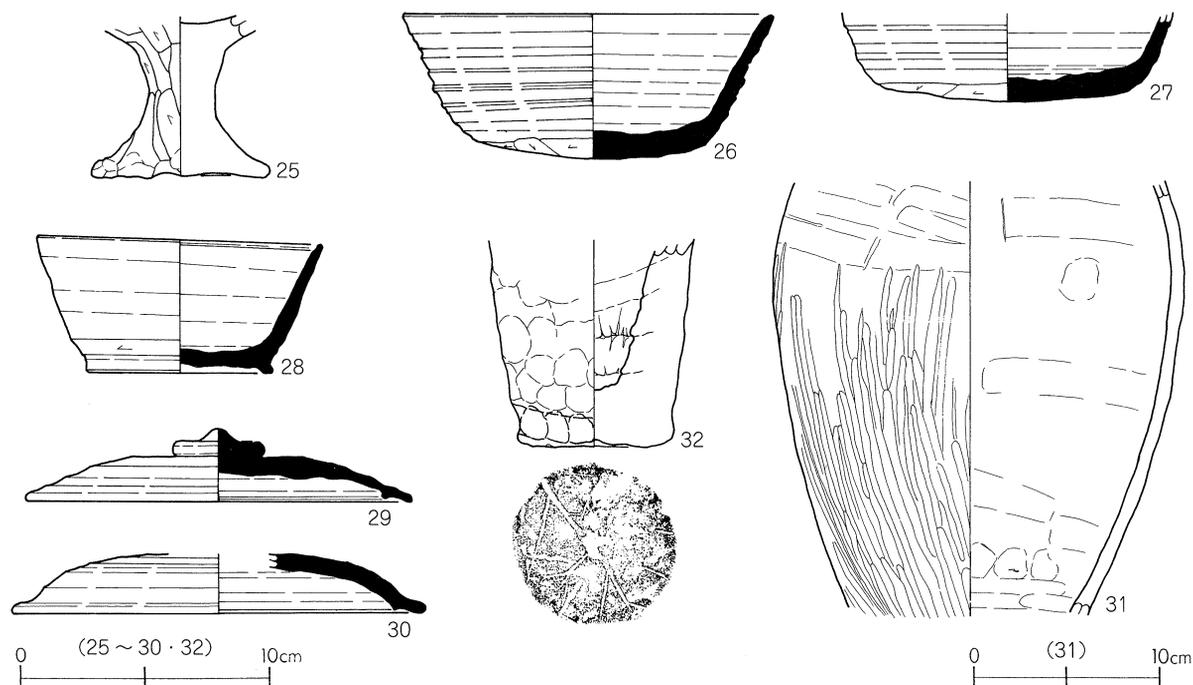


- SI-85 カマド
- 1. 7.5YR3/2 黒褐色 しまり強
 - 2. 7.5YR3/3 暗褐色 粘性・しまり強
 - 3. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小微量 ローム粒中量 粘性・しまり強
 - 4. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒少量 粘性・しまり強
 - 5. 7.5YR2/3 極暗褐色 ローム粒微量
 - 6. 7.5YR3/2 黒褐色
 - 7. 7.5YR2/3 極暗褐色 焼土粒・ローム粒微量
 - 8. 7.5YR3/2 黒褐色 焼土中少量 ローム粒微量 粘性強
 - 9. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒微量 粘性強
 - 10. 7.5YR3/2 黒褐色 焼土中微量 ローム小・粒少量 粘性強

第209図 第85号住居跡遺物出土状況・カマド遺物出土状況



第210图 第85号住居跡出土遺物 (1)



第211図 第85号住居跡出土遺物（2）

遺物 カマド袖脇の他にも床面の広範囲にわたり、床面直上から覆土中位で多くの遺物が出土している。No.1～21は土師器の坏である。形態は様々で口縁部に明確な稜を持たずに内湾するもの（No.1～3）、口縁部が短く立ち上がり、稜を境に体部が内湾するもの（No.4・6～8・10～13）、口縁部が外反し、強く屈曲して体部は内湾するもの（No.14～16）、体部より口縁部の器高が高く、体部・口縁部共にほぼ直線的となるもの（No.17～21）、に大別される。また、暗文のある坏が3点出土しており、No.2は放射状、No.12は内底面に同心円状の文様を描き、口縁部に向かっては放射状に描かれていた。No.13は粗い斜位の暗文であった。描き方をみると円形の器形を無視するように直線的に3条の線が先行しており、次いで斜方向に数条単位で放射状に描かれていることがわかる。No.20は外面底面にヘラ記号、口縁部は打ち欠かれたような痕跡が残り、この内面に縦位の刻線がみられた。No.22～24は土師器の椀である。No.25は粗製のミニチュアの高坏でヘラ削り痕・指頭痕が明瞭に残っている。No.26・27は須恵器の坏である。およそ口径は13～15cmの範疇に収まるもので底部はやや丸底気味となっている。No.28は若干傾いた様相の高台付坏で、高台高は低い。No.29・30は蓋である。No.29は体部が直線的で、断面台形の小さなかえりが付いている。No.30は体部に丸み、口縁部にかけては外反しており、断面三角形の小さなかえりが付いている。坏類は8割方土師器であった。No.31は土師器の甕で口縁部と底部が欠損している。No.32の壺底部としたものは壺とするには整形痕が著しく残っており、あるいは土製支脚の上部の可能性も考えられる。

所見 須恵器の坏・蓋の形態は新治窯跡群の永井寄井窯・一丁田窯出土のものと非常に近似しており、その時期は8世紀第1四半期に相当すると考えられている。また、土師器の坏類も8世紀前葉の範疇に収まるもので、遺棄遺物が多いことから住居の時期も概ね同様と判断した。

第85号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第210図 1	土師器 坏	口径 器高 12.5 3.7	やや小型の坏。底部は丸底で、体部から口縁部まで連続して円弧を描く。	底部にはほぼ一方からのヘラ削り、体部上位は未調整、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面におい橙色 普通	床直 完形
第210図 2	土師器 坏	口径 器高 [11.8] (3.5)	やや小型の坏。底部は丸底で、体部から口縁部まで連続して円弧を描く。	底部に多方向からのヘラ削り、体部は上位は未調整、口縁部に回転ナデ、内面に放射状の暗文を施す。	微細な長石を少量 内外面におい橙色 普通	覆土 40% (口径の 40%残存)
第210図 3	土師器 坏	口径 器高 12.4 3.2	やや小型の坏。体部は口縁部まで連続して円弧を描く。	体部外面は未調整で、下位に指頭圧痕を多く付ける。口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面橙色 普通	覆土 60% (口径の 60%残存)
第210図 4	土師器 坏	口径 器高 [11.0] 3.7	小型の坏。全体的にややいびつで器壁が厚い。底部は丸底で、体部と口縁部の境に器面調整の違いによる微かな稜が付く。	底部に多方向からの粗いヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部に断続的な回転ヘラナデを施す。	微細な長石を微量 内外面黒褐色 普通	覆土中位 40% (口径の 40%残存) 内外面黒色処理
第210図 5	土師器 坏	口径 器高 13.4 3.3	底部は丸底で、体部は浅く開き、口縁部まで連続して円弧を描く。口唇部を小さく外反させる。	底部にはほぼ一方からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデと横位の磨きを施す。	微細な長石を多量 内外面明赤褐色 普通	床直 95%
第210図 6	土師器 坏	口径 器高 13.8 3.5	底部は丸底で、体部は浅く開き、口縁部まで連続して円弧を描く。口唇部を小さく外反させる。	底部に多方向からのヘラ削りと磨き、体部に横位のヘラ削りと磨き、口縁部および内面に回転ナデと横位の磨きを施す。	微細な長石を中量 内外面黄褐色 普通	床直 ほぼ完形 (口 縁部に僅かな 欠損)
第210図 7	土師器 坏	口径 器高 15.6 4.3	底部は丸底で、体部は浅く開き、口縁部との境に軽い稜をもつ。口縁部は外反しながら大きく開く。	底部に多方向からのヘラ削り、その周縁を反時計回りの手持ちヘラ削り、体部上位に指頭圧痕、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を中量 内外面橙色 良好	カマド袖の脇床直 ほぼ完形 口縁部黒色処理 (部分的)
第210図 8	土師器 坏	口径 器高 15.0 5.1	底部は丸底で、体部はやや深めで円弧を描き、口縁部との境に軽い稜をもつ。口縁部は僅かに外反する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面におい褐色 普通	覆土中位 50% (口径の 50%残存) 内面・外面口 縁部黒色処理
第210図 9	土師器 坏	口径 底径 器高 15.7 8.0 4.4	底部は平底で、体部は口縁部まで連続して緩い円弧を描く。口縁部の内側は体部との境に段をもって肥厚する。	底部に一方からの強いヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面橙色 良好	覆土下位 95% 内面黒色処理 (部分的)
第210図 10	土師器 坏	口径 器高 14.2 4.0	底部は丸底で、体部は浅く開き、口縁部との境に器面調整の違いによる軽い稜が付く。口縁部は直線的に強めの角度で立ち上がる。器壁が厚く重い。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面浅黄褐色 普通	覆土 70%
第210図 11	土師器 坏	口径 器高 13.6 3.8	底部は丸底で、体部は浅く開き、口縁部との境に器面調整の違いによる軽い稜が付く。口縁部は直線的に強めの角度で立ち上がる。器壁が厚く重い。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に横位の磨きを施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面浅黄褐色 普通	覆土 ほぼ完形
第210図 12	土師器 坏	口径 器高 14.4 4.2	底部は丸底で、体部は浅く開き口縁部との境に軽い稜をもつ。口縁部は強い角度で立ち上がる。器壁が厚く重い。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部に回転ナデ、内面に放射状、内底面に螺旋状の暗文を施す。	微細な長石・石英を 少量 内外面におい橙色 普通	ビット3内50% (口径の50%残存) 口縁部黒色処理
第210図 13	土師器 坏	口径 器高 13.8 4.0	底部は平坦化した丸底。体部は浅く開き、口縁部との境に軽い稜をもつ。口縁部は直立し、口唇部が小さく外反する。器壁が厚く重い。	底部に多方向からの粗いヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデ、内面に放射状の粗い暗文を施す。	微細な長石を少量 内外面におい橙色 普通	中央部ビット 内 95%
第210図 14	土師器 坏	口径 器高 14.8 4.8	底部は丸底で、体部はやや浅めに開き、口縁部との境に小さな段をもつ。口縁部は外反ぎみに大きく立ち上がり、器高の半分を占める。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面におい黄褐色 普通	床直および中央 部ビット内 90% 口縁部付近黒 色処理
第210図 15	土師器 坏	口径 器高 14.1 5.0	底部は丸底で、体部と口縁部の境に小さな段をもつ。口縁部は中央に膨らみをもって直線的に大きく立ち上がり、器高の半分を占める。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部はおよび内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面におい橙色 普通	カマド袖の脇、床直 90% 口縁部付近黒 色処理
第210図 16	土師器 坏	口径 器高 15.5 5.8	底部は丸底で、体部は深く口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反ぎみに強く立ち上がり、器高の半分を占める。	底部に多方向からのヘラ削り、体部に横位の手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデと横位の磨きを施す。	微細な長石を少量 内外面におい褐色、 暗褐色 普通	床直～覆土下位 80% 口縁部黒色処理
第210図 17	土師器 坏	口径 器高 [19.2] (6.6)	大型の坏。体部は深く口縁部との境に段をもつ。口縁部は中央に膨らみをもって強い角度で立ち上がり、器高の半分を占める。口唇部を小さく外反させる。	体部に反時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量、 骨針をごく微量 内外面黄褐色 普通	覆土 20% (体部径 の30%残存) 口縁部黒色処理
第210図 18	土師器 坏	口径 器高 15.2 4.1	底部と体部が一体化して緩い丸底を形成する。口縁部は体部との境に沈線を伴う小さな段をもち、外反ぎみに強く立ち上がり、器高の7割を占める。	底部に一方からのヘラ削り、周縁に時計回りの手持ちヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面におい橙色 良好	覆土下位 50% (口径の 50%残存) 口縁部付近黒 色処理

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第210図 19	土師器 坏	口径 [14.4] 器高 3.8	底部と体部が一体化してごく緩い丸底を形成する。口縁部は体部との境に小さな段をもち、強い角度で立ち上がり、器高の6~7割を占める。	底部および周縁に多方向からのヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面にぶい黄褐色 普通	覆土中位 60% (口径の 50%残存) 内外面黒色処理 (部分的)
第210図 20	土師器 坏	口径 15.4 器高 4.7	底部と体部が一体化してごく緩い丸底を形成する。口縁部は体部との境に小さな段をもち、強い角度で立ち上がり、器高の7~8割を占める。	底部に多方向からのヘラ削り、周縁は未調整、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、 褐色スコリアを中量 外面明褐色、内面 黒褐色 普通 (やや軟質)	カマド裾の脇、 他の坏と重ね置 かれる。完形 底部に焼成前の ヘラ記号、体部 内面に焼成後の 刻線 外面口縁部・ 内面黒色処理
第210図 21	土師器 坏	底径 11.0 器高 (3.1)	底部と体部は一体化して平底を形成する。口縁部は体部との境に緩やかな段をもち、強い角度で立ち上がり、器高の8割近くを占める。	底部に一方方向からのヘラ削り、周縁は未調整、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面明赤褐色 普通	覆土 60% (口径の 60%残存)
第210図 22	土師器 椀	口径 14.0 器高 6.3	底部は緩やかな丸底で、体部は底部との境に微かな稜をもって強い角度で立ち上がり、口縁部は直立する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部は未調整ないし軽いナデ、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面にぶい橙色 普通	覆土中位 70% (口径の50 %、底部完存) 口縁部黒色処理 (部分的)
第210図 23	土師器 椀	口径 11.8 器高 5.3	やや小型の椀で、器壁が厚く重い。底部は丸底で、体部は稜をもって底部から強い角度で立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部下位に横位の手持ちヘラ削り、体部上位は未調整、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 内外面橙色 良好	ほぼ床直 完形 口縁部に歪み 外面口縁部・ 内面黒色処理
第210図 24	土師器 椀	口径 10.5 器高 4.8	やや小型の椀で、器壁が厚く重い。底部は丸底で、体部は稜をもって底部から強い角度で立ち上がる。	底部に一方方向からのヘラ削り、体部に横位のヘラ削り、口縁部および内面に回転ナデを施す。	微細な長石を微量 外面にぶい橙色、内 面橙色 良好	カマド袖の脇、 他の坏に重ね置 かれる 95% 内外面黒色処理 (部分的)
第211図 25	土師器 高坏	裾部径 7.1 器高 (6.1)	粗製のミニチュア高坏。脚部および裾部は中実で、坏部は横に大きく開く。	手捏ね成形後、脚部に縦位のヘラ削りを施す。裾部に指頭圧痕が深く残り、底面に粗い指頭ナデを施す。	ごく微細な長石を微量 内外面にぶい橙色 良好	覆土中位 50% (脚部以下 完存)
第211図 26	須恵器 坏	口径 [14.7] 底径 9.2 器高 5.7	底部は丸底で、体部との境に微かな稜が付く。体部は強い角度で立ち上がり、深身を呈する。	底部に多方向からのヘラ削り、体部外面に強いロクロ目、口縁部および内面に回転ナデを施す。	径1~2mmの長石・ 石英を多量 内外面灰色 良好	カマド袖の脇 に重ね置き 90%
第211図 27	須恵器 坏	底径 9.6 器高 (3.4)	底部は丸底で、体部との境に微かな稜が付く。体部下位に丸みをもち、上位は強い角度で立ち上がる。	底部に多方向、周縁に反時計回りのヘラ削り、その後全面的に一方方向からのヘラナデを行なう。体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 中量、白雲母を少量 内外面黄灰色 普通	覆土中位 30% (底径の 50%残存) 底部に焼成前のヘ ラ記号「×」か?
第211図 28	須恵器 高台付坏	口径 11.3 高台径 7.4 器高 5.4	高台はごく小さな逆台形を呈し、体部は強い角度で直線的に立ち上がり、深身を呈する。口唇部内面にごく浅い沈線が付く。	底部は回転ヘラ切り後、反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英を 多量 内外面灰色 普通	カマド袖の脇 床直 完形
第211図 29	須恵器 蓋	口径 [15.2] 器高 2.9 つまみ径 3.6	体部は浅く、僅かに丸みを帯びて大きく開く。口縁部内側に断面台形の小さななかえりが付く。つまみは径の大きな偏平擬宝珠状を呈する。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1mmの長石・石英、 白雲母を微量 内外面灰白色 普通 (やや軟質)	覆土中位 25% (体部の 25%残存)
第211図 30	須恵器 蓋	口径 [16.2] 器高 (2.4)	体部は浅く、丸みを帯びて大きく開き、口縁部は外反する。口縁部内側に断面三角形の小さななかえりが付く。	体部上位に反時計回りの回転ヘラ削り、体部内外面に回転ナデを施す。	径1~2mmの長石・ 石英を多量 内外面灰色 良好	覆土中位 20% (口径の 25%残存)
第211図 31	土師器 甕	器高 (21.8)	体部はやや細めで、上位に最大径をもち、下半は長く伸びる。	体部外面の中位以下に縦位の磨き、上位に横位のヘラナデ、内面に横位の軽いヘラナデを施す。	径1mmの長石・石英を 多量、白雲母を中量 内外面灰褐色 普通	覆土 30% (体部径 の60%残存)
第211図 32	土師器 壺底部?	底径 [6.1] 器高 (6.8)	器壁は非常に厚く、形態は細長く伸びて粘土柱を思わせる。	厚い粘土紐を巻き上げて指頭で成形したもの。外面に指頭圧痕、内面に横位の指頭ナデを施す。	微細な長石を少量 内外面明赤褐色 不良	中央部ピット内 20%程度か(底 部完存) 底部に木葉痕

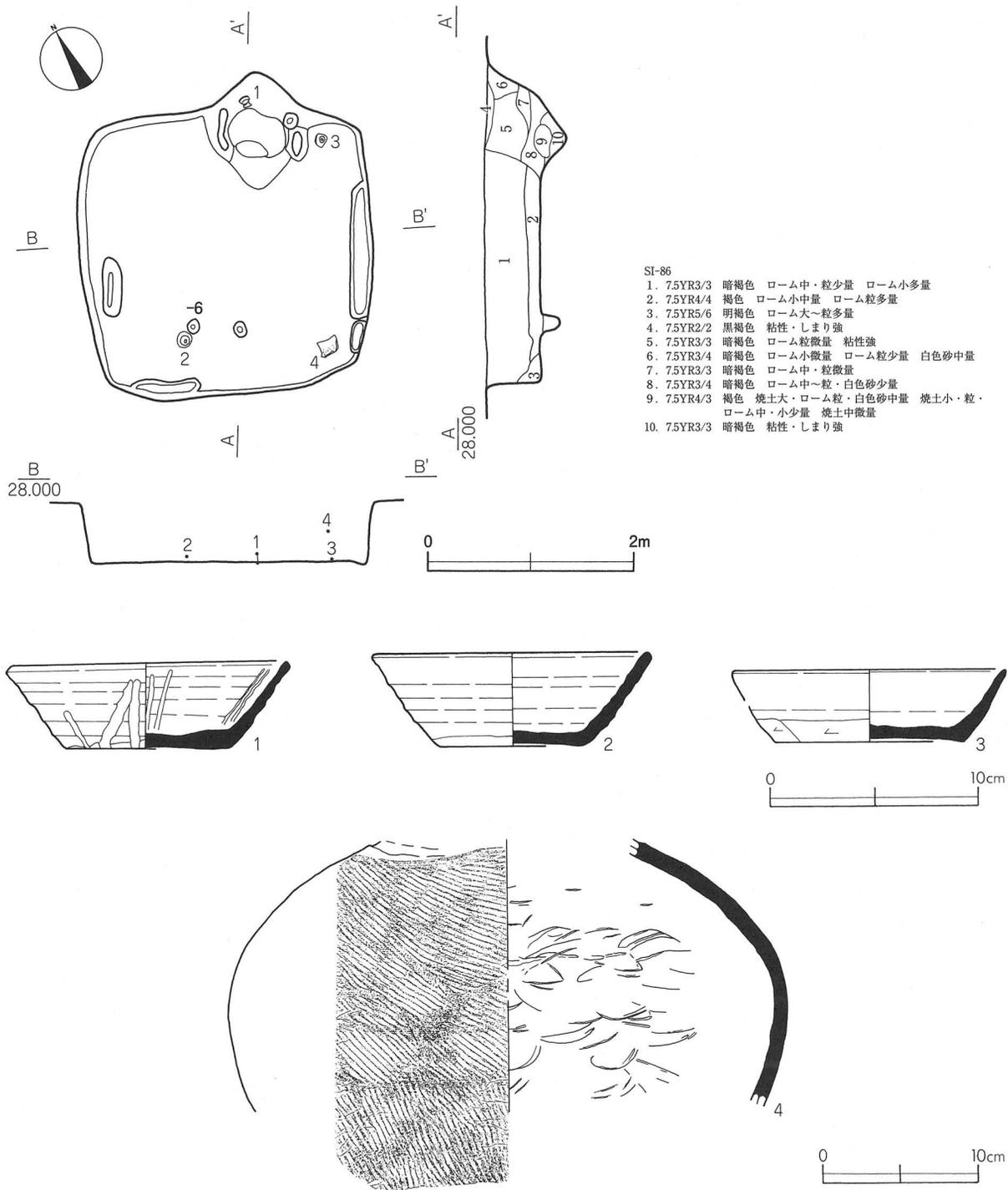
第86号住居跡 [第212図、PL.32・99]

位置 調査区東壁寄り2C-20・21グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸2.6m、短軸2.58mの正方形を呈し、床面積は約6.7㎡である。

主軸方向 N-20° - E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で58cmを測る。壁溝は東側と南側に部分的にみられ、幅10~16cm、深さ3~5cmを測る。また西側では壁面から離れて短い溝状のピットがみられた。



第212図 第86号住居跡・出土遺物

壁体から離れているが間仕切りとする程ではなく、壁溝と考えて障りないと思われる。

床 ほぼ平坦である。

ピット カマドと対をなす南壁付近のほぼ中央に2基確認された。いずれも円形を呈し、径12・16cm、深さ6・17cmを測る。深度に差異はあるが、径は近似している。2基合わせて入り口施設に伴うピットとなろうか。

カマド 北壁やや東寄りに位置し、壁下場より48cm程掘り込んで煙道部を構築している。全長1.1m、焚き口幅50cm、燃烧部の深さは21cmを測る。奥壁にかけては外傾して立ち上がり、遺物は須恵器の坏が

奥壁に貼りつくように、また、右袖脇からも出土している。

覆土 10層に分層された。第4～10層はカマドに関連した堆積である。カマドを廃絶した後に埋め戻しを行なったと思われる。

遺物 全体に出土遺物は少なく、須恵器のみの出土であった。須恵器の甕が覆土中位から出土している他は、床面直上からの出土である。No.1～3は須恵器の坏である。No.1・2は底部から直線的に外傾しており、No.1は内外面に火襷がみられた。No.3は底部直上にヘラ削りが施されており、やや体部が膨らんでいる。No.4は大型の須恵器甕で、外面は斜位の平行線の叩き目、内面は円弧状の当て具痕が明瞭に観察できた。

所見 底径の大きな坏の存在から、遺物は8世紀前半頃と考えられ、出土状況から住居の時期も大差ないと考えられる。

第86号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第212図 1	須恵器 坏	口径 13.4 底径 7.7 器高 4.0	体部は僅かに外傾気味に立ち上がる。ロクロ目がきつく、稜を生じる。	体部内外面に明確に稜を持つ横ナデ。内底面回転ナデ。底面回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	長石・雲母粉粒微量 内外面オリープ灰色 硬質	覆土下位 80% 内外面に火襷痕
第212図 2	須恵器 坏	口径 13.2 底径 6.8 器高 4.6	体部は僅かに直立気味に立ち上がる。底面は中心寄りに僅かに窪む。	体部明確に稜を持つ横ナデ。内底面回転ナデ。底面回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	雲母・長石粉粒少量 内外面明オリープ灰色 普通（やや軟質）	覆土下位 95% 外面に煤状の付着物
第212図 3	須恵器 坏	口径 13.0 底径 8.8 器高 3.6	底部から短く直線的に立ちあがる。外底面は中心寄りに窪む。	外底面底部ヘラ切り後にヘラ削り。体部外面横ナデ、底部寄りにはヘラ削り調整。内面回転ナデ。	雲母・長石少量 内外面灰白色 普通（やや軟質）	床直 65%
第212図 4	須恵器 甕	器高 (17.3)	最大径を胴部上位にもつ、球状の体部。	体部外面条線叩き。頸部ナデ。体部内面は弧状の当て具痕。	長石・石英粒少量 内外面灰色 硬質	覆土上位 25%

第89号住居跡〔第213図、PL.34・100〕

位置 調査区南側の際O・P-36・37グリッド、南側に傾斜する斜面中の標高24.0～24.5m間に位置している。本遺跡の中では最も標高が低く、また他の遺構と重複のない単独の住居跡である。

規模 長軸3.26m、短軸3.08mのやや横長の正方形を呈し、床面積は約10.0㎡を測る。

主軸方向 N-89°-E。主軸は東西方向である。

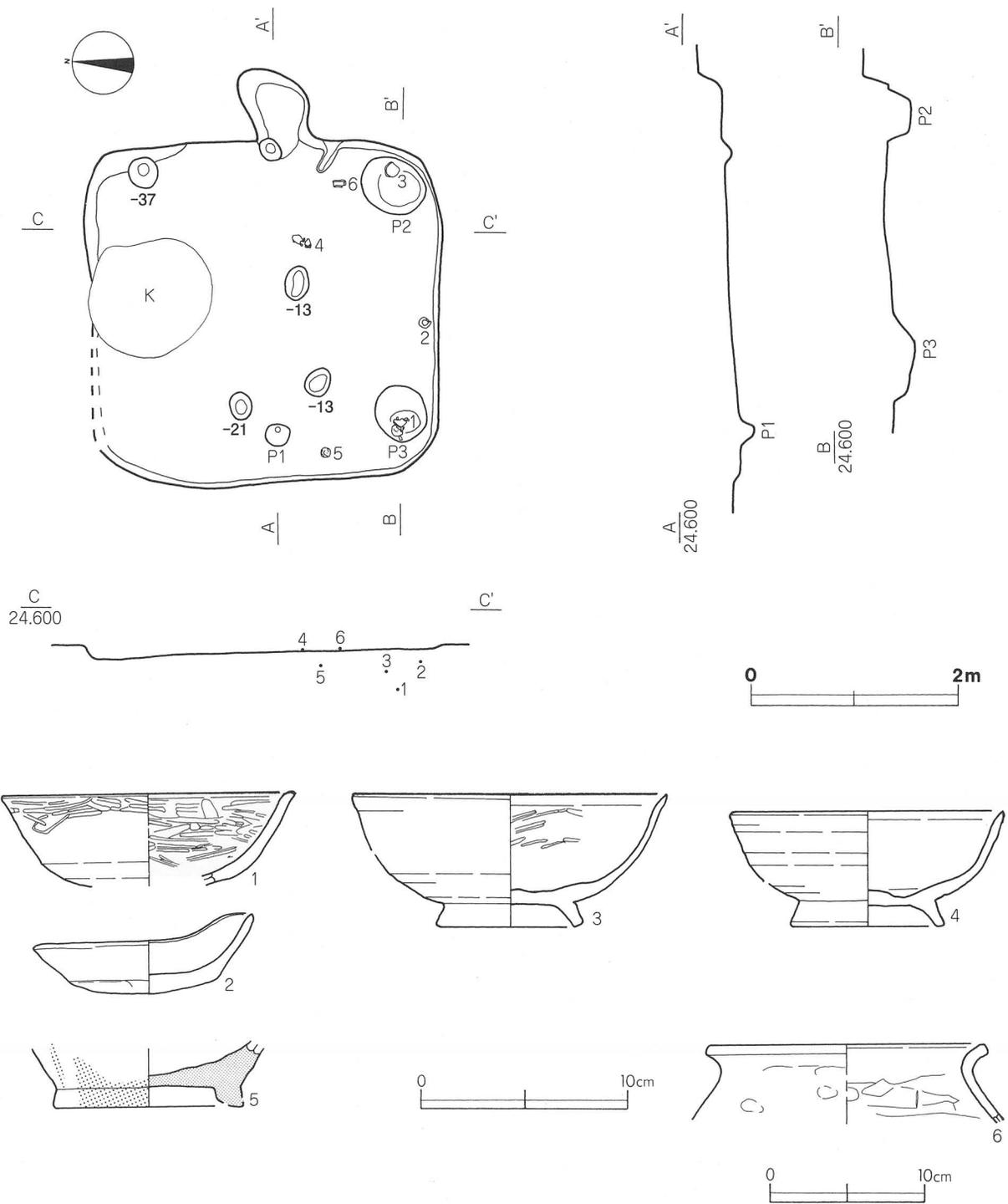
壁 外傾気味に立ち上がり、確認面からの深さは最深部で42cmを測る。攪乱により北壁の一部は壊されている。壁溝は確認されていない。

床 南から北側、東から西側にかけて緩やかに傾斜している。北壁側で攪乱により大きく深く壊されている。

ピット 7基確認された。柱穴は不明である。カマドと対となるP1は入り口施設に伴うピットの可能性がある。また配置からP2は貯蔵穴と考えられるが、P3も同様の性格を有する可能性がある。貯蔵穴としたピットは径54・64cm、深さ22・25cmを測り、ともに覆土下位より遺物が出土している。

カマド 東壁ほぼ中央に位置し、壁下場より80cm程壁外に掘り出して燃焼部と煙道部を構築している。全長86cm、左袖は遺存しておらず、燃焼部は床面とほぼ同じ高さである。右袖は住居壁とカマド掘り出し部の境ではなく、15cm程離れた南側に作られていた。カマド付近より遺物は出土していない。

遺物 出土遺物は少ないがNo.2・4～6は床面直上、他はP2・3の底面もしくは覆土下位から出土している。No.1・3・4は土師器の高台付椀である。体部はいずれも丸みを帯び、口縁端部が短く外反している。高台は「ハ」字に開き、接地面は高台内径のみである。No.2は土師器の小皿で焼成時に



第213図 第89号住居跡・出土遺物

大きく歪んでしまったものである。やや丸底状を呈し、体部下半に稜を有して外傾している。No.5は灰釉陶器の壺もしくは瓶であろう。No.6は土師器の甕である。口縁部は強く外反しており、頸部は短く体部にかけて直線的に開いている。組成は第84号住居跡と類似しており、須恵器は出土していない。所見 高台付碗の形態は第84号住居跡と共通しており、10世紀中葉から11世紀前半にかけてのものと考えられる。出土位置から住居の廃絶とあまり時間を経ないと判断し、住居の時期もほぼ同様と思われる。

第89号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第213図 1	土師器 高台付碗	口径 [14.0] 器高 (4.4)	底部を欠くも、右から左へ面取りされて立ち上がり、体部は外傾する。口唇部は微かに外反気味を呈する。	内面はヘラ磨きの上、黒色処理。外面は、底部寄りには2段のヘラ削り、体部は横ナデ、口唇部はヘラ磨き。	雲母粉粒多量、長石・石英粒少量 内面黒色、外面にぶい黄褐色 普通	P 3 内 30% 内面黒色処理
第213図 2	土師器 小皿	口径 10.6 底径 7.1 器高 2.5	焼成の結果か、歪みが著しい。歪み箇所は還元し灰色化する。体部は外傾し、底部は僅かに突出する。	底部回転ヘラ切り後、一部ナデ。体部横ナデ、内面回転ナデ。	長石・雲母・石英粉粒微量 内外面赤色 不良	床直 100%
第213図 3	土師器 高台付碗	口径 15.0 高台径 7.0 器高 6.3	高台は面取られ、外傾する。ヘラ削りを施して緩やかに立ち上がる。内面口唇部は僅かに肥厚して丸みを帯びる。	内面回転ナデ・横ナデの上、ヘラ磨き。体部外面横ナデ、下方は逆時計回りにヘラ削りを2段施す。付高台。	雲母粉粒・長石・石英多量 赤色微砂微量 内外面にぶい橙色 普通	P 2 内 60%
第213図 4	土師器 高台付碗	口径 13.0 高台径 7.2 器高 5.4	高台は外傾する。体部はヘラ削りと横ナデにより、稜を生じて直立気味に立ち上がる。見込みは凹みを生じる。	底部回転ヘラ切り後、付高台。体部下半逆時計回りに1段ヘラ削り、上半は横ナデ。内面強い回転ナデ。	雲母粉粒・長石、赤色微砂微量、石英多量 内外面浅黄橙色 やや軟質	床直 70%
第213図 5	灰釉陶器 壺瓶類	底径 9.1 器高 (2.7)	厚味のある平底底部に付け高台。体部も厚く、緩やかに立ちあがる。	外底面左回り回転ヘラ切り後、周縁をナデ。体部淡緑色の釉垂れ。内底面左回りのナデ上に自然釉。	黒色微砂・長石少量 内外面灰色 堅緻	床直 70%
第213図 6	土師器 甕	口径 [17.9] 器高 (5.1)	頸部から口縁部の破片。頸部は内傾してすぼまり、口縁部は短く外反する。口唇部は丸まる。	内外面共に横ナデ。頸部に一部指頭痕。口唇部の横ナデは、最後に施す。	雲母少量 内外面にぶい褐色 普通	床直 10%

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 [第214・215図、PL.20・35]

位置 調査区中央やや西寄り I～L-23～25グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。第40・41号住居跡と重複しており、本遺構が新しいと判断した。

規模 P 1～10の10基の柱穴から構成され、建物の形状は長方形を呈する。長辺6.9m、短辺4.4mで各2辺は同じ長さである。面積は約30.4㎡を測る。

長軸方向 N-68° -W

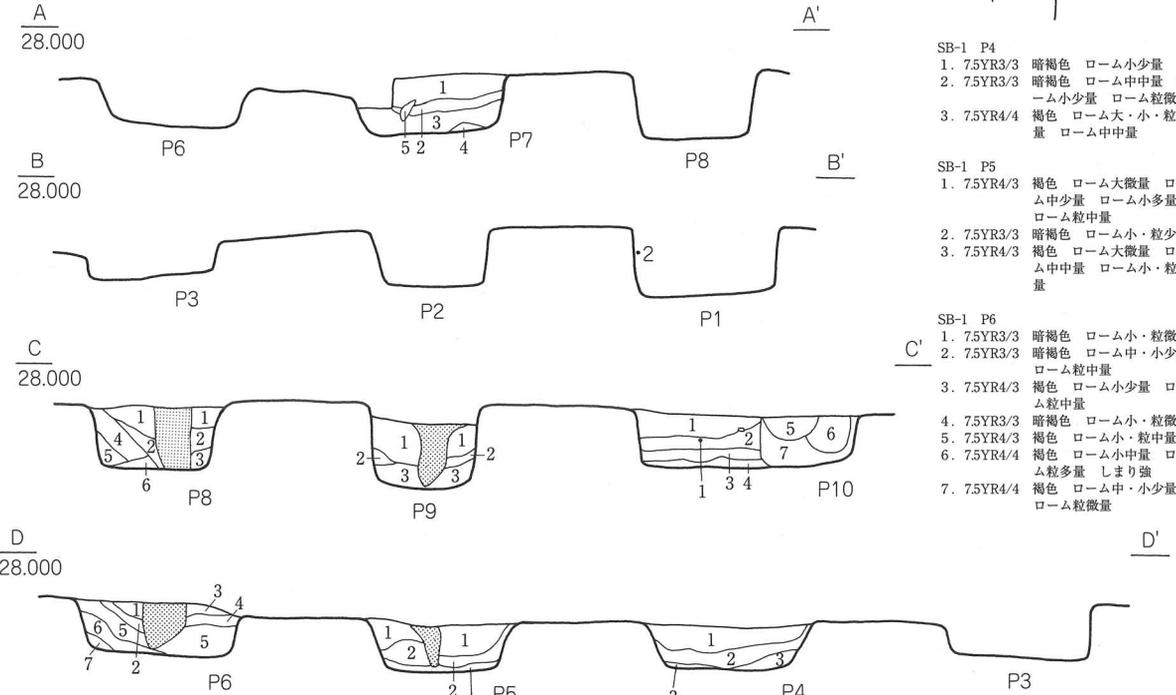
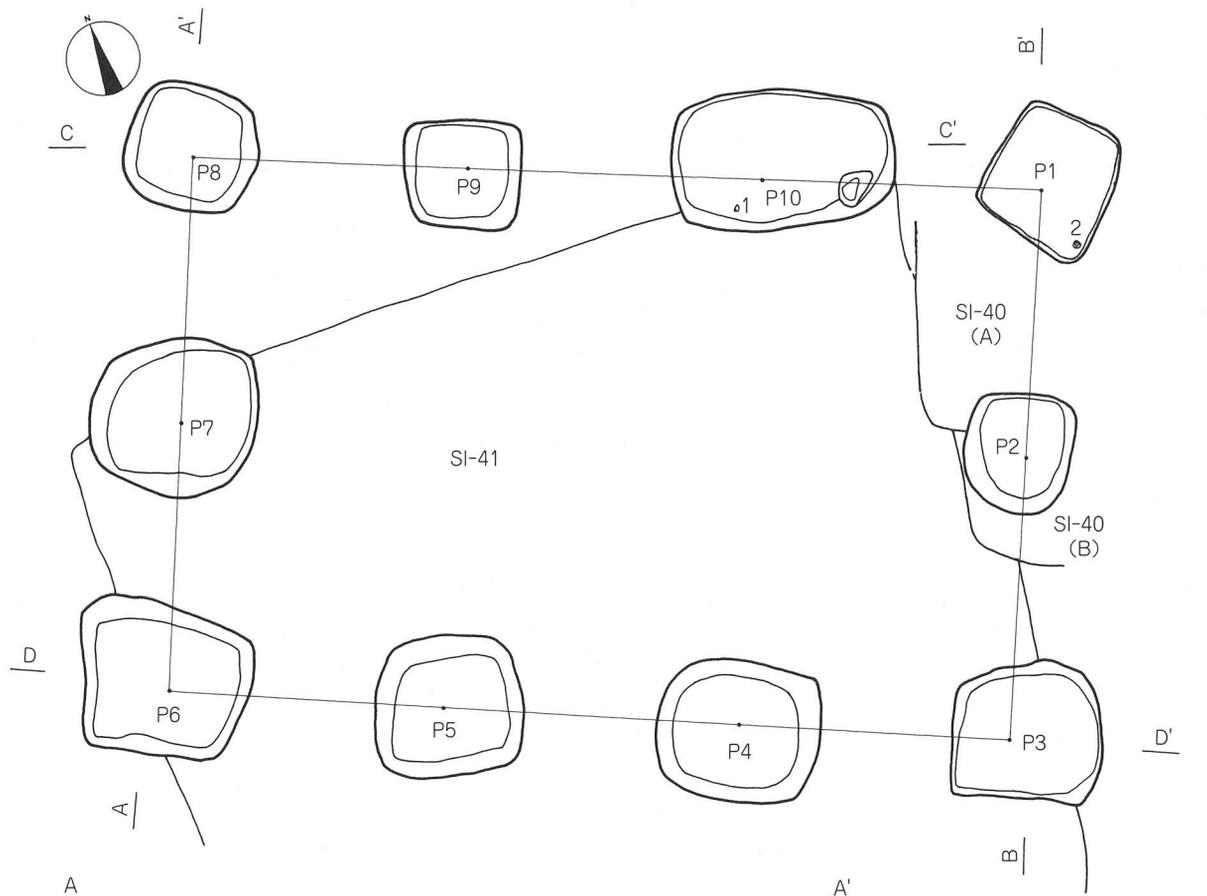
柱間構造 東西桁行3間×南北梁行2間

柱穴 桁行柱間寸法は2.16～2.36m、梁行柱間寸法は2.12～2.25mを測る。各桁行・梁行は対面する長さが同じであった。柱穴の形状はP10が長方形となる他は隅丸方形ないしは方形を呈しており、上面・底面共に相似形を成している。P10は長径1.8m、他のピットは径0.9～1.3mを測る。確認面からの深さは40～70cmで底面は水平ではなく、傾斜を有しているピットもみられた。底面からの立ち上がりはいずれも概ね垂直方向に立ち上がっている。

覆土 P 5・6・8・9の覆土中からは柱痕が確認された。

遺物 P10の覆土上位から扁平気味のつまみを有する須恵器蓋 (No.1)、P1の同じく覆土上位から性格不明の鉄製品 (No.2) が出土した。薄手で中空のため飾り金具の一種と思われる。

所見 遺物はいずれも覆土上位から出土しており、埋没過程における流れ込みと考えられる。重複している住居は古墳時代前期 (第41号住居跡) と8世紀前半代 (第40号住居跡) に相当するため、これより新しい8世紀後半、ないしそれ以降の時期が想定される。



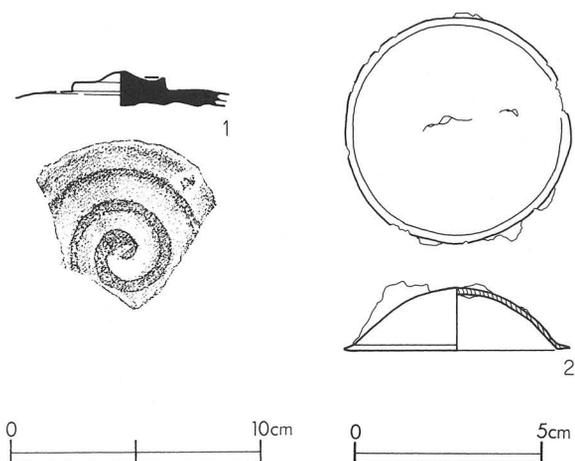
- SB-1 P7
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中・小・粒中量
 2. 7.5YR4/4 褐色 ローム大微量 ローム中中量 ローム小・粒多量 しまり強
 3. 7.5YR4/3 褐色 ローム中～粒少量
 4. 7.5YR4/4 褐色 ローム大微量 ローム中中量 ローム小・粒多量 粘性・しまり強
 5. 7.5YR3/2 極暗褐色 ローム粒微量
- SB-1 P8
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム大微量 ローム中・小中量 ローム粒少量
 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム大少量 ローム中・粒中量 ローム小多量
 3. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム大・中・粒中量 ローム小多量 しまり強
 4. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム大微量 ローム中・小中量 ローム粒多量
 5. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム中～粒少量
 6. 7.5YR4/3 褐色 ローム大・中中量 ローム小・粒多量 粘性強

- SB-1 P9
1. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大微量 ローム中中量 ローム小・粒多量 粘性強
 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒中量 しまり強
 3. 7.5YR4/3 褐色 ローム大・中中量 ローム小・粒多量 粘性強
- SB-1 P10
1. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大微量 ローム中・粒中量 ローム小少量
 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中微量 ローム小・粒少量
 3. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小中量 ローム粒少量
 4. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大～小中量 ローム粒多量 しまり強
 5. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム小少量
 6. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム中・小少量
 7. 7.5YR3/2 黒褐色 ローム中少量 ローム小中量 ローム粒微量

- SB-1 P4
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小少量
 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中中量 ローム小少量 ローム粒微量
 3. 7.5YR4/4 褐色 ローム大・小・粒多量 ローム中中量
- SB-1 P5
1. 7.5YR4/3 褐色 ローム大微量 ローム中少量 ローム小少量 ローム粒中量
 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒少量
 3. 7.5YR4/3 褐色 ローム大微量 ローム中中量 ローム小・粒少量
- SB-1 P6
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒微量
 2. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中・小少量 ローム粒中量
 3. 7.5YR4/3 褐色 ローム小少量 ローム粒中量
 4. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒微量
 5. 7.5YR4/3 褐色 ローム小・粒中量
 6. 7.5YR4/4 褐色 ローム小中量 ローム粒多量 しまり強
 7. 7.5YR4/4 褐色 ローム中・小少量 ローム粒微量



第214図 第1号掘立柱建物跡



第215図 第1号掘立柱建物跡出土遺物

第1号掘立柱建物跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第215図 1	須恵器 蓋	器高 (1.4)	蓋の体部とつまみの破片。平坦な体部から短く直立し、溝状に窪んで頂部で摘み上げられる。	内面は左巻きのらせん状ナデ。外面も左回りのロクロナデ。	白雲母微量 内外面灰色 普通	P10覆土上位 30%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第215図 2	鉄製品 不明	9.0	2.4	0.2	27	体部は半球状を呈し、周縁は平坦に短く先折れする。全体に腐食が進む。	P1覆土上位 100%

第2号掘立柱建物跡〔第216・217図、PL.101〕

位置 西側の調査区域にかかる - (マイナス) A~B-22・23グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置する。第9号住居跡・第2号溝と重複しており、出土遺物と土層堆積状態から住居跡よりは新しく、溝より古いと判断した。

規模 P1~10の10基の柱穴から構成され、建物の形状は長方形を呈する。長辺5.8m、短辺4.1m、面積は約23.8㎡を測る。

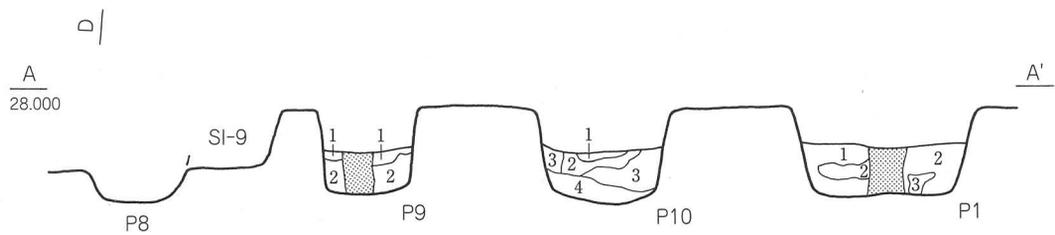
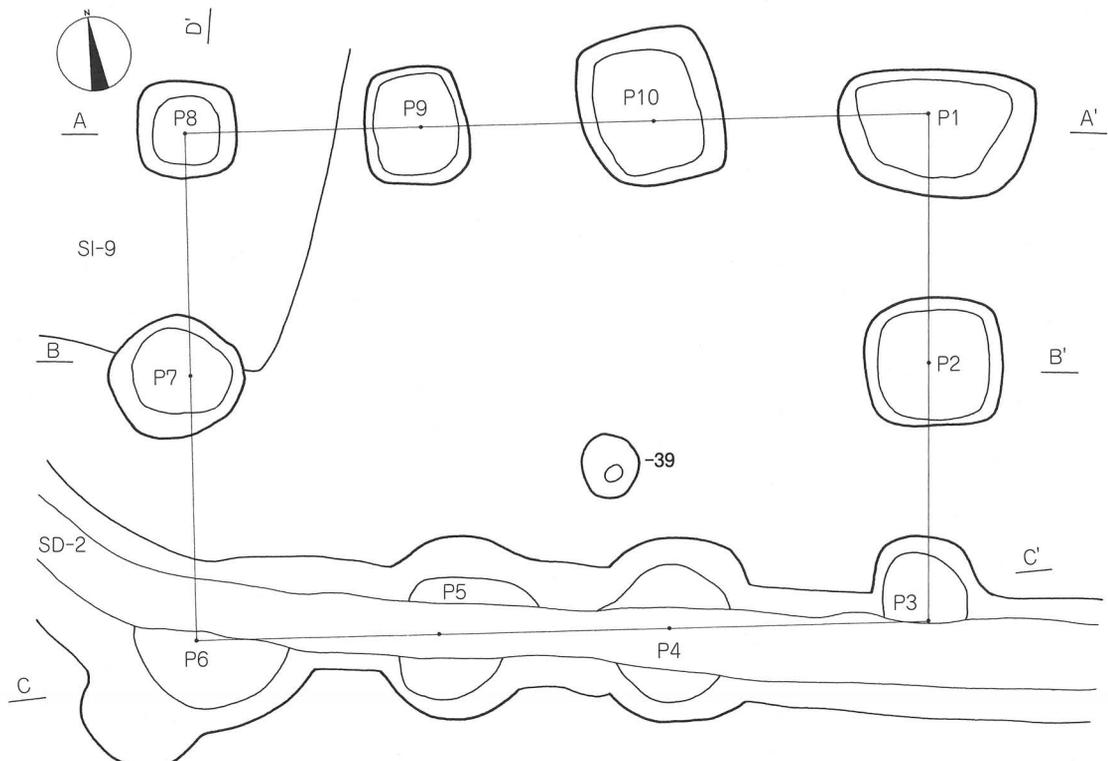
長軸方向 N-74° -W

柱間構造 東西桁行3間×南北梁行2間

柱穴 桁行柱間寸法は1.84~2.2m、梁行柱間寸法は1.92~2.1mを測る。各桁行・梁行は対面する長さはほぼ同じであった。柱穴の形状はP1・2・8~10が方形を基調としており、南側の溝と重複するP3~6、そしてP7は円形を呈している。上面・底面共に相似形を成している。規模は長径1.1~1.5m、確認面からの深さは70cm前後で、大半の底面は丸みを帯びている。P6は第2号溝との重複により壁の立ち上がり外傾気味となるが、他は垂直気味に立ち上がっている。また、P4の北側に位置している1基は、当掘立柱建物跡に伴うピットかは不明である。

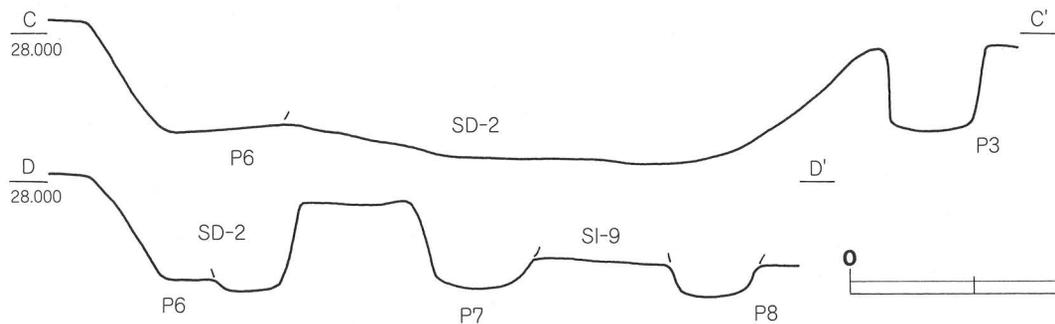
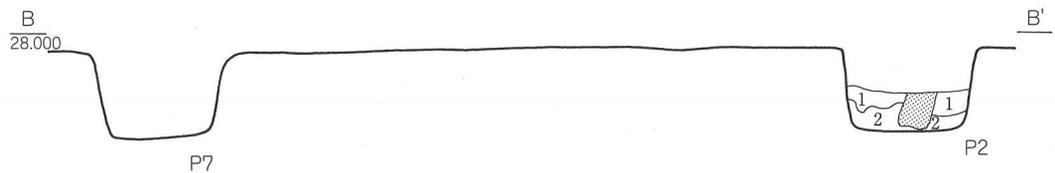
覆土 P1・2・9の覆土中からは柱痕が確認されている。

遺物 No.1はP10、No.2はP7の覆土中からの出土である。No.1が土師器のほかはすべて須恵器であった。No.1は口縁部がやや外傾し、弱い稜を有して内湾しながら体部下半に至る坏である。下半はヘラ削り、内面はナデ調整が施されていた。No.2は坏である。口縁部直下に強い稜を有し、口縁端部は短く外反している。口径に比して底径が大きく、大振りな印象を受ける。底部直上には削りはみられない。

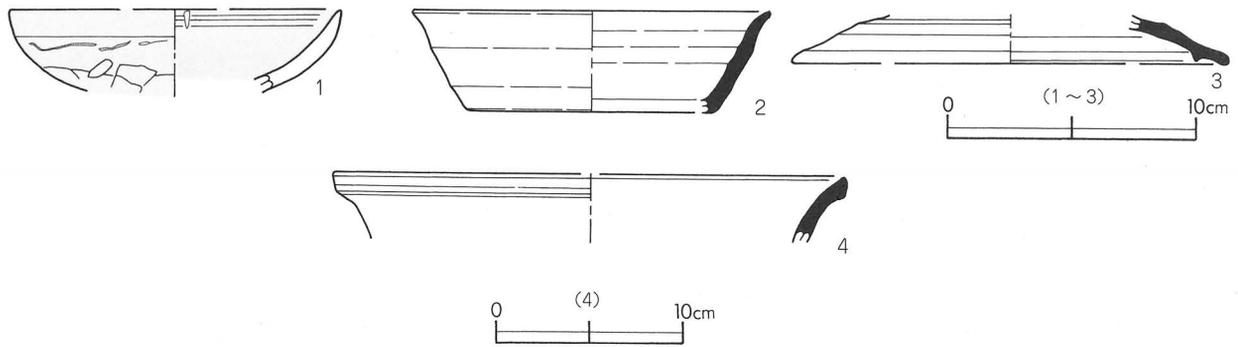


- SB-2 P1
1. 7.5YR4/3 褐色 ローム大・中微量 ローム小・粒少量
 2. 7.5YR4/4 褐色 ローム大・中中量 ローム小・粒多量 粘性強
 3. 7.5YR4/4 褐色 ローム大・粒多量 粘性・しまり強
- SB-2 P2
1. 7.5YR3/3 暗褐色 ローム大・中少量
 2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大・中中量 ローム小微量 ローム粒少量

- SB-2 P9
1. 7.5YR4/4 褐色 ローム大~小中量 ローム粒極めて多量
 2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中・小少量 ローム粒中量 粘性強
- SB-2 P10
1. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大・中少量 ローム小・粒中量 しまり強
 2. 7.5YR4/3 褐色 ローム大微量 ローム中少量 ローム小・粒多量
 3. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中微量 ローム小少量 ローム粒中量
 4. 7.5YR4/4 褐色 ローム大中量 ローム中~粒多量 粘性強



第216図 第2号掘立柱建物跡



第217図 第2号掘立柱建物跡出土遺物

No.3は蓋である。体部は直線的で基部の厚いかえりが付く。No.4は甕である。口縁端部は短く立ち上がり、頸部にかけては直線的であった。

所見 遺物の半分は柱穴覆土中からの出土であり、埋没過程における流れ込みであろう。重複する第9号住居跡の時期は7世紀末、第2号溝は中世以降と考えられることから、当建物跡はこの間の時期に相当する。覆土中から出土した土器の最新の時期は9世紀半ば頃となろう。遺物は7世紀末から8世紀前半にかけてのものとして9世紀代とみられるものがあり、当建物跡の時期を決定づけるほどではないもの、およそ9世紀半ば頃を下限とみるべきであろうか。調査区全体を概観すると第6・7号溝で区画された範囲に掘立柱建物跡が集中しており、ここに位置している9棟は時間的に大きく逸脱しないとの想定が成り立つ。当建物跡は規模・形状・長軸方向が第1号掘立柱建物跡と類似している点も考慮して8世紀後半代と考えておきたい。

第2号掘立柱建物跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第217図 1	土師器 坏	口径 13.2 器高 (3.4)	緩やかに丸みを持って立ち上がる。口唇部は先細りする。	体部外面ヘラナデ。口縁部内外横ナデ。内面ナデ。	雲母粉粒・長石粒微量 内外面黒色 普通	P10覆土 15% 内外面黒色処理
第217図 2	須恵器 坏	口径 [14.3] 底径 [9.8] 器高 4.0	平底の底部から外傾して立ち上がる。口縁部は僅かに外反気味。	内外面回転性の横ナデ成形。	石英・雲母粉少量 内外面灰色 普通	P7覆土 30%
第217図 3	須恵器 蓋	口径 [17.4] 器高 (2.0)	口縁部内面に2mm高のかえりをもつ。丸みをもつ口縁部から膨らみをもって立ち上がる。	内外面回転性の横ナデ成形。	長石・石英微量 内外面灰色 普通	10%
第217図 4	須恵器 甕	口径 [20.6] 器高 (2.8)	ラッパ状に外反する口縁部。口唇部は面取りの上やや肥厚し、上端は摘み上げられる。	ナデ成形。内外面黒色化。	長石・石英粒微量 外面褐灰色 内面に ぶい橙色 普通	10%

第3号掘立柱建物跡〔第218図、PL.35・101〕

位置 西側の調査区域にかかるD・E-25・26グリッド、標高27.5mの台地平坦面に位置している。第7号掘立柱建物跡と重複しており、おそらく当掘立柱建物跡が古いと思われる。

規模 P1～9の9基の柱穴が検出され、建物の形状は長方形を呈する。長辺5.18m、短辺3.5m、面積は約18.1㎡を測る。P3とP4の間に1基存在していたと考えられるが、発見できなかった。

長軸方向 N-21° -E

柱間構造 およそ南北桁行3間×東西梁行2間

柱穴 桁行柱間寸法は1.72～1.78m、梁行柱間寸法は1.72～1.78mを測り、柱間規模はほぼ同じであった。柱穴の形状は円形・楕円形を呈しており、上面・底面共に相似形をなしている。規模は長径0.8～1.7m、確認面からの深さは約60～80cmで、底面はほぼ平坦である。いずれも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。P1～4・8・9の底面には硬化部（いわゆるあたり痕－スクリーントーン部分）がみられた。

遺物 No.1は内黒の高台付椀で、口縁端部は直線的に外傾し、体部にかけては緩やかに内湾している。No.2は須恵器の高台付杯の高台部分である。各々の出土位置は明確にできなかった。

所見 遺物はおよそ9世紀代のものがみられ、当建物跡の下限年代を示唆するものと考えられる。

第3号掘立柱建物跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第218図 1	土師器 高台付椀	口径 [16.0] 器高 (3.8)	底部から腰部にかけて面取られて屈曲する。体部は直立して立ち上がる。	外面横ナデ、腰部ナデ。内面細かなヘラ磨き。	赤色・黒色粒、雲母粉微量 内面黒色 外面橙色普通	5% 内面黒色処理
第218図 2	須恵器 高台付杯	高台径 [16.0] 器高 (2.6)	高台は径が大きく僅かに「ハ」字に開く	付け高台。外底面回転ヘラ切り。内外面回転性のナデ。	雲母粉、長石粒多量 内外面灰白色 やや軟質	15%

第4号掘立柱建物跡〔第219・220図、PL.35・102〕

位置 調査区西側F・G-28・29グリッド、南側の斜面に向かう標高27.0m付近に位置している。第58号住居跡・第9号溝と重複しており、第58号住居跡のカマドがP3上に構築されていることから、住居より古いと判断した。また、第9号溝はP6・7の覆土を掘り込んでおり、溝よりも古いことがわかる。

規模 P1～10の10基の柱穴から構成され、建物の形状は長方形を呈する。長辺5.6m、短辺3.5m、面積は約19.6㎡を測る。

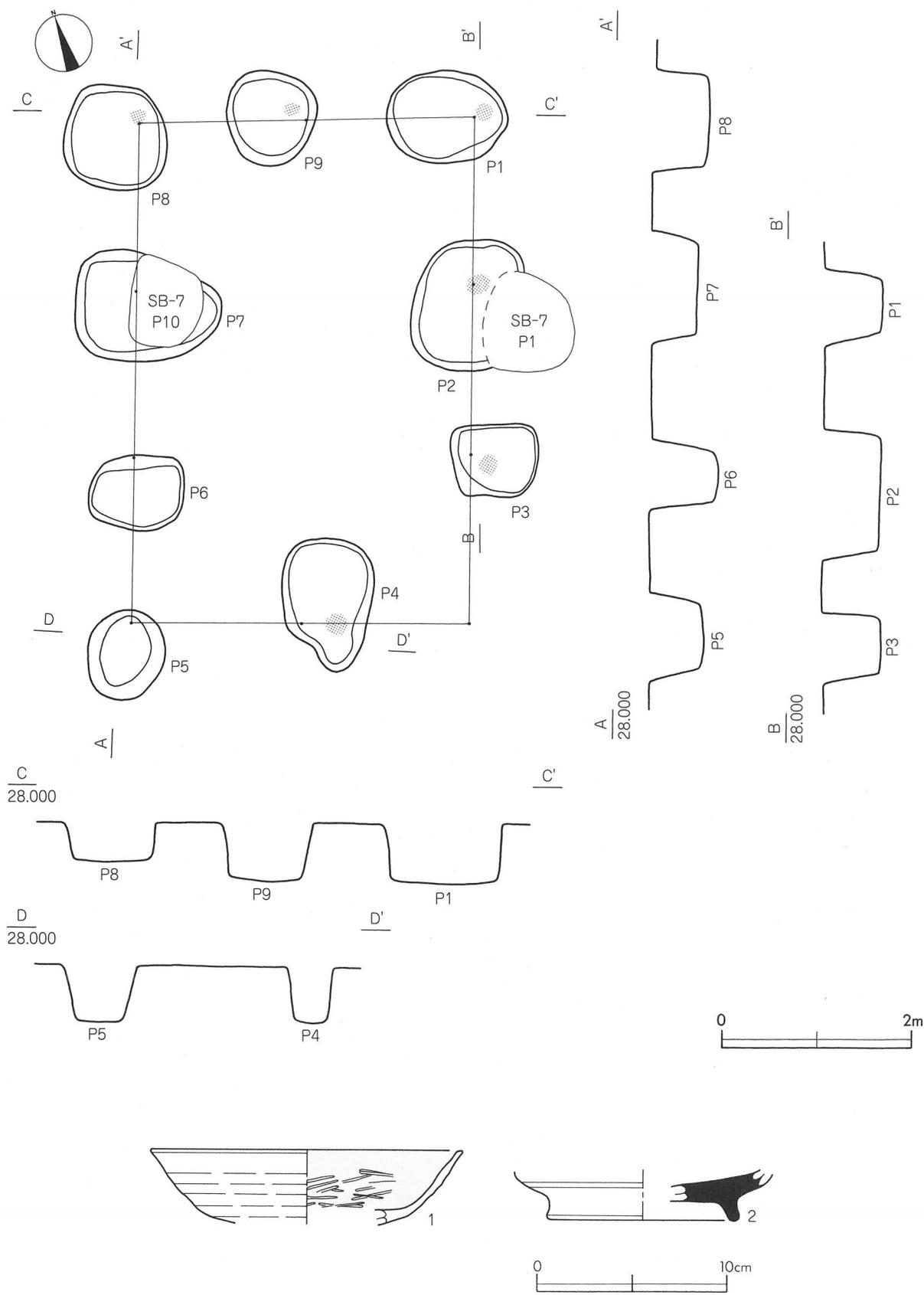
長軸方向 N-107° -E

柱間構造 およそ東西桁行3間×南北梁行2間

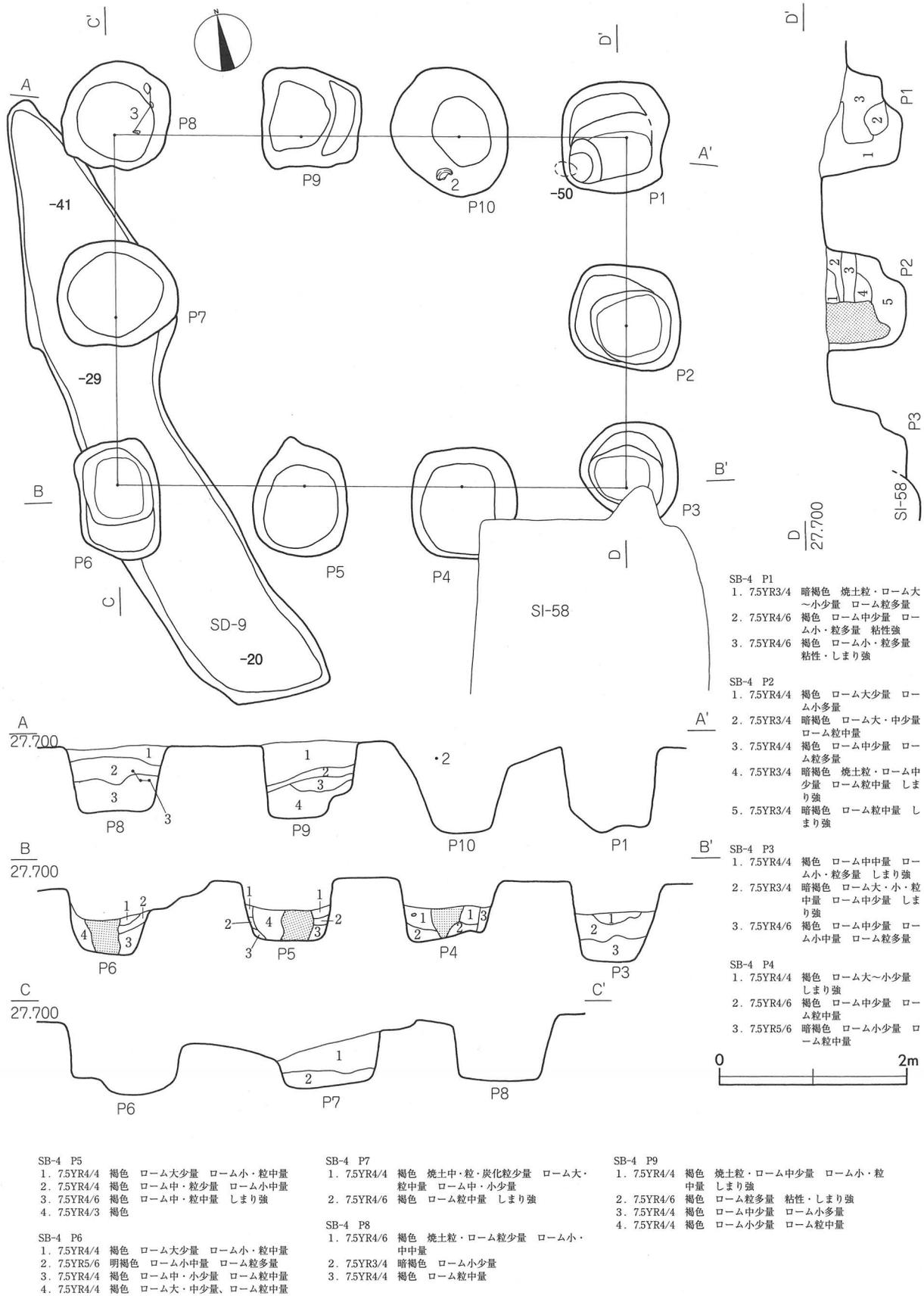
柱穴 桁行柱間寸法は1.66～1.97m、梁行柱間寸法は1.7～1.98mを測る。柱穴の形状は円形・隅丸形を呈しており、上面・底面共に相似形をなすピットが多いが、P1～3・6のように2段の掘り込みを有しているピットもみられる。規模は長径1.0～1.2m、確認面からの深さは約0.7～1.0mで、比較的近似している。P1の最深部は坑底面から50cmの深さであった。2段の掘り込みを持たないピット底面はほぼ平坦である。壁は概ね直線的に立ち上がっている。

覆土 P2・4～6の覆土中には柱痕が確認された。

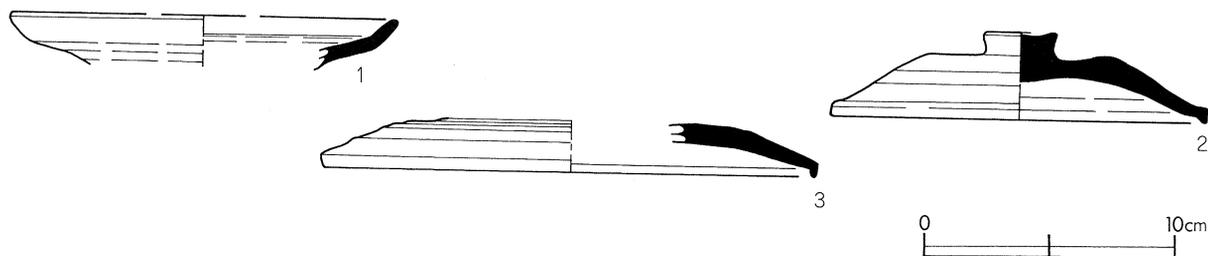
遺物 P8・10の覆土上位よりNo.2・3が出土している。出土位置不明のNo.1共々すべて須恵器であった。No.1は高台付盤である。口縁部から体部にかけて「く」字状に屈曲しており、口縁部と体部の長



第218図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物



第219図 第4号掘立柱建物跡・第9号溝



第220図 第4号掘立柱建物跡出土遺物

さ・器高はほぼ同じであった。No.2・3は蓋である。No.2はつまみが扁平で、天井部は明確な稜を有し、天井部内面は大きく湾曲している。端部は直立し、かえりはない。No.3は天井部から体部、端部にかけて稜を介して直線的な器形である。No.2同様にかえりはみられない。いずれも器厚が厚い。

所見 遺物は柱穴覆土中からの出土であり、埋没過程における流れ込みと考えられる。重複している第58号住居跡の時期は9世紀後半から末にあたり、当掘立柱建物跡の時期は、これを下限として8世紀後半から9世紀前半代と考えておきたい。

第4号掘立柱建物跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 1	須恵器 高台付盤	口径 [15.4] 器高 (2.1)	体部は僅かに外傾し、口縁部は緩やかに立ち上がる。	内外面回転ナデ。破面に切れ込み痕があり、再利用の可能性あり。	雲母粉多量、長石粒微量 外面暗青灰色 内面灰黄色 普通	10%
第219図 2	須恵器 蓋	口径 19.9 器高 (2.0)	口縁端部は僅かに突出。体部は直線的に開く。つまみ上面は僅かに窪む。	内面・外面口縁部は回転ナデ。平坦面近くは回転ヘラ削り。	長石・石英粒微量 内外面灰色 普通	P10覆土 45%
第219図 3	須恵器 蓋	口径 15.0 器高 3.5	口縁端部は2mm高で突出し、低く立ち上がる。	内外面回転ナデ。	雲母粉微量 内外面灰色 普通	P8覆土 10%

第5号掘立柱建物跡〔第221・222図、PL.35・102〕

位置 調査区南東寄りX・Y-37・38グリッド、南に向かって傾斜し始める標高27.0mに位置する。南東側に位置する2軒のうちのひとつである。他の遺構と重複はみられない。

規模 P1～11の11基の柱穴から構成され、建物の形状は方形を呈する。長辺3.9m、短辺3.3m、面積は約12.9㎡を測る。P9～11は建物に伴うかは不明である。

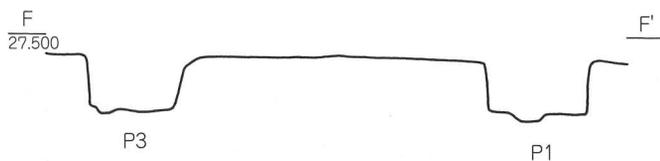
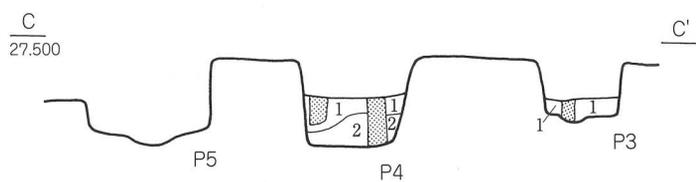
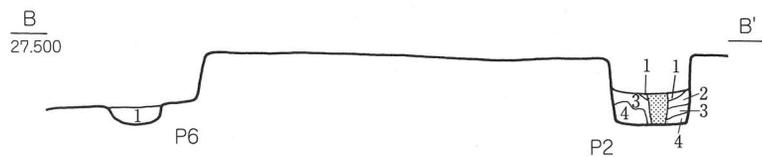
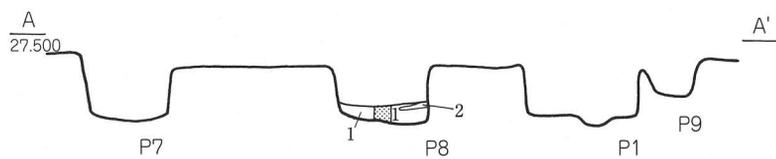
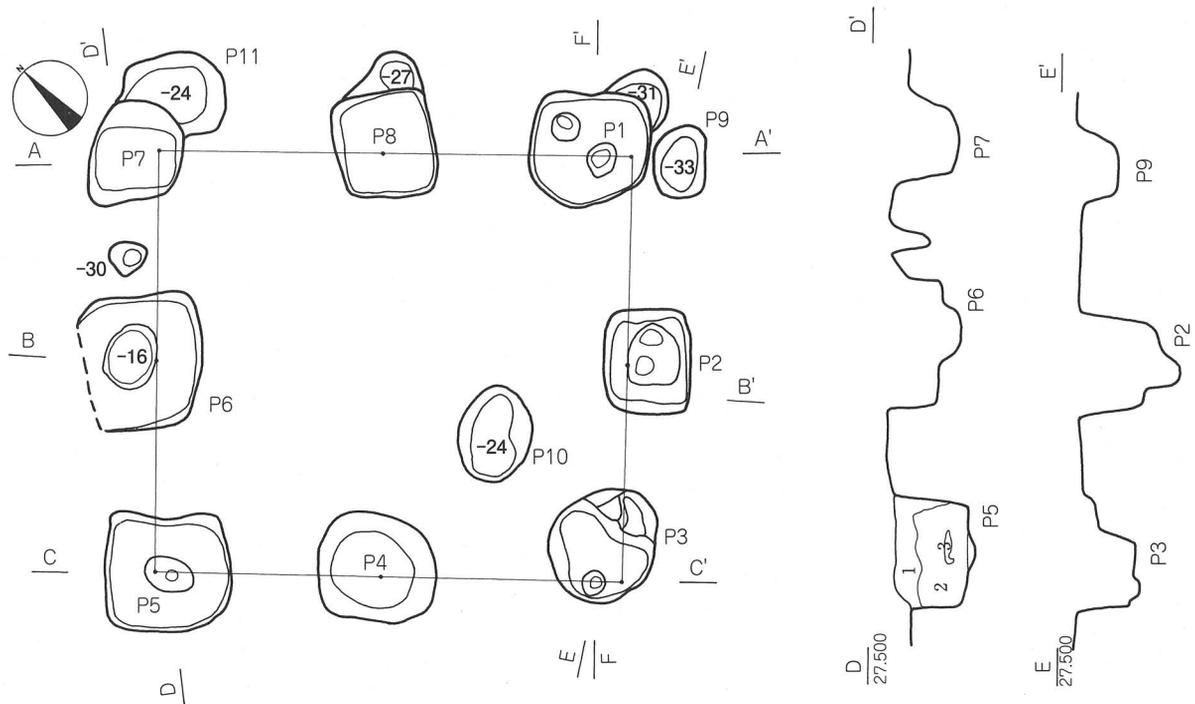
長軸方向 N-44° -W

柱間構造 桁行2間×梁行2間

柱穴 桁行柱間寸法は1.79～1.98m、梁行柱間寸法は1.66～1.72mを測る。対面する各桁行・梁行間の長さは同じであった。柱穴の形状は円形・方形を呈しており、上面・底面共に相似形をなすピットが多いが、P1～3・5・6のように2段の掘り込みを有しているピットもみられる。規模は長径0.8～1.0m、確認面からの深さは約40～60cmを測る。下部ピットは底面から8～18cmの深さであった。底面はほぼ平坦で、壁は概ね垂直に立ち上がっている。

覆土 P2～4・8の覆土中には柱痕がみられた。P4では2本の柱痕が確認されたが、深度の浅いものは補助的な性格を有していた可能性がある。

遺物 土師器高台付碗が1点出土している。口縁部にかけて直線的に開き、高台端部は丸みを帯びてい



SB-5 P2
 1. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中少量 ローム小・粒多量
 2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中少量 ローム粒微量
 3. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大中量 ローム中少量
 4. 7.5YR5/4 に近い褐色 ローム大～粒多量

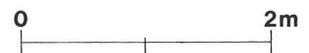
SB-5 P3
 1. 7.5YR5/6 明褐色 ローム大中量 ローム中～粒多量

SB-5 P4
 1. 7.5YR4/6 褐色 黒色土粒少量 しまり強
 2. 7.5YR5/6 明褐色 ローム中・小少量

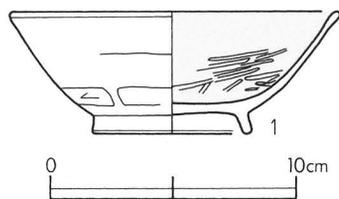
SB-5 P5
 1. 7.5YR4/6 褐色 ローム大～小多量 ローム粒微量
 2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大～小・黒色土粒多量 ローム粒微量
 3. 7.5YR5/8 明褐色 ローム大～粒多量 ロームブロック

SB-5 P6
 1. 7.5YR5/4 に近い褐色 ローム大・粒・黒色土粒少量
 ローム中微量

SB-5 P8
 1. 7.5YR4/4 褐色 ローム粒多量
 2. 7.5YR4/3 褐色



第221図 第5号掘立柱建物跡



第222図 第5号
掘立柱建物跡出土遺物

る。内黒でヘラ磨きが施されている。

所見 高台付碗の形態はおよそ9世紀後半頃と考えられる。出土位置は明確ではないが、当建物跡の時期も碗と大差ない頃が見込まれる。

第5号掘立柱建物跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第222図 1	土師器 高台付碗	口径 13.1 高台径 6.1 器高 4.8	高台は直立気味で、体部は丸みを帯びて立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。付け高台。外体部ナデ。内面細かなヘラ磨き。	赤色・黒色微砂、長石・石英粒微量 外面橙色 内面黒色 やや軟質 (一部還元化)	60% 内面黒色処理

第6号掘立柱建物跡〔第223図、PL.35・102〕

位置 西側の調査壁にかかるA～C-24・25グリッド、標高27.5m付近に位置している。他の遺構と重複はみられなかった。

規模 P1～4の4基の柱穴が検出され、建物の形状はここを桁行とする長方形を呈すると思われる。梁行方向は調査区域の外に延びており、P1～4の長さは5.9mを測る。

長軸方向 N-66° -W (残存している部分を長軸とした場合)。

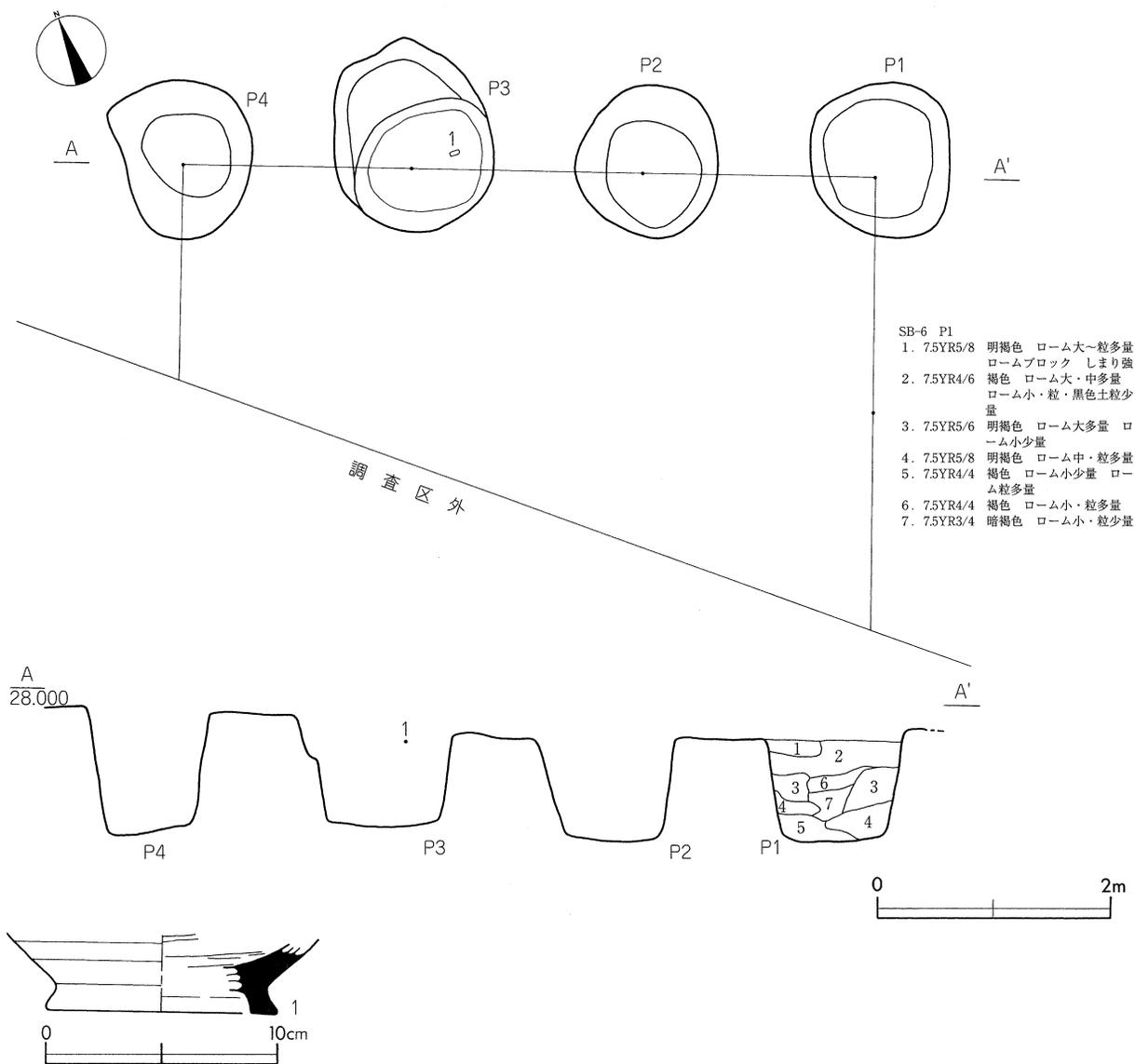
柱間構造 推定東西桁行3間×推定南北梁行2間

柱穴 桁行柱間寸法は1.96～2.0mを測る。柱穴の形状は円形・楕円形を呈する。P3が2段の掘り込みとなる他は、上面・底面共に相似形をなしている。規模は長径1.15～1.3m、確認面からの深さは70～80cmを測る。壁は概ね垂直に立ち上がっている。

覆土 柱痕は確認されなかった。

遺物 P3の覆土上位より須恵器長頸壺の底部が1点出土している。体部の立ち上がり角度からみて、ややふくらの強い長頸壺であったと思われる、8世紀後半から9世紀前半にかけてのものと推測される。

所見 遺物は柱穴覆土中からの出土であり、埋没過程における流れ込みと考えられる。当建物跡の時期は9世紀前半頃を下限として、およそ8世紀後半代と考えておきたい。



第223図 第6号掘立柱建物跡・出土遺物

第6号掘立柱建物跡出土遺物

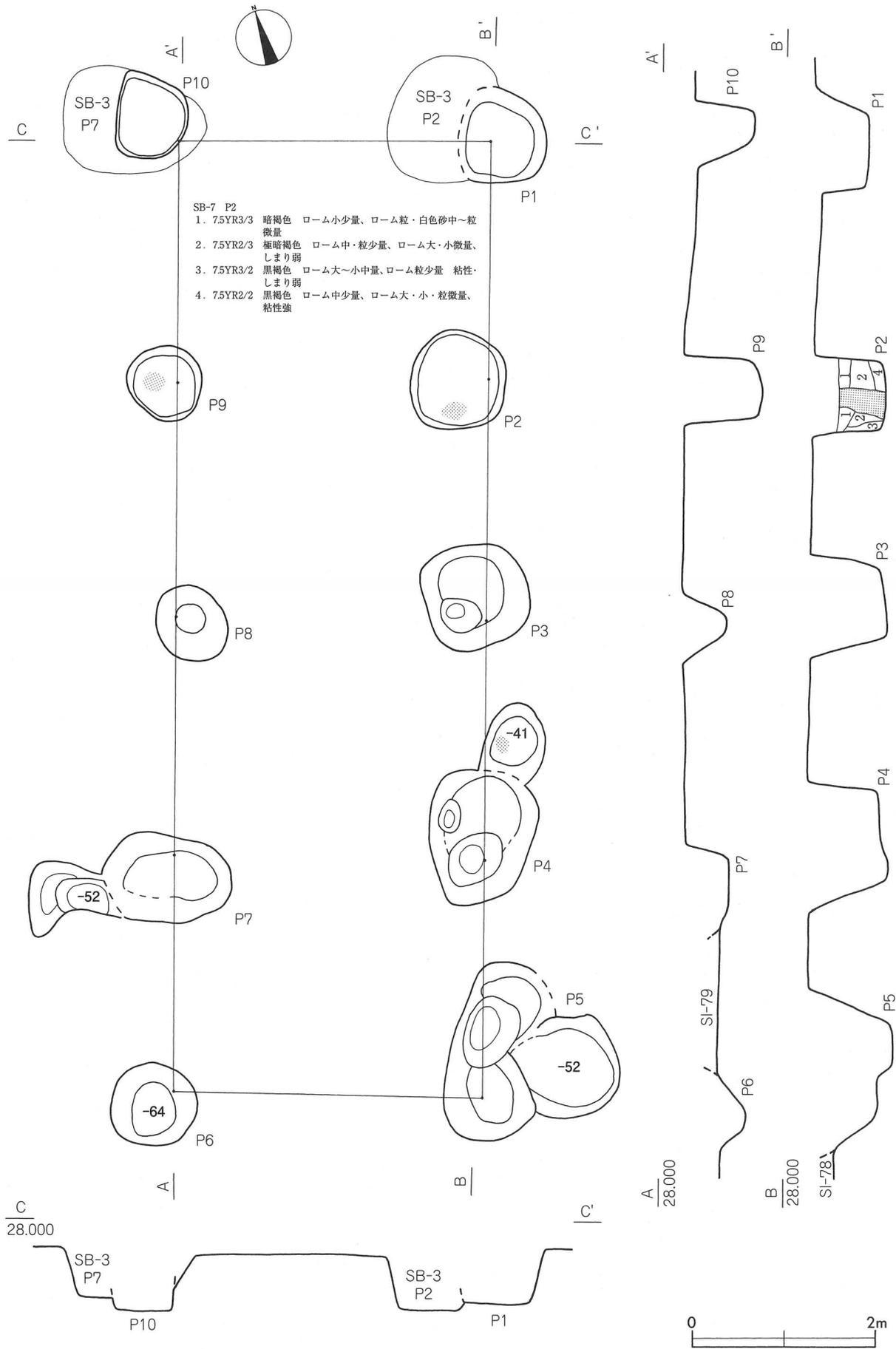
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第223図 1	須恵器 長頸壺	高台径 [9.9] 器高 (3.2)	高台は「ハ」字に開き、接地面を平坦につくる。	付け高台。体部外面に回転ナデを施す。	均質な良土 黒色粒 少量 外面黒褐色 内面褐 灰色 堅緻	P3 覆土上位 20%

第7号掘立柱建物跡 [第224図、PL.35]

位置 西側の調査壁際C～E-25～28グリッド、標高27.5m付近に位置している。北側で第3号掘立柱建物跡、南側で第78・79号住居跡と重複しており、土層堆積状態その他から当建物跡が最も新しいと判断した。調査時は建物跡として確認できなかったが、整理作業時に1棟と認定した建物跡である。

規模 P1～10の10基の柱穴が検出され、建物の形状は長方形を呈する。長辺10.2m、短辺3.35m、面積は約34.2㎡を測る。

長軸方向 N-18° -E



第224図 第7号掘立柱建物跡

柱間構造 およそ南北桁行4間×東西梁行1間

柱穴 桁行柱間寸法は2.52～2.66m、梁行柱間寸法は1.65～1.7mを測り、各桁行・梁行の長さはほぼ同じであった。柱穴の形状は円形・楕円形・隅丸方形と様々であり、長径0.45～1.15m、確認面からの深さは50～90cmを測る。底面は平坦なもの、傾斜しているもの、丸みを有しているもの等あり、また、P2・4・9の底面には硬化部（いわゆるあたり痕-スクリーントーン部分）がみられた。壁は概ね垂直に立ち上がっている。

覆土 P2の覆土中からは柱痕が確認された。

遺物 出土していない。

所見 重複している第79号住居跡の時期は8世紀前半代に相当することから、これを上限とする時期となろう。後述する第11号掘立柱建物跡の時期は、9世紀前半代を上限とすることから、規模と長軸方向をほぼ同じくする当建物跡は9世紀後半代以降と推定することが可能である。

第8号掘立柱建物跡〔第225図、PL.35〕

位置 西側の調査区壁際C・D-28～30グリッド、南側の斜面に向かう標高27.5mに位置している。第79号住居跡と重複しており、土層堆積状態から当建物跡が新しいと判断した。調査時は建物跡として確認できなかったが、整理作業時に1棟と認定した建物跡である。

規模 P1～9の9基の柱穴から構成され、建物の形状は長方形を呈する。長辺5.2m、短辺3.1m、面積は約16.1㎡を測る。

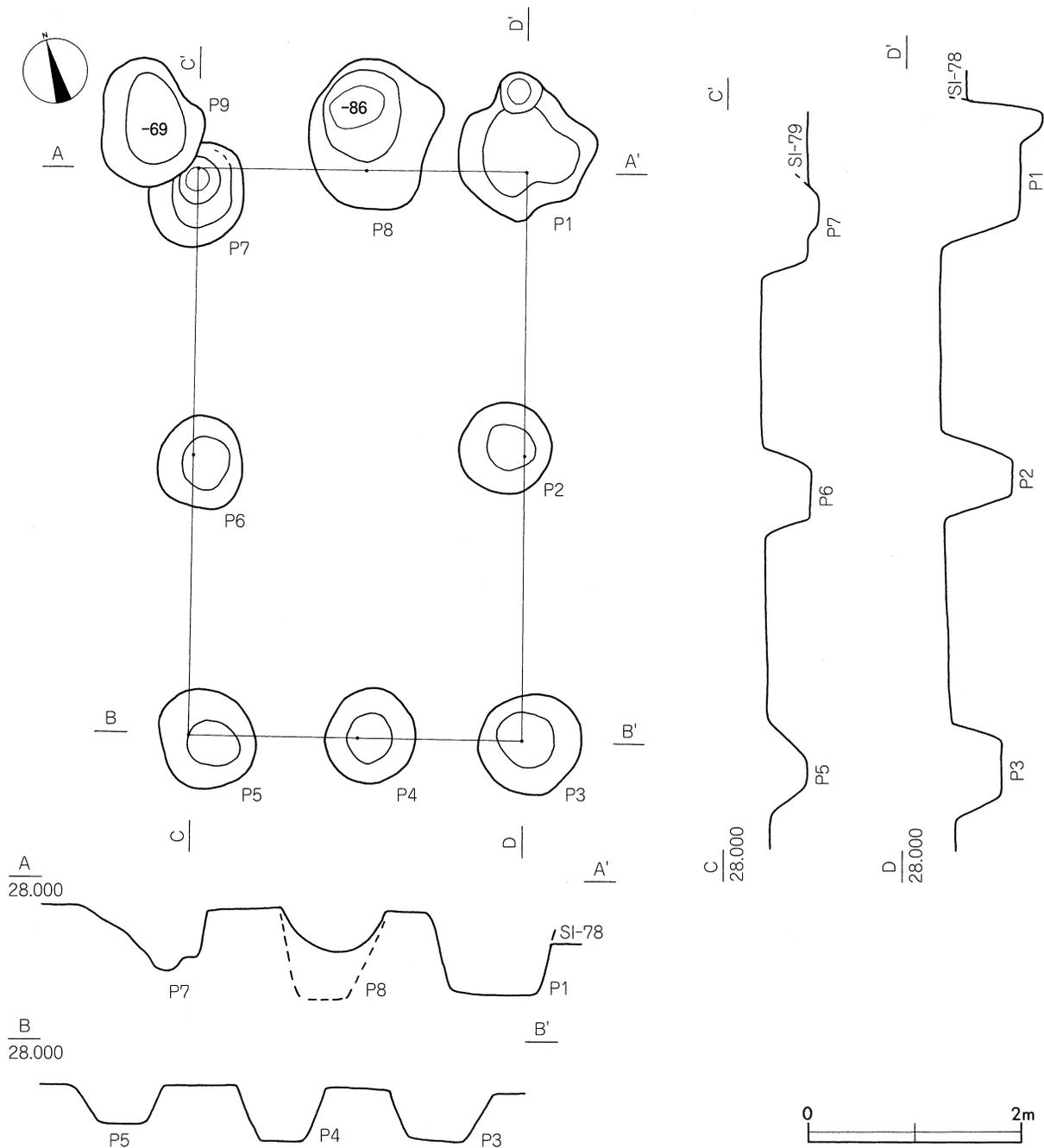
長軸方向 N-19° -E

柱間構造 変則南北桁行2間×東西梁行2間

柱穴 桁行柱間寸法は2.58～2.64m、梁行柱間寸法は1.48～1.56mを測り、各桁行・梁行の対面する長さはほぼ同じであった。柱穴の形状は円形・楕円形・不整形と様々であり、長径0.85～1.15m、確認面からの深さは40～73cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がるピットが多い。P9はP7の建て替えの可能性が考えられる。

遺物 出土していない。

所見 重複している第79号住居跡の時期は8世紀前半代に相当することから、これを上限とする時期となろう。後述する第11号掘立柱建物跡の時期が9世紀前半代を上限とすることから、規模と長軸方向をほぼ同じくする当建物跡は9世紀後半代以降と推定することが可能である。



第225図 第8号掘立柱建物跡

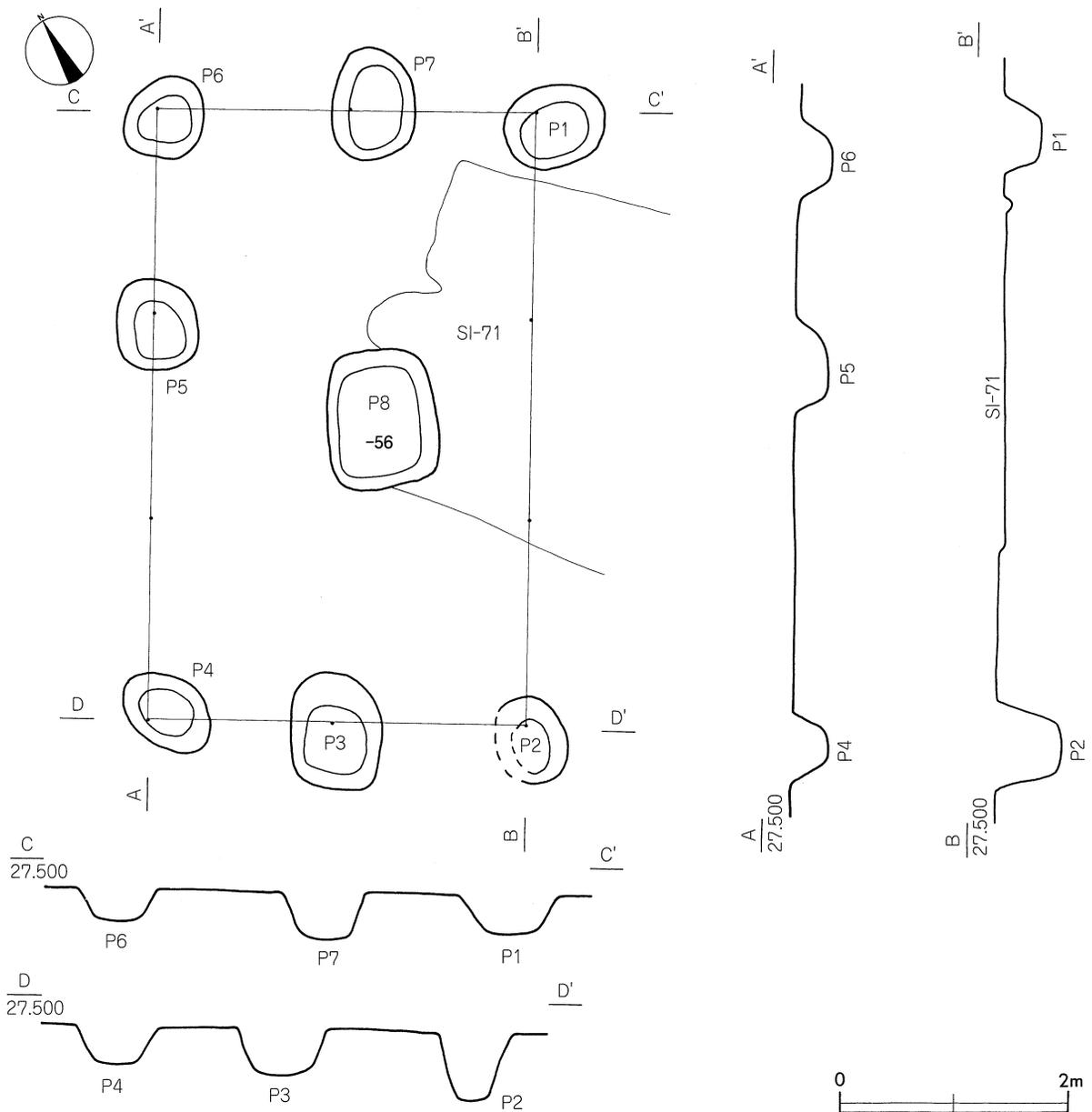
第9号掘立柱建物跡 [第226図、PL.35]

位置 調査区南東寄りX~Z-35・36グリッド、南に向かって傾斜し始める標高27.3m付近に位置する。南東側に位置する2軒のうちのひとつである。東側で第71号住居跡と重複しており、住居のカマドを壊していることから、当建物跡が新しいと判断した。

規模 P1~8の8基の柱穴が検出され、建物の形状は長方形を呈する。長辺5.38m、短辺3.32m、面積は約17.9㎡を測る。2辺の桁方向には発見されなかったピットがあると思われる。

長軸方向 N-18° -E

柱間構造 南北桁行3間×東西梁行2間



第226図 第9号掘立柱建物跡

柱穴 桁行柱間寸法は1.75～1.8m、梁行柱間寸法は1.62～1.7mを測り、各桁行・梁行の対面する長さはほぼ同じであった。柱穴の形状は円形・楕円形・隅丸方形と様々であり、長径0.7～1.22m、確認面からの深さは28～58cmを測る。底面は丸みを帯びているピットが多く、壁は大半が外傾して立ち上がっている。P 8は建物に伴うピットかは不明である。

遺物 出土していない。

所見 重複する第71号住居跡の時期は9世紀後半代を充てており、当建物跡は住居より新しい9世紀末以降と推定するに留めたい。

第10号掘立柱建物跡〔第227図、PL.35〕

位置 西側の調査区域にかかるC・D-24～27グリッド、標高27.5m付近に位置している。他の遺構と重複はみられなかった。調査時は建物跡として確認できなかったが、整理作業時に1棟と認定した建物跡である。

規模 P1～6の6基の柱穴が検出され、建物の形状は長方形を呈する。長辺10.5m、短辺3.15m、推定面積は約33.1㎡を測る。西側の桁行の多くが発見されていない。

長軸方向 N-18° -E

柱間構造 南北桁行4間×東西梁行1間

柱穴 桁行柱間寸法は2.5～2.54mを測る。柱穴の形状は円形・楕円形を呈しており、長径0.95～1.25m、確認面からの深さは56～74cmを測る。P3は底面に段、P4は下部ピットを有していた。底面は丸みを帯びているピットが多く、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 P1の第1層は柱痕の可能性が考えられる。

遺物 出土していない。

所見 後述する第11号掘立柱建物跡の時期は9世紀前半代を上限と判断しており、規模と長軸方向をほぼ同じくする当建物跡は9世紀後半代以降と推定することが可能である。

第11号掘立柱建物跡〔第228図〕

位置 調査区西寄りH・I-26～29グリッド、南側の斜面に向かう標高27.0～27.5mの間に位置している。第10・49・52号住居跡と重複しており、土層堆積状態から当建物跡がいずれの住居より新しいと判断した。調査時は建物跡として確認できなかったが、整理作業時に1棟と認定した建物跡である。

規模 P1～8の8基の柱穴が検出され、建物の形状は長方形を呈する。長辺9.85m、短辺2.4m、面積は約23.6㎡を測る。東側の桁行の多くが発見されていない。

長軸方向 N-17° -E

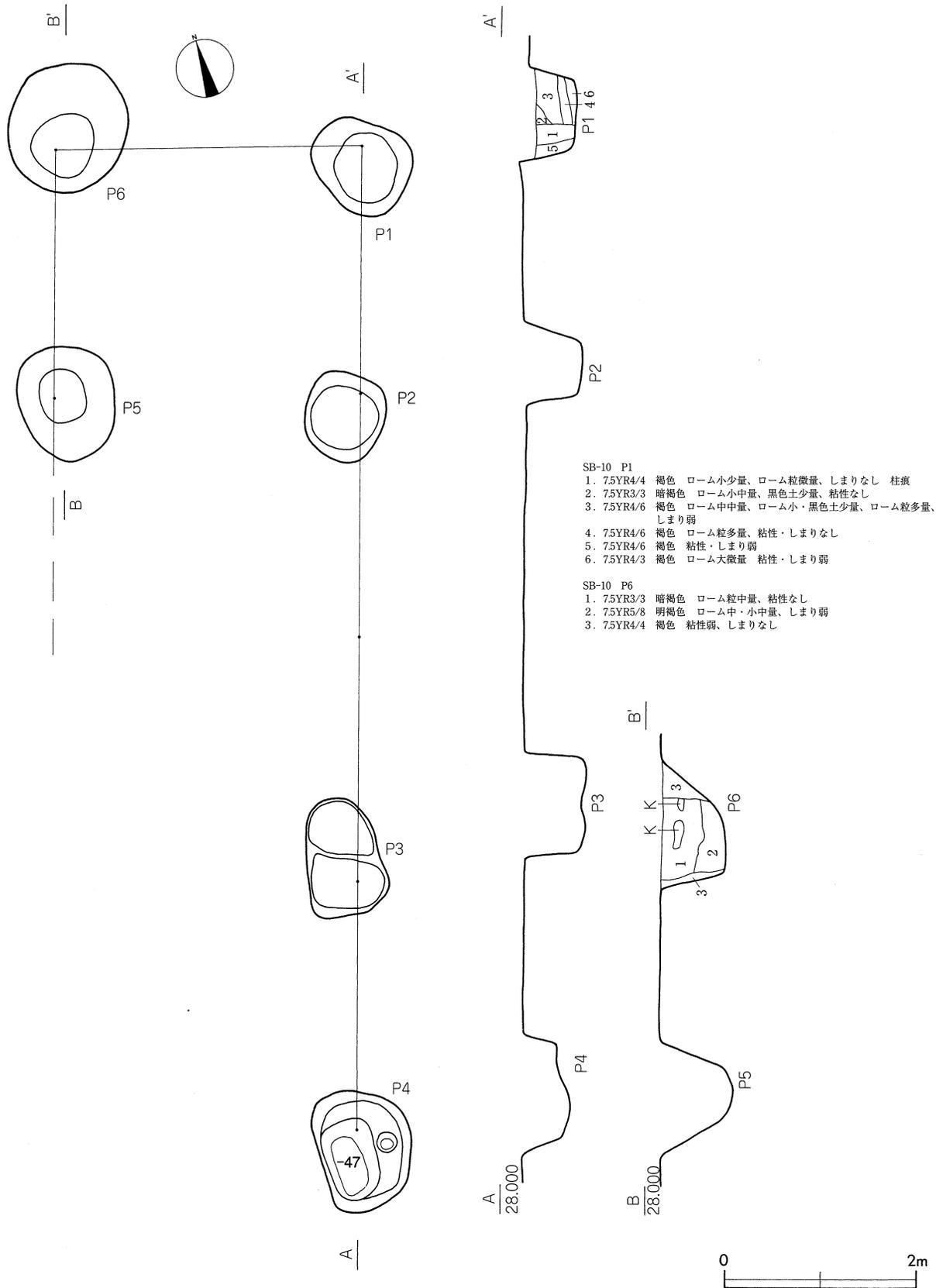
柱間構造 南北桁行4間×東西梁行2間

柱穴 桁行柱間寸法は2.4～2.51m、梁行柱間寸法は1.7～1.74mを測る。柱穴の形状は円形・楕円形を呈しており、長径0.89～1.25m、確認面からの深さは0.45～1.0mを測る。P6は底面に起伏を、P8は下部ピットを有していた。底面は平坦なピットが多く、壁は概ね垂直に立ち上がっている。

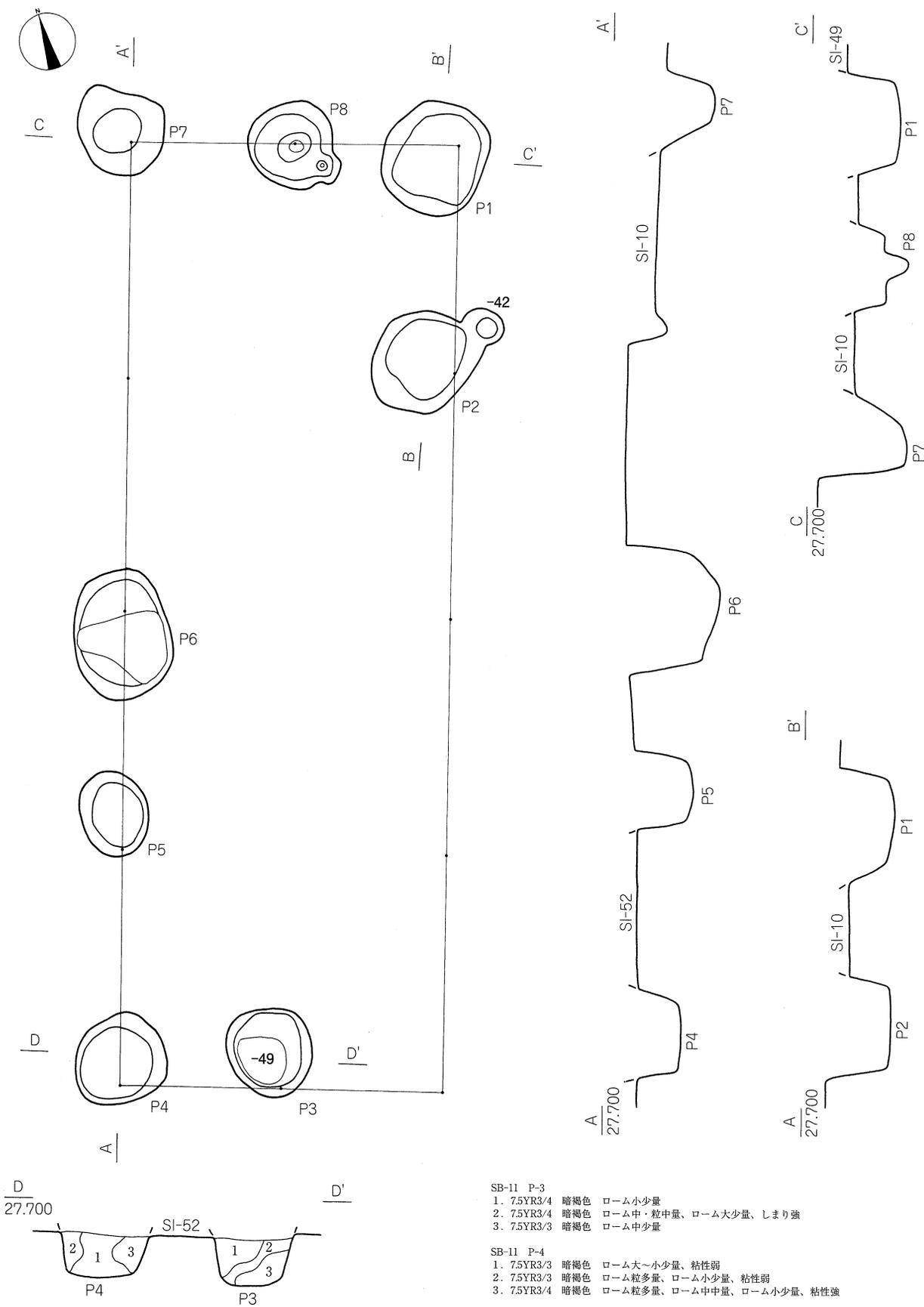
覆土 明瞭な柱痕は確認できなかった。

遺物 出土していない。

所見 当建物跡は3軒の住居と重複しており、いずれの住居跡よりも新しいことは前述のとおりである。第10号住居跡は8世紀末から9世紀前半、第49号住居跡は4世紀代、第52号住居跡は遺物が出土していないため住居形態からの類推であるがおそらく4世紀代と判断している。このことから9世紀後半代以降との推測が成り立つと考える。



第227図 第10号掘立柱建物跡



第228図 第11号掘立柱建物跡

6. 土坑

土坑は5基発見された。調査区の東側を除いた範囲に散見される。時期は不明の土坑を除き、4世紀から8世紀前半に相当すると思われる。なお、記載は調査時の遺構番号を尊重しており、整理時に掘立柱建物跡等と判断した土坑は欠番としたままとする（第2・3・5号土坑）。

第1号土坑〔第229図、PL.36・102〕

位置 調査区北西D-9・10グリッド、標高27.5m付近に位置している。他の遺構と重複はみられない。

平面形・規模 隅丸方形を呈し、長径1.92m、短径1.71m、確認面からの深さは26cmを測る。

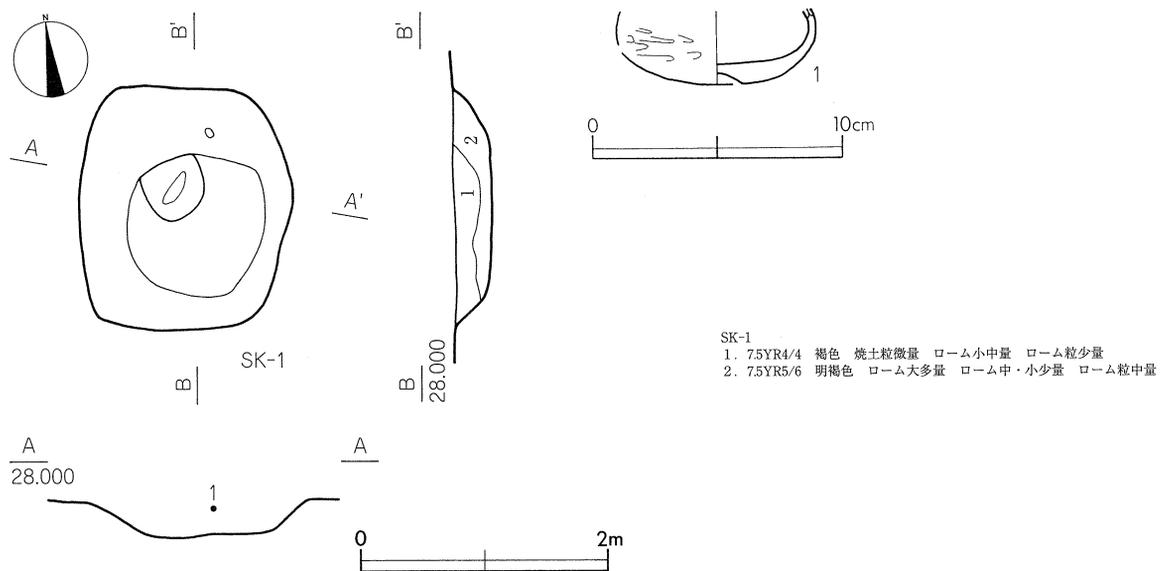
長軸方向 N-5°-E

壁面・底面 壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は上面と相似形をなさず、ほぼ円形を呈しており、やや起伏がみられた。北西部に下部ピットを有しており、坑底面からの深さは4cmである。

覆土 2層に分層された。第2層はローム質土が多量に混入しており、埋め戻しの可能性が考えられる。第1層は焼土粒が微量に混入していた。

遺物 確認面からやや下がった位置、覆土第2層上面から出土している。土師器の埴形土器の体部下半である。

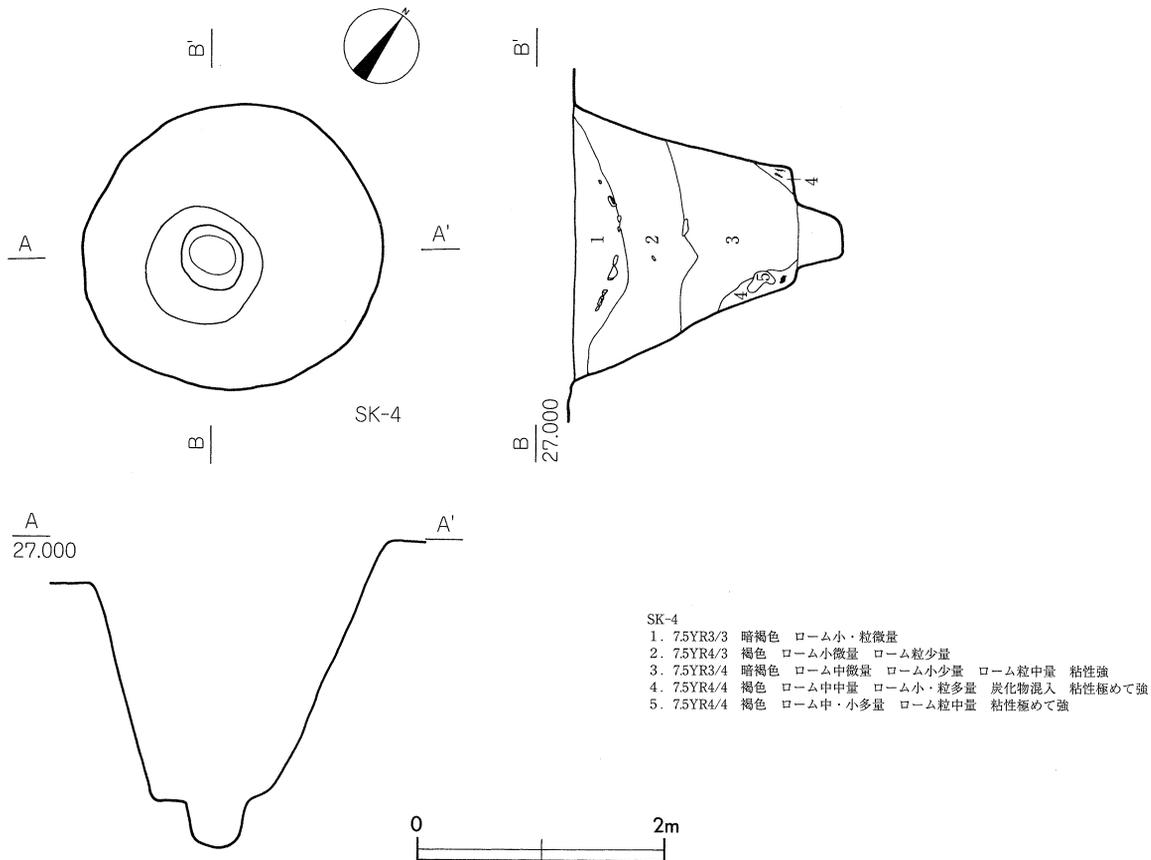
所見 遺物は底面より上位であり、土坑に伴うかは不確定であるが、大差ない時期と想定した場合、古墳時代前期と考えられる。土坑の性格は不明である。



第229図 第1号土坑・出土遺物

第1号土坑出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第229図 1	土師器 甗	底径 1.9 器高 (2.9)	底部は上げ底状に小さく窪み、体部はやや潰れた球状に立ち上がる。	底面円状のナデ。体部横位に細かなへら磨き。内面ナデだが、円形の小さな穴が多数窪む。	石英・長石少量 内外面橙色 普通	覆土下位 30%



第230図 第4号土坑

第4号土坑 [第230・231図、PL.36・102]

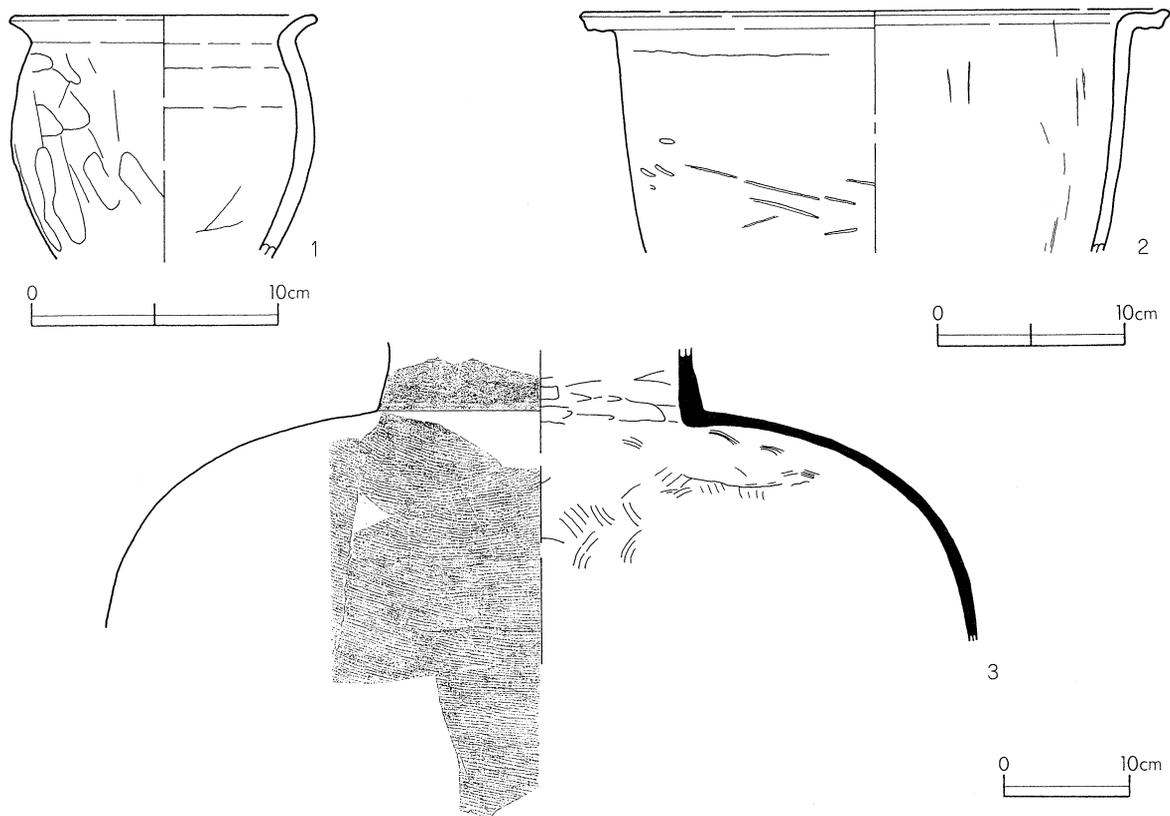
位置 調査区南側 S-32・33グリッド、南に向かう傾斜面の上がり際標高26.8m付近に位置している。他の遺構と重複はみられない。

平面形・規模 円形を呈し、径は2.42×2.22m、確認面からの深さは2.07mを測る。

壁面・底面 西側はほぼ垂直に、東側は外傾して立ち上がっている。底面は開口部とずれて南側に位置しており、底面が寄っている側の立ち上がり角度が急となっている。底面・下部ピット共に円形を呈しており、下部ピットの深さは坑底から36cmを測る。

覆土 5層に分層された。第4層には炭化物が混入していた。

遺物 覆土中位から上位、特に第2層上面で多く出土している。No.1は土師器の小型甗である。口縁部は短く外反し、体部は緩やかな丸みをもつ。No.2は土師器の甌ないし鉢であろう。No.3は須恵器の大型の壺である。頸部は直立し、肩部は丸みを持って大きく張り出している。外面は平行線の叩き目、内面は同心円状の当て具痕がみられる。また、図示はしていないが、細粒砂岩製の砥石が1点出土している。



第231図 第4号土坑出土遺物

所見 土坑の特徴は、古代の集落跡で見られる円形有段遺構や大型竪穴状遺構と呼ばれるものに類似しており、遺物はその出土位置から埋没過程で何回かに分け廃棄されたものと考えられる。遺物はおよそ8世紀代とみられる。

第4号土坑出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 1	土師器 小型甕	口径 [12.1] 器高 (9.9)	体部は僅かに丸みもち、口縁部は「ハ」字に開く。	胴部外面は僅かにハケメ状の痕跡を残し、縦位にナデ。頸部は横ナデ。内面も横ナデ。紐輪積み成形か	赤色粒多量 内外面橙色 普通	覆土中位 25%
第231図 2	土師器 甕?	口径 [31.2] 器高 (12.8)	直立する胴部から横位水平に口縁部が伸び、口唇部が直立する。	外面ナデ。口縁部から頸部は横ナデ。内面もナデ、一部ヘラ痕。	雲母粉、石英粒少量 内外面明黄褐色 普通	覆土中位 10%
第231図 3	須恵器 甕	最大径 [69.0] 器高 (25.0)	球胴状の胴部から頸部が直立する。	体部外面条線叩きが重複。頸部内外面横ナデ、波状複条沈線の上に複条沈線。胴部内面はナデと当て具痕。	長石粒・石英粒微量 内外面青灰色 堅緻	覆土中位 20%

第6号土坑〔第232図、PL.36〕

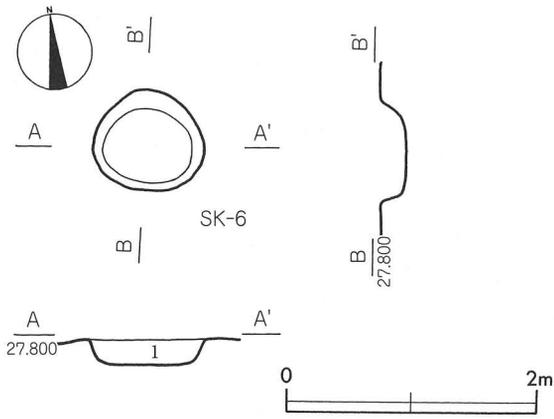
位置 調査区ほぼ中央S・T-24グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。他の遺構と重複はみられず、南側に第54号住居跡が隣接している。

平面形・規模 円形を呈し、径は89×80cm、確認面からの深さは21cmを測る。

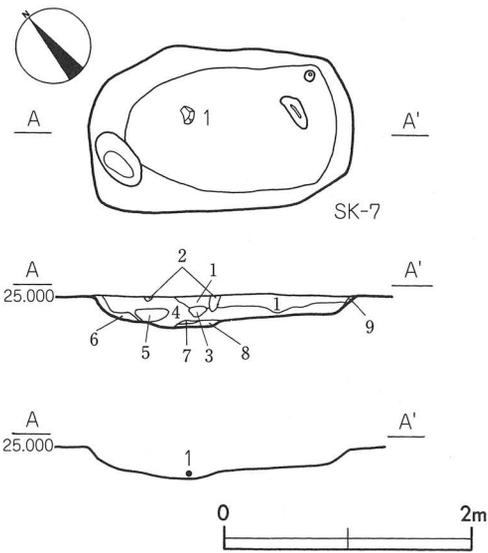
壁面・底面 壁は外傾して立ち上がっている。底面は上面と相似形をなしており、平坦である。

覆土 1層のため埋め戻し土と考えられる。

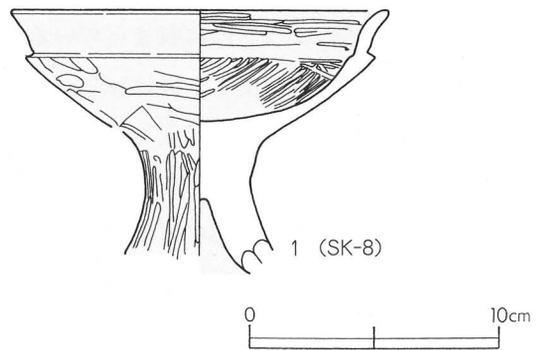
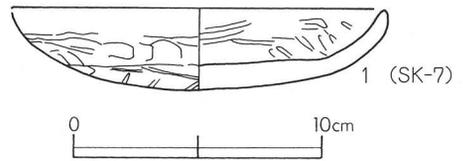
遺物 確認面で若干の骨片がみられた。



SK-6
1. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中・小中量 ローム粒少量



SK-7
1. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・粒少量
2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・粒中量
3. 7.5YR2/2 黒褐色
4. 7.5YR3/2 黒褐色 焼土粒・ローム小・粒微量
5. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土粒微量 ローム粒少量
6. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土小・粒・ローム粒少量 ローム小微量
7. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土・ローム粒少量 焼土粒中量 ローム小微量
8. 7.5YR4/4 褐色 ローム中・小・粒多量
9. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土小微量 焼土粒・ローム粒中量 ローム小少量



第232図 第6・7・8号土坑

所見 骨片がみられたことから、墓壙とも考えられるが、時期は不明である。他の土坑の時期が4世紀から8世紀代に相当することから、この範疇に収まる可能性が高い。

第7号土坑〔第232図、PL.34・102〕

位置 調査区南寄りP・Q-35・36グリッド、南に向かう斜面側標高25.0mに位置している。北側で第91号住居跡と重複しており、土層堆積状態から本土坑が新しいと判断した。

平面形・規模 長方形を呈し、長径2.12m、短径1.34m、確認面からの深さは24cmを測る。

長軸方向 N-52° -W

壁面・底面 壁は外傾して立ち上がっており、西側は比較的緩やかである。底面は上面とほぼ相似形をなしており、起伏・下部ピットを有していた。下部ピットの深さは東側の小ピットが11cm、西側の壁際が9cmである。

覆土 9層に分層された。黒褐色土や暗褐色土がブロック状に混入しており、埋め戻し土と判断できる。

遺物 土坑底面直上より土師器坏が1点出土している。丸底で口縁部にかけて緩やかに内湾している。内外面に黒色処理が施されているが、外面下半は痕跡が希薄であった。

所見 土坑底面から遺物が出土していることと埋め戻していることから墓壙の可能性が考えられよう。時期は8世紀前半代と思われる。

第7号土坑出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第232図 1	土師器 坏	口径 [14.9] 器高 3.4	丸底の底部から緩やかに丸みを帯びて立ち上がる。	内底面は細かなヘラ磨き、口縁寄りには横位に磨かれる。外面ナデとヘラ磨き、口縁は横ナデ。	長石粒・雲母粉微量 内外面橙色 普通	底面直上 30%

第8号土坑〔第232図、PL.102〕

位置 調査区西側H-23グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。第27号住居跡と重複しており、住居のプラン内に収まっている。出土遺物と土層堆積状態から本土坑が古いと判断した。

平面形・規模 円形を呈し、径は1.07×0.85m、確認面からの深さは80cmを測る。

壁面・底面 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は上面と相似形を呈しており、平坦である。

遺物 土師器の高坏が出土しているが、出土位置は不明である。口縁部は外反し、強く屈曲する稜を境に体部外面は直線的に脚部に至る。脚部は中空で器厚は坏部に比して著しく厚い。坏部内面と脚部外面はヘラ磨きが、また、全面に黒色処理が施されている。

所見 出土土器は7世紀後半代と考えられるが、明確に土坑に伴う遺物が判断がつかない。土坑の性格も不明である。

第8号土坑出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第232図 1	土師器 高坏	口径 [14.9] 器高 (9.8)	裾部は中央でやや括れ、坏部は外傾して立ち上がる。口縁部は稜を生じて、更に外反する。	裾部外面、坏部内面は入念なヘラ磨き調整。坏部外面はナデ、口縁寄りは横ナデ。	粉質で精良 内外面黒色 良好	覆土 30% 内外面に黒色 処理

7. 溝

8条発見されている。調査区の南東部以外の広範囲でみられた。第6・7号溝は調査時に別の番号を付したが一連の溝と判断した。第5号溝は欠番である。

第1号溝〔第233図、PL.36〕

位置 調査区西側のF～H-7～20グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。北端は攪乱により壊されており、南端は第6・7号溝と接し途切れている。第1・2・14・26・43号住居跡と重複しており、土層堆積状態から当溝が新しいと判断した。また、第3・4号溝とも重複しており、第4号溝より古い、第3号溝との新旧関係は不明である。

規模 全長60.5m、幅0.6～1.9mの、基本形は南北に縦断している溝である。途中大きく2度屈曲しており、北端から最初の屈曲まで約15m、次の屈曲までの直線部は約28.5m、2度目の屈曲から南端部まで約17mを測る。2度目の屈曲以南は緩やかに湾曲している。確認面からの深さは20～40cmを測り、南下するにつれ若干浅くなる。

長軸方向 N-13° -E（屈曲部間の直線箇所を計測）。

断面形 皿状を呈する箇所と平坦な底面から、壁が外傾気味に立ち上がる箇所がみられた。直線部の南側で一部有段状を呈しており、東側が深くなっている。

遺物 出土していない。

所見 当溝は重複する全ての住居跡より新しいことから、溝の上限は推測できる。すなわち、住居の中で最も新しい第14・26号住居跡が9世紀後半代であるため、これを遡ることはない。他の重複する溝の時期は厳密には不明のため、当溝の時期は9世紀末以降とするに留めたい。

第2号溝〔第234図、PL.102〕

位置 西側の調査区域際-（マイナス）A～C-10～25グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置しており、溝の両端は調査区外に延びている。第9号住居跡・第2号掘立柱建物跡・第6・7号溝と重複しており、土層堆積状態から住居・建物跡より新しいと判断したが、他の溝との新旧関係は不明である。

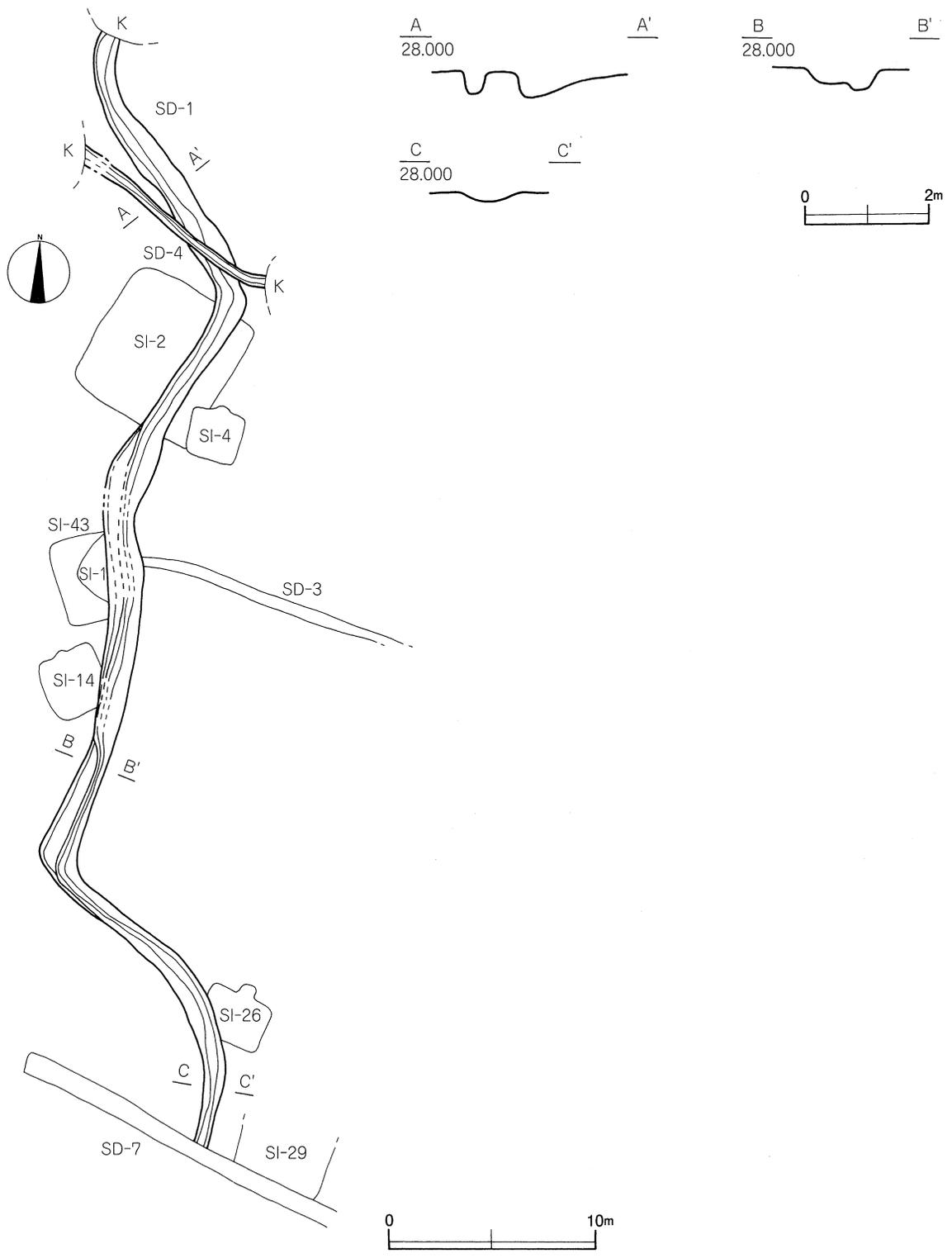
規模 全長67.9m、幅0.6～1.3mの、基本形は南北に縦断している溝である。途中大きく2度ほぼ90度に屈曲しており、北端から最初の屈曲（南北方向）まで約50m、次の屈曲までの直線部（東西方向）は約10.5m、2度目の屈曲から南端の調査区壁まで約7.4mを測る。屈曲間は直線で第1号溝のように膨らむ箇所はない。確認面からの深さは0.4～1.05mを測り、南下するにつれ若干浅くなる。

長軸方向 N-13° -E（直線箇所の最長部を計測）。これは第1号溝と同じで、両溝は平行関係にある。

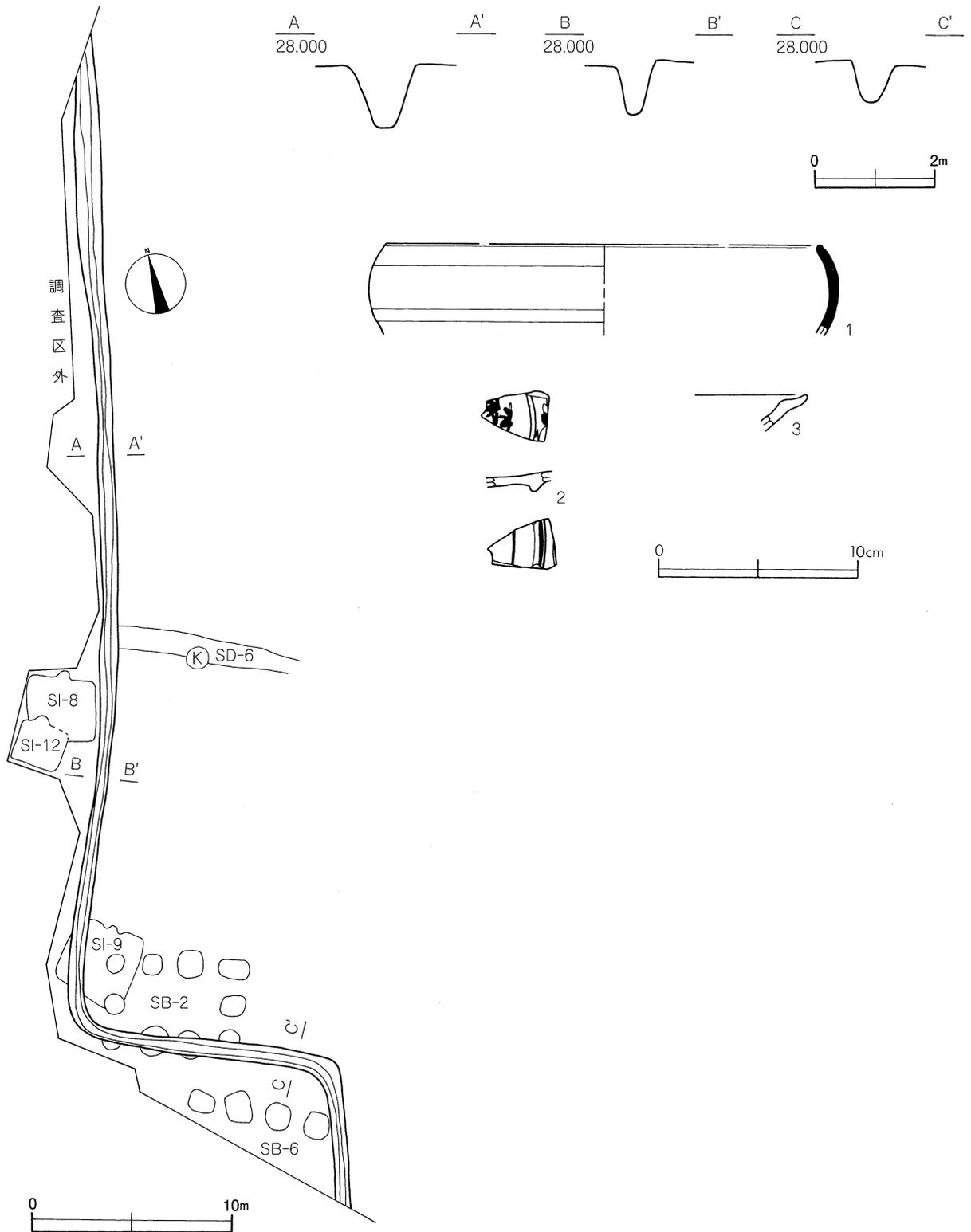
断面形 底面幅の狭い逆台形を呈しており、やや丸底気味の箇所もみられる。

遺物 全て覆土中からの出土である。No.1は須恵器の鉢、No.2は肥前系の染付皿、No.3は瀬戸・美濃系の皿である。

所見 当溝は重複する住居跡・掘立柱建物跡より新しいことから、溝の上限は推測できる。すなわち、両遺構のうち新しい掘立柱建物跡は8世紀後半代であるため、これを遡ることはない。また、第1号溝と長軸方向が同じで平行関係にあることから第1号溝との関連も窺える。第1号溝は9世紀末以降と推測しており、当溝もこれに近い時期が考えられる。



第233図 第1・4号溝



第234図 第2号溝・出土遺物

第2号溝出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第234図 1	須恵器 鉢	口径 [21.8] 最大径 [23.4] 器高 (4.6)	口縁部が強く丸みを帯びて内湾する、鉄鉢模倣の鉢。	内外面横ナデ。	雲母粉微量 外面灰白色 内面白 色 普通	覆土 10%
第234図 2	肥前系 染付皿	器高 (1.0)	短い高台に砂が付着。高台畳付以外施釉。	内面に2重沈線内にリンドウ状の葉文を配し、外面は高台内に1本、高台外面に2本沈線を配する。	精良 胎土灰白色 外面明 緑灰色 堅緻	覆土 5% 肥前系
第234図 3	陶器 皿	破片長 (1.7)	緩やかに立ち上がり口唇部で僅かに外反する皿の口縁部。	口唇部に灰釉。内面微かに長石釉。外面無釉。	良土 淡黄色 良好	覆土 100% 瀬戸美濃系

第3号溝〔第235・236図、PL.102〕

位置 調査区中央よりやや北側 G～2 E-13～23グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置しており、東端は調査区外に延びている。第16・23・24・30・72号住居跡・第1・10号溝と重複しており、土層堆積状態から全ての住居跡より当溝が新しいと判断した。第1号溝との新旧関係は不明、第10号溝より古いと思われる。

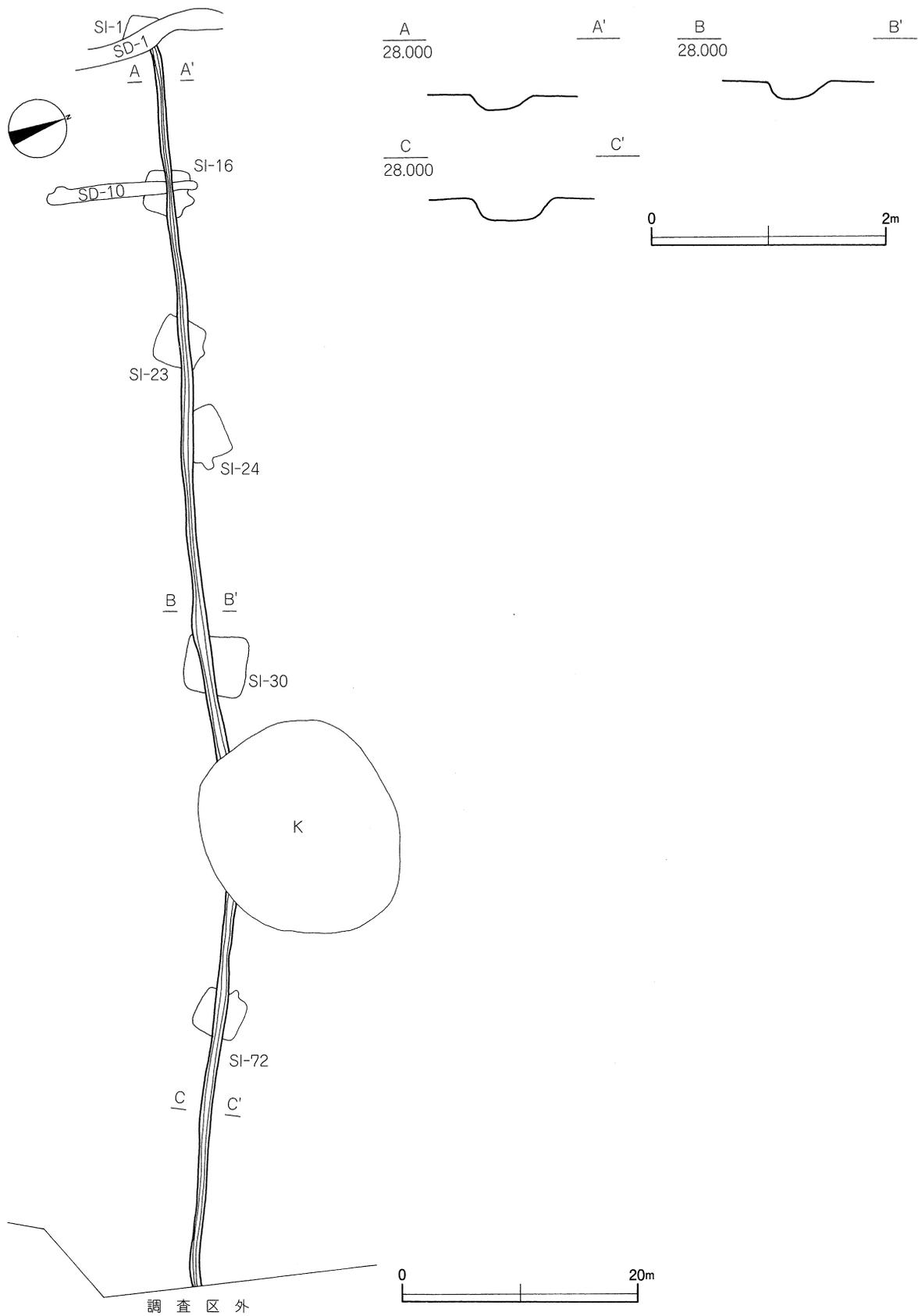
規模 全長108.5m、幅0.5～1.2m、東西方向に延びており、大きな屈曲がない直線的な溝である。確認面からの深さは16～28cmを測る。深さは比較的一定である。

長軸方向 N-80° -W

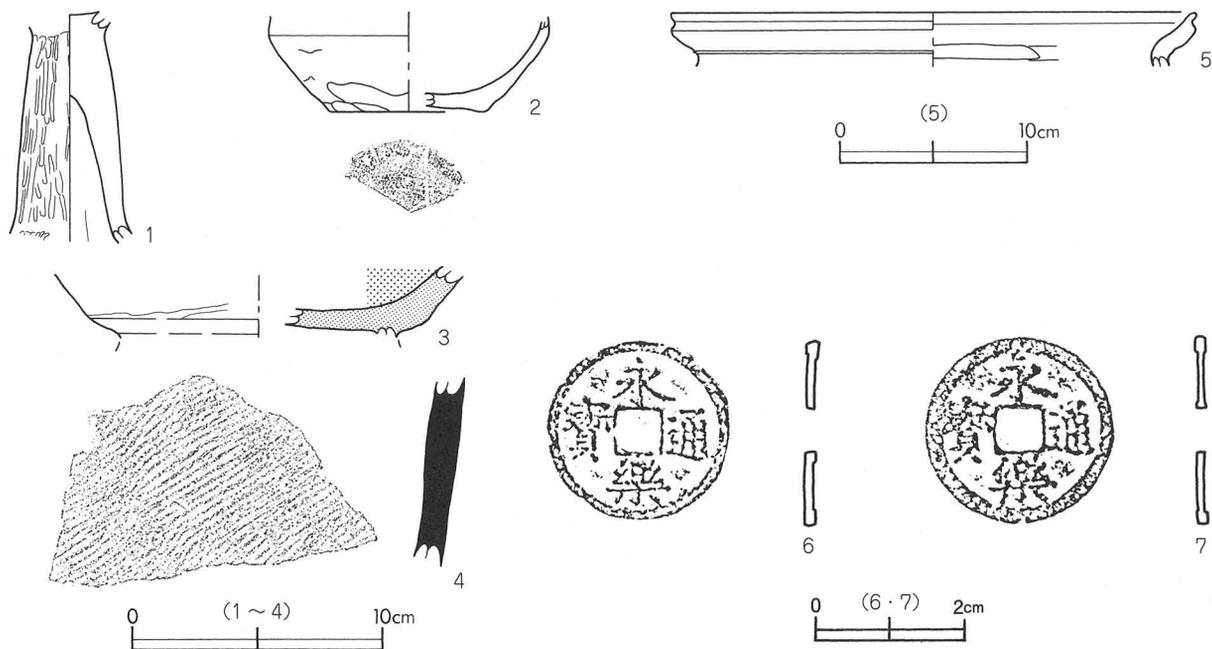
断面形 底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。皿状を呈する箇所もみられた。

遺物 全て覆土中からの出土である。No.1は土師器高坏の脚部である。中空で外面はヘラ磨きが施されている。No.2は土師器椀であろう。平底で底面に木葉痕が観察された。No.3は灰釉陶器の壺甕類である。体部下半に稜を有し、全体に大振りの器形である。内面の一部に釉がみられた。No.4は須恵器大甕の体部片である。外面は平行線の叩き目がみられる。No.5は土師器の甕である。口縁端部に稜を有し、全体に短く外反している。No.6・7は「永楽通宝」である。字体と銭の大きさから中世の模倣銭と考えられる。また、図示はしていないが絹雲母片岩製の砥石が1点出土している。

所見 当溝は重複する住居跡より新しいことから、溝の上限は推測できる。すなわち住居のなかで最も新しい第24号住居跡は9世紀末以降であるため、これを遡ることはない。加えて覆土中から様々な遺物が出土していることは、他時期の遺構との重複によるものと思われる。



第235図 第3号溝



第236図 第3号溝出土遺物

第3号溝出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第236図 1	土師器 高坏	器高 (9.0)	軸部が中空の高坏。下方に向い僅かに開き気味。	外面は縦位のヘラ磨き、内面横ナデ。坏部内底面ヘラ磨き。	長石・石英粒微量 内外面橙色 普通	覆土 60% 一部被熱黒色化
第236図 2	土師器 碗	最大径 [11.2] 底径 [6.0] 器高 (4.0)	平底の底部から外傾して立ち上がる。内面は緩やかに立ち上がる。	底部周辺指頭痕。体部内外ナデ。粘土紐輪積み成形。	均質な良土 内外面橙色 良好	覆土 20% 底部木葉痕
第236図 3	灰釉陶器 高台付碗	底径 [11.0] 器高 (2.5)	平底の底部から外傾して立ち上がる。高台は欠損。	付け高台。自然釉が体部内面のみ付着。内外面ナデ。	長石・石英・黒色粒 多量 内外面橙色 普通	覆土 20%
第236図 4	須恵器 甕	破片長 (7.5)	須恵器甕の体部。破面観察からは下半部の破片の可能性ある。	外面平行条線叩きが重複押捺。内面指ナデ。	長石・石英少量 内外面オリーブ灰色 普通	覆土 5%
第236図 5	土師器 甕	口径 [21.0] 器高 (2.2)	窄まる頸部から外反する口縁部。口唇部はS字状に屈曲し、立ちあがる。	内外面横ナデ成形。頸部ヘラ状のナデ。	長石・石英少量 内外面にぶい橙色 普通	覆土 10%

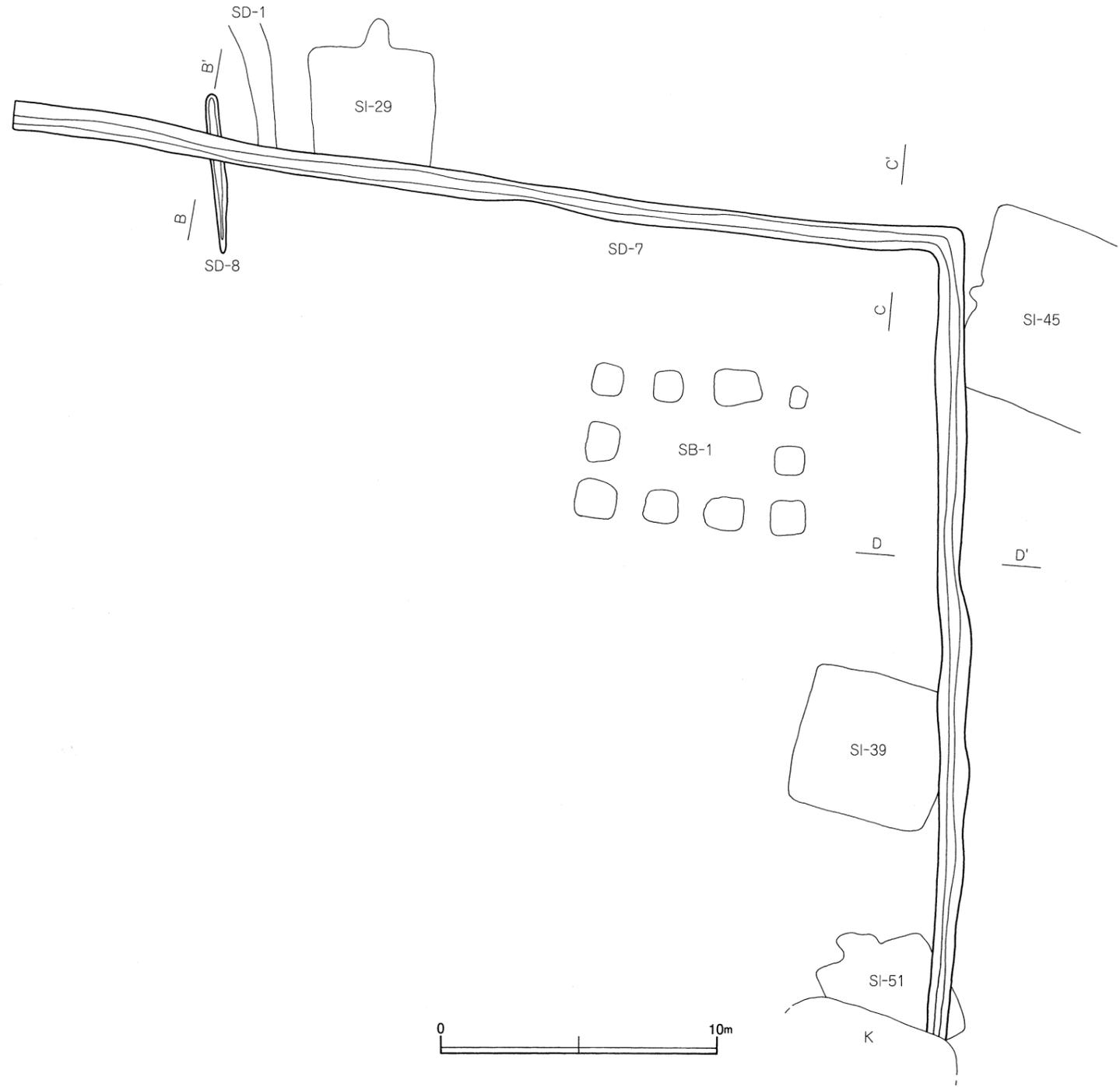
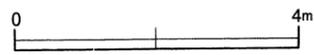
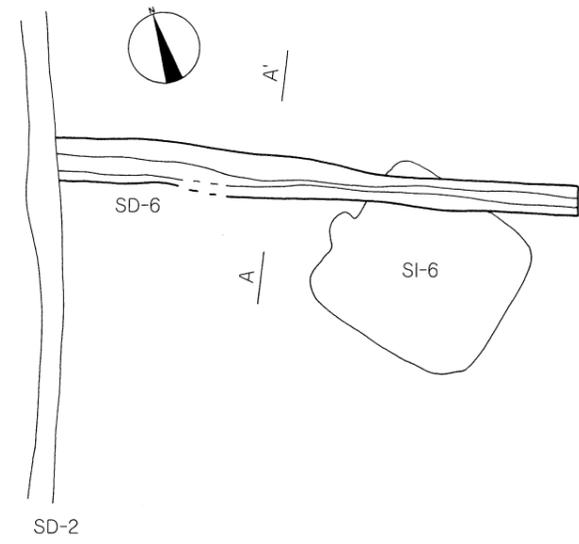
図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第236図 6	銭 永楽通宝	2.4	2.4	0.14 ~ 0.15	4	7よりも厚手で銭銘も明瞭。	覆土 完形
第236図 7	銭 永楽通宝	2.5	2.5	0.1 ~ 0.11	3	6よりも薄手で、銭銘も磨耗が著しい。	覆土 完形

第4号溝 [第233図]

位置 調査区北西寄り、F~H-8・9グリッド、標高27.4m付近の台地平坦面に位置している。第1号溝を斜めに横断するように重複しており、また、溝の両端は攪乱により壊されている。第1号溝より新しいと判断した。

規模 全長10.8m、幅50~90cmを測る東西方向に延びる溝である。確認面からの深さは40cm前後でほぼ均一であった。

長軸方向 N-57° -W



第237图 第6·7·8号溝

断面形 底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。

遺物 出土していない。

所見 第1号溝の時期を9世紀末以降と推測しており、当溝はそれより新しい時期とするに留めたい。

第6・7号溝〔第237・238図、PL.102・103〕

位置 調査区中央から西側にかけてのA～M-17～29グリッド、標高27.0～27.5mの台地平坦面から南側に向かう斜面の上部に位置している。第6・29・39・45・51号住居跡と重複しており、土層堆積状態からいずれの住居跡よりも新しいと判断した。また、溝の西端は第2号溝と接しており、東西方向の中ほどで第1・8号溝と重複している。第1号溝との新旧関係は不明であるが、第8号溝よりは新しいと判断した。南端は攪乱と重複しており、また斜面の下方に向かうため確認できなかった。当初は異なる遺構と判断したため別名称を付したが、規模・方向等がほぼ同じことから同一の溝と判断した。但し、名称は第6・7号溝と調査時のものを付している。

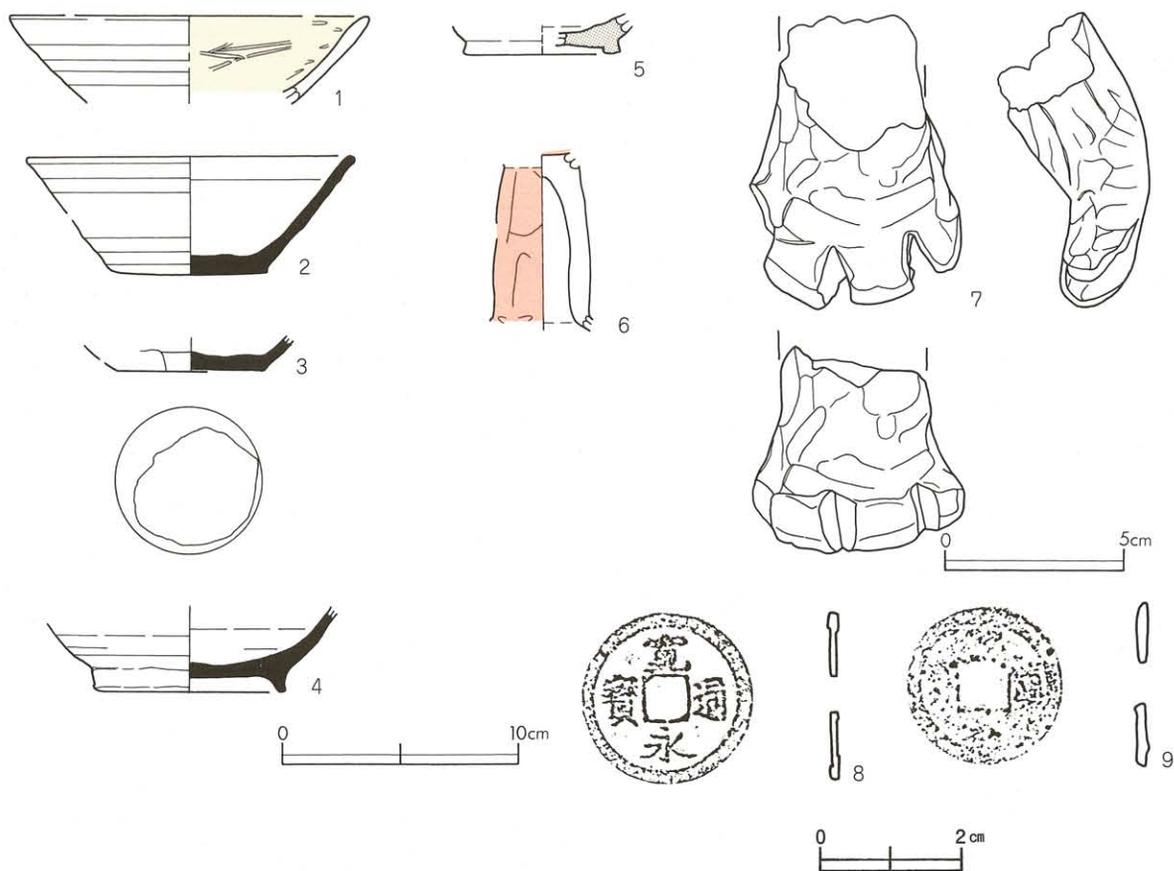
規模 西から東に向かい直線的に調査区の中ほどまで横断し、M-22グリッド付近で90度屈曲して同様に直線的に南に向かっている。この東西方向の長さは52.2m、南北は28mで、全体ではおよそ80.2mを測る。幅は0.6～1.2m、確認面からの深さは40～68cmを測る。東西方向の深さは60cm前後であり差異は認められないが、南北方向は南北のほぼ中央がやや高くなり、その比高差は北側で約25cm、南側で約40cmを測る。また、東西方向の溝はE-19グリッド付近で1箇所途切れる部分があり、屈曲箇所では区画された内側への出入り口部と考えられる。途切れている範囲は長さ2.3mである。

長軸方向 N-70°-W（東西方向）、N-20°-E（南北方向）

断面形 底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

遺物 全て覆土中からの出土である。No.1は土師器の坏もしくは高台付の器形となる。内黒で、内面にはヘラ磨きが施されている。No.2・3は須恵器の坏でNo.3は底面に研磨面がみられた。No.4は須恵器の高台付椀である。No.5は灰釉陶器で、長頸壺の底部と思われる。No.6は土師器の高坏脚部で外面と坏部内面に赤彩がみられた。No.7は獣脚の一部と思われる。欠損しているが4本指の表現がみられる。No.8・9は「寛永通宝」である。

所見 当溝は重複する住居跡より新しいことから、溝の上限は推測できる。すなわち住居のなかで最も新しい第6号住居跡は8世紀前半代であるため、これを遡ることはない。また、前述したようにこの区画内に位置する掘立柱建物跡との関連も伺えることから、この範囲内の掘立柱建物跡の2時期（8世紀後半～、9世紀後半～）に渡り機能していたと考えられる。



第238図 第6・7号溝出土遺物

第6・7号溝出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)				器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		口径	底径	器高	重量 (g)				
第238図 1	土師器 坏	[15.2]		(3.6)		外傾して立ち上がる口縁部。	外面ナデ。内面細かな横位のヘラ磨き。	長石粒微量 外面橙色 内面黒色 普通	覆土 15% 内面黒色処理
第238図 2	須恵器 坏	13.8	6.4	5.0		平底の底部から斜位に直線的に立ち上がる。	外底面ヘラ削り調整。体部底面寄り2mm幅で微かにヘラ調整。体部内外面横ナデ。	長石・石英粒微量 内外面灰色 普通	覆土 20%
第238図 3	須恵器 坏	[6.0]		(1.4)		平底の底部。	外底部ヘラ削り調整。外体部底面寄りヘラ削り調整。内面ナデ。	長石粉微量 内外面灰色 普通	覆土 20% 内外面に黒痕 転用硯か
第238図 4	須恵器 高台付椀	8.0		(3.6)		回転ヘラ切りの平底の底部に付高台。体部は丸みをもって立ちあがる。	内外面ロクロナデ。底部接合のために支持粘土付着。	雲母粉少量 内外面灰白色 軟質	覆土 50%
第238図 5	灰釉陶器 長頸壺	[6.5]		(1.7)		平底の底部に付け高台。体部は緩やかに立ちあがる。	外面は施釉なし。内底面に降灰自然釉。	長石粉微量 良土 内外面灰色 堅緻	覆土 10%
第238図 6	土師器 高坏			(7.3)		中空の高坏軸部。上下で僅かに括れるも、径はほぼ均一。	体部外面上下にヘラ磨き。坏部内面ヘラ磨き。内面ナデ。	長石・雲母粉を微量含む 外面赤色 内面橙色 普通	覆土 40% 内外面赤彩
図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)				
第238図 7	土製品 獸脚	(8.2)	(5.6)	(5.6)	(132)	4本の指(1本欠損)からなる獸脚の一部。設置面は丸味を帯び、面取りも無い。全体はナデ調整、上面一部に指頭痕。指は工具による切込みで成形か。	長石・石英多量、雲母粉微量 橙色 普通	覆土 100%	
図版番号	器種	法量				特徴	備考		
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
第238図 8	錢 寛永通宝	2.4	2.4	0.14~0.15	2	古寛永。表面の磨耗が進む。	覆土 完形		
第238図 9	錢 寛永通宝	2.2	2.2	0.11~0.11	2	新寛永。腐食が著しい。	覆土 完形		

第8号溝〔第237・239図、PL.103〕

位置 調査区西寄りG-20・21グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。第6・7号溝と重複しており、おそらく当溝が古い。

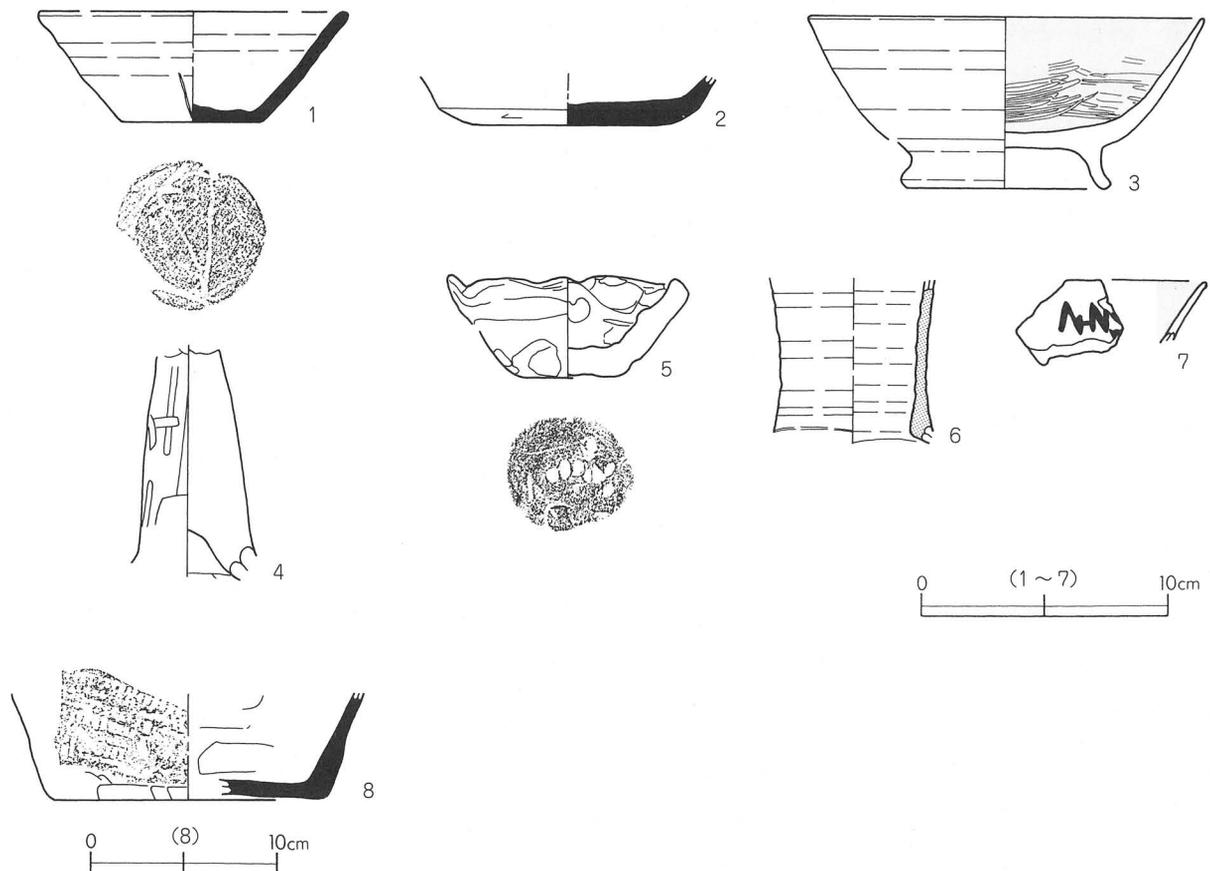
規模 南北に縦断する溝で、全長5.8m、幅30～50cm、確認面からの深さは24cmを測る。第1号溝とほぼ平行に、第6・7号溝と直交している。両端部は丸みを帯びていた。

長軸方向 N-14° -E

断面形 皿状を呈しており、緩やかに立ち上がっている。

遺物 他の溝と比べて小規模であるが、覆土中から多くの遺物が出土している。No.1は須恵器の坏である。口縁端部は丸みを帯び、底部から直線的に外傾している。底面に木葉痕が観察された。No.2は須恵器の坏で、底部直上に稜を有し、外傾して立ち上がっている。No.3は土師器の高台付椀である。内黒でヘラ磨きが施されていた。No.4は土師器の高坏の脚部、No.5は土師器の手捏ね土器で成形時の指頭痕が残る。No.6は灰釉陶器の長頸壺の頸部である。No.7は土師器の椀で内黒、外面に墨書がみられるが判読できなかった。No.8は須恵器の小型甕であろうか。外面に叩き目をもつ。

所見 遺物は7世紀から9世紀にかけてのもので時期的なまとまりはみられない。当溝は、他の溝に比べて著しく規模が小さく、性格も異なると考えられる。重複する第6・7号溝の時期を8世紀後半以降と推測しており、これより当溝は古いとするに留めたい。



第239図 第8号溝出土遺物

第8号溝出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第239図 1	須恵器 坏	口径 [12.2] 底径 5.3 器高 4.4	径の小さな底部から、体部は直線的に立ち上がる。	底部ヘラ削り調整。体部底面寄りヘラ削り調整。それ以外は横ナデ。	長石・石英粒多量 内外面灰オリーブ色 やや軟質	覆土 40% 底面木葉痕
第239図 2	須恵器 坏	底径 [7.4] 器高 (2.0)	底部は径が大きく、体部下位にヘラ削りによる稜がつく。	底部回転ヘラ切り。体部下位に回転ヘラ削り。内面ナデ。	長石・雲母・黒色粒 少量 外面暗灰色 内面灰色 普通	覆土 40%
第239図 3	土師器 高台付碗	口径 15.7 高台径 8.1 器高 6.8	高台は僅かに外反しながら「ハ」字に開く。体部は強い角度で立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面横ナデ。内面黒色処理と横位の磨き。	雲母粉多量、長石粒 少量 内面黒色 外面橙色 普通	覆土 80% 内面黒色処理
第239図 4	土師器 高坏	器高 (9.1)	軸部は中実で、底面に窪みをもつ。	外面縦位のヘラ磨き。内面ヘラナデ。	長石・石英多量 内外面橙色 普通	覆土 50%
第239図 5	土師器 ミニチュア坏	口径 9.4 底径 4.0 器高 4.0	平底の底部から外傾して立ち上がる。口縁部は波状に凹凸する。	底面に種又は粉痕。粘土紐の輪積み成形。内外面に指頭痕が著しい。	粉質な良土 内外面浅黄橙色 軟質	覆土 50%
第239図 6	灰釉陶器 長頸壺	器高 (6.0)	長頸壺の頸部。器壁が薄く、外反気味に直立する。	下方内面に体部との接合痕。外面施釉し、内面自然釉付着。	長石粉微量 良土 釉暗緑色 胎土暗灰色 堅緻	覆土 40%
第239図 7	土師器 高台付碗	破片長 (2.2)	器壁が薄く、直線的にのびる。	外面に回転ナデ。	雲母粉多量、長石・ 石英粒少量 内面黒色 外面に ぶい赤褐色 普通	覆土 80% 内面黒色処理 外面に墨書
第239図 8	須恵器 鉢	底径 [14.4] 器高 (5.8)	底面は凹凸有り。体部はやや外傾して直立する。	体部外面細かな格子叩き、底部寄りはナデ・指頭痕。内面ナデと指頭痕。	長石・石英粒少量 内外面灰色 普通	覆土 10%

第9号溝〔第219図〕

位置 調査区南西寄り F-28・29グリッド、南に向かう斜面の上位標高27.4m付近に位置している。第4号掘立柱建物跡と重複しており、土層堆積状態から当溝が新しいと判断した。

規模 およそ南北方向に縦断している溝で、平面形は北側で先細り状、南側端部は平坦面を有していた。全長6.9m、幅0.8～1.2m、確認面からの深さは13～23cmを測る。

長軸方向 N-10° -W

断面形 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

遺物 出土していない。

所見 重複している第4号掘立柱建物跡の時期は8世紀後半代と推測しており、当溝はこれより新しいといえる。規模の小さい第8号溝とも形状が異なっており、性格等は不明である。

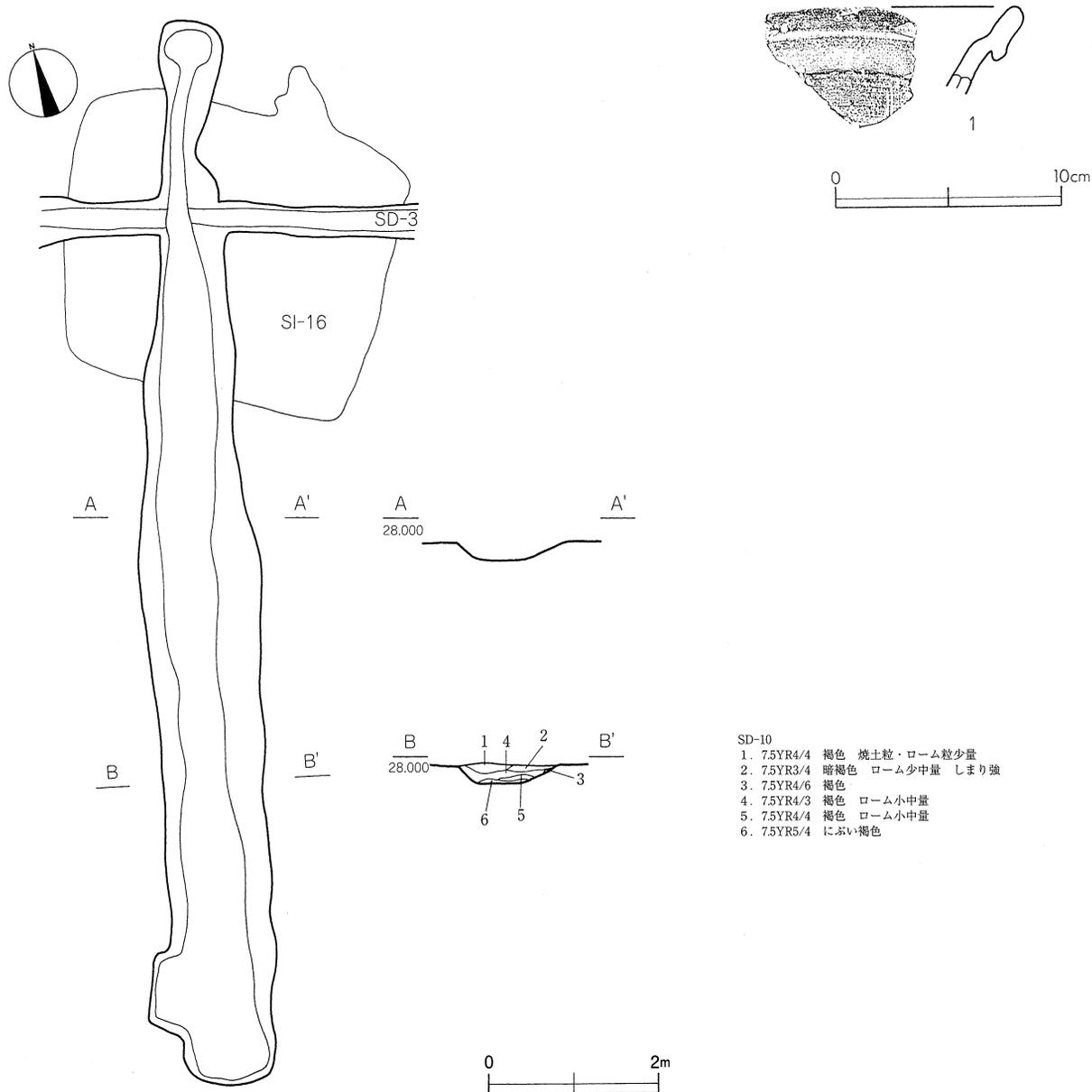
第10号溝〔第240図〕

位置 調査区北東寄り、I-13～16グリッド、標高27.5m付近の台地平坦面に位置している。第16号住居跡・第3号溝と重複しており、土層堆積状態から当溝が最も新しいと判断した。第3号溝と直交している。

規模 およそ南北に縦断する溝で、平面形は両端がやや角張る長方形を呈する。全長12.6m、幅0.4～1.42m、確認面からの深さは17～25cmを測り、中央部にかけてやや深くなっている。住居内にあたる北側の幅は、住居覆土を調査中に溝の確認面が下がってしまったため全体に細くなっており、住居以南の幅が本来の幅に近いと考えられる。

長軸方向 N-18° -E

断面形 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。



- SD-10
1. 7.5YR4/4 褐色 焼土粒・ローム粒少量
 2. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム少中量 しまり強
 3. 7.5YR4/6 褐色
 4. 7.5YR4/3 褐色 ローム小中量
 5. 7.5YR4/4 褐色 ローム小中量
 6. 7.5YR5/4 にぶい褐色

第240図 第10号溝・出土遺物

覆土 6層に分層された。いずれも比較的近似した土層である。覆土上層に焼土粒が少量混入していた。

遺物 覆土中から播鉢片が1点出土した。

所見 時期は重複する第16号住居跡が9世紀後半代であることから、これより新しいとするに留めたい。性格等不明である。

第10号溝出土遺物

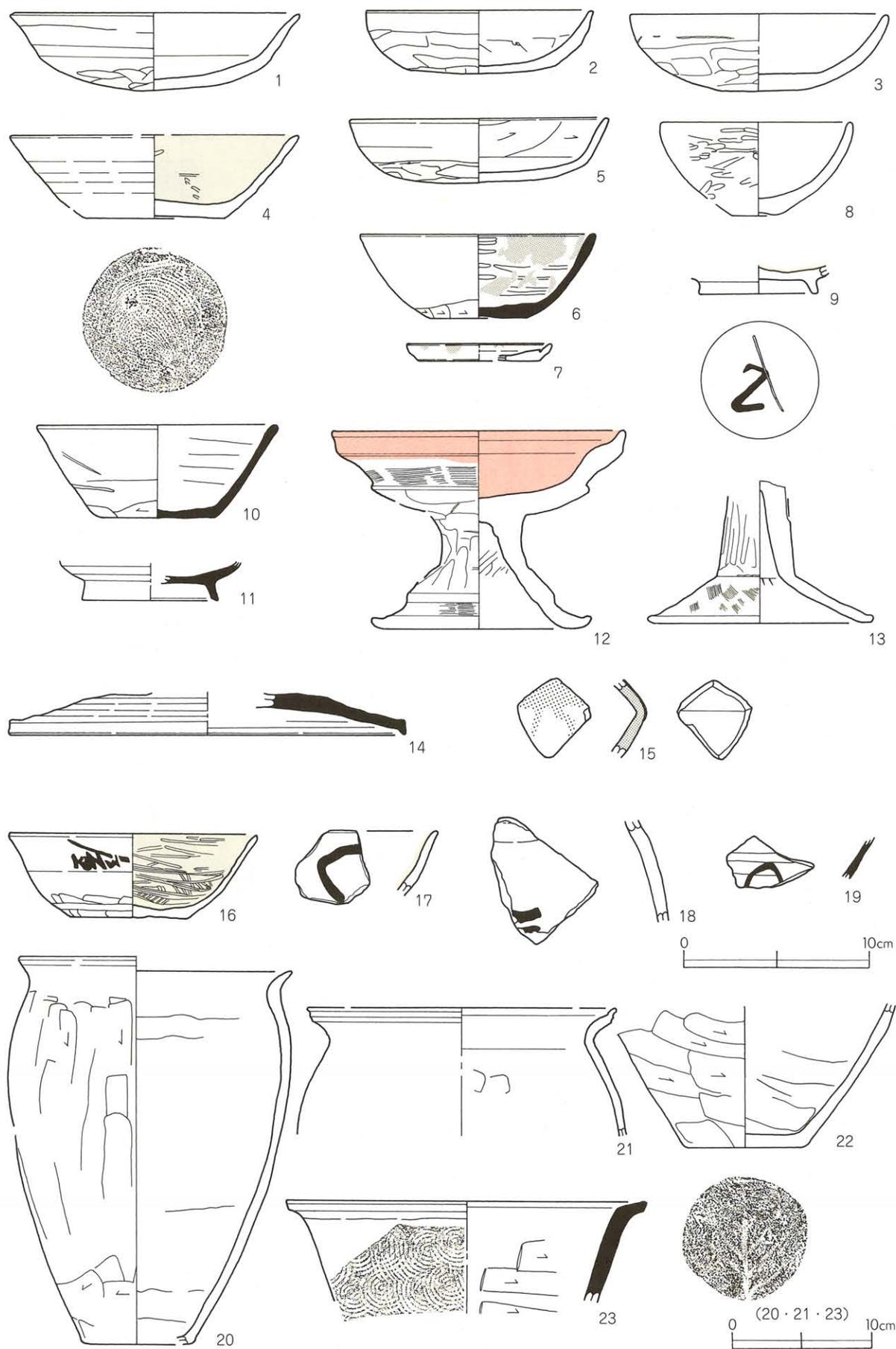
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第240図 1	陶器 播鉢	破片長 (4.0)	外傾する体部。口縁部は縁帯をなし、外面に条線が巡る。	体部内面卸目。内外面鏽釉。	均質で良土 外面暗赤褐色 内面 浅黄橙色 良好	覆土 5% 瀬戸美濃系

8. 遺構外出土遺物〔第241～243図、PL.103・104〕

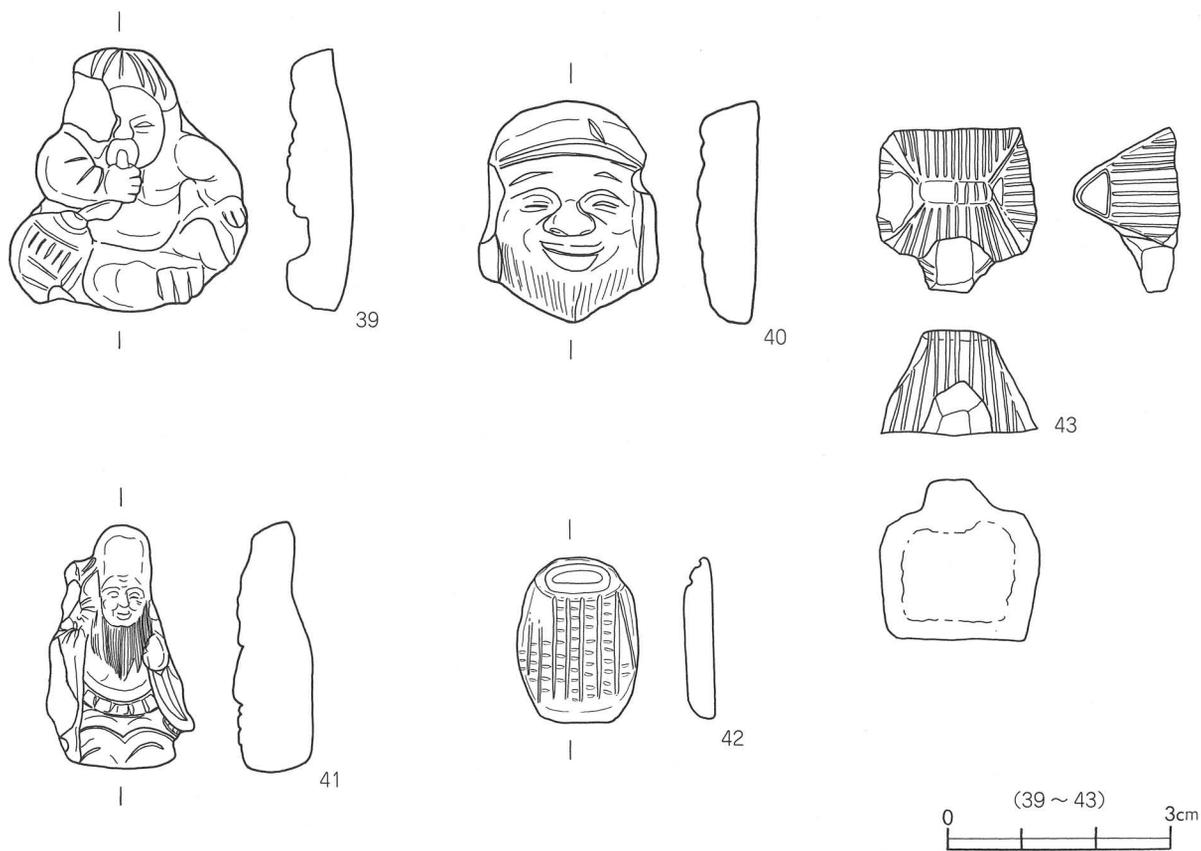
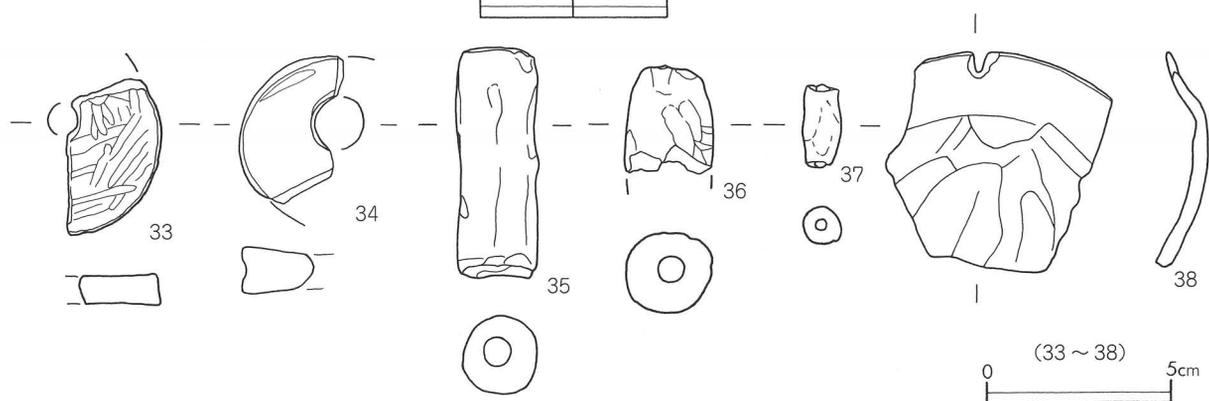
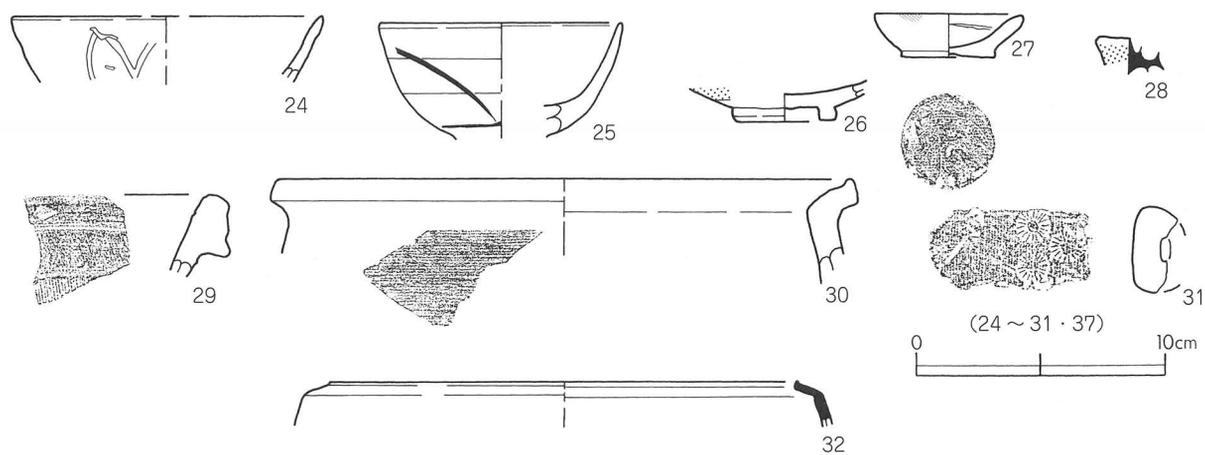
以下に、弁才天遺跡から出土した遺構外出土遺物を挙げる。この中には表採・表土出土のほか、遺構内から出土したが明らかに当該遺構には伴わない異なる時代の遺物を含んでいる。概ね、検出遺構の多い古墳時代前期・後期、奈良・平安時代のものが多数を占めている。

遺構外出土遺物

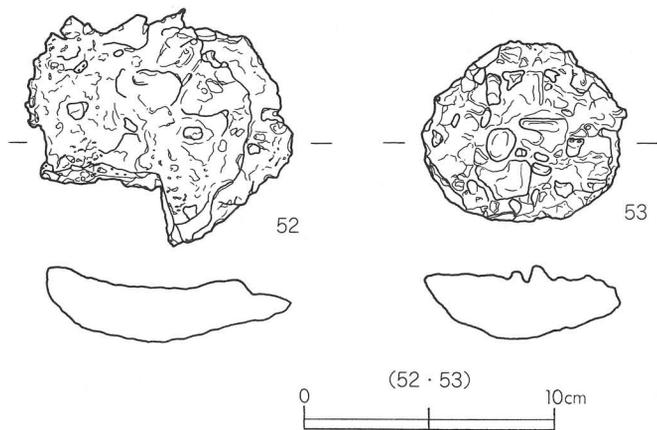
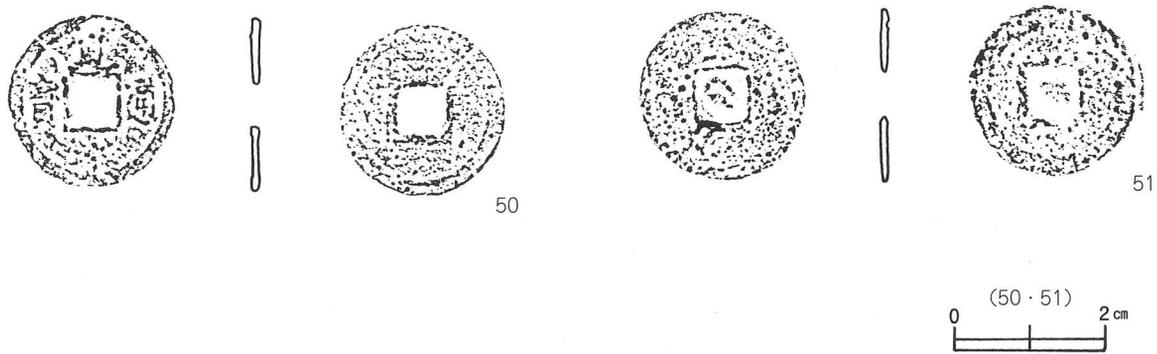
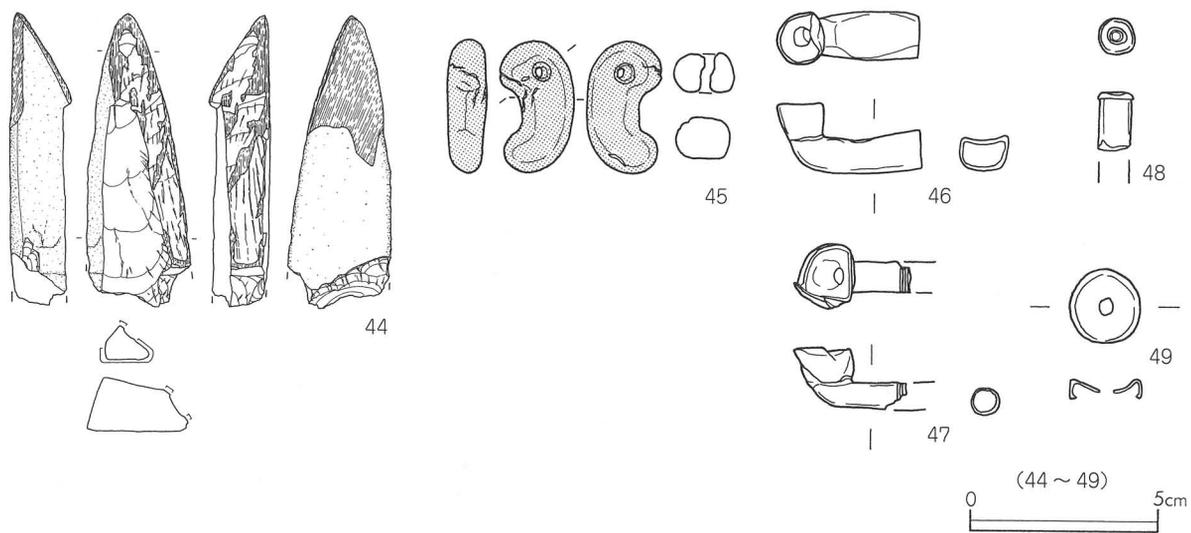
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第241図 1	土師器 坏	口径 器高 15.6 4.2	底部は丸底で、微かな稜をもって口縁部が立ち上がる。	外底面ヘラ削り。体部内外横ナデ。内面ナデ。	長石粒少量、雲母微量 内外面橙色 普通	E-6 100%
第241図 2	土師器 坏	口径 器高 12.2 3.3	丸底の底部から緩やかに丸みをもって立ち上がる。	底部・体部下方はヘラ削り調整。口唇部横ナデ。内面ナデ。	長石粒少量、雲母・石英微量 内外面橙色 普通	表土 100% 口縁部黒色処理
第241図 3	土師器 坏	口径 底径 器高 [13.8] [4.2] 4.2	底径の小さな平底から丸みをもって立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部下方は横ヘラ削り。体部内面横ナデ。	長石・雲母微量 内外面橙色 普通	表土 30%
第241図 4	土師器 坏	口径 底径 器高 15.6 7.6 4.5	低部は緩やかな丸底で、口縁部は強い角度で立ち上がる。	底部回転糸切痕、周縁をヘラ調整。体部外面横ナデ。体部内面横位のヘラ磨き。内底面ヘラ磨き。	長石・雲母粉微量 外面にぶい黄橙色 内面黒色 普通	G-20 10% (底部100%残存) 内面黒色処理
第241図 5	土師器 坏	口径 器高 13.9 3.5	底部は緩やかな丸底で、口縁部は強い角度で立ち上がる。	外底面横ヘラ削り。体部横ナデ。内底面ナデ。	良土 内外面橙色 普通	SI-62 90%
第241図 6	須恵器 坏	口径 底径 器高 [12.6] [5.1] 4.4	平底の底部から緩やかに丸みをもって立ち上がる。二次焼成を受けるか。	底部回転ヘラ切り後、横ヘラ削り調整。体部下位にヘラ削り。	長石・石英粒微量 内外面黒色 軟質	SI-16 20% 体部内面に黒漆? 付着
第241図 7	土師器 小皿	口径 底径 器高 [7.8] [6.4] 0.9	平底の底部から僅かに立ち上がる。	底部回転糸切痕。内底面回転ナデ。	長石粉粒微量 内外面橙色 普通	SI-16 30% 体部外面2箇所 に煤付着
第241図 8	土師器 碗	口径 底径 器高 [10.2] [2.6] 5.0	径の小さな平底から丸みを持って立ち上がる。	体部上半横位のヘラ磨き、下半ナデ。内面ナデ。	長石・石英多量 内外面橙色 普通	表土 20%
第241図 9	土師器 高台付坏	底径 器高 6.2 1.6	回転ヘラ切りの底部に付高台。内底面は中央が膨らみ、周辺が浅く溝状に窪む。	内底面黒色処理の上、横ヘラ磨き。高台接地面に窪み。高台内に1条線刻。	白色微粒芯、白雲母微量 内面黒色 外面橙色 普通	表土 90% 内面黒色処理 墨書「乙」
第241図 10	須恵器 坏	口径 底径 器高 [13.0] 6.1 5.0	平底の底部から外傾して立ち上がる。口唇部に付着物著しい。	底部ヘラ削り調整。体部底面寄り部分的にヘラ調整。内外面ナデ。	長石多量 内外面青灰色 堅緻	L-20 50%
第241図 11	須恵器 高台付坏	底径 器高 [7.4] (2.0)	直立する高台から平底の底部に至る。薄手である。	付高台。底部回転ヘラ削り。体部ナデ。	長石・雲母粉微量 内外面灰白色 普通	表土 15%
第241図 12	土師器 高坏	口径 底径 器高 15.8 11.9 10.6	裾部から軸部下半。設置面からやや膨らみを持って立ち上がり、中空の軸部に至る。	裾部外面はハケメの上ヘラ磨き。軸部外面ヘラ磨き。内面はナデ。	長石・石英粒・雲母粉微量 内外面赤橙色 普通	H-29 80% 口縁部外面・ 坏部内面赤彩
第241図 13	土師器 高坏	底径 器高 12.1 (7.6)	中空の高坏軸部から裾部の破片。底部端部から緩やかに立ち上がり、軸部は垂直に立ち上がる。	軸部外面はヘラ磨き。裾部外面はハケメの上ヘラ磨き、内面はナデ。	長石・石英粒微量 内外面赤橙色 普通	F-8 80%
第241図 14	須恵器 蓋	口径 器高 [21.4] (2.3)	体部は平坦で大きく開く。	内外面回転ナデ。	雲母少量、粉質 内外面灰色 やや軟質	SI-19 10%
第241図 15	灰釉陶器 瓶類	破片長 (4.0)	長頸瓶等の肩部に相当する破片。外反気味に直立し、頸部に向い直線的に窄まる。	内面ナデ。外面淡緑色の釉が肩部から体部に向い垂れる。	長石粒微量 内外面灰色 堅緻	100% SI-19
第241図 16	土師器 碗	口径 底径 器高 [13.4] [6.2] 4.5	平底の底部から外傾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反気味を呈する。	底部回転ヘラ削り。体部外面底部寄りヘラ調整。	黒色微砂微量 内面黒色 外面橙色 良好	SI-39 30% 内面黒色処理 外面に墨書 「屋」
第241図 17	土師器 碗	破片長 (3.4)	緩やかに立ち上がり口唇部で僅かに外反する碗の口縁部。	内面横ヘラ磨き。外面ナデ。	雲母・長石粉微量 外面明赤褐色 内面黒色 普通	SI-19 100% 外面黒色処理 墨書あり
第241図 18	土師器 甕	破片長 (5.1)	緩やかに内湾する甕の肩部。	内面ナデ、外面ナデと頸部寄りは横ナデ。	白雲母・長石少量 内外面明黄褐色 普通	C-22 100% 墨書あり
第241図 19	須恵器 坏	破片長 (2.1)	坏の体部破片。外面に稜をもち、斜め上方に立ち上がる。	体部外面ロク横ナデ、内面ナデ。酸化炎焼成。	雲母粉微量 内外面にぶい橙色 軟質	表土 100% 墨書あり
第241図 20	土師器 甕	口径 底径 器高 [19.6] 7.8 27.8	長胴形の甕。平底の底部から垂直気味に立ち上がる。頸部で僅かに窄まり、口縁部は外反する。	口縁部横ナデ。体部内面全体に粘土紐輪積み痕を残す。	長石・石英・黒色細粒少量 内外面橙色 軟質	L-20 40% 外面体部中位 以下は被熱し、 赤色に変成
第241図 21	土師器 甕	口径 器高 22.1 (9.3)	丸みをもって窄まる体部と、外反する頸部、上方に直立する口唇部。	体部ナデ。頸部強い横ナデ。口縁部横ナデ。	長石・石英・雲母微量 内外面明赤褐色 普通	F-24 10% 肩に砂の付着



第241図 遺構外出土遺物 (1)



第242図 遺構外出土遺物 (2)



第243図 遺構外出土遺物 (3)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第241図 22	土師器 甕	底径 8.4 器高 (10.0)	平底の底部から斜め上方に立ち上る甕の下半部。	外面体部下右方向のヘラ削り、中位以上はナデ。内面ナデ。	石英粒多量、雲母粉微量 内外面にぶい赤褐色 二次焼成	SI-40 50% 底面木葉痕
第241図 23	須恵器 鉢	口径 25.8 器高 (8.0)	僅かに外傾して立ち上がり、口縁部で短く外反する。	体部外面同心円状叩き。他は横ナデ。口唇部は面取り。	雲母少量、やや粉質 内外面灰色 やや軟質	SI-19 5%
第242図 24	青磁 蓮弁文碗	口径 [12.5] 器高 2.9	外傾する口縁部片。	釉薬はやや濁り、素地が見える箇所もある。蓮弁は輪郭外側を削り、浮き彫り状を呈する。	精良 釉オリープ灰色 素地灰白色 堅緻	SI-20 5% 中世龍泉窯系
第242図 25	染付 碗	口径 [9.8] 器高 (4.6)	くらわんか手。底部から減厚しつつ、上方に立ち上がる。	体部外面に一筋文様線を、底部寄りに界線を描く。	精良 白色 堅緻	表土 10% 肥前系
第242図 26	青磁 碗	底径 4.0 器高 (1.8)	畳付を面取りした高台から緩やかに立ち上がる。	体部高台寄り以下は無釉。見込みに胎土目痕。	精良 胎土緑灰色 釉緑灰色 堅緻	表土 10% (高台径100%残存) 近世以降
第242図 27	土師質土器 小皿	口径 6.0 底径 3.8 器高 1.8	平底の底部から浅く立ち上がる。	底部回転糸切痕。体部ナデ。体部は粘土紐輪積み成形か。	長石粉・赤色粒少量 内外面明赤褐色 普通	C-22 90% 近世 口唇部スス付着
第242図 28	須恵器 蓋	上面径 2.5 残高 1.5	蓋のツマミ部分。短く外反し、上面は平坦化する。	遺存面全体に濃緑灰色の釉が付着。接地部分には釉が溜まる。	黒色微砂微量 良土 内外面灰色 良好	SI-41 40%
第242図 29	陶器 播鉢	破片長 (3.4)	斜位に立ち上がり、口縁外面は面取られ、2条沈線が横走する。	体部内面に卸目。全体に横ナデ。	長石少量 外面暗赤色 内面赤色 堅緻	表土 5% 堺・明石産
第242図 30	瓦質土器 鉢	口径 [23.4] 器高 (3.2)	丸みももって体部は立ち上がり、口縁部で外反、口唇端部は直立する。	内外面ナデ、体部外面は微かに木目状工具の跡が残る。	白雲母微量 外面黒色 内面灰色 普通	SI-16 5% 表面は全体に 燻し
第242図 31	瓦質土器 不明品	遺存長 (6.2) 残高 [3.4]	大型品の装飾部位か脚部の一部にあたるか。すし状に両側面が丸味を持ち、上面は平坦。内面に棒状工具をさし込んだ痕跡有り。	外面は磨きの上に花文スタンプを3箇所押捺。左側は押捺無し。	長石・雲母粉微量 外面黒色 内面にぶい黄褐色 普通	F-28 40% 中世後半 外面燻し
第242図 32	須恵器 鉢又は壺	口径 [25.4] 最大径 [29.0] 器高 (2.3)	胴部は直立し、口縁部は内傾して窄まる。内面屈曲部に稜を生じる。	内外両面ともナデ。	粉質 雲母粉少量 内外面灰白色 軟質	F-25 5%

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第242図 33	土製品 球状耳飾	(3.8)	(2.6)	0.9	(11)	球状耳飾の一方の切りこみ部分の破片。表面は磨きによる調整。	長石粉微量 橙色 普通	表土 100% 縄文時代
第242図 34	土製品 球状耳飾	(3.9)	(2.6)	(1.2)	(11.6)	表面裏面とも磨きによる調整。側面は溝状に凹んでいる。	長石・雲母中量 にぶい褐色 良好	SI-7 100% 縄文時代
第242図 35	土製品 土錘	6.2	2.2	2.1	23	細長型の土錘片。表面は指ナデ調整。	長石・石英粒・赤色 粒微量 黒褐色 軟質	SB-6 100%
第242図 36	土製品 土錘	(2.9)	2.4	2.0	(47)	やや大型の土錘の破片。表面はナデと指頭痕調整。	石英粒多量 明黄褐色 普通	表土 100%
第242図 37	管状土製品	2.3	1.1	1.0	3	表面は全体に荒れる。穴は上部が広く、下部が狭い。	長石粉微量 粗土 にぶい褐色 不良	SB-4 100%
第242図 38	土製品 再利用品	8.7	9.1	0.6	59	丸底の土師器環の破片を再利用する。口縁部に内外両面から凹みを削りだす。他に凹みや調整は無い。	長石粉微量 良土 橙色 普通	表土 100%
第242図 39	泥面子	3.5	3.1	0.9	(6)	幼児の全身像。右脇下に何かを抱え、そこから帯状のものを口にくわえる。	粉質 良土 白色 軟質	表土 100%
第242図 40	泥面子	2.9	2.4	0.8	6	布袋の顔面像。左右僅かに欠損。	粉質 良土 橙色 普通	表土 100%
第242図 41	泥面子	2.1	2.2	1.4	6	寿老人の全身像。右手に杖状のものをもつ。	長石粉微量 良土 橙色 普通	表土 100%
第242図 42	泥面子	3.2	1.9	1.1	3	籠またはビク状の容器を模る。体部は縦線を太く疎に、横線を細く密に刻む。	良土 橙色 普通	表土 100%
第242図 43	箱庭道具	2.1	2.2	1.4	5	入り母屋造りの屋根を模ったもの。一方の桁に突起状の破風が付く。精良な素地を型押しして成形したか？屋根面のみ褐色の釉を施す。	精良 白色 普通	表土 100%

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第243図 44	部分磨製 石器	(7.9)	(2.7)	(1.6)	(34.4)	両面研磨、半ばで折損。	SI-47 細粒砂岩
第243図 45	石製品 勾玉	3.5	1.9	1.0	10.6	孔径3.6～4.0mm、両側から穿孔、被熱によるヒビ割れ？	SI-38 滑石
第243図 46	煙管 吐上部	(5.9)	(1.4)	(0.8)	8	吐出し口の一部分が折れ曲がる。	表土
第243図 47	煙管 吐上部	(3.0)	(0.7)	(0.8)	3	吐上部は折れ曲がり、接合部が欠損する。	L-8

図版番号	器種	法 量				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第243図 48	不明銅製品	(1.6)	1.0	1.0	2	端面が2段階に穿孔された筒状製品。葉夾か？	F-8
第243図 49	ボタン状 銅製品	1.8	1.9	0.5	3	ボタン状を呈し、中央が窪む。中心に方形に穿孔。	表土
第243図 50	錢 寛永通宝	2.3	2.2	0.11 ~ 0.15	2	新寛永。腐食が著しいが、錢銘は判読可能。	SI-6
第243図 501	錢 寛永通宝	2.2	2.3	0.1 ~ 0.13	2	新寛永。腐食が著しい。	SI-11
第243図 52	碗形鉄滓	10.0	9.2	2.2	292	腐食が著しい。	SI-78
第243図 53	碗形鉄滓	7.8	7.2	2.3	175	比較的形狀を保つ。	SI-66

第4節 まとめ

弁才天遺跡の遺構毎の様相を以下に集約する。

古墳時代前期の堅穴住居跡は13軒である。これらの住居は時期的には北西原遺跡と同様、古墳時代前期後半を主体とする。発掘調査面積当りの発見数を北西原遺跡と比較すると、弁才天遺跡の方が住居密度は希薄で、散在する傾向を示すものといえる。特筆すべきは第48号住居跡で、確認面下10cmで床面に至る悪い遺存状況であったが、北側を中心に土師器が大量に出土し、この中に南関東系の特徴をもつ壺が出土した。

古墳時代後期の住居跡は12軒を数える。この中で注目すべきは第61号住居跡で、金銅製杏葉の破片が覆土中から出土した。また第82号住居跡は1辺7.5mと大規模で張出しをもつ住居で、該期の住居群の中心的なものの可能性がある。古墳時代後期には、山川古墳群でも前方後円墳や方墳等が発見されていることから、常名台東側台地に弁才天遺跡の集落、谷を隔てた西側台地に古墳群と対照的な遺跡の立地を見ることができる。なお古墳時代中期の住居跡は現状で未確認であり、該期の集落の様相が不明確なことが課題となっている。

奈良・平安時代の堅穴住居跡は63軒、掘立柱建物跡は11棟発見された。堅穴住居の年代は8～11世紀と幅があるが、特に奈良時代・8世紀代に比定される住居跡が多く見られることが特徴である。古墳時代後期からの集落の連続性を窺う好例といえよう。

中でも特筆すべきは和同開珎（新和同）がカマド付近から出土した第6号住居跡である。和同開珎は西暦708年初鑄の貨幣で、関東地方では出土数が少ない。茨城県内では石岡市茨城廃寺の基壇状遺構・つくば市明石遺跡堅穴住居跡の2例である。錢は住居廃絶に伴うカマドの破壊によって、北側に崩落した灰白色土から出土したが、使用頻度が乏しかったためか摩滅が少ない。またカマド周辺からは、多くの完形の土師器坏が出土していることから、錢の出土も何らかの意図を持った廃棄行為の結果、残された可能性がある。同住居は、伴出する須恵器や和同錢の年代から、8世紀第2四半期のものと考えられる。

また平安時代の灰釉陶器も多数の堅穴住居から出土している。緑釉陶器碗も10世紀代の第84号住居跡から出土している。墨書土器も見られるが、住居跡の数に比べてやや少数である。その半面では、鉄鉢形土器、鉄製匙、花瓶形の須恵器、土製品の獣脚部分など仏教色の濃い遺物も見られる。

集落自体は10世紀後半から11世紀代に終焉を迎え、以後の積極的な集落形成は見られない。山林や畑地としての土地利用に終始したものと思われる。

第1表 縄文時代 竪穴住居跡一覧

住居No.	グリッド	平面形	主軸方向	規模(長×短)(m)	床面積(m ²)	壁高(cm)	床面	入り口	内部施設		時期	その他	図版No.
									主柱穴	ピット			
SI-78	D・E-28・29	不整形	不明	3.88×3.55	13.8	30	起伏	不明	3	不明	阿玉台Ⅱ	SB-7-8と重複	第21図
SI-88	C-31	円形	不明	3.22×3.17	10.2	34	平坦	不明	0	不明	阿玉台Ⅰb	出土遺物希少	第22図

第2表 古墳時代前期 竪穴住居跡一覧

住居No.	グリッド	平面形	主軸方向	規模(長×短)(m)	床面積(m ²)	壁高(cm)	床面	壁溝	入り口	内部施設				時期	その他	図版No.	
										主柱穴	貯蔵穴	ピット					炉
												主柱穴	貯蔵穴				
SI-2	F・G-10・11	正方形	N-62°-W	6.7×6.44	43.0	44	平坦	一部	東か南	4	1	8	不明	2	前期	SI-4・SD-1と重複、広範囲に焼土・炭化材	第37図
SI-3	H・I-5～7	長方形	N-34°-E	5.88×4.4	25.9	24	平坦	なし	南西	不明	1	10	不明	2	前期		第38図
SI-20	M・N-8-9	正方形	N-19°-E	2.92×2.88	8.4	18	平坦	なし	南?	不明	1	4	不明	1	前期		第39図
SI-39	J～L-26～28	正方形	N-33°-E	5.02×(5.00)	(25.1)	47	起伏	なし	南西?	4	1	6	不明	不明	前期	SD-7と重複、広範囲に焼土の堆積	第40図
SI-41	J・K-23～25	正方形	N-5°-E	3.48×3.4	11.8	13	平坦	一部	南	4	1	9	不明	1	前期	SI-40・SB-1と重複、広範囲に焼土	第43図
SI-44	N・O-22-23	正方形	N-35°-E	3.2×2.92	9.3	27	中央凹む	一部	南西?	3	1	2	不明	不明	前期	壁際に焼土範囲	第45図
SI-48	M・N-27-28	方形	N-28°-E	(推) 3.8×3.68	(推) 14.0	12	平坦	なし	南?	1	1	0	不明	2	前期	間仕切り溝あり	第46図
SI-49	I・J-26・27	長方形	N-8°-E	5.46×4.92	26.9	28	中央凹む	なし	南?	3	不明	9	不明	1	前期	SI-10・38-SB-11と重複	第47図
SI-52	H・I-28～30	長方形	N-73°-E	(推) 5.1×(推) 4.15	(推) 21.2	14	平坦	なし	西?	不明	不明	0	不明	1	前期?	SB-11と重複、壁は大平削平、遺物なし	第48図
SI-68	N・O-25・26	方形	N-35°-E	4.16×3.42	14.2	26	起伏	一部	南西?	不明	不明	7	不明	1	前期	SI-45と重複	第49図
SI-76	X・Y-39-40	正方形	N-35°-W	4.64×4.24	19.7	24	起伏	なし	南東	3	1	15	不明	1	前期	東側床面に焼土範囲	第50図
SI-87	D・E-29・30	長方形	N-97°-E	4.38×3.48	15.2	50	起伏	一部	東	4	不明	1	不明	1～2	前期	広範囲に焼土・炭化材	第51図
SI-91	Q・R-35-36	正方形	N-22°-W	3.4×3.1	10.5	20	起伏	一部	南?	不明	不明	7	不明	不明	前期?	SK-7と重複、遺物なし	第53図

第3表 古墳時代後期 竪穴住居跡一覧

住居No.	グリッド	平面形	主軸方向	規模(長×短)(m)	床面積(m ²)	壁高(cm)	床面	壁溝	入り口	内部施設				時期	その他	図版No.	
										主柱穴	貯蔵穴	ピット					カマド
												主柱穴	貯蔵穴				
SI-7	F・G-3～5	長方形	N-45°-W	5.14×4.28	22.0	57	中央凹む	一部	南東?	4	不明	4	不明	北西	7c前半	カマド内・袖付近より多量の遺物出土	第54図
SI-13	H・I-10～12	正方形	N-15°-W	4.68×4.28	20.0	65	平坦	全周	南	4	不明	5	1以上か	北	7c後半		第58図
SI-19	E～H-21～23	正方形	N-49°-W	6.32×6.24	32.4	69	中央凹む	全周	南東	4	1	4	1	北西	7c前半	SI-62と重複、カマド・貯蔵穴より土器出土	第60図
SI-21	K～M-3-4	正方形	N-47°-W	6.42×6.04	38.8	60	平坦	一部	南西	4	不明	15	1	北西	7c前半	南東壁際に焼土・粘土範囲	第64図
SI-22	M～P-4～6	正方形	N-48°-E	6.84×6.54	44.7	48	平坦	一部	南西	4	不明	9	1	北東	7c後半	南東壁際に焼土範囲	第66図
SI-31	D・E-5・6	正方形	N-33°-W	3.98×3.58	14.2	42	起伏	なし	南東	不明	不明	4	不明	北西	7c後半		第68図
SI-33	H・I-22	長方形	N-3°-E	2.98×2.3	6.9	65	平坦	なし	南?	2	不明	0	不明	不明	7c前半	南西隅が突出、有段状	第69図
SI-43	E・F-13-14	正方形	N-63°-E	4.74×-	-	20	平坦	なし	南?	不明	不明	0	不明	北	7c初頭	SI-1・SD-1と重複	第70図
SI-61	R～T-27～29	正方形	N-22°-W	6.96×6.92	48.2	42	平坦	全周	南	4	不明	1	1	北	7c後半	金銅製杏葉破片出土	第71図
SI-74	E～G-26・27	長方形	N-27°-W	5.7×(推) 5.2	(推) 29.6	55	平坦	一部	南?	4	不明	2	不明	北	7c前半	東側床面に粘土範囲	第73図
SI-82	W～Y-41～43	方形	N-101°-W	7.54×(2.9)	-	37	起伏	一部	西	2	不明	2	張り出し	不明	7c前半	2/3程が調査区外、張り出しを持つ入り口施設	第76図
SI-90	O・P-34-35	長方形	N-37°-E	3.82×3.46	13.2	52	平坦	一部	南東?	不明	不明	1	1	北西	7c後半	南壁際に15cm程の粘土の堆積	第78図

第4表 奈良・平安時代 竪穴住居跡一覧

住居No.	グリップド	平面形	主軸方向	規模(長×短)(m)	床面積(m ²)	壁高(cm)	床面	壁溝	入り口	内部施設				時期	その他	図版No.	
										主柱穴	貯蔵穴	ピット	入り口				
SI-1	F-13	正方形	N-32°-W	2.3×2.26	5.2	30	中央凹心	なし	北西?	1	不明	7	1?	南東	8c初頭	SI-43・SD-1と重複	第80図
SI-4	G・H-11・12	正方形	N-12°-W	2.3×2.28	5.2	30	平坦	一部	南	1	不明	0	不明	北	9c後半	SI-2と重複	第82図
SI-5	B・C-15・16	長方形	N-58°-W	2.74×2.3	6.3	34	平坦	なし	南東	3	不明	0	不明	北西	9c後半	東側床面に焼土・粘土範囲	第83図
SI-6	C・D-18～20	正方形	N-34°-W	4.24×4.1	17.4	80	平坦	ほぼ全周	南東	4	不明	4	1	北西	8c前半	SD-6と重複、遺物多量、「和開吹」・鉄鏝・刀子出土	第85図
SI-8	(-)A・A-18・19	長方形	N-12°-E	3.34×2.76	9.2	54	平坦	一部	南	2	不明	1	不明	北	9c後半	SI-12と重複	第90図
SI-9	(-)A・A-21・22	正方形	N-27°-E	3.48×3.42	11.9	48	平坦	なし	南	不明	不明	0	不明	北	7c末	SB-2・SD-2と重複、東壁際に粘土範囲	第91図
SI-10	H・I-26・27	正方形	N-35°-E	3.28×2.94	9.6	36	平坦	一部	南西?	不明	不明	4	1?	北東	8c末	SI-49・SB-11と重複、灰軸陶器蓋出土	第92図
SI-11	D・E-17・18	長方形	N-83°-E	5.88×3.12	18.3	46	平坦	全周	西?	6	不明	8	1?	東	9c前半	北側に2箇所焼土範囲、墨書2点出土	第94図
SI-12	(-)A-18・19	長方形	N-27°-E	2.44×1.9	4.6	28	やや傾斜	一部	南	不明	不明	0	1?	北	10c前半	SI-8と重複	第96図
SI-14	E・F-14・15	長方形	N-25°-E	3.96×2.54	10.1	30	平坦	なし	南?	4	不明	1	1?	北	9c後半	SD-1と重複、灰軸陶器皿片出土	第97図
SI-15	G・H-14・15	正方形	N-13°-E	3.54×3.21	11.5	20	平坦	一部	南	不明	不明	0	1	北	9c後半	南側に粘土範囲、灰軸陶器皿・置きカマド点・雁・藤出土	第98図
SI-16	I・J-13・14	長方形	N-32°-E	3.58×3.12	11.2	24	平坦	一部	南西?	不明	不明	1	不明	北東	9c後半	SD-3・I0と重複、灰軸陶器長頸蓋片出土	第100図
SI-17	I・J-18・19	正方形	N-26°-E	3.62×3.54	12.8	45	平坦	一部	南	不明	不明	0	1	北	9c後半	墨書4点「吉」?、転用硯出土	第101図
SI-18	E・F-20・21	正方形	N-30°-E	3.18×2.92	9.3	48	平坦	一部	東?	不明	不明	0	2	南	9c末	隅カマド	第104図
SI-23	L・M-14・15	正方形	N-42°-E	3.5×3.24	11.3	48	平坦	全周	南西	4	不明	0	1	北東	7c末	SD-3と重複	第105図
SI-24	N・O-15	長方形	N-88°-E	3.88×2.8	10.9	43	起伏	ほぼ全周	西?	不明	不明	0	不明	東	9c末	SD-3と重複	第106図
SI-25	P・Q-18・19	正方形	N-9°-E	2.92×2.9	8.5	30	起伏	なし	南	不明	不明	0	不明	北	9c後半	床面中央に硬化面、碗形鉄滓出土	第108図
SI-26	G・H-18・19	長方形	N-25°-E	3.1×2.12	6.6	14	平坦	一部	南	不明	不明	1	0	北	9c後半	SD-1と重複	第109図
SI-27	H-23	長方形	N-22°-E	(推)4.0×2.84	(推)11.4	16	平坦	なし	南	不明	不明	0	不明	北	9c後半	SK-8と重複、西側壁削平	第110図
SI-28	L・M-19・20	正方形	N-35°-E	3.54×3.34	11.8	30	平坦	一部	南西	不明	不明	0	不明	北東	9c前半	SI-56と重複	第111図
SI-29	H・I-19・20	正方形	N-17°-E	4.26×3.96	16.9	52	平坦	一部	南	4	不明	0	不明	北	7c末	SD-7と重複、東西床面に溝状遺構、広範囲に焼土	第113図
SI-30	R～T-16・17	正方形	N-32°-E	4.4×4.26	18.7	60	平坦	全周	南西	4	不明	1	1	北東	8c初頭	SD-3と重複、遺物多量(特に土師器甕)	第116図
SI-32	K・L-20・21	正方形	N-25°-E	2.88×2.74	7.9	43	平坦	一部	南	不明	不明	0	不明	北	8c前半	床面西側に焼土範囲	第122図
SI-34	I・J-22・23	長方形	N-30°-E	3.8×3.28	12.5	37	平坦	一部	南西	4	不明	2	不明	北東	8c前半	鉄製鋤先出土	第123図
SI-35	R・S-14・15	正方形	N-33°-E	2.68×2.5	6.7	42	平坦	一部	南西	4	不明	4	1	北東	8c前半		第124図
SI-36	P・Q-18・19	正方形	N-22°-E	3.96×3.76	14.9	45	起伏	ほぼ全周	南	4	1	1	1	北	8c半ば	SI-42と重複	第126図
SI-37	N～P-19・20	正方形	N-43°-W	4.4×4.38	19.3	58	起伏	ほぼ全周	南東	4	1	1	1	北西	8c初頭	SI-42と重複、床面に灰・焼土範囲、遺物多量、繅刺土器片	第128図
SI-38	J・K-25・26	長方形	N-12°-E	4.64×3.98	18.5	47	平坦	一部	南	4	不明	2	1	北	8c後半	SI-49と重複、遺物多量、刻書のある砥石	第133図
SI-40(A)	K・L-23・24	長方形	N-28°-E	4.28×3.8	16.3	60	起伏	一部	南	4	不明	0	1	北	8c前半	SI-41・SB-1と重複、床面南側に粘土範囲、遺物多量	第137図
SI-40(B)	K・L-23・24	長方形	N-25°-E	一×3.72	不明	30	起伏	なし	北?	不明	不明	0	不明	北?	8c前半	SI-41・SB-1と重複、(A)が新しい	第137図
SI-42	O・P-18・19	正方形	N-116°-E	3.48×(推)3.4	(推)11.8	23	起伏	一部	北?	2	1	1	不明	南	9c後半	SI-36・37と重複、西壁側に硬化面、墨書1点「徳万」	第142図
SI-45	M～O-23～25	正方形	N-53°-W	6.12×5.86	35.9	74	平坦	全周	南東	4	不明	2	2	北西	8c初頭	SI-46・68・SD-7と重複、北壁際粘土堆積、刻書土器	第143図
SI-46	N・O-23・24	正方形	N-19°-E	(推)3.2×(推)3.1	(推)9.9	55	平坦	なし	南?	不明	不明	0	不明	北	8c初頭	SI-45と重複、床面南側に焼土範囲、遺存状態不良	第146図
SI-47	M・N-26・27	長方形	N-28°-E	4.06×3.6	14.6	50	平坦	ほぼ全周	南	4	1	1	1	北	8c半ば	床面上に粘土・焼土範囲	第148図
SI-50	G・H-26・27	正方形	N-72°-W	2.55×2.5	6.4	38	平坦	ほぼ全周	東	不明	不明	0	1	西	9c後半	床面に焼土範囲点在	第150図
SI-51	J・K-28・29	正方形	N-5°-W	4.0×3.74	15.0	57	平坦	ほぼ全周	南?	2	不明	2	不明	北	8c初頭	SD-7と重複、貝ブロッコ、鉄鏝・藤・銅製帯金具出土	第151図
SI-53	L・M-29・30	正方形	N-4°-W	3.64×3.22	11.7	32	平坦	なし	南	4	不明	4	1	北	8c半ば	遺物多量、鉄製刀子・支脚4点出土	第155図
SI-54	S・T-24・25	長方形	不明	3.4×3.22	11.3	24	起伏	なし	不明	不明	不明	2	不明	なし	8c前半	カマドなし、作業小屋か	第159図
SI-55	E・F-24・25	正方形	N-6°-E	6.08×3.42	20.8	35	平坦	一部	南?	不明	1	3	不明	北	8c後半	著しい横長住居、墨書1点	第160図
SI-56	L・M-18・19	長方形	N-39°-E	3.4×3.08	10.5	42	起伏	一部	南西	不明	不明	0	1	北東	8c後半	SI-28と重複、カマド周辺に遺物多量	第163図
SI-57	U・V-23・24	長方形	N-110°-E	3.16×2.24	7.1	40	起伏	ほぼ全周	南?	不明	不明	3	不明	北と東	8c前半	カマドの造り変え(北→東)	第166図
SI-58	G-29・30	正方形	N-13°-W	2.6×2.44	6.3	26	一部傾斜	なし	南?	不明	不明	0	不明	北	9c末	SB-4と重複	第167図

住居No.	グリッド	平面形	主軸方向	規模(長×短)(m)	床面積(m ²)	壁高(cm)	床面	壁溝	入り口	内部施設				時期	その他	図版No	
										主柱穴	貯蔵穴	ピット	入り口				
SI-59	W-Y-24-25	正方形	N-42°-W	4.56×4.5	21.0	48	平坦	全周	南東	4	不明	0	1	北西	8c前半	北西壁面隅に粘土の堆積、遺物多量	第168図
SI-60	T-U-27-28	正方形	N-21°-E	3.2×3.08	9.9	43	起伏	なし	南?	不明	不明	1	不明	北	9c後半		第172図
SI-62	F-G-23	正方形	N-15°-E	4.16×(推)4.0	(推)16.6	61	平坦	なし	南	不明	1	0	1	北	8c後半	SI-19-65と重複、南壁に焼土・粘土範囲、羽口出土	第173図
SI-63	U-V-28-29	正方形	N-75°-W	3.5×3.24	11.3	23	起伏	なし	東?	不明	不明	0	不明	西	9c末		第175図
SI-64	B-C-21・22	長方形	N-16°-E	4.12×3.62	12.8	68	平坦	なし	南	不明	1	1	1	北	9c後半	カマド・煙道土器使用、墨書土器片・鉄釘・鉄匙・丸斬	第176図
SI-65	E-F-23・24	正方形	N-13°-E	3.54×3.22	11.4	58	起伏	一部	南?	不明	1	不明	不明	北?	9c後半	SI-62と重複、墨書2点「富□」	第181図
SI-66	2B・2C-23-24	正方形	N-58°-W	3.62×3.28	11.9	40	起伏	全周	南東?	不明	0	不明	不明	北西	7c末	南壁隅に粘土堆積	第183図
SI-67	2A・2B-22-23	長方形	N-19°-E	4.66×4.0	18.6	52	起伏	全周	南	不明	1	1	1	北	8c後半	南壁隅に粘土堆積、椀形鉄滓出土	第186図
SI-69	X-Y-31-32	正方形	N-66°-W	3.34×3.3	11.0	43	起伏	一部	南?	不明	不明	3	不明	北	9c前半	墨書1点出土	第189図
SI-70	W-X-32-33	正方形	N-12°-E	3.54×3.32	11.8	53	起伏	全周	南	3	1	2	1	北	8c後半	南壁隅に粘土堆積、転用硯・刀子・銅製丸斬出土	第191図
SI-71	Y-Z-35-36	正方形	N-45°-W	3.12×3.02	9.2	23	中央凹む	一部	南東?	不明	2	不明	2	北西	9c後半	SB-9と重複	第194図
SI-72	Z・2A-19-20	正方形	N-39°-W	3.54×3.16	11.2	64	平坦	全周	南東	2	1	0	1	北西	8c半ば	SD-3と重複、北壁隅に粘土堆積	第195図
SI-73	欠番																
SI-75	2A・2B-16~18	正方形	N-40°-E	4.34×4.14	18.0	56	平坦	なし	南西	4	不明	8	1	北東	8c前半	粘土範囲点在、螺旋状の暗文を持つ土師器坏	第197図
SI-77	G・H-30・31	方形	N-2°-E	3.96×(推)3.2	(推)12.7	35	やや傾斜	なし	南?	不明	不明	0	不明	北	8c前半	遺存状態不良	第199図
SI-79	C・D-27-28	正方形	N-44°-W	3.4×3.26	11.1	53	起伏	ほぼ全周	南東	4	不明	0	1	北西	8c前半	SB-7・8と重複、入り口側に焼土範囲点在	第200図
SI-80	W-X-36-37	正方形	N-14°-E	3.04×2.92	8.9	23	起伏	ほぼ全周	南	4	不明	0	1	北	8c前半		第201図
SI-81	U-V-41-42	方形	N-40°-E	3.9×(2.46)	不明	35	一部傾斜	なし	不明	不明	不明	1	不明	不明	9c前半	床面東寄りに焼土範囲	第203図
SI-83	2E-21-22	長方形	N-78°-E	3.08×2.76	8.5	51	起伏	ほぼ全周	西?	2	不明	2	不明	東	8c前半		第204図
SI-84	S-T-36-37	正方形	N-88°-E	3.42×2.52	7.2	43	起伏	一部	西?	3	不明	0	不明	東	10c半ば	カマドのある東壁ガラス状、緑釉陶器高台坏出土	第206図
SI-85	2C・2D-20-21	長方形	N-10°-E	3.56×3.3	11.7	33	平坦	ほぼ全周	南	4	不明	3	1	北	8c前半	カマド軸脇に土師器坏が4点重なる出土、遺物多量	第208図
SI-86	2C-20-21	正方形	N-20°-E	2.6×2.58	6.7	58	平坦	一部	南	不明	不明	0	2	北	8c前半		第212図
SI-89	O・P-36-37	正方形	N-89°-E	3.26×3.08	10.0	42	やや傾斜	なし	西	不明	1~2	4	1	東	10c半ば		第213図

第5表 掘立柱建物跡 一覽

遺構No.	グリッド	長軸方向	柱間数(桁行×梁行)	規模(m)(桁行×梁行)	面積(m ²)	桁行柱間寸法(m)	梁行柱間寸法(m)	柱穴平面形	時期	その他	図版No.
SB-1	I~L-23~25	N-68°-W	3×2	6.9×4.4	30.4	2.16~2.36	2.12~2.25	長方形・方形・隅丸方形	8c後半	SI-40・41と重複、住居跡が古	第214図
SB-2	(-)A~B-22-23	N-74°-W	3×2	5.8×4.1	23.8	1.84~2.2	1.92~2.1	方形・凹形	8c後半	SI-9・SD-2と重複、住居より新、溝より古	第216図
SB-3	D・E-25-26	N-21°-E	3×2	5.18×3.5	18.1	1.72~1.78	1.72~1.78	凹形・楕円形	9c	SB-7と重複、当跡が古	第218図
SB-4	F・G-28-29	N-107°-E	3×2	5.6×3.5	19.6	1.66~1.97	1.7~1.98	凹形・隅丸方形	8c後半	SI-58・SD-9と重複、住居・溝より古	第219図
SB-5	X・Y-37-38	N-44°-W	2×2	3.9×3.3	12.9	1.79~1.98	1.66~1.72	方形・凹形	9c後半		第221図
SB-6	A~C-24-25	N-66°-W	(推定)3×2	5.9×—	不明	1.96~2.0	不明	凹形・楕円形	8c後半	大半が調査区外	第223図
SB-7	C~E-25~28	N-18°-E	4×1	10.2×3.35	34.2	2.52~2.66	1.65~1.7	凹形・楕円形・隅丸方形	9c後半	SI-78・79と重複、住居跡が古	第224図
SB-8	C・D-28~30	N-19°-E	2×2	5.2×3.1	16.1	2.58~2.64	1.48~1.56	凹形・楕円形・不整形	9c後半	SI-79と重複、住居跡が古	第225図
SB-9	X~Z-35-36	N-18°-E	3×2	5.38×3.32	17.9	1.75~1.8	1.62~1.7	凹形・楕円形・隅丸方形	9c末	SI-71と重複、住居跡が古	第226図
SB-10	C・D-24~27	N-18°-E	4×1	10.5×3.15	推定33.1	2.5~2.54	3.15	凹形・楕円形	9c後半		第227図
SB-11	H・I-26~29	N-17°-E	4×2	9.85×2.4	23.6	2.4~2.51	1.7~1.74	凹形・楕円形	9c後半	SI-10・49・52と重複、住居跡が古	第228図

第5章 総括

平成8年度の常名台遺跡群発掘調査は、北西原遺跡第5次調査と弁才天遺跡の2箇所を調査対象とした。このうち北西原遺跡第5次調査では、古墳1基、竪穴住居跡1軒、土坑2基、溝2条を、弁才天遺跡では竪穴住居跡90軒、掘立柱建物11棟、溝8条、土坑5基を発掘した。前者では古墳時代後期の良好な須恵器を、後者では古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての集落群の資料を得ることができた。

この中でも特に奈良・平安時代に着目すると、平成8年度まで常名台全体の発掘調査では、山川古墳群第1次調査で竪穴住居跡が1軒のみ発見されているが、その他の遺跡では遺構が希薄な傾向にあった。その中でも弁才天遺跡内で、奈良・平安時代の集落跡が発見されたことは大変重要な意味を持っている。

その理由は、集落出土遺物の特異性にある。土師器・須恵器といった土器以外で、同遺跡からは以下の特徴ある遺物が出土している。銭貨では和同開珎、帯飾り（丸鞆）、金銅製品では飾り金具（推定）、鉄製品では匙、刀子、鋤先、鎌などがあり、この他にも緑釉陶器碗、灰釉陶器（長頸瓶、短頸壺、碗皿類など）、墨書土器（「億万」、「乙」他）などがある。

これら多種多様な遺物は、奈良・平安時代にある程度共通するものである。しかしながら、中には中央政府と何らかの関わりがないと入手が困難であるもの（和同開珎、丸鞆など）もみられることから、弁才天遺跡の古代集落は当時の行政体系に組み込まれていた集落であった可能性が強い。この時代の常名台は古代筑波郡に包摂されているが、茨城・信太・河内の各郡とも境界部分に当たっている。郡の縁辺・境界部に当りながらも特徴的な遺物を有することは、当時の行政区画内の物的交流や街道・官道・水運などの交通手段の実状を考える手がかりを与えてくれるだろう。現状では弁才天遺跡の性格が、一般集落の中の特異な事例にあたるものか否かは判断が難しいが、中央政府と全く隔絶した集落で無いことは確実であると思われる。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行に至るまでの間、ご協力をいただいた関係各位の方々に、衷心より御礼申し上げます。

報告書抄録

ふりがな	べんざいてんいせき・きたにしはらいせき だい5じちょうさ							
書名	弁才天遺跡・北西原遺跡（第5次調査）							
副書名	土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第4集							
編集者名	比毛君男 福田礼子							
著者名	吉澤悟 小野寿美子 窪田恵一 比毛君男 福田礼子							
編集機関	土浦市遺跡調査会							
発行機関	土浦市教育委員会							
所在地	〒300-4115 茨城県土浦市藤沢975番地							
発行年月日	西暦 2006年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
べんざいてんいせき 弁才天遺跡	つちうらし おおあざ 土浦市大字 常名 3047 番地他	08203	236	36° 6′ 8″	140° 11′ 25″	1996.5.21 ～ 1996.11.30.	約 18,500 m ²	市総合運動 公園建設事 業に伴う発 掘調査
きたにしはらいせき 北西原遺跡	つちうらし おおあざ 土浦市大字 常名 2652 番地他	08203	238	36° 6′ 9″	140° 11′ 5″	1996.6.21 ～ 1996.8.6.	約 7,500 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
弁才天遺跡	集落跡	縄文時代 (中期)	竪穴住居跡	2軒	縄文土器		舌状台地上に展開した 縄文時代、古墳時代前 期・後期、奈良・平安 時代の集落跡。 古墳時代後期の住居か ら杏葉が出土。 奈良時代住居跡のカマ ドから和同開珎が出土。	
		古墳時代 (前期)	竪穴住居跡 土坑	13軒 1基	土師器・土製品			
		(後期)	竪穴住居跡	12軒	土師器・須恵器・ 金銅製杏葉			
		奈良時代	竪穴住居跡	35軒	土師器・須恵器・ 和同開珎			
		平安時代 奈良～平安 時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝 土坑	28軒 11棟 8条 4基	土師器・須恵器・ 灰釉陶器・鉄製品 (鋤先・鎌・釘他)			
北西原遺跡 (第5次調査)	集落跡	古墳時代 (前期)	竪穴住居跡	1軒	土師器		過去の調査と同様、古 墳時代前期の集落跡と 古墳時代後期の古墳群。 古墳からは墓道を中心 に新治産・湖西産須恵 器が出土。	
		古墳群 (後期)	古墳	1基	土師器・須恵器			
		時期不明	土坑 溝	2基 2条	陶器・磁器			

弁才天遺跡

北西原遺跡

(第5次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集

〈本文編〉

編集機関：土浦市遺跡調査会

発行機関：土浦市教育委員会

問い合わせ先：上高津貝塚ふるさと歴史の広場

〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843

TEL 029 (826) 7111

発行日：平成18(2006)年3月31日

印刷：あけぼの印刷社
